

---

# BLUE・STORY

森田しょう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLUE・STORY

### 【Nコード】

N4255G

### 【作者名】

森田しょう

### 【あらすじ】

平凡且つ普通な高校生・東空。彼は勉強も運動も平均よりやや上程度のどこにでもいる少年。彼を取り巻く環境は、傍から見れば平和であり、幸せなもの。彼ら自身、その平和が続いていけばいいと思っていた。だが、変わらないものなんて存在しない。少しずつ変化していく彼らの見る世界には、変わらぬ想いと夢があった。その近くで、闇がはびこりつつ……。それは崩壊か、新たな邂逅か。遠い彼方で穿たれた約束が、紡がれようとしていた。

E P I S O D E ?

紡ぎゆく約束の果て

## 序章：Prologue（始まりの歌声）（前書き）

どうも初めまして、森田しょうとかいう者です。

「BLUE・STORY」は自分にとって初めて執筆した作品です。初めてなのに、かなり長い作品になってしまいました。小説にすると、2000ページくらいになってしまうんじゃないかっていう感じです。

「BLUE・STORY」というのは、全6エピソードで構成されています。

この物語は一つの長い時間軸の上でのお話で、こちらの都合上、最初の作品は「Episode？」にさせて頂きました。

「前半のお話が抜けていてわからないのでは？」

と思われるかもしれませんが、それぞれのエピソードはそれぞれ一つの物語としてできていて、このEpisode？だけで話がわかるようにできていますので、ご安心ください。

Episode？は「約束」というテーマで作っているのですが、それらをそこかここで感じて頂けたらなあ……と思います。

今連載中の「BLUE・STORY？」はEpisode？なのですが、あれとはまた違うお話なので、どちらから読んで頂いても問題ないです（^^）

あと、このEpisode?は全5部構成となっております。  
第1部に関しては、青春・恋愛が90%以上を占めています。  
ファンタジーを期待して見に来た下さった方、申し訳ございません。  
第2部からは、完璧なファンタジーとなっております。

非常に長い作品ではありますが、全てに目を通して、何かを感じて頂けたら幸いです。

長いまえがき、失礼いたしましたm(\_\_\_\_)m

では、第1部開始です。

「BLUE・STORY Episode4」  
第1部 「青い空」

現在改訂中です。内容はさして変わりませんが、微妙にちょこちょこ変わる予定です。

## 序章：Prologue（始まりの歌声）

遠い、遠い昔……ある、存在 がいた

それは、あらゆるものを慈しみ、愛していた

それは、あらゆるものを憎しみ抜いていた

それは、全ての始まり、終わりを告げていた……

気の遠くなるような時が経て……

多くの命が誕生し、無数の幸福と不幸が交叉する世界

どこかで平和な時、どこかでは争いが起きている時代

人類は星の上での主として、隆盛の時代を謳歌していた

それでも満足しない人類は、さらなる繁栄を目指して

一日一日を過ごしていた……

西暦の時代……

ここで、物語の第4章が幕を開けようとしていた

遙か太古に分かたれた星の雫

一つの円環と、二つの螺旋

星に祝福された者と、神々に愛された者による軌跡

神々の鉄槌が落ちてから

暁の誓約が大地に堕ちてから

青空が穿たれてしまつてから……

数万の昼と、数億の夜が過ぎた

西暦2007年……

誰も知らない、私たちだけの物語  
遙か彼方に置き忘れられた、  
数多くの生命たち……

その物語の紐を、解くとしよう

これは、「青い星」にまつわる物語の第4章……

………？

私ですか？

私の名は………

始まりなんて、いつも些細なこと。

今思えば、始まりっていつだったっけ。よくわからないんだよな。噂にしても、同じ。辿っていつても、どこが始まりだったのかわからない。まさに『一人歩きた』だ。

僕は「東空<sup>アズマ</sup>」。16歳。平凡な高校1年生。と言っても、あと10日くらいで高校2年の生活が始まる。今は、春休みなのだ。

春休みというのは、どうもやる気が起こらない期間だと思う。新

しい学年になるとはいえ、意識が変わるわけでもない。平成19年度が始まるとはいっても、すでに平成19年が始まっているし、2007年も始まっている。そう、新しい1年が開かれる前の、束の間の休息なのだろうが、別にどうでもいい。部活をやっていないので、さらにすることが無い。まあ、部活をやっているとしてみても、あまりやる気にならないが。

部活と言えば、こういう時期に態度が変わるやつがいるんだよね。進入部生が入ってくるもんだから、ちょっと偉そうにしてんだ。そして、新学期が始まり、いよいよ入部生が入ってくると、偉そうにしたり、できもしない大技をしたり。見栄を張っているのが、ばれればだつて、と突っ込みを言いたくなる。そもそも、後輩にはばをきかしているやつっていうのも気に食わない。「床ふけ」だ、「ジューズ買って来い」だ。後輩は先輩の召し使いじゃないっての。

ま、そこらへんで僕の文句は置いておいて、話を元に戻そう。

今日は3月22日。春風漂う季節とはいえ、未だ寒空が広がる。桜も咲いたかと思えば、2月中旬の寒さへ逆戻りなど、ここ最近の気候のおかしさというのは、たまたまじゃないかもしれない。地球温暖化とかね。

寒いだけ、僕はほとんど家にこもっている。もちろん、遊びに誘われた時は外出するけれど、自分から進んで外には出ようとしない自分は、暑いよりも寒いほうが苦手だからだ。家の中の暖房家具の近くで、漫画を読んだりテレビを見たり、ゲームをしたりと、およそ高校生らしくない生活をしている。

そんな春休みの生活を個人的に満喫し、そろそろ飽きてきたかなあと思う頃に、やつらはやってくる。

「おーい！ 空あー！！」

母さんの大声が、家中に響き渡る。なんだよ……と思いつながら、布団から手を伸ばし、時計を手に取る。

午前10時13分……まだ、朝じゃないか。

「空あー！ 起きなさい！」

再び、母さんの声が響く。そんな大声だと近所に聞こえる、と言いたところだが、近所と我が家はかなり長い付き合い。しかも、その娘たちは、僕の幼馴染ときた。つまり、大声が響くのは当たり前のことなので、なんとも思っていないのである。しかも、母さんが僕を呼んでいる理由に、その近所の娘たちも関係していると思われる。この時間帯に母さんが呼ぶ理由は、80%の確率で同じ理由。

「起きなさいって言うてるでしょーが！！ 2人が来たわよ！！」

2人というのは、あいつらだ。僕は少し頭を悩ませ、布団の中で大きくため息をついた。

すると、部屋への階段を上ってくる音が聞こえ始めた。もちろん、母さんじゃない。あいつらだ。

そう思った瞬間、勢いよく僕の部屋の扉が開かれた。

「おーっす！ 起きな！ 朝だぞ！」

「……………」

僕は布団の中へ潜り込んだ。寒いし、朝っぱらから見たい顔ではない。…見たくないわけでもないのだが。

「起きろって！ 馬鹿空！」

ふざけている声が、布団越しに聞こえてくる。

「起きろっての！」

そいつは、僕の布団を剥ぎ取るうとした。

「ちょ……海、止めなさいって」

それを止めようと、同じ声が聞こえる。

「起きろ　！　朝だぞ　！！」

だが、彼女は僕の布団を「どりゃああ！」と剥ぎ取った。

「うおっ！　さむ！！　寒い！！」

僕は体を暖かくするために、さすった。

「朝だぞ！　いつまで寝てるつもりだ！」

海は僕の腕をペシペシと叩く。

「わかったから、大声出すなって」

体をゆつくりと起こしながら、僕は目をこすった。

「朝だつての。もう、起きる時間は過ぎてるんだよ」

「海……お前な、僕とお前を一緒にするなよ」

「一般人はすでに起きてる時間だつて」

海の隣にいるそっくりな女性が、ため息をしながら言った。

日向空ヒナタと日向海ヒナタ。

この2人は、近所に住む日向家の娘たちで、双子。一卵性双生児というやつだ。僕と長女の空とは同名という、なんともまあ奇妙な話。この2人は僕の幼馴染で、僕より一つ年下になる。とは言っても、幼い頃からの付き合いのため、年が違うとは自分でさえ思えない。

この4月から、2人は僕が通う長束町立長束東高等学校に入学する。地元の中学生の8割が、この学校に入学するローカル学校なのだが、それなりに頭はいい（らしい）。毎年、何人が有名大学に入学する人が出る。ちなみに、前述したように僕は平凡。成績も平凡。何もかも平凡だ。高校1年生のときの成績は、300人中129位。良いとも、悪いとも言えない位置だ。いや、むしろ悪い方かもしれない。

そんな僕とは打って変わって、空と海は成績優秀。どちらかというと、空のほうが上かな。ただ、海のほうが運動神経はいい。そこからわかると思うが、空はおとなしい性格で、海はその逆で活発な

女の子といったところ。双子なのに、性格が真反対なのも珍しい話だ。まあ、根本的なところは同じなんだけど。

「ねえ、今日どっかに連れてってよ」

海は僕のベッドに勝手に座り、僕の肩を叩いた。

「ええ？ めんどくせえよ」

「家の中に閉じこもってちゃ、体がなまるよ？」

「こんな心地のいい季節は寝るのが一番」

自分で納得しながら、僕は布団の中に潜り込む。

「もお……ちよつとお、空！」

僕がかぶりかけた布団を、海がはぎ取った。これだともう絶対に寝ることなんてできないので、僕は上半身を起こし、頭をポリポリとかいた。

「一応訊きますが……なんで僕がお前をどっかに連れて行かないかなんないんだよ？」

「高校の入学祝」

笑顔で、海は言う。

「入学祝って……お前さ、そう言って以前もなんかねだったよな？」  
「うん」

笑顔で即答だった。こういった笑顔に騙される輩は少なくなないだろう。

「その時にわざわざお小遣いはたいて、プレゼント買ってやったろ？ ほかあ眠いんだよ」

一昨日かその前か、2人は当然のごとく僕がいる高校に合格し、プレゼントをねだりやがった。高校に内緒で貯めたバイト代を使って、2人にお揃いのペンダントを買ってやった。1万円超えたんだぞ……。

「いいじゃん。バイト代まだ残ってんでしょ？」

ちっ、なんで知ってやがる。僕は心の中で舌打ちをした。

「無いよ、もう」

「ええ？ うっそー」

そう、ウソです。いちいちお前らのために使うかっての。

「だから、今日はあきらめな」

片手をひらひらさせながら2人を追い返そうとすると、

「そんなこと言って、実はまだお金あるんじゃないの？」

空は笑いながら言った。その瞬間、僕の心がビクつく。……いつも思うが、なぜか空と海は勘がいい。

「なるほどねえ。んじゃ、空の財布を確認しようか」

不気味な笑みを浮かべ、海は僕の机を搜索しようとした。

「止めんか馬鹿！」

立ち上がって彼女を止めようとした瞬間、海は僕の方に笑顔を見せた。

「ようやく出たか。ホラ、ルーの散歩にでも行こ」

待っていたかのように海はそう言い、僕の手を掴んで立たせた。

ルーとは、日向家で飼われている犬で、柴犬だ。なかなか愛らしいオスである。まだ空たちが小学生に入るか入らないかの頃だったろうか、ルーがやって来たのは。半分茶色で、半分白というよくあるパターンの毛色である。

「……しょうがねえな……」

そう呟きながら、僕は2人の顔を見渡す。まったく同じ笑顔をしているその姿を見れば、こっちとしては怒る気を失せてしまっつてもんだ。あまりにも、かわいいから。

「とりあえず、飯を食わないとな」

体を伸ばし、僕は言った。

「……今更朝食？」

空はため息を漏らす。

「何か文句でも？」

「だって、もう10時過ぎてるんだよ？ 朝食の時間じゃないでしょ

よ

「僕にとっちゃその時間なんだよ。どうせお前らは馬鹿みたいに早

起きて、馬鹿みたいに早く飯食ってんだろっけどな」

「それが普通なの！」

彼女たちの起きる時間は早い。なんたって、午前6時半起きだからな。中学は20分程度のところだし、高校なんて15分程度だ。しかも、開始時間は8時20分。2時間近く余裕があるじゃないかって話。僕なんて、いつも7時45分起きだよ。

「ともかく、飯食ってくるから……ここにいるのか？」

「うっん、下に行く。ね？」

顔を振り、海は空に促す。

「そっだね」

「さいですか……」

部屋を出てあくびをしながら階段を下り、リビングへ向かった。

お母さんはテレビの前ソファの上で、横になって番組を見ていた。片手には、おせんべいが。こんなだから、太るんだよ……と思いつつ、まあこれが現実。

「母さん、飯作ってくんない？」

「なんだってえ？ あんたね、何時だと思ってるのよ」

僕は壁にかけてある時計を見た。

「10時21分です」

「ふざけんじゃないわよ」

ほんの少し動くでかいケツが無性に腹立つ。せめて、こっち向いて会話してほしいです。

「朝っぱらから自分で作るの勘弁」

「蹴り飛ばすわよ」

母さんはせんべいを大きな音を立てて食べた。それは返事じゃないでしょーよ。

「ったくよお……ちったあ動けよ」

僕はぶつぶつ文句を言いながら、キッチンの冷蔵庫からウーロン

茶を取り出した。

「うっさいわねえ。空ちゃん、作ってやってくれない？ バカ息子に」

おいおい、空にやらせようとすんなって。いちおう、客人なのに。「うん、わかった」

微笑みながらうなずいた彼女に対し、僕は肩を落とした。

「いいのかよ……。お前な、そうやってなんでもやってると母さんが怠けるだろ？ ちよつとは動かさないと、ただでさえ肥満なのに、肥満に拍車が……」

「空も少しはおばさんの手伝いをしたら？」

空はそう言うと、僕の横を素通りして冷蔵庫から卵を取り出した。「さすが空ちゃん、いいこと言う」

母さんは片手に掴んだ半分だけのせんべいをブラブラさせていた。「……どこのおっさんやねん……」

僕は呆れながら、テーブルのイスに座り、コップにお茶を注いだ。空は料理に取り掛かった。空は料理が上手で、うちのキッチンを使いこなせる人物である。いつだったか、母さんが胃潰瘍で入院した時、空が食事を代わりに作ってくれたもんだ。海はというと、そういうことが苦手な質なのである。というより、そういうことをしようとしななんだよな。空は努力したから、上手になったってのに。「はい、できたよ」

空はカウンターに料理を置いた。

「お、サンキュ」

料理はご飯と味噌汁、ウインナーを混ぜたスクランブルエッグだった。朝はこれくらいがちょうど良いよな。基本的に朝は弱いので、そんなに胃の中に入らないのだ。

「おばさん、食器洗っておこうか？」

空はカウンター越しに言った。

「えっ？ ホントに？ いいの？」

母さんはようやくくっちに顔を向ける。横になったままだが。

「うん、いいよ。やること無いと暇だしさ」

「そっかあ、じゃあお願いね」

母さんはそう言うと、再びせんべいをかじりながらテレビに顔を向けた。

「……主婦に見えねえな……」

僕は呆れた視線を母に送りながら、味噌汁をすすった。この視線、母はきつと気づいていないだろうけど。

「空ちゃんにしても海ちゃんにしても良い子だから、明久が羨ましいよ」

お母さんの後ろにあるソファで、新聞を眺めている父さんが言った。明久とは空と海のお父さんの名前で、父さんとおじさんは中学からのクラスメイトで親友同士なのだ。

「空はともかく……海はなあ……」

僕は果てしなく細めで、海を見つめる。

「何よ！ 私はダメな子って言いたいわけ？」

海はギロツと僕を睨み付けた。

「お前には、小・中の7年間でいろいろと苦労させられたからな」とにかく海はやんちゃ坊主（女だけど）で、手を焼いたもんだ。今はマシになった方だ。女らしさが出てきたし、服装もそれらしくなったし。

「否定はできないけど、空だって小学の時は同じくらいやんちゃだったじゃない」

む、それを言うか。

「……まあ、その点は気にするな」

「あほか」

海の呆れた顔を無視し、僕はご飯を口の中に放り込む。

「空ちゃんか海ちゃん、どちらかが空の奥さんになってくれれば、空の心配しなくてもいいんだけどなあ」

ハッハッハと、父さんは笑い声を上げた。

「ハッハッハ。父さん、あり得ないって」

あり得ない、あり得ない。だって、幼馴染だもんよ。

「空ちゃんと海ちゃんが空の相手するのは、勿体無いわよ」

横のまま、母さんは言う。

「実の母親がそんなこと言うなよ……」

少しは「そうね」みたいなことを言えよ……冗談でも。

「空ちゃんと海ちゃんは、空のことどう思う？ 結婚してもいいと思ukai?」

父さんは冗談混じりに言った。すると、海は顎に指を当てて天井を見つめる。

「うーん、空が立派な金持ちになったら、してあげてもいいかなあ」

「なら無理だな。金持ちなんて望んでないし、僕には無理だ」

平凡が一番、平凡が。金が多いからって、絶対幸せになるとは限らないし、自分の生活に困らない程度あれば、いらぬし。

「夢の無い奴……」

僕に聞こえるように、海は大きなため息をついた。

「空ちゃんは、こいつを貰ってくれるか?」

父さんは今度は空に訊ねる。

「え? えつと……ええつと……」

空は海とは違い、真剣な顔で考え始めた。

「お前な、否定しろよ。僕がお前たちと結婚するなんて、あり得ないだろ?」

「そ、そうだね」

空は笑った。それが、どこか作り笑いのようにも感じたが……そんなのはお構いなしに、僕は朝食を食べ終えた。

「これは?」

海は英単語を指さす。

「……うーん、わからん」

「まあ、まったく役に立たないじゃない」

子供のようにほほを膨らませ、海は言った。

「お前は僕の学年順位を知っていて、んなこと言ってるのか？」

「……そうだった。ごめん」

「いや、そこは少しフオローしろよ……」

僕は自分の部屋で、海の宿題を見てやっていた。今年の4月に晴れて高校生となる空や海には、入学式までにしなければならぬ宿題があるのだ。空はもう終えたらしいのだが、海は自分の性格が崇つてか、今の今まで一度も手をつけていないのである。

空はと言うと、母さんの家事の手伝いをしてくれている。食器を洗ったり、掃除をしたり、洗濯物を乾したりしている。今日はポカポカした陽気だから、すぐに乾くだろう。まあ、そんなこんなで、彼女の手伝いが終わるまで、ルーの散歩はお預けで、海の宿題を見てやっているということである。

……つて、そんなこと言われても、僕は学年でも中盤程度の成績。それに比べて、この双子は一桁以内に絶対入るといふ、秀才ぶり。……え？ 1年前のものならわかるんじゃないかって？ 八八八、馬鹿だから1年前のでさえわからないんだよ。

「ところで、空には宿題無いわけ？」

「ああ、そんなもんがあつたな」

「忘れてたんだ……」

呆れ顔の海。いつものことなので、ずいぶん昔から驚かなくなっているが。

「宿題が嫌いだって、昔から知ってるだろ？」

僕は体を大きく伸ばした。

「そんなんだから、地元の高校にしか入れないんだよ」

「お前こそ、それ程度の高校に入学するんだぜ？ 人のこと言えるのかよ」

「私は好きで長東東高校を選んだの。空みたいに、行くところがなかったからってことじゃないの」

「……嫌味な奴だな」

どうせ、その程度の頭ですよ。

「そう言えば、なんでお前は東高校を選んだんだ？ お前なら、三瀬高校に入ることでもできただろうに」

三瀬高校とは、この辺りではかなり頭がいいことが有名で、国立の大学や某有名私立大学に多くの学生を進学させている。空と海は、長束中学校でも学年中5位以内に入るぐらいで、「先生もそこへ行ったら？」と勧めていた。

「そんなの、私の勝手でしょ」

「まあ、そうだけども……理由が知りたいじゃん。幼馴染として、そう言つと、彼女は頼杖についてうなり始めた。

「……理由ねえ……」

海はペン回しを始める。指先でくるくる回すのは、日向姉妹共通の癖だ。

「しいて言えば、近かったからかな？」

僕に笑顔を向けて海は言った。

「……お前、そんな理由だけで？」

「悪い？」

と、首をかしげる海。

「せっかく勉強ができるつてのに、あんな高校に進学するなんて……勿体無いって思わないか？」

自分が通う高校を非難するのも変な話だが、一生に一度のことなんだ。安易な理由で進路を決めるべきではない。

「そりゃあたしかにそう思うけど、なにも勉強が全てってわけじゃないしさ」

む、そりゃそうだ。

「それに」

すると、海は頭をポリポリとかきながら、天井を見上げた。

「別の理由もあるんだ」

「どんな？」

「私、お姉ちゃんと同じ高校に行きかったの」

僕には顔を向けず、彼女は上を向いたままだ。

「空と？　なんでまた？」

「まだ離れたくなかったし、お姉ちゃんは私の目標だもん」

「目標って……料理とかみたいなの、家事？」

「……まあ、そんなところかな」

と、海は苦笑した。どれも海にとっては苦手なものばかり。双子なのに、どうもそこら辺が違うんだよな。つか、海はやらないだけか。

「ふ〜ん。ま、わからんでもないけどな」

たしかに、空は性格は穏やかで優しいし、いろいろと世話を焼いてくれるし、勉強もできるし、かわいいし。幼馴染の自分が言うのもなんだが、日向姉妹は学校内でも1、2を争うくらいかわいいんだよ。それだけ、悪いところがないとも言える。

「ん？　待てよ。と言うことは、空が元々、東高校に行こうとしてたつてことか？」

海はうなずき、「知らなかったの？」と言った。

「……初耳だな」

空がねえ……。あいつも、何を考えて平凡な高校を選んだんだか。頭がいいやつを考えることはわからんよ。

頭がいいやつと言えば、僕の同級生に一人いる。頭がいいというより、飛び抜けていると言った方が正しいが。

柘修哉<sup>ヒイラキ</sup>。僕と修哉は小学生の頃から中学校、高校と同じで、親友と言える友達だ。

僕が小学4年生の頃だった、修哉が僕のいるクラスに転校してきたのは。

肩に届きそうなくらいの長い髪の毛の男の子で、初めて見た時は女かと思うほど。印象としては陰湿で、勉強君な奴っぽいと思っていたのだが、その想像は他ならぬ彼によって、完璧に崩されてしまう。

かなりのやんちゃ坊主で、当時の番長（みたいな6年生）を転校3

日目にして殴り倒し、先生に放課後まで正座させられた。授業も真面目に受けるようなやつではなく、いつも窓の外を眺めていたり、堂々と寝ていたり……最初の印象とは真反対だったのだ。なのに、テストでは常に100点ばかり。悪くて96点。体育や運動会でも、1位ではなかったことが無い。なんでもできる、完璧な少年だった。

「名前、なんだったつけ？」

それが、修哉が僕に発した最初の言葉だったような気がする。転校してきてから数ヶ月も経つて言うのに、未だに同じクラスの男子の名前を覚えていないってのは、幼い僕からしても少々腹立たしかったのを覚えている。

「悪いけど、シャーペン貸してくれない？」

その頃は修哉の真後ろの席で、テストが手渡し出回ってきた時に、修哉が話し掛けてきた。僕は何も言わず、シャーペンを貸してやったつけ。

「サンキュ」

その時の修哉の笑顔と言うのが、どこにでもいる小学生という雰囲気放ったように思えた。それまで見てきた彼は、どうも話しかけにくく、僕だけではなく、他のみんなとも一線を引いた先の人間に思えた。どんなことも完璧にこなすために、逆に恐れられていたのかもしれない。だからこそ、その時に見た修哉の笑顔が、意外だった。僕は少しの間、呆然としていたもんだ。

それから、僕は彼に積極的に話し掛けるようになった。そうやって話していると、修哉は完璧に何でもできる少年ではあったが、それ以外のところでは普通の少年だった。話す内容は僕と同じレベルの話題ばかりだったし、外で遊ぶにしてもサッカーを好んでやったし、虫を捕りに山へ行ったりと、やることは同じなのだ。

思い返せば、小学生の頃は常に修哉と空と海、そして僕は一緒だったような気がする。中学生になってからは、そもいかなかった

けれど。もちろん、それは大人に近づいて行った証拠でもあるのだが。

それから約3週間後の4月10日。僕の高校の入学式が執り行われた。

本来、新2年生になる僕は入学式に行く必要は無いのだが、一応生徒会役員のために、いちいち行かなければならない。あんまり大きい高校ではないことと、近年の少子化のために年々入学生が減少しているとはいえ、今年は約400人が入学。その中で、空はトップの成績で合格したらしく、入学式で新入生代表として挨拶みたいなもんを言うらしい。ちなみに、海は5位以内ではあったとか。……十分すごいがね。

「新入生代表、日向空」

「はい」

空は凜とした声で、入学の言葉を言い始めた。彼女を見ていて、去年、あの場で修哉が同じことをしていたのを、昨日のことかのように思い出す。修哉は例の如く新入生トップの成績、しかも全教科満点という離れ業で合格したのだ。いつものあいつを見ている僕としては、どうしても信じられない出来事ではあったが、修哉だもんな……と、一人で納得していた。

「ホントにめんどくせ。なんで俺がこんなことしなきゃなんねえんだよ」

と、入学式の前日までブツブツ文句を言っていた修哉。

「だったら、わざと一教科80点くらいにすればいいのに。お前ならそういうことできるだろ？」

「俺にかかればそんなことちょろいけどよ、それじゃあ俺がスゲエってことがわからねえだろ？」

「……なんだ、自慢したかったのね」

そう言つと、彼は僕に向けて笑みを向ける、

「高校の教師どもに、俺の実力を早々に知っておいてもらわないとな。楯突けないように」

「……呆れたを通り越して、ある意味尊敬するよ」

そう皮肉染みたことを言つても、彼は笑いを絶やさない。

「……平成19年、4月10日。新入生代表、日向空」

気付けば、空の言葉が終わっていた。彼女は一礼して回れ右をし、小さな階段を降り始めた。

その時、彼女は僕が座っている体育館の端の方に目を向け、僕と視線が合った。すると、空はニコツと微笑む。僕も、それにつられて微笑んでしまった。それがわかると、彼女は再び普通の顔に戻り、自分のイスへと座って行った。

「……………」

ああやつて笑顔を向けられると、照れてしまうものだな。見慣れているとはいえ。

「なんだ？ あの子、こつちに微笑みかけなかったか？」

僕の隣にいる、同じ生徒会役員である進藤和樹が小さな声で言った。

「さあ？ どうだろうね」

「まさか、俺に微笑みかけたわけではあるまいし……」

そりゃそうだ。いきなり見も知らぬ先輩に笑顔を振り向けるかつての。ギャルじゃあるまいし。いや、ギャルでもしないか。いかにいかに、偏見だな。

「新入生かあ……………」

ふ〜んと、和樹はニヤニヤしていた。まあ、彼女は美人なので、和樹の目に留まるのも仕方ないというものだ。

進藤和樹。高校で同じクラスの友達だ。修哉とも仲が良く、彼は一時期同じバスケット部にいた。……まあ、修哉がすぐに辞めてしまったので、ほんの数ヶ月だけだったが。

和樹は何事も無難にこなすオールマイティな奴で、さらにルックスもいいので女性陣に人気がある。ホント、うらやましい限りですよ。

「……以上で、入学式を終わります。一同、起立………礼」  
僕は一礼した。こうして、今年の入学式は何の滞りもなく終了。なんかあっちゃ困るが。

「空あ、待ってよ」

荷物を担いで校門から出ようとした時、後ろから海の声（彼女たちは声もそっくりなのだが、空はほとんど大きな声を出さないので見分けることができるのだ）が聞こえた。後ろへ振り向くと、空と海、おばさんとおじさんがこっちへ歩いて来ている。

「こんにちは、おじさん、おばさん」

「こんにちは」

おばさんとおじさんは、ニコツと微笑んだ。おじさんもおばさんも、かなりイケてる顔をしている。まあ、遺伝って言うのは素直だよね……。

「この度はおめでとうございます」

と、僕は笑いながら言った。

「ハハ、ありがとう」

おじさんはメガネをさすりながら笑った。

「まったく心がこもってない!」

海はそう言っつて、僕の頭をひっぱたいた。

「いてっ! いちいち叩くな!」

「うっさい、馬鹿空!」

「誰が馬鹿だ! 標準だ、標準。お前らと一緒にすんな」

普通であるならば、文句は言われないのだ。下位よりマシでしょーよ。

「ちょ、ちょっと、2人とも……入学式早々、ケンカしないでよ。」

恥ずかしいじゃない」

空は少しオロオロしている。彼女は少し人見知りで、極度に目立つことを嫌がる。今日のような代表の言葉みたいのは仕方ないとして。

「ま、これが本来あるべき空君と海の姿なんだがな」

おじさんは僕たちの様子を眺めながら微笑んでいる。

「そうね。昔っから、そこは変わらないわよね」

おばさんも、同じように微笑んだ。

「年がら年中ケンカしてるわけじゃないって」

僕は苦笑しながら言った。すると、おじさんは僕の肩に手を置いた。

「何はともあれ、高校まで一緒になっちゃったけど、2人をよろしくな。空君」

「まーた僕が保護者代わりみたいなもんですか？」

僕はため息を漏らした。小学の時も中学の時もそうだったが、学校では専ら彼女たちの面倒を見るようになってしまっている。

「君に任せておけば2人は安全だし、なにより素直だしね」

「お、お父さん！」

海は少し顔を赤くし、おじさんの服を引っ張ってそれを制止させた。

「素直？ 空はともかく、海はそうじゃないでしょーよ」

「……この馬鹿空！」

バチン

再び、海の平手が僕の頭部に直撃。

「もう……結局いつもと同じじゃない……」

再び、空は呆れていた。いつものように。

同じような日々が始まるはずだった。今までと同じような日々が続くはずだった。変わるの、場所が「高校」になっただけ。生活

の本質も、周りを取り巻く状況も、何一つ代わり映えしないはずだった。

しかし、少しずつ時が進むにつれ、何かがずれ始めていた。目に見えぬ小さな、小さな歪みの隙間から、暗い何者かが僕たちを覗き込んでいたんだ。気付かれぬように息を殺し、着々と「その時」を待っている。「その時」というのを、僕が知っていたら、こんなことにはならなかったのではないかと思った。

避けることのできない未来。

逃れることのできない運命という名の道。

少しずつ、少しずつ開き始めていたんだ。

「運命」という名の扉は

## 1章：故郷にて 陰りのない日々

4月11日、新学期初日。

再び学校生活が始まった。高校の春休みは大体1ヶ月近くあるんだけど、思えばあつという間だった。高校に内緒でしていたコンビのアルバイトを辞め、春休みはゆっくりしようと思っていたのだが、それはそれで結構暇だった。毎度のように日向姉妹が押しかけるので、いつもどおりと言えはいつもどおりなのだが、修哉は家族旅行でどこかに行くし、和樹や他の友達も部活が忙しく、僕と遊ぶ暇など無かったのだ。

今日の朝は、日向姉妹に叩き起こされた。

「おらー！ 起きろ　！！　朝だぞ！　遅刻するぞ！」

「……朝っぱらからやかましい女だな……」

うざったいほどに朝から元気な海ちゃん。耳障りだったの。

「私とお姉ちゃんの高校生活最初の日、寝坊つてのはダメでしょ？」

「……だったら僕は関係ないだろ……」

僕は半分閉じている目で、時計を見た。

「ああ……？　7時10分……って、おいおい……まだ1時間以上もあるじゃんか……」

「8時までが登校の時間のはずだよ？」

空はいつもの如く、呆れながら呟いた。

「朝の読書が始まるまでに行けばいいんだよ……。お前らは新1年生だから、そうもいかないかもしれないけど」

「どっちにしても、早く行って損はしないよ？　やり忘れた宿題はできるしね」

「あのお、空……春休みの宿題をどうやって、ものの数十分で片付けろってんだ？ もう間に合わねえよ……」  
「……それはどんなに早く登校したって無理だと思う……」  
「ともかく、あと20分寝させて……」  
僕は布団の中へ潜り込んだ。まだ4月とはいえ、寒いっす。  
「せつかくだから、起きろ！」  
「……………」

結局、この日は僕の学生生活の中で、最も早く学校に到着することとなった。校門の近くで毎朝掃除している校長先生が、  
「おや、東君じゃないか。こんな時間帯に君が来るなんて、珍しいこともあるものだね」

「ハハハ……好きで早く起きたわけじゃないんですよ……」  
こんなことを言われる羽目に。はつきり言って、うれしくなかったり……。

僕は何度か校長先生と話す機会があったため、先生は僕のことを覚えてくれている。数百人もいる学生の中で、自分を覚えてくれているというのは結構うれしいことだったりする。

「そうなんですか？ ……おや？ 君は、新入生代表の……」

「日向空です。おはようございます、校長先生」

空は礼儀正しく頭を下げた。海もそれを見て、少し遅れて一礼した。

「……………？ 隣にいる子は、そっくりだが……………？」

校長先生は眼鏡越しで海を見つめた。海は目をパチクリさせて、自己紹介を始めた。

「お、おはようございます。えっと……………日向海です。お姉ちゃんとは双子なんです」

「双子？ ああ、そう言えば……………。これから、よろしくお願いしますね」

校長先生は、深々と頭を下げた。それにつられて、空と海は再び

一礼した。

「そろそろ行こうぜ。眠い……」

無理矢理起こされたので、目がシヨボシヨボする。

「ハイハイ。じゃあ、失礼します」

「失礼しまーす」

僕の教室は2年3組。教室に到着したのは、7時51分。教室に入ると、真面目な人及び女子の数人しかいなかった。

「おはよ……」

僕は流れるように教室の中を進み、自分の席に座り、机に頭を乗せて眠ろうとした。しかし、ここでも障害が待ち受けていた。

「おはよっ、空」

「……美香か……おはよ……」

オサナイミカ  
小山内美香。中学3年の時からクラスがずっと一緒の同級生。女子生徒の中では、最も仲が良い女子だと思う。女子にしては身長が高く、160センチ台半ばくらいだったか。

「どうしたの？ 空がこんな朝早くに来るなんて。朝、何か起きたの？」

美香は微笑みながら言った。

「……やかましいやつらに起こされたんだよ……」

「やかましいやつら？ 誰？」

「誰って……日向姉妹だよ。知ってるだろ？」

「ああ……空の幼馴染の双子ね。そっか、この高校に入学したんだっただね」

空たちは彼女の後輩（当たり前）なのだが、あまり面識は無い。中学時代、たまに美香とは一緒に帰ったことがあって、その時に何度か空たちと遭遇したことがある（空と海は、ほとんど行動を共にする）。

「家が近いんだっけ？」

「まあ、ね。』高校生活の初日だから、記念として一緒に登校しよ

う』……だつてよ……」

僕はカバンから枕を取り出し、その上に頭を乗せた。あまりに眠い時は、僕はこうやってマイ枕を持参するのである。

「ふーん。相変わらず仲良いよね、3人は」

「……ま、んなもんだよ。……そゆことで、寝させてくれ……」

「ハイハイ。まったく、ホントに朝は弱いんだから」

美香は呆れながらも、笑いながら自分の席へと戻って行った。

(……ようやく眠れる……)

僕の席は教室の1番左奥であり、最も先生の視界から届きにくい場所でもある。だから、朝の読書が始まって、何も言われないだろうと思った。

ものの1分程度で、僕は眠りに就いた。

青い空。

白い雲。

体を包み込む太陽の温かい光と、優しい癒しの風。

僕自身は、空中に漂っていた。まるで、一切れの紙のようにヒラヒラと。

ゆっくりと後ろ……いや、地上へ目をやると、緑色の草原で広がる大地があった。その果てには、大海原が見える。

青海と蒼空の境界線。その果てに、僕たちが求める【永遠の答え】があるような気がした。遠い昔から追い求め続けている、神秘の寶石。誰にも奪うことのできない、光輝の秘宝。

心が奪われてしまいそうなほどの、美しい地球の姿。

これが……本当の宝物なんだろうな……。

「……いい……おい……」

誰かが、僕の体を揺らしている。

「……おい。空、起きろって」  
僕は目を薄く開けた。

「……………んあ？」

「ホームルーム、始まるぞ」

「ホームルームを始めるぞー。学級委員！」

頭を上げると同時に、先生が大きな声で言った。

「起立！」

フラフラの状態で立ち上がり、一礼し、再び机の上で目を閉じた。しかし、一度起こされてしまうと、再び眠りに就くのは難しい。なかなか寝ることはできず、結局2年生最初の1時間目に突入した。

その日の昼、僕はいつものように、和樹と啓太郎（同じクラスの友達で、こいつは中学の頃から知り合い）の3人で昼食を取っているとき、

「そう言えば、見たぜ？ 空」

和樹がニヤついた表情で言った。

「……………気味悪い顔するなよ……………」

「まあまあ。今日の朝、一緒に登校してた女の子、誰なんだよ？」  
僕は思わず箸を止めた。

こいつ……………見てやがったのか……………。

「あの子、昨日の入学式で新入生代表だった女だろ？ 知り合いなのか？」

「??？ 何の話だよ」

啓太郎は何も知らないのです、サンドウィッチをほお張りながら言った。その姿はどこことなく子供っぽい。

「啓太郎には後で説明してやるから。で？ 誰なんだよ？」

「誰って……………幼馴染だけど」

「幼馴染？」

僕はうなずいた。別に隠しておくことじゃないし、教えておいてやるつもり。

「近所の子供で、双子の姉妹なんだよ。だから、物心つく以前から一緒に遊んでた仲なんだ」

「双子？ ああ、たしかにもう一人いたな。よく見えなかったけどさ。それにしても、なんで今まであんなカワイイ幼馴染がいたことを教えなかったんだよ？」

「別に教えなかったわけじゃなくて、教える必要性がなかったんだよ」

「ホントかあ？」

疑心に満ちた顔をする和樹。

「……ホントだよ。証拠に、啓太郎は知ってるもんな？」

「何が？ その双子？」

啓太郎はきよとんとした顔をしていた。

「覚えてないか？ 中学の時、1つ下の『日向姉妹』って」

「……ああ、あの日向姉妹ね。和樹が言ってたのって、日向姉妹のことか」

他に双子はいないと思いますけどね……。

「おいおい、俺だけかよ？ 知らなかったのは」

「和樹は中学が違うもんな。有名だったんだよ。空の幼馴染で、美人で聡明な日向姉妹って。まあ、美人というより可愛いつて言ったほうが妥当か」

少したれ目で、大人の女性受けしやすい童顔の萩原啓太郎<sup>ハギワラ ケイタロウ</sup>。中学の頃からの友達。啓太郎はマンションが一緒だった和樹と知り合いで、そのついで僕は和樹と知り合った。啓太郎は美香のことも知ってるし、修哉は勿論、日向姉妹のことも知っている。ちよつと天然な性格だが、根はしっかりしている。何事もそつなくこなし、みんなと分け隔てなく接することだ出来る。裏表のない性格だが、物事を見極められるやつだ。

「美人で聡明？ おいおい、修哉の女バージョンじゃねえか」

たしかに、言われて見ればそうだ。修哉もルックスは学校随一だしな。数ヶ月前、町中でモデル雑誌の人にスカウトされたって言っ

てたしな。…………断つたらしいけど。

「そんなんじゃないやあ、男子生徒が黙っちゃいないだろうな」

和樹は笑いながら言った。

「中学の時でも、男性陣は放っておかなかつたね」

啓太郎は苦笑していた。

「あの頃、あいつらの幼馴染だからって、僕が取り次ぎ役とかさせられたんだぜ？ 迷惑な話だったよ、ホント」

「と言うことは…………空の幼馴染で、仲が良いつてことがばれると、また同じことが起こるな」

和樹はハハツと笑った。

「おいおい…………冗談じゃねえよ」

あの時のことを思い出すと、ホントにめんどくさかつたもんだ。

「紹介してくれ」「俺の印象を良くしておいてくれ」とかさ。しかも、空と海は「代わりに断っておいてくれない？」などと言う始末…………。そりゃ、面識の無い人だから会いたくないのもわかるけど、相手を生殺しにするようなことをするなつての。おかげで、怨まれることは多々あつたんだからさ。いい迷惑だつたよ…………。

「ところで、その姉妹の名前は？」

「和樹さ、昨日の入学式で聞かなかつたか？」

「ハハ、ポケットとしてた」

こいつは僕以上に怠け者だな…………。こんなやつらが生徒会役員をしているこの学校つて、おかしくないか？

「日向空と海…………だつたっけ？」

啓太郎は確認するかのようには僕の顔を見た。

「日向空！？ マジで！？ お前と同名！？ 女なのに！！？」

リアクションが大きすぎるぜい、和樹君…………。

「女でもアリな名前だとは思っけど…………」

まあ、啓太郎の言うとおりで。

「はあ〜なるほどなあ…………」

和樹はお茶を少し飲み、イスに深々と腰掛けた。

「飛びつきりの美人で、しかも頭が良い双子の姉妹が自宅の近くに住んでて、一人は同名。……なんかさ、運命を感じないか？」

和樹は薄気味悪い笑顔を浮かべた。と言つより、人の恋路をネタに笑う奴の顔だな。

「何言つてんだ。たまたまだろ、たまたま。偶然が重なっただけだよ」

「偶然ねえ……」

「……なんだよ？」

和樹は意味深に呟いたので、思わず訊ねてしまった。

「それほど偶然が続くと、もはや運命だとは思わないか？」

「……………」

運命つて……大げさだな。

「もしかしたら、空ちゃんか海ちゃんのとちらかが、お前と結ばれる運命にあつたりしてな」

啓太郎の言葉で、僕は思わず吹き出しそうになった。

「……啓太郎、あり得ないことを言うなよ」

「思い当たる節はあるんだよ。……彼女たちってかなりの秀才だろ

？ 三瀬高校に100パー合格できるほどの」

「はっ？ マジで！？ んなに頭良いの？」

和樹は目を丸くした。前にも言ったが、三瀬高校はそれほど良いところである。

「そんな彼女たちが、わざわざ平凡高校のここに入學してくるかな？」

「……理由を聞いたら、『近いから』とかって言つてたけど？」

「それだけかな？ ……もしかして、空と同じ高校に行きたかったんじゃないの？」

「……………」

僕は啓太郎に何も言い返せなかった。そんなこと、考えもしなかった。

「けどさ、あれだけの美人は空に勿体無いだろ？」

「……和樹……それは、どういう意味だ？」

「セリフどおりの意味ですか？」

和樹は自信満々の顔で言い放った。僕は一発、頭をはたいてやった。

「ハハハ、凶星を突かれたからって怒るんじゃないよ」

「うっ……まだ言うか」

たしかに、僕と彼女たちではつり合わない。それは、中学の頃になつてようやく気付いたのだが。

「けど、空はそこそ良い方だと思うけどね」

啓太郎がサラツと言った。そんなこと言われたことがなかったの  
で、僕は照れてしまった。

「……そ、そういうことを言うなよ……」

「まあたしかに、啓太郎の言うとおりではあるな。空はいつも修哉とつるんでたから、みんな忘れがちになっちまうんだよな」

「そうそう。修哉は飛び抜けてるからね」

啓太郎はハハツと笑った。

「あいつと一緒にされたら、たまったもんじゃないよ」

「俺も、あいつと一緒にされたら嫌だな」

「まあ、中身は馬鹿だけど」

「同意」

僕たちは同時に笑った。

修哉は誰もが認める、パーフェクトな人間だ。全国模試で1位を取るほどの頭脳、運動神経抜群で長身、細身でかつこい。今まで、何十人という女性が（下は小学高学年から上は30代のおばさんまで）修哉に告白したのを目撃した。というより、一緒に歩いているといきなり言われたんだけど。

そんな修哉だが、実は今まで一度も女性と付き合ったことが無い。と言うより、付き合おうとしなかったと言ったほうがいいか。

「女性と付き合おうと、いちいちめんどくさい」

そう言っつて、いつも微笑んでいる。そのところは、人によって

感じ方が違うから、僕はなんとも言えないんだけどな。

「だけど、お前は好きじゃないの？ 日向姉妹は」

和樹が言った。

「……別に好きでも何でも無いけど……」

「おいおい、ホントかあ？ あれほどの女の子がいたら、たまったもんじゃないと思うけどな」

「……どっかの親父みたいだな……」

「普通、好きになると思うけどな。幼馴染で、かわいかったら」

「……」

うん……。

「……深く考えたことはなかったけどな」

「そうなのか？ まあ好きじゃないなら、それはそれでいいけど、そんなんじゃないあ、お前は他の女には見向きもしないんだろうな」

「??? どういう意味だよ」

「日向姉妹に恋愛感情を持たないなら、他の女性には目もくれないってこと」

啓太郎が丁寧に説明した。

「そ、そんなこと無いよ」

「だったらお前、誰かを好きになったり、誰かに告つたりしたことがあるのか？」

「……」

「そう言えば、空に関する恋愛という類の話は拳がらないよな、昔から」

啓太郎が言った。

「勿体無い人生歩んじやってるなあ、お前は」

「余計なお世話だったの」

僕は弁当のおかずの最後、ウインナーを口に運んだ。

「……逆に、日向姉妹のどちらかが、空のこと好きだったり」

「むぐつ」

僕はウィンナーを口から発射しそうだった。

「それこそあり得ないだろーよ、啓太郎」

和樹は笑いながら言った。

「そうかな？ あまりに仲が良いから、あり得るか？……」

「なあにい〜？ それは実に許せん！……ああ！ そうか！」

和樹は何かを思い出したかのように、立ち上がった。その瞬間、他の席で食事をしているクラスメイトの視線が和樹に集中した。

「入学式の時、空ちゃんがニコツと微笑んだ相手は……お前か！」

和樹は勢い良く、僕を指差した。

「な、なんだよ？ それの何が」

「てめえ！ 羨ましいんだよ！！」

その時、和樹はご飯粒をデコピンで、僕の顔に飛ばし始めた。

「ちよ、ちよつと………止めるっての！」

悪ふざけが過ぎる、和樹。こんなのがそれなりにもてるんだから、世の中おかしいよねえ……。

運命、か。

隣の家で生まれ、同じ名前を持ち、共に過ごしてきた。たぶん、彼女たちという時間が最も長いのもしれない。

幼稚園、小学校、中学校……そして、高校。16年と半年生きてきた自分の人生の中で、4分の3以上が彼女たちと一緒にだ。

運命ねえ……。

まあ、あいつらが僕と同じ高校に行きたかったから、この高校を選んだわけじゃないだろう。あいつらにとって僕は、長い付き合いの幼馴染でしかないんだし。

きつと、あいつらは僕と同じように、その『幼馴染』という感覚でしかないはずさ。恋愛感情だとか、そんなのは一切無いと思うけどね。今まで、そんな素振りを見せたことはなかったもんな。

午後3時半頃。6時間目が終わり、ようやく初日が終了した。ほとんどが授業と言うより、これからの授業の説明や、新しい先生の自己紹介or生徒の自己紹介みたいなばかりで、楽と言えば楽だった。しかし、1ヶ月近くもグータラな生活をしてきた自分としては、結構こたえるものがあった。しかも、空たち（ほぼ海だが）に早起きさせられたために、普段よりも滅茶苦茶眠くなってしまった。おかげで、1〜3時間目の授業はほとんど起きていた記憶が無いのが現状。

「空ー」

クラスメイトが教室から出て行く中、出入り口付近で美香が呼んでいた。

「何？」

「柊君が来てるよー」

「修哉が？」

僕は教科書をカバンに詰め込み、のらりくらりとそこへ行った。  
「おっす、空」

教室から少し出た所に、修哉がカバンを持って突っ立っていた。相変わらず、制服のボタンを閉めていない。

「おっす。何か用？」

「まあ少しな。帰り道で言うから、帰ろうぜ」

「……………？？ ああ、わかった。じゃあ、また明日な。美香」

「あ……………うん、バイバイ」

美香は小さく笑って、手を振った。

廊下を歩いていると、時おり修哉は後ろへ振り向いていた。

「さっきから、何を気にしてんの？」

「ん？ ああ、さっきの……………小山内だったか？ お前と仲が良い女

「そうそう。よく名前覚えてたな、お前」

「女の名前は忘れねえよ」

修哉はハハツと笑った。

「ホントかよ？ ふった相手の名前とか、覚えてんのか？」

「面識の無い奴の場合は、覚えられないだよ。覚えても、話すことなんて未来永劫無いだろうからな」

「相手もかわいそうに……。で？ 美香がどうしたって？」

「ああ、そうだった。……お前、なんであの女と仲が良いわけ？」

修哉は軽く質問してきた。

「普通に、話しておもしろいからだろ？ ていうか、それなりに話が合うんだよ。それに、中学の時からクラスメイトだし」

「ふ〜ん……」

修哉は微笑を含んだため息をついた。

「……なんだよ？ その意味深なため息は」

「いや、なに。お前には空ちゃんと海ちゃんがいるのってことよ」

「……はっ？ 何言ってるんだよ。空と海は、別に僕の恋人でもなんでもないだろ？」

「そりゃそうだけだよ、小山内のほうはそう思っていないんじゃないかってことさ」

「??？」

僕は頭をかしげた。

「つまりさ、小山内だけじゃなく、他のやつから見れば、空ちゃんと海ちゃんはお前の彼女に見えちまうってことさ」

「な、なんだよ？ それ」

すると、修哉はフツと笑った。

「ようするに、これからは彼女たちと接する時は気をつけろってことだ」

「……な〜んか……なーんとかなくけど、お前が言いたいこと、わかった気がする」

「おっ？ マジで？」

僕の苦笑とは対照的に、修哉はうれしそうに笑った。

修哉が言いたいことはつまり……。

「中学の時と同じことが起こるって事か」

僕は大きいため息をついた。

「ハハ、そういうことだ」

「……人事だと思つてさ」

「だって、人事だもんよ」

「……ぬう……」

修哉の笑い方が、妙に腹立つ。

「そういうお前も、周りの女が放つておかないんじゃないの？」

「んなの、もう慣れたし。簡単にあしらつておけばいいじゃん」

僕は皮肉染みたことを言つたつもりなのに、修哉は軽くかわしやがった。

「お前も大変だよなあ。かわいい幼馴染がいるとさ」

「……それ自体は別にいいんだよ。そもそも、空と海が自分で対応すればいいんだよ。……憎まれ役を、なんで僕が……」

僕は顔を沈めた。嫌なんだよなあ……僕が代わりに断る時の、相手の悔しそうな顔や、悲しそうな顔とか。たまに、突っかかつてくる奴もいるし。

「そういう星の下に生まれただよ、お前は」

修哉はボンと僕の肩に手を置いた。

「星の下つて……大げさだな」

「ハハハ、たしかにな。ま、俺のクラスの野郎どもが3人、明日2人のどつちかに告るらしいから、よろしく」

「僕に言わないで、本人に言えつての！」

「それも俺に言わないで、告白しようとしている野郎どもに言えよ」  
修哉は笑いながらあしらつた。

その日、修哉と僕は一緒に帰つた。久しぶりに、僕の部屋でゲームがしたいんだとさ。家に着いたのは4時前。僕の家から高校までは、ほんの15分程度の距離なので、登下校には便利なのである。自転車があれば尚良いんだけど。

「ただいまー」

「お邪魔しまーす」

「あらあら、修哉君じゃないの」

「お久しぶりです、おばさん」

修哉は玄関から、礼儀正しくお辞儀した。

「相変わらずカッコイイわねえ」。惚れ惚れしちゃうわ」

「……気持ち悪いこと言ってるんじゃないの」

僕は吐き付けるように言った。40代半ばのババアが何言ってるだつて話だよ。

「……あんたも、修哉君みたいな男の子になってくれればねえ……」

「あんな、遺伝的に無理ですよ。遺伝的に！」

僕はそこを強調して言った。

「ほほう？ 実の母親に向かって、そんなこと言っているのかな？」

「……………」

僕はそれ以上言われたら不利になりそうなので、何も言わず2階へ上がるうとした。

「あれ？ 逃げるつもり？」

「……ハイ、逃げるつもりです。ホラ、修哉、行こうぜ」

「ハハハ、相変わらずですねえ」

僕たちは僕の部屋で、昔懐かしのゲームをした。現代の小学生はきつと経験したことの無いゲーム機で。

そんなゲームをしていると、日が山に隠れ始めた。この時期だと6時過ぎの時間帯と言ったところか。

その時、

「こんにちは！」

元気の良い声が響いた。この声は、海だ。

「元気良いなあ、海ちゃんは」

修哉もいい加減、聞き慣れている。

「それがあいつの取り柄だからな」

「『大海原』の海。元気が良いと言うより、何もかも包み込む大きな優しさ……っていうイメージなんだけどな」

「ああ、なるほど。修哉にしては、うまいこというじゃん」

「『海』って名前を付けたってことは、そういう人になってほしいっていう両親の想いが込められてるんじゃないかと思ってね」

「僕もそうだけど、自然の名前を付けられたことは、最初はなんだか恥ずかしいなあって思ってたけど……なんか……」

「こんにちはー!!」

言いかけた瞬間、僕の部屋の扉が勢いよく開いた。そこから、空と海が入ってきた。想像通りのご登場です。2人は、高校の制服のままだった。

「あつ！ やっぱり修哉君だ」

「おつす、海ちゃん」

「こんにちは」

空はペコリと一礼した。

「こんにちは。相変わらず、空ちゃんは礼儀正しいな」

「何？ 私は礼儀がなってないと？」

海はギロツと、上から修哉を睨んだ。

「ハハ……冗談だよ、冗談」

「……で？ お2人は何の用で？」

「……なんで怒ってるの？」

空は目をパチクリさせた。

「……別に」

僕はそっぽを向いた。

「ハハ。明日、大変な目に会ってわかってるからイライラしてるんだ。気にしなくていいよ」

修哉は笑いながら言った。

「………?」

空はよくわかっていないらしい。まあ、別にいいんだけど……。

「そんで？ 何か用？」

「別に用は無いよ」

海が言った。

「だったら来んなよ。てか、今日の朝来たばつかじゃねえか」

「高校生活最初の授業日のことを話したいんだってさ」  
空がなぜか説明した。

「……わざわざ、なんで僕に言いたがるんだよ……」

「まあまあ、聞いておくんなし」

なぜか海は昔話をしようとするおばあさんのように、彼女は満面の笑みで今日一日のことを話し始めた。

同じ中学の順子ちゃんと同じクラスだったとか、女子の友達が多きたとか、お姉ちゃんが学級委員に抜擢されたとか、男子生徒が何度も何度も話しかけてきてめんどうくさかったとか、担任の先生は少しはげてるとか……。

「……ってことでさ、なんだかおもしろかった！ 高校って、想像以上に楽しいね。中学の時とは違う友達ができるし」

「ハハハ……なるほど……」

修哉は笑顔で答えていた。しかし、内心「めんどうくせえ〜」とか  
って思ってたんだろうな……。

「空、聞いてんの？」

「……はつきり言って、聞いてませんね」

「この、馬鹿空！」

海は僕の頭をはたこうとしたが、僕はその前に海の手首を掴み、未然に防いだ。やられる前に、どうにかするってことさ。

「いちいち叩こうとするなっての。ホント、めんどうくさい女だ」

「なんですつてえー！」

もう片方の手で、海は僕の頭をはたいた。

「いってえな……！」

「うっさい！ お姉ちゃん、帰ろ！」

海は立ち上がり、部屋から出ようとした。

「もう……巻き込もうとしないでよ。私、もうちょっとゆっくりしたいしさ」

「ちえっ。じゃあ、私は先に帰ってるね。……明日は、起こしに来

てやんないからね！」

海はいたずら小僧みたいに舌を出して言った。

「お願いした覚えはありませんがね」

僕も彼女と同じように、舌を出して言った。海はドアを強く閉め、出て行った。途中で、「お邪魔しました〜！」と、海の声が聞こえた。

「……なんだかんだ言っつて、海ちゃんも礼儀正しいよな……」

修哉は窓の外を見つめた。

「……ああやってやんちゃっぽく見せようとしているのは、空との違いを強調するためなんだと思うけどな。髪の毛の長さ以外、まったく同じだもんな」

空はロングで、海はショートである。いや、セミロングっつーのかな？

「海は、私と2人つきりのところじゃあ大人しいもん」

「……だろうなあ。まっ、それがわかってるから、多めに見てやれるんだけどな」

「……………」

僕はハハッと笑った。

「それじゃ、そろそろ俺もお暇するとしますか」

すると、修哉は立ち上がり、カバンを掴んだ。

「？ 帰んの？」

「ああ。もう7時過ぎてるしな。沙希が、7時半までには帰れっつるさいしさ。まあ……この分だと怒られるのは必至だな」

修哉は優しく微笑んだ。咲希ちゃんのこととなると、なんだか表情が和らぐんだよな……修哉って。

「じゃあな、空。また明日。じゃあね、空ちゃん」

「ああ、またな」

「うん、バイバイ」

そして、修哉は部屋から出て行った。

「……んで？ お前は帰らないの？」

「……帰ったほうがいいの？」

「……別に、いたいならいてもいいけど」

なんか調子狂うな。空はたまに、わけのわからないテンポを繰り返す奴だからな。

「昨日の新入生代表の言葉といい、1番最初の学級委員になったといい……お前はいきなり優等生ぶりを発揮か」

僕は笑いながら言った。

「好きでなつたわけじゃないよ」

「わかってるよ。もし好きでなつてたとしたら、なんか嫌味な奴って思うし」

「そうだね」

空はかわいらしく笑った。

「そう言えば、どうしてイラついてたの？」

「ん？」

「修哉君が、明日空は大変な目に会って言うてたから……」

「ああ、そのことが」

今更、その質問をされるとは思わなかった。

「修哉の同じクラスの男子が、明日お前か海、どちらかに告白するってんで、中学の時みたいに僕が迷惑するんじゃないか……って話さ」

「えっ？ こ、告白？」

空は顔を赤くした。

「らしいぜ。お前は中学の時もそうだったけど、今回もなんだか大変なことになりそうだな」

「もう、嫌だなあ……。空、どうにかしてよ」

「それこそ嫌だよ。ていうか、それが嫌だからイラついてたって言っただけじゃねえか」

「あっ、そうだった」

「すつとぼけたこと言うなって……」

「……それにしても、なんで知らない人から告白されなきゃならぬ  
いんだろ……。一度も話したこと無いのに」

空はため息をつきながら天井を見上げた。

「そりやお前、かわいいからだろ？」

「……えっ？」

空は僕の方に顔を向けた。

「幼馴染の僕から見ても、学校内ではトップクラスだと思うけどな  
」

「まあ、男つてのは単純だから、かわいい人を見つけるとどうにか  
して近付きたいって思うんだよ。修哉のクラスメイトも、当たって  
砕けるって考えでもしてんじゃないの？」

「はぁ……嫌だなー……」

空はため息をつき、顔を沈めた。

「そんなに嫌なんだ、お前」

「だって、これから目が合ったりすると気まずいじゃない。……同  
じ学校にいる以上、廊下ですれ違う可能性はあるんだからさ……」

「……ふん……」

彼女の落ち込む表情を見ると、本当に嫌なんだと思った。彼女は  
相手の心を傷付けることが、最も嫌なのだ。そういうやつだから。

「気にすんなよ。修哉のクラスメイトなんて2年生なんだし、学校  
行事や校外でしか遭遇しないはず」

「遭遇つて……… モンスターじゃないんだから」

「お前に近寄ってくるモンスターってことで」

「変なの、それ」

空は小さく笑った。

「じゃあ、空がその人たちから守ってくれるの？」

「はっ？」

彼女が僕を見つめる瞳は、きれいだった。

あれ……こんなだったっけ？

「私をモンスターから守る役目……でしょ？」

彼女の言葉で、ハツとした。いかんいかん、何ボーっとしてんだ。

「……なわけねえだろ。嫌だよ、めんどくさい」

「私だつてめんどくさいよ」

「あのなあ、僕は関係ないだろ？ 相手は、お前に告ってるんだ。

お前……お前たちがちゃんと言ってやらないと、相手がさらにかわいそうだろ？」

「……………」

「そうやって断つたりするのが嫌なら、さっさと誰かと付き合えばいいんじゃないの？」

「えっ？」

空は顔を上げた。

「お前が誰かと付き合っていれば、他の男は寄り付かないよ。と言つより、告白しようとする奴はいなくなるんだろっけど」

「誰かって……誰と？」

「そりやお前、好きな奴だろ？ んな当たり前のこと聞くなよ」

「好きな……人……………」

いちいち訊ねなくても、わかることだとは思うのだが。空つて時々ではなく、結構な頻度でボケたことを言う。……一般的なものが抜けてるのかなあ。

「お前、今まで誰とも付き合ったこと無いだろ？ まさか、いないことはないだろ？」

「……まあ……………いないことは、無いけど……………」

空は恥ずかしそうに顔を隠し、小さくうなずいた。

「へえ、そうなんだ。初耳だけど、誰なの？」

野次馬精神とでも言いましょうか。こういう話を聞くと、聞かすにはいられない。それが幼馴染の彼女なら尚更だ。彼女ほどの女を恋に落とさせている奴つてのは、どんな奴なのか？

「誰つて……教えなきゃ……ダメ？」

「へ？ ま、まあ、嫌なら言わなくてもいいけど……………。でも、幼馴染

染としては気になるじゃんよ。お前も、僕の好きな人がいるかどうか気になるだろ？」

「え……？　そ、そりゃ……気になるけど……」

「……けど？」

僕はニヤニヤしながら言った。何でか知らんけど、困ってる空の姿はちょっとおもしろい。

「……もう！　変なこと言わせようとししないでよ！　恥ずかしいじゃない！」

空は顔を真っ赤にして言った。

「ハハハ、ごめん、ごめん」

「もう………空って、いつも思うけど私をからかうよね」

彼女はそっぽを向いた。どっかの子供みたいだ。

「いやいや。お前と海、同じくらいからかってるつもりなんだけど？」

「そう……？　なんか、私の時の方がひどいような……」

「海の場合は、すぐムキになるからそう見えるんだよ。まあ、あいつのそういうところはある意味、からかいやすいんだけどね」

「何よ、それ」

「……なんにしても、僕からしたらお前たちはある種の妹みたいなもんだからなあ……。一応、年下だし」

「……」

「生まれた時から隣同士で、物心つく前から知り合いで。何をするにしても、幼い頃は一緒だった。………時間が過ぎていくのと同じに、一緒にいる時間も減っていったような気はするけどな」

僕はベッドの上で横になった。

「……そうだね……」

「僕はお前たちと出会った時のことなんて……覚えて無いもんな。初めて会った時、何を思ったんだろうな……」

「……」

人間ってのは、生まれから見えてきたもの……すべてを記憶し、脳

に内包している。しかし、人は歳を取っていくのと同時進行で、その引き出しを開ける力を失っていく。記憶することがどんどん多くなり、末端のものは引き出されなのまま、隅に追いやられていく。物置に入れられた、子供のときのおもちゃと同じ……だな。

「……私は、覚えてるよ……」

「ん？」

「私は空と初めて会った時のこと……覚えてるよ」

「マジで？」

空は小さくうなずいた。

「うん。……いつもニコニコしてて、私が泣いたら励ましてくれた」

「ハハ、そんなことしてたのか？ 全然記憶に無いもんさ」

「いつも、空の後を追っかけてた……」

「……お前はのろいからな、何かと」

「余計なお世話」

「そりゃそうだ」

僕と空は同時に笑った。

「……でも、もうあの頃には戻れないんだね……」

「まあな。もうガキじゃないんだし。あと何年かしたら成人するわけだ」

「……そうだね」

「けど、これからお前が泣いたりしたら、昔の時と同じように、

お前を励ますよ」

「……空」

「それが幼馴染の専売特許だろ？」

「……ありがとう……」

空はニコツと微笑んだ。

「……………」

なぜか、変な沈黙が流れた。何かを言わなきゃって思うんだけど、同時に言い掛けたりしそうで、なかなか言葉が出てこない。そうい  
うもんじゃないか？

「……あのね、空……」

空がこの沈黙を破った。

「ん？ 何？」

「……私、いつも空に言いたかったことがあるの」

「うん？」

「……私……」

……聞こえるかしら……

「……」

僕は天井を見上げた。そして、すぐさま部屋の隅々を見渡した。

「………？」

何もいない。なんだ？ 今のは……。

「??? どうしたの？ 空」

空は頭をかしげていた。

「……今、何か聞こえなかったか？」

「え？ 別に、何も聞こえなかったけど……。どうかしたの？」

「……いや、なんでもない……」

僕は肩の力を抜き、視線を落とした。

今のは……ただの幻聴か？ 女性の落ち着いた声……。なぜだかわからないけど……とても懐かしい……感じがする。

幻聴………だよな……。

………お願い………

「!!!!」

「まただ！ また聞こえた！」

……永遠に……りし、言霊……私たちの……を……

「な、なんだ!?!」

僕はベッドの上から降り、立ち上がった。

「ど、どうしたの?」

空は目をパチクリさせている。

「聞こえなかったか!? 今、変な声が」

その瞬間、頭の奥で何かが「ピー」と鳴り響いた。それと同時に、頭の奥で何度も叩かれているような痛みを感じた。

「ぐっ……!」

その痛みに耐えられず、僕は顔を沈めた。

「ちょ、ちよつと……大丈夫? 頭でも痛いのか?」

空は心配そうに、僕の頭をさすった。

……ワレ……エニ……ミヲカタ……ケヨ……ムクナル……  
……テイシャ……ヨ……

なんだ……!?! この声……違う、すごく不気味だ……やめろ……

……やめてくれ……!

「いつ……てえ……!?!」

あまりの痛みに、僕は立っていられなくなり、その場に沈んだ。

「そ、空？ どうしたの？」

空は何がなんだかわからず、声を上げる。

「……あた………まが………！！！！」

何かで頭を叩かれているかのようだ。鐘が鳴り響くかのようになり、大きな振動となった頭痛が波紋みたいに広がる。

……ありとあらゆる………メイヲ………ワガテニ………ルソノ  
トキ………タ………！！

「くっ………！！」

なんだ………なんだって言うんだ………！！？

この痛みは………一体………??

「空！？ 空！！？」

空の音が、遠くから聞こえる。

沈む。沈む。

どこかへ。

「しっかりして！ 空………空あー！！」

彼女の僕を呼ぶ声が、僕の奥で木霊する。あっちに行っ、こっちに行っている。

その時、僕は気を失ってしまった。

「………ここは………どこだ？」

辺りを見渡すと、見たことも無い風景が広がっている。………いや、

真っ暗だ。何もかもが、黒い。黒く塗りつぶされているみたいだ。

「……おい！ 誰もいないのかぁー!!?」

還って来るのは、沈黙だけ。

足を進ませてみた。けど、それがわからない。前へ進んでいるのかどうかさえ、わからないのだ。

完全なる暗闇。

人間、こういう場所に立たされると、今、自分が何をしているのか、どこを向いているのか、立っているのかさえも不明になる。

……ヴェス………セヴェス……

誰かの声が、遠くから聴こえて来た。

「……誰かいるのか?」

そう言っても、何も還って来ない。なんだってんだと思った時、

2つの『はかり』にかけられたお前は、どう生きる ?

「……??」

まったく、意味がわからない。その言葉は、僕に向けて言っているのか? そもそも、僕はセヴェスって言う名前じゃあないし。

道のりは厳しく、同時に激しい。それは川の濁流の如し。獰  
猛なる風の如し

「……だからさ、意味わかんねえって」

僕は呆れ交じりの声で叫んだ。

時を同じくしてその権利を得たのならば、その権利を行使し、すべきことがあるということだ

「おいおい、僕の声、聞こえてるんだろー?? 無視すんなー!!」

ああ……そう、私たちは還るのだよ  
時は……来た

僕の意識は、また遠くなった。  
また、沈む。  
どこかへと。

## 2章：裏山 遙かに遠き、少女の呼び声

あーたらしい、朝が来た。希望の〜

小学校の時に習った歌が、頭上から聞こえる。なんかの漫画で、この歌が使われていたような気がしなくも無い。

「……………」

目を開いた。その先に映っているのは、白い天井。

あれ…ここは、一体どこだ？

そう思いながら、自分が仰向けになっっていることに気が付いた。ゆっくりと視線を上から下に降ろし、自分の周りを眺めた。

ここは……病院……？

白色で統一された、清潔感のある部屋。僕がいる部屋は、どうやら個室のようだ。太陽の光が窓から差し込み、陽気さを漂わせている。

時間帯的には、昼の手前かな。

ちようどいい室温だ。暖房もつけていないんだろうけど、それがちようどいい。春というのは、何をしなくても最高の気分になるからたいしたもんだ。だからなのか、僕は四季の中では、春が1番好きだ。

始まりの予感を漂わせる、桜の季節。その花びらと、温かい風と共に流れてくるのは、新しい出会いや、新しい人生なのかもしれない。他にも、人それぞれでしか感じえない「何か」があるのかもね。僕は辺りを見渡した。……誰もいない。僕が病院にいるということは、あの頭痛がしてから気を失った後、ここへ搬送されただろう。そして、入院する羽目になった、と。けど、気を失ってから何

日が過ぎたのか、わからない。ていうか、新学期早々、入院する羽目になるとは……最悪だ。僕は遅刻をするものの、学校自体を休むことは病気の時以外しないので、なんだか勿体無い気分だ。…まあ、罪の意識を感じながら学校を休むわけではないので、ラッキーと言えばラッキーなのだが。

目を覚ましたのはいいが、どうしよう。暇だ。何もすることが無い。手許に、携帯でもあればなあ…。

その時、この病室の扉が開いた。そこから、一人の男性医師が入って来た。

「おや？ 目が覚めたのかい？」

その人は僕を見るなり、あまり驚いた様子を見せずに、近寄って来た。

「ここは……」

「ここは、長束中央病院だよ。君は昨日の夜、自宅で気を失ったためここへ搬送されたんだ」

「……そうですか。1日しか経っていないんですね」

「さつき目が覚めたのかい？」

「あ…はい、そうです」

「どこか調子が悪いとか、痛いとか無いかい？」

「ええつと……大丈夫です」

僕は自分の体を見渡しながら言った。

「昨日、突然頭痛を起こしたと聞いているんだが……」

「あ、はい。そうなんです。いきなり頭が鈍器で叩かれているかのように痛くなって、それで気を失ってしまつて……」

「ふむ、なるほど……。一応、検査をしましょう」

と言つことで、いろいろな検査を受けることに。

終了後、病室に行くと父さんと母さん、そして空がいた。

「空！」

3人は立ち上がり、僕の所に駆け寄って来た。

「あ、あんた……」

「検査をしたところ、特に異常は見当たりませんでした。しかし、念のためにもう1日入院することをお薦めしますが……」

「そ、そうですか。じゃあ、お願いします」

母さんはそう言うと、お辞儀をした。そして、先生は病室から出て行った。

「……あんた、もう大丈夫なの？」

「見りゃわかるだろ？ 大丈夫だって」

僕はそう言っつて、ベッドの上に座った。

「頭痛は？ もうしないの？」

空は泣きそうな顔で言った。

「まったくしないって。……つーか、お前学校は？」

「お前が心配だから、休んだんだよ」

父さんが、代弁した。

「……そっか。わざわざ、ありがとな。空」

「……」

「……俺は仕事があるから、会社に戻るよ。もう大丈夫みたいだしな」  
父さんはそう言っつて、荷物を担いだ。

「今日は別に休みじゃなかったんだ」

「当たり前だろ？ サラリーマンの休みは、大体土日なんだよ」

「しがないサラリーマンですからねえと付け加え、父さんは笑った。

「ついでに家に帰るけど、お前はどっする？ 帰るか？」

「そうねえ。洗濯物がたまってるし、帰るわ」

母さんはあくびをしながら、そう言った。

「……自分たちの息子が初めて入院したつてのに、その何事もなかったような態度はどうなんだか……」

「ハッハッハ、お前は丈夫だからな。安心した証拠だよ」

父さんはそう言っつて、笑った。

「…まったく…」

「空ちゃんはどうする？ 帰る？」

「私は…：学校休んじやつたし、家に帰っても暇だから…」

「そう？ じゃあ、帰る時は気を付けるんだよ」

「うん」

そして、母さんと父さんは僕を心配する素振りも見せず、帰って行った。

「あれでも親かあ？ 自分の息子が入院したつてのによあ」

「…おじさんもおばさんも、昨日寝ずに付き添ってたんだよ？」

「…ふーん」

なるほどな。だから、目の下にクマがあつたんだ。

「…ていうか、なんでお前は休んだの？」

「えっ？」

「まだ入学したてなのにさ。いきなりサボっちゃあダメだろ」

「…だって、空が心配で…」

空は両肩を落とした。

「まあ、目の前で気を失えば、そうなるのも仕方ないだろうけど…」

…。優等生のお前がいきなり学校をサボるのもな…。…。…。なんだ

か、罪悪感があるよ」

「…どうして？」

「そりゃ、僕が気を失ったせいでお前をサボらせちまったからだよ」

「…別に、空は何も悪くないと思うよ…」

「どうしても感じちまうんだよ。罪悪感ってのはさ」

「……………」

僕は仰向けになり、窓の外を眺めた。

「…昨日、どうしたの？」

僕は彼女の方に顔を向けた。

「声が聞こえるとか……………」

「…お前には、聞こえなかったのか？」

空はうなずいた。

「そっか……」

あれは…あの声はなんだったんだろう。聞いたことも無い声。それでいて、どこか懐かしい感じのする声ではあった。

……懐かしい……？

何が、懐かしいというのだ？ どこをどう思って、懐かしいと感じたんだ？ ……自分で思っていないながら、さっぱり理由がわからない。

「本当に……体は大丈夫なの？」

「…えっ？ も、もちろん大丈夫だよ。知ってるだろ？ 丈夫だったことをさ」

「…けど……」

空はそれでも、心配そうな表情を止めない。

「本当に大丈夫だって。……だから、そんな顔すんなよ。お前がそういう顔をしてると、気が滅入っちゃうからさ」

「空……うん、わかった…。本当に、大丈夫なんだよね？」

「ああ」

「…よかった」

ようやく、空は笑ってくれた。それと同時に、僕もようやくホッとした気分になった。彼女の笑顔を見ることができて、ホッとしたんだ。

……あれ？ ホッとしただっけ？

ニクムカ……？ ……ノカ？

オマエトオマエノ……ニトツテ、ツイトナルベキ……ザイハ……

「空？」

僕はハッとした。

「どうしたの？」

「…いや、なんでもないよ」

また、変な感じがした。意識が遠くなつて、どこからか声が聞こえる。

嫌な感じだ…。

「…それにしても、まさか空が入院するなんてね…」

「ん？」

「空は風邪の一つも引かなければ、怪我することも無いんだと思つてた」

「あのお…風邪の1つくらい引きますよ。一応、人間なんだから」  
「フフ、そうだったね」

彼女は口を押さえて、微笑んだ。その時、僕はあることを思い出した。

「…けど、まあ…こんな形で、病院に来ることになるなんてな…」

「……？」

空は頭をかしげた。

「病室に来ることなんて、昔は何度もあつたのにな…」

「……そうだったね……」

僕には空たちと同じ年の弟がいた。名前を、<sup>イシキ</sup>樹と言う。

彼は生まれつき病弱で、幼稚園から小学校高学年までは頻繁に入院を繰り返していた。呼吸器官などが弱いとか何とかって、父さんは言っていた。まあ、そういうわけで、昔は何度も病室へ出入りしていたのだ。樹を看病するために。

樹の性格は、兄である僕とは対照的に、大人しい。空みたいなもんだ。心優しく、非常に怖がりだった。カエルさえも捕まえることもできなかつた。いつも誰かの陰に隠れて、自分の意志を伝えようとする人間ではなかつた。だからなのか、いじめられることも多々あつた。そんな時は毎度のように、僕と海、そして修哉で助けたもんだ。

中学生になる直前、彼の体調は快調になった。マラソンやバスケ

などの激しい運動は禁止されているものの、喘息も起きず、普通の学生らしい生活を送れるようになった。

しかし、3年前…つまり、樹と空たちが中学生になった年の5月5日。樹は死んだ。死んだと、考えられた。

あの日、巨大化した低気圧の影響で、この辺りは暴風雨に見舞われた。だからと言って、家が崩れるとか、洪水が起きるほどのものではなかった。ただ、川は増水し、危険だと言うことを親に言われた。まあ、こんな大雨の時に外に出る人はいないだろうと、僕は思っていた。だけど、予想外のこつてのは起きるもの…。

すでに暗くなった夕方、母さんと樹が珍しくケンカをした。僕が親に口答えすることはあっても、樹が親に口答えすることはかなり珍しい…と言うより、見たことがなかった。だけど、その日、母さんは掃除の時に誤って樹の大切なものを捨ててしまったのだ。それは何なのかというと、空からもらったという小さな宝石だったのだ。小学の修学旅行に行けなかった樹のために、空がお土産として買ってきてくれた物なのだ。樹脂が結晶化したような…翡翠色をした宝石。樹はそれを宝物にした。

樹は、空のことが好きだった。物心が着く頃から、ずっと。だから、レプリカの宝石でも、昔に貰ったものでも、彼女に貰ったものならば、宝物にしていたんだ。だから、母さんに怒鳴ったりした。どうして、捨てたのか。どうして、確認もせずに捨てたのか。母さんなんて大嫌いだ。すると、母さんは頭に血が上り、思わず「出て行け！」と言ってしまったのだ。もちろん本気ではない。だって、外は嵐だ。外に出るはずも無い。その場にいた僕も父さんもそう思った。しかし、樹は本当に出て行ってしまった。何も言わず、ゆくりと。

それが、樹の最後の姿だった。

僕たちは樹が本当に出て行くなんて思うはずもなかったため、しばし呆然としていた。我に返った後、すぐに探しに行ったが……見付からなかった。これ以上探しても、自分たちも危険だったと言うこともある。

「すぐに帰って来る」

父さんはそう言って、落ち込む母さんを励ましていた。僕と父さんは、すぐに帰って来ると思っていた。外は嵐だし、あいつもすぐにわかるはず。あいつは優しいから、すぐに帰って来て、「母さん、怒鳴ったりしてごめんなさい」と言うはずだと。

しかし、待てども待てども、樹は帰って来なかった。1時間……2時間と、時間が過ぎて行った。さすがの僕もおかしいと思い、捜索に出た。まず、日向家の方に行っていないか。だが、いない。空やおじさんたちと一緒に、知り合いの家に電話を試みるが、いない。修哉のところにもいなかった。

結局、嵐のため、夜のために捜索する範囲は狭く、嵐が収まるまで待つこととなった。そして次の日の朝、警察が家にやって来た。

樹が交通事故にあったと。

そして、増水した川に落ち、流れていってしまったと。

僕は何がなんだか、わからなかった。何も考えられなかった。ただ、警察の言葉が、僕の耳から耳へと、超特急で抜けていっていた。樹は川の近くを走っていたトラックにはねられ、川べりへと飛ばされた。運転手はすぐに助けに向かったが、一步遅く、樹は流されていってしまった。警察は、事故現場の近くにあった樹の携帯から、家が見つかったのだと言う。

交通事故にあったのは、午後7時37分頃。樹が家を出て、数分後のことだったらしい。

それから警察は数週間、樹を探したが、とうとう見つけることはできなかった。「行方不明」扱いだっただが、当時の状況や事故現場の壮絶さを見ると、生きている可能性はほぼゼロに近いということ、「死亡」とされた。

それは、誰にでもわかることだった。あの状況で生きていること自体、無理なのだ。捜索は、打ち切られた……。

事件から約1カ月後の6月14日。樹の葬式が執り行われた。

父さんが涙を流す姿を初めて見た。母さんが人目をはばからず、声を上げて泣き崩れる姿も、初めて見た。

空と海は体を寄り添い、大声で泣いていた。あんなに泣く2人の姿も、生まれて初めて見た。立っているのがやっとという感じだった。

たった12年と数ヶ月しか生きることのできなかった弟の死に、僕は泣きもせず、ただただ、遺影と遺体の無い棺を見つめていた。遺影で微笑む樹の顔。優しい笑顔。それを見るだけで、穏やかな気風の持ち主だったというのがわかる。

あの写真は、いつのだったっけ……。

そんなことを、ずっと考えていた。すると、一人の親戚のおばさんが、他の人と話している声が聞こえた。

「自分の弟が死んだというのに泣きもしないなんて、なんて冷たい子だろう」

冷たい子？

泣かないのが、冷たい子？

悲しむには、泣かないとダメとでも言うのか？

泣いて、泣いて……泣きまわることが、悲しむことなのか？ 自分だけが悲しいんじゃない。みんな、みんな悲しいんだ。僕が泣けば、きつと母さんを責めることとなる。母さんは、自分のせいだと考え

ているから。

だから、泣かない。僕は、絶対に泣かない。

そう、おばさんに怒鳴ってやりたかった。胸倉を掴んで、その化粧の濃い顔を殴ってやりたかった。……けど、樹の葬式の時になんくだらないことをしても意味は無い。おばさんを殴ったからと言って、僕の気持ちがおばさんに理解してもらえはるはずも無い。意味の無いことをしても、樹の葬式を滅茶苦茶にするだけ。……だから、僕は聞こえていないふりをした。

呆然と立ち尽くすかのように……何も考えていない風に見せようと、僕は表情を変えず、樹の遺影を見つめた。

そんな時、修哉が僕の傍にやって来て、こう言った。

「……お前のそういうところ、俺は好きだな。お前が今、最大限に表すことのできる優しさそのもの……だもんな」

修哉は、理解していた。あいつにとっても、樹は幼馴染だ。樹にとって、修哉は友達であり、もう一人の兄のような存在だった。だから、修哉だって泣きたいはずだった。けど、あいつは僕の傍で突っ立って、同じように何も言わず、樹の遺影を見つめていた。

本当は泣きたかった。半狂乱になって泣き叫べば、どれほど楽になれるだろうか。どれほど、この悲しみを緩和することができるだろうか。今、この悲しみと苦しみから逃れたかった。

更に本当のことを言えば、僕は自分の意識がどっかへ飛んで行ってしまったようだった。警察から「交通事故」の話を聞いてから、なんだか意識が遠くなってしまったかのようにだった。そこにいるはずなのに、そこに自分がいない。あつという間に……気が付けば、葬式だった。泣き声を挙げる家族と、空たち。それらが、まるで他人事のように見えなかったと言えば、嘘になる。どうしてか、

第3者のような目線で見ていた自分がいた。

ようやく実感が湧いたのは、自分の部屋に戻った時だった。いつもいるはずの樹が、いない。机でいつも勉強している樹の姿が、無い。

その時になつてようやく、僕は泣いた。一人で。声を押し殺して、ひっそりと泣いた。床に敷いているカーペットがずぶ濡れになるくらいに。

そして……3年の月日が流れた。悲しみを乗り越えるには、十分な時間だった。

「……もうすぐ、あれから3年か……」

「……早いね……。もう、3年も経つちゃったんだね……」

「そう……だな。あつという間だったな……」

「……………」

「樹がいなくなつてから、もう当分病室に来ることは無いと思つてたんだが……まさか、自分が入院して来ることになるなんてな」

僕はハハツと笑った。

「……小さい頃は、病院の薬臭い匂いや、陰湿的なイメージがどうも受け付けられなかったけど……こうしてベッドで寝ていると、結構いいもんだな」

「……なんで？」

彼女は首を傾げて訊ねた。

「外はポカポカ。ここは快適。勉強を強要する教師もいなければ、授業中寝ていて、起こしてくる教師もいない」

「変なの。結局、先生が嫌なだけじゃない」

空は笑った。

「お前も嫌じゃない？」

「……何かと嫌なことはあるけど、そこまで嫌じゃないけどね。空の場合、授業中寝てるから怒られて、だんだん先生が嫌いになっちゃ

うんだよ」

「…仕方ないだろ。眠いんだから。特に朝。さらに春」

「もう……中学の時もそうだったけど、それはどうにかならないの？」

彼女はため息混じりに言った。いい加減、呆れてるんだろうな。

「どうにかできるなら、とっくにどうにかしてるって。こればかりは、もうどうしようもないと思ってるし」

「あ、開き直った」

空は僕を指差した。

「うつせ。学校サボった奴に言われたくないね」

「何よ。せつかく、心配して看病してあげてたのに」

そう言っつて、空はフンとそっぽを向いた。

「ハハ、ごめんって。……ありがとうな」

「…え？」

「わざわざ学校サボってまで、いてくれてさ」

「……………」

「こうやって話し相手がいてくれると、寂しくないしな」

樹も言っていた。「病室で一人は、とても寂しい」…と。こうして病室にいるからこそわかる。この広い病室の中で、一人でいると嫌になりそうだ。

「……空……ありがとう……」

「おいおい、なんでお前がお礼言っつてんだよ。僕がお礼言っつ側だろ？」

「…そう言っつてくれて、ありがとうっつてこと」

空の長い髪が、病室に入り込んだ風によって優しく揺れる。

「……なるほど、ね」

その日の午後、学校の授業を終えた修哉と海がやって来た。人を散々コケにしてから、「早く退院しないと、お前の部屋が大変なことになるぞ？」と言い残し、帰って行きやがった。ホント、迷惑な

奴らだ。

次の日、僕は母さんと一緒に歩いて家に帰った。この中央病院は、僕の家がある団地から程近いため、車とか必要無いのだ。

「どうする？ 昼ごはんでも食べる？」

「ああ、お願い。病院食は飽きたし」

僕はとりあえず、自分の部屋に向かった。

部屋に入ると、窓が少し開き、そこから風が入り込んできてカーテンを揺らしていた。温かい陽気が、この部屋の中に充満している。ただでさえ病院で寝たのに、またもや眠くなってきた。いくらなんでも寝るわけにはいかないが、あくびが出るほどだ。

元々、この部屋は僕と樹、2人の部屋だった。樹が中学生になったら、一人一部屋になるはずだったのだが、ものを移動するのがめんどくさいと言うことで、樹は中学生になってもこの部屋にいた。だから、未だにこの部屋には樹の机が置かれている。これを見て、毎度のようにあいつを思い出すが、ここ最近、その思い出す頻度が少なくなっていくような気がする。あいつが死んだ後、この机を見ると多くの記憶が鮮明に浮かび上がったのに、今ではちょっとしたことしか思い出せない。

…3年という月日が、僕の記憶から樹との思い出を薄くしていく。どんどん薄くなり、あいつの顔さえ、思い出せなくなっていくのだろうか。写真が無ければ、あいつの笑顔もわからなくなるのかもしれない。

そうやって、僕たちは樹を忘れていくのかもしれない。これから数年、数十年という月日が経ていくと、きつかけが無い限り、あいつを思い出さなくなるのかもしれない。…そうになったら、どうやってしまおうだろうか…。

人は死んだら、あとは人の記憶から消え去っていくのみ…。

そういうことなのだろうか。

部屋を見渡し、なんとも言えない寂しさが纏わり付いた。

「……………ふ……………」

僕はベッドに倒れこんだ。

なーんか、何もやる気が起きないなあ……。明日からは学校に行かなきゃいけないし、2日も休んだから、初っ端っから授業がわからなくなっちまった。

あーあ、めんどくせ。

(……空……)

……ん？ 誰の声だ？

(……空……空……)

誰かが、僕の名前を呼んでいる。以前聞いたような、男の声じゃない。……優しい、女性の声だ。

……また幻聴か……？ また、頭痛がしてくるのだろうか？ 内心、僕はドキドキしていた。不思議な感じがするからだ。自分が、普通の人間でなくなっていくようで。

「空！ できたよー！！」

ジッと待ち構えようと思った瞬間、母さんの声が家中に鳴り響いた。

「わかったー！」

僕はそう返事をする、立ち上がり、部屋から出ようとした。しかし、部屋の片隅から、何らかの気配を感じた。

カーテンが、フワッと浮かび上がった。風が、入り込んでいる。

「……気のせいか……」

さっきの幻聴もそうだが、あまり気にしないほうがいいのかもしれない。気にしすぎると、眠れなくなりそうだし。

僕は階段を下り、リビングへ向かった。今日はチャールハンですね。

次の日、僕は学校へ行った。学校へ行くとな案の定、みんなから質問攻めをされた。丈夫なだけが取り柄の僕が、入院したからだ。みんなは心配していたと言うよりも、真相が知りたかっただけなのかもしれないけど。

それからと言うものの、あれ以来、幻聴も頭痛もしなくなった。幻聴が聞こえ、極度の頭痛で気を失ってしまったことを知っている空は僕を心配しているようで、わざわざ学校へ行く時間を僕に合わせてくれている。……まあ、別に病人でもないのに、なんだか恥ずかしいのだが。海はマイペースな奴なので、さっさと学校へ行くんだが。それはそれで、逆に腹が立つのはなんでかな……。あいつはあいつなりに、心配してくれてるんだらうけど。

何も無い日々が続く、僕は幻聴や頭痛のことを、ほぼ忘れてしまった。そして、4月は終わり、5月に突入した。

「何か知らないけど、最近仲が良いみたいじゃん」

修哉は屋上で大の字になって言った。僕も同じように、大の字になって夕焼けの空を眺めていた。

「何が？」

「しらばっくれるなよ。お前と、空ちゃんだよ」

「ああ……そーいうことね」

毎朝：というわけでもないのだが、ほぼ空と登校している。嗜好きな奴からは、「付き合っくんじゃなやか」と言われているらしいのだが、当の本人である僕は、そんなつもりはさらさら無い。それに、中学生の時、一緒に登校していたことは多々あった。…そう言えば、中学3年生の時、なぜか知らないが空が毎朝、僕の登校時間にあわしてくれられた頃があった。なのに、2学期が始まった頃になると彼女は海と同じ時間帯に学校へ行くようになった。あの時、少し意識した。空の考えていることがいまいちわからないな、と。

「俺のクラスの男もそうだが、聞いた話では、3年の男子もお前に嫉妬してるらしいぜ？」

「3年？ おいおい、馬鹿も休み休みに言えよ」

「ハハ、ホントだって。まあ、気を付けるこつたな」

修哉は他人事のように、笑った。

「…僕があいつの目の前で気を失ったから、心配なだけだよ」

「ふーん。けどまあ、うらやましい限りですよ」

「…修哉。お前、なんか言いたいことがあるんじゃないのか？」

「……………」

僕がそう言うと、修哉はゆっくりと立ち上がり、フェンスの方に歩き出した。

「さすが俺の親友。本当に言いたいことがあるってのを、理解してくれるよな」

修哉の後姿から、彼が微笑んでいるのが分かった。

「生殺しにするようなことはするなっということさ」

「…はっ？」

僕は上体を起こした。

「お前にとっても、誰かにとっても、今の状況はよくない」

「誰かって……誰だよ？」

「…そのところは、自分で考えろって」

「なんだよ、それ。そこが重要な気がするんだけどな……」

「お前の欠点は、鈍感なところなんだよな」

「……………」

修哉は僕の方に振り向いた。

「鈍感なのはある意味、長所でもあるが同時に欠点だ。お前は、他

人の感情を察知する能力に長けている割に、本当のことが何なのか

…それに気付かない」

「…どういう意味だよ？」

「そのまんまに決まってるだろ？ まったく、本当に鈍感な奴だよ」

修哉は口を押さえて笑い始めた。僕には、何がなんだかわからな

い。

「……………意味わかんねえよ」

「それなら、それでしょうがない」

「お、おいおい、教えてくれないのかよ？」

「……………俺の言いたいことを理解してもらおうとしたら、お前の周り

を崩すことになりかねない」

「……………??」

「それに、俺の言っていることが正しいとも限らない。だから、これ以上は何も言わないよ。もし間違ってたら、俺にも責任があるよ。うになっっちゃうし」

「……………」

「じゃ、俺は帰るよ」

修哉は放っていたカバンを手に取り、出入り口の方へ歩き出した。

「え？ 帰るのか？」

「今日は用事があるんだ。…というより、ここ数日かな」

「ここ数日？ 学校には来ないつもりか？」

「ああ。来週の火曜までな」

「4日も!？」

今日は5月11日、金曜である。

「何しに行くんだ？」

「まあ……………ちょっと、な」

修哉は僕から視線を逸らし、言った。

「学校サボってまで、何しに行くんだよ？」

「そこところは、秘密」

「なんじゃそりゃ。まあ、お前は少々授業サボっても、勉強する必要性が無いくらい頭がいいもんな」

「ハハハ、そういうこと」

じゃあな。修哉はそう言って、屋上から出て行った。

僕は屋上で一人、夕暮れ時の世界を眺めていた。

修哉の言っていることの意味が、よくわからなかった。今の状況はあんまり良くないってことは、空と一緒に登校しないほうが良いということか？ それか、誰かを生殺しにさせている？ そういうことなのか？

時おり、修哉は回りくどいことを言う。あいつは、気付いたことを何でも言う奴なのだが、それを直に言う奴ではない。それを練ら

して練らして、ヒントを与えるかのように伝えるのだ。深く介入しない奴……なのかもしれない。でも、それは修哉の優しさでもある。他人に教えてもらうのではなく、自分で気づけ。そう言いたいのだ。…とは言え、時おりあいつの焦らす言葉が嫌になることもある。ちやんとはつきり言っほしいのよ。

(……………)

(……………?)

(…時は…………満ちた…………)

(……………?)

(…今こそ…………約束の…………開く時…………!)

(約束の…………扉…………?)

(…ゆくがいい…………星に…………れし…………よ…………)

「ヴー、ヴー」

携帯のバイブレーションが聞こえる。その音によって、僕は目を覚ました。ここは、屋上だ。

……あのまま、寝ちゃったんだ。

僕は制服のポケットから携帯を取り出した。…「日向 海」…。海から電話だ。

「…もしもし」

「もしもし? ねえ、今どこにいるの?」

いつもの調子である、彼女の声だ。僕はすでに赤くなっている空の果てを見つめた。カラスの集団が、自分たちの家へ帰って行っている。

「…学校」

「まだ学校にいたの? 早く帰って来てよ」

「…んで、何の用?」

「ちょっと話したいことがあるの。ね？ だから早く帰って来てよ」  
海は急かすような口ぶりで言った。

「ハイハイ。すぐ帰るよ」

「うん、わかった。……………どうかしたの？」

「…いや、別に」

「そうなの？ ……なら、いいけど…。ともかく、空の部屋で待つて  
るから。お姉ちゃんもいるよ」

「わかった、わかった」

「じゃ、待つてるよ」

ピ。

さすが、僕の幼馴染。いつもと様子が違うことに、簡単に気が付く。……………気にしていても、しょうがないか。

…さっきの声。久しぶりに聞いたな。ちょうど忘れかけた時になつて聞こえてきたな。けど、今までとはまったく違う様子の声色だった。

約束……………開く時……………。

んなの、知ったことか。戦争とは無縁の国に生まれ、食べるものに苦労せず、とりあえず高校生活を過ごし、僕は他の人と同じように、平凡な人生を歩むはず。幻聴は所詮、幻聴でしかない。幽霊かなんかが、僕の頭の内で囁いているんだろう。まっ、僕は幽霊なんて信じちゃいないけど。

さて、帰るか。僕はカバンを手に取り、家路についた。

「ただいまー」

自宅の玄関のドアを開けると、高校生が履く、女子生徒の靴が2人分あった。想像せずとも、誰かはわかる。

「お帰り。上に空ちゃんと海ちゃんが待つてるわよ？」

母さんはリビングから顔だけを出して言った。

「ああ、わかつてるよ」

「女の子を待たせるんじゃないよ」

「うつせーな。勝手にあいつらが来ただけだろ？」

「いいから、早く行きなさいよ」

「ハイハイ」

僕は自分の部屋に向かった。

「あ、お帰りー」

「お帰り」

部屋に入ると、2人はテレビの前に座っていた。制服のまんまだつた。

「……………」

「…何よ？」

「……………いや、別に……………」

僕はカバンを部屋の隅に置き、ベッドに座った。まったく、僕の部屋だつてのに……………」

「…で？ 何の用？」

「実はさ、ある噂を聞いたんだ」

「噂？」

海は笑顔で話し始めた。

「小学校の裏山……………覚えてる？」

「裏山……………ああ、あそこか。昔、よく遊んだ場所だろ？」

「そうそう。明日、そこに行かない？」

「……………なんで？」

小学校の裏山。ここ数年、足を踏み入れてはいない。

「実はその山頂に、珍しいものがあるんだつて。友達が言ってた」

「珍しいもの？」

「なんでも、桜の樹があるんだつてさ」

空が言った。

「…春になれば、桜なんて珍しくないだろ？ ……ん？ もう桜は無いだろ」

「そのとおり。そこの桜は、5月になっても桜が満開なんだつてさ」

「へえ……………珍しいもんもあるんだな」

僕としてはあんまり興味はない。桜なんて、無くなっちまったら  
哀しいだけなのにさ。

「だからさ、明日、見に行かない？」

海はニコツと微笑んだ。

「……明日？」

「そ。行くつよ」

「めんどくせえよ。明日はせつかくの休みじゃんか。それに……」

「それに？」

「……いや、いや」

「?? とまかくさ、休みだから行くつって言ってるんじゃない。

明日行つても、日曜日が開いてるでしょ？」

まあ、そうなんだけどさ。ただ、小学校の裏山というのが、少々  
めんどくさいんだよ。家から小学校までが徒歩で約20分。そこか  
ら裏山の頂上までは確か……10〜15分くらいかかる。結局、3  
5分弱もかかる。

「せつかくの休みなんだし、いいじゃん。ね？」

「……しょうがない。わかった、いいよ」

「ホント？ よかったあ。男の人でもないかと、怖いんだよね」

彼女はフーツと息を吐いた。

「怖い？ 何が？」

「山よ。当たり前でしょ？」

「その歳になつて、何が怖いんだか。小学生の頃は何度も行つてた  
だろ？」

「あの頃は、無邪気だったんだって」

「無邪気ねえ……」

僕は鼻で笑った。

「な、何よ？」

「べつつにー」

このあと、例の如く海に殴られる羽目に会いました。

小学校の裏山とは「高凌山」といって、数年前までは地元の子供の遊び場でもあった。僕たちが小学生の頃は、学校終わりによく登ったのを覚えている。虫を採りに行ったり、キノコを探したり、かくれんぼしたりなど。そこまで大きな山ではないので迷うことはほぼ無いのだが、2年前か3年前程前に迷子が出たらしく、それ以来、登山するのを禁止されたのだとか。

小学生の時は、彼女たちと頻繁に出入りしていたし、修哉が転校して来た後は、彼とも遊び場として出入りしていた。

中学生になってからは、学校が裏山から遠かったということもあり、登ったことは無い。…あそこに登らなっただってことは、ある意味で大人に近付いたということなのかもしれない。

翌、5月5日。土曜日。僕にとっては、大きな意味を持つ日でもある。いや、ぼくだけではない。空や海、父さんや母さんにとっても大事な日である。

「ちよつと、山へ行く前に寄りたいたいところがあるんだけど」

裏山へ行く道の途中、歩きながら僕は言った。

「? いいけど……どこに?」

「墓だよ」

「墓……あつ、そつか……。今日は……」

よつやく海は気付き、よそよそしい表情になった。

「ごめん……勝手に浮かれてた……」

「気にすんなよ。毎日が平凡だと誰だっけって忘れる。……僕だって、自分が入院するまでは、そのことを忘れてたんだからさ」

「……………」

海はなんとというか……気にする質の人間なんだよな。自分の言動、自分の行動が他人を傷付けなかったかどうか……それを気にする奴なんだ。相手を悲しませたりしたのなら、何日も眠れない日が続く。

「……墓地は近くにあるし、ついであって言ったら変だけど……」  
空が言った。

「だな。今日があいつの命日なはずだし」

「……そうだね……」

「海。気にするなって言っただろ？」

「けど……」

僕は彼女の頭に手を置いた。

「お前がそんな暗い顔だと、樹だって嫌がるぞ？ もちろん、僕も」

「空……」

「笑顔であいつにあいさつしようぜ。な？」

「……うん」

やっと、海は笑顔になった。

「それにしても背が低いよなあ、お前らって」

「う、うっさいな！ 空が無駄にでかいだけでしょ！」

「お前らは小さいもんな。無駄に」

「……私たちは標準だと思っただけだな……」

僕は一応、180cmくらい。空たちは双子のため、まったく同じ155cm。結構身長は離れている。ちなみに、修哉は185cmもある。何度か、体育の授業でバスケットをした時、ダンクをしたいたのを覚えている。

僕たちは、この辺りの団地の墓地へ向かった。

墓地というからには、少し涼しげで、静かな場所である。団地の丘にこの墓地はあり、住宅街を眺めることができる。さらには、これから行くところとしている小学校の裏山さえも見える。

「ここに来るのも、かなり久しぶりだな」

「そうだね。去年の……お盆以来だったっけ」

「そうだったかな」

僕は墓地の中央辺りに行った。

『東家代々之墓』

ここに、父方の祖父母の遺骨と共に、樹の遺骨も入るはずだったけど、あいつの遺体が見付からないため、遺骨も無い。ここにあいつの魂が眠っているのかどうか、わからない。とは言っても、遺骨

が入っているからといって、あいつの魂がここに眠っているとは限らないのだ。要は気持ちの問題…。

あいつの魂は、空の果てへ昇ったに違いない。

…どうして人は、人が死ぬと、その魂は 上へ昇っていくと考  
えられているのだろうか。そして、罪を背負ったものは地獄へ墮ち  
て行くと、どうして考えられているのだろうか。なぜ、人が行き着  
く先は、天国と地獄の2つと考えられているのだろうか。  
見たことも無いのに、どうしてそんなものを想像するのか。たぶん、  
死と、死後、自分が辿るであろう道筋への恐怖を緩和するために、  
そういう想像を膨らましたのだろうか。

死。

それを迎えた時、人は何を夢見るのだろうか。その先に見える世  
界は、一体どういうものなのだろう。

見たいという好奇心と、それを見るということは死ぬという恐怖  
感が、頭の中で揺れる。きっと、誰もがそうじゃないのか？

「樹、久しぶり。なかなか来なくて、ごめんな」

僕は墓前にしゃがんだ。

「見ろよ。今日も良い天気だ。やっぱ、空は晴れてるに限るな」

「…なんだかややこしいね」

空は苦笑しながら言った。

「…まっ、今に始まったことじゃないし。気にするな」

「久しぶり、樹。寂しかった？ ごめんね。なかなか来なくて…」

海は僕の隣で同じようにしゃがんだ。

「お前がいなくなって、もう3年か…。3年経って変わったのは、  
中学から高校になっただけかな」

「それ以外は、大して変わってないもんね」

「変わらないのもいいけど…時折、何か忘れもんしてるような感  
じになるよ」

「……………」

僕たちは手を合わし、目を瞑った。3人が考えていることは、た

ぶん同じだ。

青天の下、僕たちは小学校の裏山へ向かった。裏山へ行くには、小学校の近くにある細道を行って、そこから山道に入れる。

「この道を通るのも、久しぶりだね」

歩きながら、空が言った。

「小学校へ行く時以外、ほとんど通らないしな」

「あつ、この公園……懐かしいなあ」

海が指差した公園は、人気の無い公園だった。砂場やブランコ、平均台などといったものしかない、ひっそりとした公園。小学校の帰り、度々ここで遊んだ記憶がある。

「そう言えば、こういう所もあつたな」

「……だんだん、忘れて行っちゃうんだね。私たちが幼い頃、慣れ親しんだ場所は……」

「今の今まで、忘れてたもんね……」

二人は遠い目をして、公園を眺めていた。

「…変わらないものなんて、無いんだよ。記憶もそうさ。どんどん新しい記憶や思い出が積み重なっていつて、古い記憶はほとんど思い出さなくなっていく。……そうやって僕たちは成長し、現実を進んで行く。…忘れていくものもあるが、確かに成長してるんだよ、僕たちは……」

「……」

2人は、半開きの口で僕を見つめていた。

「な、なんだよ？」

「…う、ううん。なんでもないよ。ねっ？」

「う、うん」

2人は同じ顔を合わせ、相づちを打った。

「なーんか、いろいろとイラつくんですけど……」

「ば、馬鹿にしたわけじゃないからね？」

「じゃあ、なんなんだよ？」

「…も、もういいじゃない。ホラ、早く行こ？」

海はそう言っつて、足早に歩き始めた。

「…なんだよ？ まったく…」

「…わかるよ。空の言いたいこと…」

「ん？」

僕は空の方に顔を向けた。

「なんていうか…私も海も…空がなんだか…かつこ良く見え  
たんだ」

そう言っつて、空は僕に照れながら微笑みかけた。きれいな笑顔。  
白い肌が、太陽の光を反射している。あまりにもきれいだったので、  
僕は逆に照れてしまった。それを隠すため、僕は彼女から顔を逸ら  
した。

「？ どうしたの？」

何もわかっていない無垢な顔が、僕を見つめる。

「…なんでもないよ。それより、行こつ。海が行っちまう」

「う、うん」

僕と空は、海を追っつて歩き始めた。

空があんな笑顔と、無垢な表情を見せるもんだから、自分が恥ず  
かしい気持ちになっつてしまった。

…あいつの顔っつて、あんなにもきれいだっただろうか？ 今ま  
で見してきた幼馴染の顔だっただろうか？

最近、あいつを見る目が変わっつてきている気がする。海に対して  
は、何も変わっつていないのに…。

何でかな？ あいつらが高校生になっつたからかな？

午後3時頃。ようやく、山道に入った。しばらく誰も出入りして  
いないせいか、昔使っつていた山道に、多くの草木が生えている。ま  
あ、進めないほどではないが。

ここかしこから、鳥のさえずりや虫の声、そして風によって揺れ動く木々の小さな音が聞こえる。それ以外は、何も聞こえない。森や山というのは、人が住む場所から隔離された『別世界』のように感じる。車が走り抜ける音や、人間の話し声さえも聞こえない。簡単に言えば、人氣が無いということだ。だから、別世界のように感じるのかも。しかし、本当はそこが本当の世界なのだろう。だって、『自然の中』だから。

「くーらい。じめじめする」

海はブツブツと文句を言い始めた。

「山に行きたいって言い出したのは、お前だろうが」

僕はため息混じりに言った。

「だって、こんなんだとは思わなかったんだもん」

「ここ数年、出入り禁止されていたからか、山道は長いこと整備しなかつたんだらうな。以前は、こんなにつつそうとしていなかったし」

「…スカートで来るんじゃないかった…」

空はそう言って、小さくため息をついた。

こうやって歩いていると、懐かしい。3年…いや、4年間一度も来ていなかったからあまり思い出せないけど、なんとなく見覚えがあるものばかりだ。

ここを曲がれば、ちょっと変わった形をした樹があったり、2つの樹が交差するかのようになっている場所があったりなど。

(……空……)

どこからか、声が聞こえた。僕は立ち止まり、辺りを見渡した。

「……………」

この森の中には、僕と空と海、そして動物や虫以外、何もいない。何もいないはず。なのに、なぜだろう。この、変な違和感は…。

「? 空、どうしたの? 立ち止まっちゃって」

海は僕の方に振り向いた。

「……………」

「空？」

空は顔を覗かせた。彼女たちの声ではない。またもや、聞き覚えの無い声が僕にだけ聴こえたようだ。

「…なんでもないよ」

僕は笑顔を覗かせ、何事も無かったように歩き始めた。空たちは顔を見合わせ、頭の上にクエスチョンマークを浮かばせているに違いない。

忘れかけてから1ヶ月。最近、頻繁だ。自分にだけ聴こえる、あの妙な声。何度も聴いているから少しは慣れてきたが、それでも未だに体が硬直する。ビクツとしてしまう。…ホント、幽霊でも取り付いてんじゃないのか？ まあ、今更気にしてもしょうがないし、害を与えているわけ（頭痛もしないし）でもないし。

まっ、いつか。

自分の楽観的さも、自分でさえ呆れてしまう…。こういうところが、ダメなのかもねえ。

「ようやく着いた」

3時半前、僕たちはようやく山頂に到着した。

「うわぁ…。ここからの風景、久しぶりに見てみると、とてもきれいに見えるね」

空は髪をかき上げ、言った。この山頂は開けていて、町を一望できる風景がある。ここから見える風景は、結構きれいなものだ。ズラーツと陳列されたコンビニのお菓子のように住宅が立ち並び、所々から、ニヨキツと飛び出ている高層ビルが見える。

「…大きくなってから見てみると、昔とはまた違う風景に見えるな」  
「……………そうだね…」

僕と空は、しばしの間、その風景に目を奪われていた。柔らかな風が僕たちの間を吹き抜け、雑草や樹の葉っぱを小さく揺らす。町のずっと先が、微妙に白んでいる。これは、大気が汚れているからだろうか。

「あつ！ あつたー！！」

突然、海が叫んだ。後ろへ振り返るとすでに彼女の姿は無く、別の場所に移動していた。

「空！ お姉ちゃん！ こっちこっち！」

どうやら、海は奥にいるらしい。

「いつの間にも移動してたんだか…」

「た、たしかにね」

僕たちはそんなことを言いながら、海がいる場所へと進んだ。

「ホラ、見てみなよ！」

海が指し示した先に、あるものが立っていた。

「……すげー！！」

「……桜……本当に、咲いてたんだ…」

どこにでもあるような、桜の樹。満開の桜の花が、4月なのではないかと勘違いさせる。しかし、その樹以外で春を思わせるようなものは、一切無い。

異様といえば、異様。しかし、きれいだ。風が吹くたびにチラつくピンクの花びらが、この辺りを舞う。桜吹雪とまではいかないが、周りの風景とのギャップが、なんとも言えない美しさを物語っている。

「きれい……」

空は桜に目を奪われ、子供のようにずっと見上げていた。

「……いつも見る桜を見てもなんとも思わないんだけど……こうして見てみると、普段よりもきれいに見えるな……」

「……でも、どうしてこんな季節に咲いてるんだらう？」

海が言った。海も、空と同じように顔を上げている。

「……さあ？ こころだけ、寒いとか？ 標高何メートルあるかどうか知らないけど」

「そんなことで、1ヶ月以上も咲くのが遅れるのかな……？」

「そればかりはわかんないな。専門家にでも見てもらわないと」

そこまで疑問に思うことでもないのだが、少し気になる。こんな

場所に、こんな季節に、たったの1本だけ咲いている桜。

…何かを示しているように見えるのは、僕だけだろうか…？

(…空…)

再び、あの声が聴こえた。同時に一瞬だけ、電流が流れたかのような頭痛が頭の中を走った。

…いて…！

少し顔を歪める程度の痛みだった。一瞬だけだったので、大したことは無い。僕はふと、声が右から聴こえたような気がしたので、そっちに視線を移した。

「……………！」

視界に入った、何かを見つけた。

「……………」

僕は引き寄せられるかのように、そこへ足を進ませた。

「？ 空？」

僕が歩き出したことに、2人は気が付いた。しかし、僕が行こうとしている先にあるものがなんなのか、まだ気付いていない。

僕はその前に、立ち止まった。

「…なんだ……………？ これは…」

そういう言葉が、自然と漏れた。そこにあつたのは、門のようなものだった。逆U字の形をした、門のようなもの。いや、ただの…へんてこりんなものか？ ただそこにあるだけで、どこかに繋がっているわけでもない。その逆U字の門の先に見えるのは、森の風景なのだから。

「な、何？ これ？」

「うわっ！ なんだこれ？」

2人もそれに気が付き、いつの間にか僕の隣へやって来ていた。

「これ……………遺跡の一部かなんか？」

海はその回りを歩きながら、そう言った。

中世ヨーロッパにあるような…いや、古代ローマにあるような様式の形をした門。門の全体に変な模様が刻まれて、コケなどがあち

こちらから生え、粘土の色に変色している。作られてから、長い年月が経っていることを示している。

「結構大きいね。高さは……2メートル以上かな？」

海は背伸びをして、その門の高さを測っていた。彼女が背伸びをし、手を伸ばしても届かない。幅は、約1メートルと言ったところか。

「……古代文明の名残……みたいなものかな？」

空は頭をかしげた。

「この町にそんな文明があったってという話は、聞いたことも無いけどな」

「……それに、見た目からして日本のものじゃあない……と思わない？」

海はその門に触れ始めた。

「たしかにそうだな。……地中海辺りの文明のものに見えるな」

「まったく関係が無いのに、どうしてこんなものがここにあるんだろ？」

「……桜の樹といい、これといい……こんなもの、昔あったっけ？」

僕はそれを眺めながら、2人に訊ねた。

「小さい頃は山頂までなら何度も来たけど、あまりうるつかなかつたし……」

「遊んでいた場所といえば、中腹辺りの開けた場所だったもんね」  
「……………」

だからと言って、これだけのものに気が付かないのだろうか？  
町が一望できるこの場所には幼い頃、何度も足を運ばせているし、その場所からこれがある場所は、そんなに離れていない。だから、気が付かないはずが無い。もしも、一度見ていたとしても、これほど日本離れしているものを忘れるはずも無い。……と言つことは、僕たちが来なくなつてから、この門ができたということなのだろうか……？

僕は頭を振つた。いや、それこそあり得ない。見るからに、これ

は数十年…もしかしたら数百年という歳月を生きたものかもしれない。仮に、僕たちが来なくなつた4年前くらいに建造されたとしても、こんなに腐食するはずが無い。

じゃあ、これは一体…？

なんとも言えない、変な違和感が胸の中でざわつく。

「もしも古代文明の名残だとしたら、私たちは第一発見者なのかな？」

海はうきうきしながら言った。

「そうだったら、私たち一躍有名人になっちゃうかも！」

「そ、そうかもしれないけど……」

「？ お姉ちゃん、うれしくないの？」

「う、うれしいとか無いと思うけど？」

「そう？ 私、なんだかワクワクする。世界のほとんどが知り尽くされてるのに、まだ見たことも無い、知らないものが目の前にあるって考えたらさ」

海がそう言うと、空は苦笑した。

「た、たしかにそうだけどさ………なんか………」

「？ なんか？」

「……変な感じがする」

空は門を見つめ、言った。

「変な…感じ？」

僕がそう言うと、空は顔をしかめ、うなずいた。

「なんでだろ…。見たことも無いのに、なぜか見たことがあるような感じがして……」

「…デジャヴ？」

「…そんな感じ。でも、なんでだろ………？」

空は頭を抱え、深く考え始めた。小学生の頃、それも1年生くらいの頃に、もしかしたら彼女は見たことがあるのかもしれない。

…いや、そうだとしたらまたおかしい話になる。彼女と僕たちは常に同じ行動をしていたのに、僕がこれを見ていないというのがお

かしい。彼女が見たのなら、海は絶対に見ているはず。もちろん、僕も……。

その時、ある光景が僕の脳裏に浮かんだ。

夜。夜空には宝石のように散らばる無数の星。青く光る門の奥。吹き乱れる桜の花びら。今見ているよりも、ずっと門が巨大に見える。……いや、これは僕が小さいからそう見えるだけだ。

僕の傍で、誰かがうつぶせになって倒れている。血まみれの体。長い銀色の髪を持つ女性。纏っている白いローブが、土と血で汚れている。彼女が腕での中に抱えているのは、子供。黒い髪の毛を生やし、すでに2〜3歳程度に見える。その子は、大きな声で泣き叫んでいた。

断片的な記憶。ガラスの破片は一つ一つの光景を映し出し、僕の視界の中で泳ぎまわっている。

これは……一体………？

門の傍に、誰かがいる。見覚えのある、2人。大人だ。これは……  
父さんと、母さん………！！？

………お願い………

………どうか………

………を………

「空？」

「………」

僕はビクッと反応し、我に返った。

「………海………」

「どうしたの？ ボーっとしちゃって………」

海は僕の目の前に立っていた。

「いや………なんか………」

そう言い掛けた瞬間、強烈な痛みが頭を走り抜けた。

「くっ………！！！」

僕は顔を歪めた。

「!?!? そ、空!?!? どうしたの!?!?」

海は僕の表情に気が付き、言った。

(…空…)

声が聴こえる…。今日聴こえた、あの声…。

「空? 大丈夫?」

空も心配して、僕の傍へ来た。

「もしかして…また頭痛!?!?」

「頭痛…?」

「空、4月に入院したでしょ? あの時と同じなの!」

痛い……。あの時と同じような痛みが、頭の中を駆け巡る。笑い声を響かせながら走り回るやんちゃな小学生が、頭の中にいるみたいだ。

「いつつ……!」

あまりの痛みに、僕は立っていられなくなった。

(空………空………)

僕の名前を、誰かが連呼している。

「誰………だ………?」

僕はかすれるような声で、誰とも知らぬ【何か】に訊ねた。

(時は………満ちた………)

その声は初めて、僕の名前以外を口にした。

時は満ちた? なんだよ? それ…。

すると、視界が真っ暗になった。と思えば、元に戻った。しかし、すぐに真っ暗になり、再び元に戻った。まるで目に見える光景が点滅するかのように、その繰り返しだった。

「空!?!? 空!?!?」

空と海… 2人のまったく同じ声が、頭の上から聞こえる。

(…空………空………)

それと同時に、【何か】も僕の名前を呼ぶ。はっきりとしている。空たちが呼ぶ声と、【何か】が呼ぶ声の場所が、まったく違う次元

のものだということが。

僕は……ナニモノダトイウンダ……？

(…紡ぐ者…)

「……セヴェ……ス……」

その時、痛みがスーツと引いていった。潮が引くかのように。

「あ……れ……？」

僕は目をパチクリさせた。

「空！？ ねえ、空！！」

海が大声を上げる。僕は顔を上げた。

「空？ だ……大丈夫なの？」

空は小さな声で訊いてきた。

「……あ……ああ。大丈夫……夫みたいだ」

「ほ……ホント？」

「……ああ」

僕は小さくうなずいた。

「頭痛は？ もうしない？」

「……ああ」

「……よかった……」

2人はホツとし、大きく息を吐いた。

「まったく……心配させないでよね！」

「……」

「ちよつと、聞いているの！？」

「へっ？ ……あ、ああ……ごめん」

「……？」

海は頭をかしげた。

「……一度、病院で見てもらったほうがいいんじゃないの？」

「失礼な奴だな……」

「……けど、一応見てもらったら？ また、前みたいに気を失っちゃ

うかもしれないし……」

「……そう……だな」

念のため、見てもらったほうがいいのかもしいれない。以前気を失った時は、幻聴が聴こえることは言わなかったが、今回は言ったほうが良いかもしれない。……今回は、なんだか、以前とは感じがまったく違うというか……。

「……も、もう帰ろうか？」

「そうだね……。ここ、不気味だし……」

2人はそう言って、歩き始めた。

「……………」

「空？ 帰る」

「……………」

「空？」

「……ああ……」

僕は後ろへ振り向き、彼女たちの後を追った。一瞬、僕はあの門に見入ってしまった。引き込まれるような、おかしな感触。泥沼に沈んでいくような……。

「帰って何する？ お姉ちゃん」

「うーん……。何もすること無いね……」

「えっ？ もしかして、もう宿題終えたの？」

「うん、昨日のうちに……」

「ええ？ じゃあ、帰ったら宿題やる」

彼女たちがそんな話をしているとき、僕は立ち止まり、その門の方に振り向いた。

風が吹き、桜の花びらが門の前を通り過ぎていく。

……あの記憶は、なんだったんだろう……。自分の記憶なのか？ でも、父さんと母さんもいた。今よりも、若く見えた。

泣き叫ぶ子供と、血まみれの女性。

ドウシテ？

まばゆい光の中に、見知らぬ男性が立っている。光を背負い、僕を見つめている。

ナゼ、コンナコトニ…？

「！！！！」

僕は驚愕した。門の奥が、暗闇になっていた。小さな波紋が、螺旋を描きながら僕を誘っているように見える。

「う……………あ……………！」

再び、猛烈な痛みが頭を襲う。それと同時に、僕は門の中へと吸い込まれて行った。声を上げる暇も無かった。

自分の周りは、すべて真っ暗だった。しかし、遙か先に桜の風景が見える。そう、山頂の光景が小さな光の輪の中に佇んでいる。だんだん、その光景が遠くなっていく。だんだん、光は小さくなり、最終的には見えなくなってしまった。同時に、一瞬にして真っ白になった。

### 3章：緑の世界 揺らめく記憶の中

白い光の中。前を見ても、後ろを見ても白。世界のすべてが白で統一されているかのようだ。目を閉じても、開けても白。まぶたが無いみたいだ。

フワフワとした、浮かんでいるような変な感覚。プールで浮かんでいるみたいではなく、上空を浮かんでいる感覚。

しばらくして、霧が晴れていくかのように、白い景色が少しずつ消え始めた。徐々に見え始めた風景。すると、自分が着地したような感触があった。地面を踏んでいる感触だ。

足元がはつきりと見え始めた。そこには、青々とした草原。視線を徐々に上げていくと、その緑の雑草が広がっているのがわかった。遠くには、薄っすらと山々が見える。上空には、青っぽい空も広がっているのがわかる。白い霧は半分程度晴れたが、それ以上晴れることは無かった。

ここは……一体………？

まさか、夢の中か？ それにしては、あまりにも現実的だ。大気が肌に触れる。微風そよかせが髪をなでる。自分が呼吸しているのもわかるし、立っているのもわかる。夢の中だったら、これすらわからないはずだ。それに、夢なら夢だとわかった瞬間、目が覚めるようなもんだろ？ 目が覚めないもんな。………と言うことは、今見えているこの光景は、本物……？ 現実なのか？

「夢だと思っ？」

「!」

後ろから、女性の声がした。恐る恐る、僕は後ろへ振り向いた。そこに立っていたのは、一人の少女だった。空たちと同じくらいの年齢だろうか？ 長く、サラサラな金色の髪を後ろで結っている、きれいな顔立ちの少女。結っているも、かなり長い。そして、ほっそりとした体型。服装は夏場の小学生みたいな格好だ。

「残念ながら、これは夢じゃない。現実。わかる？」

彼女は微笑した。僕を馬鹿にしているかのように、手を振っていた。

「…あ…あなた、誰？」

僕の第一声は、それだけ。

「私はリサ…… リサ＝ブレスレッド。よろしく、空」

今度は、ニコツと微笑んだ。うっ……滅茶苦茶かわいいんですけど。

「な、なんで僕の名前を？」

僕は小さな声で質問した。どこだかわからない恐怖心のためか、びくびくしている。

「それはまあ……天のお告げ？ みたいな」

アハツと、リサは笑った。

「……………」

「嘘よ。冗談だった」

いや、冗談って言われても……。変なことを彼女が言ったためか、ほんの少しだけ彼女に対する警戒心が解けた。

「それにしても、知らない間にこんな所にいるってのに……あなた、やけに冷静だね？ 普通の人間なら、慌てふためくはずなのにさ」

「ん？」

たしかにそうだ。なんで、僕は冷静なんだ？

「……ここは一体どこなんだ？ なんで、僕はこんな所にいるんだ

「空たちは？」

「あなたね……質問を何個も同時に言うんじゃないよ」  
リサは小さくため息をついた。

「……じゃあ最初に、ここはどこだ？」

僕はしかめっ面で訊ねた。

「それでよろしい。……ここは、別世界さ」

「別世界？」

リサはうなずいた。

「2つの世界の狭間……とでも言うのかな？」

「な、なんじゃそりゃ。意味わかんねえよ」

「まあつまり、ここはあなたのいた世界とは違う世界だってことさ」  
「違う世界……？」

「そう。あなたのいた世界は ガイア 。そして、もう一つの世界を レイディアント って言うの」

「がいあ？ れいでいあんと？」

「んなの、聞いたことも無いんだけど。」

「私たち……レイディアントの人間がそう呼んでるの。まあ、こちらの世界のほとんどの人は、ガイアがあるなんて信じちゃいないけど」

「??？ 僕がいた世界がガイアで、ここがレイディアント……ってこと？」

「ううん。ここは、その2つの世界の間挟まれている別の次元」  
「……??？」

「ますます、わけがわからない。」

「まあ、今いるこここのことは、そのうち教えてあげる。次の質問は？」

「大雑把な女だ……。」

「じゃあ、どうして僕はこんな所に？」

「もちろん、あんたが必要とされているからよ」

「はっ？ 誰に？」

「……あなたは、選ばれし者。そして、時は満ち足りた。だから、あなたはここへ吸い寄せられた」

「！ お前か？ 僕の頭の奥で何度も囁いていたのは」

「???? よくわからないけど、あなたと話すのはこれが初めてよ？」

「え……？」

「じゃあ、なんなんだ？ ……冷静になって考えてみれば、たしかに彼女の声とは違う。同じ、女性の声ではあるが……」

「ともかく、あなたは必要とされている人間なの。……ガイアではなく、レイディアントにね」

「レイディアントに、必要とされ……？ な、なんだよそれ。わけわかんねえよ」

「でしょうね」  
「でしょうねって、なんだよそれ！ お前がここへ連れてきたんだろ……！」

僕は思わず、声を荒げてしまった。

「……私はたしかに、あなたを呼んでいた。けど、それはただのきっかけでしかない。あなたがここへ来るということは、偶然ではなく、必然的に起きたこと」

「だから、意味がわからねえって言ってんだろ！！ ちゃんと、分かるように説明しろ！」

そう言つと、彼女は大きいため息をつき、腕組みをした。

「あなたがここへ来ることは、大昔から定められていた【運命】……とても言うのかしら。そう、運命さだめられていたの」

「定められていた？ 誰に!？」

「そんなの、わかるわけじゃないじゃない。私は神様じゃないんだし」

何を言つても、訳のわからない返答が返ってくるだけだ。僕は半

ば、あきらめ気分になった。

「……もういいよ……（こっちの頭がおかしくなりそうだ……）。とりあえず、元いた場所に帰して欲しいんですけど」

ともかく、僕はガイアとやらに戻りたい。僕が突然いなくなつて、空たちも心配しているだろうし。

「いいけど、その前に私の話を聞いてくれない？」

「……話？」

リサはうなずいた。

「……あなたは、とてつもない力を持っている人間」

「……？ 力？ なんの、持ってねえよ」

「いや、持つてる。あなたは生まれながらにして、その権利を持ちえる唯一無二の存在」

「……」  
話が飛躍しすぎじゃないか？ 力？ 唯一無二の存在？ 思わず、

僕は笑い出しそうになった。

「馬鹿言つてんじゃないよ。ゲームの世界じゃあるまいし」

「信じる、信じないはあなた次第だけど……今、あなたは現実離れしている場所にいる。それを考えれば、私が言っていることが本当なのか嘘なのかもわかると思うけど？」

リサはニヤリと笑った。

「……」

「ともかく、あなたは普通の人間じゃない。それに、さっき言つた『頭の中で囁く』……だっけ？ それが、普通の人間じゃない証拠さ」

「……あれは、幻聴なんかじゃあないのか？」

「幻聴だと思えば、そう思えばいいさ。今のうちはまだ、大したことでも無いんだろうからさ」

「大したことじゃない？ 頭痛がして、気を失ったぞ？」

「気を？ ……なるほど……意外に早く前兆が起こってたってことか……」

彼女は独り言かのように、ブツブツ言い始めた。

「？ なんて言った？」

「……なんでもないよ」

彼女は笑顔を向けた。

「？ どうしたのさ？ 顔を逸らして」

「いや、気にしないでくれ」

僕は右手で顔を覆った。まったく……顔立ちがきれいだから、笑顔を向けられると照れてしまう。

「それにしてもお前、一体何者なんだ？ レイディアント……もう一つの世界の人間って言うてたけど……」

「言葉のとおりよ。私はガイアとは別の世界で生まれ、育った人間さ」

「化け物じゃないんだな」

「当たり前でしょーが！」

冗談に引つかかるとは、やっぱり普通の人間か。…とはいえ、なんで日本語をしゃべれるのか不思議だが…。

「……空」

「なんだよ？」

彼女は雰囲気を変えて言った。

「あなたはこれから……」

リサはそこで口を止めた。

「……ごめん。やっぱり、気にしないで」

「いや、気にするなって言う話のほうがおかしいだろ？ なんだよ？

言いたいことがあるなら、はっきり言えよ」

「…今言っても、しょうがないことだと思っから…」

「しょうがないこと……？」

ちゃんと言って欲しいのだが、そもそも彼女の言っていることがいまいち理解できていないので、これ以上は訊かなかった。

「…で？ お話はお終いつスか？」

「あともう一つ」

リサは人差し指を立てて言った。

「あんたは、これが夢だと思う？」

「夢？ ……夢にしては、妙にリアリティがある……というより、ありすぎるけどな」

「これは夢ではなく、現実。結局はそれを見る者、感じる者次第だけど、現実を直視して。それが、あなたが運命に立ち向かう勇氣を持たせるのだから」

「???？」

何言つてんだ？ 正直、それしか思い浮かばない。

「それを踏まえたとうえで、受け止めなさい。あなたは力を持ち、選ばれた者なのだということ」

「また訳のわからんことを…」

「あなたはいずれ、レイディアントに来ることになる。だから、それまでに心の準備をしておきなさいって言ってるのよ」

「レイディアントに？ 行くかよ。ぜってえ行かねえ！」

僕はそう吐き捨てた。

「……まあ、本当のところは私もわからないけど、きっとあなたはこちらへ来ることになる。それが、あなたを……あなた自身を知ることとなるのだから」

「……………」

自分自身。最近、幻聴が聴こえたりするから、その言葉はなんだから重みのある言葉に思えた。

「まっ、私が言いたいのはそれだけ」

リサは腰に手を当てて言った。

「さて、帰りたいんだっただね」

「？ 帰してくれるのか？」

「？ 帰りたいんでしょ？」

「…まあ、そうだけど」

なーんか調子狂うなあ。

「でも、どうやって帰るんだ？ 見渡した限り、草原ばかり……」

「目を閉じて、深呼吸をして」

「？」

「いいから、言われたとおりにする」

まるで、教師に言われたかのようにだった。僕は目を閉じ、大きく深呼吸をした。

「…絶対に目を開けちゃダメよ？ そしたら、失敗するかもしれないから」

「失敗したらどうなるんだ？」

「…知りたい？」

リサの言葉から、恐怖が伝わってきた。

「…いや、やめとく」

「賢明ね」

きっと、彼女は笑顔なんだろうなあ。……ム力つくけど。

「準備は良い？」

準備も何も、目を閉じたただけなんだけどな……。とりあえず、僕はうなずいた。

「…じゃあ、行くよ」

僕はつばを飲み込んだ。なぜだか緊張する。

「……霊界にて彷徨いし次元の歪み……。我が願いを聞き入れ、虚空にその扉を映し出さん……。我を、その手許へと導き給え……。ケリユ・ヴェル・ゼスナー……。天界への梯子……。ビフレスト」

彼女がそう言い放った途端、僕の足元から風が吹き上がり始めた。それに押されるかのように、僕の体が浮かんでいくのがわかる。ゆっくり、ゆっくりと上昇していく。目を開けて、その様子を見てみたい。しかし、目を開けてはならない。好奇心と恐怖心が交差している。

「またね、空。もう一人の空ちゃんを、大事にしてあげなさいよ」

リサは陽気な声で言った。

「！ お前、なんで」

なんで空のことを知っているのかを訊こうとした瞬間、僕がそこからいなくなった感じがした。すると、まぶたの上から感じていた光が消え、自分が暗闇にいるのがわかった。ここへ来る時と、同じだ。

自分が無重力の中にいるような感覚だ。フワフワと浮かび、くるくる回っている。まぶたを開けたいが、怖い。念のため、ガイアに辿り着くまで閉じておかないと…。

「……………」

まぶたの上から、光が差し込む。さっきまで真っ暗なところにいたせい、まぶたを閉じていてもまぶしい。

いつの間にか、僕は仰向けになっていた。目を閉じていても、感触でわかる。さっきまでのフワフワした感覚がなくなっているからだ。もうガイアへ到着したのだと思い、僕はゆっくりとまぶたを開いた。

白い天井。見覚えのある光景。

ここは…またもや病院か…。隔離された場所特有の、清潔感溢れる空気が漂っている。

僕は上体を起こし、辺りを見渡した。僕がいるベッドの隣にあるイスに、誰かが座っていた。

……空と海だ。2人は制服姿で、座ったまま寝ている。小さな寝息をたて、肩と肩を寄せ合っていた。2人の目の下には、涙を流した痕と、寝不足を象徴するクマがあった。彼女たちが制服姿と言うことは、今日は月曜か……火曜ということか。それ以降の可能性もあ

るが。

外を見てみると、すでに黄昏時だった。空の果てはオレンジ色に染まり、カラスたちが群れになって飛んでいる。

…あれは、夢ではない。現実だ。僕は一人だけ扉の奥へと吸い込まれ、別世界へ連れて行かれた。澄んだ空気。そよぐ風。萌える草原。霧がかかった風景。そして、金髪の少女。緑の世界。

僕は、たしかにあそこにいた。誰も知らない世界に、僕はいたんだ。ゲームの中でしか…2次元の世界でしかあり得ないような世界に。

どうして僕が、あんなところに？ 彼女……リサはそれを説明していたが、いまいち納得できないし、理解できない。選ばれただとか、運命だとか、そんなことを言われても、その状況をどう捉えればいいのかって言うんだ？ 今まで普通の世界で、普通の生活をしていたのに、非現実的なことを言われても、僕はどうすればいいんだ？

リアリティのある、非現実的な世界。

あれは……夢でも、幻想でもない。現実だった。

ウタガウカ？

一瞬、僕の視界が点滅した。

また変な声が聴こえた。亀裂が走るような痛みが頭の中に響く。

一瞬だけだったのが幸いだが、なんなんだ…？

僕は、一体どうなってしまったってんだ………？

「ん………」

空は目をこすりながら、うなだれていた顔を起こした。まだ目を開けておらず、眠たそうだ。

「……あれ……？」

彼女は虚ろな目で、僕を見つめていた。そうやって見つめられる

と、体が硬直してしまふ。

「……………よっ」

僕はぎこちなく、手を上げた。

「そ……ら……?」

空は疑問符を付け、僕の名前を呼んだ。

「気が付いた……………の?」

「え? あ、ああ」

そう言つと、空は小さく震え始めた。瞳に、溢れんばかりの涙を溜めて。

「! お、おい……………」

「よかつた……!」

空はぼろぼろと涙を流し始めた。

「もう……目が覚めないんじゃないかって……………!」

「え、縁起でもない……………」

顔を手で覆い、彼女は声を殺しながら泣いた。

「……ん……………」

ようやく、海も動き始めた。目をこすりながら。しぐさが空と同じなんだよな。

「……………! 空……………目が覚めたの!??」

「あ、ああ」

すると、海も同じように涙を流し始めた。

「う……………」

海は僕に飛びついてきた。

「……………! お、おい……………」

「空……………空あ……………!」

海は僕を抱きしめながら、大声で泣き始めた。

「……………」

僕は彼女の頭を優しくさすつた。

「……海……………ごめんな……………」

小さな声で、彼女に聞こえるくらいでしか言えなかった。海がこ

んなにも泣いていると、自分が罪を犯したような感覚に囚われた。

彼女たちを心配させた。それが、嫌なんだ。

「空……空……！」

泣き声なのかどうかもわからない声で、海は僕の名前を呼ぶ。僕はただ、彼女の背中をさすったり、頭に触れたりすることでしか応えられなかった。

「……………」

この日から、僕を取り巻く状況が一変してくる。

リサの言っていた「しょうがないこと」。意味深な言葉だった。

しかし、この後、僕はその意味がようやくわかることとなる。

#### 4章：幼馴染 つぶらな瞳の奥にあるもの

5月7日。月曜日。僕は2日間眠り続けていたらしい。病院でいろいろな検査を受けたが、以前と同じく、どこもおかしいところは無かった。

「おかしいのは、お前の頭じゃねえの？」

病室のイスの上で、修哉はうさちゃんリンゴ（空が用意してくれたのに）をほお張りながら言った。

「……………」

「ハハハ、冗談だよ、冗談。んな顔すんなよ。つか、頭じゃなくて脳みそだな」

修哉は笑いながら、僕の肩を叩いた。

「…訂正する必要性は感じないけどな…。で？　なんでお前がここにいるんだよ」

「もちろん、お前が心配だからさ」

「心配って……………今、6時だぞ？」

外を見ると、真っ暗だ。

「来るなら、学校が終わってすぐ来れば良かったのに」

「そうしたかったんだけどさ、2人のことを考えると……………」

「2人？」

僕は頭をかしげた。

「空ちゃんと海ちゃんだよ。あの2人と一緒に、ここにいるのはまづいと思っただけ」

「なんだよ？　それ」

「あまりにも……………そうだな……………2人を見ているのが、痛ましくてな」

「……………」  
2人は僕が目覚めた後、安心したのか、母さんとおばさんと一緒に自宅へ帰ることにした。僕が気を失ってから、2人はほとんど寝ていなくなったらしく、衰弱が激しいとのこと。今日の授業には、ほとんど身が入らなかつたらしい。

「俺は、お前が目を覚ましてから会いに行こうと思ってさ」

「……………なるほど。お前らしいよ」

僕はリンゴを1つ取り、食べた。修哉の行動には優しさが見え隠れする。

「ところで、帰らなくていいのか？ 咲希ちゃんが怒るんじゃないの？」

「ああ……………まあ、今日のところは免除してくれるだろ。……………ホントは、5時までには帰らないといけないんだけどな」

修哉は苦笑した。とことん、妹には弱い奴だ。

「おっと、そう言えば」

そう言っつて、修哉はカバンから何かを取り出した。

「これ」

修哉はプリントを出した。

「ああ、学校のプリントか」

「らしいぜ。和樹から頼まれてたんだよ」

「そっか。サンキュ」

どれどれ……………うげっ、宿題かぁ……………。まあ、来週までが期限だから、気にするほどのものでも無いんだけど……………たぶん、やらないだろうなあ……………自分の性格上。

「それにしても、頭は大丈夫なのか？」

修哉は指先で自分の頭を指した。

「頭痛がするつて、空ちゃんが言っつてたけど？」

「そうなんだよなあ。…今学期が始まった頃に、いきなり幻聴が聴こえて、ひどい頭痛がしてきたんだよ」

「……………あの頃に気を失ったのは、それが原因か？」

僕はうなずいた。

「それからしばらく、何も無かったんだけど……最近、また頭痛と幻聴ができて……」

「……なるほどな……」

修哉はうーんと唸った。

「……お前の場合、別に薬でもしてるわけじゃないし……原因がわからないんじゃない、どうにもできないもんな」

「そうなんだよなあ。なんで頭痛がするのもかも、幻聴がするのもかもわからないから、僕はなんにもできないんだよな」

「……………」

修哉は窓の外を見つめていた。表情が、さっきまでと違う気がした。

「……………？ 修哉？」

「ん？ ああ、そうだなあ。お前は普通の人間にしか見えないし、丈夫なだけ取り柄のお前の体に、異変があるとは思えないしなあ」

「丈夫なだけ取り柄って……」

「褒め言葉に決まってるんだろ？ 変な顔すんなよ」

ハハハ、と修哉は笑った。

「さて……そろそろ俺は帰るよ」

「ああ。気をつけて帰れよ」

「あいよ。じゃあな。明日、また来るよ」

修哉が個室から出て行くと、完璧な静寂が漂った。こうして病室に一人でいるのは、本当に寂しい。この時間帯以降は、たぶん誰も来ないだろうし……。

さっきの、修哉の顔。なんであのタイミングで、あんな顔をしたんだろう。何かを考え込むような、遠くを見つめる視線。あいつが考え込む顔、あまり見たことが無かったから、なんだか印象に残る……。

5月8日。再検査をしたが、異変は見当たらず、明日の9日に退

院することとなった。たった1ヶ月で、2度も入院することになるとは、予想だにできなかった。凶太い母さんでさえ、「あんたが入院するなんて、仏様も予想できなかったでしょうねえ」なんて言う始末。まあ、死んでしまうような病気にかかったわけでもないのに、何はともあれ、よかったよかった。

午後、空たちがやって来た。それから少しして、和樹と啓太郎、美香もやって来た。そのすぐ後には、修哉が出現した。

「……多いなあ」

最後に入って来た修哉は、7人もいるこの病室を見渡した。

「つーか、なんで和樹とかまでいんだよ？」

「俺がいちゃわりいのかよ？」

「まあまあ。いつもの修哉の冗談だよ」

啓太郎は笑いながら言った。

「おいおい、言うなよ」啓。せつかく、和樹のイラつく顔が見れると思ったのに

「……なんなんだよ、お前は……」

「それは置いといて、空ちゃんと海ちゃんとはともかく、和樹や……

……えつと……」

修哉は美香を見て、口を止めた。名前が思い出せないようだ。

「……小山内だつて」

僕は小さな声で言った。修哉は頭の上に電球を出した。

「そうそう、小山内。なんであんなまでいんの？」

「おいおい……んなこと言っちゃダメだろ……」

「し、心配だったから……」

美香は小さな声で言った。美香は、修哉と話す機会が無いため、ほぼ初対面である。

「ふーん……」

「修哉さあ、そんなこと言っちゃダメだろ？ 小山内だつて空が心配で来てんだからさ。野次馬ってわけじゃないんだし」

和樹は頭をかきながら言った。

「…まつ、いいけどね」

修哉はそう言っつて、ベッドの傍にやって来た。

「で、どうよ？ 調子は」

「調子も何も、どこも悪くないんだよ。早く退院してえ」

「明日、退院なんだって」

空はどこか嬉しそうに言った。

「そうなの？ まあ、お前は俺みたいに頭が良いわけでもないから、これ以上休むとやばいかもな」

「うっせえなー。お前はいいよなあ。学校をサボっても、勉強できるんだからさ」

「そう言えば……修哉君、何日か出かけてたんだよね？ どこ行ってたの？」

海はお菓子のチョコを食べながら言った。

「ちよつと外国まで」

修哉はニコツと微笑んだ。

「マジで？ どこ？」

和樹が食いついた。

「遠い国さ。日本からね」

「…アフリカとか？」

「まつ、そんなところかな」

そんな話をしていると、あつという間に時間が過ぎて行った。病院での暇な時間は、全て友達が排除してくれた。

「おつと……6時か。そろそろ、俺は帰るよ」

「おや？ 咲希ちゃんは6時まで伸ばしてくれたのか？」

「ハハ…まあ、空のお見舞いって言ったら許可してくれたよ」

修哉は立ち上がった。一応、僕は何度も咲希ちゃんと話したことはある。

「じゃあ、俺たちも帰るか」

それにつられるかのように、和樹と啓太郎も立ち上がった。

「あつ！ お姉ちゃん、私たちも帰らないと！」

「え？ どうして？」

空はぽかんと口を明けていた。

「今日、お父さんもお母さんも仕事でいないから、家事をお願いして頼まれてたじゃない」

「あつ……そうだった。じゃあ……空、私たちも帰るね」

「ああ。転ぶなよ」

「もう……転ばないってば……。また来るね」

「じゃあな」

そして、みんなは帰って行った。

「……あれ？ 美香は帰らないのか？」

なぜか、美香は一人だけ残っていた。

「な、なんか取り残されたっぽくて」

「……いたいならいても構わないけど、早めに帰ったほうがいいぞ？」

夜道は危険だしさ」

「……うん。そうだね。じゃあ、私も帰るよ」

美香はカバンを掴み、立ち上がった。

「美香」

彼女が帰ろうとしたとき、僕は呼び止めた。

「何？」

「……修哉が言ってたこと、気にするなよ。あいつは……あんまり親しくない奴に対して、ちよっときつい奴だからさ」

「……空は……迷惑じゃなかった？ 私が来て……」

「なわけないだろ？ 美香が見舞いに来てくれて、うれしいよ」

「……」

「だから、修哉の言葉は気にすんなよ」

「……うん。ありがと。また、学校でね……」

「ああ。じゃあな」

そして、美香は帰って行った。

美香の奴、気にしてんだろうな……。気にするなって言う話のほう

が、無理な話だ。修哉も修哉だ。なんだってみんながいるところで、あんなことを言うかな…。

「今の状況は、あんまりよくない」

修哉が言っていた言葉を、僕は思い出した。自分を取り巻く状況がよくないってことなのだろうか…。

まあ、あいつの言っていることを完璧に理解しようとしても、難儀な話なんですけどね。

5月9日。僕はとりあえず退院することに。時おり、一瞬だけ頭痛がし、目の前が真っ暗になるが、特に何も起こってはいない。一瞬の頭痛がするたびに、僕は リサ と出会い、話したことが現実だったのだと思い起こしてしまう。

「……………」

「何考え込んでるの？ あんたらしくくない」

母さんは、食器を洗いながら言った。

「…いや、考え込んでるって言うか…」

僕はいつの間にか、頭を抱えていた。

「そうだ。今日、お母さん懇談会に行くから」

「懇談会？」

「だから、夜いないから」

「おいおい…じゃあ、飯とかどうすんだよ？ 僕も父さんも作れないぞ？」

父さんと僕は親子だからか、不器用なのがそっくりだ。

「そこは大丈夫。空ちゃんに頼んでおいたから」

「そ、空に？」

「快く承諾してくれたし、あの子の料理ならあんたも文句言わないでしょ？」

「…まあ、そうだけど…」

「そういうことで、よろしく。文句は受け付けません」

なんじゃそりゃ。自分の母親なのに、つくづくわけのわからん人

ですわ…。

ここ最近、あいつの笑顔を見てみると、変な気分になってしまっ  
それに、泣かせてしまったこともあるし、なんだか会うのが緊張す  
る。海がいてくれたら、それでもないんだけどなあ…。

…なんで、あいつのことが気になるんだろう？ こんな風にあい  
つのことを考えるのは、初めてだ。ただの幼馴染なのに。

「こんばんはー」

夕方、空は一人でやって来た。

「退院おめでと。身体は…大丈夫？」

「ああ。もう完璧。…ところで、海は？」

「海は帰りが遅くなるんだって。あの子は家の方で食事するだろう  
し、ここには来ないと思うよ？」

「あ…なるほど」

うーん…母さんはもう出かけたし、まだ父さんは帰ってきてない  
し…。それまで、空と2人つきりか…。なぜか、緊張するな…。

「空、今日何が食べたい？」

空は玄関から上がり、リビングへ行った。

「何って…うーん…」

「病院から帰ってきたばかりなんだから、何か食べたいんじゃない  
？」

そう言いながら、彼女は自分用のエプロンを身に付けた。そう、  
この家には彼女用のキッチン用品がいくつかが配備されているのだ。

…なぜか。

「…まあ、しいて言えばカレーかな…」

「カレー？ なーんだ、やっぱりそうなんだ」

空は小さく笑いながら、家の冷蔵庫を開けた。

「ん？ どーいうこった？」

「おばさんが言ってたんだ。空はきつとカレーが食べたいって言う  
だろうって」

「…なんか、胸くそわりいな…」

見透かされたようで。

「フフ。カレーは空の好物だし、私もそう言うだろうって思ったけどね」

家族同士で外食しても、一人だけカレーばっかだったしね…。

「作っておくから、空はゆっくりしてていいよ」

「いや…なんか手伝おうか？」

「大丈夫。空は病み上がりなんだし、宿題でもしておけば？」

「それこそ嫌なだけだな…」

「もう、ちゃんとやらなきゃだめだよ。…じゃ、料理できるまで待ってて。ね？」

「……………」

「??? ど、どうしたの？」

「…な、なんでもない。とりあえず、上で待ってるよ。できたら呼んで」

「うん、わかった」

僕は自分の部屋へ向かった。

あー…緊張した。「ね？」とかがって言われると、ものすごく照れるんだよね…。

「……………父さん、遅いな……………」

時計はすでに7時を回っている。父さんは寄り道をほとんどしない人なので、勤務時間が終わるとすぐに帰って来る人なのだ。

「おじさん、残業？」

「…父さんの性格上、それはあり得ない」

「…事故……………にあったんじゃあ…？」

空は心配そうな顔になった。

「それこそ無いね。父さんは殺しても死なない人だから」

「…ひ、ひどい言い草だね…」

「まっ、念のためにメールでも送つとこつ」  
メールを送ると、すぐに返信が来た。

「…なんて？」

「…『今日は飲み会があるから、遅くなる』…だとよ」

そう言つと、空は小さく息を吐いた。彼女のことだ。胸を撫で下ろしているのだろう。

「待つて損した。食おうぜ」

「そ、そうだね」

というこつで、父さんを差し置いて、空が作ったカレーを食べることにした。

「……………」

空は僕が食べる様子をジーンと見ている。

「じ、じろじろ見るなよ…。食いにくいだろ？」

「だつてさあ…。…どう？ おいしい？」

「ん？ おいしいよ。なんて言うか……………」

知つてる味なんだよな……………。これは…………。

「なんて言うか…つて？」

空は頭をかしげた。

「…母さんの味に似てる…」

「…お婆さんの？」

「うん。…なんつーか好きなんだよな、母親の味つて」

「そりゃそうだよ。小さい頃からお母さんの料理を食べてるんだもん」

「…てか、なんで母さんの味に似てんの？」

「うーん…。味付けとかは、お婆さんから教えてもらったものが多いからかな？ ホラ、私のお母さん、料理はあんまり上手じゃないしよ」

「ああ…………なるほどね」

日向家で料理を作るのは、空かおじさんだもん。海の場合、お婆さんに似てかあんまり上手じゃないし（というより、しようとし

ない)。

「おかわり」

「ハイハイ」

腹が減っているからか、結構食が進む。元々、僕は少食なんだけどね。

「…こうしてると、なんかあれだね」

「あれ？」

僕はカレーを口に運ぶ姿を、彼女は少し微笑みながら見つめていた。

「夫婦みたいだね」

僕は口から吹き出しそうになった。というより、喉に詰まらせた。

「ちょ……大丈夫!？」

僕は彼女が渡してくれた水を一気に飲んだ。

「お……お前な……!」

「た、例えばだよ! ほ、本気にしないでよね」

「だからって……」

んなこと言うかあ? 普通……。

「そ、そう言えば、頭痛とかしない？」

なんか、無理矢理話を変えたな……。自分で振っておきながら。

「…時々、ほんの一瞬だけ痛いときがあるけど、大丈夫だと思う」

「そっか……。痛い時は、無理しないでよ」

「無理なんかしてないさ。…ただ、突然なんだよ、突然。猛烈な頭痛がしてくるのは。なんの前兆も……」

前兆? そう言えば……いろいろあった。最初気絶した時は何もなかったが、山頂に行つて、あの桜の樹を見つけたときから……いや、登っている最中に聴こえてきた、なにかの声。

あれが、前兆なのだとしたら……。

「…空? また頭痛でもするの?」

空は心配そうな面持ちで僕を見つめていた。

「だ、大丈夫。ただ、ちょっと考え事してさ」

「……………」  
僕は残りのカレーを口にかき込んだ。

夜8時。僕はリビングのソファで横になっていた。

無理して食いすぎた…。無理する必要なんか無いんだけど、なんか…たくさん食べてあげないと、空に悪い気がしたんだよね…。

空は食器を洗い、もう一つのソファに座って一緒にテレビを見ていた。

「今日はありがとな」

「え？」

「わざわざ晩飯作ったり、洗い物やってくれたり」

「い、いいよ。近所なんだしさ」

「いや、実際のところ助かったよ。僕が料理した場合、滅茶苦茶になるだろうし、コンビニとかで買った弁当は添加物が多くて身体に悪そうだし」

「……………」

空は、僕をジッと見つめていた。

「な…なんだよ？」

「…本当に、身体は大丈夫なの？」

「だ、大丈夫だって。自分のことは、自分がよくわかってんだ。快調だよ、快調。そんなに心配しなくても、大丈夫だから」

笑顔で言った。…のだが、返答はない。

「そ、空？ どうした？」

空は顔を沈ませていた。

「…空が気を失った時……………」

「……………」

「…もう…目が覚めないんじゃないかって思って……………」

彼女は小さく震え始めた。その時のことを思い出し、彼女の中に恐怖が浮かんでいるのか。

「…樹の時みたいにな、死んじゃうんじゃないかって…。急に、いな

くなつちやうんじやないかって……」

空は涙をこぼし始めた。

「お……おい……」

「空が目を覚まさなかったら、どうしようって……一日中考えてたら、眠れなくて……！」

「……………」

きつと、僕が山で気を失った日が樹の命日と同じ日だから、連想してしまっただろう。…死という別れを…。

「1日経つても目を覚まさないから……………」

「…空…」

「私……もう嫌なの……大事な人が、いなくなつちやうなんて……………」

「…馬鹿だな。いなくなるわけ無いじゃんか」

「だって……………」

「…簡単に死んでたまるかよ。僕はお前たちを残して死ぬなんてこ…と…しない」

「…空……………」

彼女は顔を上げた。涙でクシャクシャになっている。

「まだまだ、生き続けたいからな。お前らがちゃんと結婚して、幸せになるのを見届けるまでは…な」

「……………」

「だから…泣くなよ。……ホラ」

僕は手を伸ばし、彼女のほほに触れた。自然と、そうしてしまっ

た。

「…お前に泣かれると、なんかダメだからさ……」

「……………」

僕は思わず、彼女を抱きしめてしまった。なぜだろう……彼女を

抱きしめてあげたかった。泣きじゃくる彼女を。

「もう、泣くな。まだ、お前たちの傍から離れないから……」

「…うん…」

心臓がドクドクいつている。自分の心拍数が、上昇しているのが

わかる。そりゃそうだ。女性をこうやって抱きしめることなんて、ほとんどしたことが無いんだから。

「……………」

すると、空は僕から顔を離した。ほんの少しだけ震える、宝石のような瞳。少し赤くなったほほ。ピンク色の唇。変な感じだった。

「……空………」

彼女は僕の名前を言い、目を閉じた。空の唇が、部屋の明かりを受けて輝いているように見えた。

ダメだ……！

僕は彼女の身体を離し、立ち上がって背を向けた。

「……え……っと………」

何か……何か言わなきゃ。そうは思っても、何を言えばいいのかわからない。

「……そ、そろそろ帰ったら？ 海も心配してるだろうし」

僕はしどろもどろに言葉を放った。

「……空」

彼女の小さな声がした。

「私……空に言いたかったことがあるの………」

「……？」

僕は空の方に顔を向けた。

「言いたいこと……？ そう言えば……以前もそんなことを………」

そう言つと、彼女はうなずいた。たしか、あの時は途中で気を失つて……。

「ホントは、ずっと前から言いたかったことなの」

空は僕から視線を逸らした。

「私、私ね……」

彼女は何度も瞬きをしながら、言葉を詰まらせている。

「…空？」

彼女の名を言うと、それと同時に空は僕を見た。まだまぶたに残る涙の雫が、部屋の明かりを受けて光る。

「私、空が………好き」

世界が止まった。そんな気がした。

僕は空が何を言ったのか、いまいち理解できていなかった。

「…私、空のことが好き。………昔から………うつん、………出逢った時からずっと………空のことが好き……」

彼女は自分の胸に手を当て、しまい込んでいたものを取り出すかのように言葉を放つ。

「誰よりも………あなたのことが好き。空が………大好きだよ……」

空はそう言って立ち上がり、リビングから出て行った。

「…!! 空…!!」

名前を叫んだ時には、彼女は靴に履き替え、玄関から出て行ってしまった。

「…空……」

僕は追いかけることができなかった。ただ、彼女の名前を口にすることしか。

あいつ、何て言った？ 何て言ったんだ？

自分自身の記憶に、そう問いかける。

あいつは何て言った？

僕のことを、好きだって……。

あいつが……？ 空が………？

僕は呆然と、その場で立ち尽くしていた。

「ただいまー」

数時間後、父さんが帰ってきた。

「？　なんだ、いたのか？　何ボーっとしてるんだよ」

父さんは背広を脱ぎ捨て、冷蔵庫からウーロン茶を取り出した。

「空ちゃんは？　帰ったのか？」

「……………」

「なあ、帰ったのか？」

「あ…………？　…ああ…うん」

「ふーん、そうかあ。…おっ！　このカレー、もしかして空ちゃんが作ったのか？」

「…ああ…」

「すごいなあー。完璧じゃないか。後でお礼言っとかないとな」

「そう…だね」

僕は虚ろな目で、テレビの画面を眺めていた。

……………遠い昔から、誓われていた約束……………

どこからか、そんな言葉が僕の脳裏に降ってきた。

その日、僕はなかなか寝付けなかった。あいつのことはかり考えている。ようやく眠れたかと思えば、朝の5時に目が覚めてしまった。母さんでさえ起きていない時間帯だ。なのに、まったく眠くない。

ほんの……………4時間程度しか寝ていないのに……………。

もし、学校へ行く時に出会ったりしたらどうしよう？　なんて声をかければいいんだ？　何を言えればいいんだ？　わからない。

空に会った時の対応をどうすればいいのか、まったくわからない。

ある意味、恐怖だ。あいつに会うことが…。

…とりあえず、今日は早めに学校へ行こう。空と海が登校しない時間帯に。

僕があまりにも早起きだったので、母さんと父さんはビックリ仰天していた。2人からしてみれば、僕の入院と早起きは、人生でトップ10に入るくらいの出来事らしい。

7時15分。よし、行こう。空と海はだいたい……30分に家を出るはずだし。

「あんだ、もう行くの？」

「ああ」

「何でもいいけど、無理すんじゃないよ？」

「ハイハイ、わかってるよ」

僕は急いで家を出た。家を出た瞬間、目の前の家から空が出てきた。

「!!!!!!」

「やっべえ……! と思い、逃げようとしたが…。

「あれ? 空?」

それは、海だった。お、驚かすなよ…。これだから双子は…。

「滅茶苦茶早いね。なんで?」

「た、たまには早く行くのも、悪くないかなって…」

「ふーん。じゃ、一緒に行こ」

「あ、ああ」

海は何も知らないのだろうか。僕と海は、一緒に歩き始めた。

「久しぶりだね。一緒に登校するの」

「ん? …そう、だな…」

海は軽やかに歩きながら言った。どこことなく、微笑んでいるように見える。

「いつもはお姉ちゃんと一緒なのにね」

「そ、そうだな」

「ていうか、空がこんな時間に出るなんて…なんか企んでるんじゃない

ないの〜?」

「何を企むってんだよ、何を……。……空は?」

僕は何気ない感じを出すために、少し周りを見渡しながら訊ねた。

「お姉ちゃん、なんだか寝不足らしくてさ」

「ふーん……」

「なんだか一人でボーっとしてて、結局寝られなかったっていう才子」

「空が寝坊……か」

僕と同じじゃんか……。

「そう言えばお姉ちゃん、昨日何作ったの?」

「カレーだよ。聞いてないのか?」

「うん。だって、お姉ちゃんいつの間にか帰ってて、気付いたらベツドに潜り込んでたんだもん。なのに寝てないって、どういうことだろうね」

海は笑顔で笑った。しかし、僕は「……そっか……」と答えたために、その笑顔を止めた。

「……なんかあったの?」

海は僕の瞳を覗きながら核心を突いてきた。

「……別に。なんかあるわけないだろ」

僕は平静を装い、普通に言い放った。

「だよねえ。どうしたんだろ? お姉ちゃん」

「さあねえ……腹でも痛かったんじゃないの?」

ホントは知ってたんだけど……。ただ、罪悪感があるんだよ。そうしたのは、自分のせいなんじゃないかって。彼女を苦しめたのは、自分なんじゃないかと。

学校へ行くと、みんなから心配の言葉をたくさん頂いた。丈夫なだけを取り柄の僕が（高校1年は無遅刻・無欠席で皆勤賞Get）、3日も休んだために、みんな「これは一大事」と思ったようである。授業がまったく身に入らない。黒板の文字なんて見る気にならな

いし、先生の言葉も耳に入り、超特急でどこかへ消える。僕はうなだれるか、窓の外を眺めているだけだった。

ああ……今日の空も青いなあ……。

空と言え……。あいつ、今頃どうしてんのかな……。僕と同じで、まったく授業を聞いていないんじゃないのか？ 大丈夫かな……。いや、そもそも学校来てんのかな？ 海に訊いてみようか……。だめだ。訊いたところで、「何で訊くんだろう？」と思われてしまうかもしれない。それに、そういう質問をしてきたと、海が空に言うかもしれない。

そう考えてしまうと、僕はますます授業という現実からかけ離れていった。この空間が、まるで虚空のように空っぽで、そこに僕だけが静かに座っているようだった。それだけ、周りの全てのものが人にとつて、ほこりのようにちっぽけなものに感じていた。

「ま……東！」

「……」

「東……！」

「！は、はいっ」

僕は我に返った。国語教師の平塚が僕を睨んでいる。

「お前、さつきから何をボーっとしてんだ？」

「……す、すみません」

「……ったく……退院したばかりで、たるんでんじゃねえのか？」

「はあ……すみません」

先生に指摘を受けたのは、3度。今日だけで、個人的に注意されたのが3度もだ。「ちゃんとしろ！」と言われても、ボケっとしてて、どうにもならない。

「……なあ、どうしたんだ？」

「ん？」

昼飯時、和樹は焼きそばパン（定番）を食べながら言った。

「別に……」

「いや、その顔でそう言われても、納得できねえんだけど」

「…まだ身体の調子が悪いわけ？」

啓太郎が言った。

「身体はなんともないんだけど……」

「……精神的にまいってんのか？」

「……………」

精神的ねえ…：あながち、外れてないかな。僕が少しの間だけ戸惑った瞬間を、和樹と啓太郎は見逃さなかった。

「…やっぱ、お前、変だな」

「うん」

和樹の言葉に、啓太郎は小さくうなずく。

「何があつたのか知らないけど……」

和樹はそう言いながら、教室をきよろきよろと見回した。

「…まあとにかく、深く考えすぎないことだな。お前は一人で深く考え込むと、どーしても一人で結論を出しちまうからな」

「…個人の問題だろ？ それで十分だ」

「あんな、俺たちがお前のこと心配してないとも思ってたんのか？ お前がいつもの調子じゃないと、俺たちもいつもの調子にならない」

「…」

和樹は優しく微笑んだ。なぜか、僕は恥ずかしくなってしまった。

「人と人つてのは繋がりだ。その繋がりがあるから、俺たちは生きていけんだよ」

夕焼けの空。すでに6時過ぎ。僕は教室の自分の机で、窓の外を眺めていた。

この時間帯まで学校にいるのは、理由がある。それは、空に顔を合わせないためだ。あいつに顔を合わすのが、とても怖い。鬼に会うような、怒られるような恐怖感ではなく、何かが崩れそうで怖いのだ。それは、僕たちが築いてきた「幼馴染」という「繋がり」が崩れてしまいそうだからかもしれない。顔を合わすと、今までのそ

れが、音を立てて崩れ去りそうに感じた。

それだけは、嫌だった。

和樹が言っていた「繋がり」。それが不協和音を鳴らしたり、途切れてしまったりすると、もう昔に戻ることができなくなる。いつものように、笑顔で話したり、遊んだりすることができなくなると考えると……。

きっと、空だって同じはず。あいつだって、もうこれ以上壊したくないはずだ。

和樹の言うとおりだ。人と人を繋ぐ「糸」。これがあるからこそ、僕たちは生きてゆける。だけど、それがなければ生きていくことなどできないかもしれない。それは大げさかもしれないが、毎日が辛くなってしまう。内容のない、軽薄な日々と化してしまいそうだ。

僕は机に顔を沈めた。窓を眺めながら、大きくため息をついた。

「ガララ」

そのとき、教室のドアが開けられる音がした。僕は顔を逆方向に向けた。そこには、目をパチクリさせている美香が立っていた。

「…なんだ、美香か。こんな時間にどうしたんだ？」

「こんな時間について…空こそ、どうしたの？ もう、下校の時間は過ぎてるよ？」

「下校の時間…？」

僕は顔を上げ、教室の時計を見た。6時31分。気がついたら、こんな時間か…。基本、6時が下校時間であり、これ以降まで残るのは野球部などくらいなものだ。6時過ぎまで学校にいるなんて、初めてかもしれない。

僕は携帯をポケットから取り出した。

「…やっべ……母さんに怒られるな……」

着信履歴に、母さんからのものが2件あった。いつも6時までには帰る僕が帰らないので、中途半端に心配しているんだろう。

僕は椅子から立ち上がり、体を伸ばした。長いこと座っていたので、なんだか体が硬く感じる。

「帰るの？」

美香は僕のほうに近寄りながら言った。

「ああ。そろそろ帰らないと、イカズチ食らうからな」

僕は首を右に左にと傾けた。それと同時に、首の骨が鳴った。

「…ねえ、どうかしたの？」

「ん？」

僕は美香のほうに顔を向けた。どこことなく、彼女の表情は心配そうに見える。

「今日、なんだかいつもの空じゃないと思う」

「いつものって…別に、いつもどおりなんだけどな」

僕は悟られまいと、笑った。それでも、彼女の表情は変わらなかった。美香は小さく首を振った。

「いや、なんていうか……悩んでる」

「……………」

悩んでる。まさに、そのとおりだ。

「……………悩みの一つや二つ、誰にでもあるもんだろ」

「そうだけどさ。…私、空の友達だからさ。私でよければ、何があったか…教えてくれない？」

「……………」

「もしかしたら、少しは気が紛れるかもしれないしさ。それに、溜め込んでるよりかは、吐き出しちゃったほうが楽なことだってあると思うよ？」

そう言って、美香は微笑んだ。日向姉妹を除いて、女性の中で最も仲が良いのは美香だ。恋愛関係のことは、彼女に話したほうがいいのかもしれない。一番の親友である修哉には、なぜだか言いにくい。あいつは空と海の友達でもあるからかもしれない。

「…そう…か。そうだな、うん」

僕はうなずきながら言った。

「言ったほうが、いいのかもな」

顔を上げ、美香に視線を向けた。

「…実は、さ。昨日……」  
僕は昨日起きたことを、美香に話した。

「……それで、どうすればいいのかわからなくてさ……」  
「……………」

美香は終始無言で僕の話聞いていた。ひと時も目を逸らさず。  
そして、ようやく彼女は口を開いた。

「…悩んでるのは、そういうことじゃないんじゃない？」  
「えっ？」

美香は僕の前の席に座り、外を眺めた。茶色い地毛の髪の毛が、夕焼けの光で赤っぽく見える。

「空が悩んでるのは、今の関係が壊れちゃいそうだからなんでしょう？」

「…ああ……」  
そういうことは一言も言っていないのに、美香は気づいた。なぜか、すごいと思ってしまった。

「今まで築いてきたものが崩れてしまいそうで……」  
僕は大きいため息をついた。

「小さい頃から…物心が付く前から知り合いで、何をするにも一緒だった。…あいつは…あいつたちは大切な幼馴染なんだ。この関係が壊れたら、もう元に戻る事ができないんじゃないか？ そうなったら、顔を合わすたびにどうすればいいってんだ？ ……目を逸らしたり、無視したりしてしまうのだと思うと、たまらなく嫌なんだよ……」

夕焼けの空が滲んで見えた。何でだろう…。もし、そうになってしまったときのことを考えたからかもしれない。

「……空」

「……………」

「私さ、あんたのこと好きだったんだ」

「…え？」

美香のほうに顔を向けると、彼女はにっこりと微笑んでいた。

「気づかなかったでしょ？ 空と同じクラスになる中学3年の1学期に知り合う前から、空のことが好きだったんだ」

そう言う彼女の顔は、誇らしげに見えた。

「ごめんね。関係がこじれることが嫌なはずなのに、こんなこと言っちゃってさ」

「…美香…」

「でも、気にしなくて大丈夫。私はダメだってわかってるからさ」

「私は空の好きな女性にはなり得ない。所詮、私は空にとって一人の友達なんだ」

「な、何言ってるんだ。美香は…」

そう言うのと、彼女は首を振った。

「ううん。確かに、空は私を普通の友達以上に想ってくれてるかもしれない。けどね……違うの」

「違う…？」

美香は小さくうなずいた。

「空は私を恋愛対象の一人として、見てくれてなかった。空が何らかのことをしてそう感じたんじゃない、一緒に過ごしていく中で…1日、一週間、一ヶ月と過ぎて…自然と気付いたことなの。時間が教えてくれたって言うのかな」

「……………」

「言ったでしょ？ 『好きだった』って。過去形なの。……好きじゃなくなったって言ったら嘘になるけど、たしかにあの頃とは違う感情になった…。空の傍にいたいっていうことじゃなくなったた…」

「…」

彼女は椅子から立ち上がり、教卓のほうへ歩み始めた。

「ねえ？ 空は困ってる？」

「…はっ？」

美香はくるっと向き直り、言った。

「今、困ってる？」

「困ってるって言うか……びっくりしたというか……」

「じゃあ、怖い？」

同じ表情で、彼女は立て続けに質問した。

「えっと……怖い……わけじゃ、ない。迷惑でもないし……」

「そっか」

すると、彼女はフフッと微笑んだ。

「ほらね。違っただよ、そこが」

「???」

僕には、彼女が微笑む理由がわからなかった。

「私が告白したときと、空ちゃんが告白したときの空の反応。まったく違うものでしょ？」

「そりゃ……そうだけど……」

「私、わかつちやった。どうして、空が怖いって思っのか」

美香は微笑みながら軽やかに教卓の上に座った。

「? どういうことだよ」

「フフ……それは、空自身で気づかなきゃならないことだと思っよ」

「……んだよ、それ」

「あ、怒った？」

彼女は意地悪な声で言った。

「……怒ってないよ」

「大丈夫。きつと、空は気づくよ。空ちゃんや海ちゃんのことを大切に想ってるもの。いつだって、彼女たちのために行動してきたんだからさ」

「……」

美香は夕焼けの空をまぶしそくに眺めた。

「いいよね……。誰かを好きになるってさ」

「……美香……」

「私、絶対に空以上に好きな人を見つけてやる。そんで、あんたに

「自慢するの」

「自慢って……」

美香はクスクス笑いながら茶色い髪の毛を巻き上げた。彼女の髪は染めているわけではなく、地毛だ。もちろん、夕日に当たっているというのも関係しているのだろうが。

「……人を愛することほど、生きてるって実感することはない。……だって、人は人を愛することを止められないもの。でしょ？」

美香は屈託のない笑顔を見せて。その笑顔は、今まで見てきた彼女の笑顔の中で、最も美しいものだった気がする。

もしも……もしも、僕が日向姉妹に出会っていなかったら。もしも、こんな悩みを持つはずもなく、彼女たちについて何も感じなかったのなら、僕は……小山内美香を、抱きしめていたかもしれない。この手で。この腕で……。

言葉とは不思議なものだ。言葉ひとつで、人はこんなにも美しくなる。誰にもできることじゃない。美香だからこそ、できるのだ。激しく鼓動する心臓を押さえつけながら、僕は微笑んだ。そうしなければ、美香に逃げてしまいそうだった。

何から？

ふと、何か僕にそう言った。ずっと昔から……僕が生まれるよりも遙か昔から、そこにいた何か、ささやいたんだ。

……何から逃げてるんだ？ なぜ、逃げる必要があるんだ？

現実から。

空から。

校門で美香と別れ、僕はいつもの帰り道を歩いていた。何を考えるでもなく、コンクリートの道路を見つめながら。

…小さな木漏れ日 遙かなる呼び声 百億の星 堕ちた御使いの  
願い…

「…僕に何が言いたい…？」

僕は立ち止まり、道路を睨んだ。

頭の奥底から聴こえてくる声。

僕に何を伝えようとしているのか？

小さな残像と小さな痛みと共に、視界がぼやける。

遠い昔から交わされていた、遙かなる約束…

全ての命が…時が紡がれるその時に、新たなる星が生まれる

「だから…何が言いたいだよ…」

だんだん、痛みが激しくなってくる。その痛みは、僕の思考能力を徐々に停止させてゆく。

さあ…セヴェスよ…

お前は何を望む？

安堵か？

平和か？

愛か？

全てを欲する者は、あらゆる幸をその手から零す…

お前は、その手に何を望む？

「何を…望む…だつて…？ それは決まってるだろう…？ 言葉に出す必要なんて、ない。…なぜなら、僕たちは生まれてくるその昔から、その答えを知っているんだからさ…」

何かの反応があった。何かがいや、無数の何かが僕の体に落ちてくる。見つめるコンクリートの道路に、小さな斑点が少しずつ増えてゆく。

顔を上げると、それが雨だということに気がついた。雨脚はそこまで強くないが、いずれ大雨になる気がする。

さっきまできれいな夕焼けの空が広がっていたのに、いつの間に雨雲が広がっていたんだろう。それに、空が雲に覆われたせいでもあるのだが、周りがほぼ暗くなっていた。見えないほどではないが、そうだな…日が沈んだ時間帯…といったところか。

「…空？」

この声は…。

ゆっくりと視線を前へ向けると、そこに誰かが佇んでいた。

傘を持つ黒髪の少女。雨水のせいではやけた視界でも、暗くなっ  
てしまっても、それが誰だか僕は容易にわかった。

「…空…か？」

そう。そこに立っていたのは、空だった。彼女が愛用している、  
透き通った海のような色をした傘の下に。

「なんで、ここに…？」

そう訊ねると、彼女は少し恥ずかしそうな仕草をした。それがな  
んだか、とてもかわいらしく見えた。

「だ、だって…空がなかなか帰ってこないし、何度電話しても出な  
いから迎えに行行ってやってくれないかって、おばさんに頼まれて…」

「…」

「ああ……そっか……」

美香と話している時にも、帰ろうとした時にも携帯が鳴っている  
ことに気がついていて。しかし、なぜだか出る気にならなかった。

「…どうか…した？」

「…？」

彼女はなんだか心配そうな目で、僕を見つめていた。

「どうかした…か…」

なぜだろう。変な感じだ。自分の体が、自分の体じゃないみたいだ。

「ハハ…お前は、どうして平気そうな顔をしてんだ？」

「え？」

なぜか、僕は手を前に差し出していた。

「手が震える…。なぜかわかるか？」

「……？」

「怖いからだよ…。全ての歯車が動き出そうとしている…。いや、すでにぜんまいは巻かれ、ちよつとした予兆を醸し出してる…。」

「空…？ 何言ってる」

「狂おしいほどに何かを愛せるというのか…？」

僕の知らない何かが、彼女の言葉をさえぎって言葉を放つ。

「奈落の底へと…失われた聖なる空間の狭間へ堕ちゆく魂たちを…」

そのとき、僕の体はガクツと崩れた。雨水が流れる道路に、水しぶきをはじき出しながら座り込んでしまった。

「そ、空！？」

すると、彼女は傘を投げ捨てて駆け寄ってきた。

「ね、ねえ？ どうしたの？ …頭痛がするの！？」

「………」

ああ、そつだよ。頭が…痛いんだ…。なのに…なのに…。

…どうしてこんなに愛おしいんだろう…

「空！？ ねえ、そ」

僕は、しゃがんだ彼女を抱きしめていた。

「…！！」

雨の音が聞こえる。遙か遠く、遙か高みから降り注ぐ雫は、大地に小さな波紋を広げて砕け散る。まるで、生き急いだ人間のようだ。

「どうして…こんなにも…僕は…」  
「そ…ら…?」

そこからのことは、よく覚えていない。

ただ、その後、僕はちゃんと家に帰宅したこと。

ちゃんと夕飯を食べたこと。

ちゃんと風呂に入ったこと。

それらは、覚えていた。

けど、どのようにして空と別れたのか。どのようにして、彼女と離れたのか。

大切なところが、とても曖昧になっていた。

## 5章・戸惑い 変わりゆく人、変わらぬ想い

青い。

今日の空も、青い。

5月11日。なんでもない、普通の日。金曜日。平日の中で、最もうれしい日のような気がするのは僕だけだろうか？ だってさ、今日一日がんばりや明日から土曜日・日曜日と続くのだ。休日だぜ？ がんばる気になるでしょよ。

いつもの僕ならほんの少しうきうきしながら、ほんの少し早起きをして、学校に行く。

いつもの、金曜日だったなら。

「空 ！！ いつまで寝てんの！！ もうすぐ8時だよー！」

ドアの向こうから、母さんの怒号が聞こえる。なかなか、布団から出ることができない。なぜだろう。昨日、結構早く寝付いたはずだったのに。

「おらー！ 起きろー！！！」

この声は……。

「空 ！ 起きろ、このやろー！！！」

海が勢い良く、僕の部屋のドアを開けた。

「いい加減にしないと、遅刻するぞー！！！」

「……海……？」

「そうだよ！ いいから、早く起きろってば！ お姉ちゃんも待ってるのよ」

その言葉で、僕はまぶたが完璧に開いた。それと同時に、眠気もどこかへ吹き飛んでしまった。

「空まで？」

「そうだって！ ほら、早く出るー！！！」

彼女はそう言って、僕の布団を剥ぎ取った。うひゃー。

空が待っていると聞いて、行きたくないような、行きたいような、まったく別方向の感情が、あっちこっち行ったりして嫌な感じだ。急いで寝癖を直し、パンを一口ほお張り、歯磨きをし、カバンを持って外に出た。玄関の外では、本当に彼女が待っていた。

朝日を浴びる空。緑色の風になびかれる空。青い空の下に佇む空。あらゆる自然のものが、彼女のためにありそうだった。

狂おしいほどに、愛せるといふのか？

ほんの一瞬、視界がぼやける。頭痛はしなかった。

「お待たせ、お姉ちゃん」

海の声に、僕の世界は元に戻った。

「ほら、急ご。もう8時過ぎちゃったよ！」

「あ……………うん」

海は空を急かしながら、道路を走って行った。空は僕を一度も見ずに、海の後を追いかけて行った。僕はなぜかわからないが、空を見上げた。

「……………」

「置いてくぞー！！」

海の声が遠くから聞こえる。僕も、カバンを持って走り始めた。

いつもどおりの始まり。昨日と同じように、授業が身に入らない。雑音にしか聴こえないみたいだった。今、僕がいるこの空間を一枚の絵にしたら、きっと僕の周りには雑音が黒い文字となって辺りを泳いでいるのだろう。

僕の心をざわつかせるでもなく、イラつかせるわけでもなく、言葉たちはあちこちへ飛んでいって瞬く間に消えていく。

様子のおかしい僕に気がついた和樹は、教科書を丸めて僕の頭を引っぱらいた。

「いてっ！ 何すんだ！！」

「何すんだじゃねーよ、つたく」

不機嫌そうな顔を浮かべながら、和樹は椅子に座っている僕を見下ろしていた。

「昨日といい、今日といい……なんだってんだ？ お前は」

「……………」

あからさまに、和樹はイラついていて話しかけても、いつものような反応を示さない僕が嫌だったのだろう。

「ホントにどうしたんだよ？ 昨日よりも様子がおかしいよ」

啓太郎が僕の隣の席に座って言った。

「何も……………」

僕は遠い目をしながら、黒板を見据ええた。

「何も無いなら、人間はそんな様子にやなんねえよ。んだよ？ 俺

たちには言えねえことなのか？」

和樹の口調に、だんだん棘が生えてきた。

「……だから、何も無いって言ってるだろ……」

僕は和樹に目を合わせないまま、言い放った。

「何イラついてんだよ？」

イラつく……？ こんなにも激しく燃えるような感情があるのは……

イラついているからなのか？ だが、そうだとしたらこの平穏な気

持ちは何だ？ どうして、こんなにも落ち着いている？

それが、わからない。

美香に言われて、何らかのことに気がついたような気がしたのに

……。ほんの少し、自分の気持ちに正直になれそうだったのに。それなのに、どうして僕は閉じてしまっているんだろう？

…正直？

僕が気づいていない、何かがあるって言うのか…？

おかしい。

僕はどうしてしまったんだ？　こんなにも、自分の気持ちかわからないのは初めてだ。どうして、空のことを考える？　どうして、海のことには気にも留めない？　あいつたちは、同じじゃないか。見た目も、声も。性格だって、根本的なところはそっくりなのに。

……わたし、……あなたは……？

あれ……君は……？

幼い手。

幼い身体。

……そう、拾い損ねた宝物さ……

「……い。……おい！　空！」

遠くから聞こえ始めた和樹の声で、僕はハッとした。

「聞いてんのか？」

「あ………何？」

………

「………」

和樹はため息をつきながら、自分の髪の毛をクシャクシャにした。

「……何言っても、ダメみたいだな」

「和樹……」

啓太郎は困った顔をしていた。

「もういいよ。自分で悩むだけ悩んで、追い詰めるだけ追い詰めて答えを出してみろよ。そうやって得られたものに、自分が納得ができるまで答えをはじき出し続けりゃいいさ」

そう言つて、和樹は教室を出て行つた。

「……………」

「空……………あの態度は良くないよ」

啓太郎も同じように、ため息混じりに言つた。

「…わかつてるよ。ごめんな」

僕は苦笑した。本当に、和樹には申し訳ない。せつかく心配してくれてるのに、話を聞かないなんて…。

「……………」

「…? どうした?」

啓太郎は、キョトンとした表情をしていた。

「いや……………なんか…」

「……………うん?」

「さっきまでの空の変な雰囲気が消えて、いつもの空に戻つたような気がして……………」

うーん、と啓太郎は唸つた。

「おつかしいな。……………ん? おかしくないか。いつもの空に戻つたんだから」

どうしてだろう。

昨日から続いていた、なんとも言えない憤り。なんとも言えない不安。なぜか、それが消えていた。心の奥底にしがみ付いていた「何か」がようやく離れ、再び奈落の淵へ沈んだかのようにだった。

「空……………青いな」

僕は昼休み、屋上に一人だった。いつもなら和樹や啓太郎と一緒に

に食事をするはずだったのだが、僕の様子がおかしいため、和樹が嫌がったのだ。無理もない…。

フェンス越しからこの町を眺めていると、日本という国は平和なんだなと実感する。いや、平和だと偽られている、と言ったほうが正解かもしれない。

平和なんて上辺だけさ。遠くから眺めるときれいにしか見えないが、近くで見ると薄汚れている。巷では凶悪な犯罪がはびこり、無駄な論議が政府でなされ、進展しない国際問題。まるで、今の富士山のような。富士山のふもとは、ゴミだらけだと言うし。

上辺だけの平和や幸福があるだけで、人はどうして満足するのだろうか。満足せず、ただ憂いている人もいるかもしれない。だけど、そういう人に限って行動力がない。稚拙な論理しか頭のない連中だけが、行動力を持っている。

怠惰な平和。懦弱な世界。

世の中なんて、そんなもの。

生きていく中で、人はどれだけの真実を知って生きていけるのだろうか。知らないほうが幸せなことだってあるかもしれない。知らないほうが、世界はうまく回っていくのかもしれない。でも、人として生まれた以上…この星の生命として生まれた以上、全てを知る権利はある。そして、世界を変える権利がある。そうやって、僕たちの歴史は築かれていったはずだ。

僕たちの先祖たちはいつの時代でも世界に抗い、生きていたはずだ。同じ人である僕たちにもできるはずなんだ。

だけど……しようとしなさい。それは、僕だって同じ。

世界が嫌いなわけでも、憎いわけでもない。このままじゃいけないって感じているだけだ。そういう人間が一人、二人いても悪くないはず。

「今日はいい天気だな」

後ろから、修哉の声が聞こえた。

「……そうだな」

僕は振り向かないまま言った。

「そろそろ、長袖じゃ暑くなってくるな。つつても、まだ24度前後だろうけど」

きつと、修哉は上空を見上げながら言っているに違いない。

「昨日の夕立、突然でめんどくさかったぜ。洗濯物が濡れちゃったよ」

「八八。昨日はお前が洗濯係だったのか？」

「じゃんけんで負けたんだよ」

そう言って、修哉は僕の隣でフェンスに背中をかけた。修哉の家では、家事は妹の咲希ちゃんと修哉がやっている。そのためのじゃんけんだったかな。

「よく、ここだってわかったな」

「まあな。何年お前の友達やってると思ってんだ？」

「……7年、かな」

「正解。……それに、お前のいそうな場所なんてのはたいてい空が見える場所だしな。お前の名前そのまんまってね」

修哉は小さく笑った。

「八八。……僕としては意識してるわけでもないんだけど、自然とこういう所に行きたくなくなるんだよ。特に、空がきれいな日にはな」

「まあ、気持ちにはわからんでもないがね。気持ちいいもんな。陽気が降り注ぐ中、青空の下でこうやって風になびかれると……」

「……と？」

「眠くなる」

「…結局それかい」

僕は呆れながら言った。

「こういう日に勉強なんかしてられっかってんだ。だろ？」

「お前はな」

僕は皮肉混じりに言ってやった。

「お前みたいに勉強ができれば、授業なんて聞かなくてもいいんだけどなあ」

「勉強は学生の仕事だ。サボるなよ？」

「ふん。ほっとけ」

暖かな風が吹く。風の妖精が眠気を運んでくる。僕は大きなあくびをした。

「空ちゃんだろ？」

修哉は唐突もなく、口を開いた。

「……………」

「返答がないのも、答えてね。まあ、お前が悩む理由なんて容易に想像できるがな」

チラツと彼を見ると、なぜか微笑ましい顔をして空を見上げていた。

「空ちゃんに告白されたんだろ？」

「……………」

「小山内から聞いた」

「…美香が？」

すると、修哉はうなずいた。

「『一番の親友は柊君だから、今の彼を支えられるのは柊君だけだ』と思う』って言うてよ」

「……………」

「悲痛な顔で頼まれちゃ、さすがの俺も放っておけないからな」

「…お前、美香のこと嫌いじゃなかったっけ？」

「ん？ ああ…：それか。別に、嫌いでもなかったがな。ただ単に、どうでもいい存在だったってことさ。俺にとって、いよすががいまいが関係ない。お前や空ちゃんには関係があるんだろっけどな」

「……………なるほどね」

ある意味、ほっとしていた。自分の知り合いが、他の知り合いの

ことを嫌っているのを知るのは辛いから。そうじゃないとわかっただけで、心が落ち着いた。それにしても、修哉は棘がある言い方をする。可愛げの無い奴。

「さて、何から言おうか……………」

修哉はうくと唸った。

「そうだな……………まず、空ちゃんについて話そうか」

「…空？」

「彼女が何でお前に告白したのか…わからないか？」

「……………」

「お前が考えているとおり、彼女はお前のことが好きだからだよ」

僕は何も言わなかった。だけど、こいつは僕が何を考えたのかわかってた。

「いや、好きという範疇を超えているな。『愛してる』と言ったほうが正解だろう」

ほんの少し、風がなびいた。

「彼女がお前を想う気持ちは、きっと想像以上さ。だからこそ、超えたいものがあつたんだ」

「…超えたいもの？」

「ああ。…今の関係、さ」

修哉は僕に視線を向けた。

「今までと同じなのは、もう嫌だったんだ。幼い頃から続く同じ関係でいるのは、もういい加減うんざりしていたんだろう。その関係を超えて、お前の傍にいたかったのさ」

「…そんなことしなかつて、あいつは…あいつたちはいつだって傍にいた」

そう言うと、修哉は目を閉じ、首を振った。

「違うな。それはお前のエゴに過ぎない。お前がそうしておきたかったという願望さ」

「願望…？」

「ああ。お前は彼女に告白されることによって、無意識にそう置き

換えていたのさ。それまでの、自分の本当の気持ちを心情の奥底に沈めて…な」

「……………」  
修哉は僕と同じように、フェンスに向かった。

「空ちゃん自分から今の関係を壊した。そして、本当の意味で前の傍にいたいなのさ」

「そんなこと言われても……………」

「……………そうだな。お前は今の関係を崩したくなかった。そうだろ？」

「……………」  
僕は小さくうなずいた。

「そして、いつまでもそのままだったんじゃないのか？」

「……………ああ」

「それじゃあ、駄目なんだよ。…………この世に、変わらないものなんて存在しない。存在し得ないんだ。ずっと昔から続かせたいなんてただの願望……………欲張りでしかないのさ」

「欲張り？　僕が大切にしておきたいって想う気持ちは、欲張りだつて言うのか？」

僕は思わず声を少し荒げた。修哉は動じず、続ける。

「そう、欲張りだ。お前は彼女たちをいつまでも同じステージに立て続けさせ、自己満足していたんだ。それが欲張りと言って、何て言うんだ？」

「！　違う！　僕は…怖いんだ！　もう昔みたいに…いつものように話すことができないのは、辛すぎる。心が…………壊れてしまいそうなんだ！」

「そりゃそうだ。空ちゃんだって怖かったんだ。どうしようもないほど、怖かったに違いないんだ。昔に戻れないのは誰だって辛いし、どうしようもないほど怖い。だけど、いつだって人は前に進まなきゃならないんだ。そういつた恐怖感を跳ね除けて、勇気を振り絞って前に進む…。そうやって、人は自分たちの未来を拓く。そうすることで、一つ一つの歴史が重なっていくんだ。…………大げさかもしれない

ないがな」

「……………」

彼は僕のほうに体を向けた。

「考えてみる。彼女だってお前と同じように、今いる立場 スタージ に満足していたかったかもしれない。そこから離れたくなかったのかもしれないが、それでも前に進むことを選んだ。元に戻ることができない恐怖や不安を跳ね除け、己の勇気で言葉を振り絞った。そんな彼女の気持ち、お前は理解できないってのか？」

「…空の……気持ち……」

僕は思わずうつぶつぶしてしまった。あいつだって、僕と同じで怖かったはずだった。

「今までいた場所にいれば、それなりに幸せかもしれない。今までと同じ安息は得られるかもしれない。そうとわかっていながら、彼女は前に進むことを選んだ。自分の気持ちに正直になることを選んだんだ」

僕だけが怖いわけではない。あいつだって、同じなんだ。それでも……あいつは自分の心に素直になった。それが、どれほど難儀なことなのか……人であるならば、容易に理解できる。

「それは、何に置き換えても言えることさ。変わらないことが駄目って言うわけじゃない。駄目じゃないが、それじゃあ何一つ変わらない。変わるべき時だってあるはずなんだ。幸福な過去や今にしがみ付いていたって、未来は暗いままだ。……この世界も、ヒトも」

修哉の言葉は、もはや僕や空だけの範疇を越えていた。そう、全てに当てはまることなのだ。学ぶことにも。分かり合うことにも。知ることにも。…生きることにも。

「空」

「……………」

「今見える現実から目を背けるな。どんなに辛くても、現実から目を背けては全てがねじれたままだ。彼女の気持ちに素直に伝えてやれ。勇気を振り絞った彼女にな。そして、今度は自分が今の殻をぶ

ち破れ」

「…修哉…」

「健気じゃないか。俺の中の彼女のイメージは、ほんの少し弱々しい女性だと思っていたんだがな」

そう言つて、修哉はフェンスにもたれ掛かりながら座つた。

「樹と同じで、おとなしい性格だからな」

八八つと修哉は笑つた。

「…お前の気持ちがあんなであれ、彼女は優しく応えてくれるはずさ。それは、幼馴染であるお前が一番良くわかつてるだろ？」

幼馴染。それが、一番僕を縛り付けていたワードなのかもしれない。

幼馴染とか…そんな関係ない。僕たちを繋ぐ糸は、そんな言葉だけで表現できるものじゃない。

「…違うな。彼女にとって最も大切な人であるお前だからこそ、だな」

「…そうかな」

「何言つてんだ。彼女、言つてたぜ？ 『空はなんだかんだ言つて私に対して優しくしてくれる。守ってくれる』…つてさ」

「……そっか」

空がそんなことを…。あいつが、どれほど僕を想っていたのかが伝わってくる。…あいつは、嘘なんてつかないし…。

「お前が彼女に対してどういう感情を抱いているのかは、はっきりと言えない。けど、これだけは言っておくぞ？ いいか。自分の気持ちに正直になれ。自分の心に従え。あるがままの心情をさらけ出せ。本当の想いを隠したりするな」

そういう修哉の顔は真剣そのものだった。

「…わかつたか？」

「……」

「わかつたのか？」

僕はつばを飲み込んだ。

「…わかった」

すると、修哉の顔はいつもの明るい表情に戻った。

「そうか。なら、俺はもう何も言わないよ。これ以上言う必要なんて、ないっばいしな」

修哉は立ち上がり、うーんと背伸びをした。

「…ありがとうな、修哉」

「ん？ いいってことよ」

彼は僕の顔を見て、満足そうだった。自分では良くわからないが、わかる。すっきりとした顔をしているんだろう。心が軽くなったからだ。

「…行くよ」

「今からか？」

「ああ。今から、あいつに会いに行く。今あいつに会わないと、駄目な気がするんだ」

自分の気持ちに素直になるためには、今からあいつに会わなければならぬ。あいつを見ないまま、どうやって正直になれただ？ 無理な話だ。まだ良くわからない気持ちでいっばいだ。けど、彼女を見れば一つの楔が外れる気がする。僕の心を縛り付ける、見えない楔が。

「なるほどね…。まあ、善は急げって言うしな」

「あのな…」

修哉はふざけた風に笑った。

「行って来いよ。ちゃんと、決着をつけてこいよ？」

「……………ああ」

僕は彼のウィンクに、ウィンクで返した。

僕は、一年生がいる新校舎のほうへ向かった。

「……………」

修哉は小さく息を吐いた。

「俺も、お人好しだな。……とうの昔に、憐れむ心なんて消え失せたと思っていたんだがな……」

重い腰を上げるかのように立ち上がり、町の風景をゆっくりと眺めた。

「……わかつてる。お前らが何を言おうとしてんのかくらい……。いいじゃないか。ほんの少しだけ、未来を夢見るくらい……」

果てしなく続く青い空。町のずっと先が、白く霞んで見える。

「……………」

終焉の鐘は近い……か……。

ほとんど走ったことのない廊下を、僕は走っていた。ほんのちょっとした時間でさえ、今は惜しい気がしていた。一粒の雫さえ、この手から零したくない。

昼休み終了間近で、学生たちが廊下に大勢いる。なるべく人にぶつからないように、間を縫って走る。もしも空がいなかったらどうしようか？ いなかったらいなかったで、待つだけだ。あいつのことだ。授業をサボることはできないはず。絶対に教室に戻ってくる。新校舎の2階。ここが現1年生8組のいる階だ。教室の周りは1年生でこった返している。みんな、制服をきちんと着ている。僕なんてネクタイは締めてないわ、シャツとブレザーのボタンはしめていないわで、よく空と海に注意されている。

僕は教室に入り、中を見渡した。ざっと40人近くいる教室の中で、空はどこにいたのだろうか。すると、一番後ろで、誰かと談笑している彼女を見つけた。その瞬間、僕の心拍数が上昇した。まだ、空は僕に気がついていない。話に夢中だ。

いつもの歩幅で僕はそこに行った。

「……東先輩？」

すると、彼女の隣にいた女子生徒が僕に気がついた。僕としては面識がない子だった。そして、空は僕に気がついた。初めはハツとしていたが、すぐに顔を逸らした。

「東先輩ですよね？ ……もしかして、この子に用ですか？」

その女の子は空を指差しながら、笑顔で言った。

「ああ。ちよつとこいつ、借りて行っていいかな？」

「…えっ？」

僕は軽くあごで空を指した。

「もちろんですよ」

と、彼女はなぜか簡単に承諾した。そもそも、この子に承諾を得るのもおかしな話なのだが……まあ、いつか。

「ちよ…ちよつと、あずさ。授業がそろそろ始ま」

「まあまあ、一回くらいサボっても大丈夫だって。はい、東先輩」

空の友達は、彼女の言葉を遮って僕の前に突き出した。

「あ、あずさ！」

「……めんどくせえなあ………ったく」

僕は強引に、彼女の手を握って引っ張った。

「いいから来い」

「！！ そ、空、まつ」

彼女の抵抗を無視し、僕は人目をはばからず彼女を教室から連れ去った。周りの目が僕たちに向けられているのがわかった。けど、そんなの無視だ。気にしてなんかいられない。そんなこと気にしていたら、前になんか進めない。

空の手を握り締めて早歩き。その間、何度も彼女が僕に向かって何かを言っているのがわかったが、それも無視。今は、学校から離れたらいいと思っていた。ここでは、落ち着いて言葉を交わすことがで

きないと思った。彼女は学校の門をくぐると、何も言わなくなった。

僕たちは近くの公園へ行った。この公園は、幼い頃から何度も遊んでいる場所。僕たちにとって、ゆかりのある場所でもあった。あの滑り台も。平均台も。砂場も。

ここへ辿り着いても、僕はまだ彼女の手を放していなかった。なぜか、放すことができなかった。手放したら、今すぐにでも彼女が無言で帰ってしまいそうだったから。

「……………」  
僕は空に背を向けたまま、立ち止まった。

「……………」  
沈黙。それだけだった。後ろを振り向くことができない。空は、どういふ顔をしているのだろうか。気になるけど、怖い。……………けど、怖がっているのは駄目だ。

僕はゆっくりと後ろへ振り返った。そこに立っている空は、俯いていた。

「…空」  
彼女の名前を呼ぶと、ほんの少し反応があった。だが、顔は俯いたままだ。

「最初に、謝るよ。…………無理矢理教室から連れ出して、ごめん」  
「……………」

僕は小さく頭を下げ、すぐに上げた。彼女はまだ俯いたままだ。

「…………お前に、どうしても言いたいことがある。それを……………すぐにお前に伝えたかったからさ」

「……………」  
すると、空は沈めていた顔を上げ、僕に視線を向けた。どこか哀しそうで、どこか……………うれしそうだった。そんな気がした。

「……………謝らなくていいよ……………私、すごくうれしかった……………」  
「……………うれしい？」

空はうなずいた。

「空が…大好きな空が、私の手をとって連れ出してくれたことが…」

「…空が来てくれるまで、不安でたまらなかった。心が押し潰されそうだった。…けど、空がこうして目の前にいると…やっぱり落ち着く…」

空は目を閉じ、僕の手を握りしめた。

「もしかしたら、ただの親愛なのかと思っただけど…やっぱり違う。私…空のことが大好きなんだ。誰よりも…」

彼女は微笑んだ。それを見て、僕の中で何かが流れ込んだ。

……わたし、ひなたそら。あなたは……？

ああ……そうか。そうだったんだ。

僕はようやく……気がついた。遙か奥底に沈んでいた小石を掬い上げたかのように、何かが僕の中に戻ってきた。

そうだったんだよ。何が本当に、何が真実なのか。自分の想いとは……。

その答えが、今、僕の掌 たなごころ に戻ってきた。

遠い昔に零れ落ちた真実の種が、可憐な花を咲かせてこの手に舞い戻ってきた。

「……空？」

空は頭をかしげていた。

何者にも奪えない、僕だけの……たった一つの宝石。

僕は小さく微笑んだ。

「どうしたの？ 気分でも…悪いの？」

彼女は心配そうに、僕の瞳を覗き込んでいた。

「大丈夫。なんでもないよ」

僕は笑顔で返した。

「…幼い頃、ここでよく遊んだな」

僕は辺りを見渡した。昼過ぎの平日…：子供は昼寝の時間かな。

「…そうだね。小学校からでも近くて、いつもここで道草をした  
ね」

空も同じように見渡しながら、思い出を回想していた。

「僕と樹と空と海…いつも、4人だったな。いつの間にか修哉も加  
わってさ」

「あの5人だったら、怖いものなしだったね」

そう言つて、空はクスツと笑った。

「まあ、僕と修哉がいれば大抵のいじめっ子なんて撃退できたから  
な」

あの頃、おとなしい空と樹は幾度となくいじめっ子に絡まれてい  
た。そのたびに、僕たちがそいつらを撃退していた。

「一年…二年と過ぎていくたびに、ここにくる回数も減つていった  
ね…」

「…ああ」

「…何年もすれば、今こうして回想しているようになるんだね。…  
私たちがこうして、昔のことを懐かしんでいることさえも…」

空の顔に哀愁さが漂った。

「そうだな…。思い出は、風化していくだけなのかもしれない」

「……………」

「…けど…」

僕は上空を見上げた。スズメが一羽、横切つていった。

「…いつまでも、僕たちの中に生き続ける。消え去ることのできな  
い、自分たちだけの宝物さ」

「宝物……………」

僕はうなずいた。

「そして、僕たちはそれらを共有している。思い出を…：人生の一部

を」

それが人と人との繋がり。それがあある限り……人は独りじゃない。そんな気がする。

「空……うん、そうだね……。ただ、風化し続けるだけじゃないんだよね……」

「ああ」

僕たちは見つめあった。すると、なぜか同時に笑ってしまった。

「なんか、今までギクシヤクしてたのが変な感じ」

空は口元を手で隠しながら言った。

「まったく。深く考えるんじゃない」

「何よー。せつかく、私が勇気を振り絞って言ったのにさ」

彼女はふざけ口調でそっぽを向いた。

「そういう意味じゃないって。ていうか、その点に関しては今までにないくらい思い悩んだし」

「ホントにー？」

「……ホントだよ」

宝石のような瞳を見つめながらそう言うと、彼女は僕から顔を逸らした。

「も、もう……なんだか、恥ずかしいじゃない……」

「ハハ、照れるなよ」

「…もうー！」

空はフンと突っぱねた。

「……空」

「…ん？」

空は僕から顔を逸らしたままだ。

「好きだよ」

言葉が、風に乗って彼女に伝わっただろうか。囁くかのように、緩やかな風たちが僕たちを包みだす。

「……………え？」

空は、僕のほうに顔を向けた。子どものように目をパチクリさせている。

「お前のこと、好きだ」

こんなに、簡単に言えるなんて思わなかった。でも、口に出してみれば結構簡単なんだな。ある意味、新発見だ。

「……………」

だんだん、空の表情がこわばっていった。目の前の現実に、パニックになっているのかもしれない。

「うそじゃないよ。僕は、空が好きだ」

もう一度言うと、彼女は小さく首を振り始めた。

「うそに…決まってる…。そんなの……………」

「こんなときに、うそなんかつくかよ」

僕は小さく震えだした彼女の手を、強く握り締めた。

「お前に対して……………今まで嘘なんかついたことはないだろ？」

「うそ……………よ」

彼女は否定するかのように、顔を振る。

「……………まったく……………そんなに信じられないってなら、理解できるよ  
うになるまで何度でも言っつてやるよ」

空、お前が好きだ。

僕は何度も言葉に出して言った。偽ることのできない、真実。本当の気持ち。想い。これだけは、誰にも覆すことのできないものだ。

「ほんと……？」

彼女の言葉が変わった。一辺倒だった「うそ」から。

「ほんとに……？」

僕は大きくうなずいた。

「だから、こんな時に嘘なんかつくわけねえだろ？ 本当の本当だし、本気の本気だつての。…好きだよ、空」

何度目かわからない、「好きだ」という言葉。

「ほんと……なの……？」

すると、彼女の瞳から涙が零れ始めた。小さな宝石たちが、ほんのりとしたピンク色の肌を走ってゆく。

「……ようやくわかった。自分がいつも……いつも、誰を想っていたのか」

「…空…」

彼女は手で自分の顔を覆った。涙で、クシャクシャになっていた。突然、僕はそんな彼女がたまらなく愛おしくなり、思わず抱きしめた。

軽い。

彼女の髪の毛が、僕の手や腕に触れる。

「空……わ……わた……」

空は涙でうまくしゃべれていなかった。それが更に愛おしかった。

「……ああ。わかってる。……お前が言いたいことは、全部……」

僕は強く、抱きしめた。彼女も同じくらい僕を抱きしめた。

「…わた……私……私……」

「ごめんな……。ちょっと考えればわかることだったのに、お前をこんなに泣かせちゃうなんてさ……」

それは、心底思っていたことだった。彼女を苦しませていたと思うと、胸が縛り付けられる思いだった。

「謝らなくて……いいの……。…謝らなきゃ…ならないのは……私……」

「それこそ違う。……お前は、正しいことをした。それが……僕に

とって、大事なことを思い出させてくれたんだから……」

自分が悪いんだと、空は僕に謝ろうとしていた。お前は、何も悪くないのに……。

僕はゆっくりと彼女を離した。

「……………」

「……………」

僕たちは見つめあった。そして、必然……と言えようか。僕は彼女の顔を引き寄せ、唇と唇を交わした。初めての女性の唇。なぜか、落ち着いていた。そして、もう一度彼女を抱きしめた。

「…空、一つ……お願いしてもいい？」

「…ものによる」

「ちよ……何よそれ」

「八八、冗談だって。んで？」

「…もう……………。好きって…………もう一度言ってくれる……？」

僕は彼女を離し、頭を軽くかいた。

「……ま、また言えってか？」

すると、空はクスクス笑っていた。

「恥ずかしい？」

彼女の笑顔を見て、僕はちよつとムツとした。

「…………んなわけあるか。…………よく聴いとけよ？ これ以上はぜっ

てえ言わないからな」

「…………うん！」

空は飛びつきりの笑顔をして見せた。

この笑顔が……好きなんだ。この笑顔は僕の心に安寧をもたらしてくれる。殺伐とした心に、潤いの風を運んでくれる。僕を幸福へと導いてくれる。

「…空、好きだ」

そう言つと、彼女はホツとした表情をした。

「…ありがとう……。そう言ってくれるだけで、私……………すごく幸せ

……………」

「……………」

何よりも愛おしい存在。

僕たちは、3度目の抱擁を交わした。

「……お前、ホントにちっちゃいな」

「な、何よ！ わ、私は普通だもん！ 空が高いの！」

「だってさあ……………」

僕は不意打ちで、彼女にキスをした。

「……………！！」

顔を離すと、びっくり仰天の空が。

「し辛いんだよ、キス」

「……………」

だんだん顔を赤くしていく彼女を見て、僕は思わず笑ってしまっ  
た。

「な……！ 何で笑うのよ！」

「だ、だってお前……………」

と、僕は彼女を抱きしめた。

「そ、空？」

「まったく、お前つてばすんげえかわいいんだから」

「……！ や、やめてよ。そんなこと言われると……………」

「照れんな照れんな」

「も、もう……！！」

その日、僕と空は一緒に帰った。つい昨日一緒に帰ったつというのに、なぜかとても久しぶりなような気がした。

僕がなぜ、彼女のことを好きになったのか。……いや、なぜ好きなのか。その理由は、意外に簡単なものだった。好きなのかどうかもわからなかったが、「好き」なのだとなると、その理由でさえ容易に理解できた。

それは、空と同じ理由だった。

彼女と同じように、僕もまた、彼女と初めて出会った時に、恋に落ちてたんだ。彼女の「笑顔」を見るまで、完全に忘れていた。夢と夢が交叉する、紺碧の渦の中に沈んでいたんだ。

その渦から拾い上げた、僕だけの大切な宝石。キラキラと輝く、光る理由を知らない星のようなもの。

13年前、僕は初めて空と出会った。あの公園で樹と一緒に遊んでいた僕は、白い服を着た可憐な少女に出会った。幼い僕は、初めて恋に落ちた。その時は、恋というものでさえ理解できていなかった。ただろうけど。

差し伸べてきた白く、細い腕。彼女の長い黒髪は、白い肌と白い服でいつそう際立って見えた。あれでは、誰だって恋に落ちるさ。

なのに、どうして忘れていたのだろうか。今の今まで、どうして彼女と出会ったことも、彼女のことを好きになったことさえ……。

……なんにしても、僕は少しだけ大人になった気がする。誰かを好きになって、誰かを護りたいと本気で思ってた……。

ほんの少しずつ、一粒の夢の雫たちが、僕の見る世界を成長させてゆく。

……どうして、こんなにも愛おしいんだろうな……

「おはよう」

土曜日。土曜日なのになんで学校があるのか。なぜなら今日は授業日。代わりに、来週の月曜日が休みなのだ。

「…お、おはよう」

僕が挨拶すると、啓太郎は目をパチクリさせていた。和樹にいたっては、開いた口が塞がらないようだった。

「…なんだよ？」

「い、いや……昨日と…雰囲気がぜんぜん違うし…」

和樹は変な口調で言った。

「おはよう、空」

後ろから、元気な美香の声が聞こえた。

「おはよう」

美香は小さく手を振って、自分の席に着いて行った。

「…和樹、昨日はごめん」

僕は和樹に小さく頭を下げた。

「……へ？」

和樹は面食らっていた。

「八つ当たりみたいなことしちゃってさ…」

「い…いや、別に、気にしてないし…」

「ハハハ、和樹、照れてやんの」

啓太郎は彼をあしらった。

「う、うっせえ！俺はだな、ただ………」

「顔が赤くなつてら」

「啓！お前な！」

和樹は啓太郎の頭を軽くはたいた。

「俺はただ、空がいつもの空に戻ってよかったって思ってだな！」

「和樹………」

和樹は僕から自分の顔が見えないよう、反対側へ逸らした。一つ  
のことがうまくいかない、周りの輪も駄目になっていく。…けど、  
その逆もあるってことなんだ。

昼休み。僕と和樹、啓太郎の3人は屋上で弁当を食べることにし  
た。

3人で談笑しながら弁当を食べていると、修哉がやってきた。

「おっ？いつものトリオじゃねえか」

制服のボタンを閉めず、ネクタイでさえ付けていないチャラ男。

なのに、全国模試1位である。

「あいつかわらず、態度わるそーな奴だな」

和樹は卵焼きをほおばりながら言った。

「和樹には言われたくねえけどな」

ハハツと修哉は笑った。たしかに、和樹もチャラ男みたいに見えるてしまう。ロンゲだし、茶髪だし、ピアスしてるし。

「おいおい、俺は生徒会員だぜ？ お前と一緒にすんなっつーの」

「あのね……修哉は全国模試1位だぞ？ 造りが違うんだって……」

啓太郎はため息混じりに言い放った。

「なにおう!？」

「……まあ、どつちもどつちだろ」

「空、聞こえてんだぞ?」

修哉はほくそ笑みながら言った。

「まあ何にせよ……元気そうなところを見ると、どつちやらうまくいったみたいだな」

「……………」

彼はこつちに歩み寄り、フェンスに背中をかけた。

「……なんにしても、お前と美香のおかげだから……」

それは、心底言える言葉だった。彼らのおかげで、自分の宝石を見つけることができた。

「ハハ、礼には及ばないよ」

照れ隠しの笑顔ではない笑顔を、修哉はして見せた。

「??? 何のことだよ?」

和樹は首を傾げていた。

「ああ……お前らは知らないのか」

「何の話だよ? 修哉」

「そこは……………」

修哉はチラッと僕を見た。その目が何を伝えようとしていたのか、僕はすぐにわかった。

「いいよ。和樹と啓太郎なら」

僕はうなずいた。

「おいおい、気持ちわりいな〜、お前ら」

和樹はふざけながら言った。気になってそわそわしている。

「実は、空……………」

その時、勢い良く屋上の出入り口の扉が開かれた。

「あつ！ 東先輩、やっぱりここにいたんですね！！」

元気な女子生徒の声。あれは、空と一緒にいた女の子…。

「ん？」

彼女の後ろに、誰かがいた。それは…………。

「…そ、空？」

その女子生徒に引つ張られる空の姿があった。彼女たちは、僕たちのまん前まで走って来た。なんか、空は彼女に無理矢理連れて来られたっぽいのだが…。それも、空の赤くなっている顔を見れば、一目瞭然だった。

「君は…たしか、『あずさ』……………っていう名前の女の子だったよーな…」

「覚えててくれたんですか？ ありがとうございますー！」

「いや、別に……………」

「！ 和樹先輩も一緒じゃないですか！」

「…相変わらず、うるさいやつだな〜」

和樹は呆れ顔だった。

「和樹、知り合い？」

啓太郎が訊ねた。

「…中学ん時の後輩」

和樹は頭をかきながら言った。なんだかめんどくさそうだ。

「へえ〜」

「和樹先輩ったら、高校に入学してから一度も話してくれないんですよ」

「学校で会わねえからだろ！ 1年と2年は校舎も違うし」

「会わないんじゃないやなくて、会おうとしてなかったんじゃないの？」

啓太郎はまた和樹をからかった。

「ちがっ！ ち、ちげえぞ！」

「あー、先輩赤くなってるー！」

…なんとまあ、けたたましいなあ…。

「つーか、空に用があつたんじゃないのよ！」

和樹は自分の話題から、元の話題に無理矢理戻した。

「あつ、そうだった。実はですね……」

なんつーか、転換も早いな…。

「恋人同士なんだから、空と東先輩と一緒に昼食したほうが良いと思つて」

「！……！」

「あ、あずさ……！」

空は彼女の口を塞ごうとしたが、無理だった。

「え………マジ？」

和樹は僕と空を交互に見ながら言った。

「………」

僕は顔を逸らした。

「ま、マジで……？？」

和樹は勢い良く立ち上がった。

「声がかいって」

啓太郎は和樹のシャツの袖を掴み、座らせた。

「うつそ！？ お前………ええ……！」

「さすが和樹、期待を裏切らない驚き方をするんだな。俺様感心」

修哉は笑っていた。

「空と………空ちゃんが……マジで……？」

「なんとなくこんなことだろうとは思ってたけど………本当にこんな

るとはねえ。いやはや、天晴れとしか言いよう無いな」

啓太郎は和樹とは対照的に落ち着いていた。

「やっぱり、空が悩んでたのは空ちゃんのことだったか」

「…気づいてたのか？」

「まあ……可能性の一つとしての話だけだね」

啓太郎はうなずきながら言った。

「それにしても、空ちゃんまっかつかだな」

修哉の言った瞬間、空は顔を両手で覆い隠した。

「や、やめてよ修哉君……」

「八八。ところで、なんか空に渡すもんでもあるんじゃないかねえの？」

「??？」

修哉がそう言うのと、空はギョツとしていた。

「ど、どうしてわかったの!？」

「だって、わざわざカバン持って来てるからさ。そうだな……ここ

はベターに弁当かな？」

「……!」

……そう言えば今朝、空は海と一緒に登校しなかった。僕は早起きして一緒に登校しようと思ったのだが、海が言うには寝坊したわけでもなく、ただ何かを作っているらしいということだったのだが……。

「その驚きよう、当たり前だな」

修哉はニヤツとした。

「弁当!?! マジかよー。うらやましすぎる……」

「ほら、ちゃんと渡さないと」

和樹の後輩というあずさちゃんは空の隣に行った。

「わ、わかってるよ……」

すると、空はおずおずしながら僕の目の前に来た。

「あ、あの……空……ここ、これ……」

彼女は自分のカバンから、カラフルな物に包まれた弁当箱を差し出した。女の子の弁当って、どうしてカラフルなんだろうか。

「…ありがとう」

僕は照れているのを何とか隠そうと、必死に平然とした顔をしようとしていた。たぶん、修哉にはばれてるんだろうな…。

「ほ、ホントは今朝渡したかったんだけど…その…」

「…どうせ、恥ずかしくて渡せなかったってことだろ？」

「だ…だって、いつも空は私たちより遅く行くと思ってたのに、海と一緒に引っちゃうから…」

すると、空はしゅんとした。

「お前なあ…メールでもくれりゃあ、いくらでも待っててやったつてのに」

「送れなかったの！」

「はあ？ 何だよそれ」

「まあまあ」

修哉が間に入って来た。

「空、もつと空ちゃんのこと考えてやれって」

「な、なんだよ……？」

「空ちゃんさ、きつと驚かしたかったんだよ。お前を」

「え？」

「弁当を作ったってこと、内緒にして渡したほうが喜びも倍増ってね」

修哉は僕のおでこを軽くはたいて笑った。

「だろ？」

「…え、えつと…その…」

再び、空は照れ始めた。その姿が、本当のことを知ったことと相まって、さらに愛おしく見えた。

「…そっか。悪かったな…理解できなくて」

「い、いいよ、謝らなくて」

「ありがたくいただくよ。…てか、ホントにうれしいや」

僕は彼女に微笑みかけた。

「…そう言ってくれて、私もうれしい……。作ってよかったって

「思えるから……」

「……空……」

空もまた、微笑んでくれた。

「おーい。観衆がいるの忘れてラブラブモードに入っただけじゃねーよ」

「……ホント、余計な観衆だよ……まったく」

僕が細い目つきで和樹を睨んでも、彼はニヤニヤしていた。

「さて、本題に入ろうか」

なぜか和樹は本腰を入れていた。嫌な予感がしなくも……ない。

「空ちゃん、単刀直入に訊く」

「は、はい」

真面目な和樹の目に、空はなぜか姿勢を正した。こいつ、何訊くつもりだ？

「空のどこが好きなの？」

「えっ？」

僕はその言葉が出た瞬間、和樹の後頭部をひっぱたいた。

「!!!？ い、いてえな！」

「何訊いてんだよ！ お前は！」

「いいじゃねえか。これこそ、ラブコメにとって重要な話題の一つ……」

「あのなあ!!」

「でも、ぶつちやけどこが好きなの？」

啓太郎が隙に訊ねていた。

「え、えっと……それは……」

「！ ば、馬鹿！ 正直に答えなくていいんだよ！」

僕は大きな声で空の言葉をかき消した。

「いいじゃねえか、別にさ」

「修哉！ 人事だと思って！」

「だあーって、人事だもんよ」

僕は修哉に掴みかかった。修哉は笑って、相手にしなかった。

「……空は、私にとって一番頼りになる人だから……」

すると、空はほんの少し照れながら言い放った。

「……え？（言うの？）」

「苦しい時、悲しい時、辛い時……そして、死ぬほど嫌な時、傍にいて励ましてくれてたのは、空なんです」

僕たちは彼女の言葉に聞き入っていた。なぜだろう……。

「……私に光をもたらしてくれるのが、空……。だから……」

しばしの間、沈黙が流れた。流れていたのは、青空を飛ぶ飛行機の彼方に響く音だった。誰もが、彼女から目を逸らすことはなかった。風になびかれる彼女の姿は、何よりも美しかったのだから。

「……こりゃ、何人も告白するわな。今ので、納得した」

和樹が沈黙を破った。

「見た目だけで、多くの人に好かれることはないからね。たとえ、女優であっても」

啓太郎が続いた。

「私じゃあ適わないな、絶対」

「そりゃそうだよ」

「！先輩！！」

すると、あずさちゃんや和樹の長い髪の毛を引っ張り始めた。

「いてっ！ いてえって！！ 抜けるだろ！！？」

「ハハハ」

僕たちは思わず笑ってしまった。

なんだから、幸せだった。

こうやってみんなと笑いあって、大好きな人と一緒にいて……。

とても普通で、平凡だけど、これがどれほど幸せなことだろうか。

修哉はフェンスに背中を預けながら僕たちを見ていた。微笑まし

いなあと思っているのだろう。けど……なぜか……なぜかわからないけど……この時、修哉がとても遠い場所から僕たちを見ていたよ  
うな気がしたんだ。

言い表せることのできない不安。……杞憂？ わからない。  
それから数分後には、そんなものは消え失せてしまった。

「……そろそろ『時』は来る……か」

遙か遠く、ビルの屋上からある男が佇んでいた。

「もうしばらく、夢を見させてやるつか……」

異国の服を纏った男は、上空を見上げた。

「……今一時の夢を堪能するがいい……」

……セヴェス……

「今日は生徒会の集まりがあるから、先に帰っててもいいぞ」  
「……………」

非常階段。ここなら、誰も来ないはず。

「んじゃ、そろそろ教室に戻るか」

僕は階段を上ろうとした。

「あっ………そ、空……」

「？ どうした？」

「……………」

どうしてか、空は子供のように何かを言いたげそうだった。

「……その………待ってても……いい？」

彼女は機嫌を伺うかのように僕を見た。まるで悪さをした小学生

みたいで、少し笑ってしまいそうだった。

僕は微笑んだ。

「まあ……遅くなくてもいいならいいけど」

「ホント!? じゃあ、どこで待ってればいい?」

空の顔はパアツと笑顔になった。なんだか、こっちが照れてしま  
いそうだ。

「……うーん……じゃあ、新校舎の南出入口にある、自販機の所で  
待っていてくれ。なるだけ、早く済ませるようにするから」

「うん! じゃあ私、先に教室に戻るね」

そう言って、空は階段を走って上り始めた。途中、立ち止まって  
僕に笑顔で手を振った。僕もそれに応えた。

階段を上っていく彼女の足音。時間が経っていくのがわかる。

「……………」

なんだか、気味の悪い沈黙が流れた。夜でもないのに、真夜中の  
細い山道のような雰囲気漂っている。

セヴェス

その時、あの頭痛が電流のように走った。

「くっ……………!」

僕はその場にうずくまった。

遥かなる遠い契約

男性の声が…聞こえる…。

我を繋ぐ黒き楔

今までにないほど、はっきりと聞こえる。それでいて、神秘的だ  
った。耳に聞こえてくるのではない。僕の心に語りかけてくるかの

ように聞こえるのだ。

解き放て

うるさい…！

お前は俺

うるさい！ 僕は…僕だ！ それ以外の、何者でもない！！

うるたえし幼子の魂

虚空の果てに消える悔恨と悲愴の叫び

なんだ…？ 体が…熱く…

神々の時代より続く輪廻の宿命

輪廻…？ 神々…？ 宿命…？

我を……き……て…

脳の奥を襲う痛みが、一瞬にして消え去った。

「……………今のは……………」

なぜだろう…。今までの声と同じなのに、雰囲気は違っていた。

なんというか……そう、『暗闇』……という感じだった。何かを、  
渴望しているかのような声だった。

…イニシエカラノノゾミ、タツベキモノ…

その時、僕の目の前にある風景が広がった。それは、今まで見た

ことのない風景だった。この世に存在しているのかどうかもわからない風景だった。

不思議な光景だ。

四方が青空に囲まれている空間。右も左も、上も下も、全て空の青と雲の白で塗りつぶされている。遙か彼方に、海との蒼い境界線が見える。

その空間の中央に、空色に輝く何かがある。

あれは……巨大な水晶……？

ゆっくりと横回転しているそれは、僕の瞳に青い光を飛ばしてくる。チカチカと発光しているその様は、神々しさを放っているようだった。

巨大な水晶……その先に見える、記憶の断片……。

これは……

### 創造と破壊の象徴

「……っつー!!」

煌いた刹那の光と共に、僕が見る世界は元に戻った。

非常階段の下。ほんの少し、ほこり臭い。

「……創造と……破壊……？」

今までのような頭痛がするわけでもなく、幻聴が聴こえるわけでもなく……。ただ、僕の意識はどこか知らない遠くへ行っていた。

「……………」

知らない場所……。

どうして、僕はそんな光景をこの体に刻んでいるのだろう。もしかしたら、僕が生まれるずっと昔……前世の僕が見ていた「世界」なのかもしれない。

今となっては、知る術なんてないけれど。

7時10分前。ようやく生徒会の集まりが終わった。そろそろ生徒総会があるということで、議論すべきものがたくさんあったのだ。ながったるい今年度支出なんとかつてのを読んだり、話し合ったりと……まったく、どうしてこんなめんどくさいものに入ってしまったんだろう。

この季節になると、7時でもほんのりと明るい。とは言っても、8割暗いのだが、真っ暗よりはましだろう。

新校舎というのは現在の1年生がいる校舎のことで、5年前に建てられたものだ。だから、新校舎つて未だに呼ぶのもどうかと思う。カバンを担ぎ、南出入り口の自販機前に行った。暗くて人がいるのかどうかわからなかったのだが、実際に行ってみると本当に誰もいない。

「……………？」

空がいるはずなのに、いない。待つてると言ったのに……。

僕は辺りを見渡した。暗がりの中にぼつぼつと光る電灯に群がる虫。人気のないグラウンド。聞こえてくるのはどこかの車の走る音。嫌な予感がする。まさか、あいつ……………！

急激に不安になった時、何かが僕に触れた。僕は声も上げず、サツと後ろに振り向いた。

「そ……………空！？」

そこにいたのは、空だった。

「びっくりした？」

「あ、あのな……………」

ふざけて微笑む彼女。それを見て、ホツとした。安心した様子を理解されないよう、びっくりしたような表情をして見せた。

「まったく、いつになく悪ガキになってんだから……」

「悪ガキとは何よー！ あと4ヶ月で16歳なんだから！」

「はいはい。もう帰るぞ」

僕はそっぽを向いて歩き始めた。

「あ！ ま、待つてよー」

と、空は慌てながら僕を追いかけてきた。そうなるということが、最初から予想できていた。

後ろから来た空は、僕の腕に手を回した。

「こっやって帰ろ」

思わず、ドキッとしてしまった。女性とこんな風にしたことがないので、心拍数が否応にも上昇してしまう。まったく……困ったもんだ……。

僕たちは帰り道、あの公園に寄り、ベンチで談笑した。自宅に帰るとどうしても二人で落ち着いて話すことができないからだ。

「……それでね、あずさつてば大笑いしちゃって」

「あの子はけたたましいからなあ。僕が見てきた女の子の中で、一番だよ」

「あ、ひどーい。でも、たしかにそうだけどね。……あれ？」

「ん？ どうした？」

空は自分のポケットに手を突っ込んだ。

「携帯が鳴ってる。……あっ、海だ」

空は僕をチラッと見た。

「出なよ。たぶん、心配してんだよ」

「う、うん……。……もしもし」

空は不安そうな面持ちで電話に出た。僕はこの時、あることを思い出した。忘れていたわけではないが、あまり考えたくなかったことだ。できれば、何もなまま過ぎればいいと思っていた。……けど、必ずどうにかしておかないといけない問題だった。

「……うん……ちょっと用事があつて……。……うん……。……うん……。……大丈夫

……。……えっ？ そ、そうなの？……。……うん、わかった……。……

うん、じゃあね

「なんだって？」

あまり気にしていない風に訊ねた。本当は、かなり気になっている。

「…どこにいるのかだって。空の予想通り」

「そっか。…あのさ」

「…?」

僕は、今はの際に思い出したことを言った。

「…海は知らないのか?」

「……………」

空は何も言わず、小さく顔を振った。

「やっぱり、な…」

「ご、ごめんなさい。なかなか、言い出せなくて……………」

空は顔を沈めた。僕はそれを慰めるように、言った。

「お前は悪くないよ。僕がお前、どちらが言ってもいいんだが……………」

いや、二人で言ったほうが良いかもしれぬ

「でも……………やっぱり……………」

「…ともかく、早めに言っておいたほうが良い。あいつに隠し事をしておくのは、なんだか気分が良いもんじゃないしな……………」

「…うん…そうだね…」

空はどこか哀しそうだった。その理由が、今の僕は理解することはできなかった。

「ところで、帰って?」

「へっ? あ、うん。もう暗いから、帰って来いって。……………なぜか、

空の家に」

「…はっ?」

僕は頭をかしげた。なぜ僕の家…?

「いつもの晩御飯だって」

「ああ……………なるほど」

いつもの晩御飯。日向家と東家と一緒に食事をするということだ。外食するわけでもなく、自宅で一緒にするのだ。ちなみに、日向宅とうち、交互に行く。

「じゃ、帰るか。あまり遅れると、母さんたちうるさいし」

「そ、そうだね」

なぜか、空はうれしくなさそうだった。一緒の晩御飯の時、空と海はいつもうれしそうなのに。

「…？ どうした？」

「…その………まだ、空と二人っきりでいたくて………」

「……………」

少しほほを赤くしている空。僕まで赤くなってしまいそうだった。

僕は照れ隠しに頭をかいた。

「…そ、そっか」

「帰ったら、二人だけでいるなんて絶対に無理だしさ………」

「…まあ、そうだけど………」

僕もまだいたい………と言ってあげればいいのだろうけど、なんだかそこまで言う勇気がなかった。告白する時、あれだけ恥ずかしい台詞を簡単に言えたつてのに。…真面目に考えれば、そこまで恥ずかしい台詞でもないのだが。

「…みんな心配するから、帰ろう」

「……………」

「…それに、これから二人っきりになれないわけでもないんだから。なっ？」

「……………うん。わかった……………」

「ほら」

僕は彼女の手を握り、立ち上がった。

「せめて、家の前までこうして置いてあげるからさ」

「…空………」

家に帰ると、おじさんが出迎えた。

「一緒だったのか？」と言われて、とりあえず

「帰る時、ばったり会ってね」

おどおどしていた空に代わって、そう答えた。かなりありがちな嘘だが……。

今日はどうやら、1ヶ月遅れの空と海の入学祝、ということらしい。今更じゃねえかと文句を言つと、母さんに頭をひっぱたかれてしまった。

「今日の料理、誰が作ったと思う？」

いつものように談笑しながら食べていると、おばさんが言った。

「？ いつもどおり、母さんとおじさんだろ？」

「ふふ、今日は違うのよ」

「まさか……父さんじゃあるまいし……」

僕は思いつきり嫌な顔をした。

「おいおい、なんだその顔は。誰も俺が作ったって言ってないじゃないか」

「……焦った」

「おいおい……」

父さんの料理は地獄である。本当に。死に掛けたといつても大袈裟ではない……気がしなくもない。

「実は、海なんだよ」

おじさんがビールを飲みながら言った。程よい感じに顔が赤くなっている。

「海？ おいおい、嘘だろ？」

「嘘じゃないわよ！ ちゃんと作ったもん！」

海は大きな声で言った。

「りよ、料理が苦手なお前があ！？」

驚かすにはいられなかった。だって、海はなぜか空と違い、料理が苦手なのだ。前にも言ったが、彼女はしないのである。空はよくうちで料理していたので、今日くれた弁当はもちろんのごとく上手だった。さらには好みのものまで把握しているのだ。

「い、いいでしょ！ たまには！」

「はあくなるほどねえ……。どういう風の吹き回しだ？」

「あんたね、そういうこと言っくんじゃないの」

「そーだそーだ」

母さんと父さんは良く意見が合う。というより、人を否定する時は結託しやがる。質が悪いっつもの。

「だってさ、海はあんまり経験ないんじゃない……」

「でも、おいしいよ?」

空は微笑んでいた。たしかに、不味くはない。むしろ、おいしかった。味付けもおじさん仕込みだし、それに……このから揚げの味付け……母さんのそれと同じだった。

「私だって女なんだから、それくらいやるってんだ」と、海はふんぞり返っていた。

「なるほど……。海、作るの初めてだろ?」

「え? う、うん。たぶん……」

「きつと教えてもらいながら作ったんだろっけど……初めてにしては、上手だよ。むしろ、それ以上かもな」

「……………へっ……?」

海は何度も瞬きをして、それ以外の動きがなくなっていた。

「ん? どした?」

「……な、なんでもない!」

「海ったら照れちゃって」

おばさんはうれしそうに笑っていた。

「や、やだ! お母さん、変なこと言わないでよ!」

「うれしいなら、うれしいって言えよ。別に不味くないし。おいしいと思うけどな」

僕はから揚げを食べながら言った。

「や、やだ! なんか……その……」

海の照れる様子、ホント空そっくりだ。今更ながら、おもしろく思える。

「もう! 恥ずかしいじゃない! 馬鹿!」

「んだよ、褒めてやってんのに。これじゃあ、9月の誕生日プレゼントはお預けだな」

「ふんだ。そんなのいらないもん」

「んなこと言って、欲しいくせに」

「う……うっさい！ 馬鹿空！！」

「その台詞、聞き飽きたっつての」

すると、他のみんなは笑った。

「さて、もう一度乾杯するか」

「またかよ……」

「空、今日は飲んでも怒らんぞ？」

父さんは僕に酒を勧めてきた。

「いや、飲まないし。てか、未成年の息子に酒を勧める父親ってどうだよ……」

「ハハハ、気にするな」

「あのね……」

酔っ払い始めているわが父親。情けなさ過ぎる……。

「ともかく、2度目のかんぱーい！」

「明日仕事だろーに……」

10時を過ぎた頃。おじさんとお父さんは酔い潰れてソファで寝始め、母さんとおばさんはおしゃべりが続いていた。

「まったく……なんで……僕が……こんな……」

海まで酒を飲んでしまい、泥酔してしまったのだ。そして、リビングで寝させるわけにはいかないので、僕は海を背負って階段を上っていた。それにしても、海は軽い。女性ってこんなに軽いもんなんだな。……ということは、双子である空はほぼ同じくらいの体重なんだろうな。……訊くわけにはいかないけど……。

ようやく自分の部屋に辿り着き、海をベッドに置いた。ほほを赤くし、気持ちよさそうに寝息を立てる彼女の顔は、やっぱり双子だなあと感じた。

けど、同じじゃない。

「海ってば、明日大丈夫かな……」

空は海の口に引つかかった髪の毛を取りながら言った。

「まあ、飲んだって言ってもほんの2杯程度だろ？ 気にするほどのものでもないよ」

「お酒の匂いでほろ酔いするのに…」

「？ そうだったのか？」

「うん。私も、ちょっとほてってるんだけどね。双子だしさ」

そう言っつて、彼女は自分のほほを指差した。なるほど、ほんのりとピンク色に染まっている。

「……どうする？」

「ん？」

「帰らなくていいのか？」

「…今日、お父さんもお母さんも泊まるつもりらしいの」

「泊まるも何も、自宅は目の前なんだが」

それに、おじさんと海はすでに寝ちゃってるし。

「お前は？」

「……えっと……」

空は海をチラッと見て、小さな声で言った。

「…泊まっても……いいの？」

「別にいいんじゃないの？ 一人で家にいるよりかはましだろ」

「そ、そうだね。……でも、どこで寝れば……」

「この部屋で寝な。布団はクローゼットの中にあるし」

「でも、そうしたら空は……？」

「ベッドは海が占領しちまつてるし、僕はリビングに布団でも敷いて寝るよ」

さすがに、若い女二人がいるこの部屋で寝るわけにはいかない。それは常識だ。

「いいの？」

「気にすんなって。どうせ明日は休みだしな」

明日は待ちに待った日曜日。今週は6日も学校に行っ……てないか。休んだな、そういえば。

「とりあえず、風呂に行つてこいよ。着替えとかあるのか？」

「あ……ない……。取りに行かなきゃ」

「……一緒に行こうか？」

「え？ だ、大丈夫だよ」

「そっか。じゃあ、海のも持ってきてあげろよ」

「うん、わかった」

そう言つて、彼女は立ち上がり、部屋を出た。その時、僕の奥になんとも言えない感情が沸き立った。部屋を出た彼女を追い、階段の手前で彼女の手首を掴んだ。

「空、待てよ」

彼女は驚いていた。無理もない。

「……駄目だな」

「……え？」

「僕のほうが、お前と一緒にいたいと思つちまつてる」

「……空……」

彼女と一緒にいたい。それだけだった。

「明日、一緒にどこか行くか？」

「ほ……ホント？」

「ああ」

空の顔は、花が咲いたかのようだった。

「服でも買いに行こうぜ」

「うん！ また、弁当作るね」

「……」

「？ どうしたの？」

「いや……ちよつと……なんか、うれしくなつてな」

僕は思わずニヤツとした自分の口元を手で隠した。

すると、空は僕に抱きつき、キスをした。一瞬の出来事で、彼女はすぐに唇を離れた。

「……」

「…いきなり、したくなちゃった」

「あ、あのな…」

僕は彼女から顔を逸らした。

「…なんで、キスされた僕のほうが照れてんだ？」

「ふふ。空、なんだかかわいい」

なんだか、彼女はいたずら好きになっていくかのようだった。それが、さらにかわいらしかった。

「じゃあ、行くね」

「…ああ」

空はなるべく音を立てないように、静かに階段を下りて行った。

「………」

僕はちよつとキスの余韻に浸り、部屋に戻った。

部屋に入った瞬間、僕の心は凍った。

海が、僕を見ていた。目をしっかりと開け、心なしか睨んでいるように見える。

「…海、目が覚めたのか？」

まさか…キスするところを見られたのか？ さっき、ドアを閉めていなかったから…。それとも、話していたことが聞こえて…？

「今日、そこで寝ていいから。僕は下で」

「なんで？」

海は小さく、はつきりとした声で言った。

「…え？」

「なんで…？」

「…な、何が？」

「ねえ、なんで？」

海は同じことしか言わなかった。

「なんで……………お姉ちゃんと……………キスしたの？」

その言葉が放たれた瞬間、僕の心臓が凍りついた。呼吸が止まったかのようだった。血の気が引くとは、このことだ。

「ねえ、なんでキスしたの？」

「う、海……………」

「ねえ、どうして!？」

突然、海は声を荒げた。さっきまで、凍りついた冬のように静かで、小さな声だったのに。

「どうしてお姉ちゃんとキスしたの!？　ねえ、どうして!?!？」

「…そ、それは……………」

僕は何を言えばいいのかわからなかった。本当にパニックに陥っている。混乱している。何を言っても、駄目な気がするのだ。

「空……………お姉ちゃんのこと……………好きなの？」

「…え?？」

最初と同じくらいの、静かで小さな声に戻った。

「空は……………お姉ちゃんが好きな……………?？」

「……………」

「答えてよ!！」

その言葉と同時に、海は立ち上がった。その瞳には、涙が浮かんでいる。それに気がついた時、僕の心は大きく揺さぶられた。

「ねえ、どうなの!？　答えてよ!?!！」

海は僕のほうに駆けて来た。服を掴み、懇願するかのよう言い始めた。

「どうして何も言わないの?　どうして答えようとしなの!?!？」

「ねえ、どうしてよ!?!！」

「う、海……………僕は……………」

言葉が見つからない。はっきりと言ったほうが良いのだろうか。

けど、この様子だと、それでは火に油を注ぐだけのような気がする。何もかも、駄目なような気がする。

「何とか言つてよ！ ねえ！！」

海はそう言いながら、僕を揺らす。

「ねえ！ 何とか言つてよ！ ちゃんと言つてよ！ ねえ……ちやんと……答えて……よ……」

そして、彼女は崩れていった。その姿を見ながら、僕はかける言葉が見つからなかった。慰める言葉では、傷つけてしまう。そう、僕の脳が言っている。

「……海……」

すすり泣く彼女。ただ、彼女の名前を呼ぶしかなかった。

「空、おばさんが……」

その時、空が戻って来た。

「！！ 海、どうしたの！？」

事情がわかっていない空は、海に駆け寄った。そして……。  
「触らないで！！」

「！！！！」

乾いた音が響いた。海は、空が差し伸べた手を跳ね除けたのだ。

「海……？」

空は何もわかっていないようだった。海は立ち上がり、泣きながら言い始めた。

「……私……私……！！」

「私だって、空のことが好きなんだから！！」

海はそう叫び、部屋から飛び出した。彼女が音を立てて階段を下

りてゆくのがわかる。玄関のドアを閉める音が、家に響き渡った。

「……う、み……」

彼女が出て行った後の静寂が、僕の心に突き刺さる。

「？ 空 。どーしたのー??」

1階から母さんの声が聞こえる。

「今出て行ったの、空？ 海？」

おばさんの声も聞こえる。

「……… なんて………?」

なんで、こつもつまくいかないのだろう。

噛み合わせぬ歯車。

噛み合わせぬ僕たち。

どうして、うまく紐を解くことができないのだろうか……。

## 6章…ついでにめくもの 定められた運命の理

「海はね……私と同じで、空のことが一番好きだったの……」

部屋に取り残された僕たちは、母さんやおばさんたちに適当に言い訳を作って、ただ呆然と座っていた。

「海、言ってた。泣き虫だったちっちゃい頃、慰めてくれる空が好きだった。どんな時でも、励ましてくれる空が大好きだった……」

「……」  
僕は何も言うことはできなかった。そんなこと、想像の範囲を超えていたんだ。

「……海のやつ、お前に言ってたのか？」

「中学生の頃に、ね。……けど……」

空の声が、小さく震えているのがわかった。

「けど、本当はうんと昔から気づいてたの……海の好きな人は、空だって……」

「……」  
「やっぱり、双子だからわかつちやうのかな……」

空は小さく微笑んだ。しかし、程なくして彼女のほほに、一筋の涙がこぼれた。

「……なのに……私、あの子の気持ちを知ってたのに……自分の気持ち……」  
「……」

「……私、お姉ちゃんなのに……海を裏切ったんだ……！」

そう言って、空は泣き崩れた。とめどなく溢れる涙。それを止める術を、僕は探しても探しても、見つけることができなかった。

「最低だ……私……！ 自分のことばかり考えて……」

「何言ってるんだ。おまえは悪くない。お前は……」

「違う！ 私が……ちゃんと話をしなかったから……！」

「……過ぎたことを言うのは止せ」

僕は彼女を抱きしめた。小さな体だな、ホント……。簡単に包み込むことができる。

「……これは、あいつが乗り越えなきゃならないことなんだ」

「乗り越える……？」

僕の腕の中で、空はか弱げな声で言った。今にも消え去りそうな声だった。

「……現実を見なければならぬんだ。僕は、あいつの気持ちに配慮することができない。……僕はお前が好きだから」

「……」

「僕はあいつを幼馴染……大切な親友以上とは考えられないんだ」

「でも……私と海は……双子だよ……？」

僕は顔を振った。

「……だからなんだってんだ？ 同じだって言うのか？ それこそ違う。双子だからって同じというわけじゃない。人は人。個人は個人。……たとえ外見は同じでも、中身はまったく違う。お前たちが考えることの全てが、同じであることはない」

僕は空のほほに触れ、涙を取った。人肌と同じくらいの温度の水。それが、涙だ。

「……それを踏まえた上で、僕はお前が好きなんだ。外見が同じでも、僕はお前が好きなんだ。誰でもない、日向空であるお前が……」

僕を見つめる二つの宝石が、小さく震えている。

「空………う……う……わあ……あ……！」

空は僕を強く抱きしめ、泣いた。なるべく声を押し殺して。

「……出てこない」

空は頭を振った。予想通りのことだった。

一夜明け、僕たちは何度も声をかけるが、海は一度も部屋から出

てこなかった。空の部屋でもあるのだが、鍵を閉めてしまっていて彼女でさえ入ることが適わない。

「そうか…。扉越しに声をかけても……………」

僕がそう言うと、空はうなずいた。彼女は何度も問いかけてみたらしいが、返答はなかったという。

「いったい、どうしちゃったの？ 昨日はあんなに元気だったのに……………」

おばさんは、頭を抱えていた。

「……………」

「高校生だから…。ちょっとしたこと、敏感に反応してしまう年頃だ。今は、そっとしておいたほうが良いだろう」

おじさんはおばさんを慰めるように言った。

「……………そうかしら……………」

「大丈夫。それに、空君もいるわけだしな」

突然笑顔を向けられ、僕は焦った。

「……………そうよね。いつだって、空君がいてくれたおかげで海も……………空も立ち直れたことが多々あったものね」

「……………」

そうやって期待されると、引きつった笑顔しかできない。偽りの微笑でしか、二人を安心させることができなかったのだ。

「……………どうすればいいのかな……………」

とりあえず、空は海が出てくるまでの間、僕の部屋にいることにした。

「……………声をかけても、何を言っても駄目だしな……………」

「……………」

空は顔を沈めていた。僕は彼女が何を考えているのか悟った。

「お前……………まだ自分が悪いって思ってたのか？」

「……………」

「……………やっぱり。どうしてそう考えちゃうかな。」

「自虐的になるのもいい加減にしろよ。誰も悪くないって言ったろ」「でも……やっぱり、私が先に言ったから……」

「だから、関係ないって」  
まったく、どうして空はそういう考え方をするんだろう。誰かのせいにしてしようとしないことはいいと思う。けど、だからって自分に責任があると自虐的になるのはどうかと思う。自分が犠牲となって、他人の罪を軽くしようとする。

そんな彼女だから、好きなのだ。

「……もし」

「………?」

「もしも………海が、私より先に告白してたら………どうだった?」

「……はっ?」

予想外の質問だった。不意を突かれたようなものだ。

「ねえ、もし………もしも海が私より先に告白してたら、どうだった?」

空は顔を上げ、悲痛な顔で言った。

「そうだったら、受け入れてた? 私じゃなく、海を………」

今にも泣きそうな顔で、空は続ける。続けるほど、僕の中にあるものが膨らんでいった。

やめてくれ。それ以上、言わないでくれ。

大好きなお前から、そんなこと……

「ねえ? どう」

パンッ

乾いた音。空の髪の毛が、彼女の頭の動きと共に流れる。

「……!」

僕は、空のほほをひっぱたいた。

「お前………いい加減にしろよ!!」

空は叩かれた自分の右ほほを押さえながら、ビクツと反応した。

「そんなに僕が信用できないか！」

「……！」

「そんなに…僕がお前のことが好きって言うことが信じられないのか！」

僕は言葉を荒くした。湧き上がる彼女に対する怒りと、信じてもらえない悔しさが同時に昇ってくる。

「最初に告白されたから、好きって言ったって思ってたのか？ 僕が言っていたことは、全部嘘だと思っていたのか！？ 僕が言ったことを、信じちやいなかったのかよ！！？」

「ち、ちが」

「何が違ってたんだ！ そうだろ？ そうじゃなきゃ、さっきみたいな馬鹿な質問なんてしねえんだよ！」

「そ、空……」

空の瞳に涙が浮かんでいた。

「泣きたきゃ勝手に泣けよ！ ……お前のそういうくだらない茶番に、付き合ってる余裕はねえんだ！！！」

「う……う……」

空は僕を見ながら涙を流し始めた。だからって、僕は「ごめん」などの台詞を言うつもりはない。今は、空が許せない。

「勝手に責任感じて、勝手に勘違いしてるよ！」

僕は立ち上がり、部屋を出ようとした。

「！ ま、待って……」

「うるさい！ 付いて来んな！！！」

「そ、空…ごめ」

僕はドアを閉め、彼女の言葉を遮断した。

大きな音を立てながら、僕は階段を下りた。そして考えもなしに靴を履くと……。

「空、どこに行くのよ？」

後ろへ振り向くと、母さんがリビングから顔だけをヒョコツと出していた。

「…別に、ちよつと気分転換だよ」

「空ちゃんを一人にしなさんな。かわいいそうだろ？」

「…じゃあ、僕が全部受け入れなきゃならないってのか？ 冗談じやねえんだよ！！」

僕は外へ出て、早歩きでどこかに行くわけでもなく、進んだ。

「……………」

「…ん？ 空のやつ、何大声出してるんだ？」

「…あんた、能天気ねえ。心配じゃないの？」

「心配…ねえ…」

空の父は頬杖をつき、考えた。

「…空ちゃんと海ちゃんは心配だが…空は大丈夫だろ」

「？ なんでよ？」

父はフツと笑った。

「そりゃ、信頼してるからさ。親として」

「……………」

「それに、あいつは俺たちが思っている以上に大人だからな。まだ未熟かもしれないが、未熟なりに良く考える子だ。あいつがいるから、空ちゃんや海ちゃんは笑ってられると思うがな」

「…なるほど。けど、空はまだ高校生だよ？ あの歳で、一番敏感な年頃の女の子二人ってのは、ちよつとあれなんじゃあ……………」

「そこは、信じようじゃないか。俺たちが口を出してはならない、あの子達だけのテリトリ！。あの子たちだけの世界なんだからさ」

僕は行く当てもないのに、ただ白いコンクリートで塗りつぶされた道路を歩いていて。イライラとしている自分の脳みそがわかる。

「……くそっ……！」

思わず、その言葉を放ってしまった。

……どうしよう。これから、どこに行こう。

ちよつと頭を冷やすために、ゆっくりと一人で考えられる場所はないだろうか。……空が悪いにしても、あそこまで言う必要はなかったかもしれない。そう考えてしまう自分が甘いと思いつつ、大好きなあいつに言葉をぶつけたという罪悪感がある。自分が間違っていたとは思わないが、それでももうちよつと言いくるめて言うことができたんじゃないだろうか。もう少し考えていけば、あまり彼女を傷つけずに言葉を伝えられたんじゃないだろうか。

きつと、あいつは泣いている。嫌われたとかつて、考えてる。今すぐにも電話して「ごめん」と言いたい。けど、言いたくない。それでは、彼女たちに甘くないなっていきそうだから。

僕はなぜか、学校へ行った。日曜日なので誰もいない。

塀をよじ登り、屋上へ向かった。あそこが一番落ち着く場所だ。

風が良く通るし、なんとたつて空が近く感じる。自分の名前のとおり、僕は空を見るのが好きだ。ただボケーッと眺めているだけで、日が暮れてしまいそうになったことだってある。それほど、見ていて飽きないのだ。

「……ふう……」

僕は屋上で大の字になった。

今日も晴れ。一昨日雨が降ったが、ここ最近晴れの日が多い。五月晴れってやつだろうか。五月って書いてあるから、たぶんそうなんだろうな。

雲の一つ一つが、わたあめのように見える。ふわふわと漂って、風に流されるまま流されて、最終的に消えてしまふ。

…考えてみれば、雲って「夢」みたいなイメージがある。ふとした瞬間、もしくは積もりに積もって「夢」…雲となり、流れる。そして、ほどけていき、溶けていき…消える。それは、儂い。夢は儂く、人もまた愛おしいほどに儂い。そういうもんな感じがする。痛みを伴うことが、最近多い。もちろん肉体的なこともあるが、精神的なことにしてもそうだ。空に告白されて、関係がこじれそうになって不安になって、怖くなって…。うまくいったと思ったら、今度はもう一人の大切な人との関係がこじれて…。

修復できそうで、きつとできない。もう、小学生の頃や中学生の頃のようになることはない。それはわかってる。あいつらだって、それがわかってるはずだ。

だからこそ、「平凡」という殻を打ち破ろうとしたんだ。…空も、海も…。

…一番嫌だったのは、僕だったのかもしれない。今までいた世界が、あまりにも心地よすぎたからだろう。あいつらと一緒にいると、心が平和だった。世界が狂っても、僕たちは平和な気がした。

けど、変わらないものなんて存在しない。

修哉が言っていた。そう、変わらないものなんてない。すべて、変わる。恐れているも、嫌でも、すべて変化していく。世界が回るように、僕たちが見る世界もまた回っていくのだから。

ブオオオオオオオ

蒼穹の彼方に響く飛行機の音。小さな小さな物体の軌跡に、白い飛行機雲が後を追うかのようにできていく。青いキャンパスの上に、白い絵の具を伸ばしただけのようにも見える。

なんか、こうしていると今までであったことが嘘のようだ。空と両想いになったことも、海が僕のこと好きだったということも。

日曜日の昏前ほど、平穏なものはないな。  
はあ……眠くなってきた……。このまま、ちょっと寝てしまおうかな……。

「……ここあたり……そう、ここだ」

誰かが……僕に言っている……。聞いたことのない、誰かの声……なるほど……この部位を変異させるのか？」

僕……じゃない……？ 誰だろう……？

「そうだ。分子レベルにまで内部に入れ込めるようになれば、構造上の変異は可能だろう」

「ふむ……だが、これでは細胞同士の結合崩壊を引き起こしかねんな……」

「それを起こさないようにするのが、あれの役目だ」  
赤い長髪の男性は、何かを見上げていた。

「染色体そのものを、あれがはじき出したデータ情報に置換することができれば、こんな回りくどい方法など取らずにすんだのだがな……」

「致し方あるまい……。評議会がそれを許すはずがないし、今のあれの状態では予測がつかないからな」

「……まあ、な。とりあえずは次の実験だな……」

「……次回の実験を乗り越え、正確なデータが出れば…… 創世計画 はいっそう楽になる。そうなれば、評議会の老人どもも納得するだろうさ……」

たくさんの機械が置かれた不思議な場所で、二人の男性は話していた。夢のような霧が広がる中で、たしかにその人たちは存在していた。

……遠い、遠い遙か彼方に消えたけれど……

葬られた文明

忘れ去られた歴史

黄昏の歌声

凍てついた焔

穢れなき暁の天使

失われた星の遺産

全てが始まりし時より、全ての終わりを告げし万物の源

何かが鳴ってる。

これは、僕の携帯だ。しかも、電話。

僕はポケットに突っ込んであった携帯をのっそりと取り出し、着信が誰なのかも確認せず、眠たげにボタンを押した。

「……もしもし……」

「……空？」

「…………？」

この声は……空……海……？僕は携帯から耳を離し、名前を見た。しかし、すでに名前は表示されていなかった。

「……なんか用？」

とりあえず、どちらにでも対応できるような言葉たごんを言ってみた。

「あの……今、どこにいるの……？」

このよそよそしい感じは…空だな。わかりやすいというか、なん  
というか。

「…学校」

「学校？ ……今日、休みじゃ……」

「で？ 何の用？」

僕は突っ放したようなことを言った。空を思い出すと、さっきま  
でのイライラが沸々と湧き上がってきたのだ。

「その……あの……」

「言いたいことがあるんなら、はっきり言えよ」

彼女のこういうところが、唯一嫌なところかもしれない。こうい  
う時に限って、空ははっきりと言わない。

「ご、ごめん……。その………会いたくて……」

「……………」

電話の向こうから聞こえる彼女の声は、弱々しかった。

「……空？」

「……屋上」

プツ

僕は一方的に切ってやった。子供じみているかもしれない。けど、  
たまには懲らしめてやったほうがいいんだ。…けど、さすがにちょ  
っとかわいそうな気がしてきた。もし、ここにやって来たら、優し  
い言葉の一つや二つ、かけてあげようかな…。

あの夢。不思議な夢だった。それでいて、とてモリアリテイのあ  
る夢だった。

たぶん、この世界よりもずっと進歩している世界だったのだろう。  
見たことのない機械が並んでいた。透き通るほどきれいな壁と床。  
大理石やコンクリートの類のものではないような気がする。それに、  
夢に出ていた2人の男性の服装も、この世界のものとは到底思えな  
いようなものだった。もしかしたら存在するのかもしれないが、な

ぜか存在しないものと思えた。はっきりとした確証はないが、何か  
がそう告げている。

所詮夢ではあるが、僕の脳裏にはっきりと刻まれていた。たいし  
たことのない夢にしても、心に残るような夢にしても、夢は夢。も  
のの数日で空虚なものへと変化していく。そして、完全に思い出す  
ことができなくなる。

だけど、今回見た夢はそうではない気がした。不確かなものだけど、  
絶対に消え去りそうのない映像だと確信できる。忘れようとしても、  
忘れることのできないものだ。

夢？ いや、違う。これはもはや夢ではない。忘れられない夢なん  
であるものか。忘れてしまっからこそ、夢は夢なんだ。そう、つま  
り……

……記憶……

いや、それこそありえないじゃないか。僕はあんなもの知らない  
し、あんな所行ったこともない。もしくは、前世の僕の記憶……？  
以前も、そう考えたことがあった。けど、あれとは……何というか、  
雰囲気が違う。

仮に前世の記憶だとしても、今の世界の文明より発達した文明を  
持った時代など、考古学的にありえないはずだ。前世とは自分が生  
きている今よりも昔の時代。矛盾が生じるんだ。

……もしかしたら、前世というのは何も大昔の自分ではなく、同じ  
魂を持った自分……なのかもしれない。つまり、全てが始まる起点か  
ら、終わりまで続く果てしない時間の中で、今よりもずっと先の世  
界に生れ落ちたとしても、次に転生する時は古の時代にさかのぼる  
……ということだ。

あらかじめ定められた始まりから終わりまでの道のり。

終わりはいつ？ けど、遙か彼方であるのは間違いない。数億…数十億年…。その中の、ほんの少しを生きている僕たちは……何なんだろう。

僕は何度も瞬きをした。

考えすぎだよ。て言うか、そんなこと考えてもしょうがないじゃないか。答えなんてどこにもないし、誰も教えてくれない。教えてくなくても、所詮見たことも、体験したこともない人が言うことだ。天国や地獄がいい例さ。考えれば考えるだけ、疲れるだけさ。若いんだから、そんなことは考えまい。そんなのは、どこかの学者たちに任せておけばいいでしょーよ。

それにしても、僕の中で「何か」が動き出すようになってから、僕はいろいろなことを考えるようになったような気がする。こんなこと、今まで考えもしなかったのに。

変な気分だ。まるで、自分が自分でないみたいだった。それでいて、どこか自分らしさがあるんだ。まさにそうだ！ ……と言い切れないけど、もわもわした感じた。

「はあ……鳥に……なりたくないな……」

空を翔る鳥を見ると、ふとそんな言葉が漏れた。青空の中を縦横無尽にかける気持ちってのはどういうものなんだろう。人では体感し得ない、究極の感覚。それに少しでも近づこうと、人は機械を作って飛ぶんだ。昔、人はそういうった思いで技術を進歩させていった。けど、現代の人は必ずしもそういう思いをもって技術を改良しているわけではない……と思う。

再び、僕は眠くなってきた。大きなあくびをし、僕は再び大の字になった。

「どうなってる！？ エネルギーが循環されていないぞ！！ おい、メインからの応答はどうなってる？」

誰かが叫んでいる。これは…さっきの人たち…？

「メインシステム『Noah』からは応答ありません！」

「なに！？」

必死に機械たちとリンクしているであろうキーボードを打ち込む作業員…。

「あ、あり得ない！ カルマの制御システムが…ハッキングされてる…！」

「制御システムだと！？」

その時、ドームほどの広さの実験室に警告のアラームが鳴り始めた。紅い光が、辺りを散らす。

「そうか…ヘイムダルの仕業だ…！」

赤い長髪の男性が、呟いた。

「ヘイムダルが…！？」

「…！ か、閣下！ 各地の…各地の戦略兵器群が作動しています…！ 起動率…60%…！ ものすごい速さで起動しています…！」

「…！？ 馬鹿な！ あの短時間で、中央の独立制御室を落としたのか……！！！」

青い長髪の男性は、歯ぎしりをしながら何かを睨んでいた。そして、空間に表示された水色の電子パネルに何かを打ち込む。

「カルマにアクセスは…くそっ…！ 暗号がとつもないスピードで変更され続けている…。これでは、リンクできない…！！」

「…制御できないとなると、このままでは…地上は焼け野原だな…。」

赤い長髪の男は、無数の赤い点が記された世界地図のようなものを見つめながら、呟いた。

「そんなことさせるか…！ ……こうなったら…。」

「…！？ 待て、何をするつもりだ…！」

「こうするしかない！ こうするしか……！！！」

「くっ…！！ 総員、退避！ 退避だ…！ 実験は失敗だ！ 速や

かに管理棟のシエルターへ逃げ込め!!」

赤い長髪の男性は、青い長髪の男性が目指して行った先を見据えた。そこには、あの巨大な水晶体が粉塵と共に鳴りを潜めていた…。

「……これもまた、我々の罪か……」

大きな地響きを起こすと共に、この光景は崩壊した。

何が起こっているのかわからなかった。けど、夢ではない気がした。

遠い未来…？

それとも、遙か古の鎮魂歌<sup>レクイエム</sup>…？

「…うん……」

僕はゆっくりと目が覚めた。あまり寝た気がしないため、頭がボロっとする。いったい、どのくらい寝ていたんだろう？

僕はゆっくりと背伸びをした。すると、指先に何かが当たった。

なんか、人肌のような感じがしなくもない…。僕は体を起こし、後ろに顔を向けた。

「……空」

空だった。ちょこんと座っている。

「…来てたのか。起こせばよかったのに」

「だって…無理に起こすのは悪いかと思って…」

さっきまでと変わらず、オドオドしている。

「…いつ来たの？」

僕は辺りを見渡した。昼過ぎ…くらいか。

「さっき…」

「…海は？」

「…うんともすんとも言わない」

彼女は首を振りながら言った。

「そっか…」

おじさんはそっとしておいたほうが良いと言っていたが、本当にそうだろうか。僕たちに責任がある…とは言い切れないが、遠因としては考えられる。彼女の心の中では、僕たちのせいなのかかもしれない。だからこそ、僕たちがどうにかしなければならぬんだと思う。あいつを、放っておくことなんてできないもんな。

「……あの…空…」

「…何？」

「えっと…その………」

僕は頭をかいた。

「言いたいことがあるなら、はっきり言えって。そんなんじゃ、何もわかんねえだろ」

再び、厳しく言ってしまった。そう言いたくないのに、どうしても言ってしまう。自分の心と実際に出てくる言葉は、まったく違ってしまっている。

「…さつきは…ごめんなさい…」

空は顔を沈めて言った。

「…あんなこと言って、本当にごめんなさい…」

「………」

「…気が動転しちゃって…馬鹿な質問して………」

僕は何も言わなかった。ここで止めたら、本当に何も言わなくなっちゃうかもしれない。

「…でも、信じて。私…空のこと、信じてるから………」

「………」

「空のことを誰よりも信じてる自信だってある。…それに…空のこと…誰よりも…大好きだし…。…その、愛してる………」から

「………」

真っ赤な顔で言う彼女の顔は、見ているこっちが恥ずかしかった。なんだって、こいつは簡単にそういう言葉が言えるかな…。普通、

躊躇するものだが…。

普通じゃないから……好きなのかもな。

「だから……お願い………」

「ん？」

真つ赤な彼女の顔は、突然涙で冷やされ始めた。僕はギョツとした。

「お願い………嫌わないで………。嫌わ……な………」

「お、おいおい、泣くなよ」

僕は慌てて彼女に近づき、ほほの涙をふき取った。それでも、どんどん涙は溢れてくる。

「私………空のこと、大好き………だもん………」

「わかった。わかったから………」

「お願いだから……嫌わない………」

あーもう、しょうがないなあ……。

「嫌わないから。絶対に嫌わないから」

「………うう………」

「僕が悪かったよ。ちょっと、やりすぎた。お前のこと嫌ったりしない。絶対に嫌ったりしないから」

甘いなあ、自分……。

「もう泣くなつて。な？」

「………」

「僕だつて、お前のが好きだから。それだけは、変わらないからさ。な？」

「………ううわあ………空あ………」

空は僕の胸に顔を沈め、抱きしめながら泣いた。僕は彼女の頭や背中をさすりながら思った。

(………僕って、どうしてこんなに甘いんだろうなあ………)

しみじみ、そう思った。以前からこいつらには甘いと思っていたが、我ながら呆れてくる。………て言うか、好きな人にこんだだけ泣かれながら言われると、どうしようもないだろ……。………ぶっちゃけて言え

ば、めちゃくちゃかわいく感じるんだよなあ。

ハア……男の悲しい性……だな。

何はともあれ、空のことはどうにかなった。どうにかなったというか、海のことのほうが大変なのに、どうしてこいつまで不安定になっちまうんだろうな。こうして考えてみると、空と海はどこまでも似ているんだな。ちよつとしたことで、泣いたり、笑ったり。

「戻ることはできない」

「……え？」

僕にぴったりくつついて、空は座っている。

「もう、前のように笑ったりしていられないってことさ」

「……」

「…僕が最初、変わることを拒んだように、あいつも同じように拒んでいる」

「拒む…？」

僕はうなずいた。

「お前に告白されて、正直怖かった。今までの3人でいられないようになることが、怖くてたまらなかった。変わることを受けいられず、僕は迷いに迷った。その中で、あることを思い出した。それがどれほど大切なものかわかった……。だから、変わることを受け入れることができたんだ」

「……」

「あいつも、怖いんだ。自分の本音を言ってしまったことで、変わってしまったものを見るのが怖いんだ。部屋から出てしまうと、その現実を直視してしまう。目を逸らすことのできない現実を目の当たりにしてしまう。だから、出てこないんだよ。あそこから」

「……」

空は僕を見つめていた。僕はちよつと照れながら、

「な、なんだよ？」

「…空つて、本当に何でもわかつちやうんだね…」

「はっ？ 何が？」

「私や海のこと……何でも……」

「…まあ、何年も一緒にいればそれなりにわかつてくるもんだと思  
うけど…」

空は頭を振った。

「うつん、違う。空が空だから、わかるんだよ…きつと」

そういう彼女の顔は、優しかった。

「……でも、悔しいな。私、あの子のお姉ちゃんなのに、何一つ理  
解してやれていない…」

彼女は肩を落とした。僕は大きいため息をついた。それに気がつ  
いたのか、空は慌てて顔を上げて僕を見た。

「まったく…すぐこれだ。自虐的なもの……」

「わあー！！ ごめん！ ごめんなさい！」

彼女は僕の服の袖を掴んで謝り始めた。

「……まったく……それより……」

僕は立ち上がり、町を眺めた。うごめく人や車が見える。

「……早く、どうにかしないと……」

……早く……？

「何を？」

「……ん????」

空は頭をかしげていた。というか、自分も頭をかしげていた。

「空、一人で何言ってるの？」  
はて？

「……いや、なんでだろ……」

急げ

「……!!?」

頭痛もしないのに、声が聞こえる。しかも、今までのとは違う。今までは声が響くような場所から呼ばれているような感じだったが……今回はそうじゃない。耳元で囁かれているような感じだ。周りを見回しても、空以外誰も見当たらない。

動き出した歯車……分岐点……すぐそこに……

「分岐点……? なんだったんだ……?」

「空……どうしたの?」

空は心配そうな顔で僕を見ている。

「……なんでも……ないよ」

「うそ。そう言う時の空はいつも嘘をつく」

彼女の顔は険しかった。思わず、たじろいでしまった。

「幻聴でしょ?」

「……ああ」

「……大丈夫?」

僕は微笑んでうなずいた。

「……」

空は立ち上がり、僕を抱きしめてきた。

「! そ、空……」

「お願い……私に嘘つかないで……」

「……」

「もう、嘘言っちゃ……駄目だよ?」

僕は思った。父さんも母さんも、おじさんもおばさんも、僕は彼女たちのことを何でもわかると言った。実は、そうじゃない。彼女たちが、僕を理解しているんだ。理解しているからこそ、僕もまた理解できる。そんな気がする。

「……うん。わかった……。ごめんな」

「……………」

「……………」

空はよりいっそう、僕を強く抱きしめた。

「……どうした？」

「……怖い」

「？ 怖い？」

「……わかんない。わかんないんだけど……怖い」

彼女は顔を沈めたまま、そう言った。

「……なんで？」

そう訊くと、しばし沈黙が流れた。

「……から」

程なくして、彼女は口を開いた。

「……？」

「……空が、いなくなりそうで……」

「僕がいなくなる？」

空は小さくうなずいた。

「……離れ離れに……なる気がする……」

「……………」

彼女の体は小刻みに震えていた。少女の細い体が恐怖に襲われているのに、健気に抵抗しているのがわかる。まだ15歳……。

なぜだ？

理由もわからない不確定なものが、彼女を怖がらせている。

答えの見えぬ暗き深層。

「真実を知る術…とは…？」

「僕は彼女の髪の毛をかき上げ、優しく撫でた。

「大丈夫。絶対に離れやしないから」

「……うん。ありがとう……」

「空。そのときの表情が、あまりにもかわいかった。

「……」

「僕たちは、自然と惹かれ合った。そして……」。

「……あつ、携帯鳴ってるよ？」

「えっ？」

彼女の言うとおり、僕の携帯が鳴っていた。この音楽は、電話だ。

「……ったく……誰だっせん……うげっ、母さんだ」

「……クスッ。うげって言っちゃ、おばさんかわいそうだよ」

「いいんだよ。どうせ、大した用じゃないんだから」

僕はボタンを押し、電話に出た。

後になって思う。なぜ、大した用じゃなかったのだろうか。大し

た用じゃなけりゃ、後々あんなに後悔することなんてなかったのに。

「もしもし。母さん？ 何の」

「空！ あんた、今どこにいんの…！！？」

電話の向こうで、母さんのでかい声が響く。耳が痛い。思わず、

携帯を耳から離してしまった。

「何だよ、でかい声出すんじゃねえっての」

「いいから、早く帰ってきなさい！」

「はあ？ 何だよ」

用件もわからないのに、何で帰らなきゃならないんだ？

「ああもう！ このバカ息子が！ いつだって、あんたは物分かり

の悪い脳みそしてるから…！！」

「はあ！？ いきなりなんやねん、そのセリフは！！ ちったあ誉

めるよ！ 息子を…！！」

なぜか、関西弁に。

「海ちゃんがなくなっちゃったんだよ！」

……えっ？

「海ちゃんがいつの間にかいなくなってたの！ たぶん、窓から……」

……

「……ちょ……え？」

馬鹿な……まさか……家出……？

海は家出した。

おばさんが昼食を部屋の扉の前に置く時には、たしかにいたらしいのだが、1時間後くらいに食器を下げにいかうと行ってみると、気配がないので入ったのだという。……そしたら……。

僕たちは手分けして探した。探すのは専ら僕と空だった。僕たちのほうが、彼女が行きそうな場所を知っているからだ。

「修哉君にも手伝ってもらったほうがいいんじゃない……」

「……そうだな。空、あいつに連絡してやってくれ」

「……うん。わかった」

「それと、お前は一度家に帰れ」

「……え？」

「長いこと走って、疲れたる。ちょっと休め」

「けど……空、まだ昼食さえ……」

「そのくらい大丈夫さ。体力に自信はあるからな」

僕は元氣そうに笑った。まあ、腹減ったのは事実だけど。

「……」

「じゃあ、修哉のことは頼んだぞ」

「……うん」

僕は後のことは空に任せ、走った。

海が行きそうな場所は全部行ってみた。幼い頃たくさん遊んだ公園。高台の公園。行きつけの図書館。良く遊んだ川辺。

しかし、もう一つ行っていない居場所がある。もう、そこしかない。

小学校の裏山。

あそこしか考えられない。最後にあの場所を残した理由は、海と2人つきりになるためだ。空がいたら、よけいこじれそうだからだ。まず、僕があいつを説得する。それに成功できれば、今度は空だ。一度に2人で話すと、あいつは混乱してしまう。勝手な判断だが、そうだと思う。

僕は走った。裏山まで大した距離ではないが、山道を登らなければならぬので結構辛い。何度もこけそうになったが、そこは踏みとどまった。山道はなんと書いても汚れるから嫌になる。

海…。

空と出会って、次に会ったのがあいつだった。幼い僕は目を疑った。まったく同じ姿の少女が、もう一人いたのだから。

その頃はまだ空と同じだった。同じことで笑うし、同じことで泣くし、同じことで喧嘩するし。なんと書いてもおとなしかった。今みたいに、元気はつらつな女の子ではなかった。

中学生になってから、「空の妹」ということを意識し始めたんだと思う。それまで長かった髪の毛をばっさり切り、空との違いを強調していた。そういうふうに見えた。服装だって、空がかわいらしい感じのものであるのに対し、海自身は強い女の子…のような服装だった。決して、スカートをはかなかった。学校のスカートをはくのを嫌がっていたな…。

双子であるために、どうしても比べられてしまうのが嫌だったんだろう。空は優等生だったし、スポーツ以外は何でもできた。修哉のように天才ではなかったが、凡才だったのだ。しかし、海はそうではなかった。彼女は空と同等でいようと、努力していた。勉強だ

って何だっつて、裏で努力していた。料理だっつてそうさ。知らぬ間に、あいつは練習していたんだ。そうやって、空に追いつこうと……自分というものを定義付けようとしていたんだ。

自分は空と違う。

あいつは明るく振舞っていたが、寂しがり屋なのだ。空よりも何かを求め、何かを努力していた。

あいつは、そういうやつだ。

「ハア……ハア……」

ようやく、山頂に着いた。

「ハア……ハア……以前来た時と、何も変わってないな……」

汗が額をつたる。夏でもないのに、こんなに汗をかくのは不本意なんだけどな……。

「おい、海。どこだ。いたら返事しろ。いないならいないって言え」

ドラえもんでお馴染みの台詞で海の名前を呼ぶ。いなかったら、返事なんてあるわけないのにな。

桜の木……まだあるのかな。

そう思い、僕はあそこに足を進ませた。近づくにつれ、桜の香りがしてきた。それと同時に、ひらりひらりと花びらが舞っている。

あれは……海……！

あの門の前に、海が立っていた。ただただ、門の前に立ち尽くしているように見える。不思議な世界へ行ってしまった、あの門……。

「……海……」

僕は呼吸を整えながら、彼女のほうへゆっくりと歩を進ませた。

「……やっぱり、ここにいたんだな」

「……」

僕は彼女からメートルほど離れた場所で立ち止まった。

「海。みんなが心配してる。帰ろう」

「……………」  
「彼女は何も言おうとしない。」

「海……………」

「来ないで!!」

「僕が足を一步前に出した瞬間、彼女は叫んだ。」

「……………う…み？」

「…私……………私…」

突然、海の肩が震え始めた。

「私……………どうすればいいの!？」

「……………!!」

「私だって空のことが好きなのに……………大好きなのに! 空はお姉ちゃんが好きだってわかってしまつて……………どうすればいいの!?! どううしようもできないよ! こんなの……………辛すぎる!」

「海……………」

海は僕のほうに振り向いた。涙をたくさん流しながら。

「もう何がなんだか……………わからないよ!!」

そう叫び、彼女は自分の顔を覆つた。

「……………僕は……………」

つばを飲み込んだ。

「…僕は、空が好きだ。それは、紛れもない事実だよ」

「…そんなことが聞きたいんじゃない!!」

「聞かないと駄目なんだ!」

大きな声には、大きな声で返す。ほんの少しの静寂が停滞した。

「関係が壊れるのは怖い。今まで過ごしてきた日々が、もうできないようになると考えただけで嫌になる。だけど、変わらないものなんて存在しないんだ」

「……………」

「…変わることとを恐れていては、何も前に進まない。空は勇気を振り絞つて、今を変えようとした。怖くても、どんなに怖くても、そ

れを乗り越えた。彼女の言葉で、僕は大切なものを見つけ出すことができた。それが……『空のことが好きだ』ということだったんだ」  
海は何も言わず、顔を沈めている。

「空に言われたから、好きになっただとか……そういうんじゃない。僕はあいつに一目惚れしていたんだ。……13年前、あの公園で出会った時に……」

「……自分に正直になれた。だからこそ、今、お前に言うよ」  
僕は一歩前に進んだ。

「海……僕にとって、お前は大切な人だ。大切な女性だ。……けど、一人の女性としては愛せない。……お前を、親友以上に見ることはできない」

これが僕の本音だ。言わなければならないこと。絶対に。

「……今までと同じようにすることはできないかもしれない。お前だって、できないかもしれない。それは辛いことだ。……けど、お前と話さなくなるのは……もっと辛い」

「……」  
「今までのように接してくれないかもしれない。それでも、僕はお前と一緒に遊んだり、話したりしたい。僕たちは、親友なんだからさ」

「……空……」  
海は顔を上げ、涙の顔で僕を見つめている。目を逸らさぬよう、僕も彼女を見つめた。

「ずっと一緒にいられるわけじゃないかもしれない。……それでも、学生でいるうちにはできるだけ一緒にいたい。……空と修哉と……お前と、4人で」

そう言うと、海は優しく微笑んだ。涙を流しながらも、彼女は僕を見つめた。

「……私が拒んでちゃ、本当に崩れちゃうだけだもんね……」  
「……ああ」

「…一緒にいられないのは、嫌だもんね…。けど、空にふられたのは辛いな…」

海は突っぱねた表情をした。

「ご、ごめん」

「…フフ、いいよ。もうしょうがないことだもん。…もしかしたら、空はおねえちゃんのが好きなんじゃないかなーって思ったけど…当たっちゃったね」

海は辛そうな笑顔を浮かべた。その笑顔が、胸に刃を突き立てる。「…いつもどおりにいることは幸せだけど、ずっと続く幸せなんてないもんね…」

幸せだと思ったことが、永遠に長続きするならば…僕たちの見る世界は、なんら色あせることのない風景でしかない。

それは、幸福なのか？

今の自分なら、わかる。それは、違うんだってことが。

「……………」

しばし沈黙が流れ、僕はせきをして一呼吸を入れた。

「えっ…と……………」

「…何焦ってるの？」

「あ、焦ってなんかないよ。それより、空やおじさんたちが心配してる。一緒に帰ろう」

「……………」

「おい、帰るぞ」

「…うん！」

海は微笑んで、こっちへ向かって来た。

「…!?!?」

なぜか、門が光りだしたのだ。門の中が真っ白になり、あたりに白光を撒き散らしている。

「くっ……な、なんだ……！！？」

「ま……まぶし……！！！」

光はだんだん強くなり、こちら一帯を包み始めた。真昼間なのに、この光……まるで、太陽光が反射したかのようで、まぶしい。そのため、まぶたを開けていられない。

「うわっ……！！！」

「きゃあー！！！」

突然、風が吹き荒れた。強烈な風となって辺りに吹き荒れ、僕たちを吹き飛ばした。

「う……くっ……」

「……うっ……」

風が止まると同時に、光の強さが徐々に弱まってきた。それでもまだ目を開けることができない。まるで、某漫画の必殺技をやられたかのようだ。

ようやくまぶたを開けることができたと思ったら、強風によって土ぼこりが舞い上がったため、いまいち周りが見えなかった。

「海……海……？」

僕は目をこすりながら名を呼んだ。

「……空……ゴホッ、ゴホッ」

大丈夫なようだ。それがわかっただけで、安心した。その時、何とか周りを見ることができるようになった。

強烈な寒気が背筋を走った。

「か……はっ……！？」

なんだ……これは……？ 言葉では言い表せない、何かが僕を包んでいる。優しいものではない。暖かいものでもない。それは、「闇」に準ずるものだった。

呼吸を整え、僕は「それ」があるであろう門へ視線を向けた。

……誰だ？

そこにいるのは、見知らぬ男性だった。黒っぽいフードをかぶっているため、顔をはつきりと見ることができない。けど……肉体が男性のものだ。漆黒の全身タイツを着ているため、筋肉の隆起がよくわかる。どこかの格闘家……いや、ボディビルダーのような筋肉だ。それでいて、2メートル近い身長をもっている。

「……以外に安定していたな……。これも、あれが徐々に目覚めつつあるということか……」

男は辺りを見渡しながら何かを呟いている。

「……さて……」

男は僕のほうに顔を向けた。顔を向けられた瞬間、体が震え始めた。

「なっ……ん……だ……!?!?」

どうして、震えるんだ……? 怖いのか? まさか……直感的にわかっていいのか……? この男は「危険」だと……。

「……よう、空」

「……!」

その男は、知り合いかのように僕の名前を呼んだ。

「……まだはつきりと具現化されているわけではなさそうだな……。だが、それなりの予兆はあるとあいつは言っていた……。もうしばらく、時間と影響が必要なようだな……」

男はわけのわからないことをしゃべっている。

「……まあ、今はいいか……。どうせ、そのうち自分さえも制御できなくなるだろうしな……」

男はそう言いながら、倒れている海のほうへ歩き始めた。海は気づいていない。

「!! 海!! 逃げろ!!!」

「……えっ……?」

海が後ろに振り向いた時には遅かった。

「……!!!?」

男は海の細い腕を掴み、引っ張り上げた。

「いたつー!!」

「ほう…これは、なかなかの潜在魔力だな。これなら、想像以上のエネルギーとなりう。」

すると、男は頭をかしげた。

「…違う。お前は……そうか、妹のほうか」

ハハ、と男は笑った。

「ちよ……放してよ……!!」

海はじたばたと暴れていた。しかし、やつは物ともしなかった。

「青海のほうか…。これでこれほどのエネルギー波を生じさせているということは、蒼空はそれ以上ということか…」

何を、言っているんだ？

「ククク……なるほど……ユグドラシルのやつ、そこまで理解していてこの俺にここまで行かせたのか。ハハハ……さすがの一言に尽きるな」

男は愉快に笑いながら独り言を言っている。僕は未だに体が動かない。なんでだ…!?

「さて……女。貴様の姉はどこにいる？」

「…えっ？」

海は暴れるのを止めた。

「お姉ちゃん……?」

「そうだ。お前の姉、日向空だ。…どこにいる？」

まさか、あいつは空を探しているのか…?

「そんなの……教えてやるかってんだ!」

男口調で、海は再び暴れ始めた。どんなに暴れようと、男は動じていない。

「知ってても……絶対に教えない!」

「ふむ……あまり気が強いほうではないと報告を受けていたが、それでもないじゃないか」

そう言って、男は笑っていた。

「…別に教えてもらわなくてもいいが、それではお前が代わりに来

るか？」

「はあ！？ どこに行くつてのよー！」

男はニヤツとした。

「異世界さ。この世界とは違う、光の向こうよりも遠い、時の向こうにある世界へな……」

海の顔は凍りついていた。この位置からはやつの顔は見えないが、あいつは凍てついた笑顔を向けていたに違いない。僕でさえ、恐怖に駆られているのだから。

「どうだ？ お前でも、他の器に比べたらエネルギー比は高い」  
すると、男は海的首を掴み持ち上げた。

「！？ かつ……あ……はっ……！！！」

海の足は地面から離れ、彼女は宙に持ち上げられた。

「う、海……！」

「がっ……ああ……あつ……！！！」

海は何とか手を放そうとするが、効果はない。

「もちろん貴様の姉に比べたら劣るが、それでも聖杯のかなりの充填になるだろう」

男は笑みを浮かべ、さらに海を苦しめる。

「や……やめる……！！！！！」

僕はいつの間にか走り出していた。こぶしを強く握り締め、まっすぐ向かっていった。さっきまでの恐怖が、どこかに行ってしまったかのようにだった。

「ん？」

男が振り向いた瞬間、僕は殴りかかった。

「だああああ……！！！」

「おっと」

男は軽やかに避けた。

「！！！！！」

「のろい」

男は横蹴りを繰り出してきた。それは僕の横腹に直撃した。

「がつ……!!?」

強烈な衝撃が体中に走り抜ける。僕の体は軽々と吹き飛ばされてしまい、地面にゴミのように転がった。動きが止まった瞬間、今まで味わったことのない痛みを感じた。

「ぐっ!!? うっ……くう……!!」

なんて痛みだ……。アバラが折れてるんじゃないか……。

「あああああぁっ!!!!」

海の叫び声が聞こえる……。

くそ……立たないと……あいつが……!!

「空!!!!」

その時、声が響いた。誰の声……と確認するまでもない。

「そ……空!?!」

「お姉……ちゃん……」

それは空だった。息を切らせながら、離れた場所に立っていた。彼女がいるということに気がついた瞬間、僕は背筋が凍りついた。

「空! 海!!」

彼女は駆け寄ろうとした。僕は迷わず、声を放った。

「来るな!」

「!!?!」

空は立ち止まり、僕を見つめた。

「来ちゃだめだ! 逃げろ!! 早く逃げろ!」

「で、でも……」

「いいから逃げる! 頼む、逃げてくれ!!」

その言葉を放った瞬間、黒い影が彼女に襲いかかった。手首をつかまれ、男に持ち上げられた。いつの間にか、海はさっきまで男がいた場所に放り出されていた。苦しそうにせき込んでいる。

「痛っ!」

「まさか、そっちからのこのことやって来るとはな……。なんとまあ、運のないお嬢さんだ」

男は笑いながら言った。

「やめる!!」

「叫ぶだけか、小僧。それでは何も護れはせんよ。口先だけで蜜を吸う政治家と、何ら変わり映えはせん」

男は僕を見下しながら、吐き捨てた。

「お姉…ちゃん……」

後ろに視線を行かせると、海がふらつきながら立ち上がった。意識がもうろうとしているようだった。

「お姉ちゃんを…どうするつもりだ…!」

「成り損ないが知ることではない」

「く……あああああ!!!!」

海は男に向かっていった。

「お姉ちゃんを……放せ!!!!」

殴りかかろうとした瞬間、彼女の体はくの字になって吹き飛ばされた。そして、勢いよく樹木に打ち付けられた。

「海……海……!!!!」

空は叫びながら海を呼んだ。しかし、反応はない。

「海……海……!!」

「案ずるな。気を失っているだけだ。…尤も、内臓が破裂していたら危険だがな」

空を馬鹿にしたかのように、男は笑顔で言った。

「てめえ……!!!!!!!!」

僕は歯を食いしばった。

「そんな……離して! お願い、離して!!」

空は必死に暴れたが、意味を成さなかった。

「空……海……くう……うう!!!!」

僕は精一杯、足に力を入れた。たかが蹴り一発で、立てないってのはおかしい話だろうが! 立て……立てよ!

「がああああ!!!!!!」

僕は何を思ったか、近くにあった木の枝を思いっきり右足の腿に突き刺した。間髪入れず、右の太ももにも同じように突き刺した。

亀裂が走ったかのような痛みが体をめぐり、血が吹き出る。

「空！」

「…ほう」

僕は足を震わせながら、立ち上がった。痛いけど、動く。痛みがあるということとは、神経が通ってるってことだ。

「空を…放せ！！」

「…ならば、力で奪い返すがいい」

僕は走り出した。痛みもくそもない。あいつを…殺してやる！！

「うらああああー！！」

しかし、男は虫を払うかのように、僕の拳を払った。

「…ふん」

男は掌を僕の腹部に当て、回転させた。すると、強烈な衝撃波が僕の体を貫いた。そして、さっきの海と同じように樹木に打ち付けられ、その場にひれ伏した。

「がっ…は……」

口から大量の血が出た。

「いやああああ！！！！」

空が叫ぶ。悲痛の叫びだ。

「空、空あー！！」

「く…そ……」

僕は顔を上げ、男を睨んだ。

「奴に主導権を握られながらも、立ち上がったまでは誉めてやる。…だが、力が足りない」

「…くっ……」

男は淡々と述べ始めた。まるで、評点を下すかのように。

「お前が救えなかったのは、お前のせいでも、誰のせいでもない。

……そう、これは運命だ。遠い昔より、定められていたこと。お前がそこに倒れ、俺を睨むことも、な……」

「運命…だと……？」

「…来るべき時に、再び相見えよう…。それまで、己のすべきこと

を見出しておくのだな……」

男はそう言い放ち、あの門の方へ歩き始めた。

「やめ……ろ……!!」

力無い言葉は、その場に立ち尽くす。

「やめて! 離してえ!!」

空は涙を流しながら、暴れる。だが、それは無駄な抵抗だった。

「離して! 離してえ!! 海……空ああ……!!」

彼女は必死に手を伸ばした。

「そ……ら……」

僕も同じように手を伸ばした。だが、届かない。

二人は門が放つ光に包まれ始めた。紅く、淡い光が優しく抱き抱えるかのようだった。

「いやああ!! 空ああ……!!」

彼女の叫ぶ声と共に、光は消えた。そこに、二人の姿はなかった。門のあたりは小さな砂埃が舞っていたが、それ以外は以前と同じようになった。門の向こうには、何も無い。ただ、この山の中の風景が見えるだけだった。

「な……んで……届かない……んだよ……」

僕は震える腕を更に伸ばそうとした。

何に手を伸ばしているのか。

届かないと知っているのに。

もう、触れることもできないというのに。

僕は、まだ手を伸ばしていた。



## 7章：模索 どこへ消えた、灯火の残像

最後の光景がまぶたの裏に焼き付いている。

届かない指先。

届きそうでも…届かない。もう少し、もう少しで届きそうだった。もう少しで届くかのように思っていただけで、本当はまったく届きそうもない。

「空！ しっかりしろっ！ 空！！！」

ゆっくりとまぶたが開く。開けた視界の中で、修哉がいた。

「修……哉………」

「おいっ！ 目を閉じるな！ 空！！！」

大きな声を立てるなよ…眠いんだ……。

「おい！ 空！」

修哉は何度も僕のほほを叩く。もう痛みも何もない。ずっと奥へ…沈んでいきそうな感じだった。

どこか遠くで、僕と空は話をしていた。遠い昔の話のようで、ごく最近の話のようでもあった。

内容はよく覚えていない。他愛のない話をしていた気がする。他人からしてみれば、どうでもいいような内容だ。それでも、僕は十分に満足していた。ただ当たり前前のこと、いつになく幸せなことのように感じた。

普通なことがどんなに幸せか。日々を平穏に過ごしている人は、そんな当たり前前ことに気がつかないんだ。それは…僕も同じだった。今の今まで、全く気がつかなかった。

自分にとって、当たり前なこと…。

きつと、昔から憧れていたものに似ているのだろう…。

夢は、突然覚める。

「……………」  
何度か見た光景だ。白い天井が見える。

ここは、病院だ。

「……………病院、か……………」  
僕は自分の腕を目の前に移動させた。

「……………」  
現実。

それとも、夢か。

そんなこと比べなくてもわかっている。比べようとするのは、現実から逃げようとする弱い心があるからだ。

逃げ場。

それを求め続ければ、僕は弱くなっていく。そういうものだ……………。

僕と海は山頂付近で気を失って倒れているところを、修哉に救出されたらしい。その後、海は病院でまもなく気を取り戻したが、僕は一日中昏睡していたようだ。死んだかのように寝ていたとのこと。目を覚ました翌日、和樹や啓太郎が見舞いに来てくれた。

「それにしても、入院しすぎだろ」

和樹はため息交じりで言った。

「これじゃ近い将来、全国各地で大雪が降るぞ。季節外れの大雪が僕が何度も入院することが、和樹にとってはかなりの事件らしい。まあ、ものの数か月で3度も入院する羽目になるなんて、おかしいと思えないだろうな。

彼らが帰るのと入れ違いで、美香が来た。

「大丈夫？」

「ん……………まあ、体のほうは何ともないよ」

「そっか……」

会話はそこで途切れ、嫌な沈黙が流れた。個人的に苦手な空気だ。

「……何かあったの？」

「……ん？」

「……なんか、元気が無いってどうか……」

「元気がない、か……」

そりゃそうだ。……幼馴染が、目の前でさらわれたらな。

「……今回ののは、聞かない方がいいみたいだね……」

何かを感じ取ったのか、美香は神妙な面持ちを残したまま僕から顔をそらした。

「……」

その時、病室のドアが開いた。そこには、学生服を着たままの修哉がいた。

「……修哉」

「……おつす」

修哉はちよつと嫌な顔をして、僕のベッドの隣に立った。修哉は美香のことを快く思っていないのだ。勝手な勘違いなのだが。

「……様子はどうよ」

修哉は低い声で言った。どことなくピリピリしている。

「ああ……今のところ異常はない」

「そっか……。まあ……今回は以前と違って、肉体的なものだったもんな」

「……肉体的なもの……？」

美香はそうつぶやいた。すると、修哉は横目で美香を睨んだ。

「お前には関係ねえだろ」

「……え……」

美香の表情が凍りついた。

「しゅ、修哉！」

「小山内……あんたさ、なんも関係ねえんだから聞き出そうとするな」

修哉は畳みかけた。

「か、関係ないって……」

「そうだろ？ これは空の大切な人に関する事なんだ。お前なんかに話したら、知られてほしくない情報が流れるだろうが」

「修哉！ やめろ！」

「そうやって、こいつらを悲しませるようなことしてほしくないんでな」

僕が止めようとしても、修哉は続ける。

「…私が、そういうことするような女に見えるっていつの？」

美香は震える声で言った。

「可能性の話をしたまでだ。お前は知らなくてもいいことだってあんだよ。知る必要はない。それだけだ」

「私だって！ ……空のことを心配してるんだよ！？」

美香は立ち上がり、今まで聞いたことのないボリュームで言った。

「どうしてそれがわからないの！？ 友達を心配することが、いけないって言うの！？」

「んなこと言ってねえよ。心配するって言うなら、他にも方法はあ  
る。内部事情まで知る必要はないって言うてんだよ。そんなの所詮、  
好奇心だろ？ 違うか？」

「……！」

「美香……！」

美香は顔を伏せ、そのまま走って個室から出て行った。

「おいっ、修哉……！」

僕は上半身を上げ、修哉の胸倉を掴んだ。

「……なんだよ」

「なんだよじゃねえよ！ お前……一体どういつつもりだ……！」

僕はいつのまにか大声を放っていた。

「……！」

「あそこまで言う必要はないだろ!? お前があいつのこと嫌いかどうか知らないが……あいつは、心配して見舞いに来てくれたんだぞ!」

「だから? なんだったんだ?」

「ああ!？」

修哉は掴んでいる僕の手の手首を掴んだ。

「お前、こんな時に別の女とイチャイチャしてんじゃねえよ」

「! なんことしてねえよ!」

「傍から見たらそういう風に見られても仕方ないってことだ。……

大事な人がいなくなっただつてのに、何のんびりしてやがる!」

「な、なんだと!」

僕は修哉の胸を強く押し、ベッドから降りた。その時、足に電流が走った。自分で刺してしまった足の傷が響く。

「お前に……何がわかる!」

僕は修哉にケガの足を引きずりながら近寄り、再び胸倉を掴む。

「目の前であいつをさらわれた僕の気持が……わかるか!?!」

「……………」

「のんびりしているだと!? 何も知らないくせに、勝手なこと言うんじゃねえ!」

修哉は何も言わず、僕を強い視線で見つめていた。

「どうしていいか分からないだよ! どうしてこんなことになったのか……どうして、あいつがさらわれたのかわかんねえんだよ!」

「……………」

「今でもあれが現実とは思えない……。本当は、あれはただの夢なんじゃないかって……。けど、わかるんだ。目の前に現れた男が、本物だつてことが。あいつに受けた痛みも、恐怖も体が覚えてるんだ!」

頭では否定していても、体が言っている。

あれは、現実だと。

「届かなかった……。この手が、あいつが伸ばした指先に届かなかった。……お前に……。お前に、わかんのかよ！！！！？」

僕の怒声が静かな病室に響き渡る。キーンと音が反響していた。すると、数人の医者と看護師が足早に入ってきた。

「ど、どうしたんですか！」

その人たちは、無理やり僕と修哉を離れさせた。

「なんとか言え！ 修哉！！」

「やめなさい！」

医者たちに手などを抑えられ、修哉は何も言わず病室を出ようとしていた。病室から一步出たところで、彼は振り返った。

「……自分だけが悲しいと思うな。自分だけが責任を感じていると思うな。世の中にはどうしようもできないことや、どうあがいても自分一人ではできないことだってある」

修哉の見つめる瞳は、痛いほど真っ直ぐだった。

「過酷なことが敷き詰められていて、その現実から逃げようとする。そして自分を責める。けどな、お前が支えを必要としているように、他の誰かもまた、同じような支えを必要としている」

「……」

「間違えるな。お前は独りじゃない。今、お前がどうしたいのかをしっかりと考える。そして、何をすべきか見極める。後悔は人を成長させない」

そう言つと、修哉は向き直つて病室を後にした。

修哉の言葉が頭の中に残っていた。残響……とでも言つのだろうか。強烈なびんたを食らったような感覚に似てる。

「お前は独りじゃない」

深く考えていないつもりだった。でも、修哉に言いかけた時に本音が出ていた。あの時の恐怖が体に染み付いている。あの時の痛みもまだ覚えている。…と言っても、ケガの大本は自分で刺してしまった足なんだよな。

そして、自分への責め。あの時あしていればよかったとか、あすればよかったとか。ああしていたなら…：…こうしていたなら…：…れば、なら。仮定のことを言っただけ責めるだけ責めて、前に進まないのは現実から逃げているということ。それは至極当然のこととで、わからないはずがない。なのに気付かないのは、自分がいつになっても弱いからだ。

今自分にできること。そして、支えを必要としている人が誰なのか。自分だけではない。ちよっと考えれば、わかることだった。自分の周りにだれがいるのかを考えれば…。

僕はナースコールを使い、看護師さん呼び出した。

「あの、ちよっとお尋ねしたいんですが……」

僕は包帯でぐるぐる巻きにされた足を少し引きずりながら、ある所へ向かった。

「203……203……ここか」

203号室。僕の病室と同じで、ここも個室だとか。

そう、ここは海の病室。面会謝絶をしているらしく、家族や僕の両親しか入れなかったらしい。

コンコン

ノックを試みたが、返答がない。…もう一度してみる。

コンコン

やはり反応はない。これ…前にもあったな。あの時は、たしか空とのがばれてしまっただけ…。

よそう。考えても、あの時には戻らない。後悔先に立たず、だ。

僕はドアを開けた。窓べりに置かれたベッドの上で、上半身を起して外を眺める少女の姿があった。微動だにしないその姿は、悲愴感を漂わせていた。

「……………」  
僕はゆっくりと歩を進め、ベッドの傍に立った。細い肩が何かを訴えている気がした。

「海」  
普通の声の大きさと、彼女の名前を呼ぶ。すると、海はゆっくりと僕の方へ体を向けた。

「あ……空」  
キョトンとした表情。

「よかった…目が覚めたんだね。私が目を覚ました時には、空はまだ昏睡状態だつて言ってたから…。先生は命に別条はないって言ったけど、それでもやっぱり不安だった…。けど、平気そうだよかった」

ニコツと笑った彼女の顔。その眼の下には、涙の跡があった。ちよつとやそこらのものではない。よくよく見たら、彼女の眼は赤かった。それに、頬骨が以前より少し出ている気がする。ほんの1日やそこらで、痩せてしまっていた。

「空、歩いて大丈夫なの？ 足に大ケガしたっておばさんから聞いたけど…」

海は僕の太ももを指差した。

「あ、ああ…まあ大丈夫。激しい動きはできないけど、歩くぐらいなら平気なんだよ。…少し引きずるけど」

「無理ばかりして、症状を悪化させないようにね。空って、いつもそっかしいんだからさ」

「何でお前に言われなきゃなんねえんだよ。そっかしいのは自分だろうに」

「何言ってるのよ。空の方がそっかしいでしょ」  
クスクス笑う海的笑顔は、本物に見えた。どこから見ても、この

笑顔を見れば平気なんじゃないかって思ってた。……  
けど、僕はわかる。その笑顔の中にある陰りを。陰に隠した本当の  
想いを。

「……ところで、お前の方は大丈夫なのか？」

「うん、平気。ちょっとあざができちゃったけど……」

「あざ？ どこら辺に？」

「……手首とか」

「……見せてみな」

「えっ？ い、嫌よ」

僕が近付くと、海は自分の手を布団の中に隠した。

「いいから、見せてみるって」

「嫌」

頑なに拒否する海。僕は彼女の手を無理やり掴んだ。

「やっ……！！」

彼女の手首には、青あざができていた。少し内出血もしているだ  
ろうか。……それだけあの男の握力が強かったということだろう。

「……お願い、見ないで……」

海は顔を沈め、僕と視線を合わせようとしなかった。

「……気にするなよ」

「気にするよ！」

彼女の声は少し大きくなった。

「……女だもん。気にするよ……」

「大丈夫だよ。その程度、残らないって」

「……それに、好きな人にこんなもの見せたくないもの……」

窓の方へ顔を向けた彼女は、まぶたの辺りを手でこすっていた。

「見られたくないの。だから……」

小さく震え始めた少女の肩は弱弱しかった。あれほどの恐怖を味  
わったのは、まだ15歳の少女……。

「私のせいだよ、お姉ちゃんがさらわれたのって……」

「……海」

声も震えている。

「私が出して、あんな所にいなければ…お姉ちゃんがあそこに来ることもなかった。私さえ、馬鹿なことをしなければ……」

「……………」

「お姉ちゃんはここにいないのに、どうして私はここにいるんだろ  
う……………」

僕は言い終わると同時に、彼女の肩をつかみ、こちらに振り向かせた。

「お前は悪くない。お前が自分を責める必要なんてどこにもない。

…お前は守ろうとしたじゃないか」

大粒の涙を流している少女の顔。それが、空を連想させる。胸が苦しかった。張り裂けそうで、死にそうだった。どうにかこうにかそれを堪えながら、僕は続けた。

「何が悪くて、何が駄目だったかなんて考えるな。そんなことを考えていても仕方ないだろ。今は…今は、泣いていいんだ」

「……………でも…自分を責めることでしか、私……………」

僕は頭を振った。

「責めなくていい。あの状況では、しょうがなかったんだ。どうしようもできなかった。…起きてしまったことを悔やむな。お前に責任はないんだ。何一つ……………」

そう言うと、海は僕に抱きついた。

「……………うわあああ！！」

泣きじゃくる海。僕はそれ以上何も言わず、彼女を抱きしめた。こんなに、彼女の体は細かっただろうか…。

しばらくして、海はすすり泣き程度になった。

「…ごめんね」

海が小さな声で言った。

「私、泣いてばかりで……空だって……」

「……気にするな」

「……………」

彼女は僕から手をほどき、涙を拭いた。

「……これから……どうしよう……」

「そうだな……。ともかく、あの男がどこから来たのか……知る必要がある」

とは言いつつも、僕は奴がどこから来たのか、おおよその見当は付いていた。

レイディアント……。リサ……が言っていたもう一つの世界。

そうとしか考えられない。僕は一度、あの門から別世界へ行った。夢なのかと思っていたが……どうやら本物だ。いや、本物だとわかってはいたが、それが現実と認めることが怖かった。……自分が、他の何者かになりそうで……。

他の何者に、か……。

最近、わかんなくなってきた。自分が自分であること……なんていうんだらう。言葉が、思いつかない。

「……でも、どうやって調べるの？」

海は首をかしげた。その言葉で、僕は我に帰った。

「そりゃお前……図書館にでも行って、あの山のことを調べるんだよ。もしくは、神話的なものが載っている本を調べるのもいいかな」

あれが本当なら、そのことを「神隠し」などと言われていたこともあるかもしれない。そういう話の多くは、神話や伝説となって語り継がれるはず。……勝手な予想だが、まあ気にするな……ことで。

「……見つけれられるかな……」

「見つける。絶対に見つける。……どこの誰かもわからない奴に、あいつの人生を台無しにさせてたまるか」

「空……」

海は再び、すすり泣き始めた。

「…辛かったな」

「……………」

「でも、お前は独りじゃない。…お前の傍にいるから」

海は声を上げないでたくさん涙を流し、再び僕に抱きついた。

修哉の受け入りだが…海に言っておくべき言葉だと思った。

翌日、修哉が一人でやってきた。

「昨日はすまなかったな」

修哉は謝ってきた。くしゃみしそうなくらいびっくりしたが、それを通り越して、一瞬の間思考停止に陥った。

「い、いや……………僕の方こそすまない」

とりあえずお約束。

「…あの日は少々腹立つこともあったんでね……………。それも重なって、小山内には申し訳ないことをしたな…。今度会ったら、正直に謝るよ」

「…その方がいいだろうな」

修哉はバツが悪そうに頭をかいた。

「……………まあ、今日はお前に伝えておかなきゃならないことがあって、ここに来たんだ」

「なんだよ？ 改めて」

修哉は近くの椅子にどかっと座った。

「どこから漏れたかは知らないが…世間で空ちゃんが行方不明になったことが話題になってる」

「…え？」

「おじさんとおばさんは、しばらくの間世間は勿論、警察にさえいなくなつたことを言わなかった。…それはお前や海ちゃんのためだ。心に傷を受けたばかりのお前たちに、掘り返すようなことをしたくなかつたんだ」

「……………」  
それはなんとなくわかっていた。おじさんやおばさんがお見舞いに来て、空のことについて話そうとはしなかった。…逆に、それが僕の胸を締め付けた。わかるだけに、心が痛い。

「……今日、事件のことを知った警察が、日向家に向かったらしい」  
「…なんだって？」

「警察も本格的に捜査に乗り出すだろうな。その時、空。お前は一番最初に怪しまれるだろう。事件の首謀者として」

「！？ おいおい……………」

僕は冗談だろと言わんばかりに笑った。

「それが冗談でもないんだよ。学校ではすでに大騒ぎしているし、学校側は『彼女は休学』の一点張り。何も知らない世間は、興味本位で勝手なうわさをねつ造し始めている」

「……………」

「いいか、空。これから世間はお前の敵になり、お前を弁護する人間は数少なくなる。お前を信じようとする者も、わずかに限られる」

修哉は立ち上がり、窓の方へ歩き出した。

「…警察はお前の所にも来る。気をつけるよ」

「…わかった」

僕はうなずいた。

「めげるなよ。お前にはお前にしか出来ないことがある」

「わかってるよ。…ありがとう、修哉」

「ハハ、よせよ。お前の柄じゃないだろ？」

修哉は笑いながら僕の頭を軽くはたいた。

「……………しな」

「？ なんか言ったか？」

「ん？ なんでも」

ニコツと笑い、修哉は言った。

最近、修哉は独り言が多い。それに、どこか遠い眼をして何を考えているのか分からない時もある。

修哉は他人に甘えようとしない男だ。自分が辛い目にあっても、苦しい時でも泣き言を言おうとしない。誰かを頼りにするのではなく、自分で解決しようとする。あいつは最善な方法を導き出し、解決する。だからすごい。けど……それは、周りにいる僕たちが頼りないからなのかもしれない……。

……少し、寂しい気はするけどな。

火曜日。海は午前中に退院した。僕はまだ足の傷が癒えていないので、まだ入院することに。

その日、変なことが起こった。医者もびつくり、足の傷がほとんど治っていたのだ。医者が言うには、「一日やそこらで治るような傷じゃない」とのこと。木の枝で刺したんだ。それなりの傷だった。回復力が常識よりも高かったということ、一応、先生一同納得……しちやいけないと思うんだけどな。

翌日、僕は激しい運動は禁止されているものの、退院することになった。念のため、車で帰った。

「空ちゃんのことだけど……」

テーブルの席に着いた僕と母さんと父さん。父さんは今日、会社に無理を言っただけで休みをもらったのだと言う。

「……何があつたのか教えてくれないか？」

「……………」

言わない方がいい。もし言っても、信じてもらえない可能性がある。気がふれたとしか思えない、と考えるかもしれない。

やはり言わないでおこう。余計な心配をかけたくない。僕はそんな気持よりも、言わないということは間接的に両親を信用していないのではという思いで、自分が嫌になっていた。

「……今は言えないんだ。ごめん」

「……………」

「でも、ちゃんとしたことがわかったら話すよ……絶対」

「……そうか。わかった。それまで待とう」

父さんはほつとした表情になった。

「でも、あなた……」

「俺たちは空を信じていればいい。そうだろ？」

「……そう……だね」

母さんは渋々納得したような感じだった。申し訳ないと思いつつ、僕は「ありがとう」と言った。こんな僕を信じてくれることが、どんなに心強いことか……。

その日の夕方頃、海がやってきた。

「あれ……？ お前、学校は？」

まだ4時。海は吹奏楽部なので、部活があるはずだった。それに、私服だったし。

「……行つてない」

「おいおい……」

「だって、空がないから……心細くて……」

僕の呆れた顔を消すように、すぐに海は言った。

そっか……。空がないし、修哉の話では話題になつていふと言う。海が一人で行けば、他の生徒の好奇心の餌食にされていたかもしれない。知つてか知らずか、海は危険を回避していた。

「……まあ、明日は行けよ」

「……嫌……」

と、海はそっぽを向いた。まったく……ガキじゃねえんだから……。

「わがまま言うな。一緒に行くから」

「……ケガ、治つてないの？」

「激しい運動が禁止されているだけだよ。学校ぐらい行ける。それに、お前一人じゃ心配だからな」

「な、なんでよ！」

海はいつもの感じで怒った。

「……一人にしてたら、お前はまた自分を責めるだろ？」

「……空……」

海は嬉しいんだか泣きそうなんだか、中途半端な表情になっていた。

「泣くなよ。泣いたら一緒にいかないからな」

「な、泣いてないよ！」

そう言いながらも、手でまぶたを拭っていた。

「……ところで、お前に話しておきたかったことがあるんだけど  
な、何？」

海は涙を拭き、僕にいつもの瞳を向けた。

「明日、町内の図書館に行こう」

「図書館？」

「ああ。言ったら？ 調べるって」

「そ、そうだったね」

「明日学校が終わったら、一緒に行こう」

「いいけど……何も今言わなくても……」

「……たぶん、学校ではあんまり会えない。空のことがあるから」

「……そっか」

海はしゅんとした。

「とりあえず、お前は部活があるから……」

「いい。サボる」

「……あのな」

「だって、時間を無駄にはできないよ。お姉ちゃんのためだもの……  
部活なんて、どうでもいい」

「……」

彼女の気迫は、今まで見たことないものだった。

「……わかった。それじゃあ4時に駅前ってことで」

「うん、わかった」

「よし、決まり。……情報が見つかるといいんだけど……」

「大丈夫だよ。……きっと。ね？」

「ね？」……と言う海の表情が、いつかの空とური二つだった。あ

あ……やっぱり、二人は双子なんだな。外見はどこからどう見ても同じだ。けど、中身は違う。二人を同じような扱いはしない。空は空、海は海なのだから。

5月17日、木曜日。五日ぶりに学校へ行く。内心ドキドキしながら、僕は教室に入った。

ドアを開けた瞬間、みんなが一斉にこっちを向いた。そして、さっきまでの話し声がピタリと止んだ。その静けさがあまりにも気味悪く、僕の動きも止まってしまった。

「…お、おはよ」

そう言つと、再び教室に雑談が戻った。しかし、先ほどまでのざわつきではなく、何かをこそそと話している風でもあった。

「おはよ、空」

すると、目の前に美香が現れた。修哉のことがあるので、僕は少しぎこちなかった。

「…おはよ」

「退院したって聞いたけど…もう学校に来て大丈夫なの？」

美香はいつもと同じ感じで言った。

「ん……まあ、激しい運動以外なら大丈夫」

その時、誰かがいきなり僕の首にチョークスリーパーをかけてきやがった。

「うおーっす！ 病み上がり」

「てめ…和樹！」

「やめなよ……空は退院したばかりなんだから」

和樹の隣で、呆れ顔の啓太郎が立っていた。

「ちよつと進藤。空、足に怪我してるの知ってんでしょ？」

「まあまあ。祝いだ、祝い」

「どんな祝福の仕方だよ……。ご返送願いたいもんですがね」

「んだとお？」

相変わらずで、なんだか僕はホツとした。あれこれ聞かれるんじゃないかって、ある意味覚悟していた。

「あ…美香」

「ん？」

僕は和樹の腕をほどき、一度咳をして喉を整えた。

「あのさ…見舞いに来てくれた時のことなんだけど…」

「あつ…ああ…」

あれか…という表情だった。

「僕が言うのもあれだけど…気分を害してすまない」

「…空が謝ることじゃないよ。私が勝手に首を突っ込んで…」

「でも、あれは僕から見てもひどいと思う。だから…本当にすまない」

僕は頭を下げた。

「ちょ、ちよつと…やだ、やめてよ。もう気にしてないからさ」

美香は笑いながら言った。けど、あそこまで言われて平気なはずがない。修哉の考えていることはわかる。それでも、納得できない部分はある。

「おいおい…お前、小山内に何やらかしたんだ？」

和樹は腕組をしながら言った。

「…まあ…」

とりあえず、僕たちは席に着いた。そこで、修哉のことを話した。

「…なるほどね」

和樹はフー…と長い溜息をついた。

「あいつも困った奴だな…。そんなに小山内が嫌いなのか？」

「訊かれてほしくないことを訊かれたら、誰だって怒るよ」

「あのな、小山内…第三者の俺が訊いても、修哉が一方的だしか思えないぞ。たまにやガツンと言わんとダメかな」

「…修哉は後で、言い過ぎたって言ってた。いつになるか分からないけど…あいつ、ちゃんと謝るって約束してくれたよ」

「……………」

和樹はふてぶてしい顔で頭をポリポリとかいていた。

「…修哉はさ」

ずつと傍聴していた啓太郎が口を開いた。

「なんにでもはつきり言っちゃうんだよ。自分が思ったことを」

「それが厄介だったことだよ」

「和樹、最後まで聞けつて。……………修哉は修哉なりに空たちが…幼馴染の3人のことを大切に思ってるんだよ」

一言も「日向姉妹」のことは言っていないが、啓太郎はそこを付け加えた。

「あいつにとつて、一番の親友は空。大切な幼馴染が日向姉妹。…3人のこととなると、あいつは外部を遮断しようとする。言い方は悪いかもしれないけど、虫が寄らないように…みたいなものじゃないかな。小山内さん、君が虫っていう意味じゃないからね」

啓太郎は苦笑いをした。

「…空があまり言いたくないようなことを、心配してとは言え訊いてきたことが許せなくて、ついカツとなったんだと思うよ。今までだってよくよく考えたら、修哉は空が辛い時には傍にいたし、回りにくい言い方をしてまで支えようとしてるんだよ。……………それだけ、修哉は幼馴染を大切にしているってことさ」

「……………」

「和樹には和樹の優しさがあって、修哉には修哉の優しさがある。人それぞれなんだよ。正しいかどうかは、別問題としてさ。……………だから、あんまり修哉を悪く思わないでやってよ。あいつだって、反省する点はあるけど」

啓太郎…。あまり口出そうとしない奴だけど、一番思慮する。こごぞつて言う時に、あまり感情に振り回されないうまま、大事なことを言う。

「…まあ、啓がそう言うなら…なんも言わねえよ」

和樹はそう言って、もう何も言わなかった。

「…小山内さんは何も悪くない。修哉も…しいて言えば悪いかもしれないけど、許してやってくれない？ あいつ、不器用だからさ」  
「…うん。もう、そんなに気にしてないから」  
美香は優しく微笑んだ。

僕は後で、啓太郎に「ありがとうな」と言った。

「…たまにはこういうこともしないかね。ほら、僕たちの友達ってユニークなのが多いしさ」

「…それは、僕も含まれてんの？」

僕がそう言っていると、啓太郎はキョトンとした。

「え？ 当たり前じゃん」

「……やれやれ……」

ほつれかけた糸を結び直す。それが啓太郎なのかもしれない。

昼休み。僕たちは屋上で昼食を取っていた。今日は美香も一緒だった。

「あ……修哉」

啓太郎がそう言っていると、ドアから服装をちゃんと着ていない生徒がやってきた。

「チャラ男だ、チャラ男」

和樹は笑いながら冷やかした。

「うっせ。お前と俺、同レベルだっつーの」

辺りを見渡しながら、修哉は僕たちの前に立った。

「小山内」

「…はい？」

なぜか敬語。彼女も、ちょっと緊張しているのかもしれない。

「…あん時はすまなかった。ごめん」

すると、修哉は深々と頭を下げた。ネックレスが垂れ下がる音がした。修哉が頭を下げたことなんて今までなかったもので、開いた口が閉じなかった。

「いいよ、もう。…柊君の気持ち、少しわかったから」

美香はそう言って、笑顔になった。修哉は頭を上げると、再び話し始めた。

「…けど、空が自分で話そうとするまで、今回の件には触れないでくれ。…和樹、啓。お前たちも」

「…わかってるよ。俺たちも空を信じてる。…それだけは、理解しておいてくれよな」

和樹は顔をそらしながら言った。少し、照れているのだろう。

「…ところで、柊君」

「??」

美香は立ち上がり、修哉の前に立った。

「私と友達になってくれない？」

予想外のことを言われた修哉は、目をパチクリさせていた。

「……友達？」

「そつ、友達。中・高と一緒に、共通の友達を持つてるのにほとんど会話らしい会話をしたことなかったよね。…柊君って、どこか怖いイメージがあったけど、今日でイメージが変わった。だから、友達になるうよ」

「…勝手にそう決めたら？ お前にとっての友達の境界線が、必ずしも他人のそれと同じだと思っなよ」

まーた嫌なこと言っただけから…。

「じゃあ、勝手に決める。友達になる」

「……………」

そう言つと、美香は握手の手を差し出した。修哉はほほを2度人差し指でかき、握手をした。

「これからもよろしくね、柊君」

「…修哉でいいよ。柊って言われるのは、あんまり好きじゃないんだ」

そう言つと、修哉はそつぽを向いた。美香はそれを見ながら笑顔になり、

「わかった。よろしく、修哉」

すると、修哉は唇をへの字にさせ、ちよつと照れ始めた。

「…あの子たち以外の女性に面と向かって下の名前を呼ばれると、なんだか照れくさいな」

「ハハハ、なんだよそれ」

ようやく、修哉は笑顔を見せた。

「…あれ？」

美香が修哉の手をジロジロ見始めた。

「柊…じゃなかった。修哉…：ケガしてるの？」

「ケガ？」

修哉は自分の拳を眺めた。

「…ああ…：さっきのか」

「さっき？」

「…まあ、ちよつとあつてな…」

そう言つて、修哉はペロツと舐めた。

「大丈夫？」

「小山内が気にすることでもないよ。こんなの、ただの掠り傷だ」

「あ、できれば私も名前で呼んでもらいたいんだけど」

再び、不意を突かれた修哉。さっきと同じように何度も瞬きをし、最後に微笑んだ。

「…美香が気にするほどのもんじゃない、…な？」

そして、二人は笑い合った。

「なんだあ？ いい感じじゃないか」

和樹は僕の耳元でささやいた。

「雪解け…まあ、修哉が一方的だったんだけどね」

啓太郎は微笑ましく見ていた。

なんにしてもよかった。美香が修哉をひっぱたくのが先か、修哉が暴言以上のことを言うのが先か…冷や冷やしていた。

バンツ！！

その時、屋上の出入り口のドアが勢い良く開いた。そこから、男子生徒がぞろぞろと入ってきた。あまり見慣れない奴らで、調子に乗っている不良もどき……みたいだな。

「やっぱりここかぁ、柵」

一番前にいる生徒が、ケンカ口調で言った。

「……なんか用っすか？ 先輩」

先輩……なるほど、見慣れないはずだ。3年生とはあんまり会わないからな。

「しらばっくれるなよ？ てめえが後輩に手を出したのは知ってんだよ」

「後輩？ 俺も一応、先輩方の後輩ですけどね」

修哉は軽い口調で続ける。

「卑怯とは思わないのか？ 後ろから不意に殴るなんてよお」

「そうか……あの傷、その時のか。」

「卑怯？ 卑怯って言いました？」

「そう言うと、修哉は笑い始めた。」

「てめえ！ 何がおかしい！」

「ハハハ……自分のこと棚に上げて、何言ってるんだか。笑わせるなよ、先輩。俺一人に対して、十人近くの仲間でケンカしようとしてるくせによ……ああ、おかしい」

「あああ……？」

決して熱くなるうとしない修哉。うーん、上手。

「……学校の頭気取ってる、3年の唐橋 カラハシ とその下っ端だ。修哉が目立ってんで、前々から狙ってたって話だ」

和樹は小さな声で言った。なるほどね……。気に食わないから、いちやもん付けてぼこぼこにしてやるうってことか。くだらない。

「てめえ、前々からムカついてたんだよ！ 調子に乗りやがって」

「ハハ……ただ、気に食わないだけでしょ？ 自分とは違って勉強も出来て、運動も出来てもてるから」

修哉のケンカするところは何度か見たが、なんとまあ油に火を注ぐのがうまいこと。爆発しなきゃいいけど。

「いい加減にしろよ！ 理由もなく人を殴っておいで、ただで済むと思うなよ！」

「だったら先輩は関係ないだろ？ 本人を出せよ」

「ああ！？」

「それとも何か？ 強そうな奴の陰にいないと、仕返しもできないってか？ ハハハ！ お笑い草だな。いいぜ？ それでも。だが、それじゃあてめえらは一生臆病者 チキン さ。そのまま生き続けたいなら、隠れてろよ。チワワみたいに」

ハハハ！ 修哉の笑い声が木霊する。

「てめえに言われたくねえな。殺人鬼の親友のくせしてよ」

「：殺人鬼だと？」

修哉の笑い顔がピタリと止んだ。

「そうだろ？ おい、東」

唐橋は僕を指差した。ん？ ご指名？

「お前：人殺したんだって？」

「：は？」

なんだそりゃ。本人も初耳ですが。

「学校中、その話でもちきりだぜ？ お前は日向空を殺して、山の中に埋めたってよ」

「な、何！！？」

殺して埋めた！？ だ、誰がそんな作り話を…！

「最低だな、お前。女の子殺して、誰にも見つからないよう埋めちゃうなんてよあ。証拠不十分で警察には捕まっていなかったって？」

さっさと自白しろよ、てめえ！ おかげで、俺らの学校の面目が丸つぶれだろうが！」

「何言ってるんだ！ 僕はそんなこと」

「んな殺人鬼と同じ学校に通うなんてごめんなんだよ！ 殺されちゃかなわねえからなあ」

そして、唐橋は下品な笑い声を出した。僕は気がつけば、拳を強く握りしめていた。痛みなんて感じなかった。ただ、許せなかった。「おい」

修哉はゆっくりと唐橋を指差した。

「その汚え口を閉じる。殺されたくなきゃな……」

「はあ？ 殺すって？ この人数相手に、一人でどうにかなるっての……かあ？」

「当たり前だ。てめえらみたいな低俗の群れなんぞ、5分もしないうちにあの世行きだ」

修哉は冷たい声で言った。さすがの僕も、少し怖いと感じた。

「いくらお前が強かろうが、一人じゃ……」

「はいはい。俺も参加します」

突然、和樹が言った。片手を拳手し、修哉の隣に並んだ。

「どう考えても先輩方に非がありそうなんで、こちらに参戦します」

「てめえは……進藤か。ふん、ちょうどいい。お前も最近鼻につくんだよ」

「そうっすか？ だったらちようどいいじゃないですか。てか、それってただの嫉妬でしょ？ 自分がもてないから」

「ああ！？」

「あれっ、凶星でした？ そうですよねえ。先輩、不細工ですもん。気づいてたなら、まだ救いようはありますけどね」

そう言っつて、和樹は修哉の肩を叩きながら笑い始めた。修哉はやれやれと思っっているだろう。

「この……やっちまえ！！！」

いつの時代のセリフやねん……。唐橋の号令とともに、十数人の3年がこっちに突撃してきた。それと同時に、修哉と和樹も突撃した。

「あゝあ………つたく。啓太郎、美香を連れて逃げてくれないか？」

「ハイハイ。結局、空も参加か」

啓太郎は少々呆れ気味だった。

「……だつてよ、あそこまで言われて怒らない方が」

「変、だな」

啓太郎はニコツと笑った。

「後悔させてやりなよ」

僕はうなずき、乱闘へ突っ込んだ。

数分後、決着は付いた。3対12、3人に勝てるもんなんだな……。体中いてえ……。まあ、ほとんど修哉と和樹だが。

「おら、立てよ」

修哉は、倒れて顔の腫れた唐橋の胸倉を掴んだ。

「……お……覚えてるよ……」

「減らず口はまだ出るのか。……いいか？ てめえらが先に仕掛けたんだ」

「あ……ああ？ お前が……」

「お前らだろうが……！」

修哉は怒声を放ち、唐橋から手を離れた。そして、その横に倒れている男の胸倉を掴んだ。

「こいつは何を言ったと思う？」

「ん……んなの、知るか……」

「……こいつは、俺の一番大事な親友を言葉で穢したんだ……！」

修哉はその男を引つ張り、上半身を無理やり起こした。

「あることないこと言いやがって……。本当のことも知らないくせに、相手を傷つけてもいってのか！？ どうして、他人が自分と同じようにもろく、傷つきやすい人間だと思わない！ どうして、その人がどこかで苦しんでいると思わない……！」

いつだって冷静な修哉が、怒声を放っていた。その姿に驚くと共に、僕の中に喜びが浮上してきた。

「あいつを……。あいつたちを傷つけるってんなら、俺は……。てめえらを許さねえ……！」

「……修哉……」

僕は泣いてしまいそうだった。修哉は…きっと、僕が空を殺したとかいう変な噂を誇張して話していた先輩たちをたまたま見つけ、殴りつけてしまったのだろう…。そのことを、僕は本人の口から聞かなくても、曖昧ではあるが悟った。そう感じただけで、涙腺が緩んだ。

「修哉は空が辛い時には傍にいたし、回りくどい言い方をしてまで支えようとしてるんだよ」

ああ。そうだな、啓太郎。人は見えないところで、たくさんのものに支えられ、護られて生きているんだな。

「ふん……証拠でも…あんのか…？」

「……何？」

細い声があった。修哉は男から手を放し、唐橋の方に顔を向けた。

「…そいつが殺してないって…証拠でも……あんのかよ…」

「………」

唐橋はへへ、とほくそ笑んだ。

「へへへ……どうせ、そいつは警察に捕まるんだよ…」

修哉はゆらりと唐橋に近づいた。

「捕まって……裁判かけられて…へへ……実刑判決だ……」

「唐橋！ てめえ！！！！」

和樹が殴りかかろうとした時、修哉がそれを阻んだ。

「修哉！？ とめ」

和樹の言葉は止まった。なぜ止まったのか、見ればわかる。修哉の体から立ち込める、何かを察知したからだ。それは僕にも離れていくわかるほどだった。

「なんだよ……てめえ……」

「…まだ、しゃべるつもりなのか？ 俺はお前の声はもう聞きたくないんだが…」

修哉は冷たい顔で唐橋を見つめる。



……まさか……！！

「……死ね……」

「修哉！ よせー！！」

僕は走り出していた。

ドガアア！！

大きな音が響いた。校舎そのものが揺れたかのようなだった。

「……………」

修哉の拳は……床にめり込んでいた。唐橋は目を裂けんばかりに開き、口をパクパクさせていた。

「……命拾いしたな……唐橋」

和樹が修哉の体を押していたのだ。ずれた軌道は、唐橋の頭のすぐ傍にめり込んでいた。

「こらあ！！ 何をしている！！」

ごつい教師たちが出入り口からやってきた。きっと、美香たちが連絡したのだろう。

「…次はない。いいか……？ その腐れ果てた脳みそでよく考えるんだな…」

唐橋は力二のように口から血の混じった泡を吹き始め、失神した。

聞いた話では…後に唐橋は気が狂い、自殺してしまったのだという……。

「なぜ、こんなことをしたんだ？」

生徒指導室。ここに入るのは初めてだ。僕と修哉と和樹の3人は、先生たちが座るテーブルの目の前に立たされた。

「…あそこまでする必要はあったのか？ 柊」

先生はさつきから何度も同じ質問をしていた。

「……………」  
そして、無言の一点張り。これの繰り返しだった。

「唐橋は気を取り戻したそうだが、ひどく怯えている。病室内で暴れ、看護師さんや医師に怪我を負わせたそうだ。……今は、精神病院に移されたそうだ」

「精神病院……………」  
和樹が小さな声で呟いた。

「……………優等生のお前が、なんでこんなことをしたんだ？ これでは、大学入試に影響が出るのは必至だぞ？」

「……………優等生、か。……………ククク……………」  
修哉は小さく笑い始めた。

「何がおかしい？」

先生が冷ややかな視線で修哉を見ると、彼はようやく口を開いた。  
「優等生だつて？ それは、あんたらがそうしておきたいってだけだろ？ 俺をこの ゆりかご の中で飼い続けなきゃ、あんたたちの評価に関わる。あんたらにとって、生徒を管理・指導していくことよりも、俺を 優等生 にしておくことの方が大事な仕事だもんな……………」

「……………」  
評価に関わる？ なんのことだ？

「……………柊、俺たちは……………」

「先生……………」

修哉は先生の言葉を遮った。

「……………俺は自分のしたことを悔いるつもりはないし、改めるつもりもない。言っておくが、奴らが俺の親友たちを冒瀆しなければ、こんなことにはならなかった。俺も、あそこまでしなかった。……何かに責任を求めると言うのなら、それは奴らにある。それでも俺に責

任を求めると言うのなら、空と和樹は関係ない。こいつらはただの正当防衛だ。襲って来たのは、奴らなんだからな……」

「……………」  
先生は小さくため息をついた。

「たしかに、聞いた話ではそうらしいな。だが、そうであるからと言つて、人をあそこまで痛めつけていいわけないだろ。いい加減、ガキみたいな考え方をするのはやめろ」

「それは俺に言うことじゃないね。俺は教えただけさ。…人を無為に傷つけると、どうなるかを……………」

横目で見た修哉の眼は、恐ろしかった。たぶん、先生も同じ気持ちだろう。

「………… お前がそういう態度じゃあ、停学は免れんぞ」  
「もとよりそのつもりですよ、先生」

修哉はニコツと笑った。先生の背中には、きっと冷や汗が滲んでいるに違いない。

「だったら二人はもう用なしでしょ？ 帰してやってください」

「………… わかった。東と進藤、二人は授業に戻りなさい。君たちは厳重注意…ということにしておく」

「でも…修哉……………」  
僕が言いかけると、修哉は首を振った。

「俺のことはいいから、先生の言う通りにしろ。…気が変わらないうちに」

「……………」  
僕と和樹は一礼し、生徒指導室から出て行った。

「………… 修哉のやつ……………」  
教室へ戻る途中、和樹は言い始めた。

「本当の意味で何を考えているのかよくわからなかったが……………」  
すると、和樹は立ち止まった。

「和樹？」

「……あいつ、本当は何も信じちゃいないんじゃないか……？」

僕も立ち止まった。

「……それって、どういう……？」

そう訊ねると、神妙な面持ちの和樹は少し考えてから言った。

「……何となく感じたっていう話だけど、あいつはこの世の何も信じていないって言うか……もし、世界が滅びようとしていてもあいつは見捨てる……」

「……」

「……ような気がする。あいつのあの時の目を見ていて……そんな感じがした。曖昧な言い方だけだな……」

世界を見捨てる。その言葉が、頭の中に残っていた。

「俺、初めてあいつのことを怖いと思ったよ」

すでに、クラスメイトの間ではさっきのケンカが話題になっていた。あんまり話したことのない同級生にまで、そのケンカのことについて訊いてきた。そう、野次馬だ。その時にどさくさに紛れて、「空」のことについて訊いてきやがった。

「ぶっっちゃけ、何したの？」

チャラチャラした女が言った。

「……」

「ねえ、教えてよ。東、行方不明のことに関係してるんでしょ？」

「……つーか、殺したってのは本当なのか？ 山中に埋めたって聞いたけど……」

僕はキレそうだった。

噂に惑わされる奴ら。

興味本位で人の悲しかったことを訊き出そうとする奴ら

できることなら……この場で、「お前たちを埋めてやろうか」と  
言っただけだった。

「み、みんな……やめろよ。空にだって言いたくないことあるんだよ」  
啓太郎が止めようとするが、野次馬どもはそれを無視して訊こう  
とする。

本当に殺してやろうか……。

ドクン

胸が熱かった。情熱とか、そういう類のものじゃない。心を焦が  
す、何かが燃え始めていた。

不確かだ、曖昧で……それでいて、はっきりとしているもの……。

「いい加減にしろよ!!」

机が叩かれた音とともに、怒声が響いた。それは……和樹だった。  
彼の顔は怒りで震えていた。

「てめえら！ 興味本位でそういうことを訊き出すとすんなよ！  
！」

教室は静まりかえった。みんなの視線が和樹に集まる。

「空にとって、一番大事な幼馴染がなくなっただぞ！ なのに、  
空は誘拐犯だとか殺人犯だとかあることないこと言われて、可哀そ  
うだとは思わないのか!？」

「……………」  
「言われている空の気持ち……考えたことあんのか!?!? お前ら  
はそれさえも考えられないのか!? それでも、クラスメイトかよ  
!……!」

和樹……。僕の中で燃え始めていた炎が、消えた。

「ギャーギャーわめくなよ。これだから頭の悪い奴は……」

「！ 誰だ、ゴラアア！！」

ガラガラーン！

和樹は近くにあった机を蹴り飛ばし、声が聞こえた方へ進んだ。

「てめえか！」

和樹は男子生徒の胸倉を掴み、睨みつけた。

「もういつぺん言ってみろコラア！！」

「低度な奴は、迷惑だつて話だよ！」

「……んだとお！！ ウラアアアア！！！！」

ガシャーーン！！

和樹はその生徒を思いつき殴りつけた。そのまま倒れこんだ。その間、和樹は馬乗りになって殴り始めた。

「和樹！！」

いつの間にか啓太郎が走り寄り、和樹の動きを止めた。

「啓！ 止めんなあ！！」

「これ以上やったら、停学どころの話じゃなくなるぞ！！」

「うっせえ！ 俺の……俺たちの親友を馬鹿にする奴は、誰だつて

許さねえ！！」

「だからつて、暴力で証明するのは良くないよ！！」

「じゃあどうしろつてんだ！！ こいつら……糞みたいな野次馬ど

もは、ああやって興味本位で人を追い込んで追い込んで……！ 殴らなきゃ、理解させることができないことだつてあるんだよ！！」

その時、教室に先生が入ってきた。男性教師が、何事かという顔で。

「離せ！ 啓！！」

「駄目だ！ お前が退学になったら、僕や空はどう感じると思う！

？」

「……………！！」

和樹の動きが止まった。

「…………お前がいなくなったら、寂しいじゃないか……。それを、わ

かっつけてくれよ……!!」

「……………」

和樹は体から力を抜き、立ち上がった。

「けっ、気持ち悪い友情だな」

「!!! うらあああ!!!」

その一言に、再び火が付いた和樹。今度は啓太郎一人の力では止められなかった。

「やめなさい!!!」

教師たちが一斉に和樹に飛びかかる。

「んだよ!!! 離せ!!!」

床に押し付けられた和樹。彼は教師たちの腕を振り払おうと、暴れている。

「よせ! 和樹!!!」

いつの間にか、大声を放っていた。

「……………空……………」

和樹は僕に目をやる。

「もいいよ、和樹。お前がそうしてくれるだけで、本当にうれしいよ。ありがとう」

心から出た言葉だった。

「一言言っておく」

僕は周りに目をやった。

「お前らがどう思うと知ったこっちゃない。けど、これ以上友人を傷つけるようなことをするなら……絶対に許さない。絶対に許さないからな!!!」

和樹は相手の鼻骨を折るなど、全治1ヶ月のケガを負わせた。：

和樹は無期限の停学処分となった。

すでに海は駅前に行っているらしく、僕は帰り道が駅の方である美香と一緒に、途中まで一緒に帰ることにした。

「今日は……大変だったな」

僕は空を見上げながら歩いていた。

「そうね……。いろんな事がありすぎて、あつという間だった……」

「……今日は辛い一日だった。けど、すごくうれしい一日でもあった」

「……どうして？」

美香の声はトーンが高かった。ご機嫌、ということだろうか。

「友達がどれほど大切な存在なのか……思い知らされた一日だった。こんなにも、みんなのことを好きだと感じたことはなかったよ」

「羨ましいな、ホント」

「……なんで？」

僕はなんとなくわかっていった。その理由を。

「男の子の友情って、すごくきれいなんだもの。誰かを思いやって、その思いやりで自分が損することをいとわない。……ほら、女の友情は結構もろいって言うでしょ？ だから……男子がうらやましい。私も、男の子として生まれたかったな……」

女だから、そういう友情の形に憧れる……。

「何言ってるんだ。男も女もない」

「え……？」

僕が立ち止まると、美香も立ち止まった。

「男の友情だとか、女の友情だとか……そんな境界線なんて、存在しないよ。なんつーか……そう区切るのって、おかしい。だって、大切な存在するのは男も女も関係ないだろ？ 大事なのは、どれだけ他人を思いやれるかどうかなんだ。それにな、美香」

美香は僕を見つめた。

「……お前は、僕の親友だ。女だからって、和樹や啓太郎と区別するようなことはしないよ。お前は大事な友人だ。お前たちのためだ。ってんなら、なんだってやってやるよ。……絶対にな」

そう言っ、僕は微笑んだ。

友人の……大切な人たちのために、自分を犠牲にするってのも悪くない。そうだろ？

「……空……」

彼女は僕から目をそらし、少し離れた。

「やだ……泣いちゃいそう」

「……………」

僕に涙を見せないようにしている彼女の背中には、とても美しくかった。

「ごめん、先に帰るね」

「えっ？」

そう言って、美香は歩き始めた。すると、再び彼女は立ち止まり、今度は僕の方に振り向いた。そこには、涙を流しながらも笑顔の彼女がいた。

「……今ね、すっごく空と話したい。たくさん話したい気持ちなの。ずっと話していたい気持ちで一杯。だからさ……このままだと、空のことまた好きになっちゃいそうだから……！」

じゃあね、バイバイ

とびつきの笑顔。そして彼女は向き直り、軽やかに走って行った。小さな光の粒が、彼女が過ぎて行った場所に残っていた。

以前、空に告白され、そのことについて相談した時と同じ気持ちになった。どうして、僕の周りにはこんなにも美しすぎる女性がいるんだらうか。空も海も美香も……僕には、勿体ないくらい光り輝く心を持つ女性だ。

大切なものへの願い……かけがえのない宝物

「遅いよ。何してたの？」

海は御立腹だった。どうやら、3年生とのケンカなどのことは知らないようだ。先生たちは周りに漏れないように奮闘していたからな。とは言え、人の口には門が立たないと言うように、話題になるのは時間の問題だろう。

「ごめん。ちよつといろいろあつてさ……」

「……………」

何かを察知したか、海は僕の顔を見つめる。

「な、何？」

「…顔に傷がある。どうしたの？」

「傷？ あっ…これが……………」

すっかり忘れていた。こればかりは隠せるものじゃないからな

…。

「ちよつと……………ね」

「……………」

「な、なんだよ」

海は顔を伏せた。

「…隠し事はしないで。空は言いたくないかもしれないけど……………大事な人が傷ついてるのを知らないまま、自分だけ平穩に過ごすのは……………結構辛いんだよ……………」

多くの人が右に行き、左に行く駅前。そんな中で、海の優しさを見た僕だった。

「…後で説明するよ。今はとにかく、資料を集めよう」

「……………」

「約束する。…な？」

「……………」

海は顔を上げ、何も言わずうなずいた。

僕たちは駅から少し離れた図書館へ向かった。役所の近くにあり、ここらは駅前に比べれば人通りが多いわけではない。完全に舗装された図書館の周りには、ところどころ植木がある。自分からしてみれば、それは中途半端に自然を表わしているだけに過ぎないと思う。まあ、ないよりかあった方がきれいに見えるんだが。

平日ということもあり、図書館にはあまり人がいなかった。休日になると勉強をしに来た人たちや、暇つぶしに本をずっと読んでいる人たちが多くなる。

「…うーん。どこら辺にあるんだろうな…」

「…そう言えば、空ってあんまり図書館みたいなどころには来ないよね」

僕たちは小さな声で会話をしていた。

「来る必要ないもんよ」

「…そうだね」

海は呆れた顔をしながら、本を探し始めた。

図書館が…。他人が考え、知るした知識を他人へ教えるもの。遠い過去から現在へと続く足跡を伝えるもの。人が盲目的に成長するには大切な空間…。それが図書館なのかもしれない。

閉館時間。その時まで僕たちは調べ続けたが、これといって情報となるような資料は見つからなかった。

「…これからどうしよう…」

夜の帰り道。すでに8時を過ぎている。

「手掛かりがないんじゃないかあ…どうしようも…」

「……………」

手掛かりか…。

レイディアント…それしか…。

(……………空……………)

「……!!」

僕は立ち止まった。今は……。

「? どうしたの?」

海は頭をかしげた。

(……空……空……)

久しぶりに聴く、あの声。女性のものだ。

「ねえ、どうしたの?」

海には聴こえていない。やはり……。

(……あの場所へ……)

あの場所……?

(……わかたれた光を結ぶ、あの場所へ……)

わかたれた、光……。

(……あなたを導くもの……私たちの気高き幼子……)

導くつて……手掛かりでも教えてくれるのか?

(……運命の扉……かすかな道標となりますよう……)

体を覆っていたものがスーツと消えていった。と同時に、夜風が

路地を駆け抜けていった。

「……? どうしたの? ボーっとして……」

海は心配そうな顔を向けている。

「……いや、ちょっと……」

なぜか、ある光景が一瞬、頭の中をよぎった。それは桜。桃色の花びら舞う、春の風景。そこに桜は一つしかなかった。

「……海」

「???」

「……先に帰ってきてくれ。ちょっと、行かなきゃいけない場所があるんだ」

「……えっ?」

海は当惑していた。

「ど、どこに?」

「いいから、帰ってる。また連絡するから」

僕は帰る方向とは逆の道へ走った。

「ちよ、ちよっと……空!？」

桜舞う場所。そこは今のところ、一つしかない。全速力で小学校の裏山へ向かった。日が完全に暮れ、世界は闇の世界に堕ちた。この中でうごめくのは、闇に生きるものたちだけ。僕のような日に当たる人間には、無縁。

「ハア…ハア……」

くそ…暗い。道路とかでは電灯があつていいんだが、山道は真っ暗で何も見えない。今日は月も出ていなく、余計に暗い。

夜の森の中つてのは、すごく不気味だ。なんだかジメジメしてるし、獣の音が聞こえる。

光から逃れて、影に潜んでいたあまねく生物が動き出した。光は影を恐れ、影は光を恐れる。だから、人は夜を怖いと感じるんだろう…。

「えっと……こっちか…?」

記憶を頼りに、僕は山道を進んだ。その時…。

(…こっち…)

何かが僕の手を引っ張った。……ような気がした。どこかへ連れて行くかのように、それは僕を導く。足が勝手に動く。優しい何か、僕を行かせるべき場所へ誘う。…誰かが…何か…。

気がつけば、山頂に出ていた。息を切らした僕の体は、寒いはずの夜の中で暖かくなっていた。

なんか……光を感じる。これは……

「何かに導かれる……ってのはこっついうことかねえ」

声が聞こえた。この声は……覚えがある。僕は声が出た方に振り

向いた。

「…お前は…!!」

「久しぶりだね、空」

そこにいたのは、リサ…だった。微笑みながら、扉から放たれる  
淡い光を受け、こっちへ歩いて来る。

「こっちは寒いな。夜だからかな」

薄着の彼女は、体を縮ませていた。

「…気高き幼子…はお前のことか…」

「はっ？」

リサは首をかしげた。

「あんた、何言ってるの？ 私のどこが幼子なのさ」

リサは両手を広げて見せた。

「…まあ、気高くもないかな…」

「…あんた、夜空の星になりたい？」

リサはぶんぶん腕を振り回した。

「ハハハ…遠慮しておきます」

背筋が凍ったよ…。

「それにしても、どうして私がここにいるってわかったのさ？」

「どうしてって…お前が知らせたんじゃないのか？」

「…？ またわけわかんないことを。どうせ、頭の中で聞こえた声  
を私が送ったものと勘違いしたんでしょ？」

「あ、ああ…」

「私はテレパシーなんてものを送れる人間じゃないよ」

宇宙人じゃないもんね…。

「…てつきり、リサが他人の声を利用して伝えたのかと」

「神様じゃないんだ。できるわけないでしょ？ …それに、あんた  
にだけ聴こえる声はあんたにしか聴こえないようになってんの」

「…え？」

「そういう風に定められてるのさ、遙か古の時代から。あんたは他  
の人間とは別物。特異 ユニーク な生命。この世界では、本当の

意味で存在し得ない存在」

「な、何言ってるんだよ。冗談じゃあるまいし……」

だが、リサの眼は真剣そのものだった。冗談を言うようには見えなかった。

「…冗談だと思いたければそう思えばいいさ。けど、よく振り返って考えてごらん。あんたにだけ見えたものは全て現実。あんたが体験してきたことは夢でも何でもないんだから」

夢ではなく、現実。それはわかってる。わかっているけど……。

「それはさておき、とりあえず話を本題に戻そうか」

リサは僕の目の前に止まった。思ったよりも身長は低い。とは言っても、160センチ程度だろうか。

「私がここに来たのは、あんたを連れて行くこととしたからさ」

「連れて…行くってどこに…?」

「レイディアントに決まってるじゃない」

な、なんだって!?

「そ、そんなことできないよ!」

「? 何だよ?」

「何でよって……」

そんなの、言わなくてもわかるだろ。

「あんたが声に導かれてここに来たのも、レイディアントに行くためだったのさ。いいかい? それはあんたの意思とは何ら関係なく引き起こされた、言わば必然的なものだ。絶対的な力が働いて、一つの螺旋が生まれる。そう、運命ってやつさ」

「…自分の意思に反してでも、それは引き起こされるってことか?」

「要するに、そういうことだろうね」

「……………」

そんなこと言われても……。

「…僕はまだそんな所に行くことはできない…」

僕は弱い声でしゃべっていた。

「何で?」

「何でつて…そりゃ、家族や友達…自分の生活があるからだよ。…見たこともない世界に、いきなり行くこうって言われても……」

すると、リサは大きくため息をついた。

「まったく……あんたつて、今の現状知ってるの？」

「げ、現状……？」

彼女はキツと、強い視線を僕に向けた。

「あなたの幼馴染、日向空に命の危険が迫っている。そうね…1年以内には殺されるかもしれない」

「!!!？」

「時間がないつてことさ。彼女を助けられるかどうかは、あなたにかかっている。…だのに、あなたはこっちでウジウジしてる。最も大切な人がいなくなつたつてのに、どうしてすぐに行動を起こさなのさ？ 彼女はあなたにとって、助けに行く価値もない人だつての？」

「なっ!!!？」

僕の頭に、血が昇った。

「なわけないだろ！ あいつは、大切な女性だ！」

彼女に負けじと、僕は前へ出る。

「お前に何がわかる！ 目の前でさらわれた気持ち…理解できるつてのか!？」

「………あんたさ、馬鹿じゃないの？」

「な、なんだと!!!？」

リサは呆れたように顔を振った。

「他人の気持ちを理解しようなんて、絶対に無理なんだよ。それがたとえ兄弟であつても、恋人同士であつても、夫婦であつてもね。人が人の気持ちを理解しようとするのは、その人の想いに近づきたいからだよ。少しでも近づいて、その人の苦しみ、悲しみを緩和してあげられるようになる。そこまで至るのに、多くの時間が必要となる。…あなたは言ったね。『何がわかる』つて。わかるわけない

じゃん。そうやって憤りをぶちまけてる奴の気持ちなんか、私は近づこうとも思わないからさ。近づいたところで、あんたはそれを察知してくれない。私の気持ちにさえ、近づこうともしてくれないだろうさ。今のままじゃね」

僕は言葉を失った。言い返す言葉が、一つも見つからなかった。「他人への思いやりさえ欠ける人間が、『大切な女性』とかほざくな。彼女が可哀想だよ」

「……………」  
彼女の言葉が突き刺さる。僕はいつの間にか顔を沈めていた。

「そのままじゃあ、仮に今ここでレイディアントに行ったって失敗するだけだろうね。いや、今行かなくても、後ほど行ったとしても結果は同じだ。彼女を助けられないまま挫折するか、逆に自分の命を落とすか。いいか？ 彼女をさらった奴らは生半可な気持ちで相手になるような奴らじゃない。簡単に人を殺せるような輩だ。それを踏まえた上で、考えるんだね」

「……………敵は一人じゃなかったのか？」

「そうよ」

「……………」

背後には多くの敵。恐怖に震え、今でも他人に当たるような人間が彼女を救うことなんて、絶対にできない。

想いがもろい。思っていたほど固くはない…。

「…話を元に戻そう。どうするの？ レイディアントへ行く？ 彼女の生死は、あんたの行動にかかっていると行って過言じゃない。私としては、今のあなたはかなり心許ないけどね」

彼女は僕の落ち込みを無視し、どんどん話を進める。ついでに皮肉交じりだ。

自分はどうしたいのか。何をすべきで、何をしたいのか。

愛する人を助きたい気持ちだが、そこまで強くはないのではないのか？ 絵空事だと、心のどこかで思っていたんじゃないのか？ 誰かが、勝手に助けてくれると思っていたんじゃないのか？

行動を起こさない者に明日は、ない。過去を振り返り、信念を定めない者に未来は…存在し得ない。

僕は本当に、修哉に言われたことを理解していたのだろうか。その時だけ、理解していた気になっていただけに過ぎないのかもしれない…。

僕はつばを飲み込み、顔を上げた。

「お前が思っているように、今の僕じゃあ空を助けることなんて到底できないだろう。だから………」

リサは何も言わず、僕を見つめる。水晶のように輝く瞳。真夏の太陽のように、僕の心を突き刺す。

僕はもう一度、つばを飲み込んだ。

「今は行けない。こんな弱い気持ちでは、お前が言ったように途中で死ぬのがオチだ。…彼女も助けられない。それが一番辛い………」

「……………」

「だからこそ、もう少し時間をくれ。……頼む」

僕は小さく頭を下げた。

「絶対に決心できるの？」

リサは小さな声で言った。僕は頭を上げた。

「…約束する。必ず決心をする。それがどんなことであっても」

「そっか…。なら、今日は引き下がるとするか」

そう言っつて、リサは笑顔になった。その笑顔は、今まで見た彼女の表情の中で最も美しいものだった。

「できれば2、3日の間に決めてほしいけどね。残された時間が1年と言っつても、それはあくまで私の予想。奴らの考えが変われば、すぐにその時は訪れてしまう。急かすようで悪いけどね」

「…いや、そう言っつてくれた方がありがたい。現実を見れる」

「…そうか。まあとにかく、私はあんたを信じるとするよ」

リサは門がある方へ向き、ゆっくりと歩き出した。

「私の期待と信頼を裏切らないでよ？ あんたは 独り じゃないんだからさ」

ドキツとした。独りじゃない…。その言葉が、どれほど心強いものかを知っている。

「…リサ。一つ言っておく」

リサは立ち止まったが、こちらに振り向こうとはしなかった。

「絶対的な力が働き、僕を導いていると言ったよな。…だけど僕は…僕が進む道は、僕自身が決める。何かに作用されて決めるものじゃない。何かに定められているわけでもない。僕の意味は、僕のものだ。運命なんてものは信じない。先にあるものは、自分で選び取る」

成し遂げようとするものが「運命」の一言で片づけられてたまるか。僕は…僕の全ては、僕のものだ。

「そうやって考えていることも運命かもしれない。あんたが熟慮した結果、選び取った道筋さえも…運命という名の軌跡なのかもしれない」

「…そうかもな。けど、そうじゃないかもしれない。要は気持ちの問題さ」

クスツ。リサは小さく笑った。

「…なんだか、おかしい。あんたのこと、まだよく知らないけど…あんたらしいって思った。…何でだろうね」

すると、リサは僕の方に振り向いた。金色の長い髪が、夜風になびかれて動く。

「…もしかしたら遠い昔、私とあんたは知り合ってた…今のよう…に、何かを話していたのかもしれないね…」

「遠い…昔…?」

「そう考えたら、人と人の出会いがどれほど大事なものかわかる気がする。…本当のことには、程遠いのだろうけれど…」

夜空を見上げる彼女の顔は、暗くてよくわからなかったけど…想像できた。

「…じゃあ、待ってるよ。全てが始まり、全てが終わりなる場所で…」

リサはそう言って、闇夜の奥へと消えていった。

「…運命、か…」

僕は星空の遠くを見つめた。一つ一つが宝石のように、チカチカと光を放っていた。まるで、己の存在をそこに示しているかのよう  
に。

「…お前が…お前たちが僕をここへ導いたのは……僕に決心させるためだったんだろ？」

僕は遠いどこかにいる誰かに向けて、言葉を発した。いるかどうかは不確かだけど、なぜだろう……そこにいる。確かに、そこにいるんだ。

「…いいさ。僕がそう勝手に思っておくよ。見ている。『運命』が何を僕にさせようとしているのか分からないが……」

夜空を睨んだ。

「僕はお前たちが望んでいるような形にはならない。僕は僕が望むように進み、生きる。お前たちに左右はされない。…だから、空を救ってみせる。絶対にだ！」

## 8章…さようなら 近くて遠い星への旅路へ

メールが届いた。修哉からだった。

「3週間の停学処分」

退学ではなかった。それで少しホッとした。

学校では、やはり修哉や和樹のこと、そして僕のことと話題が持ちきりだった。クラスメイトは僕から一歩引いたところで知らないふりをしているようだった。良くも悪くも、空の話は出てこなくなつた気がする。

「…居心地、悪いね」

美香は頬杖をつきながら言った。

「ギシギシしてる。嫌な空気だよ、ホント」

いつになく、啓太郎はイラついていた。無理もない。

「こんなにも学校が嫌だなんて、生まれて初めてだよ」

「……………」

啓太郎が言っていることには、ある程度同意だな。そう言っておきながら、啓太郎はちゃっかり来ているわけだし、自分と美香もそっぴだ。

「…………… それにしても、日常なんてのは簡単に変わっちゃうものだな……………」

僕は他愛もないように話しているクラスメイトたちを眺めた。大笑いしたり、ゲームの話で盛り上がったたりしている。

「つい最近までは僕たちにとっての普通があったのに、今ではいつか割れてしまいそうな湖の氷みたいだ」

「何かあれば、すぐに以前みたいなことが起きるってこと？」

美香がそう言うと、僕はうなずいた。

「対人関係はもろいよな。なのに、なかなかそれがわからない」  
「……そういうもんだよ、きっと」

昼休み。教室では食事しにくいので、僕たちは屋上で食事をしていた。

「修哉、停学3週間なんだね」

美香はご飯を口に運びながら言った。

「まあ……あれだけのことをやっておいて、退学にならなかっただけマシだよ」

僕は苦笑いをしてしまった。危うく、殺すところだったからな。

……それにしても、修哉ってあんなにパワーがあるんだな。拳が床にめり込んでたし……格闘家もびっくりだろうな。

「和樹も退学にならなくてよかったよ。相手を骨折させちゃったのにさ」

「あいつはそれなりに優等生だからね。それに、生徒会役員でバスケット部のエースだ。学校側も、一回くらいは許してあげるつもりなんだと思う」

啓太郎の声には元気がなかった。啓太郎は和樹と幼いころからの知り合いだ。つまり、僕にとつての修哉のような存在だ。

「そう言えば、空も生徒会だよな？」

「ん？ そうだけど……」

すると、美香と啓太郎は目を合わせて笑い出した。

「な、なんだよ？」

「なんか……空って、あんまり生徒会役員としての風格が漂っていないっていうか……」

「影が薄い、かな」

「あのなあ……」

どうせ書記ですよ。ふん。

2年3組出席番号3番、東空君。1年1組27番日向海さん。至急、校長室へ来てください。繰り返します……

校内アナウンスだ。

「空と海ちゃん…？　なんでまた……」

「……………」

どことなく、嫌な予感がする。

「…とにかく、行ってくるよ」

「弁当食べてからでいいだろ？　絶対に昼休み終わっちゃっよ」

「そしたら授業サボるよ」

僕はそう言っただけで笑い、屋上から出て行った。

「失礼します」

ノックをし、僕は校長室に入った。ここに入るのは初めてだ。よっぽどの用事がなければ来ないところだし、来る理由のないところだ。

校長室にはすでに、海が来ていた。

「あ…空」

僕はうなずき、彼女の隣に座った。

「…校長先生、一体何でしょうか？」

僕はうろついている校長に話しかけた。

「…うむ。実は、君たちに用事のある方々がお見えになってるのでね…」

すると、校長はもう一つの部屋に案内した。そこはお客様用の部屋…のようだった。長いソファが二つあり、それに挟まれるように木製のテーブルが置いてある。

一つのソファには背広を着た男性が、たばこを吸いながら座っていた。その後ろに、同じような背広を着た男性が立っていた。そ

れも、背筋を真っ直ぐにして。

「お待たせいたしました」

校長は座っている男性に一礼した。

「…では、校長先生…」

「あ、はい」

男性の低く、冷たい声が放たれると、校長はこの部屋から出て行った。

「……………」

「…何してる。座りなさい」

座っている男性は顔も動かさず、目も動かさずにそう言った。僕たちはとりあえず、反対側のソファーに座った。

目の前の男性は、オールバックのひげ面だ。年齢は…40代前後だろうか。後ろの人はまだ若輩者で、20代前半だろう。

それにしても、なんだ…この異様な空気は…。

「…空……この人、なんだか怖い…」

海は男性に聞こえないくらいの小さな声で言った。僕は「大丈夫」と返した。

男性は何も言わず、持っていた何枚かの書類を眺めていた。

「アズマ……空、君だね？」

すると突然、男性は僕に目をやった。

「…はい」

少し驚いたが、落ち着きながら答えた。

「ヒナタ……海さん？」

「は、はい」

心なしか、海の声は小さかった。

「さて、と」

男性は書類をきれいにまとめ、後ろの男性に渡した。

「君たちがどうしてここに呼ばれたのか、わかるかい？」

前のめりになった男性は、たばこをくわえながら言った。

「……………いえ」

とりあえず、僕が答えた。

「ふむ、なるほど。では……」

「あの、その前に」

僕は手を挙げた。

「まず、あなた方が誰で、何なのか教えてくれませんか？ 何も知らされないまま呼び出されたので、困惑しているんですが」

そう言うと、男性はじーっと僕を見た。そして、たばこを口から離した。

「……困惑していると言う割には、冷静に見えるのは気のせいかな？」

「気のせいですよ。僕はともかく、彼女が困惑していると思います。な？」

「えっ？ え……と、はい」

海はきよろきよろして言った。なるほど……この人たちが誰なのか、わかった。

「とにかく、誰なのか教えてくれませんか？」

「……ハッハッハ……なるほど」

男性は少し笑い始めた。

「たしかに、何者なのかも教えぬまま話を進めてはならないしな。

……私たちは警察だよ、空君」

警察……。やっぱりな。

「私たちが誰なのかを言えば、なぜ君たちが呼び出されたのか容易に理解できると思うのだが……どうかな？」

「……空のことですか？」

そう言うと、男性はうなずいた。

「5月12日の夕方……日向空さんが行方不明になった。その現場で、君たちは気を失って倒れていた。……そうだね？」

僕たちは何も言わず、うなずいた。

「……同級生で親友の柊修哉……彼によって救出された……だね？」  
再びうなずいた。

「…単刀直入に聞こうか」

男性はたばこを吸い、フー……と煙を吐いた。

「あの、たばこはやめてもらえますか？ 未成年の前ですよ」

僕はズバツと言った。

「…そうだったね」

男性はたばこを消し、灰皿に置いた。

「…君たちは彼女がさらわれる現場にいた。それは間違いない。なら…誘拐した犯人を見たはずだ。それについて教えてもらいたいのだが…」

「…体が大きく、そう…2メートル近い身長をした男性で、格闘家のような筋肉を持っていました」

「…服装は？」

「全身を黒いタイツできていて、青っぽいベルトをしていました。フードのようなものを深くかぶっていたので、顔はよくわかりませんでした」

「なるほど……」

すると、男性はソファーにどっしりと座った。

「…では、次は海さんに答えてもらおうか」

男性は視線を海に移した。

「校内で空君が殺して埋めたんじゃないかという噂が流れていることについてどう思うか…答えてくれないかな？」

「えっ…？」

海は表情がこわばった。

「待ってください。そういう話を彼女に……」

「私は彼女に質問をしている。……君には訊いていないんだよ」

「……………」

「…それで？ どうか…海さん」

「…噂は、ただの噂です。何も知らない人が勝手に空想で話して、それが勝手に独り歩きして……。真実とは全く違います。それは、現場にいたからはっきりと言えることです」

海は強い言動だった。

「…なるほどねえ…」

男性は視線を下にやると、すぐに上げ、今度は僕を見た。

「…それにしても、空君。君は幼馴染がさらわれたっていうのに…  
冷静だね」

「……………」

「普通、目の前でさらわれたらショックがあるだろうし…。なぜ、  
そんなにも冷静でいられるのかな？ それとも、たいして気に留め  
ることもないということかね？」

「何言ってるんですか！ 空は…空は…！！！！」

海は突然立ち上がった。

「海、よせ」

「でも……………」

「いいから、座れって」

「……………わかった」

海は顔をそらしながら座った。

「…それで？ 質問に答えてもらえるかな」

「……………」

僕は小さくため息をついた。

「…僕は冷静でいないといけないんです」

「…ほう…なぜかな？」

「そこまで、あなた方に言う必要なんてないと思いますか？」

「！ なんだと…！！」

すると、後ろの男性が動いた。

「安原。お前は黙ってる」

「……………はい」

再び、石のように止まった。さっきから、僕の言動にイライラし  
ていたんだろうな、あの人。ざまあみろってんだ。

「…君は面白いな」

「……………？」

男性は自分のあごひげを触りながら、僕を見ている。

「君はその年齢で自分を押し殺そうとしている…。誰にでもできることではない。…彼女たちの存在が、君をそうさせたのかもしれない…」

「……………」

「だが、覚えておくといい。君のその能力は果たして、結果的に最善の事態を招くとは限らない。たぶん、そうした経験は何度もあるはずだ…」

「…余計なお世話ですよ。誰も、あなたに精神分析なんか頼んではないと思いますが？ それとも、そういうのが趣味ですか？ だとしたら気味が悪い趣味ですね」

僕はあざ笑うかのように微笑んだ。

「その口のきき方、いい加減にしろ…！」

後ろの下っ端が突然、怒鳴った。

「…安原…貴様がいい加減にしろ…」

男性は後ろへ振り向かないまま言った。

「し、しかし、克正さん……………」

「安原：今日、この場でしゃべることは許さんと最初に言ったはずだ…。それ以上しゃべったらどうなるのか…わかっているのか…？」

ゾツとした。背筋に、氷を突然つけられたような感覚だった。それは、海も同じだったに違いない。

でも、この感じ…誰かに似てる気がする…。

「…まあいいだろう…。今日はここまでにしておこうか…」

そう言って、男性は立ち上がった。

「…君たちも帰っていいよ。…すまなかつたね、昼休みの最中に…」

「……………」

まったくだ。昼飯、食い損ねたじゃんかよ。

僕たちは立ち上がり、部屋から出て行った。警察の二人も、同じように出て行った。

校長室に入った時、突然、廊下への出口のドアが開いた。そこから、停学中である修哉が入って来たのだ。なぜか制服だった。

「しゅ、修哉!?!」

「修哉君!」

「……よっ」

修哉は小さく手を挙げた。そして、何なのかよくわかっていない校長の前に立った。

「校長、これを」

すると、修哉はポケットから何かを取り出し、校長の机に置いた。

「……これは……!?!」

「俺、今日限りでこの学校を辞めます」

「!?!?!?!」

や、辞める!?!

「修哉、ど、どうして……!?!」

「……いいか、空。こいつら、なぜ俺を退学にしなかったんだと思う? なぜ、十数人に大ケガをさせ、一人は精神病院送りにしたのに、処分はたかが停学なんだと思う?」

「えっ……?」

「それは、俺が全国トップレベルの成績の持ち主だからだよ」

「……!?!」

「こいつら教師は、自分たちの手柄を離したくないがために、俺を退学にさせなかったんだ。考えてもみる。唐橋を含め、3年生の5人は退学処分だ。あつちから手を出したとはいえ、あまりにも理不尽な処分だ」

座って口を開けている校長を、修哉は見下していた。

「自分たちの利益のために、評価のために生徒を犠牲にする。……空。世界つてのは所詮、こんなもんだよ。限りなく理不尽で、限りなく不公平なんだ。学校では教師たちの欲望が渦巻いている。俺たちは、そんな奴らのための捨石にされる。……そんなこと、俺は認めない。絶対に認めない。……だから退学を決意した」

修哉は僕に顔を向けた。

「…でも、これからどうするんだよ!? 高校を中退したら……」  
「そうだよ! せっかく、修哉君にはいい大学にいけるほどの能力があるのに……」

僕たちがそう言つと、修哉は笑顔で首を振つた。

「高校中退だろうがなんだろうが、俺は俺のために生きる。俺は生まれながら俺のものだ。何かを失つて、何かに傷つけられたとしても…世界が俺を否定しようとも、俺自身が正しいと信じた道を選ぶ。俺は…俺たちは決して独りじゃない。そうだろ?」

「……修哉……」

その時、自分の心の中で何かが動いた。

「高校に通わなくなつて、大学に行かなくなつてできることはいくらだつてあんだよ。自分が諦めない限り、俺の道は閉ざされない。そう信じてる。馬鹿にされようが、けなされようが、そんな奴らは放っておけばいい。俺にはお前たちがいる。…それだけで十分だ。それだけで、笑顔でいられる」

心の在り方…。どうやって生きるのか。逃げないで、駆けてゆけるのか。

自分は…何をしたいのか…。

すると、オールバックの男性が修哉に近づいて行つた。何も言わず、ただにらみ合つているように見えた。

「……これは、ある意味あんたが望んだことだ。文句は言わせないぜ?」

修哉はニヤツとして言つた。すると、男性もフツと微笑んだ。

「…いいだろう。お前が何をしようとし、何をしたいのか…よくわかつているつもりだ。私の知る範囲内で、好きなようにやるがいい」  
「………端っから知ってるさ、そんなことはさ……」

修哉がそう言つと、男性は不敵な笑みを浮かべたまま、出口へ向

かった。そして、僕に振り向いた。

「……これからも、仲良くしてやってくれ。空君……」

不敵な笑みを浮かべた。そして、下っ端の警察官を連れて出て行った。

そうか……あの人は……

「まさか……修哉君のお父さん……？」

聞いたことがある。修哉のお父さんの職業は……警官……だと。

「悪かったな、変な時にあんな話しちゃってさ」

廊下。修哉は窓の外にある中庭を眺めていた。

「……」  
海はふてくされていた。

「そんな顔しないでくれ。これは、俺が決めたことなんだから」

「……勝手に辞めるだなんて……ひどい」

修哉は「参ったな」と言いつつ、微笑んだ。

「……俺は自分ができる、精一杯のことをするためにここを辞める。

そもそも、俺は前々から辞める予定だったからな」

「えっ……？」

「ずいぶん前から決めてたんだ。俺はここに在るべきじゃない。ここにいて、親の敷かれたレールを進むことが、俺の進むべき道だとは到底思えなかったんだ。俺が行く道は誰かに決められたものでも、定められているものじゃない。己自身で定めるものだ。……俺は、その当たり前のことをしたまですることさ。こんなんでも、かなり熟慮した結果なんだよ」

修哉の目はキラキラと輝いていた。それが、とてもうらやましかった。

「……修哉、お前……何をするつもりなんだ？」

「……」  
修哉は腕を組み、考え始めた。

「……まだ漠然としたものなんだけど、要するに……」  
彼の顔に、僕と海の視線が向く。

「……世界を変えるようなことをしたい。それで……理不尽な運命とやらをなくしたい。……ハハ、何言ってるんだか」

「……………」  
恥ずかしがりながら照れるその姿の中に、修哉の決意は確固たるものなのだと思わせる、何かが見えた。

僕にはそのような決意はあっただろうか。修哉の決意と同じほどの強固な意志を持っていただろうか。「彼女を助ける」というのは己のしようとするのではなく、ただの願いだっただのかもしれない。そういう風に考えてしまうことさえ、自分は軟弱なんだと知らしめるものだった。こうやって考えてしまうのは自分の悪い癖だ。ネガティブ思考……。

どれほど彼女のことを愛しているのか……。少し考えれば、わかることではないだろうか。自分のことは、自分がよく知っているはずなのに。

「……あれ？ 修哉じゃないか。なんで？」

教室へ戻る途中にある渡り廊下で、美香と啓太郎が待っていた。

「二人とも、何してんだ？ 授業中だろ？」

「少しくらい大丈夫よ。それより、大丈夫だった？」

「……まあね。イラついたけど」

「突っかかりすぎだと思っただけ……」

海は苦笑していた。

「ところで、修哉はどうしたんだよ？」

啓太郎が言った。

「ん？ 退学届を出しに来たんだよ」

「……へ？」

「えっ？」

この後の、啓太郎と美香の驚きようは半端ではなかった。

「どうしたんですか？ 柊さん」

「……………」

修哉の父・克正は校門の前で立ち止まった。

「…なかなか、面白い少年ではあったな…」

「？ 東空ですか？ ただの悪ガキですよ。口のきき方つてのがな  
つちやいない」

「フツ………… お前たちなら、そうとしか思えないだろうな……………」

「………… はい？」

克正は上空を見上げた。

「………… どのような器になるか………… これもまた、一興だな……………」

夕食を食べ終えた後、僕は部屋のベッドの上で仰向けになってい  
た。

「俺自身が正しいと信じた道を選ぶ。俺は…俺たちは決して独りじ  
やない」

修哉の言葉が刻まれた、僕のつたない脳みそ。今でも、あの時の  
ように心拍数が高い。はっきりとわかる、己の鼓動。

何かが動き出そうとしていた。

何かが、僕の中で行動を起こそうとしていた。

正しいのかどうか、わからない。少なくとも間違っではないない。

そう信じられるほどの決意が、僕の中で産声を上げようとしていた。  
でも、それを認めるといことは、今ある全てを捨てなければなら

ないということ。

決意を固めるといふのは、そういうこと。

こうして思えば、自分はどれほど助けられ、支えられて生きて来たのかわかる。僕の周りには大切な人が多い。多すぎると思うほど……。

こんなにも愛されていて、こんなにも生きることが大切だなんて思いもしなかった。本当は単純なことなのに。なぜなら、人はちよつとしたことで幸せを感じる。ほんの少し、大切に思われるだけで……「ここにいたい」という気持ちを強くできる。

今、ここにいたい。

それでも、僕はやろうとすることがある。すべきことではなく。

それは自分が望んだことであり、自分が生きる意義そのものなんだ。この世で最も愛している人を助ける。それが今、唯一の願いであり、僕がすることだ。平穩な場所で過ごしていたって、何も変わりはない。自分で変えようとしなければ、今の現実は変わらない。大切な人はいないままで。多くの人の心に穴を空けたまま、鳴りを潜めるわけにはいかない。

愛する人とともにいたいと願うのは、至極当然なこと。

そして、それは人としての意義、そのものなんじゃないだろうか。何かを得るには、それと同じ代償が必要。僕にとっては空と、今の世界なんだ。どちらも大切だ。できれば、どちらも捨てたくはない。でも、僕は選んだんだ。自分が今、精一杯しようと思うことを。どれが大事なのか……優先順位があるわけではない。どちらかが一方、捨ててもいいものではない。そもそも……比べること自体が違うんだ。どれも独立した大切なもので、自分を支えてくれるもの。そして、それらもまた、支えを必要としているものなんだ。彼女が支えを必要としているように、他のものもまた、支えを必要としている。

僕にできること。それは、もうわかった。これ以上、考える必要はない。

…僕は空のために存在していて、彼女の存在は己の存在の証…

そんな気がした。そう思うと、自然と顔に微笑みが出てきた。

その時、携帯が鳴った。電話だ。画面には、海の文字があった。

「…もしもし」

「今、部屋？」

「ああ。どうした？」

「…ちよつと、空の所に行ってもいい？」

どこか、彼女の声が震えている気がした。

「ああ…うん。でも、ちゃんとおばさんに言っておくんだぞ？」

「うん、わかった。じゃあすぐに行くから…」

…何かあったのだろうか。喉に引っ掛かる感じと…。

コンコン

「はい？」

返事をする、部屋のドアが開いた。

「…お邪魔するね」

海は声を小さくしながら言った。

「そこら辺に座れよ」

「うん、ありがと」

海は僕の隣にちょこんと座った。僕はほほをさすった。なんだか痒かったんだよ。

「ごめんね、もう8時なのに…」

「いいよ、別に。どうせ明日は休みだしさ」

「…明日はもう土曜日かあ…」

海は小さく息を吐いた。

「…んで？ どうした？」

「…え？」

海は僕に顔を向けた。

「元気がなさそうだった。何か、相談したいことでもあるんじゃないのか？」

「……………」

僕から目をそらし、彼女はうつむいた。

「やだな……。空には、お見通しなんだね……」

「…何年お前たちの世話やってると思ってたんだ？」

そう言つと、彼女は少し微笑んだ。

「そうだね……。もう、何年になるんだろ……」

「もう…13年かな。うる覚えだけど、あ頃のお前はおとなしい女の子だったよな」

「何よ。まるで今はおとなしくないみたいじゃない」

海は顔を膨らませて見せた。

「…いや、本当の部分では今も昔も変わらない」

「……………」

「お前は…本当は空と同じで、おしとやかで…つつましくて、おとなしくて…泣き虫で。そう見せないのは、お前が自分らしさを作るうとしたからだと思う」

「……………」

「海は、空と比べられるのが嫌だった。だから、髪の毛を短くしたり、服装を違った感じにしてるんだろ？」

海の瞳は潤んでいた。水面のように、揺らめいている。

「…空の双子…。そういう風に言われたくないから、そうしてたんだろ？ ……でもな、僕は今も昔も、お前は変わってないと思うよ」

「…え？」

「…今も、昔もお前は変わらない。何一つ変わってない。そして、空とは全く違う、優しく…かわいい女性。僕の…大切な幼馴染さ」

それは本当の気持ちだった。見た目は一緒かもしれないが、中身は違う。たとえ双子ではあっても、人はそれぞれ違う心を持っている。

「空……」

「泣くなよ」

彼女の瞳からたくさんの涙が流れ落ちていた。

「だって……だって……」

「だって？」

「……本当は……すごく怖かった……。黒い何かが、私を殺そうとして……私が助かる代わりに、お姉ちゃんがさらわれて……」

自分が助かったから、空がさらわれた。海は自分を責めてる。けど、どうしようもなかったことだとわかっている。それでも、自分を責めてしまうのは、彼女の心がもろい代わりに優しいからだ。それは……空も同じだった。

「お姉ちゃんは苦しんでるのに……私は空と一緒にいたりして……」

「……海……」

「今だって……そんなこと言われて……うれしくて……」

涙を拭いても拭いても、彼女の涙は止まらなかった。

嬉しさと罪悪感に挟まれて、海は苦しんでいた。それが痛いほどわかってしまう自分も……苦しかった。

「……空……」

海は涙を拭い、顔を上げた。その表情には、何というか……決心の想いが込められた顔だった。

「……私じゃ……ダメなの？」

僕の思考が停止した。

「私はお姉ちゃんみたいにおしとやかじゃないし、勉強もできるわけでも、かわいらしくもないけど……」

彼女の瞳は潤んでいた。

「……でも、空に対する想いは負けない。空のことを誰よりも好きだ。だって……自負してる」

「……」  
一瞬緩んだ瞳は、強い視線に変貌した。

「私は誰よりも……空のことが好き。大好き」

「……」  
「だから……傍に居させて。ずっと……ずっと……」

海は顔を沈め、僕をそっと抱き締めた。……肩が小さく揺れていた。怖いのか……緊張しているのか……。

「……」  
僕はゆっくり、彼女を引き離した。

「……空？」

「僕は、空を裏切れない。僕が好きなのは……お前じゃなく、空だから」

はつきりと言わなければならぬ。……いや……彼女はわかってるはずなんだ。それをまだ……認めていないだけ。

「僕は空が好きだ。……それは紛れもない真実なんだよ」

「……」  
彼女は何も言わず、僕を見つめていた。先ほどの強い視線は、すでに消え失せていた。

「……だから、逃げるわけにはいかない。温もりを求めて、あいつに似ているお前に逃げ込むわけには……いかないんだ」

逃げ込んだら、楽になるだろうさ。その時だけは。……その後、待っているのは、大きな罪の意識と真実の想いの狭間で、僕は永遠に苛まれることになる。……それだけは嫌なんだ。結果的に空を……いや、海も傷つけることになるのだから。

「……僕の答えはこれだけだ。……もう……」  
「……」

海は顔を俯かせ、無言のまま1分が過ぎて行った。その1分が、どれほど長く感じたことか。

「……ごめんね、馬鹿なこと言って……」

「……」  
彼女は何かを消し去るかのように、頭を振った。

「私は……さ……、お姉ちゃんみたいに……大好きな人に……  
大好きだよって言われたかったんだ」

悲痛な面持ちで、彼女は続けた。

「……誰かに、大事にされたい。それだけなの……」

「……僕は、お前のことを大事に思ってる。それは……」  
「違うよ」

彼女は僕の言葉を遮った。

「……空の言ってること、わかるよ。けど……そういうこととは、  
違うんだよ。ぜんぜん違うの。……私が求めているものとはさ……」  
天を仰ぐかのように、彼女は天井を見上げた。

「大事にされたいってのは……大事にされて、大切にされること  
とは違う。本当の意味で……その人の……その人だけの……私に  
なりたい……。そういうことなんだよ……」

「……」  
僕が言っていることは、所詮……その場しのぎの言葉だったのだ  
ろうか。それとも、自己満足に過ぎない……相手を生殺しにしてい  
ることだけなのかもしれない。僕は……大バカ者だった。

「……ごめん、海……。僕は……浅慮だったよ……」

「……ホントにそうだよ……ホント……」  
僕は言葉が無かった。

「……だから、さ」

「……」  
それは、一瞬だった。ほんの一瞬の隙を取られた。

「……」  
「……」  
「……」

海は僕にキスをした。ほんの一瞬の間をついて……1秒間ほど。彼女はそつと離し、僕を抱きしめた。

「お、お前……!!」

「最後のお願ひ……聞いてくれる?」

海は僕の質問に答えず、言った。

「お願い……少しの間だけ、抱きしめて……」

「……海……」

「……お願い……。ほんの……。ほんの少しだけでいいの……」

「……」

僕は何も言わず、彼女を抱きしめた。

細く、小さな肩。爽やかなシャンプーのにおい。……空と同じ。

……ああ……。わかってる。僕は……迷わないと決めた。己が定めたものに、素直に生きていく。どこかで壊れてしまおうとしても……。

「やっぱり……ほつとする……」

海は小さな声で言った。

「……空が傍にいてくれるだけで……すごく……」

「……そりゃよかった。お前が泣き止まなかったら、大変だもんな」

そう言つと、海はクスツと笑った。

「……いつもね……」

「……ん?」

「……いつも……夜になると眠れなかったんだ……。でも、空がいてくれると……」

「……ここで寝な。傍にいてやるから」

「ホント? ……ありがとう……空……」

しばらくすると、海のかすかな寝息が聞こえてきた。僕は彼女をゆっくりとベッドに仰向けにさせ、布団をかけた。

「……ごめんな……。約束……。守れそうにない……」

眠る彼女の表情は、とても穏やかだった。遠い夢の中で、空と一緒に過ごしているのだろうか。

花舞う地で、彼女はしばしの夢に就いた……。

僕は支度を始めた。とは言っても、必要最低限のものだ。お金は  
いらないうし（紙幣が違うと思う）、武器なんてものもないし。  
歯ブラシだって……まあ必要な。

机に就き、手紙を書いた。

「……みんなへ。空を探しに行きます。心配しないで……という方が無  
理だと思うので、まあ気長に待っていてください。なんにしても、必  
ず助けます。」

さて……こうして手紙を書くと何を書こうか迷ってしまうものです  
ね。……とりあえず、感謝の想いをつづりたいと思います。

父さん、母さん。これまで育ててくれて、ありがとう。わがまま  
を聞いて、ここまで大きくさせてくれたこと……本当に感謝しています。  
あなたたちの息子として産まれたこと……あなたたちの下で育ったこ  
と……幸福に感じます。いつか帰って来た時、もう一度、二人の息子  
として過ごさせてください。

おじさん、おばさん。空を護れなくて、本当にごめんなさい。自  
分の無力さに歯がゆいです。……けど、必ず助けだし、笑顔であなた  
たちに会わせます。その時まで、どうかお元気で……。

和樹。お前が啖呵をきってクラスメイトを殴ったこと……傍から見  
れば、乱暴としか思われないかもしれない。でも、僕はお前のこと  
を誇りに思う。お前がしたことは許されないかもしれない。それで  
も、僕はお前のしてくれたこと……うれしかった。お前と高校で出会  
えたことは、本当に幸運だと思うよ。

啓太郎。お前はいつだって冷静で、ほつれかかった僕たちの糸を結び直す役目をしてくれていた。誰よりも他人の気持ちを考え、察するお前の友達で…よかった。これからも、和樹の面倒を頼む。お前がいれば、和樹は悪さしないだろうしな。…中学の時、お前と知り合えてよかった。

美香。お前のおかげで、僕は大事な人への気持ちに気が付いた。お前が言ってくれなければ、僕は迷いながら…強くもなれなかった。不思議だな。男と女の友情ってのはさ。いつか、お前にふさわしい男が見つかるといいな。…お前は、最高の女友達だ。ありがとう。

修哉。長い付き合いだけど…お前はいつだって、厳しかったよな。それでいて、誰よりも優しくかった。誰よりも他人を気遣い、それを表に現さなかった。そういうところが好きだよ、ホント。…お前のおかげで、僕はこうして決心することができた。お前がいなければ、きっと旅立つこともできなかっただろう。お前の勇気と言葉に触れて、僕はようやく空を助けに行けられる。…ありがとう。お前と出会えて、本当によかった…。

そして、海。お前を残していくことを…許してくれ。お前は止めようとしたり、自分も行くと言いそうだった。だから、何も言わずに行く。お前はこの世界で、生きていってほしい。そして、空が帰るのを待っていてほしい。お前がいなければ、空も帰ったって嬉しくないだろうしな。…お前と出会ったのは、遠い昔のようで、最近のようだ。お前と巡り合えたこと…いるかどうか分からない神様に感謝するよ。…「海」という名のように、広く…美しい…優しい女になれよ。大好きな人を見つけるよ…。…そして、約束を守れなくて…本当にすまない…。

…近くて、遠い世界へ行きます。たぶん、今のところ僕しか行けないでしょう。探さないで、待っていてください。空を助けだし、普通の生活を取り戻す。どれくらいの時間がかかるかはわからないけど、絶対に助けます。

それじゃあ…行つてきます。…お元気で。

空より  
「

朝5時半。僕は忍び足で家を出た。5月とは言え…寒いな。長袖一枚じゃあやってられないよ。

鳥のさえずりが聞こえる。太陽の光が、山の向こうからこちらへ伸びている。世界中を照らす光…。旅立つには、いい感じだ。

僕は大きく背伸びをした。体中の骨がポキポキと鳴る。

さてと…行こうか。

山への道のりの途中にあるもの全てが、懐かしさを醸し出すものだった。あの電柱も、あの屋根の色も。ちょっととした張り紙でさえ、僕の記憶と想い出の一部になっていた。普段、過ごしている時には何も感じないものばかりだけれど、こうして2度と帰って来ないのだと思えば、全てが感傷に浸らせる。

僕の一部…欠片そのものなのかもしれない。大切なものは、見て

きた風景全てにも当てはまる。…そういうものなんだな…。

「…水臭いな、空」

後ろから、誰かが僕の名を呼んだ。それは…

「…修哉…」

Vネックの服を着て、そこに立っていた。

「大親友の俺に黙って、どこに行こうってんだ？」

修哉は笑いながら言った。

「……それは……」

「まあいいさ。お前が決めたことだ。…とやかく言うつもりはないよ」

そう言って、修哉は僕に歩み寄った。

「…知ってるか？ 世界はまもなく滅びようとしてる。その中で、生きとし、生けるもの全てがあがいている」

「い、いきなりなんだよ……それ」

「… 例え だよ。もしもさ。…だが、目に見える全て…存在する全てのものは、そう遠くない未来に滅びる運命にある。…そう、『その時』は、すぐ目の前にあるかもしれない。…お前はその『時』を迎える可能性の高い世界へ…己の足で踏みいれようとしているんだろ？ …それでも、お前は彼女を助けようとしているんだな？」

「………」

修哉の目は、二つの宝石だった。それであって、刀のようにも見えた。

「…決めたんだ。自分を犠牲にしても、彼女を救おうって。間違っていると言われても、駄目だと言われても、これが…僕が選んだ道だ。何を言われても、変えるつもりはない。僕は、僕が正しいと信じた道を進む。お前と一緒にさ」

「…そうか…」

修哉は少し微笑んだように見えた。そして、彼は青白い空を見上げた。

「……親友のお前が決めたことだもんな。俺には、遮る権利も、な

にもないんだ……。……どんなに狂おしい世界ではあっても、お前たちは信じてゆけるんだな……」

そして、彼は僕を見つめた。

「……さよならだ、空」

「……いや、さよならは言わないよ」

「……?」

修哉は少しだけ、眉を寄せた。

「僕の心はここにある。いつだって、お前たちの傍にいる。……だから、さよならは言わないよ。それに、絶対帰ってくる。絶対に」

「……なるほどな。なんつーか、お前らしいよ」

そう言って、修哉はフツと笑った。

「……空。お前の果てしない旅に幸運を祈るとするよ……」

「……ありがとう……」

「……じゃあな。……また会うその時まで、お前はお前らしくあれよ」

そして、修哉はそれ以上何も言わず、朝霧の向こうへ消えて行った。僕の方が、寂しく感じてどうする。帰りたいと思っただけならいい。そう、彼女を……。空を救うまでは。

「ようやく来たね」

門の前で、「待ちくたびれたよ」と言いながらあくびをしているリサを見つけた。

「……ごめん。……つーか、なんでここに?」

「あんたが間違わないように、ね」

「……?」

行く方法を間違えないようにすることだろうか。

「ところで、準備はできたの？」

「ああ」

「家族や友人に別れは言った？」

「……ああ」

「……………」

リサは「そっか」と言うと、門の方に振り向いた。

「……あつちの世界へ行ったら、もう戻れないかもしれない。だからこそ、あなたに問う」

彼女は僕に顔を向けた。

「世界はあなたが思っているほど優しくもないし、美しくもない。生と死が常に隣り合わせであり、あなたは二度と陽だまりに帰れないかもしれない。それでも、あなたはレイディアントへ行くというのかい？」

「……………」

今更、逃げない。わかってるさ。わかってて、彼女は言ってるんだろうけど。

「……ああ、行くよ」

「二度と、ここには帰れないよ？」

「自分から誘ってきたのに、その言葉はどうかと思っぞ？」

僕は苦笑した。

「……あなたにとって、これは人生における大きな決断。だから、後で後悔しないようにしてもらうために、こうして訊いてるのよ」「彼女なりの優しさ……か。

「……わかってるよ。僕は……空を助ける。全てを捨ててでも、彼女を救いだしてみせる。もう決心したんだ。……逃げるつもりなんて、一欠片もない」

そう言うと、リサは微笑んだ。

「そっか。……なら、行くっか。時間は共有してるからね」

「そっなのか？」

「……いずれわかることよ」

リサは門に触れた。すると、門は青く光り始めた。門の内側は白くなり、渦が起こり始めた。小さな渦は大きくなり、一つの光を生み出した。青く、輝く光が辺りを照らす。

「…それにしても、お前…寒くないのか？」

僕はリサの服装を指差した。

「るっさいわねえ。しょうがないでしょ？ 朝なんだから」

「…ただ単に、めんどくさいだけだろ…」

「…星屑にしてやるうか？」

リサは横目で僕を睨んだ。

「…ごめんなさい」

「…つたく…」

彼女はため息をついた。

「さて…最初に言っておくけど、あつちに着いた時、私はあなたと一緒にいないからね」

「？ なんでだよ？」

「私にも用事があるのよ。とりあえず、あんたはその辺で情報収集をしてくいな」

「…なんつー大雑把な…」

呆れたもんだ…。ちよつとくらい、案内するとかさあ…。

「んじゃ、行くでしょうか」

「…ああ」

僕は一步前に出たところで、空を見上げた。

どこまでも遠く、どこまでも広い大空…。世界が終わるその時まで、お前は僕たちを見守ってくれるんだよな…。

「よおし、行くとするかあ…！」

「…変に気合入っちゃってまあ。馬鹿だからかねえ…」

「うつせえなあ。ちつたあお前も気合入れろよ」

「気合入れるも何も、私は元の世界に戻るだけなんだけど…」

「だあーもー！ 行くんだろ！？ 早くしろよ！！！」

「なーんであんにそんなこと言われなきゃならないのさ！ この場で、八つ裂きにしてやつてもいいんだぞ！？」

「……女がんなセリフ言うなよ……」

「いちいちうっさい！ ほら、馬鹿空はここに来る！」

「むぐ……腹立つ……」

運命の扉へ。

僕は進む。足を一步、一步進める。

世界は別世界へ。

僕の……近くて遠い、星への旅路が始まったんだ。

第一部「青い空」……………Fin 第二部へ続く

8章…およろなら 近くて遠い星への旅路へ（後書き）

次の9章から、第2部ということになります。

読んでくださった方、本当にありがとうございました！

## 登場人物紹介1+

ええ、ということ、以上8章までが「第1部」ということになります。

いかがだったでしょうか？ ちょっと各章の文字数が多く、見つらかったかもしれませんね。

理由としては……

この第1部は2年前、ワードで作成し、その後第5部が完成するのと同時に、構成しなおしました。

ラストを作成し終わり、改め第1部を見ると……なんじゃこりゃ。

文章は変だし（今もたいして変わらん）、矛盾点は多いし、言葉が少ないし、なぜか修哉が空のこと好きだという設定だし。

構成しなおす時、その元の第1部にあった序章〜8章の数を変えると、第2〜5部の\*章を書きなおさなければならず、それがめんどつちいということ、変えませんでした。いや、ホントダメな人間です、はい。

なんだかんだで第1部が終了したので、第1部における、登場人物の紹介でもしようかなあ、と思います。

なんか、他の作家さんもやってらしたので、真似させていただきませぬ。……すみません！

話の中ではあんまり性格とかが描写されていないキャラもいたと思うので、参考程度に見てください。

・東空  
アズマソラ

：16歳 身長180 体重66

Episode 4における主人公。東家の長男。成績は普通、運動神経も普通。何を取ってみても普通。名前のとおり、青空を見つめるのが大好き。逆に、雨になると憂鬱になる。「平穩無事に暮らせれば、それでいいや」みたいな適当な性格。しかし、いざとなった時にはその行動力を発し、友人たちのためなら何でもやるうとする、優しい心も持つ。どこか、達観した考え方をしていて、考えすぎてネガティブになることもある。他人を惹きつけるオーラを出しているのだが……。欠点は、修哉曰く「鈍感」らしい。

いつも修哉といるため忘れがちだが、実は結構いけてる顔をしている。本人に自覚症状なし。

さらには、幼馴染の双子が美人なため、そこらの女性には目もくれない。もちろん、自覚症状なし。

ミディアムショートくらいの髪で、ウルフヘア。なかなか長身なので、ある意味モデル体型。(イメージとしては、嵐の桜井?……じやないけど、それっぽいね。…と言われる感じ)

一歳年下の弟・樹がいたが、3年前に事故死。

・日向空  
ヒナタソラ

：15歳 身長155 体重42

日向家の長女。空とは家が近所で、幼馴染。学業は全国レベルだが、

運動神経は悪い。非常に美人（というより、かわいい系）であり、性格もおしとやかで、いつも周りを気遣うやさしい少女。家事全般をこなせる女性で、東家では母親以外でキッチンを扱える唯一の人物とか。ちよつと人見知りで、人目の多いところではあまりしゃべろうとしない性格だが、親しい人たちがいると口数が多くなる。

腰にまで届く長い髪を持ち主で、ちよつとふんわりしている。遊ばしてるわけでもないのに、毛先がちよつとパーマっぽい。（見た目のイメージとしては、『赤ちゃんと』の主人公たちの母親……かなあ。わかる人は、わかるかも）。空色の瞳を持つ。

行動力のある妹に、ちよつとした劣等感を抱いている。

ヒナタウミ  
・日向海

：15歳 身長155 体重42

日向家の次女。空の双子の妹であり、空の幼馴染。双子のため容姿はそっくりで、非常にもてる。姉と同じで成績優秀だが、運動神経はそこそこ。なのに、なぜか吹奏楽部に入っている。姉とは違い、アグレッシブな性格で、誰とでも気軽に話せる。傍から見れば、「いつも明るい」ということになるだろう。

髪はセミロングで、きれいなストレート。顔も背丈も姉と瓜二つなため、そこで判断するしかない。姉と同じく、空色の瞳を持つ。

自分と違って、いつもみんなに認められる女の子らしい姉に対し、多少なりとも劣等感を抱いている。

ヒョウキ シュウヤ

・柘修哉

：16歳 身長185 体重67

柘家の長男。上記の3人とは幼馴染で、空の大親友。ピアスなどを  
していてチャラ男に見えるが、稀に見る天才で、全国模試トップを  
何度も取るほど。運動神経も抜群。冷静沈着であり、状況把握能力  
に長けている。少し棘のある性格で、自分とは（自分の見る世界と  
は）なんら関係のない人に対しては、結構ひどい態度をとる。しか  
し、空には厳しくも彼を支えようとする優しい心の持主。感情的に  
なることはないが、やっぱり幼馴染3人のこととなると変わる。時  
折見せる彼の哀愁と虚無感は、何かを示しているようにも見えるが

……

非常にカッコよく、小学生のころからモテモテ。しかし、本人は付  
き合おうとしない。（イメージとしては……ダルビッシュみたいな  
感じかなあ……）。碧い瞳をしているが、どうやら父親譲りのよう  
だ。

15歳になる義理の妹・咲希がいる。咲希は義理の母親の連れ子。

（修哉の実母は既に故人）

シンドウ カズキ  
・進藤和樹

：16歳 身長175 体重64

空のクラスメイト。生徒会役員で、バスケット部のエース。どこにでも  
いる、今時の若者。誰と接しても話せるタイプで、人に好かれる。

見た目は軽薄でチャラついているが、他人に対していつも配慮している。意外にもてるらしいのだが、本人がちよつと女性と話すのが下手なもんで、今まで彼女をGetしたことはない。本人は気にしてないみたい。

茶髪・ミディアムのパーマにピアスで、教師に目を付けられている。チャラチャラしているが、人望がある。

ハキワラ ケイタロウ  
・萩原啓太郎

：16歳 身長170 体重62

空のクラスメイトで、中学時代からの知り合い。和樹の幼馴染。優等生タイプで、いつも静かに物事を見つめている。裏表のない性格ある意味、空の知り合いの中で一番普通の人間かも知れない。作者の自分としては、影が薄い……なあと。

制服であるブレザーのボタンをきちんととめ、ネクタイもきちんと結び、髪も耳に少し掛かる程度のショート。うーん、優等生。

オサナイ ミカ  
・小山西美香

：16歳 身長163 体重46

空のクラスメイトで、中学も同じ。学級委員が似合うような、女子の中心にいる感じで、責任感が強く、誰かのためなら自分の時間を割くような性格。悩み相談を受けることも多いとか。啓太郎と同じく、結構な優等生。

セミロングで、茶色い髪は地毛。決してハーフとかクォーターとかいうわけではない。

実は、意外とポインちゃん。いえ、僕の趣味じゃないです。決して。

・リサーチブレスレット

：15歳 身長165 体重45

異世界の住人。「暁の門」と呼ばれるところから、出現した。レイディアントから来たと言っているが、事実は定かでない。言いたいことはきっぱり言う、ネガティブな奴にはイライラする、といった性格。意外と乱暴狼藉を働くため、暴言は吐かないようにしよう。身体能力は女性とは思えぬほど……らしい。

かなりの金髪ロングで、後ろで結っているがそれでも腰に届きそうなくらい。スレンダーなボディで、美人。初めて見た空も赤面するほど。エメラルドグリーン of 瞳を持つ。

男の子のような格好をしているが、決して「俺口調」ではない。男勝り、みたいな。(イメージとしては、「クロノクロス」というゲームに出てくるキッドというキャラを大人+女らしくした感じ)

Episode 4における、重要人物。

以上が、第1部の主要キャラの紹介です。

第2部からは「レイディアント編」で、全14章構成です。そこは異世界？ もしくは……。

第1部での伏線よりも伏線が多くなります。あと、ちょっと殺人……要素も含むので、苦手な方は気を付けてください。

あ、そう言えば魔法とかも出ます。出ちゃいます。でも、魔物みたいな類は一切出ません（笑）

頻繁に更新するつもりなんで、ちよくちよく見に来てやってください（^^）

## 9章：赤の世界 風歌う場所にて（前書き）

B L U E ・ S T O R Y

E p i s o d e 4 第2部「赤い空」

遙遠なる光の向こうで分たれた運命

お前は、その中で何を拾うというのだ？

終わりのない旅路の中で、

人は無為な軌跡を生むだけでしかないのに

第1部に比べ、非常にスローペースに物語が進展します。でも、レイディアントの世界観を映し出しているので、じっくり読んでくれたら幸いです。

読み終わったら感想などをお願いします（^^）

## 9章：赤の世界 風歌う場所にて

淡く、白い濃霧の中、僕は一人で歩き続けていた。ついさっきまでリサがいたのだが、「また会いましょうね」と言って、いつの間にか消えていた。この白い視界の中で、あいつは一体どこへ向かったのだろうか。そう思いながら突っ立っている今日この頃。

…っか、どこに向かえばいいのか、訊いていなかった。何も知らないのに、どうしろと。そもそも、そこは教えなければならぬことのような気がするのだが…。

上を見ても下を見ても、左右を見ても霧。遠くに何かがあるのならぼんやりと見えるのだろうか、今見える世界には何も無いせいか、果てしなく白い霧が続いているように思える。

と、そんなことを考えていると、突然何かが始めた。

風だ。こんなところで風が吹いているというのか？ それは僕の手を誘うかのように、掌の上で踊っている。

「……………前へ？」

そう言っているのだろうか。風がささやいているのかどうかなんてわからないはずなのに、なぜかそう思った。

僕は「何かに示される方向」へ歩き出した。

歩いてても歩いてても、一向に何かが見えてくる気配がない。このまま歩き続けても、何も無いような気がする。それでも歩いているのは、心のどこかで確信にも似た小さなわだかまり…：みたいなものがあるからだ。喉の奥に引つ掛かって、なかなか出てこないようなもの。はつきりとは言えないもの。

こつやって歩いてみると、いきなり足場がなくなっていて、急転直下になってしまったりね。

ハッハッハ。

まっさかぁ。そんな漫画的な展開はないでしょーよ。

などと思っている時、右足を踏み出すと、そこにあるはずの地面（霧なので、地面というのもおかしいのだが、ちゃんと歩ける平面かな？）に足がつかない。そればかりか、どんどん下へ落ちていく。

え……うそ〜ん。

ついさっき考えたことが、現実になった。道が無くなっていたんだ。

「うわぁー！ー！ー！ー！ー！ー！」

急転直下。ジェットコースターでは味わえないスピードと恐怖が僕の全てを塗り尽くしていく。ああ……父さん、母さん……意気込んで出発したのに、RPGゲームでの始まりで、ゲームオーバーになってしまった主人公のような僕を許してください……。

「たっけてー！！ 神様ぁぁー！ー！ー！ー！」

祈ったこともない神様に、僕は拜んでいたのだった……（合掌）

…／／／

って、そんなこと考えている場合じゃない！ どうすんだよ！

その時、僕は柔らかい何かに沈んでいくような感触がした。いや……これは、水？ 僕は強く閉じていたまぶたの力を抜き、恐る恐る世界を覗く。

澄んだ、濃い青の世界。

ここは……海の中だろうか？ けど、呼吸はできる。僕の周りには小さな泡の大群が、大きく揺れながら上へ昇っていく。それを目で追っていくと、揺らめく水面の姿が見えた。水中から見る水面とは、こつも幻想的なものだったんだと実感した。大きな光が、水面

が揺れるのと同時に揺れる。それ以外は、透きとおった空の青が広がっている。

ああ……不思議だ。こんなにも心が安らぐなんて……。僕たちの住まう地球にも、こんな光景は生きているのだろうか……生きていてほしいと、本気で思えた。

呆然と見とれていると、少しずつ辺りがざわつき始めた。なんと言うか……周りの水たちが動いているように感じた。目で見える水面の揺れなども、さっきよりも激しくなっていた。

この水中の遙か上空にある、光の玉。太陽のようなものが、どんどん大きくなっていく。そして、一気に僕の視界を光で覆った。

思わず目を閉じた少し後、僕を包むものの感触が変わった。水に包まれていたような重みではなく、なんだろう……浮いているような感覚だ。

再びまぶたを開けてみると、驚かされた。

白い雲が隣を漂っている。そう、僕は空を浮かんでいたのだ。フワフワと、まるで紙きれのように浮かびながら、僕はゆっくりと下降している。

またもや呆然。今の状況に理解できず、呆気に取られながら瞬きをしていた。変な濃霧の中にいたと思えば、呼吸ができる水中。そして極めつけは、空中。さっきから、あり得ないことだらけで僕は付いていけない。

……てか、こっからどうすりゃいいんだ？ なんもできんぞ、ホンマに……。

うーんと、腕を組んで考えていると、いつの間にか僕の周りにたくさん雲が集まっていた。それはまるで僕を支えるベッドのように、真下に集まっている。

身動きできないまま目をパチクリしていると、背中にくっついて

いる雲の塊を通して、何かを感じた。

大地の感触。忘れるはずのない重力。手を伸ばし、そこに触れてみる。

……草だ。それが分かった瞬間、僕を支えてくれていた雲の塊が消えた。上半身を起こし、僕は辺りを見渡した。

広がるのは、草原。遙か彼方まで広がる、草原の海。

柔らかな草萌える広大な地に、僕は一人だった。遠くには青く霞んだ山々が見える。

「……………」

言葉を失うとは、こういうものなのだろう。この眼で見たことない風景に、僕は思考することを忘れ、ただただ眺め続けていた。右を向いて、左を向き、上を向く。

小鳥のさえずりが聞こえる。

こんなにも穏やかな場所は見たことがない。きっと、元いた世界にはあるんだろうけれど、先進国で育った人々では味わうことがないであろう風景だ。モンゴルとか、そういうところの「草原」みた이었다。あくまで、僕自身の想像範囲内のことだが。

勝手な想像だが、この世界の技術はあまり進んでいないのかもしれない。空気の味も、漂う風の柔らかさも、何もかも違う。それは母国と比べているからかもしれないが、たぶん、この世界の文明レベルは元いた世界の文明レベルと大差があるに違いない。確信はないけれど、それに似た直感がある。

どうしてだろう……僕は知っているような気がした。この穏やかな空気など、全てを。懐かしさが体全体を覆う。デジャヴ…ではないけれど、体が言ってる。僕はこの世界を知っていると。

一緒に掴むのさ……私とお前で

ほんの一瞬、亀裂が走ったような頭痛とともに例の声が聞こえた。いや……今までの声とは違う、初めての声だ。若い男性……だ。まるで、微笑みながら言っているかのよう。

またわけのわからないことを……。何を掴むってんだよ、何を。僕は頭を小さく振り、立ち上がった。そして、大きく深呼吸をした。

新しい世界の空気。もう一つの世界の匂い。あつちでは気付かなかった細かなことが、ここでは大切なもののように感じる。どれを取ってみても、なくてはならないものであり、遠い昔から親しんできたもの。それだからこそ、僕たちは忘れてしまっただろうな……。

さて、これからどうしようか。普通、こんなところに放り出されたら焦ってしまうような気がするが、リサのこともあり、逆に冷静になってしまっている。知らない世界なのだから焦ってもしょうがないわけで、ここはとりあえず……

「……歩くか」

うん。

僕は一人でうなずき、気の向くままに歩き始めた。考えてもどうにもならない状況下なため、とりあえず歩くのが一番だと思う。……ですよね？

辺りを見渡しながら、僕は尖がった山に向かって歩いた。何かを目標にして歩いた方が、何かと進む……ような気がする。

しばらく歩いたつもりなのだが……時計がないため、どのくらい歩いたか分からない。広大な草原のため、自分が始めどこにいたのかもわからない。進めど進めど、尖がった山は近づかない。砂漠の塵気楼じやあるまいし、少しは近づいたっていう実感がないと、やる気失せるっての……。

そんなことを考えていた折、ガラガラと何かの音が聞こえた。こつこつという音って、よくテレビで聴く音だよな。たぶん、馬車の音だろう。僕は後ろへ振り向いた。丘の上を走る馬車の姿があった。それは僕の方へ向ってきている。何もせず突っ立っていると、それはどんどん近付き……僕の目の前に止まった。

始めて生で見る馬車。馬も初めてだ。二匹の馬がこれを引いていた。

「こんなところに、なんで人が？」

馬車の主である男性が顔を覗かせて言った。

「こんなところで何してんの？」

彼は頭をかしげていた。無精ひげを生やし、黒い髪の毛を後ろで束ねている。とはいえ、そこまで長い髪型ではないようだ。少し褐色の肌……だな。東南アジアとか、そこらの人と言えはわかりやすいかもしれないが、顔立ちが……違う。どこか日本人であり、どこか西欧人。

白い服の上に、茶色い薄汚れたブレザーのようなものを重ねて着ていて、白い長ズボンをはいている。そこらの農民……といったような格好だった。その割には、小奇麗にも見える。

「あの……えつと……」

なんて言おう。言葉に迷う。

「……迷子かなんか？」

「へつ？」

「荷物らしきもの一つも持っていないし、旅人には見えないし……つーか、この場所に一人でいるのってのもおかしい話なんだが……」  
ギクリ。僕はつばを飲み込んだ。男性は変な顔をして、僕を見つ

めている。

「じ、実は……気が付いたらこの場所にいてさ」

その場しのぎの嘘を言った。まあ、あながち間違っではないんだが。

「??？」

男性は再び頭をかしげた。

「……つまり、自分もよくわかんないんだよね」

僕は手を広げて苦笑した。

「つてことは、誘拐でもされたのか？」

「誘拐……じゃないと思う」

たぶん。

「?? ……とりあえず、乗せてつてやろうか？ 君の村まで」

男性は後ろの馬車を指差した。

「君の村までつて言うか……それがちよつと、わかんなくて……」

そうとしか言えなかった。だって、別世界から来ましただなんて言えないもんよ。

「まさか……記憶喪失!？」

「あ、それです。たぶん」

咄嗟に言った。そういうことにしておいた方が、何かといいかもしれない。何も覚えていない人間なら、この世界のことを訊かれても怪しまれない。うーん、この人、勝手に解釈してくれてありがとう！

「困ったなあ。……それじゃあ、一緒に行くかい？ 俺、一応旅人なんだ」

男性は少し日焼けしたような顔を笑顔にした。

「……いいんですか？」

「ああ。あつちこつち回っていたら、きっと君の知っている土地にも辿り着けるだろうし」

「……」

そして彼は僕に手を差し出した。

「俺はヴァルバって言うんだ。ヴァルバIIダレイオス。敬語は使わなくていいからな。君の名前は？」

僕は少し照れながら、彼と握手を交わした。

「……僕は空。あの空の空」

そう言いながら、青空を指差した。ヴァルバは一瞬驚いたような顔をし、すぐに微笑んだ。

「ソラ？ 珍しい名前だな」

「ハハ、よくそう言われる」

「じゃあ、よろしくな。ソラ」

「うん、よろしく、ヴァルバ」

これがヴァルバとの出会いだった。この世界での最初の仲間であり、友達だった。

「ところでさ、ヴァルバはなんで旅をしてんの？」

馬車に揺られながら、手綱を引くヴァルバに訊いてみた。

「うーん……」

ヴァルバは片手でひげをさすりながら唸った。

「まあ、してみたかったから、だな」

「してみたかったから？」

「ああ。……俺はちよつと陰鬱な場所で生まれてね。そこは閉鎖された場所だったんだ。だから、外の世界に憧れてた。開拓されきっていないこの広い世界を、自分の目で見て回って見たかったんだ」  
彼はニコニコしながら話していた。

「まあ、せつかくこの世界に生まれたんだから、世界の隅々まで見

ないもつたいないかなと思ってな」

「……すごいな」

普通にそう思った。

「そうか？ 珍しいことでもないと思うけどな。各国を旅する人なんてごろごろいるだろうし」

この世界ではそうなんだろうけど、あの世界ではそうじゃなかった。というより、少なくとも僕が住んでいた国ではそうじゃなかった。そんなことを志しても、資金の問題や意志の問題で挫折してしまう。個人的にはやってみたいと思ったことはあるけど、現実問題としては無理なんだよな。……そう決めつけているだけなのかもしれないが。

「何年ほど旅してんの？」

次の質問をした。

「たしか……故郷を飛び出して、もう8年くらい経つのかな」

「8年！？ 結構長いなあ」

「数字として考えれば結構時間が経ったなあと思うけど、実際には気がつけば……という感覚なんだよ。俺としては、8年も経った気がしないからな」

「……そういうもん？」

「そういうもんさ」

ハハツと、彼は白い歯を見せて笑った。

「そう言えば、ヴァルバって何歳？ 8年も旅してりゃ結構……」

「俺は25歳」

「ええ！？」

僕は思わず声を上げてしまった。

「そ、そんなに驚くことか？」

「い、いや……だって……」

無精ひげだし、黒いし、老けて見えるし……ぶっちゃけ、初見では30歳を過ぎたあたりかと思っていた。

「ったく、失礼な奴だな。そういうソラは何歳なんだよ？ つか、

覚えてんの？」

「あ、ああ……まあ」

そう言えば、記憶喪失っていう設定だったな。

「僕は……たしか、今年で17歳になる、と思う」

「17歳か……若いな。俺が旅を始めた時と同じ年齢だな。…今思えば、あの頃は無計画でこの旅を始めちゃっもんだ」

昔を懐かしみながら、ヴァルバは青空を眺めていた。

「家出みたいなもの？」

「ん？ ん……まあ、いうなれば……そうか、な」

微妙にはぐらかしたような気がしたが、気のせいかな。

「……苦労しただろ？」

「そりゃそうさ。お金も無かったし、頼る当ても無かったからな。

とにかく辿り着いた街で日雇いの仕事をしたりして資金を貯めて、船に乗って海を渡って……いろいろあつたもんだ」

「……話を聞いてると、すごく楽しそうだな」

「男だもんな。親の庇護の下暮らし続けるんじゃないかって、男なら自分の足で生きたいとこに行けばいいんだよ」

「足じゃないじゃん」

僕は笑いながら馬たちを指差した。

「……気のせいだろ」

それなりの時間が経った。それなりに進んだ。それでも、周りの風景は変わらない。いつまでたっても緑の草原が広がるばかり。

「なあ……一体、この草原はどこまで続くんだよ？」

僕はため息交じりで言った。

「この草原は2大陸の中では、最も広い草原だからな。夕暮れ時には、村に着くかもしれない」

「2大陸？」

僕は頭をかしげた。

「お前、それくらい……ああ、記憶喪失だったな」

ヴァルバは一度頭をかいた。

「……この草原は ルナ平原 と言ったが、これが ロンバルディア大陸 の南部にあたる。んで、海を挟んで西にあるのが アルカディア大陸 」

「どうやら、今知られているのは2大陸のみのようだ。世界はそんな狭いもんじゃねえし。」

「ロンバルディア大陸の北西に シュレジエン諸島 っていうのがあって、ここは1年を通して雪が降り続ける地域なんだ」

ロシアみたいなものかな。

「国とかつてのもあんの？」

「そりゃそうだろ。ここ、ロンバルディア大陸の大部分を支配しているのが ルテティア王国 。現在はたしか……33代ルーファス8世国王だったかな」

ルテティア王国か……。中世ヨーロッパみたいな感じだな。

「ルテティアの東南部には イデア王国 っていうのがあって、国土のほとんどが砂漠なんだ」

「……暑そうだな」

「何度か行ったことがあるが、ありゃあ死ぬな。気がふれちまいそうなくらい暑いもんだよ」

ヴァルバはべろを出しながら言った。よっぽど嫌だったんだろう。

「西のアルカディア大陸には、ルテティアのように大陸の大部分を支配する 神聖ゼテギネア帝国 がある。この国の南には教皇が治める ソフィア教国 があるんだ」

「へえ……ソフィア教国ってことは、何かの宗教？」

「ソフィア教さ。イデア王国を除く、2大陸の国全てがこの宗教を信仰してる。一応、俺もソフィア教徒だからな」

「……そうは見えないけど」

信者っぽくねえもんな、見た目的に。

「ハハ、そりゃそうだ。聖書だって持っていないしな」

聖書：ねえ。ガイアにあるキリスト教の位置なのかも。

「あと、シュレジエン諸島を領土とする シャロン＝シュレジエン王国 があるんだが、ここは永世中立国って呼ばれてて、自国自ら戦争を行うようなことはしないんだ。攻められたとしても、戦争を仕掛けた国はソフィア教国より破門にされかねないんだよ。ソフィア教国は絶対的影響力を持っているからな」

「ふーん……。っーことは、言い換えればソフィア教皇から許されれば、戦争をしてもいいってことだよな？」

そう言つと、ヴァルバは一瞬キョトンとした。

「……そうだな。考えてみればそうだな。よくよく考えれば、先の戦争もそうだったな」

「先の戦争？」

ヴァルバはうなずいた。

「この2大陸では、ルテティア王国と神聖ゼテギネア帝国が絶えず戦争を行ってきてるんだよ。つい20年前にも、ルテティアはソフィアより大義名分を得て、ゼテギネアに宣戦布告をして戦争をおっばじめたんだよ」

「どこの世界にも、戦争つてのはあるもんだな。自分の母国がどれほど幸福な国かわかるもんだ。

「戦争は17年前、ゼテギネア有利だったのにも拘らず、そのゼテギネアによって休戦条約が締結された」

「？ なんで？」

「ゼテギネアの皇帝が急死したのさ」

「……じゃあ、ルテティアは攻めなかったわけ？」

「いくら不利だったとはいえ、相手の指導者がいなくなったんだから攻め時でしょうに。」

「あの時はなんとと言っても、ゼテギネアの快進撃だったからなあ。」

ルテティアは貿易都市群ミレトスから王都近くまで攻め取られてね。ルテティアは虫の息だったんだよ。王都に迫っている中で、有利国から休戦条約締結の提案。しかも、領土は戦争前に戻すというもの。

乗らない手はないでしょーよ」

「…まつ、なんにしても苦勞するのは平民だしね。戦争は終わった方がいいに決まってるか」

「そうだな。…戦争なんてのは無いのが一番いいんだが、どうにもこうにも、人間つてのは相容れないもの同士だからな」

相容れない、か…。そう考えると、戦争を止めようとしていくことが無駄に感じてきててならない。そう考えない方がいいんだろっけど、あの大战が終結しても尚、世界各地で戦乱は起きてる。空しい…というか、儂いというか…。

「まあつまり、ソフィア教皇に認められれば、戦争は正しいものになつてしまふのさ。困つたもんだよ。神だか何だか知らないがね」  
神、か。神様なんて信じちゃいない僕にとって、神様を崇拜する集団に対して偏見の目をしてしまふ。

「…どういう宗教なの？」

「どういう？ うーん……」

どうやら、ヴァルバは考えるときあごひげを触つてしまふのが癖のようだ。

「あんまり知らないんだよな」

「……ダメじゃん」

「実際、そういうもんだよ。ソフィア教徒とは言つても、その教えを理解しているのはソフィア教の司祭や各国の王侯貴族くらいなものさ。俺みたいなの平民たちは、洗礼は受けても教授されないのが現状なんだよ」

そういうもんかね。平民も熱心なキリスト教…っていうのが、中世ヨーロッパでは当たり前のような気がしたけど。もしかしたら、周りがそう言っているからそうしようとしているに過ぎないだけなのかもしれない。「キリスト教徒」、「ソフィア教徒」でなければ、普通に暮らせないのかもな…。

「そもそも、なんでルテティアとゼテギネアは戦争をすんの？ 昔から仲悪いわけ？」

素朴な疑問だった。さつきから、質問ばかりしてる。なんて言ったって、知らない世界の歴史だ。聞いていて楽しい。

「昔から仲が悪いと言えば、仲が悪いのはたしかなんだよ。ルテティアが建国された当初、アルカディア大陸はソフィア教国を除いた地域において、群雄割拠の時代だったんだ。それから数百年後、最東端にあった アルバニスタ という小国がルテティア傘下の公国だったんだが、それをゼテギネアが占領してしまった。しかも、他国のように当主は生かさず、一族郎党皆殺しだったそうだ」

「…うえ……ひどいな」

「戦争なんてそんなもんさ。それでルテティアが怒ってね。ゼテギネアは他の諸国を同君連合として併合したのに、ルテティア王家の流れをくむからといってアルバニスタを滅ぼしたんだ。ある意味、宣戦布告だからな」

「それから、ずっと戦争してるわけ？」

「そう言うつとヴァルバはうなずいた。

「何度も休戦しては戦を繰り返したんだよ。先の戦争で18回目だったかな。両者譲らず、領土も変わらず、未だに均衡状態が続いてるんだ」

「なるほど。んじゃ、今はどうなの？」

「両国は海を隔てて分かれてるからな。国境の緊張状態というのがわかりにくいんだが、今は先の戦争前に比べて大丈夫なんだそうだ。大きなことでも起きなければ、10年は戦争が起こらないと言われているらしい」

「10年単位で戦争をやられても、困るもんだよ…。」

「願わくば、平和条約でも締結してくれたらいいんだけど…」

「そうはいかないだろうよ。両国とも古くからの野望があるからね」

「野望？」

「そりゃ勿論、統一だよ」

「2大陸の統一。ヴァルバが言うには、かつて2大陸を統一できたのは歴史上1国だけだという。」

「それを アヴァロン帝国」と言うんだが、今から約2000年前に建国され、初代皇帝レグルスがその偉業を成し遂げたという。アヴァロン帝国は数十年後に滅び、それ以来、多くの国々が建国と滅亡を繰り返したが、統一を成し遂げた国はなかった。だから、伝説になりつつあるアヴァロンに並ぼうとしてるわけだよ、ルテティアとゼテギネアはね」

「……そんなくだらないことに民衆が犠牲にされるなんて、馬鹿馬鹿しいとは思わないのか？」

「ん？」

「そこらで農作業を営む人にとって、統一なんてのはどうでもいいんだよ。というより、多くの民族がいるように、多種多様の国々が勃興するのは自然の摂理なんだと思う。それを無理に統一しようとするなんて、どこかで亀裂が生じてしまうものなんじゃないの？だから、統一を果たした国なんてのはいずれ滅びてしまうんだよ、きつと」

「……………」

また、ヴァルバはさっきみたいに目をパチクリさせていた。

「…な、なんだよ？」

「…ソラって、若いくせによく考えてんだな」

「そ、そう？」

「ああ…驚いたよ。お前みたいに自分の考えを持っている若者なんて、そうそういないと思うからさ」

なんだか、そう言われると照れてしまうな。

「そうだよな…。統一の夢…というのは、権力者の欲望でしかないもんな」

「平民で気づくことなのに、なんで王侯貴族は気付かないんだろうな。あほらし」

「……………わからないから、未だに争い続けるんだろうよ……………人間ってのは。それに、わかっていても譲れないものがあるもんさ」

「……………」

どこか遠くを見つめる彼の目は、哀愁を漂わせていた気がした。

「あつ、村だ」

日が暮れ始めたころ、丘を登りきったところでようやく村を見つけた。小さな村落のようだ。すでに灯りが灯り始めていた。

「あそこはたしか…… フィアナ村 だな。なんとか今日中に辿り着けたか…… よかった」

気の堀に囲まれた村。家屋はだいたい…… 20あるかないかくらいだろうか。100人にも満たない、小さな村のようだ。ゲームの初期に出てくる田舎の村のみたいで、ほとんどの家が木造建築だ。レングを使用している家屋もあるが、そのほとんどが煙突に使用しているだけだった。いくつかの家屋では、すでに煙が出ているものもあった。

「こんばんわ。どちら様ですか？」

村の出入り口付近に、槍を持った農民の男性が話しかけてきた。門番みたいな人かな。

「俺たちは旅人です。この村に宿屋はありますか？」

ヴァルバはいつになく丁寧な言葉で言った。

「旅のお方でしたか。真っ直ぐに行つて、あそこの煙が出ている大きな家です」

門番の人は村の方に向き、一つの家屋を指差した。

「わかりました。ご苦労様です」

彼がそう言うと、門番の人と同時に会釈のように頭を下げた。そして、馬車は再び進み始めた。

「ようやく今日はゆっくりできるな……」

すると、ヴァルバは大あくびをした。

「眠そうだな」

「まあな。昨日、ちょっとイノシシに襲われそうになって、あんまり寝てなかったんだよ」

「…なんだよそれ…」  
「ハハハ、旅に危険は付き物ってね」

僕たちは馬を止め、宿屋に入った。宿は思ったよりも広い。古臭い作りではあるが、どこか懐かしさを感じさせる。と言うのも、木造建築であるための木の香りというのが、それを引き出させているのかもしれない。もしくは、このちょっと土臭いのもそうなのかも。自然の香りというのは、人間を昔に回帰させる気がする。

「すみません。旅の者なんですけど、今晚泊めてもらえませんか？  
ヴァルバは皿を運んでいた少女に話しかけた。

「あ……お泊りでしたら、こちらの……」  
と、少女は皿を近くの棚に置き、カウンターみたいなところから紙を取り出した。

「……………」  
少女は何かに気が付き、僕たちの方に向きなあった。  
ん？ ヴァルバを見ているのか？

「あの……何か？」  
「えっ？ あ……いや、ちょっと考え事を」  
ヴァルバはその場しのぎのように言った。……………彼女を見つめていたのか？

「そうですね…？ それでは、これにお名前を記入してもらっていますか？」

「あ、あいよ」  
ヴァルバはそれを受け取り、カウンターでサラッと名前を書いた。  
「ほら」

「??？」  
彼は書き終わると、僕に渡した。

「自分の名前くらい書かないと、ガキじゃないんだし」  
……………」

うーん……やばいな。この世界の文字なんて知らないし、どう書けばいいんだろう。実際、ヴァルバの名前のところ、何が書いてあるのかさっぱりわからない。こんな文字、世界史の授業でも見たことないっての。目を凝らしてよく見てみると、どことなくアルファベットに似ているような似ていないような……。

名前が書けないと、ちよつとな……。記憶喪失とは言え、自分の名前を覚えているのに文字が書けないってのはおかしい話だし、それだと言葉も話せないんじゃないのってことになりかねないし……。

…まったく…

(……ん?)

一瞬、ピリツとした電流が走ったような感覚に襲われた。すると、いつの間にか僕は名前を記入していた。見慣れない文字で。しかも、なぜかそれが読める。

…ソラ＝ヴェルエス……？

それが、僕の名前？ この世界での？

誰かが、僕の体を借りて書いたような気分でもあった。

「ふーん、ヴェルエスっていう苗字なんだ」

ハツとしたら、ヴァルバがいつの間にか記入欄がある紙を取り上げて見ていた。

「はい。料金は？」

そして、少女に渡した。

「えっと…お一人様150セルトなので、300セルトです」

「やつす！ いいの？ そんな安さで」

「滅多にお泊りのお客様はお越しになりませんので……」

少女は苦笑していた。どうやら、この国…ルティアは「セルト」というのが共通貨幣なようだ。そういうところでも、やっぱり別世

界に来たんだなと実感させる。

「2階の一番の奥の部屋になります。すぐ食事になさいますか？」

「そうだな…どうする？」

「とりあえず食べようよ」

即答。僕はあまり顔に出さなかったが、結構腹が減っていた。それに、この世界の食事というのを見てみたいし。

「じゃあ、下で食べますか？ それとも、お部屋までお持ち致しますようか？」

「僕はどっちでもいいや」

「…曖昧な意見はお引き取り願いたいがね…。今回は下で食べますわ」

「わかりました。それでは、お部屋で少々お待ちくださいね」

少女は少し微笑んで、パタパタと小走りで奥の部屋に行った。たぶん、リビングと同様の部屋があるんだろう。

食事の準備ができるまでの間、僕たちは部屋で待つことに。

「ルテティアは約600年前に建国されたんだ」

「結構、長い王朝なんだ」

僕はルテティアのことについて話を聞いていた。

「ああ。王家であるルシタニア家は、神より啓示を受けた一族とか云われててね。当然、人民を精神的に支配するための作り話だがな」  
「どこもそうじゃないの？ 神の名を使えば、人つてのは簡単に信用してしまうもんだし」

「そりゃ御尤もだな。よく考えれば、シュレジエンもイデアも、ゼテギネアもそうだからな」

ヴァルバは苦笑した。

「ところで、ルテティアはどういう政治体制なの？」

「…そんなところに食いつくなんて、ホント珍しい若者だね」

「…そうか？」

すると、ヴァルバは小さく笑った。「まあいいや」と言って、彼は続けた。

「えつとな……ルテティアは国王を頂点に、貴族、国民の3階級で構成されてる。まあ、他国もここは同じだがな。政治を行っているのは議会 で、これは貴族だけで構成されている 貴族院 と、平民から選ばれた人望ある平民の 民政院 の二つに分けられるんだが、議決されたものは全て侯爵以上の貴族であり、有力貴族のみで構成された 元老院 、ここを通して国王に裁断されるため、議会はほとんど意味を成さないのが現状だ」

「んだよ……結局国王に決定権があるなら、議会やらなんやらがある意味なんてないじゃん」

「…表面上、民のための機関というものがないと、余計な反発が生まれかねない。そもそも、議会つてのは100年くらい前に起きた平民の反乱を落ち着かせるために造られたものなんだよ」

「民の要望を聞いたように見せかけて、その実、政治体制は古来と変わらないってことか」

「太古の昔から、国を統率させた者は指導者として君臨する。それがあるべき姿であり、理想像なのが現実だよ。実際問題、ソフィアやイデア、特にシュレジエンの3国は中央集権国家であるのにも拘らず、国は豊かで平和だと言われているしな」

王侯貴族が治める国でも、結局はトップの力量ってことか。

「ゼテギネアも同じようなもんなの？」

「そうだな……あそこは16ヶ国で構成された連合国家なんだが、やっぱり皇帝や宰相、盟主の国の王侯貴族に権力が集中している。ルテティアよりも中央集権に拍車がかかっているかもな。とは言え、ここ数年、ゼテギネアの財政は安定していると聞くがな。逆にルテティアの財政は滞っているとかな」

「財政が安定しているって言っても、必ずしも国民の生活が豊かになるとは言えないだろ？ 僕はどうしても、お偉いさん方しか豊かでない気がするけどな」

「……まあ、な」

そんなことを話していると、あっという間に時間が過ぎ、食事の準備ができた。

「……………」

「……？ どうした？ 食べないのか？」

クリームシチューを頬張りながら、ヴァルバは言った。

「あ、いや……」

「もしかして、苦手なものでもあるのかい？」

この宿屋の女将さんであろうおばさんが言った。

「い、いえ、そういうわけじゃないんです。い、いただきます」

「……『いただきます』……って何ですか？」

案内してくれた金髪の少女が頭をかしげていた。そっか。世界が違うんだ。僕の常識は、こちらの常識ではない可能性大なのだ。

「え？ ああ、食事の前の……儀式っていうか……」

……？ 何なんだろう？ 料理を作ってくれた人への感謝かな？

当たり前のことなのに、それが当り前である理由が分からないってことはよくあること。なぜ、「握手」するのかっていうことも。

「あれみたいだね、ソフィア教の食前の儀式。そう言えば、ヴァルバさんはソフィア教徒じゃないんですかい？」

「俺は……まあ一応ソフィア教徒ですね。洗礼も受けたし。……けど、いもしない神様を拝むってのは、俺の性にあわなくて」

苦笑いしながら、ヴァルバは水を少し飲んだ。

僕がさっき驚いていたのは、初めて目にしたこの世界の料理があまりにも普通だったからだ。世界が違うのなら料理も違うはずだし、材料も違うはずだと思っていた。だが、このクリームシチュー……：ジャガイモも人参も玉ねぎもある。……肉は無いけど。他の料理もそうだ。よくある外国の田舎の料理っぽい気がする。

何でだ？ 別世界なのに料理や素材まで同じなんて……。よくよく

考えたら、人間もいる。馬などの動物もいる。…別次元の世界…？  
？ よくわからなくなってしまうた。

そんなこんなで談笑しながら食事をした。

日は完全に沈み、部屋の窓から見える他の家の明かりは消えていた。

「……今、何時だろ……」

僕とヴァルバはベッドに入り、寝ようとしていた。

「…何時？ それはわかんねえよ」

「？ 時計はないのか？」

「時計つてのは、王侯貴族や豪族くらいしか持っていないたいそう豪華なもんなんだよ。俺や、ここみたいな村の人々では到底手に入ることができない代物さ」

「……ふーん……」

時計は高価なものか…。僕の世界での当たり前と、この世界の当たり前前は全く違うもの。ちょっとしたことでも気づく。でも、中世的な文明レベルに見える世界に、時計なんてもんが發明されてんのか…。少し驚いた。

「もう寝な。明日も早いから」

「…ああ」

僕は一度目を瞑った。

僕は今、知らない土地にいる。それも、別世界。

今頃、みんなどうしているだろう。父さんと母さんは元気だろうか。風とか引いていないかな。

修哉は何してるだろう。最後に会ったのはあいつだし、こちらの世界のことについて何か勘付いているのかもな。

和樹と啓太郎は、当り前のような日々を送ってるのかな。美香も、部活とか頑張っているだろうか。

海は…泣いていないだろうか。独りぼっちだとか思っていないだろうか。…遠くを離れても、僕の心はそこにある。それをわかっていてほしいけれど…。

夜になると、どうしても人っていうのは想い出を振り返ってしま  
う気がする。つい昨日までのことや、当り前のことを懐かしんで…。  
こづいうのを「寂しい」ということなのだろう。夜、人は独りに  
なる。それに必然として、巡り合ってしまう。僕たちはその中で、  
多くのことで悩み、考え、心の中で涙を流すのだろう。

こづは違う世界。

僕は、この世界で初めて眠りに就いた。

9章：赤の世界 風歌う場所にて（後書き）

ということ、第2部開始となりました。

相変わらず文字数が多く、初心者の方や携帯の方には見づらいかと思います。ご了承くださいm（――）m

できればパソコンで見てもらいたいのですが、見てくださったらとにかく嬉しいです。

長い話なので、時折休みながら読んでください（^^）

森田しようでした

## 10章：フィアナの村 新しい出逢いと檸檬の門出

何時だかわからない。それでも朝が来たというのは、どんな生物だつて理解できる事なんだろうな。命の鼓動が呟いてるんだ。「朝が来た」ってさ。

小さな窓から差し込む朝日がやけに眩しく感じる。そこだけが、ほんのりと新しい一日の温かさを伝えているようだった。

隣のベッドでは、ヴァルバが布団を抱いてまだ眠っていた。まだぐっすりと夢の中…という雰囲気だった。僕は起こさないように、ゆっくりと床に足をおろした。そして、忍び足で部屋から出た。もちろん、ドアを閉めるのもゆっくりとだ。他人が寝ている時、なぜか忍者のようになってしまふ。理由はわかんないけど。

階段から降りると、リビングの方から何かを準備しているような音が聞こえてくる。これは、まな板の上で何かを切っている音だ。どうやら、女将さんが朝食を準備しているのだろう。この世界の朝食の時間というのがどれくらいかは知らないが、たぶん朝7〜9時くらいかな。

僕は外へ出て、大きく体を伸ばした。こうすると、寝ている間に固まっていた細胞たちが目を覚まし、活動を始めるような気がする。現に、ちよつとさつきより動きやすくなった。…要は気持ちの問題なのだが。

小鳥たちのさえずりが聞こえてくる。彼らは家屋の屋根などに並び、右を見たり、左を見たりしている。朝を伝える陽気な歌声つか。

それにしても、どの世界でも同じなんだな、朝の雰囲気というのは。どこの家の煙突からも、煙がもくもくと出ている。あちこちから食欲をかきたてる香りを漂わせている。スープでも煮込んでんのかな。

「あ……おはようございます」

僕は声が聞こえた方に視線を向けた。宿屋の隣にある馬小屋の傍に、宿屋の少女がほづきを握って立っていた。どうやら掃除をしていたようだ。

「おはよう」

僕はぎこちなく微笑んだ。

「起きるのが早いんですね、ソラさん」

彼女はそう言いながら、僕の方に歩み寄って来た。彼女の金色の長髪が朝日を反射し、少々眩しい。

「たまたまだよ、たまたま。朝は苦手なんだ」

「そうなんですか？ ……フフ、寝ぐせ、付いてますよ」

クスクス笑いながら、少女は僕の目の前で立ち止まった。

「こりゃ失敬。それにしても、朝から仕事なんてすごいな」

右手で寝癖が付いた部分をいじった。垂直にはねてるな、こりゃ。後で水で濡らすか。

「いつものことですから。それに朝日がきれいだから、気持ちいいんです」

「なるほどね。気持ちはわかるな」

「ソラさんも、早起きしたのはこれを見るためですか？」

彼女は上を指差した。

「……ああ、なるほど。」

青い空。白く、半透明で、自由気ままな雲。

僕たちは上空を見上げた。人って、なんでか知らないが、意味もなく空を見上げるんだよな。そこには何も無いのに、何かあるのではと思っているのかもしれない。あの空の向こうに、自分たちの答えが潜んでいるのかもしれない。

もしくは、理由なんてないのかもしれない。

「……まあ、そうと言えば……そうだな」

「朝の青空って……とてもきれいですよね。私、夕焼けの空よりも、星空よりも好きです」

「奇遇だな。僕もだ」

どこまで続くのか分からない青空。全ての生命は、この空の下にある。そんなことを考えると、生命ってのは意外と身近な存在な気がする。

「こうして見ると、今日一日も平和に過ごせそうな気持ちになっちゃいますね」

彼女は掃除をしに来たのを忘れたかのように、口元を少し弓なりに微笑ませながら、上空を見つめていた。

「…そう思えるのは、君の想いが優しいからだよ、きっと。そういう人間ってすごいと思う。……率直に」

「…ソラさん…」

細長い三日月のような形をした、薄い雲がある。それは、この紺碧の空をより一層碧く見せているようだった。

「あっ、そう言えば君の名前を聞いてなかったな。……よければ、教えてくれる？」

僕は視線を戻した。ほんの少し間を開けて、彼女も視線を戻した。

「アンナです。アンナ＝カティオ……」

そう言って、彼女は微笑んだ。白い頬が朝日を受け、輝いていたように見えた。

「アンナ、か。よろしくな」

「…はい…!」

そうやって、自然と僕たちは握手をした。ヴァルバの時もそうだが、握手ってのはやはり全世界共通のようだ。…なんでだろうな。

「…そろそろ朝食ができますと思いますから、行きませんか？」

「そうなの？ わかった」

「あ、でも……まだ、ヴァルバさんは起きていませんよね？」

アンナは辺りを見渡した。

「まだ熟睡中。何やら、イノシシに襲われたとかで寝不足なんだとさ」

「…変なの」

彼女は笑いながら、宿屋に向かった。

「ふああ〜……よく寝た」

大あくびをしながら、ヴァルバはホットミルクを一口入れた。

「髪の毛、ぐっちゃだな。てか、ヴァルバって結構長いんだな」

彼の髪は肩まで届いている。前はそうでもないのだが。

「ああ……いつもは後ろで結んでるからな……」

「…そうやっていると、どこぞの不審者みたいだな……」

「不審者ってお前……。いいから、さっさと食って出発するぞ」

「へいへい」

僕は野菜スープを手際よく口に運んだ。

「あの……ちょっと訊ねてもいいですか？」

すると、僕の目の前の席で食事をしているアンナが挙手した。

「…ん？」

僕は食べる手を止めた。ヴァルバはと言うと……彼女に目をやりながらまだ食ってやがる。

「あの…お二人は、旅人ですか？」

「ああ、そうだけど」

パンを頬張りながら、ヴァルバは言った。ヴァルバはともかく、僕は違うような気がするけど……。まあ、人探しの旅みたいなものだからな。

「それがどうかしたのか？」

「…実は、折り入ってお願ひしたいことがあるんですよ」

女将さんが言った。少し神妙さを漂わせていたのを感じたのか、ヴァルバは食事を止めた。

「この子を、一緒に連れて行ってくれませんか？」

僕たちは目をパチクリさせた。

一緒に……って、おいおい。展開が速いよ。

「ダメですね」

少しの間を置き、ヴァルバは言った。

「……込み入った事情があるのはなんとなくですが察します。……ですが、いくらなんでも初見の俺たちに頼むような話ではないと思いますよ。それに、彼女はまだ幼い。危険です」

どこぞのエリート社員の丁寧な話し方のように、ヴァルバは淡々と述べる。

「ヴァルバ……でも……」

「俺がお前を拾ったのは、男で、十分しっかりしていると思っただけだ。そもそも、女性を旅に参加させるっていうことだけでも俺は反対なんだ」

僕は旅をするということが、どれほど危険を伴うのかわからないけど、ヴァルバの顔を見れば旅というのがどんなものなのかが、どことなく察することができる。

「……とにかく、連れて行く・行かないかは、話を聞いてから決めてもいいんじゃないか？」

僕がそう提案すると、ヴァルバは少しため息をついた。

「お前ってやつは……。まあ……。放っておけないのはわからんでもないしな」

ヴァルバは座り直した。

「んじゃ……。どういった事情で、君は同行を願いだんだ？」

「……わかりました」

アンナも、真剣な面持ちになっていた。

「……私は姉を探したいんです」

「姉？」

「…この子には、9歳離れた姉がいたんだ。リノアンと言って、母親譲りの赤毛だったよ」

母親譲り？ …そうか。たぶん、この女将さんは本当の母親じゃないんだろう。でなければ、そんなこと言わないはずだ。

「…もともと、アンナの家はとある貴族の家柄だったんだ。けど、10年ほど前に取り潰されて、アンナとリノアンは離れ離れになってしまった」

そんな姉が、4年前に突然フィアナ村に来たのだという。

「知り合った男性のおかげで、監禁されてる場所から逃げ出すことができたらしいんです。…でも、2年前に…お姉ちゃんはまたさらわれてしまっただんです……」

「……………」

「…まさか、お姉さんをさらったのは…監禁してた奴ら……？」

僕は少し声が小さくなった。

「…たぶん、そうです」

「…つまり、君はお姉さんを見つけるためにある所に行きたいってこと…だな？」

ヴァルバがそう言うと、彼女はうなずいた。

「そして、お姉さんがいるであろう場所も知ってる。そうだな？」

同じようにうなずく。

「えっ……わかってるのか？」

「はい。……ルテティアです」

ルテティアってことは…この国の王都か？

「どうしてそれが？」

「…私、お姉ちゃんが誘拐される現場にいたんです」

アンナは顔を伏せ、当時のことを話し始めた。

2年前、アンナはリノアンさんと一緒に近くの川へ水を汲みに行ったのだと言う。すでに夕方で、暗くなり始めていた時間帯であっ

た。

水を汲み終わり、帰ろうとした時……その男は現れた。何人かの武装した兵を連れ、首謀者であろう男はリノアンさんを気絶させ、さらっていったのだ。アンナは何もされず、ただ恐怖で怯えていた。幼い少女に、何ができようか……。

「私、覚えているんです。あの時、青黒いマントをかぶった男が連れていた兵士の鎧に、王家の紋章…… 金色の鷹 があつたのを……」

「金色の鷹……なるほど……」

ふむ、とヴァルバは唸った。

「？ 金色の鷹？」

「ルテティアの王家……ルシタニア家の家紋だよ。それにしても、鎧に王家の家紋……ということは、王家直属の兵か……あるいは王室特務師団か……」

ヴァルバは独り言のように呟いた。

「その家紋つてのは、特別な兵士しか付けられないってことか？」

「ん？ ああ、そうだ。一般的に、王家にゆかりのある軍団や大きな功労を挙げた人間に許されるものなんだが、昨今では王室直属の機関に配属された者にも許されているらしい」

「……つまり、リノアンさんをさらつたのはこの国つてこと？」

アンナは「たぶん」と言っただけだった。

「ルテティアにいるかもしれないってのはわかったけど……だからって、それだけの情報じゃ王都に行つたつてどうしようもできないかもな。王都って限りなく広いしだらうし」

「いえ、確信はあります。帰って来た時、お姉ちゃんが言っただけです」

彼女は首を振った。

「お姉ちゃんは……呪術研究院 という場所に監禁されてたつて……」

「呪術研究院……？ まさか、王室特務機関の……」

僕はヴァルバの肩をつついた。

「あのさ……何？ それ」

あ、そつかという顔をしたヴァルバ。

「えつとな……ルテティア国王直属の機関つてのがこの国にはあつて、王室親衛隊である『緋王騎士団』とかがあつて、魔法やエレメンタル、科学・生物学などを専門に研究するのが『呪術研究院』つて言うんだ」

…なんか、よくわからん専門用語まで出てきたな…。

「いまいち理解できないんだけど…」

…あのな……」

ヴァルバは苦笑しながらうなだれた。

「…ともかく、その呪術研究院つてのは王様の命令で研究をしていて、そこは王都にあるつてことなんだろう？」

「まあ、そうだけど……」

「なんだ、じゃあ話が早いじゃないか。さつさと行けばいいんだよ」

「お前な…簡単に言うが、王室特務機関は王城の中にあつて、一般人には非公開になってるんだよ。そんなところに、どうやって行くつていうんだよ？」

呆れ顔で言うヴァルバに、僕はイラつとした。

「んなの、着いてから考えるに決まってるんだろ？」

「…な、何？」

「ここでとやかく言つたつて、ここは王都でもないんだ。こんな所であれこれ考えても、何の解決策は見つからないよ。王都に行つて情報を集めるのが、一番賢明だと思うけど？」

「おいおい。そもそも、俺は連れて行くなんて一言も……」

「お姉さんを心配してるアンナの気持ちを考えてやれよ。たとえ危険であつたとしても、行かなきゃならない時だつてある。行動しなきゃ、結果もくそもない。…助けを求めてんだ。それを放つておくなんて、男の風上にも置けないね」

僕はきつぱりと言い放つた。ヴァルバの顔は「やれやれ」というものだった。

「ヴァルバがなんと言おうと、僕は彼女の同行に賛成だね。考えてもみるよ。アンナはまだ少女なのに、勇気を振り絞って同行を願いだしたんだ。それも、見知らぬ男性二人にだけ？ どれだけお姉さんのことを想っているのか容易に想像できるじゃないか。それでも、ヴァルバは反対するってのか？」

「……………」

そう言いきると、僕は彼女に顔を向けた。

「アンナ、僕は君と一緒に行く。君の手伝いをさせてくれ」

「……ソラさん……ありがとうございます」

さつきまでの哀しそうな彼女の顔が、少し喜びに変わってくれた。「……あくまで一般論を言っただけつもりなんだが……まったく、そこまです言われたら、許可しないとイケないかな」

ヴァルバは頭をかきながらため息をついた。

「わかったよ。アンナ、君の同行を許可しよう。どうせ、俺……俺たちは自由気ままに放浪する旅人だからな。目的地があつた方が旅のし甲斐があるってもんだ」

「あ……ありがとうございます！」

アンナは大きく頭を下げた時、勢い余つておでこをテーブルにつけてしまった。思わず、僕とヴァルバは吹き出してしまった。

「お、おいおい……大丈夫かよ？」

口元を押さえながら、ヴァルバは言った。

「す、すみません……」

「この子、すぐくおつちよこちよいでね」

えへへと笑うその姿は、とてもかわいらしかった。

「よかった……。この子、どうしてもあなたたちと一緒にいきたいって言って聴かなくてね」

ようやく、女将さんにも笑顔が戻った。

「さて、と……話がまとまったところで、準備しますか」

ヴァルバはぬるま湯程度になったホットミルクを一気に飲み干し、立ち上がった。

「あれだけ反対してた割には、行動は早いんだな」

「言っただろ？ 俺はあくまで一般論を言っただけだって。俺だって、こんな健気な少女を放っておけるかっての」

「そんな彼のひげ面は妙に面白かった。」

「…都合のいい奴だなあ」

「ハハハ、気にすんな。ほら、荷物まとめるぞ」

「はいよー」

僕はやる気があるのに無いような声で答えた。

「まったく……………」

ヴァルバはため息を漏らした。

「……………これも、運命か……………」

ヴァルバは小さな声で、何かを言った。そういう風を感じた。

「…？ なんか言った？」

「なんも言っただけよ、俺は」

準備を済ました後、僕たちは宿屋のおばさんからあるものを受け取った。

「これは…？」

「お金さ。アンナを連れて行ってくれるお礼だよ」

「…ちよ、ちよつと……………こんなにたくさんもらえませんかよ！」

お金が入られた袋を掴んだヴァルバは言った。

「そのくらいさせておくれよ。…私にできる、唯一の手助けなんだからさ」

「……………そうは言われても……………」

ヴァルバは苦笑いをして僕の方に顔を向けた。後で聞いた話では、100万セルトほどあったらしい。日本円で……………いくらだ？ 一般平民のヴァルバが驚くくらいだから……………数十万か、数百万か？

手渡した後のおばさんの大きな笑顔は、強く見えた。……母親、か。

「アンナ、頑張ってるね」

「うん……絶対に、お姉ちゃんを見つけて帰って来るから……絶対に……」

顔を伏せていたアンナの肩が小さく震え始めた。

「……ほら、泣くんじゃないよ。あんたが決めたことだ。後悔せず、前だけを見つめないよ」

おばさんはアンナの頭を優しくなで始めた。

「だって……なんて……お礼を言えば……」

「……お礼なんていいよ。あんたのおかげで、私の田舎暮らしは楽しくなった。アンナがいてくれたから、寂しい思いをせずにすんだよ」

「う……う……」  
涙を流し始めたアンナを、おばさんは優しく抱き締めた。それは、本当の親子のようであった。……血が繋がっていろいろがいまいが、二人は本当の親子だった。

「……頑張るんだよ……」

「うん……ありがとう……ありがとう……お母さん……」

僕とヴァルバは馬車に乗り込んだ。

「ほら、アンナ」

「あ……、ありがとう……」

僕は彼女の手を取り、馬車に引き上げた。

「それじゃあ行きますか。……今日のお天道様も、張り切ってるね」  
眩しそくに彼は上空を見上げた。

「それじゃあ、行って来ます……お母さん」

「ああ。無理するんじゃないよ。お二人さん、アンナのことをよろしくね」

「大丈夫ですよ。大船に乗ったつもりで任せてください」

僕はニツコリ微笑んだ。

「ま、お前じゃあ心許ないけどな」

「…いちいちうるさい。ほら、さっさと馬ちゃんたちを動かさなさい」

「よっしゃあ。元気に、明るく行きましょつかねえ」

ヴァルバの合図とともに、馬車は動き始めた。まだ朝の陽気漂つ中で、僕たちは草原の向こうへ進み始めた。

「…アンナ……どうか、生きて帰ってきてよ……」

哀しみを浮かべた女将さんは、青空を睨んだ。

「…ステファン……ベオウルフ……。待っていなさい。災いをあんたたちに降らせてあげるよ……」

緑だらけの草原。四方八方がそればかりの中、僕たちはのんびり進んでいた。こうしていると、馬のひづめの音ってのはなんだか安心させてくれる。穏やかな空気を作ってくれるというか……。とはいえ、激しくなったらなつたで、非常事態っぽいのだが。

「……あーあ……村がもうあんな遠くに……」

アンナは村の方向を見ながらぼつりと言った。

「あつという間だな」

僕はアンナの隣に座った。

「そう言えばさ、アンナが貴族の生まれって、ホントなのか？」

彼女は少し間をおいて、僕の方に顔を向けた。

「…私は元々、ヴァインラントという都市を治める貴族の生まれ……らしいんです。あの頃はまだ小さかったし、あまり記憶にないんですけど……」

「ヴァインラントって言うと……ブルターニュ伯爵か？」

後ろで、ヴァルバが少し大きめの声で言った。

「え、ええ……たしかそんな名前でした」

「そっか……君は、あのブルターニュ伯爵のご令嬢だったのか」  
どうやら、そのブルターニュ伯爵とは由緒正しい一族であつたらしく、過去の戦争で多くの武功を挙げたのだという。

「たしかに、ブルターニュ伯爵家は10年くらい前に取り潰された  
と聞いたな。…何でも、当主が戦死して跡取りがいなくなつたとか  
で」

「…その当主が、私の父です」

アンナは顔を俯かせた。10年ほど昔なのだから、彼女はあまり記憶にないに違いない。…それでも、父が死んだというのは……理解しようのない悲しみがある。

「……今現在、ヴィンラントはブルターニュ伯爵家に取り潰された  
後、王国宰相レオポルトが治めていると聞いたがな」

「え？ あの宰相様が……？」

「…有名なの？」

置いてけぼりな僕。

「レオポルト・ヴァツシュ。たしかまだ36歳で、ヴァツシュ家当  
主にして宰相になったかなりのやり手のもんさ。爵位も公爵だし、  
王の信頼も厚い。将来、国を背負う者になるだろうな」

「…まさかとは思うけど、その宰相がアンナの家をめちやくちやに  
したんじゃないのか？」

跡取りがないからヴァツシュ家のものに……なんてのは都合がい  
いがするけど。

「可能性としてはなくもないが、滅多なこととは言つもんじゃないよ。  
それに、レオポルト公には悪い噂が全くと言っていいほどないから  
な」

僕の予想は簡単に打ち砕かれた。実際に会ってみないと宰相がそ  
う言う人なのかどうかは知らないが、ただの民衆がそう言っている  
ならそうなのかもしれない。確信が持てないことは嫌なだけだ。

……行き当たりばつたりな選択ばかりしてるけどね。

「…やっぱり、王室特務機関 呪術研究院 が怪しい、か……」

「だろうな。あそこは、前々からよくない噂を聞くからな」  
「というと？」

例えば…と、ヴァルバはひげを触り始めた。

「生きた動物を使って実験を使っているとか、戦乱や病気で死んだ人の肉体を回収して、変な実験をしているとか…」

それを聞いたとたん、気持ち悪くなってきた。まあ……生体実験などをしてるってことを聞いてから、どことなく想像はしていたんだが…。

「あくまで噂…なんだがここ最近、誘拐事件が多発しているんだよな…」

「誘拐事件……ですか？」

「ここ数カ月間に、王侯貴族の少女が何人も誘拐されたらしいんだ。これはルテティアだけでなく、ゼテギネアなどの他国でも起こっているらしい」

少女が誘拐される……！？

「現場に居合わせた人は何人かいるんだが、犯人はいずれも巨体で、強靭な筋肉を持った男性だということだ」

そこで僕は確信した。

奴だ……奴らだ。

空をさらった…あの男……。

憎むか　？

「……っ……！！」

小さな電流のような痛みが走る。ほんの一瞬だけだったが、僕は

思わず頭を抱えてしまった。

「ソラさん？ どうしたんですか？」

「いや…何でもないよ。それより……」

少し頭を振り、意識をしっかりとさせる。

「それより、その話……詳しく聴かせてくれないか？」

僕は立ち上がり、ヴァルバの傍に言った。

「詳しくって言われてもな……」

ヴァルバは頭をかしげた。

「……ただ、巷の噂では国家規模の誘拐なんじゃないかって言われてるらしいけどな」

「国家規模……？」

アンナのお姉さんは兵士を連れた屈強な男性にさらわれた。そして、その兵士たちの鎧にはルテティア王家の家紋 金色の鷹 があった……。

噂の国家規模による犯罪……。

「……もし、それが本当なら呪術研究院にみんなさらわれてしまったっていうこと……か？」

「アンナの言っていることが正しいとすれば、そうかもしれないな」  
「だったら、早くルテティアへ行こう！」

いつの間にか、僕は声を大きくしていた。

「ど……どうしたんだよ？ 突然」

ヴァルバは僕をチラッと見た。馬を操作しているため、あまり目が離せないようだ。

「いや……」

これから、たぶんこのメンツで旅をしていくことになる。何でかわからないけど、直感的にそう思う。空を探すには情報が集まるような場所……そう、王都のような人の多い場所に行くことが大事だと。だからこそ、アンナを連れて行くことに賛成した。もちろん、彼女の意思も尊重してだ。

空を助けるためにこの世界に来た。なら、協力を求めるのが一番

いい。リサが言うように、空をさらった奴の背後にいる「何か」は甘いもんじゃないとしたら、一人でどうにかなる話じゃない。

そして、仲間を作るのが賢明だ。その仲間を作るためには、隠しごとをしてはならないと思う。じゃないと信頼してもらえないからだ。信頼してほしいのならば、信頼しなければならぬ。だから、本当のことを言わなければならぬのだ。

僕は少しつばを飲み込んだ。

「……実はさ、二人に……言っておきたいことがあるんだ」

「……………ん??」

「驚かないで聞いてくれよ?」

僕は自分のことを話した。自分がどこから来て、何のためにこの世界にやって来たのか。

ガイアとレイディアントという二つの世界。幼馴染がレイディアントの世界の何者かにさらわれたこと。

話し終えた時、二人は驚きを隠せなかった。

「……あの……さ、信じてもらえるかな?」

僕は二人を見渡しながら言った。

「……………遙か太古の昔、時と星、あらゆるものが生まれたとき、一組の双子が生まれた……………」

突然、ヴァルバが何かを淡々と話し始めた。

「……兄を赤の子、妹を青の子と呼ぶ。二人は命と時を紡ぎ、世界を創る。ある時、遙か彼方より現れし災いにより、二人は離れ離れとなる。二人の肉体は星の大地となり、二つの世界が生まれた。……兄の世界はレイディアント。妹の世界はガイア……。全てを握りし者、神々の呪いが刻まれし呪縛にて永遠に彷徨う……………」

「……それって……」

ヴァルバは小さくうなずいた。

「ああ…。 創世神話 の第1部、第1章さ」

「…新たな創造主…古の災厄を持って、二つの破滅を取り除く…ですっけ？」

「そうそう。 たしか、そう続くんだよな」

「……………」

僕は頭をかしげた。

「…まさか、本当にガイアがあつたなんてな」

「…信じてくれるのか？」

そう言うと、二人はニツコリと微笑んだ。

「信じるよ。 もちろん」

「私もです。…ソラさん、とても嘘を言っているようには見えません」

「ヴァルバ…アンナ…ありがとう」

本当にそう思った。 別世界だのなんだの、そんなことを言う奴は気が触れてるんじゃないかって思われても仕方がないって思ってたからだ。

誰かに自分を信じてもらえるってのは、いいもんだ。 ……ガイアにいた頃、思い知らされたもんな…。

「それにしても、幼馴染を助けるため単身別世界に来るなんてなあ…。 なかなか、かつこいいことするじゃないか」

「な、なんだよ…？」

ヴァルバはニヤニヤしている。 あんまり訊かれてほしくないところを訊いてきそうで怖い…。

「本当にすごいです。 私じゃあ…無理です。 さらにわれた幼馴染の方のために、ここまで来るなんて…」

「な、何言ってるんだ。 アンナだって、同じようなことをしてるじゃないか」

「…同じ世界の別の所に行くのと、別世界に行くのは次元が違ふと思います。 だって、文化も…人も違ふじゃないですか。 …とてもかつこいいです」

「……………」

アンナは微笑んだ。やばいな……照れる。

「ソラの話聞く限りじゃあ、アンナのお姉さんをさらった奴と同一人物と考えてもあながち間違っていないかもしれないな」

「犯人は同一人物による犯行…と仮定すれば、やっぱり王都…ですかね」

「そこが妥当だろうな。やっぱり、呪術研究院は怪しすぎるし……」  
とは言え断言もできないが、とヴァルバは付け加えた。

「王室特務機関は王城に設置されている。そこに行くしかない、か  
ヴァルバはなぜか小さくため息をついた。

「ところで、どうやってルテティアへ行くんだ？」

「方向的にはここから北に行けばいいんだが、北にはパルティア山脈があるため、海路を利用して行くか、東のダーナ砂漠を通過して北上するか……。砂漠を通るのは危険だから、無難に海路を歩く方がいいだろうな」

たしかに、砂漠は嫌だ……。想像を絶するだろう……。方向感覚失って、彷徨って、のどカラカラになって、ミイラみたいに干からびて……。ああ、想像すんじゃないかった。

「とりあえず ミレトス っていう町に行こう」

「ミレトス？」

「この大陸の最西端にある、貿易都市ですよ。2大陸の中では最も盛んに商業活動が行われていて、諸国からいろいろなものが集まるんです」

つまり、昔のコンスタンティノープルみたいなもんかな？

「ミレトスから船に乗って北上し、王都に近い ランディアナから陸地を渡って行くしかないな」

王都まで行くのに、結構な長旅になりそうだな……。

「…あの、ちよつといいですか？」

突然、アンナはまるで先生に質問するかのように、挙手した。

「ヴァルバさんって……ルテティアの方ですか？」

「…え？」

「ルテティアの土地や、情報に詳しいですね？　だから、ルテティア人ですか？」

「…まあ、そんな…もんかな…たぶん」

なぜか、ヴァルバははぐらかした。

「……………？　そうですか……………」

アンナはこれ以上、訊こうとしなかった。言わないということとは、言いたくないってことかもしれない。それを彼女は察したのだろう。たかが出身地……………もしかしたら、ヴァルバはこの国の人にとって忌み嫌われるような土地で産まれたのかもしれない。あるいは、自分の生まれに対して憎悪を抱いている、とか…。

「俺は陰鬱な場所で生まれてね。そこは閉鎖された場所だったんだ」

だから、言いたくないのだろうか。…それとも……………。

いや、これ以上自分の憶測だけで考えるのはよそう。他人のことで首を突っ込んでいいことと、ダメなことがあるのだから。

## 11章：活気の貿易都市 ミレトス

「へえ……すごいな」

僕は辺りをきよろきよろと見渡した。

「おいソラ……初めて来ました」ってのがガンガン出まくりだからやめておくれよ。お兄さん恥ずかしい」

「なんだよ、その言い方は……」

貿易都市ミレトス。

数百年前、この地で市場というものが開かれてから、多くの商人たちが集まるようになり、次第に規模を大きくしていった。つい50年ほど前に、ルテティアから永久自治権を与えられ、2大陸の諸国との貿易の懸け橋となるようになったのだとか。いちおうルテティアに属してはいるが、ほぼ独立したようなもんだという。

「人がたくさんいるところってのはさ、初めて行った時はどうしてもきよろきよろしてしまうんだよ。それに、僕としてはこういう雰囲気の都市に行くのは初めてなんだ」

「まあ……違う世界だしな」

それもあるが、貿易が盛んな場所というのがどうしてもわからなかったため、それを実際に見たから驚いているんだ。

この都市は、なんだかギリシヤの都市国家を思い起こさせる。エーゲ海に面したギリシヤ都市というのは、白い家屋が建ち並び、オリーブの木が植えられ、港には無数の木造船。空の青と海の蒼、建造物の白と植物の緑。ミレトスという都市は、そういった色で構成されているような気がした。

「ミレトスってというのは、複数の貿易都市で構成された自治都市群なんだ」

人が溢れる中央街道。大きな荷物を背負った商人や、壮麗な服を

身につけた貴族っぽい女性、海の男みたいな筋肉モリモリの男性たち。いろいろな人たちが向こうに行ったり、その角を曲がったりしている。この街道は多くの出店もしているようで、手を叩きながら商品の特徴や安さを大声で言っている人、中にはお客を無理やり呼び止めて買わせようとしている人なども見える。

「ここはロンバルディア大陸の最西端なんだが、ここから海岸沿いを北上した所にもいくつかミレトスみたいな貿易都市があるんだよ」「たしか……ここは西のアルカディア大陸も近くて、あそこの最東端にも同じような都市があるんですよ」

「ふーん……。ここからだ、アルカディア大陸は目と鼻の先なわけ？」

街道のずっと先に、海が見える。この街道は緩やかな坂道で、この都市は丘の斜めの部分に建造されたようだ。来る途中、このミレトスを一望できる場所があった。たぶん、それが丘の一番高い所だろう。

「見ようと思えば見えると思うぜ？ 今日ちょっと海の向こうが霞んでるから見えなかったが、いつもなら丘の上から見えるはずなんだよ」

「アルカディアか……いずれ、行ってみたいけどな」

「それよりも、まずは王都へ行く……だな」

「……ああ」

もちろん、そうだ。観光気分で来ているわけではない。空を救いだし、彼女を無事にガイアへ送り届けること。……たとえば、自分がどうなるろうと。

「そう言えば、船はどこで調達するのさ？」

「そこは港の方に行ってみないとわからないな。基本的に、定期船があるはずだとは思うんだが……なんせ、ミレトスだからな。2大陸の中で最も貿易が盛んな都市だし、観光客なども多い。もしかしたら、乗船券が完売……っていうこともあり得なくもない」

「……大丈夫かあ？」

「俺に訊くなよ……。まっ、なるようになるさ。ところでさ、飯でも食わねえか？ 腹が減っちまってしょうがねえよ」

そう言いながら、彼はお腹をさすっていた。たしかに、今日はまだ何も食べていない。

「そうですね。ちょうどお昼時ですし」

フィアナを出て5日。そろそろヴァルバが作る料理にも飽きてきたところだ。あいつの料理って、まずくはないんだけど豪快なんだよな。見た目が男っぽ過ぎるといふか……。俺としては嫌いでもないけどさ。

「飯屋はつと……………」

ヴァルバは辺りを見渡した。人がごったかえしているの、どこになんの店があるのかわからない。

「おっ、あそこ」

すると、彼は右手の方を指差した。

「あそこに、ウルヴっていう看板があるだろ？」

「ええっと……………あれ？」

「そう、あれ」

「名前に、飯屋って感じはしないけど」

「ウルヴってのは古代語で『昼食』っていう意味を持つんだよ」

「へえ……………ヴァルバって、物知りだよな」

基本的に、彼は僕の質問に全て答えてくれる。物知り博士みたいで、便利……………と言ったら、失礼だな。

「ですよ。やっぱり、旅をしているからなんですか？」

「旅……………まあ、そうかもな。自分の趣味でもあるんだけど」

ハハハ、とヴァルバは少し照れていた。

「さて、俺は馬車を預けてくるから先に行って席を取っておいてくれないか？」

「え？」

僕は硬直した。

「んじゃ、頼んだぞ」

よく考えてほしいものだ。僕はこの世界の住人じゃないんだぞ？  
注文の仕方とか、わかんないじゃんかよ。……まあ、アンナはま  
だ子供だし……僕が言うべきだろうなあ。

ん？ そう言えば……。

ともかく、僕たちは「ウルヴ」という店に行った。白い建物で、  
横幅の広い緑の扉。窓から中をのぞいてみると、多くのお客さんで  
あふれているのが見えた。屈強な男性ばかりに見えるが……。

「いらつしゃい。何名様だい？」

店に入った瞬間、人のしゃべり声と笑い声がしてきた。さっきま  
で、もっと大きな声で談笑していたように見えたのに、僕たちに気  
づいてか、どこか視線を感じる。それを気にしてしまい、店の人の  
言葉に気付かなかった。

「お客さん」

「あつ、えつと……3人です。後で一人来ますので」

「そうかい。じゃあ、開いてる席に座ってくれや」

そう言っつて、ちょび髭のおっさんは厨房らしきところへ戻っつてい  
つてしまった。

「……開いてる席つて……」

ないように見えるんですけど……。あちこちから、お客さんの目が  
痛い。どうも、場違いじゃないかっつて思う……。

とりあえず、僕とアンナは一番隅っこの4人席に座つた。窓が近  
くにあり、外に噴水が見える。

「……なんだか、私たちが入っつていいようなお店じゃあ……ない気が  
しますね」

アンナも周りの空気に気が付いたようだ。周囲の男性客たちは談  
笑しながらも、僕たちのことを少し気にしているみたいだつた。

「……ま、まあ……気にするな」

僕はとりあえず、会話をすれば気が紛れるかなと思つた。

「…そう言えば、訊こうと思ったんだけど…」  
「なんですか？」

前々から気になっていたのだが、つい質問する機会を失っていた。  
よくあることではあるが。

彼女は首をかしげた。

「アンナって何歳？」

「私は今年で……14歳になります」

「うっそ！？ 14!？」

「は……はい。そうですけど……」

僕の驚きようで、アンナも驚いてしまった。

14歳……子供だとは思っていたが、そこまでとは…。

「な、なんですか？」

「…いや、思ったよりも若いんだなと…」

「…ソラさんはいくつなんでしょうか？」

アンナはちよつとだけムツとしていた。

「今年で17になる。アンナよりも3つ年上だな」

「…ソラさんも、私とはあんまり変わらないじゃないですか」

「そうかあ？ なんっーか……やっぱり、アンナはちっちゃいんだよな」

「ま、まだ成長期なんです！ それに、ソラさんが高いと思うんですけど」

「うーん、高いとは言われるけど、特別高いわけじゃないだろ？」

「…ファイアナでは、空さんより高い人はいませんでした」

まあ…人口少ないでしょうしねえ…。

「そういや、アンナって綺麗な金髪してるよな。金髪って言うより……レモン色っぽいかな」

「えっ？」

アンナは自分の髪を触りながら、「そ、そうですか？」と言った。  
「僕が住んでいた国の人は、特別な人を除いてみんな黒髪なんだ。だから、金髪とか…色がある髪を持つ人って珍しくてさ」

「あ、ありがとうございます……」

「なんだか、アンナは照れていた。その姿を見ると、「まだ中学生程度の少女」というのを実感させる。」

「ソラさんって、東方民族なんですか？」

「東方……？」

「一概に東方民族とは言えないけど、大昔の人々に言わせてみればそう言われるのかもしれない。」

「イデア王国の原住民をそう呼ぶらしいんです。その人たちは、みんな髪が黒いって言われます」

「髪が黒い……。じゃあ、ヴァルバはその人なのかな」

「……そう言えば、ヴァルバさんはイデア人の特徴そのままですよ。肌が褐色で、髪が黒くて……」

出身地を訊いた時、ヴァルバはそれをはぐらかした。もしかしたらイデア出身なのかもしれないが……言いたくないだろうし、言わないでおこう。

「ところで、ルテティア人ってのはみんな金髪なのかな？」

「……どうなのでしょう。私、あまりフィアナから出たことないんですよ。私の村の人たちはほとんど金髪か、それに近いものだったです……」

「特別、決まってるわけじゃないみたいだな」

金髪の人種がいるってことは、ここはヨーロッパくらいの位置にあたる国なのかもしれないな。けど、顔はどことなく日本人っぽい……言葉も……。

「……そう言えば……あいつも金髪だったな……」

「……あいつ？」

彼女は頭をかしげた。

「あ、ああ……この世界に来る時、手助けしてくれた女がいてさ。」

そいつはすんげえ長く、綺麗な金髪だったんだ」

さらさらの、金色の長髪。人目を引く美しさ。あいつは、そんなやそこらの女性とは格が違う。男性だから、そう思うのかもしれない

いが。

「…その人、今どこにいるんですか？」

僕は手を広げた。

「さあ？ 来るなり、僕を放つてどっか行っちゃったんだよ。初めて来たんだから、案内してくれてもいいのにな」

「フフ、そうですね」

今頃、どこで何してんだろうな…。なんか用事があるってんで、どこか行ってしまったが…情報収集でもしてるのかな。

「その人の名前はなんですか？」

「え？ ああ…あいつの名前は」

「おい、そこのおじょうちゃん」

後ろから声がした。それは、さっきそこで座っていた海賊っぽい服装をした男性だった。タオルを頭に巻き、青っぽいタンクトップ。ガッチガチの筋肉、でかい顔に真っ黒なひげ。そして気味の悪いニヤニヤした口元。

「…なんか用ですか？」

僕はため息交じりに言った。

「小僧には訊いてねえよ。おじょうちゃん、おじさんたちと酒でも飲まんか？」

下品な笑い方。顔が歪みそうだ。つか、おっさんロリコンかあ？

「僕たちは未成年だ。んなの勧めないでください」

「未成年？ 何言ってるんだ？ おめえ」

あり？ …もしかしたら、この世には未成年というのが無いのかもしれない。そういう概念が生まれたのは大昔からだとは思うが、この頃の文明レベルくらいだったら、15、6歳くらいで成人なのかもしれない。勝手な想像だが。

「いいから、あっちで一緒に酒飲もうぜ。名前なんて言うんだ？」

「…え…」

すると、下品なおっさんはアンナの方に近づいて行った。僕は立ち上がり、そいつの腕を掴んだ。

「おい！ いい加減にしろよ！ 嫌がつてるだろうが！」

「……ああ？」

眉を眉間に寄せ、おっさんは僕に顔を向けた。

「小僧、おめえなんかには用はねえ。失せな」

「こつちの連れにちよっかい出そうとしてんだ。用が無いなんて言わせねえよ」

「小僧……いい度胸してんじゃねえか」

「ふん、褒めてもなんも出ねえよ。……それより、」

僕は鼻をつまんだ。

「あんた、息臭いよ」

「……！」

その瞬間、周りの人たちがドツと笑い始めた。そして、だんだんおっさんの顔が赤くなり始めた。

「て、てめえ……！！！」

手が小さく震えている。怒りの頂点に達するまで、もう少しってとこか。けど、それからが問題だ。力勝負だと、僕はおっさんには勝てないだろうな。さて、どうするか……。

「ちよ、ちよっと待ってくれ！」

その時、誰かが人ごみの中から出てきて、僕の前に立った。

「お前……何してんだ！？」

「あ、ヴァルバ」

息を切らして、困った顔をしている。

「こんな所でケンカすんなよ！ つか、来ていきなり騒動起こすな！」

「つつかかって来たのはあっちだったの」

僕はふてぶてしい顔で言った。

「だからってなあ、お前……」

「おい！」

気がつけば、おっさんの頭の緒も限界だった。

「小僧！ ワシをここまで恥かかせたんだ！ ワシと勝負しろい！」

「…ものにもよるけど…いいよ」

「ちよ、ちよつと何勝手に決めてんだよ！！」

ヴァルバは必死に僕を止めようとしていた。

「本当にいい度胸だ。よおーし……ここは、酒の飲み比べだ！」

と言つて、おっさんは大きな瓶を取り出し、そのテーブルに勢いよく置いた。ゆらゆらと揺れている酒だが、思ったよりも多そう  
だ。

酒勝負かあ……。僕は一計を案じた。

「…いいだろう。その勝負、ヴァルバが受けて立つ！」

「なにっ!？」

僕はヴァルバを目の前に出した。

「僕は酒が飲めないから、代理人としてこいつがやってやるうじや  
ないか！」

「なんでだよ!!」

「まあまあ…いいじゃないか」

「だからなんでだよ!!？」

僕は微笑みながら彼の肩を叩いた。

「おいおい小僧、逃げるつもりか？」

「ふん。こいつを倒せば、その次は僕が受けて立ってやるよ」

「酒が飲めなくせにか？」

「当たり前だ。アンナのためだつつの」

僕は男を睨みつけながら言った。彼は少しだけ、たじろいだよう  
に見えた。

「おい、ソラ!!」

ヴァルバは僕の肩を掴んだ。彼の顔を見ると、もうなんだか困っ  
てるやら呆れてるやらだ。

「な、なんで俺が勝負しなきゃなんないんだよ!？」

「まあまあ……アンナを守るためだって。男なら、女を守っていかないとな」

僕は笑顔で言った。

「ソラも男だろー!!? 吹っ掛けたお前がやるならともかく、なんで俺がやらなきゃならんのだ!」

「ハハハ、落ち着けて」

「笑いごとじゃねえだろー!」

僕はヴァルバの耳を引っ張った。

「…僕は未成年なんだよ。酒飲んじゃいけないんだ」

「いや、ここは世界が違うからいいだろ…」

それ言われちゃおちまい。

「……それはともかく、それ以前に飲めないんだよ」

「……」

何杯か飲めるっちゃあ飲めるのだが、酔っ払いたくないんだよね。頭痛くなるし。それに、この世界の酒ってたぶんブドウ酒だろ? なんか個人的に合わなさそう。

「ということで、頑張れよ! ヴァルバ」

僕は力強く彼の背中を押した。

「ということ……じゃないだろ! やるなんて一言も……」

「アンナだって応援してるんだ。な?」

僕はアンナの方に向いた。彼女は目をパチクリさせていた。

「えっ? あ……その……えっと…ヴァルバさん、頑張ってください」

アンナは僕の無茶ぶりに「ファイトポーズ」で応えてくれた。

「……あのな……」

ヴァルバは「やれやれ」という顔をしながら、男の前に進んだ。

「樽一つ分の酒を飲み干すのが、どっちが速いか勝負だ!」

男は樽を二つ、目の前に置いた。

「……まったく……しょうがないな……」

なんだかんだ言いつつも、ヴァルバは勝負することに。いやー、

乗りがよくていいですね。物語にはああいう役柄の人も必要なのよ（たぶん）。

「よし………始め!!」

男の隣にいたおっさんが手を勢いよく挙げた。それと同時に、男とヴァルバは樽を持ち上げ、酒をぐびぐび飲み始めた。

「だ………大丈夫ですかね……？」

いつの間にか、アンナは僕の後ろに隠れていた。

「大丈夫だろ、たぶん」

「た、たぶんって……。でも、もしも負けちゃったら……」

「それも大丈夫だって。あんなだけの酒飲んだら、勝とうが負けようが二人とも酔っ払っちゃうからな、きつと」

「…そ、そうですかね……」

そんなこんなで、二人の酒飲み勝負に触発されてか、周りがさらに騒がしくなってきた。中には真っ昼間だったのに酒をに手を出し始める客もいる。こういうのを馬鹿騒ぎというのだろうけど、楽しくなってくる。この店の客はほとんど海の人のようだが、こうして見ているとみんな気前がよさそうな感じがする。豪快というかなんと云うか。

「ほい」

すると、店のおじさんが料理を持ってきた。

「…？ あ、まだ注文はしてないはずですけど？」

「あんたら、他所の人だろ？ うちの町の奴らのせいで、昼飯時を邪魔したお詫びだよ」

そう言っつて、おじさんはいくつかの料理をテーブルに置いた。食欲をそそる香りが鼻に伝わって来た。

「だけど……」

「気にするな。それに、君の度胸はなかなか良かった。それも含めて、この飯は俺の奢りだ」

「度胸って………嘘言っただけですよ」

僕は苦笑した。

「んなのわかつてるさ。でも、君みたいな若い奴が、あんな馬鹿でかい奴らを目の前にして、物怖じしない奴なんざそうそういないからな。他所のもんはこの店に入ると、ビビッて帰っちゃうのにな」  
おじさんは腰に手を当てて笑った。まあ……この店に初めて来た人は、帰りたくもなるでしょうねえ。ごつい人ばかりだし。

「それに、こんなかわいいおじょうちゃんやんが店に来てくれたんだ。振舞ってやらないとな」

「そ…そんなことないです」

アンナは照れながら顔を振った。

「ハハハ、この店には似つかわしくないじょうちゃんだ。…客のほとんどが男だからな。女性が来ること自体珍しいんで、ちよいと調子に乗ったんだ。けど、この奴らは見た目はあれだが、根はいい奴ばかりだ。すまねえが許してやってくれ」

「…そうですね。本当に、いい人たちばかりですね」

僕はこの風景を見渡した。

「ほう、そうかね？」

「ええ。……気兼ねなく笑える。多くの人たちと一緒に今を楽しんでいる。それを見ていれば、簡単にわかりますよ。こうして、心の底から楽しんでいる人たちに、悪い人間はいない。…抽象的で漠然としていますけど、それだけははつきりとわかるんですよ。たぶん、楽しいっていう心に自分の心も共鳴しているからなのかもしれないですね」

「……ふむ、なるほどな」

黒いあごひげを触りながら、おじさんは僕に笑顔を向けた。

「お前さん、きつといい大人になるな」

「な、なんですか？ 藪から棒に……」

思わず照れてしまう。

「まっ、ともかく飯が冷える前に食いな。今日は、何を注文してもタダにしてやるよ」

これを聞けば、きっとヴァルバも喜んでに違いない。今は、命を懸けて闘っているのだから…（いただきます）。

数十分後、熱き闘いは終わった。ヴァルバと相手の男は、予想通りデレンデレンに酔っ払っていた。

「……この勝負、引き分けだな」

ジャツジをしていた男が二人を眺めていた。

「おい、ヴァルバー。大丈夫か？」

僕は床に大の字になって倒れている彼のほほを軽くはたいてあげた。

「ん？ おらー、らい丈夫らー……」

「…ダメですね」

「ダメだな」

僕とアンナは顔を合せて笑ってしまった。

「…つたく、起きろ！」

とその時、相手の男性の頭を思いっきり叩いた音が聞こえた。

「どこで何してんのかと思ったら、真っ昼間から素人相手に酒なんか飲みやがって……」

泥酔している男性の傍で、呆れ顔をした知らない男が立っていた。バンドナを巻き、白いタンクトップに白い短パン。黒く焼けた肌。きりつとした力のある瞳は、人を惹きつける感じがした。

口ぶりからして、たぶん同じ仕事をしている人だろう。

「起きろー、グスマン。起きねえと海ん中に投げ込むぞー」

ベシベシ。男性は酔いつぶれた男を何度もはたく。…つか、ちょっとは手加減した方が…。

「まったく……おい、誰かこいつを運んでやってくれねえか？ これからランディアナに向かわないといけないんでな」

「ハハハ、義賊様も大変だなあ、レンド」

「おやつさん、あんたも人が悪いねえ。飲むのを止めてやってくれ

てもいいだろうに」

レンドと言われた男性は苦笑した。

「男同士の勝負だ。口を挟んじやいけないってな」

「都合のいい時だけそのセリフ言いやがって」

二人は男らしい笑い声をあげた。

「ところで、相手の男性は？」

「ああ……そいつは、あそこの坊やの連れだよ」

おじさんは僕たちを指差した。すると、レンドという人がこっち  
にやって来た。こうして近くで見ると、ホントに筋肉がムキムキ。  
僕と同じくらいの背丈だろうか。

「悪いな、うちのもんがくだらないことをしちまって」

「いえ：別にかまいませんよ。二人ともつぶれちゃったし」

「ハツハツハ、そりやそうだ。：ところで、あんたら他所のもんか  
？」

彼は僕とアンナを何度も見渡した。

「ええ、そうです。これから、王都へ向かおうと思ってて」

「王都？ ミレトスにいるってことは、海路で行くつもりか？」

「そうですね」

うーん、と男性は唸った。

「もしよかったら、途中まで運んで行ってやるうか？」

「：え？」

「俺たちはこれから所用でシュレジエンまで行くんだが、途中でラ  
ンディアナに寄港する。王都へ行くには、そこから陸地を通って行  
くのが一番だからな」

そう言えば、海路で行くと言っても王都は内陸部にあるため、結  
局歩いていかなければならないとヴァルバが言っていたっけ。

「本当にいいんですか？」

「ああ、もちろんだ。たつた三人だろ？」

僕とアンナはうなずいた。

「よし、それじゃあ……」

レンドは仲間の男性を見た。

「…久しぶりのミレトスだし、もう少しゆっくりさせてやるか。あんたたちは今日来たばかりなのか？」

「ついさっきですね」

「そうか…。じゃあ、明日出発するのでしょうか。君たちの仲間も回復していないし」

レンドさんはヴァルバをチラ見した。

「ん〜…へへへ…もう飲めねえよ……」

僕たちは一斉に笑ってしまった。

「とりあえず、自己紹介しておくよ。俺は レンド だ」

「僕はソラゝヴェルエスです」

「アンナ゠カテイオです。よろしくお願いします」

「ハハ、よろしくな。あと、敬語使わなくてもいいからな。それに、呼び捨てでいいから」

「……わかった。よろしく、レンド」

僕たちは彼と握手を交わした。これがレンドとの出会いであり、彼とは最後まで付き合う仲となる。そうなるとは、誰も予想だにしなかっただろうな……。

「……ところで、彼はどうする？」

「……」

「こんな、自分よりも重い奴なんて僕は運べませんよ？」

「…しょうがない。宿に連れて行っというてやるうか。おーい、その人も同じ宿に連れて行っというてくれ」

「はいよ〜」

レンドの声に誰かが反応。たぶん、同じ船の仲間だろう。

「さて…と。んじゃあ、これからミレトスを案内してやるうか？」

どうせあと数時間は暇だし」

「そうだな……」

よく考えたら、この町に来たことがあるヴァルバは酔いつぶれるため、僕とアンナはどうしようもできない。

「じゃあ、お願いするよ。僕とアンナはまったくわからないし」

僕たちは外に出て、案内してもらおうことにした。

町の中央にある広場。ミレトスの街中は何かと人でごった返していたが、ここは人の話し声も少なく、唯一ゆっくりできる場所かもしれない。

大理石でできた噴水がとても珍しく、僕は素人らしくベタベタと触りまくった。

「…それにしても、なんで3人は旅なんてしてるんだ？ 親子とか…兄弟には見えねえし。他人同士だよな？」

レンドは噴水の近くにあるベンチに座った。

「ああ。ヴァルバは真正銘の旅人…らしいんだ。僕とアンナはルテティアに用事があつて、彼に同行してるってわけさ」

「ふーん…。他人同士が旅をするなんてのは、あんまり見ないし聞かないから珍しいよ」

「そうなのか？」

「というより、旅をすること自体珍しいんだ。昔っから人がいないような場所は危険だし、最近じゃあ人がさらわれるときたもんだ」  
人がさらわれる……。たぶん、少女連続誘拐事件と同じだ。

「巷の噂じゃあ、王室特務機関による計画的犯行じゃないかって言われてるけどな」

「……それって、呪術研究院…ですよね？」

「へえ、よく知ってるね。普通、国王直属の機関なんてのはあんまり知られてないはずなんだが…」

「僕たちはヴァルバに教えてもらったんだよ」

「ヴァルバ…ね」

ふむ、とレンドは視線を横へ向けた。

「というか、レンドだってよく知ってるじゃないか」

「俺は…まあ、昔ちよっとしたこと習ってね。つか、諸国を回っ

てたら自然と知ってしまうんだよ」

と、なんだかレンドははぐらかしたようにも見えた。

「それにしても、呪術研究院か……。設立当初から、黒い噂は絶えなかったもんな」

「そうなんですか？」

アンナはレンドの座っているベンチの正面にあるベンチに腰を下ろした。

「……10年くらい前だったか……。あれが設立されたのは。たしか、ルテティア貴族ブルターニユ伯爵家が没落したすぐ後だったな」

その時レンドは気付かなかったが、アンナの顔に動揺が走っていた。

「……設立とブルターニユ伯爵の没落……は、なんか関係あるのか？」

そう問うと、レンドは「あくまで他所から流れてきたもんだが」と前置きをして、言った。

「……聞いた話だが、当時のブルターニユ伯爵と設立させたクテシフォン公爵は犬猿の仲だったらしい。朝廷の場で、何度も意見が食い違ってたとか」

クテシフォン公爵……。初めて聞くな。

「ブルターニユ伯爵は戦争の最中、名誉の戦死を遂げた。……。彼には奥さんと子供がいたって話だが、どうなったんだがな」

レンドもまさか、その子供が目の前にいるなんて夢にも思わないだろうなあ……。

「んで、クテシフォン公爵は政敵がいなくなったことで呪術研究院を設立。さらに王室特務機関であることをいいことに、そこで変な実験をしてるんだとよ。金が足りなくなったら、朝廷で費用の追加を決定させようとしていたらしいが、宰相によって却下されてる」

「宰相……。って言うと、レオポルトって人？」

「そうそう。彼は古くはヴァルクュリアの血を受け継ぐと言われていて、まだ30代半ばながらもその才能と手腕は高く評価されてんだ。ゼテギネアの……。たしか、ベオウルフだっけか。そいつと

並んでも遜色ないと言われてる」

「ヴァルキュリア？ ベオウルフ？」

さっぱりわからない。

「知らないのか？ ソラってルテティアの人間だよな？」

レンドは頭をかしげていた。まずいな……なんて言えば……。

「えっと…ヴァルキュリアというのは、かつての統一王朝アヴァロンの皇帝より賜われた最高の騎士の称号…らしいですよ。たしか、そうでしたよね？」

彼女はレンドの方に顔を向けた。

「そうそう、たしかそんなだったよ」

アンナは気を利かしてか、説明してくれた。

「…ことは、ヴァツシユ家は由緒ある家系…ということか。」

「ふーん……じゃあ、ベオウルフってのは？」

「それは…ちょっと私も分かんないです。ゼテギネアのことですし……」

「ベオウルフってのは、現在のゼテギネア宰相のとき。先代皇帝の実弟で、当時から宰相として手腕をふるっていたんだ。彼が就任してから、ゼテギネアでは内乱らしい内乱が起きていないらしいぜ？ 連合国家だから、何かと亀裂が多いはずなのに。ベオウルフはかなりの切れ者って話さ。ただ、彼の姿を見たことのある国民はほとんどいないらしいがな」

「…あんまり姿を現さないってこと？」

「らしいぜ。皇族しか顔を知らないって言われてる。もちろん、噂だけ」

「ベオウルフ、か……」

そんな人と肩を並べるほど、レオポルトという人は凄い人らしい。…以前、彼を疑ったが、そんな人ほど疑わしいものがある…なんて思ったのだが、呪術研究院の追加費用を止めたというのが、その疑心を払拭させる。

「クテシフォン公爵に関しては、昔っから好感は持てないんだよな。」

国王に言葉巧みに取り入る家臣だし」

レンドはかなり嫌そうな顔をした。

「…でも、王室特務機関を設立するほどの力があるってことは、それなりに国王からの信頼も厚いってことだよな？」

「……そのとおりだ。クテシフォン公爵と現国王は長い付き合いで、国王の即位に尽力したって話さ。もう、40年ほど昔の話だがな」

「なるほど…40年来の仲か。王室特務機関を任されるってのは納得できる」

もはや親友だもんな、そんだけだと。

「だから実際のところ、宰相よりもクテシフォン公爵の方が権力を握っていると言う話もあんだよ。呪術研究院の噂を見兼ねた他の貴族員が調査を依頼したところ、国王が却下したらしい。その裏には、クテシフォン公爵が国王に変な入れ知恵したと考えるのが妥当だろうな」

親密な仲となると、たとえその人に悪い噂があろうと、その人が「違いますよ。こうこう、こういうわけですよ」と言ってしまうば、簡単に納得してしまうものだ。だから、権力を持つ者はある程度の猜疑心を持たなきゃなんないんだよな。たとえ家族であろうと、親友であろうと。

「…クテシフォン公爵か…。もしかしたら、そいつが全ての犯人なのかも…」

僕はアンナを見た。彼女も、薄々が付いているようだ。

「全ての犯人？ ……誘拐事件のことか？」

「あ…ああ」

「……実は、私はお姉ちゃんを探し出すために旅をしているんです」  
「…僕は、幼馴染が」

レンドは少しの間考えていた。

「……だから、王都へ行くつもりなのか？」

「ああ」

僕はうなずいた。

「…やめておけ。そんなことしたって、たかが庶民が王室直属の機関に参与することなんてできっこない」

「なんでそう言い切れるんだよ？ 試してみないと分かんないだろ？」

「王室特務機関の中でも、呪術研究院は特に独立性の高い機関なんだ。貴族…王国の最高政務官である宰相でさえも関与できないようなところだ。だからこそ、変な噂が国民の間で流れるんだよ。大した証拠もないのに、行くなんてのは当てが外れてるとしか思えねえぞ？」

たしかに、レンドの言っていることは正しい。けど……。

「何も行動を起こさないわけにはいかないんだよ。大事な人がいなくなっただってのに、何もしないでぼんやり過ごすなんてできない。だから、僕もアンナもミレトスに来たんだ。たとえ当てが外れてるとしても、行くと決めたんだけ。そこがダメだったら、他の当てを考える！」

僕は力強く答えた。

「……行き当たりばったりだな、それ」

「そういうもんだ。これが、自分たちの選んだ事なんだから」

「…そっか。頭で考えててもしょうがねえしな」

レンドはそう言いながら、ほほを何度か指先でかいた。

「そういうことだったら、俺も協力させてもらおうよ。できる範囲内でな」

そう言って、レンドはニッコリ微笑んだ。

「きよ、協力って……」

「もちろん、俺たちにも用事はある。俺たちには俺たちの生活があるからな。言っただろ？ できる範囲内って」

「……それでも、嬉しいよ。ありがとう」

素直にそう言えた。ほんの少し手助けをしてくれる人がいるだけで、心がホッとする。

「なーに言ってたんだ。助け合ってたのが人間ってもんだ」

レンドは豪快な笑顔をして見せた。思わず、僕たちも微笑んでしまった。

とその時、噴水の後ろをスタスタ歩いている人に目が行った。あの長い金髪を後ろで結っている女性の姿……どっかで見たことあるような気がするんだが…。

…あっ！！！！！

「あ————！！！！！！」

僕は大声をあげた。それにより、その金髪の女性はこっちに顔を向けた。何事かと、そこら辺にいる人も同じように。

「お前は……リサ……！！」

## 12章：インドラ 破滅を謳う、古の隠者とは

そこにいたのは、リサだった。僕は当惑し、目を2度こすってからもう一度彼女を見た。

……やっぱリサだ！

「あれ？ 空じゃない。やっほー」

リサは僕に元気良く両手を振った。思わず、僕も手を振ってしまった。

「ハハハ……じゃなくて！！」

と声をあげると、レンドとアンナは驚いて僕を見上げた。

「ど、どうしたんですか？」

「え？ えっと……」

「おーい、空あー」

と、リサは足早に僕たちの方に向かってきた。ポニーテールの髪型に、爽やかな笑顔。藍色のデニムショートパンツに、黒い服の上に半袖タイプの黄色いジャケット。以前見た服装と同じだ。

「約1週間ぶりだね。まさか、こんな所で再会するなんて思わなかったよ」

「……そりゃこっちのセリフだったの」

どこに行っているのかと思ったら、こんな所にいるとは……。まさかこんな早に早く再会するとは……。

「……ああ？ お前、いつかの乱暴女じゃねえか」

すると、レンドは立ち上がった。

「……そういうあんたは、ケンカ吹っ掛けてきた奴らの親玉じゃないか」

リサは不敵な笑みを浮かべた。

「？ 知り合いなのか？」

「そういうお前こそ知り合いなのか？」 「そういうあんたこそ知り

合いなの？」

「……えと……」

二人は同時に言った。…まあ、さっきの口ぶりからどういったことで知り合いになったのか、結構簡単に想像はできてしまうが。

「リサは……まあ、旅を始めるきっかけを作ってくれた…みたいなレンドは？」

「……………」

レンドは頭をかきながら、唸った。

「……以前、ゼテギネアのアルツヴァックつて所で、俺の仲間がこいつとケンカになったらしくてよ……」

「ふん。私が買おうとしたものを、勝手に横取りするからいけないのさ」

リサはつーんとすねていた。ガキっぽいな。

「んなことより、お前一体どこ行ってたんだよ？ お前のおかげで、僕は……………」

「そこまで苦労しているようには見えないけど？」

うつ……………。見透かしたような細目で、リサはにやついていた。なんかいちいち癪に障る女だよ……。

「…もちろん、あんたをこの世界に來させておいて放っておいたのは謝るよ。ごめんね」

「……………」

思わず、僕は耳を疑った。

「…何よ？ その目は」

「……別に」

ちょっと驚いた。こんなに素直に謝るなんて。意外だったもんで、彼女を見つめてしまった。

「…言い訳するつもりじゃないけど、私も急いでやらなきゃならぬいことがあったからね」

「……………」

リサは表情を変え、僕の前に顔を出した。  
「いい？ 思ったよりも奴らの行動が早い。このままでは、あなたの幼馴染が間に合わなくなる可能性がある」

「!!!!」

僕の体が固まった。一瞬、信じられなかった。

「ど、どういうことだよ!？」

「それを説明すんのよ、これから。…その前に…」  
すると、リサは辺りを見渡した。

「……ここじゃあ関係ない人が多すぎる。ちよつと、静かな場所に移動しましょ」

「それじゃあ、宿屋に行こう。ソラのお仲間さんも連れてったからな」

「……あんたがいるのは、なんか納得できないんだけど」

リサはレンドに冷ややかな視線を送った。

「んなこと言うな。もう関わっちまったんだからな」  
ハハ、とレンドは笑った。

ミレトスの中心部から少し離れた住宅街に、一件の宿屋。従業員用なのか、あまり大きな宿屋とは言えない。

部屋を開けると、ヴァルバがベッドの上で胡坐をかいていた。

「あれ？ 目が覚めたのか」

「ん？ ああ……おかげさんでな」

「……んな目するなよ」

ヴァルバは思いつきり不気味な笑みを浮かべた。「よくも」という怨念が見える……。

「あらら？ ヴァルバじゃないの」

僕たちの間から顔を出したリサが言った。

「……お前、リサか？」

「なんだ、空の連れってあんたのことだったんだ。まさか、こんな

所であんたに会うなんてね」

「稀有なことだな……」

ヴァルバは首をかしげていた。

「……なんでお前、こんな所に？」

「まあ所用でね。それにしても、まだ生きてたとは感心感心。しづとい人って好きよ」

と、リサはウィンクして見せた。なんか、笑ってしまいそうだった。

「……そのセリフ、そっくりそのまま返すよ」

ヴァルバは呆れ顔で答えた。

「……二人も知り合いだったのか」

「まあね。……こうなっちゃうのも、ある意味因果なものかね」  
そう言って、リサはもう一つのベッドに座った。

「さて、そろそろ本題に入ろうか。この話は世界に関わることだ。あんまり関与したくないのなら、この場から出て行ってちょうだい」  
リサの表情はいつの間にか真面目なものに変わっていた。否応にも、大切な話だということがわかる。

「……ソラさんに関係するなら、私のお姉ちゃんにも関係していると思います。だから……聞きます」

「俺も、何も知らないまま生きていくなんてのはごめんだからな。聞かせてもらおうとするよ」

「同意」

ヴァルバは賛同するように手を挙げた。

「……んじゃ、話そうか。まずは、少女連続誘拐事件。……あれは、ある組織による犯行なの」

「……ある組織？」

レンドは腕を組んだまま壁にもたれかかった。

「……秘密組織 インドラ」

「インドラ？」

リサはうなずいた。

「インドラ……邪神ロキを崇拜する、古のカルト集団さ。今のインドラ と呼ばれてる組織は、3年前に ある男 によって結成された殺人集団。太古の暗殺魔法や暗殺技術を持った秘密組織」

「なんだよ？ その、暗殺魔法やらなんやらって……」

「ソラ以外の人は知ってるだろうけど、 テイルナノグ のことを知ってる？」

他の3人は、「ああ……」という風にうなずいた。

「たしか……今から約2000年ほど昔まで繁栄していたって云われる伝説の古代文明ですよね？ おとぎ話でよく出てきます」

アンナが丁寧に説明してくれた。

悪さをしたテイルナノグの偉い人たちを、聖なる神様は裁きを下しました。

その程度の童話のようだ。

「……天空の神々に愛されたヒトは、禁忌とされた遺産を用いてテイルナノグを建国した。しかし、栄華を極めたテイルナノグ帝国は驕り のため神の怒りに触れてしまい、地獄の業火に焼かれて大地の砂となった……と教わったがな」

レンドがそう言うのと、

「……テイルナノグは己たちを司る天空の神々を滅ぼすために、古の破壊神を喚び起こした。しかし、その破壊神によって逆にテイルナノグは滅ぼされてしまうこととなった……。俺はそういう伝承を聞いたがな」

ヴァルバは違う伝承を説明した。地域によって、伝わっている話が違うのだろうか。

「いちおう、今伝わるテイルナノグの歴史はそうでしょうね」

リサの言い方は、まるで違っているようなニュアンスを含めた言い方だった。

「…インドラは、そのティルナノグの時代に在ったと云われる暗殺するために開発された 暗黒魔法 を復活させた」

暗黒魔法…。聞いただけで、恐ろしいものだというのがわかる。

「暗黒魔法ねえ……。そんなことができるほど大きな組織なのか？」  
レンドが言った。

「いや、本当は1000人より少し多い程度……と思う。私も実際に彼らを見たわけではないし、本拠地がどこなのかも知らないし。もしかしたら、1000人くらいいるのかも知らないけど」

リサはお手上げみたいなおポーズをした。

「……彼らは、古代ティルナノグの技術や研究を用いて、本当にとんでもないものを復活させようとしている」

「とんでもないものって…例えば悪魔や幽霊の類か？」

レンドは少し笑いながら言った。この世界にも、悪魔や幽霊、あるいは妖精とか、非現実的なものが存在するんじゃないかと云われてきたようだが、レンドの表情から察するに、すでにいないものだとほぼ決定づけられているようだ。

「そんなものだったらどれほどいいことか…。それ以上にやばいものさ。……奴らは本当に 邪神 を復活させようとしてる」

「…邪神…？」

邪神というのは、ティルナノグが滅んだ原因である暗黒神ロキのことらしい。2000年前、当時の皇帝などをそそのかし、神々に喧嘩を吹っ掛けさせたのだとか。そして、神々に敗れたロキには永遠なる封印を施されたとか…。

「そんな伝説のような話にある神をか？ 馬鹿げた話だ」

たしかに、ヴァルバの言う通りだ。

「普通に聞けばそうでしょうね。けど、奴らはその復活のために少女たちを誘拐している。これは紛れもない事実だ」

「……………」

「…だが、邪神の復活ってのはどうやって知ったんだ？ それに、どうやって？」

そんなおとぎ話のようなものを本気で信じている組織ではないはずだし。

「…よくわからないけど、彼らを統率する幹部のような者たちはそれ関連のことに詳しいらしいの。なぜなのかはよく分からないけど……これは憶測だけど、『組織の存続に関わっている人物』が伝授したんだと思う」

おそらく、考古学や科学にかなり精通している人物が彼らのバックアップとして存在しているのではないかということらしい。専門分野に特化している者でなければ、魔法を復活させることなどできないと、リサは付け加えた。

「……私としては、インドラの長…設立した男というのがそれらの技術を復活させたんじゃないかって思うけど……」

彼女は「うーん」と唸り、俯いた。

「…なんで、少女たちが誘拐されなきゃならないんだ？」

ヴァルバはあごひげを触りながら言った。

「邪神の封印を解くため…でしょうね。それしか考えられない。彼女たちは普通の人間ではないからこそ、さらわれるの」

「…普通の人間じゃない…？」

そう言うと、彼女はうなずいた。

「………彼らは 聖杯 と呼ばれる鍵を使える状態にするために、特殊な能力を持った少女をさらいつづけている。……それを 永遠とわの巫女 と言つもの」

「永遠の……巫女？」

なんつーか……すごく清楚で陰湿な女性をイメージしてしまったんだが…。

「…鍵である聖杯の鍵を解くために、必要な女性たちのこと…だと思つ」

「だと思つて……」

僕は呆れ気味に言った。

「しょうがないじゃない。彼女たちのような存在については、謎が

多すぎて憶測でしか言えないもの」

再び、彼女はお手上げのポーズをして見せた。

「…聖杯と呼ばれる 鍵 を 鍵 たらしめるのを抑制する何かを解除するために必要なのが、彼女たち永遠の巫女なのだと思う。…私の見解として、ね」

つまり、聖杯の鍵としての機能を封印している、一種の暗号を解除する鍵となるのが巫女、らしい。

「…なんで、そんな女性たちが存在するんだ？」

レンドが訊ねると、リサは頭を振った。

「さすがにそこはわからない。…もしかしたら、誰かの血を受け継ぐとか何とかでそういう風になっているのかもしれない」

誰かの血を受け継ぐ…。ある能力を持った人物の子孫であるが故に、永遠の巫女である…ということか。

「…あの、その聖杯…というのは何なんですか？」

アンナが微妙に挙手していた。

「たしか、聖女サリアが初代教皇アイオーンに与えたと云われる、神々の楽園に流れる聖水が入った杯…だったか。アイオーンに聖なる力を与えたものであり、そのために彼は奇跡を起こせるようになり、人民を救済した…らしいけどな。ソフィア教典に載ってたと思うが……」

レンドがそこで説明してくれた。ヴァルバにしても、なんかレンドも物知りだな。海の間人や、一介の旅人が知っているようなことなのか？ でも、アンナは知らないわけだし…。二人には教養があるってことか？

……ええ？ でも、レンドとヴァルバは教養があるっていう雰囲気じゃないし、むしろアンナの方が一般的な教養は備わっていると思うのだが…。たぶん、これを言ったら二人にすごく怒られてしまいそうなので、胸の奥にしまった。

「……………」

リサは顔を陰しくしていた。

「…リサ？」

「え？ ……あ…ごめん。…聖杯……か。私もよく知らないんだ。ただわかるのは、邪神の封印を解く鍵の一つ……ということだけしか…」

「鍵の一つ？ ……じゃあ、他にもいくつかあるのか？」

「たぶん、そうでしょうね。詳しくはわからないけど」

聖杯を使えるようにするため、インドラは永遠の巫女をさらい続けて……。どんどん話が飛躍していき、付いていけなくなってきた。ここまで聞く限り、ゲームのような内容みたいだ。

…でも現実。僕はそんな世界の中にいる。だから、空はさらわれただ。

「……それにしても、インドラという組織を諸国は知らないのか？ ヴァルバは頭をかいていた。」

「知っているのはシュレジエンだけよ。ルテティアの貴族の中に、その存在を知っている人もいるけど…」

「…アイデアはともかく、ソフィア教を信仰するルテティア、ゼテギネア、シュレジエン…そしてソフィア。この国々が邪神の復活を目指すインドラを放っておくわけがない」

「…すでにシュレジエンのラーナ様には謁見した」

「陛下に？」

レンドは目を輝かせていた。

「空。私があんたをこっちに来させたのにも関わらず、どっかへ行ったのはルテティアやゼテギネアに行ったからなの」

「そうなのか？」

リサはうなずいた。

「…でも、どちらの陛下にも謁見は叶わなかった。まあ、正式な取り次ぎもしてなかったんだけどさ」

彼女は笑っていたが、そりゃ当たり前だろ……と、僕は心の中で突っ込みを入れていた。

「ルテティアやゼテギネアのような大国の主に謁見は叶わなかった

んだけど、シユレジエンの女王様は快く謁見を許可してくれた。：

…陛下は嘆いていた。インドラのような組織が存在するってことが  
女王か…。男性じゃない王ってのもいるもんなんだな。

「私の計画では、イデアを含めた全ての国々にインドラのことを知  
ってもらい、同盟を組むことによって対抗してもらおう」

「…たかが小規模の組織に、そんなことが必要なのか？」

「ヴァルバ、知らないの？ 奴らが持つ暗黒魔法は、かつてのミッ  
ドランド最強の黒獅子団の強さの秘密そのものなのよ」

ミッドランド。彼らの説明によると、約600年ほど昔、ロ  
ンバルディア大陸を一時的に統一していた帝国。主君であったラン  
ディアナ帝国を滅ぼし、公国から帝国となり、わずか十数年の間に  
ロンバルディアは統一。それを行ったのがアルヴィス1世で、彼は  
黒獅子団 と呼ばれる直属の騎士団を用い、敵を蹴散らしたと云  
われる。…あまりの強さに、人々は 死神を従えし騎士団 と畏怖  
したのでという…。ヴァルバが言うには、現在のルテティアはそん  
なミッドランドから独立した小国であったとか。

「…あれって、ただの伝説の類じゃなかったのか？」

ヴァルバは頭の上にクエスチョンマークを浮かべた。

「事実よ。ミッドランドの騎士団並みであるインドラに対し、2大  
陸諸国で対抗するのは大げさな話じゃないと思う」

「じゃあ、そういった脅威を説明すればいいんじゃないの？」

レンドがそう言うと、リサは首を振った。

「それだけじゃあ、ただの狂信としか思われないでしょーよ。ミッ  
ドランドに関連することなんて、所詮作り話だって思われてんだか  
ら」

狂言ねえ…。たぶん、そのことを言っているのが一般人である僕  
たちだから、そう思われてしまうんだ。…なら、説得力のある人…  
…貴族…いや、国家元首に匹敵するくらいの人に…あつ！

「だったらシユレジエンのラーナ様から書状を賜って、それを使っ  
てルテティアやゼテギネアに行けばいいんじゃないの？」

そう言うと、リサは手を叩いた。

「あら、空つてばいい勘してるじゃない」

なぜカリサは僕にウィンクした。僕は無視したが。

「空の言うとおり、ラーナ様の書状さえあれば各国の首長たちに謁見は叶うと思う」

「だったら最初っからそうすりゃいいのに……」

「だって、まさか断られるとは思わなかったんだもん」

「……………」

ヴァルバとレンドは呆れ顔だった。「かわいらしく言っただって、普段とギャップありすぎてなんだか逆に萎えちゃうな……」なんてことを考えてんだろ。事実、僕は思ったわけだし。

「ルテティアとゼテギネアはいいとして、ソフィア教国とイデア王国はどうすんの？」

「ソフィア教国……はまだ無理かもな」

「??」 どうしてですか？ ソフィア教国はソフィア教の中心地ですし、邪神を崇拜するような集団を許さないとは思うんですけど……」

アンナは頭をかきあげた。ソフィア教は他神教に対して敵愾心を抱き、とくに数百年前、実際に存在した邪神教を 異教徒 として殺害した……らしい。

「宗教的なことと言えば、必ずインドラを許しはしないだろうさ。けど……ほら、あれだよ。3年前のクーデター」

「ああ、あれか。そう言えば、そんなことがあったな」

ヴァルバとレンドは納得していたが、僕とアンナは顔を合わせてクエスチヨンマークを浮かべた。

「なんですか？ クーデターって」

「なんだ……アンナは知らないのか？」

「田舎に住んでたからだよ」

と、ヴァルバが説明し出した。

「発端は14年前、ソフィアで教皇の弟である枢機卿が反乱を起し

て即位し、ハロルド10世を名乗り、政権を奪ったことに始まるんだが……つい3年前、独裁政権を築いていたその教皇がクーデターで倒されたんだ」

クーデターを起こしたのは、まだ成人してもいない少年だったという。

「その少年が即位し、新たな教皇となったんだが……未だに旧大司祭派…反乱分子が残っていて、それらの駆逐に少々手間取っているようなんだ」

「そのため、ソフィアは他国との貿易などを一切断絶してる状態なんだって。今はそれなりに治安は回復して限定された貿易船は入れるんだけど、旅人とかみたいな素性の知れない人は入国できないのよ」

リサはそう言うと、ヴァルバを見た。

「……なんで俺を見るんだよ？」

「素性の知れない、怪しい旅人だからでしょ？」

「…リサには言われたくないけどな…」

「でも、あながち間違っていないと思うけどな」

僕は笑いながら言った。

「…ソラにだけは言われたくないな…」

「……否定できん」

僕の時だけやけに力強く言ったな…。

「これじゃあ、私たちは絶対に入国なんてできませんね」

アンナは微笑みながら言った。うーん……僕たちは素性がほとんどわからない者ばかり。見つかったら即刻取調、でしょうねえ。

「まっ、そんなこんなでしばらくはソフィアには入れないってことだ。治安は先々代教皇の統治時なみに回復してるから、入国禁止令が解かれるのも時間の問題だとは思っぜ？」

レンドの言うとおり、ソフィアの暴徒はほとんど駆逐されたのだとか。

「そしてイデアは……こここそ無理があるだろうな。それこそ宗教

的な問題で」

「……イデアだけがソフィア教を信仰していないってことが問題あるのか？」

以前、ヴァルバがそんなことを言っていた。

「まあそういうことだ。あそこは古代から土着の神を信仰する国で、ソフィア教の聖典にある 光神 とかは信じていないんだよ」

「イデアは2大陸の諸国の中で最も古い歴史を持つ国で、2400年くらい昔に建国されたって言われてるの」

ガイアで言えば、日本の天皇家が統治し始めた頃だったかな。：

まあ、あそこらへんは後世の人々の作り話だろうけど。

「あそこは土着の神を異常なほど信仰してるし、頭が固い人ばかりだから、インドラと闘うことは ソフィア教徒のため のように捉えないかもしれない」

「？ なんて？」

「邪神つてのは、ソフィア教の聖典に記されている 神々の戦乱を引き起こした神で、ソフィア教徒がそんな邪神を信仰するような組織を糾弾するのはわかるが、それらとなんら関係のないイデアまでが協力する義理はないってことさ」

ヴァルバが言うには、イデアの神は聖典に載っている神でもあるんだが、イデアの人々はそれを信じていないらしい。彼らには彼らの奉ずるものがあり、それ以外は関係ないということか。

「…イデアはともかく、せめてルテティアとゼテギネア……二つの大国さえ協力することができれば、インドラはどうにかできるかもしれないですね」

「そうだな…。ソフィアにも神聖騎士団、シユレジエンやイデアにも独自の兵団がいると言っても、2国の兵力には到底敵わないだろうしな」

「どうかしらね」

リサが言った。

「言ったでしょ？ 奴らはかつてのミッドランド並みの可能性があるあ

るって」

「とは言っても、現在のルテティアとゼテギネアさえいればなんとか……」

ヴアルバが言うと、彼女は首を振った。

「たとえばそうだとしても、味方は多いに越したことはない。それに、諸国の宗教的首長であるソフィア教皇の承認さえ得れば、ルテティアとゼテギネアは協力してくれるし、なんて言ったらって団結力も生まれる」

ルテティアとゼテギネアは昔っから仲が悪い。もしもソフィア教国が協力してくれなかったら、2国も団結して戦おうなんて思わないだろうし。

「念には念を入れないと、ね」

たしかに、リサの言う通りだ。世界をどうにかしようとしている奴らを止めるには、卑怯とは言われても強大な見方をつけるのは当然の策略だ。

「しかし、諸国に協力を要請するって言ったってはたして間に合うのか？ 永遠の巫女たちの命だって……」

「……これも私の憶測で悪いんだけど……」

ヴアルバが言うと、リサは片足で足踏みをしだした。

「……奴ら、巫女たちをさらうにしては人数が多すぎる」

「……つまり？」

「たぶん、聖杯の解除に必要な巫女の数、彼らの想像以上に多い……っていうことだと思う。もしかしたら、まだ巫女を見つけようとしているのかもしれないし……」

「ということは、まだある程度の時間はあるってこと……なのかな？ だろうね、とリサは言った。

「……少なくとも、1年くらいは大丈夫なんじゃないかな。どうやって解除するのかわからないけど、たかが特殊な人間を集めただけで簡単に封印が解かれるはずがないと思うから」

たとえば永遠の巫女を全員集めたとしても、彼女たちを解除のため

の 鍵 とするには別の時間も必要。…あるいは、まだその方法を見つけていないかもしれないということだ。

「それにしたって、これからどうするんだ？」

レンドが言った。大体の内容は理解できた。これからはどのように行動するか、だ。

「とりあえず、ソラにはルテティアに行ってもらいたいんだけど」

リサは僕の方に視線を向けた。

「ルテティア…？ まあ、最初っから行くつもりだったけど」

「そうなの？ じゃあ都合がいいや。あんたにはルテティア国王ルーフアス8世に謁見してもらいたい」

「おいおい……さっき、謁見は叶わなかったって……」

「実はさ、私の知り合いに貴族がいるんだ」

リサは僕が言う前に言い出した。

「アンジュー伯爵つてのがいるから、そいつに会えばたぶん何とかしてもらえる」

「なんとかかって……なんだよ？」

「さあ？ 昨日か一昨日くらいに連絡がきて、もしかしたら国王に謁見できるかもしれないらしいんだってさ。たぶん、貴族の力を利用してなんとかしてくれたんだよ」

「……だったら、お前が行けばいいんじゃないのか？」

リサは首を振った。

「タイミング悪いつていうのか……私には私のやることがある。だから、あんたたちに頼んでんだ。ルテティアに用事があるんだろ？」

「ちょうどいいじゃないか」

「まあ、それもそうなのだが…。」

「とりあえず、俺はシュレジエンに用事があったから、物資調達のためにランディアナに寄港する予定だ」

「僕たちはそこで降りて、王都へ向かう……」と

「なんだ、さらに好都合じゃないか。思ったよりも事が早く運びそ  
うだ」

と、なんだかリサは上機嫌だった。

「あの……一つ、質問してみてもいいですか？」

僕たちはアンナの方に振り向いた。

「ずっと疑問に思ってた事なんですけど……お姉ちゃんがさらわれたのは永遠の巫女だから……ですよ？ ……じゃあ、どうして別世界の空さんの幼馴染の方をさらったんでしょうか？」

「……………」

たしかに、それもそうだ。関連のある二つの世界とは言っても、血脈的な関連はないはずだ。……そうだよ。リサは言ってたじゃないか。誰かの血を受け継ぐからこそ、永遠の巫女なのだと。だったら、どうして別世界の住人である空がその巫女なんだ？ 矛盾が生じてしまうじゃないか。

「……ごめん、それはわからない。なぜ奴らが彼女の存在を知ったのか……なぜ、別世界の人間が永遠の巫女としてなり得ていたのか……………」

リサはうーんと唸った。

「前々から思ってたのよね……………あの子たちには謎が多すぎる。……どうして別世界の人間が永遠の巫女に？ ……この世界とあの世界……………遠い昔に何かあった……………？ ……けど、あの空間は約束の刻まで封じられていたはず……………」

彼女は一人で何かをブツブツ言い始めた。

「……その、空の幼馴染が元は レイディアント の住人であったっていうことはあり得ないのか？」

ヴァルバが言った。

「……いや、それはないと思う。彼女たちは真正正銘あそこで生まれた人間だし……………」

真正正銘、彼女はおじさんとおばさんの子供だ。

……もしか、彼女の先祖の誰かがレイディアントの人間だったのでは？ 遠い昔にガイアへ移り住んだ……………ということではないのだろうか

か？

「……まあ、わからねえこと考えててもしょうがねえだろ。ともかく、予定通り目的地に行くしかないんじゃないの？」

「…レンドの言う通りね。ここで考えてても時間の無駄だ。とりあえず、行動しようか」

「じゃあ俺たちはルテティアへ行く……でいいんだよな？」

「そゆこと。ルテティアへはランディアナから東……わかるよね？」

「んなこと知ってるっての」

馬鹿にするなっていう感じのヴァルバ。

「それにしても……話が大きくなつたな。…インドラ、か」

レンドは少しため息をついた。

「何？ 知らない方が良かったって思う？」

リサはちよつとにやついた顔で言った。

「…後悔はしねえよ。知つちまつたんだからな。知らないふりして

何もしないより、行動した方が何かと男らしいだろ？」

「そーでもないけど？」

「…くっ、腹立つ女…」

彼女は全否定しやがった。せつかく、レンドがかっこつけたのに

…。

「…ともかく、さっきソラたちには言ったけど、俺の船の準備とかもあるから出発は明日の朝だ。それまで、この町で自由に行動していてくれ」

「せつかくのミレストスだ。いろいろ買い物したいところだな」

ヴァルバはそう言うと、ベッドから降りた。

「あれ？ 酔いは大丈夫なのか？」

「……頭痛い」

「なんだよそれ……」

彼は頭を抱えてテーブルにあった水を一気に飲み干した。

「まったく…情けない」

「誰のせいだと思ってるんだよ……」

「飲んだヴァルバのせい」

「…お前なあ…」

ヴァルバは「とほほ」と苦笑した。

「あつと……空」

「ん？」

僕は彼女の方に向き直った。

「一つだけ言っておくよ」

「…なんだよ？」

「あんたはきつと……インドラの奴らと闘つことになる。首長にも

……そして、奴にも

…奴？」

リサはうなずいた。

「…………… シュヴァルツ ……………それが、空ちゃんをさらった男の名よ……………」

シュヴァルツ。そして、インドラの首長……………。

彼らとの闘いが始まることとなる……………。

13章・ミレトスにて　しばしの安息と己の剣（前書き）

今回の章は、のんびりとした様子が描かれています。  
話的にはあんまり進展しません。



ころどころ汚れている。そうだった……この世界に来てから、服を洗っていないんだ……。

「……もう汚れちゃってますしね」

アンナが服の汚れに気が付き、ボソツと言った。

「決まりだな。ソラの服を買いに行こうか」

「服を？」

アンナとヴァルバは顔を合わせ、ニツと笑った。アンナはニコツとしたのだが、ヴァルバは白い歯がこぼれるほどの笑顔をしていた。

「せっかく、ミレトスに来たんだ。ここには各地で製造されたいろいろなものが入り入れ、売られている。ソラに似合う服だって、たくさんあると思うしさ。お金は俺が払ってやるからさ」

とヴァルバは言い、僕の肩を片手で叩いた。意外と強く叩きやがったので、思わずふらついてしまった。

「……んなこと言われても」

「いいじゃないですか。その服って、ガイアのものなんですよ。ね？ こっちの世界にいるんだし、こっちの世界の服に着替えたほうがきつと似合いますよ」

アンナはフフフと笑いながら言った。そして、ヴァルバが頭をかきながら、付け加えるように言った。

「それに、これからルテティア国王に謁見するんだ。そんな服装じゃあ、怪しまれるからな」

たしかに……。初見というのは大事だ。第一印象で疑わしいのか、信頼するに足るのか……。普通の人はそうやって判断するだろう。

「……御尤もな意見ですな」

「だろ？ そうと決まれば行こうぜ。暇つぶしだと思えばいいんだよ」

「暇つぶしって……」

まったく、ヴァルバは見た目どおり、大雑把なやつだ。

ミレトスの出店が立ち並ぶ、大きな街道を 中央商店街道 とい  
うらしい。来る時に通った道だ。ここにはロンバルディアの内陸や、  
西海岸で取れた畜産物を取り扱っており、海鮮物などの日常に必要な  
なものが出店から売られている。

その街道から、南のほうに行くと、 総合交易街道 というのが  
あり、貿易によってもたらされた各国の特産物や珍品など、人が趣  
味で買うようなものが売られている。見る限りでは、物好きな奴し  
か買わないようなもんがある。どこぞの貴族とかが、無駄に金をは  
たいて手に入れそうな壺みたいなもんもある。

この街の特徴、それはロンバルディア建築であるという。イメー  
ジとしては古代ギリシャであろうか。前にも述べたが、この街のほ  
とんど……いや、全部と言ってもいいほどの建物が白い。街道に敷き  
詰められているレンガのようなものさえ、白いものとなっている。  
白くないのは民家の庭にあるオリーブのような樹や、出店、そして  
空と海だけだ。しかし、貿易都市だがなんだか知らないが、ちよつ  
と建築物を詰めすぎではないだろうか？ 街中を這うように張り巡  
らされている街道は、そのため狭くなっており、どうしても窮屈だ。  
市場が開かれる時は人でごったかえすのに、これでは仕事の効率な  
どが悪くなるのではないだろうか。

とはいえ、この街で唯一気にしていることがある。それは 色  
だ。

街の白。海の蒼、空の青。それぞれが見事にマッチし、驚くほど  
の美麗さを放っている。それぞれの色との境界線がはっきりとして  
おり、より一層の輝きを放っているようにも感じる。できることな  
ら、この風景を写真にでも収めたいのだが……まあ、無理なんだよ  
な。持ってきてないし、持ってきたとしても印刷もできねえし……。

総合交易街道の一角に、服屋さんがあった。店名はオリブの海域。……独特で……変なネーミングだな……。それに、服を売っているイメージが皆無と言っていいほど浮かばないのだが……。店長に突っ込みたい次第です。

店の中に入ると、見たこともない服やズボン、男物も女物も無造作に飾られている。その数は、ガイアの世界の服屋より断然多い。ていうか、こんなにあつては良い物も見つけることができないのでは。

どれもこれも、僕から見れば「なんじゃこりゃ」という感想しか出てこないんだが、ヴァルバの言うとおり、国王に謁見するのにこの世界ではありえないような服装で行くのは、怪しまれてしまうものだ。

この世界の一般人っぽい服装は、僕では決めることはできないのでヴァルバとアンナに任せることにした。僕は彼らが決めている間、他の服を見ることにした。

いろいろと見てみると、ここの服は短いものが多いように見える。短パン、半袖シャツ。女物は、スカート類や白い服が多い。あと、タンクトップっぽい物もよく見かける。もしかして、港町だからこういう服が多いのかもしれない。それにミレトスはフィアナに比べれると、気温が高いように感じる。5月の後半（以前、アンナに聞いたのだが日にちはガイアとおなじだった。……不思議だが）にしては、けっこう暑い。しかし、汗が出るかといったら、そうでもない。なぜなら、海からの風が町中を吹きぬけているからだ。ちょっとぬめぬめするのが嫌だが、汗でなるよりかはマシだ。

この店では、ほとんど長袖がない。まあ、これから夏に向かうんだと思えば、半袖の服を買ったほうがいいよな。

個人的に、夏より冬のほうが好きだ。夏はむしむしするし、汗は出るし、やること全てがめんどくさくなってしまふ。7月とかに学校に行くのは、かなり気分が削がれるものだ。プールに行けばいいと思うかもしれないが、真夏、真っ盛りにプールに行くと、人が多

すぎて気分よく泳ぐこともできない。川で泳ごうにも、それなりの都会に住んでいたため川は汚染されており、泳ぐことなんて絶対に無理だ。そういうとき、田舎に住んでいる人たちがうらやましい。最近では、ヒートアイランド現象とかいう都市部にしか起きない現象で、気温は高くなる一方だったし。

それに比べ、冬はいい。寒いのが得意…というわけでもないのだが、寒いならたくさん服を着たりすればいいし、寝るときとかなんか布団や毛布をくるんで寝ると、かなり気持ちがいい。夏だと暑すぎて、快眠なんてほとんどできっこない。そして、何と言っても雪しんしんと降りしきる雪は、一つの絵。夜の黒と、ゆらゆらと降っている雪の二つが織りなす憧憬は、どこか魅入ってしまうほどだった。

……そういえば、なぜか僕の中に 空 は雪のイメージがある。いや、 白 ……と言ったほうがいだろうか。

真っ白な風景の中に、彼女1人でたたずんでいる。そんな、イメージがある。彼女の名前どおり、青空の下にいる空つても好きなんだが……白い世界の中で微笑む彼女は、哀しさを漂わせているというか……。それが好きなのかもな。

「おーい、ソラ。来いよー」

ヴァルバの声でうつろだった精神が、正気に戻ったようにハツとした。後ろに振り向くと、カウンターの前でヴァルバとアンナがこっちを見ている。

2人のところに行くと、カウンターの上に服が置かれていた。

「これは……？」

「もちろん、ソラの服」

ヴァルバが得意そうな顔で言った。いや、それはわかってんですけどね……。

「似合うといいんですけど……」

アンナが照れながら言っている。

「あ、いや……自分で選ぶより、他人に選んでもらったほうが大体似合うもんだよ。(……たぶん)」

というわけで、試着することになった。

服は二枚重ねで、長めのタンクトップと半袖シャツ。上のほうは全体が青色、いや、空色かな。下のタンクトップは、真っ白に染まっている。ズボンは、長ズボンだった。茶色の長ズボンで、はいてみるとちょうどいい長さだった。あと、黒いスカートみたいな腰に巻くもの、装飾品であろう腕輪、ベルト。そのベルトに引っ掛ける小さなバック。あと黒い手袋。あんまり手袋は好きではないのだが。「お、けっこう似合ってるじゃないか」

「そうですね。ぴったりです」

2人にそう言われ、なんだか照れくさい。

「ソラは背が高いわりに、ほっそりとした体だから、服のサイズがそれで合うかどうか心配だったが……ちょうどいいな」

まあ、180センチだけどLサイズでは少し大きすぎているからな。これは、Mサイズのほんの少し大きめのサイズかな。たしかに、ぴったりだ。

「そうだ。あと、お前にはこれをやるよ」

ヴァルバが差し出したのは……

剣だった。

僕はそれをなかなか受け取ることができなかった。剣なんて、初めて見た。これ……本物か？

「こ、これ……」

「もちろん、剣だ」

ヴァルバがすんなりと答えた。

「けど、こんなもの……」

「絶対に、お前には必要になる」

ヴァルバは眉間にしわを寄せ、厳しい口調で言った。さっきまでの雰囲気、風で流されたかのように消えていた。

「インドラの連中と戦うことだってあるかも知れない。そのほかにも、盗賊だとか、悪人だとかに襲われるかもしれない」

「そ、そうかもしれないけど……」

「お前は、男だ。だから護られる側じゃなく、護る側なんだ」

「……………」

護る……。

「もしアンナが危険な目にあつたとき、俺がいなかったらお前が護つてやらなくちゃならない」

ヴァルバは僕に無理矢理、剣を渡した。その剣はズシリと、僕の体にのしかかってきた感じだった。そんなに重くないと思っていたが、違う、想像よりももつと思ひ……。いや、そうじゃない。勝手に重いと感じているのかもしれない。

「………… お前は、幼馴染の女の子を助けるんだろ？」

「………… あ、ああ」

僕は力なく答えた。

「だったら、これが絶対に必要になる。これは護るために使うものだ。その意味を絶対に忘れるな」

ヴァルバは僕の目を見ている。きっと、僕が心の底から戸惑っているのがわかっていいるだろう。

「そして、覚えておけ。……その剣の重さが 人を殺す ことと 命の重さ だということを、な」

「……………」

武器とは、殺めるもの。そのために、作られたもの。

「………… まっ、どう扱うかはお前次第なだけだな」

「……………」

剣を握っている手が微妙に震えている。意識していないのに、震えている。まるで、地震が起きたときの初期微動みたいに。

「わかつてるんだろ？ お前の世界と、この世界は違つてことを」

その言葉に、僕は顔を上げた。

「……もうお前はこの世界にいるんだ。迷いもするだろうが、自分のためにも早く吹っ切れておけよ」

ヴァルバのさっきまでの厳しい顔が、縄が解けるかのように緩んだ。

「ソラさん……」

アンナが心配そうな顔をして僕に近寄り、顔をうつむかせながら言った。

「……戸惑うことのほうが多いと思います。でも、頑張ってください……。ソラさんなら、きつとできると思います。いえ、絶対に！」

そんな自信、どこから来るんだ？ どうして、僕をそこまで……。

……と疑いたくなかったが、彼女の笑顔を見てるとそういう気が無くなってきた。彼女の笑顔には、暗い影に光を照らす力がある。

そんな気がした。

「……僕に……できるか……？」

この 重さ に耐えることが……。

「ええ、きつと……！」

「……ありがとう」

護るための剣。殺すための剣。武器を扱うということは、その二つを行うということ。二極の……相容れぬもの。時として、人はやらなければならないことがある。この世界に来たからには……空を救うと決めたからには、やらねばならない。そこから逃げても、結局ダメなんだ。何も…変わらない。

そういえば、ヴァルバだけ昼飯を食べていないので同じ店に食べに行くことにした。

「それにしても……アンナはよく1人でお姉さんを探そうと思ったな」

ヴァルバがミートスパゲッティみたいなものを、大きな音をたてながら、アンナに訊いた。

「たしかに。普通、女の子が1人で行くなんて考えられないもんな」

「……どうしても、お姉ちゃんに会いたかったし……それに、真実が知りたいんです」

「……どうして家族が離れ離れにされた……とか？」

僕は、アンナの方を見ながら、ロールキャベツみたいなものを口にはおぼった。ここの料理は、『ガイア』のものとそんなに変わりばえはしない気がする。別世界だといっても、食べ物まで変わらないのだろうか。ゲームとかでよくある、亜人といった類の人たちも存在しないし……。

「……そうです」

アンナはうなずいた。

「ブルターニユ伯爵ダグラス……だったか」

ヴァルバがそう言うと、再びアンナはうなずいた。

「ダグラス伯……当時の王国師団主席隊長だったかな」

「有名なのか？」

「まあ、な。元は子爵だったんだが、17年前まで行われていた先の戦争時、最も功績を挙げた將軍でね。それによって伯爵を賜った……と聞いたがな」

しかし、とヴァルバは続けた。

「10年前、ハロルド10世に反発する過激派の神聖騎士団が反乱を起こし、それに軍事介入したルテティア。……その時、戦死したんだっただか……」

「……あんまり記憶にないんですけど、なぜか私だけがヴィンラントを離れさせられて……」

そして、お父さんの従姉にあたるフィアナ村の宿屋のおばさんのところに引き取られたのだという。

「実はお姉ちゃんだけ、他の人に引き取られたんです」

「……どうして？」

「……ファイアナでは、私とお姉ちゃん……二人を養うのはちょっと無理があつたんです。だから……」

そっか、あの宿屋にはおじさんはいなかった。おばさん1人で養うのは、かなり無理があつたんだろう。

「それで、お姉ちゃんは王都に行つたつて聞きました」

王都か……。じゃあ、没落してすぐに王都へ連れて行かれたのではなく、最初から王都にいた……ということが。

「……それでようやく帰つて来たのに……」

アンナは顔を俯かせ、弱い声で言った。

「……やつと、やつと、一緒に暮らせるようになったのに、たったの2年で……また離れ離れに……」

たしか、2年前にお姉さんはさらわれたつて言っていたな……。

「……だから、どうしてもお姉ちゃんを助けだして……もう一度、一緒に暮らしたかつたんです……」

アンナの目が少しだけ潤んでいた。

「……毎度毎度思うが、アンナは本当に優しいな」

ヴァルバはニツコリ微笑みながら言った。

「そ、そんなことないです。ただ……お姉ちゃんに会いたい一心で……」

彼女はほんの少しだけ、照れていた。

僕はふと思った。お姉さんを引き取つたという人が、インドラ……シユヴァルツを使つて、さらつたのではないだろうか。その人こそ、

呪術研究院に勤めている人なんじゃないだろうか。

「……アンナ、訊きたいんだけど……君のお姉さんを引き取つた人……君は、その人が全ての犯人なんじゃないか……思つてるんじゃないのか？」

「……」

アンナの顔がこわばつた。

「……そうなんじゃないの？」

僕はもう1度聞いた。アンナの顔から察するに、当たりかもしれ

ない。

「お姉ちゃんは言っていました。……その人が、王都の呪術研究院で……お姉ちゃんに対し、あることを……」

「……あること？」

アンナはうなずいた。あんまり口には出したくないという感じがした。

「……魔法の実験……をされていたみたいなんです」

「魔法の実験……？」

魔法と言われても、無縁の僕には何も想像できなかった。

「私もよくわからないんですけど……お姉ちゃんによると『私だけが王都に連れて行かれたのは、アンナにはない特別な精霊力を持っていて、そのせいで怪しい薬物実験とか、魔道注入とか、体がおかしくなるようなことをされてきた』……らしいんです」

「……つまり……ええっと……」

「……精霊力というのは『エレメンタル』……元素とも言って、人間の体を構成するものだ。一般的に、人間の体内にあるのは基本属性のみなんだが、リノアンには特殊な元素があった……ってことだ」

「はあ……なるへそ」

ヴァルバはご丁寧に説明してくれた。こういう人がいないと、そのうち頭がパンクしそうだ……。

「ソラ、あんまりわかっていないだろ？」

「あ、いや……大まかなことはわかるよ。アンナのお姉さんが、ある実験対象にされていたということは……」

「簡単に言えばそういうことだな。……魔道注入のことが、1番の問題だ」

ヴァルバは黒いあごひげに付いた、ミートを取りながら、説明した。

魔道注入 というのは、もともと魔法を扱う素養のない人物に対し、人工加工された 精霊力 を人体に直接注入、あるいは液体化させたものを飲ませることによって、強力な魔力を得れるのだと

いう。生まれつき精霊力の備わっている人に行うと、尋常でないほどの魔力を得、操作の難しい魔法も扱えるのだとか。

「この魔道注入を施された人間は、一般の魔術師より強い魔術を操ることができるようになる。体内に持つている元素の量が多くなるわけだしな。……だが、これにはそれなりの 代償 がある」

「代償……？」

「……無理矢理、精霊力……つまり元素であるエレメンタルを人為的に体の中に入れてるんだ。体に拒否反応が起こり、徐々に細胞が壊れ始め……死に至る。それも、平均寿命よりも若い段階でな」

「だんだん、ヴァルバの顔がこわばっていった。」

「……だから、数百年ほど昔にルテティアでは魔道注入、そして魔力を増幅させるような薬の開発・使用そのものが禁忌とされたんだ。もちろん、他の諸国も禁止している」

「禁忌にされているはずのことが、どうして……？」

「僕はすぐに訊ねた。」

「ルテティアのある人たちが禁止……禁忌とされていることを、行っているということだ」

その言葉を聞き、ハツとした。

「呪術研究院……か」

「……そういうことだ」

ヴァルバがうなずいた。

「……アンナ、君のお姉さんを連れて行った人の名前はわかるか？」

僕はアンナの方に向き直って聞いた。

「えっと……ちよつとうる覚えなんですけど……ステファン……とか言う名前だったような……」

アンナは天井を見上げながら答えた。その時、

「ステファン……！！」

突然、ヴァルバの顔が硬直した。頬の辺りに、一筋の冷や汗が見えた。



と知り合いだったのかもしれない」

「えっ？ 知り合いじゃないって言ってたじゃないですか」

僕は顔を振った。

「……様子からして、嘘か何かだろう。知り合いじゃなくても、あいつは知ってるんだよ。クテシフォン公爵を……」

あいつは顔色が悪くなるほど、クテシフォン公爵の名前を出すのが嫌だったんだ。それだけ因縁のある仲だっていうのだろうか……。気になるところだが、本人が言いたくないのなら訊かない方がいい。……空が行方不明になった時、友達がそうしてくれたように。

「……アンナはステファン」ロベスピエールってのを知ってるのか？」

アンナは少し間を空けた。

「……実は、私もよく知らないんです。ただ、遠縁にあたる上流貴族の方で何度か家の屋敷でみたような……気がします」

無理もない。まだ3歳とかそこらの頃だ。

「たしか、クテシフォン」というのは王都の近くにある城塞都市だっけ聞きます。軍事的な拠点らしいですよ」

「城塞都市で軍事的拠点、ねえ……」

そんな重要な所を治めるステファン＝ロベスピエールというのは、かなりの権力者なのだろう。

城塞、というのを聞くと想像としては中国の万里の長城を想像してしまうが、あそこまで大きな建造物はこの世界には無いだろ。だって、万里の長城は、唯一、宇宙から見える建造物らしいし。

「クテシフォン公爵が呪術研究院の設立者で、アンナのお姉さんを連れて行った人物……か」

「……何から何まで、その人が秘密を握っているとしか思えませんね……」

「だな。インドラとの関係も持っているのかっていうのもあるし……。アンナ、他にステファン公について知ってることはないのか？」

「……ごめんなさい。それ以上はよく知らないんです。ほとんど会

ったこともないですし、私って結構世間に疎いし……けど……」  
アンナは窓の外を見つめた。

「……ヴァルバのほう知っている、か？」

アンナはゆっくりとうなずいた。

「どうしてでしょうか……。ヴァルバさん、あんなに顔色悪くして

……」

「さあ……。けど、言えるのはヴァルバはただの旅人じゃないってことさ」

「……………」

アンナはわからないような顔をした。

「旅人って、あそこまで情報を持っているもんかな？」

「あそこまでって？」

「旅人にしてはよく知りすぎている気がするんだよ。現在の情勢やらなんやらさ。ただの旅人にしては知りすぎているような気がしてならないんだ」

「それもそうですけど……」

「1番は、リサを知っているということだ」

「……………」

リサ。彼女を知っていることが最も怪しいと、僕はふんでいる。

「……リサは、次元を超えて僕のいるガイアに来た。世界が二つあるってことを知っていて、さらにはその移動の仕方まで知ってる。それに、たかが一少女が一国の女王に謁見できるなんてのが、そもそもおかしい。……いろいろな知識を持っているし、諸国の知らない組織であるインドラのと、奴らの目的……そして、誘拐の実行犯の名前さえも知っている。そんな謎だらけの少女と知り合いで、妙に情報を持っているなんて、怪しすぎんだ」

僕がそう言うと、アンナは目をぱちくりさせながら顔が固まっている。

「ただの旅人だなんて言っていたけど、絶対に嘘をついている。胡散臭いってのも程があるってんだ」

彼女はちよつと苦笑していた。

「か、考えすぎじゃないですか？」

「いや、絶対におかしい。……それに、あいつ年齢ごまかしてるよな？ 25歳だなんて言ってたけど……あのひげ面、どう見ても30代くらいじゃないか！」

僕は半分笑いながら言った。これは、どうしても言いたくてしようがなかったことなのだ。共感者が欲しい……その願いが、このセリフを発させたのだ。

「そ、それもそうかもしれないけど……ただ単に、顔が老けているだけかもしれないですし……」

「……それはそれで、結構ひどいよな……」

「えっ……え？」

アンナはよくわかっていなかった。やっぱり、アンナって天然だよな……。素直とも言えるのかもしれないが。

「……まっ、とやかく言ったって意味ないか。あいつが言いたくないのなら、言ってくるまで待つてあげなきゃいけないんだよな……。一緒に旅してるんだから」

心にしまっておきたいことってのは、誰もが持っていることだ。言えないということとは、心の整理ができていないってことだ。本当は聞きたいことだらけだが、言ってくれないのは信用されていないからなかもしれない。そこは、仲間として少しずつ信頼されるようになってからも和うしかない。……かなり難しいことだとは思っけど。それに、出逢ってまだ日は浅いが……悪い奴ではないと思う自分がある。彼は信じるに足る人物だと。いや、信じたいのだと。

「……敵しいかと思えば、優しいんですね、ソラさんって」

「……なわけないだろ。ただ、相手の気持ちを酌んでやってるだけさ」

「そういうところが、優しいんだと思いますよ」

あんまり、アンナがはつきりと言つので、顔を赤くしてしまい、とっさにアンナの目線から背けてしまった。

店の外で、人々が足早に通り過ぎていく街道を見つめ、ヴァルバはつぶやいた。

「……どっちにしても、お前は逃れられなかったのか……」

……リノアン……

ヴァルバはいつの間にか宿に戻っていた。僕たちとはというと、店から出て海の見える場所でのんびり過ごしていた。

気が付けば、日が暮れてきた。どうやら今日の貿易船の出入りは終了したらしく、さっきまでにぎやかだった港が、静かになった。荷物運びの男たちも、そこらへんでくつろいだり、談笑したりしている。

この世界の海の夕焼けもきれいだ。ガイアで初めて海に行った時も、夕方に見た海と夕焼けは幼い子供心が奪われるほどだった。静かな波が、黒い影を作りながら遠くに見える浜にゆっくりと押し寄せる。この世界でも、それがある。自分のいる港には浜なんてはないが、それでもやはり僕の心を奪う。

それにしても、ここの海はガイアの海に比べて断然きれいだ。サンゴ礁は見えないが、ごみなんて一つも浮かんでいないし、太陽の姿がくつきりと、海に映っている。ここは、まだ文明が発展途上だから

らだろ。ガイアにもまだいくつかの美しい海は残されてはいるが、それが汚されてしまうのも時間の問題だろ。……遠くない未来、全ての海で泳げなくなってしまうかもしれないな……。

21世紀に生きていた自分はそれなりに幸せだと思っていたが、この世界の風景を見てみると、そうでもないんじゃないかって思ってしまう。この世界をまだそんなに回ってはいないが……海辺で荷物を運んだり、商品を買ったりする人々、ひっそりと暮らす小さな村の人々。みんな、笑顔がきれいだった。

なんでだろうな……。夕焼けを見てみると、いろいろと物思いにふけてしまう。けど、こういうときはあんまり悪いことは考えなくなる。よく、嫌なことがあった時空を見上げる僕は、よく陰鬱なことを考えていた。

生きることか。

無為に存在するものか。

でも、この世界ではあまり考えていない。世界が美しいからだろ  
うか。

「ん？」

ふと気付き、アンナを見てみると頭が揺らいでいる。よく見てみると、アンナは寝てしまっているんだ。「ここで寝ちゃダメだろ」と小さく言いながら、起こそうとしたら、アンナが僕の方に倒れ掛かってきた。

一瞬、どうしたらいいかわからなくなってしまった。しかも、なぜだか体が動かなくなってしまった。某漫画の「時よ止まれ、ザ・ワード」をかけられた感じだ。

身動きができないので、僕はそのままでいることにした。

「……………」

こうやってしていると、空を思い出してしまっ。

空……。どうしているだろう。僕が見ている、この夕焼けをどこかで見ているだろうか。それとも、夕食でも食べてんのかな。……

いや、1番の願いは、とにかく無事であって欲しいことだ。この世

界に無理やり連れてこられ、あいつは……………。

「ありゃ、不倫ですかい？」

前触れもなく、女の声が後ろから聞こえた。あまりの驚きで、立ち上がってしまいそうだったが、なんとかそれを抑えることができた。

心拍数が下がってきたところで、恐る恐る後ろに振り向いてみると、そこに立っていたのは……………リサだった。

荷物バックを後ろに背負い、朝の格好のまんまで、あの銀色の瞳が夕日で反射しながら僕を見下ろしている。僕の背中に、一筋の汗が流れたような感じがした。たぶん、冷や汗だ。

「お、お前……………」

僕は驚きで、言葉がうまく出てこない。口が空気を食べているように、パクパクしている気がする。

「やっぱり不倫か？ 肩なんか貸しちゃって」

ニヤニヤしながらリサは言った。

「な、な……………」

「『何言ってるんだよ』……………ってか？ はっきり言えよな〜」

「お、お前なっ！！！」

僕はアンナを起こさないように、小さくも大きな声を出すように言った。

「まったく、お盛んだね〜最近の若いもんは」

「ば、ババアかお前は！」

リサの顔が一瞬でムツとした顔になり、肩に担いでいるバックで僕を殴った。見事に顔面に直撃。

「い、いってえな！」

「ババアとは何さ！ これでもまだ16歳なんだ！ あんたと一っしか違わないんだよ！」

あれ？ 16歳だったっけ？ にしては、口調がお姉さんみたい

な感じた。というより、なんだか知っている感じなんだよな……リサって。誰かに似てるとも思ったし……。うーん。

……なんでそんなに暗いの？ あんた……

えっ？

今の声は……誰だ？

「どつたの？ ぼけーっと口を開けて」

不思議そうな面持ちで、リサは僕を見る。

「いや……」

懐かしく……温かく、それでいて厳しい女性の声……

「あんたって、ホントに変な人間よね」

「な、なんだと!？」

「だって、よく上の空になるし。変だよ。変人」

「変って言うなっつ!!」

僕たちがそんなふうに行っていると、アンナが「う、うん」と唸った。そして目が覚めたのか、目をこすりながら頭を起こし、辺りを見回した。

「あれ……? リサさん、どうしたんですか？」

「ん〜? なんでもないよ、アンナ。切符も買い終わって手続きも済んだし、夕焼けでも見ようかな〜ってね」

そう言いながらリサは微笑んだ。

「……んな柄じゃねえだろうに……」

と、僕がつぶやくと、荷物を持っていないほうの手でおでこにデコピンをしてきた。

「な、何すんだよ!?!？」

「減らず口だからね! ほら、晩御飯でも食べに行こ。約束したじやん」

「……晩飯？」

「そ。……あれ？ ヴァルバは？」

リサは頭をきよるきよるさせながら、辺りを見回していた。ヴァルバがそこら辺に居ると思っただろう。

「ヴァルバなら宿屋だよ」

僕は宿屋のほうを指差しながら言った。

「そっか。じゃっ、あいつなんかほっとして3人で行きましょ」

「え……？ ヴァルバさんは……」

まだ、アンナは寝ぼけているのだろうか。目が開いたり閉じたりしている。

「いいのいいの、あんな飲んだくれ。おいしそうな店を見つけたから、行きましょ。おごってあげるからさ」

そう言いながら、リサは半ば強引に僕とアンナを連れて行った。

リサに連れて行かれたのは、朝と昼に行った店とは違って少し高価そうな店だ。きらびやかな看板が飾られており、窓から光が溢れている。電気がない世界だったのに、贅沢なもんだ。油を使いまくってんだろっな。

どうやら、ミレトスの都市内の北側に料理店が立ち並ぶ街道があり、ここにはパブに居酒屋、他にも風俗っぽい店もある。

「お金持ちばかりが集まるところさ。居酒屋だって、どっかの商人や旅行に来た貴族でないと買うことのできない酒ばかりさ」

「じゃあ、この料理店は？ 見るからに貴族とかが出入りしているうなんだけど」

と言つと、

「ここは海賊とかみたいな荒くれたちでも受け入れてくれる、良心的な店さ」

リサはにこやかに答えた。どうやら、リサは貴族とか大して何もしていないのに、偉そうに踏ん反りかえっている人間が大嫌いらし

い。まあ、見た目通りというか、予想通りというか……。

中に入ってみると、たくさんの人が料理を食べながら談笑していた。中には、リサの言うとおり海賊みたいな人もいる。予想していた、丁寧な食べ方をしながら「ウフフフ」とかって、上品な笑いをしている人がいるのかと思った。こういう雰囲気なら、気分よく料理も食べれるってもんだ。

僕は二人にガイアでの話を訊かれ、世界観的なもんを説明した。そうやって話していると、僕は望郷の念に駆られた。

父さん、母さん。

おじさん、おばさん。

和樹、啓太郎、美香。

そして……修哉と海。

みんな…何を想っているだろうか……

ベットに就き、ヴァルバから手渡された剣を眺めた。

真っ黒な鞘。何の変哲もない、一般的な中世の剣。もつと太いかと思っただが、ヴァルバが僕のために軽めの物を選んでくれたんだ。柄の部分は、青い染料が使われているんだろが少し緑色に変色している。

剣を抜いてみると、白銀の刀身が現れた。ところどころ傷が付いているが、それなりに使えそうだ。

……僕は、これで人を殺めるのだろうか。この白銀の刀身を、血で濡らしてしまうのだろうか。……ヴァルバの言うことは、よく理解しているつもりだが……僕にできるだろうか……そんなことを。

インドラ

永遠の巫女

…人を殺めるとのこと

僕は、なかなか寝付けることができなかった。

## 14章：大海原への旅路 蒼い境界線の向こうへ

目が覚めたときには、朝……というより、昼前の陽気を感じた。この宿は住宅街の中ほどにあるため、日当たりが非常に悪い。窓から陽光は差し込まず、部屋の中は日中だというのにほんのりと暗い。部屋を見渡すと、すでに二人の姿はない。さらには荷物もない。

……置いていきやがったな！！

ということは、もう集合時間なのか！？ 港に行つてレンドの船に乗せてもらわなきゃなんねえのに！

つか、なんだって他の二人は起こしてくれないんだよ！？ 僕は布団から飛び降り、右手にあの剣を握つて出口へ向かった。その時、テーブルに置いてあるメモに目が行った。

「何度起こしても、起きないので、置いて行きます。太陽が真上に来る前に港に来なかつたら、船を出します！ ……ヴァルバ」

あんのやる……。ぜつてえ昨日のことを根に持つてやがるな……。

と、ふとその文章の下にあるもう一つの文章に気が付いた。

「ヴァルバさんの嘘なので、気にしないでください。もし、お昼になつても来なかつたら迎えに行きますから、安心してください。…アンナ」

…なんだよ、少し慌てて損したな。つか……ちと考えればわかることかもしれないな。ヴァルバはともかく、アンナはそういうこと

をしないだろうし。…まあ、嘘には付き合ってしまうような質ではあるな。どこか抜けていて、どこか真面目…みたいな。

僕は大きいため息を漏らし、港へ向かった。港へ行く道は、商人や荷物運びの人たちが大勢、忙しく歩いている。そのせいで、歩くことさえままならない。なんとか掻き分けて、港に着いた。

街道の中にそびえ立つ、白い塔みたいな建物が視界から消え、代わりに巨大な船たちが姿を現した。

僕は、その光景に息を呑んだ。昨日、夕方に見たときはこんな大きな船なんてなかった。それに数も多い。あまり貿易船だとか、そういうのには詳しくないからわかんないけど、荷運びだとかいろいろあんだろう。

港の船着場の近くに、ヴァルバたちが立っていた。アンナが僕に気付き、向こうから手を振り始めた。そのアンナの行動に、ヴァルバとレンドも僕に気付いた。よく見ると、ヴァルバの隣にはリサが立っていた。ここから見ると、リサは案外小さいように思える。それでも、女性としては高い部類であろう。リサとアンナを比べたら、子供と大人みたいに見えてしまうんだよな。

「間に合ったな」

嫌味のニユアンスを含めて、ヴァルバが言った。

「…あんな手紙にだまされるかっての」

「え？　なんで嘘だつてわかったんだ？」

なんだよ、ヴァルバはアンナの手紙に気付いていなかったのか？

とことんマヌケなやつだよ、ホント……。

「私が『ヴァルバさんのは嘘ですよ』って書いておいたんです」

アンナは微笑みながら言った。

「なんだよ。せつかく、慌てふためくソラが見れると思ったのにさ」

「ハハハ、ソラもかわいそうに」

レンドとヴァルバは同じように笑いやがった。レンドは、昨日とほぼ変わらない服装をしている。どごその海賊だ。今さら気づいた

のだが……ヴァルバの左肩のあたりに、何かが刻まされている。緑色の紋章……？ 海賊の証だろうか。刺青、みたいなもんかな。

「さて……やっとみんな揃ったね」

リサが待っていたようにしゃべった。

「……これから、あんたたちが行く場所、理解してる？」

僕は大きくうなずき、強い口調で言った。

「もちろん。ルテティアへ行き、『インドラ』のことについて、陛下に謁見することだろ？」

「そうだよ。へますんじゃないよ？」

リサが僕の胸元に握った手を、トンつと、軽く押した。

「ま、リサの『根回し』がちゃんとしていれば、陛下に会うこともできるさ」

ヴァルバがハハハと笑いながら言った。肌が茶色いので、白い歯がよりいっそう目立つ。

「たぶん、大丈夫だと思うんだけどね」

「……曖昧なのは嫌いだね」

ヴァルバがそう言うと、みんなが笑った。

「それじゃ、私はこの船に乗ってシュレジエンに行くから」

リサは、1番端に停泊している船を指して言った。見るからに、旅行船だ。いろいろな塗料が施されている。

「……旅行船かよ」

「ヴァルバ、なんか文句でも？」

「いや……お前だと、わざわざ遠回りなんじゃないのか？」

「そりゃそうだけど、あんまし使うなって言ったのはあんたじゃないの」

リサが首をかしげながら言うと、ヴァルバは小さくため息をついた。

「ま……そうだな」

「……」  
「ま……そうだな」「やれやれ」という風にも見える。

「ここから、シュレジエンまではどのくらいかかるんですか？」  
アンナがリサに聞いた。

「たしか…20日くらいかな？ よく知らないけど」

「けっこうかかるもんだな。飛行機があれば、1日もかからないと思っただ。そう考えると、『ガイア』って、便利なものが多いよな。車にしても新幹線にしても。」

「ま、そのくらい船旅を楽しむさ。…おっと、そろそろ出航しそうだ。あんたたちとは、しばらくの間お別れだね」

「そう言いながら、顔はニヤついている。」

「…ふん、途中で難破しなきゃいいけどな！」

また、ヴァルバが嫌味を込めて、笑いながら言った。リサはヴァルバが言うなり、回し蹴りを横っ腹にぶつけた。

「ぶふっ…！」

そして、ヴァルバはその場に腹を抱えながら、座り込んだ。も、悶絶……。その光景を見て、アンナが石になってしまった。

「な、なんつーことを…それでも女か…！」

と、ヴァルバは言う。

「うっさいわねえ。私の特技をぶち込むわよ？」

と、リサは掌を広げて見せた。それを見たヴァルバは、目をそらして小さく、

「…ごめん」

と言った。…リサって、怖いんだね。

「まああんたたちも、船旅に気をつけな」

「俺の操作する船だ。大丈夫に決まってるだろ」  
レンドが胸を張って言うてくれた。

「はは、それもそうだね。…じゃ、私は行くよ」

リサはそう言うと、船のほうに歩き始めた。

「おい、リサ」

僕は、リサを呼び止めた。どうしても、僕は彼女に聞きたいことがある。前から、ひっかかっていたことを。

「何？」

リサは微笑んだ顔を向けた。昼間の太陽光を受けて、彼女の金色の長髪がキラキラと輝く。

「…あんた、一体何者なんだ？」

「……………」

リサは顔色を変えず、僕を見つめている。1度まばたきをして、静かに口を開いた。

「…ルテティアに行けば、わかるよ」

「王都に…？」

「うん…。きつと、ね」

適当なことを言っているようには見えないし、リサが嘘をつくとは思えない。本当はすぐにでも突き止めたいが、言わないということとは、言いたくないんだと僕は解釈した。

「…わかった」

「まあ、深く考えないことさ。んじゃ、またどこかでね」

リサは僕たちに笑顔で手を振り、定期船に乗り込んで行った。

「何者、か…」

ヴァルバは歩いて行くリサの後姿を、目を細くしながら眺めていた。

ヴァルバに、リサ。

謎だらけの二人。インドラのことを知らなかった分、まだヴァルバの方がわかりやすいが…。

「さて…俺たちも行くか？」

ヴァルバが、首を左右に動かしながら僕たちに言った。

「そうだな。よし、俺の船に案内するよ」

レンドがいつの間にか、少し離れたところに行っていて、そこから手招きをしていた。

横にズラつと停泊している船の中で、ちょうど真ん中あたりに、レンドの船があった。それは、全体が焦げ茶色の木でできていて、中央から一本の長いマストがニヨキツと空に伸びていた。ところどころに、文字が書かれているんだが、かなりの筆記体……とでもいうのか、少々見にくいためなんて書いてあるのかわからない。

船の上には、5・6人くらいの人たちが、忙しく右に行ったり左に行ったりしている。たぶん、レンドの仲間なのだろう。

レンドについて行き、港の真つ白な石の階段を登り、小さな橋を渡ると船上にたどり着いた。さつき、港から見えた仲間の人たちは僕たちに気付かず、動き回っている。みんな、レンドくらいの年なのだろうが、若いようだ。海賊つてあごひげが立派なイメージがあったのだが、実際はそうでもないかもしれない。

「おい、野郎ども！ お客さんのお出ましだあ！」

突然、レンドが叫んだ。その声に反応し、船上で忙しく動いていた男たちが、いつせいに僕たちの顔を見た。「なんだ、なんだ？」という、驚きの顔をしている。

「今回の船旅に、この3人のお客さんが参加することになった！」

「なんだ、女の子もか？」

大きな荷物を軽々と担いでいる、肌黒の男が言った。緑色つばい髪の毛で、白いターバンを巻いている。レンドとは違って黒い長ズボンをはいているが、ガタイはそれと同等ときたもんだ。

「大丈夫だって、デルゲン」

「まったく……」

デルゲンという人は、レンドの笑顔を見て呆れていた。

「むさ苦しいところだが、我慢してくれよな」

突然、デルゲンは僕たちに向かって言った。

「むさ苦しいのは、お前だろうに……」

「船長さんには言われたくないがね」

「なんだとお!？」

「八八八、冗談だよ」

デルゲンはレンドを軽くあしらって、船の内部に通じる階段を下りて行った。

「まったく、あの野郎……。あっ、紹介すんの忘れてた。なんで逃げて行くんだ？ あいつ」

レンドが呆れたような口調で言った。すると、ほかの男たちがニヤニヤしながら、レンドに言った。

「デルゲンのやつ、女の子がいたもんで恥ずかしいんだよ。だから、逃げて行ったんだ」

そう男が言うと、レンドが大笑いした。

「ハツハツハ、なるほどなあ。まあ、あいつには後で紹介しとくか」  
レンドは僕たちのほうを向き、僕の肩に手を乗せた。

「こいつは、ソラ「ヴェルエスだ。まだ16歳だってよ」

いきなり紹介された。なぜだか少し照れくさくて、頭を下げて「どうも」としか言えなかった。そして、レンドはアンナのほうに行き、おおらかな口調で言った。

「このかわいこちゃんは、アンナ「カティオ。なんと14歳!!」

「おおっ！ いくらなんでも若すぎる!!」

僕のととは違い、男たちは歓声を上げた。なぜかこぶしを強く握り締めて、空に突き上げている。この光景に、アンナは驚きを隠せないようだ。

「それで、このひげ面がヴァルバ「ダレイオス。これでも25歳だ」

どうして知らないが、レンドの声のトーンが低い。しかもアンナのときとは違い、男たちは「ふん」といった、薄い反応をした。

そのせいで、ヴァルバはひどく不機嫌だった。…その気持ち、わかるぞ、ヴァルバ。

「じゃ、俺たちを紹介しよう。知ってると思うが、俺はレンド「ステカーノ。24歳になる。改めてよろしく」

レンドは丁寧な頭を下げながら言った。そして、スタスタと1人の男のほうのところに歩き、肩に手を回して紹介を始めた。

「それで、このバカ面の男が、ルシファン。まだ18歳だ。ルーシ

「って言ってやってくれ」

「馬鹿は余計だ！」

冗談だよとレンドは言いつつ、大笑いしていた。

「で、この大きい男が、ジヨナサン。俺と同じ24歳だ」

た、たしかに大きい。見るからに、2メートルはあるう巨人だ。

自分は背が高い方だと思っていたが……いやはや、人間ってのはここまででかくなるもんなんだな。

「それで、こいつは俺の従弟、ロルグ。アンナと同じ、14歳。んで、こいつがサンガ。21歳だ」

そのほか、いろいろな人が紹介されたが、人が多すぎて、僕は覚えることができなかった。

「紹介が終わったところで、みんな、よろしくな」

そうレンドが言うと、仲間のみんなは声をそろえて「よろしく」と言った。彼らの豪快さたっぷりの元気さは、なぜか僕にも浸透してきそうだった。元気ってのは、誰かに伝わるものなのかもしれない。

「おっと、さつき下に逃げて行った男は俺の幼馴染、デルゲン＝フオレスト。女が苦手な田舎者さ」

レンドは腰に手を当てて、笑って言った。幼馴染か。なんとなく、親しい感じがしたからな。

みんなの紹介が終わると、僕たちは船内に案内された。さつき、デルゲンと言うレンドの幼馴染が下りて行った場所から船内に入る。

船内は思ったより広く、今のような空間の中央に大きなテーブルがあり、仲間と談笑したり、飯を食ったりする場所のようだ。左右の壁に3つずつ、ドアが付いてあった。

奥の壁には、一つの地図があった。どうやら、2大陸の地図のようだ。初めて2大陸の形というのを見たのだが……へえ、こんな形

なんだ。ロンバルディア大陸の最西端、つまりミレトスがあった場所というのは、大陸の南西部にあたるようだ。ロンバルディア大陸はまるで「人」という字みたいで、アルカディア大陸も「人」という字っぽいな。

リサの向うシュレジエンというのは、ロンバルディアの北北西のあたりにある、いくつかの島々のようだ。

「俺はシュレジエン出身でさ」

地図を眺めていると、いつの間にかレンドが隣に立っていた。

「へえ……そうだったんだ。やっぱり寒いのか？」

「べらぼうに」

レンドはお手上げをした。

船長室には棚にきれいに並べてある酒、無造作に転がる樽。いろいろな地域で手に入れたのである。黄金の杯や、動物の牙、どこかの騎士のヨロイ、見たことも無い物がたくさん置いてあった。どれも僕の興味を惹くには、十分であった。

「これ……全部、レンドが取ったものなのか？」

僕は興奮気味で言った。

「ああ。けど、盗んだものじゃないぞ。これらは、悪さをする他の海賊たちからぶんどった物を領主に返還して、その代わりとしてもらったものなんだ」

「この動物の牙も？」

アンナが指を指して言った。それは、1メートル50センチほどもある、巨大な牙だった。白いが、黄色いところもたくさんある。

「これは、アルカディア諸島の北にある小さな島に住み着いてたセイウチ……かなんかのものだったけな」

セイウチがそのでっかい牙で漁にやってきた船とかに悪さするもんで、シュレジエンの女王様から依頼され、退治したのだとか。セイウチって、悪さするような動物だったけ？

「あん時はデルゲンがいなかったら、俺たちやられていたからな」

へへつとレンドは苦笑し、当時を振り返っていた。

「俺や他の仲間たちが寒さで動きが鈍いのに、あいつだけなぜか知らないけど、動きが機敏だったんだよな〜」

レンドは当時のデルゲンの動きを表しているのか、槍を振るような動作をした。

「最後に息の根を止めたのも、デルゲンだったからな」

レンドが言うにはこの海賊船の中でデルゲンが1番、腕っ節が強いらしい。さっきのレンドの動作から察するに、槍の使い手なのだろう。

その後レンドに案内され、寝室に行った。ここは3段ベットらしく、僕とヴァルバ、レンドがここで寝る。レンドがアナナのことを気遣って、自分の船長室のベットで寝泊りさせるらしい。ちようどそのころ、ヴァルバが馬車を連れて来たらしい。馬にとって少し環境が悪いが、1番底に入られることになった。

「さて、そろそろ出発するか!」

船上で、レンドが大きな声で言った。

「さあ、野郎ども! ルテティアへ向けて出発だ!」

「おー!!!」

みんなが声をそろえて大声を張り、それぞれ準備にかかった。その動きの早さに、なるほど、手馴れたものだと感じた。

レンドは、海賊の証とも言えるハット帽子をかぶり、後ろの舵のところに行つて、それを握った。

「碇を上げる!!!」

デルゲンが叫び、サンガやジョナサンたちが綱引きをするかのように、いっせいに力を入れて碇を引き上げた。船を止めるほどの重さだから、引き上げるのも苦労するのではと思った。

「ちようど風が出てきたな…」

たしかに、碇が上げられたとたん、舟を押すかのように、柔らか

な風が出てきた。まるで、「早く行け」と言わんばかりに。

「よっしゃ〜！ 出発ー！！」

アンナと同じ年でレンドの従弟だという、ロルグが大声を張り、みんながそろえて大声を上げた。

船は徐々に前に進み、港から離れていく。海にさざなみが立ち、だんだん音が大きくなってきた。僕は船から頭を出し、ミレトスの町を見た。この位置から見るとギリギリ、街道を覗くことができる。どんどん勢いがついていき、後ろから押すようにしてやってくる風たちが、レンドの船を前に進ませる。

僕は前の方に行き、前方の海を見る。そこには奥がどんよりとした青色が広がる、大海原だった。空には鴨が飛んでいて、真上から降り注ぐ太陽の光をちよくちよく遮ったりする。鴨の白い体と空の青は、ミレトスの街道から見た光景と同じだった。

もう1度後ろを見てみると、いつの間にかミレトスの港は小さくなっていった。白い塔のような建物がところどころ突き出ているのが、ここならよくわかる。

船旅。

僕は生れてこのかた、一度しか乗ったことがない。小学生の頃、フェリーかなんかで学校の企画で行ったんだっけな。

あの蒼い境界線の向こうへ…！

目指すは王都ルテティア。

そこにあるのは残酷な真実と……

知りたくもない、己の闇。

そのことを、この時はまだ知る由もない。

登場人物紹介2 + (前書き)

ネタバレ要素も含まれますので、第1部を見てない方は見ない方がいいかも知れません。

まあ、大したことではないんですけど……一応( ^ | ^ ; )

## 登場人物紹介2+

ということ、第2部の中ほどまでやってまいりました。  
ご休憩、ということでもしでしょうか。

第2部の20〜22章くらいまでは、のほほんとした旅が続いていきます。

特にラストらへんは残酷なシーンなどもありますので、もう一度こちらで告知しておきます。

では、登場人物紹介でも。

### ヴァルバッドレイオス

25歳(?) 身長181 体重72

ロンバルディア大陸を旅する男性。冷静で物事を見極めようとする能力があるのだが、ちょこちょこユニークなことを言う。非常に情報通で、特に歴史に関しては知識が豊富。旅人にしてはあまりにも知りすぎ、さらにはリサと知り合いということ、空からは怪しまれてはいるが……。妙に謎の多い人物。武器は槍。

無造作ヘアであるが、後ろ髪だけが長く、普段はうなじらへんで結んでいる。東方民族を思わせる黒髪に褐色の肌ではあるが、独特の

黒い瞳ではなく、碧い瞳をもっている。ハーフと思われるが、真実は定かでない。あごひげを生やしており、そのためか老けて見られがち。年齢詐称の疑いあり。

便利な説明役です、基本的に。でも、ほぼメインキャラです。

アンナⅡカティオ

14歳 身長149 体重37

ファイナ村の宿屋で働く少女。非常に大人しい性格ではあるが、物怖じしないところもある。何かを決意した時は、非常に頑固。ついでに天然(?)。決して弱音を吐こうとせず、無理に自分の中にためてしまうタイプ。言葉遣いが丁寧で、「敬語じゃなくていいから」と言っても敬語を使う。理由は知らない。

小顔で、将来はきつと美人になる...であろう。金髪というよりレモン色の長髪で、ストレート。大きな眼で、エメラルドグリーンの瞳を持つ。

どこぞの農民...みたいな恰好。茶色い服の上に白いエプロンみたいなを着ている。同色の足首まで届きそうなスカートで、頭には質素なカチューシャを付けている。これは、姉からもらったものなのだとか。

旅にはゆとりも必要。そんなキャラです。意外にメインだったりする。

レンド＝ステカーノ

24歳 身長176 体重74

ロンバルディア大海の海賊（自称）。ムキムキの筋肉で、非常に馬鹿力。豪快単純で猪突猛進に見られるが、意外に知識がある。基本的にはポジティブではあるが、感情で突っ走る傾向がある。武器は斧。

シュレジエン出身であり、紺色の髪に白い肌を持つはずなのだが、日焼けのためか褐色に見える。左肩の部分に、幼馴染であり副船長であるデルゲンと同じ刺青を刻んでいる。

いなくなったり、出てきたりしますが覚えててくださいね。

あと、第1部にあった伏線で後になっても回収しない伏線について説明しようかと。

主人公・空が中学3年の頃、なぜか幼馴染の空が一時期、毎朝一緒に登校していた。

まあ、あんま大したことじゃないんですが……東空は中学3年の1学期の頃、地元校の長東東高校ではなく別の高校に進もうとしました。下宿かなんかでもしようかと考えていたくらいです。それを知った日向空は、「離れ離れになる前に、告白の機会をどうにか」と考え、それプラス一緒にいたいということ、毎朝一緒に登校するようにしました。しかし、東空は勉強がうまくいかず、断念。結果、日向空は安心して、いつもどおりに過ごすようにした……ということです。

ホントは告白する時とかに書いところと思っただんですが、「よくよく考えたら、そんなのどうでもいいことやんけ」と思ったので、書きませんでした。

その他、後のストーリーに関わる伏線以外のことなら、質問に答えようかと思えます。ある方は、メッセージか感想・評価欄のところをお願いします。

ではでは。

## 15章：ロンバルディア大海 潮風と共に

船旅を始めて3日。

この3日間、ずっと快晴で日照りが厳しく感じてきた。レンドの話では、ロンバルディア大陸は比較的温暖な気候で、特に貿易都市群のあたりは他の地域より早く、夏が訪れるため、6月の最初だとしても気温は夏並らしい。たぶん、30 を超えているんじゃないか。

この暑さで、アンナが少し辛そうだった。どうやら、アンナが暮らしていたフィアナ村があるルナ平原は、最も適度な気温がほぼ1年中続くらしく、この暑さが初体験だということ、慣れない船旅もありダウンしてしまったのだ。

ヴァルバはアンナとは対称的に元気が有り余るほどで、他の船員の手伝いをしている。夜は相変わらず、酒を飲んだりしているけど。僕はというと、それなりに船旅に慣れてきたが、どうも塩のおいというのがなかなか慣れない。体はべとべとするし。いちおう男なので、ヴァルバと一緒に仕事の手伝いをしていたが、ヴァルバほど役には立てず、夜にはへとへとになってしまふ。この時初めて、自分には体力がないことを思い知った。…体でも鍛えようかな。そんなことをしみじみ感じた。

しかし、海賊というのは本当にすごいと実感した。ログはマストのてっぺんに登って、船の周囲を見張っている。デルゲンは下に行ったり、上に来てレンドと何かを相談したり、忙しく動き回っている。他の人たちも何らかのことはしており、のんびりしている人などいなかった。

「レンド、王都まであとどのくらいかかるんだ？」

舵の後ろにあるイスに座って海図を見ているレンドに訊ねた。

「そうだなあ……。ランディアナに到着すんのはあと1週間くらい

だから……せいぜい10日前後だろ」

「フーことは、ランディアナから王都まで3〜4日くらいか。」

「ランディアナか……。あそこの都市は特殊だからな」

「特殊？」

「レンドはうなずいた。」

「ランディアナは地上ではなく、海の上に造られた巨大都市なんだよ」

「そういえば、みんな「海上都市」だとかって言っていたな。ヨーロッパの方にも、そんな都市があったよな。なんて名称だったのか、いまいち思い出せないが……」

「ルテティア王家もあの町並みを愛しているらしくてな、噴水とかが作り出す造形はそりゃきれいで、建物もミレトスと同じような白いレンガでできていて、その配置がまた壮麗ですごいんだよ」

海水が町全体を流れていて町中に人工の川や湖、そして王族や貴族の別荘があるところには、大きな滝があるらしい。これも、人工的に造ったものらしい。

しかし、どうやって海水を都市中に張り巡らしているのだろうか？ 水は高い所から低い所にしか行かないし、人工の滝があるっていつても、海上都市はきつと海を埋め立てて造った都市であるため、高低差は無いだろうし……。そもそも、この世界の文明レベルからしてそんなことができるとは思えないのだが……。まあ、そこはランディアナに着いてからののお楽しみってことか。

この船旅の間、僕は他の船員とたくさんのお話をした。レンドは海賊だと言っているが、どうやらそうではならしい。

「そもそも、海賊っていうのは、『海を荒らす荒くれども』なんだ」  
レンドにバカ面と言われていたルシファン（ルーシーと呼ぶけど）が説明してくれた。

「俺たちは見てのとおり海賊のなりをしているが、していることはいたって善良なことさ」

「善良なこと？」

「そうさ。海賊に襲われている貿易船を助けたり、難破した旅行船の人命救助、民からの要望で凶悪な動物を退治しに行ったり。まあ、お偉いさんからの要望もあるがな」

「そういえば、レンドが言っていたな。シュレジエンの女王様からの要望で、悪さをするセイウチを退治しに行ったりとかなんとかつて。『そういうことをやって、俺たちはお金をもらったり、レンドの部屋に置いてある宝物とかをもらうのさ。まあ、義賊みたいなもんさ』

『義賊』。民のために動く集団で、彼らから人気があるため、王族からは疎ましく思われているイメージがある。……勝手な想像なんですけどね。

「けどさ、どうしてレンドは海賊って言うてるの？」

「ん？ ああ、それは『義賊』と言われるより、『海賊』って言われるほうが強そうなんだと」

「強そう……？」

よくわからない……。レンドって、馬鹿……かな。そんな単純な理由……つーのも珍しい。

「よくわからん信念だよなあ」

ハツハツと、大きな口を開けてルーシーは笑った。

「……みなさんは、どうしてこのレンドさんの船に？」

僕の隣に座っていたアンナが言った。

「えーと、俺は、俺の親父がルテティア海軍の軍人だな。親父と同じ軍人になろうと思ったんだが、頭が悪くてね。14歳のときに挫折しちゃったんだよ」

ルーシーは、右ほほのあたりを手でかきながら、楽しそうに話した。

「それで、親とケンカしちゃって……路頭に迷っていた時にレンドと出会って、今こうしてるわけさ」

「……レンドさんの考えに心が揺れた、ということですか？」

アンナがにこやかに聞いた。ルーシーは照れているのか、また右

ほほをかきながら答えた。「まあ、そんなところさ」なんて、はぐらかしていた。照れながらも、はつきりとそう言えるってことは……レンドを信頼してるのだろう。そう、感じた。

「でも、この船に乗っている奴つてのは、全員レンドと出会ってこんなことをやってる奴らばかりだよな」

ジョナサンが言った。すると、他のみんなも「たしかにな!」と言いながら、笑い出した。

「ジョナサンはたしか海賊だったんだけど、レンドに負けて、今こっしってるんだ」

「おいおい、サンガ。お前だってそうだろ? ていうか、俺と同じ船の海賊だったじゃねえか」

「ハツハツハ、そうだったっけか?」

昔のことだから忘れちゃった。そう言いながら、サンガは大笑いした。

「ロルグは、どうしてレンドと一緒に?」

僕が、みんなの脇でイカの干物を食べているロルグに聞いた。

「俺はレンドの兄貴とは従兄弟同士になるんだ。ちっちゃい頃から俺の目標で、兄貴たちが海賊をやるってんで付いてきたんだ」

まだ少年のロルグは、はにかみながら答えてくれた。

「……たしか、レンドとデルゲンとロルグと……ブリアンが最初のメンバーだったっけ?」

「ああ……そう、だね」

ロルグは、少し愛想笑いをしていたようにも思えた。

「おい、ジョナサン。……少しはロルグのことを考えてやれよ」

突然、ルーシーが小さい声で言った。しかも、まじめな顔で。

「おっと……つい……。わりいな、ロルグ」

「いや、気にしなくていいよ。……もう、昔の話だからさ」

ロルグは引き続き、愛想笑いだった。

……ブリアンという人は、この中には見当たらない。今のレンドの仲間ではないのか、それとも……。

ダメだな…。勝手に想像してはいけない。他人の事情に入っていないこと、悪いことがある。たとえ自分が口に出さずに想像することではあっても、常識ある者として気に掛けない方がいい気がする。…無理に気を遣ってもらっても、逆にその人を苦しめることになるかもしれないのだから。

「…ところで、デルゲンってみんなの中で1番強いのか？」

僕が話を变えるために聞いた。『ブリアン』という人の名前が出たとたん、みんなの顔が沈んだからだ。

「ああ、そうだな。俺たちの中の切り込み隊長だからな」

サンガがうなずきながら言った。

「あいつの槍さばきは、どっかの騎士なんかより上手いと思うけどな」

そうジョナサンが言っていると、下の階段からデルゲンが上ってきた。

「お、噂をすればなんとやら」

「…何がだよ」

デルゲンは苦笑しながら僕たちの輪の中に入って、座った。こうして見てみると、体つきが他の人に比べてすごいというのがわかった。背は僕と同じくらいだったのに、肩幅なんて1.5倍くらいありそう。他の仲間とは、漂っている風格が違う…ような。肩にある刺青がよりいっそう強く見せているような気がする。

「デルゲンって、どこで槍の扱い方を習ったんだ？」

サンガが聞いた。

「おっ、それ、俺も聞きたかった」

ルーシーが手を上げて言った。

「どこでって言われても…。そりゃあ、地元のシュレジエンだよ」  
シュレジエン。正式にはシャロン＝シュレジエン王国。北方のシュレジエン諸島を領とする国。

「シュレジエンの男は、生まれたら槍の訓練をするのが掟みたいなものなんだよ」

「掟？」

「国を守るためにな」

デルゲンが言うには、シュレジエンは建国された当初かなりの弱小国で、600年ほど昔にミッドランド帝国の属国 アルクイン大公国 に攻められ、王国の領土は王都の王城のみにまでなつた。時のシュレジエン国王は降伏し、シュレジエンは王国でありながらアルクイン大公国という一介の諸侯に支配されることになったのだという。その後、ミッドランド帝国がルテティア公国に滅ぼされ、当時のルテティア公妃がシュレジエン王家の出であることも幸いし、王国となつたルテティアの支援で国が再興された。そして、これから侵略されないためにも富国強兵に努めたらしく、「男の槍の訓練」はその1つらしい。現在は先代国王の偉業によつて、2大国と不可侵条約を締結し、各国の中で最も平和な国になり、ラーナ2世女王が治めている。

「ラーナ様は、先代の85代アレクセイ14世の王妃様だつたんだ。陛下が急逝され、王位後継者だつた王子もすぐに急死。だから、ラーナ様が即位なされたんだ」

シュレジエンはイデアに次ぎ、2番目に古い国らしい。本当かどうかはわからないらしいが、今から2000年前に建国されたのだという。『ガイア』でも、そんなに長く続いている国は、日本くらいだ（伝説の時代を含めるかどうかによるが）。

「まあ……今は平和だから訓練する必要もないんだけど、やるのが基本……となつてしまっているからな」

「じゃあ、レンドさんも槍は上手いんですか？」

アンナが聞いた。そういえば、レンドもシュレジエン出身だよな。「いや……あいつは槍を訓練するのが嫌いで、断固拒否したんだよ」と、デルゲンは苦笑した。

「いちおう、国の義務じゃないのか？」

ジョナサンが言った。酒を飲んだせいか、彼は少し顔が赤い。

「義務じゃないんだ。ただ、昔から続いてきたものだし『富国強

兵』の慣わしがいろいろと違う形で、他の村とかにも根付いてんだ」  
「…例えば？」

「例えば？ …うん、そうだなあ」

デルゲンは唸りながら、そこにあつた酒を一口、口に運んだ。

「…たしか、南の村では、女性が乗馬を習うつてのを聞いたことがあつたな」

絶対とは言い切れないっていう表情で、彼は言った。

「ああ。アンナくらいの年頃の女の子は、すでに馬を乗りこなすつて聞いたな。あと、弓も習うらしいが」

「…私、弓なら扱えるんですけど、馬は無理です……」

なぜだか、アンナはしょんぼりした顔で言った。

「…気にすることでもないんじゃない？」

僕がそう言うと、アンナは困つたような顔をした。

「…あの村で、馬が扱えないのは私だけだったんです」

フィアナ村に初めて行った時に、たくさん馬がつかがれていたが……なるほど、乗馬するための馬でもあつたんだ。

「ソラ坊は、どこの出身なんだ？」

僕はジョナサンのその問いに思わず、ビクツと、猫のような反応をしてしまった。さらに、何も口に入れていないのに、むせてしまった。

「…？ どうしたんだ？ ソラ坊」

ジョナサンが、僕の顔をのぞきながら言った。僕はこの問いにどう言えばいいのか迷い、ヴァルバのほうをちらりと見た。助け舟が欲しかったのだ。けど、その期待は簡単に裏切られた。久しぶりに酒にありついたらどこかの親父のように、ガバガバ酒を口に運んでいくヴァルバの姿がそこにあつた。しかも、すでにデレンデレンに酔っ払っている。

僕は呆れた。…役に立たねえ奴だ、まったく。飲んだくれは嫌いだ。

アンナのほうに目をやると、考えが浮かばないのか。苦笑いしな

がら首を左右に振っていた。

あゝ………つたく、しょうがない。適当に説明しとくしかないよ。僕は腕を組み、考えた。何か、いい考えはないものか……。

そうして考えていると、ヴァルバが突然、ゲラゲラと笑いながらしゃべりだした。

「ソラはなあゝ、『ガイア』つつところからやってきたんだぜ？」

…言っちゃった!? しかも、なぜか「すげえだろ」と、自慢するところもないのに、自慢をしている。これだから酔っ払いつていうのは大嫌いなんだ! 父さんもなかなかの酒豪だったから、こういう姿は情けないとほとほと思う。

「ガイア…? どの地域だ？」

「お前、知ってるか？」

「知らんなあ」

みんな、顔を合わせて、「どこだ?」と言っていた。どうやら、『ガイア』という世界があるという伝説を知らないのだろう。でも、アンナも知っていたから世間一般に広まっているものかと思っていた。

「ソラは東方民族か？」

サンガが言った。

「東方民族にしては…肌が白いと思うぜ? でも、黒髪に黒い瞳だしな」

ジヨナサンが僕の顔をまじまじ見ながら言った。

「それにしても、『ガイア』なんて地域は聞いたことがないな。どこなんだ?」

「どこって言われても………」

サンガの問いの答えに迷った。人種は近いかもしれないけど、なんとさえばいいのだろう。「別世界から来ました」なんて言えないもんね。…まあ、隠す必要もないんだが、頭のいかれた奴と思われてもあれだし……。

そうやって迷っていると、また階段から誰かが上ってくる音がし

た。みんな後ろに振り向き、誰が来たのかを確認した。それはレンドだった。

「なんだ…まだ起きてたのか？ もう真夜中だぞ」

部屋に行ってみると、僕とヴァルバがいなかった。ここに上がってきたらしい。真夜中といわれても時計が無いので、時間が具体的にわからない。真夜中なんだから、12時くらいだろうか。

「なあ、レンドは『ガイア』っていう場所を知っているか？」

ルーシーが座ったままの大勢で上半身をそらし、自分の後ろに立っているレンドに訊いた。レンドは僕がどこから来ているのを知っている。なんて答えるんだろう…。

「『ガイア』っていうのは、ロンバルディア大陸のもっと東にある大地のことをそう呼ぶらしいんだ」

「ええ！！」

この説明に、デルゲンを除いてみんな驚いていた。もちろん、僕やアンナも同じように驚いていた。デルゲンは声を発しなかったものの、顔は硬直している。デルゲンって意外とポーカーフェイスなのか、冷静な人間なんだ。

「ロンバルディア大陸とアルカディア大陸以外の大陸から来たのか！？」

みんなが僕に詰め寄り、同じような質問を投げかけてきた。

「え？ えっと…ええ…」

僕が言ったわけではなく、レンドがうまく嘘をついたので、なんと言えはいいのかわからない。

「そうだって。けど、ソラはここに来る船が途中で嵐に見舞われてあそこでの記憶が無いんだ」

「！！！！？」

う、上手いな…嘘をつくのが。聞いている僕でさえ、驚いてしまふ。

「そっか。ソラ坊も苦労したんだなあ」

ジヨナサンはそう言うと、なぜか知らないが泣き始めた。もしか

して、酒を飲んだら涙もろくなってしまふという、泣き上戸というやつか？

「俺もよく、若いころはいろいろと悪さばかりして、親を悲しませるようなことをしたんだよ……」

さっきの話とまったく違う話のように聞こえるんだけど……。……つか、若いころって言っても……。……ジョナサンはまだ24歳じゃなかったっけ。

みんなは笑いながら、ジョナサンの泣き上戸をからかったり、なだめていた。こうして見ていると、やっぱり「海の男」という空気を感ずる。ミレトスでの飯屋で見た男たちと同じような気がする。あそこでからんできた男たちも、きつとこんなふうに酒を飲んだり、仲間たちと大笑いするんだろう。

そういえば、父さんが知り合いの人たちと酒を飲み合っている時も、こんな感じだった。もしかして、酒って人を和気藹々にさせる魔法の薬なのかもしれない。……けど、ヴァルバとかみたいな酔っ払いは絶対に認められないがね。

その夜、僕はなかなか寝付けることができないので、みんなが寝静まった後、甲板に出て、1人でたたずんでいた。理由は、今日は月が満月だということ。ヴァルバとレンドのいびきがとんでもなくうるさいこと。これは1日目、2日目も同じだったのだが、酒を飲んだせいも、耳をふさいでもそのいびきから逃れることができない。1番の理由は今日、みんなといるいろいろな話をして故郷を思い出したからだ。いや、いつも気にかけているのだが……なんでだろう。頭から離れない。ぴったりくっついて、僕の耳元でささやいている。こういうときは、簡単に寝付けることなんてできない。

この世界は簡単に言えば、「ファンタジー世界」。ゲームでよく見る、冒険があったり、仲間がいたり、武器があったり、海賊がいたり、いろいろな国があったり、魔法があったり、世界を滅ぼそうとする悪の秘密結社がいたり……。たった10日ほど前まで、僕は長

東町で高校2年生として生活していて、何不自由の無い暮らしをしていて、ゲームもするし、遊ぶし、友達と過ごしていた。電気もあつた。ガスもあつた。きれいな水もあつた。毎日、風呂にも入っていた。

この世界にはそういったものが無い。そう、不便なのだ。何かと自分でやらなくてはならないことがある。なのに、なぜか人々の顔は豊かに見える。1日中仕事をしていても、みんなは笑顔を絶やさない。『ガイア』では見ることもできないものがたくさんある。あそこでは、多くの人は仕事の後、疲れ切った表情で世界を望む。

ここで見えるもの。それは美しい建造物や風景とかではなく、『人』だ。

『ガイア』のほうが見た目は豊かなのに、『レイディアント』のほうに豊かに見えるのはなぜだろう。あの世界よりも、この世界を美しいと……懐かしいと感じるのはなぜなのだろうか。

『ガイア』は、僕の故郷なのに。

故郷のみんなはどうしているだろう。今頃、夢の中か。

みんなにも、この世界を見せてあげたい。『ガイア』には無いもの、それが確かに存在する世界なのだ。僕たち、『ガイア』の人々が忘れかけている本当に大切なもの。それが、ここにはある。

本当の豊かさ、か。

空を探しに来たのに、それなりの充実感がある。不謹慎だが……。

……空はどうしているだろうか……。僕と同じで、長束町を思い出しているのだろうか。この世界を見て、何を想っているのだろうか……。この夜の中、何を考えているのだろうか……。

……泣いていないだろうか。

怖い思いをしていないだろうか……。

わけもわからず、知らない世界、知らない場所に連れて来られた

んだ…。怖いに決まってるよな…。

満月の夜。漆黒の闇夜でさえ、この世界は柔らかな黄色い光に包まれる。快晴のおかげで星たちが宝石のように輝くはずなのだが、その輝きさえ月の光は吹き飛ばす。

海に映る月が、なんとも言えないくらいきれいだ。夜空に浮かぶ満月が、この深淵の海に落ちてきたかのように見えてしまう。

昔聞いたことがあるけど、人が湖に映った月を拾おうとして、水の中に入るが、一向につかむことができない、というエピソードを聞いたことがある。その気持ち、なんとなく理解できる。だって、これほどきれいなもの、どんな宝石にも勝るとも劣らないのだから、何とかして拾おうとするのも無理はない。

これを見てしまうと、自分が何を考えていたのかもわからなくなってしまうそう。そう、泣いていることも、簡単に止まってしま。う。空も、泣いたらこれを見ればいいのかもな。きつと、涙は止まるはず。

僕は、横に置いてある剣を手を取った。最近、剣を肌身離さず持ち歩いている。自分を守る道具であり、他人を守る道具でもあるからかもしれない。いざという時のために。

ふと、何か音がしたような気がした。こんな静かな夜の海だから、その音がはっきりと聞こえる。これは…人声？ しかも、何人もの声が聞こえる。

僕は差し足忍び足で、音が聞こえるほうに近づいていき、船から下をのぞいた。

そこにいたのは…海賊…！？

## 16章：海賊襲来 その先を奪うということ

何艘ものボートで、この船の横に群がっている。あの大きさでは、甲板から乗り出さない限り、見ることはできない。海賊たちは登ろうとしているのか、ロープを準備している。

そこから100メートルほど離れたところに、この船と同じくらいの大きさの船が一艘見える。たぶん、あれがこの海賊たちの船だろう。ひっそりとこの船に入るために、小さなボートで来たんだ。

僕は驚きはしたが、哀愁に浸っていたせいかそこまで焦ってはいなかった。冷静に考え、僕はレンドたちを起こすことにした。離れているのは、彼らなのだから。

音をたてずに早足で階段のところに行くのは、けっこう骨が折れる。まず始めに、船長であるレンドを起こしに行った。

部屋のドアの前で、ものすごい音が聞こえてきた。2人のいびきだ。この通路にまで響くとは、よっぽどだ。すぐにドアを開け、レンドを起こす。

「レンド！ レンド！」

その声に、レンドは反応した。いびきが止まり、つらそうな顔をする。

「なんだよ……。どうしたんだ……？」

目を開けずに、レンドが言った。

「海賊がこの船に登ろうとしてるんだ！」

「何言ってるんだ……。俺たちは海賊だ……」

寝ぼけてる……。僕はレンドの両ほほをつねり、

「レンドたちのことじゃなくて、だ他の海賊がこの船を襲おうとしてるんだっつものー!!」

と叫んだ。レンドは飛び上がり、僕の顔を見た。

「それ、ホントか!?!」

「そうだったの!」

彼はぼさぼさの髪を、まるで髪を洗うときかの様に手でクシヤクシヤにした。

「ちっ…何人くらいいたかわかるか?」

「たしか…10〜15人くらいだったかな」

そう言つと、レンドは少し間を空けた。

「…フン、たかがその人数で俺たちを襲うとはな…。ただの無謀か、自信の表れか…」

彼は冷静に分析し、自分の顔を叩いて眠気を吹き飛ばした。

「うし!! まずみんなを起こさないとな。ソラ、手分けしてみんなを起こそう」

「わかった!」

さすが船長だ。声を荒げることも無く、冷静に対処している。いつの間にか、さっきまで開けきつていないまぶたが、スツキリしたかのごとくぱっちり開いている。

僕は言われたとおり、ルーシーたちを起こしに行った。どこの部屋に行つても、いびきがうるさい。さすが海の上で生きる男たち…寝る時も豪快、というべきか。まあ…こつこつには慣れてっけど。

みんな、最初は寝ぼけていたが2回ほど言つと、レンドと同じく表情が変わり、急いで着替え始めた。そして近くにあった武器を手に取り、通路に出てきた。しかも外に漏れないよう、静かにだ。

レンドとデルゲンが船長室から出てきた。レンドは片手で持てる斧を持ち、デルゲンは想像していたとおり槍を持っている。

レンドは僕たちを見渡すと、静かに、早い口調で言った。

「どつやら、俺たちの船を襲おうとしているバカどもがいるらしい。野郎ども!! この船に乗り込んできたこと、後悔させてやろうぜ!」

そう言つと、みんなは大きな声で叫んだ。僕が「外に聞こえる!」

と思った瞬間、みんなは甲板に出て行った。

すると、戦いが始まったのか、いろいろな声が交じり合った、歓声にも近い声が聞こえてきた。

「なんだ。動くのが早いなあ」

けつをかきながら、ヴァルバが言った。後ろにはアンナが立っていた。少し怖がっているのか、眉を中央に寄せている。

「のんきだなあ、ヴァルバは」

「はは…。起きたばかりだしな。さて、俺たちも行くか」

ふと気付いた。ヴァルバの右手には、槍があった。

「ヴァルバって、槍扱えんの？」

「まあ、人並みにはな」

彼は小さくほほ笑む。

「ソラ、お前も行くんだぞ」

「え？」

わずかに、体が震えた。

「こついうときのために、その剣はあるんだ。わかるだろ？」

ヴァルバが指をさして言った。その先は、僕が右手に握っていた剣だった。

「お前も、この船の一員なんだ。この船を守らなきゃならない」

さつきまで、大きないびきをしていた男とは思えない。ヴァルバは、僕を真剣に見ている。

戦う…。人を、殺すのか…？

僕が？

「お前は、幼馴染を救うんだろ？」

「ヴァルバの碧い瞳が僕の意味を覗く。  
殺す。」

人を……。

「……ああ」

僕はうなずいた。きっと、ヴァルバは分かっていたはずだ。力が無いってことを。

「……彼女を救うには、剣を取って戦わなければならないってことも理解できるだろ？」

「……………」

そうだけど……『ガイア』ではなんであろうと、どんな理由があるうと、人殺しは最悪の犯罪とされていた。そう教えられて育ってきた僕に、武器をもって敵を殺すなんてできるのか？

僕は己に問う。

殺すってことは、どういうことなんだ？

「……行くぞ」

ヴァルバは僕の答えを待たずして、上に行った。

「無理しなくても、いいんですよ？」

ヴァルバの後ろに隠れていたアンナが言った。

「……無理なんて、していないさ。大丈夫」

僕は作り笑顔を浮かべた。どうして、大丈夫なんて言ったんだ？

本当は、嫌だっただけわかってるのに。

「僕は大丈夫だから、アンナは部屋に戻りな」

「……わかりました」

心配そうな面持ちで、彼女は一步下がった。

僕は甲板に向かった。

どうして僕は走っているのか、わからなかった。自分でも答えなんて出ていないのに。なのに、足が動いていた。自分だけ恐れてちやいけないとわかっているからだ。それを理解しているのに、僕は

まだ震えている。…心が。

甲板に出ると、みんなが入り乱れていた。大きな声を出したり、叫んだりしながら相手に向かって行っている。

よく見ると、敵は赤色のしましまの服を着ている。幸い、今日は満月。敵の姿もよく見える。

しかし、ここに来たのはいいが、どうすればいいのかわからなかった。みんな僕に気付かず、敵に攻撃している。ヴァルバも、4メートルほど先で槍を振り回し、敵を寄せ付けない。敵の多くは剣や斧が武器のようだ。

すると、誰かの叫び声が聞こえた。人のものとは思えない、大きな声。

その声が聞こえた方向に向くと、1人の男の体がゆっくりと倒れていっていた。いや、そう見えた。倒れた人が誰かはわからない。誰が斬ったのかもわからない。けど、その声が断末魔の叫びだということとは理解できた。そして、その男から血が吹き出している。まるで、噴水のように。男の体は電気が走ったように、微動している。

その光景を見て、僕は足が震えた。

こんなもの見たことが無い。映画で見たような、戦いのシーンではない。これは本物なんだ。そう頭が理解するのは、遅くはなかった。

本物の血。本物の戦い。日本では到底ありえない光景。

目をそらし、後ろのほうに向くと、レンドとデルゲンが戦っていた。

レンドは、さっき見た剣で敵の攻撃を防御し、反撃している。デルゲンは重そうな槍を軽々と振り回し、敵に攻撃している。彼らの足元には、すでに4人の死体が転がっていた。全て見えなかったが、死体の目は大きく見開いたままのように見える。

僕は、思わず後ずさりをしてしまった。情けない。頭ではわかっているのに、体が言うことを聞かない。勝手に足が後ろへ下がっていく。

何かに、僕は気付いた。すぐさま横を見ると、1人の男が叫びながら向かってくる。その手に、剣を握り締めて。

「でやああああ……！」

彼がそれを振り下ろす前に、僕は慌てすぎて後ろに転げてしまった。そのおかげで、敵の攻撃をよけることはできた。だけど、剣が1メートルぐらい先に投げ出されていつてしまった。

まずい！

武器がないと何もできない。敵の攻撃をよけるなんて、僕にはできやしない。レンドのように、武器で防御するしかないんだ。

僕は横になりながらも、剣に飛びついた。ぴったり右手に収まった。後ろを向くと、男が走りながら僕に向かっていてる。

すぐさま剣を抜いた。月光により、黒く光っているように見えた。

## シネ

何を考えていたのかわからない。ただ、向かってくる敵に向かって僕は剣を突き出していた。何も見ないように横に顔をそらし、目を強くつむった。

すると、変な感触が右手に伝わってきた。ズルつとした感触。まるで、少し硬いこんにやくに包丁を突き刺したみたいに。

恐る恐る、目を開けた。顔を横に向いてるから、見えるのは甲板の板だけ。ゆっくりと前に顔を向けると、僕はその目の先にあるものに驚愕した。

僕の剣が、相手ののどに突き刺さっている。

「うあ……あ……！」

情けない声が漏れる。口から出る言葉が震える。

敵は圈を上にかざしたまま、体が硬直している。目は見開き、口を開けたままになっている。そう思ったとき、しゃべっているんだろうか……口を動かし始めた。パクパクと、魚がえさをもらうときのように動かしている。

そして、その口から真っ黒なものが流れ始めた。それを理解するのは難しくなかった。満月を後ろにしているからといっても、この状況ならばわかる。そう、血だ！

男がそのまま僕に倒れ掛かってきた。

僕の上に覆いかぶさるように、男は倒れてきた。

「うわ……あああ！！」

僕はそれを払いのけようとしたが、男の体が重くて上手く動けない。

すると、男の首から突き出ている剣が目に入った。それは、月の光を浴びているため、刀身が真っ赤な血で染まっているのが簡単にわかる。それを見て、僕は『これ』を自分がしたことだと理解した。男はまったく言っていないほど、動かない。まるで石のようだ。

死んでいるんだ。昔、祖父ちゃんの葬式の時に見た、あの体みたいだ。

潮が引くように、血の気が、引いていった。

僕が、殺したんだ。

どうして？ 殺すつもりなんて、微塵もなかったのに。

どうして？ 僕が、殺したのか？

僕は目の前の光景から、必死に逃げようとしていた。尻もちをついて、這いずるように。

怖い。真つ赤な刀身の剣。動かない男の体。そして最も怖いのは、まだ剣を握っている自分だ。怖いと思いながら、どうしてか離さない。

いや、それが怖いんだ。離すことが怖いんだ。離すと、僕を守るものが何一つなくなってしまう気がした。

僕がそうやって怖がっていると、前に影が見えた。顔を上げるとそこに別の男が立っていた。

「残念だったな、坊主」

「！！！！」

そう言いながら、男は笑っている。気持ちが悪い笑顔だ。けど、そんなことを思っている場合ではない。男は剣を持って、振りかぶった。

「死ねえ！！！」

男はそう叫んだ。僕は殺されると直感した。思わず、目をつむった。

「……………？」

しかし、何も起こらない。どうしたんだろう。

目を開け、前を見ると男の姿はなかった。倒れる音が聞こえた。倒れていっていたから、見えなかったんだ。でも、どうして？

そこに、ヴァルバが立っていた。ものすごい形相で。

「まったく……」

息を切らしているため、言葉が続かないのだろうか。ヴァルバは息を整え、僕に言った。

「1人殺したからって、ぼうつとするんじゃないよ……」  
怒っているんだろうが、声があまり出ないようだ。

「……ほら、上手く横に出て剣を抜きな」

そう言われ、僕は動いた。しかし、剣を抜くことにためらいがあった。また、あの感触がするんだろうか。

「早く抜けて」

ヴァルバは僕に近づき、無理矢理剣を引き抜いた。

すると、血が溢れ出した。もちろん、あの男の血だ。そういえば、聞いたことがある。突き刺さったものを無理矢理抜くと、血が出てきて出血多量で死んでしまうという話を。

身動きできない僕を見て、ヴァルバは言った。

「…お前は悪くない」

…悪くない？ 僕は顔をあげ、ヴァルバを見た。満月を背負っている彼の顔は、よく見えない。

「どちらかといえば、こいつらが悪い」

少し辺りを見渡してみると、みんなの動きが止まっていた。敵は、殲滅したということか。

「…どうしてだ？」

僕はヴァルバに訊いた。

「なんでって、こいつらが悪さしようとしたんだ。…この船を乗っ取るうとした。俺たちは、それを阻止するために戦った。…どちらに正義があるかといえば、俺たちに正義がある」

「…正義」

僕は血塗られた剣を見つめた。

「自分たちを守るために、戦わなきゃならない。お前のいた世界と形が違うかもしれないが」

形。僕がいた世界では、どうだっただろう。『正当防衛』といったものがあつた。やられそうになったとき、自分を守るためにやりかえすのは、『正当』。

けど、今回ののはどうなんだろう。

正当なのだろうか。こんなに、人が死んでいるのに。

「…ごくろうさん、ソラ」

後ろから、レンドの声がした。振り向くと、彼は汗だくだった。汗が月の光に当たって、輝いている。

「…そうか。お前、人を殺したのは初めてか」

僕の様子を見て、レンドは悟った。他のみんなから見ると、今の

僕の様子はどうなんだろう。震えているんだろうか。それとも、泣きそうな顔をしているんだろうか。

「誰だって、初めて人を殺すことにためらいはある」

レンドは汗を拭い、呼吸を整えた。

「俺だって、初めて人を殺めた時はそんな感じだったよ。今のお前のように、ほとんど何も考えることができず、考えるのは、『殺したことは正しいのかどうか』だった」

殺したことは正しいのかどうか。

「俺は何度も何度も考え、迷った。その結果、俺はある結論……いや、自分なりの答えを出した」

「答え……？」

うつろに、僕は言った。

「俺は俺を守る。そして仲間を、俺たちの船を守る。そのために戦うときもある。そのときはやむをえない、という答えさ」

守るため……。

「お前も安易な答えは出さずに、迷って、迷って、考えて……結論を出しな」

レンドは肩に手を置き、優しく言った。

「……そこまで考えんなきゃいけないのか？」

「ああ。『人を殺すこと』は簡単なことじゃない。『人を殺すこと』は、相手の命を……全てを奪うということだ」

その言葉に、恐怖した。僕は、あの男の全てを奪ったということか……？

「そして、未来も希望も、消え去ってしまう。だから、俺は安易な答えを出さないで欲しいんだよ」

「……………」

相手の全てを奪うこと。それは何を意味するのか。

「なんだ、レンドのほうが説得力あるじゃないか」

ヴァルバが苦笑いしながら言った。

「ハハ……。ま、海賊だからな。ソラと同じ境遇になったことはあ

るんだ。だから、俺は俺なりのアドバイスをしたつもりだ」  
「なるほど」

「さて、戦いは終わった。みんな、死体を片付けるぞ」  
レンドは汗を拭いながらみんなに言った。

「…片付けるって？」

「死体を海に捨てるのさ」

「……………！！？」

な、なんだって!？

「驚くのも無理はないだろうが、これがこいつらのためでもあるんだよ」

ジヨナサンが体に付いた血を取りながら、僕たちのほうに近づいてきた。

「『海賊』っていうのは、帰る家なんてないんだ。それに、俺たち海賊の間には『海で生き、海で果てる』という信念がある。だから海の上で死ぬことに後悔なんてないし、海の中に捨てられることも、こうして殺されてしまうことも、覚悟してるんだよ。『かわいそう』とか、『邪道だ』というのは、ただの偽善でしかない」

偽善的…。

「こういった、送り方もあるってことさ」

デルゲンがそう言い、僕の肩を軽く叩いた。

「……………」

「…ほら、みんな作業に取り掛かるぞ。ロルグ、相手側の船に知らせな。『お前たちの作戦は失敗した』ってな」

「あいさ」

そして、みんなは死体を背負い始め、甲板から海へ落としていった。

ロルグは言われたとおりたいまつを持ち、それを振りながら相手の船に何かを伝えている。どうやら、そういった情報伝達の方法があるらしい。

ドボン、ドボン。

次々と、死体が海に投げられていく。敵は数えると14人いたらしく、全員殺した。そのうちの1人は、僕が殺したんだ。

「ソラ、こいつだけはお前の手で海に入れてやりな」

「え…？」

1つ年上のルーシーが言った。腕に抱えているのは、さっきの男。僕が殺した男。

「こいつは、お前がやったんだろ？ だったら、お前が入れてやりな。…母なる大海原に」

僕はうなずき、男を持った。しかし重すぎて…いや、力がないため持つことができなかった。他の人に手伝ってもらった。

船から海へ。水面に、波が立つ。そして、すぐにもとのどこまでも続くような深淵の海に変わった。

「母なる大海原に、か…」

ふと、ルーシーが言ったことを口にした。

なんともやりきれない思いと、自分がこれからこういった場面に遭遇したとき、どんな対応をすればいいのかを考えた。今回のように戸惑い、あわや殺されそうになるということにならないために、ちゃんと結論を出さなきゃならない。

レンドの言ったとおり、安易な答えを出してはいけない。

そして、いずれ相見えることになるであろう、『インドラ』の人たち。空を救うには、この剣を手に取り、戦わなければならないんだ。

空を見上げればまん丸のお月様が、深淵の夜空を泳いでいた。雲も月を囲むように、うっすらと漂っている。

僕はまだ、血塗られた剣を握りしめていた。

## 17章：蒼海の古都ランディアナ 水に愛された都市

航海7日目の朝。古都ランディアナが見えてきた。

1日ほど雨が降ったが、今日は朝からいい天気だ。通ってきた海の道を振り返ると、雲一つない青空が海の果てまで続いている。

港の方に目を向けると、海に浮かぶ白い街並みが見える。あれが、海上都市ランディアナかあ。

「お〜古都ランディアナ……久々だな」

感嘆の声を上げながら、ヴァルバは船の先に立ってランディアナを望んでいる。

「古都っていうからには、由緒正しいところなのか？」

僕が質問を投げかけた。

「たしか……ランディアナは1000年以上昔、ロンバルディア大陸中部・北部一帯を支配していたランディアナ帝国の首都だったんだ。んで、その後にミッドランド、ルテティアと続き、ルテティアが一時期首都に定めていたっけ。たしか、今から400年ほど前の話だったか。13代アルフォンソ3世が都市の美しい町並みが気に入って、遷都したんだとさ」

しかし、海上の都市のため思わぬ自然災害を食らったり、夏は一段と暑いということで、初期の首都ルテティアへ都を再び遷したんだという。

「そんでもって、ランディアナはミッドランド帝国の西の都と謳われていたんだ」

「ええつと、たしか……600年前、ロンバルディア大陸を統一したっていう帝国だよな？ 黒獅子騎士団やらなんやらって」

僕が自分の覚えている限りの知識を振り絞ると、レンドは「正解」と言って笑った。

「よく覚えてたな。ミッドランド帝国つてのは、もとは伝説上の王朝ティルナグが滅亡した後、建国されたランディアナ王国の小さな諸侯だったんだよ」

つまり、2000年ほど昔に建国されたってことだろう。

「新歴1400年頃にランディアナ皇帝から帝位を奪って帝国となり、属国のアルクイン大公国を使ってシレジアを掌握し、さらにその数年後にはイデア王国おも一時期、滅ぼすほどにまで至ったんだよ。どうやら、ミッドランド帝国は2大陸支配できるほどの強さだったという。レンドは自分の知識を自慢げに披露するかのようにつけた。」

「しかし、当時の皇帝で『魔王』と恐れ敬われていたアルヴィス1世が暗殺されると、状況は一変する。各地の諸侯が王になるため一斉に蜂起し、ミッドランドはその反乱国の一つだったルテティア公国に滅ぼされることになる」

ルテティアはミッドランド帝国から爵位を賜り、現在の王都周辺を領土としていた諸侯の一つだったらしい。

「そしてルテティアは他の諸侯を屈服させ、イデア王国を再興、シレジア王国のアルクイン大公国からの支配脱却を手助けし、ソフィア教皇より王を称することを承認されて、王国となった。それが、今から600年くらい前の話さ」

「へえ……」

まるで、本当にヨーロッパみたいだな。いや、中国みたいな要素もある。一つの統一国家を治めていた元首がいなくなり、そのくびきから脱した諸侯は我先にと反旗を翻し、王座を狙う。どの世界にも、争いの理由つてのは同じだ。

頂点。自分たちが勝手に定めた頂に登るために、人々は馬鹿馬鹿しくも終わりの無い争いをする。

僕は心の中で笑った。所詮、どこも同じだ。滑稽。

そして同時に、自分を蔑んだ。争う人々を滑稽だと称した自分もまた、愚かしいほどに滑稽だから。

「ランディアナは各地を結ぶ商業・貿易の拠点で、今も昔もああして多くの人々が集まり、時には軍事の拠点として重要な都市なんだ」  
僕が自分の中で勝手に呟いていると、最後になぜかヴァルバが締めた。さすが旅人というべきか。もしくは、怪しい人間。……まあ、ただ単に言いたかっただけのようないきがすつけど。

ランディアナの港に船を着け、僕たちは馬車と共に港へ降りた。

「うーん、久しぶりの地上だな」

ヴァルバが体を大空に伸ばしながら言った。妙に実感がこもっている感じがした。

「そうだな……1週間ぶりくらいか」

「そんなに経っちゃったんですね……」

アンナが空に手をかざしながら言った。今日は快晴のためか、日差しがまぶしい。少し、ミレトスより暑いくらいか。

「旅立ちにはいい天気だ。お空さんも機嫌いいみたいだ」

後ろからレンドが言った。レンドも、アンナと同じように青空に手をかざして、日光を遮っている。指の隙間から零れる昼間の太陽光が、彼の焼けたほほを突き刺している。

「んじゃ、俺たちは自分たちの仕事に戻らせてもらおうとするか」

レンドがそう言うと、彼の後ろに並んでいた仲間たちが一斉に動き始めた。

「そっか……レンドたちは、シレジアに行くんだっただな」

寂しさのせいかわ、自分の声が弱くなった。彼らといると、彼らの明るさに感化されて自分までもが明るくなった気がした。それが心地よく、そこから離れたくないと直感的に察したのだ。

「短い付き合いだったけど、いろいろ話を聞けて楽しかったよ」

そう言って、レンドは僕たちのまん前に歩み寄った。

「それはこっちもだよ。いろいろありがとう」

僕が微笑むと、彼もまた微笑んでくれた。

「なんかの縁だ。きつと、俺たちはまた出逢う。そんな気がするよ」  
レンドの後ろから、デルゲンがやって来た。いつも落ち着いた雰  
囲気で、誰かの支えとなるような人。レンドが光なのだとしたら、  
デルゲンは影。もちろん悪い意味ではなく、いい意味でだ。何でそ  
う感じたのか、いまいち理解できないが。

「また出逢えると願って、さよならは言わないうことで」

僕はつい、笑いながら言ってしまった。

「なんだよそりゃ」

思わず、彼らも笑ってしまった。

「けど、そーいうのは好きだな。つーことで、俺もさよならは言わ  
ねえよ」

「ハハハ、レンドがそう言うなら俺もつてことで」

二人は笑顔で言った。お昼時の日光を浴びる彼らの笑顔は、そう  
…… 大海原の男つてのを感じさせた。よくわかんないけど、日焼け  
した肌とかのせいかもしれないな。

「そんじゃ、俺たちは行くよ。サンキューな、レンド」

「本当にありがとうございました」

アンナは頭を上げてお礼を言った。

「いいってことよ。んじゃな」

彼の笑顔に見送られ、僕たちは町中へ向かった。

「うおっと、忘れてた。おい、ソラ」

数歩歩いたところで、レンドは僕を呼んだ。

「ん？」

僕は彼の方に向き直った。

「いいことも悪いことも、何もお前自身で決める必要はない」

「……………」

僕は意味がよくわからず、しわを寄せた。

「何かを奪って、何かを傷つけていくつてのが人だ。お前だけが、罪を犯しているわけでもねえんだ」

そこで僕は理解した。彼の言葉の矛先にあるものが、何なのか。

「俺はお前に考え抜いて自分なりの答えを出してほしいが、自分を追いつめるような真似はすんなよ？」

「……………」

彼の言葉を、僕は視線をそらさずに受け止めた。そうしなきゃ、彼を怒らせてしまいそうだった。そして、未来の僕も。

「要するに、深く考えすぎず浅く考えすぎず……ってことだわな？」

「いくらなんでも簡略しすぎだってーの」

デルゲンが笑顔で言うと、レンドは彼にチョップを食らわした。

「ま、俺からはそれだけだ。じゃあな、ソラ。元気でやんな」

そう言っただけは僕の肩に手を置いた。

人を殺すということ。命を奪うということ。

その先を奪うということ。

深く考えれば闇、浅く考えれば馬鹿。

僕は自分の胸の内に問う。

「自分を信じれるのか」

そして、僕たちは港を後にした。

「どうやら、本来のルートでは王都に行けないっぽい」

少し困った顔をして、ヴァルバが言った。

王都への行き方を確認するため、そこら辺にいた商人に訊いたのだ。

「本当はここから東に向かったところにセルハン川というのがあったが、その橋が、最近頻発している自然災害で壊れたらしいんだ」

ヴァルバは大きくため息をもらす。

「どこを通って行くんだ？」

「セルハン川の上流に、バクラ山っていうのがあるらしくて、その山道を通って行くしかないな」

「山道って……険しいんじゃないの？」

苦笑いしながら聞いた。すると、ヴァルバは場が悪そうに頭をかきながら、

「それなんだよ。どうやら今は使われてない道らしくて、10年近く整備してないらしいんだ」

と答える。

「それって、通れるかどうかもわからないってことか？」

「まあ、そういうことだ」

「おいおい……。他に道はないのか？」

「山の北にある関所を通る方法もあるけど、あれは通行証を持った人じゃないと通れないんだよ」

その通行証を持っているのは、軍人や王都へ荷物を運ぶ人や、商人たちだけらしい。大多数の人、つまり一般人や観光客はセルハン橋を通って行くので、その関所の通行証は通常持たないんだと。

「まあ、少々険しくても僕は大丈夫だけど……」

僕はチラッとアンナの方を見た。そう、まだ14歳のアンナが問題だ。そんなに体力があるとは思えない。しかも、年頃の女の子にしては体は弱いほうなのではと思っていた。

「うーん、そうだなあ」

ヴァルバも唸った。

「だ、大丈夫です。私、頑張りますから」

アンナは自信がなさそうな顔で言った。僕とヴァルバは顔を合わせ、互いの心の内を悟った。

「まあ……いざとなったら、お前がおんぶな」

「まあ……いざとなったら、お前がおんぶな」

二人の言葉が重なる。

「……………」

僕とヴァルバは不気味な笑みを同時に浮かべた。なんでこんな時に、おっさんと以心伝心せなあかんのや。僕の中に憤怒が湧く。

結局、二人とも疲れること(だって、山道でおんぶしたらやばいよ、体力)が嫌だったことでした。

「つーか、橋を通れば4日くらいで着けるはずなのになあ。山道を通ると、どのくらい日数がかかるんだか」

僕は天空を仰ぎながらため息を漏らした。まったく、ちょうど悪いときに橋が壊れたもんだ。

なるべく食料や必需品を買い集めて、山道に備えようということになったのだが、僕たちは現実問題に気付いた。それはどこでも、いや、別世界共通でも言うのか。お金が足りないということだ。

「いやあ、まいった。お金のことをほとんど考えていなかった」

ガツハツハツハと大笑いしながら、ヴァルバは言った。笑い事ではないだろうと、苦笑しつつ思った。まあ所詮旅人……いや、ヴァルバ。彼の懐にはあと1000セルトしかない!!

「じゃあどうする? お金が無いんじゃあ、王都に行ったときも苦労するだろうし」

「この都市はけっこう大きいから、仕事がたくさんあると思うんですけど」

「それもいいけど、あんまり長い期間この町にいるのも、お金がかかってしまうんだよな」

ヴァルバの言うとおり、宿屋を利用するだけでもお金がかかる。町中で野宿みたいなことをするわけにもいかないしな。つか、それじゃホームレスじゃん。…まあ、ある意味ホームレスですが。

「とにかく、今日1日はどっかで働くとするか」

「今日だけ?」

「1日くらい、公園かどこかで寝ればいいよ。それ以上滞在していると、怪しい人間ってことで保安官に連行されるかもしれないからな」

「怪しい人間って……」

心外だな、まったく。

「ま、とにかくさ、仕事を探しに行こうぜ。それなりにいい仕事があれば、1日だけでもけっこうな金になると思うし」

馬車を引きながら、ヴァルバが言った。

「そうだな……とりあえず、町の中心部にも行こうか」

古都ランディアナ。

海の上に造られた巨大都市で、海から見たときもミレトスとは比較にならないくらい大きい。

今の時代の文明レベルで建造したのではなく、遙か昔から存在する都市なのだから。「古都」というのは、そこからきているらしい。伝説のティルナノグ期の遺産か、あるいはそれ以前の文明か……。事實はわからない。

海に浮かんでいるということ、やはり商業や貿易の拠点として栄えている都市。イタリアのヴェネツィア（だっけ？）や、古代ローマやオスマン帝国の首都だったイスタンブールみたいな都市だろう。いや、どちらかといえば、海の上にあるからラヴェンナに近いが。

ミレトスと同じで、町の中は多くの人が商売をしていて、かなりにぎやかだ。出店が立ち並び、見たこともない物売っていた。そして、客を勧誘する商売人の声。どこかの朝市みたいだ。

けど、ミレトスのように人が多く入り込んではいなかった。それは、大きな道があるからだ。都市内の道の幅は、ほぼ均一に作られているらしく、10メートル以上はあると思う。そのため人が多いとはいえず、けっこう歩きやすい。

町並みを見てみると、本当に美しい。完全に舗装された道路は白く輝いており、まるで誰かの手で並べられたかのように、建物が配置されている。

道路のあちこちに水が流れている。家と家の合間を縫って、水路が造られている。都市の中心部に行くと、それが集合して大きな川になっていたり、人工の湖が作られていた。それが想像以上のもので、どうやって造れるんだろうと思うってしまう。

レンドの言っていた滝というのも見てみたのだが、どこを見てもそれらしいものが見当たらない。滝というほどなんだから、よっぽど大きいんだと思っていたのに。

町の商店街のほうに行き、僕たちは仕事を探した。

「俺はけっこう体力があるほうだから、力仕事を探してくるよ」

「じゃあ、僕は何をしようか？」

「うん、そうだなあ」

ヴァルバは1度あごひげを触りながら、適当な口調で言った。

「どっかのウェイターでもやればいいんじゃないか？」

「ウ、ウェイター？」

「若い男しかできない仕事だぜ？」

「……ヴァルバさんだって若いですよ？ 25歳ですし」

「……………」

アンナの言葉に、ヴァルバは胸に槍か何かを刺されたかのような顔をした。そのヴァルバの顔を見て、ふと気付いた。

「そうか……。ヴァルバは見た目が老けているから、25歳に見えないからだろ？」

「う、うっせえな……………」

凶星を突かれた人間ほど、見ていて楽しいものはない。

「なんだあ。ヴァルバは自分で自分が、歳のわりに老けていることを自覚してたんだ。えらいえらい」

「何で褒めるんだよ！」

顔を赤くしながら、ヴァルバは言っている。

「そもそも、ひげを生やしてるところで25歳に見えないんだよ」「  
そう言うと、ヴァルバはまたアンナに言われたときのような顔を  
した。」

「あと、しわがあるところですね」

アンナの素朴な言葉に、ヴァルバは息の根を止められた。

「く、くそう。俺は先に行ってる！！ 後で覚えてろ！！」

そう言って、ヴァルバは人ごみの中へ走って行った。いつの時代  
のセリフやねん……。

「走ってどこかに行っちゃいましたね」

君がとどめ刺したんだけどね。」

「古い捨て台詞。前にも聞いた覚えがあるけど」

「それにしても、どうしたんでしょうか。ヴァルバさん、あんなに  
悔しそうな顔をして……」

……アンナって、本当の天然だ。ある意味、最強の残酷天使だな  
……。

「これからどうします?」

「そうだな……ヴァルバの言うとおり、僕はウェイターの仕事でも  
しようかな。あればの話だけど」

「私は何をすれば……」

アンナは困ったような顔している。僕も少し悩んだが、すぐに解  
決策が思い浮かんだ。アンナにピッタリの仕事があるじゃないか。

「アンナは宿屋の仕事をするば?」

「宿屋、ですか?」

「そうさ。だってアンナは昔から、フィアナ村の宿屋の仕事をして  
いたじゃないか」

「そそうですけど、フィアナの宿屋とこの大きな都市の宿屋は規模  
が違いますよ。だから……きっと無理です」

消極的だなあ。もっと自信を持てばいいのに。人のことを言えた  
もんじゃないが。

「大丈夫だつて。僕も一緒に行ければいいんだけど、男が働く宿屋なんて、【華】がないから、雇ってくれないと思うし」

「花……ですか？」

「いやいや、華やかとかの【華】」

「……？」

アンナの顔からして、あんまりわかつていない気がする。

「とにかくさ、大丈夫だつて。アンナにはピッタリの仕事だと思うんだけど」

「けど……自信がないです」

と言われても、他にアンナができそうな仕事ってないんだよなあ。アンナは船旅をしていてわかったけど、体が弱そうだし、男みたいに力があるわけでもないから、経験のある仕事じゃないと雇ってくれないと思うんだよな。

「……ソラさんも一緒の仕事をしてくれませんか？」

まるで、子供が機嫌の悪い親に対して言うかのようにアンナは言った。

「一緒って言われても、雇ってくれるかな？」

「えっと、それは……行ってみないとわからないですね」

「まあ、な」

個人的に宿屋の仕事って向かないと思うんだよな。そうになると、接客業は僕に向かない。ウェイターももちろん、自分には合っていないと思う。できれば、ヴァルバみたいな力仕事がやりたいんだが……。

アンナを見ると、放っておくと危ない気がした。まだ14歳の女の子だし、ミレトスのときみたいに変なやつらに絡まれてもいけな  
いからな。

「ま、行ってみて試してみるか」

そう言つと、アンナはうれしそうな顔をした。僕ぐらいの歳なら1人でもいいんだけど、アンナくらいの年頃の女の子は1人じゃ心細いんだろつな……。こんな大きな町で働く分には。

町の中心にある、噴水の近くに宿屋をいくつか見付けた。そこで高価なホテルっぽい宿屋ではなく、見た目はどこかのギリシャのお屋敷みたいなおところに入った。

「いらつしやいませ。何名さまですか？」

宿屋に入ると、『ガイア』でいう、メイドみたいな人が出迎えてきた。僕はそういったコスプレが大嫌いなのだが、自分を見られると顔が赤くなってしまう。どうしてか、自分が恥ずかしくなる。

「あの……ここは従業員を募集していますか？」

僕が焦っている間に、アンナが先に言った。

「そういうことでしたら、社長にお聞きくださいませ」  
女性は丁寧に言った。しかし、この営業スマイルが少し気に食わない。

「社長つて？」

「あそのこのカウンターの奥の部屋にいらつしやいます。ご案内しますね」

そう言われて、僕たちはその社長のいる奥の部屋に進んだ。

「社長、お客様です」

そう従業員の女性が言うと、奥から「どうぞ」という、女性の声が聞こえてきた。

「失礼します」

部屋に入ると、10畳くらいの部屋だろうか。なかなか広い。壁には、各国の調達品と思われる様々な物が飾られていた。鏡や金の盾、銀の槍。これは2メートル近くもある。

部屋の中央に大きな机が置いてあり、そこに大人の女性が座って、山ずみにされた書類に目を通してしている。

「従業員希望の方たちです」

「そ。わかった。下がりなさい」

いすに座っている女性が言うと、メイドの女は部屋から退出した。

「こちらへ」

そう言われ、机の前に進んだ。女性は、1度も僕たちを見ていない。

「……簡単に言えば、バイトを希望、ですか？」

書類に目を通しながら、僕たちに言った。この声、なんていうか、真面目な女性教師みたいだ。声がピリピリしているが、怒っているわけではなく、そういう独特の雰囲気を持っているんだ。

「そうです」

なぜか、緊張してしまう。厳しい教師っていうのは、いつも相手を緊張させる。

「そこのお嬢さんも？」

「はい」

「ふん……」

女性は持っているペンを指先でくるくる回しながら、素っ気無い口調で言う。

「そこのお嬢さん、名前と年齢、出身地を言って」

「あ、はい」

いきなり言ってきたので、アンナも少し戸惑っていた。

「アンナはカティオです。14歳です。出身地はブルターニュで、つい最近までルナ平原の端にあるフィアナ村に住んでいました」

「ブルターニュ？ へえ……」

言葉が少し驚いてるようだが、顔はいたって普通だ。いや、ポーカーフェイスとも言えるのか。

「あそこに住んでいたってことは、貴族出身かしら？」

そんなことまでわかるのか。

「あ、はい。そうです。父はブルターニュ伯爵でした」

「ブルターニュ伯爵……。なるほどねえ」

意味深な口調で女性は言った。そして顔を上げ、初めて僕たちの顔をのぞきこんだ。

「じゃあ、次は君。名前と年齢と出身地を言って」

指で指され、体の姿勢がきちんとなってしまった。

「ソラゝヴェルエスです。今年で17歳になります。出身地は……  
東方の大地です」

「東方の大地？」

女性は頭を傾かせ、僕に聞いた。

「え……、イデア王国からさらにずっと東の海の果てから来ました」  
「……？ どうしてこんなところに？」

当たり前前の質問だな。想定どおりだ。

「気が付いたらこの大陸に流れ着いてて、あそこにいたときの記憶  
が消えてしまったんです」

レンドの嘘を引用させてもらった。自分で考えるより、レンドの  
嘘のほうがしつかりしてる。

「流れ着いたところである旅人に拾われて、その人と一緒にここま  
で来たんです」

「……で？」

「お金が少なくなってしまうって、この大きな都市の中で何かしらの  
仕事をして、お金を稼ごうとしたんです」

「なるほどね……」

女性は、机の引き出しを開け、1枚の紙を取り出し、サラサラっ  
と何かを書き出した。もしかして、契約書か？

すると、突然彼女の手の動きが止まった。そして、冷たい口調で  
言い放った。

「ところで、どうしてブルターニュ伯爵のご息女がこんなところに  
？」

「……？」

そういえば、そうだ。それも説明しなくては。

「それは、あなたも知っているとと思うのですが……」  
アンナが言った。いつになく、真剣な顔だ。

「……たしか、ソフィア継承戦争に出兵されて戦死されたんだっ  
たのよね？」

「そうです」

彼女は少し小さな声で言った。無理もない。

「それで、ブルターニユを治めるケルヴィン家は没落して、あなたたちは一家離散になった……ということ？」

「…そうです」

「けど、フィアナ村に行つたはずのあなたが、どうしてこんなところに？ 何の用で、旅人と一緒に行動するソラ君とここへ？」

女性はいすに座っているためか、上目遣いでアンナを見た。

「それは……」

戸惑うアンナを見つめる彼女の目を、僕は見逃さなかった。

好奇心とか、そういうものじゃない。何か……確認するような、そんな目だった。

「ま、いいわ。そんなことまでしゃべらすわけにもいかないでしょ。自分で訊ねておいてそれかい。めんどくせえな、いちいち。」

「とにかく、お金が欲しいんでしょ？ さっそく働いてもらおうかしら」

女性はそう言うと言類にハンコを力強く押し、立ち上がった。

「自己紹介が遅れたわね。私はこの宿『プライレス』を経営する、ミーシャ。よろしく」

「ご丁寧に、手を差し伸べてきた。いちおう形だけの握手を行い、仕事の説明に入った。」

「そんなに大きな宿じゃないんだけど、最近、従業員が3人辞めちゃってね。人手が足りなかったの。あなたたちは、ちょうどいいところに来たわ」

「は、はあ」

力なく答えた。さっきまでの、空気を緊張させるあの雰囲気はどこに行つたんだろうか。

「それに、女ばかりで力仕事をしてくれる人がいなかったから、ソラ君は大歓迎よ」

女ばかり。それはそれでうれしいんだけど、話しづらいんだよね

あ。少し、憂鬱になってきた。

「アンナちゃんは部屋のお掃除をしてもらおうかな。できるわよね？」

「はい、もちろんです」

ミーシャさんはニツコリと笑って、手を叩いた。すると、メイド服の女性が2人、部屋に入ってきた。

「この2人があなたたちに仕事を教えるから。この金髪の子はアリサ。アンナちゃんの担当になってもらうわ。隣の黒髪の子はエリーザ。彼女はソラ君ね。2人とも、しっかりとお願いね」

僕たちはお互いに挨拶をして、それぞれの仕事場に向かった。

すると、僕は裏庭のほうに連れて行かれた。そこには、多くの馬車から荷物が運び降ろされていた。

「……？」

「ソラさんは、ここで荷物降ろしを手伝ってもらいます」

「……これ？」

僕がそう言うのも、けっこうな量だからだ。この裏庭は馬車の通る道路につながっていて、そこから食料などを運ぶ馬車が入り、荷物を降ろしているらしい。しかし、そんなに大きい宿ではない……と言っていたわりには、量が多いような気がすんですけど。

「それじゃあ、ソラさん、お願いします」

エリーザという女の子は、1度お辞儀すると足早に建物の中に入っていた。説明してくれるはずなのに、たったあれだけの説明でいいのか？ それとも、男の従業員に対するいじめか？

僕はしぶしぶ、その荷物運びの親方であろう（長いひげを生やし、ひととき厳格そうな感じ）男の人に仕事を手伝いに来たことを説明し、参加した。そして、働いている人に適当に自己紹介をした。親方が、「坊主が来る前に、もう1人仕事をしたいって言ってきたやつがいるんだ」と言うので、その人を探し、挨拶に行った。しかし、そこで僕は本当にビックリすることになる。

「どうも、新入りです。あなたも新入りなんですよね？」

と、丁寧に挨拶を行った。その人は僕に背を向けていたので、すぐに顔を見ることはできなかった。そして、男の人が声に気付き、僕の方に振り返ると、仰天した。

「ソ、ソラ!？」

「え?」

そう言われたので、顔を上げると、そこに立っていたのは、なんとヴァルバだった! そういえば、後姿が見たことあるなあと思っていたが、まさかヴァルバとは……。

「な、何でお前がここに!？」

面白いほど驚いているヴァルバは、後ずさりしながら僕に質問した。

「それは僕のセリフだ。ヴァルバこそ何でここに?」

「そりゃあ、お前。力仕事を探していたら、この仕事にたどり着いたんだよ。それより、ソラは何でここに?」

「まあ……アンナができそうな仕事を探してて、この宿の職場に来ただけだ、僕だけここに回されたんだ」

ヴァルバは「ふん」と言いながら、頭をかいていた。

「しかし、偶然っていうのはあるもんなんだな」

「はは、たしかにね」

2人で談話していると、親方から「くっちゃべってしないで、さつさと仕事をしろお!」と怒鳴り散らされた。僕たちは大急ぎで荷物運びを行った。

日が暮れてきた頃、仕事が終わった。

何度、荷物が置かれた馬車置き場から、宿内の食堂へ持ち運んだことか。100往復はしたと、自身を持って言える。明日には、腕が筋肉痛になっちゃうかもしれない。

僕はメイドのエリーザに社長室に来てくださいと言われた。ヴァルバは、親方たちと一緒に、飲み会に向かうらしい。

社長室に入ると、ミーシャさんが昼ごろと同じように座っていて、

誰かが1人、隣に立っていた。……彼女はアンナだった。

僕は呆気にとられた。なぜなら、アンナとは思えない感じがする。きれいな、可愛いだとか、そういったことではなく、想像できなかった事態とも言えようか。なるほど、後姿だけでは理解できないはずだ。後ろから見ると、髪形は違うし、服装は180度違うから、ヴァルバはきつとわからないと思う。

僕がそうやって驚いていると、アンナが僕の方をチラッと見ては、顔を赤く染めていた。アンナの性格からして、あの格好を恥ずかしかるだろうなあ、と1人で勝手に納得した。

「さて、2人とも」

社長は、紙が積み重ねられ、30センチほどの厚になったものをきれいに整頓し、僕たちを見た。

「今日はお疲れ様。初めての仕事なのに、よくやってくれたわね」  
社長は、少し笑いながら言った。

「唯一の男性として、荷物運びをよくやったわね。親方さんも、若いのに対したもんだって褒めていたわよ」

あの親方がねえ。そう言われると、かなり照れくさい。

「アンナちゃんも14歳なのに、本当にテキパキと仕事をこなしてくれたわ。昔、同じような仕事をしたの？」

持っていたペンを、器用に指先で回しながら、アンナに言った。

そういえば、社長にはアンナがフィアナ村で宿屋の仕事をしていたことを言っていなかったっけ。

「実はフィアナ村に住んでいたときに、私を養ってくれていたおばさんの宿屋の仕事を手伝っていたんです」

「だから、慣れた手つきだったのね」

そう言くと、社長は置いてあった書類に目を通した。

「ところで2人は今日、泊まるどころあるの？」

「あ、そうだ。宿をまだ決めてなかった」

「そうでしたね。それに、ヴァルバさんもどこで仕事をしているかわからないし……」

「ヴァルバなら、僕と同じ仕事をしてたよ」

「ええ！？ ど、どうしてですか？」

いつになく、アンナは驚きの表情をしている。

「まあ、それは後で説明するよ」

「それで？ 泊まる場所はないの？」

社長は、サラツとした前髪をいじりながら、僕たちに言った。

「そ、そうですね。今のところ、決めていませんね」

「だったら、この宿で寝泊りしなさいよ」

「へ？」

僕たちは、2人して驚いた。

「1ヶ月くらいは、住み込みで働いてもいいわよ」

「それはありがたいんですけど……」

「だけど、いちおう1日ってことで働いていたからなあ……」。

「アンナ、どうする？」

「とりあえず、ヴァルバさんと相談したほうがいいですかね？」

「それもそうだな。あの、もう1人の仲間と相談してから決めさせていただきます」

「そう、わかったわ」

「あと……1つ、お願いがあるんですが」

「何？」

あいつだけ、放っておくことはできないからな。

「そのもう1人の仲間ここで泊まらしてくれないですか？」

少しだけ間が空いた後、社長はフツと笑った。

「……もちろん、いいわよ」

「本当ですか？ ありがとうございます！」

そういうことで、ヴァルバを探しに行くことにした。僕は親方たちが歩いて行った方向にある、バーを探しに行った。

そこで、奴はまたもやデレンデレンに酔っ払っていた。僕がため息を大きく漏らす隣で、アンナは優しく笑っていた。

「……まったく、大した男だよ。これだけ酒を飲んでも、明日になればケロツとしてるんだもんな」

僕は彼をおんぶしながら、夜のランディアナを歩いていた。

「ふふ、そうですね」

今日の夜空は月の光がないため、真っ暗だ。けど、この町は電気のようなものがあちこちで光っている。しかも、この都市を網目に流れている水路の底もところどころ光を放っている。

「これ、なんなんだろうな」

「この光ですか？」

アンナは水路の方に目をやった。

「ああ。何かわかる？」

「……すみません、田舎暮らしが長かったんで、こういう最先端技術はよくわからないんです」

最先端の技術か……。ガイアの電気というのをこの世界の人が見れば、驚いて何も言えないだろうな。

「……それにしても、今日の星空は一段ときれいだな」

夜空を仰いで、言葉が漏れた。

「僕さ、あつちの世界の星しか知らないからこっちの世界の星のことを知らないんだ。この世界にも、名前の付いた星っていうのはあるのか？」

「そうですね……」

アンナも顔を上げた。そして、1つの星を指差した。

「あれ……青く光っている星、わかります？」

北の方向……だろうか。

「青い星……あの、星が固まって集まってるところの中心にある星か？」

「それです。あれは、『セレスティアル』っていうらしいです」

「『セレスティアル』？」

そう言うと、アンナはうなずいた。

「古代の言葉で、『紺碧』っていう意味らしいです」

「『紺碧』……」

紺碧、か。青いつてことかな。僕はいまいちボキャブラリーに欠けてっし。

「あの星は……ソフィア教典にある大昔の神々が生まれたあと、神々の1人といわれる『ラケシス』という女神様の涙が、空に落ちて星になったんだそうです」

「……どうして、女神様は涙を流したんだ？」

「邪神によって女神様の旦那様である、騎士の神『アーレス』が殺されて、悲しみの涙を流したらしいんです」

「……ひどい話だな、それ」

最愛の人を亡くすつてのは、想像しがたいほど苦しく、辛いことだ。僕は……そうならないようにするために、この世界に来た。全てを捨ててまでも。

「でも、邪神はソフィア教の主神である 光神ヘイムダル によって滅ぼされるんです」

「ふーん……」

「あの星、『セレスティアル』は 泰平 と 平和 という意味も持っているんですよ。だから戦時に人々はあの星に拜むんです。どうか、平和な時を訪れさせて下さいって……」

戦争のときにだけ、人々に拜まれる星も困るってもんだ。戦争を引き起こしたのは、自分たちなのに。世界を救った神々も、報われないよ……。

「あの星のこと、お姉ちゃんが教えてくれたんです」

夜空を見上げる彼女の口から、哀愁の言葉が漏れる。

「私が知らないこと、たくさん教えてくれました。夜中には星のことや、精霊様たちの話とか……」

「……そっか」

「だから……どうしても、もう1度会いたい」

アンナの目は潤んでいた。真っ暗であっても街灯の光が煌めき、

アンナの潤んだ瞳を輝かして、目が光って見える。

「もう1度、お姉ちゃん……」

「大丈夫だよ、きつと」

彼女は僕に顔を向けた。

「きつと、お姉さんはこの世界のどこかにいる。この広い空の下に、絶対にいる。お姉さんだつて、アンナに会いたはずなんだし。…

…きつと会える。アンナの心に、その想いがある限りね」

アンナは涙を少し流しながら、微笑んでいた。

「だから、泣くな。お姉さんに会うときのために取っておいたほうがいいよ」

「……それもそうですな」

僕もアンナも、ニッコリと笑った。そして、この空を見上げた。

「ソラさん……ありがとうございます」

「いやいや、気にしなさんな」

「……なんか、お爺さんみたい」

そう言つて、アンナはクスツと笑った。

セレスティアル……か。

どの世界でも空は広い。どこまでも続く、永遠とも思える青い布。夜で言えば、真っ暗な布か。夜は夜で名のある星、名の無い星が揃つて自らの生きている姿を見せ付けるかのように、煌々と輝いている。僕たち人間一人一人は、あの星たちと同じなのかもしれない。自らが生きる光を誰かに向かつて放っている。自分たちの存在に……「ここにいるよ」っていう想いを、遥か彼方へ響かせて……。

……そんな気がした。



## 18章：栄光の王都 ルテティア

結局、僕たち3人はミーシャさんが経営する宿屋に、住み込みで働くことになった。そして、1ヶ月ほど働くことになった。

どうして1ヶ月働くことになったのかというと、これからのことを考えればそのほうがいいということだ。お金の面で、王都での滞在費や食料費、さらに、日用品などを買うために、いろいろと出費がかさむ。ここで一気に溜めておくのが賢明だということが、相談した結果だ。

僕とヴァルバは同じ力仕事だけで、アンナは宿の部屋の掃除や接客、受付など、たくさん仕事をすることになった。体力的に考えれば僕たちもアンナも、同じくらいの労働力ということだ。

けど、アンナはそんなに辛くないようだ。もともと、小さい頃からこういう仕事をしてきていたから慣れているのもあるし、僕とヴァルバという知っている人がいるということが安心感を与えているのかもしれない。

僕はヴァルバと一緒に、親方に指導されながら働いている。最近日照りが厳しく、気温も急上昇して30以上の日々が続く、体力が持つかどうか心配だ。とはいえ毎日が新鮮だし、何といても働くことが楽しい。

周りの人たちは大雑把だけど、朗らかで気が許せる。レンドたちのような感じだ。ガイアの人々にはない、独特の雰囲気…….というかなんというか。

最も楽しいのは、剣の修行だ。

始めはあの夜の戦いのことがまだ頭の中を駆け巡り、剣を上手く握ることさえできなかった。けど、剣の心得がある親方や他の従業員

員も一緒になつて、僕を指導してくれる。剣の握り方、振り方、防御をするときの動作や、受け身の仕方など、いろいろと教えてくれる。

身長が高いわりに僕は体が細く、筋肉が付いていないため、剣を振るにしても剣に体が持つていかれてしまつらしい。だから、この荷物運びの仕事は、筋肉を付けるためにはピッタリなんだ。1ヶ月も長い時間しておけば、軽い剣を簡単に操れるようにはなると言われた。そう考えたら、頑張るしかないだろ。これからのためにも。

7月3日。気が付いたら、7月になつていた。ランディアナの気温も、毎日汗が出るほど暑い。この世界での、夏がやってきたのか。今さら思うが……なんで、この世界と元の世界の日付が同じなんだろう。未だに納得も理解もできない。グレゴリ歴だったか……。この世界がそれほどものを作れるとは思えないし。

以前、リサの言っていた「時間は共有している」というのは、このことなのだろうか……。

お金も十分にたまり、僕たちは王都へ向かうことにした。1ヶ月でセルハン川の橋が直るかなあと思っていたが、そんなに上手いくわけがなかった。しかし、18日もかかったが、北の関所を通るための通行証を発行することができた。これで山道を通らずに王都へ行くことができるようになった。

「本当に、お世話になりました。ミーシャさん」

「あんまりフルネームで言わないでくれる？ 恥ずかしくなつちゃう」

僕が言うと、なぜかミーシャさんは照れていた。

「しかし、1ヶ月も3人を住み込みで働かせてくれるなんて、本当に感謝してます」

珍しく、ヴァルバが丁寧な言い方をした。

「そんなかしこまらないですよ。本当に照れちゃう」  
すると、ミーシャさんは笑い出した。

「けど、人手が足りないときに来てくれたからこっちも感謝してるわ」

くせなのか、ミーシャさんは話すときいつも前髪を指でいじっている。

「んじゃあ、行くとするか」

「ああ」

「そうですね」

僕たちには置いてあった荷物を馬車の中に押入れ、馬車に乗り込んだ。

「アンナちゃん、あなたのメイド姿、かわいかったわよ？」

「!!! そ、そんなこと言わないでください！」

顔を真っ赤にしながら、アンナは馬車の奥に行ってしまった。

「ははは。それじゃ、ミーシャさん、お世話になりました」

ヴァルバは頭を下げた。

「……またランディアナに来たときは、ぜひ、ここに寄ってね」

そして、僕たちはランディアナを出発した。

いよいよ、王都だ！

「社長、よろしいんですか？」

「……エリーザ。そうね、たしかに、公爵の命に反したことになるわね。けど……」

「……」

「けど、これくらいはいいじゃない。あんなひどいことを、私は許すことができないのだから……」

「……せめて、幸せな時間を少しでも感じられればいいんだけど……」

「……公爵の犠牲になることだけは、避けてほしい。……どうか、あの子をお守りください……」

ランディアナの町を通っているとき、思い出したことがあった。

「なあなあ、ヴァルバ」

「なんだよ？」

舗装された、真っ白な道路をゆっくりと動く馬車に揺られながら、ヴァルバに訊いた。

「この都市って、夜になつても明るいよな？ どういうことだ？」

夜になると、この都市には電気みたい物が光って明るくなる。あちこちを流れる水路の中にも、光る物があった。

「ああ、あれは、『魔法石』っていう石が光っているのさ」

「『魔法石』？」

僕は頭をかしげた。

「魔法石っていうのは、魔力を封じた石のことで、持っているだけでその属性の魔法を操ることができるんだ。夜に光っているそれは、たぶん雷の魔法石なんだろうな」

「常に光ってるわけじゃないんですか？」

「制御する人がいれば、いつでもその性能を発動させることができるんだ。きつと、夜になったら魔術師たちが発動させてるんだよ」

魔法石にはそれぞれの属性によって、いろいろな効果があるらしい。

「炎だったら物を焼いたり、水だったら冷却だったり、水を出したりするのさ。ちなみに、これらの魔法石は込められている魔力の大きさにもよるが、大体、半日くらいしか持たないはず」

「半日だけ？ じゃあ、あの雷の魔法石は？」

「あれは、常に魔術師たちが魔力を補充してるんだろうよ。けっこう大変なもんさ」

なるほどなあ。この世界は、『魔力』といったものがあるから、文明がそこまで発達していなくても、『ガイア』に近いことはできるということなのかも。

「たしか……『天空石』だったかな」

ヴァルバは記憶から知識をひねり出すように、声を細くしながら

つぶやいた。

「あれの構造を真似して、魔法石を造ったんだっただな」

「その天空石って何？」

「謎の宝石のことだよ。遙か数千年前に造られたって言われてる。とてつもないエレメンタルを秘めていて、どういう風にできているのか、さっぱりわからないんだよ」

天空石に秘められているのは未発見のエレメンタルだったとか。現在の世界には存在しない、失われた元素だという。

ランディアナを出ると、ミレトスに行った時みたいな緑ばかりの風景ではなく、少し寂れた感じの風景が続いた。しかし、夏のためか生えている草も、木も、青々とした緑だ。遠くにある山を見ても、夏の山という感じがする。

ここはちゃんと道が舗装されている。レンガが敷き詰められているんだろうな。ヴァルバによると、ランディアナは戦争時には兵糧物資や軍隊の補給拠点なため、移動しやすいよう、王都まではこういった道が続いているらしい。

セルハン川の橋に続く道の先には、修復工事を行っている人たちの影が見えた。ドガン、ガチャン。大きな音が、静かなこの平野に響く。

ランディアナを出発して、次の日には関所に到達。この関所は思ったよりも大きく、セルハン川の橋が壊れているためにここを通る人が多くなり、ミレトス並みの騒がしさだ。

通行証を見せるための行列が並んでいて、僕たちはそこで3時間くらい足止めを食らった。

そして、関所を通る頃には、空も赤みがかっていて、カラスが自分の家に帰っていつていた。あーあ、ただ立ち尽くすってのは性に

合わん。絶対に行列のできる店とかに入らないタイプです。

それから馬車で進むこと3日後の昼ごろ、果てしなく広がる平野の中に、巨大な都市が見えた。そう、ルテティアだ。

灰色の城壁。あまりの高さのため、内部の町並みは一切見えない。見えるのは、王都の中心からよきつと出ている城だけだ。

城壁は端から端まで、数キロもあるのではないかと思った。

出入り口の門は馬鹿でかいというほどでかく、何物も通さないといい雰囲気を漂わせていた。

門番の人に旅人の証明書を提示し、都の中に入るとそこは、ミレストスやランディアナなんてちっぴけだと思っただけだ、すごい。すごい。すごい。すごい。すごい。すごい。

「す、スゲー……。これが、王都かあ……」

自然と、言葉が漏れてしまう。幅30メートルはあるであろう、白いレンガの中央道路。そこを多くの人々が歩いたり、荷物を運んだり、談笑したりしている。

中央道路を挟むようにして、木造のログハウスみたいな民間人の家や、いろいろな店が並んでいる。ところどころ、出店も出ているが、ミレストスとかほどではない。あと、教会らしき建物も見かけた。『ソフィア教』の教会だと思っただけが白銀のような色彩で、神々しさを放っている。

中央道路のずっと先に、空へ伸ばすように大きな建物がある。城壁のように白いが、塔みたいなもの先端は青だったり、他の建物とはまったく違うものだった。

「ヴァルバ、あれって？」

僕はその建物を指差し、ヴァルバに訊ねた。

「あれはたぶん、王城だろ」

「王城……王様のいる場所か」  
遠くから見ても、威厳を放っているのがわかる。なんともいえないこの重厚感。ひしひしと感じる何かがある。昔の日本の天皇や、ヨーロッパの王様のいた城も、あの王城みたいなものを放っていたんだろうか。

この王都、上空から見ると一つの六角形に見えるようになっていく。首都は4つの市街区と1つの商店街、1つの貴族街、そして中心の王城に分けられており、それぞれが一つの都市並みの広さだ。観光名所である第3市街区は、現在僕たちがいるところ。主に他地域から来た人のためのもので、隣には商店街があり、博物館やら宿屋がたくさんある。中には、ランディアナにあったホテルのようなものもある。最早、宿屋ではないな。あまりに豪華すぎて。

少し休める場所を探し、中央道路の中程にある公園に行った。きれいな緑の樹木が並び、子供たちが追いかけてこしながら遊んでいる。中央には、ミレトスの公園と同じで噴水があり、上空に向かって飛んでいる水の高さは3メートルほどだろうか。その噴水を囲むようにして白い彫刻の女性像が並び、古代ギリシャのものを思い起こさせる。

「これからどうすっかな」

ベンチに座って、ヴァルバが言った。

「どうするって……あ、そうでしたね」

アンナが思い出したように言った。

「たしか……アンジュー伯爵に会えみたいなこと言ってなかったか？」

僕は腕組みをしながら呟いた。もう1か月以上も前のことだから、正しいかどうかわかんなくなってきた。

「アンジュー伯爵……か」

「？ ヴァルバ、知ってるのか？」

僕は期待を込めて訊いた。

「知らん」

「……………」

思わずデコピンしたくなかったが、まあ許しておいてやるか……。

「それにしても、アンジュー伯爵って貴族だろ？ どうやって会えてんだよ」

僕はため息を漏らした。

「そうですね。一般人は王侯貴族と話すことなんてできないと思うですし」

「リサの奴も、知り合いなら面会する方法を教えといてくれてもいいのに」

「まったく、あいつはいつもあんなだからな……………」

ヴァルバは「やれやれ」といった顔で言う。

「…………… そういえば、ヴァルバさんはどういった経緯でリサさんと出会ったんですか？」

ヴァルバが言ったセリフに反応したんだろう、アンナが訊ねた。

「どういった経緯って言われてもなあ……………」

ヴァルバは頭を抱え、頭を垂れた。表面的には僕は普通だが、心の中は早く聞きたくてしょうがない。

「…………… そうだそうだ。ルーテっていう町で出会ったんだよ」

ヴァルバは手を叩き、そう言った。

「ルーテって、ダーナ砂漠のルーテですか？」

「そうそう、そのルーテ」

2人はわかってしているようだが、僕はまったくわからないので頭の上にくエスチヨンマークを浮かべた。

「ソラはわからないだろうから、説明してやるよ」

ヴァルバが少し笑いながら言った。

「ダーナってというのは、イデア王国にある大きな砂漠なんです」

アンナが説明を始めてくれた。

「あそこは別名『忘却の砂漠』って言われていて、ガイドの人無し

であそこに踏み入ると、二度と生還することができないといわれています」

まあ砂漠だしな。

「ダーナ砂漠は、イデアの領土の3分の1を占めるらしいですよ」

「それって、大きいのか？」

イデア王国の大きさがわからないので、3分の1と言われても大きさがよくわからない。

「イデアは、ルテティアの3分の2くらいの領土だから、砂漠はかなり大きいほうだろ。あのルナ平原よりも大きいはずだったと思う」となると、どのくらいかな。『ガイア』のサハラ砂漠くらいだろうか。あるいは、ゴビ砂漠くらいかも。世界地図でもあれば、わかりやすいんだけど。

「そのダーナ砂漠の中央辺りに、『ルーテ』っていうオアシス都市があるんだ」

「そこでリサと出会ったのか？」

「うーん、気が付いたら、そこにいたんだよな」

「……………」

僕とアンナは頭をかしげた。

「実はさ、『忘却の砂漠なんて言われてるけど、どうってことないだろ』と高をくくっていたら、やっぱり遭難しちゃって行き倒れてしまったんだ」

どうやらその危ない状況の中、リサが見つ付けてくれてルーテまで運んでくれたらしい。

「気が付いてからも体調が芳しくなくて、リサがいつも看病してくれてな。2週間くらい、お世話になったんだよ」

「……………」

なんだか、男と女の関係みたいだな…………。

「な、なんだよ？ 2人とも」

少し、ヴァルバは戸惑っていた。

「い、いや、なんでもないよ。な？ アンナ」

「そ、そうですね」

「……？ まあそれで知り合って、大きな町でたびたび会うことになったんだよ。偶然と言えば、偶然だがな」

それが3年程前の話らしい。

「まあ……あいつはよくわからない女だよ。あの若さで独り旅してると、どこに用事があるのか、目的があるのかも言わない。俺にはとやかく訊いてくるくせに、自分のこととなるとはぐらかす。……ある意味神秘的……とでも言うんだろうが、あそこまで怪しいと変って言いたくなるよ、ホント」

ヴァルバはため息交じりに説明した。つか、怪しいし変って……これこそ、自分のことを棚に上げて言うってやつだな……。僕は内心、笑っていた。

ん？ 3年前？ リサは確か……。

「……それって3年前の話だよな？」

「ああ、そうだけど？」

「リサって、16歳だよな？ っていうことは、13歳より前から一人旅していたってことか？」

ヴァルバは少し驚いたような顔をして見せた。

「単純計算すればそうなるな。けど、それがどうかしたか？」

ほほの辺りをポリポリとかきながら、ヴァルバは言った。

「……いや、なんでもないや」

そのヴァルバの顔を見ていて、しゃべる気が失せてしまった。

たしかに、どうでもいいといえば、どうでもいいのだが……。謎の多いリサにとって、そんな若い時分から旅をしているということはない。はかなりの、それも大きな事情が絡んでいるのかもしれない。

あいつ、本当に何者なんだろう。インドラのこととは知ってるし、貴族とか、女王様に会えたりできるような一般人、そうそういないだろうし……。まさか、亡国の王女とか……。いやあ、それはねえだろ。リサに限って。王族なら、もう少しおしとやかに成長してもいいだろうしなあ。

……それを言った時、僕は自分がリサにどんな制裁を食らうのか、容易に想像できてしまった。

「さて、今日泊まる宿を見つけに行こうか」

「それもそうですね」

再び中央道路に戻り、宿屋を探した。今回決めた宿屋は、ランデイアナのようなホテルみたいな宿屋ではなく、木製の宿屋だった。形的には、ログハウスに似ている。

宿に入ると、中は思ったより広く、1階はどこかのバーみたいだった。カウンターにイスが並び、その後ろには5つのテーブルが並んでいた。4、5人ほど、それに座って談笑しながら何かを飲んでいる。

「すみません、3名泊まりたいんですけど」

「あ、お泊りですか」

カウンターの男性の人はそう言うと、紙を取り出した。

「ここに、記入をお願いします」

僕たちがそこに行き、名前を書いていると後ろから視線を感じた。こういうとき、人間の6感っていうのはすごいと思う。見てもいない人の視線まで感じるができるのだから。

見る気が無いのに後ろを振り向く仕草をして、誰が見ているのかを確かめた。

奥から3番目のテーブルに、1人で座っている男だ。どこかの西部劇の帽子をかぶっていて、服装はどこかの貴族っぽく見えた。けど、こんなところに貴族なんて来ないだろうと思った。

そう思って僕は向き直り、紙に名前を記入した。書き終わったとき、誰かが近づいてくる気配がした。……もしかして、さっきの男だろうか。

再びゆっくりと振り返ると、目の前にあの男が立っていた。

「うおっ!?!?」

たった少しの間にごここまで来ていたので、僕は思わず声を出してしまった。その声に、他の2人も気が付いた。

「ソラ？」

僕は驚きのあまり、体が少しの間だけ硬直していた。

「みなさん、もしかしてリサという女性から都に行けと言われましたか？」

男は、僕たちの顔を眺めながらしゃべった。こうして近くで見ると、背が高いというのがわかった。僕より、少し高いぐらいだろうか。

「え、ええ。そうですけど……」

アンナが言った。

「そうか！ やつと来たか！」

いきなり、男は大きな声を上げて、万歳をした。どうしてそんな行動をするのか、まったくわからなかった。僕たちがそうやってあぐりしていると、男はそれに気づき、ゴホンと1度咳き込み、帽子を取った。

「これは申し遅れました。私は、王都の西の土地を治める、アンジュー伯爵カルヴァン＝アンルと申します」

「あ、アンジュー伯爵！？」

この人が！？ つか、運がいいにもほどがある……。まさか、これらの宿屋で出会ってしまうとは……。

それにしても、貴族か。初めて見た。たしかに帽子は質素なものだが、服装はさつき見た時思ったように、貴族のような格好だ。きらびやかな模様の服。ベルトは赤と金の彩色。そして、『細剣』とでも言うのか、高価な剣を差している。

帽子が取られて、やっと顔がはっきりとわかった。髪は金髪で、僕と同じくらいの髪の長さだ。目は細く、年をとっているようにも見えるが、ひげは生やしていない。しかし、貴族としての風格とでも言えようか、それらしい雰囲気を持っていた。

「なるほど、あなたがアンジュー伯爵ですか。俺たちも、あなたを

探していたんですよ」

「ヴァルバは落ち着いたような口調で言った。

「私はリサからあなたたちを国王陛下に謁見させてくれ、と頼まれてね。それで、ずっと待っていたんだよ」

「ずっととどれくらいですか？」

「僕が慌てて訊ねた。」

「そうだな…… 2ヶ月近くかな」

「ランディアナで、1ヶ月も滞在したからなあ。」

「リサは1ヶ月くらい待てば来ると言っていたからね。そろそろ、待つのをあきらめようと思っていたところだよ」

「そう言いながら、伯爵はハッハッと、笑っていた。笑い事になったんだから、いいのか、な？」

「す、すみません。お待たせしてしまって……」

「アンナが丁寧に謝った。僕とヴァルバもそれを見て、深々と頭を下げた。人が見ている中で、頭を下げるのは恥ずかしいものだ。」

「いや、いいのだよ。頭は下げないでくれ」

慌てながら、伯爵は言った。

「リサからの頼みだからな。断るわけにもいかないのだよ」

「それってどういう意味なんだろう。リサは、それなりに高い地位にいるということか？」

「さて、ここで話をするのはあれだ。私の家に行こう」

伯爵は後ろに振り返った。

「よろしいんですか？」

「もちろんだよ。そうだ、名前を覚えてもらえるかな？」

伯爵は苦笑いをしながら言った。

「あ、僕はソラ＝ヴェルエスです」

「私はアンナ＝カティオつて言います」

「俺…… いや、私はヴァルバ＝ダレイオスと申します」

今まで見た中で、最も丁寧なヴァルバを見てしまった。僕とアンナは思わず噴出してしまいそうになったが、それを何とか堪えた。

後で思いつきり笑ってやろう。

僕たちは伯爵と握手を交わし、宿を出た。

中央道路から王城への道をまっすぐ進み、王城の門前に来た。王城は近くで見ると、かなり高いことがわかった。ヨーロッパの何とか大聖堂くらい高いんじゃないかと思った。

門の頂点には1つの旗が立っていて、風になびかれて揺ら揺らと動いていた。その旗に、金色で何かが描かれている。たしか、『金色の鷹』という王家を表す紋章だっただろうか。

シュヴァルツがああ紋章が入ったものを身に着けていた。いずれ、わかることになるんだろうけど。

その王城の門をぐるっと一回りしたところに、また外の門に続く道路があった。だけど、さっきの中央道路ほどの幅はない。しかも、ちよつと行った所に、豪華な家々が立ち並んでいた。それは、1つの町並みを形成しているようだった。

どうやら、ここは貴族が住む一帯なんだろう。中央道路で見た家々のような、木製のものではなく、白いレンガできれいに組み立てられていて、たくさん窓が付いており、そこに花が飾られている。そして、一つ一つの家には絶対と言っていいほど、庭が付いている。中には、その庭で貴族の子供たちが、こぼれそうな笑顔をしながら遊んでいる。みんな公園で見たような感じの子供だったが、服装が見るからに高価そうだ。さすが、貴族の子供……だ。

そのこの区域の一角に、伯爵の家があった。他の貴族の家に引けを取らない、見事な建物だった。赤と黄色と白い花がきれいに並び、咲いている花壇が特徴的だ。アンナがそれを見て、感嘆の声を上げていた。

「私の本当の家は王都の西にある『アンジュー』という都市にあるんだが、仕事の関係上、王都に滞在することが多くてね。ここ、特

別区域にもう1つの家を造ったんだ」

王都にいるほうが長いので、この家の方が、アンジューにある家より大きいらしい。とはいえ、これより少しだけ小さいらしいので、普通の家から考えれば十分大きいと思う。さすが、貴族というべきか。

家の中に入ると、これまた驚きの一言に尽きる。よくテレビで見たお金持ちの家のようなものだ。

広さは30畳くらいだろうか。天井に豪華なシャンデリア。花の模様が描かれたじゅうたんが、床に4つほど敷かれている。見るからに高そうだ。そして、金ぴかに輝くグラスなどが立ち並んでいる。それは目を眩るばかりだった。

「みなさん、そこに腰掛けてください」

言われた先に、大きなソファアールが置いてあった。真っ白なソファアールに座ってみると、今まで感じたことがないくらいふわふわだった。

「さて、君たちはリサから話を聞いているかな？」

伯爵は、僕たちと向かい合っているソファアールに座り、訊ねた。

「……『インドラ』のことですか？」

「そう、それだよ」

伯爵は指をパチンと鳴らした。すると、他の部屋から召し使いのような男性が来た。

「お客様に、飲み物を」

召し使いは1度お辞儀をして、「かしこまりました」と言って他の部屋に行った。

「聞いたと思うが、インドラは古代暗黒魔法を復活させ、自由に扱うことができる集団だ」

僕たちはそろってうなずいた。たしかに、リサはそう言っていた。暗黒魔法は必ず人を死に至らしめる最悪の魔法だ。

「さらに、やつらは特殊な訓練を受けた人間たちらしい」

「特殊な訓練、ですか？」

そう言うと、伯爵はうなずいた。

「簡単に言えば、暗殺訓練を受けているということだ」

「あ、暗殺ですか？」

現実味のない言葉を聞いて、僕の心が動揺した。

「そう。格闘技術、剣術、槍術、魔術など……。一般の軍人や騎士たちを遥かに凌ぐ戦闘能力を持っている」

シュヴァルツとかみたなのが大勢いるってことだろうか……。

「ここ最近、頻発している少女誘拐事件や貴族暗殺事件も、やつらがやっていることだと考えれば、それだけの能力を持っていると考えることができるんだ」

「貴族……暗殺事件、ですか？」

それは初めて聞いた。

「知らなかったのか？ まあ、無理もない。これは政治機関に属している者だけが、知っているような情報だからな」

そのとき、さつき飲み物を準備しに行った召し使いの人が、部屋に入ってきた。そして、僕たちの前にオレンジ色のものが入ったグラスを置いた。王都に来てから、まだ1度も飲み物を飲んでいないから、すごく飲みたいんだが、今は伯爵の話のほうが大切だ。

「……そういったこともあるのに、インドラのことを知っている人は私を含め、ほんの10人程度しかいないんだよ」

「たったの10人？」

伯爵はゆっくりとうなずき、続けた。

「国王陛下でさえ、この事実を知らない。そう、上層部であればあるほど知らないんだ」

「どうしてですか？」

「……そのことを、知らせようとしない者たちがいるのだよ」

急に、伯爵の顔が強張った。

「その者たちは私がインドラのことを知らせようとすると、何かしらことを陛下に告げて、私の言葉を聞かせないのだよ」

「……それは一体……？」

僕が訊ねた。

「元老院の者たちだよ。全員ではないが、大多数がそのことを隠そうとしている」

元老院……。国王に選ばれた貴族のみで構成された機関だ。これがあるために、議会という機関があまり意味を成さない。

「私も貴族議員なのだが、元老院の者たちが相手ではどうにもならないことが多いのだよ」

伯爵も、中央と呼ばれる議会の一員らしい。

「当然ですね。議院の人でも元老院には楯突くことはできない。そうですね？」

ヴァルバが丁寧な口調で言った。

「そういうことだ。それで、君たちを呼んだ」

伯爵は僕たちを見回した。

「君たちなら、国王陛下に進言することができるからだよ」

議会委員であり、さらに民選議員よりも権限のある貴族議員である伯爵でも進言することができないなら、ただの民間人では絶対に会うことすらできないと思うんだけど。

「……伝説の『ガイア』の人間だろうか？」

伯爵が人差し指で僕を指した。その鋭い眼光に、僕はたじろいでしまった。

「なんで、それを？」

「2ヶ月前、リサが言っていたんだよ」

『陛下には謁見できないし、馬鹿なじじいどもが邪魔をするし……。やっぱり、王様の好きなお話にもっていかせるか』

『？ どういうことだ？』

『ルーファス8世は神話とか伝説の類がお好きなんですよ？』

『まあそうだが……』

『あんたのところに、ガイアからの少年を届けるよ』

「ガイアだと？ あの伝説上の？ 君のことがあるから、なまじ嘘だとは思えんが……」

「そいつらを、なんとかして陛下に謁見させて。あのおじいちゃんなら、会いたくなるでしょうし。それで、これを陛下に」

「……書状？」

「うん。謁見さえすれば、元老院に伝わらずにインドラのことを知らせることができる。これに、その脅威とかいろいろ書いておいたから」

「どうして、そのリサの書状をすぐに渡さなかったんですか？」

疑問に思っていたことを伯爵に訊ねた。

「それは、元老院に見せないためだ」

「??？」

「陛下にお渡しするには1度、宰相に通らせなければならぬ。現宰相である、ヴィンラント公爵レオポルト卿は元老議員と仲がよく、その元老議員の口車に乗り、インドラのことを隠そうとしているんだ」

あの名宰相と名高い人がねえ……。

「しかも、『ガイア』の住人である君がいれば、必ず1度は陛下に謁見できるのさ」

伯爵の顔は、さっきまでの強張った顔から、笑顔が少しだけこぼれた。

「この国では、他国の人間は1度は陛下に謁見できるんだ」

「……？ どうしてですか？ 他国の人間は、危険なんじゃあ？」

だって、もし暗殺を企てている人間だったらどうするんだろう。

「この世界では情報が命だからな。貴重な情報を持っているかもしれないだよ。それに、陛下から離れているから、弓矢でも持ち込まない限り、陛下に危害を加えることなんてできないんだよ。まあ、陛下も少しは自粛してもらいたいところではあるのだがな」

伯爵は、苦笑した。国王のわがままで、そういうことになっていくようだ。情報が大切なのはあなたが間違っているとは思わなかったが、そのうち痛い目を見る気がする。

「じゃあ僕がいるのといないのでは、どう状況が違おうと言っているんですか？」

僕は少し間を開けて、続けた。

「『ガイア』はたしかに違う国と言えばそうかもしれませんが、別世界の人間ですよ？ 怪しすぎて、逆に会うことなんてできないと思っただけ……」

すると、伯爵はフツと鼻で笑った。僕は少しだけムツとした。

「実は、陛下は『伝説』や『神話』といった類のものが大好きでね。君が『ガイア』の人間だということを知れば、きっと話だけでも聞いてくれるはずなんだ」

「……そういうことですか？」

伝説とかが好きな国王っていうのも、なんだかおかしな話だ。少しだけ、吹き出しそうになった。

「とにかく陛下に謁見し、インドラのことを知ることになれば、やつらの企みを阻止することができる」

そう簡単にいくかどうかはわからないが、何でもやってみることにしよう。可能性は広がるものだ。

「俺たちはあんまり関係ないみたいだな」

ヴァルバが言った。その言葉に、僕は驚いた。

「そういうこと、だな。君たち2人は、お会いすることはかなわんかもしれない」

伯爵がすんなりと言った。

「どうしてですか？」

僕は立ち上がった。

「この2人は、きっとルテティアの人間であろう？ だったら、陛下に謁見することは……ん？」

伯爵が2人を見回し、ヴァルバを見たとき、顔が止まった。

「君は……そうか、違うのだな」

「ええ。さすがルテティア貴族様」

「……混血の東方民族か？」

「はは、さすが伯爵様。よくわかりますね」

微笑みながら、ヴァルバは言った。

「たしかに俺は混血の東方民族ですが、混血のロンバルディア人でもあるんですよ」

「……というと？」

「父はアルカディア系ロンバルディア人、母は生粋のイデア人なんです」

「なるほどな……。その瞳の色は、アルカディア系のためか」

ハハハと伯爵は笑い、立ち上がった。そう言えば、ヴァルバの瞳ってブルーだよな……。ここいらでは、珍しいのかもしれぬ。

「もしかしたら、ゼテギネア人かと思ってるね。気分を害したなら、謝ろう。すまない」

伯爵はきちんとしたお辞儀をした。まるで、お手本となりそうなお辞儀だ。

「……あれ？ ということは、俺も陛下に謁見できるのかな？」

ヴァルバが言った。

「なるほど。君は見た目的には、ほぼイデア人だしな。謁見するのも難儀な話ではないかもな」

そっか。他国の人間だから、陛下にお目通りかなうかもしれないんだ。

「しかし、アンナは無理だな……。どう見ても、ルテティア系人間だからな」

そう、アンナは金髪（どちらかといえばレモン色）で、この町の人々と同じような人種というのはわかる。

「……アンナは、たしかにルテティア人です。ですが、彼女は由緒ある家系の者なんですよ」

ヴァルバは再び丁寧な口調で言い始めた。

「彼女は、ブルターニュ伯爵の御息女です」

その発言が出たとたん、伯爵は目をまん丸にしてアンナを見た。

「そ、それは本当か!？」

伯爵は立ち上がった。

「ええ、そうです」

「ブルターニュ伯爵の……ダグラス様のご息女か？」

「……お父さんの名前をご存知なんですか!？」

今度はアンナが立ち上がった。今まで見たことのない、アンナの姿だ。

「10年前、ダグラス様は私の上司だった。第4師団を率いる大佐であり、尊敬するお人だった」

伯爵は天井を仰ぎながら、言った。

「そして、私が爵位を受け継いだときも、最も喜んで下さったのはあの方だった」

目頭が熱くなってきたんだろうか、目を閉じ、間が空いた。

「しかし、ダグラス様は侯爵の爵位を賜る授与式の前に出兵なされて……帰らぬ人となってしまった」

アンナは、すでに顔を伏せていた。

「そして、2人のご息女は行方知らず。ロアーノ家は廃され、ブルターニュ領もクテシフォン公爵とヴィンラント公爵に取られ……」

「ちよつと待つてください」

ヴァルバが伯爵の言葉を遮るかのように、手を挙げた。

「伯爵の死後、彼女はフィアナの親戚に引き取られ、姉であるリノアンはクテシフォン公爵に連れて行かれたそうですか？」

今までの話を聞く限りでは、そうだった。

「どういうことだ? 君はダグラス様が亡くなった後、突然行方をくらましたと聞いたが……」

「いえ……そんなことはありません」

アンナは小さく顔を振った。

「ダグラス様が亡くなっただ後、爵位を受け継ぐのは長女であるリノアン様のはずだったんだが、王城に召喚しようと使者を送ったところ、すでに御2人の姿はなかった。奥様も、行方不明となっていたのだ」

「お母さんが行方不明……？」

アンナは当惑していた。

「……クテシフォン公爵……ステファン卿が領土を得るために、嘘の報告をしていたとは考えられないんですか？」

ヴァルバは依然、落ち着いた雰囲気で発言をしている。

「そうか……そうだとしたら、公爵が我々を警戒しているのもうなずける」

伯爵が言うには、伯爵たちによって嘘がばれ、調査されるのを嫌がっているのだらうということだ。ローノ家の領土を手に入れた……という、過去のことばれてしまうのだ。

「ところで伯爵、陛下は『呪術研究院』についてはご存知なのですか？」

「いや……知らないだろう。あそこは、ステファン卿が最高責任者を務める機関だから」

「なら、そのことについても話さなければなりませんね」

と、ヴァルバは小さくため息を漏らし、真剣な目で伯爵を見つめた。

「ステファン卿が行っている、悪事についてです」

ヴァルバはリノアンさん誘拐、そして禁忌とされている『魔導注入』を行っていることを告げた。

「そんな馬鹿げたことを……！！」

伯爵は怒りが立ち込めてきたのか、握りしめる拳が小さく震えている。

「……『呪術研究院』は法を破り、悪しきことを実験と称して行っているという噂があったのだ」

伯爵はテーブルに置いてある飲み物を一口飲み、自分を落ち着かせるためにフーと息を吐いた。

「なら公爵を問い詰めて、何をしているのか吐かせるしかないな」  
そう言っつて、ヴァルバもオレンジジュースみたいなものを一口飲んだ。

「最終的にそうなればいいんだけど、どうやって公爵に聞くかだよ」

「『呪術研究院』は王様でも口を出すことができないですよね？」  
アンナが訊ねた。

「そうなのだよ。……とはいえ、これだけの事実があるのだ。陛下が信じてくだされば、陛下の独断で調査が行われるやもしれん。そうなれば、ステファン卿も失墜し、インドラの対抗策も練ることができる！」

伯爵も、なんだか興奮気味だった。

アンナのお姉さん、リノアンさんの行方や『インドラ』のことさえも知っているかもしれない鍵を握る男、クテシフォン公爵ステファン・ロベスピエール卿。奴が『永遠の巫女』を研究しているのだとしたら、同じ巫女である空のこと……！！

少しだけ、心拍数が上がってきた。

## 19章：謁見の間 策謀渦巻く中で

僕たちは、さっそく陛下に謁見するため、王城へ向かった。

「しっかし、大きな門なこと」

王城の門の前に立ち、ヴァルバは見上げながら言った。

「どうして偉い人たちってというのは、高いところを好むのかねえ。

俺はどうも好きになれないな」

「ヴァルバって、高所恐怖症？」

僕がそう言うと、伯爵もアンナも吹き出した。

「な、何言ってるんだ！ そんなわけあるか！」

あからさまに戸惑っているところが怪しい。僕たちは、ますます笑い出してしまった。慌てるヴァルバの姿がなんとも面白い。

「ヴァルバさん、見かけによらずかわいいところありますね」

「か、かわいくはないって」

さすがの僕も苦笑した。そうやって、僕たちは笑いながら門番のところ近づいていった。

「君たち、そろそろ静かにしたほうがよさそうだ」

伯爵は笑いを抑え、僕たちをさえぎった。目の前にいる2人の門番が、細い目つきで僕たちを見ている。

「……カルヴァン卿。今日は何の御用で？」

右側に立っている若い門番が、伯爵に丁寧に行った。

「今日は陛下に進言したいことがあってな。すでに陛下の承認は得ているはずだ」

「……今日は王国議会の日ではございませんよね？」

「そうだが、今日は議員としてではない。ともかく、確認して来てくれ」

得意そうな顔をして、伯爵は言った。

「……わかりました。少々、お待ちください」

若い門番は王城の方に向かい、王城の前に立っている人に何かを

話すと、その人は王城の中に入って行った。

「伯爵、あれは？」

僕が指を指した方向に、王家の紋章である『金色の鷹』が、王城の壁に描かれていた。その紋章の下に、今まで見たことがない絵があった。鷹と同じ金色で、スポーツ大会とかの優勝カップみたいな形をしていた。

「あれか？ ルテティア王家である、ルシタニア家の家紋『金色の鷹』だ。知らないのか？」

「それじゃなくて、その金色の鷹の下にあるあの……杯みたいなものです」

「ああ……」

伯爵は顔を上げ、その紋章を眺めた。

「あれは『聖杯』と呼ばれるものをかたどった紋章なんだ」

「……あれが聖杯、か」

たしか、以前にリサが言っていたような。…そうだ。邪神の封印を解く鍵の一つだったか。

「太古の昔、大いなる力……災厄を封じた、3種の神器だ」

大いなる力を封じた、ねえ……。何か、もっと大きな意味を持つもののような気がするんだけどな。

すると、王城の中へ走って行っていた男が戻り、さっきの若い門番に何かを言っている。そして、門番は足早にこっちに向かって来た。

「カルヴァン卿、御通りください。そちらの3方は、こちらへ来て検査させていただきます」

僕とヴァルバはその場で検査された。アンナは女性のため、女性警護兵にすぐその部屋に連れて行かれ、検査された。男とはいえ、警護兵がたくさんいる中で検査されるのは恥ずかしい。

検査は5分程度で済み、僕たちは王城へ進んだ。

王城の中へ通じる階段は、2メートルほどの高さで、それぞれの段に、1人ずつ兵が立っている。まっすぐな姿勢で、重そうな槍を持っている。その中を歩き上るのは、兵たちの視線を浴びているようでかなり緊張する。

門が押し開けられ、王城の中へ入ると、そこは今まで見たことがない壮麗たる場所だった。

床から、天井まで何メートルあるのだろうか。もしかして、20〜30メートルくらいはあるんじゃないだろうか。

そして、天井から釣り下がっている巨大なシャンデリア。伯爵の家で見たシャンデリアも十分に大きいとは思ったが、ここのは別格だ。その大きさは、自宅の今に置いてあったコタツの机の2倍くらいの大きさで、ダイヤモンドみたいにきらきらと輝き、虹色の光を放っている。伯爵が言うには、あのシャンデリアには魔法石が埋め込まれており、鮮やかな色を発するのだという。

中央にはずっと上に続く階段。まっすぐに、約45度の傾斜で伸びていて、赤いじゅうたんが敷かれている。その上った先に、大きな扉が1つあった。

「あの奥の部屋が、陛下のおわす『王の間』だ」

伯爵はその大きな扉を指差した。なんだろう、さらに緊張してきてしまった。あの先に、絶対君主の王様がいる。教科書とかでしか見たことがない、偉い人が。

ところどころに階段があり、ドアがある。それらは貴族の勤務室だったり、將軍たちの作戦会議のための部屋らしい。そして中央の階段に隠れているが、その下に民選議員と貴族議員によって形成される、王国議会の審議場があるらしい。入ってみたいが、それはまた後で。

中央の階段をゆっくりと登り、伯爵の後に付いて行く。僕たち3人は辺りをきよきよと見回し、田舎者ぶりをいかなく発揮している。しかし、伯爵は堂々としたもので、しっかりと前を見据え、ゆっくりと階段を登って行く。後姿が、やはり国民を代表する議員

を思わせる。

大きな扉の前に到着し、1度後ろを振り返ってみると、ここはけっこう高い場所だとわかった。城の中まで、こんな高さのものを作るのは骨が折れただろうなあと感慨深く思った。建築者はどうやって作ったのだろうか。

「国王陛下の承諾はお在りか？」

扉の前に佇む屈強な兵士が、伯爵に訊ねた。

「私は王国議会貴族議員・アンジュー伯爵カルヴァン・アンルだ。陛下に申し上げたいことがあり、ここに参った。それに対する陛下の承諾は得ている」

伯爵はビシツと起立をし、兵士に言った。思わず、僕たちも姿勢を正してしまった。

「……わかりました。どうぞ、お通り下さい」

伯爵が軽くお辞儀をしたので、それに釣られて僕たちもお辞儀をした。

屈強な兵士たちによって、大きな扉が開いていく。開ける瞬間だけ、ゴトン、という音が出たが、開くときにはまったくと言っていいほど音が出なかった。

そして、扉が開いた。

開いた先には、さっきの部屋……というより広間のように、天井がとんでもなく高い。今度は、鋭角に伸びているようだ。そこに張り巡らされたステンドグラスが、なんとも言えないほどきれいだった。

顔を下ろし、前を見ると、床には階段から続く赤いじゅうたんが、ずっと前まで続いている。そして、そのじゅうたんの終わりのところに、1人の人間が立っていた。

国王だ。

国王は、赤と黄色で彩色された、大きな玉座に座っていた。足を

組み、玉座に肘をつき、顔を支えている。玉座から1段降りたところ、赤いじゅうたんの両脇に、何人かの男の人が立っている。たぶん、大臣か何かだろう。

玉座の左右には、同じような玉座があった。しかし、大きさは少し小さいようだ。王妃、王子、あるいは王女が座るところなのだろう。

伯爵の後に続き、僕たちは赤いじゅうたんに沿って、ゆっくり進んだ。

進むたびに強烈な威圧感を感じてくる。そう、国王の威圧感だ。じわりじわり、相手が迫ってくるように、そのピリピリとした感じが近づいてくる。

王様って言うのは、みんなこういう雰囲気を漂わせているんだろうか。歴然の力の差で、相手を捻じ伏せるがごとく、鋭い眼光で僕たちを見ている気がする。

「止まれ!!」

静かな『王の間』に、大きな声が響く。玉座の近くにたたずんでいる男たちの中の誰かの声だ。

「カルヴァン郷、そなたは前へ」

伯爵は1度お辞儀をし、玉座のほうに歩いて行った。そして、玉座から4メートルほど離れた場所でひざまずき、手を合わせた。

「陛下、ご機嫌麗しゅうございます」

「……うむ」

国王のどっしりとした、小さな声が聞こえた。僕たちはあまりの迫力に、瞬きをするのも忘れ、伯爵の背中をジッと見つめている。

「その者たち、10歩前によ」

突然、命令された。言われたとおり10歩前に歩こうとするが、どのくらいかわからない。だから、僕は左右にいるアンナとヴァルバの足を見ながら歩いた。二人の歩幅に合わせれば、ちゃんとなると思ったからだ。

伯爵の5メートルほど後ろで止まった。ここから王様まで、けっ

こう離れているように見える。伯爵が以前言ったように、弓矢でもないで国王に危害を加えることはできない。

「そこで止まれ」

すると、ヴァルバがひざまずいた。とっさに、僕やアンナもひざまずいた。どうやら国王に謁見する際には、畏敬の念を込め、こういった行動をしなければならぬようだ。

「……カルヴァン卿、面を上げよ」

ひざまずき、顔を下げているので、伯爵の姿は見えない。国王の姿ももちろん、見えない。

「その方たち、名を述べよ」

国王の声が響いた。

「私は、ヴァルバ・ダレイオスと申します」

ヴァルバがきれいな口調で言った。どうして、こいつはこういった緊張する場面でも平然とこなすんだらう。とにかく、僕も同じように名前を言わなきゃな。

「私はソラ・ヴェルエスと申します」

声が震えた。な、情けない……。

「わ、わ、私は、アンナ・カティオと申しますです」

アンナは、緊張のあまりろれつが上手く回っていない。きつと、アンナは顔を真っ赤にして、「逃げ出したい」なんて思っているんだらうな。

すると、国王はフツと笑った。

「それほど緊張せずともよい。表を上げい」

僕たちはすぐに頭を上げた。国王の顔は、少し微笑んでいるようだった。そして、玉座からすくつと立ち上がった。

「余はルテティア29代国王ルーファス8世だ」

僕たちは、深々と頭を下げた。そうしなきゃならないと思ったからだ。

「君たちは異国のものだと言われているが、どこから来たのだね？」  
国王はそう言うと、さつきみたいに座りなおした。

「……私は、イデアから参りました」  
さっそく、昨日考えていた嘘をついた。伯爵が言うには、見た目はイデア人なので、嘘を言っても問題はないらしい。

「ほう、はるばるイデアから……なるほど、その漆黒の髪と褐色の肌……純血、あるいは混血の東方民族か」

国王は真っ白なあごひげをさすりながら、ヴァルバを見ている。時折、目を細めて観察しているようにも見えた。

「その……アンナと申したか。そなたは？」

「……あ、あの、私は、本国の者です……」  
オドオドしながら、アンナは言った。

「ふむ。そなたは？」

国王は肘をついていないほうの手で、僕を指した。

「ええ………つとですね………」  
どうしよう。緊張しすぎて、口が上手く開かない。ここで、ちゃんと行わなければ……。

「少年、どう致した？」

心配したのか、黒ひげで、赤い帽子をかぶった大臣っぽい人が言った。僕は、「大丈夫」という表情をして見せた。

僕は息を整えた。

「……僕は、『ガイア』というところから来ました」

僕がそう言うと、その場にいるみんなの表情が固まった。事情を知っている、ヴァルバとアンナと伯爵の3人を除いて。

国王は大きく目を開き、僕を見ていた。

「おぬし………それはまことか？」

国王は驚きの表情をしつつも、声はいたって普通だった。

「……まあ、本当です」

「そ、そうか………！ で、伝説の『青の世』からの住人なのか!？」  
国王は興奮気味の口調で言った。

「そうなります……ね」  
「だよな？」

すると、心配してくれた大臣ではなく、金髪のオールバックで金色のひげが目立つ男が、一歩前に出て国王に言った。

「陛下、迷信に騙されまするな。このような少年、『ガイア』の間であるうはすがありません」

男はそう言うと、僕を一瞥した。その目は、なんだか冷たい雰囲気を持つていた。……どこかで、感じたことがあるんだが……。

「黒の髪、黒の瞳。これはどこからどう見ても、ヴァルバという男と同じ東方民族の出でございます」

「そう言われれば、そうじゃが……」  
国王は納得できないように言った。

「カルヴァン卿。そなた、これは一体どういうおつもりかな？」

もう1人の、茶色い髪の男が伯爵のほうに向いた。眉を寄せ、少し怒っているように見える。

「このような妄言を言わせに、正式な手続きもせずこの王の間に参上したのか？」

すると伯爵はスツと立ち上がり、言った。

「お言葉ですが、財務大臣。私は伝説の『ガイア』から来た住人だと確信できたから、彼をここへ連れて参ったのです。それに陛下に申し上げたいことがあります、私はここへ参ったのです。これまで、今回も、陛下にお目通りするに当たって、私はすべきことはしてききました。だから、『正式な手続きもせず』というのは間違いであり、正式に手続きを済ましたからこそ、私はここにいます」

伯爵は冷静に且つ、丁寧にしゃべった。財務大臣と呼ばれる男はしかめっ面をしつつ、顔を背けた。

そして伯爵は陛下に顔を向け、続けた。

「陛下。ソラ『ヴェルエス』は本当にあの別世界『ガイア』から、あの目的でこの世界に参ったのです」

「ほつ……目的とは？」

「……彼は悪しき者共の企みを知り、それを伝えんがために王都に参ったのです」

それだけが理由ではないのだが……。僕の本当の目的は、空を救うこと。それだけだ。

「ソラ……と言ったか。そなた、まことにあの別世界から来たのか？ 偽りではあるまいな？」

念を押すように、国王は言った。僕は迷わず「はい」と答えた。

「そ、そうか、そうか！ これはまた、なんと希有なことだ！」

国王は喜びのあまり、周りを気にせず笑い出した。

「おぬし、わざわざ別世界から来るほど余に伝えたいことは、一体なんじゃ？」

国王は前に乗り出し、訊ねた。

「じ、実は……」

ごくりとつばを飲み込んだ。その音が、周りのアンナたちにも聞こえたと思う。

「『インドラ』と呼ばれる、ある組織についてです」

「……………」

僕はしどろもどろに、『インドラ』のことについて説明した。

邪神復活のこと。『永遠の巫女』のこと。そして、僕は連れさらわれた自分の幼馴染のことも、説明した。

「……なるほどのお」

国王は立派なひげをさすりながら、考えた。

「それがまことならば、ワシらも何か事を起こさねばなるまい」  
「やった！ 自分の顔から笑みがこぼれるのがわかった。」

「じゃが、魔道大臣よ」

「……は」

魔道大臣と呼ばれた男が、一步前に出た。さっきの、オールバツクの男だ。

「……ここ最近、カルヴァンが度々余のところを訪れ、おぬしがそれを阻んだという話があるが？」

「そうですが、それが何か？」

国王はさつきまでの驚きとうれしさの笑みが消え、冷酷な顔に変わっていた。

「おぬし、なぜカルヴァンの言を阻んだ？ カルヴァンの申したいことというのがこの『インドラ』とかいう集団のことならば、国にとって……いや、ソフィア教徒にとって、かなり重要なことじゃ。」

……それを阻んだのは、一体どういうことだ？」

「陛下……私がどうしてアンジュー伯の謁見希望を退けたのか、その理由は……」

魔道大臣は僕たちの方に体の向きを変え、僕たちを見た。やはり、冷たい感じがする。そして、伯爵をニヤリと微笑しながら見て、言った。

「……アンジュー伯が元老である、私を陥れようとする魂胆がある……という密告がありましたな」

辺りがざわついた。陥れようとする、だと？ 伯爵はそんなこと一言も言っていないぞ！？」

「な、大臣！！ 私はそのようなことを考えておりませぬ！！」

伯爵が魔道大臣を遮ろうと、大声を上げた。魔道大臣は伯爵を手で押さえるような動作をした。

「彼ら王国議会の者と、我ら元老院の者たちの意見の食い違いが多いことを、陛下もご存知でありましょう？」

「……それは知っておる」

「それなんですよ。元老のであり、五大老の1人である私を陥れ、議会の力を増幅させ、陛下をたぶらかそうとしているのです」

「大臣！！ 何を勝手なことを言っている！！！！？」

伯爵は怒りのあまり、足を踏み出した。

「アンジュー伯よ、口を慎みたまえ。そなたは議会議員であるかもしれないが、爵位で言えば私よりも断然低い。……公爵である私に、そのような口をきいてもよいのかな……？」

大臣の細い目が、へびのように感じた。

……直感した。この人は悪だ。己の欲のために、他人を苦しめる悪だ。本能がそう告げている。

「それに、その『ガイア』から来たと言い張る青年も怪しい。アンジュー伯は何の証拠があつて、この神聖なる『王の間』に参上させたのか、理解に苦しむ。もしや、それは陛下を騙し、あらゆることを吹き込み、国家の中枢を握るつもりでもいたか？」

「私を愚弄するか!？」

伯爵はさらに前に進み、床を強く踏んだ。その音で、他の大臣たちが少しだけ体をビクツとさせていた。

「愚弄だと？ 貴様こそ、私や陛下を愚弄しているのだぞ。……この反逆者めが」

公爵の声色が変わった。汚い、路上に捨てられた何かを見るような目で、はき捨てるように言った。

「……貴様ああ!！」

伯爵は走り出そうとしていた。それを見て僕は思わず、伯爵のところに飛びついた。両腕で、しっかりと伯爵を止めた。

「伯爵、落ち着いてください!！」

「ソラ!？」

伯爵の顔は怒りで赤く染まっていた。まるで、湯気が立っているようだ。

「冷静にならないと……。相手の挑発に乗ってはいけません」

「そ、そうだが……」

伯爵は公爵に詰め寄り、殴りたい気持ちがあるんだと思う。けど、それでは何もかもダメになってしまう。相手は伯爵を怒らせ、冷静さを失わせ、その中で暴れさせて言い訳のできない罪を作り、すぐにでも牢にぶち込むつもりなんだろう。

「だけど、僕も怒りが収まらない。僕だって、あいつをぶん殴つてやりたい。だが……我慢するんだ。奴から、情報を引き出すまでは……！」

「カルヴァンよ、そなたは陛下をたぶらかし、国家の転覆を狙っているのであるう？」

公爵はほくそ笑みながら言った。

「そんな気など、毛頭も無い！」

「……ほう？　だが、それを証明するものなどありはしまい？」

公爵のほくそ笑んだ顔は、唾棄したいくらいだった。

「そなたこそ、何の理由があつて私をそのような反逆者に仕立て上げようとする？」

「仕立て上げようとしているのではない。……言つたではないか。私を陥れようとしていると、密告があつたと」

「……？」

伯爵はわからないような顔をしていた。

「貴様の家の従者が申し出たのだよ。そなたが、イデア人を『ガイア』の人間に仕立て上げ、ここに参上し、私の失態を陛下の御前で作り上げようとしていると」

「な、何！？」

公爵は指を鳴らした。すると、さっき入つて来た扉が開く音がした。振り返ると、1人の男が入つて来ていた。

……伯爵の家の召し使いだ！

「なつ……キユルロ！？」

伯爵も、男の方を向いていた。

「貴様の家の召し使いであろう？　こやつが、私に教えてくれたのだよ。昨日、その3人と共に私を陥れようと計画を立てていた……とな」

「ど、どうしてだ……！」

伯爵は当惑していた。もちろん、僕たちもそうだった。

「……陛下、おわかりでございましょう」

公爵は国王の方に向き直った。そして、自信満々に続けた。

「カルヴァンは反逆者でございます。そして、そこにいる別世界から来たという青年も、偽りでございます。……インドラとかいう集団のことももちろん、偽りでございますよ」

公爵は続けた。

「……そのガイアから来たという男……ヴェルエス、と申しませんか？　そなた、なぜそのようなことをする？」

公爵の視線が、僕に来た。

「……そのような？」

「ヴェルエスという名を……なぜ軽々しく使うのか……。身分違いにも甚だしいというものだ」

身分違い？　ヴェルエス……という苗字が？

「ヴェルエスは、我らがソフィア教徒の主……教皇様の家名だ」

「……!?!?!」

教皇家の家名だって……!?!?

「何!?!?　それは真か!?!?」

国王が言った。教皇家の家名を知らなかった……ということか？

「教皇様の家名を知らないのは無理ありません。あれは、非公開のものですからな。……その名をどこで知ったかはわかりかねるが

……狛下の神聖なる名を語りし異境の者よ、貴様の罪は死罪に相当する。覚悟せよ!?!」

公爵は僕を指差し、大声で言った。

「ま、待ってくださいよ！　僕はそんなの知らない！　僕は……」

ヴェルエスは、頭の中から出てきたものなんだ。それを説明する余裕はなく、公爵は国王に近寄った。

「陛下、ご命令を」

「……ステファン、カルヴァンおよび、『ガイア』から来たと偽る男、その小娘とイデアの男も、同じ牢獄に入れい」

「かしこまりました…」

国王は切り捨てるように言った。……ステファンだって!? あいつが、クテシフォン公爵!

「陛下! お待ちください!」

伯爵が声を上げた。

「陛下、もう一つあるのです! 陛下にお伝えしたいことが!」

僕たちの周りを、何人も警護兵が取り囲んできた。みな、僕たちを槍を向けている。

「……10年前、ブルターニュ伯爵ダグラス卿が戦死なされた後、ブルターニュは宰相閣下に、その他の領土のほとんどがステファン卿に渡りました」

「……そうだったか?」

10年前のことだ。国王も、きちんと覚えてはいないのだろう。

「あれはダグラス卿の跡を継ぐはずだった、二人の御息女が行方をくらましたからでございました」

そうか……伯爵はここで公爵の行っていることを言って、現状を打破しようとしているんだ。

「しかし、行方不明だったご息女の1人はここにいます!」

伯爵はアンナの方を向き、手を差し伸べた。

「彼女、アンナ! カティオがダグラス卿の御息女です!」

みんなが、震えているアンナを見つめた。

「……彼女と彼女の姉であるリノアン様は、そこにいるステファン卿によって離れ離れにされたのです!」

「なんじゃと!」

国王も、驚きの表情を隠せない。よし……いいぞ。

「アンナ様はステファン卿の命令で、強制的にルナ平原のフィアナという村へ行かされ、長女のリノアン様はステファン卿に連れて行かれ、禁忌とされた実験を行っていたのです!」

伯爵の声に力がこもっているのがわかった。だんだん、怒りが込み上げてきたのだろう。

伯爵はキツと公爵を睨みつけた。

「ステファン卿はリノアン様に対し、『魔道注入』を行っていた事実があります。……『呪術研究院』の完全不干渉を利用し、陛下の目が届かぬ場所で犯罪に手を染めていたのだから!？」

「カルヴァン、証拠も無しに何を言っている?」

公爵は動じた顔をせず、冷静に言った。

「……証拠ならあります!」

突然、アンナが叫んだ。彼女の目は、怒りで燃えているように見えた。

「私が証人です!! お姉ちゃんは1度あなたのところを脱走し、フィアナの私のところまで逃げてきました……。そして、あなたがお姉ちゃんにした事……『魔道注入』のことを話していました!」

アンナは、今までで聞いたことが無いくらい大きな声で言った。「そして2年前、再びお姉ちゃんをさらったのもあなたでしょ!？」

アンナの叫び声が、王の間に響いた。

「……ステファン!! それはまことか!？」

国王は公爵のほうに向き直った。

「……ハッハッハ。陛下、伯爵が言うことも、あの小娘が言うことも、全て偽りにしか過ぎませぬ」

公爵は笑いながら言った。この期に及んで、まだ笑うとは……いちいち腹が立つ。さっさと諦めりゃいいのに。

「あの召し使いが言っていたではありませんか。伯爵は昨日、その3人と共に作戦を練っていたと。……このダグラス卿の娘を騙りし女に、あらぬ事を吹き込み、私が法に触れたようにしようとしているのでございましょう」

「違います! 私は、本当にブルターニュ伯爵……ダグラス=ロアーノの娘です!!」

アンナが懇願するように言った。目には、涙がたまっている。僕もたまらず声を上げた。

「陛下!! 公爵こそ、伯爵が真実をお伝えしようとするのを阻み、

陛下に確かなことを伝えず、さらには禁忌に手を出し、犯罪に手を染める極悪人です！」

僕が叫ぶと、国王は近くにいた若い男性に耳打ちした。

「……レオポルト。そちはどう思う？」

国王がそう言うと、国王に最も近くにいた男が前に出た。レオポルトっていうことは、例の宰相であるヴィンラント公爵か？

想像していたより、若い。ひげは生えておらず、つややかな顔をしている。紺色の髪に、優しい感じの顔。下手をすれば、ヴァルバと同じ年くらいに見える。

「そうですねえ。ここは、調査してみたほうが得策かもしれません」

「宰相！ それは、私も疑っているということですか！？」

公爵が声を荒げた。さっきまでの冷静さがどこへ飛んだのか、見てもわかるくらいオドオドしている。

「ハハハ、そうじゃないですよ。ただ……」

宰相はもう一歩前に出て、目をつむりながら続けた。

「……カルヴァン卿も、ここへ参るのにそれなりの覚悟をしていたはず」

宰相は伯爵を横目で見た。

「彼は誰もが知っているとおり、有能な貴族議員だ。彼の言葉をただの妄言として扱うのは、よくないでしょう。……ここは、彼の言葉にも耳を傾けるべきかと」

「なっ……！！ 宰相！ やはり私をお疑いか！？」

そういえば、伯爵は宰相と公爵は仲がいいと言っていたけど、あの様子からはそう見えないのだが……。

「……だからあなたと伯爵、御2人を調査すればよいのですよ。……それに、公爵。あなたが最高責任者を務める、『呪術研究院』はよくない噂が出すぎている。そのことも考慮して、調査をしたほうがいいと申しているのです。……以上が、私の意見でございます」

宰相は国王に一礼し、元の位置に戻った。なんていうか、宰相は他の人とは別格のような気がした。それだけの風格を備えていると

いつか、さすがというべきなのだろうか。

「だがのお、レオポルト。40年前からワシを支えてきてくれたステファンじゃ。やつが偽りを述べているとは思えぬ。しかも、そのカルヴァンの召し使いが証人なんじゃからの」

僕たちに、絶望の空気が流れた。

「私は自分の意見を述べたままでです。……全ては、陛下がお決めになることでございます。いかようにも……」

宰相は再び一礼した。

「そ、そうか。緋王親衛隊、アンジュー伯爵およびきやつが連れて来た3人を、地下牢に連れて行け」

国王がそう言うと、玉座の後ろの幕から6人ほどの兵士が出てきた。他の兵とは違い、煌びやかなヨロイや兜を身に着けている。

「陛下！ せめて、これをお読みください！！」

伯爵が叫んだ。差し伸ばされた手のひらの上には、1つの紙筒があった。

……リサの書状だ！

「陛下……これは、リサの書状でございます！ せめて、せめてこれだけでも目をお通しください！！」

「……リサだと？ リサが、ここに来ていたのか？」

まるで魚がえさに食いついてきたように、国王は言った。

「そうです！ 陛下、どうかこれだけでも……！！」

伯爵が少し動いた瞬間、僕たちを囲んでいるたくさんの槍が動いた。すると、伯爵は動けなくなってしまった。

「陛下、リサの書状というのも偽りでございましょうぞ。彼女ほどの人間なら、正式な手続きをして直接陛下と謁見するはずです。それをわざわざ、カルヴァンのような一貴族から渡させるという回りくどい方法をなさいますか？ あの書状はきつと偽物です」

「ステファン！ 貴様が陛下に伝わる全ての情報を操作しているから、リサも陛下にお会いすることができず、こうして私に書状を託したのだぞ！？」

「陛下、すぐさまきやつらを牢に連行なされませ。陛下をたぶらかそうと、あることないことをこの場で言い続けますぞ」

伯爵の言葉を遮るように、公爵が言った。

「それもそうじゃな。よし……早く牢に打ち込めい！」

国王が声を荒げた。すると宰相が再び一步、前に出た。

「陛下、少々お待ちください」

そう言うのと、宰相は伯爵のほうに歩み寄って来た。

「……この書状、私が預かってもよろしいでしょうか？」

「え……？」

さすがの伯爵も、戸惑っているようだった。

「な、なりません宰相！ それは偽りの書状。すぐにも処分せねば……！」

公爵が困ったような顔をして言った。

「陛下にお通しする書状は、全て宰相である私が先に目を通さなければなりません。……それに、すぐに処分する必要はないでしょう。魔道大臣、慌てる必要もないのでは？」

宰相は公爵の方に顔を向けた。ここからでは宰相が背を僕たちに向けているので、顔は見えないが……わかる。宰相は鋭い目で、公爵を射抜いているのだと。

「陛下、よろしいでしょうか？」

「……よかるう。好きにせい」

宰相は、伯爵から紙筒を取った。

そして、僕たちは兵士たちに、地下牢に連れて行かれた。

## 20章：宰相の企み 野望を打ち砕くために

石造りの階段を下りて行くと、ろうそくの火だけしか灯りのない、ただっぴろい部屋に出た。

通路の両側に、それぞれ10個ずつの鉄格子の付いた牢獄があった。その牢獄に、大体4人くらいの人が入っていた。みんなぼろぼろの服……というより、汚れた布を覆っているような感じで、顔がやつれている。昔、テレビでよく見たアフリカの難民のようなに見えた。男ばかりで、ひげもじゃの顔をしている。ずいぶん長いこと外に出してもらっていないのがわかる。

男たちは、連行されて行く僕たちを見て、原始人みたいな声を上げていた。それは、「助けてくれ」という意味を含んでいるのか、あるいは女性のアンナを見て興奮しているのか。どちらにせよ、気持ちが悪い。

僕たちは通路の左側の最も奥の牢獄に入れられた。中は、もちろん石造りだ。光がほとんど無いためか、ろうそくの灯りだけで、黒く光っている。じめじめして、清潔感の欠片も無い。天井からは、ところどころから水滴が落ちてきている。その水も、どんよりとした雲のように汚れていた。

僕たちは、そのままの服装で押し入れられた。しかも、伯爵はあの高級感溢れる貴族服のまま牢獄の中にいるので、この場の風景とまったくマッチしない。まあ、そんなことを今気にしても意味が無いのだが。

「くそ、公爵め……！」

伯爵は牢獄の隅に座り込み、僕たちに背を向けている。

「あることないことを言いおって……！」

伯爵は壁に手をたたきつけた。どれほど悔しいのかが伝わってくる。

「……もう少し、考えて乗り込むべきだったかもな」

「えっ？」

壁に寄りかかり、腕を組んでいるヴァルバが言った。国王ルーフアス8世と謁見した際、自己紹介以外1度もしやべらずに冷静に、ことが起こるのを静観していた。

「ステファン卿は元老院の中で、最も権力のある五大老の1人。しかも、魔道大臣という地位に加え、1つの独立機関の最高責任者だ。……国王陛下が公爵に対する信頼の大きさは、あなたに対する信頼に比べると、天と地くらいの差がある。これじゃあいくら真実味のある話をして、陛下は信じてもらえないでしょう」

ヴァルバは、宰相のように冷静に、淡々と説明した。

「……そなたに、そんなことを言われる筋合いは無い！」

伯爵は立ち上がり、ヴァルバをキツと睨んだ。

「なぜですか？ 自分が公爵に劣っているということを、認めたくないからですか？」

見下すような口調で、ヴァルバは言った。伯爵の体は怒りで震えている。僕はそれを見て、ヴァルバに言った。

「お、おい、ヴァルバ！ そんな失礼なこと……」

僕が止めようとしたがヴァルバは無視し、続けた。

「あなたは無鉄砲すぎたのですよ。そもそも、公爵はある程度のことを想定するはずだと……準備をしているはずだと、我々は考えなければならなかった。そうじゃないですか？」

「……だが、そなただって何も案を出さなかったではないか」

「まあ、そうですね。しかし、私としてはここまで想定範囲内……」

「ですがね」

伯爵の皮肉を、ヴァルバは笑って答えた。

「想定内だと？ それはどういう……」

「陛下の信頼篤いステファンを、あの場でいくら真実を述べようと

陛下は信じてくれない。これは明白だ。ならば、証拠を掴めばいい」  
ヴァルバは淡々と説明していた。

「証拠つつつても、どうやって？」

「僕は首をかしげながら訊ねた。」

「そりやもちろん、奴の本拠地に行くんだよ」

「それって……呪術研究院ですか？」

「アンナが言うと、ヴァルバはうなずいた。」

「呪術研究院は王城の深部にある。外部から侵入するのは、難儀な話だ。……なら、内部から侵入すればいい。だから、まずは王城に入ればいってことさ」

「まさかそなた……わかっていて、何も言わずに大人しく……」

「さあ？ どうでしょうか」

伯爵は唾然としていた。ヴァルバがそこまで考えていたとは……  
さすがの僕も驚いたよ。

「……王城に入れたのはいいけど、こっからどうすんだよ？ 牢獄  
ん中だし、なんもできないぞ？」

「そんなことくらいわかってるよ。……宰相さ」

「……宰相？」

宰相といえば、あの強気の公爵を簡単に御していたような。

「これは俺の憶測に過ぎないが……宰相は伯爵の仰ったとおり、ス  
テファン卿と仲が良いんだろうな。……表面上は」

と、ヴァルバはニヤツとした。

「それはどういう意味だ？」

伯爵がすかさず訊ねた。

「さっきの謁見の際、ステファン卿はリサの書状を早く処分した方  
がいいと言った。しかし、宰相は自分に読ませてくれと言った。……  
ステファン卿はあの書状が、自分にとって害を成すものだと思う  
たんだろう」

まあ……冷静に考えれば、そうかもしれないけど……。

「宰相が公爵と仲が良いのなら、彼を失墜させるようなことはしな

いはず。聡明と誉れ高い彼なら、わからないことではない。わかっておきながら、書状を処分することを拒んだ。ということは、彼の中に……なんらかの計画がある……と俺は感じた」

「計画……？」

僕は首をかしげた。

「いつも親しく、ステファン卿がすることに目をつむっていたはずの宰相が、今回だけ公爵とは意見が食い違った。いや、それを表面に表した。そこがポイントなんだよ」

ヴァルバはだんだん得意になってきたのか、顔が微笑み始めた。

「たぶん、あの宰相はとんでもなく頭がきれる人間だ。俺たちという得体のしれない奴らが、ステファン卿のことを白日の下にさらそうとしている。きっかけを得たのならば、行動を起こすに違いない」

ヴァルバは自信満々に言った。

「……お前つてば、結構冴えてんのな」

「……結構つて言っな」

だって、あのヴァルバがそこまで考えていたとは……ちょっと信じがたいんだよなあ……。

それにしてもあの宰相、何か企んでいる……か。けど、宰相つてどういった人なんだろう。

「レオポルト宰相はどういう人なんですか？」

伯爵に訊ねた。

「あ、ああ。……昨日も言ったが、宰相は王都の南にあるヴィンラントというところを治める公爵で、本名はレオポルトⅡヴァッシュという」

彼はまだ36歳らしく、史上最年少で宰相に抜擢された賢人である。

「先代ヴァッシュ家当主が22年前に逝去し、わずか14歳のレオポルト卿が跡目を継いだのだ。当時はそれに反対する人もいたが、卓越した知能を持ち、兵法、政治学もすでに熟知していたため、1

7歳ぐらいの頃には文句のつけようの無いほどの貴族となっていた」  
それで国王に気に入られ、20歳で貴族議員となり、翌年には王国第6師団団長となり、少将となった。これら全て最年少だそうだし、そして、24歳の時には元老院に入り、30歳のときに大将にまで上り詰めたいらしい。

「彼が32歳のとき前宰相が急死したため、陛下の指名により、最年少で宰相に就任したのだ」

「……めちゃくちゃなエリートなんだな……」

まさに、エリート街道まっしぐら。

「いずれ爵位としては最高の「大公」になるとも言われる。……私と同じ年なのに、脱帽するよ」

えっ……伯爵って、36歳なんだ。ていうか、あの若そうな宰相と同じ年？ 失礼だけど、見えねえなあ……。

「……そういえば、彼の爵位を受け継ぐときも争いがあったんだが、それを鎮めたのがダグラス様だったんだよ」

その時、アンナに反応があった。さっきまで、ずっと落ち込んでいたのに。

「ああ。ダグラス様と先代ヴァツシュ家当主であるマクシミリアン卿は、プライベートでも仲がよろしかったこともあり、ダグラス様は宰相の爵位継承に反対する一派を陛下のお力を借りて、一蹴したのだ」

つまり、今の宰相があるのもアンナのお父さんのおかげかもしれない、ということか。その時、僕はふと思ったことがあった。

「……あのさ、もしかして、宰相はそのことで、ああ言ってくれたんじゃないの？」

「……？」

「宰相はアンナがダグラス卿の娘だと知って、伯爵を助けるようなことをしたんじゃないの？」

「……だが、宰相は陛下に反対することはなかった」

伯爵が、視線を落しながら言った。

「だけど、リサの書状を受け取ってくれたじゃないですか。あれこそ、僕たちを見捨てていない証拠じゃないですか？」

宰相は公爵の言分を退け、書状を受け取った。あのときの公爵の焦りようと、宰相のあの強い言動。ヴァルバの言う通りなら、きつと何かが起こる。……今は、それを信じるしかない。

どのくらい時間が経っただろう。この牢獄の中にとると、時間の感覚が全く無くなっていく。外の光が差し込まないから昼なのか、夜なのかということさえ確認することもできない。

時間を計る手段としては、天井から滴る水滴の数だ。1つ落ちてから次の水滴が落ちるまでは、大体5秒くらい。だから、この水滴が落ちる数を数えればどのくらい経ったのか計算できると思うけど、10滴くらいで数えるのを止めてしまった。いくらなんでも、めんどくさいよ。

あと、お腹がすいたな……。昼は伯爵の家で食べたのに。もしかして腹が減るほど時間が経っているということなのか？ だとしたら、もう日が暮れ始めている頃かもなあ。

だけど罪人とはいえ、飯くらい出してくれればいいんじゃないのか？ 罪人を餓死させるなんて、聞いたことないぞ。

ルテティアという国家に対しての文句を考えると、誰かが階段を下りてくる音がした。カッーン、カッーンと、静かな牢獄に響く。

そして、誰かと話している。たぶん、番人と話しているんだろう。僕たちがいる牢獄が一番奥なので、全く見えない。

僕たちはみんなして鉄格子に顔をつけ、誰がいるのか見ようとしたが、この角度では見えない。

そして会話が終わったのか、話し声がしなくなり、また歩いてくる音が聞こえてきた。それはだんだんと、こっちに近づいてくる。

他の牢獄にいる人たちが、鉄格子にしがみついて叫んでいる。中には、「ここから出せえ!!」というやつもいた。悪さしたからここにいるんだろ、と思ったが、悪さもせずに牢獄に入れられることもあるか。

歩いてきた男の影見えてきた。誰だろうと鉄格子の方に近寄って、外をのぞく。

……宰相!?

僕たちはみんな驚愕した。どうして、王国で最も高い地位にいる男が、こんなところに?

「さ、宰相、どうしてここへ!？」

驚きながらも、声は落ち着いている伯爵だった。この地下牢が大體静かだから、大きな声を出すわけにもいかないだろう。

「……君たちに、ある話をしに来たんだ」

宰相はかがみ、ヒソヒソ話をするかのような体勢になった。

「ステファン卿は、君たちを処刑するつもりだ」

「な、なんだと!？」

伯爵の声が一気に大きくなった。

「しょ、処刑するほどの罪なんですか？」

僕はいきなりのこととで声に変に裏返ってしまった。

「ハハハ……実際は、法律に照らせばカルヴァン殿は免職、爵位を最低の男爵に格下げ。君たち3人は、片足切断程度かな」

さらりと言いのける宰相に恐怖感を抱いた僕だった。片足切断って……おいおい。

「だけど、それはあくまで法律に書かれてあることだ。たとえ軽い罪であっても、陛下が死刑と仰れば死刑になる。……私が言いたいのは、公爵が陛下に進言し、君たちを処刑にしようとしているということだ」

今の日本とは違い、司法機関は誰かに干渉されてしまうんだ。そ

れが国の首領であれば、どんな罪でも覆ってしまう、ということか。……だが、そんなことを私はよしとはしない」

宰相は、横目で何かを睨んでいた。「陛下をたぶらかし、不気味な実験を『呪術研究院』で行い、さらにはダグラス卿のご息女を手にかけたとか。……国の最高政務官として、1人の人間として、犯罪に手を染めるステファン卿を、これ以上許すことはできない」

宰相は、力強くこぶしを握っていた。

「……お言葉ですが、宰相は公爵と仲がよかったのでは？」  
ヴァルバが訊ねた。

「昔から、陛下はステファン卿を信頼なされている。宰相である私よりもだ。……そして、ステファン卿は自分の提案で『呪術研究院』という独立機関を設立させ、最高責任者に就任し、国の経費を使い、好き勝手なことをしているという話を聞いた。私はいつか奴を告発するために、彼と親しくしていたのだ」

ヴァルバの言ったとおり、表面的な親しさでしかなかったわけか。だから、先ほどの謁見の際、閣下はあのような発言をしたのか……

伯爵がそう言うと、宰相は小さくうなずいた。

「けど、どうして宰相は今回公爵と意見を食い違っようにしたんですか？」

「ソラ君、わからないか？ ……時が来たと思ったのだよ」

「時……ですか？」

すると、宰相はニヤツとした。

「そう、ステファン卿を地の底に落とす、絶好の時というのがね」  
宰相はなぜか、僕たちにウィンクして見せた。

「そして、リサの書状……読ませてもらったよ」

「……なんて書いてあったんですか？」

僕は鉄格子に詰め寄り、訊いた。

「……『信じる事ができない話かもしれませんが、『ガイア』から来た住人の言うことは、全て真実です。彼には私の知っていることを話しました。私が今まで嘘なんてついてきたことが無いということを知っているのならば、その男が言うことも嘘ではないと、分かるはずですよ。たぶん、これを最初に読むのは賢人と名高い、レオポルト宰相でしょう。賢いあなたなら何が真実で、何が偽りなのかわかるはずです。陛下をたぶらかす奸臣をどうにか抑え、『インドラ』の脅威を陛下にお伝えください。』……とね」

そうか……リサはステファン卿のやっていることを知ってたんだ。禁忌を犯していることも、国王をたぶらかしているのも。

そして、自分の書状がどこに渡るのかも、わかっていた。もしかしたら、あいつはこうなることを予想していたのかもしれない。

「……宰相さんはリサさんの書状の内容、全部覚えたんですか？」  
アンナが訊いた。たしかに、書状の内容を全部しゃべった感じだったか……。

「ん？ まあ……私はその程度の文章ならば、1度見ただけで覚えることができるんだよ」

「……マジですか」

瞬間的に見たものを、完全に覚える能力か……。そんな能力を持った人間がいると、テレビか本で見たことがあるような、ないよな。

「それはさておき、私がここに来たのは君たちにあることをしてもらいからだ」

「あること……ですか？」

「君たちをここから脱走させる。そして『呪術研究院』に向かい、その情報を手に入れてきて欲しい」

宰相は、チラッと出入り口の方を見た。

「……ステファン卿は、先ほど王都の近くにあるクテシフォンに向かった」

クテシフォンは、ステファン卿の領土だったはず。

「その隙に、君たちは『呪術研究院』が置かれている、地下魔法研究所へ向かってもらいたい」

宰相はさつきよりいっそう、ひっそりとした声で言った。

「……けど、見つかるんじゃないですか？」

「大丈夫。私の読みでは、ステファン卿が戻ってくるのは明日のはず。見つかったら、その研究員は満足に魔法さえ詠唱することもできない、ただの研究おたくばかりだから、倒してしまえばいい」

倒せばいいって……笑顔で言うことじゃないでしょ、と心の中で突っ込みを入れてみる。

「でも、上手くいくでしょうか？」

アンナが言った。

「さあ？ どうだろうな」

「さ、宰相、それはあまりにも……」

「……やってみなきゃ、わからないですよ」  
みんなが僕の方を向いた。

「宰相の仰ったことを信じましょう。やる前から、あきらめてはいけないんですよ。つか、証拠を掴むためにここまで来たんだ。ここで、ポーっとなんてしてられませんかよ」

行動する。何が何でも、行動する。迷ってもいい、悩んでもいい。自分がやれる精一杯のことをすればいい。きっと、結果は付いてくる。自信を持ってそう思える。

「……ソラ君、君は見込みのある男のようだ」

宰相が含み笑いをしながら言った。

「私の部下を使おうとしても、すでにステファン卿の兵士が監視に来ていて動かすこともできぬ。だから君たちに頼もうと思ったのだ。……それに、私の恩人である、ダグラスさんの娘を、このような汚い牢獄に入れておくことはできない。かわいらしいからね」

あんなら、アンナってば赤面。宰相にしては、ユーモラスのある人だ。

「……私がお父さんの娘だと、信じてくれるんですか？」

アンナはうれしそうな顔をして、言った。

「もちろんだ。君は嘘をつくような人ではない。……それを、君の仲間がよく知っているのではないかね？」

アンナの顔に、満面の笑みが広がった。その目に、涙がたまっていた。

21章：深淵の研究所 小さな亀裂、闇の咆哮に（前書き）

一部、残酷なシーンがあります。  
苦手な方はお気を付けください！

## 21章：深淵の研究所 小さな亀裂、闇の咆哮に

宰相は、僕たちに武器を渡してくれた。僕と伯爵は剣。ヴァルバは槍。アンナは、唯一扱える弓。僕の剣は、宰相が兵士に没収されたものをわざわざ持ってきてくれた。

どうやら、宰相は牢獄の番人に多額の金を渡し、脱走を見逃してくれるようにしてくれたらしい。僕たちが牢から出て、出入り口から出るとき、引き止めようとしなかった。しかし、他の囚人たちが出て行く僕たちを見て、大声で叫んでいた。たぶん、「お前たちだけ卑怯だぞ」みたいなことなんだろうな。

地下牢から出ると、同じような部屋に出た。牢に連れてこられたときは、目隠しをされていたので、この部屋は見えていない。あちこちに武器が置いてあることから、兵士たちの部屋なのかもしれない。奥の部屋からは、誰かの叫び声がする。もしかして、拷問でもしてるんだろうか。そう考えると、怖くなってきてしまった。もし、宰相が来てくれなかったら、僕も拷問をされて、殺されるかもしれない。かっただ。

どうしてか、この部屋には兵士がいなかった。宰相が言うには、この時間帯は兵士たちの訓練時間なので、待合室には誰もいないのだという。いるのは番人をする兵士だけで、この兵士さえ買収しておけば、脱走なんて軽いものらしい。……そんな大事なことをばらしてもいいのかしら……なーんて思ったりするけど、それもこれも全部馬鹿国王のせいだっつーの。

その兵士たちの待合室から階段を上り、出てみると、さっきまでのはじめじめした感じのない部屋に出た。1階に出たらしい。

すぐそのドアを開けると、中庭、とでも言うのか、壮麗な風景

が広がっていた。色とりどりの花が咲き誇り、大理石の通路と壁に、青く光る魔法石。中央にある噴水が、ランディアナにあったものより遙かに大きく、派手なものだった。建物の中とは思えない。

「……おや？ ここは中庭だったか」

宰相が辺りを見回し、言った。

「宰相……地下魔法研究所は、ここから行くと、遠いのでは？」

伯爵が言った。苦笑いしている。

「え……？ 間違えたんですか？」

「ソラ君。私は方向音痴でね。慣れ親しんだ王宮でも、迷ってしまったのだよ」

ニツコリと微笑んで宰相は言った。そんな笑顔で言われても困るのだが。

「しかし、地下魔法研究所に行くにはここからの方が安全だ」

「なんでですか？」

「正規ルートがあるんだが、そこは警備が厳重でな。今回は、非常用の出入り口から入る」

「非常用……？ そんなもの、あったのですか？」

伯爵が訊ねた。

「元老、宰相、王族のみ知っている秘密の出入り口がある。それは緊急用のためのもので、地下に通じるようになってる」

宰相はゆっくりとうなずき、続けた。

「地下には軍事会議室や魔法研究所などがある。そのルートを使えば、行くことができるのだよ」

「けど、方向音痴って今さっき言いましたよね？」

「……ここからも行くことはできるのだが、少々、遠回りする羽目になる」

「だ、ダメじゃないですか」

宰相は鼻先をポリポリとかいていた。

「まあ、こちらの警護兵たちは君たちが牢獄に入れられたということを知らないから、逆に好都合かもしれん」

本当かなあ。微妙に、不安感が心の中を流れた。

すると、一人の兵士がこちらに来た。僕たちは慌てて隠れようとしたが、宰相がそれを止めた。「ここは任せとけ」みたいな顔をして「おや、これは宰相様。どうなされたのです？」

何も知らないかのように、兵士は言った。

「少し、王宮の中を散歩しようと思ってね。この中庭はとても美しいから、ついつい見とれていたんだよ」

「そうですか。…そちらの方々は？」

兵士は僕たちに目を向けた。

「私の部下たちだ。初めて王宮に来たから、この中庭も見せてあげようと思ってな」

「そうでございますか。…陛下に見つからないようにしてくださいよ？」

「はは、わかっているよ」

「では、失礼致します」

兵士は一礼して、歩いて行ってしまった。

「ほら、大丈夫だろ？」

「ハハハ……」

みんなは顔を合わせ、苦笑いをした。考えていることはたぶん同じだ。宰相は意外と適当な人なんだ、と。

中庭は王城の「王の間」の奥にあるらしく、ここは本来、大臣や宰相、將軍格の人たちでないと入れないらしい。さっき、兵士が陛下に見つからないようにと言ったのは、そういうことなのだ。

反対側のドアを開け、大きな通路をまっすぐ進み、階段を下り、またドアを開けると物置部屋みたいな場所に出た。

「宰相、ここは？」

伯爵が言った。

「ただの物置か？」

「いや、ここに隠し通路がある」

宰相は左の隅に置かれている木箱をどかし、床に敷き詰められたレンガに手を当てた。すると、そのレンガがへこみ、左手側の壁に通路の入り口みたいなのが現れた。

「こ、これは？」

「これが、その非常用の出入り口につながる通路だ」

非常用の通路につながる道は、この王宮に20個くらいあるらしい。いろんな場所にいても、いざというときになったら使えるように、いろいろな場所に作られたとか。

通路の中にみんなが入ると、宰相は入り口の方に戻り、通路の壁にあるレンガを押した。すると、今度はさっき開いたところが閉まった。どちらからでも、開け閉めできるようにできているらしい。

しかし………こういう原理なんだろう。この時代の技術にしては、あれだしなあ………。

通路は最初はほぼ下り坂で、どんどん下に降りて行った。途中で、上に向かう道があったが、あれは出口に通じているらしい。

右に、左に回って行くと、枝分かれした場所に出た。

「あみだくじか？」

「ソラ………違うと思う」

ヴァルバはため息を漏らした。

「それぞれの場所に通じる道だろう。この中に、魔法研究所に通じる道があるはずなんだが………」

宰相は辺りを見回し、何かを探している。非常用の通路だからか、通路や壁はちゃんと舗装されていない。ところどころ、崩れかけているところもある。

「………ふーむ………」

宰相はかがみ、地面を見渡した。地面はあの地下牢の中のように、真っ黒でじつとりとしている。

「………これか」

宰相が何かを見つけた。

「何があっただんですか？」

アンナも前かがみになり、訊いた。

「ここ、わかるかい？」

宰相が指したところに、何かが刻まれていた。暗くて見にくいが見えるようにも見える。

「これは……古代文字ですね？」

「さすが伯爵」

2人は顔を合わして、笑顔をして見せた。しかし、僕たちにはわからない。

「古代文字ってなんですか？」

「古代超高度文明を築き上げた、ティルナノグ帝国の末期に使用されていたと云われる文字のことだ。王侯貴族、幼い頃の英才教育でこの文字を習わされるのさ」

「……じゃあ、これはなんて書いてあるんですか？」

僕は指差した。そこには、筆記体のようにスラスラと書かれていた。

「『研究』と書かれている。きっと魔法研究所のことだ」

「じゃあ、この先にあるかもしれないってことですね？」

「……ああ」

僕たちは薄暗いその通路を進んだ。最初の通路よりも幅が狭い。

2人は入れるかどうかの幅だ。

さつきとは違い、平たい通路だった。ただ少しだけ曲がっていて、それが延々と伸びている。

「こんな通路、いつ作られんたんだろう」

もしものことを考え、アンナは最も安全な真ん中を歩かせた。前を宰相が、後ろをヴァルバが歩く。そして、僕と伯爵がアンナを挟む形で歩いた。

「……ルテティアが、ソフィア教皇より王位を賜ってから作られたものだったと思うが」

宰相が思い出すように言った。

「ということは、600年前……だったっけ？」

「ソラ、よく覚えてたな。おりこうさん」

後ろで、ヴァルバが笑いながら言った。

「う、うるさいな」

「……まだルテティアが大国ミッドランドの諸侯の1つでしかなかった頃、当時の都だった今の王都は、今では想像もつかないほど寂れていた都市だったそうだ」

ミッドランド帝国による、厳しい支配政策。それに加え、自然災害による食糧難。そのため、ミッドランド帝国の特権階級の人間たちしか贅沢はできない時代だったらしい。

「時の魔王と謳われたアルヴィス1世による、アルカディア大陸侵略。それに伴う、民に対する増税。……国民の怨嗟の声は天に届き、魔王は暗殺された。そして、ルテティア公ウイリアム1世が拳兵し、ミッドランドを滅ぼした。その後、初代国王となった彼はミッドランド帝国のように攻められたときのことを考え、この隠し通路を作ったとされる」

「……王都が攻め滅ぼされても、国の中枢を担う人たちが生き残れば、国家を再興できる、という考えだったということか」

「この通路のことを知っている人たちの地位のことを考えれば、そうなのかもしれない。」

通路をずっと進むと、ようやくドアが見えてきた。

宰相がゆっくりとドアを開け、中を確認する。

「……どうやら、こここのようだな」

地下魔法研究所。伯爵が言うには、独立機関『呪術研究院』の置かれている場所で、研究・実験は全てここで行われているらしい。

「じゃあ、ここでどうすればいいんですか？」

僕は宰相に訊いた。

「今まで、ここに部外者が入ったことは無い。先月、干渉可能な法案が可決され、陛下にも承認が得られたとはいえ、即日施行という

わけにもいかず、未だ誰も入ったことが無いのが現状だ」

じゃあ、僕たちが初めて足を踏み入れるということか。

「それじゃあ、どこに研究や実験の結果が記されたものがあるかもわからないんじゃないか……？」

不安を感じながら、僕は言った。

「……あるとしたら、ここ你最も奥にあるステファン卿の執務室だ」  
「こんなところにあるんですか？」

伯爵が驚いたように言った。

「普通、大臣の執務室というのは王城の中にあるものなのだ。だが、ステファン卿は陛下に嘆願して、執務室を自分が責任者を務める魔法研究所の奥に設置したのだ」

つまり、誰にも研究・実験の結果を見せないようにするために、そういうふうにしたということか。

「奥ってというのはけっこう大雑把だけど、どこら辺か把握できないよりかはましだな」

ヴァルバが苦笑いしながら言った。

「……さて、諸君。ここからは、君たちだけで先に進んでもらう」  
「宰相さんは来ないんですか？」

アンナが言うと、宰相はフツと微笑んだ。

「私はこれから、君たちの処分に関する会議に出席せねばならないのだ」

僕はあんぐりした。な、なんじゃいなそら……。

「その場に私がいないと、怪しまれるだろう？」

「まあそうですね……」

「ソラ君、自信がないような顔をするな。君には、仲間たちが付いているじゃないか」

仲間……か。その時、初めて実感した。

自分を支えてくれる人。自分を救ってくれる人。

友であり、仲間。和樹や啓太郎、美香……修哉……そして、海。

「……そうでした。宰相、これまでありがとうございました」

僕は一礼した。

「頼むぞ。君たちがステファン卿が罪を犯したという証拠を見つけなければ、この国は、いずれやつに食いつかされてしまう」

「……わかりました」

伯爵が大きく一礼した。

「それと、ヴァルバ君」

「……なんでしょう？」

「ソラ君と、アンナさんを守ってやってくれ」

宰相はヴァルバの胸に手を置き、言った。

「大丈夫です。任せてください」

ヴァルバはニコツと笑った。

「……アンナさん。君のお姉さん、リノアンさんが見つかることを、私も心から祈っている」

「……ありがとうございます……」

そして、宰相はもと来た道を引き返して行った。

地下魔法研究所。

今まで、神秘のベールに包まれてきた『呪術研究院』の人たちが研究や実験を行っているところである。

非常用の通路から入ってみると、そこは地下なのに明るい場所だった。巨大な空間に、変な機械みたいなものも置かれている。こんな時代に、こんなものがあるとは到底思えなかった。

仕事をしている人たちは、みんな白い服を着ていてマスクもしている。病院の看護師や、医者みたいな格好だ。魔法のことを研究しているのなら、みんな黒い衣を着ていると思っただけだ。ほら、錬金術……とかなんかを研究する人とか、変なドリンク作ってる魔女とかさ。

細い通路を見つからないよう、かがみながら進み、別のドアを探

す。この細い通路はまるで水路のように細く、いろんな場所に張り巡らせてあった。

突き当たりを左に曲がると、一つのドアがあった。

ゆっくりとドアを開け、中をのぞくと、今度は広い通路があった。

「……あなたたち、誰ですか？」

後ろから、人の声がした。僕たちは一斉に後ろに振り返ると、白衣を着た女性が立っていた。

「この施設の人じゃないですよね……？」

「……ちっ」

ヴァルバが彼女の背後に回り、両手を手で押さえた。すると、伯爵が片手で彼女の口を押さえた。彼女に、剣の先を向けて。

「君は、この研究員かね？」

伯爵が、冷たい口調で彼女に言った。

「……！！」

「うなづくかどうかしろ。そうしないと……わかるね？」

剣先をチラつかせ、彼女を脅す。けど、殺す気は無いと思う。…

…たぶん。

女性は小さくうなずいた。

「ならば、この最高責任者の執務室もわかるだろう？ どこだ？」

女性は震えながら、怯えている。

「……この通路の奥か？」

ヴァルバが訊いた。すると、女性が小さくうなずいた。

「……よし、わかった」

すると、ヴァルバが彼女の首筋の辺りにチョップをした。女性はそのまま力無く、ぐったりとして倒れた。

「ヴァ、ヴァルバ？ 何を……？」

「気絶させただけさ。殺す必要なんてないからな」

いちおう、僕たちは彼女が見つからないようにすぐその部屋に

入った。

部屋に入ると、多くの書物が積み重ねられていた。題名には、ほとんど『魔法』の二文字が書いてあった。

「……ここの書物は、別に研究には関係ないな」  
ヴァルバが無造作に取り出した本を1度開き、すぐに閉じてそこからへんに放り出した。

女性をその部屋に置き、僕たちは通路に出た。さっきまでの薄暗い感じではなく、どこかの病院のように明るかった。壁、床、天井が全部真っ白ということもあるが、天井に備え付けられている魔法石が、電気のように光っているからだろう。

僕たちは少し走りながら、通路を進んだ。不思議と、通路には誰もいなかった。

「……誰もいないな」

伯爵が言った。

「たしかに。……誰もいないというのはありがたいけど、それはそれで、気味が悪いですね」

僕は横目で辺りを見渡した。

とにかく、通路を走った。

すると、突き当たりにドアが見えた。見るからに、他の部屋のドアとは異質のドアだった。ちょっと豪華というかなんというか……。伯爵が静かにドアノブをつかみ、ゆっくりと引く。

開けてみると、部屋の奥に大きな机が置いてあり、その上にたくさんさんの書物や書類が置いてあった。そういう机が置いてあるところから、ここはたぶん、ステファン卿の執務室だろう。

「……ここか」

伯爵が辺りを見渡しながら、静かに言った。

壁には大きな本棚が置いてあり、そこには魔法に関する本が、溢れんばかりに置いてあった。1つ、手にとって開いてみたが、わけのわからないことばかり書いてあったので、すぐに閉じた。

「ここに置いてあるものを見て、結果が書かれたようなものはないものも無いな」

「……そうですね」

いくら探しても、それらしきものは見つからない。

「普通、責任者が保管したりするもんじゃないのかな」

「別の場所か？」

伯爵がかがみながら言った。

「どうでしょうね……」

ヴァルバはため息をつきながら言った。あるもんだと思って来てみれば、何も無いときの虚脱感は、分からなくもないけど。

そうしてあきらめかけたとき、僕がある変なところを見つけた。

机の後ろの壁にうつすらと、線が見えたのだ。長方形で、高さは僕の身長くらいだろうか。いや、そのドアと同じような形だ。

もしかして、もしかするかもしれないので、その壁を恐る恐る押してみた。すると、ドアくらいの大きさに壁がへこみ、音も無く地面に沈んでいった。

「あ、あれ？」

突然のことに、僕はその場に硬直した。そして、壁が消えたその先に広い空間が現れた。

その奥には、大きな部屋が広がっていた。少し、うつすらとしていて何かが見えるが……はつきりとは見えない。

「……何したんだ？ ソラ」

呆然と立ち尽くす僕に、ヴァルバが近寄ってきた。

「ただ、ちよつと壁を押ししてみたら、こんなことに……」

「これは、非常用の通路の開閉のシステムと同じようなものか？」

そうか……くぼみみたいな所を押しすれば、隠し扉が開く仕組みなのか。

「隠し部屋ってことは、公爵にとって他人に見られたくないものが

「この中にあるって事ことだろ」  
「……入ってみよう」

薄暗い部屋に入ると、あの王の間くらいの広さだろうか。かなり広い。暗くてよく見えないが、巨大な機械みたいなものが置かれている。……人が入れるくらいのカプセルのようなものが付いてあるのが見えた。所々にボタンやら、何かを入れるような穴がある。

「伯爵、これってなんなんでしょうか？」

僕がそう言うと、伯爵は機械を見上げながらこっちに来た。

「……こんなもの、初めて見た。しかし、暗いな……。灯りでもないと、はつきりわからない」

「じゃあ付けてあげましょう」

いきなり、灯りが付いた。天井から、魔法石の光が出てきた。突然の光の出現に、目をつむってしまった。

ゆっくりと目を開けると、機械が姿を現した。そして、入り口の方に3人の男が立っていた。その中に、見たことがある人物が混ざっていた。

「……ステファン卿！！」

伯爵が叫ぶ。そう、ここにいるはずのないクテシフォン公爵がそこに立っていた。

「ど、どうしてここに……？」

僕がそう言うと、公爵はほくそ笑んだ。僕はやつその顔が大嫌いだ。嫌悪感を漂わせる。

「どうして、か」

クツクツクと笑いながら、公爵はなかなか続きを言わなかった。

「お前たちのしようとしていることなど、全てお見通しなんだよ……」

「……なんだと!？」

伯爵がダンツと片足を踏み出した。

「牢に入られたとしてもいざ脱出し、ここに忍び込んでくるだろうとふんでいたのだよ。だから、私が自分の領地であるクテシフォンに帰ったと、噂を流したのだよ。きつと、君たちを助けようとする輩がいるはずだと思っていたから、この情報は絶対に君たちに伝わりと計算してね……」

公爵は、金色のひげをいじりながら続けた。

「……すると、まさか投獄された初日に脱走するとはな。どうせ、レオポルトが手助けしたのだろう」

奴が現れた瞬間、ほんの少しだけ宰相が何かをしたのかと思っただが……公爵の言動からすると、宰相は関係ないみたいだ。……宰相、疑ってすみませんでした。心の中で平謝り。

「きやつめ、私に協力するなどと言いながら陛下の前で露見の危険性があるようなことを言いおって……」

どうやら、宰相が公爵に表面的に付き合っていたことを本人は全く気付いていなかったらしい。へん、ざまあみさらせ。

「……だが、あんな小童なんぞどうだっていいわ。いずれ、何らかの嘘の失態でも陛下に進言し、処刑してくれる」

カツカツカと笑いながら、公爵は言った。

「……それで？ 僕たちをもう1度牢獄にでも打ち込むつもりか？」

「ハツハツハ。そんなことはない」

公爵はニヤニヤしながら、僕たちを見渡した。

「……君たちは、この部屋を見て何か気付かないかい？」

僕たちは部屋を見渡した。といっても、この部屋にあるのは巨大な機械みたいなものが、4つ置いてあるだけ。

……機械？

「この機械、なんなんだ？ ……ここで、何をしていた？」

僕がそう言うと、公爵はまた不気味な笑顔をして見せた。

「ソラ……君だったかな？ そうだよ。私はここであることをしていたのさ……」

「ある、こと？」

「……『呪術研究院』が設立された理由を、君たちは知らないだろう？ カルヴァン卿、そなたさえも」

「……」  
伯爵は何も言わなかった。

「いや、本当のことを知っているのはワシを含め、数人しかおらぬがな……」

陛下さえも知らないと、また笑い出した。

「ここは噂で知られているように、古代魔法や古代技術の復活を達成するために設立された場所だ。……しかし、それは表面的な理由だ……」

公爵はゆっくりと歩き出し、機械のそばに立った。

「『永遠の巫女』を研究するためだろ？」

ヴァルバは大きくも、冷静な声で言った。

「……ほう、知っていたか……」

公爵はあの微笑みで、ヴァルバを見つめる。

やはり……か。こいつがアンナのお姉さんや、空を……！

「……カルヴァン、貴様の言を毎回のように退けていたのは、インドラのことが陛下に知られ、『永遠の巫女』のことを捜査されるのを防ぐためののだよ」

「何？」

「もし、貴様が陛下に進言するようなことがあれば、どうしようかと思っていたが……陛下はほとんど貴様の言を信じてはいなかった。あんな簡単に、ワシの言葉が信用されるとはな。所詮、貴様のこと

などただの杞憂だったか」

公爵の言葉の中に、伯爵をあざ笑っているニュアンスが含まれていた。伯爵はそれを感じ取ったのか、怒りで体が震えている。

「貴様、侮辱するか!!」

「そういきり立つな……。ワシの話は、まだ終わってはおらんのだ」  
伯爵を制止するかのようになり、公爵は彼の前に手を広げて差し伸ばした。

「ワシは、インドラの者たちと協力をして暗黒魔法と禁じられた魔法、そして伝説の天空魔法の復活を目指した」

その言葉を聞いて、僕はあることを思い出した。

「まさか、インドラが暗黒魔法を扱えるのはお前がここで秘密の研究をしていたからか？ 暗黒魔法を復活させ、奴らが扱えるようになったのも、お前の仕業なのか!？」

僕の大きな声にも、公爵は全く動じていない。

「……そうだと言ったら？」

公爵は冷やかに言った。

「絶対に許せない！ 暗黒魔法は少しでも喰らえば、必ず死に至らしめる最悪の魔法だぞ!？ 大勢の人が死ぬかもしれないんだぞ!？ それがわからないのか!!!？」

「それがどうした？」

「!?!」

公爵はサラッと言った。思わず、僕は目を見開いた。

「くその役にも立たない人間なんぞ、死んでもよいではないか。世界には大勢の人がいる。数え切れないほどの。その1%ほどの人間が死んだとしても、私には何の関係も無い」

公爵は吐き捨てるように言った。

「お前……本気で言ってるのか？ 本当に、そう思っているのか!？」

「何を言っている？ お前にこそ、何の関係も無いではないか」

「関係なくなんか無い！！」

僕はすぐさま反論した。

「……関係無い。なぜなら、お前は『ガイア』という別世界から来た人間だろう？ この世界の人間がどうなるかと、知ったことではないのではないか？」

公爵は「すつとぼけたことを言うな」という感じの顔で、僕を見る。それが……僕は信じられなかった。当たり前だが、通じていないのだから。

「ワシだったらそう思うぞ？ 『自分はこの世界の住人ではないから、この世界の人がいくら死のうとどうだっていい』と思うがな」

「ソラさんはあなたとは違う！！」

突然、後ろからアンナの大きな声が聞こえた。

「ソラさんは、人を殺すことなんて簡単にできる人ではないんです

！！」

「……何？」

初めて、公爵の顔から笑みが消えた。

「あなたとは違う。あなたみたいな、人の命の重さの重要さもわからない人とは違うんです！！」

アンナの大声が、この大理石の部屋に木霊する。

「何を言う。国民を守る我々が、どうしてそこらにいる人間のことを心配せねばならないのだ？ 命の重要性？ なんだ？ それは。

国民の命など、上級貴族である私の命に比べればほこりに等しい」

僕は頭を振った。人の言葉とは思えない。

「ステファン！ 同じ貴族として、貴様の言動はおかしいぞ！？」

伯爵が叫んだ。

「どうしてだ？ 何がおかしい？」

「……貴族の命は、庶民と同じ価値を持っている！ いや、そういう価値で言い表せるものではない！ 何よりも尊い、何よりも大切なものが命なんだ！ どんな人間であれ、その重さは変わらない

「ハッハッハ。どこかの教科書にでも書いてあるようなセリフだな。到底、同じ貴族のセリフとは思えんな。……いや、伯爵である貴様なんぞ、公爵であり魔道大臣であるワシに比べると、庶民と同じ価値しか持たぬか……」

つまらなさそうに、公爵はため息をついて言った。

「貴様あー!!」

伯爵は剣の柄を握り、飛び出した。向かう先は、公爵だ。

「ステファン!!」

公爵の名前を叫びながら、突進して行った。

「……屑が」

公爵は変な構えをして、何かを言い始めた。

「魔の淵より出でし、忘却の炎よ。我が敵を塵と成せ」

「伯爵！ 伏せろ!!」

突然、ヴァルバが叫んだ。すると、公爵の手が光り始めた。

「……ヴォルカニック!!」

公爵の手からほとばしる光は赤い光となり、何かが出てきた。それは、真つ赤な炎だった!

炎は渦を巻きながら、走って行く伯爵とぶつかるように飛んで行った。そして、伯爵はそれを避けることができず、真正面から受けてしまった。

「ぐああああ!!」

伯爵はそのまま炎に押されていき、壁に叩きつけられた。渦を巻いていた炎が消えても、伯爵の体に燃え移った炎は消えなかった。

伯爵は叫びながら床をゴロゴロと動き、火を消そうとするが、なかなか消えない。僕たちは駆け寄り、熱いのも我慢して消そうとした。そして、何とか火を消すことはできたが、伯爵の服は焼かれ、肌が火傷でただれていた。伯爵は、かすかに声を出しているだけで、

すでに動けなくなっていた。

「私が魔道大臣となった理由をお忘れか？」

公爵は、ゆっくりと僕たちの方に近づいてくる。

「5属性の精霊を操り、最高位のマジである『セイジ』の称号を持つ者だぞ？ それを忘れたのか？」

公爵はニヤツと笑った。魔法なんて初めて見た。こんな場面じゃなかったら、ワクワクしたかもしれないけど、今はそんな気分じゃない。最悪の気分だ。

「……く、そ………！！」

伯爵は力を振り絞り、悔しそうな声を出した。

「伯爵、しゃべらないほうがいいです………」

アンナが心配そうに言った。彼女の手は、フルフル震えている。

「所詮、無知な貴族よ。高貴であるワシに盾つくから、こういうことになるのだ。身の程を知れ」

「てめえ………！！」

僕はキツと奴を睨んだ。

「東方の者よ。貴様のような卑しい民族が、そのような口を利いてはならんのだぞ？」

「貴様のほうが、卑しい人間にしか見えないけどな」

ヴァルバの口元は笑っているが、目元は笑っていない。憎しみのこもった、憎悪の炎が渦巻いている。僕はゾクリと、寒気を感じた。

「……何だと？」

「自分が高貴だと？ どこが。世界の人たちに聞いてみる。お前みたいな汚物と同程度の人間なんて、貴族である資格も無い、と言われるさ」

「……貴様、ワシを侮辱するか！？」

公爵が怒りをあらわにした。すると、奴は再びさつきと同じ行動をした。

「……蒼空に満ちし冷気よ、極寒の刃となり、悪しき命を切り刻め………」

公爵が再び印を結んだ。まずい、また魔法を使つつもりだ。とすると、あれは詠唱か？

「させるかよ！！」

ヴァルバが一気に踏み出し、槍で公爵を突いた。しかし、公爵は間一髪でそれを避けた。

「ぬう……邪魔をしておつて……！！」

公爵の周りを衛兵のような2人が取り囲み、ガードしている。衛兵にしては、来るのが遅いんじゃないかと思ったり

「……さて、公爵さんよ。話がまだ済んじゃあいないだろ？」

「何？」

ヴァルバは肩に槍を置き、微笑しながら言った。

「お前の目的はなんだ？」

「……目的だと？」

「そつだ。インドラに暗黒魔法を伝授し、『永遠の巫女』を研究するその目的は一体なんだ？」

ヴァルバは腕を組み、言った。

「ヴァルバ……そいつの目的は国の実権を握ることじゃないのか？」

「はつきりしないから、訊いているんだ」

僕の問いに、彼はすぐに返してきた。

「クッククク。ヴァルバ、と言ったか？ 貴様もなかなかの切れものよのお」

公爵はうれしそうに笑いながら、手を叩いた。

「そつ。ワシの目的は、世界の霸王となることだ……！！」

「霸王……だと？」

公爵は手を広げ、続けた。

「『永遠の巫女』を覚醒させ、聖杯の封印を解き、邪神を復活させる。そして、ワシは神の力を得るのだ。そして、この『レイディアント』の……絶対的な支配者となるのだ！！」

言い切ると、公爵は大声で笑い出した。天を仰ぎ、大きく手を広げるさまは勘違いした権力者にしか見えない。

馬鹿だ。ただの馬鹿だ。

絶対的な支配者だと……？ そんなの、なり得ない。

「……そのためにリノアンをさらい、禁忌とされたことをしたというのか？」

ヴァルバは冷静に問う。

「……ほう、知っておるのか。そうか、そこにいる娘はリノアンの妹だったか」

公爵はひげをさすりながら言った。

「クッククク。その娘が言ったとおり、ワシはリノアンを行方不明ということですらいい、この地下で禁忌とされた『魔道注入』を行った。……なぜならば、きゃつは『永遠の巫女』としての素質を持つていたからなあ……」

「……」

「やっぱり、お姉ちゃんは……」

アンナは想像していたこととはいえ、ショックを隠しきれない。

想像していたとおり、アンナのお姉さんは空と同じで『永遠の巫女』であるがために、さらわれた。

「だったら、なぜ『永遠の巫女』に魔道注入をする必要がある？」

あれらは、生まれながらにして常人の域を逸しているほどの魔力を持つている。それを、さらに強化する意味はなんだ？ あまりにも増えすぎた元素は、やがて肉体の限界を超え、分子から乖離する。

「……それくらい貴様も知ってるはずだろ？」

な、何を言ってるんだ？ ヴァルバ……お前、一体何を知らっているんだ？

「……」

「答える……ステファン」

公爵はニヤリとして、口を開く。

「『永遠の巫女』は、確かに生まれながらにして常人では扱えぬほ

どの元素を持っている。だが、そのままでは聖杯を覚醒させることはできない。……なぜだかわかるか？ それは、聖杯に必要な魔力は一般的に存在するエレメンタルではないのだ」

「……基本属性と光陰2元素とは違う……ということか」

ヴァルバは言った。

「そう。それらとは別に、古代ティルナノグ文明期に存在した特殊なエレメンタルが必要なのだよ。それを『永遠の巫女』は潜在的に持っているが、古の盟約によりそれは覚醒できないようになってい

る」

「古の盟約だと……？」

ヴァルバは目を細めた。

「そればかりはワシも知らん。だが、わかっているのは巫女の元素そのものが鍵だということだ。だが、肉体の檻にある元素は外界の出てくることは敵わない。……そこで、魔導注入を行うのだよ」

「！！　そうか、やつぱりな……！！」

ヴァルバは小さく歯ぎしりをしながら言った。

「ど、どうということだよ！？」

僕は理解できず、すぐに訊ねた。

「先ほど、ヴァルバとやらが言ったではないか？ 『増えすぎた元

素は、分子から解離する』と」

「……………？」

すると、公爵は不気味な笑みを浮かべた。

「魔導注入を行い、魔力……体内の元素量を増やす。そして、乖離現象を起こす。そうすることによって、『永遠の巫女』の元素が結晶化して外界に具現化する。そう、これこそが聖杯の鍵となるのだよ」

「……………つまり……………」

僕は、嫌なことを知った。それを口に出したくなかった。

「……………お姉ちゃんは、どっ？」

僕たちは、アンナの方に顔を向けた。

「お姉ちゃんを、どこに連れて行つたの!?!」

アンナは立ち上がり、言った。

「私のお姉ちゃんを返して! 唯一の私の家族を返して!?!」

アンナの必死の叫びが木霊する。けど、僕にはわかっていて。この男には、そんな言葉は届かないということ……。

「ハッハッハ……。アンナ、だったかな? 貴様の姉なんぞ、もうここにはおらぬわ!」

「えっ……?」

公爵は笑いを抑えられないのか、手でお腹を押さえている。

「……貴様の姉の覚醒は完了した!! すでに、聖杯の覚醒をとくための鍵となり、肉体は消滅したわ!!」

ガッハッハッハと、公爵はアンナの目の前で大笑いをした。アンナは怒りか、あるいは悲しみかで、体を震わせている。……どうやら、後者のようだ。アンナの目から、多くの涙が流れ始めた。

「う……う、うわあああああ……!?!」

アンナは泣き叫んだ。僕には、どうすることもできなかった。

ヴァルバの言っていることを照らし合わせれば、納得できる。肉体の限界を超え、リノアンさんのエレメンタルの結晶は具現化し、彼女の肉体は消えた……。

「……公爵」

ヴァルバがアンナが泣き叫ぶ中、小さい声で言った。しかし、僕にははつきりと聞こえた。

「貴様のしてきたこと……後悔するんだな」

「……なに？」

ヴァルバは小さく首を振り、公爵を見据えた。

「お前さえいなければ……お前さえ、こんなことをしなければ……」

！  
彼の手が震えている。伝わる。ヴァルバの怒りが……。

「貴様を……殺す。肉体も、何もかも……微塵も残してはやらん！」

！

ヴァルバは持っていた槍を公爵に向けた。槍の先の光が、小さく輝く。

「ヴァルバ……」

「ソラ、手を貸せ。……アンナのために、そして多くの民のために、このへド面の男を倒すんだ！！」

ヴァルバは僕を見ず、そう言った。僕は体が震えてきた。怖いんじゃない。どうしてかわからないけど、少しうれしいからだ。

「……ああ。僕も、絶対に許すことができそうにない！」

僕は腰に差してあった剣を引き抜いた。レンドの船が海賊に襲われた時以来だ。

「貴様らごときが、ワシに盾つくというのか？」

「当たり前だろ。僕は、人を侮辱する貴様を……人の命をゴミのようにならしているお前を、絶対に許さない！！ その不細工な面をもっと不細工にしてやらあ！！」

怒りで、口から火が出そうだった。公爵はほくそ笑み、僕たちを見渡した。

「貴様らなんぞに、ワシを殺すことなんぞできるはずない！！」  
そう言つと、公爵は印を結んだ。

「ヴァルバ！」

「また詠唱を開始したか。いいか、ソラ」

「ヴァルバは僕の肩を抱き、小さく言った。

「俺が公爵の前にいる2人の衛兵をどうにかする。お前は一気に走りこんで、あの2人の間を滑りぬける。そして、公爵を殺せ！」

「僕はうなずいた。ヴァルバより僕のほうがガタイが小さいし、小さい動きができるから、滑りぬけるのは僕が妥当だろう。」

「……行くぞ!!!」

「ああ！」

僕が最初に走り出した。その後に、ヴァルバが続く。すると、公爵の前にいた衛兵2人も飛び出してきた。

「……鮮麗なる清き風よ……」

詠唱が進みだした。……走れ!!!

衛兵が大剣を振りかぶったその隙に、僕は走った勢いでスライディングをした。もし、タイミングが遅かったら敵の攻撃をまともに受ける。

危機一髪、二人の衛兵の間を何とかすり抜けられた。立ち上がった勢いで後ろを振り向くと、ヴァルバが槍で衛兵1人の首を突き刺していた。

「ソラ、行けえー！」

ヴァルバの声に押されるように、僕は公爵のところに行った。公爵は目をつむり、詠唱をしている。

よし、間に合う！

僕は走りぬける勢いで、剣を振りぬこうとした。だけどその時、僕の中に一つの光景が浮かんだ。

海賊を殺した光景だった

血に塗れた剣。

血塗られた僕の体。

殺したという事実、恐怖で震えた僕の心。

「……!!」

僕は……その、ほんの一瞬の光景で……手を止めてしまった。

「……ゲイルファンゲ!!」

その瞬間、刃のような風が僕を包み、まっすぐ吹き飛ばした。僕は壁に叩きつけられた。そのときは、ぶつかった痛みだけしかなかったが、自分の体を見てハツとした。……体中、刃物で切り刻まれたかのように、ズタズタにされていた!

「ぐっ……!!」

傷に気付いた瞬間、全身にビリビリする痛みが走った。カッターか何かで、指を切られたときのように。

「ソ、ソラさん!」

「ソラ!!」

ヴァルバは2人目の衛兵を斬っていた。しかし、僕を心配して公爵に背を向けてしまったのだ。

「馬鹿が! フリーズランス!!」

氷結の槍が、一閃してヴァルバの体を貫いた。

「ぐああああ!!」

ヴァルバの痛みによる叫び声が響いた。僕は一瞬、体が硬直した。胸を刺されたと思ったからだ。しかし、ヴァルバはとっさに避けたのか、氷でできた槍は右腕に突き刺さっていた。

「ぐっ……く……!!」

「クッククク……ヴァルバよ、ワシが詠唱破棄をすることができぬと思っただのか?」

公爵は不敵な笑みを浮かべながら、倒れこんでいるヴァルバに近づいて行った。

「くそ……詠唱破棄できなかったのは、炎熱系だけか……!?!」

「そのとおり。ワシは、氷水系と嵐風系は得意なのだよ」

ヴァルバは悔しそうな声を出しながら、その場で、大きく呼吸し

ている。氷の槍が腕に刺さったため、大量の血が流れ出ていた。僕の体も、ヴァルバ以上ではないが、今まで流したことがないくらいに血が流れている。

「読みが浅かったな。ククク……」

「こ……の野郎……！」

くそ……。体が痛くて、上手く動かない。

「……さて」

公爵はヴァルバの横を通り過ぎ、僕のほうに向かってきた。僕は自分がやられると思った。しかし、そうじゃなかった。公爵は、僕の隣にいるアンナのほうに行き、彼女の腕を引いた。

「いたっ……！」

「フフフ……。なるほど、母に似てかわいらしい顔立ちをしておるなあ……！」

「……！ どうして、お母さんを……！？」

アンナは振りほどこうとする手を止めた。

「どうして？ もちろん、お前の母は前の姉と共にここで研究体として、私が連れて来たからだよ」

「え……？」

「な、なぜ、巫女の母まで、さらう必要がある……？」

ヴァルバが小さな声で言った。それでも、公爵には聞こえたようだ。

「『永遠の巫女』は、巫女である者の血族にも巫女の素質を持っている可能性があるのだよ。だから、この娘の母……エリザベスもここへ連れてきたのさ。貴様も連れて行くこと思ったのだが、お前はほとんど魔力を持っていなかったな」

「……じゃあ、お母さんは生きて……？」

「いや、もういない」

公爵はグイとアンナを引き寄せ、不気味な笑みを浮かべながら、アンナにとって最悪の言葉を言った。

「お前の母は魔道注入に体が耐えられず、6年前に死んだ」

「……し、ん……」

「エリザベスは体中の毛穴から血が吹き出し、一瞬で肉の塊と化したわ!!」

「……嘘……」

アンナは顔を左右に振りながら、何かを言っている。

「……嘘……」

「お前の母は、もうこの世にはいないんだよ!!」  
人間じゃ、ない。僕の心が暗転する。

「う、そだ……嘘だ……!!」

「嘘ではない! 貴様の母親は死んだ後、ワシが魔法で焼き尽くし、もう血肉の1つもこの世に残しておらんわあ!!!!」

「やめてええええー!!!!」

アンナは公爵の手を振りほどき、その場に崩れた。そのまま、大声で泣き始めた。

「……貴様……それでも、人間か……!?!」

伯爵がボロボロの体で言った。

「なんだ? カルヴァン、まだ生きていたのか? あの魔法は上級炎熱系魔法だったんだがなあ」

伯爵を見下し、吐き捨てるかのように言った。まるで、唾棄すべき存在であるように。

「貴様のような下流貴族、そこで寝そべっている。お似合いだ」

公爵はまたアンナのほうに向き直った。

「……君の父、ダグラス卿は私の上司だったんだよ」

再びアンナの手をつかんで、無理矢理立たせた。

「君の父は、いつも反対していたなあ……。私が、古代魔法や暗黒魔法を研究することを」

涙顔のアンナは、目を見開いた。

「さらに、この機関を設立するのに猛反対しおつてな……。さすがの馬鹿国王も、主席隊長の言を無視することはできず、長い間邪魔されたのだよ。……だから、殺したのさ」

「!!!!」

殺した……。？ だって、戦死つて…。

「お父さんは……。戦死したんじゃない？」

「違うんだよ……。私が暗殺者を大金をはたいて雇い、聖都の近くで軍略を練っている彼を殺させたんだよ。あたかも、敵軍が暗殺したかのようになあ!!」

「……どう……。して……。??」

アンナの体が震える。少女の心が……。ズタズタにされていく。目に見えない『心』が、目に見えない『ナイフ』で切り刻まれていく。何の躊躇いもなく。

「どうしてかって!? ダグラスが邪魔だったからだよ! 私の研究に対して、文句ばかりを言っていたからなあ!!!!」

公爵はアンナから手を離し、大声で笑った。

「そんな……。な……。!」

「あいつさえいなければ! 巫女の素質を持つリノアンをもっと早く研究体にできたんだ! しかし、遅れたとはいえ、愉快だ。実に愉快だった!!」

こんなの、人間じゃない。なぜか、僕の体に刻まれた傷の痛みが、遠退いていく。

「もう……。やめて……。やめてえええ!!!」

アンナはこれ以上聞きたくないと言わんばかりに、両耳を手でふさいだ。

「ハツハツハ! お前をもう1度検査すれば、エレメンタルが自然発生しているかもしれん。……魔道注入を試みようか?」

公爵はアンナの顔を覗き込んだ。そして、体を震わせるアンナを見て再び笑い出した。

「お前たちがランディアナに来たということを知っていて、予想していたぞ！　こうなるということを知っていたぞ！」

「ど、どうしてランディアナに来たと……？」

「冥土の土産に教えておいてやる。貴様らが泊まった宿の社長ミィシャは、ワシの娘だ！」

「……………！！！」

だから……霧囲気を感じたことがあると思ったのか。ということには、ミィシャさんが……僕たちをこいつに密告した。そういうことかなのか！？

「さて、愉快になってきたところで実験といこうか」

公爵はアンナの腕をつかみ、機械のところに行った。

「この機械が、魔道注入を行う機械だ。アンナ、貴様もこれでリノアンと同じように、『永遠の巫女』という崇高な存在になれるかもしれないぞ？　うれしいだろ！？　なあ？　うれしいだろう！？」

「いや、いやあ……！」

アンナが叫んだ。そして、自分の腕をつかんでいる公爵の手を、ガブリと噛んだ。

「ぎゃあああ……！」

公爵の叫び声が響いた。公爵はアンナから手を離し、噛まれた手を宙に上げた。

「く、くそ、貴様あ……！！！」

立ち尽くすアンナを、平手打ちした。アンナは、そのまま倒れこんだ。

「貴様……愚民の分際で、このワシに傷を負わすとは……もうお前などどうでもいい……殺してやる、殺してやるわ……！」

公爵は腰帯の細剣を引き抜き、アンナに突き立てようとした。僕はとっさに、そこに飛び込んだ。

ズボッ

妙な音が耳に響いた。なんだ？ 聞いたことも無い音だ。それに、何か体が通っているような感じもある。

目の前には、目を見開き、仰向けになり、僕のお腹の辺りを見ているアンナがいた。アンナが見ている先を見ると、白い線みたいなものが、僕の腹の辺りから出ていた。

これは…なんだ？

なかなか、理解することができなかった。すると、その白い線みたいなものが、ズルリとした音を立て、消えた。すると、せきを切ったかのように、白い線があった辺りから真っ赤なものが出てきた。

…血？

真っ赤な血が、倒れているアンナのところに降り注ぐ。それを頭で理解したとき、体の力が抜けた。ズルッと、アンナの上に倒れこんだ。

「ソラさん…？ ソラさん！！」

アンナの叫ぶ声が、耳元で聞こえる。なんだろう、どんどん聞こえなくなっていく気がする。

「やだ…ソラさん！？ やだ、やだ！」

「ソ、ソラ…！！」

ヴァルバの声も聞こえる。けど、すごい遠くから聞こえるようにも感じる。そんなに、離れていないはずなのに。

「クッククク。下賤の者が、無様な姿だ」

人間じゃない男の声が聞こえる。聞きたくもないのに。

くそっ……！！

あの時、迷わず剣を振り抜いていれば……こんなことには……！！

「…せめて、高貴なワシの手で、葬ってやろう。うれしく思うがい……」

ちくしょう……気が遠くなる。

どうして、剣を振り抜かなかった？

どうして殺さなかった？

僕のせいで、みんなが……みんなが……！！

何を迷う必要があるんだよ……

あいつは……あいつは……！

憎めばいい

えっ？

憎めば、殺せるぞ

憎……む？

そうすれば、何の躊躇いもなく殺せる。ヒトを

憎めば……憎めば、あいつを……

そうだ。聴こえるだろう？ お前にも、この羨望が

消える

やめてくれ……

なんだ……？

声が聞こえる……

朽ちていった者たちの……怨嗟の音が……

殺せ

消えろ

殺せ

消えろ

やめろよ……

そんなことを、するな……！

やめてくれ……！！

グルグル回る……

死ねよ

ぐちゃぐちゃに潰してやる

切り刻んでやる

肉片が一切残らないほどに……

殺せ

憎め

殺せ

ハハハハハハ！！

そうさ！　そうやりやあいいんだよ！！  
ズタズタにして、血みどろになっちまえ！！

滅尽滅相

そうやって、俺たちは繋がってる

殺し合って、憎み合って

殺して殺して殺して殺して殺して殺して  
殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ

やめてくれ……

もう、やめてくれえ！！

……何もかも、消し去ってやれ……  
血に塗れ、罪深きその剣が……

これ以上……僕は……

やめろ……やめてくれ……

やめろお！！！！

視界が、ぼやける

声が聞こえる

遠い昔の声が

なんでそんなに暗いの？ あんた。  
……ひどい言いぐさだな。

俺は……ただの実験道具に過ぎないんだよ。  
何言ってるんだよ。私も、あなたも……あいつらも、同じ人間よ。

一緒に掴むのさ。私と、お前で……

原初の人類……知っているか？ 君は、その人類と同じなんだよ。  
君は……世界を新たな繁栄に導く道標になるんだ。

わかってる。大丈夫よ。きっと……信じていける。ずっと……

一緒に、空の見える場所に出よう。こんな所から……

…ええ。あなたと一緒になら…どこへでも…

…見ない…で…

世界を変えてやろう。お前の力は、そのために与えられたものなんだ。

堕ちた者たちの願い、か……。皮肉なものだな…

俺は…お前の言うとおり、神になったというのか…？

カイン…きさ…ま…！！

あと、もう少しのところで…！ プロジェクト…ジェネ…シ  
ス…を…

お前が…！！ お前があいつを…！！

うああああああ！！！！！！

俺は…ただの操り人形だったってことか……。何のために…こ  
こまで…

ハハ…ハハハハハ…

余は叔父上の操り人形なんかじゃない！！

じゃあ、この国の帝ってのはなんなんだ！？ ただの飾りだと言

うのか!?

僕は……兄上に付いて行く。兄上を独りにはさせないよ。だって、独りであるには……この世界は広すぎるからさ……

そうだな……私たちは、決して独りじゃない。誰かと共に支えあって、この世界は成り立っている……

お兄様……よろしいんですか？  
ガルザス閣下も、話せば……

違う！

余は……ただ、この世界の人々のために……

中途半端な意志が、奴らを破滅へ追い込んだのさ

どうして……どうしてだよ……？

どうして、殺されなきゃならなかったんだ!!

この血が……？ そうか……私のこの血があるからか……!!

……神々に祝福された一族だと……？ 呪われた一族じゃないか

……

これは……！！　あなたを突き動かしているのは……憎しみだけ  
なのか……？

兄さま！！　お願い、もうやめてえ！！！！

……もう、何もかも無くなってしまえばいい……  
私は……なんのために生まれてきたというのだ……？  
生きているだけでは……毒でしかない……

これは……僕が望んだことか？　兄上を殺してまで救った結果がこ  
れか……？

……！！  
……こんな……こんな、僕たちが目指した世界の姿じゃない……

なぜ、人はこんなにも穢れているんだ……！？

言葉が消える



「く、くそお！」

公爵は、僕から遠ざかるように走り、離れたところで印を結んだ。

「……喰らえ！ フリーズランス！！」

氷の刃が瞬時にそこに作り出され、僕に向かって飛んできた。けど、どうしてか全く怖くなかった。

僕は無意識にその刃を、空いている左手で受け止めた。すると、氷の刃は僕を貫くことができず、そのまま崩れ去った。

「な、なんだ、と……！！？」

公爵は信じられないのか、驚愕の顔をして、僕を見ている。

「エ、エレメンタルで作り出された、魔法の造形物が、いとも簡単に崩れるとは……。どれほどの魔法耐久度を持っているというのだ！！！」

公爵は後ろを向き、出口のほうに走り出した。僕はそれに反応し、瞬時に公爵の前に移動した。人間とは思えないスピードで。

「な、なんだと！！？」

驚き、慌てふためく公爵。僕はそれを冷静に見ながら、剣を振った。

「ぎゃあああああ！！！！！！」

横一文字に、公爵の胸を切り裂いた。どうやら浅かったらしく、致命傷にはならなかった。それでも、公爵はとんでもないくらいいの声を上げている。

「ひ、ひiiiiiiii！！」

そのままその場に倒れ、僕を見て怯えている。

「大袈裟に痛がるなよ。たいした傷じゃねえだろ……？ ……お前が今まで他人に与えてきたものに比べれば、さ……」

どうしてだろう。言葉が勝手に出てくる。これは僕の言葉なのか、



静な精神状態を保っている。いつもなら、こんな大量の血を見ただけで気を失いそうになるっていうのに、今の僕はどうしたんだ？

なんだ……この湧き上がるような高揚感は……？  
破壊衝動……？

ああ、そうさ。それこそ、俺たちの『真の姿』だ！！

「ククク………ハハ………アーハハハハハハ！！」

「ソ……ソラ……？」

「そうだ！ それでいい！！ もっと叫べ………もっと泣き叫べ！

！ ハーハハハハハハ！！！！」

別の何かが聞こえてくる。僕の力を解き放て、と。

怒りに身を任せ、力を解放し、目の前の邪悪な人間を殺せと、何がささやいている。

ハハハ、そうさ、それでいいんだよ。これが、あるべき姿さ……

！ 僕たちはそうやって殺し合って、殺し合って殺し合って……ハハハハハ！！！！

僕は剣を振り上げた。今度こそ、公爵の息の根を止める。僕はそのまま、振り降ろそうとした。

その時、何かが飛んできて、僕の体をつかんだ。すると、僕の体は静止した。剣も、途中で止まってしまった。よく見ると、そこにいるのはアナナだった。

「ソラさん、もうやめてくださいー！！」

アナナが言った。……やめる？ 何を？

僕はそれが理解できない。

「それ以上やったら、死んじゃいますよー！！」

「戯言を……。いいんだよ、別に死んだって……。命は………まだ腐る

ほどある……。殺しきれないほどになあ！！……ククク……ハハハハ！！」

笑える。くそ笑える。何が死んじやいますだあ？

生命は、殺し合って進んでいくんだ。殺し合い、憎み合い、歴史を築き上げていくんだよ！！

俺たちはそうやって笑顔になれるのだ……！！

「もう、やめてください！！ お願い……！！」

アンナが僕に顔を向けた。その目は、強く、勇ましく、潤んでいた。と思えば、雨粒が窓を滴るように、涙が溢れてきていた。

「……！？」

何かの衝動に動かされる、僕の動きが止まりそうだった。自分で、そう思った。

コロセ

……え？

また、何かが『ささやいた』。

ハヤク、コロセ

コロセ

けど、アンナが……

コロセ

セイマノチカラヲモツテ

……セイマの力？

コロセ

コロセ

なんだよ、それ？

オオイナルチカラ

セイマノチカラ

リユングヴィノチカラデ

コロセ

コロセ

コロセ

コロセ

コロセ

コロセ

コロセ

コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロ

セコロセコロセコロセコロセエ!!!!!!!!!!!!!!

「死ねええ!!!!!!!!!!」

僕はアンナの手を振りほどき、剣を振り上げた。

「……!!! ソラさん、やめてええ!!!」

すると、突然、奥の壁が崩れ去った。

22章：囁く言葉たち 始まりと終わりを知る者（前書き）

一部、残酷なシーンがあります。

苦手な方はお気を付けてください！

## 22章：囁く言葉たち 始まりと終わりを知る者

大きな音をたてて、奥の壁が一面、崩れ去った。

真っ白な土ぼこりがその辺りを舞い、崩れた壁から外が見えるはずなのに何も見えない。そして土ぼこりが収まってくると、自分の足元も見えるようになってきた。

「…………ちっ、外したか」

…………剣を振り下ろしたつもりなのに、剣先は公爵の耳をかすめ、大理石の床に食い込んでいる。公爵は鼻水をたらしながら、硬直していた。気絶はしていないようだが、過呼吸状態みたいになっていた。

崩れた壁のところを目をやると、何かが立っていた。そのシルエットは、まさに人の姿をしていた。

「お前……………は」

そこに立っていたのは、あの男。

…………そう、空をさらい、アンナのお姉さんであるリノアンをさらった、インドラのシュヴァルツ…………。あの時と同じ服装。黒いぴちぴちのタイツみたいな服。顔を隠すかのように、パーカーみたいなものを羽織っている。

「…………??」

なぜ、あいつを前にしてこんなにも冷静なんだ…………？

怒りで震えるはずなのに。恐怖で震えるはずなのに。

僕は細い目つきで、奴を見ていた。

「シュ、シュヴァルツ!!」

公爵の声が響いた。すると、公爵は這いずるようにシュヴァルツの元に近づいて行った。公爵を止めようとすればできたのだが、なぜかしなかった。

結果が見えている。そう確信していたからだ。

後になって、そうわかったのだが。

「シュ、シュヴァルツ! た、助けに来てくれたのか!？」

「……ロベスピエール。ひどくやられたようだな」

あの重い感じの声。どっしりとした、雨の日にずぶ濡れになったセーターのような。

「そ、そうなんだ。あの、青髪の男にやられたんだ!」

青髪……? 僕のことか?

「ふむ……なるほどな」

シュヴァルツは僕を一瞥した。唯一見える彼の口元が、小さく動いた。

「ヒ、ヒヒヒ! 貴様らはこれで終わりだああ!」

公爵が僕たちの方に向き直り、叫んだ。

「シュヴァルツに……シュヴァルツにかかれば、貴様らなんぞ数秒で血祭りだああ!」

気色悪い笑いをしながら、公爵は言った。

「ヒヤハツ、ヒヤハハハハハ! シュ、シュヴァルツ!! 頼む、

きゃつらを……きゃつらを殺してくれえ!」

足がほぼ切られたような状態になっているため、立ち上がることもできずに、シュヴァルツの足にしがみついている。

「……………」

「シュヴァルツ! 頼む! 早く、早くきゃつらを、ワシの目の前でズタズタに殺してくれえ!」

まるで嘆願するかのように、公爵は叫ぶ。

するとシュヴァルツは公爵に手を貸し、立たせた。右手で公爵の脇をつかみ、何とか公爵は立った。

「お、おお……………す、すまんな……………」

「……………いや、これから死ぬ人間に対しせめてもの慈悲だ」

「……………なっ！！？」

その刹那、公爵の背中から血が吹き飛んだ。それは、5メートルほど離れた伯爵にも飛び散った。一瞬だけ、雨のようにその一面を覆った。少しだけ間を置いて、小さな欠片たちが辺りに降り注ぐ。見なくてもわかる。……………公爵の肉片と内臓の一部だということが。

「ぐっ……………ぶえ……………げふっ！！」

公爵の体を1つの腕が突き抜けていた。突き抜けている部分は、赤い血がべつとりと付いていた。

「う……………げえ……………ふ……………。シュ、シュヴァル……………ツ、な、なに、をお……………！？」

公爵は血走りしている両眼を大きく開き、震えながらシュヴァルツを見た。

「お前のおかげで……………最終的な調整を行うことができた。礼を言うシュヴァルツは、褒めるように言っていた。

「だ、だった……………ら、な、ぜええ……………！？」

腹を突き抜かれ、上手く呼吸もできないのに公爵は力を振り絞って言った。それを見たシュヴァルツの口元が、嬉しいのか……………微笑んでいるのがわかる。

「……………貴様はもう用済み、だと言われたのでな」

「な、なんだあ……………と……………？」

「聞こえなかったのか？……………ロベスピエール。お前は、ウラノスとリオンの命により、殺されるんだよ」

その時、シュヴァルツの歯が見えた。

凍てついた微笑

それを見た公爵の顔は、衝撃と恐怖で『顔が強張る』を超えるほど引きつった。

「！！！！ ユ、ユグ、ドラシ ……！！！！」

公爵が言い終わる前に、シュヴァルツは公爵の脇から右手を離し、こぶしでやつ顔を殴りつけた。そして公爵は地面に吹き飛び、仰向けに倒れこんだ。顔の表面は原形をとどめないほどに変形し、ピクピクと痙攣をしていた。もう、生きてはいまい。

「あーあ、かわいそうに。結局、俺たちの手駒だったことにも気付かずに、死んじまいやがったか」

シュヴァルツの後ろに、見たこともない男が立っていた。……シユヴァルツの仲間か？

「ホリン、俺だけで十分だと言ったはずだが？」

「固いことを言うなよ。俺たち、仲間じゃねえか」

ホリンという男は、公爵の体に近づき、つばを吐いた。

「こいつ、最初から嫌いだったんでな。……お前に殺されるどころ、見たかったんだよ」

ホリンという男はそう言うと、公爵をぐりぐりと踏みつけた。

「ん？」

彼は僕に気が付き、一瞥した。観察するかのように。

「まさか……………覚醒したのか？」

……………覚醒？

「いや……………あの状態は、ただの暴走だろう」

「なんだ、ただの暴走か。驚かせやがって」

ホリンはまた笑い出した。

「お、お前たち、何者、だ……………？」

うつ伏せになっている伯爵が言った。

「なんだあ？ そんなところにいるから、全然気付かなかったぜ。」

シュヴァルツ、誰だ？ こいつ」

ホリンは伯爵を指差した。

「アンジュー伯カルヴァン・アンル。ルテティア中央議会貴族議員の正統派の者だ」

「ああ、こいつがそうか。『何者』、か。ハツ、お前には関係ないだろう？」

「……インドラ……の者、か？」

「なんだ？ お前、そんなことまで知ってるのか？ おいおい、シュヴァルツ。いくらなんでも、インドラのことが外に漏れすぎじゃあないのか？」

「リリーナの仕業だろう。……あいつのことだ。そろそろ動き出さなければ、手の講じようが無いと思ったんだろう。まあ、これも予想の範疇だな」

「……結局は、ウラノスの計画どおりってか」

ホリンは腕を組みながら言った。

そのとき、大勢の足音が聞こえてきた。入り口の方に向くと、そこには武装した兵士が何人もいた。そして、中央に宰相が息を切らして立っていた。

「な……！？ こ、これは？」

「なんだあ？ てめえら」

ホリンはゆっくりと宰相たちを眺めた。

「！ お前たち、何者だ！？」

宰相は腰帯に差してある剣の柄を握った。他の兵士たちも体を少し低くし、戦える体勢になっている。

「またその質問かよ。……レオポルト宰相閣下には、何の関係も無い。失せな」

ホリンの顔から、ヘラヘラした笑顔が消えた。

「！ なぜ、私の名を知っている？」

ホリンは微笑しながら答えた。

「お前のことは有名なんだよ。歴代宰相で最も賢人であると誉れ高

い、レオポルト＝ヴァッシュ宰相。敵国、ゼテギネアの人間でさえお前の名前を知っているぜえ？」

クツクツクと笑いながら、ホリンは宰相たちを見据えた。

「……インドラの者か？」

「そうだと言ったら、どうするってんだ？」

ホリンは微笑しながら、宰相を睨みつける。

「もちろん、放ってはおけんな」

「ほう、だから？」

「……やつらを捕らえる！」

宰相がそう言つと、宰相の周りにいた兵士たちが一斉にシュヴァルツたちのところに突進して行った。

「ちつ、しょうがねえな。シュヴァルツ、ここは俺にやらせてくれ」

「言われなくとも……こんな雑魚共、俺は興味ない。好きにするがいい」

「なんだよ、運動のために少しくらいやれば？」

「遠慮しよう」

「そうかい。んじゃ、さつさと終わらすか」

ホリンは背中中に担いである剣を引き抜いた。なんと、その長さは彼の身長並みだった。

「……ハッ、死ねえ！」

ホリンは剣を横一文字に振った。まだ、兵士たちは剣の間合いに入っていないのに、どうして剣を振ったんだろつ。

すると、白い風が飛んできた。その白い風は、10人近くの兵士たちを一瞬のうちにすり抜けた。

そして、ホリンは剣を鞘に収めた。

「烈衝斬牙。これでお終い、つてな」

ホリンがそう言つと、兵士たちの体が腹の辺りで真つ二つになって崩れていった。兵士たちは、何が起きたのかすぐにはわからず、他の兵士たちを見回していた。そして、自分の体に気が付いた瞬間、声を上げることもなく……息絶えた。

「な、なっ……!?!」

宰相は、あまりの光景に足が動かなくなっていた。

「つまらんな。せめて、このレーヴァンテインの錆落としにでもなるかと思っただが……所詮、雑魚は雑魚か」

「見ればすぐにわかるだろう？ こんなやつらなど、そこらの虫と同程度だということが」

そうだなとホリンは言っ、大きいため息をついた。

「……宰相閣下。お前は、俺を楽しませてくれるのか？」

ホリンはそう言っ、こちらに近づいてきた。

「この焰剣の、飢えを満たしてくれるのか？」

不気味な微笑を浮かべ、ホリンは剣を再び抜いた。

「くっ……!!」

宰相が危ない!

僕の心はそう叫んだ。しかし、何かを阻む。僕の意味が肉体を動かすことを、何かを阻んでいる。

お前には過ぎた玩具だ

ああ……そうだ……

黒い、真つ黒な風景

全てが黒く塗りつぶされた世界

その中に、白い絵の具が一粒、墮ちてきた

黒と白は混ざることなく、白は黒の中を泳ぎ回る

ハハ……まるで、コマージュのコーヒーマーシャルのコーヒーマーシャルみえてえだ

意識が遠のいて行く……

お前はそこで見ている

力の使い方ってもんを教えてやるよ

僕は気が付けば、ホリンの方に向かって行っていた。

「ハッ！ てめえが来るか！！ 面白い、その暴走がどれほどのものか見てやらあ！！」

剣と剣がぶつかる。そして、とんでもない音が響いた。

「ハッ……。なかなかの力じゃねえか！！」

ホリンはうれしそうに笑いながらバックステップをして、剣を構えた。そして前に飛び、再び剣をぶつけ合った。今度は、火花が散った。僕の顔にも当たったが、今は『変な状態』なため、何も感じない。

そして、力が均衡したのか、2人とも2歩くらい吹き飛んだ。

「ハッハッハ！ そんな糞みたいな剣で、俺のレーヴァンティンを受けきれるとはな！ よほど、その剣にソリッドプロテクトが発動してるんだろうなあ！ いや、体全体にか！！」

攻撃をする中でも、攻撃を防御する中でも、ホリンは笑っていた。この戦いを、楽しんでる。

何度も攻撃が繰り返される。そして、1度も僕とホリンの体をかすめることもなかった。

再び剣がぶつかった衝撃で、僕とホリンは吹き飛んだ。

「さすが、リユングヴィの力……聖魔の力を受け継ぐ人間だ！ 星と人を紡ぐ唯一無二の存在』だな！！」

ホリンは大きく剣を上げた。

「これなら、俺を楽しませてくれる。さっきの雑魚共とは違い、俺をワクワクさせてくれる！ だが、これでどうだ……！！」

ホリンはにやりと笑った。

「烈衝斬牙！」

ホリンは再び、剣を振った。縦に、真っ直ぐ振りぬいた。すると、兵士たちを切り裂いた、あの白い風が、今度は縦になって飛んできた。

「……………ほう、ならば……………」

僕はホリンと同じように、剣を振りぬいた。すると、それは黒い風となった。

それは一直線に飛んで行き、ホリンが作った白い風とぶつかった。そして、力が拮抗したのか、二つの風はその場で消えた。

「へえ、やるじゃねえか！」

「……………その程度で、俺に勝てると思っていたのか？」

僕とは違う、何かが声を発する。それを見たホリンは、目を細くした。

「?? ……ソラじゃねえ。てめえは……………」

「……………ここでお出ましというわけか」

ホリンの隣に、シュヴァルツが歩み寄って来た。

「こんなにも早く発露するとはな……………。なるほど、それほどの『器』ということか？」

シュヴァルツは僕を見つめる。いや、僕じゃない。僕の体を操る、何かだ。

「……………貴様には関係あるまい。これは俺と奴の問題だ」

僕の声が出てくる。

「まあ……………そいつがどうなるかと知ったことではないが、あまり表面に出て来ない方が良くないのか？ ただでさえ不安定な精神が、消え去ることになるぞ？」

「ハハハ……それなら、結局全ては俺のものだ」

「……ウラノスの時とは違い、今回はやけに積極的だな」

「言っただろ？ 貴様には関係ない。……あいつの流れを組むとはいえ、貴様は傍族にしか過ぎんのだからな……」

「……………」

シュヴァルツは小さくため息を漏らし、僕から背を向けた。

「いつまでたつても、哀れな奴だな……。ホリン、殺れ」

「言われなくても!!」

ホリンは剣を構えた。

「今度は一味違うぜ！ 烈衝斬牙!!!」

見えぬ剣閃で繰り出された風の刃は、僕に襲いかかる。

僕はさっきと同じ、黒い風を飛ばした。しかし、それは奴の白い風にあたると同時に塵となって消えた。

「なに……？ ちっ……この貧弱な肉体め……」

僕はそう呟くと、構えていた剣を下ろした。

そして、白い風が僕に向かって飛んできた。

すると、僕は宰相のところに吹き飛んで行った。僕の体は真つ二つにはならなかったものの、肩から腰にかけて、大きな切り傷ができていた。

### 貧弱な肉体だ

何かがため息を漏らしながらつぶやいている。

今回は返してやる。ほらよ

その瞬間、僕の体が一気に重くなった。体が……動かない！

「くっ……い、いてえ……！！」

声が出る……。僕の意味で、声が……！

「俺の斬撃を喰らっても、生き永らえているとは……」

「『奴』の強力なソリッドプロテクトのおかげだ。それがなければ……いや、低度のソリッドプロテクトでは、そこらの兵士と同じように真っ二つになっていた」

そうシュヴァルツが言うと、2人は崩れ去った壁のほうに向き直った。壁の向こうには、闇夜の世界が広がっている。

「なるほどな……。しかし、暴走でも初歩的な特能は発生するものなのか？ 身体的能力が上昇するのはわかるが……」

「……ウラノスが初めて暴走した時も、微弱ながらソリッドプロテクトとリジエネイトは発生していた。まあ、奴の場合……発露したというのも関係しているのだろうがな」

シュヴァルツは、静かに息を吐いた。

「もう用はない。帰還するぞ」

「あいよ」

2人は歩き出した。

「ま……待て、よ」

なぜ、そう言ったのかわからない。血が出ているため、上手くしゃべれないようだ。

「空は、どこ、だ……？」

シュヴァルツは立ち止まり、僕を横目で見た。

「……あの女はまだ生きている。奪い返したいのならば、来るがいい」

「ハッ、まだ暴走状態にしかねないあいつに、俺らのところに来ることが出来るはずもないだろ？ 来る前にあの闇に食い尽くされ

るのが、奴の末路だ。いや……女が覚醒する方が早いかな」  
「……だろうな」

ホリンは吐き捨てるように言っつて、その崩れた穴のところから外へ出た。というより、ジャンプして消えて行った。

シュヴァルツも僕たちを見てニヤリとして、そのまま消えて行った。

残されたのは、呆然とする僕たちと、兵士と公爵の死体だった。体から血がとめどなく、流れていく。

僕の中から呼びかける者。お前は一体なんだ？

リユングヴィ……セイマの力ってなんだ？

古からの望み、断つべき者

お前の力は、そのために与えられたものなんだ

そして、僕はそのまま気を失ってしまった。

22章・囁く言葉たち 始まりと終わりを知る者（後書き）

第2部「赤い空」 終わり

(筆者が) 休憩中

8月11日、改訂しました。

ということ、いったん休憩です。非常に長い作品ですので、ディスプレイ見んの疲れたって人は、とりあえず外の風景を眺めましょう。心が落ち着きます……。

さて、ようやく第2部が終わりました。

既に20万字以上になりますが、まだ序盤です。レイディアント編「起承転結」の「起」です。

しかも、文字も詰めているし、ケータイの方には非常に見辛くなっていて本当に申し訳ありません。

本来の小説にはほとんど改行というのはないし、普通の小説としての形にしたい。という、自分の生意気且つ身の程知らずな言い訳ですが、ご了承ください。

気分を変えて、

第2部はいかがでしたでしょうか？ アンナの家族のことしかわかっていないので、謎は多くなるだけだったと思いますし、個人的には作って一番飽きてしまったところですよ(笑)

もちろん、数週間で作り上げましたが、ルテティアまで持っていくのに特に起伏はなく、のほほんとした旅にしてみました。

自分自身、そういつた「旅」に憧れている部分があったので、  
この  
いう風に乗ってしまったのかもしれない。

少しでも、彼らの旅の情景が目には浮かんでくれたら幸いです。

第3部「記憶の空」

第4部「運命の空」

第5部「約束の空へ」

と続いていきますので、よろしく願いします（＾＾）

23章：ルシタニア王宮 隠された想い、真実の声とは（前書き）

BLUE・STORY

Episode 4 第3部「記憶の空」

ああ、きっとそうなのでしょう

私たちは、その夢を追い求め続ける

砕け散った翡翠の記憶

この願いが、想いが……

あなたに、届くだろうか……？

第3部は、ちょこちょこ伏線回収です。

というより、ラストで回収ですかね。



公爵をズタズタにした。

そして、シユヴァルツがやって来て……公爵を……。

どうやら、あれは現実だったようだ。僕の体の傷が、その証拠だ。このホリンの斬撃でやられた場所、肩の辺りから腰のところまで一直線に斬られた。あの一撃で、『変な感覚』に襲われていた僕は、倒れてしまったんだ。

あの『変な感覚』。

なんだったんだろう。頭のずっと奥から、何かがささやいていた。コロセつて……。けど、あの呼ぶ声……ずいぶん前から聞いていたような気がする。ただ、僕が聞こうとしなかっただけで、前からささやいていたんじゃないか？

奥底で、小さな声で。

考えても仕方がないのかもしれないけど、あれがりサの言っていた『力』なんだろうか。

……あの暴力的な力が、僕の力？

公爵の腕や足を切り裂いても、何も感じない。動じない。あれだけの大量の血が溢れていくのを見ても、ただ、冷静に眺めていた。…なんていうか、自分と違う『誰か』が僕の体を使って、動いていたようにも感じる。その自分の行動を、第3者のように眺めていた。

だから冷静だった？

違う。あれは僕だけど、僕じゃない何かが完全に僕を支配していた。体の動きも、精神さえも。

お前には過ぎた玩具だ

お前は……誰だ？

僕の中で、何をしている？

お前は一体、何のために……？

「ん……」

アンナがもぞもぞと動き始めた。いきなり動き出したので、僕は身動きができなかった。

「あ……れ……？」

寝ぼけているのか、目が半開きのまま辺りを見渡した。僕を見ても、何の反応もない。

「アンナ？」

「……ん？」

「おーい、起きてるか？」

僕はアンナの顔の前で手をチラつかせた。

「……ソラさん？ ソラさん！？」

アンナはギョツとして、僕を見た。

「そ、そうだけど。どうしたの？」

「よ、よかった……」

そう言うと、アンナは突然、涙を流し始めてしまった。何もしていないのに、いきなりこうなるとどうすればいいのか全くわからない。

「ど、どうしたんだよ？ いきなり」

「だ、だって……」

アンナはぐずりながら続けた。

「ソラさん、あれから……3日間、ずっと寝たっきりで……。いくら呼びかけても全然起きなくて……」

3日間ずっと寝ていた？ そんなに寝ていたのか……。そんなに長く寝ていたのに、何の夢も見っていない。意識が消えて、真っ暗になって、目を開けてみればこの場所にいた。それだけで、3日も経ったのか……。

「けど、よかった。本当によかったです……」

アンナはもう涙で、上手くしゃべれなくなってきている。涙を拭いても、すぐに流れてくる。

「よかった……。本当に……」

その姿を見て、僕はあることを思い出した。前にも、こんなことになったよな。僕が山で気を失って、空と海が泣いちゃったりして……。

アンナも、僕のことを心配してくれていた。きっとこの3日間が、とても長く感じたんだろうな。僕にとっては、一瞬だったけど……。

「アンナ、ありがとう。心配してくれて」

そう言っても、アンナは何も言わない。ただ、泣きながら、鼻水をすすっている。泣くと、どうしてもか鼻水も出てくるもんだ。

「お、おい。アンナ、もう泣くなって」

僕がそう言うと、アンナは僕に抱きついてきた。ベッドが大きいので、1メートル以上離れていたが、アンナはベッドに飛び乗った。

「ちよ、ア、アンナ？」

突然のことで、またもや体が硬直してしまった。

「私、うれしかった……」

「え、え？」

どうすりゃいいのかわからず、僕は焦っている。

「ソラさんは、私を守ってくれましたよね……」

「……………」

ああ、そうだ。彼女を庇って、公爵の剣が僕を貫いた。その中で、僕は後悔した。どうして、殺さなかったのか。

死を予感するというのは、ああいうことなのだろうか。

後悔して、後悔して……。どんどん、落ちていく感覚だった。僕

としての 存在そのものが、夜の海に沈んでいくかのようだった。  
「本当に、うれしかった……」

アンナが僕を握る力を強くした。苦しくはないが、自分の心臓の心拍数が早いことに勘付かれそうので、焦っている。

「だ、だつてさ……前に決めたんだよ」

僕は1度せきをして、息を整えた。

「ヴァルバが言つてた。僕は護られる側ではなく、護る側だつて」  
彼女は顔を上げた。

「だから、とつさにああしたまでだ。まあ、さすがに死ぬかと思つたけど」

僕は小さく苦笑いをした。

「……もう、あんなことしないでください」

彼女は僕の手を掴み、祈るように持ち上げた。

「ソラさんが死んじゃったら、自分が死ななくても……うれしくなんかない……」

「……」

「だから、あんなこと……2度としないでください……」

アンナはそう言つと、僕を真剣な眼差しで見つめた。彼女の眼にたまった涙は、雫となってほほを伝つていく。

僕は優しくアンナの頭を撫でた。

「……わかった。もう、あんなことはしないから。だから、もう泣くなつて。せつかくのかわいい顔が、崩れちゃうからさ」

そう言つと、アンナは顔を真っ赤にした。

「なんて、冗談」

「ソ、ソラさん！」

「ハハハ」

すると、いきなりドアをノックする音が聞こえた。アンナはすぐさまベッドから下りて、すぐそこにあるいすに飛びついた。顔を真っ赤にしてるところが、見ていて面白かったりする。

ドアが開き、誰かが入つて来た。

「お、目が覚めたか？」

それはヴァルバだった。いつもどおりの顔をひょこつと出して。

「ヴァルバ……」

「なんだ、元気そうじゃないか」

そう言つと、ヴァルバはのっしのっしと歩み寄つてきた。すると、今度は宰相が入つて来た。

「やあソラ君。気分はどうだね？」

宰相お得意の笑顔で、訊いて来た。

「宰相……あれ？　ここつて、もしかして宰相の屋敷ですか？」

「いや、私の屋敷はこんなに豪華ではないよ」

宰相は歩きながら、この大きな部屋を見渡した。

「え？　じゃあ……」

「ここは、王宮の寢所だ」

「お、王宮!？」

驚くのは当たり前だ。だって、3日前に国王に地下牢に打ち込まれたんだぞ？　どういう経緯で、ここにいるのかもわからないから余計混乱する。

「……どうして僕はこんなところで寝ているんですか？」

そう言つと、宰相はベッドの近くにあつたイスに座つた。

「実は3日前、あそこで公爵が惨殺されたことにより、一時は君たちが犯人なのではと思われたが、カルヴァン卿がステファン卿の魔法を受けた証拠があつたことや、私が居合わせたこともあり、君たちの誤解は全て解かれたのだよ。そしてその謝罪として、君たちに対する高等治癒機関の使用および、王宮での完全治療、1000万セルトが送られることになったのだ」

「は……なるほど。さらに1000万……ええ!?　1000万セルト!？」

僕はあまりのことに、飛び起きた。

「ハハハ。君は、面白くなるほど当たり前前の反応を見せてくれるね」  
宰相は頭を抱えて笑い出した。なぜか、自分が恥ずかしくなつて

きてしまった。

「さて、ソラ君も目を覚ましたことだし、本題に入るとしよう」

宰相は笑いが収まると、2度くらい目をこすり息を吐いた。そして、僕たちを見回した。

「本題？ なんですか？」

「君たちの、これからのことについてだ」

そして、宰相は淡々と説明し始めた。

「ステファン卿、いや、もう公爵ではなかったな。大逆の罪人口ベスピエールの事件のこともあり、陛下もカルヴァン卿の言うことを無視するわけにはいなくてな」

宰相は完璧に公爵を呼び捨て状態。今更と言えば今更だが、ステファンねえ……。あいつ、本当に死んだんだ……。この時、初めてあいつが死んだことを実感した。

「陛下はインドラという組織を認識し、やつらの目的が邪神の復活ということならば、他国とも協力して対策を練らねばならぬ、と申してな」

それで、他国に使者を送ることになったらしい。

「ヴァルバ君とアンナさんから聞いた話では、リサはシュレジエンへ向かったと聞く。そうだね？」

「あ、ハイ、たしかにそう言っていました」

「……いくらリサとはいえ、一般人が一国の首領に会っても正式な協約は結ばれない。だから、ルテティアからの正式な使者を送り、協約を結ばねばならない。しかし、それはソフィア教を信仰している国だからこそできるのだが、イデア王国はそうもいかない」

たしか、イデア王国は独自の神を信仰しているんだっただか。

「……違う宗教だからですか？」

ヴァルバは壁にもたれかかりながら、宰相の話聞いていた。

「それもあるのだが、まあ……話は邪教のことになる」

邪教とは、今から約700年前、ロンバルディア大陸で信仰され

た宗教のことで、大国ミッドランドがそれを信仰したらしい。

「邪教において奉じられている神は邪神ロキ。ソフィア教の主神である光神と相反するものであり、敵対するのは納得がいく。しかし、イデアで信仰されている神とは関係が無いのだよ」

「ああ……そう言えば、以前そんな話を聞きましたね」  
ミレトスで、リサたちが言っていた。

「イデアの神様はソフィア教とは関係ない。つまり、ソフィア教と敵対する者……邪神やインドラなんてどうでもいいってことさ」

ヴァルバが言った。

「……邪神のことがどうでもいいっていうのは、なんだか冷たい人たちのように感じます」

アンナが小さく言った。

「まあ全員が全員、そういった人たちということではないのだ」  
宗教のこともあるが、他にもあるらしい。

「……今までイデアとルテティアは、この王国が建国された時は友好関係を築いていた。なぜだかわかるか？」

「ええっと、たしかミッドランド王国によって一時滅ぼされていたイデア王国の復興を手助けした、から？」

「そう、御名答」

宰相は指を鳴らして僕を指した。前に、ヴァルバが説明してくれ  
たっけ。

「イデアが再興されて、400年前までは友好関係を築いていた。  
だが13代国王の時代に領土拡大政策が実行され、西の大陸諸国や  
イデア、さらにシュレジエンにまで侵略したのだ。その時、当時の  
イデア国王である恵霊王を卑怯な手口で殺したため、ルテティアは  
イデアの民から恨まれることとなったのだ」

「……たしか、ルナ戦争っていうやつでしたっけ？」

ヴァルバが言うと、宰相はうなずいた。

「そういうこともあり、以来ルテティアとイデアは険悪な仲となり、  
通商関係の使者以外はイデアに入国することさえできない状態とな

った。戦争を仕掛けられることがないのが、唯一の救いだかな」

アイデアの軍力はルテティアに比べると小さいもので、戦いなんて挑まないのだという。したらしたで、逆にやられるだろうし。

「そこで、君たちにアイデアへ行つて国王に謁見し、インドラのことについてお話してもらいたい」

「……僕たちがですか？」

「俺たちがルテティア人ではないから、ですか？」

「御名答。ソラ君は別世界の人間といつても、見た目はアイデア人。ヴァルバ君も限りなくアイデア人。アンナさんは……まあ、何とかなるだろ」

なんとかなるって……本当に、大雑把な人だなあ。

「……どうだ、やってくれぬか？」

宰相は一転、真面目な表情に変わった。

やってくれと言われても、どうしよう。たしかに、インドラの脅威を他国に伝えなければならぬ。そのためにルテティアに来た……というのもあるが、ここには空とインドラに関する情報があると思つたからこそ、来たといつても過言ではない。

しかし、アイデアに行つても空のこと、インドラのこともわかりそうにない。意味がないような気がする。自分がこの世界に来た目的と、あんまり関係ないと思つた。

けど、それでいいのだろうか。

自分の目的と関係がないからって、世界の脅威となることを他国へ伝えることを拒むのは、なんというか……かっこ悪い。いや、事情を知っている人間として、恥ずかしい。事情を知っているからこそ、インドラの暗躍を食い止めるために、しなければいけないことがたくさんあると思つた。

……表裏一体の考えが、頭の中で渦巻く。自分にとって利益のないこと。今、この世界のためにできること。

……どちらを取ればいいのか。

「私は、もちろん行きます」

アンナがいち早く言った。その発言に、僕が戸惑ったのは言うまでもない。

「俺も行くぜ。やらなければならぬこと、だしな」

ヴァルバはニコツと笑って、言った。

「……ソラ君は？ どうする？」

宰相が急かすように言った。と言われても、さっきまで迷っていたのにすぐに結論を出せるはずなんてないよ。

「……い、行きます」

「そうか。わかった」

力無く答えてしまった。勘がいい人だったら、僕が迷っていることを察知するだろう。

「それでは、君たちは一先ず陛下にお会いしてもらいたい」

「……陛下に？」

「ああ。陛下は、今回のことを詫びたいとおっしゃられている。特に、アンナさん。そなたに」

宰相はアンナをじっと見つめ、言った。

「私に、ですか？」

「……ダグラス卿のこと。ロベスピエールのこと。一国の首領として、そしてロベスピエールに意思がなかったとはいえ協力した者として、陛下はそのことをひどく悔やんでおられて、どうしても、謝罪の意を示したいとおっしゃっておられるのだ」

そっか……。今回のことで、最も心を傷つけられたのは、アンナだ。残酷な真実を伝えられ……。殺されそうになって。

「……」

「お願いできぬか？」

「……わかりました。行きます」

アンナは大きくうなずき、言った。その顔に笑顔なんて浮かんでいなかった。

僕はこの病人のような服を脱ぎ、置いてあつた服を着た。どうやら、僕が着ていた服のようだ。ズタズタにされたはずだが、きれいに直されていた。わざわざ同じ服を取り寄せたのだろうか？ まあ……王族の考えることだ。いちいち無駄な労力でも使つたんだろさ。

部屋を出て、宰相の後を付いて行つた。どこもかしこもレッドカーペットが敷かれていて、両側の壁には何枚もの絵が飾られていた。お金持ちの人つて、必ずと言っていいほど絵を飾る。こういったものが何百万つていう値段なのに、よく買うよなあ。食料とか、日常に不可欠なものを買つたほうが損をしないと思うんだけど。

長い廊下のようなものを通り、ドアを開けると、最初に城に入つたときに出た場所に出た。中央にはあの大きな階段があり、その奥に王の間へと続く扉があつた。あそこで、国王が待っているらしい。扉が開けられると、初めて謁見した時のように、奥の真ん中の玉座に国王が座っている。両隣にある2つの玉座にも、女性と男性が座っていた。若いようなので、王子と王女、といったところか。

僕たちは前に進み、前回よりも国王に近い場所に止まつた。大体2メートルくらいだろう。もし、僕が暗殺者だったら国王は殺されてしまう。ということは、国王はやはり謝罪する意思がある、という事なのかも。

「陛下、お連れ致しました」

宰相が一礼をした。

「うむ。ご苦労」

宰相はもう一度一礼をして、前回の立ち位置に戻つた。

「…ソラ…ヴェルエス、ヴァルバ…ダレイオス、そして、アンナ…カティオ…いや、アンナ…ケルヴィン。これまでのことを、すまなく思う。……申し訳ない」

国王は玉座から降りて、僕たちと同じ目線の高さで、謝罪をした。

「ワシがステファンの愚行の数々に気付かず、奴の好き勝手を許してしまった」

国王は顔を伏せていた。

「本当にすまぬ……」

最後には、頭まで下げてしまった。一国の主にここまでされてしまったら、僕としてはうるたえてしまう。

「彼らに、例の謝礼金を」

国王は近くの召し使いみたいな人にそう言うと、後ろの扉から大きな宝箱を持ったメイドさんが出てきた。まさか……。

「お詫びとして、1000万セルトをそなたらに差し上げよう」

1000万セルト……。1セルトはきつと1円より価値があるだろうし……。

メイドさんは右端に立っていた僕に頭を下げながら渡してくれた。お、重い。下手したら、死ぬまで生きれる金じゃねえのか？

すると、隣に立っていたヴァルバが大きいため息をついた。しかも、誰にもわかるように。

「……まったく、どうして権力者はこうなのかねえ」

「なんだと？」

国王がギロツと僕たちを睨んだ。

「陛下、俺とソラに対してはその程度の謝罪で済みます。いや、過ぎる謝罪になるかもしれません」

ヴァルバは淡々とした言葉遣いだった。それにしても、丁寧な言葉遣いだな。僕には無理だよ、きつと。

「しかし、アンナに対してはその程度の謝罪で済むのでしょうか」  
「……………」

国王はきよとんとした顔つきだった。

「おわかりになれませんか、やれやれ……………」

ヴァルバは再び大きいため息をついた。たぶん、このため息で、

そこらへんに立っている大臣たちを敵に回したな……。僕は思わず苦笑いをしてしまった。

「ヴァルバ殿、陛下に対して無礼では……」

ヴァルバは、そう言う大臣の言葉を手を差し出して遮った。

「アンナはステファン」ロベスピエールによって父を殺され、母と姉と別れさせられ、さらに彼女たちは禁忌の術によって殺されてしまいました。これは、陛下が奴を信頼し、権力を与えたがために起きたことでございます。大きな精神的苦痛を受けたアンナに対し、もっと誠意ある謝罪を行うのが国を治める者のあるべき姿ではないでしょうか？」

ヴァルバが言い終わると、辺りはざわついた。すると、大臣の1人である男が足で強く床を踏み鳴らし、前に出た。

「貴様！ 陛下に無礼であるう！？ 何様のつもりだ！」

ヴァルバはくるつとその男のほうを向いた。

「……俺は、陛下にアンナに対して誠意ある謝罪をしてくださいと求めている。それはなぜか？ 陛下はそれ相応の罪を犯したからだ。ステファンの愚行をみすみす見逃し、アンナの家族を奪ったことに加担しているも同然。アンナは気弱で、心優しい少女のため、誰かに悪いことをされても少々謝罪されると優しく許してしまう。しかし、今回のことはそうはいかない。一国の主が、自らの部下が犯した死罪にも勝る愚行に対し、謝罪を行うのは必然。この国の法律であれば、陛下は処刑になります。しかし、国王である陛下が処刑されるということはあってはならぬこと。ですから、陛下にはアンナに対する大きな謝罪を求めているだけです。そのどこが無礼なのでしょう？ できれば教えてくださいませんか、財務大臣」

ヴァルバの睨みに、財務大臣はたじろいだ。

「それに、あなたがステファン」ロベスピエールから賄賂を受け取り、私腹を肥やす代わりに彼に魔道大臣に就任させるよう陛下に進言したことは、すでに全国に広まっているほどの噂がありますが……そのところも教えてくれませんか？」

「う……」

「な、なんじゃと!？」

陛下も驚愕している。

「ステファンが大臣に就任されたのはいつですか？ 宰相閣下」

「……新暦1991。今から10年前のことだ」

「アンナの父、ダグラス卿がステファンの差し向けた暗殺者によって殺された年ですね？ もしかして、大臣はそれにも加担していたのではありませぬか？」

「な、何をありもしないことを!？」

財務大臣はヴァルバの前に進んできた。

「き、貴様！ もう許さん！ 陛下の御前でこれほどの侮辱を行った罪、万死に値する!!!」

「ふざけるな！」

ヴァルバは大きな声で言った。

「お前のような権力やお金に目がくらみ、くだらないことをするせいで、傷付く人がいるんだぞ!? 家を失い、大切な家族を失う人もいるんだぞ!? それがどれほど悲しく、辛いことが貴様にはわからないのか!?!？」

ヴァルバは叫ぶように言い放った。壮麗としたこの広い王の間に、あちこちで跳ね返りながら響いている。

「まだ14歳の少女が、さらわれた姉がまだ生きていると信じて、ここまで来た。そして、とんでもない事実をそれを行った本人の口から聞かされたアンナの気持ち……貴様らにわかるのか!?!? ……いいか？ 権力を持つ者は民を護らなければならない。それが王侯貴族として生まれた者の義務だ！ その義務を果たせなかった貴様らこそ、万死に値するんだ!！」

そして、財務大臣はその場にしりもちをついて倒れてしまった。

「……そして、陛下」

ヴァルバは陛下のほうに向き直った。

「陛下は謝罪の意思を、お金で済ませようとした。謝罪というのはそもそも、金で表せられるものじゃない。最初にも言ったが、俺やソラに対してはそこまで大きな謝罪は求めない。だが、俺たちには想像すらできない、絶望を味わう羽目になったアンナに対して、お金で済ませようというのはどういうことだ!? それが、謝罪する人間のすることか!? お金で、苦しめられた心は癒されないんだ! …… 貴様の重臣たちがそれを認めても、俺は絶対に認めないからな……!!」

ヴァルバはそう言い放った。国王は怒りなのか、体を震わしている。

「き、貴様……」

「なんだ、陛下は謝罪する意思が無いと? それが、ルテティア王国を治めるルーファス8世陛下がなさることですか? それだから、先の戦争でゼテギネアに負けてしまうのですよ。ベルセリオス6世が死ななかつたら、あなたはすでに死んでいる」

「くっ……ぐ……!!」

国王は握りこぶしを、何度も小さく振っている。

「ヴァルバ殿、それまでにしておいてください」

すると、玉座に座っていた男性が立ち上がった。きれいな顔立ちで、若いように見えるが、もしかしたら宰相と同じくらいの年齢かもしれない。

「ア、アルベルト……」

「…ヴァルバ殿、そなたの気持ちは承知した。しかし、仮にもルテティアの国王である我が父にそこまで言うと、さすがに取り返しのつかないことになりかねない」

「……」

「……ですが、父上。失態を犯したのは我々、上に立つ者たち。民

を護るべきの者が、それと反対のことを犯した。ならば、王族である我らが頭を下げねばなりません」

アルベルト王子は段を下り、しゃがんだ。

「……アンナ殿。そなたとそなたの家族に、心よりお詫び申し上げます。どれほどのことをしても償いきれぬが、こうする他、謝罪の意を示すことはできぬ。そなたたちが求めるものがあるのならば、それを与えよう。なんなりと申されよ」

アルベルト王子は、深く頭を下げた。

「私も、謝罪しよう」

今度は宰相までかがみ、頭を深々と下げた。

「さ、宰相？」

「……ソラ君。私は十数年前のロベスピエールや、それを取り巻く状況を知らなかったとはいえ、私は今はルテティアの宰相だ。宰相であるからこそ、謝罪をしなければならぬ。そうだろうか？」

宰相の言葉に、ヴァルバの強張った顔も和らいだ。さすがのヴァルバも、宰相を謝らせるつもりはなかったんだろう。

「あ、あの！ もう……いいです」

突然、アンナが叫んだ。

「アンナ……」

「ヴァルバさん……。もう、いいんです」

「だが……」

アンナは顔を横に振りながら、続けた。

「私は……もう十分です」

「十分……？」

「もう、いいんです。だって、これから自分にできることがあるんじゃないかって、気付いたから」

「……」

アンナはくつと頭を上げた。

「お姉ちゃんやお父さん、お母さんのことは、確かに辛かった。けど、私はこれからお姉ちゃんとお母さんのような、魔道注入の被害者を出さないために、イデアへ危険を伝えに行くことができるんです……」

アンナは自分で大きくうなずいた。「だから……」

「だから……もういいんです」

優しく微笑む彼女の奥に、悲しみが見えた。それに気が付いたのかどうかはわからないが、ヴァルバは彼女から顔をそらした。

「俺は　　だ」

ヴァルバは何かをつぶやいた。けど、僕は気付かなかった。

その後、国王は謝罪したが、ヴァルバの望むようなものではなく、すぐに王宮へ逃げていくように下がっていった。宰相と王子と女性の人以外はみんな同じように消えて行った。

「……すまないね。父上に代わり、私がもう1度謝ろう。本当に、申し訳ない」

アルベルト王子はもう1度、アンナに頭を下げた。

「も、もういいんです」

「……ヴァルバ殿の言うとおり、心が本当に優しい人だ」

王子はフフッと微笑んだ。

「しかし、父上も困ったものだ。未だに、ステファンのことを気にしておられるのだろう」

「どうして、陛下はステファンを特別扱いするんだ？」

ヴァルバは今も怒った顔をしている。あの国王の態度が、やっぱり許せないんだろう。まあ、それは僕も同じだが。

「陛下とステファンは、幼馴染だと聞いた」

ロベスピエール家は元をたどれば王家の流れを組む一族で、建国当初から王家を支えてきたという。だから代々最高の爵位を世襲し、何かしらの大臣となるらしい。

「陛下が即位した23年前、陛下の即位に反対する勢力が陛下の暗殺などを企てたとき、陛下を身をもって守り、その勢力を排斥したのはステファンなのだ」

「……そうだったな。あの頃、私はまだ幼かったが……ステファンが父上に尽力したのは、偽りではない」

だから、国王はステファンを最も信頼していたのだ。

「私も幼い頃に暗殺されそうになり、彼に助けてもらったことも多々ある」

「…陛下は宰相である私より、ステファンを信じていらした。だから、今回のこともたくさんの証言、証拠があるにせよ、信じるのがなかなかできないのだ」

宰相はうなずきながら言った。

「だったら、宰相はよくステファンを押しつけて宰相になったんですね」

「ソラ君、なぜかという私が常人を遥かに超える頭脳を持っているからだよ」

「へ……？」

「おいおい、レオ。何を言っているんだよ」

王子が苦笑いをしながら言った。

「ハハハ、冗談だ」

2人は、同じように笑いあった。あれ……。もしかして、この2人って。

「もしかして、アルベルト王子と宰相って、幼馴染ですか？」

すると、2人は少し笑いながら僕を見た。

「そうなんだよ。私とこいつは、同じ場所で勉強していた仲間なんだ」  
「殿下、恥ずかしいから止めてください」

「何を？ お前、私と同じ教室で勉強していたと言うことが恥ずかしいとも言っただけか？」

「いやいや、そういうわけではないですよ。ただ、幼い頃の話を読めるのは、本当に恥ずかしいんですよ」

「…今と違つて、泣き虫だつたから？」

「……………」

宰相の動きが止まつた。凶星を突かれたようだ。

「うわ……宰相、なんだかかわいらしいですね」

「ソ、ソラ君、かわいいと言わないでくれ。あの頃は、自然と出るものなんだよ」

「ハハハ。まあ、こいつはその頃から神童ぶりを発揮していてな。聞いたかもしれないが、最年少で中央議員となり、軍では大将にまで上り詰めた男だ。そもそも宰相というのは中央議員120名と、將軍5人以上、公爵5人以上の承認が得られないと就任することができない。ま、ステファンはあまり人望のある人ではなかつたし、な」

だから、宰相は今の地位にいるというわけか。

「まあ、話を変えよう」

王子はゴホンと咳き込んだ。

「今回、君たちにしてもらいたいことはレオから聞いていると思うのだが……………」

「イデアへ行き、インドラのことを伝えることですね」

僕がそう言つと、殿下はうなずいた。

「ああ、そうだ。ルテティアからの使者は一部を除き、イデアへ入国することができないからね。事情を知っている一般人は、君たちだけだ。……陛下に代わり、君たちにお願したい」

「……もちろん、行きますよ。さつき、決めたことですし」

「ええ」

「……………」

ヴァルバは押し黙つたままだ。腕を組み、横をじつと睨んでいる。

「ヴァルバ殿は？」

「……もちろん、行きます」

ヴァルバはうなずいて言った。

「そうか。じゃあ、そのことについていろいろと決めようか」

その後、出発の日時など、いろいろと話し合った。

出発は1週間後。なぜなら、ヴァルバと僕の怪我がまだ完治していないからだ。僕は『物理障壁』とやらのおかげで傷は浅く、さらに『自然治癒』というのが発生していたらしく、傷の痛みはあるが、ほとんどふさがっているらしかった。

ヴァルバは平気そうにしていたが、かなり傷が深かったらしく、王室のほこる『高等治癒機関』の治癒術では完治させることはできなかった。いちおう、1週間ほど治療しようということだ。

僕は1日ほどで、傷の痛みを感じなくなった。部屋で寝ているのも暇なので、何をしようかと王宮の中をブラブラうろついていたとき、ある人に呼び止められた。

「……ソラさん、でしたよね？」

「え？ あ、はい。そうですけど……」

この人、王子と一緒にいた女性だ。もしかしたら、王妃様が王女様かと思ったが、あまりにも若いので前者だろう。

「私はレイフエーゼ。この国の王女です」

「あ……、どうも」

僕は一応、ぺこりと頭を下げた。

わっかいなあ……。何歳だ？ 下手したら、同年かもしれない。まあ、空たちに比べたら大人だけど。

「お兄様があなたを探しておられました。来ていただけませんか？」

「え？ 王子……殿下が？」

「ええ。お暇ならどうでしょうか？」

「ええ……と、じゃあお邪魔します……」

「では、付いて来てください」

王女様はニッコリと微笑んだ。ていうか、今の僕のセリフが変だったもんだから、笑ったんじゃないか？ なんか恥ずかしいなあ、もう。

しかし、王女様っていうのはそこの人とは別格というくらい、服装や装飾品が派手だな。ああいうところに、国民の税金がかかっていると思うと、少し嫌になる。この人や殿下はいい人のように見えただから尚更だ。

王女様が案内してくれた場所は空中庭園、とでもいうんだろうか。色とりどりの花が咲き乱れ、透明なドームで覆われていた。なのにこの庭園の中には鳥たちがあちこちを飛び回り、鳴いている。その鳴き声は、心地いいものでしかなかった。こんな時代に、こんなものがあるなんて信じられない。中世ヨーロッパ程度の文明だと思っていた。まあ、魔法がある時点でかなり違ふところが出てくるんだろうけど。

その庭園を少し進むと、公園のような場所に出た。その中央に定番の噴水があり、その近くに殿下が立っていた。

「お、来たな」

すると、ベンチに誰かが座っているのに気付いた。それは、アナだった。

「あれ？ アンナも呼ばれたの？」

「うん。ソラさんも？」

「ああ」

殿下のそばに行くと、殿下は僕を見ず、噴水を眺めた。

「これからあと6日ほど君は暇だろ？ 実は私も公務が終わり、暇なんだよ」

「はあ……暇、ですか」

僕はあんまりいい予感がしなかったので、やる気の無い返答をした。

「それでどうしようかと思っていたとき、レオに相談したんだ」

「レオ……宰相ですか？」

「ああ。彼が『ソラ君はなかなか面白い。剣術などを一緒にやってみてはいかがでしょうか』というので、そうしようと決めたのだ」

「……ん？ 剣術？」

すると、殿下は剣を抜いた。

「ちよ、殿下!？」

僕はとつさに10歩くらい後ろに下がった。

「まあまあ、逃げるなよ。これは見た目は剣にしか見えないが、人を切ることはできないから、大丈夫だよ」

「じゃ、じゃあ、突くのは……」

僕がそう言うと、殿下はきよとんとした顔をした。

「あ、それはどうかな。とんがってはいないが、もしかしたら刺さっちゃうかもね」

殿下は剣を見ながらニツコリと笑った。

「じゃあ危ないじゃないですか!」

「こら。剣を怖がっては、彼女を守れないだろう?」

殿下はその剣でアンナを指した。

「な、何言ってますか!？」

僕は顔を赤くした。僕とアンナはそういう関係じゃないのに。そして、アンナも顔を真っ赤にして、伏せていた。

「あれ……違うのかい? レオがそんなことを言っていたんだが」

「さ、宰相めえ……」

ちくしょう。あの宰相、初めて見たときはクールで真面目な人だと思っただのに、かなりのいたずら好きと見える。

「ま、そのことは後々聞くとしよう。どうだ? 一緒に剣術を磨こうとは思わないか?」

「え?」

「君はこれからたくさん、戦うこととなるだろう。だから、君が探している人を助けだせるようになるために、腕を磨かなければならない。……しかも、男なんだから強くないといけないだろう?」

殿下は剣をくるくる回し、鞘に収めた。中国雑技団みたいな技に見えた。

「はあ……まあそうですね」

「なんだ? その力のない返事は」

「はい？」

「よし。その根性、叩きなおしてやろう！ 特訓だ、特訓。よし、こーい！ー！」

殿下はまた剣を抜き、ぶんぶん振り回し始めた。

「ちよ、殿下！」

「ホラ」

殿下は僕にもう1本の剣を渡してくれた。それは、殿下が持っている剣と同じく、切れない剣だ。

ええい、しょうがない。やるしかないでしょう！

「おりゃー！」

そして、僕と殿下の特訓が始まった。殿下はけっこう腕がいい。僕が言うのもおかしな話なただけだね。

どうやら王子であるために、小さい頃からそういった訓練を受けてきたらしい。剣術、槍術、弓術、魔術、兵法術、帝王学など、たくさん学んできたという。王族として生まれた人間の宿命だという。望まずに選ばれてしまったのに。

「あなた、きれいな顔立ちね」

王女はアンナに微笑みかけながら言った。アンナは照れながら、顔を左右に振った。

「あ、え？ そ、そんな……王女様に比べれば、だめですよ」

「まあ、謙遜しちゃって」

王女はフツと笑った。真っ白な肌が、太陽の光を受けている。

「……あの、王女様。失礼だと思うんですけど、おいくつですか……？」

「いくつに見える？」

王女は意地悪そうに言った。アンナは空を見上げ、少し考えた。

「えっと……22歳くらいですか？」

「いいえ、19歳よ」

「はあ〜…大人っぽいですね……」

「あなたは、おいくつ？」

「まだ14歳です」

「……それにしても子供っぽいわね」

「……よく言われます」

アンナは苦笑いをした。自分が子供っぽい顔立ちということを感じているようだった。

「フフ、正直ね。……あなた、ソラさんのこと、どう思ってる？」  
いきなりの質問に、アンナは目を見開いた。

「どうって……えと、あの……」

困っている様子の彼女を見て、王女は小さく笑った。

「言わなくていいわ。見ててわかっちゃったから」

「ええ？ わかるんですか？」

「だって、顔に出ているもの」

「う………そんなあ」

アンナは顔を真っ赤にしていた。

「かわいいわね、ホントに」

王女はまるで、どこかの公園で遊んでいる子供に対して言うような口ぶりで言った。

「ところで、ヴァルバさんのこと訊いてもよろしいかしら？」

「ヴァルバさん、ですか？」

アンナは顔を少し横に倒した。

「ええ。彼、どこの人？」

アンナは空を見上げながら、うん、と唸った。

「一応ルテティア人らしいんですけど、イデアの人とのハーフらしいです」

「なるほどね……」

王女はあごに手を当て、考えるそぶりをした。

「……？ 何か、気になることでもあるんですか？」

アンナは王女を覗き込みながら言った。

「彼……どこかで見たことがあると思ったの」

「そう、なんですか？ あ、旅人って言うていたから、もしかしたらこの王都に来たときに見かけたのかもしれないね」

ソラと王子の剣がぶつかる音が響く。王子がソラを手玉にとっているように見える。

「そう……。あの目の色、もしかしたら……」

「え？」

「……いや、なんでもないわ」

王女はフツと笑った。

「????」

「けど、ヴァルバさんって本当に25歳？ お兄様と同じくらいにしか見えないんだけど」

「アルベルト殿下と？ 殿下って、おいくつですか？」

王女はソラたちを見ながら、微笑んだ。

「ソラさんと特訓している姿を見て、何歳くらいに見える？」

アンナは王子を見て、少し考えた。

「そうですね……25歳くらいかな？」

「宰相と同じ、36歳よ」

「ええ！？ ほ、ホントですか！？」

アンナは、驚きで思わず声が大きくなった。

「若作りでしょ？ レオポルトも見た目は若いしねえ。もしかして、2人して変なものでも飲んだのかしら」

王女は笑いながら言った。アンナも、思わず笑ってしまった。

「アハハハ。そうかもしれないね。……じゃあ、ヴァルバさんは36歳くらいに見えたってことですか？」

「だって、それくらいに見えない？」

「ま、まあ、そうですね」

アンナは仲間であるヴァルバに対して、うんとはうなずけない。

「……ヴァルバ、ダレイオスねえ……」

「……??」

王女は意味深につぶやいた。アンナには、何もわからなかった。

## 24章：忘却の砂漠 砂塵の向こうで待つ者たち

ようやくヴァルバの傷は完治した。高等治癒機関による治療により、普通は数ヶ月かかる傷も、1週間程度で治ったのだ。「治癒魔法」といって、損傷した細胞や筋肉組織を繋ぎ、元に戻すものらしい。攻撃系魔法に比べて扱いが難しいらしく、さらには特殊なエリメンタル（光の元素と基本元素を組み合わせたものらしい）であるため、上位魔法を扱える魔術師でもあまり扱えないのだとか。

僕はこの1週間で、けっこう剣さばきが上手くなった気がする。殿下は今まで剣を扱ったことが無いのに、呑み込みが早いと褒めてくれた。

「持って生まれた才能かもしれんな」

とは言うものの、至極平凡な僕に剣術の才能？　なんか、嘘を言われているような気分だ。素直に喜べばいいのだが……所詮、人殺しの技だしな……。

殿下と宰相、2人は似ていると思った。なんていうか、兄弟のように見える。幼馴染だということもあると思うけど。

初めて出会ったときの印象は、2人ともクールで、そこらへんの丁寧な貴族と同じだと思ったのに、なんていうか、大雑把で、ユーモラスがあり、お馬鹿なことを言う人だった。面白いんだけど、僕の王子と宰相ってこういうイメージを崩された感じだ。まあ、ああいう人だからこそ、すごい人なのかもしれないけどさ。

元老院の筆頭であるステファンが死んだため、そして彼の執務室から発見された資料から賄賂を受け取っていた者・協力者などが判明。多くの有力議員・元老院議員が捕らえられ、朝廷の編成が忙し

いとのこと。それでも、インドラに対しての会議は毎日為されている。

その会議の内容としては、明白になったインドラが使用する「暗黒魔法」についてだ。

そもそも暗黒魔法というのは、古代魔法の一種でティルナノグ帝国が作り出した最悪の魔法らしく、世界を構成する7つのエレメンタルを含んでおらず、特殊なエレメンタルを持っているらしい。それは解明されていないが、闇のエレメンタルに近いものであるという。遙か昔には、そういった特殊なエレメンタルは自然界に存在していたのだという。なぜ存在しなくなったのか、その理由は解明されていない。ティルナノグ帝国や、それ以前に存在していたといわれる「創世時代」の国々によって枯渇したのではないか……というのが、最も有力な説だとされる。

おっと、話が変わっていた。

暗黒魔法は前にも言ったけど、1度でも喰らうとその後、体が強力な毒素に犯され、死に至る。ステファンは人体実験も行ったらしく、ほんの数分、数十分で死亡したという記録が記されていた。「所詮伝説」と高をくくっていた多くの貴族・大臣は、あまりのことに肝を冷やしたそうだ。

対策を講じるといつても、ステファンの資料には「いかなる魔法でも治癒することはできない」と記されていたため、「論議など無意味」と思っている議員が多く、会議はなかなか進展していない。

何せ、2000年以上も昔に開発された魔法だ。当時よりも技術の低い今の時代、どうにかしろという方が無理な話なのかもしれない。暗黒魔法にしても巫女にしても……この世界には謎が山ほどある。この世界とあちらの世界。どういった関係で繋がっているのか。

どういう成り立ちでこうなったのか。……この世界に、その謎を解く鍵があればいいんだけど。

「では、気をつけて行けよ」

見送りには、殿下と王女様が来てくれた。宰相たちは議会のため、忙しいそうだ。

「短い間でしたけど、お世話になりました」

アンナが丁寧に頭を下げた。

「しかし、本当にいいのか？」

「……何がですか？」

「爵位を賜るという話」

「……」

そう、アンナは爵位を授かってはどうかという話を持ちかけられた。行方不明だと思われたブルターニュ子爵の娘がいたから、後継者として爵位と領地を相続してはどうかというものだ。国王が言い出したらしいが、まあ、謝罪というのはこういったものでしか表せることができないんだろう。

けど、予想していたとおりアンナはそれを断った。自分は人の上に立つような人間ではないと。民から税金をもらうようなことはできないとまで言った。国王としては、クテシフォン公爵の領地を含め、王族直轄の領地が増えるから裏でニヤニヤしてるんだろう。

「君のような人こそ、人の上に立つべきなのかもしれないが」

殿下はどこか哀しげに言葉を放った。

「……ソラ君、君は短い間で上達した。ヴァルバ殿と一緒に力を合わせ、アンナさんを守るのだぞ」

「……わかってます」

自信は無い……いや、そう思っちゃいけない。二人を護れなくて、空を救えるのかって話だ。

「へっぴり腰になんなよ？」

後ろでヴァルバがニヤニヤしながら言った。

「うっせ！ これからを見とけ！」

「おっ、なんか俺が見ない間に成長したか？」

「今度見せてやるよ。……人を殺すことには、まだ抵抗があるけどな」

「……そこは気長にしないとな」

と言つて、ヴァルバは僕の肩を軽く叩いた。たしかにヴァルバの言うとおりだが、僕のせいでも……僕の中に迷いがあつたせいで、みんなが傷ついた。それを考えると、気長に結論を出せるものではない。

……やれやれだよ、ホント。

「それはさておき、君たちに話しておかなければならないことがある」

殿下は一呼吸入れ、話し出した。

「リサのことだ」

「リサ、ですか？」

リサか……。最近、すっかりあいつのことを忘れてたな。そんなことを言えば、またデコピンが飛んで来るんだろうけど。

「彼女に対し、いろいろと不思議な点が浮かんでくるはずだと思うが」

「まあたしかに……リサは貴族とかでもないのに、どうして他国の偉い人にあつたりできるんだろうと思いましたが」

「彼女は貴族ではない。しかし、貴族ではないがもつと別の人間なんだ」

「……どういふことですか？」

僕が訊くと、殿下は王城のあの金色の鷹を見つめた。今日は雲一つない晴天で日差しが厳しいが、心地よい風がさつきからずつと吹いているので、夏だというのに春のような気分だ。

「……彼女は特殊な一族の人間なのだよ」

殿下は僕たちに向き直った。

「『ラグナロク』と呼ばれる一族の人間なんだ」

ラグナロク……？ それ、北欧神話のやつか？

「『ラグナロク』は強大な魔力を秘めた一族で、それは常人の理解を超えるほどだ」

一般人では扱うことのできない魔法を使用できると云われている  
そうだ。

「そして、彼女はその一族の生き残りだと云われる」

「生き残りって……滅んだんですか？」

アンナが言った。

「ああ。2000年くらい昔に、突然姿を消したと言われる。……  
そもそも、1人で一個中隊を壊滅させることができる魔力と力を持  
ち合わせていると云われ、国としては欲しい逸材なのだよ」

生き残りがいることを信じて、ルテティア王国や神聖ゼテギネア  
帝国のような国は、彼らを求めていたのだとか。

「すでに伝説だと思われていた6年前……リサはこの国にフラツと  
現れた」

「6年前……？」

ということは、リサは10歳か？ ……そんな幼い頃に、1人で  
旅をしているというのか？

「リサは1人だったんですか？」

僕は疑問に思ったことをすぐに訊いた。

「ああ。彼女はなぜか1人だったし、ひどい怪我をされていてな。そ  
れで、1年間ほど高等治療医療機関で療養していたんだ。そこを使  
わしたのも、彼女が普通の人間ではないとわかっていたからね」

高等治療医療機関は一般人が利用することはできない。王侯貴族、  
あるいは戦時にだけ使用する。

「そして何者なのかを問うと、ラグナロクの者だということでこちら  
は大騒ぎ。最初は疑ったが、彼女の持つ大きな魔力や見たこともな  
い魔法、卓越した格闘能力。信じるほかになかった」

「……あいつ、すごい女なんだ」

「想像できませんでしたね」

僕とアンナは顔を合わせて言った。

「父上はこの国の貴族として受け入れようとしたが、体よく断られてしまった。その後、彼女は諸国を放浪して各国の王に謁見しているそうだ。……まあ、ここ最近父上はリサには会いたがらないがね。理由を問うと、「無礼だから」らしい。リサだもんな……。どうせ、ズカズカと言いたい放題のことをしてきたんだろう。容易に想像できてしまう。」

「しかし……何のためにあいつはそういうことをしてるんだろう？」  
僕はぼそつと呟いた。

「なんのために僕のいる世界に来たり、あちこちで動き回ってるのかな……」

「それは、インドラをどうにかするためじゃないか？」

「インドラが結成されたのは3年前だろ？ だったら、6年前から国々を歩き渡っているのはなんなのか、気にならない？」

「ん……まあ、言われてみればそうだな」

ヴァルバは腕を組んで言った。

「リサにはリサなりの、個人的な目的があるということなのだろう」  
殿下が言った。

「目的、か」

もしかして、大怪我をして王都にたどり着いたってということが関係するのかもしれない。

「なんにしても、そればかりはリサ本人に聞かないとわからないことだ」

殿下は頭をかきながら言った。

「……ですね」

「さて、そろそろ出発するか」

ヴァルバが背伸びをしながら言った。

「そうですね。もう、お昼になりますよ」

「じゃ、ささつと行こうか」

僕たちは顔を見合せ、馬車に乗り込もうとした。

「おっと、ソラ君、君に渡したいものがあつた」

「はい？」

殿下は王女様から、何かを受け取つた。そしてそれを差し出した。

「これ……剣、ですか？」

「ああ。君にあげようと思つてね」

殿下はニコツと微笑んだ。

「けど、こんな立派なものを……」

その剣は大きさと重さは前の剣とほとんど変わらない。しかし、刀身がすごく輝いていた。鏡のようで、僕の顔を映し出している。鐔の部分なんて、金が備え付けられているように見える。

「君が持っていた剣では、これからの戦いでは役に立たないかもしれない。それに刀身がボロボロだった。あれでは、鍛冶屋でも直すことはかなわないからな」

「そう、ですか……」

あれはあれで気に入っていた。初めて手にした武器だったし、少し思い入れがあつた。けど、もう直せないほど壊れているのなら仕方ない。武器が武器として機能しないなら、必要ないのだから。

「これでヴァルバ殿とアンナさんを守り、君の大切な人が救い出せるよう祈っているよ」

殿下はその剣を自分の額に付け、おまじないをするようにつぶやいた。そして、僕に手渡した。

「ソラ君、がんばりたまえ」

「はい。……ありがとうございます」

僕はお辞儀をした。アンナとヴァルバも、丁寧に頭を下げた。

「じゃあ、お世話になりました！」

「気をつけてくださいね、みなさん」

いつ見ても上品さを失わないのが、王女様なのだろうか。ていうか、本当に何度見ても人形みたいな美しさだ。同じ人間とは思えない。

「近くを通つたら寄つてくれ。歓迎するよ」

「ええ、わかりました。殿下、本当にいろいろありがとうございます」

殿下は本当に楽しい人だった。王子っていうからいいイメージが無かったのだが、兄さんのような感じだった。もし自分に兄さんがいたら、こんな感じなんだろうか。

僕たちはヴァルバの馬車に乗って、王城を背にしながら王都を出た。

目的地はイデア王国の首都・ローヴナー。ルテティアとの国境からずいぶんと離れているらしく、馬車で行くとも一月はかかるという。しかも途中には奥に入りすぎると戻れなくなるという、『忘却の砂漠』と呼ばれるダーナ砂漠がある。都に行くには絶対に通らなければならぬところなので、気を引き締めて行けと宰相に言われた。

まあ最近以案内人というのがいるらしく、迷うことは少ないらしい。ただ、不法にイデアに侵入した人間は砂漠で迷い、帰らぬ人となってしまうのだという。そのため、あちこちに人骨があるのだとか。触れないようにとも言われたが、触りたいと思う人間のほうが少ないと思うんだけど。

道のりとしては、ここから南にあるヴィンラント（宰相の領地。あと実家である）に寄って、食料などを補充。その後、国境の関所に行つて入国認定証の発行をして、砂漠の案内人を雇い、オアシス都市に行つて、休憩。ここまでで20日ほどかかる予定。その後、東にずっと進み、古都ソファラに行つてまた東に進み、王都ローヴナーへ行く。

これまでで最も過酷な旅路になりそうだ。なんつっても砂漠が嫌だ。想像を超えるほどの暑さに、ずっと同じ風景……きつと、途中で気持ち的にも体力的にも参つてくるだろうな……。

そんなことをボソツと言うと、ヴァルバの肘打ちを喰らった。「行く前からどんよりしててどうすんだよ。シャキツとしな、シャキ

ツと」と、笑いながら言われた。

そりゃあな、ダーナ砂漠を体験したことがある人はいいよ。僕は日本という四季がはつきりとした土地に住んでいたんだ。寒すぎても暑すぎても、この体が付いていけないんだよ。

途中、僕は恐ろしい話を聞いてしまった。それは、ヴァルバは4回ほど商業の都市であるジェノヴァに行くためにダーナ砂漠を通つたらしいが、3回ほど死に掛けたらしい。ヴァルバはそれを笑いながら言っていたけど、4回も行って3回も死に掛けるというのは、かなり危険な場所ということじゃあないのか？ そんな話を聞くと、行く前からどんよりするのは必然じゃあなかるうか！？ ああ！ ちくしょう！ なぜかその話をアンナまで微笑みながら「それは大変でしたね」って、他人事みたいに言うし。たしかに他人事なんだけど、それが他人事じゃなくなりそうで恐ろしい！

そんな感じで、気が付けばヴィンラントに着いていた。

ヴィンラントは、ミッドランド帝国時の諸侯の1つの首都だったらしい。その一族の子孫が、ここを治めるヴァッシュ家なのだという。つまり、由緒正しき一族なのだ。

ルテティア王家がミッドランドを倒すことに協力し、初代国王ウィリアム1世と共に、16代ヴァッシュ家当主ファルコ6世は国家の基盤を築き上げたのだという。

ヴィンラントは王族もよく立ち寄る都市で『文学の都市』と呼ばれる。文学者、音楽家、研究者などが多く住み、大きな学校もいくつかある。貴族の多くはここで勉学に励むらしいが、ヴァッシュ家の人間は王家の者と交流を交わすために、わざと王立学校に行くらしい。だから宰相と殿下は幼馴染なのだ。

町の中には多くの学生や、研究者が忙しそうにあちこちを走っていた。みんな同じような服装、つまり白衣なので一瞬、看護師なのかと勘違いしそうだった。

この都市の建物がほとんどレンガ造り。王都のように木でできた民間の家というのがほとんどない。紺色とでもいうのか、青いような黒いような色だ。ランディ孔のように爽やかな感じではないが、さすが王都近辺の都市だと思わせる。

都市の中央に貴族の住む高級住宅街があり、王都のような人たちが上品に笑っていた。

その隣には大きな学校がある。王立の学校らしく、前に述べたように貴族ばかりが通う、超お坊ちゃま学校。文化の都市ということ、かなり高度な勉強をさせられるらしい。それに付いて行けられる貴族の人は、少しイメージとは違った。人の上に立ち、偉そうにしているだけで、勉強とか一切努力していないと持っていたし。

北、東、南には5つの居住区があり、富裕層の人たちが住んでいる。逆に西はスラム街と言い、言葉のとおり貧しい人や捨てられた子どもたちが肩を寄せ合って生活している。

宰相はそのスラム街のことについて悩んでいるらしく、自分の資産を使ってどうにかしようとしているが、なかなか上手くいかないらしい。

そのこの宿屋に泊まったんだが、これがまた高級なんだよ。入ってみると、あの魔法石を使ったシャンデリアとか、めちやくちや上手そうな食材を使った料理とか。中にいる人たちは、みんな貴族のような人ばかりで、自分たちがその中にいると、なんだか場違いのような気がする。結局、そこらの普通の宿を利用することになったんだけど。

王都からの承認書とやらで、ほとんどの宿屋・ホテルがただで使えるようになってしまった。どうやら、朝廷がそのお金を払ってくれるらしい。なぜなら、僕たちは国王からの勅命により、イデアまで旅をしているから、らしい。

なんか、少し心が痛いんだよな。だって、ランディアナで貯めたお金がまだけっこうあるし、謝罪とやらでもらった1000万Gもある。…使い道に困るんだよ、ホント。

1日ほどヴィンラントに滞在し、僕たちは国境の町ラジトに向かった。ここにはイデアへ通るための関所が置いてある。とは言っても、商業や貿易関係の人しか通ることはできない。イデアはルテテニアのことを嫌っているからである。

僕たちはヴィンラントから一週間ほどでラジトに着いた。思ったよりひっそりとした町で、人通りは少ない。町並みは、大体西部劇の町並みを想像すればいい。そこらへんに、でっかくて丸いほこりみたいなのが転がっていつていた。

地面を見れば、緑が萌えたルテティア付近やヴィンラント付近とは違い、ほとんど砂ばかり。なるほど、砂漠が近いのがわかる。

あの関所を通れば、ダーナ砂漠か。死にたくないなあ、まだ。

そういえば、砂漠の案内人というのがあるって聞いたけど、本当にいるのかな。こんなひっそりとした場所に。一応、商人とかがイデアへ向かっているはずなのに、50人も住んでいないような町に、それほどの人を案内する人たちはいるんだろうか。どうみてもいないように見えるんだが……。杞憂だといいいけど。

とにかく、入国認定書を発行しなければ。

3日くらいかかると思ったが、イデアへ行く人が少ないため、すぐに発行できた。

「……認定書は？」

関所の兵士が、うつろな目で言った。

「ありますよ、ほら」

馬車に乗りながら、ヴァルバが発行されたばかりの認定書を提示した。

「……どうぞ」

兵士はチラッと認定書を見た後、僕たちに目を合わせることもなく言った。

「あ、あの」

「……………何か？」

僕が訊くと、兵士はやっと僕と目を合わせた。

「ダーナ砂漠の案内人って、どこにいます？」

そう言うのと、しばし沈黙が流れた。兵士は無精ひげのあごをポリポリとかきながら、ため息をついた。

「……………そんなもん、ここにはいねえよ」

「は？」

兵士はもう1度ため息をついて、言った。

「いねえんだよ、そんな人たちは」

「え、ええ？ いらないんですか？ どうして？」

「……………知らなかったのか？ 坊主」

兵士は砂漠の方に目をやった。

「あの案内人つてのは、オアシス都市にしかないんだ。こういつた、関所にはいないんだよ」

「ええ……………マジかよ」

僕たちは3人で顔を合わせて、困った顔をした。

「お、おいおい、どうする？ これじゃあ到底ルーテまで行けないんじゃないの？」

「そ、そうですね。どうしましょう……………」

「大丈夫だって！ 俺が付いてるじゃないの！」

ヴァルバが胸をドンツと叩いて言った。僕とアンナはその姿を口を開けて見つめた。

「……………」

「なんだよ？ どうしたんだよ、2人とも」

「い、いや。別に。なんでもないよ、なあ？ アンナ」

僕は困りながらアンナに振った。

「う、うん。なんでもないですよ、ヴァルバさん」

「……………」

僕とアンナが考えていることはきつと同じだろう。

「ま、大船に乗った気持ちで任せる！ なんとって、俺は何回もあの忘却の砂漠に挑んできた男だからなあ！」

ガツハツハツハ、と大笑いをしたヴァルバ君。何度もその忘却の砂漠に挑んで死に掛けたくせによ。大船に乗った気持ちではなく、泥舟に乗った気持ちになつてしまつよ……。

とにかく、案内人がいないということを知った僕たちは、自分の足を信じてルーテまで行くしかない。ルーテまで行けば、ソフアラまでの道が一応あるらしいので、そこまでどうにかして行くしかない。砂漠では、暑さで馬がやられる可能性があるでここに置いておくほうが賢明だと、その兵士に言われたのでラクダ（これだと楽ですよみたいなことを言われた）を借りて、行くこととなった。

ここからルーテまで順調に進めば、約10日ほど。これでは予定をオーバーするが、まあ仕方ない。案内する人がいないんだから……一応、経験者はいるんだけどね。何度も死に掛けた人が……ということ、僕たちは出発した。地獄の砂漠へ。

砂漠は、最初はラジトと同じくらいの暑さだったが、3日ほど進むと、とんでもないくらい暑いゾーンに入った。ガイアでは経験したことのないほどの暑さ……これは確実に40 を超えてんな……。あつちでは、暑くて35 程度だし。

ラクダは暑さに強いというのはいんだけど、何と云つてもとろい。荷物を乗せているというのもあるけど、それを考えたら馬車のほうが早い。

しかし、この暑さはどうにかなんないかな……。まだ我慢できるっちゃあできるのだが、到着するまで身体がもつかどうか。

あと7日。僕たちよりも、アンナが心配だ。

「しかし、とんでもない広さだな」

ヴァルバが砂漠を見渡しながら言った。

「……本当に、この先にイデア王国なんてあるの？」

「あるさ、もちろん。というか、すでにイデアなんだけど」

「こんな砂漠を領地にしてんの？」

「そう。この砂漠は、イデアにとって大事な場所なんだよ」

僕たちは昼間、テントを作って暑さをしのいでいる。夜中の方が涼しいし、進むには適している。

「なんで？」

「この砂漠、イデアが建国された当初は緑に覆われてたんだ」

ヴアルバは暑そうに、べろを出している。

「それで、当時の都イデアはこの砂漠の中心にあったって云われてる」

「この砂漠に？」

僕もあまりの暑さに、口を開けたまんまにしている。

「ああ。もう砂に埋もれて、その姿を見ることはできないけどな」

オアシス都市ルーテム、当時から存在する古代都市の1つで、湖があるため今でも人々が住んでいる。

「イデア人にとっては、この砂漠は王国発祥の地なんだよ。じゃなけりゃ、こんな砂漠いらないだろ？」

「ふーん。物好きな性格のなのかと思っただよ」

「なんだよ、物好きって……」

ヴアルバが苦笑いしながら言った。

「使えもしない領土を持っていて、おかしいなって思っていたからね。でも、イデア人の郷土愛というのを考えると、あながちおかしい話でもないんだな」

それにしても、イデア人のそういった精神の大きさ、逆に異常さを感じるのは僕だけかな。日本という、自国に対する想いが薄い国で生まれたために、逆に郷土愛の強さがおかしいと思ってしまうたんだろつか。いずれにしても、日本人のその薄い感情を思い出し、なんてバカな人間なんだろって思ってしまう。……日本人の僕がそんなことを思っていると、やっぱり自分は自分の生まれた国に対

する想いが薄いんだなと実感する。

「そうだなあ。……東方民族はそういう心を持ち合わせているから、働き者なのかもしれないな」

「それって、自分の国に対する感謝の気持ちってことですかね？」

テントの影で、アンナは今で言う体育座りをして言った。

「なるほど……。今、自分が住んでいる大地に感謝を、働くっていうことで恩返ししてるのかもな」

「……上手いことを言うなあ」

「俺が？」

「バカ、ヴァルバじゃないよ。アンナだっつ」

「フフ、ありがとうございます」

ヴァルバはどこかのすねた子どもみたいな顔をしていた。

4日目。この日は特別暑い。夜を移動しているが、それでも暑い。昼間に比べればましなほうなんだけど。

行けども行けども、砂だけ。途中で、枯れ果てた草木がポツンやらサボテンがあるだけだった。

まだ4日目だっというのに、昼間の暑さで体力が消耗されたせいか、スタスタと歩くことができない。それに比べて、ヴァルバの元気なこと。顔はいつもどおりの涼しい顔。足取りは普通。しまいはあくびをしている始末。本人曰く、「3度も死に掛けているからなあ。これくらいどうってことないんだよ」と言っていた。僕は何度も死に掛けたからといって、体力がつくというのはおかしいのではないかと疑問に感じたが、いちいち突っ込みを入れては、逆に体力を消耗することとなる。

そして、アンナも顔色が悪い。足取りは重く、顔は俯いたままだ。昨日までは、こうやって歩いている間でも会話をしていた。しかし、今日はほとんど会話もしてない。いや、1度も口を開いていないよ。うな気がする。ただ、小さく肩で呼吸しているように見える。

「ヴァルバ、今日はそろそろ……」

アンナに聞こえないよう、歩きながらヴァルバの耳元で言った。

「そろそろ、アンナが限界……か」

ヴァルバは横目でアンナを見た。

「食料は10日以上あるし、少し予定が狂ってもいいだろ？」

「……そうだな。少し早いけど、今日はこころへんで休憩を取るか」  
そして、4日目は終了した。

5日目、6日目は何とか切り抜けられた。しかし、7日目になると事件が起こった。アンナが倒れたのだ。

最初は砂漠の雑菌に侵されでもしたのかと思ったが、どうやら疲労とこの暑さにやられたということらしい。しかし、このままでは前に進むことができない。

ヴァルバと相談した結果、アンナはラクダに乗せることにした。

ラクダには折りたたみ式のテントや食料、水を乗せていたので、砂漠に入ったときに好奇心で乗って以来、誰も乗っていないかった。

ラクダが持っていた荷物は、僕とヴァルバが分担して持つことになった。

「私のせいで……すみません」

「気にするな。アンナは、僕たちとは違って繊細なんだから」

「でも……」

ラクダに乗ったアンナは、辛そうな顔をしている。

「大丈夫だって。僕たちは男なんだから」

「男で片付けられるのもなあ」

「なんだよ、不満でも？」

「俺たちだからできると言っただけいいね」

ヴァルバは笑いながら言った。

「ま、気にすんなよ、アンナ。俺たちはバカだから、体は丈夫って決まってるのさ」

すると、アンナは苦しそうな顔をしながら微笑んだ。

「おいおい、僕はバカじゃないぞ」

「はいはい。ほら、行くぞ」

「お、おい！ 軽くあしらうなよ！ 訂正しろ！ てーせー！！」  
そう言ってもヴァルバは僕に背中を向けたまま、スタスタと歩き始めた。

「大丈夫」って言ったけど、思ったより荷物が重い。疲れが倍増する。けど、ランディアナでの1ヶ月や、王都での1週間、体をそれなりに鍛えたんだ。ここでそれを発揮しなければ！ ぬりゃああ！！

……逆に気合を入れすぎ、ばててしまったのは言うまでもない。

8日目。砂の丘みたいなのを発見。そこに登れば、ルーテが見えるかなあと思つて登ったが、特に何も無かった。遙か先は風で砂が舞い、霞んでよく見えない。

すでに太陽が顔を出してきている。朝方だつてのに、この暑さはどうにかなんなのかね……。砂漠で生まれた人つて、どんだけ逞しいんだと思つてしまう。肌が焼けるような世界の中で、彼らは平然と生活している。アフリカの人とか……南米の人とか、人間つてのはうまくできてるもんだ。

この日も、アンナをラクダに乗せて移動した。

「ところでさ、ヴァルバは何を目印にして歩いてんの？」

大きな荷物を背負つて、足元の砂漠に大きな足跡を作りながら、ヴァルバに訊いた。

「星を目印にしてるのさ」

ヴァルバは遠くの星空を指して言った。

「星？」

「そ、星」

「んん??？」

僕は星を見上げた。太陽も沈み、今は昼に息を潜めていた無数の星たちが、我先にと輝いている。星座とかあるんだらうけど、自分

は詳しくないのでいまいちわからない。

「旅人にとつて、星は道標なんだよ」

ヴァルバは星空を見上げながら言った。

「大昔から、星は東西南北を示してくれるんだ。当時から旅人は、星を頼りに移動してたんだ。けど、最近は地図っていう便利なものができて、星を利用する人が少なくなってきた。けど俺の場合、地図を持っていないから、星を頼りにするしかないんだよ」  
「なるほど」

「それで、ラジトからルーテまでは南に行けばたどり着けるはずなんだ。つまり、南を指す星を目指して進めば、ルーテに着けるっていう考えなのさ」

「……その南を指す星ってどれ？」

そう言うと、ヴァルバは星を指した。

「あれ、結ぶと三角形になる3つの星、わかるか？」

「えっと、あの鋭角三角形になるやつ？」

「そうそう、それ」

結ぶと、小さな三角形になる星たちがあった。そういえば、『ガイア』にも春だか夏だか忘れたけど、なんとかの三角形っていうのがあったような、なかったような。

「その三角形の真上にある、赤っぽい星がわかるか？」

「ああ、わかる」

「それが、『南の赤光星』って言われる星なんだ。あれは、正確に南を指してるんだよ」

「へえ……」

「だから、心配するなって」

「いや、そりゃあ、ねえ……」

3度も死に掛けているんだから、僕が心配するのも当たり前だろうけど、こればかりは経験者であるヴァルバに任すしかないんだよな……不本意だけど。

「けどさ、2回ほどあの星を目指して歩いたのに、2回とも遭難し

ちゃって、死に掛けたんだよなあ。なんでだろ」

そう言って、ヴァルバは首をかしげた。

「お、おいおい。それって、危ないんじゃないか……」

「大丈夫だって。3度目の正直って言うじゃないか」

ヴァルバは、大きな声で笑った。いつも「なんとかなるだろう」

と考えている僕でさえ、今のヴァルバのセリフによって、身の危険を感じた。果たしてこの砂漠の旅、無事に終えることができるんだろうか……。父さん、母さん……。この馬鹿な仲間をどうにかして……。

9日目。この日は前日に比べると、少々涼しいくらい。それでも、暑いことに変わりはない。

相変わらず、アンナはぐったりしている。毎日、荷物を運んで歩いている僕たちを見ては「ごめんなさい」と言って謝っているが、それは逆に困る。アンナは僕らよりは体が弱いんだから、仕方ないのに。

さすがに9日目となると、僕もばててきた。いや、けっこう最初からばててただけで、そろそろやばいかなと思った。体力が自慢のおっさん面・ヴァルバもヒーコラ言っていた。つまり、肩で呼吸しているということだ。

夜に歩く暑さにはそれなりに慣れたんだけど、足取りが重い。なんて言っても、目的地が見えないからだ。ヴァルバの言うとおり、『南の赤光星』を目指して歩いているんだが、町らしきものなんて見当たらない。それらしきものさえ見つからない。

今日は月が出ていて、この砂の海を照らし出した。それはそれで、今まで見たこともない風景に心を躍らせたんだけど、今の気分ではそれをゆっくりと眺める気にはなれない。くそ……。こういう時じゃなかったら、のほほんと月夜の砂漠を眺めてるってのに……。

10日目。普通に歩いて行ったら、そろそろルートが見えてもい

いはずなんだが…。

足を止め、四方八方を見渡しても、何も見えない。砂漠に入ってから、ほとんど同じような風景を見ている気がする。というか、風景が全く変わっていないような錯覚を起こしてしまう。

「なあ……ヴァルバ。まだかな……」

へトへトで、ヴァルバを見ずに言った。

「見えるはずんだけど……」

ヴァルバも、最初のような元気が声には無い。

「……もしかして、遭難？」

小さな声で呟く僕。

「もしかして、もしかするのかな」

僕とヴァルバはゆっくりと足を運びながら、顔も合わせずに言った。

「ホントに遭難？」

ヴァルバはまるで、自分に訊ねるように言った。

「……遭難かあ……」

「そうなんかあ。……どうしよう……」

「ソラ、今のギャグ？」

「なわけないだろ。こんな状況でギャグ言つやつ精神がしれないよ……」

「……だよなあ」

「あの……2人とも、大丈夫ですか？」

そんな僕たちを見かねたのか、アンナが心配そうに言った。ここ何日か、アンナはラクダの上にいたので、体調は良くなっているらしい。

「ハ、ハ。大丈夫だよ……」

「そうそう……俺はまだ大丈夫。ソラとは違って……」

体力が無いのに、カチンとくるようなことを言いやがって。無駄な体力は使いたくないんだけど、こんな感じだから、冷静な思考が行われていない。自分の反論を止めることができない。

「ヴァルバに言われたくはないよ……」  
「なんだってえ……？」  
「ヴァルバなんて、ハハハ……へろへろじゃないか……」  
「お前こそ……」  
「いや、僕はまだ元気だよ……」  
「へえ、その証拠を見せてみな……」  
「……ヴァルバこそ、見せろよ」  
「……お前が言い出したんだろ？」  
「いや、ヴァルバが言い出したんだよ……」  
「いやいや、お前だって……」  
「あれ、そうだっけ……？」  
「あの、ソラさん？ 大丈夫ですか？」  
「どことなく、苦笑している感じで言うアンナだった。」  
「俺は大丈夫だよ、アンナ……」  
「……アンナは僕に言ったんだよ」  
「違っつて……俺だよ」  
「僕だよ……」  
「俺だって……」  
「このやるお、勝負だ……」  
「なんでこんなことを言っているのか、理解できない。やばい。頭  
がいかれてきたかもしれない。」  
「望むところだ……」  
「あの、2人とも。少し休みませんか？」  
「アンナが慌てながら言った。」  
「……だってさ。どうする？」  
「アンナが言っただ……。俺たちはそれに従おう……」  
「……なんだよ、それ……。この意気地なし……」  
「なんだとお……？」  
「あのお、2人とも？」  
「なんだ、どうした？ アンナ……」

「あ、あの……少し休憩しませんか？」

「……だつてさ。どうする？」

そして、そんなことを約15分くらい繰り返していたら、僕とヴアルバは倒れてしまった。

気が付くと、テントの中にいた。しかも、頭には水で濡れたタオルが置いてあった。横を見ると、同じようにヴアルバが横たわっていた。

もしかしてこのテント、アンナが1人で組み立てたんだらうか。

……あのか弱いアンナが？ さすがに、1人するのは無理だろ……。

テントから出てみると、僕は眩しい光で目を細めた。どうやら、朝日が昇って来たところのようだ。たしか、あの頭がフラフラしていた時は夜だった。ということは、今は11日目の朝なんだろうか。辺りを見回すと、テントの後ろから誰かの声が聞こえた。ぼさぼさの髪をかきながら後ろに回ると、僕は顔が硬直した。

「お、お前……」

僕の声に気が付き、アンナが僕に気が付いた。

「あ、ソラさん！」

そして、アンナと対になって立っていたのは、リサだった。

「リサ!？」

「やつほー、ソラ。元気？ いや、元気じゃないか」

リサは笑顔で手を挙げた。

「ソラさん、体はもう大丈夫ですか？」

アンナが僕に駆け寄り、見上げながら言った。

「え？ あ、ああ。もう大丈夫だけど……これ、アンナが1人でやったのか？」

「……がんばりました!」

アンナはニツコリと笑った。

「うそっ！ マジで？」

「ソラさんとヴァルバさんが倒れた後、なんとか組み立てられたんです」

「そっか……。けど、お前こそ体は大丈夫なのか？ 無理してないか？」

「はい。お2人のおかげで、とても体が軽くなりました」

アンナは元気なポーズを見せて見た。元気なのは安心したけど、アンナは辛い時や苦しい時は、それを隠すタイプなんだよな。どこかで、僕たちに気を遣っているんじゃないかって、少しハラハラする。

「……本当に、大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ！」

アンナはまた笑顔を見せて見た。その笑顔になぜか自分が照れてしまい、顔をそらしてしまった。

「あれえ？ 照れてんの？」

リサが後ろで悪魔のように囁いた。それも、アンナに聞こえないくらいで。

「な、なわけないだろ」

「嘘、照れてんでしょ？」

リサが僕の顔の目の前に、自分の顔を出した。

「嘘じゃないっての！ ……それより、どうしてリサがここにいるんだ？」

僕がそう言うと、リサは元の位置に戻った。

「自分のすることが終わったから、あんたらを追いかけて来たんだよ」

「追いかけて来た？」

「リサさんは、私がテントを張り終わった時にちょうど来てくれたんです。それで、ソラさんとヴァルバさんを運ぶのを手伝ってくれました」

アンナが微笑みながら言った。この言い方、たしかに元気そうだ。「ふーん……けど、よくわかったな。僕たちがここにいてること」

「ん？ まあね。私にかかれば軽いもんよ」

偉そうな体勢をしながら、リサは言った。なんか腹立つ……。

「……ちゃんとした説明を求めてんだけどな」

リサは面倒くさそうに、「ハイハイ」と言いながら、説明を始めた。

「シユレジエンへ行った後、すぐにルテティアへ向かったんだ。もしたら、あんたたちは3日前に出発したって言われてね」

誰に？ ……って訊きたかったけど、訊くまでもないか。たぶん、殿下か宰相、あるいは伯爵なんだろう。

「それで、ルーテに行つてあんたたちを探してもいないし、待つても来ないし、もしかしたら砂漠でくたばってるんじゃないかって思つて、わざわざ探しに来たんだよ」

くたばるって……恐ろしいことを言うなよ。まあ、もうちょっとで本当にくたばりそうだったんだが。

「そしたら、ルーテとは違う場所であんたたちを発見したわけ」

「なるほど……ん？」

違う場所？

「ちよつと待った。ここつて、砂漠のどこら辺？」

「えつとね、ちょうど真ん中辺りかな」

「……ルーテはここからどのくらい離れてんの？」

「ここから真東よ。大体、歩いて5日くらい」

「そ、そんなに離れてるのか!？」

さすがの僕も、手を挙げた。バンザイじゃなく、お手上げ。

「そうよ。あんたたち、一体何を目印に移動してたわけ？ 大昔なら迷つのもわかるけど、今はけつこう知り尽くされてるんだから、迷うことはないと思つただけ……」

呆れた感じでリサは言った。

「ち、ちくしょう……ヴァルバめ。あいつの言うことなんて信じるんじゃなかった……」

僕はそう言いながら、拳を震わせた。年齢詐称疑惑の男の言うことなんて信じるんじゃなかった！……結果的に助かったんだから、いいけどさ。

「あいつの言うこと、信じないほうがいいよ？」

リサはニヤニヤしながら言った。

「あいつさ、方向音痴なんだよ。昔っから」

「……そうなんですか？」

「そ。だって、初めて出会った時なんか地図も持たないでこの砂漠に入って、行き倒れてたんだよ？ 訊いてみれば、ルートに向かっているって言うてたけど、ルートとは反対方向に進んでたんだよ。しかも、それから地図を持って言うてるのに、なぜか持たない。なんだか知らないけど、いずれこの砂漠で死ぬんじゃないかって思うよ」

リサは笑いながら言った。

「まったく……。なんにしても、これからはリサがいるから大丈夫だろ」

「そうですね」

「ええ？ 私が案内するの？」

リサはあからさまに嫌そうな顔をした。

「だって、僕とアンナはルーテなんて行ったことがないし、ヴァルバはもう当てにならないしさ」

「そうですね。お願いします、リサさん」

いつになくアンナは強気だった。このアンナの珍しい行為に押されたのか、リサはほほをポリポリとかきながら、

「しょうがないなあ。あんたらの目的地はアイデア、なんだよね？」

「ああ。そうだけど？」

「だったら、そこまで送ってってやるよ」

「……は？」

リサは夜明けの空を見上げて言った。

「ルーテやソファラを通らず、都まで連れて行ってやるって言うてんだよ。……嫌なのかい？」

僕とアンナは訳がわからず、首をかしげた。それを見たりサは、右手の人差し指を立てた。

「魔法でイデアまで連れて行ってやるってこと」

「ま、魔法？」

僕とアンナは声を揃えて言った。

「うん、魔法」

リサは軽くうなずく。

「そんなこと、できるのか？」

僕がそう言うと、リサは僕の額にデコピンをしてきた。

「いて！ な、何すんだよ！？」

「あんだね、私がどういった人間なのか……すでに聞いてるんですよ？」

「……あっ……」

リサはラグナロクという一族の生き残り。とてつもない魔力を持った、特殊な一族の……。

僕の顔を見て、リサは小さくため息を漏らした。

「私はラグナロクの女。そんじゃそこらにいる魔術師と一緒にされちゃ、困るもんよ」

そう言って、リサはニヤリとした。

「お前の自慢話はどーでもいいんだっての。その  
ズビシ

リサのチョップがのどに直撃。

「げぶっ！ー！」

「あんたって、毎度毎度思うけど……一言余計なんだよー！ー」  
の、のどが……っ、つぶれた。目にも止まらぬとは、このことだな……。

アンナは苦笑しながら、その光景を眺めていた。

「そ、そんで、その魔法ってのはどういう魔法なんだよ？」

言い終わると同時に、僕は咳をした。あー痛い。

「空間転移魔法『アース』っていう、禁じられた魔法の1つさ。そ  
うだね……『禁呪』と呼ばれる、特異な魔法よ」

リサは得意そうに言った。

「これを使えば、一瞬でローヴナーまで行けられる。どうする？」  
「どうするって……」

僕とアンナは顔を合わせた。けど、答えは決まってるだろ。

「行くに決まってるんだろ？ ……楽だし」

「楽ってというのは余計！」

リサはまたデコピンをしてきた。

僕たちは寝ているヴァルバをどかせ、テントをしまい、準備を始  
めた。

「さて、準備はいいかい？」

僕たちはうなずいた。けど、ヴァルバだけわからないような顔を  
している。たしかに、まだ説明していないけど。

「お、おいおい。これから何をするつもりだ？」

「ヴァルバは気にすんなって」

「い、いや、気にするよ」

慌てるヴァルバを放つといて、リサは詠唱を始めた。

「世に満ちし、時の欠片よ。我が血により、その力を現世に現  
したまえ。壮麗たる青き翼、我を光の出でし場所へと誘いたまえ…

…」

リサが描いた魔方阵が光りだした。

「精霊の力のあずかりし地に……その翼を現したまえ アース！」

リサが叫ぶと、魔方陣の光が輪となり、僕たちを包むように上空へと浮かんでいった。その光は、自然と眩しくなかった。

僕がハツとした。地面の魔方陣が浮かんでいた。いや、その魔方陣に乗って、僕たちも一緒に浮かんでいた。

僕が驚いていると、目の前の景色が真っ白になっていった。

## 25章：黄砂の王都 ローヴナー

真つ白な光に包まれ、僕たちはその中を漂っていた。しかし、その感覚はほんの数秒だった。

光が消え、落ち着いてきたところで辺りを見渡した。

さっきまでの砂漠の世界が消えて、数十メートル離れた先に、大きな城塞が見える。王都ルテティアとまではいかないけど、それなりに立派な城塞だ。ヴィンラントのように黒く、どっしりとした威容を放つ。高さは、そこまで高くはないと思う。

「……あれ？　ここは？」

ヴァルバが目をこすりながら言った。

「たぶん、ローヴナーですよ」

「ローヴナー？　アンナ、何言ってるんだ。俺たちはダーナ砂漠にいたんだぜ？　どうしてイデアに……」

ヴァルバは言葉の途中で、辺りを見渡した。そして、顔の動きを止め、視線の先にはあの城塞があった。

「……ん？　あれ、ローヴナー？」

「そうだって」

僕がそう言っても、ヴァルバは目をパチクリさせるだけだった。

「マジで？」

「そ。マジよ」

「……マジ？」

「だから、マジって言うてるでしょ？」

リサがヴァルバの額にデコピンをして言った。

「お、お前！　また『アース』を使ったのか！？」

ヴァルバが額を押さえながら言った。

「そうだけど？」

「あれほど簡単に使うなって言ったじゃないか！？」

ヴァルバは血相を変えて、リサに言った

「だって、あんたたちが持っていた食料じゃあ、ルーテまでもたないかもしれないって思ったし、ソラとアンナに頼まれちゃったしなあ」

「だからって、お前なあ……」

ヴァルバは大きくため息をついて言った。

「……自分の体のことなんだから、少しは気をつけて禁呪を使えよ……まったく」

体のこと？ リサの？

「大丈夫だって。少し休めば、どうってことないよ」

リサは微笑みながら言った。

「……あのさ、リサがどうかしたの？」

「ん、まあ……実は、禁呪を使うとあることが起きるんだよ」

リサは頭をポリポリかきながら言った。

「どういう？」

「禁呪っていうのは、かなりの魔力を消耗するんだ。それは、各属性の最大級魔法の比じゃない。だからこそ、古代ティルノグ人のように特別な力を持った人たちじゃないと、禁呪を扱うことはできないんだよ。けど、あたしならできる。なぜだかわかるだろ？」

リサはニコツと笑った。ラグナロクの間人だから、か。

「だけどね、私のような大きな魔力を持っている人間でも、禁呪を使えば消費される魔力に比例して、自分の体力が想像以上に消耗されてしまうんだ。そんなこんなで、このおっさんはうるさいわけよ」

「お、おっさんって言うなあ！」

まあまあとリサはヴァルバをなだめた。

「……つまり、下手をすると体に悪影響を及ぼす、ってことか？」  
「まあ、使いすぎるとそうなるね。私はそこまで禁呪を行使していないから、まだまだ大丈夫だよ。シュレジエンに行く時だって、使えばものの数秒で行くことはできたけど、自分の体はやっぱり心配だったしさ」

たしかに、あの時にリサは船を使って行ったな。

「でも、今回は大丈夫なのか？」

「まあね。休ませてもらえば、すぐに回復するよ。」

リサは元気そうな顔をしてみせた。

「……とりあえず、ローヴナーに行こう。」

ヴァルバは王都を指差して言った。

イデアの首都ローヴナー。今から1400年ほど昔に天変地異が起こり、当時の都だったイデアは大地の下に消え、栄華をほこった都周辺の地は砂漠と化した。そして、東都と謳われたローヴナーに遷都したのだという。

ローヴナーは水源が近いこともあり、王国が建国された頃から人々が集まり、商業などが発展したのだという。さらに、金銀が多く採掘される鉱山もあり、他国の商人はそれを求めて海を渡ってくるらしいのだが、それは仲のいい国だけ。ルテティアの商人は取らせてもらえないらしく、他国の商人が買った金銀を買って、イデア金・イデア銀を手に入れるのだという。

城門を抜けると、一本の大きな道が先の城門につながっている。

道路の左右には、ルテティアと同じく民家や商店が立ち並んでいる。

この道を歩いている人は、なんていうかわかりやすい。外国の人は大体金髪やら赤髪やら茶髪なんだが、イデアの人々は髪が黒い。本当に、アジア系という感じが。前にレンドの仲間に東方民族かと間違われたことが納得できる。日本人っぽい人たちもいるし。

砂漠のある国だから、もっと乾ききっていて暑くて、地面には砂の色しかないのだとばかり思っていたが、ここはそうでもない。民家の周りには樹木が生えているし、水の音がどこからともなく聞こえるし、想像とはかけ離れている場所だ。ちょこちょこ草も生えているし。

けど、暑さはラジト以上に暑い。砂漠ほどではないが、空には雲

1つなく、お天道様の光がぎらついている。これではものの数日で日焼けしてしまう。

僕たちはとりあえず、旅の疲れを癒すために宿を探した。ここらの建築は、石造りのものばかり。水源があつて緑らしいものもあるけど、森林はないから、木の家はないんだろう。

僕たちはこの大通りから少し離れたところにある、1人1泊150セルトという宿屋を見つけた。

「それにしても暑いなあ、イデアは  
後ろからリサの声がした。

「……おい、なんでお前がここにいるんだよ？」  
今回、1人1室で泊まることになったのに、どうしてかりサは僕の部屋に入って来ていた。

「まあまあ、そう言いなさんな」  
暑い暑いと言いながら、リサはそのベッドに寝そべった。

「僕のベッドに寝るな！ だから、どうして勝手に入って来てるんだよ？」

「ん？ いいじゃないか。たまにはさ  
たまにはつてなんだよ……。」

「……なんだよ、そのしかめっ面」  
エメラルドグリーンの瞳で睨みつける。

「なんでもねーよ。それより、これからどうすればいいんだ？」  
「……何を？」

リサはきよとんとして言った。  
「だから、どうやってイデア国王に会うのかってことだよ。ルテテ  
イアで誰に会ったのか知らないけど、その話は聞いてるんだろ？」

「ああ、それね」  
リサは手をポンツと叩き、思い出したように言った。

「それなら、普通に会いに行けばいいんじゃないの？」  
なんてことないじゃんっていう顔で言いやがった。

「普通につて……あのな、国王に普通に会うことなんて、一般人にはできないだろ？ 普通」

「ハハハ、冗談だつて」

リサは僕の肩を叩きながら言った。

「一応、会えることは会えるよ、たぶん」

「？ どういうことだよ？」

リサはベッドで大の字になった。

「ちゃんと受付を済ませば、きっと国王に会えるよ」

ニコツと笑いやがったりリサの顔に対し、微妙に腹が立つ。こんちくしょう。

「受付つて……どつかの大会じゃあないんだから……」

「でも、どこの国でも同じようなもんよ？ ルテティアだつて、他国の人間ならなぜか謁見できるしね」

「ん……たしかに」

この世界の王様つて、ちょっとおかしいつか、なんつか。

「時間はかかるかもしれないけど、会えるよ。たぶん」

「たぶんは余計だろ」

「ハハハ、気にしない」

「けど、すぐに謁見できないのか？」

「どういうことさ？」

リサは頭をかしげた。

「お前を使えば、すぐにでも会えるんじゃないのかつてこと」

殿下が言っていた。リサを欲しがる人間が多く、各国はリサを賓客として迎えると。

「それがさ、イデア国王には会ったことがないのよ、私」

リサはゴホンと間を置いてから言った。

「ローヴナーまでは来たことがあるんだけど、1度も国王に謁見できていないの」

「なんで？」

「この国王つて私のこと、どうでもいいって思ってるのよ」

「ど、どうでもいい？」

リサは大きいため息をついた。

「この国、ほとんど魔法を使わない国だし、他国を侵攻しようなんてさらさら無いから、私は必要ないわけよ」

「……なるほど」

「そんなもんだから、私がラグナロクの一族だつて言っても『あつそ』って言う薄い反応をして、逆に怪しがってんのさ」

リサは以前のことを思い出しなのか、イライラしているようだ。

「……それで、今回は僕たちについて行こうと？」

「んー、まあそんなところさ。謁見が済むまでだけ」

あーあと言いながら、リサは体を伸ばした。

「あゝ、それにしても暑い！」

「当たり前だろ、砂漠に近いんだから」

「私、暑いのは嫌なんだよ。ここに来るまでは逆に寒いシュレジェンにいたから、さらに暑い！」

「そんなん、知るか。……つか、用が済んだらさっさと自分の部屋に戻れつての」

「あー暑い。暑いから服脱ごつと」

「！！ 何！？」

「ちよ、何言つてんだ！？」

「だから、服脱ごうかなつて」

文句でもあるのかという目で彼女は僕を見る。

「ぼ、僕がいるところで脱ぐな！ そもそも、男がいる所で」

僕がそう言っている間に、上の1枚を脱ぎ捨てた。

「……つて、おい！ 脱ぐなつて言っただろ！？」

「なんだよ、ケチ」

彼女はすねたガキみたいな態度をとる。

「ケ、ケチとかいう問題か！？ 早く出てけ！！」

「うるさいな。ホントにケチだね、あんたつて。そんなんだから

「……」

「うるさいってのー！」  
そして、この日は過ぎて行った。

翌日、僕たちは王宮へ向かった。

城門から繋がる大通りを進むと、また大きな門にたどり着く。どうやら、この門を進むとさらに多くの人々の住まいがあるらしい。そこは、この大通りみたいに商店などは混ざっていないという。

その城門は通称『玄武門』と言われているらしい。どうして、日本の玄武なのか疑問なのだが……。

玄武門は自由に通れるらしいが、日が沈むと出入り禁止となるのか。

門を通ると、ずっと先に城らしきものが見えた。それはルテディアの城ほど豪華なものではないが、やっぱり王様がいるせいかな、重厚感というのを感じる。そういえば、イデアの王様ってどういう人なのか、という疑問が頭に浮かんできた。

「なあ、イデア国王ってどういう人？」

「ヴァルバに訊いた。」

「今のイデア王国はディルムン朝っていうんだけど、現国王は34代皇隆王っていうんだ」

「コウリュウオウ？」

「代タイデア国王は、他国みたいに『なんとか何世』っていう感じの名前じゃないんだ」

なるほど。中国みたいなもんか。

「この国王は、10歳のときに即位したって聞いたけどな」

「そんな若い時に？」

「若いというレベルじゃないが。」

「だよな？ リサ」

ヴァルバが言うと、リサは小さくうなずいた。

「先代国王が聡明で人望もあっただけで、そのせいで親族には恨

まれちゃって、暗殺されたんだけ」

「穏やかな話ではなさそうだ。ていうか、どの世界でも権力争いっていうか、人間くさいことをしてるんだな……。」

「ひどいですね……」

「まあね。けど、それが人っていうもんさ」

「……先代孝武王が34歳で殺されて、彼の信賴篤い配下だった宰相が反対する人たちを抑えて、今の国王……皇隆王を即位させたらしい。けど、それから5年後に、幼い国王に代わって政治を行っていた宰相は急死してしまっただ」

「その時でも、皇隆王は15歳だよな？ その年で政治ができるとは思えないんだけど……」

「たしかに、ソラの言うとおり当時は誰もがそう思っただけで、皇隆王は親政を開始したんだ」

「へえ。すごいな……」

「そして、親族の内乱を鎮め、自分の父の敵をとったのさ」  
「かっこいいですね」

アンナが言うと、ヴァルバは「だな」と言って続けた。

「その後、各国との条約を改めて自国の利になるような政策をしてきたんだ。そして、今はシュレジエンと並ぶ平和な国っていわれるようになったんだ」

「たしか、皇隆王は今35歳なんだっけ？」

リサは先にある王城を見つめながら言った。

「へえ……若いんだな」

「なんたって、10歳で即位した王だからね」

「とは言っても、ずいぶん昔の話かと思って聞いてたよ。どうも、国王とかっていうのはひげの生えた還暦ぐらいの人っていうイメージがある。そう、ルーファス8世がまさにそうだったわけだし。」

「想像とは違いますね」

アンナが言った。

「あ、僕も。どれくらいだと思ってた？」

「えつとですね、60以上くらいかと。ルテティアの陛下も、60歳になったばかりですし」

60歳であんなに老けこんじゃって……。上に立つ者ってのは、僕たち凡人にはわからない悩みでもあんだらうな。

「ハハハ。皇隆王に言ったら、シヨックを受けそうだな」

「若いつて言っても、アンナかソラと同じくらいの年齢になる王女がいるよ」

リサが笑いながら言った。

「35歳なのに？ …… 20歳くらいの頃の子どもか？」

「そうなるね」

「毎度毎度思うが……王様ってのは、子供作るのが早いよな」

ため息にも似た声で、ヴァルバは言う。

「後継者を作るためなんだから、しょうがないでしょ」

リサが自分の前髪をいじりながら言った。

「王家の血を絶やさないために、10歳を過ぎた辺りから許婚をもらって、早ければ14歳には結婚するはずだよ。たしか、皇隆王も14歳で結婚したんじゃないかってっけ？」

「子どもを作るのも早ければ、結婚するのも早いんだな」

「ルテティアのルーファス8世も、17歳くらいのときの息子がいるよ。もう43歳なんだよね」

「あれ？ アルベルト殿下が長男じゃなかったの？」

リサは首を左右に振った。

「アルベルト王子は第3王子。第1王子がその長子なんだよ」

「へえ、そうだったんですね。でも、王宮ではアルベルト殿下とレイフェーゼ王女様しか見かけませんでしたよ？」

「ルーファス8世には5人の子どもがいて、レイフェーゼ王女は第1王女。長男のクレイン王子は43歳で、地方視察に行っている最中らしい。次男で第2王子のカーン王子は40歳で、何をしているのか知らないが、どうやらヴィンラントにいるらしいな」

ヴァルバは、さらにカーン王子の説明に『遊び人』ということも

付け加えた。ま、ありがちな王子様ってか。

「アルベルト王子はもうみんな知ってるから説明はいいか。レイフ  
エーゼ王女が19歳で、末娘のマリア王女が13歳、だったかな？  
マリア王女は王宮にいるはずだけど、まだ幼いから人前に姿を現  
さないんだろ」

そんなに子どもがいたんだ。けど、末娘が13歳？ …… 国王も  
好きだねえ、いい年で。

「太子となるのは無難な第1王子か、それとも聡明で判断力・統率  
力に優れる第3王子のアルベルト王子か。最近、そういう噂が巷に  
流れてるんだよな」

「普通、長男が継ぐもんじゃないの？」

僕がそう言っていると、ヴァルバは頭をかいた。

「普通、はな。けど、アルベルト王子みたいに王としての素質を十  
分に持ち合わせている王子がいると、長男を差し置いて即位するこ  
ともあるのさ。ま、誰が太子となるのかは、ルーファス8世次第だ  
けど」

けど、アルベルト王子が跡を継いだら、きっとクレイン王子は黙  
つてはいないだろうな……。そういうところで、骨肉の争いが起き  
るんだよな。

「じゃあ、皇隆王の王女様っていくつなんでしょうか？」

「たしか……15、14？」

リサは自問自答しながら言った。

「……曖昧だな」

「あのね、ソラ。国王ならともかく、その子どもたちの年齢まで詳  
しく覚えてる人間は、その国の人間くらいなもの。だから、私  
が知らなくて当然っていうことなの！」

なぜか怒り、デコピンをしてきた。また避けられなかったし…。  
「腕白で活発な王女様らしくて、さすがの皇隆王も困ってるって話  
だけだな」

ヴァルバは笑いながら言った。

「活発ねえ」

「なんだか、ドタバタお姫様っていう感じか？ それとも、父ちゃんには内緒で、城下町に変装して遊びに来るお姫様か？」

「お上品なイメージは湧かないよな」

「ヴァルバは腕組をして、想像を膨らましている。」

「ハハ、おてんば姫だから？」

「僕も、ついつい笑ってしまう。」

「俺としては、ルテティアの王女たちとは真逆のタイプだと思う」

「たしかに。たぶんリサみたいに凶暴なんだよ、きつと」

「……凶暴は余計だ！」

「僕はリサからローキックを食らわせられた。ちょうどけつの下あたりを蹴りやがった。おしりをさすりながら、やっぱり凶暴だと改めて実感。」

「そんなことをして、イデア城の門のところに着。」

「あの、国王様にお会いしたいのですが」

「見たことがないくらいリサが丁寧に言った。少し、驚きの表情をしていると、またデコピンを喰らった。」

「……何用ですか？」

「まるで、怒っているように門番が言った。」

「ひじょくに重大な話があるんです！」

「リサが門番の顔の前に、自分の顔を突き出した。兵士は顔を赤くしながら、目を泳がせている。まあ……あんなだけの美人だ。目の前に来られると、免疫の無い人は対応に困るだろーよ。」

「おほん。そうだった、怪しい人間は謁見することはかないません」

「ええ？ そこをなんとか」

「今度は、リサは困ったちゃんのような顔をした。さすがのアンナも、その姿を見て呆気にとられていた。」

「ねえ、お願い」

「そ、そんなことを言われても……」

門番の2つの目は、リサからそらしたり、戻したりと忙しく動いている。

「せめて、陛下に伝えて。イデアの人間もいるから、絶対に嘘は言いませんって」

女の子みたくない（女の子なんだけど）ことを言いながら、どんどん門番に迫っていく。その光景を、僕とヴァルバは苦笑いをしながら見ていたが、アンナは体全体が硬直してしまっている。

「うう、しかし……」

「ね？　お願い」

リサの後ろにいるのでわからないが、たぶん、ウィンクでもしてるんだろ。ああいう手段は、別世界共通なのか？　それとも、同じ人だから同じようなテクが生まれてしまっただろうか。……はつきり言つて、どーでもいいけど。

「し、しかたがない。陛下にお伝えする」

なんとリサの作戦（？）が成功し、門番は門を開けた。そして、数メートル離れたところにいた他の兵士が、僕たちを少し門から離れさせ、さっきの門番がイデア城の中に走って行った。

数分後、その門番が呼吸を荒くして戻ってきた。そして、少し自分の呼吸を整え、僕たちに言った。

「陛下が、お会いになられるそうさ。さ、先に進んでよいぞ。ただし、陛下に失礼のないように」

マジで謁見が可能になってしまった。あのリサの方法で？

僕たちは城の扉へ向かった。

「しかし、リサのあの演技で謁見が可能になるとはな」

ハッハッハと、ヴァルバは苦笑いしていた。よほど、あのリサの姿が驚くものだったんだろう。

「すごいもんでしょ？」

偉そうにウィンクして言いやがった。

「……ああやって中に入れるなら、最初っからやっつけての」

「ハハハ、細かいことは気にしないの」

相変わらず、大雑把な女だよ……。

「そ、それにしても……リサさん、すごいですね」

「アンナ、女にはああいう武器もあるから、覚えといて損はないわよ?」

「は、はあ……」

アンナも苦笑いしていた。

「何が武器だよ。純粋なアンナに、変な教育をするなっつての」

「女として、色気は最大の武器だよ? 知らないともったいないでしょ?」

「……お前な、その最大の武器つていうものを、外から見てる人の気持ちにもなっつてくれないか?」

「何だよ?」

リサはギロつと睨んだ。

「お前らしからぬお前を見てしまった、僕たちの気分を考えてくれつて言っつてんだよ!」

「な、なんだつて!? このやる!」

再び、リサは僕にローキックをしてきた。それも3発。

「いてっ!!! く、くそ。凶星を突かれたからつて、暴力に走るなよな!」

「うるさい!」

ちくしょう。女っぱいことを見せない女め。本当に女なのか疑いなくなつてきたが、こいつの胸を見ればやっぱり女か、と笑つてしまつ自分がいた。

イデア城に入り、案内人に教えてもらいながら中を進む。

この城は、ルテティアの王都ほど豪華ではない。シャンデリアもなければ、色鮮やかなじゅうたんもない。だけど、質素だが豪勢、という雰囲気だ。

壁は少し黄色い。この砂漠の色をイメージしてるんだろうか。い

や、城の外見は黒かったけど、中は全体が少し黄色いんだ。

壁の彩色の代わりなのか、垂れ幕みたいなものがいくつか付いている。そして、その垂れ幕に同じような紋章が描かれていた。王冠の上に、2つの剣が対になって描かれている。たぶん、イデア王国の紋章なのだろう。

あちこちに、通路に繋がる入口みたいのがあるが、全て扉が付いていない。青と赤ののれんが代わりに付いている。

階段を上り扉を開けると、また大きな通路が目の前に現れた。その先に、さらに大きな扉があった。扉の前には、黒い衣を来た男が2人立っていた。2人とも、腰には剣を差している。

扉の前に進むと案内人は止まり、扉に向かって頭を下げた。

「陛下、お客人をお連れ致しました」

案内人がそう言うと、2人の剣士が扉を開けた。

その黒い扉が開かれると、大きな部屋が広がった。その先に、垂れ幕が下がっており、誰かがいる。

僕たちは案内人の後に続き、その広間を進む。そして、その垂れ幕の前に止まった。

「そなたたちか。危急の用事で参ったのは」

若々しいが、厳とした声が聞こえた。そして、その垂れ幕が一斉に天井に上がった。

現れた玉座の上に、長髪の男が座っていた。黒髪に褐色。古代中国王朝の人みたいな服装だ。この人が、皇隆王か…。

「私が、イデア34代皇隆王だ」

僕たちは並んで頭を下げた。不思議と、しなければならぬって  
いう雰囲気の流れる。

「さて、そなたたちの自己紹介をしてもらおうか」

いきなり、皇隆王の声が変わった。というか、柔らかくなった…

…感じか？ 皇隆王はニコツと微笑んでいる。

その姿に少し驚いて、言うのが遅れてしまった。

「ええ………私は、ソラッヴェルエスと申します」  
僕は一例をした。

「そんなに固くならなくてもいい。楽に言いなよ」

皇隆王の言葉に、その場にいた誰もが驚いた。いや、案内人などはそうでもない。

「は、はい？」

「楽に言えって言うてるんだよ。俺、そういうのがどうしても苦手  
でねえ」

と、皇隆王は大笑いをした。その姿に、僕たちは呆気に取られて  
いる。

「ホラ、次。そのかわいこちゃん」

皇隆王は、僕の隣にいたアンナを指した。いきなり差され、アン  
ナは表情が止まっていた。僕が呼びかけると、あわわわと口が震え  
ていた。

「わ、わ私は、アンナッカティオっておっしゃいますです」

緊張のためか、前回みたいにアンナは変なことを言った。すると、

皇隆王は玉座の手すりを叩きながら大笑いした。

「ハッハッハ！ わかりやすい娘だな。よろしく」

皇隆王はニコツとアンナに微笑みかけた。その笑顔でアンナの緊  
張がほぐれたのか、少しだけ砕けた表情になった。

「さて、その……おや、君はイデア人かな？ それとも、ゼテギ  
ネア人か？」

皇隆王はヴァルバを見ながら言った。

「いえ、私はイデア人ですよ。混血なんです」

「ほう、なるほどな。で、名前は？」

「ヴァルバッダレイオスです」

「うん、よろしく」

皇隆王はペコリと頭を下げた。思わずヴァルバも頭を下げた。

「そのポニーテールの子は？」

「リサ＝ブレスレッドです。ようやく、お会いできましたね、陛下」  
リサは微笑みながら言った。

「ああ、君か。いや、会えなかったのは俺のせいじゃないんだよ。  
周りのじじいどもがうるさくてな」

「いやあまいったと言いなながら、またもや皇隆王は笑い出した。す  
ると、さっきの案内人が言った。

「へ、陛下。そのようなことを言われては、後でお叱りをくらいま  
すぞ?」

「いいの、いいの。気にするな。ホラ、お前は後ろで待機してな」  
シッシと、手を動かしながら言った。

「さてと、改めてみなさん、よろしく!」

また、皇隆王は大きく頭を下げた。僕たちもそれにつられて、頭  
を下げた。あまりに想像とかけ離れていることによって、リサ以外  
は驚きを隠せない。どう見ても、言い方がどっかの若者にしか見え  
ない。

「それで? 君たちは一体何の用で、俺に会いに?」

皇隆王は手すりに肘を寄せ、ほほを手に乗せた。

「……世界の一大事、とでも言えましようか」

僕たちはインドラのことを包み隠さず、皇隆王に伝えた。

「なるほど……インドラ、か」

皇隆王のさつきまでの笑顔が、話を進めるうちに、氷が溶けてい  
くように消えた。

「やっかいな者たちがいるものだな」

フーと、皇隆王は長くため息を吐いた。

「しかし、俺にどうしろと?」

「え?」

皇隆王は天井を仰ぎながら言った。そして、ゆっくりと僕たちに  
視線を戻して続けた。

「我がイデアは、邪神が蘇ろうがなんだろうが、どうでもいいと思っ  
ている」

皇隆王の目は冷ややかだった。

「どうでも……いい？」

ヴァルバが小さくつぶやいた。

「愚かな人の為すことだ」

吐き捨てるように皇隆王は言った。

「愚かな人の為すこと……それを止めるのが、同じ人である我々が  
すべきなのは？」

ヴァルバが鋭い目で言った。皇隆王はその目から視線をそらさず、  
こくりとうなずいた。

「たしかにそうだ。しかし、人であるからこそ人は自分たちのして  
きたことに責任を持たなければならない」

「……………」

「インドラの者たちが行うこと。すなわち人の所業。ならば、どう  
して我らが止めることができよう？ 同じ人が行う所業を、どうし  
て遮ろう？ 同じ人が犯す罪ならば、我らはそれを静かに受け止め、  
共に罰を受ける。それが、我々イデアの考え方だ」

皇隆王は目を瞑った。

「そう、かもしれない……けど、それは無責任すぎるのだと思いま  
す。同じ人がすることだから、他人を傷つけることを放っておけと  
いうのは、なんていうか……」

皇隆王は僕を一閃に見ている。黒い瞳が、僕の頭に突き刺さる。

「……………心がないと、思います」

「心、か？」

僕は小さくうなずいた。

「多くの人を傷つけることなんて、許されるはずのないことだ。い  
や、許されないのではなく、してはならないんだ。愚かな人のなす  
愚行をみすみす見逃して、たくさんの人が苦しむことは、僕は絶対  
に許せない。……国王であるのなら、民を守る立場の人間として、

インドラのすることを止めなければならぬはずだ！」

皇隆王は目を細くして、視線をそらさずに僕を見ている。

「……なるほど、よくわかった」

皇隆王は大きくうなずいた。

「すまないね。俺が今言ったことは、全て嘘だ」

王はニコツと笑った。

「????」

「君たちを試すようなことを言ってしまった。申し訳ない」

王は大きく頭を下げた。急展開に、僕たちは顔を合わせあった。ただ、リサだけは笑っていた。

「君たちがどれだけ真剣なのか、聞いておきたかったからな」

ゆっくりと僕たちを見渡す王は、僕を見つめた。

「特にソラ。君のをね」

王は僕を指した。

「自慢するわけじゃないが、俺は他人の『空気』というものを察する能力があつてね。……君の背後に見える『何か』……ちよつと、嫌な感じがしたんだ」

王の顔が変わった。真剣な顔だ。

「嫌な感じ、ですか？」

僕が訊くと、王はうなずいた。

「君がどういった目的、あるいは望みがあつてここまで来たかは知らない。知らないが、世界の生死に関わることを背負っているのに、君の顔には虚ろなものが映ったように見える」

虚ろ？ 僕の中に？

「それが何かはわからない。だが、いずれ君にとっての大きな試練となつて、襲い掛かるかもしれない。だから、それを懸念して君に聞いたんだ。……いや、君だけではなく、ヴァルバ。君にもね」

王は今度はヴァルバをあごで指した。

「君の中にも、何かしらのものがある。それは迷いなのか、あるいは……」

「……………」

ヴアルバは床に目を向けていた。

「君の……いや、これ以上、推測で言うのは止めておこう」

王は自ら自分の言葉を止めた。

意味深な言葉だ。

僕の中にある虚ろ。大きな試練となつて、自分に襲い掛かる？

まったくわからない。

「話を元に戻そうか。……俺自身としては、君たちにぜひ協力しようと思う」

王の言葉に、僕は我に返った。

「陛下、本当ですか？」

アンナが言った。

「世界の生死に関わることなんだ、放っておけないからな。国民を守る立場の人間として、無視することはできない。ソラの言ったようにね」

王は僕の方を向いて笑った。

「……けど、大臣たちが黙ってはいないでしょうね」

リサが腕組みをしながら言った。

「リサ、どうして？」

僕がそう訊くと、リサは頭をかいた。

「ここのおじいさんたちの固い頭は有名だからねえ」

「お、よく知ってるじゃねえか」

ハツハツハと王は笑いながら言った。

「俺が幼い頃、即位に反対した奴らから俺を守ってくれたのは、そのじじいたちだからな。あいつらの言葉にも耳を傾けなきゃならぬんだよ」

王がじじいという言葉を連発するので、後ろで待機している案内人は背中にビツシヨリと冷や汗をかいているだろう。

「しかも、あのじじいたちが言うこともまんざら嘘じゃないんだよな、これが」

王はばつが悪そうに頭をかいた。

「……じゃあ、イデアが他国と協力して、インドラに対する何らかの対抗策を講じない、ということなんですか？」

僕がそう訊くと、王は首を左右に振った。

「そうとは言っていないが、対抗策を講じるとも言っていない」

まだ、決まっていないということか？

「今聞かされたばかりだからな。しかし、我が国の事情などを考えれば、固い頭を持つじじいどもが、そう簡単に他国と協力するとは思えんからな」

やれやれ、と最後に付け加えて、王はため息をついた。

「方法はないんですか？ その人たちを納得させるようなことは」

アンナが困ったような顔をして言った。

「そうだなあ。もし、じじいたちを納得させることができたとしても、それに納得できない民もいると思うからなあ。どちらにせよ、ルテティアに協力することはできんと思うしな」

「……やっぱり、昔の侵略戦争のせいですか？」

「おつ、ソラ、知っていたか？ たしかにそういったこともあるんだが、その戦争に関して我々はそこまで怒ってはいない。もう40年も前の話だからな。昔のことをいちいち気にしては、イデアも前に進まないからな」

「??？　じゃあ、どうして仲が悪いんですか？」

「……アンナ、君はルテティアの人間だよな？　知らないのか？」

王の顔が、険しくなった。眉間にしわを寄せ、細くした目はなんだか怖く感じた。

「な、何をですか？」

「……そうか。君が田舎の人間ならば、到底知りえない話であろう。王は大きいため息をついた。しばし、沈黙が流れた。なんなんだろう。間を置かれると、かなり気になる。」

「ルテティア王国に大昔から伝わるものがあるんだ。なんだかわかるか？」

王は逆に僕たちに質問を投げかけた。僕やアンナはその問いに戸惑い、顔を見合わせた。

「わからないかな？ ヴアルバ、君は？」

「……さあ、わかりかねますね」

ヴァルバは顔を振った。

「……あまり、自分の口で言いたくはないのだが……」

王は苦しそうな顔をした。そして少し間が開き、王は言った。

「大昔から伝わるルテティアの伝統、とでも言えようか。あるいは、人としての業とでも言えようか。古代の世界を完全に支配し、超高度文明を築き上げたティルナノグ帝国。2000年以上経った今でも2大陸の諸国は、その技術の片鱗に近づくことさえできない。そのティルナノグ帝国の皇室とその血に連なる王族、そして貴族と限られた人間たちは、今では考えられぬほど裕福だったという。それはなぜか？ 彼らが裕福であるが故に、牛耳られる人間たちがいる。それは今の世界でも変わらないかもしれないが、当時は今の人々のようにそれなりの民権が与えられていたわけではない。……帝国の人口の約9割が、そういった身分の人間だった。そう、『奴隷』と言われる人々だ」

奴隷。

その言葉を聞いて、気分がいい人間はいないだろう。僕の心に、どんよりとした空気が流れた。

「ドレイ……？」

アンナはわからないようだった。たぶん、聞いたこともない言葉なのだろう。

「同じ人に隷属され、生き物として扱われず、無理矢理働かせられる人間たちのことだ」

王は続ける。

「ティルナノグ帝国が『神罰』と呼ばれる神の矢によって滅ぼされた後、解放された人々は、ティルナノグの行った愚行の数々を絶対に行わないと誓ったという。その奴隷制に関しても、な。しかし、やはり人は同じ過ちを犯してしまふ。そう、このロンバルディア大陸を完全に支配し、天下統一を目論んだミッドランド帝国は、我がイデアの民やシュレジエンの民など、征服した国の民たちを奴隷として扱っていた。男は肉体労働、女は口に出すことさえ禁じられる行為を、奴隷だからということとさせられてきたらしい」

……どこの世界にも戦争というものがある限り、隷属されてしまふ人は無くならないのだ。ガイアでの主だった国が奴隷制を廃したのは、100年か……200年くらい前の話だ。

「その後、魔王アルヴィス1世が死に、ルテティア公国により滅ぼされ奴隷制もなくなる……と思われたが、そうもいかなかった」

王は顔を曇らせた。

「ルテティアは王国となった後、自国の領内にいたミッドランド帝国の中枢を担った人々を奴隷とした。それは、それまでの復讐だったのだろう。当時のイデアは復興を手助けされた手前、そのことに關しては何も言わなかった。だが、400年前の侵略戦争により、知つてのとおり我がイデアは国王が戦死し、大敗北を喫した。その時に獲られた領土にいた多くのイデア人は、奴隷にされたのだ」

「イデア人が……」

僕は思わず言葉が出た。

「そう。その後、休戦協定が結ばれ、友好関係を築こうとしたルテティアだが、我がイデア人を奴隷にしたままであり、奴隷制は今日に渡って続いているということとを鑑みると、我らは到底許すことができないのだ。イデア人として、人として」

王は目を瞑り、静かに息をした。冷静には見えるが、その奥、あるいは裏に燃え盛る怒りの炎があるのを、ここにいる誰もが気付いているのだと思う。

「それが陛下が……いや、この国がルテティアと協力できない理由なんですね？」

リサがすぐさま言った。

「そうだ、な。……ティルナノグ帝国の支配期に何百年の間奴隷として扱われ、2000年以上経った今でも、我がイデア人が奴隷として扱われてる以上、ルテティアに協力することは無いだろう」

「なるほどね……」

奴隷……。僕が生きている時代には無かったが、世界4代文明の時代から、1800年代まで奴隷制があったらしい。詳しくは知らないけど。

「奴隷制……この世界でもあるんですね」

「この世界？ 意味深なことを言うな、ソラ」

そうか。王はまだ僕が、別世界から来た人間ということを知らないんだ。リサのほうに向くと、彼女は小さくうなずいた。言ったほうがいいということだろう。

「実は、陛下」

「ん？」

僕は自分がこの世界の人間ではないことを説明した。

陛下はなかなか信じてもらえないので、証拠として「漢字」を披露した。「東空」と自分の名前の漢字を見せると、目を丸くした。

「……本当にあの伝説の世界が存在するとはな……いやはや」

王は喜びつつも、少し苦笑いをしていた。

「……で、ルテティアは奴隷制を施行している限り、イデアは協力するつもりは無い、ということですか？」

ヴァルバが言った。王は小さくうなずいた。

「じゃあ、自国の民以外の人間が苦しむのを放っておくということなんですか？」

そうか……。王が協力しないということは、他国の人間がどうな

ろうと知ったことではないと捉えられてしまう

王は少し考えらながら、口を開いた。

「そういったことはしない。そこまで非道な人間ではないのだから。俺が言っているのは、ルテティアと協力するということではできない……ということだ」

「……………」

それは、それでひどいような気がしなくてもないが……。

「とにかく、インドラに対しては俺らなりに協議し、ルテティア以外の国とも協議して、何らかの対策を講じるつもりだ」

「どうやら、なんだかんだ言いつつも協力してくれるということのようだ。ルテティアとは手を結ばないが、国民に罪は無い……と、王は付け加えた。

「その前に、お前たちにもしてもらわなければならないことがある」  
「……………」

王はすくつと立ち上がり、階段を下りた。そして、僕たちの目の前に近寄ってきた。

「お前たちというより、ヴァルバとソラにしてもらおう」

「???? な、何をですか？」

僕がそう言つと、王はほくそ笑んだ。

「それは、試練だ」

「し、試練？」

王は大きくうなづく。

「古来より、アイデアでは国王に嘆願する者は男であれば、しなければならぬ試練というものがあるのだ」

王は僕とヴァルバを横目を見た。

「君たちが通ってきたはずの『忘却の砂漠』には、この国の古の都が眠っているのを知っているかな？」

「古の都……アイデアのことですか？」

ヴァルバが言った。

たしか、ヴァルバが言っていたっけ。建国当初、王都は今の砂漠にあっただらしく、天変地異によって地中に埋もれてしまったと。

「そうだ。その古都イデアの近くに、代々の国王が儀式を行ったという神殿がある。その神殿に行き、ある物を取ってくるというのが試練の内容だ」

王はうれしそうに口調で言った。

「どうして、男はそんな試練をしなければならないんですか？」

僕がそう訊くと、王は再び微笑んだ。

「イデアでは、男は強くなきゃならん。ていうか、男は強くなきゃダメだろ？」

「は、はあ……」

あまりにも断言するので、思わずうなずいてしまった。

「それに、王に願いを申請してくるならば尚更だ。そのために、古代の神殿に行って男としての強さを見せるのさ。わかるか？」

王は僕の頭を人差し指で押した。王は、中国王朝の偉い人……あるいは、日本のはかまみたいなものを着ており、その色は黒い。そのためか、体が細くみえる。身長は僕と同じくらいだろうか。

「というわけで、君たち2人には明日、出発してもらおう」

「明日！？ は、早くないですか？」

僕がすぐさまそう言うと、王は言った。

「早くしたほうが君たちにとっては好都合だろ？ 早々に国同士が協議し、対策を講じなければならぬ時だ。君たちが神殿から男としての強さの証を持って帰れば、じじいたちも認めてくれる。そうなれば、国民もお前たちのしようとしていることに対して、納得してくれるはずだ」

僕は一歩足を引いた。この王様は、ルテティアの国王とは別格だと思った。格が違う。エリートとでもいうのか。こんな人が治める国の人々は、きっと幸せなんだろう。苦笑しつつも、そう感じた。

王の言葉には説得力がある。王様の言うことは尤もだ。

「さて、納得してもらえたかな？ ヴアルバ君、ソラ君」

王は得意そうな顔をして言った。僕とヴァルバは顔を合わせた。ヴァルバは、なんだか嫌そうな顔をしていた。こいつのことだから、面倒くさいんだろうな、きつと。そう言う僕も、面倒くさくないと言ったら嘘になるが、ここはするしかないだろう。

僕はアイコンタクトでヴァルバに言った。「やるしかないだろ」と。ヴァルバは大きいため息をつきながら、頭をかいた。

「……わかりました。やります。な？ ソラ」

ヴァルバは僕の顔を見ながら言った。

「……やりますよ、陛下」

「おいおい、やりますじゃなくて『やらせてください』だろ？ お前たちが協力してくれて言ってるんだからさ」

嫌味っぽく、王は笑って言った。僕は思わず笑ってしまった。僕とヴァルバは再び顔を合らし、王に言った。

「『やらせてください』、陛下」

その場にいたりサヤアンナも、笑ってしまった。

## 26章：フォルトウナ神殿 どこにある、男の証

翌日、僕たちは再び砂漠へ向かった。

「お試しの神殿は、『砂塵の神殿』って呼ばれている。ダーナ砂漠がまだ緑が溢れる大地だった頃、フォルトウナ神殿と呼ばれていたんだが、天変地異によって辺りが砂漠と化し、神殿のほとんどが砂に埋もれたため、文字通りの名で呼ばれるようになったんだ」

王はどっかの教師が、歴史とかの授業で得意になって説明しているように言っていた。

「イデア第1王朝……ティルナノグ帝国に滅ぼされる以前のイデアをそう呼ぶんだが、砂塵の神殿は建国前から存在していて、初代国王が神から教を戴いたとされる場所だといわれてる。だから第2王朝、今の第3王朝の歴代の国王は、即位と同時に神殿で教を授けた神……そして開祖である『剣神』に誓うんだ。『我、我が力と我が剣を持って、我が愛すべき大地と我が民が生きるこの国を、天に召されるその時まで、守護することを誓う。イデア王国に栄光あれ。王家に、幸あれ。』とな」

思わず、「お〜」と言ってしまった。そういうことを、この王様もしたんだと思うと、かつこいいいなあと感じたからだ。しかし、そのすぐ後に自分で「かつこいいだろ〜」と言ったので、その思いはすぐに消え失せた。そういうのは、自分で言うもんじゃないだろ……。

謁見した後、王はすぐにじじい呼ばわりしていた大臣たちを招集し、僕とヴァルバに試練を与える、と言った。すると大臣たちは、「イデア人でないよそ者に、神聖なるフォルトウナ神殿に足を踏み入れさせることはなりませんぞ」  
とかなんとか言い出す人がいた。

まあたしかに、自国を大切にしたいの強いイデアの人々からすれば、そういった意見が普通だろう。けど、王はというと、

「2人とも、イデア人じゃないか。問題ないだろう？」

と、嘘をついていた。大臣たちは、

「ヴァルバ殿はともかく、ソラ殿はイデア人に近いが、やはり違うじゃろ？」

とか言っていた。僕はここの人々とは少し似ていないので、御尤もな意見だ。

「いや、イデア人だ。俺が判断したんだ。文句あんのか？」

と、半ば無理矢理認めさせていた。王様がそう言うては、さすがに口うるさい大臣たちも認めざるを得ないだろう。しぶしぶ、承諾証を作っていた。仲が良いというか、悪いというか……。

そんなわけで、僕とヴァルバは今、その砂塵の砂漠へ向かっている。

砂塵の砂漠は、オアシス都市ルーテの近くにあるらしい。古都イデアもその近くで眠っているのだとか。

ルーテは町の中央に巨大な噴水があり、水が地下から溢れ出てくる証拠なのだという。町並みは、昔のエジプトのような造りだった。歩いている人はみんな肌が茶色で、ターバンみたいな物をかぶっている。……イスラム教徒なのかなと思った。

この都市はティルナノグが滅び、イデアが再建されたあとに造られたらしい。もともとは、王族の流れを組む貴族が自らの居城にするために建設されたらしいのだが、天変地異によつて辺りが砂漠化し、貴族が住むような都市じゃなくなったため、今はほぼ自治都市なのだという。

だけど、どうして古都イデアは地中に沈み、このルーテは砂に埋もれずに済んだのか。それが疑問だ。本当に天変地異みたいなことが起きたというなら、納得だが……基本的に、天変地異つてのは嘘が多いんだよな……。勝手な見解ですけど。

ここで少々休憩した後、僕たちは神殿へ向かった。実は、なぜかリサやアンナもついて来ていた。理由を問うと、

「だって暇なんだもん」

と、リサはわざとかわい子ぶって言った。さらに、王も同じ理由で一緒に来ていた。……一国の主が、暇だからと言って都から離れていいものか。ホント、皇隆王は僕の期待を裏切ってくれる王様だ。砂漠を進むこと約2時間、地面に何かがあるのが見えた。近づいて見てみると、四角い穴が開いているのがわかった。人が2人、入れるくらいの大きさだ。そこには、地面の中に通じるであろう階段があった。その中は、ほぼ真っ暗闇だった。

「もしかして、これが砂塵の神殿ですか？」

アンナが僕より先に言った。言おうと思ったのに……。

「ああ。これが入り口だ」

王がその入り口を指しながら言った。

「……ホントに、砂の中に埋もれてたんだ」

「おい、ソラ。俺が嘘を言ったとでもいうのか？」

「い、いや、そうじゃないですよ。ただ、砂に埋もれた建物っていうのは初めて見たもんで」

だって、日本でこういつた遺跡を見たことなんてない。あるとしたら、どっかの古墳だとか、ピラミッドだとか。あれとかは、地面の下にも空間があるって話を聞いたような気がする。

「……どのくらいの広さなんだろ」

僕はその階段の奥を覗き込みながら言った。

「まあ、想像以上に広いと思っていいぞ」

「……陛下、思いたくも無いこと言わないでくださいよ」  
ヴァルバはため息を漏らした。

「ハッハッハ。まあ、俺が即位したての時、この神殿の内部の広さには驚いたもんだ。子どもだった俺にとっては、恐怖以外の何ものでもなかったがな」

王は思い出しながら言った。

「中には、財宝を求めて忍び込んだ盗賊や、大昔の騎士が迷い込んで、白骨化したものがたくさんあって、小さかった俺はもう、ちびりそうだったなあ」

いやあ懐かしいと、王は笑いながら言った。それとは裏腹に、僕は青ざめていた。王は、昔経験したから笑って済ませられるかもしれないけど、僕たちの場合はこれから、その神殿に入るんだから、テンションが下がるようなことを言っただけほしくないなあ。…この人の性格から察するに、これは僕たちを怖がらせようと、わざとこのタイミングで言ってるのではないか。

「ホラ、ぼさつとしてないで、早く行けよ」

リサが急かすように言った。

「さっさと行って、サクツとこなして来い！」

「お、お前、自分が行かないからって……」

「いいから、行けっつての」

リサはそう言って、僕の背中を蹴って押した。僕は突然蹴られたので、受け身もできずに砂の地面に倒れこんだ。少しか、口の中に砂が入ってしまった。うえ、ザラザラする。

「バカ！ 何すんだ！」

「だって、あんたらがまたもたもたしてるからだよ。早く行けっつて」

リサは偉そうに腕組みをしながら言った。

「くそ……（腹立つ女）。ヴァルバ、行こうぜ」

ヴァルバのほうを見ると、明らかに嫌そうな顔をしていた。けど、仕方が無い。もう、行くつて言っつてしまっつたし。

僕とヴァルバはその階段に足を踏み入れた。その時、王が僕たちを引きとめた。

「そついえば、言うのを忘れてた。この神殿の内部には、侵入者対策のためにいろいろ仕掛けがあるから、気をつけるよ」

王は微笑みながら言った。

「へ、陛下！ そついうことは早く言っつてくださいよ！」

ヴァルバが苦笑いしながら言った。

「ハツハツハ、忘れてたんだよ」  
そんな大真面目な顔をして言われてもなあ……。

僕たちは、神殿に行くのを見て笑っている2人と、心配そうな顔  
つきのアンナに見送られながら、神殿の中へ入って行った。

僕とヴァルバはたいまつを持ちながら、階段を下りて行った。思  
ったより長い階段で、たいまつ  
の光には届かない。2分ほど下りて  
行くと、やっと階段の終わりが見えた。そこから、光の届く範囲で  
見える限りでは、ずっと真っ直ぐだ。壁も床も、黄色いレンガに覆  
われている。RPGゲームで見た、砂漠の神殿のような風景だ。と  
いうか、想像通りの神殿だま。壁には、長い時間によってできたで  
あろう傷のようなものがたくさんあった。

頭上の天井には、何かの絵が描かれている。ずっと先まで。なん  
だろう、へびだろうか。そのへびが、いくつかの剣に巻き付いてい  
る。すでに色褪せているその絵が、いくつもきれいに並んで、奥の  
暗闇へと続いている。

「何の絵だろうな、あれ」

僕が天井の絵を指しながら言った。

「……剣が描かれてることから、あれは王家の証なんだろうな」

「王家の証？」

「イデア王家……デイルムン家って言うんだけど、イデア人ってい  
うのは、剣が得意な民族でな。もちろん、王家も同じ。王家は、イ  
デア人にとつての剣を極めた師匠のようなものらしくて、王家の紋  
章は剣っていうわけ」

「ふ〜ん。じゃあ、皇隆王も剣の腕はすごいのか？」

「たぶんな。物心つく頃から、剣の特訓をするって聞いたからな」  
ということとは、皇隆王は30年くらい剣を握っているということ  
か？……数ヶ月しか剣を握っていない僕からすれば、とんでもな  
い年数だ。戦乱の時代は、武将とかになる人はそれくらいが当たり

前だったのかな。

「それに、イデア第2王朝の開祖・ローランは『剣神』って呼ばれている。そういうのも関連するんじゃないのか？」

「なりほどね。……剣の民、か」

剣の民にとつての神だから、ローランは『剣神』なのか。それとも、ローランが『剣神』だから、イデアの民は剣を学ぶのか。そこから辺を調べてみたいと思ったり。

長い通路を歩いて行き、ようやく突き当たりに出た。右と左。二つの道に別れている。壁には、2つの首を持つ鳥の絵が描かれており、その背景に細長い剣が1つ、描かれていた。

「さて……最初の仕掛けってところか？」

ヴァルバが頭をかきながら言った。

右か左に、当たりの道があるんだろう。どれなのか、僕は左右に顔を向けた。

「どつちかに行つて、間違えたら引き返せばいいと思うが……」

「それでもいいけど、もしかしたら、はずれの道には落とし穴か何かがあるかもしれないんじゃない？」

僕はヴァルバにそう言った。この神殿には侵入者対策の罠があるつて王は言っていた。ゲームなら引き返せるかもしれないが、これは現実なんだ。

「けどなあ、罠があるとは限らんぞ？」

「まあたしかに」

「……とりあえず、右に行つてみるか」

僕はうなずき、右の通路に行つた。危険があるかもしれないが、ヴァルバの言うことももっともだ。

右の通路を進むと、行き止まりだった。壁には1匹の鳥、その後ろには剣が描かれていた。

「なんだ、行き止まりか」

「じゃあ、左だったのか。戻ろう」

僕たちは引き返し、左の通路を進んだ。そこを同じくらい進むと、

再び行き止まりだった。そして、右の通路と同じく、壁には1匹の鳥と剣が描かれていた。

「おいおい、どっちも行き止まりじゃねえか」

ヴァルバがため息をつきながら言った。

「奥に行く道が無い……。どういうことだ？」

僕は辺りを見回した。この左の通路は、右の通路と同じくらいの広さだ。さっきの別れ道から、この行き止まりに至るところまでの距離も、ほぼ同じように感じた。

そういえば、違うといえばこの壁画だ。

この壁画、右の通路の鳥の絵は右を向いていて、ここの通路の絵は左を向いている。鳥の後ろにある剣、組み合わせると剣を交差しあっているように見える。……。これが、なんらかのヒントなのだろうか。

うーん。ガイアでいくつかのゲームをしていく中で、謎解きの能力を培ったはずだ。ゲーム能力を存分に発揮すれば……。

「ヴァルバ、この絵がヒントなんじゃないか？」

ヴァルバはその絵を目を凝らして見た。

「……道が別れた場所にも、2つの頭を持つ鳥の絵が描いてあったな」

この左の通路と右の通路の壁画の鳥、頭は1つの鳥だ。さらに、後ろに描いてある剣も、1つずつだ。それに関係があるのかな……。

僕はその壁画にたいまつを一杯近づけ、顔も近づけて見た。すると、何かが光ったように見えた。

……。宝石だ。

鳥の目のところに、小さな宝石が埋まっていた。それは円形で、直径1センチほどの小さなものだった。色は霞んだ白で不透明だったが、たいまつ光に当てられて、少しだけ透けているように見える。

僕はその宝石に、指先で触れてみた。ほんのりと冷たい感触が伝わってきた。もしかしたら外れないかと、その宝石を指で掴んでみ

た。すると、その宝石は簡単に外れてしまった。

「なんだ、それ？」

ヴァルバは僕が掴んでいる小さな宝石を見ながら言った。

「この壁画の目のところに付いてただけで、取れるかと思って掴んだら、取れちゃったんだよ」

ヴァルバは「ふ〜ん」と言いながら、その宝石をまじまじと眺めた。

「……この壁画にあったということとは、右の通路の壁画にも同じような宝石があるってこともかな」

「……たしかに。行ってみよう」

僕たちは足早に右の通路の壁画のところに行った。

ヴァルバの推察どおり、この壁画の目のところに同じような宝石が埋まっていた。

「これも、外れるんだろうか？」

「だろうな。取ってみよう」

ヴァルバはその宝石に手を伸ばし、鳥の目から手に取った。

「……これでどうするんだ？」

ヴァルバは頭をかきながら言った。

「ここの鳥とさっきの通路の鳥の目には同じ宝石……。そして、2頭の鳥の絵。もしかして……」

「ん？ 何かわかったのか？」

そう言われ、僕はヴァルバのほうに向き直った。

「中央の2頭の鳥の壁画のところに行ってみよう」

「?? ああ」

道が左右に分かれていたところに戻り、2頭の鳥の壁画の前に立った。僕は、そこであるものを探した。ヴァルバは何もわからず、僕の顔を頭をかしげて見ていた。

たいまつを壁画に近づけ、鳥の頭のところを目を凝らしてみている。そして、思ったとおり、あるものを見つけた。

「あつた。やっぱり、これが」

「おいおい、なんなんだよ、ソラ」

「……ここ、見てみるよ」

僕はそこを指差し、ヴァルバに見せた。

「鳥の目のところに、小さな穴があるだろ？　ホラ、こつちの頭の鳥の目のところにも」

「ほんとだ。……これがどうかしたのか？」

「……わからなかったら馬鹿としか思えないんだけど」

「うっさい。わからねえんだからしょうがないだろ？　謎解きは大嫌いなんだよ」

ヴァルバは思いつきり嫌な顔をしてみせた。

「左右の通路の壁の鳥の絵は、1つの頭を持つ普通の鳥が描かれてただろ？　そして、この壁画には2つの頭を持つ鳥が描いてある。そんでもって、左右の通路には1つずつ、宝石があつた。そして、この壁画には1つの頭に1つずつ穴がある。つまり、この穴に宝石を埋めればいいんだよ、きつと」

「なんで？」

「左右の壁画の鳥の後ろに描いてあつた剣、重ね合わせると、うまくいことこの壁画の対になつてる剣になると思わないか？」

僕は少し得意になつて説明した。

「なるほどな。じゃあ、ここの穴に宝石を埋めれば、奥に通じる道が開くつてことか？」

「うーん、どうだろ。そこまではわかんないや。もしかしたら、何かの罠かもしれないし」

無いとも限らないからね。いきなり床が開いて、グサツ……みたいな。

「なんだよ、それ」

「そんな変な顔するなよ。皇隆王にでも聞かないと、罠かどうかなんてわからないだろ？　それに道が無いんだから、何かしないと前に進めないだろ」

「だけどなあ……」

ヴァルバはばつが悪そうな顔をした。

「とにかく、宝石をはめてみようよ」

ヴァルバはうなずいた。

僕は、壁画の2つの小さな穴に宝石をはめた。しかし、すぐには何も起こらなかった。僕とヴァルバは、辺りを見回した。何も起こらないので、不安になったからだ。

すると、ズシン、と大きな音が響いた。それは大きな振動で、この神殿が揺れたように感じた。そのせいか、天井から砂がサラサラと振ってきた。そして、壁画の壁が突然、鳥の体が縦に切られたかのように割け、壁の右半分は右の通路を、片方は左の通路をふさぐように移動した。そして、目の前に一つの階段が現れた。

「おお……」

ヴァルバはその階段を見ながら、感嘆の声を上げた。僕も驚きを隠せず、口を開けたまま、その光景を見ていた。

「本当に、道が開けた……」

「お、おい、ソラ。まるで、違うんじゃないかって思ったようないいぶりだな」

「ま、まあ、こんな簡単な謎解きでいいのかなって思ったしさ」  
ゲームでもこんな簡単なものだ、ちよつと拍子抜けというか……

…

「そうか？ 俺が1人でここに来ていたら、絶対にわからなかったと思うぞ？」

「ハハ、だろうね」

ヴァルバは「馬鹿にしてんのか!？」と、ふざけながら言った。  
僕たちは階段を進んだ。

階段は、入り口の階段と同じくらいの長さで、2分ほど歩いて行くくと、ようやく底が見えた。

またもや、通路に出た。しかし、その通路を進んで行くと、すぐに行き止まりに着いた。

「なんだ、また行き止まりか」

ヴァルバはため息混じりで言った。

「うーん、また謎解きかな？」

「かもな。あゝあ、面倒くせえ」

ヴァルバは肩をがっくりと下げた。まあ、ヴァルバの気分はわからないでもない。こんな暗闇の神殿の中を、うろろろしているのは気分がいいものでもない。

「仕掛けなら、どこかに何かがあるはずなんだけど……」

僕はその行き止まりの壁を眺めた。この壁には、絵画らしきものなんて1つもなかった。レンガで作られた壁は、そのレンガの隙間が小さな迷路のようになっていて、きれいな線ができていた。その線を上から下へ、ゆっくりと見てみると、壁の真ん中より20センチほど下のところに、変な隙間があるのを見つけた。

それは、レンガ同士の隙間なのかと思ったのだが、その一部分だけ少し大きな隙間になっていた。2〜3センチほどだろうか、剣がすっぽりと入りそうな大きさだ。

「ヴァルバ、この隙間……なんだろう？」

僕はその隙間を指差しながら言った。

「……あからさまに怪しい隙間だな。もしかして、これがさっきと同じような謎なんかな？」

「さあ、どうだろ」

「……剣でも入れてみたら？」

「剣？」

僕は頭をかしげた。

「ソラの持つてる剣が、ちょうど入りそうな大きさの隙間じゃないか。もしかしたら、それがスイッチなのかもよ？」

「どうして？」

「だってよ、この国の民族は『剣の民』って呼ばれてるんだぜ？」

剣を使って謎解き、なんてこともありそうな話だろ？」

ヴァルバは手を広げて言った。

「たしかに、ヴァルバの言うことも考えられるな……。やってみようか」

僕は腰帯に付けていた剣を抜いた。この剣は、ルテティアを出る時にアルベルト王子からもらった、高そうな剣だ。そういえば、剣を抜くのはけっこう久しぶりのような気がする。けっこう長い間、ダーナ砂漠でうろろろしていたから、練習する暇も無かった。というより、暑さと疲れで練習する余裕が無かったからか。

その隙間に、ゆっくりと剣を入れてみた。なんと、隙間の大きさと剣の厚さはピッタリだった。

剣の刀身が見えなくなるところまで入れると、再びズシン、と大きな音が響いた。さっきと同じように、神殿全体が少しだけ揺れて、しばらくすると変化が表れた。

目の前の壁は大きな音を立てながら、どんどん後ろへ下がって行った。そのスピードは、とんでもないくらい速かった。目で追える程度ではあったが。

またもや、僕とヴァルバはその光景を微塵も動かないで見つめていた。

「……すごいもんだな、大昔の神殿も」

ヴァルバが言った。

「これが畏なのかな？」

「さあな。だとしたら、なんと殺傷能力の無い仕掛けなこと」

ヴァルバは苦笑いして言った。たしかに、これが侵入者対策の畏だとすると、あんまり効果が無いのでは……。

そんなことを考えていると、開けた通路の左右の壁の燭台に、灯が灯り始めた。僕たちの近くにある燭台から、ずっと奥の燭台へ、順番に灯っていった。

「……これまた驚きの仕掛けだな。どういう原理で火が灯るんだろ？」

「たぶん、魔法石の力だろ」

「また魔法石？」

「まあ予想だけだな。この壁が後ろに下がると同時に、炎のエレメントルが入れられた魔法石が起動して、火が灯る仕組みなんだろう」

「……魔法石つて、何でもできるんだな」

「上手く使えばあんまり不自由はしない。けど、空を飛んだりすることはできないがな」

空を飛ぶ、か。『ガイア』には、飛行機があった。修学旅行でしか乗ったことがないし、そこまですごいとは思わなかったが、今考えると、あんな大きな鉄の塊が何十人という人に乗せ、大空を飛び、世界の端から端まで行くことができるというのは、なんとも偉大なことなんだ。この世界に来て、しみじみとあの世界の文明が僕の生活を豊かにしてくれていたということに気付いた。

だが、それは同時に何かを捨てていた。この世界に来て、初めて気が付いたことの一つだ。

最初の通路とは違い、今回の通路は幅がけっこう大きかった。ところどころ、横には部屋があった。

通路の奥には、大きな扉が1つあった。ここからでも灯りのせいか、それがよく見える。

僕たちは1つの部屋の扉を少しだけ開けて、覗いてみた。その部屋は普通の寝室、といった感じだった。隅に、汚れたシートがかぶせられたベッドがあり、部屋の中央にはほこりまみれのテーブル。撒き散らされた本の数々。本もまた、ほこりをかぶっていた。ほこりというより……砂かもしれない。少し暗いので、確認できないけど。

他の部屋も覗いてみたが、ほとんどが同じような感じの部屋だった。

「ここらへんの部屋は、何に使ってたんだろ？」

通路を歩きながら、ヴァルバに訊いた。

「皇隆王が言うには、この神殿は啓示を下したアイデアの神と、剣神

ローランに即位と誓約を伝えるための儀式を行うために造られたものなんだから、その儀式の準備をするための部屋、あるいはこの神殿に住み着いて、掃除や管理をしていた人の部屋だったのかもな」ということは、この神殿が建造された頃からある部屋ってことかそうとなると、2000年以上の前の前の部屋を使うのは、なんだか気分がいいものではない気がする。

「本とかにかぶっていたほこりを見ると、相当長い間、使われていないんだろうな」

「だろうな。まあ、砂の中に埋もれている神殿の内部で生活したいなんて思う人はいないだろ」

ヴァルバは笑いながら言った。

僕たちは通路を進み、奥の大きな扉の前に立った。その大きさは、イデアの王宮の謁見の間と同じくらいの大きさだ。

「まるで、この先に王様がいきそうな感じだな」

大きな扉を見上げながら、ヴァルバは言った。

「ハハ、まさか。いたら怖いよ」

亡霊じゃあるまいし。

「冗談に決まってるだろ？ ま、何かがいそうな気がしなくもないがな」

「たしかに。皇隆王が言っていた侵入者対策の罠なんて、どこにも見当たらなかったから、もしかしたらこの扉の奥に、とんでもない罠があったりするかもしれないもんな」

「……怖いこというなよお」

「……こ、怖がんなよ、気持ち悪い」

僕は吹き出しそうな気持ちを抑えた。だって、笑ったらヴァルバに何か言われそうだったから。

ゆっくりと扉を押し開けると、そこには広々とした空間が広がっていた。前に進み、その広間に進む。

広さ、天井までの高さは高校の体育館と同じくらいだろうか。天

井の中心から、大きな燭台が垂れ下がっており、そこには通路と同じく、火が灯っていた。たぶん、同じ原理なのだろう。壁には、ヘビや剣、人の絵が描かれていた。これらは、もちろんアイデアを象徴するものだ。

「広いな……。ここで儀式をしてたんだらうか？」

ヴァルバは天井を見上げた。

「天井があれだけの高さってことは、僕たちはそれだけ下に進んでいったってことか」

「そういうことになるのかもな。もしかしたら、もつと下に進んでいるのかもしれないが」

「……青空が恋しい」

そう言いながら、僕たちは天井を見上げながら歩いた。

ふと、視線を真つ直ぐに戻した。広間の奥には、1つの台座があった。そこには天井の燭台の光が届いていないのか、暗くて何があるのかよくわからない。

少し目を凝らして見てみると、その台座に何かが、いや、誰かが座っているのがわかった。

「……誰だ？」

ヴァルバが、広間に響き渡るほどの大きな声で言った。ヴァルバも、その台座に座っている『誰かが』に気付いていた。

ヴァルバの声に反応し、黒い影が少しだけ動いた。

「なんだ、気付いたのか」

聞き覚えのある声。男の声だ。

僕はハツとした。そう、この声……

インドラの……ホリんだ。

27章・地下宮殿 炎剣士ホリン「1」（前書き）

ちと長い（いつも長い）ので、分割しました。

「1」と「2」ですけど（^^）

## 27章：地下宮殿 炎剣士ホリン「1」

暗くて見えないが、ホリンだ。

ルテティアのステファン卿の研究室で、インドラのシュヴァルツと共に現れ、宰相の兵士たちを殺した、あのホリンだ。

ホリンは台座から軽やかに降り、前に進んできた。ホリンが一步進むたびに、彼の体を隠していた黒い陰が、潮が引くように上へ消えていった。

「ようやく来たか。待ちくたびれたぜ」

ハハハと笑いながら、ホリンは歩いた。そして、ようやくホリンの全身が見えるようになった。以前見たときと同じく、背中に身の丈以上の長さの剣を背負っている。

「早く来るものと思って朝から待機していたのに、何時間も待たせやがってよお」

ホリンは大きくため息を漏らす。

「なぜ、お前がここにいる？」

ヴァルバは背中に背負っていた槍を握んだ。すでに臨戦態勢になっている。

「おいおい、ヴァルバさんよ。人にもものを訊くときは、武器から手を離れたらどうだ？」

「その必要はない。答える、ホリン」

ホリンの言葉に冷静に対応し、ヴァルバは言った。ホリンは面倒くさそうに、頭をかき始めた。

「……ふん、まあいいだろ。ここまで来といて、知らないのもかわいそうだしな」

鋭い横目で、僕たちを見渡す。

「俺は、お前たちを殺すためにここに来た」

「なっ……!?!」

クツクツと、ホリンは含み笑いを始めた。

「そもそも、俺たちの邪魔をするお前らを、どうしてシュヴァルツやバルバロッサ……ウラノスは放っておくのか俺には理解できないんでね」

「つまり、独断でここに来たってことか？」

僕はホリンに聞こえるよう、大きな声で言った。

「そうなるかな。ウラノスの命令だろうがなんだろうが、俺らの邪魔をする人間は殺すしかないんだよ」

殺すとか言いながら、ホリンは笑っている。冷酷な顔で言われるより、その方がよっぽど不気味だった。

「その『ウラノス』っていう人間が、お前たちインドラの指導者か？」

ヴァルバは一步、前に足を踏み出した。その言葉に、ホリンは口を横一文字にした。

「……………」

「沈黙もまた、答えてことか。そうなんだな？」

ヴァルバはニヤツと微笑んだ。それにムカついたのか、ホリンは僕たちにも聞こえるくらいの舌打ちをした。

「……お前らごときの屑が、知る必要なんてないんだよ。ウラノスのことも、インドラのことも……」

ホリンの声が低くなった。

「知る必要はある。少なくとも、ソラはな」

ヴァルバはもう一步、前に進んだ。槍を掴みながら、ゆっくりと進んでいく。

「……そういや、あの女は貴様の幼馴染だったな」

「!?! 空のことか!?!」

僕はヴァルバと同じ位置まで進んだ。

「……日向空は『永遠の巫女』として覚醒させる。あの女の『宝玉』をもって、聖杯の封印を解除しなければならぬからな」

それはつまり、空の死を意味する。僕は飛びかかりたい気持ちを抑え、深呼吸した。いつだって冷静にいないと、闘いを始めた時にやられてしまう。

「……さっきの質問に答える。『ウラノス』とやらが、お前たちの指導者なのか？」

ヴァルバはさっきと同じ質問を投げかけた。前にホリンとシユヴアルツが現れた時も、奴らは『ウラノス』がどうのこうの言っていた。

「……ウラノス……ユグドラシルはインドラを設立した人間であり、指導者であり、幹部の一員でもある」

「ユグドラシル……？」

たしか、北欧神話に出てきたような。おいおい、たいそうご立派な名前なこと。自分を神か何かと勘違いしてんじゃないのか？

僕は心の中で蔑んだ。

「そのユグドラシル……いや、お前らの目的はなんだ？」

「……目的？」

ホリンはヴァルバを一瞥し、小さく笑った。

「知ってるはずだろうが。俺たちは邪神ロキの復活を果たすため、

『聖杯』を集め、封印を解こうとしている、と」

ホリンは数歩、僕たちに近づいた。まだ20メートル以上離れている。

「……本当に、それが最終の目的なのか？」

ヴァルバは確かめるように言った。

「まるで、他の目的があるんじゃないかっていうニュアンスを含んだ言い方だな」

「……」

今度は、ヴァルバが黙った。

「ククク……なかなか勘が鋭い野郎だ。さすが、と言っておこうか。お前こそ、自分の目的を言ったらどうだ？」

ホリンはニヤニヤしながら言った。ヴァルバはたぶん、ただの旅人ではないと思う。僕も気になるところだ。

「俺のことはどうでもいい。貴様たちの目的を言え！」

ヴァルバは、少しだけ声を荒げた。

「……お前らがそれを知ってどうする？俺たちを止めるとでも？」

「やはり……まだ何かあるんだな？」

「ふん、てめえには関係ないだろ？」

「関係あるね」

僕はすかさず言った。ホリンの視線が、ゆっくりと僕の視線を捉える。

「……ふん、まあいいだろ。てめえらが知ろうが知るまいが、結果は同じだし」

ホリンは、再び歩き出した。そして、僕たちと10メートルほど離れた場所で立ち止まった。

「インドラが何を意味するのか知っているか？」

ホリンは僕を見ながら言った。

「創世神話にある、世界を滅ぼした『神の矢』と呼ばれる天の雷のことだろ？」

ヴァルバはすらすら答えた。そんな話、初めて知った。

「そのとおり。さすがヴァルバ殿、よく知ってらっしゃる」  
「……………」

ヴァルバは瞬きをせず、笑っているホリンを見ている。

「お前の説明どおり、インドラとはティルナノグ帝国以前の世界を滅ぼしたといわれる、『神の矢』だ。しかし、なぜ神々は世界を滅ぼしたと思う？」

「……人が、愚かだったからとか？」

僕が言った。

「ああ、お前の言うとおり。インドラは愚かな所業を行い、母なる大地を汚し、命をむさぼり続ける人を滅ぼしたのさ。……全てじゃないがな」

と、ホリンは一度間を開けた。そして、続けた。

「そうすることによって、人は改心する。『我々は間違っていたのだ』と。だが、長い、長い……気の遠くなるような時間が過ぎると人は再び同じ過ちを犯す。だから俺たちが神に代わって、人類に天罰を与えようってことさ。それは、再び人々に幸福で平和な世界を作るチャンスを与えるということなんだよ」

ホリンは笑みを消し、静かに言った。

「そして、ティルナノグ帝国を……あの『天空の楽園』を滅ぼした『神罰』も、インドラと同じ類のものだった。なぜその文明を滅ぼしたのかも、すでに知っているはずだ」

たしか、天空の神々に反旗を翻したから……だったか？

「リサから聞いた話では、どうせ邪神が天帝をそそのかして闘いを始め、神々に滅ぼされた……とかっていうもんだろ？ どうせ」

聞いた話とほぼ同じことを言い当てたため、僕たちは驚いた。それを見たホリンは、馬鹿にするかのように笑い始めた。

「ハツハツハ、あの女……まだ理解していなかったか。あるいは……気付いているのに、あえてお前たちに教えなかっただけかもしれないが。ハツ、まあいい。話を元に戻そう」

ホリンは笑いを止めた。

「つまり、インドラは世界を再び創造するためのもの。もう、わかるだろう？ 俺たちの組織がその意味を冠しているということだな……」

細めた目で、冷たい視線を僕たちに向ける。

「そうか、お前ら……人を滅ぼすつもりか？」

人を、滅ぼす？

「な、なんだよ、それ？」

僕が慌てて言っても、ヴァルバは答えなかった。そして、少しだけ間が開いてから、ヴァルバは説明した。

「こいつら……人を駆逐して、自分たちが創世主となって新しい世界を創ろうとしてるんだ」

「な、なんだって！？　そ、そんなことができるわけが……」

「できるんだよ、それが」

ホリンは僕の言葉を遮って言った。その顔には、笑みがこぼれている。

「この世にはてめえの世界とは違い、人知の範囲を超越しているものがたくさんある。その中には、この世界の生命を……この世界自身を完全に葬ることができる代物だって眠っているんだ。俺たちはそれを使って、理想を実現させようとしているだけさ」

ホリンは手を広げて言った。僕はすかさず言った。

「何を馬鹿なこと言ってるんだ！　大勢の人を殺すようなこと、許されるはずがない！」

「許されない？　誰に？」

ホリンは眉を眉間に寄せて言った。まるで、僕を見下すかのよう

に。  
「くだらんな。俺たちは誰かに許されないからといって、己の信念を曲げるようなことはしない」

くつとあごを上げ、ホリンは言った。

「な、何が信念だ！　人を殺すことが信念なのか？　世界を滅ぼすことが理想だと言うのか！？　んなの、ただの虐殺だろうが！！」

僕は訴えるように言った。

「理想だとは言っていない。理想を現実のものにする過程の中で、犠牲となる必然的なものが、この世界だということだ。普通のこと

じゃないか？ 何かを得るには、それと同等の代価が必要なのだから」

「違う！ そんなのは間違ってる！ 理想のためだからと言って、命を奪うことがいいわけじゃない！」

「わかりやすい正統論を言うな、お前。よっぽど、甘ちゃんのような」

ホリンは鼻で僕を笑った。興奮気味の僕に対し、それは火に油を注ぐものだった。

「なんだと!？」

「ならば聞くが、お前が日ごろ食べている食料はどうだ？ それらも命を持っていたにもかかわらず、お前が食欲のために殺したと同然だ」

「そ、それは、人間だって生きている。生きるためにはしょうがないことだろ」

思わず、僕は弱い声で答えてしまった。

「そのとおり。生きる上で致し方ない犠牲だ。生きるための犠牲だ。所詮は原因と結果。お前は俺たちがしようとしていることによって生じる犠牲が大きいために、ただ単にその『常識』を忘れて反論しているに過ぎないんだよ」

「……お前たちが古の神々に代わって人間に天罰を与えるというのは、どこか履き違えてるとは思わないのか？」

ヴァルバは僕と違い、冷静さを保ちながら言った。

「俺たちは神になるうとしてしているわけじゃないんだよ。どこかの王族のような考え方と一緒にするな」

「じゃあ、そういった考え方とどう違うんだ？」

ヴァルバの問いに、ホリンは眉を眉間に寄せた。

「……俺たちがしようとするのは、この世界を救うことでもあるのよ」

「世界を救う……？ どういうことだ？」

僕は顔を上げて訊いた。世界を滅ぼすのに世界を救うというのはどういうことだ？

ホリンはクククと笑い、僕たちを睨みつけた。

「そこまで教える必要はない。……どうせ、お前たちはここで死ぬんだからな」

僕はすかさず、剣の柄を握った。なぜなら、ホリンの言葉には殺気がこもっていたからだ。

ホリンは背中に背負っている、身の丈を越す長剣をゆっくりと抜いた。ヴァルバも、すでに槍を構えていた。

ヴァルバは僕に寄ってきて、小さな声で言った。

「ソラ、奴は今までの敵とは別格の敵だ。用心しろ」

僕は小さくうなずいた。王都の地下研究所でホリンの技を見た時は、変な感覚のためか何も感じなかったが、その後、寝室で起きた時に冷静に考えたら、ゾツとした。剣が触れてもいないのに、数人の兵士の体を胴のあたりから真っ二つにしていた。人の為せる技じやあ、ない。

「俺たちは2人だからといって有利じゃない。攻撃をする際、味方に当たらないようにあたりをよく見ながら攻撃するんだ。いいな？」  
僕は再びうなずいた。

ホリンは、ゆっくりと近づいてくる。身長と同程度の長さはある長剣を、地面すれすれに引きずりながら、不敵な笑みを浮かべている。

「どうした？ 来いよ」

手招きを شدした。けど、僕たちは動かなかった。わかりやすい挑発に乗っちゃいけない。

僕はアルベルト王子に教わったとおりの構えをした。ホリンが一步一步、近づいてくるたびに、心拍数が上がってくるようだ。

「まったく……しゃーねえな」

ホリンは5メートルほど離れた場所で、突然、走り出した。そのまま、僕たちに斬りつけてきた。

うまく、ヴァルバがその一太刀を槍の中程で受けきる。僕はさすが、ヴァルバの槍に剣をぶつけて押し合っているホリンに斬りかかった。しかし、ホリンは僕を見ずに、そのままバツクステップをしてかわした。

「ヴァルバ…… お前、俺の剣を受けきれるなんて、なかなか力があるじゃねえか」

ホリンは偉そうな格好をして言った。

「お前なんか褒められても、うれしくもなるともないんだがね」

ヴァルバは嫌味つたらしく言ってみせた。ホリンはその挑発に動じず、逆に笑った。

「ハツハツハ、褒めてないんだがな。しかし、俺の一太刀を受けきれる人間はそうはいない」

「そこまで自信があるのはどうかと思うけどな。大胆不敵って言葉、知ってるか？」

僕はニヤツとしながら言った。ホリンは首を曲げた。

「知らねえよ、そんな言葉。どうせ、蒼碧世界の言葉だろ？」

「蒼碧世界？ ガイアのことか？」

「なんだ？ お前、知らなかったのか？ …… 大昔から、ティルナノグ人にそう言われてるんだよ。ガイアは蒼碧世界、レイディアントは紅炎世界と呼ばれている。なぜだかは知らんがな。…… まあ、そんなことはどうでもいい」

ホリンは首を曲げて、骨を鳴らした。寝起きのときに、よく音が鳴るものだ。

その瞬間、再びホリンは突進をしてきた。今度は、僕の方に向かってきた。

僕は殿下の言葉を思い出した。

「敵の動きをよく見る。怖いからといって、目を瞑るな。敵の攻撃がどの方向から来るかを見極めれば、絶対に防御できる。武器が壊れない限りね」

と、最後は笑いながら言っていた。

ものすごい速さでホリンは向かってくるが、心は冷静だ。ホリンは剣を真横に構えた。よし、奴の攻撃は僕から見て左からだ！

大きな音が響く。僕の剣とホリンの剣が、左手側でぶつかる。

僕は地面にしっかりと足をつけ、押し負けないようにした。僕は何とか、ホリンの攻撃を受け止められた。

「なんだ、お前も受け切れるのか？」

ホリンは笑いながら言った。すると、一瞬にして表情が変わり、顔だけを後ろに反らした。その刹那、ヴァルバの槍が僕の目の前を通過した。ホリンは、顔を後ろに下げることによってヴァルバの攻撃を避けたんだ。

そして、ホリンはすばやく左手で、その槍を掴んだ。

「まだまだ甘いな、ヴァルバ」

「……」

そのまま、僕たち3人は硬直状態になった。僕は押し負けないように、両手で剣を持っていたので、身動きできない。ヴァルバも、握られている槍を引き抜こうとするか、できないようだ。ホリンの握力が、ヴァルバが引き抜こうとする力を上回るといふことか！？

「くっつ……！」

「どうした？ 引き抜けないんだろ？ クックック、それが、本当の俺とお前の力の差だ」

ホリンは笑いながら言った。

「ま、俺は力の半分も出しちゃいないんだがな……」

そう言うと、ホリンはヴァルバの槍を離し、僕の剣から自分の剣を退け、再びバックステップして離れた。

「まだ、本気じゃないだと？」

僕は体勢を立て直し、恐る恐る聞いた。

「当たり前だ。お前たちのような屑に対して、いちいち本気を出すか？ 竜がねずみを殺すのに、本気を出すか？」

そう言うのと、ホリンは面白そうに笑い出した。何が笑えるのか、さっぱりわからない。

「もう少し力を出してやろうか」

ホリンは言葉を言い切る前に、動き出していた。

一瞬にして、僕の後ろに回った。とても、人間の為せる動きじゃない。いや、そんなことを考える前に、体を動かせ！

そう自分に言い聞かせ、ホリンの攻撃を防御した。

「なっ……！？」

しかし、踏ん張ることができず、剣に押され、宙に浮いた。そして、2メートル離れたところにドツと倒れた。僕はすぐさま体を起こし、体勢を整えた。防御したのに、剣の衝撃でここまで吹き飛ばされるってのか。

目の前では、ヴァルバが連続で突きを繰り返していた。しかし、そのことがくが避けられてしまう。ホリンの顔からは、余裕さえ見える。

僕は手助けしようと思い、ダッシュをしてホリンに近づき、攻撃を繰り返した。だが、やはり簡単に避けられてしまう。その間、ホリンは1度も攻撃を仕掛けてこなかった。この余裕からならば、きっとできるはずなのに。

「ハッハッハ！ お前らの攻撃は遅いなあ！」

ホリンは避けながら、そう言った。僕は何度も攻撃をしているが、ホリンの服にさえかすらない。

僕が大きく振り抜いた横一文字の攻撃をひらりとかわし、僕とヴァルバの攻撃範囲から出た。

「こんなじゃあ、遊びにもならんな。つまらん」

ホリンは肩に剣を置いた。

「簡単に殺しちゃあ、面白くないからな」

そう言うと、ホリンは閃いたような動作をした。

「よし、ごうしよう。このままじゃつまらないから、お前たちにチャンスをやるう」

ホリンは剣を背中にある鞘に収め、腕を広げた。

「どこにでも斬りつくな」

僕とヴァルバは驚愕した。腕を広げ、まさに無防備の状態だ。肩も、胸も、腹も、腰も、足も、全て無防備。

「1度だけ、お前らの攻撃を受けてやる。……それでもし、俺が死ななかつたら、お前たちは素直に死にな……」

ホリンの目は本気だった。口元が笑ってはいるが、目の奥、そのまた奥の瞳の中には、深淵の闇があるように見えた。

「くそ……なめやがって！」

ヴァルバは走り出した。僕はそれに少し遅れ、走り出した。

ホリンの言葉なんて、嘘に決まっている。非力な僕が本気で斬りつけても、人は斬れる。ホリンが斬れないはずがない。

そう言い聞かせ、僕はホリンの体を真つ二つにするために、やつの頭上から力いっぱい剣を振り下ろした。ヴァルバもまた、渾身の突きをホリンの心臓があるあたりめがけて繰り出した。

ガキイイン

まるで鋼鉄の塊に斬りつけたような感じになった。そして、目の前には信じられない光景があった。

僕の剣はホリンの肩の辺りでピタッと止まっていた。いや、振りぬこうとしているのに、チワワのように震えている。重すぎて動かないものに、一生懸命押ししているときのように。

ヴァルバの槍もまた、ホリンの服を突き抜けてはいるが、やつの体を突き抜くことができていない。ホリンの肌の上で、止まっている。

「う、嘘……だろ」

僕は思わず、そういう言葉が漏れた。

ありえない。

防具も、防弾着も付けていないのに、どうして、皮膚の上で剣が止まっている！？ どうして、槍が皮膚の上でピタッと止まっている！？

ありえない！！

「……期待はずれだな」

僕たちが目の前の光景に目を奪われていると、ホリンが口を開いた。それまで、ホリンは僕たちの驚く様を細い目つきで眺めていた。まるで、地べたに転がっている石ころでも見るかのように。そして、今の言葉も呆れたような声で言っていた。

「お前らがもし、精一杯の力を振り絞って攻撃していて、俺の体に傷を付けることができなかったというのなら、呆れたもんだ……」

ホリンは大きいため息をついた。僕は驚きを隠せずに、そのままホリンに訊いた。

「ど、どういふことなんだ？ どうして……」

わななく口が、情けなく思える。けど、今はそんなことを冷静に考えてなんかいない。

ホリンはくつと首を曲げ、ニヤリとした。その質問を待っていたぞ、というような顔で。

その時、ホリンは剣を横に構え、振り抜いた。咄嗟に防御した僕とヴァルバは踏ん張りが効かず、吹き飛ばされた。

「どうしてかって？ 前にも説明しなかったか？」

ホリンから数メートル離れた場所で、僕たちはゆっくりと立ち上がった。

「お前が『暴走状態』だった時のことを思い出してみろ。『暴走状

態』だったとしても、記憶はあるだろ？」

ホリンは問うように言った。

「あの時……？」

たしかに、あの時の『変な感じ』がホリンの言う『暴走状態』だというなら、記憶はある。ステファン卿を斬りつけた時、あの何も感じない感覚。人を殺すことに何の躊躇いもなかったあの時。今思い出しても、恐怖で震えてきそうだ。

「あの時、俺はお前になんて言った？ お前と剣を交えた時、シュヴァルツが『これ』について言ったんだがな」

僕の考え込む顔を見て察したのか、ホリンは言った。

あのとき シュヴァルツは何て言っていた……？

「ソリッドプロテクト……？」

たしか、そんなことを言っていた。「ソリッドプロテクトがなければ、そこらの兵士たちと同じように真っ二つになっていた」と。

ホリンはこくりとうなずいた。

「そう、それだ。ソリッドプロテクト……それが、お前らが俺の体に傷を付けることのできない理由だ」

「……なんだ？ その、『ソリッドプロテクト』とは？」

ヴァルバはすかさず訊いた。

「ソリッドプロテクト……外部からの攻撃から身を護るために、体の表面に薄い膜を張る。薄いとはいえ、鋼鉄以上の固さを持つことは可能だ。なぜなら、ソリッドプロテクトの強弱は、自らが持つ潜在元素の大きさによって変わるからだ」

魔法がある世界だからかもしれないが、とんでもないものが存在するんだ。剣で斬られても、槍で突き立てられても、肉体には傷が付かないソリッドプロテクト。本当に、人知の範囲を超えている。

「ソラ、お前が俺の攻撃を受けても、そこらに転がっていた兵士の骸のように真っ二つにならなかったのは、そのソリッドプロテクト

が発動していたからだ。しかし、お前はまだ『暴走状態』で未完成な状態なために、死には至らなかつたものの、傷を負う羽目になったのさ」

未完成って……？

「潜在元素が常人より大きく、ソリッドプロテクトが扱えるならば、大体の攻撃は防げるようになる」

「それは……インドラの人間だからこそできる特技なのか？」

ヴァルバは構えを解き、訊いた。

「いや、俺のような幹部の人間だけだ」

「じゃあ、シュヴァルツも同じようなことができる、ということか？」

僕がそう訊くと、ホリンはうなずいた。

「……あいつは特別な人間だからな。俺より、もっと強いソリッドプロテクトを発動させることは簡単だろう」

ヴァルバは苦笑いをしていた。ホリンでさえ、剣や槍の攻撃を防ぐことができるほどののに、それ以上の強度を持つソリッドプロテクトを放つシュヴァルツは、弾丸でも防ぐことができるのか？

いずれにせよ、どうすればいい？

このままでは、ホリンにかすり傷さえ付けることもできないまま……殺されてしまう。

いや、殺されるわけにはいかない。死ぬわけにはいかない！　まだ、空を見付けてもいないのに、こんなところで、死んでたまるか！

自分の故郷の人々と別れの言葉を交わすこともできないまま、見たこともない世界を訪れたのに。精一杯の決意と決心をし、ここまで来たのに、死んでたまるか！

僕は剣を強く握り、ホリンへ向かった。剣を鞘に収めている今のホリンは無防備だ。斬れる。斬れないはずがない！

「喰らえええ……！！」

斬れるのだと自分に言い聞かせ、今度は横一文字を食らわした。再び、重い感触が腕を伝わり、体全体に伝わってくる。まるで、

鐘でも叩いたときのような感触。そう、頭の隅で想像していたおりの結果になってしまった。

僕の剣は、ホリンの腕の皮膚の表面で止まり、震えている。

「学習能力のない野郎だな……」

ホリンはため息をついた。そして、ゆっくり自分の剣を頭上に上げる。

「お前の非力な力じゃ、俺のソリッドプロテクトを破壊することなんてできないんだよ」

そう言い放つと、ホリンは上から剣を振り下ろした。僕はとっさに、自分の頭上に、ホリンの剣と垂直になるように、防御をした。

強烈な斬撃が、僕の剣に叩き落される。その衝撃で、思わず目を瞑ってしまった。すると、すぐにホリンの剣が離れるのがわかった。すぐさま目を開け、次のホリンの攻撃に備える。

ホリンの横からの斬撃が右手側から飛んでくる。それをなんとかガードできたが、衝撃で一步ほど横に吹き飛んだ。

すると、今度はヴァルバが攻撃を仕掛ける。僕に攻撃をしていたホリンの横っ腹の辺りを、力いっぱい突くが……やはり、貫けない！ ヴァルバは悔しそうな顔をした。

「この屑が……！」

ホリンがヴァルバに攻撃を仕掛ける。ヴァルバはその攻撃を槍の中程で受けきる。しかし、今度はホリンがすばい斬撃を繰り出している。ヴァルバは防戦一方になってしまっていた。ホリンは長剣であるため、何とか追いついていける攻撃スピードだから助かった。僕は剣を構え、そこへ向かった。ヴァルバはホリンの攻撃を何とか防御しているが、顔が苦しそうに歪んでいる。

ヴァルバに当たらないよう気をつけながら剣を振るうが、ホリンはそれを器用に避ける。ヴァルバには反撃の余地もないくらいのはやい攻撃を繰り出しているのに、僕の攻撃に対しては飛んだり、体を反らしたりして避けている。目が後ろにでも付いているのだから。

「ハツハツハ！ 雑魚だなあ、お前らは！」

そんなことを言われても、どうにもできなかった。いくら攻撃しても、かすりもしない。いや、当たったとしても、ホリンには傷一つ付けることができないのかもしれない。

「この……！！」

僕は思いつきり剣を振りぬいた。力を込めて、どうにかして傷をつけてやろうと、振りぬいた。

ほらよ

その時、今までの感触とは違う感じがした。何かが、剣先に触れたような感じがした。

顔を上げ、ホリンを見ると、今までとは違う光景があった。ホリンの肩の辺の服がパツクリと裂け、赤い筋みたいなものが見える。

そう、あれは血だ。

僕は一瞬信じることができなかった。だって、ホリンには傷を付けることができないはずじゃないか。ヴァルバでさえ、その光景を見て驚いている。

ホリンは驚きの表情をしていた。目は見開き、口は小さく開いていた。そして、ゆっくりと自分の肩の傷を見た。

「なん……だとお！？」

信じられないのか、その傷を剣を握っていない方の手で押さえた。自分で触って、その傷が本物かどうか、確認している。

ようやくその傷が本物だと気付き、ホリンは悔しそうな顔を僕たちに向けた。

「くっ……ソラ、てめえ！！」

怒りのこもった表情を、僕に向けた。そして、ホリンは目で追えぬスピードで、僕に迫った。

僕は慌ててホリンの攻撃を防御するが、衝撃で横に吹き飛ばすぐさまホリンが追い討ちをかける。僕はそれを、体制を崩しながら受け流した。そのまま、僕は倒れこんだ。

すると、ヴァルバが僕をかばい、ホリンの斬撃を防いでくれた。

「なんだ……かなり動揺してるじゃないか」

つばぜり合い、じゃないが、そんなふうには槍と剣を押し合っていると、ヴァルバが皮肉めいたことを言った。

「ちっ、うるせえ！」

ホリンは大声で言った。明らかに動揺している。僕に傷を付けられたことが、それほど屈辱的だったのか。

「どうやら、ソリッドプロテクトを發動しているのに傷を付けられたことが、かなりの衝撃だったようだな」

「なんだと？」

「そんなに、ソラの力が信じられないのか？」

ヴァルバは笑いながら言った。ホリンは、悔しそうに口を端で結んでいた。けど、すぐにその表情は消えた。

「ハッ……あいつはてめえらとは違う人間。そう考えれば納得……だが……！」

ホリンはそう言うと、力でヴァルバの槍を押し返した。そして、大きく後ろへジャンプして、距離をあけた。

「お前らにも、見せてやるよ」

ホリンは自分の剣を、自分の目の前に据えた。

「俺たちが、そこらの屑とは違うってことをな……！」

ホリンは目を静かに閉じ、つぶやいた。

「吼える、魔人の豪炎……目覚める、殺戮の焰剣  
『レーヴァン  
ティン』……！」

ホリンは大きく叫び、剣を天井に向かって突き上げた。その瞬間、ホリンの持っていた剣が、赤く光りだした。そして、その切っ先から、朱色の炎が溢れ出した。

「ほ、炎!？」

その炎は瞬く間にホリンの剣を包み込んでいき、赤く煌めいていた。その光景を、僕とヴァルバは瞬きをすることも忘れ、見つめていた。

なんだ、あれは？

ホリンの剣の刀身が、炎に包まれていったかと思うと、剣は息を吸うかのように、炎を吸い込み始めた。そして、ホリンの剣の刀身は赤く輝いた。時折、息を吐き出すかのように、切っ先から炎が噴出していた。

「な、なんなんだ……それは!？」

ヴァルバは思わず、そう言ってしまった。それを聞いて、ホリンはニヤツと笑った。

「これが、俺の『力』だ」

自慢するように、その炎の剣をかざした。

「レーヴァンティン……絶え間なく、地獄の業火を纏っている炎の魔剣さ。特殊なエレメンタルで加工された オリハルコン でできた武器だ」

ホリンはレーヴァンティンをまじまじと眺め、ニヤニヤ微笑んでいる。

「いつ見てもレーヴァンティンは美しい。真っ赤な色ではなく、朱色というところが、味を出していると思わないか？」

その剣を見つめながら、ホリンは言った。

「それは……魔法剣の一種か？」

ヴァルバが言った。

「ま、それに近いといえば近い。だが、違う点がある。そもそも、

魔法剣は自らの魔力をもって、所持している武器にエレメンタルを付与するものだ。しかし、レーヴァンテインの場合、この剣自体が炎のエレメンタルを発している。つまり、俺自身の魔力は少しも失われない。そのため、いくら使っても疲れない。魔法剣の弱点であった、長期戦に弱いということがないのさ」

説明口調で、ホリンは言った。

「さてと、説明が終わったところで、ディナーショーだ。いや、エンディングかな。……お前らが死ぬという結末でな!!」

27章・地下宮殿 炎剣士ホリン「1」(後書き)

地下宮殿 炎剣士ホリン「2」へ続く

27章：地下宮殿 炎剣士ホリン「2」(前書き)

27章後篇です。

## 27章：地下宮殿 炎剣士ホリン「2」

ホリンはハツハツハと笑いながら、天井を仰いだ。かと思うと、瞬きする間も与えず、ホリンは僕たちの方へ突撃してきた。

「おらああ！！」

ホリンの振るう剣から、炎がほとばしる。僕たちは剣自体の攻撃を避けることはできる。だけど、剣を避けてもレーヴァンティンから発せられる朱色の炎が、追い討ちをかける。

目と鼻の先で何とかホリンの攻撃を避けたとしても、少し遅れて、炎が体に降りかかる。

僕がその炎に当てられて体を転がしている隙に、ホリンは後ろへバック転し、大きく剣を構える。

「屑が、こいつで死にな！ 烈衝斬牙ア！！」

レーヴァンティンを地面にめり込ませるくらいの勢いで、ホリンは剣を振り下ろした。

前回のようないくつ風ではなく、炎を纏った、紅蓮の風が僕を目掛けて飛んで来た！

僕は炎によって火傷を負った肩の痛みを堪え、床を手と足を使って押し、横へ転がるように避けた。

「うおっっ！？ ……あちちち！！」

間一髪、避けることができたが、さつきと同じく、その衝撃波よりも広い範囲で炎が追い討ちをかけ、今度は僕の太ももの部分に降り注ぐ。その熱さで、思わず飛び起きた。

熱さで体勢を戻せたって言うのもなんだかおかしな話だが、なんとかホリンを見据えることができた。ホリンは、うれしそうに笑顔を浮かべていた。

「クツクツク、ただ逃げるだけか？ さっきみたいに俺に向かって来いよ！」

再び、ホリンはすばやく突進してきた。その速さは目で追えるものの、身体がついて行けていない。

ホリンの横からの攻撃を何とか防御し、反撃に出た。左で防御した後、すぐにホリンの目の前へ、レーヴァンティンの刀身が当たらないところまで踏み込んだ。そのまま、ホリンの利き腕である右手を掴んだ。

「何？」

ホリンが攻撃できないよう、動きを封じるためだ。ヴァルバがその隙を狙い、ホリンの後ろから攻撃を仕掛ける。

「お前程度の腕力で、俺の動きを止められるか!!！」

ホリンは左手で僕の胸倉をつかみ、そのまま前へ押し出した。僕は床へ転げて倒れた。

そして、ホリンはすばやくヴァルバの方へ向き直り、槍の矛先を顔面すれすれで避けた。

「ハハハ！ やるじゃねえかあ!!！」

「ちつ……!!！」

ヴァルバは悔しそうに舌打ちをした。

「ハッ、のろいんだよ！ 屑が！」

ホリンは上から叩きつけるように、ヴァルバへ剣を振り下ろした。ヴァルバはそれを槍で防御するが、僕の時と同じようにレーヴァンティンの刀身に漂っている炎が、ヴァルバへ襲い掛かる。

「うあつち!？」

と、ヴァルバは声を上げた。こんな切羽詰った状況だったのに、よくもまああんな声が出るもんだ。人のこと言えないけど。

ホリンはもう1度振り上げ、再びヴァルバ目掛けて振り下ろした。その瞬間を突いて、ヴァルバは反復横とびをするかのように、右に避けた。勢い余って、レーヴァンティンが床にめり込んだ。その衝撃で、柄に敷き詰められた黄色いレンガが、あるものは砕け、ある

ものは浮き上がった。その光景が見えた後、その床から朱色の炎が噴き上がった。その炎は、ヴァルバにも当たりそうなくらいで、ヴァルバはとっさに後ろへジャンプして逃げた。

「あぶね……。ったくよ、物騒なもん振り回しやがって」

どっかの高校生がしゃべっている感じで、ヴァルバはつぶやいた。ヴァルバは僕の方へ早足で近づき、言った。

「……まったく、あいつにダメージを与えることができないな。どうする？」

「どうするって……」

ホントに、どうすればいいんだ？

ホリンがレーヴァンティンを覚醒する前から、歯が立たないのに一度だけかすり傷を付けることができたが……。

今の状況なんて、レーヴァンティンを覚醒させたため、斬撃をガードしてもその上から炎が追い討ちをかけてくる。しかも熱い。かなり。

そんなことを考えていると、ホリンが剣を横に構えた。あれは、斬撃の衝撃波を放つ構えだ！

「こそこそと相談しても、どうにもできねえんだよ！」

真つ赤な衝撃波が、大気中の水分を蒸発させながら、床に少しだけある砂を巻き上げながら、ものすごいスピードで僕たちの方へ飛んでくる。

僕とヴァルバはそれぞれ、左右に前転しながら避けた。まるで、アメリカの警察とかが銃弾から避ける時のように。

前を見ると、ホリンはヴァルバのところに向かっていた。そして、手前で剣を振り下ろした。ヴァルバは顔を歪めながら、レーヴァンティンの間合いから離れるように、身体を後ろへ引いた。そして、槍の特性を生かす攻撃、つまりホリンの攻撃の間合いの外から攻撃した。

その時、僕はホリンは避けられないと思った。しかし、避けられた。いや、ホリンはヴァルバの突き攻撃を避けたわけではない。ヴ

アルバの槍の矛先は、ホリンの胸元の辺りで止まっていた。なんと、ホリンは左手で槍をつかんでいた。ホリンは不敵な笑みを浮かべ、ヴァルバに言った。

「……ちよろいもんだな」

僕は走り出した。危険、だと思ったからだ。ホリンはヴァルバの槍を右斜め下から、レーヴァンティンで真つ二つにした。そして、ホリンはその掴んでいた槍の先端部分をくるりと回し、矛先をヴァルバに向けた。それを見て、ヴァルバは身体を倒そうとして避けようとしたが、遅かった。

ホリンはそれを、ヴァルバへ投げつけた。目にも止まらぬ速さで、槍の先つぽはヴァルバの胸を目掛けて向かって飛んでいった。ヴァルバは倒れこみながら、胸から避けることに成功したが、ヴァルバの右肩に突き刺さった。

「ぐあつ!!」

ヴァルバは顔を歪ませ、その場にドツと倒れこんだ。槍の先が刺さったヴァルバの右肩から出てくる血は毒が回るかのように、その部分の服を赤く染め上げていた。

「よええ槍だな。ま、お前にはお似合いだな」

ホリンは倒れているヴァルバに、そう吐き捨てた。ヴァルバは悔しさで、歯軋りしていた。

僕は走る勢いそのまま、ホリんに斬りかかった。しかし、ホリンは僕を見ずに攻撃をガードした。

「ハッ、邪魔だ!」

ホリンはそのまま、剣と一緒に僕を押し切った。そして、僕は3メートルくらい吹き飛ばされてしまった。

「くっ……!!」

「雑魚は雑魚らしく地べたに這いつくばっている」

ホリンはヴァルバのほうに向き直り、切っ先を向けた。波打つ朱

色の炎が、ヴァルバに襲い掛からんとしている。

「……覚悟はできたか？ ヴァルバ「ダレイオス」

ホリンがそう言うと、ヴァルバは少しだけレーヴァンテインの切っ先を見つめ、キツとホリンを睨んだ。

「覚悟なんて……最初からできてるに決まってる？ お前のような、人を殺すことに何も感じない人間とは、格が違うんだよ！」

ヴァルバは大きな声で、ホリンを挑発した。ホリンは目を細くし、ヴァルバを見回した。

「……じゃ、死ねよ」

ホリンは剣を振りかざした。ヴァルバは覚悟したのか、静かに目を閉じていた。

「ヴァルバ！！」

目の前で……死なせてたまるか……！！

空がさらわれた光景がよぎる。

空……あの時、僕はお前を護れなかった……。

あん時みたいに、何もできないまま……！！  
仲間を護るんだ。

この剣で、この意志で！！

そう、その心さ

紡ぐための

何かが囁くのと同時に、僕は走り出していた。無意識のうちに、いや、違う。

まるで、地面に足をつけないで……飛ぶかのように、僕は進んでいった。それも、人間の為せる速さではなく。

僕は、ホリンに斬りかかっていた。

「ああ？」

ホリンは僕の方に体を少し向け、僕の斬撃を防御した。しかし、さつきまでのように、押し負けている感じがしなかった。なんだか、体がすごく軽い。

「なっ！？ この俺が、押し負け」

キーン……と、剣が弾かれるような音が響いた。レーヴァンティンはホリンの手の内から離れているわけではないが、上へ吹き飛んでいた。ホリンの体も、同じように少しだけ浮いた。

「な、何！？」

今の状態、ホリンは前方が完全に空きだ。僕はすかさず、剣を斜めに斬り下ろした。

少しだけ、感触があった。切っ先に何かが当たり、裂けられた感触。ホリンは間一髪で、僕の斬撃を避けていた。しかし、ホリンの胴体には、50センチくらいにわたって、斜めの切り傷がついていた。そう、僕がやったんだ。

「くっ……ソリッドプロテクトもろとも、切り裂いただと！？」

ホリンは驚いたような、怒りがこもっているような顔で言った。

そして、僕は再び足を踏み出していた。ホリンに向かって、一直線に。

「てめえ！！ いい度胸だ！」

ホリンは剣をサツと構え、僕に向かって走り出した。僕の目の前で、剣と剣がぶつかり合う。レーヴァンティンの炎が、火花に混じって僕の顔の前をちらついた。

どうしてだろう。今までのように、ホリンに力で押し負けていない。いつもなら、僕は両手でホリンの攻撃を受けていても、吹き飛ばされてしまうほどで、さらにホリンは片手だった。なのに、今は全然押し負けていないし、ホリンは両手でレーヴァンティンを握っていた。

この感覚、あの時と同じだ。そう、ステファン卿を殺そうとしたときの、あの感覚と。

だけど、違う。意識がはっきりしている。僕自身が、僕の体を動かしている。

「クツ……この、くそが!!」

ホリンは僕の剣を、体ごと剣をかがめ、左に受け流した。そして、くると回転し、そのままの勢いで僕に切りかかってきた。僕はそれを前かがみになって避けた。レーヴァンティンの炎で、後頭部のあたりの髪が、ほんの少しだけ焦げてしまったようだ。

体勢をホリンの方に向け、かんだままホリンのおなかの中心を狙って、突き攻撃をした。

再び、あの感触。ズルツといくような、気持ち悪い感触が、まるで電気が流れるように、僕の指先から腕をつたり、頭の奥まで届いてきたようだった。

ホリンはその攻撃を、すばやい行動で何とか避けていた。しかし、今度はホリンの横腹の辺りが、赤くにじんんでいた。

「ソリッドプロテクトを突き破るほどの威力！ まさか、覚醒したのか……」

ホリンは顔を歪ませ、その傷の部分を片手で押さえていた。  
覚醒？

前にも、誰かが言っていたような……。

「暴走だというなら、これほど精神が安定しているというのが、いささかおかしい。お前、もしかして……」

そこまで言って、ホリンはハツと何かに気付く動作をし、自分の口を手でふさいだ。

「ハッ、まあいい。てめえがその状態なら、俺はようやく本気を出せるってもんだ」

ホリンは構えを緩くした。つまり、さっきまでのどっしりとした構えから、体中の力を抜いたような構えだ。

僕は、瞬間的に感じた。今までのホリンとは違う。

今まで、ホリンは完全に僕たちをなめていた。全く力を出さず、少々傷を付けられても、まだまだ本気を出していない、という感じだった。しかし、今は空気が違う。いつもニヤニヤしていた口元は、どこかの真剣な受験生の顔つきになっていた。

「……聖魔の力を、この俺の前で示してみる。俺を楽しませてみる！」

そうホリンは言うと、レーヴァンティンの赤く輝く刀身に指先で触れた。すると、レーヴァンティンの炎が朱色から、マグマだまりのような、どす黒い赤色に変わった。

ホリンはレーヴァンティンを円を描くようにゆっくりと回した。すると、その軌跡に少し遅れ、マグマのような炎が円を描いた。そのマグマが床に触れると、茶色いレンガは灰色の煙を出しながら、黒く焦げてしまった。

「これからが本番だ。行くぞ！」

ホリンは僕に向かって一直線に飛んだ。僕はゆったりしながら、剣を構えた。いつもなら、こんなに落ち着いていないのに。

ホリンの横一文字をバックステップでかわし、剣道で籠手を狙い撃ちするかのように、ホリンの頭を狙った。しかし、ホリンはそれを体を少しだけ動かして避けた。

そして、僕たちは剣のぶつかり合いをした。

レーヴァンティンのマグマのような炎が、あたり一面を赤く燃やしている。だから火傷をするはずなのに、なぜか全然燃えたりしない。

すると、両方の剣を何度もぶつけながら、ホリンが言った。

「なるほど……ソリッドプロテクトだけじゃなく、マジックシールドまで発生しているのか」

マジックシールド？ 名前からして、魔法攻撃を遮断するようなものか？

何度も剣をぶつけ合っていると、あることに気が付いた。だんだん、ホリンの斬撃の威力が上がってきているような気がしたのだ。さっきまでは、ホリンの斬撃は僕と同じくらいだった。しかし、今は逆に押し負けている気がする。

しかも、剣さばきがかなり速い。最初はついて行けられたけれど、だんだんスピードが上がっているので、辛くなってきた。

「くっ……！！」

「オラオラ！！ どうした！？ もうへばってきたのか！？」

何度も切り返しを試みるが、上手くない。ホリンに、簡単に弾かれてしまう。

「くそ……！！」

悔しさに、言葉が漏れる。すると、ホリンは僕が振り下ろした剣を、真下からぶつけるように、レーヴァンティンを振り上げた。大きな音と共に、僕の剣は僕の手から逃げていくかのように、天井に向かって飛んでいってしまった。そして、自分の後方に落ちていく音が聞こえた。

「……！？」

ホリンは僕を見据え、ニヤツとした。

「……所詮、そんなもんだ」

僕は急いで後ろへ走り出した。転がりながら、床に倒れている自分の剣を手にする。すぐにホリンの方向に向くが、「時、既に遅し」だった。ホリンは大きく、剣を天に向かって上げていた。

「終わりだ！ 烈衝斬牙！！」

真つ赤な炎を纏った、斬撃の衝撃波が僕に向かってくる。剣を手にし、ホリンの方を向いてはいるが体勢を直せていない。避けるこ

とがままならない。

「くっ……！」

僕は剣を自分の顔の前に構え、ガードすることにした。せめて、致命傷にならないければ……！

炎の衝撃波が僕に襲い掛かる。僕は思わず、声を上げた。電気が通ったような痛みが、体を駆け巡る。

僕はそのまま、床に転がりながら倒れた。たぶん、距離にして10メートルくらいだろう。それくらい飛ばされたのだ。

「ぐ………があああ……！」

とんでもない痛みが広がってきた。どうやら、炎の衝撃波は僕の右肩から腰の辺りにかけて、襲い掛かったらしい。その部分の服は焼けて、黒く焦げていた。そして、皮膚の部分も切り傷と火傷で、ひどいものだった。それを目にする、さっきよりも大きな痛みが出てきた。あまりの痛み、僕はその場で悶絶した。

「くっ……うっ……！！！」

「ソ、ソラ！」

僕を心配して、ヴァルバが肩の傷を手で押さえながら駆け寄ってきてくれた。

「ソラ！　しっかりしろ！」

頭がまるで、ハンマー投げされるハンマーのように、くるくる回っている感じだった。そんな僕の意識を保とうと、ヴァルバは僕を呼びかける。

しかし、傷口がひんやりとした感覚に襲われた。そう、心地よい感覚だ。傷の部分を見ると、淡く緑色に輝く光が、そこを包んでいた。

「な、なんだ？　これは……！」

ヴァルバもそれを見て、驚きの表情をしていた。

「ちっ、『リジエネレイト』か……。しかも、ソリッドプロテクト

とマジックシールドのおかげで、烈衝斬牙は致命傷にならなかったか」

ホリンは燃え盛るレーヴァンティンを肩に担ぎ、歩み寄りながら言った。

「自分の血に感謝するんだな。お前が微弱ながらもソリッドプロテクトを無意識に発生させていなければ、お前の体はあの時の兵士たちのように、真つ二つになっていたんだからな」

「自分の、血……？」

僕は大きく呼吸しながら、訊いた。すると、ホリンはフツと笑った。

「知らないのも当然、か。……どうだ、知りたいか？ いつもいつも、変に思っただけ来たんじゃないのか？ てめえの中に在るわけのわかんねえ能力を、さ」

逆にホリンが訊ねてきた。僕は戸惑ってしまった。そんなこと、考えたことも無かった。

この『変な感覚』と、自分が意識している以上の俊敏さや力……。それが、自分の血に関係しているかのように、ホリンは言う。僕は自分の傷の痛みを忘れ、『それ』を知っているホリンに聞きたい衝動に駆られた。僕は、いつの間にか口を開いていた。

「……知りたい！」

そう言うと、ホリンは目を瞑り、ゆっくりと開いて僕を見た。

「冥土の土産だ。教えてやるよ、お前の……」

ホリンがそう言い掛けたところで、ホリンは目を見開いた。僕たちを見ているのかと思ったら、僕たちの向こう側、後方の辺りを見ていた。

「……！！？」

すると、ホリンは戦いの時の真剣な表情になった。そして、僕たちの頭上から何か飛んで行った。あまりに速すぎて、よくわからなかったが、それはホリン目掛けて、一直線に飛んでいた。ホリンはそれを大きくバツク宙しながら避けた。それは、人間にできる跳躍ではない。

飛んでいったものは、そのまま反対側の壁に突き刺さった。目を凝らしてよく見ると、それは巨大な氷柱だった。

「……何もんだ、お前」

ホリンは既に床に立っていた。その目は、僕たちの後方を睨んでいた。

僕は、傷口を押さえながら自分の後ろを見た。そこには、見たこともない人間が立っていた。

## 28章：漆黒の剣士 天賦の軌跡

そこには、真っ黒な服装で包まれた人が立っていた。

黒い服。黒い長ズボン。少し紫がかった黒いマントを身に付け、腰には茶色のベルト。そこには、細長い剣が差されてあった。そして、顔は真っ黒な兜を付け、さらに薄黒いターバンを付けていた。あまりの怪しさに、僕は眉間にしわを寄せてしまった。だってさ、考えてみるよ。体全体、黒いもので包まれた男（女かもしれないけど）だし、さらに顔は前面隠しているし。いや、鼻から下は見えてるんだけど、顔がわからないようにしているのは、怪しい人間の真骨頂だろ？

……ええ？ なーんか嫌な予感。

ホリンは壁に突き刺さった氷柱を見上げた。  
「……氷水魔法か。しかも、詠唱破棄。ただの剣士にしては、魔法ができすぎてる。てめえ、ただもんじゃないな？」

ホリンが慎重な面持ちで言った。黒い剣士は、何の反応も示さない。何を見ているのか、さっぱりわからない。

「俺の邪魔をしに来たってのか？」

そうホリンが訊いても、仮面男は何も言わない。たぶん、ホリンをじっと見ているんだろうけど、わからない。

「ふん、最近インドラの奴らを襲っているという剣士がいると聞いたが……もしかや、お前がそうか？」

インドラの兵士を襲っているだって？ そんな話、初めて聞いた。ていうか、暗黒魔法を扱うっていうインドラの人間に戦いを挑むなんて、無謀というか何とというか……（自分たちのことは棚に上げて）

。「ミランダが言っていたっけな。たしか『漆黒の剣士』だったか。お前がそうなんだな？」

それでも、『漆黒の剣士』と言われたその仮面男は何も言わない。しかも、何の反応もしない。しゃべらないなら、うなずくくらいすればいいのに、とか考えてしまった。

すると、仮面男がベルトに差ししてある剣を抜いた。その剣は、青い刀身を持っていた。まるで、氷の刀身だ。細いが、僕の剣と同じくらいの長さだろうか。そして、日本刀のような片刃の剣だった。「てめえ……俺とやるってか？」

ホリンが少しイライラしたような口調で言った。さっきから何度問いかけてもしゃべらないので、相当頭にきていたのではないかと思う。

そんなことを思った瞬間、仮面男は走り出していた。シユタタタという感じで、軽い身のこなしで走っている。そう、日本の弓道や剣道などの武道をしている人のように、つま先で走っているかのようだ。

ホリンはそれを見て、何かをつぶやいた。すると、レーヴァンテインから燃え盛る炎が溢れてきた。そして、そのまま仮面男に向かって突進した。

ホリンは剣を自分の右耳あたりに構えた。なのに、仮面男は構えようとしない。手を前に出さず、風に乗せているかのように、両腕を後ろに伸ばしている。

「死ねえ！！」

ホリンは「もらった！」という顔をして、地面に叩きつける勢いで、剣を振り下ろした。僕は仮面男に直撃した、と思った。しかし、レーヴァンテインは本当に地面を叩きつけた。床のレンガが砕け、上空に舞う。その一瞬の間の後に、マグマのような炎が吹き出る。ホリンも、なぜ当たらなかつたんだ、という顔をしていた。

そして、ホリンの後方にはあの仮面男が立っていた。それに気が

付いた瞬間、ホリンの表情が変わった。少しだけ、顔を歪ませたのだ。すると、ホリンの右の横腹から、真っ赤な血が出てきた。

「な、なんだと!?!」

あまりのことに、ホリンも驚きを隠せない。痛みよりも、どうして避けられたのか。どうして斬られているのか。そのことのほうが、今のホリンの思考を支配しているんだろう。

「く……っ、てめえ!」

ホリンは自分の傷を顧みず、後ろに振り向き、仮面男に突進して行った。仮面男は、ゆっくりとホリンの方に向き直った。剣を目の前に据えたと思ったら、僕がまばたきする間に、その場からいなくなっていた。

一瞬の間に、ホリンの横をすり抜けていた。そう、さっきと同じように、斬りつけて。今度は、ホリンのほほが斬りつけられていた。右ほほから、一筋の血が流れていた。さっきより、浅かったのだろう。あまり気にならない程度の傷だった。

「くそ……この俺が避けられないだど!?!」

それでも、ホリンは動揺している。僕と戦っていたときよりも、動きは断然速いのに、それを仮面男は凌駕している。

一体、何者だ…?」

「殺してやらあ!?!」

ホリンはそう叫びながら、再び走り出した。今度は仮面男は突っ立ったままで、その攻撃に備えた。攻撃するわけではなく、防御するつもりなのだろうか。

ホリンのレーヴァンティンと、仮面男の青い剣がその場でぶつかり合う。傍から見れば、仮面男の剣が簡単に割れるんじゃないかって思うんだけど、実際、折れない。

ものすごいスピードでホリンは斬りつけているが、それを難なく仮面男は防御している。押されてはいるが、軽い感じでホリンの攻撃を受けている。というより、受け流しているようだ。

そして、防御しないのかと思ったら、またもや軽い感じで右へ左

へと、体を動かし、ホリンの斬撃を避けている。ホリンはだんだん、イライラから悔しさに変わっていくような顔つきになった。

ホリンの横からの斬撃を、仮面男は大きく跳躍して避けた。

「ハッハア！ 馬鹿が！ 避けるのに、上空へ逃げては避ける術はねえぞ！」

ホリンは笑顔をこぼしながら、上へジャンプした仮面男を見上げた。ホリンの言うとおり、人間は空中では左右に避けたりすることなんてできない。

「死ねええ！！」

ホリンは剣を構え、あの衝撃波で攻撃しようとした。すると、仮面男は空中で防御の構えはせず、剣を持っていない方の手を前へ出した。その瞬間、青白い光が、その手の平から出て行った。

「なっ！！？」

それは、氷柱の大群だった。それらは上空からホリンに向かって、雨のように降り注いでいった。

ホリンは剣を目の前に構えた。すると、レーヴァンティンの炎が大きく揺れ動きだした。

「彷彿と煮えたぎる、溶岩の壁よ レイジングフレア！」

ホリンがそう叫ぶと、ホリンの周りを朱色の炎が包みだした。これは…魔法か？

「レイジングフレア！？ 炎熱系の上級魔法か！！」

隣にいたヴァルバが言った。

「えっ？ ホリンみたいな攻撃型の剣士でも、魔法が使えるのか？ ……あいつはインドラの幹部だと言っていた。下っ端の人間が古代の暗黒魔法を扱えるのなら、幹部は魔法を簡単に扱うことはできるだろう。しかも、上級魔法を詠唱破棄できるなんて……とんでもない能力の持ち主だな」

ヴァルバはどこか、驚嘆するかのようにつつた。

たしか、ステファン卿も氷水系の魔法とかは詠唱破棄できるとか言っていたな。けど、あれは後から聞いた話では、氷雪系中級魔法だったらしい。つまり、魔道大臣だったステファン卿でさえ、上級魔法の詠唱破棄はすることができなかつた。それだけのものを、剣術が相当できるホリンは上級魔法の詠唱破棄を難なくこなしている。……僕と戦っているときに、魔法も使われていたら、もっと早くやられていただろうに。

仮面男が出した氷柱の雨は、ホリンの魔法で出てきた炎の膜に当たって、溶けて水になり、その場で蒸発してしまった。

僕は辺りを見回した。水蒸気によって、辺りが白い霧に包まれていったため、仮面男の姿が見えない。

少しして、ホリンの周りの炎が消えていった。ホリン自体は、どこも火傷を覆っていない。なるほど、魔法は使用した本人には全く効かないということか。

すると、今度はホリンの真正面から何かが光った。さっきと同じような、青白い光だ。

「……またか！」

ホリンがそう言った瞬間、青白い光は消え、別のものが僕の目の前に現れた。

そう、氷河だ！

氷河が辺りを覆い始めた。この茶色いレンガで敷き詰められた空間を、水が這うように氷が広がり、所々から氷の刃が上へ突き出ていく。それは、飛び跳ねるホリンを追い、瞬く間に広がっていく。

「ちっ！ くそが！！」

ホリンは空中へ飛び上がり、再びレーヴァンティンを目の前に構えた。

「炎嵐の渦よ、逆巻きやがれ！！ バーニングサイクロン！！」

ホリンの真下に、真つ赤な渦が現れた。それはだんだん大きくなり、竜巻のように渦を巻きながら氷河の前に立ち塞がった。そして、氷河の進攻が止まるのと共に、炎の渦も消えていった。

そして、ホリンが降り立つと、氷河の中程からあの仮面男が姿を現した。

「『アイスベルグストーム』に『フィンブル』か。どれも、氷水系最大級魔法か。よくもまあ、それだけの精霊を操ることができるもんだ。お前も……俺と同じ、魔道注入を受けているのか？」

その言葉に、思わず反応してしまった。魔道注入だって……？ ホリンがそれを受けた、ということか？

「何の反応も無し、か。だが、わかっているんだぞ？ 本来、各属性の上級魔法は50年以上の鍛錬をした者しか、詠唱破棄はできない。あるいは、専用の魔道書を持つていなければならない。だが、魔道注入を行えばそれをせすとも簡単に、『セイジ』以上の魔力を得ることができると」

詠唱破棄……仮面男は、最上級魔法のそれを難なくこなしている。あれだけの剣技に加えて。

「魔道注入は俺らインドラの技術だ。他の国では禁忌とされ、使われていないはずだ。なのに、どうしてお前がそれをされている？ そこが腑に落ちないんだがな」

ホリンは顔をかしげた。

「お前……まさか、ウラノスと同じ一族か？」

そう問いかけても、最初と同じように仮面男はピクリとも反応を示さない。

「返答は無し、か。なら、これ以上訊いても無意味だな。ここで死にやがれ……！」

ホリンは仮面男に向かって走り出した。そして、少し離れたところで大きくジャンプをした。

「くられ!! 烈衝斬牙ア!!」

空中でレーヴァンティンを一振り。真っ赤な炎の衝撃波が、仮面男に向かって放たれた。そして、さらにホリンは剣を目の前に据えた。……魔法か!?

「立ち昇れ、バーストフレイム!」

今度は、仮面男の周りに炎の壁が噴出した。仮面男は、炎に囲まれてしまった。

「どうだ!? これで逃げ場は無いぞ!!」

そうホリンが言うと、仮面男は剣を上へゆっくりと振り上げた。

「……………」

そして、剣の残影が見えないくらいの速さで、振り下ろした。すると、青い衝撃波がホリンの炎の衝撃波に向かって飛んでいった。まさか、ホリンと同じようなことをしたっていうのか!?

「な、何!!!?」

ホリンは思わず声を上げた。まさか、自分と同じような技を使えるとは思いつかなかっただろう。

2つの衝撃波は空中の中程でぶつかった。そして、ホリンの赤い衝撃波が消え去った。そう、仮面男の青い衝撃波の方が強かったのだ。

青い衝撃波は、ホリン目掛けて飛んでいった。とつさにホリンが両腕を交差するように顔の正面を防御したとき、衝撃波はホリンに当たった。そのまま、ホリンは吹き飛ばされていった。

「く……………そがぁ!!!!」

ホリンは倒れこみながら、そう叫んだ。よほど悔しかったのだろう。自分の得意技がまね(?) されて、それに自分の技が負けてしまったのだから。

ホリンはゆっくりと立ち上がった。その額には、真っ赤な血が流

れていた。さらに、腕や胸の辺りにも切り傷があった。そこからは、同じく赤い血がとめどなく流れていた。

「くそ、くそあ！ この俺が……この俺が、どこぞの誰ともわからねえ野郎に負けてたまるかあ！！」

悔しそうな声を上げるホリンを尻目に、仮面男は自分の剣を見ていた。……なかなかいい切れ味じゃないか……とか思っただろう。……

「こんなところで出したくは無かったが、しょうがない。本気を見せてやるよ……」

肩で呼吸しながら、ホリンはそう言った。

「おいおい、この期に及んでまだ本気を出していなかったのか？

どうせハッターさ」

横で、ヴァルバがそう言った。たしかに、僕もそんな感じがするんだけど、なんだろう……変な違和感がある。

「万象一切、灰燼と為せ。終焉の業火、汝を煉獄の奈落へと誘え。今こそ、うつ世にその姿を現せ……」

ホリンはレーヴァンティンの切っ先を、垂直に地面に向けた。もしかして……本当にまだ本気を出していなかったのか！？

「……行くぜ」

ホリンがそう言った時、彼の横に光の柱が現れた。

「えっ!？」

光はすぐに消え、代わりに女性が現れた。灰色の長い髪で、ところどころで結ってあった。魔道士のようないでたちをしているが、マントはしていない。露出なところが多く、少々目のやり場に困るのも事実。

「ミ、ミランダ？ どうしてここに？」

ホリンがそのままの体勢で、女性に言った。

「ホリン。ウラノスの命も無しに、勝手な行動をするな」

ミランダだといわれた女性は、きれいな声で厳しくホリンに言った。

「ウラノスがこいつらをほったらかしにしているから、俺が代わりに始末しといてやるうと思っただよ。そのどこかいけねえんだよ……！」

怒声を放つホリンに対し、ミランダは落ち着いた視線で対応する。「……あなたの独断、というのがいけないと言っているのよ」

「るせえ！ 何をしようが、俺の勝手だ！！ 俺らの邪魔をしようとしているこいつらを、早めに殺しておくことが得策だと思わねえのか……！」

ホリンはまるで不良生徒のように反論している。

「インドラの間人である以上、ウラノスの命以外での行動は許されない」

「じゃあ、シュヴァルツやバルバロッサとかはどうなんだよ！？」

あいつら、俺が……いや、お前さえも知らないようなことをしていたぞ！？ あれは独断じゃないって言うのか！？」

「2人の行動は、全て極秘のものだそうよ」

「極秘……？ ウラノスの命令でか？」

「それは確かよ。ただ、どんな内容かは知らないけどね」

「……ちっ、所詮、俺はやつとは違って信用ならねえ下僕ってことか」

ホリンは、吐き捨てるように言った。

「ウラノスの命よ。今すぐ本部へ戻りなさい」

「何……？」

ホリンはミランダを見上げた。

「会議があるそうよ」

「会議、ねえ……」

ホリンは目を瞑り、ゆっくりと息を吐いた。

「わかった。……帰還しよう」

ホリンはミランダに背を向け、レーヴァンティンを上に放った。すると、レーヴァンティンは光を放ち、消えてしまった。僕はその光景に、目を見開いたままになってしまった。

「精霊の力のあずかりし地に、その翼を現しな……アース！」

そして、ホリンは何かをつぶやいた。すると、ミランダが現れた時のような光の柱がホリンの足元から現れ、ホリンは消えていった。もしかして……空間移動の魔法だろうか？

ミランダはホリンが消えていくのを見送ると、僕たちの方に顔を向けた。さっきまでは正面じゃなかったから顔がよくわからなかったが、なんとまあきれいな顔立ちをしているんだろう。どっかの女優みたいな白い肌をしていて、小さい顔。さらに、170センチはあるのではないかと思わせる身長。僕の足とは比べ物にならないほどの細い足。見事なくびれ。簡単に言えば、モデル体系ってか。年齢は、17〜20歳くらいだろうか。……おっと、これじゃあ変態みたいだ。自粛。

「あなたが、ソラ？」

ミランダは僕に言った。突然、呼ばれたので、体がピクツとしてしまった。その衝撃で、ようやく収まってきた痛みが再び盛り返してきてしまった。

「なるほどね、似てる……たしかに」

ミランダは意味深なことをつぶやいた。

「……似てる？ 誰に？」

「じゃあ、いずれまた……」

そうミランダは言うと、足元から現れた光の柱の中に入り、消えて行った。

僕とヴァルバは、ホリンとミランダが消えて行った場所を、じっと見つめていた。

僕はフラフラする足をなんとか立たせ、仮面男の方に向かった。

「あの……ありがとう。あんたのおかげで、助かったよ」

僕がそう言っても、仮面男は何の反応も示さない。

「ホントにしゃべらないな。まあとにかくありがとう。君がいなかったら、俺もソラもホリンに殺されていたよ」

ヴァルバが肩の傷を抑えながら、僕の横に立っていた。仮面男は顔をこちらに向けているので、たぶん僕たちを見ているんだと思う。すると、仮面男はゆっくりとうなずいた。初めて、言葉に対して反応を見せて見せた。なぜか分かんないけど、少し自分が照れくさくなってしまうた。

仮面男は天井を見上げ、手をかざした。その手から青白い光があふれ出し、気が付いたら大きな氷柱が天井へ向かって飛んでいった。そして、氷柱は音を立てて天井に突き刺さり、幻が消えるかのように消えていく。当然のごとく、栓が無くなったかのように、その天井の穴から大量の砂が流れ出した。僕たちは驚いたが、すぐに砂の流れは止まった。そうか、天井があまりに広いから、地表まであまり高さは無いんだ。

その穴から、太陽の光が差し込んできた。なんだか、久しぶりに太陽の光を拝んだ気がする。

仮面男は、その穴に向かってジャンプした。……っておいおい、この高さを人間が飛んで、出て行くことができるわけ無いだろ、とかなんとか心の中で突っ込みを入れたが、それはすぐに消え去った。だって、仮面男はあの穴まで飛んでいってしまったのだ。

あまりのことで、僕とヴァルバは天井を見上げたまま口を大きく開いた状態になってしまった。

「……世の中にや、わけのわからん人間がいるんだな……」

と、ヴァルバは呟いた。

## 29章：次なる目的地 シャロン＝シュレジエン王国へ

「それにしても、長かったな」

砂塵の神殿から出ると、腕組をしながら皇隆王は言った。今にも「遅すぎ」と馬鹿にしそうな雰囲気だった。

「……俺たちの傷を見て、なんか気付きませんか？」  
ヴァルバが不機嫌そうに言った。皇隆王は僕たちの体をじろじろ観察するかのように見て回った。

「ど、どうしたんですか！？ その傷！」

皇隆王の横にある小さな石に座っていたアンナが僕たちの傷に気が付き、大きな声で言った。

「おいおい、あの程度の罨でそんな大怪我するほど、お前たちとはんちんかんなのか？」

皇隆王は笑いながら言った。

「そんなわけ無いでしょ！ 僕たちは罨で怪我をしたんじゃないんです！」

「ん〜？ じゃあなんなんだよ？」

皇隆王は僕の肩の傷を見て、顔をこわばらせた。

「これは……剣や槍による切り傷か」

さすがと言うべきか、皇隆王は簡単に悟った。

「切り傷？ まさか、奴ら？」

同じく横に侍っていたリサが言った。

「ああ。 ホリンだった」

「ホリン……あの長剣使いの男ね」

王都でホリンと会った時、リサはいなかったが、どうやら奴のことは知っているらしい。

「ホリン……だと？」

皇隆王が突然、気付いたかのように言った。

「陛下、知ってるんですか？」

僕がそう訊くと、王は目を瞑った。

「そういうわけでは……いや、もしかしたら……」

王は自問自答しながら、なかなか返答しなかった。

「もしかしたら、そのホリンという男……私の知人かもしれないと思っ  
てね」

「知り合い……」

「いや、まだ確信はできない。まあ、そのことは王都に帰還してから  
ちゃんと話そう。それより、例のものは見付かったか？」

王は小さく首を振り、本題に戻した。

例のものというのは男の強さの証、みたいなものらしい。僕はポ  
ケットの中からそれを取り出した。

「これですよ？ これしかめぼしいものは無かったですけど」

金色に輝く、黄金の宝玉だった。これは、ホリンと戦ったあの広  
い広間の奥の台座の下に隠れてあった箱の中にあった。イデア王家  
の紋章が刻まれていたので、きつとこれだろうと思った。

「ふむ……さすがだ。よく、隠されている場所がわかったな」

王はにこやかに言った。

「薄暗い広間の中で、小さな光が漏れていたなら誰だって気付きます  
よ」

大きくため息をつきながら、ヴァルバは言った。

「ハツハツハ、そりゃあたしかに。何はともあれ、これでお前たち  
をじじい共に会わせることができるってもんだ」

「そっか……これからおじいさんたちに認めてもらわないといけな  
いんですね」

アンナがうれしそうに言った。暑い中ずっと待ってたんで、少し  
疲れたようにも見える。

「そういうこと。よし、ルータでゆっくりしてから王都に帰るとす

るか！」

腕を空に伸ばし、王は叫んだ。なんだか、帰るのを一番喜んでるのはこの人ではなかるうか？

「……ホント、子供みたいな王様だな」

まだ痛みが残っている肩を抑えながら、ヴァルバは僕の耳元で小さく言った。僕は笑って応答した。

3日後、僕たちはイデア王国の首都イデアに帰還した。なんだか長かった……いや、ホント。それもこれも、あのホリンのせいだ。あいつにやられた傷跡が、風呂に入るたびに電撃が走っているかのようにヒリヒリするんだよ。まったく、ここ最近、いいことが無いなあ。

王城に入り、僕たちは皇隆王と共に大臣や重臣たちと行う会議の場である、『朝廷の間』に行った。すでに、そこには20人以上のおじいさんや、いかつい人が座っていた。ここには、一番奥の中央に国王が座る王座があり、そこを挟む形で両サイドに約10人ずつ、縦に並んでいた。入り口から右に武人のような人たち、左におじいさんたち。たぶん、王が言っていた「じじい共」というのはこの人たちのことなのだろう。

王は王座にドスンと座ると、僕たちを手招きした。そして、右側に並ばせた。

「さて、今回は緊急の召集であるが、忙しいところ済まぬな」

王は大きな声で言った。労いの言葉、みたいなものか。両サイドの人たちは礼儀正しく、一礼をした。

「横にいるのは、他国からの使者たちだ」

王は僕たちを紹介した。すると、老人側の中の1人が一歩、前に出た。

「陛下、他国というところからですか？」

「ん？ ああ、ルテティアだ」

王がそう言うと、辺りがざわついた。中には、眉間にしわを寄せ

ている人もいる。

「王よ、我らの同志たちが逆賊ルシタニア家によって辱めを受けていることは、承知の上でありましょう？　なのに、何故ルテティアの使者を我らに紹介するのです？　全く理解できませぬぞ」

「まあまあ、落ち着け。ルテティアからの使者つていつても、ルーファス王から直々に頼まれてきたわけではないんだ。彼らは、自分たちの意思でここまで来たのだ。ただルテティアから来たというだけで、ルシタニア家に関わる者たちではない」

王はテキパキと答えた。なるほど、そういうふうの説明すれば、頭の固いおじいちゃんたちも納得しそうだ。

「ですが王よ、ルテティア人には変わりはないのでは？　彼らと同じ民が、我ら誇り高き砂漠の民を侮辱し続けているのですから」

いかつい顔をしたおじいさんが言った。そこまで言われると、正直心苦しくなってくる反面、自分は何もしていないんだけどなあと思ったり。

「まあまあ、いいじゃないか。そんな固いこと言うなよ、ジェイナ」

「本当に、王様には感じられないんだけど……大丈夫かな。ちょっと不安になって来た。」

「あいつらはルシタニア家とは関係ない。ルテティアの人間でもない。何か問題でもあんのか？」

その人の顔を覗き込むかのように、王は顔を前に出した。

「問題はないと言えませんが……」

おじいさんたちは口をこもこもさせていた。それを見た王は、小さく微笑んだ。

「それと、話は変わるが重要なことがある。彼らがフォルトウナ神殿へ行った時、ある男に出会ったという」

王はいきなり顔を真面目にした。変わり身の速さというか……なんというか。

「男、ですか？」

ジェイナーという人が言った。

「その男、ホリンと名乗ったらしい」

その瞬間、空気が凍りついたように感じた。少しだけ和やかに感じたこの会議の場が、『ホリン』という言葉が出たとたん、変わったのだ。

「ホ、ホリンですと!？」

「ああ。ソラ、その男の髪の色はなんだった？」

「髪の色……? たしか、黒でしたけど」

辺りがざわついた。

「まさか、ホリンが生きていようとは……」

意味ありげなことを誰かが言った。

「あ、あの、ホリンって……何者なんですか？」

ヴァルバは礼儀正しく、手を上げて訊ねた。その問いに、おじいさんたちは誰が答えようかと迷っているのか、顔を見合せながら落ち着きが無くなっていった。

「……ホリンは、本名をホリン＝マリクル＝デイルムンと言っただ」

少しだけざわついた中、王が言った。

「デイルムン? どこかで聞いたような……」

うーん、この世界に来てからいろいろな情報がありすぎて、いまいち思い出せないんだよな……。

「イデア王家の家名じゃないか!」

ヴァルバが言った。ということは、ホリンはイデアの王族ということなのか?

「そう。ホリンは正統なる、デイルムン家に連なる剣士だったんだ。そして、俺の甥に当たる人間なんだよ」

王は語り出した。

ホリンは皇隆王の姉の子供らしく、現在24歳（生きていれば）だという。

「剣の腕が立ち、いずれこの国の一角を担う人物になるであろうと  
囑望された。それに謙虚で、心優しく、誰よりも他人のことを考え  
る人物だった」

王が語るその顔は、過去を振り返り、楽しかった日々を思い出す  
かのようにだった。

「だが6年前、ホリン公子の父……ウルク公ユンケル卿が陛下が聖  
なる儀式を行っている最中、暗殺しようとするという事件を起こし  
たのだ」

ジェイナーおじいさん（？）が横から言い出した。

「あ……聞いたことがあるな。たしか……ウルク公が突然、叫びな  
がら王に襲い掛かったとか」

「知っていたのか、ヴァルバ。……まあ、全国に広がってしまった  
事件だったからな」

その後、ホリンの父・ウルク公は国王暗殺未遂の罪で処刑された  
のだという。

「……ホリンは最後まで、ウルク公の無実を証明しようとした。し  
かし、あらぬ噂が広がってしまったのだ」

「あらぬ噂？」

僕がそう言つと、みんなが口をつぐんだ。そして、王がゆっくり  
と口を開いた。

「彼も……その暗殺計画に加担したと、風評が流れたんだ。もちろ  
ん、俺は信じなかった。だが……」

「彼の寝室から、計画のものであるとされる証拠などが、多数発見  
された。そのため、ワシたちはホリン公子の拘束に踏み切ったのだ」  
他の大臣が口にした。

「ホリンは連行されて行く最中、俺に怨みの言葉をまき散らしたよ。  
……まあ、全てを決めたのは俺だったからな。あいつに怨まれるの  
も無理はない」

小さくため息を漏らし、王は足を組んだ。

「その発言もあり、ホリン公子の死刑が決まった」

ジェイナーさんが言った。

「ひどいですよ、そんなの……」

アンナの言うとおり、傍から見ればひどい話だ。けど……。

「そうじゃな……ひどい決断じゃった。しかし、ワシらも苦渋の決断じゃったのじゃよ。多くの証拠があるのに、ホリンはそれを否定し続けた。しかし、その言葉を裏付けるものは無かったんじゃ」

わけのわからない罪つてのはよくあることだ。誰かに陥れられたなど、真実は定かでないのだから。

「だからって、死刑なんて……」

「国王の親族だからといって、刑を軽くすることは、下々の民に示しがつかないのよ」

リサは腕組みをしながら言った。

「そのとおり。……しかし、死刑執行当日の朝、ホリンは監獄から姿を消した。そこには、大量の血痕と怨みの言葉が印されてあったんだ。『デイルムン家に天罰を。皇隆王に、天罰を』……とね」

嫌われたもんだ、と王は笑った。その笑いが、無理なものであることは誰にでもわかることだった。

「ホリン兄さんはそんな人じゃない！」

突然、少女の大声が宮殿内に響いた。後ろを振り返ると、そこにはきれいな黒髪の少女が立っていた。

「ラ、ラルハ？」

王がそう言った。黒い女性用のはかまみたいなものを着ていて、王と同じような装飾品を身に付けている。ということは、彼女が例の王女か？

「ラ、ラルハ王女、今は会議中ですよ。入って来てはいけません」  
「ホリン兄さんのことを悪く言わないで！」

まるで駄々をこねる子供のように、王女は同じことを何度も大声で叫び続けた。

「誰か、ラルハを後宮へ！」

王がそう叫ぶと、衛兵がどこからともなく現れ、王女を担いだ。

王女は「離せえー！！」と泣き叫びながら、担ぐ衛兵の頭やら顔やら、ぼこぼこに殴りつけた。それでも衛兵は負けず、宮殿の奥へと王女と共に消えて行った。王女の叫び声が、宮殿内に木霊した。

「すまないな……」

「いえ、いいですけど……」

王はフーっとため息をつき、口を開いた。

「……あれは俺の一人娘でね。あいつが産まれた頃、俺は政務が忙しくてかまってやる暇が無かったんだが、それをホリンが補ってくれた。ホリンはラルハの兄のように、時には父のように、教師のように、あいつの相手をしてくれていた。だから、ラルハは誰よりもホリンになついていたんだ……」

王はそこまで言うと、口を閉ざした。

「……さて、今日の臨時会議はこれで終了としたい」

突然、王はそう言った。もちろん、おじいさんたちはびっくりして一斉に王の顔を見た。

「な、なぜですか？ まだ、ルテティアに協力するかどうか決まっておらぬというのに……」

「まあ、そのことは後日、話そうぜ。今回はもういいや」

気分がわりいし、みたいなことを付け加えた。さすがの大臣たちも、呆れつつ大声で言い始めた。

「お、王よ！ 真面目に答えてください！」

「これは重大なことなのですぞ！？ そんな適当なこと……」

「俺がいいって言ったらいいいんだよ！」

皇隆王は子供のように大声を上げて、そう言い切った。すると、周りの臣下の人たちが慌て始めた。

「陛下、そんな子供のようなことを仰いますな。一国の主である者がそんなことでは……」

「ああ、もう黙れ！ 解散解散！！ かいさーん！！！」

老人の言葉を遮り、王は言い放った。みんなはやれやれといった顔で、そろそろとこの部屋から出て行ってしまった。

残された僕たちは、同じタイミングで王の顔を見た。

「ま、いつもこんなもんだよ」

「いつもって……だったら、会議なんて必要ないのでは？」

ヴァルバは苦笑いをしながら言った。

「そう言われてみれば、そうだな。ハッハッハ！俺としたことが！」

王は腕組をして、大笑いしていた。

「まあ、内緒にして事を起こすよりはマシだろ？ 何にせよ、一応伝えたほうが何かといいじゃないか」

「そりゃあまあ、そうかもしれないけど……」

僕とアンナは顔を合わせ、苦笑いをした。

「ともかく、アイデアはインドラに対処するために、諸国と話し合うことに賛成だ。それだけは、じじい共も分かってくれるからよ」

王は微笑みながら言った。

「なんだか、達成感が沸々と湧いてきた。僕たちが、あの灼熱の砂漠を歩き、神殿で死に掛けてきたことは無駄じゃなかったんだ。……ま、割に合わないかもしれないけどさ。」

「……ホリンのこと、悪く思わないでくれ。あいつが人を憎むのは、俺たちのせいだったのだから……」

「陛下……」

「そうしんみりするな、ソラ。あいつを止めるためにも、必ず我がアイデアは協力する。……約束しよう」

王はまさに、『王の顔』という顔をして言った。その言葉に偽りが無いということを感じることができた。

「まあともかくにも、ようやくアイデアを味方にできたね」

リサは小さく微笑んでいた。そこには、何となく達成感を覗くことができる。

「ああ。あとは、会議の場所を作るだけだな」

「場所？」

僕は首をかしげた。

「お前な、会議する場所っていうのは必要なんだよ。諸国の首脳たちが集まって話し合いをするんだ。それも、世界の滅亡に関わることをな。最も中立で、由緒正しき場所で、話し合いをしなければならぬんだ」

「由緒正しき場所……例えば？」

レイディアントに来て4ヶ月近く経つが、未だに2大陸の情勢とどうか、そういうのが把握できていない。

「ん？ ん……そうだな。聖都ソフィアとか？」

「聖都ソフィアか。たしかに、あそこならルテティア国王もゼテギネア皇帝も納得するでしょうね。けど、皇隆王はどうかしらね？」

リサは少しにやつきながら王の顔をチラツと見た。ここでOK言わないと、場の空気読めないわよ……みたいな目つきだな。

「……へーへ、どこへでも行ってやるさ。会議に出るって言ったんだからよ」

「フフ、お願いしますよ」

王さえも手玉にとって……いるのかどうかわからないが、僕はこいデアに来て、リサの本性、つまり魔女の姿を垣間見た気がした。しかし、そんなことを考えた瞬間、リサの鋭い眼光が僕の額を貫いた。よし、憶測で考えるのはよそう！ 自分の身の安全のために……。つか、僕が考えたことを悟ったのか？ 女つてのは、妙に感がいっていか。

「さて、これからどうする？」

ヴァルバが突然、言った。

「そうねえ……あつ、そういえば大事なことを忘れてた」

リサが「閃いたあ！」みたいな動作をしながら言った。

「大事なこと？ なんなんですか？」

「ほら、私さ、あんたたちとミレトスで別れた後、シュレジエンに行くって言ったでしょ？」

「ああ、そういえばそうだったっけ」

「で、ラーナ様に会って、あるお願いをされたのを忘れてたの！」

リサは慌てながら言った。

「だから、なんなんだよ？」

じれったいのが嫌いな僕にとって、「あるお願い」とかって言われると、ものすごく気になってしまう。

「ラーナ様から、ルテティア国王とソフィア教皇にあてた書状を預かって、それを届けてねってお願いされたのよ」

「おいおい……んな大事なことで、よくもまあ今まで忘れてたな。あんまり忘れっぽすぎると、男に嫌われるぞお」

嫌味たっぷりなヴァルバのセリフが、リサの耳を通り抜けた瞬間、キツとヴァルバを睨み、ナイフを投げた。あまりの手の早さに、僕とアンナは気付かなかった。ナイフはヴァルバの顔をかすめ、後ろの壁に突き刺さった。ヴァルバは顔が凍り付いた。その額には、冷たそうな汗が……。

「あんまり余計なことを言わないほうが、女性にもてるわよ？」

リサが恐ろしい笑顔を浮かべながら言った。

「ハ、ハ……そうします……」

ヴァルバの顔は引きつっていた。女を怒らせると怖いことを、今まで何度も体験してきた僕にとって、リサの恐ろしさは同感だ。

「とにかく、そういうことで私はこれからルテティアに行くから、彼女はビシッと手を挙げた。さっきまでの怒りはどこに行ったのやら。」

「……まあいいけど、僕たちはどうすんのさ？」

「あんたたちは、一先ず先にシュレジエンに行ってくれない？」

「シュレジエン？ どうしてさ？」

「ん……実はさ、ラーナ様があんたに会いたいって言ってるんだ」  
頭をかきながら、リサは言った。

「僕に？ またどうして……」

ちよつと、動揺した。だって、一国の主が一個人に会いたいって言うてるんだから。ただのもの好きとしか思えないし。

「ラーナ様に会った時、まあ……あんなたちの話をしたのよ。そして、ぜひお会いしたいって言うてさ」

「……理由になってねえだろ」

僕は呆れながら言った。

「どうせ会議が始まるまであんなたちは暇なわけだし、いいじゃないの」

と、彼女は僕の方をポンポンと叩いた。

「そりゃあそうだけど、シュレジエンって遠いんだろ？」

「この大陸の北にある、シュレジエン諸島にあるからな。かなぐりの距離だと思うぜ」

ヴァルバの言葉には、お疲れモードが広がっているためか、少々めんどくさそうな感じが含まれていた。

「こつからだ、一ヶ月近くかかるんじゃないか？」

王座にふんぞり返ってる皇隆王が言った。

「一ヶ月も！？ そ、そんなにですか？」

「だってよ、ここは大陸の南端だぜ？ 大陸の南端から北端を越えて、海の向こうだ。そのくらいかかるだろ」

「適当なんですな」

アンナがクスクス笑いながら言った。

「魔法でも使えば、一瞬で行けるだろうけどな」

「魔法……」

そういえば、リサは使えるんだっけ。空間転移の魔法を。

「今回は無しだ。ここへ来る前に、使っちゃったからな」

ヴァルバがすかさず言った。

「私は別にいいよ？ 一回や二回で魔力が尽きるようなやわな体じゃないからね」

リサは微笑みながら言った。しかし、ヴァルバは首を横に振った。

「ダメだ。あんなもん、馬鹿みたいに乱用したら  
そう言つと、リサはヴァルバの口を押さえた。そして、首を左右  
に何回か振った。「それ以上は言っちゃダメ」と言っているかのよ  
うだった。」

「まあいいさ。あんたがそこまで言つなら、今回はやめておくよ  
リサは優しく言つて、彼から手を離れた。」

「とにかくさ、シュレジエンに行つて来てよ。ね？」

「とにかくつて……ねえ？」

僕はアンナに振ってみた。

「……行くしかないんでしょうね」

予想通りの反応とでも言えようか、アンナは苦笑いしながら言っ  
た。

「アンナがOKしたんだから、ソラもいいでしょ？」

「まあ、暇になるよりはマシだし……いつか」

それに、まだまだ見たこともない場所があるこの世界を歩いてみ  
たい、というのも理由の一つなんだけど、緊張感が無いみたいなの  
でしまつておこう。

こうして、次の僕たちの目的地は極寒の地シュレジエン諸島にあ  
る、シュレジエン王国になった。

登場人物紹介3 + (前書き)

ネタバレを含みますので、ご注意ください!!

## 登場人物紹介3+

第3部も中盤に差し掛かったということで、またまたやります。登場人物紹介3+ !!

投稿しない間、アクセス数とか滅茶苦茶減っていて、びっくりしました(笑)  
やっぱり、話を進めんことにはダメですね(^-^;) ……でも、人気のある作品はいつだって読者が多いんだよなあ……うらやましい。

まあ愚痴は置いといて、第3部は全15章構成で、37章までの予定です。

主人公・空の気持ちに変化が生じてくる(?)とところなので、ぜひ最後までお付き合いください!!

今回の登場人物紹介は、どーでもええキャラ+敵キャラも載せておきます。

### ルテティア王国

ルーフアス8世 「ジョージ」アルベルト「ルーフアス」アイン  
「ルシタニア」

ルシタニア朝ルテティア33代国王。18歳で即位し、在位43年目に入るおじいちゃん。60歳とは思えぬほど老け込んでおり、口とあごの髭の長さが尋常じゃないほど長い+白い。良くも悪くもその程度の国家元首……といったレベルの王。周りの者に影響されやすく、結果的にステファン卿を重用してしまった。子供が5人いる。

アルベルト第3王子 「アルベルトⅡウィリアムⅡツァーリールシタニア」

ルーファス8世の第3子、第3王位継承者の36歳。正義感・統率力に優れ、王の才を生まれながらに持つ男。国内では絶対的な人気を誇るが、改革派に所属するため、保守派の筆頭である第2王子たちによって命が狙われたこともあるとか。

レオポルトⅡヴァッシュ

ヴィンラント公爵ヴァッシュ家当主。36歳にして王国宰相という高みにいる天才。幼少期からその神童ぶりを発揮し、軍部でも王国大将にまで上り詰めた。アルベルト王子とは幼馴染で同い年ということもあり、かなりの仲良し。

カルヴァンⅡアンル

アンジュー伯爵アンル家当主。中流貴族ではあるが、騎士道精神に溢れ、議会では正統派に所属する有能な貴族。だが、感情に突っ走りやすいところがダメです。王国内では中立派と公言している。

ちなみに、大やけどを負ったあと、1ヶ月寝込んでました。

ステファンⅡロベスピエール

クテシフォン公爵ロベスピエール家当主。64歳という高齢でありながら、魔道大臣・元老院議員「五大老」筆頭・呪術研究院最高責任者・魔道軍総司令官。国王の幼馴染で、絶大なる信頼を寄せられている。それを利用して、様々な禁忌に手を出した。結果、シュヴァルツに拳で腹を突きぬかれ、さらには頭部をつぶされ、死亡する。

イデア王国

皇隆王 「スカサハⅡヴァルザックⅡローランⅡウルⅡデイルムⅡ」

イデア王国103代国王であり、第3王朝デイルムン朝34代国王。非常に明るく、親しみやすい性格。というより、適当。つか、気分屋でわがまま。いつも大臣であるおじいちゃんたちを困らせている。しかし、重大な場面になると王としての姿を現す。普段はめんどつちいからやんない。

ラル八王女という、一人娘がいる。

## インドラ

ホリン 「ホリン」マリクル「ヴェルド・ディルムン」

24歳 身長177 体重65

インドラの幹部の一人。炎剣「レーヴァンティン」を操る剣士でありながら、炎熱系最上級魔法まで詠唱破棄ができるほどの魔道士。非常に残忍な性格で、いつもほくそ笑んでいる。片手で自分の身長並みの長さをほこるレーヴァンティンを軽々且つ巧みに操る。

漆黒の髪で、緑色の瞳。母がイデア系ではないらしい。肩に届くほどの無造作ヘアで、後ろは結んでいる。ヴァルバと同じような軽装。ウルク公子であり、皇隆王の甥にあたる。

## ミランダ

18〜24歳程度 身長172 体重54

インドラの幹部の一人。見るからに魔道士だが、その能力はまだ出していない。誰もが振り返るほどの美人。リサといい勝負かも。スゲーグラマす。ボンツキユツボンみたいな（古）

灰色の長髪。両サイド・腰のあたりで結っている。額には金色のサークレット。黒いドレスで、胸のあたりと左太ももあたりを大きく露出。空口く、赤面してやれまへんわって話だっさ。

シュヴァルツ

25歳程度？ 身長195 体重97

インドラの幹部の一人。ボディビルダー並みの筋肉を誇る戦士。他の幹部とは次元の違うほどの強さ……？

黒い全身タイツを身に着け、腰にはベルト、腰から膝のあたりまでのスカーフ？みたいなもんを付けている。パーカーみたいなものを羽織っており、口元しか見えない。

ウラノス 「ユグドラシル」

?????

インドラの幹部の一人であり、創始者であり、統制者。彼の目的は……？

以上で、登場人物紹介は終わりです。

たぶん、バンバン更新しますんで、目を通してやってくださいね)

^^)

では、森田しようでした。



### 30章：港町アルフィナ 月夜に輝く願い

シュレジエン王国に行くには、このイデア王都ローヴナーからルテティアまで戻り、大陸の1番北にあるアルフィナという港町へ向かう。そこから船で北上し、シュレジエンへ行く。

ルテティアまでは皇隆王が遣わしてくれた護衛兵や案内人がサポートしてくれる。そこから、ヴァルバの馬車で港町アルフィナへ行く。予定では……あれ？ そういえば今日って何日だっけ？

「なあ、今日って何月何日だっけ？」

おもむろにヴァルバに訊いた。

「おいおい、そんなことまで忘れちゃったのか？ 今日9月6日だぜ」

「ヴァルバさん、今日は9月9日ですよ」

アンナが絶妙なタイミングでヴァルバに言った。僕は吹き出しそうだったが、何とか我慢した。……大笑いしたら、本気でヴァルバが落ち込みそうだったし。

それにしても、いつの間9月になってたんだろ。9月は空と海の誕生日がある月だ。

9月24日……あと2週間あまり、か。どうやら、今年は「誕生日おめでとう」と二人に言うことはできないようだ。

皇隆王と重鎮の方々が見送りをしてくれた。あつゝい青空の下、僕たちは再びルテティアへ向かった。

ルテティアへは約10日余りで到着した。今回は案内役の人がいてくれたし、リサもいたので迷うことなくスムーズに進むことができた。前回はヴァルバのせいでちよつとだけ黄泉の世界に行っちゃったもんな。

ルテティアに着くと、やっぱり圧倒されてしまう。多くの区域に

分けられた見事な町並み。レンガ通りの美しい住宅街。そして、なんとと言っても都の中心部にある、空にまで届きそうな城。青く広がる空とその城は、何度見ても圧巻の一言。とても、中世並みの文化を持つこの世界の人間が作ったとは思えない。ガイアでも、昔のヨーロッパの建造物はすごかった。バロック式だとかルネサンス式とか。

ここでリサと僕たちは一度別れることになった。リサはシュレジエン女王ラーナ様から渡された書状をルテティア国王に渡すためだ。そして、いろいろな話もしていくつもりらしい。…その話がなんなのか、詳しくは教えてくれなかった。あとついでに、イデアとの交渉成立の報告もしておくとのこと。それが済んだ後、シュレジエンに来て僕たちと合流する、という予定だ。

「じゃ、寒いと思うけどがんばってね」

リサは王城の前で、にこやかに手を振って言った。

「なーんか、心がこもってないよなあ。もうちつと、『がんばってね！』みたいなさ〜」

ヴァルバがそう言うと、リサは素早くヴァルバの額を手ではいた。個人的に共感できる部分ではあったが、彼女にやられてしまいうそのなので知らんぷり。

「あ、そーだ。空、あんたにいいこと教えてあげる」

リサがずいと僕の目の前に顔を持ってきた。思わず、僕は目をそらしてしまった。きれいな顔立ちをしたリサの顔が近くにあると、面と向って話せられないというか。

「な、なんだよ?」

「あのね、シュレジエンは過去の遺産が眠っている国なのよ」

「過去の……遺産?」

そう言うと、リサは小さく微笑みながら顔を引き戻した。

「うん。この世界の過去の遺産……古の魔法帝国の謎を持っている可能性を持っている」

「古の魔法帝国……ってことは、ティルナノグのことか？」

古と言えば、この王朝しか思い浮かばない。

「そうよ。ティルナノグのことを知ることは、もしかしたらあなたの持つ力について知ることができるかもしれないし、あるいはガイアとレイディアント、2つの世界の秘密も隠されているかもしれない」

「力、か……」

僕は自分の掌を見つめた。生命線……かなんかが短い。

心の隅から語りかけてくる、どこか懐かしい不気味な声。遙かなる昔、僕が命を授けられた時に聞いていた子守唄の主なのかもしれない。

「ま、ホントにあるかどうかはわからないけどね」

リサはニコツと微笑んで、そう言った。期待させといて、不安になりそうなことを言う。まったく、手助けしたいのかそうでないのか教えて欲しいよ。

「じゃあね、ソラ、アンナ。ついでにヴァルバ」

「……なんで俺だけついでなんだよ」

「冗談だつて。んじゃ、また今度会おうね！」

リサは城の手前で元気よくジャンプしながら手を振り、城の中に消えて行った。ああいう姿を見ると、リサってまだ16歳の女の子なんだよなと実感する。時々大人っぽくて、子供っぽい。

「ふう……やかましいのがないと、なんだか気が抜けるな」

ヴァルバがボソツと言った。

「そうですね。リサさんといると、なんだか楽しい気分になっちゃいますもんね」

アンナはそう言って、フツツと微笑んだ。

「……まあ。ああいった風にしていないと、一人でいる時にふさぎ込みまうかもしれないし」

僕は王城を見つめながら呟いた。リサの醸し出す雰囲気……といつか、時折感じるもの。初めて見た時から、初めてじゃない感覚。

懐かしいものと……言い表せることのできない感覚。そこからわかる、あいつのオーラ。……どことなく、我慢してる感じがするんだよな……直感的に。

「なるほどなあ。ソラも、たまにはわかった風なこと言うじゃないか」

「……なんか癪に障る言い方だな」

こうして、僕たちはアルフィナへ向かった。一週間余りでそこへ着く予定だ。

「アルフィナって町、女性の名前みたいな名前だよな」

馬車に揺られながら横になって、いつもどおり操作しているヴァルバに訊ねた。

「お前なあ、俺が何でも知ってると思ったら大間違いだぞ？」

ヴァルバは笑いながら言った。

「だってさ、僕はこの世界の住人じゃないんだし、知らないことがたくさんあるんだよ」

「まったく……。アルフィナっていうのは、元々は港町じゃなくて、今町のある場所からもっと離れた場所にあったんだ」

「へえ、なんでまた？」

「ミッドランド帝国は覚えてるよな？ ミッドランドが皇帝アルヴィス1世が暗殺されたためにルテティアなどの小国によって滅ぼされた時、その戦乱によって当時のアルフィナ……元の名であるゴルドバっていう町は破壊されてしまったんだ」

「戦争のせいで……。かわいそう」

アンナが言った。圧政から解放される為とはいえ、その過程の中で一つの町が破壊された。……皮肉なものだよな。

「そのゴルドバの町の生き残り、アルフィナっていう女性が、荒れ果てた土地から離れ、今の町の場所に町を復興させたんだ」

「たった一人で？ そりゃすごいな」

「……けど、アルフィナさんが生きている間に、町は完成できなかったんだ。なぜなら、ルテティアによるロンバルディア制圧で、各地で反乱が起きたから」

「もしかして……アルフィナさんは……」

アンナが恐る恐るヴァルバに訊いた。彼はどことなく遠い目で、馬たちを見つめながら、うなずいた。

「ああ……アルフィナさんは蹂躪されそうになった復興中の町を守るため、軍隊に反抗し、殺されたんだ」

「ひどい……」

その言葉を聞き、ヴァルバは彼女に向けて優しい顔をした。

「そうだな。そうだけど、アルフィナさんがしたことは無駄にはならなかった。戦争が終結し、彼女の遺志を継ぐ者たちが現れ、今から200年位前によく町を再建することに成功したんだ」

「だから、再建された町の名を死ぬまで復興することに努力したアルフィナさんの名前を取ったのか」

「すごいな……。死んでもなお、彼女の遺志は受け継がれていたことが。普通、ヒトの遺志ってのはよっぽどじゃないと、受け継がれていかない。受け継がれていったとしても、都合のいいように解釈されたりする場合がある。」

「この話から学ぶべきことは、『あきらめるな。自分があきらめた時が全てが終わる時なのだから』ということなんだよ」

ヴァルバが広がる空を見上げながら言った。

「へえ……一つの真理だな」

「なんだか、ヴァルバさんがかっこよく感じました」

アンナが何気なく言った。思わず、僕はアンナの顔を見てしまった。「ええ〜!？」という心の言葉を放つが、届いてつかない。

「ハハ……まあ、今の言葉は俺が考えた言葉じゃないんだ」

照れながら、ヴァルバは言った。

「なんだよ、本気ですげえなって思ったのに」

「じゃあ、誰の言葉なんですか？」

そうアンナが言うと、ヴァルバは再び青空を見上げた。僕も思わず、上の空を見た。そこには、1匹のトビが翼を大きく広げ、風に導かれるかのように飛んでいた。悠々自適で、羨ましく感じる。

「……もう、空へと消えた人の言葉なんだ。遠い、遠いあの頃に生きていた人の、な……」

そう言うヴァルバの碧い瞳は、想い出の中を見つめていた。そこには楽しいものもあり、穏やかなもの、哀しいもの……多くのものが詰まっているようだった。

「大切な人だったんですか……？」

その空気を察してか、アンナは気遣うような声で訊いた。

「ん？ ん……」

今の話から、ヴァルバの知り合いだったことは悟った。それも、亡くなってしまった人だということも。

「そうだな……うん、大切な人だった。昔のことだ。本当にずっと昔の、な」

ヴァルバは僕たちに笑顔に向けた。どことなく、作り笑顔に見える。

「昔って……ヴァルバは今25歳なんだろう？ ずっと昔ってというと子供の頃なのか？」

からかうつもりで、そう言ってみた。すると、ヴァルバは顔を赤くした。

「な、なわけねえだろ！ ……まあ、今更言うけど、俺25歳じゃないし」

「……へ？」

あまりにも突然なせいかわ、僕の思考回路が一時、中断した。いきなりバグったゲームの時みたいに。

「えと……ヴァ、ヴァルバさんって一体いくつなんですか？」

アンナが慌てながらも、冷静に質問した。

「実は、俺32歳なんだよ。ハッハッハ！」

「さ、32歳!？」

僕とアナの声はピッタリ揃ってしまった。恥ずかしさを隠すかのように、ヴァルバは大きめの声で笑う。

「い、いくらなんでもサバ読みすぎだろ!？」

「お、大声出すなよ、ソラ」

誰だって大声を出すと思う。だって、7歳も偽ってたんだぞ？

女ならともかく、男が……。まあ、年齢詐称の疑いあったし、今更っちゃあ今更なんだけど。

「俺なりに、どこまで若く見せられるかが問題だったんだよ」

「なんでさ?」

「そりゃあ、お前……秘密だよ」

僕はガクツとなった。思わず、馬車から落ちてしまいそうだった。

「ひ、秘密かよ。……待てよ、今更歳を明かすなら、隠していた理由を教えてくれてもいいんじゃないか?」

そう言うと、ヴァルバはばつが悪そうに頭をかいた。

「ん、今は話せねえ。ごめんな。俺にもいろいろあったんだよ。歳を隠さなきゃならない理由、そして、こつやって馬車を引いているってこともな」

ヴァルバは苦笑いをして、小さく頭を下げた。

「馬車を引いている理由?」

アナがそう問うと、ヴァルバは何も言わず、首を横に振った。

話さないには、結構大きい理由があるんだろうな……。

僕やアナ、リサにもヴァルバにも、それぞれ生きている理由……

…みたいのがある。千差万別とは、このことだ。

9月24日、ロンバルディア最北端の港町アルフィナに到着した。ここは北の北海に接し、その海独自の魚介類が取れるため、漁業が盛んである。そして、ルテティア王国公認の高等治癒機関が設置

され、魔法学校もあるという。それらは、名のある魔道士として活躍したアルフィナさんに関連しているのだとか。

町は賑わっていた。通を多くの人々が歩いていて、どこか懐かしい香りを感じさせた。

ああ、そっか。ここは一般的な町なんだ。今まで、僕たちの旅では大きな町しか通ってこなかったもんな。2大陸随一の貿易都市に王都、水上の都に、砂漠の都。アンナが住んでいたフィアナの村は、なんというかRPGゲームに出てくる田舎の町って感じだったし。この町の人はそこまで多くないし、賑わっているとはいっても、どこかの商店街みたいな感じだし。

「それにしても……寒いな」

通を歩いていると、肌寒い風が僕を包んだ。

「ここはロンバルディア大陸最北端の町だからな。大陸で唯一雪が降る地域でもあるし」

ヴァルバも寒いのか、両手で体を包むようにしていた。

「雪か……。この世界にも雪が降るんだな……」

僕は寒空を見上げた。薄らとした白い雲が、視界の端から端まで続いている。

長束町にも雪が降るには降るのだが、ここ最近、地球温暖化のせいか雪が降る量がめっぼう減ってしまい、5センチ積もればいいほうだったな……。父さんや母さんが言うには、僕がうんと小さい頃までは、20センチくらい積もっていたそうだ。

「ガイアでも降るんですか？」

「ああ、もちろん。ほんの少ししか降らなかったけどね」

「私、雪は見たこと無いんです。お母さんがどんなものなのか教えてください」

アンナは僕と同じように上空を見上げた。寒い地域なせいか、空が高く感じる。そういった空も僕は好きだな。どこか寂れているけ

ど……「憧憬」っていう雰囲気だ。

「俺も、長いこと雪は見えてないなあ」

「……ヴァルバはシュレジエンとかには行ったことないのか？」

そう問うと、彼はうなずく。

「まあな。シュレジエンに行くための船に乗るには、かなりの費用がかかるもんで、一人旅してる俺にとっては大変な出費になっちゃうからな」

ヴァルバは笑いながら言った。

「じゃあ、アルカディア大陸では降るんですか？」

「アルカディア大陸は……このロンバルディアとは対称的に厳しい環境の大地でさ、ゼテギネア帝都より北は毎年ものすごい量の雪が降るらしいよ」

「環境が厳しいっていうと？」

「大地が乾燥していて、作物が育ちにくい。土壌的にもあまり農業をするのに適していないしな。しかも、北以外の地域もここアルフイナと同じくらい寒いんだってよ。……だから、ゼテギネアは輸入する食料がとても多いというがな」

逆に、ソフィアはそうでもないとか。

「ものすごい量の雪って、どのくらい積もるんですかね？」

アンナは目を光らせながら訊いた。どうやら、見たことも無い雪に対して、大きな関心を持っているようだ。

「さあな……。行ったこと無いからさ」

ヴァルバは苦笑いしながら言った。

「たぶん、1メートルくらいじゃないか？ 僕が小さい頃、まだ記憶も無い頃には故郷に1メートル以上降ったって、親が教えてくれたけどな」

「1メートル!? だったら私のここくらいまで積もるんですね」

アンナは自分の胸の少し上辺りに手を置いた。そっか、アンナは150センチにギリギリ到達してないくらいだから、1メートルの雪が積もるとかなりの高さを感じるんだろう。……ま、1メートル

ルは十分な高さだけだな。

北の港町だからだろうか、魚臭さを感じる。男の人が店の前で手を叩き、客を呼んでいる。その後ろには、新鮮な魚たちが無造作に並べられていた。秋刀魚のような魚や、シヤケのような魚もあった。前から思っていたが、この世界も元の世界も、食材はあまり変わらないようだ。魚も似たようなものが多いし、肉も同じだ。いろいろなものを食べてきたが、味も変わらない。

フルーツにしても、リンゴやミカン、バナナ、パイナップル……これらは気候の暑い地域に入る貿易都市ミレトスに売ってあった。アンナがいたフィアナ村にはジャガイモや玉ねぎ、ニンジンがあった。

今更ながら思うが、ここまで食料が同じなのは、レイディアントとガイアは『まったく別の世界』というわけではないのだろうか。密接に関係する2つの世界……つまり、別の道を歩んでしまったが故に2つに分離してしまったんじゃないかと思った。そう、世界は元々一つだったんじゃないかという仮説が浮かび上がった。あくまで、仮説だが。

「それでは、我々はこれで……」

アイデアの護衛役である人と案内人が言った。

「あ、そっか。ここからは、船を使えばいいんだもんな」

「じゃあ、ここまでありがとうございました」

アンナは丁寧な2人に頭を下げた。僕とヴァルバはそれを見習って、一足遅れて同じように頭を下げた。2人はニコツと微笑んで、何かの印を結んだ。

「あなた方の旅に、クロトの御加護があらんことを……」

そして、2人はもと来た道を引き換えして行った。

「……なあ、クロトって何？」

2人の姿が見えなくなるところで、僕はヴァルバに訊ねた。

「クロトは『運命の神』の一人だよ。『人の運命を創る神』だな。他に、運命を生む神と運命を断ち切る神がいるのさ」

「たしか、イデアは最高神に始祖ローランを置いて、その次の神にクロトを置くっていう独自の宗教でしたよね」

「じゃあ、ソフィア教は？」

僕は続けざまに質問をぶつけた。

「主神は光神ヘイムダル、聖皇バルドルにそれを補佐する知恵の神エツダと、武勇の神アールス。そして人を統べるラケシス。ちなみにラケシスが『人の運命を生む神』なんだ」

そういえば、いつだったかアンナが話してくれたっけ、「ラケシスの涙」とか。

「最後に、混沌を統べる邪神ロキ」

「ロキ……か」

インドラは邪神ロキを復活させようとしている、というのが表面上の目的、らしい。

「けど、なんで混沌を統べる神なんかがソフィア教の中にあるんだ？」

「宗教の聖書の中には、神々と邪悪な神の絶え間ない戦いがあるもんなのさ。それに、英雄がいるということはそれと相反する存在がいつの時代にもある。そうしておくことで、人心を得ることができるからな」

俺なりの見解だけだね、とヴァルバは付け足した。

「じゃあ、ロキは付け加えられた神っていうことなのか？」

ヴァルバは顔をしかめた。

「うーん……どうだろうな。そもそも、ソフィア教が成立したのがティルナノグ王朝の終焉と同時期だし、ソフィア教を創始した人の考えていたことなんてわからないしな」

そして、ヴァルバは寒空を見上げて言った。

「もしかしたら、神様なんていないのに、創始者が人心を得るために、ありもしない話を作り上げたのかもな。俺たちだって、ティル

ナノグのことは伝聞によるものでしかほとんど知り得ないのだし。その伝聞によるものが本当なのか、虚偽なのか、今では到底わからない」

「……………」  
何が本場で、何が嘘なのか。それを知ることができないために、人は間違いを犯すのかもしれない。

けど、インドラは邪神ロキを復活させようとしている。ということとは、邪神ロキという『存在』は無いのかもしれないが、世界を震撼させるほどの『何か』があるのかもしれない。

?? それは何を引き起こすんだ？

とんでもないこと？

ホリンが言っていた、ヒトの世界を滅ぼすこと？

……………わからないことが多すぎる。永遠の巫女や聖杯、インドラ、そして何より……………自分。

わけのわからない力。声。

お前は、一体

無為に探るな、愚者が

「いつつ……………!!」

頭の奥に氷が突き刺さるような痛み。思わず、僕は顔を歪ませた。それに気が付いたアンナが、僕の顔を覗き込む。

「ソ、ソラさん、どうしたんですか？」

「……………いや、なんでもない」

僕は顔から自分の手を離し、彼女に微笑みかけた。

「……………」

彼女が放つ疑問の視線を振り払うかのように、僕は海へ顔を向けた。

……冷たそうな海だな。

僕たちが出発するのは、明日。大型船に乗ってシユレジエンの首都があるリーフ島に行くには、ガレ島、オルーヴェ島、アルテスタ島と、3つの島を通りながら行かないといけないらしい。食料を補給したり、人手を補給したりするためだとか。どうやら、リーフ島に行くには結構な日数がかかるようだ。

僕たちはとりあえず、今日宿泊する宿を見つけた。

その夜、みんなが寝静まった宿屋の中、一人だけこそこそと動いていた。

僕は自分の寢室の窓を開けた。すると、冷たい空気が流れる水のように入って来た。そして、僕の体を震わせる。

「さむっ！」

思わず、そんな声が漏れてしまった。僕は凍える体に毛布をくるませ、ベランダに出、屋根によじ登った。

真夜中の空には、少しだけ欠けた月が浮かんでいた。それでも、この町を照らすには十分だった。凍える夜中にこの月……。まあ、雰囲気は結構いいんじゃないかと思ってみたり。

僕は屋根の上にくっくりと腰を下ろし、息で手を温めながら呟いた。

「空、海……誕生日おめでとさん。今年は直にいえないようだけど、勘弁してくれよ」

今日は9月24日。彼女たちの16回目の誕生日。ガイアにいた頃、毎年のように誕生日プレゼントをあげていた僕。いつもは「金が勿体無い」、「めんどくさい」などと思っていたが……こうしておめでとも言えずに迎えると、少し寂しいもんだな。いつも、彼女たちの傍で二人の成長を見ていたからかもしれない。

「はぁーあ……。みんな、どーしてっかなあ……」

空を思い出すと海を思い出し、家族を思い出し、友達を思い出す。妙に連携して、僕の心に寂しさを訪れさせる。

その時、誰かの心配がした。恐る恐る右下を見ると、アンナが顔をひよこつと出して僕を見ていた。

「ソラさん？」

「な、なんだ、アンナか。びっくりさせるなよ……」

僕がそう言うと、アンナは少し照れ笑いしながら屋根をよじ登り始めた。なんだか危なっかしいので、登るのを手伝った。

「あ、ありがとうございます」

アンナは寝巻き姿だった。

「寒いんだから、毛布でもくるんで来れば良かったのに」

「……物音がしたんで、覗くだけにしておこうと……」

アンナは照れながら言った。

「じゃあ戻りな。寒いし」

僕がそう言うと、アンナは顔を横に振った。

「じゃ、邪魔はしないので、居させてください」

「??? まあいいけどさ……」

屋根の中央に僕とアンナはちょこんと座った。月明かりで、アンナの顔がはつきりとわかる。チラッと横目でアンナを見ると、体を震わせていた。

「ほら、これ」

僕は毛布を差し出した。

「え……? でも、ソラさんは……」

「僕はいいよ。寒いのは得意だし」

これはただの強がりだ。本当は寒い方が苦手。……というより、暑いとか寒いとかに得意もくそもあるかって話。人間の構造上、耐えられません。

「でも……」

「いいんだって。お前は女の子なんだしさ。……風邪でも引いたら嫌だろ」

「ソラさんが風邪を引いちゃいます」

「男の子は風の子、というのがガイアの常識なんだよ」

これは正しいんだっけ？ 幼い頃、何かと母さんに言われ続けたもんだ。……おかげで、冬でも半袖・短パンで遊んじやいましたよ。

「だけど、ソラさんが風邪引いちゃうと……」

「このくらい大丈夫だって。気にするな」

「……………」

そう言うのと、アンナは観念したのか、毛布をくるんだ。

その後、しばしの間沈黙が流れた。ただ、2人ともずっと先の海を眺めていた。月の光が海面に当たり、きらきら輝いている。ただ、その美しさに惹かれてるだけなのかもしれない。

「……………どうして、ここに？」

アンナが言った。

「なんでここに居るのかってこと？」

「いえ、どうして屋根に上ったのかって……」

「ああ、そういうことか……………」  
てつきり、どうしてこの場に居るのかという質問なのかと思ってしまうた。

「……………誕生日なんだ」

「えっ？」

アンナは顔を曲げた。

「ソラさんの、ですか？」

「いや、僕じゃない。わざわざ自分の誕生日に、こんな寒い真夜中に屋根に上るわけないだろ？」

「それもそうですね」

アンナは微笑んだ。

「じゃあ、どなたの誕生日なんですか？」

笑いが収まったところで、アンナは訊ねた。

「幼馴染の2人の誕生日」

「幼馴染……空、さんですよ」

「ああ」

「でも、2人ですよ？ もう一人はどなたなんですか？」

「言っただけだったわけ？ ……空には、双子の妹がいるんだよ」

「そう、なんですか……」

アンナは少し、物悲しそうに言ったような感じだった。

「妹さんは、元の世界に？」

「……あいつは無事だったからね。それだけでも、よかったと思ってる。……二人を同時に失っていたらと思うと……想像したくねえな」

本当にそうだ。二人同時にいなくなったら……いや、考えるのはよそう。

「……ソラさんは、幼馴染の空さんを助けるために、この世界にきたんですよ？」

「そうだけど……なんかさ、今更だけど同じ名前だとややこしいな」

「フフ、そうですね」

再びアンナは微笑んだ。その笑顔に、誰かの面影を感じた。

僕は体を小さくして、体育座りをして海の果てを眺めた。小さく動く水面と共に、月の光が揺れ動いている。

「ソラさんは……彼女のことを好きなんですか？」

突然の質問で、僕はびっくりしてしまった。

「な、なんだよ？ 急に」

僕は焦りながら、問い返した。

「……気になったんです」

アンナはピイツと顔を正面に向けた。

空、か……。

好きなのかと問われ、あの頃の感情が浮かび上がって来た。彼女

に告白され、不思議な感覚の中、僕は遠い昔に置き忘れた宝物を掬い上げた。

あの時、彼女さえいれば何もいらないとさえ思うほど、愛おしくなった。

僕は小さく微笑んだ。

「ああ……好きだ。あいつのこと、誰よりも……」

そして、月夜を見上げた。

あいつのことを考えると、会いたくて、話したくて、抱きしめたくて……しょうがない。こうやって離れてると、今更ながら実感した。

僕がどれだけ彼女のことを愛しているのか。

だからこそ、助けだしたい。絶対に。

「……いいなあ、ソラさんは」

「えっ？」

僕は縮こまっているアンナを見つめた。彼女は、顔を俯かせていた。

「……大事な人は、この世界にいるんですもん」

「……」

「私には……いない。もう、誰も……」

そして、彼女は呟いた。

「……私、なんのために生きてるんだろう……」

本音なのか。それとも、無意識に発した言葉なのか。

「探し続けたお姉ちゃん……もういない。お母さんも、お父さんも……」

彼女の体は震えている。それはきつと、寒さだけではない。

「誰もいないのに……どうして、私は旅をして……こうして……呼吸してるんだらう。どう、して……」

忘れていた……と言ったら、ひどいかもしれない。彼女はまだ14歳の少女。なのに、あれほどの残酷という名の真実を知った。普通なら、言葉を放つことさえ敵わなくなるはずなのに……彼女は……。

僕はそっと、彼女の頭部に手を置き、自分の胸に抱き寄せた。……空、ごめん。お前には悪いけど、彼女は仲間だ。支えてやらないとな。……などと、心の中で懺悔しながら。

「ソ、ソラ……さん？」

か弱く、震えた声が漏れる。ちよつと涙声だ。

「聴こえるか？」

「えっ……？」

「鼓動」

トクン、トクンと鳴っている僕の拙い心臓。

「その音は生きている証拠。僕がここにいてるって証拠さ」

「……………」

「お前の隣で、生きてる。ちゃんと呼吸して、こうして話してる。お前は独りなんかじゃない。アンナには僕もヴァルバも、リサもいる。フィアナのおばさんだっている。レンドもデルゲンも……どこかにいるしさ」

最後だけ、半笑いになってしまった。そう言えば、あいつら元気かななどと思ったり。

「アンナの見つめてる世界には、こんなにも仲間がいる。大事な人たちがいる。お前を想って、お前を支えてくれる。どんなに悲しくたって、辛くたって、傍にいてやれる。アンナを笑顔にしてくれる奴がいる」

受け売りだけどな、修哉。

「大丈夫。今は悲しくても、きつと笑顔になれる。僕たちがいるか

らさ」

「ソ……ラさん……」

彼女は僕の服を掴み、更に顔を沈ませた。

「ソラさん……ごめん、なさい……。私、私……」

僕は小さな彼女を、自分の腕の中に入れた。

「いいよ、無理すんな」

軽く、彼女の背中を叩いてあげる。ポン、ポンと。

「う……うう……」

大きく震えだす、小さな体。14歳、か。彼女は小さいから、まるでどこかの小学生くらい。

「わああああー!!」

静寂の夜空に、彼女の鳴き声が飛び立つ。

「……我慢してたんだな。もう、我慢なんてしなくていいからな」

「ソラ、さん……ソラさん……!!」

何度も僕の名を呼びながら、泣き続けるアンナ。

もし、自分に妹がいたらこんななんかもな。いつかは空たちを妹みたいに見ていた頃もあったが……違ってたんだよなあ……。

いつか、お前をこんな風にして抱きしめることができるだろうか。この旅路の果てに、お前は笑顔を向けてくれるのだろうか。

ただ、お前の無事を祈るだけ。

……僕は、お前のために……

しばらくして、僕は三度、月を見上げた。

「きれいだな、お月さま」

「……そうですね。本当に……」

窓から差し込む月の光が当たたらぬ影の中で、彼は壁にもたれかかりながら、木造の床を見つめていた。

「……………」  
ヴァルバは目を瞑った。

この悪戯は誰の差し金なのかね……  
神様とやら、面白半分なら、俺だけにしておきゃいいのにと……

ホント……………嫌になるよ。

31章：船旅 寒空の下で（前書き）

今回はストーリー的にはあんまし進みません。

### 31章：船旅 寒空の下で

9月27日。アルフィナの港で僕たちは大きな船に乗った。ルテティアのほこる大型船『ラビリンス』だ。

大きいとは言っても、ガイアでもっと大きい船とかを見てきた僕にとっては、あまり驚くものではなかった。隣で口を開け、船を見上げている二人には悪いけど。

今日は晴天なり、であるが、なんとと言っても風が寒い。この晴天の太陽光がせめてもに救いか。

かかる日数は約15日。船で15日って、結構な距離なのだろうが、地図が無いので距離を把握することはできなかった。ヴァルバにも訊いてみたが、二大陸の地図と7つの海を網羅した地図というのは、一般人では手に入れることができないらしい。そもそも、このレイディアントはまだまだ未知なる大地があるらしく、世界を把握し切れていないのが現状のようだ。つまり、ガイアの大航海時代を迎える以前の世界、といったところか。いずれ、見つけるようになるんだらうけど。

船に乗り、指定席へ向かった。中はいつか乗った義賊（もしくは海賊）のレンドの船を思い起こさせる。ほとんどが木で作られていて、そこはかとなく彼らの雰囲気が漂う。ガイアによくある、船の色が黒と白の半々で中はほとんど白だったり、青緑色だったりしたら、少々明るい感じはするんだけど。ま、ようは色の問題ということなんだけどね。

部屋はヴァルバと同室だった。アンナだけ、違う部屋だった。

「なんだか、心配だな」

僕は部屋の二段ベッドの上でねっころがりながら言った。

「何が？」

二段ベッドの上のせいかな、ヴァルバの声が頭の下から聞こえる。

「何がって……アンナだよ」

「アンナ？ 何でよ？」

「そりゃあ、女の子を一人にすると何かと心配だろ」

「ああ、何かあったら、一人じゃ何もできないからな」

「だろ？ 大丈夫かな……」

「……ふくん、なるほどねー」

ヴァルバは少しにやついたように言った感じがした。

「……なんだよ？」

無粋に言っちゃった。

「そこまで心配するんだな、お前って」

「当たり前だろ。アンナはまだ14歳だぞ？」

と言うと、ヴァルバは小さく笑った。

「お前だつて俺の約半分程度しか生きてないくせに、なに偉そうに言ってるんだよ」

「違うつての。ただ、あいつと一緒に旅をしている以上は、僕たちがあいつを守らないといけないじゃないか」

「まあ、な」

ヴァルバはどことなく受け流したように言った。

「なんだよ、その適当な言い方は？」

「俺はお前ほど立派な人間じゃないからなあ」

まるで、自分を嘲笑っているかのようになり、ヴァルバは笑った。

「……僕は立派な人間なんかじゃないよ」

「そりゃそうだ」

「馬鹿にすんなつーの！」

「ハハ、怒るなつて。……俺はお前がうらやましいよ。そうやって、他人を思いやる気持ちを育むことができる生活の中にいられたことがさ」

ヴァルバの顔は見ていないが、どことなく悲しい感じが漂ってきて

た。言葉だけで伝わってくる。

僕は訊いてみたくなかった。ヴァルバがどこで育ち、どのような生活をして、どんな考えを持って生きてきたのか。

「……なあ、訊いてみるのもいいかな？」

「ん？ どうした？ 改まって」

ヴァルバはさつきとは違って変わって、陽気な感じで返事をした。

「……ヴァルバはどこ出身なんだ？」

「……………」

沈黙。やっぱり、訊かない方がよかったのだろうか。

そう思った時、ヴァルバは口を開いた。

「俺の故郷か……そうだな……………」

ヴァルバはうーんと少し唸った。

「俺はさ、ゼテギネア出身なんだよ」

「ゼテギネア……………」

アルカディア大陸の大部分を支配する、中央集権国家だったか。

「驚いたか？」

「えっ？ ま、まあ少し」

少々、驚いた。てつきり、ルテティア出身だとばかり。もしくは、イデア。

「……何で黙ってたんだ？」

そうだな、とヴァルバは一呼吸入れた。

「……ゼテギネア出身なんてこと言ったら、ロンバルディアでは嫌われ者になっちまうからな。旅をするには、『ゼテギネア出身』つーのは不便なんだよ」

なるほど、ね……………」

「俺は純粋なゼテギネア人の父と、純粋ないデア人の間に生まれたんだ。だから、生まれつき肌が褐色なのさ」

「ゼテギネア人とイデア人……………」

交流のありそうな2国ではなさそうだけどな。

「父親は一年中、仕事ばかりで俺の顔もろくに覚えていない有様だよ。母親は母親で病弱だったし。だからさ、お前が羨ましかったんだ。きつと、両親に愛されて生きてきたんだろうなってさ」

「……愛されて、か……」

ちよくちよくケンカしたことはあるけど……両親は、僕と樹を思いやってくれていた。直接聞いたわけではないが、何となく、十数年過ごす中で気づいたものなんだよな。

「……感謝しろよ、親に。そうやって育ててくれたことをな。感謝する気持ちを失うと、お前は必ず墮ちてしまっただろうよ」

「墮ちる……？」

そう訊くと、ヴァルバはフツと鼻で笑った。

「俺が教えることじゃないさ。それに、墮ちるところは人によって様々なはずだしな。……それがわかるようになれば、お前も他人を『護る』に足る人物になつてはるはずさ」

「……まだ、僕は他人を守ることができるほど強くないってことか？」

「そういうこと」

「またもや、ヴァルバは笑い出した。」

「馬鹿にすんなって！」

「怒るなよ。俺も、まだそれ相応の強さを持っていないしな」

「……んだよ、偉そうなこと言う割には、ヴァルバも大したことねえじゃんよ」

「うっせ！」

「……だけどさ、強さを持つまで大切な人は守れないってことなのか？」

ヴァルバは何も言わなかった。たぶん今、鼻の辺りを指先でかいているはずだ。

「守るに足る力を得るまでに、大切な人を守ることができないっていうのは……嫌だよ。だから、力が無くても精一杯守ろうとする気

持ちも大切なんじゃないのか？」

要は気持ちの問題……な部分もあるはず。

「……そうだろうな。たぶん、お前の言っていることは正しいよ」「珍しく、ヴァルバは僕の意見に賛成した。けど、そう思った次の瞬間、再びヴァルバは言った。

「けどな、そういった気持ちを持っているからって、守れるとは限らないんだよ」

「……………」

「どんなに想っても、想いを積み重ねたとしても、どうにもならないことは存在するんだ。守るに足る力が無ければ、結局のところ意味が無いんだよ」

まるで、ヴァルバは自分のことを言っているようだった。そういう経験があるからこそ、今のように言えるのだろうか。

「だけど……………」

「俺としての、一個人の考えだ。俺は俺。ソラはソラ。お前は自分がやりたいようにやりゃいいんだよ。きつと、な」

ヴァルバは僕の言葉を遮って言った。

「さてと、俺は一眠りするよ」

「おいおい、まだ昼前だぞ？」

「昨日、あまり寝てなかったんだよ」

「ふーん……………」

「なんで寝れていないの？」と訊きたかったが、なんとなく訊かない方がいいような気がした。なんとなく、だが。

ヴァルバは寝てしまったので、僕は甲板へ出ることにした。

甲板に出ると、冷たい風が吹き抜けていった。今から、雪の降りしきる島へ行くのだから、こんな格好で出るのは馬鹿だよな（長袖一枚と長ズボンしか履いていない）…。

甲板には、他の乗船脚の人たちがいた。全員というわけでもない

思うが、結構人数は多い。……40人くらいか。高校の一クラスつてところ。

すでに、大陸は青白く霞んで見えなくなっていた。乗船して数時間。まあまあの速さのようだ。海賊のレンドの船に乗った時もそうだったけど、晴れた日の航海って、旅してるなあって実感する。上には真つ青に広がる青空と白い雲、そして下には紺色の大海原。水平線の彼方では、その空と海の青の境界線があった。きつと、自分が昔から思い描いていた「旅路」の姿だからこそ、胸が躍るんだろうな。

潮風の匂い、実は苦手だ。小さい頃、家族と日向家と一緒に海水浴に行った時も、泳いだ後、気持ちが悪くなってしまい、もどした経験がある。だけど、この世界の潮風の匂いはあまり気にならない海がきれいということと関係があるのかな。

「あ、ソラさん」

後ろから、アンナの声が聞こえた。振り返ると、風になびかれているアンナが立っていた。

「ソラさんも展望ですか？」

展望……。展望なのかな。

「まあ、そんなとこ」

アンナは僕の横に立ち、海を眺めた。

「……きれいな海ですね……」

「ああ」

「ソラさんのいた世界の海は、この世界のとは違うんですか？」

僕はうーんと唸った。あんまし海つてのを眺めたことが無いしな……。

「たぶん、場所によってはここの海と大差はないんだと思うよ」

「場所によってはって？」

「……僕のいた世界は、文明の成長に伴って星が蝕まれていつてるんだ」

「そう、なんですか？」

「その過程の中で、海もまた汚れていつてさ。泳ぐこともできない海なんて、たくさんあるんだよ」

「ゴミの吐きだめになった時代もあったしな。」

「どうして、そうなったんですか？」

「好奇心に襲われた瞳で、彼女は僕を見る。」

「もちろん、人間のせいさ。言つたる？ 文明の成長に伴ってつて、生活の豊かさを求めるために、多くのものを犠牲にしてきた結果が、現れてきているんだ。地球温暖化つて言つてさ、平均気温がどんどん上昇して、海面が上昇するつていう現象が起きてるんだよ」

「え？ なんで気温が上昇すると、海面が上昇するんですか？」

「ガイアには南極と北極つていう、氷だけの大地があるんだよ。気温が上昇すると、その氷が溶けちゃつて、海面が上昇するんだ」

「へえー。じゃあ、なんで暑くなつちゃうんですか？」

「それは……」

と、小1時間ほどアンナにガイアについてのいろいろな話しをした。こんな国があるとか、こういう法律があるとか。他にも世界遺産（個人的に、歴史関係の物を見るのは好きのため）についても話した。アンナは、見たこともない世界の話を聞いているためか、子供が英雄譚を聞く時かのように、目を輝かせながら聞いていた。

数日が過ぎ、ガレ島に到着した。甲板からガレ島を眺めると、小さな島ということがわかる。殺風景な島には、港くらいしか町らしい町というものが見当たらない。人も、ぽつんぽつんしか見えな  
い。

「ガレ島はな、ミッドラント帝国がシュレジエンを制圧しようとした時に、両国が戦った戦場になったんだ。それまでは、2大陸を繋

ぐ一つの貿易都市として、隆盛をほこっていたんだってさ」

「ここも、戦争の被害を受けたのか……」

「ガレ島は、シュレジエンへの物資流通拠点でもあったからな。ミッドラントは、ここを潰しておけば、兵糧を確保しにくいシュレジエンを苦しめることができると思っただら」

「どうしてシュレジエンは兵糧を確保しにくいんだ？」

「そりゃ勿論、シュレジエンでは年中、雪が降りしきる、厳しい土地柄だ。自国内で兵糧を確保しようとするのは無理があるんだよ」「なるほどね……」

戦略の過程の中で標的にされてしまい、今は過去の隆盛の影も残さない島となってしまった。この世界もまた、あの世界と同じなんだと実感した。違うのは、自然だけなのかもしれない。

数時間後、日が暮れそうになった頃に、ラビリンスは再び出発した。

それから次の日の夕方には、オルーヴェ島に到着。ここはガレ島とは打って変わって、賑わいを見せていた。島も一回り大きく、人々が忙しくあちこちに行ったり来たりしている。

どこと無く、ミレトスのように感じた。町の作りも似ているし、貿易都市ということも相まってそう感じるのかもしれない。とは言っても、ミレトスは暑かったが、この島は寒い。ずいぶんと北に来たようで、アルフィナよりも何度が低いように感じる。

……そろそろ、雪でも降りそうだ。

翌日、昼過ぎにアルテスト島へ向けて出発した。毎日、甲板へ出て海を眺めていたが、いい加減、寒さを我慢できなくなってきたので、部屋でぐーたらすることにした。

そういえば、何もしない日は、今みたいにしていたっけ。こうすることを、しばらく忘れていた気がする。違う世界だから、当たり前かもしれないけど。

またもや、思ってしまった。

父さんや母さんはどうしているだろうか。先月（今日はもう10月5日）の空と海の誕生日の時に、その二人のことを考えたが、親のことを考えていなかった。

元気になっているかな。この世界の時間と共に、あっちの世界も同じ時間を経過しているのだとしたら、僕がいなくなってしまうたあの家は……両親はどうなってしまっているんだろう。

……すごく心配しているんだろうな。なんだかんだ言って、父さんと母さんは心配性だったからな……。

手紙を置いてきたといつても、一言も言わずに姿を消したんだから。

翌日、アルテスタ島に到着した。アルテスタ島は、一つの島ではなく、いくつかの小さな島が連なってできた島らしい。満潮時には、島々を繋ぐ浜辺が消えてしまい、分離するようだ。

海がすごくきれいで、沖縄みたいな『夏の海』ではなく、『秋・冬の海』という感じだった。

この島で、十数人の乗船客が降りて行った。どうやら、この島は観光地としても有名ならしい。しかも古代遺跡が残る島でもあり、それによる効果もあるようだ。

日が暮れて、リーフ島へ向けて出発した。

「あー……寒い！」

アンナと一緒に小さな丸テーブルを囲んでランプをしていると、ヴァルバが文句を言うかのように呟いた。

「どうしたんだよ？ 急に」

僕はカードを一枚出した。

「ドボンです」

と、アンナはニコツと笑った。

「げ、また負けちまった」

「寒いんだよ。体が震えるんだよ」

「今に始まったことじゃないだろ？ 僕たちだって寒いんだよ、我慢しな」

「お前は俺の奥さんかつっの」

「なわけないだろ、バカ」

僕とアンナは互いのカードを混ぜ合わせ始めた。この世界のトランプゲーム、意外とルールは単純で、暇つぶしにはちょうどいい。

「ヴァルバさんとソラさんは男同士ですよ？ 結婚できませんって」

「……そんな、真に受けなくても……」

久しぶりに、アンナの天然ぶりが出た。思わず、肩を落としてしまった。

「とにかく！ 寒いからどうにかしてくれ！」

ヴァルバは子供のように言い出した。

「あーもう、うっせー！ 33の親父にもなって、ガキみたいなこと言うなつての！ アンナ、うるさいから甲板行こうぜ」

「あ、はい」

「おーい、ホントに寒いん」

部屋から出て扉を閉めると、ヴァルバのセリフが途切れた。どうせ構ってほしいんだろーなんて、心の中で微笑んだ。

階段を上り、扉を開けるといっそう寒い風が入って来た。以前よりも、数倍寒い風だ。

「うわっ、寒いな」

「そうですね……」

青空が見えるかと思ったら、どんよりとした雲が上空に広がっていた。どこもかしこも、白と灰色が混じった雲がこの世界の空を全て支配しているかのようだった。

「なんだ、今日は曇りか」

「いい天気だったら、寒くても甲板に出る価値はありますもんね」  
「そうだな。……海ってこんなにきれいなんだ、って思うようにもなつたしね」

あっちじゃあ、きれいだななんて思ったことはほとんどなかった。  
「昔、ソラさんが海が苦手だったなんて、なんだかおかしいんですよ」

アンナはそう言うと、クスクス笑い始めた。

「わ、笑うなよ。誰だって、弱点ってのはあるもんなんだよ」  
「そうですね」

フツツと微笑みながらアンナは言った。

その時、白いものが見えた。小さくて、丸みを帯びた物体。

「あ……」

「どうしたんですか？」

アンナは顔をかしげた。

「……雪だ」

「え？」

僕は上を見上げた。アンナも、同じようにした。その目の先には、いくつもの白い粒がチラホラ降っている。

「これが……雪？」

「ああ、雪だ」

まだ10月。なのに、もう雪が降り始めている。ガイアでは、日本ではありえないことだ。いや、東北地方からは降ってるのかも。

「初めて見ました……」

彼女の顔は、最初は驚きの表情だったが、だんだん笑顔に変わっていった。自然と口が開いて、首が疲れても白い粒を降らしている白い雲を見上げている。

「アンナは見るのは初めてだったよな」

「はい。すごくきれい……」

風に吹かれながら、雪はどんどん降ってくる。一つは顔に当たって溶け、一つは甲板に到着して水と化して行った。

「雪はな、よく見ると丸いわけじゃないんだ。小さな六角形の形をしたものがいくつも組み合わさって、丸くなってるんだ」

「そうなんですか？」

「ああ。ちよつとした宝石みたいなんだよ」

僕は服の袖に降り立った雪を、アンナに見えるように差し出した。「ほら、わかる？」

「あ…… ホントだ。すごいですね……。本当に宝石みたいです」

「自然界が生み出したものって、なんだか人間では敵わないよな」

「ホントきれいですね……」

僕は再び、目線を海の向こうへと向けた。少し灰色の混じった雲から、無数の白い粒たちが風景をさえぎるかのように、この海へ降り注いでいる。

その先に、島の影が見えた。

……リーフ島だ。やっと、シュレジエンが見えてきたんだ。

### 32章：風精に愛されし都 ジニー

10月9日。やっとシュレジエン王国の王都があるリーフ島に到着した。今までで最も楽な旅だった。ルテティアへ行く時や、イデアに行く時は汗だくになったりしたもんな。まあ、お金がかかりましたけども。

リーフ島の港に降り立つと、町のほとんどが雪に覆われていた。といつても、5センチほどしか積もっていないが。それでも、僕たちの心を躍らせるには十分だった。

「おおお……積もってるなあ」

体を小さくしながらヴァルバは言った。結構着込んでいるのに、まだ寒いのだろうか。

「すこし、小降りになってきたな」

「さっきよりは、多く降っていませんね」

「そのほうがいいよ、俺は。雪が多く降っていると、なんだか寒く感じちゃうんだよ」

鼻をすするヴァルバの姿は、なかなか笑える。

「今からもっと寒くなるんだろうなあ。やれやれ」

ヴァルバは大きいため息を漏らした。その息は白くなって霞んでいた。

「やつぱり、ヴァルバはおっさんだよな。この寒さを我慢できないなんてさ」

「ちえっ、ほっとけ。それより、ジニーへはどうやって行くんだ？」

ジニーとはシュレジエンの王都だ。風の妖精の名前が由来だとかって訊いたことがある。

「そんなの僕が知るわけないだろ。初めて来たんだしさ」

「私もです」

「おいおい、俺も初めてだぞ」

「……みんな、初めてなんですな。どうしましょう」

「どうしましょうって……なんだか、アンナが言っと緊張感に欠けるなあ」

「そうですね？」

アンナは顔をかしげた。

「と、とにかく、今晚泊まる宿を探そう。場所もわからないのに、雪が降りしきるこの道のと真ん中で、突っ立っていることほど間抜けなことはないからな……」

ヴァルバは体を震わせながらそう言った。

「あれ……ヴァルバ、顔色悪くないか？」

ヴァルバの顔は、少し青ざめているようだった。そう、血の気がない感じだった。

「ホントだ。熱があるんじゃないですか？」

「馬鹿言うなよ。この俺が、熱なんか出してたまるか」

無理に言っているのは明白だった。僕はヴァルバの額に手を置いた。熱があるのかどうか確かめるためだ。

「やめるよ、気持ち悪いって」

「子供みたいなこと言うな。僕だって、できればやりたくなんかないんだよ」

ヴァルバの額から手を離し、今度は自分の額に手を当て、温度を比べてみる。……少し、僕よりも熱い。やはり、熱があるようだ。

「……熱があるな。どこか、宿を探して医者に見てもらおう」

「医者！？ 嫌だよ、医者なんて！」

「な、なんで医者が嫌なんだ！？ つか、30越えてんのにその言いわけはねえだろ。」

「ホント、ガキみたいなのやつだな。大したことないものでも、見といてもらって損は無いんだぞ」

「そうですねよ、ヴァルバさん」

「ちえっ……もう好きにしてくれ」

アンナが言うのと納得するところが、少々気に食わないのだが、とにかく今は宿を探そう。

だんだん、雪が強くなり、視界もかなり悪くなってきた。宿を見つけたらいいかもしれないが、医者を探しに行くととなると、難儀かもしれないな……。

歩く足が重く感じる中、ようやく宿を見つけたことができた。

「ほら、ヴァルバ、宿見つけたぞ」

「ああそうか……」

もはや、答える元気がほとんど無いヴァルバ。足取りはふらついている。

宿に入り、すぐに部屋を借りてヴァルバを寝かせた。布団に入るなり、ヴァルバは激しく呼吸を始めた。どうやら、我慢をしていたようだ。

「ど、どうしましょう……?」

アンナはオロオロし始めた。初めて直面することにうるたえるのはわかるが、こういう時こそ冷静に行動しなきゃならない。

「一応、この宿の人に薬を頼んどいた。とは言っても、ちゃんとした医者に見せてあげたほうがいいからな。それより……」

「……?」

「この大雪だからな。開業しているかどうか不安だ」

窓の外を眺めると、白い雪が猛威を振るっていた。隣の住宅さえ見ることにはかなわない。さっきまで降っているとは言えども気にならない程度だったのに、今ではあの様だ。気候なんてのは気分屋なのを実感した。

「そんな、どうしたら……」

アンナは今にも泣きそうだった。

「アンナ、大げさだよ」

「でも……」

「僕が何とかするっから」

「え……？」

僕はイスから立ち上がり、

「アンナはここで待ってな。僕が医者を探してくるから」

「あ、危ないですよ！ こんな雪の中、外に行ったら！」

「大丈夫だよ。前に言っただろ？ 寒いのは得意だって」

まあ、嘘なんだけどね。

「でも……」

「大丈夫。心配するだろうけど、ヴァルバはお前が見ていなくちゃ、嬉しくないと思うし。それに、お前を連れて行くわけにもいかないもんな」

僕は厚手の服を羽織り、外へ出ようとした。

「ソラさん、気を付けてくださいね……」

どうも悲痛な面持ちだな、アンナは。彼女を安心させるため、僕は微笑みかけた。

「ああ、わかった」

外へ出ると、さっきよりもいつそう、雪の強さが増していた。というか、もう吹雪じゃないか。5メートル先さえ、見ることができないほどだ。

この中で、どうやって医者を探せばいいんだ？

その時、宿の扉が開く音がした。振り返ると、受付のおばさんが立っていた。

「医者を探してるんだろ？ だったら、この通を行って大きな木がある場所に行きな。その近くに小屋があるんだ」

「大きな木、ですか？」

「ああ。そこにある人がいるから、その人に頼めばきっと診てくれ

るよ」

地元の人が言うことだ。きっと、正しいに違いない。

「ありがとうございます」

僕はおばさんに頭を下げ、猛吹雪の通へと向かった。

顔を上げることができない。目を開けることも、少し苦しく感じる。中学生の時、学校帰りに大雨が降ってきたために走っていると、雨の粒が顔や目に当たって痛い何の。あれに比べれば痛みはマシなのだが、今回の雪はなんと言っても冷たい。手や足などは何かで覆っているから大丈夫なのだが、顔は覆っていないものだから、もろに雪の冷気を受けてしまう。

通には人通りは当然のように全くなく、ただただ吹雪の音がするだけだ。すでに、雪の深さは30センチくらいになっている。ここに着いた時には、ほんの5センチほどだったのに、ものの数時間でここまで積もるものなんだな。

雪のせいで、足がなかなか前に進まない。

「うっ、めんどくさいな」

久しぶりの雪で忘れていたが、雪はかなりめんどくさいんだよな。バスは動かなくなるし、電車も……。交通機関が麻痺してしまうと人間ではどうにもならない。いや、自然には全く敵わないものだ。

ゆっくり、ゆっくりと足を進ませ、通の先へと進む。

この港町はルヴィアと言い、王都ジニーと他国を繋ぐ貿易都市で、冬季以外では交易が非常に盛んだという。冬になると海が凍ってしまうため、ほとんど機能しないらしい。そのため、ジニーは輸入できる間にできるだけ輸入しておいて、長く厳しい冬を過ごすのだという。

そういえば、ロシアでもそういうのがあったっけ。世界史で習った。ロシアは寒い地域を支配しているため、冬になると港が凍ってしまうらしく、凍らない港を目指して、ヨーロッパ諸国や時の大帝

国オスマン＝トルコと戦ったって。

このシュレジエンは話を聞く限りでは侵略戦争を行わず、諸国とも同盟を組み、平和路線を行く国である。だから、不凍港を求めて対外戦争は行ったことは無い。

代々のシュレジエン国王は建国以来、平和外交を続け、極力戦争を避けてきた。だからこそ『平和王国』と呼ばれるのだ。ヴァルバが聞いた話ではこの国は寒くても、心はどここの国の人々よりも豊かなのだという。

目の前に広がる雪の嵐。こればかりはどうにもならない。10数分かつて、ようやく木の目の前に来た。

たしかに、大きい。吹雪で高さかどのくらいかはわからないが、10メートルくらいあるのではないだろうか。この吹雪にもかかわらず、木はほんの少ししか傾いていないほどだ。

宿屋のおばさんはこの木の下にある人がいると聞いていたが、本当だろうか？ この木の周りには何も無いし、家らしい家……はあるにはあるが、この吹雪で閉め切っている。医者っぽい家もないし、顔をきよるきよるさせて辺りを見渡すが、人がいそうなものは全く見付からない。あまりにも視界が悪いから、見付からないだけなのかもしれない。

もはや、あたりは白い雪だけになってきた。しかも、あまりの寒さに顔の感覚も無くなってきた。

……戻ったほうがいいかもな。このままでは、自分の体も危うくなつてきそうだ。

そう思ったとき、雪の勢いが和らいだ。

「あれ……？」

思わず、声が漏れた。すると、後ろに人の気配を感じた。

「私をお探しかな？」

僕が後ろを振り返る前に、声の主は言った。すぐさま振り返ると、そこに一人の男性が立っていた。

「あなた、は……？」

和らいだ雪のおかげで、姿をちゃんと確認できた。全身を白い口  
ーブで纏い、頭にはターバンのようなものを着けていた。

「私はクロノスという者だ。……医者を探しているのだろうか？」

クロノスと名乗った男性は、揺ら揺ら降り注ぐ雪の中で、寒そう  
な顔もせずに言った。

「……どうして、僕が医者を探しているとわかったんですか？」

「こんな吹雪の時に私を訪れてくるというのは、それ相応の理由が  
あつてのことだろうか？」

「まあ、そうですね……」

クロノスさんは微笑みながら言った。怪しさ満点だが……今はそ  
んなことはどうでもいい。医者を探していたことを見抜くほどなん  
だから、宿屋のおばさんが言っていた人はこの人なのだろう。

「仲間が熱を出したんです。診てもらえないでしょうか？」

そう言うと、クロノスさんはゆっくりとうなずいた。

「もちろん」

不思議と、雪がクロノスさんに降りかかっているような気がし  
た。

知らない人に診てもらうのは危険、だと言えば危険なんだろうけ  
ど……なぜだろう。この人からは、一切の危険が感じられない。そ  
う、『シグナル』が聞こえないんだ。本能がそう告げてる。心の奥  
底の声が、「危険ではない」と囁いている気がした。それは、クロ  
ノスさんから感じる独特の雰囲気のためなのかもしれない。それが  
どういったものなのか、具体的にはわからないけれど……。

僕はクロノスさんを宿へ来てもらい、ヴァルバを診察してもらった。宿に着くと、ヴァルバは昏睡していた。

「ふむ……なるほど」

クロノスさんはヴァルバの顔色をうかがったり、瞳孔の状態を見たり、脈も計っていた。医師というのは、やることは世界が違っても同じなんだな。

「ヴァ、ヴァルバさんはどうなんですか？」

アンナが恐る恐る訊いた。

「……これは、ビジョラ病だな」

「び、びじよら病？」

聞いたことも無い病名だった。

「命に関わるような病気ではない。そこは安心していいよ」

アンナは胸を撫で下ろしたかのように、大きく息を開いた。ここで、命に関わる病気、だったら心臓が飛び出しそうになっちゃうけどな。

「ただ、あまり長く放っておくと、身体に影響を残しかねない病気なんだ」

「そうなんですか？」

「ビジョラ病というのは、ビジョラレス菌というウイルスに感染すると引き起こされる病気で、長い潜伏期間を経て、高熱や嘔吐などを引き起こすんだ。たしかに、命には関わりは無いのだが……ウイルスが神経にまで及び、下半身不随などを引き起こす可能性がある」

「下半身不随……脊髄関係か」

「なんなんですか？ カハンシンフズイって？」

「どうやら、アンナは初めて聞く用語らしい。」

「……下半身が麻痺して、動かなくなるということなんだ」

彼女の顔が凍り付いた。

「そんな……！」

「確率の問題だがな。とにかく、抗ウイルス剤があるジニーへ向かうでしょう」

クロノスさんはスクツと立ち上がった。

「治せるんですか？」

「もちろんだ。ここ10年の間に、この世界の医学は飛躍的に伸びたのだよ。難病といわれたこの病気も、今では抗ウイルス剤が開発されているんだ」

「じゃあ、王都に行けば、薬は手に入るんですね？」

僕は少しトーンが高くなった。治るといっものがわかると、胸の奥にあった不安感が取り除かれたからだ。

「シユレジエンは最も魔法による医学研究が発展している国だからな。確証は無いが、きつとあるだろう。有名な病気の抗ウイルス剤は、どの国でも手に入るからね」

「じゃあ、大丈夫なんですね！ よかった、本当によかった……」  
アンナはペタンと床に座り込んでしまった。体に力が入っていたのが、安心して気が抜けてしまったのだろう。

「あの、クロノスさん。できれば、ジニーまでの道を教えてもらえないでしょうか？ 僕たち、シユレジエンへ来るのは初めてでどうやって行けばわからなくて、途方に暮れていたんです」

クロノスさんはニツコリと微笑んだ。もう、返ってくる答えがわかった。

「いいよ。私も一緒に行こう。……少々気になることがあるのでね」  
少し意味深な気がしたが、今はあまり気にしなくてもいいだろう、たぶん。

—安心したところで、食事にしようとするのと部屋から出ようとすると、クロノスさんが小さい声で僕を引きとめた。

「ビヨラレス菌は、特定の地域にしか生息しない、極めて珍しいウイルスなんだ」

「……と言つと？」

僕は小さい声で問い返した。

「ゼテギネアの都アヴァロン付近によく生息していると言われている」

「帝都……?」

「いまいち、声を潜めて言う意味がわからなかった。だって、ヴァルバがゼテギネア出身というのは本人から聞いていたし。」

翌日、雪が止んだので、ジニーへ向けて出発した。昨日の猛吹雪が嘘のように、今日は雲の隙間から青空が覗いていた。

外へ出ると、雪は1メートルくらいの高さまで積もっていた。これにはアンナも僕もビックリだ。一面に広がる雪景色は、朝日を浴びてきらきら輝いている。白銀の世界とはまさにこれだ。

「王都ジニーへはこの町から北へ歩いて半日のはずなのだが、雪が多いから日が暮れた時くらいに到着となるだろう」

リーフ島はこのシュレジエン諸島で最も大きな島であるらしいが、北半分は年中雪で覆われているため、人が住めるような状態ではないらしい。そのため、リーフ島にある町や都市は、南半分に位置する。王都ジニーもまた、南よりだという。

馬車（ヴァルバの愛馬はアルフィナに住む農業者に預けてきた）に乗り、除雪された通をノロノロと進んでいった。

ルヴィアの外に出ると、広がる雪景色に目を奪われた。辺り一面、雪がきらきら輝き、反射された太陽光がまぶしい。所々に立っている木にも、葉っぱの一つ一つが雪に覆われていた。雪の道の果てには、真っ白な山々があり、まるで白い世界が延々と続いているように感じる。こういった風景は、テレビでも見たことがない。

「ここらの平原はリーフ島唯一の平原で、セルシウス平原というんだ」

「セルシウス……?」

たしか、『撰氏何度』とかの『撰氏』というのは、セルシウスっていう人の名前から取ったって科学の授業で習った記憶がある。…

曖昧だが。しかし、そういった名称などが、2つの世界共に微妙に関連しているのは、少々疑問に残るところだ。

王都に到着したのは、クロノスさんが予想したとおり日が暮れた頃だった。とは言っても、まだ6時くらいで、『冬になると日が沈むのが早い』ためである。

ジニーはルテティアには劣るものの、イデアより大きな城門を構えている都だ。けど、壮麗さでいえばルテティア以上だろう。なんとなく、城門や城壁が全部、銀色に輝いているからだ。朝や昼ならば、城壁は太陽光で光り輝き、見る者の目を奪うのは間違いない。

王都の中に入ると一直線の中央通があり、他の王都と同じようにその通を挟むようにして商店や住宅が立ち並んでいる。通のずっと先には、宮殿が建っていた。もちろん、王宮であろう。トルコのイスタンブールにある、ソフィア聖堂みたいな形をしていた。だけど、王宮はイデアやルテティアに比べれば少々こじんまりとしている。

「わかるだろうが、この通の先に行けば王宮に行くことができる」  
クロノスさんは王宮を指差して言った。

「ということで、私はこれで失礼するよ」

「えっ？ 王宮に用があるんじゃないんですか？」

「いや、私はこの近くに用事があったのだよ。友人に会うのでね」  
クロノスさんはそう言うと、右手の人差し指を口に添え、口笛を鳴らした。そのまま、人差し指を立てていた。何のことはわからなかったが、しばらくすると一匹の小鳥が上空から飛んできて、クロノスさんの指に降り立ってきた。そうか、よくある鳥を呼ぶやつか。生で見るのは初めてだ。

「わあ、すごいですね。どうしたんですか？ その鳥」

アンナは笑顔を見せながら小鳥を指差した。

「二日前に知り合いの元に伝言として送ったのだが、昨日の猛吹雪で帰ってこれないと思ったのでね。ついでに、迎えに来たのだよ」

「つまり、伝書鳩つてやつですか？ 鳩じゃないけど」

「ああ、よく知っているね。……まあ、伝書鳩は本来、戦争で使われる遺志伝達方法だったのだがね」

クロノスさんは細い目で、小さく微笑んだ。

「では、さよならだ。うまく女王に謁見できるとよいな」

「え？ どうして、ラーナ様に会うことを知っているんですか？」

僕たちが女王様に会いに来たことは一言も言っていないはず。

「ハハ……何となくだよ。機会があればまた会うこともあるだろう」

そう言つて、クロノスさんは暗がりの細い通路へ消えて行った。

「……お礼を言うタイミングを逃がしちゃいましたね」

アンナがボソツと言った。

「あっ、そうだった。じゃあ、ありがとうございました」

と、僕はクロノスさんが消えた方へ一礼した。

「今言つても意味ないじゃないですか」

「気持ちの問題だよ、気持ちの」

すると、アンナは笑いながら歩き始めた。

馬車を引きながら、僕たちは王宮へと向かった。

王宮の前の門に着くと、衛兵に止められた。

「王宮に何の用だ？」

「ええと、女王様に謁見したくて来ました」

超ストリート。あまりにも直だったので、兵士は質問するどころか当惑している。

「ラーナ様に……」

「はい。あと、仲間がビジョラ病という病気にかかっていて、薬をもらいたいんです」

そう言つと、衛兵は驚いた顔をした。

「な、なんと、ビジョラ病！？ それは大変だ。すぐに医者に診てもらおう。おい、医者に連絡しろ！」

すると、一人の衛兵がダツシュでどこかへと行ってしまった。

「君たちは王宮へ！」

「えっ？ い、いいんですか？」

「何を言っている！ 早く診てもらわなければ！」

僕たちは連れて行かれるがままに、王宮へと進んだ。あまりに協力的なので、少し混乱してしまう。ちよつとくらい、疑ったほうが安全だと思うんだけどな……。

王宮には馬車は入れないため、僕はヴァルバを背負って進んだ。70キロを超えるであろうヴァルバの体を持つのは、結構辛いけれど、この世界に来る以前の僕だったら持つことはできなかっただろうな。何かと鍛えられたからなあ。

王宮の中に入ると、僕は驚かされた。大きくて広いから驚いたわけではない。今まで見てきた王宮に比べると、質素だったからだ。そう、壮麗さに欠けるのだ。質素な広間の中央には定番の階段があり、その奥には『王の間』があるのだろう。

煌びやかなものはほとんど飾られておらず、絵画も一つも見当たらない。床には緑色のじゅうたんが敷かれているが、それ以外はどこかの下級貴族の館（見たことはないが）となんら遜色は無いようだ。

……シュレジエン王家はこんなところに住んでいるのだろうか？

王が住む場所にしては、本当に質素だ。

「さ、病人の方はこちらへ」

どこからとも無く現れた衛兵の人が、丁寧に言った。

「あっ……お願いします」

僕は背中に抱えていたヴァルバをその衛兵にゆつくりと背負わせた。その衛兵は鎧を付けているにもかかわらず、軽々とヴァルバを運んで行った。さすが衛兵。

「お2人はこちらへ。陛下がお待ちでございます」

言われるままに中央の階段を上り、『王の間』へと進んだ。そこ

の扉を開くと、一直線の長い廊下があった。ゆうに100メートルくらいはある。もちろん、それと同じ長さのエメラルド色のじゅうたんが敷かれていた。どうやら、シュレジエン城は緑がテーマカラーなのだろう。

長い廊下を進み、扉を開くと今度は横長の部屋に出た。向こう側の壁にはいくつかの扉があり、中央の扉が1番大きかった。

「こちらです」

衛兵が差し出した方向は、その最も大きな扉だった。

扉を開くと、大きな円形の部屋に出た。そして、その奥にいくつかの玉座が対になるようにあり、一人の女性が座っていた。

あの人……ラーナ様か……。黒く、腰まである長い髪で、着物に似た服を着ている。西洋風に改良した着物、という感じだ。穏やかな顔をしていて、どこか懐かしさを感じた。

「どうぞ、お座りになってください」

その女性は凜とした声で言った。あまりにも優しい声なので、思わず体が固まってしまった。威厳のある声とは違い、こういう感じの声をされると逆に緊張してしまう。

僕たちは恐縮しながら指し示されたイスへ座った。

「初めまして。シュレジエンを治める、ラーナと申します」

すると、ラーナ様は丁寧な頭を下げた。僕は慌てて頭を下げた。

「そんなに緊張しないでいいのよ。あなたたちは下がってってくれる？」

メイドのような人や、衛兵たちはペコリと一礼して、垂れ幕の奥へと消えていってしまった。

「自己紹介してくれるかしら？」

ラーナ様はニコリと微笑んで言った。優しい笑顔……。まるで、母親の笑顔のようだった。

「わ、私はアンナと言います。じゅ、14歳です」

アンナは以前みたく、カチンコチンに固まっていた。まだ慣れないみたいだ。

「年齢は言わなくてもよかったのに」

クスクスとラーナ様は笑いながら、「よろしくね」と言った。

「僕はソラと言います。よろしくお願いします」

僕はペコリと一礼した。

「よろしくね」

ラーナ様の声から優しさが伝わってくる。……こういう声を持つ人っているんだな……。こういった人に出逢ったことが無いので、少々驚いた。

空や海も優しさ……が伝わってくる雰囲気を持っているのだが、違う。この人が持っているこの雰囲気……なんだろう、心が安らぐ。「あなたたちのことは、リサちゃんから聞いているわ。ソラ君が、別世界の人間ということもね」

僕は顔を上げた。リサはそこまでのことを言っていたのか。

「……信じてもらえるんですか？」

僕は恐る恐る聞いてみた。信じてもらわないと、話は進まないからな。

「そうね……少なくとも、別世界があるということは知っているわ」

「えっ！？ ど、どうしてですか？」

僕は早口になった。

「このシュレジエン諸島にはね、古代遺跡がたくさん眠っているの。もちろん、彼の古代魔法文明ティルナノグのもの」

リサの言っていたとおり、か。

「リーフ島の北半分は一年中深い雪に覆われていて、その中に古代遺跡がいくつもあるの」

だから、このシュレジエンは技術機関を用いて研究や古代文字の解読を長い間行っていたらしい。

「その中で、今から数千年ほど前の古書が見付かり、この世界と繋がっている、もう一つの世界があることがわかった」

「それだけで、信じることができるんですか？」

「たかが書物。伝説と同じようなものの類かもしれないのに。」

「このシュレジエンにも、別世界の伝承が残っているんです。それも相まって、別世界伝承は本当だと信じられるようになったのです」「その、シュレジエンに伝わる伝承とはどういったものなんですか？」

僕は少し身を乗り出して訊ねた。

ラーナ様によると、『かつて世界は一つだった。記憶さえも失ったのではないかと思うほどの古に、全てを握りし者、世界を滅ぼす。世界は消え、星の遺産は二つの世界を生み出した。創造の時に分たれた 天 と 地 。それぞれは世界となり、天は レイディアン ト、地は ガイア 。全てを握りし者、神々の呪縛にて罰を受ける。断罪の審判、永遠の黄昏に沈む』……これが、伝承。

「……創世神話に似通ったものですね」

アンナが言った。

「全てを握りし者……神々の呪縛……」

そう言えば、この世界に降り立った頃、ヴァルバとアンナが言っていたような……。

「……その、見付かった古書にはなんて書いてあったんですか？」  
そう言うと、ラーナ様は小さくうなずいた。

「古書には、ティルナノグの『時空研究員』の研究結果が書いてありました」

その内容とは、研究員による時間軸を固定する実験の最中、ある時間軸を発見したというものだった。その新しく見付かった時間軸というのが、もう一つの世界……ガイアのことなのだという。

「時間軸……？ どういうことですか？」

僕にはよくわからない単語なので、訊かずにはいらなかった。  
「私もまだよくわからないのです。ただ、技術機関によると……何らかの影響で生じた時間の流れ……簡単に言えば、この世界が歩む一つの『道』ということらしいわ。そうね……世界の『運命』その

もの、というものでしょう」

「運命、か……」

命を運ぶと書いて、運命。そのレール、軌跡、最初から敷かれていた進むべき道。僕としてはそんなもの信じていない。というより、信じたくない。

「つまり、2つの世界は何ならかの事象によって分岐して生まれた……ということなんでしょうか？」

「古書や伝承を信じれば、そういうことになるでしょうね。でも、実際にありえるのかしら……。たかが一つの事象で、世界が二つに分かれてしまうということが……。いえ、実際になっっているのだから、本当なのでしょうけれど……」

ラーナ様は顔を曇らせ、俯いた。

「答を知る術は無いんでしょうか？」

僕は質問を変えた。

「わからないわ。もっとたくさん古書や遺跡を調べたら、ちよつとした情報はあると思うのだけど、調べるのに数十年単位でかかりますし……」

「数十年かかっちゃ、もう意味が無いですよね」

僕は苦笑いをして言った。

「実は、この島より北に開拓されていない大陸があるの」

「……初めて聞きました。2大陸だけじゃなかったんですね」

アンナは少し驚いていた。そう、教えられてきたのだから。僕としては、この世界がそんなに狭いとは到底思えなかったから、まだまだ開拓されていないんじゃないかと考えていた。

「その大陸には、ティルナノグの都や重要都市が眠っているという伝説もあるの」

伝説と云われたティルナノグの？

「そんなものがあるっていうなら、どうして調べていないんですか？」

ティルナノグ時代の都市などがあると噂される大地を、放ってお

く意味がないからな。

「……北の大陸は、このリーフ島北部よりも環境が厳しい大地で、目を開けていられないほどの吹雪が猛威を振るっています。しかも、永久凍土の大地が形成されるほどのものです。もちろん、人間が行けるような場所ではないのです。……だから、建国されてから一度も調査が行えなかったのです」

ラーナ様は少し、申し訳なさそうに言った。

「そうだったんですか。……じゃあ、『聖魔の力』っていうのをご存知ですか？」

僕はもう一つの疑問をぶつけた。自分の持つ、不思議な力のことを。

「聖魔の力ですか？ ごめんなさい、知らないわ」

ラーナ様は顔を小さく振った。

「そう、ですか……」

僕は顔を沈ませた。リサに「自分を知ることになるかも」と言われたので、期待していたのだが……。少しでも、あの力に関する情報が欲しかったのに。このシュレジエンに来たのは、そのためだったのに。

「……ただ」

ラーナ様の声に反応し、僕は顔を上げた。

「関係しているかどうかはわからないけれど 聖魔の神剣 というのがあるのを知っていますよ」

「えっ!？」

がっくりから一転、僕は仰天した。

「な、なんですか!？ その 聖魔の神剣 っていうのは!？」

思わず興奮気味になり、声が大きくなる。ラーナ様はそれに驚き、

少しだけ目をパチクリさせていた。

「ソフィア教団に伝わる、神の剣といわれるものです。太古の昔、世界を闇が支配していた頃、一人の若者に神が与えた神剣。その若者は闇を払い、光を取り戻した。けれど、力に溺れた若者はその神剣を血で染め上げ、最後は魔剣と化した神剣によって滅ぼされてしまった、という伝説があります。故に、聖魔の神剣と呼ばれているのです」

「……？ どういうことですか？」

「所有者の心によって、闇を屠る剣にも、光を穿つ剣にもなってしまうというのですよ」

「つまり、持ち主の心次第ってことか……」

心を反映する、神の剣。……持ち主を選ぶ、心を持った神々の剣……なのかもしれない。

「聖魔の神剣は、ソフィア教の創始者アイオンが破壊神リユングヴィを倒したという伝説もあるんです。これは、子供たちの間では英雄譚として語られているんですよ」

英雄譚ねえ……。ナポレオンやアレキサンダー大王とかみたいなものか。

ん？ 今、リユングヴィって言った？

「あ、あの、破壊神リユングヴィって……？」

僕は恐る恐る訊いた。胸がドキドキする。奥底からの声は、聖魔の力はリユングヴィの力だとも言っていた。もし、それが本当なら

……

「本当かはどうかはわからないけれど、2000年近く昔に、ティルナノグを滅ぼしたといわれている破壊神リユングヴィを、聖者アイオンが聖魔の神剣を携え、壮絶な戦いを繰り広げ、破壊神を倒したという伝説よ。たぶん、ソフィア教団が創始者を神格化させるために、破壊神というものを作り上げたのでしょね」

「どうして、そうだと思うんですか？」

アンナは拳手して訊ねた。まるで、生徒みたいだ。

「正史ではティルナノグは時の天帝によって、滅ぼされたと書かれているからよ。破壊神 が滅ぼしたという記述は残っていないもの」

「えっ？ ちょ、ちょっと待ってください。ティルナノグは天罰で滅びたんじゃないんですか？」

僕はそう聞いていた。世界を蹂躪するティルナノグに、神の雷が落ちたと。

「それは他国に伝わる伝説でしょう？ シュレジエンには独自の歴史学が発展していて、それは古書の研究に基づいているからそれなりに信憑性はあるといわれているの。ゼテギネアやルティアで伝わっている歴史は、口伝によって伝わったものを都合のいいようにあるいは神がかり的なものを付け加えたものなのです」

「そうだったんだ。へえ……」

きっと、物知りなヴァルバさえも知らないことだろうな。後で教えてやる。

「最後の天帝の名は……ユリウス。彼が、世界を支配したティルナノグを滅ぼした人間です」

彼は皇室に伝わる禁じられた封印を解き、その力をもって世界を支配していたティルナノグを滅亡させたのだという。彼は民を解放するために、帝国を滅ぼしたとされるが、実際、彼はどうやって滅ぼしたのか……そこらは謎である。なぜ滅ぼしたのかは、それについて書かれているとされる『プラニッツ聖典』の腐敗が激しいため、わからないという。

「たかが人間……か」

どうも、重要な部分だけが偶然なのかわからない。今までもそうだった。いや、わからないようにされているんじゃないのか？

そんな疑問を考えていると、この部屋に一人のメイドさんが入って来た。

「お客様、ヴァルバ様には抗ウイルス剤を投与いたしましたので、もう大丈夫とのことですよ」

「ホントですか！？ ああ、よかった……」

アンナはペタンとへたり込んだ。きつと、今の今まで内心、ずっと心配だったんだろうな。

「もう、大丈夫なんですか？」

僕は念のために訊ねた。

「ええ、もちろんです。お医者様はそう仰っていました」

メイドさんはニコツと微笑みながら言った。思わず、僕は恐縮した。

「では、ヴァルバさんの所へ行ってきてもいいですよ」

ラーナ様は立ち上がった。

「い、いいんですか？」

「ええ。また、後でソラさんとお話したいですけど、よろしいかしら？」

「あ、はい。もちろんです」

ラーナ様は微笑み、奥の垂れ幕へと消えて行った。

僕たちはメイドさんに付いて行き、ヴァルバがいる部屋へと向かった。部屋に入ると、白いベッドの上で横になっているヴァルバがいた。

「……よお」

ヴァルバは僕たちに気付くと、横目で見つめた。

「済まなかったな……迷惑をかけて……」

変な笑いをしながら、そう言った。

「別にいいって。どうせここには来る予定だったし、ついでだよ、ついで」

僕は笑いながら嫌味を言ってやった。

「へん、うっせーやい。お前にもうつつしてやるーか？」

「皮肉を言う元気があんなら、もう大丈夫なようだな」

僕は思わず微笑んだ。いつも通りのヴァルバだと、安心する。

「……おかげさまでな」

ヴァルバは目を閉じた。そして、大きく息を吐いた。ようやく、落ち着いていられるといった感じだろうか。

「ホントによかったですね、ヴァルバさん……」

アンナは本当にうれしそうに声を言った。

「そんなに心配したのか？」

「当たり前です。麻痺が出るとか言われたから……」

「ああ、それか。ビジョラ病、か……」

遠い目で、彼は天井を見つめた。

「ヴァルバ……」

「勘がいいやつなら、気付くが……あまり深く考えるなよ、ソラ。

俺は俺だからな……」

そう言われても、ちよつと僕にはわからなかった。

クロノスさんは言っていたっけ、「ビジョラレス菌は帝都付近にいる」って。けど、ヴァルバはゼテギネア出身ということは、本人から聞いているから驚くことではない。偶然、帝都の近くに住んでいたってことなんじゃないのか？ それとも、言葉の裏に隠された意味でもあったんだろうか？ 副音声でもあったのか？

「……その様子じゃあ、まだわかってないようだな。まあ、いい。

俺は少し疲れた……寝るよ……」

そう言うと、ヴァルバはゆっくりと目を閉じた。

「薬が効いてきたようですね」

白衣を着たおじさんが言った。メガネをかけ、いかにも医者って感じのおじさんだ。

「薬？」

「ええ。抗ウイルス剤の副作用で、眠ってしまうんですよ。眠くなつたということは、抗ウイルス剤が効いてきたということです」

医者はメガネをクツと上げた。どこの世界も、医者ってというのは

どうもメガネが好きだよなあ。たまたまかもしれないけどさ。

「では、私はこれで……」

医者は荷物をまとめ始めた。

「あ、あの、ありがとうございました」

アンナは医者に大きく頭を下げた。僕も急いで一礼した。感謝の心を忘れるな。それが、父さんの教だったもんな。

医者は僕たちの方に向き直ると、ニコリと笑って会釈をした。

「ともかく、よかったな」

「そうですね。ラーナ様に感謝しなくちゃ」

「そうだな。……ラーナ様って、今まで見てきた王様とは全然違う人だよな」

「なんていうか、すごく優しい人ですよ」

「うーん、僕は母さんみたいだと思ったな」

「……お母さん？」

僕はうなずいた。

「ああ。母性を感じさせる人というか……理想の母親像っていうのかな」

「理想の母親……たしかに、女王様っていうよりはお母さんっていう感じですよ」

「それなんだよ。なんだか、王様独自の緊張感じゃなくて、もっと和やかな雰囲気を作り出してくれるんだよな」

「……ラーナ様って、結婚されているんですっけ？」

「ラーナ様は……ホラ、いつだったか、誰かが言っただけだったっけ？」

「誰か……？」

僕は記憶の糸を手繰り寄せた。えーと、えーと……そうだ！ レンドの船に乗った時、誰かが言っただけだ！ その誰かは思い出せないけど。

「たしか……ラーナ様は先代国王の奥さんで、後継者だった息子の王子が亡くなったとかで、分家ながらも王家の血を継ぐラーナ様が

即位することになったって言ってたよ」

「……ラーナ様、お一人できっと寂しい想いをなさっているんじゃないかね」

アンナはしゅんとした声で言った。

「……女性が家族を失って、感情を押し殺して自国の長としてやっていかなきゃならないっていうのは、僕たちでは想像できないほど辛くて、苦しいことなんだと思う。けど、ラーナ様はきっと、国民にとっても愛されてるんだろうな」

「どうして、そう思うんですか？」

「……この国の人たちを見れば一目瞭然だよ。笑顔が溢れてる。みんながみんな、きつと平等にされているんだよ。それに、ラーナ様のあの優しさ……あれを嫌う人の気が知れないしね」

僕は笑いながら言った。だからこそ、この国は「平和王国」と謳われるんだよ。

「フフ、そうですね」

その後、ヴァルバは2日ほど寝続けた。イデアに行くまで灼熱地獄の砂漠で迷い（自業自得だが）、ホリンと戦って死に目に会わず、それから気温が正反対のシュレジエンまで直行でやって来て、そりゃあ疲れもたまるだろうよ。僕も実を言うと、かな〜りくたくただった。ヴァルバが寝込んでくれて、ゆっくりと休むことができた。

今となつては、感謝感謝。

ヴァルバが寝ている間、僕はラーナ様と話をした。ラーナ様は僕のいた世界のことにごく興味があつたようで、どうやらリサの言っていたことはこのことだったようだ。

ラーナ様はまるで母親のように、自分の子供が学校での話を話す時のように訊いていた。不思議と、それは嫌ではなかった。上から見られているような気がしないからだ。だから、話をしている僕も心地がよかった。やっぱり、どこことなく懐かしさを感じる。シュレ

ジエンは寒い土地なのに、どうしてか暖かく感じる。それは、ラーナ様がかもし出す、雰囲気……人間の暖かさ本来の雰囲気なのだろう。

ああ……そうだ。わかった。

この雰囲気は、母さんのそれと似ているんだ。懐かしいと感じたのは、それが理由だ。

そういうこともあり、僕はこの3日間、王宮に滞在させてくれる代わりにラーナ様に肩たたきをしてあげた。ラーナ様の肩は予想通り、小さくてほっそりとしていた。僕の母さんといえば、少々太り気味だったので、ラーナ様の体型をコピーさせてあげたいよ。

肩たたきといえば、母さんよりも父さんにしてあげてたな。父さんは仕事から帰るとたまに、「肩もんでくれ〜」とかって言っていたので、渋々ながらもやってあげていた。母さんには、本当に時々しかしてあげていない。そう、母の日とかにね。まあ自主的にはなく、やってあげたらお小遣いやってくれるので、めんどくさくてもやっていたのだ。たぶん、同世代の子供は同じような理由でやっていたんだと思うけど……古いかもしれないな。

ラーナ様に肩たたきをしていて思ったけど、やっぱり無理をなさっているんだなと思った。うちの父さん以上に固かったのだ。やっぱり、国王というのは常人では想像ができないほど激務なんだろう。それも、支えてくれる家族がいらないということも相まって。

僕は失礼を承知で、そここのところを聞いてみた。

ラーナ様の旦那さんは、85代国王アレクセイ14世という人で、若干20歳で即位されたそうだ。即位と同時に、太子時代からの恋人だったラーナ様と結婚され、一児をもうけたという。ちなみに結婚時はまだ18歳だったそうだ。しかし、ラーナ様が33歳の時、つまり2年前、国王が原因不明の病気で急逝してしまい、王子である息子はその翌日に姿を消したという。どうやら急死というのは嘘

らしく、王子が政務を嫌って行方をくらましたという風評を出さな  
いために、急死……事故死にしたのだという。他に子供はいなく、  
旦那さんの兄弟もいないため、王妃だったラーナ様が即位すること  
になった。

ラーナ様が言うには、旦那さんも息子さんも一日中、外の風景を  
眺め、暇があれば笛を奏でる人だったという。2人とも、王族でな  
ければ吟遊詩人になりたかったと言っていたそうだ。けど、国を思  
う気持ちは人一倍大きく、宮殿を質素なものにして国民の負担を軽  
くしたり、昔は王族や貴族しか入学できなかった王立学校に平民の  
人も入学して勉強できるようにしたり、国民のために自分の命を削  
ってきたらしい。……そういうこともあり、旦那さんは若くして体  
を悪くすることが多かったそうだ。

ラーナ様がそういったお話をされる時、とても優しくかった。にこ  
やかな笑顔をして、よき思い出の日々を振り返るその姿は、母親が  
幼子に昔話を語る用でもあった。しかし、やはり辛いことがあった  
時期のことを話をする時は、感極まってぼろぼろと涙を流す場面も  
あった。つまり、それほど旦那さんと息子さん……家族を愛してい  
た証拠なのだろう。

僕も、つい泣きそうになってしまった。

……僕はもう元の世界には戻れないから、父さんと母さんに会う  
ことはできない。つまり、死に目にも会えない。それを考えると、  
本当に僕は泣いてしまいそうだ。息子2人がいなくなってしまって、  
2人はどれほど悲しい思いをしているのだろう。きっと、2人にし  
かわからない、深淵に落とされたかのような、絶望に近い悲愴なの  
だろう。

よく、考えていなかった。僕は別れが悲しくなるからって、最後  
の日に父さんと母さんに、一言も言わなかった。僕は今、それをと  
ても後悔している。自分の息子が突然、一言も言わずにいなくなる

という悲しみの大きさは、ラーナ様から聞いてようやく理解した。

だから、後悔した。どうしてあの時、何も言わなかったのだろうか。

……神様がいるのなら、もう一度会わせてほしい。そして、ちゃんとした別れの言葉を交わしたい。それが、僕ができる唯一の恩返しのような気がする。別れの言葉が恩返しっていうのもおかしい話だけど……。

その日の夜、静まり返った暗い寝室のベッドの中で、小さく泣いた。隣のベッドで寝ている、アンナに気付かれまいと。

久しぶりに涙の味を思い出した。それも、僕が最も嫌いな、悲しみの涙の味を。

しょっぱく、切なく、どこことなく冷たい。そう、まるでシュレジエンの空気のようにだった。

シュレジエン。風の吹く王国、か……。

そこにあった風は、親の香りを運んできた。

### 33章：妖精の森 雪舞う陽炎の果てで

ヴァルバが目を覚ます頃には、すでに熱などは引いていた。ど  
うやら、薬がよく効いたようだ。とはいえ、念のため安静にしてお  
こうということ、ヴァルバは後宮内に缶詰め状態にされた。

僕たちは、後から来ると言っていたリサが到着するまで、王宮に  
いることとなった。

ラーナ様は、お話をした後は僕とアンナにいろいろな場所を案内  
してくれた。王宮の奥にある、室内庭園や、ジニー名物の食べ物を  
売っている店に連れて行ってくれたりしてくれた。そこには蟹……  
だろうか。あるいは貝などの魚介類が並べられていた。中には、牛  
乳から生成された思われる甘いお菓子。ヨーグルトに近いが、子供  
には堪らない甘さだった。アンナが大喜びしたのは、言うまでもな  
い。

ここ数日、雪はあまり降らない。シュレジエンでは9月の半ばに  
入ると、一週間の内、3、4日くらい降るらしく、10月に入ると  
ほぼ毎日降るのだという。しかし、ルヴィアに到着したと時の吹雪  
は、シュレジエンでもあまり起こらないほどの大雪だったらしい。  
原因は不明。北の大陸から、巨大な寒波が来たんじゃないかという  
話もあったが、下町では『妖精たちが悪さをしたんだろう』という  
のがもっぱらの噂だ。

ラーナ様が言うにはこのリーフ島の北、つまり年中雪が降る地域  
に、『妖精の森』と呼ばれる森があるらしく、そこにはティルナノ  
グ時代以前からいたとされる妖精が住んでいるという。そして、そ  
の妖精は基本属性である火・水・風・地・雷の5つのエレメンタル  
を司るという伝承がある。その水を司る妖精が、人間に悪戯して  
やろうとして、吹雪を起こしたのではないかというのだ。

大昔からこの世界では、自然災害は属性を司る精霊や妖精の仕業だと考えられていた。ガイアでも、技術が進歩するまでは同じように考えていたのだと思う。災害を食い止めるために、生贄の儀式を行ったりしていた。あるいは、神様の怒りだとも云われていたそう  
だ。

妖精とか、精霊とか、そういった類のものは信じないタイプだ。だって、そんな生き物があるわけじゃないじゃないか。そのことをラーナ様に言ってみると、予想とは違う答えが返ってきた。

「いますよ、妖精は」

テーブルを囲っていすに座り、紅茶をすすする。簡単に言えば、午後の紅茶ってか。

「いるわけじゃないじゃないですか」

僕は疑心に満ちた視線を送った。ラーナ様はクスクスと笑い出した。

「だって、私は見たことあるのよ？」

「いやいや、んなのただの見間違いですって」

僕は紅茶を一口、運んだ。ほんのりとレモンの味がする。

「けど、私の村にも見たって言うていた人がいましたよ」

アンナはクツキーをほお張りながら言った。ちょこちょこ少しずつ食べる様は、愛くるしい彼女の姿も相まって、失礼だがリスのように見えてしまった。

「だからさ、見間違いなんだって。ありえないよ、精霊や妖精なんかがいるなんてさ」

「ソラ君の世界にはいなかったのよね？」

「ええ。百年も昔までは、人々はこの世界と同じでそういった類のものを信じていましたけど、現代は世界が知り尽くされていますから」

「けど、この世界はまだ探索されきっていないわよ？」

「そうでしょうけど……この世界と分岐した世界にいないんだっ  
ら、この世界にもいないでしょーし」

「でも、魔法があるわよ」

と、ラーナ様は微笑む。

「……ああ、そんなものが……」

すっかり忘れていた。ホリンと仮面男がバンバン使ってたんで、  
ちょっと見慣れてしまっていたのかも。

「ソラ君の世界にはない、魔法というものがあるのよ？ 妖精がい  
たっておかしくないんじゃないかしら」

「……うーん……」

僕は腕組みをして唸った。

そう言われてみれば、なくもないかもしれない。たいてい、魔法  
が存在するゲームでは絶対と言っていいほど妖精（あるいは精霊）  
がいるもんな。ほぼ、サポート役として。

「たしかにそうかもしれないけど、やっぱりいいですよ。属性を  
司る、生き物なんて。非科学的だし」

そう。科学で証明されないものはないんだよ、きっと。

「だったら、行ってみない？」

ラーナ様はニコツと笑った。

「？ どこにですか？」

「もちろん、北の森によ」

再び、笑顔が返ってきた。

そんなわけで、リサが来るまで暇なので北の森に行くことになっ  
てしまった。

北の森は前述したとおり、通称『妖精の森』と呼ばれており、こ  
こ王都ジニーから北へ20キロの地点にあり、白雪に年中覆われた

森林が北の海岸まで埋め尽くしているのだという。

アンナは女性だし、体力もそこまであるわけではないので、今回はお留守番ということになった。毎度のごとくアンナは出発する時、かなり心配していた。ホントに、心配症っていうかなんというか。

僕一人で行くのではなく、王宮にいるときに仲良くなった、アレクソンという男性と一緒にいくことになった。

彼は正統な王家に通じる者で、ラーナ様の亡くなったお兄さんの息子だという。つまり、甥だ。まだ16歳で、産まれてすぐに父親は病死、母親は病弱で、今も後宮で寝たきりだという。一度お会いしたが、どことなくラーナ様に似ている感じがした。

……シュレジエンの人たちは、どことなく優しい風を纏っているのだろうか。

僕たちはシュレジエン独自の馬車を使って、妖精の森へと出発した。予定では、明日の昼ごろに到着する予定。

「まったく……なんで俺まで行かなくやならないんだよ」

馬車に揺られ、アレンは文句を言っていた。

「ハハ、僕だけが行くならまだしも、アレンまで行かなくてもいいのにな」

「ラーナ様に頼まれたら、断るわけにはいかない。お前を1人にして行かせるのは、心配なんだろう」

と、アレンは白い溜息を寒空に放る。

「子供扱いされてるなあ」

「子供、だろ？」

アレンはニヤツと笑って僕の顔を見た。

「フン、もう17歳だ。十分、大人みたいなものじゃないか」

そう言つと、アレンは僕から視線を雪の向こうへと向けた。

「……お前は、王子に似ていると思われたんだろう」

「王子？ 失踪したっていう？」

アレンとは従兄弟同士になるってことだよな。

「王子は、生きていけばソラと同じ年なんだ」

たしか……ラーナ様が18歳の時に産まれて、今35歳だから……

……ああ、確かに同じ年だ。

「ま、王子のほうが美少年だったけどな」

「へっ、母親がラーナ様みたいな美人だったら、誰だって美少年になるよ」

うちの母さんはあんなだし、父さんもあんなだし。東家の遺伝子には「美」は存在しません。

「……王子って、どんな人だったんだ？」

ラーナ様から話は聞いていたが、それは『母親』の視点から見た姿なので、他の人から見た視点を知りたかったんだ。

「ジルファ王子は……そうだな、よく言えば自由奔放な人だった。悪く言えば、勝手気ままな人だったな」

「……要するに、我がままで自己中心的な人ってことか？」

そうだとしたら、おおよそ模範の王子ではないよな。アレンは苦笑しながら、僕を見た。

「違っつて。ジルファ王子はまさに、風のような人だったんだ」

「風……？」

自由気ままな人だからってことか？

「シュレジエンは、古代文字で『風精に愛された地』という意味を含んでいる。つまり、王族は代々風の力を伝承している一族で、王子はその『王』の器を持つ人と言っている。樹の上に登り、笛を奏でるその姿は……そう、まるで風精を連れているような感じだったよ」

アレンは寒空を見上げ、にこやかに続けた。

「風のような人、か……。なんだ、僕とは似ても似つかないじゃないか」

「年齢だけだろ」

アレンはハハッと笑った。

翌日、僕たちは妖精の森に到着した。予想以上に、この森は広い。視界の端から端まで、木々で埋め尽くされている。ドイツにあるような、怪しさ満点の森ではないのだが、雪が降り積もっているから、逆に不思議さを感じられる。本当に要請なんかがいそうな雰囲気だ。

「……………ここに入るのか？」

僕は思いつきり嫌な顔をした。

「そんな顔をするなよ。ソラ、怖気づいたか？」

アレンは僕を鼻で笑って言った。

「なわけねーだろ。ただ、念のために訊いてみただけだ。もしかしたら、アレンがここまで来て怖がったりしたかなあと思って、親切に聞いてあげたんだよ」

「ハイハイ」

僕の嫌味を軽く受け流す様は、僕よりも年下だとは思えない。

「しかし、雲行きが怪しくなってきたな」

アレンは空を見上げた。それにつられて上空を見上げるが……たしかに、さっきまで広がっていた冬の青空は消え去り、灰色の雲が空を覆っていた。

「雪でも降るのかな」

「降るだろうな。この季節、北は普段雪が降っている。降っていないほうが、珍しいんだよ」

「……………」

「どうしたんだ？ ソラ」

ふと考え込んだ僕を見て、アレンは顔をかしげた。

「あのさ、やっぱり帰らないか？」

アレンは呆れた目を僕に向けた。

「ここまで来たんだから、もう十分だよ」

「ソラ、お前が妖精を信じないって言うから、ラーナ様が見せてあげようと思ひ、俺がお供としてここまで連れてきてやったんだぞ？」

「まあ、そうだけどさ……」

「だったら、森の中に入って妖精を見るまでは帰らないぞ」

「えええ？」

「え〜じゃない。ホラ、行くぞ」

「……教師みたいなやつだな、アレンって」

僕は小さい声で言った。

「何か言ったか？」

「いやいや、何も言ってないよ」

僕は笑顔で言った。なるほど、リサほど地獄耳ではないな。あいつのは、恐ろしいを通り越して、殺気を感じるからな。

こうして……僕たちは恐ろしい森へと足を進ませた……。

森の中に入ると、深い森のせいではほとんど光が入ってこない。しかも、曇ってきたために、昼間だというのに明るさを感じられない。午後5時過ぎに感じる。

道らしい道はない。というより、雪の量が多いから道があったとしてもその機能をほとんど果たさないだろう。

雪が積もった木の傍を過ぎると、風に揺られたのか、パラパラと粉雪が降ってきた。これが太陽光を浴びると、まるでダイヤモンドの欠片が落ちていくかのように見えるのだが……今日は見れないな。「なあ、もう帰らないか？」

ズボ、ズボ、と雪を踏みながら前へと進む。

「まだ入って少ししか搜索していないじゃないか」

「長く搜索していると、迷う可能性があるだろ？」

「大丈夫だ。俺は何度かこの森に来たことがあるから」

「…そうなのか？」

「ああ。俺は、妖精を見たことがないんからさ、妖精を見ようと思  
い、何度もこの森に来たんだ」

「なんだ、結構ファンタジーを信じるタイプなんだな、アレンって」

「少しくらい、そうである方が人生楽しくならないか？」

あり得ないことを夢見ることが、楽しい……？ なるほど、わかる気がする。男はいつだって、ありもしないことに夢を膨らませる。幼い頃に見たアニメの映画……冒険の果てに、伝説の大陸に辿り着くってやつ。あの頃、本気でその大陸があるって信じてたもんな。そう思うだけで、胸が躍った。

「ま、今回は雪が激しくなる季節だから、あまり行きたくなかったんだけどね」

「そんなこと言って、本当は行きたかったんだろ？」

「……半々、かな。行きたい気持ちも、行きたくない気持ちも拮抗してしまってるよ」

ふうと小さくため息を漏らすアレン。

「そう言われると、どうも今この森にいることは、危険なんじゃないかと思ってきたんだけど……」

「大丈夫だ。たぶん」

アレンはきつぱりと言った。きつぱり言う割には、「たぶん」って言うんだな……。そーいうところから危険なんじゃないかって思うんだよ……。

「こつちに行ってみよう」

アレンが示した先は、少し霧がかかった場所だった。

「なんでだ？」

「妖精は、霧のある場所にいるといわれている。ラーナ様も、深い霧の中で見たと仰っていた」

そう言われてみると……妖精は森の中の霧の奥にいるような想像はある。けど、それは『ありがち』なので、逆にあり得ないのではと思うのだが。

僕たちはアレンが示した方向へと進んだ。霧があるとは言っても、ほんの少しだけなので、たいしたことではない。

「ソラ、急な坂があるから気をつけるよ」

アレンは木の隙間を歩きながら言った。たしかに、今通っている

ところの右側に、45度くらいありそうな坂があった。ちょっと下を見てみると、その坂がずーっと続いているように見えた。

「長い坂だな……これ、落ちたらやばいよな？」

「落ちたら怪我だけじゃ済まないぞ、ソラ」

「ああ、わかって」

その時、僕の片方の足が何かに滑り込むかのように、雪の下へと滑り込んだ。すると、そのまま僕の体は急な坂へと落ちていった。

「!!! ソラ!!!」

雪が崩れる音でアレンは振り返り、僕の姿が見えないことで坂に落ちたと直感した。

僕はだんだん速力を上げながら、転げ落ちていった。景色があっちに行ったりこっちに行ったりする。途中途中で、顔が雪の中に入り、息ができない状態になった。

そして、僕は一つの木に頭をぶつけた。一気に頭の中がぐちゃぐちゃになっていく。視界が崩れてゆく。目の焦点がまったく合わない。痛みを感じないのに、血が出ているのを感じた。

そして、僕は気を失った。動物も凍える、この白銀の森の中で。

34章・ユートピア 聖なる血脈、我らが主の誓約

「……ラ、ソラ……」

どこからか声が聞こえる。もしかしたら、僕を呼ぶ『あの声』だろうか。

「ソラ……ソラ……」

いや、違う。あの感じじゃない。男性の声だが、あれよりも暖かい感じがする。

「ソラ……私の声が聞こえるか……」

この、声は……

「……クロ、ノス……さん……？」

「私ができるか？」

僕はゆっくりと目を開いた。そこには、ジニーまで案内してくれたあのクロノスさんの顔があった。

「ど、うして……うっ！」

その瞬間、体中から痛みを感じた。頭もガンガン叩かれているかのような痛みを感じる。どうやら、木にぶつかって気を失った後、さらに転げてあちこちをぶつけてしまったのだろう。

「待て、動くな。打撲がひどい。今、治療術をかけてやる」

「治療、術……？」

口がうまく動かない。出血をして気を失い、しかもこの寒さだ。体が凍りついたかのようだ。

「命の言霊、光の恩恵に ヒール」

クロノスさんは僕の腹の部分に手をかざすと、治癒術を行った。その掌から淡く、白い半透明な光が出てきた。

……暖かい。以前、ルテティアで治癒魔法をかけてもらったが、あの時よりも効果が高い気がする。痛みがどんどん引いていつている。

「……よし、このくらいでいいだろう」

クロノスさんは手を閉じ、静かに息を吐いた。まだ、少しだけ痛みは残っているけど……すごい、体はあっという間に動くようになってる。

「大丈夫か？」

「……あ、はい。おかげさまで」

僕はペコリと一礼した。クロノスさんはフツと微笑み、辺りを見渡した。

「どうやら、君は妖精たちを探しているようだね」

「……どうしてわかったんですか？」

「この森に来るということは、彼らに用事があるということだろう？　そもそも、このような森には用事がないと来ないしね」

クロノスさんはチラツと木から落ちてきた雪を見た。

「まさか……いるんですか？　妖精って」

「彼らを妖精と呼ぶならそうなのだろうな」

「????」

僕は頭をかしげた。

「……彼らは、君たちが妖精と呼ぶから妖精と呼ばれるのだ。そうだろう？」

「はあ……まあ、たしかに」

すると、クロノスさんは僕に背を向け、前方に歩き出した。

「あの、クロノスさん……どこに行くんですか？」

僕は立ち上がりながら訊ねた。

「君も、彼らに用事があるのだろうか？」

「そうですね、君もって……？」

「以前、私が言っていた友人とは、彼らのことなのだよ」

たしかに、ジニーでの別れ際、クロノスさんはそう言っていた。

「ついでだ。案内しよう」

「ほ、本当ですか!？」

僕はすごくうれしくなった。いるはずがないと思っていた、妖精がいる場所へ連れて行ってくれるのだから。まあ、多少なりとも疑念はあるのだが……うーん、なぜかこの人は嘘を付いていない気がするんだよな。直感的に……？

僕はクロノスさんの後を付いて行った。数メートルほど歩いていると、だんだん辺りの霧が濃くなっていく感じがした。いや、気のせいじゃない。濃くなってきている。

「あの……霧が濃くなってきていませんか？」

「そのようだ。だが、この霧が彼らの住まう場所があるという印象なのだ」

「そうなんですか？」

アレンの言っていた通りだな。というか、霧の奥にいるというのが正しいなんて、なんか拍子抜け。

「……そろそろだ」

いっそうと霧が濃くなったところで、クロノスさんは言った。少しずつ先へと足を進めると、辺りが見えなくなってしまった。淡い光が、僕を包みだした。

……あれ……この感じ、いつか感じた記憶がある。

どこだったっけ……思い出せない。

そうこうしている間に、シュレジエンの寒さを感じなくなってきた。代わりに、ほのかな草の香りが漂ってきた。

「着いたぞ」

僕は辺りを見渡した。すると、さつきまでも濃霧が、潮が引くかのように消えていき、今度は緑色の雑草が生い茂る大地が目の前に広がった。

「……………おおおお……………」

思わず、声が漏れた。それほど、美しかったんだ。ここまできれいな緑の草原を、僕は産まれてこのかた見たことない。こんな草原が、存在するなんて思わなかった。風に撫でられ、小さく揺ら揺らと動く、緑色の波。その一つ一つが、人10人分、いや100人分の心を奪うだろう。

「あ、人だ」

後ろから、子供の声が聞こえた。僕は反射ですぐさま振り返った。すると、そこには小さな妖精……………妖精!?

「おーい、人だ、人が来たぞお」

妖精が大きな声で言うと、どこにいたのか、何人(匹?)もの妖精たちがわらわらと僕たちの周りに集まってきた。

目をこすり、もう一度よく見ると、妖精は掌サイズの小さな体で、人間と同じ四肢と頭を持っている。もちろん、髪も生えている。耳は尖がってて、背中には薄い色をした透明な羽があった。しかも、その羽の色はみんな違う。赤だったり黄色だったり。だが、どれもが透けている。

「人だ。珍しいな、人が来るなんて。何年ぶりだ?」

フワフワと浮いた、薄紫色の羽を持つ妖精が言った。

「知らない。ていうか、人が来たことあるの?」

「やいや、最近来なかったっけ? 妙に髪長い女つペーとか」

ガヤガヤと、辺りが騒がしくなってきた。なんだか、人間の野次

馬集団みたいだ。

「あ　　！！　クロノスじゃんか！」

一人の妖精が飛び上がり、クロノスさんを名指しした。

「ホントだ！　クロノスだ！！」

波紋が広がるかのように、僕たちを囲んでいた妖精たちが「クロノスだ！」と言い始めた。う、うるせえ……。

「おい、クロノス！　ミリアに用事があるんだろ！？」

薄き緑色の羽をした妖精が言った。

「ああ、そうだ。呼んでくれないか？」

「オツケー！」

すると、その妖精はピュンとどこかに飛んで行ってしまった。

妖精が多すぎて、その妖精がどこに行ったのかわからない。というか、多すぎだよ。だって草原が見えないから……。

1分も経たないうちに、妖精が帰ってきた。すると、大きな妖精が上からさっそうと現れた。ピンク色の半透明な羽を持ち、他の妖精に比べるとんでもなく大きい。とは言え、アンナより20センチくらい低いくらいだが。大きな目に翡翠色の瞳をしていて、服を着てない女の姿……う、目のやり場に困る。僕はとっさに、視線を斜め下に逸らし、口元を右手で覆った。

「よお、クロノス。遅かったな」

「ああ、すまないな」

「……ん？　こいつ、人間か？」

ミリアという妖精は、僕を指差した。

「ああ、そうだ」

「どうしてここに入れたんだ？　ただの人間はここには入れないんだぞ」

と、僕の目の前に顔を出して言った。入れないんだぞって言われども……僕が分かるわけないだろ。

「……ふーん、なるほど。そういうことが」  
「……………」

ミリアは勝手に納得し始めた。僕を下から上まで、じろっつと見る。

「これは珍しいな。『純血』じゃないか。だろ？ クロノス」

「そのようだな」

と、クロノスさんは小さくうなずいた。

「……あんだ、知ってただろ？」

ミリアは不敵な笑みを浮かべた。僕は二人が妙に納得し合っているのに対し、苛立ちを覚えた。

「なんだよ、教えてなかったのかよ？」

「私が教えることのほどでもあるまい」

と、クロノスさんは逃げた。

「な、なんなんだよ？ 僕について……何か知っているのか？」

僕は目線を元に戻した。……が、やはりミリアを直視できない。

「あんだ……何も知らないの？ 何も知らないでここまで来たっての？」

「……知らないのは関係ないだろ」

「関係あるよ。自分のことだろ！？」

そう言っつて、ミリアは僕に顔を近づけた。だから……近づくなつての！

「と、ともかく、どういうことなんだ？ 教えてくれよ」

僕は顔を赤くしながら、視線を上空に変えた。ええいくそ！ これでは僕が馬鹿みたいじゃないか！

「……いいの？ クロノス」

彼女は横にいるクロノスさんに目をやった。

「いいと思うよ。知るも知らぬも、全ては彼自身だ。その時が来れば、自ずと知ることになる」

クロノスさんは腕組をして言った。

「じゃあ、今が知るべき時ってこと？ 私が教えるこの時が、その

時なのかい？」

「さあな」

クロノスさんは腕を組み、顔を小さく振った。

「ふん、相変わらずだな……あんたのその性格！」

クロノスさんの態度に、ミリアはイライラしている。

「……お、おい。結局僕は一体」

僕がそう言い掛けると、ミリアはキツと僕を睨んだ。

「うるさいなー！ 静かに待ってる。後でちゃんと教えてあげるからさ」

「ああ！？ んだよそりゃ！ いいから教えてくれよ！ 僕は自分のことが知りたいから、ここまで来たんだ！」

妖精の森に来たのはそういう理由ではないが、シュレジエンに来たのはそれが理由だったから。

ミリアは僕の気迫に、少し押されていた。

「……わ、わかったよ」

ミリアは頭をかきながら言った。どことなく、めんどくさそうに見えた。

「まずは、この場所から説明するよ」

「はあ？ なんでここなの？ 僕のことから……」

その瞬間、僕はミリアに顔を蹴られた。というより、空中に舞った彼女の足の裏が顔面に直撃。

「そこから説明しないといけないの！」

何がいけないのか、わかんねえっての。横で、クロノスさんがクスクス笑っている。

「オホン。この場所はあんたたち人間によって、妖精と呼ばれている者たちが住んでいる場所。ここはもつと別の次元に存在する空間だったんだ。それが、一つの世界が2つに分かれた時、非常に不安定な時空間が生じちゃって、そこにここは引き込まれた。そして、この場所は2つの世界の間位置することになったの」

ミリアは人差し指を立てて説明し始めた。

「ちよ、ちよっと待った！」

僕はどすこい、みたいに手を出した。

「んあ？ 何よ？」

「世界は元々一つつてのは……本当なのか？」

ラーナ様から聞いてはいたが、あくまで後世の人々の考え。正しいかどうかはわからない。

「……そう、世界は一つだった。遙か古まではね……」

ミリアはどこか哀しげに、横目でクロノスさんを見た。

そうか……だから、植物やら食いもんやらは同じだったんだ。それで納得。

「んで？ こここのことは理解できた？」

「……狭間の世界、ってことなのか？」

「簡単に言えばね。でも、ちゃんとした名前があるのよ？」

『トピア』っていうんだからね。覚えておきなさいよあ？」

「はあ……」

なんじゃそら……。ミリアは一息ついて、説明を再開した。

「2つの世界が分かれてしまった後、時空の歪みから生じた穴……ワームホールっていうものが両世界にあって、そこから2つの世界は繋がってる。そして、ここにも繋がってるの。あんたたちがレイディアントと呼んでいる世界のワームホールは、あの森ってわけ」

「なるほど」  
じゃあ、ガイアのワームホールは、あの山ということか。なぜか扉だったか。

「んで、ワームホールに入ると、体を構成する分子と元素……つまりエレメンタルが分離する。普通の人間なら分離した後、不安定な場所であるここでは再構築されないの。再構築されないまま、もう一つの世界に行っちゃうのさ」

「つまり、ワームホールに入っても、普通の人間ならここを知らぬ間に通り過ぎて、もう一つの世界似に行っちゃうってことか？」

「そゆこと」

ミリアはグツと親指を突きたてた。

「でも、例外もある。普通の人間は、分子とエレメンタルの割合が6：4なの。ガイアの人間に至っては、元素なんて存在しない。けど、中にはその逆もいるのさ。体のほとんどがエレメンタルだけで構成されている人間は、ここを通り過ぎるんじゃない、再構築される。今のあんたやクロノスのようにね」

「じゃあ僕は……ほとんどエレメンタルでできてんのか？」

「ほとんどつつても、3：7くらいだけどね」

知らなかった。……待てよ、たしか……ガイアの人間はエレメンタルを持っていなかったはず。じゃあ……僕はレイディアントの人間……？

「もう、ほとんどいないはずなんだけどね。クロノス以外でここに来た人間は、リサくらいだよ」

「リ、リサ！？ リサも！？」

「何、あんた知り合いだったの？」

「あ、ああ……」

あいつも、僕と同じような存在ということか……。

「……どういった人間が、ここに入れるんだ？」

そう問うと、彼女は人差し指を自分の顎に当て、上空を見つめたへの字に曲がった唇が子供っぽい。

「んーと、簡単に言えば……潜在エレメンタルをたくさん持つてるやつだよ。ホラ、あんたたちが 永遠の巫女 と呼んでる人間とかもだよ。あんたは違うけど」

「永遠の巫女……？」

空もか……。ん？ ということは、もしかして……。

「な、なあ……リサも、巫女なのか？」

「そうだよ。知らなかった?」

「そうか、そうなのか……。あいつの、強大な魔力。巫女の伝説と同じだもんな。」

「じゃあ、僕はなんなんだ? 巫女でもないのに、どうして?」

「そうだね。……ん……」

ミリアは僕の体を上から下へと、ゆっくりと見始めた。考える眼球が、上下に動いている。

「……わかんない」

「はっ?」

ミリアは顔をブンブン振りまわした。

「わかんないよ。あんたみたいなタイプ、初めて見たんだもん!」

「……なんじゃそりゃ……」

結局、わかったのは小さいことだけじゃないか。聖魔の力のこととか、知ることができると思ったのに。

「だけど、あんた……教皇に似てるね」

「教皇……?」

「うん。エレメンタルが同じなんだよ、その一族と」

「教皇の一族? どういったエレメンタルなんだ?」

「……言っつていいのかな?」

ミリアは困った顔をクロノスさんに向けた。クロノスさんは目を閉じ、何の反応も示さなかった。

「ミリア、教えてくれ!」

僕は彼女にずいと詰め寄った。ここまで来て、話さないってのは生き地獄にも等しい!!

「ん……、わかったよ。でも、気を悪くしないでよ?」

僕はうなずいた。つばを飲む音が聞けてきた。

「あんたのエレメンタルは……『創造と破壊』　有と無、正と奇。……あんたたちの世界の言葉で言えば、『聖魔』と言うのかな」

「それって……」

いつか聴こえた　声　と、ラーナ様が言っていたものと同じだ。

「一つのエレメンタルの中に、相反する二つの属性を持つ特殊なものだよ。これは代々教皇家にしか現れないんだけどね」

「教皇家……？」

僕とどういふ関係があるんだ？　だって、僕は……ガイアで育ったのだし。いや、もしかしたら……。

「……創造と破壊は常に同じ。破壊は創造、創造は破壊。2つは表裏一体。カードの表と裏。どう使うかは、自分次第なのだよ」

クロノスさんが、閉ざしていた口を開いて言った。

「ソラ、君が憎しみや破壊衝動に囚われれば、破壊の面が出るだろう。逆も然り、だがな」

「……………」

ラーナ様が言っていた、　聖魔の神剣　が現す、2つの側面。それに、創造と破壊は表裏一体。ということは、やはり　リユングヴィ　とも……。

「一つ訊いてもいいかな？」

俯いていた僕に、クロノスさんが不意に問いかけた。

「君は、どうしたいのだ？」

「えっ？」

言葉の意味がわからず、僕は当惑した。

「君は、自分のことが知りたくてここに来たと言った」  
たしかに、そう言ったけど……。

「真実を知って、君はどうしたいのだ？」

真実？ 僕は数度瞬きをした。

「自分のことを知って、何をやりたいというのだ？ 君にはないのか？ その『答』が」

「……………」

僕は、自分を知ってどうしようとしたのか。この世界に来たのは、空を救うため。けど、自分を知ることが……。

「君は、一度ガイアに戻ったほうがよいだろう。帰れば、君の道が見分かるかもしれない」

「……………え？」

僕は度肝を抜かれた。……………帰る？ ガイアに？

「君が知りたい 真実 のいくらかは、あそこにあるかも知れぬ。

ここで知るより、そこで知った方が君のためにもなるだろう」

「……………自分を知ること……………」

追い求めてきたもの。自分は何なのか。何者なのか。

「……………でも、帰れるんですか？ リサは二度と帰れないみたいなのを言っていましたけど……………」

「それは嘘だ」

「嘘？」

僕は肩を落とす。ショックと言うより、気が抜けて。

リサは、嘘を言っていたんだ。もしか、あいつは僕の決心を鈍らせないためにあえて嘘をついたのだろうか。……………考えられる。あいつは、そういう奴だ。そこまでの決心がないと、インドラと戦うことなんてできない。

「ここは二つの世界の狭間。レイディアントからここに繋がっているように、ガイアもここに繋がっている。ユートピアならば、どちらの世界にも行くことができるのだよ」

「……なるほど」

たしかにその通りだ。そもそも、ガイアからは行けたのにレイディアントからじゃあ行けなくなるってのはおかしい話だもんな。よく考えればわかる話なのに、うまいこと騙されたな。

それにしても帰れるのか……ちょっと現実味が湧かないが……。「さて、どうするのだ？」

考えている僕の顔を眺めながら、クロノスさんは言った。

「……僕は一度、戻りたいと思います」

僕は顔を上げた。

「両親に訊きたいことがありますし、みんなに……伝えたいことがあるから」

ラーナ様とお話をして、思い出したこと。大切なことを。

クロノスさんはニッコリと微笑んだ。

「フム、わかった」

「……けどさあ、ワームホールに入って元の世界に戻れるとしても、不安定だからどこに放出されるかわかんないよ？ あんたなら知ってることだろうにさ」

「はっ？」

やばい。日本ではなく、アメリカやアフリカに放出されたらどうしよう。それを考えると、ゾツとした。

「そのところは大丈夫。私がワームホールを安定させる。……とは言え、長い時間ワームホールを安定させることはできないだろうな」

「といつと？」

ミリアは首をかしげた。

「私が安定させていられる時間はせいぜい48時間。最低で44時間だ。だから、44時間以内に帰ってくるならば大丈夫だ」

「44時間……か。たぶん、十分です」

しかし、どうしてクロノスさんはそんなことができるんだろう？  
どうして巫女でもないのに、ここに入れたのだろう？ 疑問が残る。だけど、今はそんなことは気にしてられない。

「ワームホールはあそこだ」

クロノスさんは天を指差した。その指が指す方向に、青い渦があった。

……いやいや、あそこまでゆうに10メートルはあるぞ！？ どうやって行くんだ？

「ぐずぐずしてないで、行くんなら早く行きなさいよ」

ミリアは急かすように、僕のケツを蹴りやがった。

「……あのな、どうやってあそこまで行くんだよ？ お前みたいに、僕は飛べるわけじゃねえんだよ！」

ミリアはため息をついた。ヤレヤレという顔をしやがった。む、むかつく……。

「目を閉じ、深呼吸をして、『飛べる』と連呼してみな。あんたには、そういう力が備わってんだからさ」

「はあ？ んなので空が飛べたら苦労」

「いいからやるー！」

再びミリアの蹴りがケツに命中。何すんだよと思いつながら、性格がどことなくリサっぽいのが笑える。

僕は言われるままに、しぶしぶ目を閉じ、深呼吸を始めた。

（僕は飛べる……飛べる、あそこまで飛べる……）

心の中で、何度も何度も呟いた。

（飛べる、飛べる……）

その心の声に合わせて、別の声が重なった。この声は……以前の……。

( 飛べ、飛べ、僕は飛べる…………… )

そして、僕は目を開き、力いっぱいジャンプをした。すると、想像を遥かに超える高さをジャンプした。あのフォルトウナ神殿で、怪しさ満点の仮面男がジャンプした時のように。

「うっそお!?!」

驚いている間に、僕は青い渦へ一直線。その中へと吸い込まれるかのようだ。

### 35章：ガイア 残された人々、真実の答に

いつだったか、このなんともいえない空間の中にいた。そう、あの山でリサとであった時、そしてレイディアントへ足を進めた時、この空間の中にいた。自分の足が着いているのか、わからないくらいフワフワした感覚。淡い光に包まれ、どこが上なのか下なのかわからない。

「ソラ、私の声が聞こえるかな？」

男性の声が、どこからともなく漂ってきた。この声は……

「クロノスさん、ですよね？」

「ああ。……どうやら、途絶えていないらしいな。これから、君はガイアへ行く。そこでいられる時間は最高で44時間。あちらの世界へ出ると、17時13分のはずだ。つまり、翌々日の13時13分までに『暁の門』へ入ってくれ」

クロノスさんの声は、この空間の中であちに行ったりこっちに行ったりしている。体育館に一人で大声で叫ぶと、木霊が帰ってくるかのように聞こえるのと同じ感じだ。

「……あの、ワームホールを安定させて、ユートピアからガイアの日本に行けるようにするのはわかるんですけど、どうして戻る時も安定させる必要があるんですか？ 安定させなくても、ユートピアに戻るんじゃないんですか？」

「ミリアが言っていたように、2つの世界に存在するワームホールは非常に不安定だ。そのため、どこへ出るのかわからない。つまり、戻る時も同じだ。君が特殊な人間であるためにユートピアには入れるが、私が安定させていなかったら、君は次元の渦に巻き込まれ、他の次元へと飛ばされていたかもしれない」

「うわ……マジですか？」

ゾツとした。見も知らぬ世界に行っていたとしたら……。でも、レイディアントに来る時はどうだったんだろう？ 偶然の賜物か？ 「じゃあ、安定させてくれる人がいれば、ちゃんとしたところに行けるといふことなんですか？」

「そういうことだ。君がレイディアントへ来れたのは、彼女のおかげだろう」

「彼女……リサですか？」

「そうだ」

リサ……ラグナロクの人間で巫女つてのはわかったが、なんつか……わけのわからん奴だよな。怪しいと言えば、怪しいのだが。

「それと、君はその姿のままゲイアに行くつもりか？」

「ん？」

僕は自分の服装を眺めた。……この服装では、完璧に変人扱いだな。はつきり言って、警察に捕まりますよ。こんな服装、日本にはいませんから。

「ハハ、これじゃあ捕まりますね」

とは言っても、どうしよう。現代日本の若者風の服なんてレイディアントにはないし、今更戻るわけにもいかないし……。

「私が変化させてあげよう」

「……ハ？」

思わず、口を開けてしまった。

「今は10月だ。秋用の服装を思い浮かべてみなさい。私がそれと同じ格好にしてあげよう」

「で、できるんですか？」

「私が嘘を言うと思うか？」

「い、いえ……」

僕はまさかと思った。できるわけないだろうと。一応、目を閉じて連想してみた。自分の秋服、自分の秋服……。

すると、一瞬で服が変化した。去年、僕が秋に着ていた服装だ。

「うお！ ス、スゲー！」

「私に任せれば、なんだってできるぞ」

クロノスさんは自慢げに言った。なんか、ここまでできるとクロノスさんはもはや、ちよつとしたドラえもんじゃないか。どこでもドアを出せるんじゃないのか？

「さて、もう一度言っておこう。君に与えられた制限時間は44時間だ」

「わかりました。絶対に戻って来ます」

変な次元に飛ばされたくはないからな。

「では、行きなさい。青の世界へ……」

その言葉が通り過ぎ、沈黙が流れると、僕の体は真っ白な光に包まれていった。あまりのまぶしさに、僕は目を開けていられなかった。

土の匂いがする。

僕は目をゆつくりと開いた。目の先に広がっているのは、懐かしい光景だった。そう、ここはあの山頂。扉の前。すでに太陽は沈み、上空に残されたオレンジ色の光だけが、この世界を照らしていた。この眺めから、僕が住んでいる町が見える。家々には、夕食の準備をしているのか、生活の灯火が煌々と輝いている。

すっかり、秋景色になっていた。山の木々は、きれいな紅葉や銀杏。赤色や黄色に囲まれた山は、大昔から人々の心を捉えて離さないのだろう。だけど、変な感じだ。僕がいた時はまだ春の香りがほんのりと残る時期だった。それが、タイムスリップしたかのように、夏を通り過ぎてしまっているのだから。まあ、レイディアントで日本の夏を超える暑さを経験したわけだが。

さて、これからどうしよう。僕は辺りを見渡した。家に直行するのでもいいんだけど、道端で知り合いに会ったりしないだろうか。いや、もう日が暮れている頃合だから、近くで見ない限り僕と気付かないだろう。

……とにかく、我が家へ行くか。

僕はこの山道を下り、家へと直行した。少し頭を伏せ、自分だと気付かれないようにする。ま、すでに忘れられているかもしれないけど。

山を下り、小学校を抜け、いつもの帰り道へと出た。この道の途中に、小さい頃遊んだ公園がある。そこで、空に告白したんだっとな。

懐かしく思い、その公園を覗いた。滑り台、ジャングルジム、砂場、平均台など、僕の子供時代を持つ記憶の中に佇むものがそこにあった。そして、ブランコ。あそこで、海が落ちちゃって、大泣きして。

……？ ブランコに誰がいる。暗がりの町の中、公園は電灯がすでに付いていて、不気味な明るさを出していた。

僕は誰なのかと思い、目を凝らしてよく見てみた。

……海？

あれは、海……か？ どうして、ここに…？

もう、学校は終わっている時間帯だ。いても不思議ではない。しかし、すでに10月半ば。しかもこの時間。冬に匹敵する寒さだ。それを制服のまま、ブランコに座って下を向いている。

僕は差し足、すり足、忍び足でブランコへと近づいて行った。さすがに、地面を踏んだ時に生じる音は消せないけど。

今の海は傍から見ると、かなり暗い女に見える。海は、誰より明るい女だった。悪く言えば、それが取り得だと言ってもよい。それが、あんなに暗いと……知り合いでなければ話しかけたくない雰囲気だ。けど、あんな風になったのは、少なからず僕のせいでもある。いや、ほとんど僕のせいと言ってもよいかもしれない。海の小さな背中を見ているうちに、心の中の罪悪感がどんどん膨らんでいつているのがわかった。

海の背中から約4メートルの所まで来ると、海は伏せていた顔を上げ、後ろに振り返った。

そして、僕の体は硬直した。そう、だるまさんが転んだをしている時みたいだ。

「……誰？」

彼女は暗いためか、僕の顔がよく見えていないようだった。

「よ、よお……」

この言葉が精一杯。ぼくは右手を挙げた。すると海は口を半開きにし、僕を見ている。

「……空……？」

海は小さく言った。けど、静まり返った夕暮れ時の公園では、聞き逃さなかった。

「空、空なの……？」

信じられないのか、疑問系で僕を呼びかける。

「えと……うん、まあ空です」

疑問を確信にさせるために、僕は海に言った。海はフルフルと震え、泣き面になっていった。そして涙を一粒、流した。一つの宝石のように。

「ど……して……」

海は涙でうまくしゃべれないようだった。

「帰ってきたんだ、海」

「そ……ら……！」

海はブランコから立ち上がり、僕の所に飛び込んできた。衝撃で、少し後ろに下がってしまった。

「空……空あぁー！！」

海は大声を上げて、泣いた。

「海……相変わらず、小さいな」

「うる、さい……！！ うわぁぁー！！」

海の泣き声が、小さい公園に響いた。

「……………」

僕は何も言えなかった。……泣かれるのは得意じゃないんだが、この泣き方……すごく懐かしく思えた。ほんの4、5カ月しか離れていなかったのに。

彼女の無く姿を見るのが懐かしいだなんて、僕もよっぽどの「あれ」だな。

僕は海を連れ、自分の家へ向かった。家のチャイムを鳴らすと、ドタドタと足の音が聞こえた。この騒音は母さんだな。少し太り気味だから。

ドアが開き、母さんの顔が出てきた。

「どちらさ」

「ただいま、母さん。僕がわかる？」

母さんは本当に時が止まったかのように、微動だにしなかった。

時よ止まれ、ザ・ワールド……じゃなくて。

「おばさん！ 空だよ！ 空が帰ってきた！」

海が僕の後ろからひよいと出て言ったが、母さんの開いた口と目が動かない。すると、今度は目をぱちくりし始めた。

「あ、あ、あ、あ、あ、そ、そ、そ、そ、あ」

何を言っているのか理解できない。あとそしか言ってねえじゃん。

「……あのさ母さん、僕だよ。まさかとは思うが、自分の息子の」と忘れたのか？」

「あ、あんたー！ー！ー！」

と、母さんはドアを開けっ放しでリビングの方へ入って行った。奥から声が聞こえる。

「あんた！ そ、そ、空が！」

「空？ 空がどうしたってんだ？」

「そ、そ、空がー！」

「空あ……？ UFOでもいたのか？」

父さんの声だ。しかも、そっちの空じゃないよ……。僕は思わず、肩をガツクシ落とした。

「違うよ！」

バチッ！

たぶん、父さんの頭をひっぱいたな。可愛いそうに、父さん。

「なっ、何すんだよ！？」

「そ、空が帰って来た！！」

「空あ？ 空って……？ ……なにいいいい！？」

そして、ドタドタという足音が僕と海の所にやってきた。父さんは出口の前に立ち、僕を見ると体が止まった。

「空!? なんで空が!!!?」

「化けて出たんだよ!」

母さんがおかしなことを言う。自分の息子が生きて帰って来たっていうのに、化けて出たはないだろーよ。

「ど、どうして、そ、空が!!!?」

このままでは埒があかない思い、僕は大きくため息をついた。

「……あのさ、寒いから中に入れてくれる? 詳しい話は中でするからな」

父さんと母さんは目をぱちくりさせ、うなずいた。……まったく、いちいちめんどくさいことさせやがって。

そう思いつつも、内心安心したのは言うまでもない。

僕たちはリビングのテーブルに座った。すでに、父さんと母さんは落ち着きを取り戻し、僕が生きていることを認識したようだ(遅いんだよ)。

「……で? どういうことなんだ?」

父さんが言った。僕の正面に父さん、その横に母さん、海は僕の隣に座った。

「……置いていった手紙に書いていた通り、僕が行方をくらましたのは、空を救うためなんだ」

「空ちゃんを……?」

「まさかとは思うけど、手紙のこと信じてなかったわけ?」

手紙とは、僕がガイアを出る時に残した手紙のことだ。まあ……どこに行くのか、ちゃんとしたことは書かなかったが。

「い、いや、そういうわけじゃないんだけど……まさか、本当にそ

うだとは思わなくて……」

母さんは未だに何が何だかわかっていないようだ。こんがらがってるんだろうな。

「空ちゃんは生きてるのか？」

3人の中で、一番冷静な父さんが言った。僕はうなずいた。

「生きてる。けど、この世界にはいない」

「……この世界？　じゃあ、どこにいるの？」

海が言った。

「信じられないと思うけど、空は……この世界とは違う世界に連れ去られたんだ」

3人はきよとんとした。信じられない様子だ。

「違う世界……？　そんなもの、あるのか？」

「あるよ。……僕は空を救うために、その世界へ行っていたんだ。

僕がいなかったということ、それが証拠にならないか？」

「そりゃあ、そうかもしれないけど……ねえ」

母さんは父さんと目を合わせた。

「いきなり信じろって言われても、わからないだろうけど……信じてくれないか？　それが真実なんだから」

「……まあ、ね。うん。信じるほかないだろうさ」

父さんは腕組をして言った。まだ拭い切れない疑念はあるようだ。うだ。

「お姉ちゃんは、その世界のどこにいるの？」

「……空は、まだどこにいるかはわからない。けど、生きている」とは確かだ」

「どうして？」

海はすぐに問いかけてきた。

「空をさらった奴らは、空を殺すことが目的じゃない。それに、まだ生きているって、奴らが言っていた」

「ホントに？」

僕はうなずいた。空が宝玉を取られて死ぬのが先か、僕が自分の

闇に飲み込まれて死ぬか……とも言っていたが。

「……なあ、『奴ら』というのはなんなんだ？ 彼らが空ちゃんをさらった理由はなんなんだ？」

父さんが言った。

「……目的成就のためさ」

「目的？」

僕はそこで、「インドラ」という組織と、彼女がさらわれた理由のことについて説明した。そして、奴らの目的が「人類の滅亡」だということも。

「……いくらなんでも、話が飛躍しすぎじゃないか？」

父さんは眉を曲げて言った。

「たしかに、僕もそう思った。……けど、奴らはできると断言している。あまりにも自信がありすぎている。それに、あの世界には……わけのわからないものがたくさんある。魔法もそうだしさ」

「うーん……」

父さんは再び腕を組み、唸った。そして大きく息を吐き、ボサボサの髪の毛がある頭をかいた。

「……それで、空はこれからどうするんだ？」

「これから？」

「やっぱり、あちらの世界に行くのか？」

父さんは眉間にしわを寄せた。少しの間、沈黙が流れた。

「……もちろん行くよ。まだ、空を救えていない」

あいつを救わない限り、こちらの世界に留まる理由はない。彼女を助けることが、僕の旅の目的の一つなのだから。

「じゃあ、お姉ちゃんを助けたら……一緒に帰ってくるの？」

海は飛びついたように言った。

「えっ？」

僕は一瞬、戸惑った。

「お姉ちゃんを助けだしたら、帰ってくるんだよね？」  
空を助けて、ここに帰る。

……帰る？

そう考えた時、僕の中に言い表すことのできない疑問が浮かんできた。そう、空を助けて帰るということに、疑問を感じたのだ。

「ねえ、空？」

期待の瞳を向けて、海は僕を呼ぶ。

帰る？ 空を助けて……それだけで？

僕は……何がしたいんだ？

空を助け出すだけでいいのか？

でも、最初の目的はそれだった。彼女を助け出すことだけが、僕の旅する理由だった。

僕は自問自答を繰り返す。自分という揺りかごの中で。

「ちょっと、聞いてるの？ 空！」

「え？ あ、ああ……」

海は首をかしげ、眉を曲げる。

「僕……は……」

助けたいと思うのは、今でも変わらない。けど、それだけではい

けない。どうして自分は真実を知ろうとしたのか。なぜ、真実の糸を探し求めたのか。

真実を知ることによって、僕は何を得たかったのか。

小さな、鼓動が聴こえた。

ドクン、と。

僕は……何がしたいのか。何をしようと思ひ、真実を知ろうとしたのか。

「君にはないのか？ その答が」

クロノスさんの声が蘇る。

僕は何をしようとしているのか。真実を知って、どうしようとしたのか。

……僕は……

と、その時、僕の頭に誰かがチョップした。

「もう、さっきから何なのよ!!」

海はいつもの怒った顔で、僕を睨みつける。

「ご、ごめん。ちょっと、考え事を……」

「考え事？ 何？」

彼女は頭をかしげた。

ああ……きつと、今自分の中にある言葉に心を宿し、彼女に届け

ると……きつと、彼女は泣いてしまっただろう。  
確信にも似た想いが、そこかしこに溢れた。

「……僕は、帰らない」

「えっ?」

僕は自分の顔から笑みを消し、海を見た。さっきまでと様子が違い、少し当惑しているようにも見える。

「お前は訊いたな? 空を助けたら帰ってくるのかって。……答えは、帰らない……だ」

そう言つと、彼女の顔が硬直した。

「そんな……!! どうして!?! どうして帰ってくれないの!?!」

海は立ち上がり、叫んだ。

「海……」

「やだよ! 空だけ帰ってこないなんて!!」

海はそう言つと、イスを倒して玄関へ走り出した。

「海!!」

僕は彼女を追おうとイスから立ち上がったが、その時に玄関のドアが閉められる音が轟いた。

「……空」

振り向くと、母さんが心配した顔で僕を見ていた。

「あんだ、本当に……?」

母さんたちも信じられない様子だった。僕はゆっくり深呼吸をし、再び椅子に腰を下ろした。そして、父さんと母さんに自分の視線を向けた。自分の想いを届けるために。

「……僕があつちの世界に行ったのは、空を救うためだけだった。

……それだけだった。空が救えれば、あとはどうでもいいとさえ考えていた」

本当にそう思っていた。事実、空に関連しないことは、めんどく

さくてやりたくないと思つた。

「けど……それでいいのかつて思つたんだ。空を助けだして、ここに帰ってくるのはさ。なんつーか……そう、嫌なんだ」

「……嫌？」

父さんの言葉に、僕は小さくうなずいた。

「あそこに行つて、いろいろなものを見たんだ。この世界とは違つて、あらゆる所に自然が溢れてる。山や草原がブアーって広がつて、海なんかすんげえ透き通つてさ」

初めて降り立つたルナ平原や、ランディアナやミレトスで見た青海の姿。僕はそれらを見るたびに、心を震わせた。思ひだしただけで、笑顔になつた。

「すごく……きれいだった。ガイアとは違つて不便だけど、ここにはないものがたくさんある。そこには、僕たちと同じようなヒトが住んでいたんだ」

ヴァルバ、アンナ、リサ、フィアナのおばちゃん、レンドの海賊仲間、ミレトスの飯屋のおじさん、アルベルト王子やレオポルトさん、皇隆王にラーナ様。

「みんな、僕に多くのことを教えてくれた。一日一日を懸命に生きて、あの世界で暮らしている。なんていうか……この世界のヒトにはない、輝くもんがあつたんだよ」

「……」

「それは、時に穢されて、時に何かを壊そうとする」

ステファン卿……愚かな権力者。最後の最後まで、哀れなヒト。

あいつは、みんなが持つ輝くものを穢し続けた。

「でも、全部あの世界の宝なんだよ。いつだって僕を笑顔にしてくれて、安らかな心を与えてくれるんだ。そうやって、僕は生きていけた。死ぬ目に何度も遭つたけど、それでも生き抜くことができた。みんなと笑顔で、旅ができたんだ」

言葉が溢れて来る。想いが重なつて、言霊となつてこの世界に放たれる。

「僕は……知ったんだ。あの世界で、何が起ころうとしているのかを」

インドラという、馬鹿げた連中がしようとしていることを。

「世界が滅ぼされようとしている。あの世界の人々、みんなが殺されようとしている。何もかもを知ろうとして、知ったのに、目を背けて帰ることなんてできない」

そうだよ、そうなんだよ……。自分で言いながら気付いた。見捨てておくことなんてできないんだ。見て見ぬふりなんて、できない。滅びゆくものを、放っておけない。

「あの世界が大切だ。ほんの数ヶ月でそう思うのは、もしかしたら馬鹿げた勘違いだって言われるかもしれない。けど、滅ぼさせたくない。あそこにいるヒトたちや、あそこの世界を」

真実。それを知って尚、僕は僕でいられるのか。  
何がしたくて、何を求めているのか。

答えは、意外にも近くに眠っていたんだ。

父さんたちは目をそらさず、僕を見ていてくれた。

「そうか……うん、それなら俺は何も言わない」

父さんは穏やかな笑顔を向け、優しい瞳をしていた。

「父さん……」

「それでこそ、俺たちの息子だ。……母さんも、そうだろ？」

お父さんは母さんの方に目を向けた。

「……そうだね。けど、心配だよ。あんたが、死んじゃうじゃないかって……」

母さんの心痛な面持ちが辛かった。…心配させているんだと。

「大丈夫だよ。心強い仲間たちがいるから……さ」

「……そうかい、そうならいいけど……樹に続いて、あんたまで死

「んだったらって思うと……」

母さんは、目の辺りを手で押さえた。小さな涙が溢れていた。

「あんたがいなくなった時、あんたまで死んだのかと……」

「……………」

そうだった。ここへ帰って来たもう一つの理由、それは両親に謝ることだった。どれほど、心配させたか……。

「父さん、母さん、ごめん」

僕はテーブルに額が当たるくらいまで頭を下げた。

「どうしたんだよ？ いきなり」

父さんは見たことの無い僕の姿に、当惑していた。

「父さんと母さんが心配する気持ちを考えないで、一言も言わずに出て行ってしまつて、ごめん。僕は、2人が心配するということを、簡単に考えていたんだ」

「空……」

僕は顔を上げ、再び二人を見つめた。

「あつちの世界で、息子がいなくなつてしまつた女性に出会つたんだ。その人に、親の気持ちがどんなものなのかを、教えられた。だから謝りたくて……どうにか帰つてきたんだ」

ラーナ様。最愛の夫を亡くし、唯一の息子まで……消えてしまった。何も言わずに消え去つてしまう悲しさ……。それはラーナ様の言葉から伝わってきた。

そして、親が子を想う気持ちも。

「……………ごめん。けど、僕は明後日にはあつちの世界へ行く。そして、空を助け出して、やつらの計画を阻止するまでは……帰らないつもりだ。どんなに危険だとしても、それはやり遂げたい」

と、僕はそこで頭を振った。

「いや、やるんだ。だから……」

僕はもう一度、頭を深々と下げた。

「……わかってるわよ。悪者たちのしよつとしていいることがわかっていいるのに、それを止めないなら、あんたをぶつたたいてたよ！」  
母さんは笑いながら言った。そう言ってくれる、親だから僕はうれしいんだ。

「父さん、母さん……ありがとう」  
僕は心の底から、そう思った。

「……もう、言うべき時なのかもな……」

すると、父さんと母さんは顔を合わせ、口で話してはいないが、アイコンタクトで相談しているようだった。

「空、お前に言わなくちゃならないことがある」

父さんはさっきまでの穏やかな顔とは打って変わって、深刻そうな顔になっていた。

「言わなくてはならないこと？」

「いつか……言おうと思っていたことだ。お前と、樹に」

「僕と樹？」

父さんはゆっくりと目を閉じて、静かに語りだした。

「……お前と樹は……父さんたちの子供じゃないんだ」

体が止まった。

「えっ……？」

硬直した僕を見据え、母さんが続ける。

「お前と樹はね……14年前、あんたの小学校の裏山で拾ったんだ」

14年前……9月24日の夜、母さんと父さんは昔、流産で死んでしまった子供を山に埋めたので、その日、お参りに行ったそうだ。

「その時、変な光が辺りを包みだして、あんたと樹……そして見たことのない女性が現れたのよ」

「女性は何を言っているのかはわからなかった。しかし、子供をお願いします、ということだけはわかった……」

その女性は大怪我をしていて、まもなく息を引き取った。僕と樹は、彼女が息を引き取る瞬間を、何もわからないような顔で見ているという。

「……お前たちはきつと行くあてもないんだろうと思ひ、俺たちが引き取ることにしたんだ」

そうか……初めて 暁の門 に行った時に見えた不思議な光景。

夜空の中、僕はあそこで泣き叫ぶ樹と、真っ赤な血が付いた白いローブを羽織り、今にも消えてしまいそうな女性を見ていた。

あれは、その時のものだったんだ。

……じゃあ、その女性は……僕の……本当の……

「……あんたはね、いつも空ばかり指すから 空 って名付けた。

樹は、大樹のペンダントを持っていたから 樹 と名付けた」

母さんの顔は、微笑んでいた。

「……ごめんな、今まで内緒にしていた……」

「ごめんね、空……」

2人はそう言った。けれど、うれしかった。

「……謝らなくていいよ。僕は、父さんと母さんに育ててもらって、うれしいよ。血の繋がりなんて関係ない。本当の親子だと思っているから……」

「空……」

「普通、いきなり現れた身寄りのない子供二人を助けるなんてのは、できない。けど、二人にはできた。……そんな二人に育てられて、本当によかったと思ってる。この上ない幸福ってやつだよ。……ありがとう、父さん、母さん……」

それは正直な気持ちだった。たとえ憐れみから救ってくれたのだとしても、平穩無事に育ててくれたことは、感謝してもしきれない。「……もし、本当の父親と母親を知ったとしても、僕は二人を親だと思ってる。それだけは、変わらないよ。……これからも」

「……あんたって子は……」

母さんの涙腺はもう爆発寸前だった。

「うん、うん。よかったよ。否定されるんじゃないかと、冷や冷やしていたんだ」

父さんは頭をかきながら笑った。

「……ほら、海ちゃんの所に行つてあげな」

「……わかつてるよ、母さん」

じゃあまたあとで。僕はそう言つて、外に出た。

「……あの子たちを拾つて、正解だったね……」

「正解もくそもあるか。あの子は……あの子たちは、俺たちの宝物だよ」

空の父は妻の手に、自分の手を添えた。

「……あの時、彼女の想いに応えてあげることが、その心を天国へ誘つてあげることだと思つた。樹を失わせてしまったが……あいつは、大きくなつてくれた……」

「……そうね……」

海が行きそうな場所……たぶん、あの公園だろう。それしか考えられない。自分の家に帰っているのなら、ついでにおばさんとおじさんに挨拶しておきたいところだが……何となく、自宅ではない気がするんだよな。

案の定、海は公園にいた。闇夜に包まれた公園の中、一際輝く電灯の光を浴びるベンチに腰を下ろし、俯いている。

「……おい、海」

僕は彼女の傍に立ち止まった。

「いくらこの辺りは知ってるって言っても、もう真っ暗なんだ。危険なことはすんな」

「……」

彼女は俯いたまま。

「寒いだろ？ 風邪ひくぞ」

僕はそう言っつて、持ってきたジャケットを彼女に羽織らせた。

「……はぁ……」

僕は小さくため息をついた。これじゃあ、いつかの時と同じじゃないか。海に内緒で空と付き合い始めた時と。不安定になって、泣き叫んで……ひたすら沈黙。

「……海、帰るぞ。きつと、おじさんたちも心配してるだろうし」

「」

「なんで？」

突然、海は言った。

「どっつして、空は普通なの？」

「……普通？」

海は顔を上げ、僕を睨みつけた。思わず、たじろいでしまいそうだった。

「普通だよ!! お姉ちゃんがさらわれて、空は何も言わずいなくなつて……」

「何も言わずつて……一応、手紙置いておいたじゃないか」

さすがに何も言わずにいなくなるのはダメだと思い、一生で一度の本気丸出しの手紙。今考えると、ちと恥ずかしかったり。

「行くなら行くつて言つて欲しかった! どこに行くのか、何のために行くのか……はつきり言つて欲しかった! 私、すごく心配したんだよ? お父さんも、お母さんも……!!」

「……」

「なのに……どうして空は普通でいられるの!? 私たちがどれほど心配したのか……全然わかつてない!」

「海……」

彼女の瞳から涙があふれ始めた。

「せっかく帰つて来ても……また行つちゃうんでしょ? 私を……私たちを放つて、自分はまた別の世界に行くんでしょ!!?」

「……」

「心配させて……死ぬほど心配させて、帰つて来てみたらいつも通りに振る舞う……それが嫌なの! 私はこんなにも心配してるのに……心配してるのに!!」

夜の静寂に轟く彼女の声。それから逃げるわけにはいかなかった。

「……そうだな。お前の言う通りだ」

「わかつたようなことを言わないで!!」

顔を振つた彼女の下に、空中に舞つた涙の雫が落ちてゆく。

「……お前の気持ちも考えずに出ていったこと……お前の気持ちも知らずに話しかけたこと。それが許せないんだよな、海は」

海の気持ち……わからなくもない。自分の気持ちとは裏腹に、平然と振る舞う姿が……許せないんだ。

「まずは、謝らなくちゃいけなかったんだよな。……今更遅いとは思うけど……ごめん」

僕は頭を下げた。

「……簡単に言わないでよ！」

「それでも、言わせる。お前は、僕の大事な幼馴染なんだから」

手紙を置いてきたとはいえ、何も言わずにいなくなったのは間違っていたのかもしれない。……僕は、彼女の気持ちを理解していなかった。彼女の想いがどれほど大きいのか、考えていなかった。

「……お前の気持ちを考えていなかった。ごめん」

「悪いと思ってるなら、行かないでよ……！」

彼女は僕の手を握り締めた。この季節の夜のせいで、彼女の手は氷のように冷え切っていた。

「私を置いていかないで……これ以上、一人ぼっちにさせないで……！」

「……海……」

彼女は僕の服を掴み、懇願するかのよう続けた。

「これ以上、あんな想いをしたくない……これ以上、空がないところで生きていたくないの！ たとえ、お姉ちゃんみたいに愛されなくても……同じ世界で、同じ場所で笑い合っていたいの！ ただ、空とお姉ちゃんがいてくれたら……私、私……！！！」

「……」

実感する。ここにきて、彼女がどれほど僕のことを想っていてくれたのかがわかる。……これほどまでとは思わなかった。彼女を侮っていた自分がいた。

「お願い……もう、行かないで……！ 私を……一人にしないで……」

……  
僕を掴む手に、力が抜けていくのがわかる。ずるずると下へ落ちていき、ベンチの上に彼女の手がうなだれる。

「……………」  
僕は何も言わず、彼女の隣に腰を下ろした。

「海、よく聞いてくれ」

そう言うと、海は僕を見つめた。

「……………僕にとつて、お前は大事な人だ。お前を悲しませるようなことは……………できればたくない。……………けど、それは空にしても同じなんだ。あいつを知らない世界に一人で放っておくなんてのは……………できない」

「じゃあ、お姉ちゃんを助けだしたら、一緒に帰って来て！」

「海……………それは無理だって、さっき言ったじゃないか」

「じゃあ行かないで！」

空と帰って来ないのなら行かないでほしい。行くのなら、空と一緒に帰ってきてほしい。……………彼女は、一途に願っているんだ。僕がこの世界にいるという確証たる言葉を、を放つのを。

僕は顔を振った。

「……………空を救いだしても、ここには戻らない」

「どうして？ 目的を達成したら、戻ってくるのが普通でしょ？」

「新しい目的ができたんだ。空を救いだすっていうのも目的の一つだし、他にも目的があるんだよ」

「……………それは……………何？」

海は再び俯いた。

「……………あつちの世界を助けることだよ」

夜空の下、公園の電灯だけに照らされるこの場所で、彼女の空色の瞳が揺れる。

「世界を救うなんて、そんな大それたことはできないかもしれない。無理なのかもしれない。たかが人間が数人集まったところで、世界の崩壊を望む人たちを食い止めることなんてできやしないのかもしれない。そもそも、そんな勇者が言いそうなこと、恥ずかしくて思いつかない。……こっちの世界にいたら……ずっといたら、そう思っていたらうさ。いや、滅びようとしている世界があるってことすら知らないで、自分は平穩に生きていたんだらう」

思いもがけないところから、僕は眞実を知り始めた。

「……でもな、知ったんだよ。僕たちは、知ってしまったんだ。だから、自分ができる精一杯のことをしたい。知らんぷりして生き延びるなんてのは、できない。せつかく知ったんだ。そこにいる人々のために命を懸けるのも……悪い話じゃないよ」

正直そう思える。そう思えるからこそ、海に言った。……彼女なら、わかってくれるだろうと信じてるから。

「……だから、海……」

海は顔を再び上げ、涙を流していた。

「信じてくれ」

「……空……」

彼女は何かを確かめたかのように、僕を見つめた。涙で溢れていた彼女の顔には、決意をしたような面影があった。

そして、海はゆっくり僕に抱きついた。

「……あつたかい……」

「そりゃそうだ」

海はクスツと微笑み、言った。

「#N&D' I N&D P S S C.」  
「..... S S K」

36章・狂った希望 羨望という名の執着「1」

あまり長いこといられないのだが、せっかく戻ってきたんだ。もう少し、故郷を味わいたいと思った。とは言っても、行方不明になっている僕が辺りをうるちよろするのはダメだろう。巷では、未だに僕は空をどこかに連れ去ったんではないかって言われているらしい。

さてと、どうしようか。ちゃんと和樹たちに挨拶もしておきたいんだけど、明るい中、彼らに会いに行くわけにもいかないし……。

「じゃあ、帰り道に待ち伏せしとくつてのはどう？」

「待ち伏せ？」

自宅。今日は学校のある日なのだが、海はサボったらしい。せっかく僕が帰ってきたんだから、一日くらいサボったってどうってことではない……らしい。まあ、彼女らしいと言えば彼女らしいけど。「だから、外に出るわけにはいかないだろ？　僕は　いないことになってんだから」

「たしかにそうだけど、会わないまま帰るわけにもいかないでしょ？」

「まあ……そりゃそうだ。あいつらに会いたってのは正直な気持ちだ。」

「……でもなあ……」

「それに、ちよつと変装していれば大丈夫だって」  
海はそう言っつて微笑んだ。

「……変装つて、どういう？」

「例えば、サングラスとか」

「……ありがちにもほどがあるな」

「じゃあ、付けひげ」

「……………」  
彼女が言うものは、全てありがちなものだった。まあ、ありがちなものでないと、ばれてしまいそうだが。

「もう……………じゃあどうするのよ?」

何でも否定するので、海は呆れ顔になっていた。

「携帯で呼び出すとか」

「空の携帯、もう止められてるよ」

「……………なんでだよ?」

「そりゃ、もしもない人の携帯料金払うなんてのは馬鹿らしいからでしょ」

「……………」

納得です。

「私の携帯には、進藤さんや小山内さんのは登録されていないし…」

「……………」  
「まあ、そうだな。……………ん? そうだ、修哉のは登録されてるんだろ?」

「そうだ。修哉がいれば、みんなに連絡をつけることはできる。あいつと僕の友達ってのは、ほとんどが共通なのだ。」

「あいつに頼んで、和樹たちを呼び出してもらえば……………」

その時、僕はハツとした。海の表情には、さっきまでの明るさの一欠片もなかった。

「……………空、まだ知らなかったんだね」

「……………何を?」

僕は首をかしげた。あまりいい予感はない。

「修哉くん……………のことなんだけど」

「あからさまに、海は僕と視線を合わせようとしなかった。拳動不審に、彼女の瞳が動きまわる。」

「……修哉が、どうかしたのか？」  
数秒間、空白があつてから海はうなずいた。

「……実は、修哉くん……行方不明なの」

「行方……不明？」

海の話では、3ヶ月前から姿が見えないのだという。

「どうして、あいつが……？」

彼女は首を振った。

「わからない。……でも、3ヶ月前……ある事件があつたの」

「……………？」

口にはあまり出したくない。俯いている彼女の姿がそう言っている。

「……3ヶ月前、修哉くんの家があるマンションが火事になったの」

3ヶ月前……僕が旅立つてからちょうど2ヶ月くらい経つたある日、修哉の家が火事に襲われた。あいつの自宅があつたマンションの3階部分は、ほとんどが焼失してしまったほどであつたらしい。

「……修哉くんの家からは、3人の遺体が発見された。修哉くんのお父さんとお母さん……そして、妹の咲希ちゃん……」

咲希ちゃんまで……！

「……修哉はそこにいなかったのか？」

そう訊ねると、彼女はうなずいた。

「……最悪だ。火事で死んちまうなんて……」

僕は頭を抱えた。修哉の大切な家族が、一気にいなくなるだなんて……。

「警察が言うには、死因は火事じゃないらしいよ」

「えっ？」

海は心痛な面持ちで言い始めた。……3人とも直接の死因は、刃物のようなもので切り付けられたことによる出血死……らしい。それも、包丁とかのようなものではなく、もっと大きな……そう、日本刀のようなもの。父親は首をはねられていた……。

「……な……んだよ、それ……いつたい、何がどうなって……」

僕はハツとした。そうか……わかった。修哉は、事件の首謀者だと思われているんだ。あいつ以外の家族が死んで、自宅は火事になり、あいつ自身は行方不明……。警察はあいつが犯人だと断定しているに違いない。誘拐するにしたって、修哉ではなく咲希ちゃんにするのが妥当だ。そう考えたら、修哉が犯人であると断言しても過言ではない。

「……警察は、修哉くんが犯人だって思ってる。でも、修哉くんはいない……誰にも何も言わず、どこかに……」

海は顔を俯かせた。あいつが行方不明で、犯人扱いされている。……到底、信じられない話だった。なぜなら、理由がある。

「……何が理由にせよ、修哉が殺したとは思えないな」

「え？」

「あいつは、誰よりも咲希ちゃんのことを大切にしていた。それだけにはつきりと言える」

幼い頃、あいつの両親が再婚して間もない時に、咲希ちゃんが高熱を出した。両親は仕事で家にいないため、修哉は学校を休んで義理の妹である咲希ちゃんの見護をした。あいつは渋々したわけではない。本当に咲希ちゃんのことを大切に思っていていたんだ。

妹ができた時、最初に僕に言った言葉を思い出した。

「妹ってのはいいな。……すげえ大切に思える」

屈託のない笑顔で、小学生の彼は言った。だからこそ、断言できる。咲希ちゃんを殺したのは……修哉ではない。咲希ちゃんにだけは、逆らえなかったもんな。

……けど、それと同時に思い出したことがある。それは、中学3年生くらいの頃のことだ。学校からの帰り道、僕と修哉は懐かしの公園のブランコに座っていた。

「……なあ、空」  
「ん〜？」

僕は途中のコンビニで買ったアイスを舐めながらブランコの先にある砂場を眺めていた。あの時はまだ、その砂場で空と出逢ったことなど思い出していなかった。何の気なしに、そこを見つめていた。……もしも、俺たちが歩んでいる人生ってのが何かに予め定められていたものだとしたら……どうする？」

「……なんだよ？ いきなり」  
「もしも、俺自身を選びたいと思った道が、誰かによって強制的に選ばせられたものだとしたら……」

彼は僕とは違い、ブランコに座って真下の地面を見つめていた。  
「……修哉、難しいことは考えない方がいいよ。そうやって考えすぎると、憂鬱になる」

すると、修哉はフツと笑った。

「……お前らしいよ。お前は、そもそもそんなものを信じないんだっつたな」

顔を上げて、彼は右方向にある滑り台を見つめた。

「信じる、信じないじゃなくて……なんつか、考えてもしょうがないことじゃねえの？ いくら考えたって、答えなんてのは見つかりっこないんだから」

「……」

修哉は茜空を見上げた。カラスの群れが、鳴きながら飛んでいる。……俺は誰かに……何かに敷かれている道を行きたくはない。俺

の意志はどうなる？ 俺が決意した思いがどこに行くってんだ？」  
唇を噛みしめながら、修哉は茜空を睨んでいた。

「……修哉、どうしたんだ？ 何か……あつたのか？」

あの時、修哉はいつもと様子が違っていた。

「……昨日、親父たちとケンカになつたんだよ」

「……なるほど、そのケガはそのときの……」

その日、学校で会ってからずっと気になっていたことだ。修哉の右ほほには、殴られたような傷があつたのだ。

「親父は、俺を完璧な存在にしたいんだよ」

それを聞いて、僕は小さくため息を漏らした。

「完璧、か。それは、孤独と同じに過ぎないと思うけどな……」

「……俺もそう思うよ。俺にとつて大事なのは、お前や……空ちゃん、海ちゃんと過ごしていくことだ。それこそが大事だと思ってる。そこを……親父は理解できていない」

「……親父さんも、お前のことを想ってしているんだよ。たとえば、親父さんとしても、それこそがお前のためになると……親父さんは本気で思ってるのかもよ？」

すると、修哉は偽りの笑顔を作り、「あり得ない」と呟いた。

「親父にとつて、俺はチェスの駒。俺の全てを支配し、将来の行く末の決定権を持っていると驕っている。そう、もの、としか思っていないんだ。……そんな親父に、俺に対する愛情なんてのは一切ないんだよ……」

修哉はきつぱりと言い切った。

「……でも、おふくろさんはそうじゃないんじゃないのか？」

「……おふくろ、ね……。あの人が方が憐れだよ。親父の言いなり。親父の操り人形。親父に逆らうことのできない母親。……見ていて、滑稽さ」

「……修哉……」

修哉は小さく嘲笑い、立ち上がった。

「俺は……お前たちがいればそれでいい。ただ……それだけでいいんだ……」

修哉の、最初で最後の弱音を吐いた時のようだった。これ以前に、彼が僕に何かを相談するようなことはなかったし、これ以降もなかった。

あいつが両親に対して複雑な感情を抱いていると知ったのは、この時だった。あまり、仲がいいとは思えなかった。だから、あいつはあんまり自宅に他人を入れたがらないのかもしれない。僕が行った時はいつだって、両親が外出している時だった。見たことがあるのは、いつも家事をしていた妹の咲希ちゃんだけだったもんな……。

「空？ どうしたの？」

「……ん？ なんでも、ないよ」

両親のことなら……あいつは、もしかしたら……。

「……修哉は……いないのならばしょうがない。さて、どうやって和樹たちに会うかな」

もう、修哉の話をしてもしようがない。あいつに会いたかったけど、無理なようだ。……きっと、あいつはどこかで生きている。何か考えがあつて、行方をくらましてんだ。……僕はそう、自分に言い聞かせた。

一番の親友、修哉。あいつには……会いたかった。

「だから、変装すればいいじゃない」

「またそれかよ……」

「だって、他に手がないでしょ？」

「……」

つーことで、彼女の作戦に従うことにした。考えぬいた揚句、こ

れしか方法が無かった。何も言わずに帰るのは、僕としては嫌なのだ。なんとしても、彼らに会って一言言いたい。

「私もついて行っていい？」

「……ああ」

たぶん、その方がいい。何せ、中途半端な変装をしてんだ。一人でいては怪しまれる。まあ、誰かを連れていても怪しまれそうではあるが、一人だと不安になりそうなのだ。……この町で育ったのに、不安だなんておかしな話だけどな……。

たしか、啓太郎、美香は部活をしていなかったはず。和樹はバスケット部のため、遅れて出てくるかもしれない。とはいえ、他の二人はたぶん、下校する時間はほぼ同じだ。

僕と海は下校時間に、彼らの帰りを待ち伏せした。

下校時間になると、多くの生徒がそろそろと歩いて来る。こんだけ部活していない人がいたっけな……と思うほどだった。

「そう言えば、今週はテスト週間だった。部活も何もないんだよね」  
テスト週間……そっか、この季節だもんな。中間テストが始まる……くらいだな。

「そっいや、お前は勉強しなくて大丈夫なのか？」

「私？ ……あのね、私を誰だと思ってるの？ 私は学年トップ10に入れるほどの実力ってのを知ってるくせに」

「そーでしたね。あーすごいすごい」

「何よ、その適当な言い方は！」

空色の瞳が僕を睨みつけた。

「べっつに〜」

「この……馬鹿空！！」

バチンと、海は僕の頭を叩いた。

「いってえ！ お前、付けひげが取れるだろうが！」

「うっさい！！」

フン、と海はそっぽを向いた。こいつのせいで、変装のためのサングラスと付けひげがグラグラしちゃいましたよ。

「まったく、相変わらずの乱暴女だな」

「空が変なこと言わなければ、私だって乱暴なことしないわよ」

「ハイハイ。あっちにも、お前みたいに乱暴狼藉を働く女がいるよ……まったく」

リサのことを思い出し、なんだか笑ってしまいそうだった。んなこと言ったら「うらあー！」……と、後ろ回し蹴りが来そうだ。

「あっ……海ちゃんじゃない」

とその時、誰かが海を呼んだ。その声に、聞き覚えがあった。

「小山内さん！」

それは、美香だった。こんなにも早く現れるとは思わなかったの  
で、僕は咄嗟に顔を隠した。

「あれ？ 今日学校は？」

美香はこっちに向かって来た。

「えっと……実は、サボっちゃいました」

と、海は苦笑した。

「珍しいこともあるんだね。けど、サボったのにどうしてここに来  
てるの？」

「……あ、あの……実は、ちょっと小山内さんに用事があった……」  
「なんか……不安だ。しどろもどろだと、怪しまれると思うし……」  
「私に用事？」

美香は首をかしげた。

「えっと……ちょっと、ねえ！」

すると、海が僕を手招きし始めた。目から「こっちに来なさいよ  
！」という言葉が伝わってくる。

（んだよ……まったく……）

僕は咳をして喉を整え、彼女の隣に立った。

「……？ 誰？」

「あの……実は、今日……小山内さんに、この人を会わしたくて……」

……」  
疑問点だけが美香の頭の上に乗っていた。あからさまな疑いの目が痛い……。まあ、当然と言えば当然なのだが……。

「あの……どちらさまでしょうか？」

「……………」

うーん、いざとなると何を言えばいいんでしょうね。僕は腕を組んでい唸っている、そんな僕を見ていた海が頭を叩いた。

「何黙りこくってるの!？」

「いつ……てえな! さつきから何度も叩くんじゃねえよ!」

「なんも言わないからでしょ!？」

「ちったあ考えさせろ!」

「十分考えたじゃない!」

「実際に会つと何言えばいいのかこんがらがるんだよ!」

「いくじなし!」

僕と海はギャーギャーわめき始めた。と、誰かが僕の肩をつつく。

「なんだよ!？」

僕はくるつと後ろに振り向いた。

「……………空?」

「……………」

目の前に美香が立っていた。あれ? なんで?

「……………空、下」

海に言われたとおり下を見た。僕はサングラスと付けひげが取れていたことに気が付いた。叩かれた衝撃で外れてしまったんだ。

「……………ん?」

僕は辺りを見回した。

「あの……何がどうなってるの？」

美香は未だに状況が把握し切れていないようだ。僕たちはファミレスに行き、そこで全部話すことにしたのだ。

「空……だよな？」

「当たり前じゃないか。目の前にいんのに、わかんないのか？」

「いや……なんて言うか、信じられなくて……」

……無理もないか。

「ところで、和樹たちは？」

「さつき、電話しておいた。こっちに向かっているはずだけど……」

美香はきよろきよろと見渡し始めた。すると、出口の方を見た瞬間、何かに気が付いたようだ。

「進藤、啓」

「おっす。つか、どうしたんだよ？」

久しぶりの和樹。いやあ、相変わらずですな。僕は彼らの方に向かず、とりあえず気付かれるまで何も言わないことにした。

「あれ？ 日向さんじゃない。珍しいね」

「こんにちは、萩原さん」

久しぶりの啓太郎。そう言えば、萩原って苗字だったな。

「……あり？ あんた、誰っすか？」

後ろ姿の僕を見て、和樹が言った。

「二人とも、とりあえずこっちに座って」

と、美香がご親切に言ってくれた。

「……………??」

二人は顔を合わせ、首をかしげた。そして、僕と面と向かうように美香の隣に座った。

「……………ん？」

「あれ……………」

僕の顔を見て、二人の表情は固まった。その顔が、めちゃくちゃ面白かった。

「……んん!？」

和樹は目をこすり始めた。我が目を疑ってるんでしょ。

「えっと……ええっと……」

この時ばかりは、冷静な啓太郎でさえ目を点にしていた。

「……まさか……」

「もしかして……」

二人は顔を前に出して僕を見つめた。そんなに強く見られると、照れちゃうな。

「……空あ!?!?!?!」

「んじゃ、そろそろ説明してよね」

驚く二人を見届けた美香はそう言った。

「……とまあ、そんなわけでここに戻って来たってこと」

「……………」

しばらくの間、3人は開いた口が塞がらない状態だった。

「……空が言ってることは、全部本当です。お姉ちゃんが何者かにさらわれる時、私もそこにいたから……」

海はしっかりとした口調で言った。シュヴァルツに襲われたこと、ひどく怯えていたのに……今は、それをちゃんと伝えるんだな。

「……ホントに、そんな世界が存在するのかよ……」

和樹は小さな声で言った。

「……まあ、信じてるって言ったって難儀な話だろうな。現実離れしすぎてるもんよ、実際問題」

自分で言うのもおかしい話だが。

「……信じる信じないは置いておいてさ、」

啓太郎が言った。

「こうして無事に空は帰ってきたんだ。……それを、素直に喜ばうよ」

啓太郎は美香と和樹を見渡し、微笑みながら続けた。

「お帰り、空。また会えるって、信じてたよ」

啓太郎はニコツと微笑んだ。僕もそれにつられて、微笑んだ。

「……だな。お帰り、空」

「お帰りなさい……空」

「……うん、ありがとう」

3人の微笑みを見れば、ああ……帰って来てよかったなって思える。こここそが、自分の故郷なのだと。たとえ、自分がこの世界の人間ではないとしても。

「それにしても……なんか、お前変わったな」

「……ん？」

和樹は一息をついて言った。

「うん……変わった」

「たしかに、そう思うよ」

美香と啓太郎もうなずいた。

「変わったって言っても、髪型くらいだろ？」

今の僕はミディアムくらいだ。ヴァルバとかに定期的に切ってもらっているのだが、いつの間にか肩に届きそうなくらいだ。

「そりゃそうだけど……なんつーか、根本的な雰囲気はそのまんまなんだけど……」

「どこか、芯が固くなったって言うか……しっかりしたって言うのかな」

「たぶん、責任感が強くなったんだね」

美香は頬杖を突きながら言った。

「責任感ねえ……」

自分としてはあんまり変わったつもりはない。とりあえず、自分にできることはしようとしているだけだし……。

「……なにせよ、お前が無事に生きてくれていてよかった。どっかでのたれ死んじやってんのかと思ったよ」

和樹は冗談交じりに言った。

「ハハ……まあ、実際に死にかけたけどな」

どっかの誰かさんのおかげで、太陽光線で焼け死ぬところだった。

その頃、シュレジエンのジニー王宮。

「へぶしっ！」

ヴアルバはベッドの上で、横になっていた。

「……ん……風邪かな？」

と、彼は大きくびをして、布団の中にもぐりこんだ。

「おいおい、冗談も休み休みに言えよ」

さすがの和樹も、苦笑していた。

「……ホントだよ。ほれ」

僕は服を少しだけ脱ぎ、以前ホリンにやられた肩から腰辺りまでの傷を見せた。

「ちよっ……マジかよ……」

「よく、死ななかつたね……」

男二人はともかく、女二人にまじまじと眺められるとだんだん恥ずかしくなってきた。つか、自分で脱いだんだから自業自得だ。

「……空は、よく逃げようと思わなかつたね」

美香はちよつと心配そうな顔だった。

「んー……まあ、空を救うためだ。ちよつと死にかけたからって、逃げだすようなことはしたくないんだ。全てを捨てようとしてまで

決意した心を、無くすようなことはしたくなかったしさ」

途中で投げ出して逃げようとするれば……想い出に逃げ込めば、必死に手に入れた 決意の心 を失ってしまいそうだ。

「それに……」

「それに？」

海が言った。

「……大切な仲間がいる。それだけで、僕はあそこで生きていられたような気がする。きつと、笑顔でやっていけるしさ」

「……」

「……な、なんだよ？」

なんか、目をパチクリさせながらみんなは僕を見つめる。

「いやあ、やっぱ変わったんだな、お前って」

「またそれかよ……」

僕はため息をついた。

「くっさ〜いセリフはくようになりやがって」

和樹の僕をからかう癖は、相変わらずなようだ。

「へいへい、言ってる……ったく」

僕は大きいため息を漏らし、窓の外に視線を向けた。

「そういえば、いつまでこっちにいられるの？」

「……明日には帰るよ」

そう言った瞬間、みんなの顔が止まったような気がした。

「ゆっくりしていられないってことなの？」

美香の言葉に、僕はうなずいた。

「あんまり、こちらの世界にいられる時間はないんだ」

「……なるほど、な」

和樹は腕組をしたまま外を眺めた。

「……お前は、お前がしようとしたことをするだけなんだな」

「……ああ」

「まっ、好きにするといいき。俺たちは、お前の帰りを待ってるか

らな」

和樹は微笑んだ。

「だろ？」

すると、他の二人も微笑みながらうなずいた。

そう、この笑顔があるから僕はここが 故郷 だと思っただよ…

…。

「俺たちはお前を信じてる。だから、心配なんてしないさ」

出逢えてよかった。そんな言葉が、心の底から想いとなって現れた。

36章・狂った希望 羨望という名の執着「2」（前書き）

ほんの少しだけ、本当に少しだけ性的な描写があります。  
苦手な人はお気を付けください。

### 36章：狂った希望 羨望という名の執着「2」

「……もう一つの世界って、どんな場所なの？」

夜。僕はおじさんとおばさんに挨拶を済まし（二人とも目が飛び出るほど驚いていた。すでに数度目のことだったので、僕としては慣れてしまった）、海の部屋でレイディアントの話を彼女にしていた。

「しいて言うなら……中世ヨーロッパ風かな。魔法もあるから、簡単に言えばRPGゲームみたいな世界かな」

「こ、子供が食いつきそうだね」

ちよつと呆れた顔で、海は言った。

「ハハ、そうだな。……けど、実際の魔法はゲームみたいな生半可なものじゃない。実際に見た後だと、次元のものがどれだけ現実離れしているのかわかるよ。本当の魔法は、ただの人殺しだけに使われるものばかりなんだし」

「……………」

あんなもの、誰が考えついたんだろうかって思う。たしかに、戦乱の時代には人殺しの道具も必要になるだろう。けど、何も自然界のものを操るような兵器を開発しなくてもいいのに。……使役させられている自然界のエネルギーが勿体無いと思えない。

「けど、そうじゃない部分もある」

「例えば？」

「傷を癒したり、日常生活の中で活用されることさ。ある町では、街灯の役割を担ったものもあつたし、ある都市では巨大な防壁として使用してたところもあつたんだ」

まあ、実際のところはエレメンタルを利用した結晶体を用いたものだが。

「魔法……か。世界には、本当に謎が多いんだね……」

海はベッドの上で大の字になった。

「……世界は解明されきつたばかりだと思ってたのに、私たちの知らないところで、私たちの知らない別の世界が生きていた。当然、そこでは私たちと同じような人たちが住んでいて……危機にさらされていた。どうして、大事なことほど気付かないんだろう……人間って……」

天井を見つめる彼女の瞳は、空を彷彿とさせるものだった。

「普通なんだよ、それが」

「……普通？」

彼女は上半身を起こし、僕に視線を向けた。

「人間一人が一生で知り得ることってのは、限度がある。どれほど世界のあらゆることを知りたいと思っても、たかが80年ちよいの人生で知り得るようなものじゃない。大抵の人は、本当に大事なことを知らないまま死んで行くんだろうよ」

「本当に大事なもの……」

そう言う自分でさえも、本当に大切なのは何なのか、わかっていないのかもしれない。いや、知っていたとしても、それはあくまで自分だけの 答え であり、真実。人の数だけ、真実があるのかもしれないのだから。

「……空にとつて、大事なものって……何？」

「なんだよ？ 藪から棒に」

「……訊いてみたくてさ」

少しはにかんだ彼女の顔は、どこかリサを連想させるものだった。

……なぜかわからないけれど……。

「そう、だな……」

僕は立ち上がり、海の机に腰掛けた。

「……やっぱり、お姉ちゃん？」

「……………」

彼女の方に目をやると、体を起していた海は目をそらしていた。

「空も、大事なものの一つだと思う。それと同時に、お前も大事なものの一つだよ」

「……………」

「僕はそういつた大事な……人とかに優劣は付けたくないんだよ」  
優劣をつけたって、なんになる。ただの自己満足とかにしか過ぎない。そもそも、そういつたものに優劣をつけること自体がおかしいんだ。

大切なものは大切。大事なものは大事。……それだけだと思うけどな。

「僕にとっては、自分の人生の中で支えて来てくれた人たち全員が大事なもんだよ。空は空。海は海。それぞれに対する感情は違うかもしれないけど、大事にしようとする気持ちは同じだよ。……そこんとこ、理解してくんないかな」

僕はあまりイラついた感情を出さないよう、静かな声で言った。  
毎度毎度、空と海はどうしても……なんつーか、同じようなことを言う。あれほど言うなっつってんの……。まあ、そういう性格だからしょうがないのかもしれないが。

「……………ごめん、なさい……………」

海は顔を俯かせていた。……はあ……まったく。

「お前の……いや、お前たちの悪い癖だな、そういうところ」  
僕は彼女の傍に座った。

「少しは信じてほしいな。僕はお前たちを、何よりも大事に思ってきた。もちろん、これからも」

何にも代えられない大切な二人。それは間違いないこと。

「……お前は、どうせ お姉ちゃんが連れ去られたから、空はなんとしても行くんだ みたいなことを、心のどこかで思ってたんだろ？」  
「そ、それは……！」

海は顔を上げた。瞳には、うつすらと涙が浮かんでいた。それを見ればわかる。凶星を突かれたってことが。

「いいか？ 僕はもし、お前が連れ去られていたとしても、助けに行く。誰に止められようと、大好きな空に止められようと助けに行くだろうさ」

「……空……」

泣くのを必死に我慢しているのか、彼女は唇を強く閉ざしていた。だから、さ。もうちょっと、僕を信用してくれよ。な？」

僕がそう微笑みかけると、沈んだような表情だった彼女の顔が、ほのかに和らいだように感じた。

……いつもの空だ。

たぶん、そんな風を感じてくれたのかもしれない。

「……ごめんね、馬鹿なこと訊いたりして……」

「そーいうところも、悪い癖だな」

「え……えっ？」

「すぐ自虐的になる。そーいうところ、空も海も同じだよな」

僕は彼女のおでこに指を立て、強く押した。彼女の小さな頭が揺らいだ。

「なっ……何すんのよー！」

すぐに海は僕の指をはたき、ほっぺたをつねって来た。

「いでででー！」

「この……馬鹿空！」

そして、海はそっぽを向いてしまった。

「……ったく、何度も肉体的制裁をしゃがって……」

「ふんっ」

「でも、まっ……海らしいけどな」

「……………」

僕はほほをさすりながら言った。海は僕から顔を隠しているが、どうせ赤くなってるんだろっな。

「……………ねえ、どれくらいかかるの？」

海はそっぽをむきながら言った。

「さあな……半年近くかかって、まだ奴らの尻尾辺りしかつかめていない気がするんだよな……。条約締結まで考えると、あと半年近くかかるかもしれない」

「そんなに……………」

海はしゅんとしてしまった。そりゃそうだ。あと半年も一人でいないと思うと、がんばる気力を失ってしまうものだ。

「……………なんにしても、空をお前の所に連れて戻すから」

「……………」

海は小さくうなずいた。どうも、力がない。

彼女はそれを払拭するかのように、あるいは自分を奮い立たせるように、小さく顔を振った。

「そ、そうだ。紅茶入れあげるね」

健気に、彼女は笑顔を向けた。

「いや、別にいいよ」

「いいからいいから。前に、お父さんがおいしい紅茶を持って帰ってくれたの」

海は立ち上がり、部屋を出て行くこととした。すると、ドジなのか天然なのか、海の体がぐらりと倒れ始めた。

「ちよっ……………！」

僕はとっさに、海の体を抱えた。しかし、そのまま僕と海は床に倒れてしまった。海は仰向けになり、僕がその上に倒れこんだ。

「いってえ……ったく、お前な……」

「ご、ごめん。長いこと座ってたもんだから、足がすくんじゃって……」

海は思わず、苦笑していた。

「なんだよ、まったく……」

僕は自分が海の上にいることに気付いた。同じ瞬間、海も気付いたようだった。海は少し顔を赤くし、何も言わなくなってしまった。

「空……」

直感した。海は、自分が何をされてもいいと思っっているはず。何をされても……？ それは……海は目を瞑った。ほほを赤くして。

望むままにすればいいだろ？

体の奥で、小さな「メーデー」が鳴る。心が、肉体が畏れている。

この、声は……！

耳をすませてみる、お前の奥底の言葉を

お前は……あの時の……！

いちいち思い出す必要性などない  
さあ、お前自身の言葉に従え

まだガイアにいた頃……僕の頭痛とともに襲ってきた謎の声。優しい女性の声とは違い、暗い……暗い深淵の声。そして、ルテティアで僕を襲った……あの声！

お前……誰だ！？ 誰なんだ！！

おいおい、俺はお前だよ。それ以外のなんだって言うんだ？

違う！ お前は僕じゃない！

どうして、そう言い切れる？

だって……今しゃべっている僕が僕だ！ お前がしゃべっているようなセリフなんて考えていない！

ハハ、屁理屈だな

ただ単に、お前が聴こうとしていないだけさ

なんだと……？

俺は何度もお前を呼んだ  
しかし、いずれもお前への直接アクセスになるものではなかったが

何を……言ってる……？

「空？ どうしたの？」

僕はハツとした。目の前で、海の頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいた。

お前は自分の意思に反するの？

さっきから何だ！ 僕に、何の用だ！？

いちいち吠えるな

さあ、その女を犯せ

「なっ……何言ってるんだ！？ てめえ！！！」

僕は思わず、天井に向けて声を放った。海の体が、驚きで一瞬動く。

「ど、どうしたの？」

「海……お前には、なんにも聴こえないのか？」

海は頭をかしげた。

「……？ 別に、何も聴こえないけど……」

海には聞こえていない……ということは、やはり……

そう、お前という存在にだけ聴こえる声さ

お前……一体何のつもりだ！？ なぜ僕に語りかけてくる……！？

お前が自分の意思に反しようとしているからだ

俺は、お前自身が望むことを告げているだけだぞ

「僕自身が望むこと、だと……？」

なんだよ、それ。わけわかんねえよ……！！

「ねえ、どうしたの？」

海は困惑していた。だが、僕はそれに気がつかず、天井を睨みつけていた。

お前が望むもの

それは、お前を満たしてくれる存在さ

一体、なんのことだ……？

理解力に乏しいようだな

その声は、僕を鼻で笑ったような気がした。

その女は、お前になら、何をされてもいいと思っている  
それだけ、お前にほれ込んでいる。なぜ、拒む必要がある

？

お前に、そんなことを言う権利はない！ 僕は……そんなことなんて望んじやいない！！

違うな。少なくとも、その女は望んでいる

さっきの表情、見てなかったのか？

あれは、待っている顔だ

んなわけないだろ！ 海も……僕も、そんなこと望んでいない！！

いい加減、素直になれよ

お前が求めている女は、助け出せるかどうかわからない  
いや、もう生きているかどうかさえわからないのだぞ？

どうしてそう断言できる！ 空は……生きてる……！！

貴様こそ、なぜそう断言できる？  
確証を得たのか？

不幸な結末を想像するより、希望のある未来を想像したいからに  
決まっているじゃないか！！ じゃないと、僕は……！！

ククク、くだらん

くだらないだと！？

非現実的なんだよ、お前は

生死が定かじゃない女より、目の前にいる女にしたらどうだ  
？

黙れ！ 僕は、空を愛してる。それは偽りよのない真実だ！！

違うな。貴様は、ただそうだと思っ込んでいるに過ぎない

僕には確かな記憶がある！ あいつと初めて会った時……僕はあ  
いつに惚れたんだ！！

なぜ、それが自分の 正しい記憶 だと思っているのだ？  
なぜそれが、思い込みによる偽りの記憶ではないかと思わな  
い？

てめえ……！！ 僕の記憶は、僕が都合のいいように作ったもの  
だとしても言うのか！？

そうかもしれないということだ

どちらにせよ、お前は望んでいる  
今、この場にいてもしない愛する女よりも  
自分を純粹に愛してくれる女を、その手で抱くことを

違う！！ それ以上言うな！ それ以上……！！

認めてしまったらどうだ？

これ以上、貴様の奥底にある 言霊 を無視することはでき  
まい

黙れ……黙れ！！

あの時、『俺』を縛り付けていた 楔 は引き裂かれた  
古の時より紡がれし、忘却の怨嗟と砕け散った天使の歌声  
貴様にも聴こえるのだろうか？

「空？ 空？」

……！！  
僕を小さく揺らす彼女の手。世界が揺れる。ダメだ……ダメだ……

さあ、お前の手で穢せ

たとえお前に汚されようと、その女は受け入れられるさ  
愛する人が、己の恋敵より先に自分を抱いてくれるのだから

「違う、違う……！！ 僕は……僕は……！！」

「ねえ？ どうしたの？ 空！？」

海は必死に僕へ呼びかけている。僕は頭を抱えた。

それ以上無理していても、すでに貴様の 結界 を破壊して

いるのだよ

お前の 真の望み に、身を委ね  
その女を犯せ

僕はそんなことはしない！

するんだよ。それがお前の望んだことなのだから

しないつつてんだろ!!!

己の望みに従い、奴を穢せ  
その手で、徹底的に

「黙れええ!!!」

僕は声を張り上げた。大声が、女性の部屋に響く。

「そ、空？」

「うるさいうるさいうるさい……!!」

僕は『奴』の声が聞こえないよう、耳をふさぎ、大きな声を撒き  
散らして聞こえないようにした。

無駄だ。お前は俺。俺の声を妨げることなどできん

僕はお前なんかじゃない！ いい加減にしろ!!

カードの表と裏、鏡の内と外。それが、俺とお前だ

頭がガンガンする。まるで、酒を飲んで二日酔いになったようだ。

「ね、ねえ、空？ 大丈夫？」

海の声が、何度も僕を呼びかける。

本能に、欲望に従うことは悪いことじゃない  
生命とは、そういう風にできているんだからな

僕は、そんな醜い欲望なんてものは抱いていない!!

必ずしもそう言い切れるのか？

お前は、自分のこと全てを把握しているつもりか？  
だとしたら、お笑い種だな

俺という存在さえ認識できないお前が、どうして己の欲望に  
反せよう？

黙れ……黙れ!!

情弱な貴様では、俺を抑えることは敵わないんだよ

「空？ 空？」

「うるせえつつつてんだろ!!」

「!!!!!!」

海は自分に言われたのだと思い、後ろへ下がった。

「ち、違っんだ、海。お前に言ったんじゃ……くっ!!」  
激痛が走る。頭の奥で、何かが……何かが……!!  
あまりの痛みに、僕はうずくまった。

清流を流れる木の葉のように、己に従え

獣となってそいつを犯せばいい

僕は獣なんかじゃない!!

どうして逃れる必要がある？

自らに従うことは、別におかしいことではない

自分に従うだと？ 僕は、海を犯したいとは思っていない！！

この世に存在する生命が、己の本能に従うことは普通なのだ

それに、俺がお前である以上、俺はお前の全てを知っている  
のだからな

全て……だと？

だからこそ言えるのだ

その女を犯せと

違う！ 僕は、僕は……！！

やめる……やめてくれ……！！

やめて……く、れええ……！！

永遠とわの礎となれ

セヴェス

僕……は、誰………？

その瞬間、自分の何かが砕け散った。大切に、大切に秘密の宝箱の中に入れてあったガラス細工の宝石が、夜空に輝く星たちのように、小さく砕けてしまったかのようなようだ。

「そ、空………？」

天井を見上げ、微動だにしない僕を彼女は見つめ、名を呼ぶ。すでに、僕は「空」でなくなっていたのに。

「………？」

僕は彼女をベッドに投げ飛ばし、仰向けにさせた。

「きゃっ………！　そ、空………？」

僕は彼女の手首を掴んだ。海は掴まれている手をほごごとと暴れるが、この時の僕の握力は自分でも信じられないほど強かった。

「ちょ、空………　やめ………　やめて………！！」

海の言葉に耳を貸さず、僕は自分の手で、海が着ていた服を引きちぎった。

「や………　やあ………！！」

欲望に体を預けよ

奥底からの声が、どんどん近くなつてゆく。

海のブラジャーを外し、スカートを引きちぎった。彼女の小さな胸が、晒し出される。そして、僕は彼女の下着を力任せに引き裂く。

「空………？　そこは………！！」

海は言葉では拒んでいるものの、抵抗する力があまり感じられない。

八八八八八八

ハアーハハハハ　　！！

笑い声が聞こえる。誰の笑い声だ？　自分か……？

僕は海の股に手を入れた。彼女は僕の手を止めようとするが、無駄だった。

「そ、空……やめ……あっ！」

海の体が少しだけ反応する。電気が走ったかのように。

「や……あぁっ！！！」

さらに彼女の体が動く。

「そ、ら……」

僕を呼ぶ声に反応し、僕は彼女の顔を見た。海は……震えながら少し涙を流していた。

ほとばしる。小さな亀裂が、僕の記憶の断片に。

やめるお！　そいつには……そいつには手を出すな！！　罰なら、俺が……！！

残念だったな、リーベリアに帰れなくて、さ。

ハハハハハ！　こうやってやりゃあ、もう脱走なんて考えねえ  
だろお！？

頼む！　もうやめてくれ……やめてくれええ！！！！

自分の運命を呪え、　ン。お前は、一生ここで……

……ぐっ……がああああああああ！！！！

死ねえええ！！！！！！

真っ赤な景色が、僕の視界を覆う。

それと同時に、何かが砕ける。

何をしているんだ？　僕は……！！

……狂おしいほどに、何かを愛せるといつのか……？

僕は彼女の陰部に触れている手を止めた。指先が濡れている。

「……いいよ、しても」

小さく、かすれた声で海は言った。

「私は、空になら何をされてもいいから……だから……」

ナンデソンナコトイウンダヨ

コワレル

スベテガクダケテキエテシマウ

ボク………ハ………

その瞬間、僕の頭の中である映像が流れた。そこには、白いローブを羽織った長い銀髪の女性と、聖職者のような格好をした青い髪の男性がいた。その2人は、僕に何かを呼びかけている。

ジエ・レル・ヴェスナ・セスタ。悠久なる精霊の灯火よ……

我を護り給え。……いい？ これは、あなたを守るための言葉なの。不安になった時などに、思い出して言うてみて。きっと、あなたたちを守ってくれるから……

きっと、お前たちを護ってくれるから。

僕は無意識に、言葉を綴った。小さな小さな宝石の欠片を手繰り寄せ、元の形に戻そうとするかのよう。

「ジエ・レル……ヴェスナ……セスタ……悠久、なる……精霊の、

灯火、よ……我を……守り、給え……」

何？

これはまさか　　！！

すると、体を覆っていた不思議な呪縛から解き離れたような感じがした。体が、軽くなった。

僕は、ようやく冷静になれたような気がした。目の前に、服と下着が引き裂かれた、裸体の海の姿があった。僕を見つめる瞳には、心配と不安、恐怖と困惑……そして、涙が浮かんでいた。

「う、み……僕は……僕は……は……」

視界が暗転する。グニャグニャと、僕の世界を支える全てのものが砕け、四方に散らばってしまう。

僕は目の前が真っ暗になり、どんよりとした暗闇の中へと落ちて行った。

暗闇の渦の中で、誰かの言葉が聞こえる。どんよりとした黒い光と、白い光の……話し声……。

「まさか、貴様が直々にお出でになるとはな」

「……………」

黒い光は、白い光に語りかけている。その度に、小さく揺れている。

「それほどまでに、大事な器か？」

ほくそ笑む黒い光。

「……そうだな。お前にとっても……私にとっても、な……」

この声は……クロノスさん……？

「ここは退け」

「……今ここで、食い破ってもいいんだがな」

黒い光は小さく笑った。

「それはお前の本意ではなからう。紡ぐ時に紡ぎ、死すべき時に死ぬ。それが呪縛に囚われた者の……理に反して生きる我々の掟ではないか？」

「くだらん……呪縛だと？　そもそも、俺は貴様と違って時の理を反古にしたわけではないんでな」

「……」

「まあいいだろう……一先ず退いてやる。今日は働きかけすぎた。

結果、奴の精神の基盤がこれ以上、脆くなってしまっても困るしな」

「……お前自身の力も、未だ聖域に囚われたままであるう？」

「ふん。人一人、我が膝下に敷くのは容易だ。さっきも言っただろう？　食い破るのは今でもできると……」

「……」

「そう身構えるな。お前の相手も、いずれしてやるさ。……この堕ちた者どもの聖域ではなく、ちゃんとした物質世界でな……」

そして、黒い光は笑い声を響かせながら、どこかへと消えて行った。

目を開けると、見慣れた天井がそこにあった。

ここは……僕の部屋か。数ヶ月ぶりだ。けれど、どこかほこりっ

ばい匂いがする。長いこと掃除していない様子だ。

上半身を起こし、窓から外を眺める。懐かしい青空が広がっている。レイディアントとガイアの青空はあまり変わらない。けれど、それでも二つは違う世界なのだ。本能が告げている。

秋の陽気とでもいえようか、太陽の光が差し、部屋は少し暖かい。太陽の位置から見て、すでに朝ではない。僕はすぐさま時計を探し、時間を確認した。……10時46分。あと数時間しかないじゃないか！

しかし……いつ寝てしまったんだろう？ たしか、海と一緒に……

……ハツとした。

僕は海に襲い掛かり、服を破いた。

あれが自分とは思えない。自分だと信じたくない。けど、あれは自分だった。どこか、冷静な自分がいた。

ステファンに殺されかけた時に聴こえた、あの声。どうして、昨日聴こえたんだろう？ どうして、呼びかけてきたんだ？

あいつは、『俺はお前』だと言っていた。あのひどいことを考えるやつが僕？

僕は顔を振った。

そんなわけない。あれは僕なんかじゃない。

そうだよ、僕はあるなことを考えない。きっと、海を襲ったのは『あいつ』が体を操っていたからなんだ。でなければ、あれは夢なんだ。

そうさ。僕は海にあるなことをしたいとは思っていないかったし、しようとも思わなかった。だから、あれは僕じゃない。

僕はベッドから降り、1階のリビングへと向かった。リビングには、母さんが忙しく動いていた。専業主婦なので、洗い物などが

大変なのだ。その中に、海の姿が見えた。海は、母さんの仕事を手伝っていたのだ。

「あら、空、おはようさん」

母さんは僕の姿に気付くと、朝の挨拶をした。それに海も気付き、「おはよう、空」と言った。

「あ、ああ、おはよう……」

自分の声が小さくなった気がした。昨日のこともあり、海の姿をまともに見ることができない。

「あんた、13時過ぎには行かないといけないんだろ？ 準備とかしなくていいのかい？」

「そうだな……母さんの飯を食ってから行くよ」

「……しょうがないわね。ちよっと、待ってなさい。すぐに作るから」

母さんは台所に向かった。いつも見ていた風景が、今では特別なものに見える。

「……空」

海がおずおずと、僕の前に立っていた。僕は小さく慌てて、視線をそらしてしまった。

「う、海。そ、その……ごめ」

「いいの」

海は僕の言葉を遮った。謝ることを知っていたかのように。

「いいの。あの時の空は……別人みたいだった。違う人間に見えた」

「……………」  
彼女は小さく顔を振った。

「空は悪くない、悪くないよ。私は、信じる。……それに、さ」

海は後ろへ振り向き、僕に背中を見せる格好になった。

「変な話だけど、私は嫌じゃなかったよ。……空にされるのなら、何をされてもいいし……から……」

「……………」

「そういうことを言うなよ……。」

じゃあ、僕が死ぬと言えば死ぬのか？

違うだろ？ お前は、なんだかおかしいよ……。」

そう言っただけでやりたかった。けど、その言葉を言えば、きっと海はまた泣くだろう。……もう泣かせたくはない。僕は、その言葉を胸の奥へとしまいこんだ。

「と、とにかくさ、おばさんの料理食べて元気だしなよ！」

海ははつらつな笑顔を見せた。しかし、僕はわかった。理解した。海は無理をしている。『嫌じゃなかった』なんて嘘だ。きっと、怖かったはずだ。あの笑顔がそう告げている。

……………どうして、強がるうとするんだろう……………。

「海、待てよ」

僕は海を呼び止め、腕を掴んだ。

「……………すまない。謝っても、許されないけど……………」

「い、いいって言ってるじゃん」

健気な笑顔。その奥に、傷ついた心をしまい込んでいる。

「良くないよ。……強がらないでくれ」

「やめてよ……………。そんなこと言われると、また……………泣きそうになっちゃうから……………」

海は手で目の辺りを拭いた。

「おーい、海ちゃん、手伝ってくれろ？」

キッチンから母さんの大きな声が響いた。

「は、はぁーい！」

海はバタバタと足音を立たせながら、キッチンへと向かった。

僕は……何をしているんだろう。

約10分後、料理が完成した。と言っても、朝を少し過ぎた時間帯なので、がつつりしたものではなく、あっさりとした朝飯みたいなものだ。

メニユーはハムを混ぜたスクランブルエッグと、ウィンナー、味噌汁、そして日本人の主食キング・オブ・フード、ご飯！

「ご、ご飯……」

「ど、どうしたの？ 空。そんなにうれしいのかい？」

母さんは苦笑いしながら言った。

「だってさ、あっちの世界にはご飯がないんだよ！ あるのかもしれないけど、見たことないんだ。だから、もう米が恋しくて恋しくて……」

僕はご飯にかぶりついた。この味、忘れかけた米の味！ やっぱし、日本人は米がないと生きて行けられないよ、ホント。

「そんなおいしいそうに食べられると、私も作るかいがあるわ」  
母さんが僕の食事姿を見ながら呟いた。

「な、なんだよ？」

「父さんも、あんたみたいに食べてくれれば、ちょっとはがんばる気持ちになるんだけどねえ」

そう言うと、母さんは大きなため息をついた。

「いつもはどうなの？」

海はクスクス笑いながら言った。

「あの人は……食べて飲んで、ゲップ。最後におならしておしまい」  
我が父ながら、情けない……。しかも、その姿を容易に想像できるところが、なんだか悲しい。

「八八、おじさんらしいね」

海は笑顔だった。……さっきの不安な笑顔とは違う。少し、ホツとした。

僕はカップラーメンができない間に、食べ終わってしまった。

「ごちそうさまでした。おいしかったです」

僕は丁寧に一礼した。その姿を見て、母さんと海は固まってしまった。

「……空、あなた、礼儀もよくなったのね」

「……良くなっちゃ悪い？」

「そういう意味じゃないわよ。ま、私としては戸惑うけど」

「どうして今更うまくなったの？」

海が顔を乗り出して訊いてきた。

「どうしてって……仲間で、すごく礼儀正しい女の子がいるんだ。

その子につられてしまったということもあつたし、王宮に行ったりするからなあ。自然と、そういう技術が身に付いたのかもね」

「王宮……想像できないわねえ」

「そりゃそうだ」

「……あなた、嫌味な性格は変わってないのね」

「そう？ 僕的には気に入ってますけど」

「あなたね……」

13時前。母さんと海は、その扉のところまで来てくれるそうだ。

ここから、山頂までは約20分。十分、間に合う。

今日の天気は快晴。秋晴れといった感じか。

「……この世界の空も、きれいだな」

僕は上空を見上げながら呟いた。

「あっちの世界はどんな空なの？ ……空のことじゃないからね？」

「わぁーってるよ」

海が頭をのぞかせて訊ねた。

「同じだよ。ただ、この世界みたいにビルなんて建っていないから、空が広く感じるよ」

「ビルがない？ そりゃまた退化してるのね」

「退化っていうか、まだ進歩してないんだよね……」

けど、考えてみたら、同じ世界からある時に分離して、同じ時間を歩んできていたとしたら、同じ時間量を生きているはず。なのに、2つの世界の文明の差っていうのは、ちょっと疑問を感じるところだ。

「進歩していないんだったら、環境問題なんて心配しなくていいわね」

「じゃあ、あつちの世界ってすごい自然がきれいなのかな？」

「この世界よりは百倍きれいだよ、ホント」

「すごいね、私も……いや、やめとこ」

海は顔を振って、その言葉をかき消した。

辺りを懐かしみながら、僕たちは山頂へ向かった。

予定通り、13時3分前に、山頂に到着した。古びた暁の門は、静かに佇んでいた。

「……変わってないね」

海が扉を眺めながら呟いた。

「ここから、全てが始まったような気がするね」

「……そうだな」

秋風が緩やかに、僕たちを包んだ。故郷の香り。……これを嗅ぐことができるのは、当分先になるかもしれない。

「空、気をつけるんだよ。風邪引かないようにね」

母さんは僕が遊びに出かける時のようなセリフを言った。

「……もうちと心配してる素振りをしてくれませんかねえ」

僕はちよっとふざけながら言ってみた。

「これでも、かなり心配してるんだけどねえ」  
「ふん、そうですか」

……母さんの気持ちは理解しているつもりだ。だからこそ、これ以上深く訊く必要もない。

「空……あの、さ」

海は緊張した面持ちで、何かを言おうとしている。

「どうした？」

「……お願いがあるの」

海は顔を上げ、悲痛な面持ちで僕を見つめる。

「帰ってくるって約束して」

海は瞳を潤ませていた。泣きそうながらも、絶対に泣かないような瞳だった。

「ああ、約束する。ホラ、指切りげんまんしようぜ」

「ちよっ……何よ、それ」

海は思わぬことに、当惑している様子だった。

「指切りに決まってるじゃんかよ。ホラ、小指出しな」

僕と海は指切りげんまんをした。子供の頃、口約束を守らせるために何度も何度もやっていたっけな……。

「……よし」

彼女と指を離し、小さく微笑んだ。なぜか、海はムスツとした様子だったけど。

「絶対に……絶対に帰って来てよ。約束だからね？」

彼女は念を押すように言った。

「わかってるよ。約束を反古にはしませんよ」

と、僕は笑顔で海の頭をなでてやった。

「な、何すんのよ!!?」

「まあ、ちよっとした気遣いだよ。僕なりの……」

「……………」

海は返答もせず、俯いてしまった。

「……空、母さんとも約束してちょうだい。生きて帰って来るって死なずに、空ちゃんを助け出すって」

母さんは海の横に来て言った。

「わかっている。ちゃんと空を助けだして、やるべきことをやって……帰って来るよ」

「……いいかい？ 一番の親不幸は、親より先に死ぬことなの」

「縁起でもないことを……」

思わず苦笑してしまった。まあ、母さんは母さんなりに心配してるっていう証拠なんだが。

「何にしても大丈夫だよ。あつちには仲間たちがいるしさ」

志を共にする仲間たちがいるから、僕は諦めない。ここに、僕を待っていてくれる人たちがいるように、あつちでも待っていてくれる人たちがいる。そう、僕たちは独りじゃない。

「よし！ 張り切って行って来なさい！」

母さんは大きな顔を微笑ませた。

「母さんが一番張り切ってんじゃん」

「いいから、あんたも気合入れなさい」

「りょーかい。……じゃあ、行くよ」

名残惜しくて、なかなかその言葉が出てこなかった。こういうことも、あるもんなんだな……。

「……行ってらっしゃい」

「空ちゃんを取り返してきなさいよ！」

海と母さんの激励に、僕は笑顔を見せた。こんなことまで言われたら、がんばるしかない。いや、がんばるのは当たり前。絶対に帰ってくるんだ。それを、守らなきゃな。

僕は門に近づき、指先で触れた。門は光り輝き、レイディアントへの扉を開いた。そこから、少し強めの風が吹き出てくる。

「待って！」

振り返ると、海が今にも泣きそうな顔をしていた。

「……海？」

「私、空のことが好きだよ」

彼女は笑顔で言った。涙を浮かばせながらも。

「大丈夫。空の気持ちは……わかってるから。でも……それでも、私は空が好き。だから……待ってる。空とお姉ちゃんが無事に帰ってくるの……待ってるから！」

そう言い切った瞬間、彼女のほほに一筋の涙が流れて行った。

お前は、あんなことをした僕を信じてくれているんだな。あんな、ひどいことをしたっていうのに。

今回の帰宅で、彼女がどれほど想ってくれているのか……ようやく理解できた。

「……母さん、父さんによろしく」

「ハイハイ、わかってるよ」

母さんは変わらない笑顔を見せた。

「海……元気だな」

「ば、馬鹿！ そんな今生の別れみたいに言わないでよ！」

さつきとは違い、いつもの怒声っぽい感じで彼女は言った。

「別にそういうつもりじゃなかったんだけど……ま、行ってくるよ」

「さっさと行っちゃえ！」

「ハイハイ、わかりましたっつての。まったく……」

僕はぶつぶつ言いながら、淡い光の中へ足を進ませた。入る瞬間の時だけ、少しだけ息苦しかった。

これで、しばらくさよならだな。

和樹、啓太郎、美香。

また帰ってくるから、そんな時はよろしくな。

修哉……………きつと、お前はどこかにいるんだよな。今度帰って来たら、一緒にいつかの約束のとおり、世界を旅して回りたいな……………。

しばらくの間、みんなを護ってくれよ。

……………樹……………

空が門に入った後、光は一瞬だけざわつき、消えた。後に残ったのは、静かな森の音と、海たちだけであった。

「……………無理しなくてもいいのよ、海ちゃん」

空の母は、そっと海の肩に手を置いた。

「……………うん。わかってる、わかってるよ。……………わかってるけど……………」  
海はその場に座り込んだ。

「でも……………どうして空がいる時だけ……………強がっちゃうんだろつ……………」

小さく自分を嘲笑った。自分でも、なんでそうしたのかわからず……………に。

「本当は……………行ってほしくない……………。行ってほしくない……………!!」

体を小さくして崩れた海を、空の母は優しく抱き締めた。

「離れたくない……………離れたくなかったのに……………!!」

……………うん……………」

彼女は優しく背中をさすった。それによって、海がなんとか……  
なんとか抑えていた、湧き上がるものが溢れ出てきた。

「やだよ……」

秋の空に、かすれた自分の声が漏れる。風に乗って、淡い言霊と  
なつて世界に溶け込んでゆく。

「空………空ア!!」

空色の瞳から零れ落ちる彼女の想いの欠片たちは、枯れ葉で覆わ  
れた山頂に沈む。

遠くて近い世界……

どうして、私はこんなにも……こんなにも……

あなたが好きなの？

苦しいよ………こんなの………

「……………」  
空の母は、息子が消えて行った門を見つめた。

……人に………たくさんの人に愛されて、本当に幸せな子……  
だから、帰って来なさいよ。あんたは、私たちの大切なバカ息子  
なんだから。

血が繋がっていらなくても……ね。

### 37章：呪われし血 記憶の断片、太古の主とは

光の中を漂っていた。僕は目を閉じ、ユートピアへ到着するのを待っていた。光が和らぎ、草原の香りがしてきた。僕はゆっくりと目を開き、辺りを見渡した。目の前には、ミリアとクロノスさんがいた。

「…………お帰り」

「おつす、お帰りなさい」

2人とも、どこか笑っているように見える。ミリアにいたっては、それが普段の自分なんだろうけど。

「どうだったかな？ 久しぶりの故郷は」

「そうですね…………知らない間に、いろいろなことが起きていました」  
「そうか…………」

クロノスさんは目を閉じ、考え事を始めた。

「あの…………聞いてもいいですか？」

「ん？」

僕は、今回のことでも聞いてみたいことがあった。

「…………あなたは何者なんですか？」

「……………」

クロノスさんは目を開け、僕を見つめていた。紺碧の瞳が、全てを見透かしているようにも感じた。

「あなたは次元を安定させたり、この空間に入れたり、テレパシーを遅れたり、そして…………僕の心の中に来たりすることができる。…

…クロノスさん、あなたは一体、何者なんですか？」

僕は目をそらさず、問うた。クロノスさんは頭をポリポリとかい

た。

「フム、そうだね……私は、君と同じような存在とでも言えようか」  
「僕と、同じ存在……？」

「君は、あまりに大きな力を保持するがために、非常に不安定な存在だ。君の持つエレメンタル……『聖魔』。もう知っているとは思うが、『聖魔』は2つの側面を持つ。破壊と創造……君は生まれながらにして、人々から神と恐れられる力を持っているのだ」

「……神の力つてことですか？」

馬鹿げている　と、昔の僕ならば言っただろう。けど、自分の中の　あれ　を目の当たりにした今、それは現実のことなのだ……はつきり言える。

「君たち、人間の言葉を借りればな。……私はそれに似た力を持った、一人の人間だ」

「人間……？」

正直、怪しいのだが。僕の疑心暗鬼の視線に気が付いたクロノスさんは、小さく苦笑いした。

「おいおい、本当だぞ？　私が昨日のように君の意識の中に入る込むのは、リサもできる技だ」

リサにも？　一種のテレパシー能力……みたいなもんかな。

「信じてもらえたかな？」

「え？　あ……はあ……」

僕の曖昧な返事に、クロノスさんはニコツと笑った。なんか、うまく言い逃れられたような気がしなくもないのだが。

クロノスさんは笑顔を消し、真剣な眼差しで僕を見た。

「さて、重要な話へ変えようか。……リユングヴィについてだ」

リユングヴィ。クロノスさんはあのまどろんだ意識の中で、僕をおかしくさせる声の主を、そう呼んでいた。

「なんなんですか？ リュングヴィって」

「……リュングヴィは、レイディアントでは『破壊神』という伝説が残されている。ティルナノグを滅ぼしたのも、リュングヴィの仕業だとも云われた」

けど、ラーナ様によると、ティルナノグを滅ぼしたのは最後の天帝だと言っていた。

「そして、リュングヴィは『聖魔の神剣』ティルフィングを携えた、初代教皇アイオーンによって倒されたとされる。しかし、それは後世の人間による作り話だ」

事實は、こうだ。

ティルナノグが成立するよりも遙か昔……現代の人々によって創世時代 と呼ばれる時代があった。これは数万年にも及び、その末期には 神国戦争 というものが起きていた。何十ヶ国も存在する国々は、それぞれ覇権を狙って争い合っていたのだ。その戦乱は数百年もの間続き、大地は荒れ果てていった。

そんな中、ある人物が現れる。どこからともなく現れた 英雄 は諸国を平定し、世界を支配する巨大国家を築き上げた。

彼の名は リュングヴィ

彼こそが、古代魔法王朝ティルナノグの開祖なのだ。ティルナノグ皇室は代々リュングヴィの能力を受け継いでおり、常人を遙かに超える エレメンタル を保持していたのだそうだ。

「建国されて約8000年後、第322代天帝ユリウスⅡフェムトⅡヴェルエスが即位する。今から、約2000年前のことだ」

「…………ヴェルエス…………」

ヴェルエスとは、ティルナノグ皇室の家名なのだという。じゃあ……僕はティルナノグ皇室の血を受け継いでいるということか……？

「彼は後継者争いの中、若干7歳で叔父の傀儡天帝として即位した。ユリウスはそのためか、権力のために争い合う、肉親に幻滅した。つまり、汚い人間の欲望を知ってしまったのだという。叔父による世界に対しての恐怖政治によって、ティルナノグの上級民族、つまり天空人と呼ばれる者たち以外は、まさに泥をすすする生活を強いられていたという。」

「ユリウスは地上の民に同情した。同時に、圧政を敷く肉親を恨んだ。自分が天帝なのに、その名を借りて好き放題な悪行を行う。心優しい子供天帝は、クーデターを起こそうとした」

しかしそれは失敗に終わり、ユリウスは廃位され、地上へ捨てられた。そこで、彼は地上の民から、天帝だったということと今までの怒り、憎しみをぶつけられた。殺されはしなかったものの、彼にとっては想像できないほどの苦しみだったのだろう。

「…………その中で、ユリウスは同情していた地上人に対しても、憎悪を抱くようになる。天空人、地上人、つまり世界中の人間を憎むようになり、世界に絶望し、彼は覚醒してしまう。至上天帝リユングヴィの持っていた、聖魔…………『破壊』の力　ロキの力を」

「ロキの力…………？」

クロノスさんはユートピアの草原を見渡した。どこか、哀しいものにも見える。

「聖魔の力の中の『破壊』にあたるのが、『ロキの力』なのだ」

反対に、『創造』に当たるのが『バルドルの力』なのだという。どちらも、ソフィア教典にある神々の一人だ。そこから由来していたのかもしれない。

「…………ユリウスはその強大な力をもって、ティルナノグを滅ぼし、地上を焼き尽くした」

彼の憎悪、受けた痛みは、あらゆるものを塵にってしまった。天

空人、地上人を見境なく虐殺したのだという。

「しかし、ユリウスは自分の弟に倒されることになる」

「自分の弟？ 肉親は、殺されたんじゃないやあ……」

そう言うと、クロノスさんは小さく顔を振った。

「ユリウスは肉親の内、弟を含めた数人だけは殺さなかった。……それは、彼らに対する愛情があったのだろう」

ユリウスの弟は兄と仲が良く、共にクーデターを起こした。それが失敗し、2人は一緒に地上へ捨てられていた。弟は何があるかと、兄と一緒に生きていくことを決意し、兄を励まし続けた。いつも傍にいてくれる弟を、兄は信頼していたのだ。

「……弟は、暴虐の限りを尽くす兄を止めようと決心する。たとえ兄であるうと、全てを破壊し尽くすことは許してはならないと思っただろう」

天帝の弟。彼こそが……

「弟の名は『アイオーン』……初代ソフィア教皇だ」

彼も兄ユリウスと同じように、聖魔の力を継承していた。世界を護ろうと、生命を助けようとする彼の想いは、『創造』の力である『バルドル』を呼び起こさせる。彼はティルナノグ皇室の宝剣ティルフィングを手に取り、兄であるユリウスと闘った。そして……兄を殺すことにより、闘いは終わった。

「しかし、アイオーンはユリウスを完全に消滅させることはできなかった。ユリウスの中の、強大な力に阻まれてな」

アイオーンはユリウスの肉体を消滅させることはできたが、その『力』だけは消滅することができなかった。だから、その力のある場所に封印したのだという。

それを解く鍵こそが、ソフィア教典に載っている『3種の神器』なのだ。

聖剣、聖杯、聖玉……全てティルナノグ皇室に伝わりし宝物であり、アイオーンはそれらを鍵として仕掛けを施したのだ。

聖玉は聖剣を覚醒させ、聖杯は特殊なエレメンタルで、その機能を解除するようになっていた。それに必要なのが、永遠の巫女。ティルナノグ時代に造られたエレメンタルを保持する女性たちだ。

「……そして、アイオーンは荒れ果てた大地を歩き、人々を救済した。結果、後世の人々によって初代教皇と呼ばれるようになった。彼の血を受け継ぐ者たちが、今の教皇家なのだ」

だからこそ、教皇家にはリユングヴィの力が受け継がれているのだ。だが、ここで疑問が一つ浮かぶ。

「……でも、あなたは『あの声』の主のことを、リユングヴィと呼んでいましたよね？ リユングヴィは1万年も昔に死んだ……はずです」

リユングヴィは教皇家・ティルナノグ皇室の祖。1万年前の人間が、どうして僕の中にいるのかわからない。

クロノスさんは一息をつき、言った。

「リユングヴィは、お前たち……全ての子孫に息衝いている。自分の力を使うに相応しいのかどうかを見極めるために、な」

「じゃあ、あの時、僕は試されていたってことなのか……」

僕は自分の胸に手を置いた。あいつの子孫だから、あいつが僕の中にいる。1万年前の、人間の精神が……。思わず、ぞくりとした。

「……お前の中のリユングヴィは、どうやら今までのリユングヴィとはわけが違うようだな」

「えっ？」

僕は顔を上げた。

「お前の中のリユングヴィは、お前を『破壊』の道へと導こうとしている」

「破壊に……？」

破壊というからには、どによりとした暗いイメージがある。それは、ステファンを殺そうとした時の感じに似ている。あれも、あいつが……？

「お前は、どちらの力を求める？」

唐突に、クロノスさんは言った。

「バルドルとロキ……のどちらかかってことですか？」

そう訊ねると、クロノスさんはうなずいた。

自分は、空を助けると誓った。そして、世界を救うとも誓った。ならば……

僕は唾を飲み込み、クロノスさんを見据えた。

「バルドルの……創造の力を望みます」

まるで、答えを知っていたかのように、クロノスさんは微笑んでいた。

「……ならば、お前はお前自身の力で、心中の闇であるリユングヴィを打ち倒さねばならない。その難しさがわかるか？」

そんなの……体験したことも、それを体験した人から話を聞いたこともないから、わかりっこない。しかし、僕はあいつに抗えなかった。いや、抗っているのに、敵わなかった。

「世界を救う……それだけを考えていた最後の天帝ユリウスでさえ、人の闇に触れ、絶望し、ロキを呼び起こした。お前の場合は、最初

から天秤が『破壊』の方に傾いてしまっている状態だ。それを、反対側にするには強靱な精神、つまり強い意思を持たなければならぬ。……幼馴染を前にして、リユングヴィの誘いに容易に乗ってしまった今のお前では、到底無理な話だ」

「！！！！ ち、違う！ あれは僕じゃない！ あれは……」

僕はすぐさま反論した。あれは僕じゃない。だって、あの時はあいつが……僕の体を……！！

だが、クロノスさんはそんな僕を睨むようにして、言い放った。

「言い訳をするな。お前が彼女を襲ったのは事実だ。そして、それはお前の心の奥底にある、小さな欲望だったのだ」

「よ、欲望！？ 違う！僕は……僕は……！！」

「いいか？ お前の中のリユングヴィは、お前がちよつとでも負の感情、あるいは穢れた欲望を持つと、容赦なく襲い掛かる。お前を、破壊の道に歩ませよう」と

クロノスさんは僕の言葉を遮り、言った。そして、彼は天を仰いだ。

「……お前は、望まずに選ばれた者だ。だが、選ばれたからには……真実を知ったからには、やってもらわなければならない。それはお前のためでもあり、お前が救おうとしている彼女のためでもある。そして、最終的にインドラの計画を阻止することに繋がるのだ。それを、忘れるな」

「……………」

「最初から不利な状況に立たされているお前は、これからいろいろな苦難に出会うだろう。だが、それこそがお前の選んだ道のはずだ」僕は体が震えた。怖いのではない。怖いわけではないが、なぜか体が震えた。理由は、本当にわからなかった。

「僕は……そつだ」

真実を知って、何をしたいのかを悟ったんだ。それが自分の選ん

だ道。だからこそ、自分はバルドルの力を得ようと思った。  
リユングヴィに踊らされて、ああなってしまったのは自分に原因がある。

ステファンを殺したいほど憎んだ。

海に対して……歪んだ感情を抱いた。知ってか知らずか、それは自分のせいだ。

「……彼女を……空を救うために、そして世界を助けるために……  
がんばります」

そこまで言ったところで、僕は思わず苦笑した。

「な、なんか、がんばりますって言うと、どうも緊張感にかけるような気がしますね」

「ハハ、そうだな。ならば、全力を尽くします、というのはどうだ？」

クロノスさんは僕と同じように、小さく笑っていた。

「じゃ、じゃあ……全力を尽くします」

そう言うと、クロノスさんはこくりとうなずき、指を上空にかざした。

「では、戻りなさい。レイディアントへ」

「……はい！」

と返事をした時、クロノスさんが指を鳴らした。

「おっと、その前に君の服装を元に戻さないとな。忘れるところだった」

クロノスさんが指先をチラつかせると、一瞬光が放たれ、僕の服装が変わった。簡単に言えば、魔法みたいなものか？

「ところで、あんたはこれからどーすんの？」

ミリアが言った。どうやら、僕たちの話が終わるまで、何も言わずに待っていてくれたらしい。

「そうだな……聖都に行くよ」

「? どうして?」

ミリアは頭をかしげた。その顔が、なんとも愛らしかった。さすが妖精と言っべきか。

「……どうやら、僕は教皇家に関係する人間のようなんだ。聖都に行けば、僕自身のこともわかるだろうし。それに、インドラのことについて、教皇とお話をしたいしさ」

「ふくん、考えてんだね」

「……お前の第一印象は、考えてないってことらしいな」

「だって正直な感想だもん」

悪さをした後、逃げようとする子供みたいに彼女は笑った。なるほどな、妖精ってのは笑顔が一番似合う。

「……クロノスさん、お願いします」

「承知した」

再び、クロノスさんは空に手をかざした。今度は、赤い渦だ。あそこが、レイディアントへ繋がっている。

僕は青の渦へ飛び込んだ時のように、集中して跳躍をした。やはり、同じように数メートルジャンプした。そして、赤い渦に入って行った。

「……ソラ、ソラ……」

この声は……

僕は目を静かに開けた。そこには、見覚えのある顔ぶれが揃っていた。

「アンナ、ヴァルバ……リサまで」

「よかった! 目を覚ましたんですね!」

僕はシュレジエン王宮の寝室にいた。3人の他に、アレンに……  
なんと、海賊のレンドまでいた！（覚えてます？）

「レ、レンド！？ レンドじゃないか！！」

僕は飛び上がった。レンドに会うのは、何ヶ月ぶりだろう！  
三  
レトスから海上都市ランディアナへ連れて行ってくれた、自称海賊  
の義賊。

「よ、久しぶり。リサに頼まれてな。シュレジエンまで送ってやつ  
たんだ」

レンドは相変わらずの格好だった。短パンに半袖シャツ。こんな  
寒いシュレジエンなのに、何も感じないのだろうか？ まあ、神経  
が図太いかもしんないけど。

リサは「やほー」と手を挙げ、僕に微笑みかけた。

「ソラ。どうやら、いろいろあったようね」

不敵な笑みを浮かべる彼女に、僕はため息を漏らした。

「リサ……お前、初めっから知ってたな？」

「さあ？ どうかしら」

「……食えない女だよ、ホント」

リサはニヤニヤしていた。しかし、そんなことはどうでもいい。

「それで？ ソラ、お前はこれからどうしたいんだ？」

ヴァルバはもう元気そうで、しっかりとした姿勢で立っていた。

次の目的地。決まってるぞ。

「これから、聖都へ向かおう。教皇に会って、インドラへの対抗策  
を考えるんだ」

「聖都か……そういえば、一ヶ月前に開国したようだぜ？」  
レンドが言った。

「そうか……内乱の処理で、入国禁止状態だったからな」

数年前のクーデターで、反乱分子がどーのこーの言ってたっけ。

「じゃあ、ちょうどいいじゃん」

「相変わらず、リサは適当なこと」

「ヴァルバは大きいため息をした。」

「まーたそんなことを言う。リサに殺されるぞ？」

「僕がそう冷やかすと、ヴァルバは苦笑いをした。もちろん、リサは恐ろしさを含んだ笑顔を見せていた。」

「次は……聖都ですね。どうやって行くんですか？」

「アンナが訊ねた。」

「そこは、俺に任せとけ」

「レンドが自分の胸をドンツと叩いた。」

「俺の船がありゃ、どこでも行けるぜ！」

「レンドの船か……ハハ、ちょうどいいや。船賃もかからないし」

「ヴァルバは大声で笑いながら言った。」

「言っとくけどな、ちゃんと料金はいただくぜ！？ お前ら、ルテ

ティア国王から金をもらったんだろ？」

「レンドは鋭い眼光で、ヴァルバを見た。手には、お金のマークが。」

「うっ……なんでそれを……」

「ヴァルバ、俺様の耳をなめんなよお？ これでも情報には敏感な

海賊なんだからよ」

「……レンドって義賊だろ？」

「ソラ！ 何度言ったらわかる！ 俺らはか・い・ぞ・く……！」

「あまりにも強い気迫で僕に言ったので、思わず目をそらしてしま  
った。」

「と、とにかく……次の目的地は聖都ソフィア！」

「うっしゃあ！ と叫ぶと、リサが僕の頭をはたく。」

「いちいちうるさいんだよ！」

「お、お前に言われたくねえっての……！」

「何い……!?」

「と、彼女は僕の眉間にジヤブをお見舞いした。」

「何すんだ！ この乱暴鬼娘……！」

「な、なんですってえ……！」

「こらこら、やめろって！」

襲いかかるうとするリサを、ヴァルバが制止させる。

「リサ、いちおうソラはケガ人なわけだし、勘弁しろって」

「一回くらい骨折ったって死にやしないわよ！」

「ふん、悪口の一つや二つで怒るとは、短気な女だな。そんなんじや、嫁にも行けねえっつの」

と、動けないリサをいいことと言ってみると、ヴァルバを上空へ吹き飛ばし、リサが襲いかかって来た！

「うらあああ！！」

彼女の空中回転蹴りが、僕の側頭部に命中。僕はパタリと沈んだ。

「ソ、ソラさん！？ ソラさん、ソラさん！」

アンナが必死に僕を呼ぶが……ダメだ、ひよこさんが空中で踊っている。

「へへん、私の悪口を言うからこうなるのよ！」

くそ……リサが偉そうに腕を組み、ふんぞり返っている姿が目に見えぬ。

くそ……覚えてろ！

その頃、とある暗い宮殿。イスに座っているある男のもとに、一人の男性が近づいて来た。

「……なんだ、あんたか」

イスに座っている男は、ため息交じりに言った。ろうそくの灯りだけで照らされる宮殿の中で、彼は何かを執筆していた。

「久しぶりだな、ユグドラシル。いつ以来だ？」

その男は、小さく微笑んでいた。ユグドラシルと言われた男は、その質問には答えず、ため息を漏らした。

「……用件を聞こうか？」

すると、男はフツと笑った。

「状況は？」

男はユグドラシルの傍を通りすぎ、柱の近くで立ち止まった。

「万事、うまく進んでいる」

「計画通り、ということか……」

クククと、男は笑う。

「まだ、魔力は蓄積されていないのか？」

「……巫女のことか？」

「それ以外にないだろーよ」

当たり前のことなのにと思いつつ、男は苦笑した。

「……まだだ」

しばしの沈黙。男は天井を見上げた。

「時間は十分に取ったはず。……時間がかかりすぎやしないか？」

ユグドラシルは何も答えず、執筆を続けていた。

「情が沸いた、なんてことはないだろうな？」

男は腕組みをし、柱に背中をかけた。それと同時に、綴り続けて

いたユグドラシルの筆が止まった。

「……お前には関係のないことだ」

「ハハ、つれない奴だな」

やれやれと思いながら、男は頭をかいた。

「……リオン、お前は最近一人行動が多いようだが……何のつもりだ？」

「一人行動？ 何のことだよ？」

と、男は手を広げて言った。

「あくまで、しらけるつもりか？」

「しらけるも何も、俺は何もしてないぜ？」

男はクックククと笑った。それが逆に怪しいのと同時に、この男はいつもこうだと、半ば諦めているユグドラシルだった。

「なら、いい」

ユグドラシルは、再び執筆を開始した。

「ところで、他の奴らは？」

男は辺りを見渡した。この場にいるのは、二人しかいない。

「……シュヴァルツは皇帝の監視。バルバロッサは、遺跡の探索に当たっている。ホリンとミランダは、監視に向かわせた」

「奴のか？」

「ああ」

ユグドラシルはうなずいた。「ふーん」と納得し、男は天井を見上げた。

「さすがのお前も、危険視してきたってことか」

男は小さく笑った。

「まがりなりにも、『聖魔の力』を持つ人間だ。覚醒していないとはいえ、リリーナと同じくらい危険度は高い。……念のため、派遣した」

「監視ねえ……。あいつらで、大丈夫なのか？ 所詮、印を持たない奴には手に負えない」

「さあな……。まあ、そのところは運もあるだろうがな」

仲間のことなのに、負けると思っていて派遣した。男は、そんなユグドラシルの考えに対し、笑みを零した。

「ククク……お前にしてはいつになく、高く評価しているな」

「……………」

さすが『あいつ』と思いながら、男はフーと息を吐いた。

「それと、もう一つ」

男は、ゆっくりと辺りを歩き出した。

「クロノス。奴が動き出しているようだ」

さっきまでの軽い感じとは違い、男は真剣な面持ちで言った。

「クロノス……ズルワーンか」

ユグドラシルは筆を止めた。

「ふむ……………」

彼は筆を置き、イスの背もたれに背中をかけ、大きくため息を漏らした。

「滅びゆくこの世界を傍観するのだと思っていたが……なるほど、そうするつもりは最初からなかったということか」

やれやれ、と顔を振る。

「どうする？ さすがに、奴が絡むと少々厄介だが」

「放っておけ。どうせ、あいつは時の呪縛に抗えず、現実世界にほとんど干渉できない。脅威に感じることもないだろう」

「ま、たしかにな。……ただ、クロノスがあいつらに要らぬ知恵をやるとなると……それだけで脅威に俺は思えるけどな」

「要らぬ知恵、か。そうだな。奴はこの世界の真理を知っている、数少ない存在。それが、やつの覚醒を手助けさせるとなると……………」

奴め……結局、『両方』に手を貸すということか。

ユグドラシルは灯りの行き届かない宮殿の深部を睨んだ。

「……蒼空の巫女が覚醒すれば、聖杯は完成する。そうなれば、ズルワーンなぞ恐ろしくはない。……奴も、到底辿り着けない」

男はそう言いながら、ユグドラシルの傍に行った。そして、彼の耳元で呟いた。

「日向空。あの女を早く殺せ」

その声は、少し触れただけで斬れるような……刃物を思わせた。……わかつている。長らく魔道刺激のない環境で暮らしていたため、覚醒が遅れているんだ」

「ならいいがな。俺はクロノスとリリーナを観察してくる。……巫女や奴のことは任せたぞ」

男はそう言うと、足もとに出現させた魔方陣の中に入って消えて行った。そう、リサが使ったのと同じ、空間転移の魔法である。

ユグドラシルは見向きもせず、小さく息を吐いた。

「……闇夜の鐘は近いな……」

彼は天井を見上げた。

「……………」

ユグドラシルは顔をテーブルの方向に戻し、再び筆を動かし始めた。暗がりの宮殿で、一人で何かを書き続けていた。



37章：呪われし血 記憶の断片、太古の主とは（後書き）

第3部「記憶の空」……Fin

第4部へ続く

登場人物紹介4 + (前書き)

い。  
ネタバレを含みますので、本篇を見てない人はお気を付けください。

## 登場人物紹介4 +

どうも、森田しようです。

無事、第3部が終了しました。残るは第4、5部だけです。

ということ、またまた登場人物紹介でもしていこうかと。

あんまりいませんけど( ^ | ^ ; )

ラーナ2世 「ラーナ」シルヴィア「アリス」シャロン・ベルナドツテ

ベルナドツテ朝シャロン「シュレジエン」86代女王。先代国王の王妃であり、分家であるベルナドツテ家出身。非常に温和な性格で、周りにいる者を優しくさせる不思議な雰囲気を持つ。国民からの人気は非常に高く、信頼されている。

先代国王との間に息子がいたが、行方不明。

クロノス

22〜25歳程度 身長186 体重??

紺碧の瞳に蒼い頭髮。白いローブを着ていて、頭には白いターバンのようなものを付けている。謎の男性で、他人の意識に入りこんだり、扱いの難しい治癒魔法を詠唱破棄できるなど、わけわからん人。

彼には彼なりの目的があるようだが……？

### ミリア

10歳程度（妖精の為、正しい年齢は不明）  
妖精の国（別次元の世界）にいる妖精。他の妖精とは違い、人間の  
子供サイズ。ピンク色の長髪に、ピンク色の半透明な羽、耳は尖が  
っていて大きな翡翠色の瞳を持っている。ストリートな性格。ユー  
トピアにおいてはある意味、長老的な位置にいる。

### 漆黒の剣士

謎の剣士。全身黒づくめで、更には鼻から下以外を隠す黒い仮面を  
付けている。氷水系魔法を詠唱破棄でき、インドラのホリンを凌ぐ  
ほどの剣技を持っている。度々、インドラの邪魔をしているようだ  
が……？

### リオン

18〜22歳程度 身長??？ 体重??？

インドラの幹部の一人であり、頭領ウラノスと同じ位置にいる人物。

さて、これからは重苦しい話になって(？)いきます。ダークファンタジーに比べると、そうでもないかもしれないかもしれませんが^^;

第4部は全17章構成です。ハッキリ言って第1〜第3部とは違ってかなり長いです！

あ、「説明」の方でEpisode3の設定を解除しました。よければ見てください(^^)

では、森田しようでした。

38章・ジーン王宮 孤独な内なる者ども（前書き）

BLUE・STORY

Episode 4 第4部「運命の空」

僕は……そう、憎んでいたんだ  
だって、願いは届くことがなく、  
想いさえ届くこともない……

この運命の楔から、逃れられるのならば  
愛を得られぬなら、憎めばいい

二つは、共に寄り添ってこそ一つの夢となるのだから……

いよいよ、後半に突入です。

感想など、心よりお待ちしております（^^）

### 38章：ジニ―王宮 孤独な内なる者ども

僕たちの次の目的地は、教皇がいる聖都ソフィア。

聖都のあるソフィア教国は西の大国・神聖ゼテギネア帝国があるアルカディア大陸にあり、南に位置する。そのため、ゼテギネアとは違って南からの温かい風を受け、気候的には穏やかだという。

ソフィア教国はつい一ヶ月前、開国された。今から14年前、当時の教皇オディオン5世がクーデターで殺され、教皇の弟である大司祭ハロルドが即位。その12年後……つまり3年前、ハロルド教皇は同じようにクーデターで倒され、今の教皇が即位する。しかし、反乱によって即位したために、反乱分子が未だ多く、その処理に今までかかったのだ。レンドの話では入国禁止が解除、多くの商船や貿易船が出入りしているという。すでに、教皇オディオン5世が存命だった時のような活気を取り戻しているらしい。

ヴァルバが言うには、今の教皇は教皇家の出自ではあるが、親がわからないらしい。ただ、教皇になる者だけが持つ 聖なる刻印

……通称 聖痕 を持っていたため、枢機卿や中立派司祭、騎士団に教皇として認められた。

名前はクピト1世。クロノスさんやミリアの話から、僕も教皇家の人間のようなので、教皇とは何らかの関係があるかもしれない。あくまで、可能性の話だが。もしかしたら、分家とかそういうもんかもしれない。

レンドは久しぶりに故郷に帰ってきたということで、出発するにはもう少し待ってくれと言われた。リサが言うにはルテティアのルーファス8世やその重臣たちは、もう少し時間が必要とのこと、急いでも意味がないのだ。ただ、僕が気になるのはインドラのことだ。最近、奴らをまったく見かけない。しかも、奴らの情報も手に入らない。

……今まで知って来たことを頭の中で整理してみよう。

インドラはウラノス　ユグドラシルという人間が指導者で、彼とシュヴァルツ、ホリン、そしてミランダは幹部である。他にもいるかどうかはわからない。その配下に、下っ端がいる。その下っ端とやらは未だ見たことがないのだが、暗黒魔法を操るといので、侮ってはならないだろう。

奴らの目的は、約2000年前に封じられた最後の天帝ユリウスの持つ破壊の力、ロキを復活させること。どうやら、その力を施行してレイディアントの人々を全て滅ぼそうとしている。

幹部のことではわかつているのは、ホリンだけ。彼は、ロンバルディア大陸のイデア王国の王族出身で、イデアに対して深い憎しみを抱いている。そこから、人を滅ぼすというところでもない発想が生まれたのだろう。そこに至るまでの過程が全く見えてこないが……。

謎が多いし、最近は全然姿を見せないの、不気味な恐ろしさがある。まだこの世界に異変は起こっていないので、巫女である空はまだ殺されていないはずだ。殺されていたとしたら、すでに何らかのことが起きているはずなのだから。

しかし、諸国が条約を締結して協力すれば、インドラといえども敵いっこないし、すぐにアジトも暴き出せるはず。そう、条約締結まで持ち込めば何とかなるはずなんだ。

今日は10月20日。ジニー王宮の外は、吹雪が猛威を振るっていた。気候予報士によると、精霊が大暴れする日にちなんで、あと2、3日はこの状態が続くという。

……これ、気候予報でもなんでもないじゃん、と突っ込むと、みんなに笑われた。もとより、みんな知っていることらしい。

レンドを待つている間、僕はガイアへ帰ったことをみんなに伝えた。

自分が教皇家出身であるかもしれないこと。ティルナノグやユリウス、そしてリユングヴィのことについて。これは、知らなければならぬことだ。

話をしている間、ヴァルバ、アンナ、リサは静かに聴いてくれた。途中で質問をせず、目を背けずに。

「ふーん……なるほどねえ……」

円形のテーブルを囲んで、僕たちは午後の紅茶的なものを興じていた。ヴァルバはカップを置き、小さく息を漏らした。

「教皇家に、そんな秘密が隠されていたなんて……しかも、お前がその一族出身だとはな。……お前が高貴な身分出身つてのは、天地がひっくり返つてもありえないと思つていたのにさ」

ハハハ、とヴァルバは笑った。思わず、僕も苦笑した。自分だつて信じられないし。

「僕だつてびっくりだよ」

「……ソラさんは、ショックじゃなかったんですか？」

僕と対にあるイスに座っているアンナは、どことなく心配気に訊ねた。

「ショック？」

「だつて……自分は拾われた子供で、破壊の力に傾きかけているとか……」

彼女に言われて、初めて考えた。

ショック、か……。

「そうだな……最初はショックだったよ、もちろん。……けど、知りたかったことばかりだし、自分が求めて得た真実なんだし。今は、それを素直に受け入れてるよ」

そうやって彼女に微笑みかけた。安心させようと思つたのだが、

アンナは目をそらしたまま俯いてしまった。

僕は、その理由がわかる。彼女はわかっているんだ。本当は、僕の手が震えているってことを。

そう、本当は怖いんだ。

恐怖が蘇る。海を野獣のように襲った、恐ろしい自分の姿。そして、ステファンを切り刻んだ時のように、命を命とも思わない行動。あれは、リユンググヴィであるけれども、完璧にそうではない。

あれは……僕でもある。

人間ってのは、何も正義だの愛だの、そういうものだけで構成されているわけではない。理性で抑えている部分……暗い領域がある。どうしても、それだけは消え去ることはできない。

奴は、そこを『餌』としているんだ。

僕がその感情に支配された時、呼びかけてくる。その方が、僕を操りやすいのだから。

「なんだ、強くなったかと思えば、うじうじ君になっちゃってまあ」

リサはあからさまに大きなため息をつき、頬杖を突きながら僕を白けた目で見ていた。

「……リサ……」

「あなたは自分で選んだことだろ？ 真実を知って、自分のことを知ってさ。そうやって、闘うことを決めただら？」

「……」

僕は小さくうなずいた。

「空ちゃんを救いだして、世界も助けたいってのが、あなたの選んだ道でしょ？」

「あ、ああ」

僕は力なく答えた。そりゃあ、そうだけど……自信がないわけじゃない。自信がないわけじゃあ、びかける声が聞こえて、怖いんだ。

俯いている僕を見兼ね、リサはテーブルを手で叩いた。その音が響き、空気が静まりかえる。

「怖いなんて言っていないで、自分を強くしようと心がけなさい！ あんたがあんたであるためでしょうが！」

彼女のエメラルドグリーン瞳が、僕を射抜いている。

「それに、あんたは独りじゃない。あんたは一人で考えるから、リユングヴィに押し負けそうになるんだ」

初めて彼女に叱咤された時のことを、思い出した。あの時も……リサは言ってくれた。「独りじゃない」って。

「自分だけの問題なのはわかる。けど、一人で抱え込むな。あんたが不完全なように、奴もお前と同じように不完全なんだ。けど、あんたには私たちが付いている。リユングヴィは孤独だけど、お前は独りじゃない。そうでしょ？」

リサは強い眼光で、笑顔を見せてくれた。

「そうだけ、ソラ。ま、どちら辺で力を貸せるかどうかはわからないけどな」

頼りになるのかならないのか……これがヴァルバラらしいところだな。言葉の裏に、優しさが見える。

「私も、微力ながら力を貸します。ソラさんは、今までだっているような苦難を乗り越えてきた。……だから、きっと大丈夫です！」

「アンナ、気弱なやつに 絶対 とか きっと はタブーなんだぜ？」

「えっ？」

ヴァルバは笑いながら言った。

「……気弱な奴で悪かったな」

ふんと、僕はそっぽを向いた。

「ハツハツハ！ 気にするな！」

「い、意味わかんねえ……」

僕をけなすヴァルバの笑顔は、憂鬱だった僕の心に少しだけ安寧をもたらした。

そうだな……うん。

一人で考えすぎず、甘えるところは甘えていく。バランスが大事  
ってことだ。

その夜、僕はなかなか寝付けず、ベッドに仰向けになった状態で、吹雪の舞う窓の外を眺めていた。

なんだ、やけに冷静だな

「……お前か」

頭の奥から声が聴こえる。リユンググヴィだ。

何の用だ？

ククク……そう邪険にするな

お前に会いたいわけじゃない。消えろ。

ほう、強気だな

それこれも、ズルワーン……クロノスの野郎に感謝するんだな

「……………」

まあいいさ。いずれは朽ちる精神

お前がどうしようと、今更覆るものではない

……そう言い切れないのが、人生ってもんだよ。

17年しか生きていないお前に、何がわかる

首を長くして待っている

俺がお前を食い破る時をな

その時、心の奥底でうごめいていたものが消えた。胸のつかえが取れたような、そんな感覚だった。本当の意味での、スッキリではないけれど。

僕は……お前になんかに奪われやしない。

絶対に……！！

翌日、レンドが一人の男性と一緒に戻って来た。あの男の人……見覚えがあるんだけど、誰だったっけ？

首をかしげていると、レンドは大きな声で言った。

「うーす。ようやく、吹雪が止んだな」

「ご苦労さん。で、いつ出発できるの？」

リサはホッとした様子で言った。なかなか来なかったので、予定よりも遅れてしまうんじゃないかって心配してたからだ。

「ああ。ルヴィアの港に船を着けてある。いつでも出発できるぜ」

「そっか、わざわざありがとう」

僕は丁寧に一礼した。

「あれ、ソラってこんなに礼儀正しい男だったか？」

レンドの隣の男が言った。えーと……誰だったっけ？ 喉のところまできてんのかなあ……！！ 思わず、喉のあたりをかいてしまった。

「ま、王様がいるような場所ばかりに行ってるから、礼儀正しくもなるさ」

ハハハ、とヴァルバは笑った。

「俺はここに何度も来てるけど、進歩しないぞ？」

と、レンドの隣の男性は首をかしげた。

「そりゃあお前……教養力が無いからだよ」

レンドは励ますかのように、彼の背中を力強く叩いた。彼の顔に、少しだけ苦痛が浮かんでいた。

「言っておくが、お前も教養力が無いってことだからな？」

「おいおいデルゲン、俺をお前と一緒にすんなよ」

「あのかなあ……」

僕はハツとした。デルゲン……デルゲンだって！？

「デ、デルゲン！？ ひ、久しぶりだな」

僕は思わず彼をズビシ！と指をさしてしまった。そっか……デルゲンだ！ 緑色の髪に、翡翠色の瞳。海賊の人間にしては、優しさを感じる顔。

そんな僕を見たデルゲンは、苦笑しながらほほを二度、人差指でかいた。

「ソラ……俺の名前を思い出すのに時間がかかったな」

「ハハハ……ご、ごめん」

デルゲンは、レンドと共に海を駆ける海賊だ。たしかレンドと同じ、シュレジエン出身だと聞いた。

「レンドの船に乗ったのは……もう、半年近くも前のことだしね」

「そうだな。気が付けば、厳しい季節になってきたからなあ」

寒い季節は、たぶんレンドの性に合わないんだろう。レンドって、真夏に海の中で魚を狩っているようなイメージがある。日焼けしてっし。

「レンドたちは俺たちと別れた後、どこに行ってたんだ？」

「ええっとな……まあ、あちこち行ってたんだよ、あちこち」

レンドは罰がわるそうに言った。どうやら、あんまり覚えていないようだ。

「……あれから、俺たちはゼテギネアに行ったんだ」

デルゲンは呆れながら言った。

「ゼテギネア？ 何でまた？」

僕はデルゲンに訊いた。レンドでは説明不可能だし。

「あの頃、ソフィアで旧大司祭派による小規模な内乱が起こったんだ。その残党がゼテギネアの方に逃げてきたらしく、帝国はソフィアに恩を売るために駆逐しようとした。で、自軍を使わず、俺たちのような義賊を雇って撃退しようとしたんだ。それで依頼されたんで、行ってきたんだ」

「あゝ、あれね」

今思い出したようにレンドは言った。彼によると、自分たちは海賊と言い張りながらも、陸上で傭兵みたいな生業もしているのだから。たまにしかしないらしいけど。

「ゼテギネアにまで依頼されるって……レンドさんたちって、有名なんですね」

アンナは感嘆しながら言った。すると、レンドはうれしかったのか、照れ始めた。

「ば、馬鹿やろう。俺たちは、義理堅い海賊だ」

「何言ってるんだ？ お前……」

またもや、デルゲンは呆れながら言った。

「馬鹿はほつといて、お前らは準備はできたのか？」

「おいデルゲン！ 誰が馬鹿だ！？」

レンドの反論にもデルゲンは軽く手であしらい、耳を貸さなかつた。

「あ、ああ。行ける準備はできてるよ」

「あーあ、また寒い所を歩くのか……………」

ヴァルバは大きくため息をついた。

「ヴァルバさん、大丈夫ですよ」

「……………なんで？」

「だって、もう病気も治ったじゃないですか」

「……………」

それ以前の問題だと思うが……………。

「ともかく、私たちの準備はできてるよ」

リサは待ち切れないのか、うずうずしていた。

「……………行かれるんですね」

奥から、聞きなれた女性の声が届いた。ラーナ様だ。

「ラーナ様……………短い間でしたが、いろいろお世話になりました」

僕は深々と頭を下げた。それにつられて、ヴァルバとアンナも頭を下げた。

「いいんですよ。……………私も、久々に楽しい時間を過ごさせていただきました。ありがとうございます」

ラーナ様は僕たちに向かって頭を小さく下げた。

「そ、そんな、ラーナ様……………お礼を言うのは、僕たちの方なのに」

「いえ、あなた方が来て下さって……………本当に楽しかった……………」

ラーナ様はニコツと笑った。ああ……………本当にホツとする。親を思い起こさせる、ラーナ様特有の空気。それは温かく、微笑みが生まれるものだった。

「ラーナ様……………あなたのおかげで、僕は忘れかけていた気持ちを取り戻しました。本当に、ありがとうございます」

親への愛情。親が子を想う気持ち。

そして、アンナがラーナ様へ近づいた。

「あの、ラーナ様……恐れながら、もう一人のお母さんのように感じました。これくらいしかできませんが……ありがとうございます」  
アンナは大きく、頭を下げた。彼女の感謝を表意する気持ちは、誰よりも大きいのだろう。

思わず涙腺が緩んだのか、ラーナ様は右手で目の辺りを拭った。

「……2人とも、いなくなってしまった私の子供のようでした。いつまでも、いつまでも……笑顔で旅をしてくださいね」

そう言ってくれるだけで、来てよかったと思える。本当に。

「ソラ君。あなたは大きな壁に……障害に突き当たることでしょう。それでも自分を見失わず、自分が何をしようとしていたか常に問いかけ、励んでくださいね……」

「ラーナ様……ありがとうございます。肝に銘じておきます」

こうして、僕たちはシュレジエンを後にした。

故郷の温もりを思い出させてくれた寒き大地……きっと、僕は忘れることはできないだろう。

### 39章：それぞれの想い それぞれの思念

11月2日。今、僕たちはレンドの船の甲板にいる。シュレジエン王国のルヴィアの港を出港して、すでに10日以上が過ぎた。

2大陸の間に位置する、スルスト大海。ガイアという、太平洋や大西洋みたいな位置にある海だが、大きさからしてみれば全然小さい。そもそも、2大陸も実は中国大陸……いや、もしかしたらヨーロッパと同じくらいかもしれない。つまり、世界はまだまだ広いということ。もし、スルスト大海が太平洋とかみたいにならったら、ゼテギネアとルテティアは戦わないもんあ。……発見できないからもう北海（シュレジエン諸島周辺の海のこと）は抜けたので、体に突き刺さるような寒さは感じない。しかし、この時期でしかもアルカディア大陸に近いので、ちゃんと冬服を着ていないと震えるくらいだ。

「さみいな」

物思い……というより、特にすることもないので大海の果てを見ている僕。ヴァルバはいつの間にか隣に立っていた。

「寒いなら部屋に戻ればいいじゃないか」

「それもそうだが、俺もいろいろ考えてんだよ」

「ヴァルバがあ？」

僕は細い目つきで、彼を見た。

「失礼な野郎だ」

と、ヴァルバはそっぽを向いてしまった。

「んで？ 何を考えてんのさ？」

僕はその場に寝っ転がった。あ……青空が高い。寒くなると、あの青い空間が遠く感じるのはなぜだろうか。

「……俺は成り行きでお前たちと一緒に行動することになった」  
「そういえば……そうなんだっけ？」

ヴァルバと初めて出会ったのは……レイディアントに足を踏み入れ、広い草原に落ちた時だった。この世界で、初めて出会った人間だ。

「ソラと出会って、もう半年か。時間が経つのは早いな」

そう言いながら、ヴァルバは僕と同じように上空を見つめた。

「そうだな。……この半年、いろいろなことがあったなあ」

想像を絶することばかりだった。平和・平穏とはかけ離れている。

「お前はさ、考えたことがないか？」

突然、彼はほそつと訊ねた。

「何を？」

「生きることについてさ」

一瞬、思考が止まった。深くも、シンプルな質問だからこそだ。

「生きること……？ どうしたんだよ、突然」

僕はヴァルバの顔を見た。どこか、遠い目をしているように見える。

「俺はさ、生きるとは罪だと思っんだ」

彼は頬杖をつき、海を見つめた。

「……どうして？」

「生きる間に、生きるために他の命を奪うだろう？ それ以外にも何かしらの理由で他の命を殺す。……罪だとは思わないか？」

罪か……。僕はちよつと考え、答えた。

「……生きる上でしょうがないことだろ？ 何かは何かの犠牲となつて、ある意味支えていく。それは、変えることのできない自然の摂理なんだよ」

「摂理ねえ……………」

ヴァルバはため息をつき、言った。

「他の命を奪うなら、死んだほうがいいとは思わないか？」

ぞくりと、背筋が凍った。それだけ、恐怖と思える言葉だった。

「死んだほうがいい？ ……何言ってるんだ？」

「……ハハ、極論だったな。気にしないでくれ、ソラ」

ヴァルバはそう言うと、すぐに船室のほうへ帰って行ってしまった。

「……………」

あいつ、一体……。

「ねえ、ヴァルバのやつ、変な顔してたけど…………どしたの？」

今度は、リサがやって来た。レンドにしてもこいつにしても、こんな寒空なのに短パンなんかはいちゃって、寒くないのかな。

「あいつ…………変なんだよ」

「変…………？」

リサはクエスチョンマークを頭の上に浮かべた。

「あいつは元から変なやつだよ？」

リサは何の迷いもなく言い放った。僕はため息を漏らしながら、体を起こした。

「そういうことじゃなくてですね…………今のヴァルバは、いつも以上に変だったってことなんだよ」

「ふーん、なるほどね」

リサは僕の横にちょこんと座った。僕は少し横に体をずらした。

「なんで逃げるのよ？」

「別に……………」

するとリサは僕の服を掴み、引っ張った。これ以上抵抗すると、

なんかされそうなのでおとなしくした。少しは理解してほしい。…  
…なぜか照れてしまうという男の切ない感情を。

「寒いんだよ。壁になれ」

リサは僕の影に隠れようとしている。

「なんで僕がお前のために風除けにならなきゃならないんだよ……。つーか、寒いならアンナが着ているような服装にすればいいだろ？」

「私にかわいらしい服装は似合わないよ」

「……うん、そりゃそうだ」

その瞬間、僕は頭に平手打ちを喰らった。

「いつて〜な！ 何すんだよー！！」

「うつさい！ 私は信念を持ってこの服装にしてんだ。私だって、女らしい服装になりたいんだよ」

リサはふてぶてしい顔で海の向こうを眺めた。

「……なんだよ？ その信念ってのは」

僕がそう言っても、リサは何も言おうとしない。訊いて欲しくないのか、あるいは言いたくないことなのか。

「……私はさ、この2大陸の辺境に位置する、ある島の出身なんだ」  
リサの言葉には、さっきまでの軽薄な感じが消え失せていた。言うとは思わなかったので、僕からしてみれば驚愕だ。

「なんていう島？」

「グラン島。とうの昔に名前を忘れられた、古い……古い島。そこに……私たちの一族、ラグナロクが住んでいた」

「ラグナロク、か……」

先祖代々、強力な魔力を持つ伝説の一族。ルテティアの宰相レオポルトさんが言うには、古くから諸国の王たちはその力を求めてきたという。

「私たちはそこで世俗から離れ、細々と暮らしてた。古から伝わる、戒めを守りながら……」

風になびかれ、リサは寒さから身ぶるいをしていた。

「どんな風な暮らしをしてたんだ？」

「……普通の農家と同じ。自分たちの畑を耕し、野菜を栽培してそれで生活してた。たまに、若い男衆が中央の森に行つて、狩りをしてイノシシとかを捕まえてくるの。たまに食べる肉は、すごくおいしかったな」

「イノシシかあ。僕は食べたことがないな。おいしいのか？」

「おいしいよ。……脂がすごいけどね」

リサは笑いながら言った。

「それじゃあ、女の大敵じゃん」

「ハハハ、そうだね。けど、たまにしか食べなかつたし。ホラ、私は太つてないでしょ？」

と、彼女は自分のくびれを見せた。うーん、モデル並みだな。

「太つてないというより……お前は痩せすぎなんだよ」

リサは身長が160センチ半ばであるのに対し、体重は……50キロにも満たないのではないだろうか。

「女性は痩せてたほうがいいでしょ？」

リサは満面の得意顔をした。

「……お前は全体的に痩せすぎ」

「全体的？」

リサは頭をかしげた。

「だって、貧乳じゃ」

ドカ！

僕はリサに思いっきり蹴り倒された。

「な、何すんだよ!？」

「貧乳で悪かつたわね! それ以上言つとぶつよ!？」

「もうやつてんじゃないか！」

「うっさい!!」

再び、リサはそっぽを向いてしまった。

……たしかに、僕が悪かつた。けど、リサは美人なのに悲しいと

言っつていいほど胸が小さい。それが好きな人にはもつたいたいと思われろるだろつ。……僕？ いや、僕はどつちでもいいんだけど……まあ、これ以上は言われないが。

「……ごめんつて」

適当に謝ると、彼女のチョップが僕の脳天に振り降ろされた。

「いつてえ……！」

「ふん、謝るなら最初から言つたつの！」

リサはつーんとした態度だつた。あーあ……まったく、すぐ暴力に走るんだから。

「……それで、リサの家族は？」

僕は話を元に戻した。怒れる少女をどうにかしなければと思つたので。

「もう、死んじやつた」

「……………」

そ、そんな答えが返つてくるとは思いもしなかつた。座つていろる後ろ姿の彼女は、どことなく哀愁を漂わせていた。

「2人とも、殺された。私の……」

リサはそこで言葉を詰まらせた。僕は次の言葉を何も言わず、静かに待つていた。

「……なーんでもない」

と、彼女は僕の方に向き直り、笑顔を浮かべた。それが作りものだつてことは、容易に理解できた。

「ごめんね、変な話してさ」

小さく顔を振り、彼女は何かをもみ消そうとしていた。

「いや、別に気にしてないよ」

僕は同じように作り笑顔を見せ、再び海の方に目をやつた。

「……………訊こつとは、思われないの？」

いつになく小さな声で、彼女はその言葉を寒空に放った。

「……お前が言いたくないなら、言わなくていい。辛いことは、口にするだけでも、泣きそうになっちゃうもんだしな」

「……………」

「リサのこと、もつと知りたいけど……まあ、気長に待つよ。お前から言ってくれるまでさ」

僕だって、他人のことを考えているつもりだ。昔……弟の樹が死んで、僕はあいつのことを考えただけで泣きそうになった。時間だけが、その悲しみと痛みを緩和してくれたのだから。

「……なんで、そう言えるの？」

リサいつの間にか、僕の目の前に顔を出していた。僕は照れて、少し目をそらした。真剣な時はリサの瞳をそらさずに済むのだが、どうも不意を突かれるとダメだな。

「……お前が言ったからだよ」

「えっ？」

覚えていない、か。僕はよく覚えてんのかな。

「ほら、ガイアでお前が僕に言ったじゃないか。『人が人の気持ちを理解しようとするのは、その人の想いに近づきたいからだ』って、何かの言葉に導かれ、暁の門の前でリサと再会した。誰かれ構わず、僕は空をさらわれた悲しみをぶちまけてしまった。

「お前に教えてもらった。お前のことを知るためには、時間も必要。リサが前向きに話せるようになるまで、待つてるとするよ」

そう言って、僕は微笑んだ。

誰だって、辛いことの一つ二つはある。それでも、生きている人は生きていかなければならない。たとえば、一番大事な人がいなくなつたとしても。

「……うじうじ君だと思つたけどなあ」

リサは大きく背を伸ばしながら、甲板で大の字になった。

「うじうじ君で悪かったな。見てろ！僕は絶対にリユングヴィな

んかには負けられないからな！」

そんな僕を、彼女は優しく微笑みながら見ていた。

「……期待してる」

リサはぼそつと呟いた。しかし、少々耳の悪い僕には聞こえなかった。

「？ 何て言った？」

「いや、なんでもないよ。それより、あんたの話が聴きたくなっちゃった」

「はっ？ うお!？」

と、彼女は僕の服を引き、甲板に倒れさせた。

「お、面白い話なんて持ってないぞ？」

「あんたが亡くした、家族の話。良ければ、だけど……」

亡くした家族……樹、か。もう3年以上が過ぎたが、僕の心が軽くなったのは時間のおかげ。誰かに、話せるまで気が楽にはなつた。なぜだかわからないが、僕はフツと笑ってしまった。その理由がわからないリサは、小さく頭をかしげていたが、それを無視して僕は言った。

「そうだなあ……何から話そうか。僕の弟は樹っていう名前で……」

僕たちは、そのまま甲板にねっころがって話をした。そういえば、リサとこうやってのんびりと話すのは初めてだ。リサはいつも、どこかでいなくなっていた。単独行動をとることが多かった。

……リサにはリサの信念があつて、それで僕たちと協力してインドラの野望を阻止しようとしているのか……僕はまだ、そのことについて訊くことができなかった。それは勝手な予想だが、彼女の家族が殺されたことに関連していそうだからだ。

誰もが傷付き、誰もが何かを憎んでいる。そうやって、再び同じような苦しみを受ける人がいる。それは、どこの世界も変わらないようだ。その連鎖を止めることができれば……あるいは……。

11月3日。天気は良好。吹き抜ける風はまだまだ、寒さを感じさせる。レンドが言うには、ミレトスやソフィア付近に行くところの季節でもまだ暖かいらしい。長らく、暖かい地域から遠ざかっていたので、早く行きたいなと思っっている今日この頃。

船を操作するのは船長であるレンドの仕事なのだが、昨夜ヴァルバと飲み比べ大会をしたらしく、二日酔いで歩くことができない状態なので、副船長（仮）のデルゲンが操作している。

ちなみに、副船長（仮）は他に3人いる。レンドの仲間であるジヨナサンとルーシー（本名はルシファン）、サンガがそれである。なんでこうなったのかは……まあ、この人たちの負けず嫌いという性格を理解していただければ、おわかりかと思えます。レンドの従弟であるロルグはというと、副船長になりたかったのだが、ジヨナサンに「年功序列だ!!」と言われ、渋々諦めたらしい。

「俺は副船長なんかじゃ興味ないんだが……例の3人がケンカするもんで、俺がやってるわけ」

と、デルゲンは言っている。しかし、ジヨナサンはこう言う！

「俺こそが！ 本当は船長に相応しい！ だって俺が1番年上（レンドと同じ年で、1ヶ月だけ誕生日が早いというだけ）だもんよ！  
！ ガーハツハツハ！」

……あまりにも力強く、しかもでっかい体で（ジヨナサンは2メートルを超え身長）言うので、まるで「そうなのか」と思っしまいそうだった。そしてルーシーはこう言う。

「なんでかって言うと、副船長とは船長を最大限に支援、及び補佐する人間だ。つまり、武勇と知略を兼ね揃えたこの俺が（以下省略）」

簡単に言えば、「俺が相応しい」ということだろう。……ジヨナサンとあんまり変わらないや。

「この俺、サンガは」

もうめんどくさいので、サンガはいいや。っていうか、副船長（仮）なんてどうでもいいや。しかし、デルゲン以外はみんな同じようなセリフなんだよな。同じセリフって言うより、最終的な意味合いは同じなんだよね。

そういえば……ふと思い出したけど、初めてレンドの船に乗って海を渡っている時、ジョナサンが言っていたな……。ブリアンと彼の名前を出したとたん、周りの空気が一変した。なんか、いろいろ因縁があるような気がしたけど……。

その夜、僕は船室で航路を確認していたデルゲンに訊ねてみた。

「……ブリアン？ どうして、その名前を知ってたんだ？」

デルゲンは地図をテーブルに置いた。

「あの……ちょっと小耳に挟んで」

ジョナサンが言っていたなんてとても言えなかった。

デルゲンは少しの間天井を見上げていた。

「……まあ、もう昔のことだからな。話してもいいだろ」

彼は目を瞑り、遠い日々話を語り始めた。

ブリアンとは、レンドたちが海賊団を立ち上げた時の仲間の一人で、同郷出身らしい。実はロルグのお兄さんで、レンドの従兄弟に当たる。

「俺たちは小さい頃から一緒に過ごし、一緒に夢を語った。それは、まだ見たことのない未開の大地へ行くことだった」

「未開の大地……？」

「シュレジエンの北にある、永久凍土の大陸さ。世界はまだまだ広い。俺たちは他の人が見たことのない大陸へ行くために、海賊となつたんだ。海を駆ける人間としてな」

その気持ち、わかる気がする。見たこともないものがあるなら、そこへ行ってみたい。あらゆる感情を凌駕する探究心が、それを加

速させる。そして、人は世界の視野を広げていく。ガイアの大航海時代では、探究心が新大陸を発見させたと言っても過言ではないだろう。

「いろいろなところを旅したよ。俺たちは、シュレジエンしか知らなかったからな……」

そのころが楽しかったのか、彼は微笑んでいた。だが、それも束の間。彼の表情は暗いものへと変わった。

「……だが、海賊として動き出して4年後、ブリアンが死んだんだ」  
「……………」

デルゲンは顔を振った。

「他の海賊と戦っている最中にな。敵は大したことのない連中のはずだったんだが……そいつらの中に、以上に腕の立つ奴がいたんだ。そいつに、ブリアンはやられた。ブリアンは、俺たちの中で最も強い男だったのにも関わらず……」

デルゲンは机に置かれた海図に触れ、俯きかげんに続ける。

「……俺はもう逃げるしかないと思い、復讐しようとするレンドを抑えて、ジョナサンやロルグたちと共に逃げた。……あの時の戦いで、多くの仲間が死んだ。40人以上いた仲間が、たったの8人になったからな……」

今のレンドの仲間は、21人だ。

「それ以来、レンドにブリアンの話をすると、台風の前の静けさというものになっちゃうんだよ」

なるほど……だから、レンドに殺されるぞ だったんだ。

「あの時、ブリアンがいなければ……あいつが、自分の体であの敵を抑えなかったら、俺たちはみんな殺されていた。……俺たちが今ここで生きていられるのは、ブリアンのおかげなんだよ……」

デルゲンはそう言いながら、遠い目をしていた。デルゲンは顔に出さないが、兄弟同然だった人を失った気持ちは、怒り狂うレンドと同じなんだろう。レンドのために、その感情を出さないのかもしれない。

11月4日。気候が暖かく感じる気がする。どうやら、シュレジエンや北アルカディアから流れる冷たい空気の範囲を抜けたようだ。「太陽の時間が長くなりそうだな……」

レンドは舵を取りながら言った。

「あと何日でソフィアに着くの？」

「どうだろうなあ。たぶん、10〜20日、いや、1ヶ月くらいかかるかもしれないな。俺、ソフィアに行くのは初めてなもんで、推測しかできねえや」

「そうなのか？」

「俺が海賊になった時期は、先代教皇の暴政時代だったんだよ」

「先代というと……ハロルド10世か」

「そうそう、それ」

いちおう、話だけは聞いてましたから。

「そのハロルド10世は鎖国みたいなことをしたり、教団の神聖騎士団を使つて貿易都市群のミレトスに攻め入ったり……とにかく、どっかの領土欲が大きい権力者だったんだよ」

民衆にも恨まれていたので殺されて当然だ、とレンドは付け加えた。……先代教皇もある意味、かわいそうな奴。自業自得だけど。

「だから入れなかつたんだよ。けど、ようやくソフィアに行ける。あそこは本当に行きたかつた場所だからなあ」

レンドの顔は笑顔になつていった。

「ソフィア教国か……どんなところなんだろうね」

「あそこは世界屈指の建築家たちが作った都市群があんだよ。城塞都市ジョルジオに魔法都市ガリオンヌ、聖霊都市ジェミニに天秤都市リーブラ、そして中でも群を抜いているのが聖都ソフィアⅡエルメス！ ルテティアやゼテギネア以上に壮麗な都なんだぜ」

その話を聞くだけで、早く行きたいという気持ちが大きくなった。

ワクワクしてしょうがない。王都ルテティアやミレトスでも度肝を抜かれたのに、それ以上だなんて……想像すらつかない！

「ソフィア教の中心地だし、ティルナノグ時代の建造物を模倣しているものが多いんだそうだ」

「ティルナノグを？」

「伝説では、始祖アイオーンはティルナノグ皇室だと言われているからな。それに関係してんじゃねえの？」

それは伝説ではなく、真実。始祖アイオーンは最後の天帝ユリウスの実弟なのだ。そう言えば、まだ彼には教えていなかったっけ。

「けど、ティルナノグの建築物を参考にできるものなんてあるの？」

2000年以上も前のものなのに、そこが少し疑問だ。ユリウスによって天空都市は地上へ墮とされたっというし。

「どーなんだろうなあ？ さすがに知らねえや」

ハッハッハと、大きな口を開けて笑うレンド。そこは笑うところではない気がするんだけど……。

「ま、気長に到着するのを待とうぜ、ソラ」

「……そうだね。けど、暇で暇でしょうがないよ」

僕は両腕を天に伸ばした。

「筋トレでもしたら？」

「してるよ、毎日」

腕立て200回、腹筋200回、背筋200回を3セットを毎日している。この世界に来て、体力や筋力がないことを実感させられたからね。

「……たしかに、見ない間に体がしっかりしてんな、お前」

レンドは僕の体を頭から足の先まで見渡した。

「けど、痩せすぎだ。もっと肉を食わないと、俺みたいになれねえぞ？」

「いや、別にレンドみたくなりたくはないからさ」

レンドはムキムキマツチヨの日焼けのすごい男。とても24歳には見えないのだ。

「なんだよ、そりゃ？ もてねえぞ？」

「いや……そこんところはすでに大丈夫なので……」

「はあ？ 彼女でもいんのか！？ ああ！ わかった！ アンナだろ？ そうだろ！」

いきなり、レンドはにこやかな笑顔で言い始めた。

「……なんでアンナなんだよ……つか、彼女なんていねえし」

「ん？ じゃあなんで大丈夫なんだよ？」

「それは……まあいいじゃん。気にすんなって」

僕はその場から逃げようとした。すると、レンドに首元を掴まれ、引き戻された。

「な、なんだよ！？」

「ソラ君よぉ、逃げようとしてんじゃねえよ。お兄さんに話してみな？ んん？」

レンドの顔は笑顔だが、どこかおぞましい雰囲気を感じるのはいのせいだろうか？ しかも、肩をつレンドの手に力が入って行っているのか……ギリギリと変な音がし始めた。

「い、痛いって！」

「早く言わないと、お前の骨が砕けるぞ？」

「ちよっ……マジで痛いんだってば！」

僕はレンドの手を離そうとするが、かなりの力だ。離れてくれな  
い。

「早く言えって〜」

レンドの顔は不気味なまでにニコニコしている。やばい……ホントに肩が壊れてしまう。

「……いちおう、好きな人はいるんだっつもの」

「ほう？ それで何が大丈夫なんだ？」

何が大丈夫って……そこまで言わなきゃダメなのか！？ 僕は観念し、小さく唾を飲み込んだ。

「……恋人同士……みたいなもんだし……」

恥ずかしく、だんだん声が小さくなった。

「ふ〜ん、じゃあ彼女じゃないか。嘘つきやがったなあ〜？」

レンドはさらに力を入れた。

「いたたたたた！」

そして、ようやく手を離してくれた。

「つたく、この筋肉馬鹿め……」

僕は自分の右肩をさすった。握力80はあるんじゃないか？

「で？ 誰なんだよ、相手は」

「お、幼馴染だよ」

「ほう？ 名前は？」

そんなことまで訊くのか……。ていうか、以前会った時に言ったような気がするんだけど。

「……日向空っていう名前」

「ソラ？ お前と同じじゃないか」

「まあ……ただの偶然だよ」

母さんと父さんが僕に名前を付ける時に、すでにいたはずの空を意識していたかどうかはわからない。まあ……偶然だとは思うが。

「で？ その子はガイアでお前の帰りを待ってんのか？」

「あの子、以前にこの話はレンドにしたような気がするんだけど……」

「そうだったけ？ まあとにかく教えるよ」

この様子じゃあ完全に忘れてるな……。

「……インドラの連中に、さらわれたんだよ」

「ああ、そういえば……そんな話をしたよな？」

「今更かよ……」

僕はため息をついた。

「まあとにかくよ、彼女を助けられるように、剣の特訓でもしたらどうだ？」

「剣の特訓、か……」

ホリンと戦って以来、実戦は行っていない。シュレジエンでアレと一緒に少しくらいやった程度だ。

「俺の勝手な予想だが、鳴りを潜めていたインドラの野郎どもも、そろそろ出てくる頃だ。……準備をされていて損は無いと思っぜ？」  
「……そうだな、そうするよ」

僕は剣を部屋に置いてあるので、下へ向かった。  
鳴りを潜めている、か。

あいつの声が聴こえる。「ソフィアへ行けば、二度と戻れなくなる」と。ほくそ笑みながら呟いている。

あそこには、何か待ち受けている。そんな気がする。

11月8日。僕はレンドに言われた日から、剣の特訓を行っている。レンドやデルゲン、他の仲間たちに暇があれば見てもらうようにした。みんなから言われてうれしいのは、以前より断然上手になっているということである。ランディアナでの自主練、ルテティアで王子と一緒に練習したことや、フォルトウナ神殿でのホリンとの闘い。そのおかげだろう。

その夜、一生懸命腕立て伏せをしていると、ヴァルバが話しかけてきた。

「なあ、お前の恋人の空ちゃんって、どんな女の子なの？」

僕はズルツと手が滑ってしまった。

「いきなり、なんなんだよ。……172、17……3！」

3セット目なので、いい加減辛くなってきた。

「今まで聞いたことないなーと思ってよ」

「なんで言わなきゃなんねえんだよ？ 176、177……」

「お前が好きな子っていうのが知りたいんだよ」

僕はまたもや手を滑らした。

「……レンドから聞いたな」

「何のことだ？」

ヴァルバはニヤニヤしていた。

「そうとしか考えられないだろ？ このタイミングで言ってくるわけだし」

僕はため息をしつつ、腕立て伏せを再開した。

「んで、どんな子なんだ？」

あまりにしつこくいうので、もういいや。別に、恥ずかしいことじゃないし。

「……よくそれで好きになれたな。それだけ一緒にいると、恋愛感情なんて湧かないんじゃないか？」

ベッドで横になっているヴァルバは、腹筋を始めた僕を眠たげに見ていた。

「まあ……普通はそうなんだろうよ。けど、僕はあいつが好きだった。そのことを完璧に忘れてたんだよなあ……」

思い出した時は、一瞬にして世界の風景が変わったような感覚だった。心の中のもやもやが洗い流されて、雲一つ無い快晴の青空が出てきたような……。

時折思うのは、あそこまであいつのことが好きになっているってのは、なぜなんだろう。一目惚れ……ってのもあるんだろうけど、それだけじゃない気がするんだよな……。

「なるほどね。どうせお前のことだから、自分の気持ちにも空ちゃんの気持ちにも気付かなかったんだろ？」

ヴァルバの指摘によって、僕の筋トレは停止した。

「……なんでわかんのか？」

「そりゃあ、いつもお前を見てりゃ鈍感だなあってのはわかるし」

「……そうなの？」

ヴァルバはニヤニヤしていた。うーん、以前にも修哉に言われた。「お前は鈍感」だって。

「お前、未だに気づいてないだろ？」  
「何を？」

僕は首をかしげると、わかっていたかのように笑いだすヴァルバ。  
「お前がある奴に好かれてること」

「僕が？ うーん??？」

ヴァルバは指をパチンと鳴らした。

「ホラな？ わかってねえだろ？」

「……結局、誰なんだよ？」

自分だけ納得している姿つてのは、無性に腹が立つつてもんだ。

「それは俺が言うべきことじゃない。自分で気付くか、相手が言ってくるまで我慢するんだな」

「なんだよ、それ……」

「ホラ、空ちゃんのことを教えろよ。性格とか」

「なんでそうなるかな……」

そんなこんなで、約1時間ほどヴァルバと話をしていた。空は双子であるとか、こんな遊びをしたとか。あと、いなくなってしまう修哉についても話した。

修哉……僕の一番の親友であり、最も信頼できる男。いつもふざけてはいるが、思慮深く、学校随一の秀才で頭も切れる。そして、誰よりも妹の咲希ちゃんを大切にしていた。そう、人として「愛すること」を持っていた奴だった。

その後、ヴァルバは寝てしまった。筋トレをするのに、ここでしていたら邪魔をすることになるので、僕は甲板へ出てすることにした。

甲板にはリサが一人で佇んでいた。太陽が沈み、月の光に照らさ

れる大海原を眺めながら。

「一人でなにしてんの？」

僕は後ろからリサに話しかけた。

「海を眺めてるだけ」

リサは振り向きもせず、素っ気無く言った。リサらしいと言えば、リサらしいけど。

「……ん？」

僕は自分の目を疑った。

リサは女の子らしい格好をしているのだ。女の子なのに、そう言っ  
てしまうのはおかしいかもしれないが。

白のワンピースの下に、長袖の白い服を着ている。いつもポニーテ  
ールにしているのに、それを完全に解いていた彼女の金髪は、甲板  
に散乱しているようにも見える。

「…………」

思わず、見とれてしまうほどの美しさ。小さい顔に白い肌。モデル  
のようなスリムな体。誰もが羨む綺麗な金色の髪。大きなエメラル  
ドグリーンの瞳は、月光を受けて小さく輝いている。

神秘的な巫女。

ああ、なるほど。彼女こそ、「永遠の巫女」に相應しいのかもし  
れない。彼女のために、その名詞が存在しているのかとさえ思うほ  
どだった。

「……どつたの？」

「えっ？」

瞬きもせず、ずっと自分を見ている僕を不審がったのか、あるい  
は少し心配しているのか、顔をかしげているリサがいた。

「い、いや。何でもないよ」

やべえやべえ……なに見とれてんだか。

「……なんで、そんな恰好してんのかなって思ってたさ」

彼女の隣に、僕は立ち止まった。

「……誰にも見られないと思ったから、この服を着たのにさ。まったく、あんたが来るとは思わなかったよ」

リサはため息交じりで言い放った。

「別にいいじゃん、馬鹿にされるよりさ。きつとみんな目を丸くするよ」

「なわけないでしょ。特にヴァルバが」

「どうかな？ ベタ惚れすんじゃないの？」

僕が笑いながらそう言うと、彼女も微笑んだ。

「あり得ないね。歳が違うじゃないのよ」

「いやいや、そういう意味じゃなくて、おっ！ あの子かわいい！ 的な意味だよ。本気で惚れてどうすんだよ」

マジで惚れられたら、さすがの僕も止めようとするかな。犯罪じやん、ある意味。

「うーん、あいつに惚れられたら、速攻で断るかな」

「ハハハ、かわいそうに」

僕は彼女と同じように海を眺めた。港町アルフィナの宿の上で眺めた、あの海と同じだった。中途半端に欠けた月の放つ光が、柔らかく大海原を照らし出している。

「それで、どういう心境の変化？」

視線を向けず、僕は訊ねた。

「寒いからよ」

「寒い？」

まさかそんな返答が来るとは……予想だにしませんでしたわ。

「今まで、意地になって着なかつたじゃないか」

「人前が出る時は、そういう服を着るよ。誰もいないような時間帯は、こうしてもとの自分に戻る。そんな感じ」

「元の自分、ねえ……」

「……何？」

彼女を見つめる僕の顔を、じろつと睨んだ。

「……いや、普通に見ててもお前は十分きれいだと思ってたけどな」  
「けど？ 今はそうでもないってか？」

リサは皮肉交じりで言いやがった。せつかく褒めたのに。

「あのな、お前は どうしてそういう風にひねくれた考えしかできないかね？ 今は女性らしいし、髪も解いてるからいつもよりきれいに見えるって言おうと思ったのによ……」

「でしょ？」

リサは憎たらしいような微笑みをした。

「でしょって……はあ……もういいや」

僕はため息をつきながら言った。なーんか、しゃべる気力が失せてしまった。

「ごめんって。……あんたは何しに来たの？」

リサは横目で僕を見た。

「特訓に決まってるじゃんよ」

彼女は首をかしげた。

「部屋でしてただけ。ヴァルバが寝ちゃってさ。それを邪魔しちゃいけないから、ここに來たってわけ」

「へえ、優しいじゃん」

「当たり前です」

人間、優しくないとね。意地悪な人もいるので、そうやってバランスを保たないと。

僕たちは静かに海を眺めた。今は碇を落としているので、船は動いていない。そのためか、海はすごく静かだ。小さく波打つ海の声が、静寂な夜の中を揺ら揺らと動いている。海の上に浮かぶ、一つの雲は、まるで旅する自由人のようだ。好きなように好きな場所へ行き、気ままに他の雲と合わさる。そして雨を降らす。今、雨でも降られたら僕としては困りますが。

「……海の果てには、何があるんだろうね」

リサが小さく呟いた。

「果てなんてないよ。世界は丸いんだから」

「あんたね……そういうこと言ってるんじゃないの」

僕は「夢が無いね」と言われ、頭を軽く殴られた。

「じゃあなんなのさ？」

「大地をゆく人、海を旅する人、空を駆ける人……みんな、その旅の果てに何を求めようとしてるのかなって……」

リサは体を小さくしていた。ちよつと寒いのかもしいない。

「旅の果て、か」

人は何らかの理由がなければ行動は起こせない。自分たちがこうして生きていること、自分がこうして追い求めること。それらに理由があるのだから、人は行動するわけで、ないとしたら、それはつまり生きていることさえ否定しかねない……あれ？　なんだかよくわからなくなってきた。

「うーん……よくわからなくなってきたな」

思わず、僕は腕を組んで唸った。と、僕はあることを閃いた。

「もしかしたら、旅の果てには何も無いんじゃないか？」

「……無い？」

僕はうなずいた。

「そこに自分の知らない何かがあると信じているから、人は歩いていくんだと思うんだよ。……つまりさ、旅の終着点なんてないんだ。何かを見つけたら、新しい何かを求め、再び歩いて行く。それは延々と続いて行く旅路……。たぶん、そうやって自分なりの答えを発売するんだよ」

終わりを求めているわけじゃない。終わりの果てを見たいわけでもない。その中で得られるものを求めているのかもしれない。それが積み重なって、1年、2年、10年と……人は歳を取っていくのだろう。

「……そうかな。私は最終的な答えこそ、私たちが追い求めているものだと思う。答えがなきゃ……こうして生きていることの意味さえ無くなりかねない。そうじゃない？」

リサは海の果てを睨んでいた。さっき、僕が考えたことと同じだ。「……自分の信じているものが、自分だけの答えだとは思うよ。僕には僕の考え、リサにはリサの考え。答えなんてのは千差万別だよ。正しいものなんてないと思うし」

そう言うと、リサは体育座りのように体を縮こまらせた。

「……そうだね。人によって、考え方は異なるんだしね……」

「そりゃそうだよ。ま、宗教みたいに考え方を共有する人たちもいるけど」

しかし、そういった人たちは考え方を肥大化させ、理想という名の下に自分たちを認めようとしれないものたちを排除しようとする。宗教は、ある意味最も恐ろしい人間の力なのかもしれない。

……信じる力つてのは、予想以上に強固なものだからな……。

「けど、私たちの目的は……同じ」

リサは僕に顔を向けた。その顔は月光を浴びて、ほのかに白みを帯びていた。

僕は夜空を見上げた。

「……それにしても、リサはどこまでのことを知ってたんだ？」

「どこまでのこと？」

「お前、僕がどんな人間か知ってたんだろ？ そこんところだよ」

リサは僕から目を逸らし、少し慌てた様子だった。

「それは……私が……」

「今宵は女とデートか？」

40章：急襲！！ 血に塗れし黒き翼「1」

聞き覚えのある声が、後ろから聞こえた。僕たちはすぐさま後ろへ振り返った。

「お前は……!?!」

マストの影でそいつの姿を確認できない。

「おいおい、もう俺のことを忘れちゃったのか？」  
この口調で、はつきりと思いついた。

「ホリンか!?!」

そう、イザークのフォルトウナ神殿で僕とヴァルバに襲い掛かった、インドラの幹部の一人ホリンだ！

「久しぶりだな空……いや、『セヴェス』ヴェルエス。教皇家の嫡男さんよ」

ホリンはマストの影から出て、月光に当たる位置にまで歩み寄ってきた。

「あんたがりサか……あいつらから聞いてるぜ？」  
「……………」

リサは何も言わず、自分の長い髪を結び始めた。

「僕たちを狙って来たのか？」

そう言うと、ホリンは小さく笑った。

「まあ、そんなところだ。お前が『調停者』として覚醒する前に殺らなきゃならないと、幹部会議で決まったんでな」

緑色の瞳が、僕を睨みつける。

「……今回もお前一人なのか？」

ホリンの辺りを見渡しても、他に人影は見えない。前回と同じく、

一人で闘おうというのだろうか。

「今回は俺一人じゃない。さすがに、その女がいると俺一人では荷が重いんでね」

ホリンはリサを指差した。

「こりゃあ高く買ってもらったもんだね。けど、『あんた程度の一般人にやられるような私』だとも思ってたの？」

リサは小馬鹿にするかのように微笑んだ。

「ふん……てめえが特別な巫女であることは知っている。そして、『あいつら』と同じような殺人格闘術を会得してんだろ？ ……ラグナロクの一員だからって、女が会得できるようなもんじゃねえのにな……」

さ、殺人格闘術？ まさか、んなもんをリサは会得してるっていうのか？

その時、ホリンの野郎は首をかしげ、ほほを指先でかき始めた。

「それにしても……男みたいな格好をしていると聞いたんだが、どうやら違うらしいな。ただの女にしか見えねえぞ？

「だ、黙れ！ 私だって女なんだよ！」

なんていうか……照れる姿もあんまり見ないせいか、初々しい。あからさまに恥ずかしくてやんの。

「まあとにかく、俺の仲間を紹介しようか。 ミランダ」

ホリンがそう言うと、ホリンの隣に光の柱が現れた。これは……空間転移？ 数秒後、そこに一人の女性が現れた。この女性は、たしか……

「どうも、初めまして。 ……あなたとは二度目ね」

ミランダは僕の方に目をやり、小さく微笑んだ。フォルトゥナ神殿で現れた、ドがつくほどの美人。ナイスバディでスレンダー。しかも身長が高い。

「空、鼻の下を伸ばしてんじゃないよ」

と、リサによって例の如く頭を叩かれた。

「の、伸ばしてなんか無いっての！」

「ホントにい？」

疑心に満ちた顔。このやる……。

「……お前なあ……」

「冗談だつてば」

そう言つて、彼女は笑つた。危ない危ない。男の目を釘付けにする女つてのは、そんだけで凶器だよ。

「あら……見ない間に、体つきが良くなつたわね」「

ミランダまるで母親のように言つた。

「あんたは敵だろ？ 僕の成長がうれしいのかよ？」

「そうね……以前のままだと、張り合いがなかったから」

クスツと、ミランダは……なんつーか……なんか腹立つな。つー

か、美人つてのは、どうも上から目線なんだよなあ。これも世界共通なのかね？

「気をつけな、ソラ。ミランダはあらゆる精霊に通じた、聖霊術師だ」

「聖霊術師？」

「……5種属性に光陰2元素を操る魔術師のことよ。今では聖霊術師になることはできないはずなんだけどね」

そう言つて、リサは身構えた。

「リサさん、あなたも同じ聖霊術師じゃなかったかしら？」

「……まあ、そうと言えはそうなるかもね。けど、知ってんでしょ？ 『私はあんたたちとは別物』つて」

リサも聖霊術師……？ 移動する魔法を使える所などからすると、あながち間違つてはいないとは思うけど……。

「そうね。……でも、何もあなたのような人間だけができるわけじゃないのよ？」

「………??？」

リサは首をかしげた。それを見たミランダは、クスツと微笑んで

右手を空中へ掲げた。

「今ここで私たちが出逢うのは、遙かなる過去から定められていたこと……」

ミランダはそう言うと、印を結んだ。……魔法の詠唱だ！

「リサ！ 魔法だ！！」

「そんなのわかってるに決まってるでしょ！」

リサはすでに走り出していた。ミランダの方向へ、一直線に向かって行つた。その速さは、かなりのものだ。

すると、リサの前にホリンが立ちはだかった。ホリンは後ろに背負っていた剣を取り出し、横一文字に振りぬいた。リサはそれを横っ飛びをしてかわした。あのスピードで走って、あのスピードのまま横へ避けるなんて人間業か！？

「行かせるかってんだ！」

「ちっ！！」

リサはホリンから数メートル離れた場所へ着地した。

「朽ちなさい、泡沫の海を漂う瘴気の嵐にて……」

ミランダの周りに緑色の光があふれ出していた。僕はベルトに差してあつた剣を抜き、体勢を整えた。

「魔の祝福を　ヴェルニスカ」

緑色の光が辺りへ飛び散りだし、その光がこの甲板の床へと降り注ぎだした。波紋を広げながら、緑色の光はどす黒い何かを撒き散らし始めた。

「これは……！ 空、その黒い霧に触れるな！ 毒ガスだ！！」

口に手を当てて叫んだ。

「ど、毒ガス!?」

黒い霧は、この月夜の中ではよく見えない。僕は姿勢を低くし、口を塞いだ。それでも少しだけ吸い込んでしまった。

僕が咳き込んでいると、ホリンが剣を携えながら走って来た。

「燃え上がれ　レーヴァンティン!」

剣は朱色の炎を纏い、僕に向かって来た。振り下ろしてきたその一撃を、僕は剣でガードした。以前とは違い、押し負けている感じはしない。

「よく受け止めたなあ!　なるほど、てめえの成長はウソじゃなかったってことか」

「お前らと同等に戦えるために……いや、お前らを倒すために、努力をしてきたつもりだ!」

「ハッ!　それを無駄な努力だとわからせてやらあ!」

ホリンは後ろへジャンプし、再び切りかかってきた。その素早い斬撃を、僕はガードし続けた。何度も攻撃していれば、一度体勢を直す時が来る。その時こそが、反撃するチャンスだ!

ホリンの連続攻撃を防ぎきると、ホリンは間を空けた。……チャンスだ!　僕は思いつきり斬りかかった。その時

「　ゲイルスラッシュ」

円を描く緑色をした風が僕の方へ突撃してきた。僕は間一髪、横へ転ぶように避けることができた。すると、ホリンがジャンプをして、上から剣を振り下ろしてきた。僕は再び転ぶようにして、横へ避けた。

「ハッ!　逃がすかあ!」

ホリンはすぐさま追撃攻撃を行った。しかし、それをリサが手で受け止めた。　素手で!?

「なっ!?!」

ホリンが驚いている隙に、リサは横蹴りを繰り返した。ホリンはそれを後ろへ引くことで避けた。ここで、ようやくみんなの動きが止まった。

「俺の攻撃を素手でガードするとは……」

「ソリッドプロテクトね……それかなり強力だね。ホリン、もう少し強度を上げたほうがいいんじゃないかしら?」

「んなのわかってる!」

ホリンは甲板にひざを着いていた。

「ふん……そこまでの強度があるとは思わ」

リサは一瞬の間に近づき、ホリンに空中蹴りを繰り返した。ホリンはそれを剣でガードするが、リサのすさまじい速さの攻撃に防戦一方だ。

「くっ……このアマア!」

ホリンは苦し紛れに剣を出す、リサはそれを蹴り上げることで上へと弾き返した。すると、ホリンの懐が開いた。

「しまっ　!」

リサはホリンの懐に手を当てた。そこに、黄色い光が終結する。

「闘韻に叫べ、レツリョウコウハ烈霊黄波!」

すると、ホリンはすごい勢いで後ろへ吹き飛んだ。巨大な衝撃波が、そこではじき出されたのだ。そのまま、ホリンは床に転がりながら倒れた。

な、なんだ? あれは……格闘術? いや、まるで魔法みたいな

……。

「ちっ! くそが!」

ホリンはすぐさま立ち上がった。

「……リサ、お前って……」

「何よ?」

リサはギロつと横目で僕を睨んだ。

「ああもう！！ 動きにくいつたらありやしない！」

そう言つて、リサは自分の膝辺りの裾を手で裂き、太ももを露出させた。一瞬目をそらしたが、なるほど、蹴りとかをするのにワンピースは邪魔だもんな。

「大丈夫？」

ミランダは心配そうな様子でもないのに、ホリンに言った。

「……瞬間にプロテクトを発動した。大丈夫だ」

ホリンはゆらりと、僕たちに近づいてきた。

「厄介な女だ。さすが、やつらの従妹つて言うだけはある」

「そんなの関係ないね。私は私だ」

リサは拳を握り、構えた。

「ホラ、空も構える！」

「あ、ハイ」

とつさに構えてしまった。条件反射か？ すると、ミランダが再び印を結び始めた。リサはそこへ走り出す。

「空！ ホリンは任せた！」

ホリンを？ やだなあ。あいつ、いちいちうるさいから。とにかく、僕は剣を携えホリンの方向へ走った。

「てめえなんかに、俺が止められるか！」

ホリンも僕の方へ走ってきた。僕は素早く攻撃を繰り出した。僕の目の前で、2人の剣がぶつかり合う。

視界の端で、リサの攻撃をミランダが避けているのが見えた。しかも、詠唱をしながらだ。

「よそ見してんじゃねえよ！」

ガキITTと、僕の剣が横へ弾かれた。その隙をホリンにやられそうだったが、僕はすぐさま後退し、それを避けた。そして、再び剣がぶつかり合う。どちらとも、まだ一度も体にかすつてさえない。

よし、力で押し負けていない。筋トレは無駄じゃない！

「遥かなる風の向こうへ……露の調を聞き届けたまえ……」

「させるかって！ 封じよ、アンチ・マジック！」

リサは右手から青白い光を放った。それはミランダに直撃した。すると、ミランダを包んでいた氷色の光が消えた。

「詠唱禁止の術か……」

リサの回し蹴りがミランダに直撃。ミランダはその衝撃で数メートル吹き飛ばされた。しかし、どうやらミランダはうまく手でガードしたようだ。

「へえ、私の蹴りを防御できる魔術師がいるとは思わなかったよ」

「……………」

「さて、教えてもらおうか。あんたは、ラグナロクの間人？」

ミランダは何も言わず、リサをずっと見つめていた。

「……ヴェルニスカはすでに失われた術。あれを唱えられるのは、ラグナロクの間人か……あの血族の者だけのはず」

「フフ……そうね、あなたはそう思うかもね」

不敵な笑みをミランダは浮かべた。

「……どういう意味？」

「禁呪は、ラグナロクの間人だけが唱えられるものとは限らないのよ」  
ミランダは手を掲げた。

「氷の牢獄に沈め　　グラッシャージェイル！」

彼女が詠唱破棄した瞬間、手から放たれた青白い光が甲板を走り、氷の牢獄がリサを今まさに捉えようとしていた。リサはとつさに、上空へ大きくジャンプした。人間の跳躍力では無理な高さを。

「上に跳んだのは失敗ね……ヴォルカニック！」

ミランダは手をリサに向けた。その手から、渦を巻く烈火の炎がリサ目掛けて突進した。

「失敗？　どうかしらね〜」

リサは素早く印を結んだ。

「壮麗たる無の歪み、星の下に闇を刻め！　　グラヴィエイロ！」

リサの周りに、歪みが生じた。それはまるで、空間がねじれているかのようなだった。ミランダが放った炎はその歪みに入ると、塵になるかのように消え去った。

「禁呪の詠唱……早すぎる……！」

ミランダは驚きを隠せなかった。その隙を、リサは見逃さなかった。

「集結せし空気の波動、轟け！　閃波センバ！！」

リサは空中で何かを押すかのように素早く拳を突き出した。すると、そこから放たれた衝撃波が数メートル離れたミランダに直撃した。

「ちっ……！！」

ミランダは後ろへ吹き飛んだが、華麗にバク宙をして、甲板に着地した。それとほぼ同時に、リサも甲板に降り立った。

「碎ける、ロツクイラプション！」

リサの足元に、岩石の刃が出現。リサは高速移動で避け、印を結んだ。

「ヴォルカニック！」

先程、ミランダが行った横向きの炎の渦を飛ばす魔法を行った。

「フィンブル！」

それを防ぐように、ミランダは自分の前に巨大な氷山を出現させた。炎がそれにぶつかった瞬間、リサは目にも止まらぬ速さで、ミ

ランダの前に移動した。

「！！！！」

「魔獣よ叫べ！ 獣牙閃！！」

リサの右拳が紫色に煌めき、フックパンチを繰り出した。それを両手で防御したミランダは、後ろへ大きく吹き飛ばされた。が、彼女は何事もなかったかのように着地した。

「あら、顔から血が垂れてるよ？」

リサはミランダの顔を指差した。彼女の口から、一筋の赤い血が流れて行った。

「……なかなか、やるようね」

「お褒めの言葉、どうもありがとう」

小さくリサは一礼した。その顔には、余裕の笑みが浮かんでいた。

「ほんの数ヶ月で、ここまでなるもんかなあ」

僕の剣とホリンの剣が何度も何度もぶつかり合い、火花を散らす。レーヴァンティンが炎を纏っているため、この闇夜を照らしてくれているのでありがたい。それは、ホリンも同じだろうが。

「努力したんだよ！」

僕はホリンを押し返した。ホリンは軽やかにバックステップをした。

「一年以上の努力をすれば、少しは伸びるだろうが……短い期間でここまで伸びるものかあ？」

「僕は飲み込みが早いんだよ！」

「……聖魔の力が顕在かしつつある？ そうか……リユングヴィが

表面化した今、力を縛り付けていた楔は消えたってことか……」  
「?????」

自問自答し、納得するホリン。僕には何が何だかわからない。

「ふーん……まあ、この程度ならまだあれか……」

と、ホリンは僕を見てほくそ笑んだ。その瞬間、彼は指先を素早く動かし、印を結んだ。

「溢れる岩石をも焦がす、黒き怨嗟を響かせる……骨の髄まで黒焦げになっちまいな!! クリムゾンフレア!!」

巨大な真つ赤な爆弾が、いや、まるで小さな太陽が3つ、ホリンの頭上に並ぶようにして出現した。そして、僕目掛けてすごいスピードで飛んできた。

「う………うおっ!?!」

僕は後ろへ走り出した。火の玉は3つとも床に落ち、静かな海に爆音を響かせた。レンドの船が、大きく揺れる。その衝撃で、僕は体のバランスを崩した。

振り返ると、炎の玉が落ちた場所から巨大な火柱が3つ、昇っていた。それは、まるで天を焦がすかのようにだった。すると、その炎の火柱の間から何かが飛んできた。……ホリンだ!

「うらあああ!!」

レーヴァンティンが真つ赤な炎を纏って、僕に振り下ろされてきた。僕はすかさず、自分の剣でガードした。

「くっ………!!」

僕は少ししゃがんでいる状態、ホリンが上から押している状態なので、分が悪い。

「忘れたのか? レーヴァンティンの威力を」

ホリンはニヤツと笑った。すると、剣と剣が交わっているところから、炎がまるで水が伝うかのように、僕の方へ流れてきた。

「さあどうする!?! このまま焼かれるか、ガードを解くかだ!」

「ぐう……！！」

くそ……このままじゃ、本当に焼かれる。だからといって、剣を離すとすべさまやられる。

どうするー？ どうすれば ！

しょうがない。少し、力を貸してやろう

この声は……！！

僕がそれがリユングヴィのものだと気付く前に、やつは僕に何かをした。その瞬間、変な感覚が体を包みだした。

「こ、これは……まさか……！！」

ホリンは僕を見ながら驚いていた。見る見る、僕の内側から何かが溢れ出てきた。すると何かを察知したのか、ホリンは僕から剣を離し、後ろへと下がった。

「……覚醒したのか……！？」

この感覚……覚えている。王都ルテティアでステファンと戦った時と、海を襲った時のと……！！

だけど、違う。これは僕だ。ちゃんと意識がある。これは……フオルトウナ神殿でホリンと戦っていた時に感じたものか？ けど、それ以上の力を感じる。あれよりも、体が軽い。この湧き上がるものは……エレメンタルか？

ホリンの隣に、ミランダが移動して来た。同じく、リサもまた僕の隣へとやって来た。

「覚醒？ こんなに早くするわけは……」

ミランダも驚いた顔をしていた。隣にきたリサが僕の頭に手を軽く乗せた。

「……空？ 私がわかる？」

心配そうに、僕を見つめる。

「あ、当たり前だろ？ わかるよ、もちろん」

僕がそう言っても、リサはじーっと僕を見つめる。そして、軽く息を吐いて手を離れた。

「ふーん……なるほど、リونغグヴィが力を貸してくれてるようね。理由は知らないけど」

「……貸してくれた？」

あいつは僕に協力するはずがない。むしろ、邪魔をするはずなんじゃあ……？

ふん、巫女風情が余計な事を

俺としては、ここでお前に死んでもらっちゃあ困るんな

意識の奥から、リونغグヴィの声が響いた。  
お前、僕に何をするつもりだ！？

言っただろう？ 力を貸してやると

一体、何が目的だ？

わかりきっていることを  
俺が貴様を奪うためさ

……ここで死んでは、僕の体を得ることができないということか？

### 御名答

なんだ、そういうことか。冷や冷やしたよ、ホント。あの状態になると、リサまで殺しかねないし……。

今のお前ならば、奴らなど一捻りのはずだ

一捻り？ そんな簡単にいくとは思えないけど……。

「……聖痕も魔痕も出てない。覚醒はしてないはずよ」

「だが……この雰囲気、いつか見たウラノスと同じだぜ？」

「覚醒した時ほどの力は発揮できないはずよ。けど……覚醒も時間の問題のようね。殺すなら、今この時をおいて無いと思いなさい」

「……わかった。行くぞ！」

ホリンは僕たちの方に突っ込んで来た。そして、手を前に突き出して詠唱を行った。

「吼える、魔炎！ ジェノサイドフレーム！」

僕とリサの目の前の甲板から溶岩が溢れ出した。

「……虚空より来たれ、無数の光。我が盟約を結びし精霊の加護を

得、無垢なる者を汝の血肉と化さん……………」

「ちっ、また禁呪の詠唱か！」

リサは大きく前方にジャンプした。どうやら、ミランダが何かしらの詠唱を始めたようだ。

溶岩の横から、炎を纏った剣を携えたホリンが突撃してきた。僕はその攻撃を軽く避け、さらに連続攻撃も避けた。

……なんたる。ホリンの動きがすごく見える。まるで、スローモーションのようだ。

あ、右からか。そうわかると、僕はレーヴァンティンの攻撃範囲から離れば、それで済む。しかもどの程度離ればいいのかもわかる。必要最低限しか動かなくていいんだ。

「この……………！」

ホリンが上から振り下ろした剣をほんの少しだけ右に避けると、ホリンの体は隙だらけだ。僕は試しに、ホリンの左の太ももを狙って攻撃した。すると、簡単に当たってしまった。

ホリンはすぐさま体の向きを変えて僕に攻撃してくるが、簡単に避けることができる。

ハハ……………のろいな。全部見えるよ。

「エヴラハウル」

どこからか、ミランダの声が聞こえた。

「くそ、止められなかった！ 空！ 上空に気をつける！」

リサの叫び声が届いた。僕はホリンから十分離れ、上空を見上げた。そこにあるのは、闇夜の空だったが……………なんだ、あれは。

隕石！？ そう、何百個の小さな隕石が上空から落ちてくる寸前だったのだ！ おいおい、そんなのありかよ！？

僕はその小隕石を避けようと考えた。その瞬間、声が響いた。

聖魔の波動、見せてやれ

「……集え、暗き闇夜に従いし者ども。漆黒の黄昏に誘え、忘却の魔人よ。その力に贅を与えん　グラノマーレ」

深淵の言霊につられるように僕は言葉をつづり、手を空中にかざした。すると、青黒い巨大な光が轟音を立て、上空へ浮かび上がった。その所々に、星のようなものや、銀河のようなものが浮かんでいた。そう、まるで宇宙に見えたのだ。

「な、なんだあ……？」

ホリンは上を見上げた。上空から今まさに降り注ぐとしていた無数の小隕石たちが、その宇宙みたいなものにぶつかると思えて無くなってしまった。

「消えた……だと!？」

ミランダも、上を見上げながら口を開けていた。その隙を、リサは見逃さなかった。

「空よ裂ける!

センケイシュウキヤク  
閃到襲脚!」

ミランダが気付いた時はもう、手遅れ。リサは目にも止まらぬ連続回転蹴りを行った。ミランダは甲羅のようにガードするが、かなりのダメージを受けているように見える。

「まだまだ!　烈靈黄波!」

掌をミランダの前に広げ、衝撃波で彼女を吹き飛ばした。

「ミランダ!」

ホリンはミランダのところへ行くつもりとした。けど、そんなことはさせない。僕はホリンの前に立ちはだかった。

「くそ……!」

ホリンは一段とレーヴァンティンの炎を溢れ出させ、僕に振り下

ろしてきた。それを避け、次の攻撃も軽く避け、さらには次のも避け、僕はホリンから離れた場所で、地面すれすれから剣を勢いよく振り上げた。

「なっ!?!」

僕の剣撃から放たれた衝撃波は、ホリンを捉えた。

「ぐうう!?!」

ホリンは斜め上空へ数メートル吹き飛んだが、彼は空中でうまく体勢を整え、甲板に着地した。左肩から一直線に、長い切り傷ができていた。

「くそが……くそがあ!?!」

ホリンは悔しそうに肩から呼吸をしている。肩が下がった瞬間に、赤い血が月の光に照らされ、ぼたぼたと落ちていった。

リサの方に目をやると、ミランダはなんと空中に浮かんでいた。

そして、ゆっくりとホリンの上空へ移動して来た。彼女は所々の服が破け、すでにいくつもの怪我をしていた。

「分が悪いわね……」

「……くそ! 所詮、俺は印を持たない人間だつてのか!?!」

ホリンは悔しさを込めた剣を、甲板に叩きつけた。

「なんだなんだ!?!」

どやどやと、男たちの声が聞こえた。それは、この船の海賊たちだった。この甲板と内部に繋がるドアから顔を覗かせているのは、巨漢のジョナサンだった。

「だ、誰だ! てめえら!?!」

「ちっ……邪魔な野郎どもがきやがったぜ」

さらにその奥から、たくさんの頭が顔をのぞかせた。

「お、おい、見えねえって！」

「押すなよ！ 倒れる！！！」

すると、将棋倒しのように数人が倒れていった。

「いてててて……誰だ！ 俺の船で暴れてんのは！！！」

その倒れた集団の中ほどから、レンドが立ち上がった。そして、辺りを見渡し、一言。

「お、俺の船が……！」

そういえば、ホリンの魔法で火の玉が出てきて、それが大爆発を起こしたんだった。まだ、火は残っていた。

「こ、こんちくしょー！ 誰だ！？ 俺の船をこんなにしやがったのは！！？」

レンドは大きく足音を立てながら、ホリンに近づいて行った。

「てめえか！？」

すると、レンドの足がピタツと止まった。

「て、てめえは……！？」

「ザコどもが……おい、グルヴィニア！ 出て来い！！！」

ホリンがそう叫ぶと、船の側面から来たのか、何人もの剣士や魔道士みたいな奴らが現れた。全員、黒い衣を纏っている。

「いいか！ てめえらはリユングヴィのやつとリリーナ以外のやつらを殺せ！！ 俺らの邪魔はすんじゃねえぞ！！！」

すると、後から現れたやつらは剣を抜き出した。

「……レンド！！ 指示を出せ！」

デルゲンが叫んだ。しかし、レンドはホリンの顔を見て動かなくなっていた。小さく、何かを呟きながら。

「お前、は……ブリアンを……」

「レンド！！ ……みんな！ 戦うぞ！！！」

デルゲンはみんなに指示を出した。みんなの顔は変わり、どこからか武器を取り出した。

「ソラ！ リサ！」

僕の元にヴァルバが走ってやってきた。その隣に、アンナもいた。「大丈夫か？ お前」

眉を曲げて、ヴァルバは走ってきたせい少し息切れをしている。「大丈夫だよ。それより、アンナは危険だ。早く部屋に……」

「そんな……！ 私も、一緒にいたいです！」

彼女はいつになく、大きな声で言った。

「アンナ、あんな……」

すると、リサが僕の前に出て来た。

「アンナ、いい？ あんたは戦うことなんてできない。ここにいるも、邪魔になるだけ。そしたら、みんなの死傷率を上げてしまうことになる。だから、空の言うとおりに部屋に戻りな」

「でも……」

「お願い、アンナ。これはあんたを護るためでもあるんだから」

リサは厳しくも、優しい口調で言った。さすがに観念したのか、アンナは俯いてしまった。

「……わかりました」

そう言うと、リサは大きくうなずき、戦闘状態になっている周囲を見渡した。

「ヴァルバ、あんたは出入り口の前に立って、敵が内部に進入しないようにすること。いいね？」

なるほど、そうやってアンナを安全にするわけね。

「わかった」

「それと、今現れた奴らは、たぶん暗黒魔法を使う。あれ、威力は大きいけど、詠唱破棄できない上に詠唱時間が長い。あれを詠唱し出した奴、つまり体の周りから紫色の光を出してる奴を狙いな。無防備だから。それと、絶対に喰らわないこと。死んじゃうからね」

「あ、ああ。それより、リサ、お前のその格好は……」

さっきから気になっていたんだろう、ヴァルバは彼女のワンピース

スを指差した。

「今はどうでもいいでしょーが！ ホラ、さっさとそれをみんなに伝える！」

「ハイハイ」

すると、ヴァルバはため息を漏らしながら走って行った。

「ソラさん、リサさん……怪我しないでください」

「ええ、ありがとね」

「ああ」

アンナはそう言うと、ヴァルバの後を付いて行った。

「怪我しないでって……もうしてんだけどね」

ハハハと、リサは手を広げて笑った。

「よし、空。そろそろ、あいつらも本気を出してくると思うよ」

「……まだ出してないの？」

「あれだけゼーゼー（ホリン）言ってるのに？」

「たぶんね」

僕はミランダとホリンの方へ向き直った。

「……ふん、これ以上でめえらの好きにはさせねえぜ。いい加減、疲れてきたしな」

ホリンはレーヴァンティンを前に突き出し、切っ先をゆっくりと床に向けた。これは、いつか見たような……。

「……万象一切、灰燼と為せ。終焉の業火、汝を煉獄の奈落へと誘え。今こそ、うつ世にその姿を現せ……」

すると、ホリンの剣の刀身が赤く光り輝き始めた。その切っ先から、まるでガラスが割れていくように、破片となって宙へ舞い始める。



40章：急襲！！ 血に塗れし黒き翼」2」

「煉獄・滅翔」

無数の刀身の欠片たちは弧を描きながらホリンを包みだした。そして、彼の足下に、彼を囲む炎の円環が出現した。

「靈帝の怒りを我が許に統べよ。銀箔の濃霧、漆黒の大地を照らさん」

ミランダは詠唱を始めた。しかし、もう間に合わない。詠唱が早い！

「ザヴェーロ……眠れ、凍結の棺の中に……」

「空！ 上空だ！！」

僕はすぐさま上を見上げた。小さな光の点がいくつもあり、それがだんだん大きくなり、巨大な氷柱となった。

「逃げる必要はない。僕が、さっきと同じように……」

僕は空に手をかざした。もう一度、さっきみたいにすればいい。

連続しての聖魔術の使用は、お前の限定されたエレメンタルを削る

それは即ち、未だ覚醒しきっていないお前にとっては大きな  
痛み

何言っただ？ この程度……

気付かないのか？

お前は力に溺れつつあるということ

「！！！」

僕は体が止まった。

力に溺れる……それは、ロキに蝕まれるということ。

すぐさま、手を引いた。しかし、ミランダの魔法は待ってくれない。氷柱の大群は、僕を目掛けて落ちてくる一歩手前だった。

「空！ ……仕方ない」

僕を見兼ねたリサは、素早く印を結んだ。

「崩せ、無限回帰へと ザヴェーロ！！」

リサはまったく同じ魔法を唱えた。しかし、ミランダの時のように氷柱が現れるわけではなかった。だが、奴が作り出した氷柱が消え去っていた。

「これは……相殺か！？」

「またよそ見か、ミランダ！」

リサはミランダ目掛けてダッシュした。その瞬間、真っ赤な紅蓮の炎が辺りを包みだした。その炎によってリサはミランダの所へ近づけず、跳躍して元の位置に戻って来た。

「な、なんなの？」

リサも何が起きているのかわかっていない。炎ということは、ホリンか？ ホリンの姿を探すが、どこにも見当たらない。巨大な炎が、船の半分を包みだした。

「お、おいおい！ 何だこの炎は！！？」

ルーシーの大声が夜空に響いた。誰もが、この炎がなんなのかわかっていないようだ。いや、ミランダはわかっている……？

すると、炎がある所に集まり始めた。巨大な烈火の炎は凝縮され、人を包む程度となった。渦巻く炎の中心に、ホリンが立っていた。炎の中にいるのに、焼かれてもいない。

「今まで好き勝手やってくれたなあ！」

ホリンは僕たちを睨みつけながら笑った。あれは……ホリンの炎か！？

「さーて、こんがりと焼いてやるよ！！！」

そう叫ぶと、奴は渦巻く炎の中心で片手をかざした。

「焼き尽くしやがれえ！！！」

ホリンは勢いよく手を振り下ろした。すると、それとほぼ同時にホリンの周りの巨大な炎が、まるで恐竜のように先端を大きく開き、僕たちへ突撃して来た。

「な、なんじゃありや！？」

僕とリサはそれを走りながら避けた。しかし、炎はすぐに方向転換し、僕たちの方向へ向かって来る。

「どーなってるんだ！？」

「……どうやら、奴の意思どおりに動くってことらしいわね」

「冷静に分析すんなよ！」

「あーんたが質問して来たんでしょーが！」

僕たちが二人でギヤーギヤーわめいていると、ホリンが叫んだ。「ハハハ！ 理解したって遅い！ この煉獄の炎から逃れることはできねえんだよ！」

烈火の炎は僕たちを執拗に追いかける。これでは、攻撃することはおろか、奴らに近づくことさえかなわない。

「虚空より来たれ、無数の光。我が盟約を結びし精霊の加護を得、

無垢なる者を汝の血肉と化さん。命脈よ、断罪の心にて断ち切れ」  
ミランダの声が聴こえる。これは……

「葬る！ エヴラハウル！」

ミランダは再び禁呪を唱えたようだ。くそ、またさっきの小隕石の魔法か！

「どうすんだ！？ 小隕石が降ってくるぞ！」

僕は追ってくる炎を避けながら叫んだ。

「私が相殺すればいいんだけど……お願い、空！ この炎をどうにかして！」

「ど、どうにかしてって……無茶言うなって！！」

「この炎は、まだ一つしかない。だから、一か八か二手に分かれるよ！」

そうか、二手に分かれれば、炎は2人のうちどちらか一人しか追いかけることはできない。

アイコンタクトで僕とリサは立ち止まり、炎が迫ってくるのを待った。そして、目の前に来た瞬間、二手に分かれた。だが、追いかけてくるかと思ったら、そのまま炎は直進して行ってしまった。

「な、なんかチャンスみたいだぞ！？」

「わかってるよ！」

リサは自分の体の前で素早く印を結んだ。しかし、さっきの炎がリサへ向かって行った。

「やらせるかってんだあ！！」

ホリンは叫んだ。リサが危ない！ 僕は手をかざした。

待て、何をするつもりだ？

意識の奥で、リユングヴィが叫んでいる。  
決まってるだろ？ あの炎を吹き飛ばすんだ！

貴様……正気か？ 自分を失っても知らんぞ

やる前からうつせえな！ ここで死んでほしくねえんだろ！？  
いいから早く教える！！

手を前に出し、集中すればいい

僕は言われたとおり、手を前に突き出し、掌に力を溜めるかのよう  
にイメージした。そして、あの炎目掛けて、何かを放つようにイ  
メージした。

「!?!」

すると、僕の左手から、大きな青透明な光が飛び出て来た。それは  
レーザー光線のように、一直線だった。

青い光は巨大な炎に当たり、相殺するかのよう弾けて消えた。

「ば、馬鹿な！！ 俺の魔炎が消えただと!?!」

「よくやった、空！」

リサは詠唱を再開した。彼女の体を、不思議な魔方陣が囲む。

「崩せ、無限回帰へ！ エヴラハウル!!」

一瞬にして印を結び、それを唱えた。すると、さっきミランダが  
唱えた ザヴェーロ とかっていう魔法が消えたように、上空に見  
えていた小隕石が光を放って消えてしまった。

「相殺の詠唱破棄……なんて奴……!!」

「くそが!! なんて消えやがった!!」

ホリンもまた、悔しそうに叫んだ。しかし、再び炎が彼の回りを渦巻きだした。いくらでも、出せるということか。

ドクンッ

「ぐっ!!!?」

急に、胸が締め付けられるような痛みにも襲われた。それとほぼ同時に、頭を鈍器で叩かれているような痛みも出現した。

「な、なんだ……これ、は……!!?」

僕はその場に崩れた。呼吸がうまくできない……!

馬鹿が、忠告したというに

「リュ、リユンググヴィ……?」

声がかすれる……まずい。

膨れ上がりすぎた能力に、今の肉体の檻では抑えきれん  
このまま、自我を失って傾いた力に流れ込む

「なんだ……と……?」

せいぜい足掻くんだな  
じゃあな、空<sup>セウエス</sup>

意識の底で呟いていた感覚は消えたその瞬間、視界が歪み始めた。  
「ハハハ！ 所詮、中途半端な覚醒か。器が力自身に蝕まれてら」  
ホリンは笑いながらゆっくりと近づいてきた。

「ホリン、暴走する前に早く始末しなさい」  
「んなの、わかってるよ」

ホリンは腕を振り回し、炎を獰猛な嵐のように動かした。  
ちくしょう……やられるっていうのか？ こんなところで……！

「空！ 私の声がわかる！？」

彼女はしゃがみ、僕の背中に手を置いた。

「リサ……」

ダメだ……彼女の顔さえ、ぼやけてはつきりと見ることができない。  
「待つてな。あんたの侵食を食い止めてやるから……」

と、リサは目を瞑り、僕を抱き寄せた。

「……リ、リサ……な、にを……」  
「黙ってな！」

そう叫ぶと、彼女の大気を吸い、ゆっくりと吐きだす音が聴こえた。

「何をしようとしてんのか知らねえが……まとめて死にやがれ……」  
ホリンは巻き上げた炎を、僕とリサのところに飛ばして来た。炎は勢いよく、唸りを上げながら向かってくる。

リサ……どうするつもりだ……？

「大丈夫……心配しないで」

もつろつとする意識の中、彼女は僕を強く抱き締めた。  
その時、リサの周りに黄金の光の粒子が浮かび始めた。この甲板  
の床から、染み出てくるかのように沸々と浮かぶ。  
それらは壁となり、ホリンの炎を弾き返した。

「ど、どういうことだ!? これは一体……」

「光の結界? クリスタルシエルじゃないわね。……あれは……ま  
さか、聖魔術!?!」

なんだろう……痛みが和らいでいく。

「生命の言霊……永遠の礎となりし、あまねく想い……。我が天使  
の歌声に触れ、覆い尽くす冥い残像を浄化せん……」

心地良い詠唱……いや、まるで歌のようだ……。激しかった動悸  
も、痛みも遠のいてゆく。眠くなってきそうなほど、気持ちのいい  
……歌。

僕たちを包んでいた光の粒子は、より一層輝きを増し始めた。

「 ジェ・レル・ヴェスナ・セスタ ……悠久なる精霊の灯火  
よ、我らが幼子を護りたまえ……」

この詠唱は……!?

光たちは僕に吸収されるかのように、体に溶け込んでいった。  
完全に、痛みも違和感も……消えていた。

ほう、さすがあいつの……あいつらの『影』だけはあるな

ほくそ笑むような声が聴こえた。それが何を意味するのかを考え

ようとした瞬間、

「ぎゃああああ!!」

人間の叫び声が聞こえた。僕たちはその方向に目を向けた。一人のインドラの兵士の首から、噴射のように血が吹き出していた。ホリンが起こした紅蓮の炎によって、辺りは明るくなっていたのでよく見えた。

「ホ、ホリン様! 何者かが、我々の船を……!!」

一人のインドラ兵士がホリンのもとへ走ってやって来た。

「何い? 誰だ? 誰がやった?」

「そ、それが、顔を隠してよく見えないのです!」

兵士はオドオドした様子だった。その言葉で、僕を含めてホリンとミランダは、誰がそれをやったのかを理解した。

「漆黒の野郎かあ!!」

ホリンは怒りを露わにした。僕たちに背を向け、兵士が指し示した場所へ行こうとした。

「ホリン! 待て!」

ミランダが走って行き、ホリンを引き止めた。

「何だ!？」

奴は鬼の形相で、ミランダの方に振り向く。

「……引くぞ。これ以上は危険だ」

「危険だとお? 何がだ!？」

「漆黒の剣士の戦闘能力は……認めたくはないが、我々を凌駕している。ここは、一度引いた方が得策だ」

「馬鹿言つな! 俺は以前、あの野郎に負けて逃げたんだ!」

ホリンは仮面男のことを知ると、頭に血を上らせ、激昂していた。「リサや空を相手にしながら、漆黒の剣士へ対抗することは無理だ。

お前は、敗北すると知っていて戦うのか？」

「るせえ！！ 俺が……この俺があ野郎に負けるか！」

ホリンはミランダを振り払おうとした。しかし、

「待て！ ……ウラノスは今回のことについては、私に決定権があると言った。お前は、私に従わなければならない」

「何だと……！！？」

ホリンはミランダに向き直った。それと同時に、また誰かの断末魔の叫びが轟いた。たぶん、仮面男がやったのだろう。

「ホリン……今の私の命令に従わないことは、ウラノスに従わないことだ！ それが聞けないのか！？」

「……くっ……！！」

ホリンは歯ぎしりを立てていた。

「どうなんだ？ ホリン！」

「……くそがあー！！」

最後の悔しさの叫びを残し、彼は空間転移の魔法で光の柱の中へと消えて行った。同時に、燃え上がる炎も消え去った。

「……退却する。残った者たちは、臨時用の船を使って本部へ……」

ミランダは怪我をした部分を押さえながら、ゆっくりと僕たちの方に向き直った。

「……リサ」

「何よ？ 帰るんだったら、早く帰ってくんない？」

と、リサはめんどくさそうに言う。

「……どーでもいいんだけど、さっきからずっと抱きしめられたまんまなんですけど……」。

「あなたがしようとするのが……正しいと思う？」

ミランダは内出血で青いあざができている右の二の腕部分を抑えていた。

「正しいと思っっていることが、必ずしも最良の結果を生むとは限らない。リサ、あなたが自らがすることを正しいと思うように、私たちもまた、自分たちのことは正しいと思っっている……」

「……殺すことが、正しいわけ？」

リサは小さい声で言った。

「殺さないことが正しいわけ？ ……いいえ、どちらも正しく、同時に間違い。そうでなければ、答えなんてとうの昔に悟っっているのだから……」

ミランダはそう言い残すと、ホリンと同じように光の柱を出現させ、その中へと消えて行った。

「……私だっつて、そんなことわかってるよ……」

彼女はミランダが消えて行った場所を睨みつけていた。

「そんなの……私だっつて……！！」

「リサ……」

その時、一人の男がジャンプして甲板に上ってきた。

漆黒の剣士だ！

彼は逃げていくグルヴィニアたちを放っておき、僕とリサの所へ歩み寄って来た。

「……あんた、何者？ やつらの血相を変えさせるほどなんだから

……」

「リサ。以前、フォルトウナ神殿で僕たちを助けてくれた男だよ」

「ああ……なるほど」

仮面男はなぜか小さくうなずき、甲板から海に向かってジャンプをした。

「なっ！？」

デルゲンが慌ててその姿を追ったが、すでに彼の姿はどこにも見当

たらなかった。どうやら、ミランダたちのように空間転移の魔法でも使ったのだろう。

「……ふう、ようやく解けられるね……」

リサはそう言つと、光の結界を解いた。暖かく感じていた空間が閉じたため、闇夜の寒さが体にまわり付いてきた。

「……リサ、さっきのは……」

言いかけた瞬間、彼女は人差し指で、僕の唇に触れた。

「そんなことはどーでもいいから。……ね？」

「……………」

リサは立ち上がり、ヴァルバたちのもとへ走って行った。どうやら、インドラの兵士たちも全員、姿を消したらしい。

「……まったく、船の上で襲いやがって……」

朝日が少しだけ頭を出した頃、デルゲンはボロボロになってしまった船を見て、ため息混じりに言った。

「ハハハ、みんな無事だったんだから、よかったじゃないか」

ヴァルバは大声で、しかも笑顔で言った。

「お前は陽気だなあ……。ま、たしかに誰も死ななかつたから、よししようか」

レンドの仲間たちもみんな、無事なようだ。ただ、その中でリサは疲労が激しい。床に座り込み、大きく、肩で呼吸している。アナは心配そうに介抱している。

「そつだ……空、あんたミランダのヴェルニスカを喰らったわよね？」

リサは少し、やつれた声で言った。

「そう言えば……それがどうかしたのか？」

「あの時言ったでしょ？ 毒ガスだって」

「わかつてるよ。けど、今のところは何ともないし……」

「まったく……ホラ、これ」

リサは僕に何かを投げつけた。これは……薬？

「それは解毒剤。今は症状が無くても、時間が経つと体を蝕んでくる。魔法でも治せるんだけど……今はちよつと疲れたから」

そう言つと、リサはぐつたりと横なるように寝そべつた。魔法や禁呪を使つたりして、体を酷使したのだろう。

僕はリサからもらった解毒剤を口に運んだ。

「……うええ、不味い……」

かなり不味い……というより、苦い。思わず、口から舌を出してしまった。だが、体のためだ。ちゃんと飲まないと。

「何かと、お疲れのようだな」

ヴァルバが歩み寄つて来た。

「……かなり疲れた」

僕は大きいため息をつきながら、甲板で大の字になった。

「奴ら、何が目的で俺たちを襲つたんだ？」

「……目的は、僕とリサを殺すことだったらしいよ。僕の聖魔の力が覚醒する前に、殺そうとしたんだよ」

「なるほどな。どうやら、インドラの連中はよつぽど、お前に覚醒してほしくないんだな」

朝日とは逆の方向を空を見つめ、彼はため息を漏らした。あつちの空は、まだ暗い。

「……あんまりうれしくないな。とはいえ、本人でさえ覚醒するとどうなのかわかんねえけど」

覚醒、覚醒だと言つけど……どうなるんだろ。ユリウスみたいに、全てを破壊し尽くすほどの力を得るってことなのだろうか。

「詳しくはリサに聞いてみたいところだが……今のあの様子じゃあ、無理だろうな」

ヴァルバはリサに目をやった。リサの額には汗が浮き出ており、アンナに膝枕をしてもらっている。

「……無理させちゃったな」

そんなリサの姿を見て、声が漏れた。

「リサにか？」

「ああ。……後でお礼言つとかなきゃな」

「……たしかに、あの姿を見ると惚れてしまうのも無理はない」

ヴァルバは腕組みをして、偉そうに言った。

「何の話だよ……」

そりゃあ、見惚れるほどの美人でしたけど。

「惚れたる？」

「惚れてません。見惚れましたけど」

「ほらあ、やつぱし」

ニヤついた顔で、ヴァルバは僕の頭を押した。

「はあ……もう勝手に言ってるよ」

「お？ 認めるのか？」

「……疲れたんだよ。もう、部屋行って寝る……」

僕は立ち上がって、通路のドアへ向かった。すると、誰かが大きな音を立てて倒れた。

「お、おい！ どうしたんだ、ジョナサン！？」

サンガの声が響いた。倒れたのは、ジョナサンのような。僕はその場へ駆けつけた。ジョナサンは顔を真っ青にして、息が切れている時のように呼吸をしている。

「どうした？」

レンドが駆けつけた。

「く、苦しい……ゲホ、ゲホッ！！」

ジョナサンは乾いたせきをしていた。しかも、いきなり震えだした。

「ジヨナサン、大丈夫か？」

デルゲンはしゃがみ、ジヨナサンの額に手を置く。

「……熱は無いようだ」

じゃあ、風邪とか病気とか、そういうもんじゃないのか？

その時、ジヨナサンは一層大きなせきをした。そのせきと共に、真っ黒なドロドロの液体が出て来た。

「うっ……な、なんだ？　これは……」

デルゲンは少し体を引いた。ジヨナサンには悪いが……すごく気持ち悪い。

「　　ジヨナサン。あんた、暗黒魔法を喰らったね？」

リサがジヨナサンの横に来ていた。ふらつく足で、アンナに支えられながら。

「暗黒、魔法……？」

「インドラの兵士たちと戦う時に、魔法を受けたかって聞いているの」

「魔法……たしか、に……受けたな。軽く、触れた、だけだったけど……」

「……そう……」

リサは眉をしかめた。

「なあ……どうなるってんだ？」

サンガが訊ねた。

「……　　暗黒　に侵されてる。もう、助からない」

「えっ……」

みんなの動きが止まったかのようにだった。

「ど、どうということなんだ！？」

レンドはリサに問いかけた。

「……　暗黒魔法特有の付加能力で、　暗黒　がある。古代ティルナノグ人は、数多くの状態に異常を引き起こさせる魔法を作り出した。さっき、ソラもその類の魔法を受けていた。だから、私は状態を治

す薬を渡したの。暗黒魔法も、状態異常を引き起こさせる魔法の一種さ」

「じゃあ、薬で治せるんじゃないのか？」

「……暗黒は、必ず人を死に至らしめる最悪の状態異常。……治すことはできない」

「そ、そんな……！ いや、何か方法があるんじゃないか！？」

お前、ラグナロクの間人なんだろ！？ どうにかしてくれよ……！」

レンドはさすがのように、リサに問い詰めた。

「お、おいレンド……落ち着け！」

「お前はただの間人じゃねえんだろ！？ どうにかできんだろ！？ デルゲンの制止も全く効かず、レンドはリサに詰めかかる。

「……2000年以上も前に、今の文明を遥かに凌ぐ文明を築き上げたティルナノグ人が、この暗黒を治す術を見つけてくれたが、危険な術として封じたものを、今の私たちで治すことができないわけないだろ！！ 現実が見たくないからって、私に当たるな……！」

リサは今まで見たことがないほど、大声で言った。レンドは、目を見開いたまま、プルプルと震えていた。そうかと思うと、強く目を閉じ、唇を噛みしめていた。

「……お、俺……死ぬのか……」

ジョナサンが小さく呟いた。

「ジョナサン……」

レンドはしゃがみ、ジョナサンの手を握った。

「……ああ、お前は死ぬ。もう、どうにもできない」

「レンド……そんな風に言わなくても……」

僕がそう言うと、彼は首を振った。

「俺はお前のボスだ。……言い残したいことがあるなら、言え。それをお前の『在り処』に送り届けてやる」

「レン、ド……」

ジョナサンは弱弱しく微笑んだ。

「……あなたに……負けたのが、未だに……悔しく、てよ……」

ジョナサンの呼吸は、さらに荒くなっていた。

「もう一度……あなた、と……勝負した、かった……」

「……そんなことが、最後に言いたいことなのか？ そんなんじゃないねえだろ……！」

彼の言葉を振り払うかのように、レンドは顔を振った。

「ハハ……そう……だな……最後……の、最後まで……俺は……意地ばっか……り張って……ゲホゲホ……！」

再び、あのどす黒いものが吐き出された。もしかして……これは、暗黒に侵された血液なのか……！？

「ああ……本当……は、謝りた、かったん……だ、よ。わが、まま……ばかり……言って、迷惑かけ……て……親父……と……お袋に……」

ジョナサンは、両目のまぶたを静かに閉ざした。

「ジョナサン……！」

レンドは、もう力がなくなりってしまったジョナサンの右手を、両手で力強く握っていた。彼の目から、ジョナサンの顔に涙が落ちていくのがはっきりとわかった。朝日が、その涙を照らしていたから……。



## 41章：ソフィア教国 神々に祝福された地へ

「レンドは……まだ部屋か？」

ヴァルバは部屋の片隅で、デルゲンに訊いた。

「たぶん、な」

デルゲンの言葉には力がなかった。ジョナサンが死んでしまつてすでに1日ほど過ぎた。ジョナサンの体は、海賊のしきたりで海へと還つていった。

「……リサ、暗黒魔法っていうのは、詳しく言うかどうかというもの何だ？」

僕はベッドで横になっているリサに訊ねた。彼女は天井の木目を見つめ、言った。

「……ティルナノグが建国された頃、当時の先進技術を全て担当していた科学者が発明した、いくつもの対人用兵器……その中で、魔法として生成されたものの一つが暗黒魔法。正式には暗黒術。最・上・中・下の4つがあつて、どれも付加能力で 暗黒 がある」

「そこらは、普通の魔法と同じなんだな」

「暗黒は空が受けた 毒 をさらに強力にした 猛毒 のようなもの。 毒 よりも潜伏期間が短く、受けてから数分〜数十分で発症、致死率は100%。しかも、発症すると治す術は無い」

致死率100%……ゾツとする。

「……あまりにも強力で惨殺、しかも暗黒を治す術を見つけることができず、後世のティルナノグ人はそれを禁呪として封印した」

「そんな危険なものを……インドラの連中は復活させたのか……」  
デルゲンは怒り混じりに言った。

「いや、実際に復活させたのは……ミッドランド皇帝アルヴィス1世よ」

「アルヴィス1世？ 魔王と恐れられたっていう……」

ヴァルバが言った。たしか、ロンバルディア大陸を一時的に統一した皇帝だ。今から1000年ほど前になるか。

「彼は禁呪を復活させた。それこそが、彼の従えた騎士団の無戦無敗の理由さ。……滅亡後、その研究の一部がルテティアへ持ち込まれ、インドラから古書などの情報を手にしたステファンⅡロベスピエールによつて再び復活したのよ」

リサは小さくため息を漏らし、続けた。

「ステファンは科学者・考古者としても権威のある人物だけど、欲が大きく、そこに目を付けたインドラが彼に協力したんでしょね。たぶん、世界の霸王にしてやるとか言つて」

「そんなことを、あのじじいは言つてたな」

やれやれという顔で、ヴァルバはイスに座つた。

「……ま、ステファンはインドラに、いいように利用させられただけなんでしょうね」

あの時のシュヴァルツの口ぶりからして、そうだろうな。……今となつては、哀れとしか言いようがない。

「治す術が無いなら、これから奴らと戦うのに苦戦を強いられそうだな」

当たれば死に至る。ということは、こつちとしてはかなり不利になる。

「……治す術は無いけど、予防することはできる」

「そうなのか!？」

「毒とか、眠りとかの状態異常を阻止する、補助魔法つていうものがあるの。これを戦う前におけば、暗黒にかかるとは無いです。ただ、その魔法の効果は長くないから、戦つてわかつている直前に使用しないと、効果は望めないと思う」

リサはゆっくりと目を閉じた。まだ、疲れているようだ。

「……それに、今の私じゃあ、みんなにかけてあげることではできない  
い……」

「リサ、やっぱり体調が悪いんじゃないか……」

僕はリサの傍へ行つた。闘いが終わつてからというもの、彼女の青ざめた顔色は一向に治る気配を見せない。

「……私が使つた魔法とかはね、もう失われてしまった魔法……そう、禁呪なの。空間転移の魔法と同じさ」

「禁呪……」

前からよく聞いてはいたが、実際にはどういうものか知らない。

ただ、今存在する攻撃魔法を遥かに凌駕する魔法であることは確かだ。

「禁呪は詠唱が難しいため、詠唱破棄なんてできない。……普通はね」

と、リサは自分の掌を見つめた。

「光の民……ラグナロクの一族の持つ強大な魔力を持つてすれば、大量のエレメンタルを消費して詠唱破棄できる」

なるほど……だからこそ、ミランダは詠唱破棄できたことに驚いていたのか。

「……ミランダも私と同じ聖霊術師だけど、元からの出来が違うからね」

強力な格闘技を使えて、しかも魔法に特化したミランダを超えるほどの魔力……想像していたとはいえ、これほどまでにリサが強いとは思わなかった。あの細い体のどこに、そんな力があるのだろうかと思つてしまう。

「ただ……何回も行使すると、体内のエレメンタルを無くしていつてしまうから、力が出なくなるの」

リサは見つめていた手を、僕たちに見せるように出した。その手は、小さく震えている。

「……今は、たかが下級魔法さえも使えない状態。もし、この状態で禁呪とかを使うものなら体の元素は消失し、分子と元素の乖離現象が起きて死に至るでしょうね」

「……!?!?」

リサは驚く僕を見て、首を振つて微笑んだ。

「大丈夫よ、空。……時間を置いていけば、直に回復するからさ」  
そうはいつても……僕のせいで、禁呪の詠唱破棄を何度も行ってしまった。その罪悪感は、拭い去れない。

「……デルゲン、お願い。空たちをソフィアへ連れて行ったら、シユレジエンへ連れて行ってくれない？」

「……どういうつもりだ？」

ヴァルバは問いかけた。

「今の私じゃ、あなたたちに付いて行っても、邪魔になるだけだからね……」

「だが……」

「シユレジエンへ行つて、クロノスに頼めばすぐに回復させてくれる。そうすれば、空間転移の魔法を使って、ソフィアまで行ける。……こうしたほうが、時間はかからないからさ……」

ヴァルバは何も言わず、大きくため息をついた。渋々ながらも、納得したようだ。

「それをお願いできる？ デルゲン」

「……俺の一存じゃあなんとも言えないが……まあ、一度シユレジエンに行かないといけないからな。いいぜ」

レンドが船長ではあるが、今はデルゲンが船長のようなものだ。

仕方ないと言えば、仕方ないが。

「……どうして、デルゲンさんたちはシユレジエンへ、また戻るんですか？」

ベッドの端に、ちよこんと座っていたアンナが訊いた。

「ジオナサンの親御さんに、知らせなきゃならないからな」

「あつ……そうなんですか……。すみません……」

「ハハ、謝る必要はないよ」

デルゲンは頭をかいた。

「……あいつの親はもう10年以上、息子と会っていない。だから、せめて海に還ったことだけは伝えないと」

微笑みながらも、その目には哀しさがこもっていた。それを払拭

するかのようになり、デルゲンは手を叩いた。

「さて、出航の準備をしようか。半日もレンドを動かさないのは体に悪いからな」

デルゲンは笑いながら、部屋を出て行った。

「……知っている人が死ぬのは、辛いな」

僕はボソツと呟いた。

「まあな……。生と死は一つの直結する道。それが早いか、遅いか……。けど、運命の神様がいるなら、理不尽な死を与えないでくれて言いたいよな……」

ヴァルバの言うことは、最もだ。だけど、神様なんて信じない僕にとつては、運命も信じない……。けれど、実際はどうなんだろう。その答えが知りたくても、生きている間に知る術は見付からない。もしかしたら、死んでしまった後に、知ることができるのかもしれないけど……。

一週間後、船の修理のためにミレトスへ寄った。どうやらこの港からソフィアへの乗客船があるらしく、それに乗ることとした。修理するのに、約10日あまりかかると思われるからだ。

「レンド、デルゲン、それに他のみんな……」

「おいおい、俺たちの扱いは適当だなあ」

僕がお礼を言おうとした時、ルーシーが笑いながら遮った。

「ご、ごめん。とにかく、わざわざ船に乗せてくれてありがとう」  
僕たちは一礼した。

「レンド、リサを頼むよ」

「ああ。任せとけ、ソラ。どうやらこいつはちゃんとした服を着れば、思ったよりいけると知ってたわけだし」

レンドはリサを指差しながら言った。リサはあの日以来、女性の

服を着ようとしない。あまりにも、大勢の人に目撃されたからだろう。

「う、うるさい！ 服を着ないとかわいくないみたいなのを言うな！」

「ハハハ、なかなか可愛げのあるところもあるじゃねえか」

と、笑い始めたレンドの腹部にリサの正拳突きが炸裂。音もなく、レンドは砕け散った……。

「ハ、ハハ……なんだかんだで、リサは元気だな……」

「まあな。……ああやって、照れているリサもかわいいもんだな」

僕の耳元で、ヴァルバが言った。リサはそれに気付いたのか、ヴァルバを鬼のような形相で睨んだ。

「ヴァルバ！ 今、なんて言った!？」

「へ？ い、いや……その……ごめんなさい」

ヴァルバの言葉は、恐れのためか小さかった。ていうか……ちょっとした誉め言葉だったような気がしなくもないんだが……。

「まあまあ、落ち着けて」

デルゲンは笑いながらリサをなだめた。

「笑うな！」

リサはデルゲンにアッパーカットを食らわした。おお……さすが殺人格闘術の使い手……手が早い。

「と、とにかく、リサをシュレジエンへ連れて行ったら、俺たちもすぐに聖都に行くからな」

レンドは悶絶しながら言った。せつかくのセリフも、その姿じゃ台無しだ。僕たちは笑いながら、うなずいた。

「ああ、頼りにしてる。……じゃあ、みんな、また聖都で」

こうして、僕たちはソフィア教国へ。レンドたちはリサを乗せて再びシュレジエンへ。

その頃、とある宮殿の内部。大きな円形のテーブルに、一人の男が座って、国語辞典ほどの厚さの本を黙読していた。

「ウラノス、ただいま帰還しました」

テーブルの前方に、ホリンとミランダがやってきた。二人の服はボロボロで、傷口を手当した姿が見てとれる。

「ご苦労様。さて、報告を聞こうか」

パタンと本を閉じ、ウラノス　ユグドラシルは彼らを見据えた。

「……失敗しました」

悔しさで顔を歪め、ミランダは小さく頭を下げた。その姿を、ユグドラシルは何も言わず見ていた。

「ふーん………彼は、それほどのものだったのか？」

頬杖を突き、ウラノスはどこかニヤついていた。

「いや………奴は、聖魔の力がある程度引き出せるようにはなっていないが、覚醒するまでには至っていない」

ホリンは思っていた。

聖魔術の高速発動………身体・特殊能力の急激な増大………覚醒しきっていない。じゃあ、本当の『調停者』として覚醒すれば、俺は………「それで、お前たちはそんな奴から逃げおおせたのか？」

『その時』のことを想像しかけた時、ホリンは現実に引き戻された。

「………俺たちを付け狙う、漆黒の剣士が邪魔に入ったんだ」

「………」  
漆黒の剣士。

その言葉一つで、ユグドラシルの目色が変わったのは言うまでもない。

「奴の参戦で我々が分が悪いと思い、撤退しました」

ミランダは淡々と説明する。

「……漆黒の剣士、か……」

何度も何度も自分たちの邪魔をする、謎の剣士。自分たちを邪魔するというのはなら……二人を引き返させるほどの能力があるならば、殺せるはず。

なのに、殺さなかった。

「申し訳ありません……」

ミランダは頭を下げた。彼女は、横眼でホリンにそれを促せた。

「……すまねえ」

ホリンは性に合わないのか、ぎこちない謝り方をした。その姿を見て、ユグドラシルは思わず微笑んでしまった。

「いや……気にしなくていい。これからのことはまた後日、話そう。下がっていいぞ」

「はい……」

ミランダとホリンは一礼すると、その場から立ち去った。

その時、

「なんだ？ 結局、ダメだったのか？」

いつの間にか、一人の男がユグドラシルの背後に立っていた。ユグドラシルは気付いていたのか、振り向きもせず、イスに深く腰掛けた。

「リオン、どこに行っていた？」

暗闇の中から、リオンと呼ばれたはろうそくの灯りが届くところまで足を進ませた。

「どこつて、そりゃ監視に決まってんだろ？」

微笑みながら、リオンは言う。

「……お前、ホリンたちが闘うところを見ていたのか？」

「まあ、な。気配を消す程度、なんてことはないからな」

「……………」

リオンはクククと笑いながら、宮殿を支える巨大な大理石の柱に背中をかけた。

「それにしても……不甲斐ない奴らだな」

灯りの行き届かない奥を見つめ、リオンは呟いた。

「……印を持たない人間では、印を持つ人間には敵わない……結局、そういうことか」

あの血に勝ることは、一般人にはやはり無理ということか。

ユグドラシルはドーム状の天井の中心部分を見つめ、小さくため息を吐いた。

「印、ねえ……………」

その時、リオンは笑いを堪え切れずに、口に手を当てていた。

「……何がおかしい？」

訝しそくに、ユグドラシルは言った。

「おかしいだろ？ たかが普通の人間が、特異な人間に敵うはずはない。そう、『神に人間は勝てない』のさ。わかりきってるのに、

あいつらと言ったら……………」

と、再びリオンは笑い始めた。

「……………」

「ククク……………」ところで、シュヴァルツとバルバロッサは？」

笑いが収まったところで、リオンは訊ねた。

「シュヴァルツはすでに帰還して、用意をしている。バルバロッサは 聖典 の搜索を引き続き、行っている。……あいつも、奴らが

聖都に来たらこちらへ向かうことになっているがな」

「ふーん……………そろそろ、事は大きく動きそうだな」

「とはいえ、諸侯が集まるまでもう少し時間がかかりそうだな」

「巫女の覚醒を考えれば、ちょうど良いんじゃないのか？」  
「……そう、だな」

巫女。

最後の巫女 日向空。

星の元素を持つ、唯一無二の存在……か。

「まあいい。俺は一眠りさせてもらうとするよ。浮遊魔法を使った  
りして、体内元素が消耗したら」

リオンはそう言って、再び暗闇の中へ消えて行った。

「……………」

ろうそくの火だけに照らされる宮殿は、光の届かない闇の中に、  
何かが潜んでいそうな雰囲気を漂わせていた。

怖い？

別にそうでもないかもな……

自分で選んだ道だから

後悔など、しない。

貿易都市ミレトスを出航して約一週間。僕たちは、ソフィア教国の最東端である、港町ペルルークへ到着した。

「ふう…… やつと着いたか」

ヴァルバは大量の荷物を抱え、一息をついた。

「やっぱり寒いけど、シュレジエンとかに比べればマシな方だな」

「そうですね。ぼかぼかした陽気が気持ちいいです」

アンナは大きく背を伸ばした。暖かいとはいえ、冬用の服装は欠かせない。

町を眺めると、大きくはないがミレトスのような町並みが並んでいる。白を基調とした建築物。ギリシャ風だ。さらに、教国なためか大層立派な教会が建っている。十字架が飾られているのは、ソフィア教がキリスト教みたいなものだからなのだろうか。

以前、レンドが言っていたように、貿易などのために多くの商人たちの姿が見える。閉鎖される前から、ソフィア教国の中でも随一の交易都市であるペルルークは、教会への寄付だけではなく商いを目的とした人々がたくさん訪れるのだという。

「さてと、聖都に行くか」

商店街を歩きながら、ヴァルバは言った。この商店街には、活気を取り戻した港町の匂いがある。そこかしこに、魚介類が並んでいる。教会の建物とはミスマッチングだな。

「ヴァルバ、聖都までの道知ってんの？」

「一応、な」

と、ヴァルバは白い歯を見せて笑った。

「もしかして、来たことあるのか？」

「いや、来たことはない。ただ、聖都はこの町の近くだという話を聞いたことがある」

「じゃあ、教会に行つて訊いてみたほうがいいんじゃないですか？」

「初めて来た土地だもんな。それに、ヴァルバの言うことはあんまり信用できないし」

「聞き捨てならないなあ」

ヴァルバは微妙に笑いながら言った。顔が引きつっている。

「だって、砂漠じゃあお前のトンチンカンな道案内のせいで、死に掛けたんだぞ？」

それを言つと、ヴァルバの口元が引きつった。

「そ、それはな、たまたま……」

「お前、リサから聞いたけど、あの砂漠で何度も行き倒れになつたんだつて？」

「ま、まあ、とにかくだ。俺たちは聖都に行かなきゃならない。そうだろ？」

「本題に戻すなよ……」

「教会に行くか！ 念のために！」

勝手に引つ張るヴァルバ君。呆れつつも、ヴァルバラしくて面白い。とても、自分の倍近くの年齢だとは思えない。

僕たちは町の中央に尖つた塔を持つ、大きな白い教会へと向かつた。近くへ行つてみると、その教会はなかなか高く、重厚な扉がある。教会の脇には小さな噴水や庭園があり、華やかさを感じさせる。教会の扉の前に立っている、聖職者っぽい（にこやかな顔をしており、白いローブを着ている男性）人に訊ねたみることにした。

「あのー、すみません、聖都ってどうやって行けばいいのか教えてくださいませんか？」

「ソラ……なんでじじ臭い言い方なんだ？」

聖職者のおじさんは、僕たちの顔を眺めた。

「おや、巡礼の方々ですか？」

そのおじさんの声は、想像していたとおり、温厚なタイプの声だった。

僕はいまいち意味がわからず、一步後ずさりしてヴァルバの耳元で言った。

「……なあヴァルバ、巡礼……っていうことにした方がいいのかな  
うーん、どうしようか。アンナはどう思う？」

「えっと……いいんじゃないですか？」

「いいのかよ……」

「ソラ、とにかく巡礼ということにしておこうぜ。めんどくさいし」

「お前な……」

相談した意味がないなあ……。

「どうされたのです？」

おじさんの声で、思わずビクツとしてしまった。

「あ……まあ、いちおう巡礼です」

僕は自信なさげに言ってしまった。

「そうですね。聖都へは、この町から西へ約2、3日行けば着くと思います」

その程度か……思ったよりも、楽な旅路になりそうだ。今までが、結構面倒だったしね。

「ところで……教皇猊下は、今どこに？」

ヴァルバはおじさんの方に向き直って、訊ねた。

「猊下は聖都におられると思います……もしか、謁見なされるおつもりですか？」

「ええ、そのつもりなんですけど」

僕がそう言うと、おじさんは少し顔を困らせた。

「……あなた方も知っておられると思いますが、この国は教皇猊下を認めないとする、反乱分子が制圧されたばかりです。それゆえ、謁見なされるのは少々難しいかもしれません」

「なるほど……つまり、まだ猊下は身を狙われる身だということだ

すか？」

いつか見た、ヴァルバの礼儀正しさが出た。どうも、この姿が胡散臭いのは何でだろう……。

「そのとおりでございます。ただ、あなた方が自分の身分を証明できるものがあれば、大丈夫だと思えますよ」

「身分を証明できるものか……とにかく、ありがとうございました」

僕たちはおじさんから離れ、噴水の方に行った。

「なあ、身分を証明できるものなんてあつたっけ？」

「うーん、俺は旅人用の通行書があるからいいけど……」

ヴァルバは僕とアンナを眺めた。

「2人はどうするかなあ……」

「……何も無いな」

「そうですね」

アンナはなぜか笑顔だった。というより、ペルルークに来てからというものの、ずっとだ。

「アンナ、何でそんなに笑顔なんだ？」

「だって、すごくポカポカしてて、気持ちいいじゃないですか」

「……………」

「ハハ、緊張感が無いな」

ヴァルバは笑いながら言った。そう言えば……長いこと寒い地域にいたからな。ここも暖かい部類には入らないが、シュレジエンなどに比べればかなりマシだ。

「……ソラさんが持っている剣はどうですか？」

アンナは閃いたような顔をしていた。

「僕の剣？」

「たしか、それってルテティアのアルベルト王子から頂いた剣でしたよね？ 身分を証明するものじゃないけど、信頼性はあるんじゃないでしょうか？」

たしかに、この剣はイザークに行く時にアルベルト王子から守るために使うものとして頂いた。あの時は新品できらきら輝いていたが、今は少々ボロボロになっている。まだまだ、使えないことはないけど。

「なるほどな。どう思う？」

「……まあ、いちおう信頼されるに値するかもな。けど、アンナはどうするんだ？」

「アンナなんて、貴族出身なだけだなあ。証明するものがないよな」

「私はいいですよ。2人謁見できれば、ちゃんとしたお話はできると思いますし……」

「だけど、インドラのせいで被害を受けた人の証言っていうのは必要なんだよ、きつと」

ヴァルバは真剣な顔で言った。なるほど、それは一理ある。

「……ヴァルバの言うとおりだ。アンナの証言は絶対に必要だもん。あいつらのしてきたことを、教皇に示すために」

きつと、最も被害を受けたのはアンナだ。インドラの野望に加担したステファンによって、家族を失った。その悲しみは、誰にも理解することはできないほど、深く、辛いものだったんだから。

「……一度、ルテティアへ行つて、証明書を発行してもらおうか？」

「いや、そうすると約2ヶ月はかかる。ただでさえ、今の時期は最終決算のことなどで政府は大忙しだ。発行するのに、下手したら半年近くかかるかもしれない」

「半年もかかるとさすがに……」

時間の経過が1番重要だ。たぶん、空が魔道注入によって覚醒するのも、時間の問題。

嫌な予感がする。早くどうにかしなければと、内心焦っている。

「じゃあやつぱり、このまま突入するのか？」

「それしか手はないだろうな」

いい案が浮かばず、ヴァルバは虚空にため息を放った。

「……じゃあ、私は入れませんね」

「ま、そこは何かしよう。土下座でも何でもして、謁見させてもらえるように嘆願すれば、何とかなる気がする」

「何とかなるって……適当だなあ、ソラ」

ヴァルバは僕を見ながら、苦笑いをしていた。

「だって方法が思いつかないんだから、しょうがないだろ。教皇はまだ若いし、たぶん優しいから大丈夫だよ」

「その 優しい というのは、どこから出てきたんだ？」

「…… クピト っていう名前からして、なんか優しい感じがしない？」

「……あ、そう」

「何だよ？ その呆れた顔は」

「いや、気にするな。じゃ、とりあえず聖都まで行くか」

ヴァルバはよっこらしよと、置いていた荷物を担いだ。

こうして、僕たちは大した方法も思いつかないまま、聖都へ出発することになった。

## 聖都ソフィア

そこにあるのは、**真実**という名の**運命**。フェイト

現実**は**、優しくなんか**ない**のだと………思い知った。



## 42章：輝ける白銀の聖都 ソフィアⅡエルメス

聖都は、このアルカディア大陸の南の カナン半島 にある。半島とはいえ、かなり小さい。ガイアのスカンディナヴィア半島みたいにでかいと、すでに半島ではない気がするが。

徒歩で2、3日程度とはいえ、この寒空の下、岩が突き出た大地を歩かなければならないというのは、なかなか辛いものだ。

アルカディア大陸の南部は緑が溢れる地域らしいのだがこの季節、その緑は乏しい。しかも、ペルルークの西部に広がる地域は「ヴェスナ台地」と呼ばれ、もともと緑が少ないためか、どこか寂しい雰囲気漂わせている。

このヴェスナ台地……ガイアのヒマラヤ山脈が太古の昔、インド半島が大陸とぶつかった瞬間に隆起してできた山脈だといわれているが、それと同じようにできたという。そういった奇跡的な偶然によってできたためか、古代の人々から聖地と呼ばれるとか。

出発して数時間、太陽が沈みかけていた頃、僕たちはヴェスナ台地を進んでいた。

「……ずっと、上り坂だな。ばててきちゃったよ」

僕は重い足を動かしながら、呟いた。

「何言ってるんだ。我慢しろい」

無駄に元気なヴァルバ君。いや、おじさん。

「お前、今文句を考えたろ？」

「おいおい、僕がそんな根暗に見えるか？ 冗談じゃない」

どうも、ヴァルバは人間的勘というか、動物的勘が鋭いというか。思わず、僕は小さく笑ってしまった。

「……この台地を抜ければ、聖都は目の前だ。今日中に、抜けるぞ」

「え、勘弁してくれよ」

「駄々をこねるな。男だろ？」

「じゃあ、アンナはどうするんだよ。無理させるつもりかっの」  
「ヴァルバはギクツとした顔をした。

「そ、そうだった……」

「アンナだって、もう疲れたろ？」

後ろを振り返ると、肩を上下に動かしているアンナが、一生懸命僕たちの後を付いて来ていた。

「まだ、大丈夫……です」

見るからに、結構辛そうだ。

「……どうするよ？」

「お前から言っておいてなんなんだよ……」  
と、ヴァルバは少し困惑した様子だった。

「疲れてても頑張るアンナを見ると……やっぱり、ばてるまでやらなきゃなあと思って」

「……気分屋め」

ヴァルバは笑いながら言った。

「つつさい」

星空が輝く時間帯に、僕たちはようやくヴェスナ台地を抜けることができた。疲れ果てたアンナを先に休ませ、僕とヴァルバは見張りをすることに。

「……アンナはもう寝たのか？」

焚き火の近くで、ヴァルバはホットミルクを飲んでいて。白い湯気が、彼の鼻の辺りをうるちよろしている。

「ああ。飯を食べて、すぐに寝ちゃったよ」

「……無理をさせたか……」

ヴァルバはカップを置き、足元にあった木の枝を火の中に放り込

んだ。

「ふう……」

彼は夜空を仰ぎ、白い息を吐いた。

「どうしたんだよ？ ため息なんかついてさ」

僕はヴァルバに対になるように座った。

「うーん……」

唸りつつ、ヴァルバは小さく瞬きをしながら、いくつも輝いている星を見つめた。

「前にさ、生きることはなんなのか……っていう質問をしたのを覚えているか？」

いつかの怖い質問。僕はヴァルバの後ろの果てにある星を見つめた。

「……お前はどっ思うよ？ 生きることについて」

そうきたか。

小さく息を吐き、彼と同じように星空を仰いだ。

「生きることについて、か………今まで、深く考えたことはなかったな」

時折考えたこともあるかもしれない。けど、時折思う程度で、記憶に残るほど考えつめたことはないのだ。

「……僕はさ、別に考える必要はないと思うんだ」

「………」

「だって、難しいだろ？ 生きることについてなんて」

僕が視線をヴァルバに戻すと、それに少し遅れて、彼も僕に視線を向けた。

「まあ、な」

「だろ？ ……生きること……それについての答えなんて、わかり

っこない。そもそも、あるのかどうかもわからない。水を熱すると沸騰するっていう、答えが用意されてるわけでもないしさ」

そう言うと、ヴァルバは小さくうなずいた。

「答えの無いものは、自分なりの答えを得るしかないし、それはすごく難しい。考えれば考えるほど、頭が痛くなるしさ」

「ハハハ、なるほど」

僕らしいと思ったのか、ヴァルバは軽く笑った。

「……深く考える人ほど、自分を追い詰めるもんだよ。人間も他の生き物も、結局は同じなんだ。あらゆることは、シンプルなんだよ」  
「シンプルねえ……」

微笑んだまま、彼は再び夜空を見上げた。

「だからさ、ヴァルバ。もう少しシンプルに考えなよ。最近のお前、おかしいからさ」

「おかしいって……失礼な奴だなあ」

ヴァルバはハハハと、苦笑いをした。

「そうだな……どうも、故郷に近付くと……いろいろ考えちまう」

「……それって、いつか話してくれた人のことか？」

「誰のことだ？」

と、彼は僕に顔を向けた。

「ほら、アルフィナへ行く時に話をしてくれたじゃないか」

「ああ……そういえば……」

ヴァルバはポリポリと頭をかき始めた。

「いつかさ、話せる時が来たら、僕たちにその人のことを教えてくれないか？」

「……なんで？」

「なんでって……そりゃあ、あれだけすばらしい言葉を考えた人だ。きつと、ヴァルバにとっても大事な人で、誰にも愛されるような人だったと思うんだ。……勝手な思い込みだけどね。だからさ、訊いてみたかったんだよ」

「……そうか……そうだな、いつか……じゃなく、近い将来に教え

「てやるよ」

「ハハ、無理しないでいいよ。そういうことは、ちゃんと心の整理ができないと言えないもんだしさ」

僕は立ち上がり、テントに向かった。

「じゃ、僕は寝るよ。お休み。明日の朝、ちゃんと起こしてくれよ」

「ハイハイ」

そのまま、僕はテントに入り、アンナの横で床に就いた。

ヴァルバは木を一つ掴み、火の中に入れた。その瞬間、炎が歓喜したかのように揺れ動き、火の粉が舞い上がる。

「どうされるのですか？」

空やアンナの知らぬ男の声が、小さく流れてきた。足音を一切起こさず、いつの間にか暗闇の奥に誰かがいたのだ。

「……そう急かすな」

「ですが……」

暗闇の内にいる男が言うと、ヴァルバは首を振った。

「もう少し、考えたいことがある」

「……………」

「……寒いな」

寒い夜空の中では、吐いた息は白くなる。その白い息が、精霊さえも見失うこの漆黒の夜空へ、消えて行く。

「おい！ ソラ、起きろ！！」

ヴァルバの声が響いた。

「おい！ 起きろつての！」

頭をびびしびし叩かれている。い、痛いつての。

「だあーもう、いてえつての！ なんなんだよ！？」

「早く準備しろ。雨が降ってきた」

「雨？」

「そうだよ。この気温だ。雨の中を長時間歩くと、風邪を引きかねない。早く出発しないと」

そう言つて、ヴァルバはテントから出て行つた。すでに、アンナも起きて片付けをしているようだ。……つーか、朝一番に聞いてしまったのがヴァルバの声だなんて……しかも、見てしまったのもヴァルバ。アンナだったら、寝起きも気分がいいのになあ。

僕は心の中でぶつぶつ文句を呟きながら、準備をした。テントの外に出ると、小さな雨粒たちが上空から降り注いでいる時だった。まだ小雨のようだが、そのうち大雨になりそうだ。

僕たちはこうだった時のために、カッパのような物を準備していた。ビニールでできているわけではなく、皮製のものだ。

出発して、約3時間。雨が止み始めたころ、都市らしきものが見えてきた。

「なあ、あれ……」

「聖都だ。ようやく、見えるところまで来たか」

聖都はカナン半島に広がる、リーベリア平原に位置するのだが、湖の上にできた、水上都市のように見える。

「聖都つて、ランディアナみたいに人工的な大地の上に出来てるのか？」

平原を歩きながら、ヴァルバに訊ねた。

「いや、そんな話は聞いたことがない。俺が知る限りでは、海とかを埋め立てて造った都市つてのは、ランディアナしか存在しないはずだ。聖都は自然にできたところに造られたと思うんだが……」

ヴァルバは昨日整えた、あごひげを触っている。……30過ぎにしか見えないよね、やっぱり。

「じゃあ、そういうことから聖都にされたのかもしれない」

平原をゆつたりと駆ける風になびかれて、アンナのレモン色の髪が揺れ動いている。

「どうということ?」

「自然によって造られたものって、なんだか神秘性が溢れるじゃないですか。そういうところに、神様がいらっしゃるような気がしますし」

「なるほど……けど、あんなのが自然にできるのか疑問だけだな」

聖都は円形の湖の上に、皿でも浮かんでいるかのように建てられている。これが、自然にできているとは到底思えないのだが。

「ま、見えない力でも作用してるんじゃないのか?」

「見えない力、か……」

この世界では、本当にありそうだから怖い。幽霊とかも、絶対にいそうな世界だもんな。魔法があるわ大昔には空中都市があるわ、だし。

聖都に着く頃には完全に雨は上がり、雲の切れ間から太陽が顔を覗かせていた。

「は、半端ねえ……」

僕は思わず、そう言葉が漏れてしまった。聖都の城壁は大して大きいわけではないのだが、真っ白なレンガでできた城壁は、見るものを圧倒する。

僕たちは聖都に入った。聖都はレンドが言っていたとおり、白を基調とした建物で溢れていた。他のヨーロッパ風・ギリシャ風の建物とは違い、形としてはアラビア系の建物だろうか。色は白いのだが、屋根の部分は丸みを帯びているものや、奇抜な形（クリームみたいな）をしたものがあった。

道路にも白いレンガが敷き詰められていた。道路の両端には、きれいな樹木が一行に並ぶかのように植えられている。この季節だからか、葉は全て落ちてしまっているようだ。

中央通には、多くの商人以上に教団関係者と思われる人たちが溢れている。白いローブを着て、片手には聖書らしきもの。頭には白い三角形をした帽子。男も女もみんなそういう格好のため、見分け辛い。

「今まで見てきた都市とは、雰囲気が違うな」

ヴァルバは辺りを見回しながら言った。

「『普通の人』がいるような感じはしないな」

「潔白、ですね」

「潔白って……なんか、みんな清潔で、礼儀正しいみたいだな」

僕は苦笑した。

「司祭や司教の人たちは、大体がそんなんだろ」

「偏見で見ちゃいけないぞ」

「俺が昔、住んでた所にいた司祭はそんな人だったけどな」

ヴァルバが生まれた場所はゼテギネア。ゼテギネアはソフィア教を信仰している……いるのは不思議ではないのだが、どうもヴァルバのイメージには合わない。教徒っていうか、放浪歴の旅人っていうか。

どうやら、この聖都ソフィアは上空から見ると六角形の都市で、その中心部に「聖帝中央庁（宗教会議室や神聖騎士団の基地があり、教皇のいる場所でもある）」がある。聖都が六角形なため、6つの市街区で区分されている。第1市街区には教団関係者の住居があるということだ。僕たちは、教皇のいる聖帝中央庁へと向かった。

「通行許可証をお見せください」

聖帝中央庁の出入り口の前で、すべてが銀色でできた鎧を着た一人の兵士が言った。

「通行許可証？」

「そうです。それがなければ、ここから先へ進むことはできません」  
「……………」

僕たちはその兵士から少し離れ、相談した。

「……………聞いてないぞ？」

「ヴァルバ、よく考えたら普通だよ」

なんとたつて教皇がいる場所だ。他の国にすれば、王城のようなもの。

「どうします？」

「……………とりあえず、事情を説明すれば何とかなるんじゃないか……………」

「言っても怪しまれるだけだと思うが……………」

早速、僕の案は却下された。しかし、ここでいちいち時間を喰うのが非常にめんどくさいと感じる僕は、彼に言った。

「他に方法が思い浮かばないんだから、しょうがないだろ？ あの兵士、あんまり頑固そうに見えないし」

「そ、そこが問題なのか？」

ヴァルバの顔が引きつっていた。アンナが「とりあえず、やってみたらどうです？」と言ったため、なぜかヴァルバは了承してしまい、この方法でいくことに。

僕はスタスタと衛兵の所に近寄り、

「あの、僕たち、とつとつとつても重大な話をしたくて、ここまで来たんですが……………」

僕は自信なさげに言った。兵士は、きょとんとした顔をしていた。うーん……………反応がいまいち。やっぱり、行き当たりばったりな方法でいくのは無謀過ぎたか。

「非常に深刻な問題で、すでに各国の首脳や偉い人に知れ渡ってることなんですけど……………」

すると、兵士は思い出したかのような顔をして、僕たちを指差し

た。

「あ、あなた方、もしかして、インドラ に関しての使者では…  
…!?!?」

「使者？ えっと、まあ……インドラに関してはっていうのは当た  
っていますけど……」

「そうですか！ いやあ、お待ちしておりました！ さ、どうぞお  
進みください！」

兵士はどうぞどうぞと、入り口に手を差し出した。何がなんだか  
よくわからないが、とにかく聖帝中央庁に入れるチャンスだ。僕た  
ち3人は顔を合わせて微笑んだ。インドラに関しての情報は持って  
いるから、一応大丈夫なはずだしね。

僕たちは中央庁内部へと足を運んだ。中に入ると、圧巻だった。  
ルテティアの王城以上だったからだ。

天井から吊り下げられた巨大なシャンデリア。それは白金ででき  
ているのか、白い煌めいている。壁はもちろん白く、床は大理石の  
ようで、まるでクリスタルのようにすすべだった。所々の壁には  
高価そうな絵画が飾られ、天井には天使や神様が描かれた天井画が  
あった。ミケランジェロの天井画のようだった。あの天井画もそう  
だが、この天井画も人が描いたものなのだろうか？ 人間業には思  
えない。

「お待ちしておりました」

僕はその声で我を取り戻した。神々しい天井画に、心を奪われて  
しまっていた。目の前に、にこやかな顔をしているおじさんが立っ  
ていた。風貌から見て、司祭だろう。

「私は、ソフィア教団大司教 トルーマンという者です」

トルーマンというおじさんは、丁寧な頭を下げた。45度で、約3秒間の礼だった。昔、学校で習った正しい礼の仕方と同じだった。……ソラと言います」

「ヴァルバです」

「アンナです」

僕たちは自己紹介をし、一礼した。トルーマンさんが醸し出す雰囲気のためか、思わず礼儀正しくなってしまった。

「これはこれは、ご丁寧ありがとうございます」

再び、トルーマンさんは一礼した。

「あなた方のことは伺っております」

「……あの、誰からその話を？」

僕はそのことを訊ねた。ソフィアの人たちは知らないはずなんだけれど……。

「知らないのですか？ シュレジエンのラーナ様から、インドラという組織についての使者が参られます、という書状が届いたのでよ」

「ラーナ様が……」

「ええ、そうです。お聞きではありませんでしたか？」

「あ、いや……」

僕は濁した。どうやら、ラーナ様が根回ししてくれたようだ。

「では、猊下がお待ちでございます。こちらへ……」

僕たちは、トルーマンさんの後へ付いて行った。

聖帝中央庁を張り廻っている廊下には、スカイブルーの細いカーペットが敷かれている。ちなみに、そのスカイブルーはソフィア教国の証なのだという。

聖帝中央庁は王宮並みの広さを持つ。ただ、利用できるのは1階のみ。上には行けることは行けるのだが、どうやら教皇家及び枢機卿しか入れない場所なのだとか。

広い通路を歩き進むと、大きな扉の前に辿り着いた。

「ここは……」

「猊下がおわす場所でございます」

トルーマンさんはそう言うのと、扉を開け始めた。扉が開かれると、いつか見た、フォルトウナ神殿のあの大広間並みの部屋が現れた。中央に一本のカーペット。一番奥の段差まで伸びている。その段差の上に、白いカーテンがかけられた所があつた。下の辺りは届いておらず、玉座があること……そこに、誰かが座っていることがわかる。

「……では、あそこの線までお進みください。ただし、あの線より前に行つてはなりません」

「どうしてですか？」

ヴァルバはトルーマンさんの方に向き直つた。

「皆さんもご存知のとおり、この国は3年前、暴君が倒された後、猊下に反発する者どもがおりました。混乱は鎮圧されたといえ、まだそういう輩がおらぬとは限りませぬ故……」

「……念には念を入れて、ですか？」

「猊下に危害が加わらぬようにするためです……」

なるほど、僕たちが教皇を狙つた者とは限らないからか……。まあ、信用してもらえないのは残念だが、この場合はしょうがない、か。

僕たちはトルーマンさんに言われた線の所まで、足を運んだ。そこから、教皇がいると思われる玉座までは、20メートル以上離れているようだ。これでは、銃でも持つていない限り、教皇に危害を加えることはできないな。

「……猊下、シュレジエン女王ラーナ2世陛下からのご使者様たちでございます。我がソフィア教の申し子たちを闇に侵さんとする、インドラなる者どものことについて、協議されたいとのことです」

トルーマンさんは僕が説明するよりも簡潔、且つ迅速に言ってくれた。自分では、どうしてもうまくしゃべれない。こういった、国家元首がいるような場所が放つ、圧倒的な威厳に押されているのか

もしれない。が、

「……ど、どうすりゃいいの？」

僕は起立したままの体勢で、ヴァルバを見ずに囁いた。

「とにかく、自己紹介したほうがいいのかもな」

「自己紹介か……」

僕は一度、せきをして喉を整えた。

「ソラという者です。ラーナ様の使者として、参りました」

「ヴァルバです。教皇陛下、ご機嫌麗しく思います」

と、ヴァルバラしからぬ、いつかのヴァルバの礼儀正しさが現れた。

「ア、アンナと言います。よろしくお願いします」

僕たちは一同に礼をした。

「……よく、おいでになりました」

教皇の声……若い男性のようだ。僕と同じくらいの歳だろうか？

けど……なんだろう、この感じ……

「私が、第83代教皇クピト1世です」

ここから見えるのは、玉座に座っている教皇のひざから下の部分だけ。

なんか……違和感を覚える。なぜだろう……？

「ここからお話することの無礼をお許してください。未だ、私は命を狙われる身でありますので……」

教皇が頭を下げたのが、ほんの少し揺れたカーテンの動きで理解した。

「あ、えっと……今回、僕たちがここへ参りましたのは、邪教を復

「活させようと目論む、インドラへ対抗するための協議について、」  
相談に「」

「ええ、わかっています」

「教皇は僕の言葉を遮った」

「インドラが巫女なる少女たちを誘拐し、伝説の邪神を復活させようとしていること。そして、彼らに対抗するために、各国と条約を締結しなければならないことを……」

「じゃ、じゃあ……」

再び、教皇がうなずいた。

「悪辣な者どもを放っておくことはできません。早々に、各国の首脳たちをここ、聖帝中央庁に集めましょう。そこで、条約締結と今後の対策について協議を行います」

僕はたちは、笑顔で顔を見合わせた。こんなにも簡単にいくとは…… 予想外だった。

「トルーマン大司祭、至急、アマゼロト枢機卿と上級司祭、そして神聖騎士団ヴィクトル総長を集めよ」

突然、教皇の大きな声がこの大広間に響いた。トルーマンさんは一礼し、すぐさまここから出て行った。

「お三方はどうされますか？」

「……ど、どうされますかって…… どうしようか？」

「そんなことを言われてもなあ……」

「ヴァルバは頭をポリポリとかいていた。」

「もし何も無いなら、しばらくの間ここ、中央庁にいてくださっても構いませんよ」

「えっ？」

「あなた方は、大切なお客です。もてなすのは、当然ですから」

優しい声で、教皇は言った。

「だけど……なあ？」

「俺はいいと思うぞ？ …… お金はかからないし」

その部分だけ、ヴァルバは小さい声で言った。しっかりしてい

るといっか、なんとうか。

「……それに、これ以上俺たちがやることじゃないだろう。ゼテギネアだって、猊下の勅令なら従うだろうし」

たしかに、彼の言うとおりで。教皇が動き出したのだから、残されたゼテギネアだって動き出すだろうし。

「じゃ、じゃあ、お世話になります」

僕は小心者のように言った。「金がかからないから」という理由があるので、少々罪悪感がある。ていっか、何で僕が罪悪感を感じなきゃならないんだよ？ 普通、ヴァルバが感じなきゃならないだろ？

「では……ヴァルカン」

教皇がそう言うつと、一人の男が玉座の近くの扉から入って来た。

そして、教皇の前でひざまずいた。

「お客様を、客間へご案内しなさい」

「ハッ……」

すると、その男は僕たちのところへ歩み寄って来た。

「それでは、私はこれにて失礼します。後は、彼の指示に従ってくださいね」

教皇はそう言うつと、立ち上がり、玉座の奥へと消えて行った。

男はニツコリ微笑んだ。それにつられて、僕も小さく微笑んでしまった。

「ほな、ワイに付いて来てや」

僕は噴出しそうになった。彼のしゃべり方にかなり驚き、立ち止まってしまった。

「？ どないした？」

目を丸くした男が、普段から細いであろう双眸で僕を覗き込んでいた。

「え？ あ、いや……」

どうして、関西弁なんだろう？ お、おかしすぎる……。

「その……と、特徴的な口調ですね」

僕がそう言くと、ヴァルカンさんはハッハッハと笑った。

「生まれつき、この口調やねんて！」

この笑い方……生粋の関西人っぽいよ。そこがさらに面白い。

けど、なんだろう。この人にも、変な違和感を覚える。

「あなたは……もしか、ヴァイスリッター・ガーディアン神聖騎士団守護天使のヴァルカンですか？」

顔がほころぶ中、ヴァルバは疑問めいた顔で言った。

「おっと、自己紹介がまだやったな。ワイは守護天使ガーディアンのヴァルカン  
「スウィフト、26歳や」

自分を親指でさし、白い歯を出して笑った。

「守護天使？」

「教皇親衛隊のことさ。常に教皇の近くにいて、身の安全を図る……

……と、俺は聞いたがな」

「そのとおり！ ワイはこう見えても、なかなか強いんやでえ〜！」

ヴァルカンさんは自分の胸に拳を置いた。

なかなか強い……て、この人……体格がものすごい。身長は190センチ以上はあるし、筋肉の隆起がどこかのボディビルダー並みだ。競泳者みたいな、ピチピチの服を着ているから、よりいっそう筋肉がすごく見える。肩や関節の辺りに、銀色のプロテクターを付けている。

「ほな、案内するから付いて来てや〜」

陽気な関西弁。なんだか、緊張していた心の紐が、ほどけていくようだ。

ヴァルカンさんの後を付いて行くと、中央庁の奥へと進んだ。ど

うやら、奥は神聖騎士団や住み込みの司祭たちが寝泊りする場所があり、その一角に客用の部屋があるらしい。

奥にはきれいな中庭や、教会などがある。さらに、ヴァイスリッター神聖騎士団（ソフィア教国のほこる、ソフィア教徒で結成された軍隊。それぞれの兵士が、何らかの魔法が使える……つまり魔法戦士であり、他国にも引けを取らないという）の訓練所もあつた。

「んで、ここがあんたらの部屋や」

ヴァルカンさんに示された場所は、かなりの広さを持つ部屋だつた。どこぞのリゾートホテル並みだ。ベッドのシートとかがきれいに敷かれている。

「ここらあたりの施設はつこうてもええねんけど、2階以上に上がつちゃああかんからな。猊下や、そのご家族のいる場所やさかい」

ヴァルカンさんは近くにある階段を示した。そこには、進入禁止の文字が書いてあつた。

「一応、好きなだけおつてもええちゆうことやから。ほな、ワイはこれから仕事があるさかい。……あと、腹減つたら近くにおる司祭さんにゆうてみ。うまいもん作ってくれるけえのお！」

そう言つて、ヴァルカンさんは手を振りながら、元来た道を引きかえして行つた。

「……あれが、ヴァルカンか……」

ヴァルバが、彼の後姿を見ながら言つた。

「知ってるのか？」

ヴァルバは小さくうなずいた。

「ヴァルカン」スイフト……3年前の内乱で、最も活躍した神聖騎士だ。その功績で、ガーディアン守護天使に抜擢された。今も昔も、彼は教皇の右腕といわれている」

「ふーん……すごい人なんだ」

「彼の噂は、各国に轟いたからな……。武器を持たない、つまり格

闘術で敵をなぎ倒していたらしく、いつもああいう笑顔を見せているが、戦場では 鬼神の微笑み とかって言われているらしいぞ」「鬼神の微笑み……………」

あの笑顔のまま、誰かを殺している姿を想像すると、恐ろしさで身震いがしてきた。

「……………ん？ 素手で？」

「ああ。彼の放つ豪拳は、敵の鎧も貫くとか」

「すごい力ですね」

アンナ……………すごい力という言葉で済まされるものじゃないと思うぞ……………。

「ああ。それに、一個中隊を一人で壊滅させたとかっていう都市伝説てきな噂もあるんだ。まあ彼の戦績からして、あながち嘘じゃないとは思うがな」

一個中隊って……………そもそも、人間の力で鎧を貫くことはできるのだろうか？ 少々、信じ難いのだが……………。

それにしても、なんか胸につかえるものがある。こう……………喉の奥というのか、そこらへんがもぞもぞするというか、モヤモヤするというか……………。

教皇と、ヴァルカンさん。

言い表すことのできない、違和感。

違和感というより……………疑念？

うーん……よくわからない。

僕は腕を組み、天井を見上げながら口をへんの字にしていた。

### 4 3 章：聖地カナン 太古の残照、朽ちた者の願い

年が明け、新暦2002年。ガイアでは、2008年か。この聖都の地にも、チラチラと雪が降っていた。

この世界の暦が始まったのは、統一を成し遂げたアヴァロン帝国の前身、アヴァロン王国が建国された頃だという。しかし、その頃の歴史がちゃんとわかっているわけではないので、正しいのかどうか定かではない。けど、ガイアの暦も2008年前に始まった。どこの世界も、約2000年前に暦が始まっている。ここのところも、2つの世界はなんらかの関係を持っているのだろうか。

1月17日。ソフィアへ来て、すでに2ヶ月近く経った。各国との会議の準備は着々と進んでいるらしいのだが、ゼテギネアだけは難色を示しているらしい。

去年、ゼテギネアの農作物は不作だったらしく、大量の餓死者が出てしまったという。そのため、社会混乱などが起こり、今は各国との会議をしている暇はないということ。さらに、皇帝が信頼を置いている親族が旅の真つ最中なため、会議には出れないということ。交渉のためここ数日、教団の上層部はちよくちよくゼテギネアへ行っている姿が見えた。

そして今日、2月2日。結局、ゼテギネアの皇帝及びその側近たちは来ることは叶わず、会議はルテティア・イデア・シュレジエン・ソフィアの4国で行われることに。

会議は本当なら僕たちも出席するはずだったが、今日は諸国の重臣や支配者のみで行われるとのこと。明日、多くの教団関係者たちも含め、僕たちは参加することになっている。

僕は相変わらず、筋トレや剣の修行をしている。それに感化されてか、ヴァルバも槍の練習をしている。昔、ヴァルバは槍を得意と

していたらしい。それを言うと、「今は違つとでも言いたいのか？」と、怒ってくる。どうやら、槍術は得意分野（のつもり）らしい。

「……………」

僕は聖帝中央庁の中庭で、目を瞑ったまま立っていた。

「ソラさん、何してるんですか？」

後ろから、アンナの声が届いて来た。僕は振り向かず、そのまま言った。

「ちよつとした練習」

「練習？」

「ああ。…………リユングヴィに話しかける練習さ」

「リユングヴィ…………ですか？」

「うん。最近、あいつの声が聴こえても頭痛とか、違和感を覚えなくなったんだ。だから、もしかしたら僕から話しかけられるかなって…………」

僕は再び、問い掛ける。心のずっと奥、ただ暗闇しかないその場所に。

…………聴こえてるんだろ？ いい加減、出て来いよ。

「……………」

後ろにいるアンナから視線を感じる。邪魔をしないようにと、静かにしてくれているのだ。

もの好きな奴だな、貴様は

深淵から小さく木霊するかのような声……  
ようやく出てきたか、リユングヴィ。

貴様を食い破ろうとしている奴に話しかけるとは  
つくづく、馬鹿な申し子だ

ため息混じれなのがわかる。

……一つ訊きたいことがあるんだよ。

何がだ？

どうして、僕を「ロキ」にしようとするんだ？

知れたこと。その方が御しやすいからだ

御しやすい？ どういうことだ？

ロキ……あれは、生命の本能……そのもの  
つまり、肉体という「器」に自我という「水」が必要ないと  
いうこと

水の無い器に、別の水が入るのは容易なのさ

なるほど……今は、器の中に水　精神が満たされているから、  
お前は完璧に出て来れない……そういうことか？

そういうことだ

あの時、巫女が邪魔さえしなければ、お前は消え失せたとい  
うに

巫女……リサのことか？

あの巫女に感謝しろよ　？

あの女は、穿たれし空虚を紡ぐ存在  
暁の誓約を浄化せし、白銀の巫女  
統制主の傀儡を愛した、唯一の

？  
それって、どういう……？

まだお前が知るべき時ではない

お前が、「執行権」そのものを得るまでは

お、おい……わけわかんねえよ。

聖地カナンへ行け

真実、そして……俺と決着、付けたいのだろう？

聖地……カナン？

古、一つの物語が始まりし場所  
堕ちた者どもの墓場さ

そう言い残すと、奴の放つ独特の雰囲気が消えて行った。黒く塗りつぶされていた場所は、空が晴れるかのように白くなった。

「……………」

「ソラさん……大丈夫ですか？」

心配そうな声の方へ、僕は向いた。少しだけ首をかしげた、アんながいます。

「ああ。大丈夫」

と、僕は彼女に笑顔を向けた。

「……聖地カナン、か」

聖地カナン。どこかはわからないが、幸いここは聖都。聖地というからには、こういった場所の近くにあるだろう。つまり、教団関係者なら知っている可能性が大きい。

とりあえず、僕は中庭から出て辺りをうろちよろした。いつものなら、どこにでも司祭さんが歩いているのだ。

僕は、一人のおじさんを見つけた。服装は白いローブ……教団関

係者だ。

「あの、すいません」

おじさんは僕の方に向き直った。あ、この人は……。

「おや、ソラ様ではありませぬか」

「トルーマンさん……ですよね？」

「ええ、お久しぶりです」

大司祭のトルーマンさんは、丁寧に頭を下げてくれた。僕もそれに釣られ、軽く頭を下げた。

「それで、どうされたのです？」

「実は、お聞きしたいことがあります。よろしいでしょうか？」

「ええ、いいですよ。私を知る範囲であれば……」

トルーマンさんは穏やかな笑顔を見せた。

「……聖地カナンという所を知っていますか？」

「聖地、ですか？ もちろんですよ。聖地カナンは、我々ソフィア教徒の神聖なる場所ですからね」

「それがどこかわかりますか？」

「聖地は、ここですよ」

「えっ？ ここ？」

「ええ、ここです」

トルーマンさんは、床を指差した。

「ここっていうことは……」

「聖帝中央庁のことです。ご存知ではないようですね。たしかに、今では聖地としての姿を、地上には現していませんからね」

「……？」

僕は頭をかしげた。

「聖地カナンは、このリーヴェ湖に浮かぶ平たい島のことなのです。今から約2000年前、2代教皇様から10代に渡って、今の聖都ソフィアⅡエルメスが造り上げられたのです」

「じゃあ、聖都そのものが聖地なんですか？」

そう問うと、トルーマンさんはうなずいた。

「簡単に言えば、そうでしょう。しかし、古来から聖地と呼ばれるのはここ、聖帝中央庁なのです」

トルーマンさんは紹介するかのようになり、辺り一帯に手を添えた。

「でも、ここが聖地と言われても、よくわからないんですけど？」  
すると、彼は小さくうなずき始めた。

「この聖帝中央庁の地下にあります」

「地下……？」

「この下には、ティルナノグ時代以前の遺跡群が眠っています。

それも、数万年前と言われるほどの」

「す、数万年前？」

それはすごい。ガイアではその頃に文明なんてものは存在しなかったはずだ。

「そこには当時崇められていた、宇宙を創りたもうた神々が祭られておりました」

大昔の、それも数万年前に祭られていた神々か……。以前、アンナが教えてくれたラケシスや、クロトとかかな。

「しかし、ソラ様。聖地に何の用で？」

「……実は、そこに入りたいのですが……」

「え？ そうなのですか……」

そう言うと、トルーマンさんは頭を抱えた。

「だ、ダメでしょうか？」

僕は恐る恐る、訊ねてみた。

「いえ、入れるには入れるのですが……何せ、ソラ様は正式なソフィア教徒ではありませんので……」

「ということは、ソフィア教徒なら入れるんですか？」

「ええ、そうです」

「……どうにかありませんかね？」

僕はゴマをするかのように訊いてみた。トルーマンさんは天井に

視線を向け、唸り始めた。

「うーん、そうですね……協力したいのですが……」

「そこを何とか!」

僕はいただきますのポーズで、嘆願した。

「……まあ、いいでしょう。ソラ様は、猊下の大切なお客様ですし、トルーマンさんはため息を交えながらも、承諾してくれた。」

「これをお持ち下さい」

トルーマンさんは何かを差し出した。これは、カードだろうか？  
通行書かな。

「これは？」

「聖地カナンへ入るためのものです。これを門番の人に見せれば、地下に進むことができます。入り口は、神聖騎士団寮の中心部にあります。では、私はこれで失礼致します」

「あ、ありがとうございます。……あの、会議……うまくいきますかね？」

トルーマンさんは立ち止まり、僕の方に顔を向けた。

「きつと、うまくいきます。この世界を憂う気持ちは、皆、同じはずなのですから」

そう言い残して、トルーマンさんは通路の奥へと消えて行った。

僕は、聖地カナンへ向かうことにした。今回のことは僕自身ことなので、ヴァルバやアナを連れて行くわけにはいかないと思ったのだが、

「おいおい、一心同体である俺たちを置いて行くつもりか？」

ヴァルバは真剣な眼差しを、僕に向けていた。僕はその眼差しにより、悪寒を感じ始めた。……新しい、ヴァルバの技だ。

「誰が一心同体だ。気味悪いんだよ！」

「照れるなって、かわいい奴め」

「……………」

今回ほど、ヴァルバを打ち倒したいと思ったことは無い。

「ヴァルバさん、ふざけちゃダメですよ」

「ハハ、すまん。それは置いておいて」

ヴァルバは荷物を置く動作をして見せた。

「とにかく、お前を一人にしておいては危険だと思うんだ」

「危険？　なんで？」

そう言つと、やれやれという顔でヴァルバは僕のおでこを叩いた。

「お前が、リユングヴィに勝てるとは限らないからだ」

「……負けるつもりなんて、さらさらねえって」

「なるほど」

ヴァルバは小さく微笑み、続けた。

「もしもの話だ。その時、お前を守らなきゃならないのは、俺たちの役目だからな」

ヴァルバの横で、アンナは優しい笑顔を見せていた。

「そうですね。私たち、仲間じゃないですか」

「……………」

僕はフーと息を吐いた。

「まったく……そう言われちゃ、敵いませんよ」

神聖騎士団寮は、この客室から少し離れた場所にある。神聖騎士団は会議場護衛のため、ほとんどが出払っている。

近くの階段を下りてゆくと、一つの縦長の扉の場所に辿り着いた。そこには、一人の兵士が立っていた。

「あの、聖地カナンへ入りたいんですけど……」

兵士は僕たちに視線を向けた。

「通行書をお見せ下さい」

「ええつと……………」

僕はカバンを探った。

「……………はい、これです」

「これは大司祭様の……………よろしいでしょう。お進みいただく前に、いくつかの注意点があります」

「注意点ですか？」

門番はうなずいた。

「1つ、聖遺物には触れぬこと。2つ、遺跡に傷を付けぬこと。3つ、黄色のシールが張られている場所には入らないこと。この3つをお守り下さい。よろしいですか？」

「……………はあ……………」

「では、お進み下さい」

兵士は扉を押し開けた。すると、地下へと続く幅の狭い階段が現れた。フォルトウナ神殿の出入り口のようなだ。

「……………暗いツスよ？ 灯りは付いてるんですか？」

ヴァルバは階段の奥を眺めながら訊ねた。たしかに、階段の奥は真っ暗だ。

「聖地には天空石と呼ばれるものが所々に埋まっっていて、それが発光しているため、明るいはずです。念のため、たいまつを持っていますか？」

兵士はたいまつを差し出した。ヴァルバは変な顔をしながら、それを受け取った。

ゆつくりと階段を下りて行く。結構、長いようだ。

「天空石って……………いつか、ヴァルバが言っていたやつだよな？」

僕は細い階段で、足下を注意しながら訊ねた。

「魔法石の基となったやつだな。……………ティルナノグの都市は、天空へ浮かんでいたというし、その天空石が浮かばせていたっていう伝

説もあるがな」

「……すごいですね、都市を浮かばせるなんて」

「今の技術じゃあ、開発することはできないし、それを解明することもできないんだよなあ……」

たいまつが火に揺られながら、ヴァルバは言った。

「……それにしても、なぜ文明はこんなにも衰退したんだろうな」

「確かに。ガイアでは、年が経つごとに文明は進化していったし。やっぱり、ティルナノグが滅ぼされたっていうことが原因じゃないの？」

ヴァルバは顔をしかめ、少し考えた。

「……けど、文明は滅んでも、技術は失われねはず。技術が失われているということは、なんらかの意思が働いているとしか思えない」

「……どういうことですか？」

「誰かが故意に消し去ったんじゃないかってことさ」

「もしかしたら、あの超技術はあまりにも恐ろしく、悲惨を招くものだから、後世の人たちがわざと失わせた……とういうことか？」

「ま、憶測だけだな」

ヴァルバの言うとおり、故意にやったとしか思えないのが現状だ。「そうであってほしいですね。人が人の過ちを認め、二度としないと誓ったということを」

アンナの横顔は、たいまつが灯りに照らされていた。

「……そうだな」

長い時間、階段を下りているが、全然先は見えない。フォルトゥナ神殿の階段よりも、深いようだ。これだけの階段を下りていると、帰る時、上るのがかなりめんどくさそうだ。

それにしても、これだけの階段をどうやって作ったんだろう。この聖都のある島が自然にできていて、そこが0メートルとすると、すでに100メートル近く降りているのではないだろうか。いや、できないことはないだろうが、この時代の技術では、ちょっと無理

があるんじゃないか？

さらに長い時間降りていき、いい加減ため息が出てきたところで、階段の先にぼんやりとした光が出ていることがわかった。

「……出口か？」

僕たちは足早にそこへ行くと、ある景色が広がっていた。

「な……なんだ、これ……！？」

僕は声が漏れてしまった。そう、それだけすごい。

階段が終わり、大きな広間が……いや、一つの都市が現れた。巨大都市を覆うことのできる空間に、古の遺跡群が立ち並んでいる。インドの宮殿を思わせる、塔のてっぺんが丸っぽいものがあったり、住居のような遺跡もある。それらは、聖都の建造物に酷似している。

そして、この空間は青緑の光によって覆われていた。その明かりの元は、遙か100メートル……いや、それ以上かもしれない。まるで天井が夜空のように、星空のように輝いている。煌めく星こそ、兵士の言っていた「天空石の放つ光」なのだろうか。

こんな地下の中にこれだけ広い空間をどうやって造ったのか。これだけの量の遺跡を、どうやって造り上げたんだろうか。聖帝中央庁と、ほぼ同じ大きさのような気がする。

「聖地カナン……なるほど、聖地といわれるのもわかるな」

ヴァルバは顔をきよるきよるさせていた。アンナもまた、同じような行動をしている。

「す、すごいですね……。聖都の下に、こんなものがあるなんて……」

「それもそうだけど……よく崩れないな、ここ。この上は聖都だし、

これだけの空間を作ると……普通、崩れるような気がするんだけど……」

地下何メートルかはわからないが……トルーマンさんの言ったとおり数万年前のものだとしたら、よくぞまあ壊れなかったものだ。」

「ここは聖地だ。それに、天空石まである。ティルナノグの技術が関係していないとはいえない。……あの時代の人間ならば、この程度のもを作るのは造作も無いことだろうからな」

これがティルナノグ人によるものならば、ここが崩れない理由もはっきりしてくる。だけどトルーマンさんは、ここはティルナノグ時代よりもっと昔のものと言っていた。

……数万年前の技術は、ティルナノグの技術に相当していたというのか？

僕たちは、その古代都市へと足を進めた。本当に、聖都と同じような造りをしている。大きな通があつて、その通をはさむように、住居のようなものが立ち並んでいる。この通の先には、聖帝中央庁に似た、一つの大きな宮殿のようなものが建っている。それは、天井に到達しそうなほどの高さをほこっていた。

「うお、これ見てみるよ」

ヴァルバが突然、足を止めた。彼が指差した方向を見ると、住居の中にある、一つの機械だった。

「これ……なんなんですか？」

アンナはそれを目を凝らしながら見ている。この機械のようなものは、土台があり、その上に電球みたいなものが付いている。

「……もしかして、電気を放つものかな」

僕はそう呟いた。

「デンキ？」

「ガイアには存在するんだよ。生活には欠かせないものさ。光を放ったり、涼しくしたり、暖かくしたり、機械を動かしたりと、僕たち人間の生活を豊かにしてくれた、最も重要なものだよ。簡単に言えば、この世界の魔法みたいなものかな。兵器にすることもできるからね」

「じゃあ、これはその デンキ を放つのか？」

ヴァルバは電球の辺りを触り始めた。

「どうだろう。ただ、その丸っこいもの……ガイアにある 電球 っていうものに似ているんだ。そこに電気が流れて、光を放つ仕組みになってたんだけど……これはどうかな」

コンセントのようなものがあれば、電気が流れるとは思っただけで、そういったものは見当たらない。というより、この遺跡群は結構腐敗していて、粘土のような色をしている。コンセントもあつたかもしれないが、長い時間が過ぎ、風化してしまったのかもしれない。

「動かないんですか？」

「……たぶん、動力が死んでる。動かないだろうね」

「そっかあ……」

アンナは少し、がっかりした様子だった。電気がどういうものか、見てみたいのだろう。いや、それ以前にこの機械のようなものが動くのを、この場にいる3人は見たいと思っっているのだ。

対になっている住宅の遺跡の中に入ると、生活をしていた痕跡のようなものが残っていた。コップのようなもの、皿のようなもの。どれも、無造作に散らばり、ほとんどがバラバラに割れていた。風化し、土になっているものもある。

住宅の中央に、テーブルがあつた。その上に、一つの石が置いてある。それは、天井にある天空石と同じ光を放っていた。

「これは……天空石か？」

ヴァルバはその石に触れようとした。触れた瞬間、ヴァルバは声を上げて指を離した。

「ど、どうしたんですか!？」

アンナが心配そうに駆けつけた。

「ふ、触れた瞬間、ものすごい痛みが走ったんだ。おゝ痛かった」  
火傷したかのように、ヴァルバは触れた指に息を当てて、冷やしていた。

「……触れるなっということか？」

僕はその石に指を伸ばした。なぜかわからないが、触れるなっって言われると触れなくなるのが、人間の悲しい性。

「お、おい、危ねえぞ」

ヴァルバは忠告したが、僕はそれを聞かずに石に触れてみた。しかし、何も伝わってこなかった。

「……あれ？ 何も、感じないぞ？」

僕は石をまじまじと眺めた。少し青く、半透明だ。水晶に似ているが、あれみたいに鋭角な物じゃない。丸みを帯びている。

「本当ですか？」

アンナも天空石に触れてみる。

「……何も感じませんね」

どうやら、アンナも大丈夫なようだ。

「……？ もう一回、触らせてくれ」

ヴァルバは立ち上がり、もう一度天空石に触れてみる。すると、さっきと同じように、声を上げて指を離し、床に倒れこんだ。

「いってええー!! な、なんなんだよ!？」

「……ヴァルバさんだけ、痛みが出るようですね。どうしてですかね？」

アンナは頭をかしげた。

「と言われても……さっぱりだな。あれかな、やつぱり。歳を誤魔化してた人は触れることができないってことなのかも」

「……いい加減、そのことに触れないでくれませんか？」

苦笑しつつ、ヴァルバは肩を落とした。

「ハハハ、冗談だって。けど、何でだろう？ ヴァルバだけ、触れられないっていうのは……」

「……俺にはない、ソラとアンナには共通するものがある……という事なのかもな」

「共通するもの……？」

ヴァルバは手を広げた。

「わからないよ。ただ、そう考えれば俺だけ触れられない理由がわかるだろ？ 俺には持っていないく、2人は持っているもの」

「僕とアンナが持っているもの……若さ？」

僕とアンナは顔を合わせ、首をかしげた。

「……違うと思うぞ？」

「ハハ、わかってるよ」

僕は天空石をテーブルに置いた。

通を進んでいくと、右手側に住居とは違う建物があることに気が付いた。それは、手前に階段があり、その上に長方形の形をした建物がある。所々、窓が付いている。

その長方形の建物中に入ると、ここが何なのかすぐにわかった。

図書館だ。数列に、本棚が立ち並んでいる。床には、建物の瓦礫が落ちていたり、本棚から落ちた本も散らばっている。

「本？ 読めるのかな……」

数万年前の図書館なのだとしたら、すでに読むことは叶わないと思う。普通は、風化するからだ。

床に落ちている本を拾おうとする。掴み、持ち上げようとした瞬間、本は砂屑になってしまった。

「あ……やべ」

「おいおい、壊すなよ。大昔の貴重なものなんだから」  
そういうヴァルバも、本を掴んでは砂屑にしていた。

「門番さんが言っていた、聖遺物って……この本たちも含まれるんですかね？」

「……………」  
「まずい。それは非常にまずい。すでに、10冊近くの本を土に還してしまっているのに。」

「と、とにかく、慎重に選ばう、ヴァルバ」

「あ、ああ」

落ちている本を踏まぬよう、足場を探しながら歩く。崩れてしまふ本とそうでない本を見分ける方法がわからないのに、どうやって見分けるんだよ……。けど、何らかの本を見てみたい。数千年前の本には、ということが書かれているのか。僕の好奇心を煽るには、十分だ。

僕は奥へと進んで行った。どうやら、この図書館は奥行きがかなりある。長束町の町立図書館より、断然広い。

このあたりの本は、結構厚めの物が多い。これだけのものなら、崩れないと思い、手を伸ばす。ドキドキしながら、本を掴むと……崩れない。

「あつ……おい、大丈夫な本があった！」

僕は2人に聞こえるように、大声を張った。ページがめくれるかどうか、試してみる。……よし、めくれる。大丈夫だ。

「どれだ？」

ヴァルバとアンナが駆け寄って来た。

「これさ」

「これは……古代ティルナノグ文字？ いや、まさか……神国文字か!?!」

ヴァルバは本を眺めながら言った。少し興奮気味に見える。

「神国文字？」

「ティルナノグ時代以前の時代の文字だ。まだ人は文明を持たず、ただの動物と同じような生活をしていた時代。世界を支配していたのは、今は姿を見せない神々。その神々の文字といわれるのが、こ

の 神国文字 だ」

「ティルナノグが始まったのが、今から10000年近く前の話だから……少なくとも、11000年前くらいか」

そんな大昔に文明があったとは思えないが、事実ティルナノグはあったわけだし……この世界、とんでもないな。

「ティルナノグ文字はアカデミーで習うことだが……神国文字は、そのほとんどが解明されていない」

「じゃあ、読み明かされたことは無いんですか？」

「だろうな……」

僕は本の中程を開いた。……エジプトのヒエログリフっぽい。と言っても、よくわからないが。

文字を眺めていると、頭の奥がスーツとしてきた。

なんだ……？ この感覚。小さな電流が、耳の辺りをざわついているようだ。これ……フィアナ村で、初めてこの世界の文字を見た時と同じ感覚……。

ああ、そうだったな

「……覇者なるは、荒れ狂う嵐、荒れ狂う波、荒れ狂う火炎……すべてを凌駕せし者。我が名は ヴァルドモンド・ケイドヴァー」

脳裏に浮かんだ文字を、知らず知らずのうちに口から出していた。それを見た2人は目を見開き、僕を見ている。

「ど、どうしたんだ！？ ソラ」

「え？ どうしたって……この文字を眺めたら、突然……頭の中で文字が浮かんできて……それを言ったただけなんだけど」

「よ、読めたつてことですか？」

「そ、そうなのかな？」

「正しいかどうかはわからない。確かめようが無いからな。けど、ソラはリユングヴィの力を持つ人間だ。不思議なことができて不思議じゃない」

「……あんまり、うれしくない」

正直、ね。

「まあともかく、続きを読んでくれよ」

「わ、わかったよ」

ヴァルバは急かすように言った。僕は、次の文字列を眺める。

「…… 我が名は、ヴァルドモンド・ケイドヴァー。ニヴルの帝王である。我が主神ルプレシユカの庇護の下、敵国ミズガルズを滅ぼすことを、宣言する …… 創世歴40011年、アルカディア大陸の8割を領有する、ニヴル帝国3代皇帝ヴァルドモンド8世は、隣国ミズガルズ共和国を進攻することを宣言。だが、この宣言の翌日、15年前、帝国により滅ぼされたフェロバーラ王国の旧臣により、ヴァルドモンド8世は暗殺される。まだ27歳の皇帝の後継者は幼く、当然のごとく後継者争いが勃発する。その隙をミズガルズ共和国に突かれ、創世歴40014年、一大国家を築き上げたニヴル帝国は滅ぼされることになる。

当時のミズガルズ共和国の主神党総裁ウラーヴァスは、総選挙に勝利し、一党独裁の政権を築き上げ、ロンバルディア大陸を手中に収める。創世歴40015年、ウラーヴァスは病死するが、息子のヴァレンロイルが総裁を継ぐ。もはや、皇帝と同じような存在になり、総裁の地位はそれ以降、世襲され続けることになる……このペーシはこれで終わり」

「……神国文字があつた時代の歴史書か？」

ヴァルバは腕組みをしながら言った。

「この文字が本当に神国文字なら、そういうことになるね」

「……神々の時代というのは、まったくのウソだったというわけか……」

大きくため息をつき、ヴァルバは頭をかきだした。そう、神がいたわけではない。人類が今と同じように、争い合っていた頃なのだ。「大昔のことなんて神格化されることがほとんどだよ。実際、ティルナノグもそうだったわけだし」

僕は次のページを開いた。

「なんて書いてあるんですか？」

アンナは本の中を覗き込んだ。

「今読むよ。……創世歴39765年、グラン大陸の三国時代は、シアルファイ王国の統一により、終焉を遂げた。」

その頃、ミスガルズ共和国は総裁ブロンによる暴政が続き、各地で反乱が頻発していた。ここで特筆すべきは、ブロンを諷めたカイン将軍が民衆を率いて反乱を起こしたことだ。

さて、そのカイン将軍は、シアルファイ王国に救援を打診する。シアルファイはこれを承諾し、海を渡りミスガルズへ進攻する。当時、ミスガルズ共和国の首都は北のゴルドバに定められていたため、シアルファイ軍がロンバルディアに上陸して、ほんの2ヶ月で陥落してしまう。総裁ブレンはアルカディア大陸の一國、ハヴァザード帝国へ亡命。こうして、ロンバルディアはシアルファイに支配されることになるが、そのほとんどがカイン将軍の統治下に入ることになる。

創世歴40020年、カイン将軍はティルナノ……えっ！？ ティルナノグ！？」

僕は思わず、声を上げた。

「ソラ、続きを読んでくれ！」

「あ、ああ。……創世歴40020年、カイン将軍はティルナノグ王国の初代国王となる。これはシアルファイ王国が帝国となり、そ

の最大の功労者であるカイン将軍に対する勲章であろう。爵位では、彼の功績には応えられないと考えたのだ。創世歴40021年、ブロンはハヴァザード帝国へ渡った旧ミスガルズの民により、惨殺されてしまう。これにより、一時代の支配者ウラーヴアスの血を継ぐものは途絶えることになる。

創世歴40021年、カイン王は首都をリーフ島……のグラールに定める。その翌年、ティルナノグ王国はアルカディア大陸へ進攻する。次々と諸国を滅ぼし、3ヶ月後には、大国ゼテギネア連合王国を滅ぼす。ティルナノグはシアルフィの属国であるため、その領土のほとんどがシアルフィのものとなった。しかし、野心を抱いたカイン王は、シアルフィから独立を宣言する。その宣言は、次のとおりである。

……我が名は神の御使いであり、神の申し子であるカイン。我が戦う所以……それは、蹂躪され続ける人々を救済するためである。蹂躪され続ける未来に、希望など見えては来ない。蹂躪され続けた過去に、何の価値も無い。新しい希望を見出すために、我は宣言する。シアルフィ帝国皇帝アドラメラク1世、そなたを玉座から退き下ろすまで、我は肉体が引きちぎられようとも、戦うであろう……  
これが、カイン王の 救済宣言 と呼ばれるものである。この宣言の中では、王は民の救済を述べているが、実際の目的は、3大陸を支配することである。これは、すでに王が即位以前に持っていた理想とは、大きくかけ離れてしまっていることが伺える。

創世歴40022年、ティルナノグは150万といわれる大軍で、グラン大陸へ進攻を開始する。対するシアルフィは200万という、ティルナノグを凌駕する大軍を繰り出す。しかし、魔道士としても、騎士としても、指導者としても天才であるカイン王の軍勢に、シアルフィは敗戦を続ける。そして、創世歴40022年11月、シアルフィ皇帝アドラメラク1世は倒され、帝国は滅びる。こうして、一つの時代は終焉を迎える。

翌月、カイン王はティルナノグ帝国の成立を宣言して皇帝に即位。

名を主神リユングヴィから取り、「リユングヴィ1世」を名乗る。さらには暦を「創始歴」へ変え、8年後、皇帝よりも上である 天帝 を名乗る。その後、天帝は世襲される。

こうして現在、創始歴877年に至る。現在、36代ゼファード3世陛下の統治の下、世界は繁栄している。創始歴012年には至上天帝の右腕である大宰相……ここは消されてる。……大宰相によって天空石を開発され、人類の夢であった空へ進出することを達成。天空帝都セレスティアルを築き上げる。そして800年が経ち…… 人類の繁栄期を、今まさに迎えているところだ…… 歴史学者アブドウル・レアノン」

僕は、この本をゆっくりと閉じた。題名は ティルナノグ創世期 。少しの間、沈黙が流れた。

「……神国文字が使われていた時代から抜きん出たのが、リユングヴィ……カインという人間だったのか……」

「1万年前……に生きていた人の意志が、今なお、ソラさんの中で息づいている……ということなんですね」

他の本の題名を見てみると、そのほとんどが、 ティルナノグ に関することだった。どうやら、この遺跡群はティルナノグが成立した頃にできたものなのかもしれない。あるいは、それ以前に存在していて、ティルナノグの人たちが何らかの目的でここを使っていた、ということなのかも。

「この本の中に出ていた……グラン大陸というのが、もしかしたら北の大陸のことなのかもしれない」

「アルカディア大陸も、ロンバルディア大陸も出てきましたもんね」「けど、ティルナノグが成立した頃は、その国自体はロンバルディア大陸にあったんじゃなかったっけ？」

「統一後、天空帝都というものがグラン大陸には無かったとは言い切れない。それに、ロンバルディアとアルカディアの2大陸には、

ティルナノグの都市らしきものは残っていないはずだ。いや、残っているのはリーフ島の遺跡群だけか」

「そっか。本には 首都をリーフ島のグラールに定める とかって書いてあったな」

ラーナ様も、リーフ島の北半分には今も発掘されていない遺跡が眠っていると仰っていた。

他に目ぼしい本はないかと、再び搜索に当たった。しかし、あの本以外は腐敗が激しかったり、汚れなどで文字がまったく見えないものばかりだった。

もう、何も無いだろうと思っていた頃、変なものを見つけた。……石？ 宝玉の形をしているので、もしかして、天空石だろうか？

だけど、光っていないし青色の半透明でもないの、ただ加工した石なのかと思った。僕は、ゆっくりとその石に触れてみた。

「……何か感じましたか？」

アンナは僕の顔を覗き込みながら言った。すると、宝玉のような石が突然、灰色から青色に変わった。そして、まぶしい青緑の光を、辺りに撒き散らし始めた。

「くっ……まぶしい……！」

僕は思わず、ヴァルバに渡した。すると、当然のごとくヴァルバは悲鳴を上げて、天空石を手放した。

「お、お前な！ いきなり俺に渡すなよ……！」

ヴァルバは痛みを受けた右手を、ぶんぶん振り回しながら言った。結構痛いんだな……。

放られた天空石は、さっきのようにただの石ころに戻らず、煌々と青緑の輝きを放っている。

「どうしてソラが触れた瞬間、他の天空石みたいになっただんだ？」

ヴァルバは天空石をじーっと眺めている。

「……さあ？」

「お前な……」

僕を見ながら、ヴァルバはため息をついた。

「しょうがないじゃないか。わからないんだからさ」  
「……ま、あまり気にすることでもないか」

図書館から出て、僕たちは最も大きな建物である、中央の宮殿遺跡へ向かった。すでにポロポロになった通を歩き、宮殿に辿り着くと、その入り口には黄色いカードが吊るされていた。門番の人が言っていた、立ち入り禁止のところか。

「1番見たい所なのになあ」

ヴアルバは宮殿を見上げながら言った。

「入っちゃいけないなら、守らないと」

「……だな。他の所に行ってみようぜ」

そう言っつて、他の2人は引き返そうと後ろへ振り向いた。けど、

僕だけはこの宮殿に目を釘付けられた。

左右対称の、きれいな宮殿。数千年の時が流れ、土色に変色しているとはいえ、その壮麗さを感じずにはいられない。

その時、僕の回りが真っ暗になった。

「……あれ？」

僕は辺りを見渡した。

「ヴアルバ？ アンナ？」

二人を探すが、すべてが真っ暗なため何も見えない。声さえも、届いていないのだろうか。そうやってきよるきよるしていると、宮殿があつた方向に、一筋の光が現れた。それはだんだん円を描き、誰かを映し出していった。

男の姿。誰だ……？

「……あんた、誰だよ？」

僕は男に問い掛けた。ミディアムほどのウェーブがかった髪は、鮮やかな青色をしていた。

首にはなぜかリングを装着し、古代人の服だろうか……黄色っぽいカーディガンに、白い長ズボン。彼の瞳は、紅く……輝いている。

「……ようやく、ここまで来たか……」

男性の声で、ハツとした。この、低く、響くような声の持ち主は

……

「お前、リユングヴィか……！」

「そうだ」

リユングヴィは大きくうなずいた。

「……ヴァルバとアンナはどこだ？」

「今は仲間のことは気にするな。ここは……選ばれた生命にしか入れない所なのだから……」

「……？」

リユングヴィはゆっくりと目を閉じ、両手を広げた。

「1万年の間、俺はお前を待っていた。俺の肉体が消滅し、魂だけの存在となった、その時から……」

雄大な大気を感じるかのように、奴は穏やかな表情で話す。

「すでに、お前は知っているだろう？ 俺が……元の俺がどんな人間だったかを」

目を閉じたまま、奴は言った。

「……カイン。シアルフィ帝国の將軍だった男」

「その通り。あれから約1万年……お前にわかるか？ この、途方もない時間を……次元と次元の狭間で彷徨い続けた、俺の想いが……」

リユングヴィはゆっくりと、両目のまぶたを開いた。鮮血の双眸が、小さく煌めきながら僕を見つめる。

「……最後の天帝ユリウスや、初代教皇アイオンに憑依していたんじゃないかったのか？ あの2人は、お前の器じゃなかったのか？」  
前から思っていた疑問を訊いてみた。

「奴らは違うのさ」

「……………」

僕は頭をかしげた。

「お前以外、俺と完全にリンクすることのできる血族はいなかったということだ。お前は傾いた器を持つ男と、封印された聖なる焰の光を持つ女との間に生まれた、純粋な存在。……空、お前はこの星に選ばれた生命なんだよ……」

目を細め、奴は微笑む。

「あらゆる生命を生み出した、すべての根源　星。星にも、意志があるということをお前は信じられるか？」

僕は顔を左右に振った。そんなの、信じられるかよ。

「……だが、俺が今、こうしてここにいるということ。そして、お前が数奇な運命を辿り、今、ここに立っているということ……全ては、星の意志……つまり、運命そのものなんだよ」

「……僕が今まで歩んできた道、そして決意してきたその意志も、星の意志によって定められていたって言いたいのか？」

「そつだ。人間一個の意志なぞ、すべてを包括する星の意志に比べれば、微力でしかない」

違うね、と僕は言った。

「僕は認めない。僕がこうして生きてきたその道……いろいろな人たちに出会い、いろいろなことを学んできたことが、運命という言葉で片付けたくない。選ばれたとか、そうでないとか、関係ない。今、こうして、力を持っている僕が、僕こそが！ 自分の未来を決定する！ 星や……お前なんかには、僕の未来を定められてたまるか！！！」

声を荒げ、僕は奴を睨んだ。それに臆することなく、逆に奴は笑い始めた。

「愚かな奴だな……。お前は、運命に抗うというのか？」

「抗うとか、そんなんじゃない。こうすることが、僕の運命だ」

「……………」

リユングヴィは瞬きをせず、僕の目を見ている。

「あらゆる生命が、自らを生み出した星により定められた運命を歩んでいく。それは俺も、お前も同じだ。死すべき時に死に、生を戴く時に生を戴く。時の呪縛に抗えず、歩むべき道を歩むのが……俺たちだ」

「そんなものが、生きていく道だとは到底思えないね」

「そして、俺がお前と一体化するのも……定められていた運命なのだ。いい加減、あきらめろ。お前は、俺と一つとなり、俺の夢を叶えるのだ。あらゆる生命を凌駕する、新しい生命として再誕する……」

「……………」

「新しい生命だと？ 僕とお前が……」

「わかるか？ その意義が。星に選ばれた俺とお前が、分かれた世界が一つになるように、一つの生命となれば、俺たちはこの次元と他の次元……別の星を繋ぐ、調停者 となる！ すべての生命が夢見ていた……完全なる進化の最終地点へ到達することを意味する」

どこその支配者の如く、大きく手を広げて笑う様は、僕の中に怒りと哀れという二つの感情を作り上げた。

「調停者……って、なんなんだ？ お前が僕と一体化して、完璧な生命に進化して……何をするつもりだ？」

「……………」

「答える……リユングヴィー!!」

と、奴は暗闇の虚空を見上げた。

「……………どうやら、邪魔が入ったようだな」

すると、この空間が揺らぎ始めた。暗い風景が、紙がねじられるかのように湾曲を描いている。

「せつかちな女だ……。いずれ、貴様もわかるというに……」

「なんだ？ 何を……」

「見てみる。貴様を呼んでいる」

僕は奴が指差した、上空を見上げた。すると、金色の光の線がこの空間を照らし出した。

「……………じゃあな」

「ま、待て！ リユングヴィー!!」

「……………見たくも無い、悲惨な運命が待っている………それを見ても尚、お前は運命に抗うか……」

そう言い残し、リユングヴィーは最初と同じように光となり、上空へと消えて行った。

「待て!! リユングヴィー!!」

僕はリユングヴィーの光を追うように、そこへ走って行った。しかし、当然のごとく、届かない。

「……………ら……空……空………」

突然、頭の上から女性の声が響いた。この声の主が誰なのかわかると、僕の意識が遠のいていった。

「……空……空！」

バチンと、頭をひっぱたかれた。

「い、いって！ 何すんだよ！！」

僕は声の主がいる方に顔を向けた。

「リサ……」

そこにいたのは、リサだった。辺りを見渡すと、聖地カナンの中央の宮殿遺跡の前に立っているのがわかった。……真っ暗になる前と、移動していない。

「ソラさん！ 大丈夫ですか！？」

アンナが僕の腕を掴んできた。その目には、涙が薄っすらと浮かんでいた。

「あ、ああ、大丈夫だよ、アンナ」

「空、女の子を泣かせるもんじゃないよ」

再び、リサに頭をひっぱたかれた。僕は叩かれた部分をさすりながら、「ごめん」と言った。

「……なんでリサがここに？」

「ソラ、そんなことよりインドラの連中が……」

ヴァルバが焦った様子で言った。

「インドラ……？」

「奴らが、この聖帝中央庁を襲撃したようなの。それで、あんたらの波動を追って来たってわけ」

インドラがここを襲撃？ それって……

「まさか……各国の首脳部を狙って……!?」

リサはうなずいた。

「かもしれない。ともかく、地上へ戻るわよ」

リサは後ろへ振り向き、走り出した。僕たちも、その後を付いて行った。

リユングヴィが言い残した 悲惨な運命

それが、とうとう、僕の前にやってくることとなる。

逃れることのできる、未来なんて無い。

そういうことなのだろうか……

#### 44章：聖帝中央庁 霞んだ憎しみの果てに

長い、長い階段を駆け上がる。下りるのは楽だが、登るのはかなり辛いもんだ。すでに、リサ以外の人間は息が切れている。特に、アンナはきつそうだ。

「アンナ、大丈夫か？」

僕は後ろを振り向いた。

「は……はい………」

こういう時、弱音を吐かないのがアンナだ。あからさまに肩で呼吸しているのに。それから百段くらい進むと、限界なのか、アンナの足が止まってしまった。

「リサ、ヴァルバ、先に行っててくれ」

「ソ、ソラさんも、先に……行って……下さい」

顔を俯かせ、汗が会談にこぼれ落ちている。

「ダメだ。この中で、アンナだけ戦うことができないんだから。ほら、2人は先に行ってくれ」

「……わかった。出入り口の所で待ってるからさ」

リサはそう言い、階段を上って行った。ヴァルバも、その後について走って行った。

「……アンナ、背中におぶされ」

「えっ？」

「おんぶするから」

アンナは顔を赤くし、顔を左右に振った。

「いい、いいですよ！ そ、そんなことしたら、ソラさんが……」

「だけど、アンナは今走れないだろ？ おんぶして行ったほうが、早いじゃないか」

「で、ですけど……」

「早く行かないといけないんだ。だろ？」

「じゃ、じゃあ……失礼します……」

アンナおずおずと、僕の背中におぶさった。うーん、かなり軽い身長も低いから、体重もまったく無いんだろう。

僕はアンナをおんぶしながら、全速力で階段を駆け上がった。アンナが軽いとは言え、辛さが倍増した。

ここは気合だ、気合！ 某プロレスラーの言葉を今ここにい！！  
ぬうおおおー！

数分後、ようやく出入り口にたどり着いた。

「……その状態で、戦えるのか？」

ヴァルバは片手に槍を携えていた。僕はすでに、会話できる状態ではなかった。さ、酸素が…。

「だ、大丈夫ですか？」

アンナはしゃがみこんで、へ垂れ込んでいる僕の背中をさすってくれた。

「空、休んでないで行くよ」

「せ、急かすなよ……も、もうちょっと……」

僕は大きく息を吸い込んだ。そして、ゆっくりと、吐いた。こうすれば、呼吸が落ち着くとかならないとかつて、聞いたことがある。息吹だとか、なんとかって。

「フウー……よし、行こう！」

地下から出て、会議場のある場所へ急行する。会議場は、この中央の真ん中にある、教皇と謁見したあの場所に程近い所らしい。聖地カナンへ通じる入り口は、西よりの所にあるため、少し離れている。

長い通路には、いつもなら司祭の一人や2人歩いているのだが……まったく、見かけない。やはり、会議のためにみんな出払っているんだろうか。

通路を進んで行くと、人影が見えた。黒い服を着て、片手には血塗られた剣を握っている。

「あれは……グルヴィニアか」

リサが言った。

「何？ それ」

「空……あんたね、忘れるんじゃないよ。インドラの下っ端どもだよ」

「あ……なるへそ」

「ん？ 何だ、貴様ら！」

グルヴィニア兵は僕たちに気がつき、剣を構えた。すると、リサがものすごいスピードで走って行き、前へジャンプした。グルヴィニア兵は剣を繰り出すが、リサはそれを空中蹴りで弾き飛ばし、床に着地する前に、もう片方の足で相手の顔を思いつき蹴飛ばした。グルヴィニア兵は声も上げず、その場に倒れこんだ。そして、リサは僕たちの方に向き、手招きをした。

「……美人なのにすごいな。鬼女神だ」

「ヴァルバ……リサに殺されるぞ」

そう言うと、ヴァルバは口に手を当てた。

通路を曲がり、先へ進むと所々に血痕があつた。そして、それに程近い所に何人かの司祭や、神聖騎士団の兵と思われる人たちが倒れていた。近付いて呼びかけるが、返答は無い。すでに、事切れている。

切り傷で倒れている人もいれば、黒い血を吐いて、倒れている人もいる。そう、暗黒魔法だ。

「……あー！」

真っ直ぐな通路の先に、人影が見えた。その人影は、見た記憶がある。その人たちは僕たちに気が付くと、向かって走り出した。

「おーい！ ソラ！ リサ！」

男の図太い声が、静まり返った通路に響く。この声は……レンドだ！！

「レンド！ それに……デルゲンも！」

レンドの横には、デルゲンもいた。2人とも、武器を携えていた。「無事なようだな、リサ」

デルゲンは息を切らせながら言った。

「ああ。あんたらもね」

「？ どういうことだよ？」

「この2人がどうしても連れて行ってくれって言うから、アースの魔法でここまで一緒に来たんだ。そこで、二手に分かれて、あんたたちを探してたんだ」

なるほどと、僕はうなずいた。

「けど……よく無事だったな。あちこちに、グルヴィニアたちがいたんだろ？」

ヴァルバは辺りを見渡した。司祭たちの死体に混じって、グルヴィニア達の死体も転がっている。

「まあな。けど、腕には自信があるから下っ端にゃ負けねえよ」

レンドは自慢げに、斧を取り出した。

「だけど……暗黒魔法を使うんだぞ？」

いくらレンドが闘いに手慣れているからって……

「ああ、それは大丈夫。リサに魔法をかけてもらってたからさ」

「魔法……いつか言っていた、状態異常阻止の魔法か？」

以前、リサが言っていた。

「そうよ。私たちが来た時には、すでに奴らがいたからね。ともかく、あんたたちにもかけとこうか」

リサはそう言うと、印を結んだ。

「……あまねく精霊よ、その庇護の下、邪悪なる意志を退けたまえ。」

青い光がリサの手から放たれ、空中へ舞い、四方八方散り、僕たちを包み始めた。それは、いつかクロノスさんにやってもらった治癒魔法の暖かさに似ていた。

「……これで、もういいのか？」

「うん。たぶん、24時間は効果が続くとは思う」

「……よし、これで暗黒魔法なんてヘツチャラだな」  
すると、リサは僕の耳をつまんだ。

「暗黒 にはならないけど、魔法自体の攻撃力は普通の魔法に比べたら、数倍の威力なんだから、ちゃんと避けなさいよ。ある意味、禁呪みたいなもんだからね」

「わ、わかつてるよ」

「ところで、方向はこつちで合ってるのか？」

レンドは通路の果てを指差した。

「ああ、たしかそつちだ。……行こう」

僕たちは、再び走り出した。

広い通路を抜けると、あの巨大なシャンデリアのある場所に辿り着いた。ここにも、多数の遺体が転がっている。司祭たちの白い口ブは、赤く染め上げられていた。

僕たちは中央の階段を上り、扉を押し開ける。扉が開けたところは、少し大きな広間が広がっている。あたり一面、殺された兵士や、司祭たちがただの肉の塊となって、転んでいた。全員、刀傷によって殺されていた。

そして……この広間の中央に、一人の男が立っていた。

「遅かったな」

男は、僕たちの方に振り向いた。

ホリンだ。右手にある愛剣レーヴァンティンは、すでに血で真っ赤に染められている。

「お前たちが聖都にいることは知っていたが……まさか、今日この日に、聖地へ行っているとは思わなかったぜ」

ホリンは剣を振り回し、こびり付いた血を落としていた。彼の服装は、今までとは違うものだった。緑を基調としたローブのようなものを着て、腰には茶色いベルト。束ねていた後ろ髪をほどき、黒い髪が小さく揺れている。

「セヴェス……てめえが聖地に行つて、あれらのことを知るには早すぎるんでな。わりいが、ここでてめえの命を奪わせてもらう」

小さく笑いながら、ホリンは剣を肩に担いだ。

「てめえ……ホリン！！ ブリアンの仇、取らせてもらうぞ！」

突然レンドが叫び、僕たちの前に行つて行った。

……ブリアンの、仇？

それを、ホリンは蔑むかのような目で見下していた。

「フン……屑風情が、俺に勝てると思つてんのか？」

「うつせえ！ やつてみなきゃわかんねえだろ！！」

その時、リサは彼の肩を掴んだ。

「レンド、あんたじゃあいつには勝てないよ」

「な、なんだと!？」

「ホリン……インドラの幹部相手に、一般人では敵いつこない。ここは、私と空に任せな」

「だ、だがな……」

「レンド、リサの言うとおりだ。……2人以外は、奴に対抗することはできない。俺たちは、グルヴィニア達の対処をするんだ」

「……………」

デルゲンはレンドの優しくなだめた。レンドは悔しそうな顔をしているが、理解したのか、後ろへ下がった。

「……一斉にかかれば、俺に勝てるかもしれねえのに」

「以前は一对一だったけど、今度は2対1だ。僕たちの方が、有利なんだぜ?」

「ハッ、女の手助けが無けりゃ暴走してたくせに、偉そうなこと言つてんじゃねえよ」

鼻で嘲笑う彼に、僕の頭に血が上がった。

「空、あんたが挑発しておいて、逆に挑発されてどうすんのよ。冷静になさい」

「……ふん、わかってるよ」

僕は剣を抜いた。

アルベルト王子……力を貸してください。剣の鏢を握り締める手に、力を込めた。

「クッククク……以前までの俺と思うなよ……」

ゆっくりと、ホリンは辺りを歩き始めた。

「……お前、自分で数ヶ月で強くなるもんじゃない、と言ってたじゃないか」

そう言うと、再びホリンは笑った。

「ククク……魔道注入で魔力を強化できる術がこの世にあるように、戦闘力を強化する術も、この世には存在するんだよ」

「まさか、増強剤……!？」

「増強剤？」

よくある、ドーピングってやつか？ でも、この世界のドーピングってどんなものなんだ？

「筋肉を増強させ、パワーとスピードを激増させるもの。けど、魔道注入と同じで、命を削って能力を上げる。もちろん、今では禁忌とされているものよ」

「命を削って……！？ ば、馬鹿なことを！」

「馬鹿だと？ 純粹に力を求めることが、馬鹿だというのか？」

僕は首を振った。

「……馬鹿としか思えない。自分の命を削ってまで求める力に、どんな力があるって言うんだ！？」

「人それぞれだ。……強くなりたい、守りたい、生きたい。様々だろうさ。俺は、知ったんだよ。力こそが全て。力こそ、自分が信じれる、唯一の存在！ 極限まで求める力は、果てしない。人類の頂点を極めるには……力を得ることが、最も近道なんだよ……！」

ホリンは拳を前に突き出し、ギュツと握り締めた。血が出てしまっいそうなほどに。

「人類の頂点……？ お前は、すでに人としての心を失っているのか？」

なぜか、自分の言葉に憐れみが宿っていた。

「……人の心、ね……」

ホリンは、クックククと笑い始めた。

「そんなの……すでに失ってるさ……」

そして、緑色の瞳に憎悪を宿し、僕たちに放った。

「お前らが正しいとする範疇からはな！」

そして、ホリンは剣を高く振り上げた。

「燃え上がれ　　レーヴァンティン!!」

レーヴァンティンの刀身は、朱色の炎を纏い始めた。

「行くぞ……セヴェス、リリーナ!!」

炎を巻き上げ、ホリンは突進して来た。やつは真っ直ぐ、リサの方へ向かった。僕は、その方向へ進んだ。

「ハッ！　邪魔だ!」

ホリンの横攻撃が繰り出された。僕はそれを防御しが、そのまま後ろへ吹き飛ばされた。そのまま、壁に叩きつけられた。

「空!」

「余所見してんじゃねえよ!」

ホリンは素早い連続攻撃を繰り出した。それをリサは難なく避けられているが、以前のように、ソリッドプロテクトでガードしない。

「ホラホラ!!　どうした!?　以前みたいなことはしないのか!」

「ちっ……………」

リサは天井に届くほど……10メートル近く跳躍した。

「大地をも震わす、破壊の振動!　轟け、閃波・剛爆!!」

彼女が突き出した拳から、巨大な円形の衝撃波が、轟音を響かせながらホリンへ突撃して行った。

「炎嵐の渦よ、逆巻け!　バーニングサイクロン!」

数メートルの長さの炎が、渦を巻きながら上空へと自らを伸ばしてゆく。リサが放った衝撃波は、その炎の渦に当たり、消えてしまった。

「しょうがない……断罪の刃、貫け!　ホーリースピア!」

リサは、今度は光の刃を繰り出した。この時になって、僕はよう

やく立ち上がることができた。背中を強打し、まだ痛みを感じる。

「喰らいな！ 烈衝月牙斬！」

リサが着地した時、ホリンは離れた場所で素早く、何度も大気を切り刻んだ。すると、炎を帯びた鋭角の衝撃波が、リサ目掛けて飛んで行った。以前の 烈衝斬牙 とは違い、いくつもの衝撃波が飛んで行っている。

リサの放った魔法はその衝撃波によってかき消されてしまった。

「くそ……敬虔なる金剛の壁！ アンチブレイク！」

リサがそう唱えると、左手から黄色い四角の光が飛び出した。それが衝撃波に当たると、衝撃波は消えてなくなった。

「物理拒否の魔法か！？ ハッ！ さすが巫女だな！！」  
嬉しそうに叫び、ホリンはリサに突撃した。

僕は自分の中にある力を引き出そうとした。そう、リユングヴェイへ呼びかける時と同じ要領だ。

自分の中に何かが湧き上がる。よし……これなら！！

「うらあ！！」

ホリンの斬撃をリサは体を回転させて避け、瞬速のミドルキックを繰り出す。ホリンはそれを剣で防ぐが、踏ん張りが効かず数メートル吹き飛ばされた。

今がチャンスだと思い、僕は彼に攻撃を仕掛けた。その瞬間、ホリンは僕に気付き、攻撃を防御した。

「ちっ！ 無理矢理、引き出しやがったか！」

そのまま、数度の攻防が続いた。すると、リサはその隙に地上へ降り立ち、ホリンの後ろへ向かった。ホリンは、僕と面面向かっている。後ろへ振り向く暇など無い。

「空よ裂ける！ 閃到襲脚！！」

華麗な連続蹴りが、ホリンの背中を強打する！ ホリンは、僕とリサの挟み撃ち攻撃を、ガードに徹して、何とかやり過ごそうとしている。

「……真の姿を現せ……」

「空！ 離れろ！」

リサの声が轟く。僕は危険を察知し、攻撃を止めて後ろへ飛んだ。リサも、中国雑技団も顔負けの、バク転・バク宙で後ろへ下がった。それに少し遅れて、ホリンのいた場所から爆炎が天井へ上った。そして、その炎は天井を突き破り、彼がいた場所に瓦礫がなだれ落ちる。粉塵のせいか、奴の姿が見えにくい。

巨大な火柱は、すぐにホリンの体を纏い始めた。これは……あの時の……

「……あの程度じゃあ、お前らには勝てねえようだ……」

紅蓮の炎は、ホリンの周りを波打つようにして動いている。

「れからは、本気で行かせてもらうぜ……！！」

ホリンは左手を動かせ始めた。それに連動して、ホリンを包んでいた紅蓮の炎も動き始めた。

「黒焦げにしてやらあ！！」

紅蓮の炎は、炎特有の音を轟かせながら、僕たちの方に突っ込んで来た。僕は前方へ走りながら、突っ込んで来る炎を軽くかわす。ほんの少しだけ髪の毛が焦げ、有機物の匂いが漂った。僕はその勢いのまま、炎に包まれたホリンに剣をたたきつけた。

「馬鹿が！」

僕の剣は、ホリンの前にある、炎の壁に阻まれてしまっていた。

「何っ！？」

「吹き飛びな！ エクスプロージョン！！」

ホリンの手から放たれた爆炎は、僕の目の前で大爆発した。僕はマジックシールドを（なぜか勝手に）発動し、大火傷は防いだが、再び吹き飛ばされてしまった。

ホリンが操る紅蓮の炎は、執拗にリサを追っていた。

「まったく……しつこい野郎だ！」

リサは何かを発動した。何を発動したのかわからないが、その瞬間、リサはものすごい速さで炎を避け、ホリンへと向かった。

「私の速さに付いて来れる？」

「ちっ……やってやらあ！！」

ホリンは素早く、左手を動かした。それに連動し、巨大な炎の渦はリサを追って行った。リサは走りながら、印を結んだ。

「……消し去るがいい、常軌を逸した大海の器……まどろみへと沈め、影となりし愚者」

蒼い魔方陣が大きな球体となり、リサを包む。

「神龍の激流　　ジェルヴァイツァー！」

リサが唱えると、蒼い魔方陣が砕け、強烈な水しぶきが飛び出し、行った。その水圧は、岩をも破壊するほどだろうが、ホリンの炎を正面衝突し、共に押し合っている。

「馬鹿が！　そんなもんで、俺の炎が消えるか！」

ホリンは高笑いをしていた。

「んなこと、端っからわかってるわよ！」

リサはそのまま、ホリンの方へと走った。

「！？」

「魔法はただの時間稼ぎなんだっつもの！」

ホリンは前方に炎の壁を繰り出す。しかし、リサは目では追えぬスピードで、奴の後ろへと回り込む。

「果てしなき、魔狼の瞬撃……奥義！」

コウロウセンケイキヤク  
皇狼閃剄脚！！」

流れるような蹴りと殴打の連携。まるで、何匹もの狼たちが切り裂くかのように、ホリンを襲う！

僕は立ち上がりながら、ホリンにようやく攻撃が当たったと思った。だが……

「なっ！？」

リサの蹴りは、炎によって阻まれていた。

「喰らえ！！」

巨大な炎の渦が、リサを襲う。しかし、リサは間一髪、横へジャンプして避けていた。

僕は、リサの元へ駆け寄った。

「大丈夫？」

リサは僕の顔を眺めながら言った。

「あ、ああ。少し、火傷したただけだ」

「あんた……あまり、力を行使しないのよ。使いすぎると……前みたいになるからね？」

悲痛な面持ちで、彼女は言う。心配している様子が、見て取れる。普段ならば、その様子が珍しくて嫌味の二つや二つ言っただが……そんな暇はない。

「ああ……わかってるさ」

僕は大きく、ゆっくりと息を吐いた。

「お前らの攻撃は、全部無意味だ」

ホリンは、炎を自分の周りへ集結させた。ぐるぐると渦を巻き、ホリンを守っているように見える。

「なあ、セヴェス……てめえが求めてんのはなんだ？」

炎を己の後ろに停滞させ、ホリンは言った。

「誰にでもあるだろ？ 力、金、権力……どれも、どす黒いものだ。お前も、同じようなものを求めているだろう？」

「そんな……どす黒いものなんて、いらないね」

僕は焦げた髪の毛の辺りを触った。パラパラと、毛先が崩れる。

「なら、何を欲するってんだ？」

口の端を吊り上げ、奴は問う。

「……僕は、当たり前前のものが欲しいだけさ。自分にとって、大事なもん。それだけだ」

「こうして闘うのも、それを手に入れるためか？」

ホリンは顔をかしげた。

手に入れるために、闘う……

「……そう、だな。僕は……お前らによってさらわれた、大切な人を取り戻したい。そして……お前らの目的を阻止する。そして、当たり前前の日常を取り戻す！」

ホリンは嘲笑うかのように、僕を見据えた。

「自分のしようとしていることが正しいと思うのか？ ハッ、お前は当たり前前のことしか言わない、甘ちゃん野郎だ」

「当たり前前の何が悪い！ 当たり前前のものを得ることが……最も幸せなことだつてあるんだ！」

普通のことほど、人は大切だと気付かない。自分の身近に、自分が求めているものがあるっていうことに気がつかずに。

ホリンは静かに息を吐き、目を瞑った。

「……当たり前前ものなぞ、いつかは裏切るんだよ」

奴は目を開き、鋭い眼光で僕を睨みつけた。

「裏切つて、傷付けて、どこかへと消え去る。残るのは……辛さと悲しみと……憎悪だけだ！」

ホリンは腕を振り上げた。それに付き従い、巨大な炎の渦が僕たちの方に向かって来る。

今の状態なら、炎を避けていくことは簡単だ。ホリンの近くに行くこともできる。だけど、それからどうする？ 攻撃しても、炎の壁によってホリンに攻撃を与えることができない。きっと、リサも同じだ。

突撃してくる炎を、僕とリサは一緒の方向へと避けて行く。走りながら、リサと相談する。

「どうする？」

「そうね……レーヴァンティン自身の覚醒を無くせば、あの炎の渦も消えてなくなると思っただけど……」

「方法は無いんだろ？」

「……レーヴァンティンはホリンの意識、あるいは命と共鳴してる。つまり、ホリンを倒さない限り、炎は消えないのかもしれない」

「……消すことを考えるんじゃないか、どうやって攻撃を当てるか考えなきゃダメってことか……」

巨大な炎は、唸りを上げながら突進して来た。

「逃げてんじゃねえ！」

炎を僕たちは右に避けた。すると、炎は壁に激突した。しかし、すぐに方向転換し、突進して来る。

「くそっ！ このままじゃ埒があかない！」

「……………」

リサは走りながら、何かを考えている。

「……私に任せて」

「は？」

「聖魔術を……私の中で、とつくべつ強力なのをあの炎の壁ごとホリンを吹き飛ばしてやるさ！」

リサの顔はあからさまに、イライラしている。なるほど……もう、めんどくさいのね……。

思わず、僕は苦笑した。リサらしいけどね。

「……わかった。僕が炎を何とかする！」

「お願い！」

僕たちは立ち止まり、僕はリサの前に立った。炎が、正面からやって来る。

……頼むぞ。あの力を……最小限に抑えれば、炎を止めることぐらいは……！

僕は左手の平を広げ、前に突き出した。以前、巨大なレーザー光線を出した時のように。左手に、青っぽい光が溢れ出した。

「死ねえ！！」

「死ぬかってんだ！！」

眼前に迫った炎を、僕は左手で思いつきり掴んだ。自分の握力、最大限で！

「なっ！？ 何い！！？」

ホリンは大きく目を見開いていた。炎は僕に掴まれ、頭を掴まれた魚のように暴れる。

「……古の盟約に従って……来たれ、万物を消し去る不浄の翼……」

リサは僕が炎の動きを止めたのを見ると、足を止め、詠唱を開始した。

「鑑みよ、己の所業を……苦しめ、遙かなる黄昏の次元にて……」

彼女を包む魔方陣が足元に出現した。白い円環から金色の粒子が浮かび、彼女の突き出している左手に集う。

「これは聖魔の波動……させるか！！」

ホリンは炎を僕の手から離そうとした。そんなことはさせない。炎は魚でいう胴体部分を歪ませ、暴れる。

くそっ……手が熱い……！

「動かないだと……！？ 空、てめえ！！」

ホリンの大声が響く。炎の強さが増したのか、振動で体が震える。まずい……このままでは、離されてしまう！

「リ、リサ、早く……!!」

いい加減、握力が無くなり、炎を手放してしまいそうだ……！  
体を包むマジックシールドを超える熱が、左手を焼いている。

「……悔やめ、朽ち果てた屍の眠る魔の地にて……今こそ、断罪の  
意志をここに現さん。星光の輝き、我に仇なす者どもを塵と化せ……  
…ラ・ギエル・レ・アヴァンズ……」

「白き断罪、出でよ!! ヴァイスノヴァ!!」

彼女から粒子が放たれた瞬間、光の玉たちがホリンの上空へと集  
結し、大きくなって行く。

「くっ……そがあ!!」

ホリンは炎を戻し、マジックシールドを張ったがもう遅い。

光は大きな音を立てて弾け、ホリンを中心とした、その辺りに降  
り注いでいった。一つ一つが地上に着くたびに、大きな音と共に光  
の小爆発を引き起こし、床もろとも破壊している。ホリンの姿は小  
爆発よる発光で、まったく確認することができない。僕は、いや、  
リサ以外でこの広間にいる人間は、呆然と立ち尽くしていた。

「これで終わりだ！ 終焉!!」

リサがそう叫ぶと、掲げていた左手を振り下ろした。それと同時  
に、最後の光の玉はさらに大きくなり、爆音を立ててホリンがいる  
と思われる場所へ落ちていった。爆発が起こり、あまりの眩しさに、  
目を開けていられなかった。

「くっ……!!」



凝縮された炎の固まりはこの広間に烈火の光を放ちだした。

「ぬう……………があああああ！！！」

その瞬間、巨大な地響きが僕たちを襲った。その揺れが静まり返り、ホリンの方を見ると、彼の周りの炎は消え去っていたが、代わりに右手が、何かを握っていた。

剣、か？

「……………焔曳剣……………」

ホリンが握っているその剣は、異様な形をしていた。ギザギザの片刃、日本刀を思わせる、反り返った刀身。何より、灼熱にさらされたルビーのような、朱色の煌きを放っている。

「調停者となり得る、セヴェス……………お前を……………殺してから……………あの世へ行つてやらあ……………！！！」

僕とホリンは、静かに剣を構えた。

辺りに、静寂が漂う。聞こえるのは、リサとホリンの呼吸の音。

「……………殺す……………殺す……………！」

ホリンの口からばたばたと、血が大理石の床へ落ちてゆく。彼を支える2本の足は、小刻みに震えている。ホリンは……………限界なんだ。次の一撃が、最後。

いや、考えるな。思考は行動を遅らせる。自分の感覚。感性を研ぎ澄まし、自分で引き出せるだけの「聖魔の力」を出せ。

そして、やれ。

ホリンを 殺す。

「……………」  
ホリンは大きく呼吸している。それに、出血もひどい。きっと、口の中に血がたまっていたって、吐き出さざるを得ない時が来る。

その時が「チャンス」だ。  
僕とホリンは、瞬きをせずに互いに見つめた。ほんの小さな動きを、見逃さないために。

極限まで集中力が高められているのがわかる。こんなの、初めてだ。高校の入試の時よりもだ。

数分が経過した時、その時が来た。ホリンは軽く咳をして、血を吐き出した。僕はリユングヴィの力を少し借りている状態で、突進した。それも、体験したことのないスピードで。

これは……………今まで以上に速い。感じたことの無い、速さだ。もしかして……………音速……………？

ホリンも気付き、ほんの少し遅れて突進した。彼もまた、同じくらしいのスピードで。

僕は剣を右肩に担ぐようにし、そのまま斜め左下へ切り下ろした。ホリンも同じような斬撃を繰り出した。

2人が交叉する。

交差した瞬間、光が弾けたようだった。だからなのか、当たったのか、やられたのか、まったくわからなかった。

僕はその勢いのまま、切り抜けた。ホリンも、切り抜けた。

2人は振り下ろした状態で、数メートル離れた位置で、止まって

いた。

ただ、前を見つめていた。微動だにせず。

そして、僕はゆっくりりと、体の感覚を調べた。痛みがあるか、血液が流れ出していないかどうか。

……何も、なっていない……？

僕はそう気付くと、後ろを振り向いた。数メートル離れた場所に立ち尽くすホリンの後姿があった。彼の右手にあるはずのルビー色の刀身が、半分しかなかった。

それに気づいた瞬間、赤く、キラキラと何かが降り注いでいる。

これは……破片……？ もしかして、壊れた刀身が……？

その欠片たちは大理石の床に辿り着くと、朱色の炎を吐きだし、小さく燃える。

「教えてくれないか？」

ホリンの声に、赤く光る炎から見とれる心を奪い返した。

「……お前はさ、なんでそこまでして闘うんだ？」

彼は崩れ落ちた天井を見上げていた。

「……言っただろ？ 普通でいたって。当たり前のことを、当たり前にしたいだけなんだよ」

「なるほどなあ……」

フツと笑った声が聴こえた。

「ハハハハ……全部殺して殺して、一から創り直せば……そうすりゃ……」

その時、ホリンは刀身の無くなったレヴァンティンを落とし、その場にひざまずいた。

「嫌んなるよ……こんな世界はよ……」

そして、ゆっくりとうつぶせに倒れた。

「ホリン!!」

僕は彼のもとへ駆け寄った。ホリンを仰向けにすると、ハツとした。彼の右肩の辺りから斜めに、腰まで長い傷がある。しかも深い。真っ赤な血が、とめどなく溢れている。これは、僕がやったんだ……焦点の定まらない緑の瞳が、僕を捉える。

「空……てめえ、は……ヒトを、どう、思う……」

ホリンは小さな声で呟いた。

「どうって……」

「殺し合って……殺し合うだけの……異端な生命、だろ……?」

もつろうとする意識の中、彼は僕を睨みつける。

「なんでそういうことを考えるんだよ! 僕は……僕たちは、どんなに頑張ったって未熟なんだ。未熟だから、争い合ったりするんだ! ……けど」

僕は顔を振った。

「全部が全部そうだったか? お前には……その部分しか見えなかったのか!? お前だって、あるだろ! 大切なものが……!」

全てのものを憎むことなど無理なんだ。絶対に無理だ。何かがあるから、この世界で生きてんだ。当たり前のことなのに……

……どうして忘れようとするんだよ……!!

「……お前は、恵まれてるんだよ……」

こんな状態なのに、ホリンは皮肉を言った。

「……憎しみだけ、で……生きるってのは……辛すぎる……それだ

けで生きるのは……もう、ダメだ……」

ホリンは小さく頭を振った。

「もう……生きたく、ねえんだよ……」

「んな馬鹿なこと言うな！ 生きたくないんだったら……どうしてすぐに死のうとしなかった！ ここまで……自分の命を賭して闘うまで生き続けたのは、生きたかったからだろうが……！」

彼の顔の前で、僕は怒声を放った。

「……ククク……馬、鹿は……てめ、えだ……」

と、彼は僕に何かを差し出した。その手に、ペンダントが握られている。

「これ、を……あいつ……に……」

「？ あいつって……誰だよ？」

「すぐ、に、わか、る……」

言葉が切れ切れになり、彼は目を瞑った。

「おい、ホリン……！」

「憎ん……で、消え、て……砂漠、は……そ　　か……辛い、なあ……」

ホリンの生気が、失った。穏やかな笑顔にある、一つのまぶたから、一筋の涙が流れて行った。

45章：惨劇の会議場 蹂躪された意思たち（前書き）

残酷な描写があります。  
苦手な人はご注意ください。

#### 45章：惨劇の会議場 蹂躪された意思たち

なんとも言えない、虚しい気持ちが僕の心を踏みつけている。僕は、ゆっくりと立ち上がった。

「……ホリン……」

もう、動かない。魂が、肉体を離れて行ってしまった。

「……ソラ」

ヴァルバの声がした。彼は僕の横へ来て、肩に手を置いた。

「なんでかな」

僕は小さく呟いた。

「なんでか……虚しい。ホリンは……大勢の人たちを殺した。やってはいけないことをした、僕たちの敵なのに……」

ヴァルバは何も言わず、僕の肩から手を離れた。

「……最後の最後だけ、ホリンは悪くないって思った。なんでだろう……」

そう言つと、ヴァルバはホリンの遺体の傍で、しゃがんだ。

「わかんないもんさ。……そういうのは」

彼はそつと指を伸ばし、東方民族らしからぬ白い肌に触れた。

「善悪を基準にして闘うのは、間違っている」

呟いたように言った言葉を、僕は聞き逃さなかった。いや、彼はわざとその程度の声量で言ったのかもしれない。

「……ホリンには、どうしても変えたいことがあったんだ。たとえば、何もかも殺して、憎むことになってみさ」

「……」

何かを変えるには、己の命を失うことになってもいいっていうの

だろうか？

「そんなの、違う。絶対に……」

「ソラ、ここで立ち尽くしていても仕方が無い。俺は、ここに襲撃してきたのがホリンだけとは、到底思えない」

デルゲンは僕の隣に立ち、言った。

「デルゲンの言うとおりよ」

後ろへ振り向くと、大きく体を伸ばしているリサがいた。

「聖帝中央庁……いや、神聖騎士団を相手にするくらいだから、幹部たち ユグドラシルが直々に来ているかもしれない」

たしかに……今まで陰で行動してきたインドラが、こうやって日の当たる場所に出てきたってことは……

「そうだとしたら、各国の首脳たちや教皇も危ない。……すでに、やられているような気がしなくもないが……」

ヴァルバは頭を抱えた。

「ともかく、会議場へ行かないと。空、行くよ」

リサは僕の背中を軽く叩いた。

「……わかった」

僕はホリンのペンダントを大切に、胸元へしまった。

「ソラさん……」

アンナが駆け寄って来た。心配そうな瞳が、うるうる震えている。

「あの……私……」

僕はアンナの頭に手を置いた。

「……僕は大丈夫だから、心配するな」

「……………」

彼女は俯き、小さくうなずいた。

「……会議場はどの扉だ？」

レンドは頭をきよろきよろさせていた。

「この北の門が教皇との謁見場だったから……東か」

「あれか」

僕たちは会議場へと向かった。

東の扉を抜け、長い廊下を走る。突き当りにあった会議場への扉を開けると、静けさと共に、血の匂いが漂って来た。会議場は、惨劇の場と化していた。

「う……ひどい……」

アンナは声を上げた。僕たちは、鼻に手を当てた。

すでに屍となってしまうた人間の姿が、巨大な円形のテーブルのあちこちに倒れている。この会議場、あの謁見の間と同じくらいの広さを持っている。だが、その床のほとんどが遺体で埋まっっている。埋まっっていない場所は、赤い血や黒い血が水溜りのように、陣取っていた。

壁にも黒い血や赤い血、何かに叩きつけられて頭を潰された人など、おぞましい壁画になっってしまったっている。

「ひ、ひどすぎる……なんだよ、これは……！」

デルゲンは顔を歪ませながら言った。それだけ、ひどい。

「お、おいおい、この遺体……大砲にでも撃たれたのか!？」

ヴァルバ大声で言った。その遺体の腹部を中心に、直径20センチほどの穴ができている。

けど……大砲にしては小さい。大砲じゃないとしたら……なんだ？

「……とにかく、生きている人を探そう」

僕はみんなに言い聞かせた。これだけの大人数だ。きっと、殺されていない人もいるに違いない。

なるべく遺体を踏まないように、搜索する。逃げ惑い、暗黒魔法をかけられ、その場で倒れてしまった人たち。剣か何かで、スタズ

夕にされた人たち。こんな光景……警官にでもならないと、見るこ  
とはないと思っただが……

会議場の角の所に、見覚えのある人を発見した。あの、黒髪の長  
髪の女性は……まさか……!!

「ラ、ラーナ様!？」

僕はその人のところへ駆け寄った。近くへ行くと、たしかに、シ  
ュレジエンのラーナ様だ!

「ラーナ様! ラーナ様!!」

僕は必死に呼びかける。ラーナ様の服や顔には、飛び散った血痕  
が残っている。いや、ラーナ様の血なのか!? そう考えると、心  
拍数が見る見るうちに上昇していく。

ラーナ様の手首に手を当て、脈を計ってみる。……生きている!

「ラーナ様、しっかりしてください!」

僕は体を何度も揺らした。

「う……」

ラーナ様の体が、少し反応した。僕は再び呼びかける。すると、  
ラーナ様のまぶたが、少しずつ開き始めた。

「……あなた、は……ソラ君……?」

ラーナ様は、細い声で言った。

「ええ、そうです! 僕です!」

僕が笑顔になった瞬間、ホツとしたようにラーナ様は微笑んだ。

「ああ……よかった、無事だったんですね……」

自分の方が危険な目にあつたのに、僕を心配してくれるなんて……

「ラーナ様、魔法に当たってはいませんか?」

念のため、暗黒魔法に当たったかどうかを訊ねなければならぬ。

「魔法……? いえ、そのようなものには当たってはいないと思

ますけど……」

「そうですか、よかったです……」

僕は胸を撫で下ろした。

「……私、逃げる人たちに押しつぶされて、気を失っていたみたいです。それが、幸いしたようですね……」

ラーナ様は、悲痛な面持ちで辺りを見渡した。

「……ラーナ様、ここは危険です。すぐに、ソフィアから離れてください」

「やはり……インドラですか……」

「ええ。まだ、いる可能性がありますし……」

「ソラー!!! こっちに来てくれ!」

ヴァルバの大声が、会議場に響いた。後ろを振り向くと、ヴァルバの手が見える。どうやら、他の生存者を発見したようだ。

僕はラーナ様を抱き上げ、ヴァルバの元へ行った。そこには、イザークの皇隆王がいた!

「おっ、ソラか……久しぶりだな……」

「陛下……大丈夫ですか?」

王の体には、裂傷の跡が見える。しかし、肩に剣を突きつけられたのか、包帯を巻いている。

「……まあ、命に別状は無いと思う。暗黒魔法だって受けてないしな」

王はへへっと笑った。

「そうか……ホリンがここに来たんですね?」

僕はしゃがんだ。王は、小さくうなずいた。

今から1時間ほど前。断末魔の叫び声が響く会議場で、ホリンと皇隆王は数年ぶりの再会を果たした。

「ぐっ！」

王の右肩に、ホリンの剣が突き刺さる。

「ふん……『劍聖』の称号を持つローランの剣士が、この程度か……」

冷たい目で、彼は王を見下ろしていた。

「ホリン……お前……！」

痛みに顔を歪ませながら、王はホリンを見上げた。

「……この時を、どれほど待ち侘びたことか……」

ホリンは目を瞑り、怒りで小さく震え始めた。

「くだらない言葉に踊らされ……何が真実かもわからないまま、てめえは俺を……父上と母上を殺したんだ！ あんたの……あんたの治世を助け続けた、俺の両親を……！」

「ホリン……」

緑の瞳がまるで、怒りの炎で赤くなっているかのような錯覚を覚えた。

「奴隷制を許さないとかぬかしておきながら、てめえは多くの命を奪った！ その罰を……俺が与えてやる……！！」

憎しみがホリンの全てを覆い尽くそうとした時、グルヴィニアの一人が走ってやって来た。

「ホリン様！」

ホリンは目を瞑り、小さく息を吐いた。

「……なんだ？」

「どうやら、巫女どもが……」

「……ふん、来たか」

ホリンは王の肩から剣を抜いた。

「……ホリン様、殺しておきましようか？」

「いや、こいつは後で俺が殺す。お前たちは、ユグドラシルの所へ行け」

「ハッ！」

グルヴィニアは一礼し、奥へと消えて行った。

「……さてと……スカサハ、お前は後だ。俺の任務は……セヴェスたちだからな。俺が戻ってくるまで、今までの人生を振り返っておけ……！」

ホリンはそう言つと、会議場を後にした。

「……ホリンは、俺を殺そうと思えば殺せた。……なのに、殺さなかつた」

王はうなだれた。あれだけ憎んでいたはずなのに。

「ホリンは、僕が殺しました」

「……そうか」

王は小さくうなずき、自分の肩に手を当てた。

「彼は……悔やんでいました。憎しみだけで生きていくことを……」

「……そうか……」

陽気な感じの王の雰囲気は、まったく感じられなかつた。  
「陛下、まだインドラの奴らがいるかもしれませんが。ラーナ様と共に、祖国へ戻ってください」

ヴァルバは辺りを見渡しながら言った。

「ああ……そうだな……」

王はそう言うと、ゆっくりと立ち上がった。よろけるその足を、ラーナ様が支えてくれた。そして、出口へと向かい始めた。

「……気を付けるよ。死ぬんじゃないぞ」

王は僕たちの方に向き直った。僕たちは、大きくうなずいた。

「皆さん、どうかご無事で……」

2人を外まで見送り、会議場へ戻り、再び生存者を探す。もう、生存者はいないんじゃないかと思つた頃、死体に埋もれた生存者を見つけた。

「あなたは……レオポルト宰相!？」

この顔は、ルテティアの若き宰相レオポルトさんだ! その隣に、豪華な服を着ている男性の遺体があつた。

……ルテティア国王ルーファス8世だ。触れてみたが、すでに事切れていた。

「う、く……」

レオポルトさんのうめき声。僕はハツとした。彼は…… 暗黒に侵されている……

「レオポルトさん!」

僕たちは必死に呼びかける。

「お…… おお…… 懐かしい…… ソラ君じゃないか…… ゲホ、ゲホ!」

真っ黒な血が吐き出された。これだけ吐くということは…… もう……

「イ、インドラの奴、らは…… う、上へ……」

上は、教皇家の人間や上層部しか入れない場所。そうか、この国の上層部を殺すつもりか!

「…… わかりました……」

僕は宰相の手を握った。もう、暖かさは感じられない。

「立派に、なっているんだ、な……よかった……」  
レオポルトさんは目を瞑り、何かを言い始めた。

「……我が主神ヘイムダル、よ……彼、らを……護り給え……」

そして、宰相は力を無くした。事切れてしまった。  
ルテティアで、牢獄に入れられた僕たちを救ってくれた。

研究所へ、助けに来てくれた。いつも見透かしているような人だったけれど……苦しみを背負ったアンナのために、多くの手助けをしてくれた。

でも、もう……その人はいない。

「……空、急ごう」

リサが言った。僕は何も言わず、うなずいた。

上へ行くための階段は、会議場の奥にあった。もしかしたら……  
この上に、ユグドラシルがいるかもしれない。

インドラを統べる、元凶。

「……ふう、怖いな」

僕は高鳴る鼓動がする胸に手を置き、呟いた。言い終わったのと同時に、誰かが僕の頭を叩いた。

「いつて！ な、何すんだ！？」

叩いたのは、リサだった。呆れた顔で、リサは僕を見ている。

「あんだね、今更何言ってるのよ？ 怖いことは、今に始まったことじゃないでしょーが」

「そ、そうだけど……」

「何度も言うよ。あんたは『独りじゃない』……ね？」

相変わらず、宝石のような瞳。僕を決して裏切らないのだと確信させる、

見覚えのある、懐かしい瞳。

「ほら、リサに見惚れてんじゃねえよ！」

と、レンドが僕の頭に手を乗せ、髪の毛をグシャグシャにした。

「な、何言ってるんだ！ べ、別に見惚れてなんか……」

「あーあー、わかったって。お前にもあ空ちゃんがいるもんさ」

「レ、レンド……」

な、なんで空の名前を出すんだ！？

「まったく……レンド、そのくらいにしてやれって」

苦笑しながら、ヴァルバは言った。

「おふざけはそこまでにして、気合入れろって」

ふざけているレンドを見ながら、デルゲンは微笑んでいた。

「そうですね。……が、頑張りましょう！」

と、アンナは気合を入れ始めた。

「ハハハ……よし」

僕は前を見据えた。

「……行こう！」

僕たちは意を決して、階段を駆け上がった。

その階段は、何を示すのだろうか。

これを上った先に、待ち受けるもの。それは……

長い螺旋階段を上ると、一つの広間に出た。思ったよりも狭い。天井は大きな穴がぼっかりと開いていて、満月の光がここに降り注いでいる。明かりはそれだけ。そのためか、幻想的な空間を作り出している。

「ここは……」

この広間は下の中央庁みたいに、大理石でできていない。ただの、黒っぽいレンガでできている。

「ようやく来たか」

男性の声が聞こえた。若々しい聞き覚えのある声。

「この……声は……！！」

僕たちは、先を見据えた。

#### 4 6 章：カナンの聖塔 星の宿命という名の下に

目線の先には月の光が届いておらず、暗い。

この広間の奥には4メートルほどの段差があり、その上にトンネルみたいなものがある。その トンネルの、入り口の部分までしか月光は届いていない。どうやら、声の主はそのトンネルの中の部分にいる。影

僕たち全員が、その先を見つめていた。

「予測通り、来たのは君たちか」

若々しい声。この声に、聞き覚えがある。

「この声……あなたは……！」

「 教皇!？」

ヴァルバが叫んだ。

そう、この声の主は……ソフィア教皇クピト1世だ!

「そのとおり」

答えを待っていたかのように、あの声が聞こえる。

「ほ、本当に……猊下なんですか？」

未だに信じられぬ僕は、自信の無い声で言った。

「ええ、そうですよ。僕こそ、ウラノス　ユグドラシルさ」

「そんな……!!」

教皇は初めて謁見した時のように、優しい声で言った。

まさか……本当に教皇が、あの……ユグドラシルだなんて……!!

「教皇……貴様が、ユグドラシルだったのか！」

ヴァルバの声は静かだが、怒りに震えている。

「そつやで」

違う場所から、違う男性の声が出た。広間の右奥の隅、月光の当たらぬ場所から一人の男性の姿が現れた。藍色のウェーブがかった髪に、首には金色のリング。Vネックのような黒い服と、黒いズボン。

あの人は

「ヴァ、ヴァルカンさん!!」

「ガーディアン守護天使……きさまもか……!!」

教皇親衛隊のヴァルカンさん……いつもニコニコしていたあの笑顔で、あそこに立っている。

「まったく、待ちくたびれたでえホンマ。お前らが、ホリンみたいな雑魚にてこずつとるからや」

ヴァルカンさんは腕を組み、小さくため息を漏らしていた。そして左手を小さく揺らし始めた。

「ホリンもホリンやで。目をかけて強うさせたゆづに……糞の役に

も立たへんかったか」

「……死んだ奴を侮辱するな!!」

込み上げた激情のまま、怒声を放った。だが、ヴァルカンさんは首をかしげて言った。

「カツカすんなや。そもそも、ホリンはお前の敵やったんやで？  
なんで怒んねん？ 理解できひんわ」

呆れたように言葉を放ち、彼はあの細い目で僕を見据えた。

「……せやけど、ただの小僧風情がよくここまで来れたな。褒めたるわ」

「何……？」

ヴァルカンさんはその微笑のまま、小さく拍手をし始めた。

「予想以上だった？」

リサがそう言うと、ヴァルカンさんの拍手が止まった。微笑みを消し、細い目で彼女を捉える。

「……久しぶりやな……リサ だったか、今は」

「……そうね」

「？ ……リサ、知り合いだっ」

隣にいる彼女の顔を見た瞬間、僕は目を見開いた。

彼女は、怒りの形相だった。歯を食いしばり、今にも唇から血が出てきそうだった。それは、今まで見てきた彼女の姿ではなかった。

「何が守護天使だ……何が、ガーディアン神聖騎士団のヴァルカンだ……!!」

床へ、彼女は吐き捨てるかのように言った。そして、顔を上げて奴を……睨みつけた。その双眸には、燃え盛る憎悪の意思が宿っていた。

「 シュヴァルツ!!! 」

「 えっ ? 」

ヴァルカンさんが……シュヴァルツ……？

あの……空を、さらった……

「 ハハハ、何を戸惑つとんねん 」

ヴァルカンさん シュヴァルツは笑い始めた。

あの笑みこそ、畏怖されし……鬼神の微笑み。

あの体格、あの筋肉。そして、今まさに解き放たれた ぞす黒

い雰囲気。これこそ……あいつの……シュヴァルツの……!!

「 改めて自己紹介させてもらおうか 」

と、シュヴァルツは笑顔で一步前に進んだ。

本当に……シュヴァルツか？ 僕が見てきたあいつは、あんな口

調じゃないし、あんな声でもない。一体、どういうことだ……! ?

「 ワイの名はシュヴァルツII グランディア 」

そう言い、奴は左手にはめている黒い手袋を外し、手の甲をさらした。そこには 紅い魔方陣のような紋章が刻まれている。

「ラグナロクの人間や」

「ラグナロクだと!？」

ヴァルバは思いがけず、叫んだ。

あいつも、リサと同じラグナロクの一族なのか!？

「どや? すごいやる。ワイも、お前らがリサと呼んどる女と同じ一族なんやで?」

笑顔で手を広げ、陽気に奴は言った。

「なんで知り合いなんか……教えてやったらどうや? ……」  
『リリナ』。まだゆーてへんのやる?」

その言葉と共に、僕たちはリサの方に顔を向けた。彼女はさつきまでの憎悪の瞳を消し、静かにシュヴァルツを見つめていた。

「……そう、私は……」

彼女は自分の服を掴み、胸元を出した。そこには

「私の名は、リリーナ・グランディア……あいつらの従妹さ」

奴と同じ、紅い魔方陣のような紋章。あれこそが、グランディアという家の……証！？」

「そうだった……んですか？ リサさん……」

アンナは震える声で、言った。

「……………」

リサは唇を噛みしめながら、再びシュヴァルツを睨んだ。

「シュヴァルツ……あんたが、空ちゃんをさらったんだろ？」

その言葉に、僕はリサに対する一瞬の疑念を吹き飛ばされた。

「そうだ……シュヴァルツ、お前が……！」

僕は怒りが湧いてきた。

この男が空を……海を、僕たちを狂わせた人間！

「まあ待てや」

僕の苛立ちとは対照的に、奴は笑顔で僕を見る。

「お前の彼女をさらったのはワイやない。それに、お前におうたのは、聖都での時が初めてや」

「あれがお前じゃなくて、誰だって言うんだ！！？」

僕は声を荒げた。もう、落ちていてなんかいられない。

「……そうか」

リサは前へ進み出した。

「空ちゃんをさらったのは……巫女たちをさらっていたのは、あんたじゃなく……バルバロッサの仕業だったのか……！」

その言葉が終わると同時に、シュヴァルツはニヤリと微笑んだ。

その時、もう一人の人間の足音が聞こえた。今度は、広間の左奥だ。一斉に、そこへ視線が向く。

「よつやくわかったか」

暗い影から出てきたのは

……！？

「リリーナの言うとおりや」

そこにいたのは、声も、体格も、顔も……シュヴァルツと同じ人間……！！ 違うのは、首元まである黒いタイツに、黒いぶかぶかのズボン。そして、藍色の髪の毛を後ろで束ねていることだけ。

「バルバロッサ……あんたが……！！」

リサは歯ぎしりと共に、その名を呼んだ。

「リリーナ、ワイはな、シュヴァルツとして行動してたんや」

「シュヴァルツとして……？」

リサは頭をかしげた。

「そんなことをする必要は無いはず……」

「正体がばれないようにするためさ」

その時、教皇の口が開いた。未だ、あの暗い影の中にいる。

「僕たちは影で行動してきた。……その姿を、あまり出すことはしたくない。だが、資金と調査の問題で、クテシフォン公爵ステファンと協力せざるを得なかった」

「せやけど、奴は諸国の情勢に詳しい。もちろん、ソフィア教皇の片腕　ヴァルカンのことも知つとる。特徴的な口調も、顔もな」

左のバルバロッサが言った。

「ガードイアン守護天使がインドラ……そこまで、あの屑公爵が知る必要はない。」

知れば、余計な事をしかねなかったからな」

教皇の言葉の意味、よくわかる。インドラの幹部だということが  
ばれれば、奴は脅してくる。それを餌にして……

「ど、どうして、シュヴァルツが2人いるんですか……?」

震えるような声で、アンナが言った。それを聞いたバルバロッサ  
は、ニコツと微笑んだ。

「教えたるうか? お嬢ちゃん」

そして、奴は右手の甲を僕たちに見えるように突き出した。

「ワイの名はバルバロッサ。グランディア。シュヴァルツの双子の  
兄や」

右手の甲には 紅い魔方陣の紋章!!

「双子だと……!?!」

「ガーディアン守護天使最強の戦士が……!!」

レンドとデルゲンは、驚きを隠せなかった。

「小僧、久しぶりやな」

バルバロツサは僕を眺めながら、不敵な笑みを浮かべていた。

「ガイアでおうたのが……9ヶ月前かいの？　ん？　あかんな、最近もの忘れがひどいわあ」

「カカカ、ボケとんちやうの？」

「この歳でボケたらシヨックやわ」

シュヴァルツとバルバロツサは、同じ笑い声で笑い始めた。

あいつが……空をさらった張本人？　だけど……

「お前……声が……？」

そう、あの時と声が違う。もつと暗く、深い声だった。ずぶ濡れのセーターのような、重い声なはずなのに。

「声？　ハハハ、その程度、ワイにかかりゃ簡単なもんやわ。ほら、こんな風にな……」

「！！？」

バルバロツサは喉に指を当て、声色を出して見せた。この声は……あの時と同じだ！　あいつは、たったあれだけのことで、僕を騙して……！

「ワイらが醸し出す雰囲気を変えることができるゆーても、まったく気付かへんって、お前ホンマ……アホちやう？」

バルバロツサは僕を指差し、下品な笑い声を響かせた。僕は、握り締める剣の鏢に力を入れた。悔しい。気付かなかった自分が悔しい……！

「んなのはどーでもええんや」

と、バルバロツサは笑いを止めた。

「小僧、お前は気付かへんのか？」

「えっ？」

僕はシュヴァルツの方へ向き直った。すると、シュヴァルツは近くにあった階段を上り始めた。その階段は、あのトンネルのある場

所 ユグドラシルが立っている台場へ繋がっている。

「……何をだ？」

「カカカ……どんくさいやつちゃやでえ」

今度は、左から声がした。バルバロツサも階段を上り始めていた。そして、2人はユグドラシルを挟むように立ち並んだ。しかし、ユグドラシルだけがまだトンネルの奥にいて、顔が見えない。

「お前は、自分が誰か……そんで、どういう血族なんかもすでに知つとんのやる？」

自分のこと……それは……

「破滅の調停者 カインⅡウラノス。あの血を受け継ぎし、ティルナノグ皇室。その直系者……アイオーンの子孫である、教皇家の人間やということを知つとるんやる？」

「……だから、なんだっていうんだ？」

そう言つと、二人は鼻で僕を笑つた。

「そこまで気付いておきながら理解できないとは……やれやれ、とんだ馬鹿だな」

再び、教皇の声がトンネルの奥から聞こえた。僕はその方向を睨みつけた。

「見えないところから言つてんじゃねえ！ 姿を見せる！！」

満月の浮かぶ夜空に、僕の声が響く。

「……まったく……声を聞いてもさっぱりなようだ」

教皇は小さく笑つたように感じた。

「声……？」

そういえば……教皇の ユグドラシルの声を初めて聞いた時、言い表せない違和感を感じた。

……違和感？

いや、違う。違和感じゃない。これは……

「しょうがないな」

ユグドラシルの足音が、どんどん近付いてくる。そして、ようやく足が見える範囲まで出てきた。白いズボン……スーツだろうか？

そこで、再び立ち止まった。

「まあ……わからないのも無理はないのかもな」

影に隠れていても、奴がため息を漏らしたのがわかる。

「どういう……ことだ？」

奴は何も言わず、足を進め始めた。少しずつ、少しずつ、彼の体が見えてきた。月光が徐々に上がっていき、奴の膝、奴の腰、奴が着ている白いスーツ。そして、奴の……

「っ……………あ……………！！！！！」

僕は、言葉を失った。

全て止まる。

震えることも、瞬きをすることも、呼吸することさえも、忘れてしまったかのようだった。

「な……………ん……………で……………！！！」

そこには、見覚えのある姿があった。

「よく、ここまで来たね……………セヴェスIIヴェルエス　いや、そう呼ぶべきではないな。こう呼ぶべきだな」

奴は微笑み、小さく言った。

「ん」

ゆっくりと言葉を放ったあいつの声を、逃すことは無かった。

あいつの口の動きを、見逃さなかった。

聞き逃せば……現実を知らなくてもよかったのに。

あんな、苦しみを覚えることも無かったのに。

でも、言葉が漏れる。

認めたくないのに。

「樹」

僕は無意識のうちに、言葉を放った。  
懐かしい名を。

僕の……………弟の名を。

「樹？ それは、たしか……………」

「ソラさんの弟さんの名前……………」

ヴァルバとアンナは顔を合わし、その名を呼ぶ。

樹と思われる青年は、僕に視線を合わせた。この瞳に見覚えがある。

赤紫 ルビーのような瞳。

以前とは違う。でも、知っている。

あれは……………樹。

4年近く前に死んだはずの 弟。

「もう一度言ってみようよ」

あの頃とは違う、大人びた声であいつは言った。

「僕はクピト1世　ユグドラシルだ」

インドラの頭領だと、奴は言った。  
体が、震える。

恐怖とか、そういうものじゃない。

信じたくないんだ。現実を……

「久しぶりだね、兄さん」

樹はあの懐かしい微笑みを向ける。大人びたその顔は、当時の幼さを思い浮かばせる。

「な……んで、お前が……お前、が……！！」

僕は顔を振る。現実を否定したい。否定して、何もかも忘れてしまいたい。

「あれから約4年、か」

ふーと息を吐き、彼は上空にある満月を見上げた。

「月日が経つのは、意外と早いものだな……」

優しい瞳はうるたえる僕を見つめて、疑念を浮かべた。

「まだ信じられないのか？　4年近くも経てば、成長もするけど……」

ホラ、よく見てみるよ。あなたの弟、樹……アスマイツキ東樹だ」

「そん、な……」

あいつが……ウラノス　ユグドラシル……！

嘘だ……嘘だ……！！

「空の弟　樹、か。あんたが、ユグドラシル……ふん、　樹と伝説の大樹を掛け合わせるとはね……」

リサは大して驚いた様子も見せず、腕を組んだ。そんな彼女を、樹はルビーの瞳で見つめる。

「……リリーナ、貴様でさえわからなかったようだな。東空の弟が  
教皇、そしてインドラの頭領だったことをさ」

「……………」

樹はにこやかに言った。そして、彼は再び僕に顔を向けた。

「ここまで、なかなか楽しい旅路だったんじゃないのか？ 兄さん  
兄さん。」

成長した声で、僕を呼ぶ。呼ばれる度に、呼吸が荒くなっていく。  
「どうだい？ レイディアントは。僕たちが育った世界には無かつた、多くのものが存在している、美しい世界だろ？」

変わらぬ微笑み。

その微笑みは、幼き頃から僕を捉えていた。あの頃と違うのは、  
一片の温もりさえ感じられぬものだということ。

「青い世界　ガイア。あそこは、ヒトによって穢された世界。歩むべき道を違えた、愚かな次元。……そう、あれはイレギュラーなんだよ」

まるで演説者のように、樹はしゃべっている。

「この世界とはあまりにも違い過ぎている。そうは思わないか？  
兄さん……………」

台場から僕たちを見下ろしているその様は、どこぞの権力者のようだった。温かい視線などない。どこで覚えたのか知らない　冷たい視線。

その時、リサが一步前に出た。

「ユグドラシル……………いや、東樹。あんたは……………4年近く前に交通事故で死んだ　はずでしょ？　どうして、生きてるの？」

リサは一番の疑問をぶつけた。樹は、頭をかしげた。

「……………交通事故で死亡？　まさか、それを未だに信じていたのか？  
樹は目を細め、嘲笑うかのようにクククと笑う。

「死体も無いのに、どうして死亡扱いなんだ？　どうして、生きているんじゃないかと想像しなかった？」

「そ、それは……………」

あの状況で……………生きているとは、思わない……………思えない……………  
ククク……………生きていると仮定すれば、聖魔の力を持つ兄さんの弟

であり、先々代教皇の息子である僕が教皇ではないかと、考えられたかもしれないのに、さ」

口元を手で隠し、樹は笑っている。

「考えてもみるよ。僕が『死んだ』頃とソフィアでクーデターが起きた頃……同じだろ？」

「！……！」

樹が死んだのが約4年前……ソフィアでのクーデターも、4年前

……！！

「ハハハハ！ お前たちは、本当に馬鹿だな。ヒントがあったのに、何一つ気付かないなんてさ」

「馬鹿馬鹿……連呼してんじゃねえ！！」

その時、レンドは怒りの形相で叫んだ。だが、樹はそれに冷たい目で見下ろしていた。

「フツ……お前には話していない。単細胞は黙ってな」

「な、何……！？」

「レンド、落ち着け」

デルゲンはレンドの肩を掴み、小さくうなずいた。レンドは、何も言わずに前を向いた。

「へえ、この状況で冷静だなんて……海賊如きの中にも、お前みたいな奴がいるとはな」

樹は小さな拍手をデルゲンに送り始めた。

その時、あいつは僕のことを思い出したのか、再び僕に視線を向けた。それと同時に、僕は無意識のうちに口を動かしていた。

「どっしてだ？」

ようやく出てきた言葉は、震えている。

「お前は……なんで、インドラなんかを結成したんだ……？」

「……」

彼は何の反応も示さず、瞬きもせず、僕を見ている。

「どうして……空を……」

僕の中に、どうすることもできない激情が浮かんできた。それは怒り。

「どうして、あいつをさらうような真似をしたんだ！！ どうして、あいつらを傷つけたんだ！！？」

僕は顔を上げて叫んだ。

「あいつらは……空と海は、お前の大事な幼馴染だろ！？ なんでこんな……こんなことをしたんだ！！」

あの優しかった樹が……こんなことをするなんて信じられなかった。いつも優しく微笑み、いつだって周囲の人たちのことを気にかけていた。

あいつが、空と海を傷つけた。そして、世界を滅ぼそうとしている。わけのわからない真実の中で、僕は未だもがいていた。

「なんとか言え！ 樹！！！」

樹。その名に反応したのか、彼のまぶたが少しだけ動いた。

「……星が誕生して数十億年」

彼は満月を仰ぎ、呟いた。

「人類が誕生して数百万年……その中で、どれだけの命が奪われたか」

目を瞑り、静かに言葉を放っている。

「数え切れないほどの虐殺……殺し合い、憎み合い……。とことん、堕ちるところまで堕ちた」

そして、彼は僕たちに顔を向けた。ルビー色の双眸が、僕たちを睨みつけている。

「それがヒトだ。間違いなんだよ、ここまで穢れてるのは……」

「だから、お前が神に代わって天罰を与えても言うのか？」

その時、僕の後ろにいるヴァルバが、前に出て樹の言葉を遮った。

「そうだとしたら、驕りが過ぎてるんじゃないのか？」

ヴァルバの怒りにも似た声が、この広間に響く。しかし、樹はそれを鼻で笑った。

「違うな。そもそも、驕りが過ぎるのは 存在するすべての人間だ。多くの動物や植物を管理し、自分たちにとって都合のよいように作る。遺伝子操作なども行い、新種の生命まで誕生させた。まるで、自分たちが生命の統制主であるかのようにな」

「それはガイアでの話だろ！ たしかに、あそこでは自分たちのために研究だと言って、生物を弄んでいる。……だけど、それはレイディアントを滅ぼそうとする理由にはならない！！」

僕は叫んだが、樹はそれを不敵な笑みで吹き飛ばす。

「……元は同じ世界。いずれ、同じような文明を築き上げる。それはある意味、人類が必ず歩む道なんだよ。あちらの世界での『星の遺産』がどこにあるのかわからない今、こちらの世界を滅ぼす方が手っ取り早いんだよ。ガイアの文明レベルなら、放っておいても近い将来に滅びるからな」

「手っ取り早いだと……？ 世界の……全ての命を握っているのは、貴様らだというのか？ お前らは、神にでもなったつもりか！？」

今度のヴァルバは、思わず怒声を上げていた。

「僕が神になったつもりだというのなら、存在する人間全ても神になったつもりなんだよ。もちろん、そうだと気付いている奴はほとんどいないがな。……それに、僕たちがやっていることは表面上たいてい変わりはしないからね」

樹は微笑を浮かべながら横髪をいじった。彼は横髪だけが、胸に到達するくらいの長さだった。

「人を憎んでいるのなら、なぜ俺たち人類と同じようなことをする?!?!?」

「同じじゃない。人類の馬鹿げた妄想の果てにある現実と、僕たちが目指す果てには、あらゆる憎悪がその楔から解き放たれ、癒される。履き違えるな」

「貴様……! 履き違えているのは、お前たちだろうが!!」

抑えられなくなった怒りの言葉を、樹は小さく笑いながら受け止めていた。

「声を荒げるなよ。落ち着いて話をするともできないほど、お前は馬鹿なのか?」

「この……貴様ア……!!」

わなわなと震える、ヴァルバの拳。今にも、血が滲み出そうなほどだった。

「ヴァルバさん、堪えて……」

アンナがすぐさま、ヴァルバの震える手を押さえる。

「ぐっ……!!」

アンナの言葉で、ヴァルバは深呼吸をして、落ち着きを取り戻した。

「ヴァルバ、確かにお前の言う通りかもしれない。だがな、よく考えろ。なぜ理不尽に生命は傷つけられ、星は汚されるのか。……貴様ならわかるんじゃないのか? 多くの喪失を経験してきたお前なら、さ」

その言葉を、ヴァルバは受け止めてはいなかった。床へ顔を俯かせ、悲痛な面持ちだったのだ。

「……人が弱いからだ。そうだとしか……」

ヴァルバは小さな声で言った。

「人が弱いとか、そんなんやない」

関西弁の声 シュヴァルツが言った。

「この星の上に、命があるからや」

今度は、バルバロッサだ。

「命……？」

樹はうなずき、続けた。

「命ある限り、この星は食い物にされ、同時に命は傷つけあう。その中に、人類のように生命の統制主であるかの如く暴虐の限りを尽くすものも出てくるのは、ある意味、自然の摂理と言える」

そして、彼は右手を掲げた。

「さて、そこから導き出される結論とは何かわかるか？」

「……」

誰も答えなかった。答えようとしなかった。……わからないけれど、とても恐ろしいというのは容易に想像できた。

誰も言おうとしないことを想定していたのか、あるいは代わりに思ったのか、樹は 言うてはならない答えを放った。

「全ての生命を根絶させる。それが結論だ」

背筋を、冷たい感触がよぎった。

「なん……だつて……？」

全ての生命を滅ぼす……だと！？

「お、お前、何を考えてんだ！！？」

恐ろしさ、そして驚愕のあまり、僕は叫んでしまった。

「お前らは知らんやろ？ この星の未来を」

シュヴァルツは睨みつけるかのように言った。

「星の未来……だと？」

「……数千年を経た遙かなる未来に、この星は滅びる。逃れようの

ない死を迎えるんや。それはなぜか？」

「人類によつて、この星は滅びる」

「えっ……？」

バルバロッサが続くように言った。

「愚かな人類……くだらない理想という名の妄想の果てに、己らの世界ごとこの星を……ワイらの『母』を殺すんや」

奴の目 リサと同じエメラルドグリーンの双眸が激しく、猛々しくも静かに、憤怒で燃えていた。

この星を、人間が滅ぼす？ まさか、そんなことが……

「……もし、そうだとしても……他の生命を殺す必要が、どこにある！？ 無駄に血を流させるつもりか！？」

樹たちに向かつて、大声を放った。樹は、再び目を閉じた。

「無駄？ 無駄じゃないね。言つたる？ 僕たちが目指す先……全てのものが癒されると」

「癒される……！？ そんな殺戮の果てに、何が残るって言うんだ！？ 何も……何も残らないじゃないか……！」

「残るよ。星が」

即答だった。同じ質問をすると言わんばかりに、樹は僕を蔑んでいた。

「人類ほど醜悪で、破壊衝動に駆られた生命なんていない。だろ？ ……信じられないのか？ 信じるに値しないってのか？」

ヴァルバの言葉に、樹はニコリと微笑んだ。シュヴァルツ いや、バルバロッサが見せていたような、冷たい微笑を……

「違うのか？ ヴァルバ！ ダレイオス。お前はよく知ってるはずさ。お前は」

「……………」

ヴァルバは口をつぐみ、ただ樹を見ていた。

「いいか？ 生命ある限り、人間のような劣悪種が生まれてくる。

だからこそ、人類は『神々の鉄槌』が落ちても尚、こうして生き延びているんだ」

「……………?」  
その言葉の意味がわからない。

## 神々の鉄槌

あれ……………?

なんだ? 今の感覚は……………

「もう遙か昔の話さ。気が遠くなるほど、ずっと昔」  
そして、樹は僕を見据えた。

「兄さん、あなたも何度か見たはずだ。その直前の光景を」

「直前の光景……………?」

そんなもの、見た覚えは……………

意味を理解していない僕を見て、樹は小さくため息を漏らした。

「……………覚えていないのも無理はない、か。……………まあいい、話を元に戻そう」

そう言つて、彼は一度手をパンと叩いた。

「僕が言いたいのはさ、結局のところ人類は一度滅んでおきながら、再び隆盛の時代を手に入れたつてことだ。無数の犠牲と、星の痛みによつてな」

「……………」

「どうしてそうなつたのか……………生命は死に絶えていなかったからだ。生命の中から再び人は生まれ、全てを愛そうとする星によつて、今日に至る。……………わかるだろ? 人間という生命が生まれないようにするために、全ての生命を根絶させる。それしか方法はない」

樹はきつぱりと断言した。強固な意志……………それが垣間見えた気がした。けど……………考え方が……………飛躍している。いや、し過ぎている。

「全てを束ねる負の連鎖を断ち切るには……………大いなる破壊と殺戮が必要だ。何も生み出せないよう、無に還すのさ。そうすれば、この

星が傷付けられることは永遠に無くなる」

そんなひどいことを……どうして考え付くというんだ……？

心の中が、暗転する。昔の記憶が、グニャグニャに捻じ曲げられている。

虫一匹、殺すことさえできなかったあの樹が……

あの場で、全てを殺すと言っている。

「どうして……そういう方法を選んだ？」

そう言わざるを得ない。それしか、出て来なかった。

「どうして、最もひどい方法を選び取るんだ！」

「……知っているはずだよ、兄さんは」

「えっ……？」

彼は目を瞑り、少しだけ微笑んでいた。

「兄さんは……ずっと、護ってきた。自分の大切なもの、全てを」

僕が……護ってきた？

「空と海……そして、僕を」

想い出を語るかのように続ける樹。

「それと同じなんだよ。結局さ」

「同じ……？」

「僕はこの星を護る。この星の未来を……護る」

「この星を護るために……全ての命を殺すっていつのか……？」

違う！ そんなの、絶対に違う！

「護るためなら、何もかもぶっ壊してもいいっていつのか！？ そ

れは違うだろ！」

「違っているのは兄さんだよ」

「!?!?」

彼は小さく頭を振った。

「絶対的な摂理……何かを得るには、それと同等の犠牲が要る。星という巨大な生命体を救うには、それに住まう全ての生命の犠牲が必要なんだよ」

「そんなの間違ってる！　なんで、もっと考えないんだ！　もっと、他の方法があるかもしれないだろ!?!?」

僕が叫ぶと、シユヴァルツとバルバロツサは笑い出した。

「カツカツカ。小僧、お前は本当に甘ちゃんやなあ。あほかっちゅーねん」

「んなきれいごと、ゆうとる場合やあらへんのや」

「きれいごとだと!?!?」

僕はキツと2人を睨んだ。

「きれいごとの何が悪い！　そういうった方法の方が、誰しもが平和に過ごせることだってあるだろうが!?!?」

「あほか。んなの、とうの昔から知っちよるわい」

「まったく……話にならないな」

樹はわざとなのか、大きくため息をついた。

「兄さん、あなたの言っていることは所詮、理想論だ。その理想論を叶えられた人間がいると思うか？　きれいごとは、叶えられない。その途中であきらめるか……もしくは、朽ち果てるのが関の山さ」

「くっ……!?!?」

僕は言い返せなかった。歯を噛み締め、ギリギリと音がする。

その時、リサが僕を守るかのように手を前に差し出した。

「あんたたちは、楽な道を選び取ったんだろ？」

「……楽な道？」

樹は首をかしげた。

「そうさ。万物は、創るよりも壊すことのほうが簡単だからね。あんたらは手っ取り早く、理想を実現しようとしている。最善な方法を行い、時間をかけて理想を実現することをあきらめたってことだ。……それを楽な道と言わずに、なんて言うのさ？」

「なるほど、御尤もだ」

樹は不気味な笑顔を浮かべてながら、リサの話の話を聞いている。

「あんたたちは、ただ星を救いたいんじゃない、星を食い物にする存在が許されないだけだ。……星を救う、っていう大義名分を掲げ、憎んでいる存在を消し去りたいだけなんだ！」

リサは今まで見た中で、最も声を荒げていた。許すことができない……その気持ち、伝わってくる。

「……ふーん、なるほどね」

樹の態度は、まるで母親が子供の愚痴を聞いている様子だった。

「リリーナ………かつて、この星の未来を救おうと、太古の人間と戦った存在がいたじゃないか。それを知っていて、そんなことを言っているのか？」

「……え？」

リサは頭をかしげた。

「まさか……知らないのか？ ハハハハ！」

樹は笑い出した。同時に、シュヴァルツとバルバロッサも笑い始めた。

「なんや、リリーナ………お前、知らんのかいな？」

「何………何のこと？」

彼女は戸惑いを隠せない。

「ハハハ………知らないなら、知る必要は無い。なぜなら、そいつの理想は兄さんと同じようなものだったからだ」

僕と同じ考え………そんな人が？」

「その男は……最も犠牲が少なく、最も星と生命を癒すことのできる方法を求め、戦った。だが……男は結局その理想を実現することはできず、逆に世界を2つに分けてしまったんだよ。星を癒すどころか、さらに次元の混沌を深めてしまったのさ」

「!!!!!!」

まさか……その人こそが、ガイアとレイディアント……一つの世界を二つに分けたっていうのか!?

「人の仕業だったのね……!!」

「何だ、そんなことまで知らずにここまで来たのか？ まったく……無知なものほどほどにして欲しいな」

ム、ム力つく……。樹って、この4年近くの間でかなりひどいものになってるな……。

「僕が言いたいのは、結局きれいごとでは……いや、お前たちが理想とする最善な方法では、星は救えない。救えなかつたんだ。この星を滅亡の未来から解き放つには、僕たちの理想でしか実現できないんだよ……」

樹は僕たちに背中を向けた。上半身の白いスーツが、月光に当たって青っぽく見える。

「さて、話は尽きた。そろそろ、ディナーショーといこうか」

「お前ら……何をするつもりだ!?!」

レンドは怒りで震え、叫んだ。

「レンド……だったっけ？ 君は、あまりしゃべらないほうがいい。

……命が惜しいならな」

彼は振り向かないまま、言い続ける。

「さもなければ……ブリアンのように、死ぬことになるぞ?」

「なっ……!!?!?」

ブリアンのように……!?!?

その時、レンドの双眸が見開いていたのは言うまでもない。

「て、てめえ……!! やっぱり、てめえらの仕業か!!」

レンドの怒声に、バルバロッサは笑った。

「たしか……ブリアン＝カシユフォードやったかの？ あいつは『緑風の巫女』をさらった現場を見とったからな……」

「たしか、シュレジエンの王女やったか？ 緑風の巫女は」

「あーそうそう、それや」

と、シュヴァルツは思い出したかのように手を叩いた。

シュレジエンの王女？ シュレジエンには、王子しかいなかったんじゃない……

「待て、シュレジエンには王女はいない！ ということだ！？」  
デルゲンが声を荒げた。

「知らんかったんか？ ラーナ女王には、王女しかおらんかったはずなんやけどな」

「なんだと……！？」

「ブリアンは、その場を目撃した。あの頃は、まだインドラの存在を明かすべき時ではなかったからな」

「……口封じのために、ブリアンを殺したってわけね」

「そのとおり」

樹はくるっと、僕たちの方に向き直った。その顔には、笑みが浮かんでいた。最早、レンドは怒りを抑えることができなかったのか、腰のベルトに付けてあった斧を取り出した。

「うああああ……！」

そして、彼は怒りの赴くまま、奴らの方へ走って行った。

「よせ！ レンド……！」

デルゲンは止めようとしたが、遅かった。

「しゃーないなあ……ワイがやったるか」

「いいよ、シュヴァルツ。僕がやるっ」

レンドは段差の上にいる樹を目掛け、持っていた数本のナイフを

投げつけた。しかし、樹は微動だにしない。このままでは、当たってしまう。

すると、樹は掌を広げてた。

「消える、パニッシュ」

一瞬の間に、円形の光が出現し、ナイフはそれに当たると消えて無くなってしまった。

「何!？」

「ゼロ」

樹はそう呟くと、彼の掌から巨大な赤紫のレーザー光線が飛び出した。あれは……僕と同じものか!？

光線は一瞬にしてレンドを襲った。

「ぐわあー!！」

そのまま、レンドは壁に叩きつけられた。崩れていくレンガと共に、レンドは埋もれて行く。

「ぐっ……は……!！」

「レンド……!！」

デルゲンがレンドもの元へ駆け寄る。僕もそこへ行った……しかし、彼の意識はすでにもうろうととしていた。服は破け、焼けただけたような傷や、裂傷などがある。

「樹……!！」

僕は樹を睨んだ。樹は……冷たい微笑を僕たちに向けていた。

あいつは……ためらいも無く、レンドを殺そうとした……!

「くだらないことでいちいち怒るなよ……。あなたはまだ覚醒していないんだから、暴走するだけだぞ?」

「樹……お前……！」

「まあいい。ディナーショーを開始しようか。……バルバロッサ、連れて来い」

「あいよ」

バルバロッサは陽気な返事をし、トンネルの奥へ入って行った。

「何を……するつもりだ？」

そう言うと、樹は僕に笑顔を向けた。

「兄さんが喜ぶことと、悲しむこと……両方だよ」

意味をまったく理解できなかった。ただ、この時の樹の笑顔が、とても不気味だったことを……後の僕はよく覚えている。

「連れて来たで」

再び、バルバロッサの陽気な声が聞こえた。月の光で彼の姿が見え、そして、彼が連れて来ている人間の姿も……ようやく、見えた。

「空？」

言葉が漏れた。

あれは……空なのか？

一度見ただけでは、僕は信じられなかった。

彼女は後ろで両手を縛られていて、腕を掴んでいるバルバロッサの手を離そうと、もがいていた。

「離して！」

空の声……

彼女の声が、こんなにも懐かしく感じるなんて……ほんの、9ヶ月しか離れていなかったのに。

僕は自分の中に沸々と湧き上がる想いによって震える体を何とか抑えつけ、もう一度、彼女の名を呼ぶ。今度は、彼女に届くように。

「空！」

僕の声が、この空間に響き渡る。空はそれに気が付くと、抗っている行動を止め、声がした方へ顔を向けた。ゆっくりと首が回り、瞳が僕を捉える。

「そ、空……？」

そう言っ、彼女はもがくのを止め、動かなくなった。しばらく、沈黙が流れた。

「空なの……？」

その沈黙は、彼女が僕の名を呼ぶことによって引き裂かれた。

「本当に……空なの？」

「ああ、僕だ……空だ！」

なんて表現すればいいのだろうか。わけのわからないくらい……理解できないほど喜びが込み上げる。今までの辛さ、苦しみが、水泡に帰すかのようだった。

「来てくれた……本当に、来て……くれ……！」

彼女は想いを抑えられず、あの懐かしい　空色の瞳から、多くの雫を落とし始めた。

「感動の対面はここまでだ」

「……」

その時、僕は現実に引き戻された。今、この場には……奴らがいるというところを。

「兄さん、忘れてはいないか？　僕が、何のために空をさらったのか」

「………！！」

あの真実が、頭の中をよぎる。

永遠の巫女。

あいつら……！！

「そうそう。空ちゃんは、ここで死んでもらわなあかんのや」

シュヴァルツの陽気な笑い声が聞こえた。その声の奥に、闇の淵のような殺意を感じる。いや、殺意ではない。僕が感じる恐怖だ。命そのものを、なんとも思っていないんだ。

「や、止める！　空に手を出すな！！」

僕は叫んだ。ダメだと、心の底ではわかっているのに。

あいつらは止めない。犠牲をいとわないのだから。

「空の元素の結晶　『宝玉』を取り出すことによって、『聖杯グルール』は完成する」

すると、バルバロッサは樹の前に空を突き出した。

「……樹……」

空は顔を上げ、樹を見つめた。

「さて、覚悟はできたか？　空」

樹は、空にもあの冷たい笑顔を見せる。

「どうして……どうしてなの？ 樹……」

「……………」

彼女は小さく頭を振る。未だ信じられないのは、彼女も一緒だった。そんな彼女を、樹は無表情で見つめる。

「あなたは、そんな人じゃなかった……そんな人じゃ……なかったじゃない！」

空は泣きながら叫んだ。

すると、樹はクスクスと笑い始めた。僕たちは理解できなかった。

「何が……おかしいの？」

そして、彼はようやく笑いを止めた。

「どうして、か。お前には関係ないことだ……」

まるで玩具を見るかのように、樹は空を見る。

あいつは……樹？

違う……あれは、樹なんかじゃない……！

「樹……私は……私たちは、いつだって一緒だったじゃない。あなたがいなくなつて、死んだと思つて、私も海も……空も、みんなも……すごく悲しんだ。それだけ、あなたを愛していたのよ？ どうして、それがわからないの？ あなたなら……簡単に気づくことでしょ？ どうして、目を背けようとするの？」

疑問しか浮かばない。僕も空も、昔のあいつしか知らない。

なぜ？ どうして？

それしかない。

「何を勘違いしている？」

彼は、彼女に向けたこともない……いや、向けるはずもない瞳を向けた。

あいつは 空を睨みつけたんだ。

「4年前、お前が見てきたいつもの樹は死んだんだよ」

「……………!!」

「僕は………… ユグドラシル シャルフィール ヲヴェルエスだ」

「……………いつ、き……………？」

彼女の体が大きく震える。恐怖と、真実に打ちひしがれて。

「どうして……………そんな考え方をするの？ ねえ、どうして？」

「それは、お前が知るべきことじゃない。どうせお前は、ここで死ぬんだからな……………」

すると、樹の右手が光り始めた。

「樹!! やめる!!」

「うるさいな……………黙って見ている。あんたでは、どうしようもできないんだからさ」

彼は僕を虫を見るが如く、吐き捨てた。

「くっ……………樹イー!!」

僕は走り出した。それと同時に、剣を引き抜いた。リユングヴィの力を、出せるだけ出すんだ! そして、空を取り戻す!!

「やれやれ…………… シュヴァルツ、相手してやれ」

「あいよ」

シュヴァルツは台場から下へ飛び降り、首を右や後ろへと回した。準備体操のつもりだ。

「小僧の力がどないなもんか…………… 見させてもらおうやんけ」

さらに、指の骨を鳴らし始めた。

不気味な威圧感が漂う。いつもの僕なら、足を止めて慎重に行くのだが…………… 今は、そうできなかった。怒りだけが、今の僕を支配していた。

その時、僕の中で力が大きく膨れ上がった。

馬鹿が……消え去るつもりか

リユングヴィの声が聴こえる。だが……  
「るっせえ！ 引っ込んでろー！！」  
僕は叫んだ。

うるさい！ 邪魔だー！！  
空のためなら……少しくらい……！！

愚かな末裔だ  
シリウスの野郎も浮かばれんな

「ダメ！ 空ー！！」  
リサの音が後ろから響く。しかし、僕の心にはとどいてはいなかった。

「はああああー！！」  
僕はシュヴァルツに剣を振り下ろした。しかし、シュヴァルツは動こうとしなかった。

ガキイイ！！

「なっ……！！？」

僕の剣は、シュヴァルツの手で止められていた。そう、素手で。

「う、嘘だろ……!!?」

「なんや、こんなもんか?」

シュヴァルツは大きくため息をついた。そして、にこやかな笑顔から、鬼も退く、冷たい顔に変化した。

鬼神の微笑み

「ふん!!」

気が付いた時には遅かった。いや、剣を掴まれた以前から遅かった。シュヴァルツの豪拳が、僕の腹部に直撃した。とんでもない衝撃が、体の中へ突き抜ける。口から、胃液が吐き出される。

「がつ!!?」

僕はその衝撃で、後ろの壁まで吹き飛ばされた。その場で、僕はのた打ち回った。

「ぐっ……がああああ!!」

「ソラさん!」

口から、胃液と共に大量の血液が出た。

痛い……! 内臓が……!!

「嫌あああ! 空あ!!」

泣き声で、悲鳴が聴こえる。彼女の声が……

「お願い! 空にひどいことはしないでえ!!」

空は嘆願するが、それを受け入れる奴らじゃない。樹たちは、僕を見下ろしながら微笑んでいた。

「こきゅ……う、が……ぐっ……!!」

呼吸がうまくできない。口の中に、鉄の味が広がる。まさか、折れた骨が肺に突き刺さったんじゃない? ……?

「なんや? ホンマ雑魚やな。こんなんに、ホリンの馬鹿は負けたんかい」

シュヴァルツは右手をぶんぶん振り回していた。

「ま、印を持たん人間なんぞ、小僧程度にやられるなんて」

バルバロッサがそう言うと、シュヴァルツと共に笑い始めた。

「く、そ……！」

「ソラさん……！」

「ソラ！」

ヴァルバとアンナが駆け寄って来た。

「兄さん、ここで見ている。あんたの大事な人間が、死ぬところをな……」

僕は危険信号を出している体を起き上がらせた。だが、それをヴァルバとアンナの二人が止めようとする。

「ジツとしてる……！」

「うる……せえ！」

差し出すヴァルバの手を跳ね除けた。

「空……ぜってえ……！！！」

口から滴る血が、床のレンガに小さな円を描く。

「止める！ ソラ……！」

「動かないで下さい！ 血が……」

「邪魔……するなあ……！」

退き止めようとするアンナの手を、僕は振りほどいた。

「これ以上リユングヴィの力を使うと、暴走しちまう……！」

ヴァルバは僕の体を力いっぱい、引き止めた。

「だけど、空が……！ ぐっ……！」

僕は大きく咳き込んだ。再び、真っ赤な血が吐き出された。胸の奥が、ズキンズキンする。

「暴走しちまったら、お前は自分を失うんだぞ！？ 敵味方関係な

く、殺そうとするんだぞ……！」

「……だけど……！」

僕は必死にもがいた。

その時、樹の視線を感じた。そして

「ここまで来れない、自分の無力さを呪うんだな」

哀れな者を見る目で、あいつは僕に言った。その言葉が、引き金だった。

僕を喚ぶ崩壊の導

碎けて

死ね

コロセ

「う……………」

僕の周りに淡い、緑の粒子たちが出現した。一瞬にして、痛みが消えた。

「ガアアアアアア！！！！」

僕は獣のように、雄叫びにも似た声を轟かせた。

「青い髪　それに、魔痕が額に現れとる。暴走やな」

「へえ……暴走にしては、なかなか強力なりジエネレイトだな」

「あんな小僧でも、お前と同じカインの直系者や。そんなくらい無いと、奴に選ばれんやろ」

樹たちは冷静に何かを言っている。

「空！　やめなさい！！！！」

僕の前に、リサが立ちはだかった。だが、この時の僕はもう僕じゃない。

化物だ。

「ドケエー!!」

僕は彼女に向って、掌からレーザーを出した。

「なっ!?!」

リサはその巨大な光線を右へ飛んで避けた。彼女がいた場所に、砕け散った大量のレンガと粉塵が舞いあがる。

「うおっし! 今度はちゃんとやろうか!」

シュヴァルツは何度か屈伸し、僕を見据えた。

「おおああああ!!」

僕 化物は叫びながら、そこへ突撃した。中程まで行ったところで、印を結ぶ。

「破滅の旋律、我が膝下にありし言霊を喰らえ……………汝、時の底へ墮ちろ…………」

「クダケロ カタストロフィ!!」

シュヴァルツの足元に、巨大な黄色い魔方陣が出現した。それは瞬時に黄金に煌めき、破滅の宴を呼び起こす。

「これは…………」

床が砕け、土砂が噴水の如く溢れ、そこを中心に全てが砕け散る。シュヴァルツを包み込み、破片や土砂と共に大爆発を起こした。

化物はそこへ斬撃による衝撃波を幾重にも重ね、飛ばした。

「なるほど…………禁忌聖魔術か だが!!」

彼を包んでいた魔法の造形物が、奴が発動させたアンチマジックにより、一瞬にして弾けて消えた。

「せっかくの聖魔術も、小僧程度じゃあ使いもんにならんわ!!」  
そして、奴は右手を前に出して巨大な障壁を出現させた。化物が放った剣の衝撃波はそれに当たり、塵となって消えた。

「ガアアア!!」

雄叫びを上げ、シュヴァルツへ再び突撃する。瞬速の斬撃を、奴は右へ・左へと素早く避ける。

「なかなかのスピードやな……暴走状態にしちゃあ、大したもんやで!!」

奴が発動させた強力なソリッドプロテクトによって、化物の攻撃は全て防がれる。

「ウアアアア!!」

振り降ろされた剣は奴に当たらず、床のレンガを破壊する。

「ほう! 破壊力もなかなかやな〜!!」

「シネエ!!」

刹那の横一文字をしゃがんで避けたシュヴァルツは、水面蹴りを繰り出した。化物はそれを小さく跳躍して避け、剣撃を繰り出す。しかし

「うるああ!!」

シュヴァルツの豪拳が、化物の剣を砕いたのだ。だが、化物はすぐさま回転し、空中蹴りで奴を攻撃する。

「甘いわ!!」

それを左手で防御した奴は、右手を引いた。

「荒れ狂う竜巻、切り刻め! 奥義

ランリュウレッツシュウセン  
嵐龍裂襲閃!!」

奴が繰り出したコークスクリューから、全てを切り裂く竜巻が飛ばされた。

「があああ!!」

それに巻き込まれた化物は吹き飛び、ソリッドプロテクトもろとも、体中をズタズタに切り裂いた。

「空アア!!!」

空の叫びが響く。化物は床に落ち、あまりのダメージにリジエネレイトが追いつかない。

「お前に奥義使わせるとは、なかなかちやうん？」

「なーにゆーてんのか？ さっさと終わらせたかっただけやっちゅーねん」

シュヴァルツは手を広げて、余裕の笑いをした。

「グ……ククク……ハハハハハハ！」

体中から血が流れ出ているのに、化物は何事も無かったかのように立ち上がった。

「暴走にしちゃあ、ちと自我の崩壊がひどいのお……」

「お前の奥義が、余計に油を注いだんちゃう？」

バルバロッサは腕を組んだまま、笑っている。

「死ぬ……死ぬ、殺せ、刹せ、屠れ キエロオ!!!」

咆哮と共に、化物は樹の方に手をかざした。

「シネ……ゼロ!!!」

その手から、青紫の巨大なレーザーが出現した。それは樹の方に、高速で直進していった。

「ふーん……本物を見せてやるよ。　ゼロ」

再び、樹の手から赤紫のレーザーが飛び出していった。

二つのレーザーは中程で激突し、一瞬だけ停滞した。しかし、樹のレーザーは化物のそれを消滅させ、化物に直撃した。

「ゴアアア!!」

壁に叩きつけられ、化物はその場に屈した。

「お願い、樹! もう……もうこれ以上、空を傷つけないで!」

「……お前は黙ってる」

泣き叫ぶ空に小さい声で言い、樹は化物を見つめた。

「馬鹿が。その状態で、覚醒している僕に勝てるわけないだろ?」

「ぬう……ガ……!!」

それでも立ち上がるうとする化物の所に、リサが駆け寄る。

「空!!」

彼女は手を添え、何かを呟き始めた。黄金の粒子が、彼女と化物の周りに漂い始める。

「何、ヲ……スルツモリダ……!?!」

「ジエ・レル・ヴェスナ・セスタ 悠久なる精霊の灯火よ、

我らが幼子を護りたまえ……!!」

あの時の魔法を唱えたのだ。

「!!! リア、キサマ……マタシテモ……!!!」

僕を覆い尽くしていた、あの冥い残像が……霧が晴れていくかのように、消えていく。

霞んだ意識が、僕の中に戻ってきた。それと同時に、体中からとつもない痛みを感じた。これは……シュヴァルツにやられた技によるものか……!!

「空!? 大丈夫?」

「リ……サ……」

言葉が漏れると、彼女はニコツと微笑んだ。しかし、疲労が見える。

「……まさか、あいつがあれを唱えられるとは……」

樹は瞬きをするのを忘れ、呆気に取られていた。

「次元の巫女だからといって、できるものじゃないはず……」

「……サリアの力かもしれへんな」

ボソツと、バルバロツサが言った。

「サリアの？ ……まあいい。始めようか」

樹は空の腕を掴み、自分に引き寄せた。

「樹……やめて……やめて……！」

恐怖で震える彼女の目の前で、樹は印を結び始めた。

「や……めろ……！」

「空！」

その時、リサは立ち上がるうとする僕の体を押さえつけた。

「リサ……！」

「動くな！ 大丈夫だから……」

大丈夫？ それって、どういう……

「……天と地、狭間に眠る幽玄なる魂よ。聖なる杯の道標とし、真実の光を具現せよ……」

樹を包み込む、金色の魔方陣。

「や……止めろおお ……！」

「空ああ ……！」

僕と空の叫び声が、共に重なる。それと同時に、樹はいくつもの天使の輪みたいなのが付いた手を、空の胸の辺りに突っ込んだ。

ズドツ！！

血が吹き出るのかと思った。が、違った。樹の手は、水面のように揺れる空の胸の中に入っていた。

「あ、あ……はっ……!!」

空は、自分の胸に入り込んだ樹の右手を見つめていた。

「……これか!」

ゆっくりと、樹は光の輪を付き従える手を引いた。その指には、青々と輝く一つの宝玉が掴まれていた。空の胸に開いていた空間はだんだん小さくなり、消えて無くなった。

「……そ、ら……」

空は、そのまま倒れてしまった。ドサツと倒れるのではなく、まるで紙が倒れるかのように、フワツと倒れて行った。

「そ………空アア!!」

僕の叫び声は、空に届いているのだろうか。

「これが……『蒼空玉』か。最後の宝玉に相応しい、神々しさを放っているな……」

樹は取り出した宝玉を、まじまじと眺めていた。

「空………空ア!!」

僕は何度も名前を呼ぶが、倒れた彼女は何の反応も示さない。その時

「!?!?」

彼女の体が白く光り始めた。所々から、小さな白い粒子が立ち昇っていた。

「我に眠る、聖魔の血よ 具現せよ! 魔闘気!!」

すると、リサが飛び出して行った。シュヴァルツの方へと、向かって行く。

「ほう、魔闘気か………かかって来いや!!」

シュヴァルツはうれしそうに笑った。彼も、リサ目掛けて突進した。

「天駆ける、水流と化せ　奥義！　崩縛竜水閃！！」

ホウバクリュウスイセン

「させるかい！　奥義、崩縛竜水閃！」

シュヴァルツとリサは蒼い闘気を纏い、舞いのような蹴りと掌底の攻撃を、素早く繰り出した。2人とも同じ技なせいか、両者の攻撃はまったく同じところでぶつかり合う。まるで、鏡にした自分に攻撃しているようだ。

「死ねや！　魔獣よ叫べ！　獣牙閃！」

シュヴァルツは、ボクシングのフックパンチのような攻撃を繰り出した。リサはそれを、ジャンプしてかわした。

「何！？」

シュヴァルツのパンチの風圧で、リサの靴の先が吹き飛んだ。そして、リサはそのままの勢いで、シュヴァルツの肩を土台にして、樹の元へと向かった。

「このまま行けると思うなよ？　砕け散れ　轟魔衝打！」

リサの前に、今度はバルバロッサが立ちはだかる。そして、豪拳の連続攻撃を繰り出した。

「宙舞う、鮮鋭の影となれ　奥義！　皇斜影衝！！」

コウシャエイシヨウ

リサは空中で、花びらのようにバルバロッサの連続攻撃をかわす。

そして、シュヴァルツの時と同じように、彼を土台にして樹の所へと飛んだ。

「な、なんやて!?!」

バルバロツサは避けられることに、驚いていたようだ。

「むざむざ、やられに来たのか?」

樹は、リサに手をかざした。すると赤紫の光が、樹の手に集結してきた。

「あなたには、まだ用はないよ。ただ、返してもらいたいだけさ」

「何?」

リサは樹に攻撃するのではなく、意識を失い、白く光っている空を抱きかかえ、僕たちの所へ瞬時に戻って来た。

そして、リサは何かを空の口に入れた。その瞬間、彼女を包んでいた白い光が、スーツと消えていった。

「ちっ、こんにやろ……!」

「放っておけ、バルバロツサ」

「せやけど……」

「いいんだよ。用は済んだ」

バルバロツサは掲げていた腕を下ろし、大きくため息をついた。

「……あいよ」

そして、二人は樹のいる台場へと跳躍して戻った。

「おっと、ついでだから教えといてやるよ」

樹は僕たちの方へ向き直った。

「兄さん、あなたがこの世界へ来て、不思議に思ったことはないかい? なぜ、リユングヴィの力を持つ自分は、インドラにとって脅威なはずなのに、生かされていたのか」

「……………」

僕は痛みと苦しきさで、答えることができない。

「お前たちは、殺そうと思えば殺せた。だが、殺さなかった。なぜ

なら…… お前たちには、利用価値があると思ったからだよ」

「利用価値だと……？」

「ヴァルバは樹を睨むが、あいつはほくそ笑んでいる。

「……僕たちにとって邪魔だったのは、各国の首脳部だ。いくら僕たちが特殊能力を有しているとはいえ、各国が結託し、数十万という大軍で攻めて来たらさすがに敵いつこないからね。……だからといって、首脳部を排除しようにも王城や宮殿に攻め込むのは、ちょっと無理がある。自分たちの存在を教えることにもなってしまおうね」

彼は僕たちによく聞こえるかのように、顔を前に出した。

「そこで、お前たちを利用してもらった。お前たちは、僕たちを止めようと各国を協力させようとする。諸国会議にこぎつけると思った。そして、その会議の場は中立地である……この聖都にしようとするだろうと踏んだ」

「首脳部が集まった場で、一網打尽にしようとしたのか!？」

「そういうこと」

デルゲンの言葉に、樹は再び笑みを零す。

「ハハハハ！ お前たちは、僕の思い通りに動いてくれたよ。リサだけが危惧すべき存在だと思ったが……そんなことは無かったな。取り越し苦労だったようだ」

「……………」

リサは何も言わず、空を抱き抱えている。

「わかったか？ お前たちは、僕たちに踊らされていたんだよ。生き抜いてきたんじゃない。生かされていたんだ。……それをよく覚えておけ」

そう、樹は吐き捨てた。

後ろへ振り向き、トンネルの入り口に差し掛かったところで、彼は足を止めた。

「まあ……ホリンを倒したことだけは認めてやるよ。……けど、あいつは所詮 印 を持たない『ただの人間』だったがな……」

「いつ……き……!!」

僕は腹部を押さえながら、樹を睨んだ。未だ、口から血が出てくる。

彼は背中を向けたまま、顔を横にし、横目で僕たちを見た。あのルビーの瞳で。

「じゃあね、兄さん。大好きな空を守れなかった自分の無力さを呪うがいい。そして、崩れゆくこの世界を眺めながら……空の死を見届けな」

「いつ……樹……樹いい……!!」

樹は僕たちに手を振り、トンネルの奥へ消えて行った。シュヴァルツとバルバロッサも、それに続く。

「……全ての歯車は動き出した。カナンの聖塔は消える。跡形も無く、の」

「はよう脱出せんと、お前らも巻き込まれるで」

シュヴァルツは笑顔で僕たちにそう言った。そして、二人も奥の闇へと消えていった。

その時、地響きのような音と共に、広間が揺れ始めた。いや、広間だけじゃない。この、聖帝中央庁が揺れているんだ！

「ほ、ホントに崩れるのか!？」

デルゲンは傷だらけのレンドを抱え、立ち上がった。

「早く脱出しないと……!!」

「そう言うけど、どうすんだよ!？」

ヴァルバは焦っているのか、辺りを見渡している。

「……大丈夫。私が、魔法で脱出させる!」

リサはそう言うのと、空を抱えたまま詠唱を開始した。

「ホラ、早く魔方阵の中に入って!!」

青い魔方陣が、リサを中心として現れた。

「ソラさん、立てますか？」

「よし……ゆっくりとだ」

アンナとヴァルバが肩を貸し、僕を起こしてくれた。

「……いつ、き……」

奴らが消えていったトンネル　天井から落ちてくる瓦礫によって、その道が徐々に塞がれてゆく。

「精霊の力のあずかりし地に、その翼を現したまえ！　アース！」

リサの魔法の詠唱が完成し、僕たちはこの場から消えた。

聖帝中央庁は大きな轟音を立てながら、崩れていった。

「じゃあね、兄さん」

蔑視しているかのような、ルビーの瞳……

お前は……どうして、そんなに憎んでいるんだ？

どっ……っ……



## 47章：月夜の草原 零れ落ちた夢の雫

聖都から少し離れた場所に、僕たちはテントを張った。

現在、聖都では聖帝中央庁が崩れ去ったため、大きな混乱が生じている。多くの人々が犠牲となり、さらには政治の中枢・神聖騎士団さえも失い、ソフィア教徒の中心地としての機能を失っていた。

テントはどこまでも広がるリーベリア平原に張った。このリーベリア平原は、僕が降り立ったルナ平原と並び称されるほどの美しさを誇る。とくに、聖都と聖地があるため、昔から多くの礼拝客や観光客が訪れる。

夜中のためにその美しさを見ることはできないが、満月のおかげで別の美しさを感じることができる。けど、僕にはその美しさを眺める余裕が無かった。

「くそっ！ 俺たちはあいつらに利用されてたつてのわ！」

ヴァルバはぶつけることのできない怒りを、大声で発散していた。「……会議場で集結した各国の首脳部たちを皆殺し、か……。これで、奴らの脅威となるものは、取り除かれたということだな……」

デルゲンは冷静に呟いた。たぶんあの時、最も冷静だったのはデルゲンだ。リサが発動した空間転移魔法は、急速な詠唱破棄によって十分な距離を飛ばず、聖帝中央庁の城門までしか行けなかった。デルゲンは慌てふためく僕たちを率先し、危険範囲から脱出させたのだ。

僕は……シュヴァルツによってあばらが数本折られ、体全体に裂傷、樹による光線で、足の骨などが折れていた。意識を失い、普通ならば死んでいるほど。しかし、リジエネレイト 聖魔の力による自然治癒と、リサの魔法によって僕の傷はほぼ完治し、すでに立って動けるまでになった。

リサは気を失っている空を看護していた。まるで看護師のように、額に手を置いて体温を測ったり、胸に手を置いたりしている。

「……そう言えば、空ちゃんに何を飲ませたんだ？」

ヴァルバは僕の隣に立ち、腕を組んでいた。

「……私が飲ませたのは、増魔剤といわれるもの」

「増魔剤？」

訊ね返すと、彼女は小さくうなずいた。

「ティルナノグ初期に造られたって云われてる薬品。……言うなれば、魔導注入みたいなものよ」

魔導注入…… 人体に固形化・液体化させた元素を注入させること。人為的に体内元素を増幅させることができるが、代償もある。

「違うのは、人間の細胞に耐えられ得る元素であるということ」

「……つまり？」

「魔導注入で人体に入る自然元素　それは、生命そのものに順応するようには出来ていないの。けど、ティルナノグ…… 天空人と呼ばれた人々は、生命に順応できる元素の発明に成功した。それこそが、永遠の巫女が持つ特殊なエレメンタルなの」

だが、当初、それらのエレメンタルを持つ人間は比較的高い確率で、分子と元素の乖離現象を起こし、死亡したのだという。

「それを防ぐために開発されたのが、増魔剤。自然に乖離していく元素を補充するためのものよ」

本来、自然に乖離現象を起こす人間はいないし、時が経つにつれて増魔剤そのものを使用することはなくなった。しかし、空の場合には体内元素のほとんどを引き抜かれた状態であるため、これが一番の方法なのだという。

「……じゃあ、もう空は大丈夫なのか？」

僕がそう言うと、リサはスツと立ち上がり、振り向いた。そこにある神妙な面持ちから、僕は答えを悟った。

覚悟していた答えを。

「……所詮、人間が作り出した 理への反逆。一時的に命を引き止めることはできるけど、徐々に元素は乖離して……もって、5ヶ月……ううん、4ヶ月程度」

瞬きをせず、彼女は僕を見ていた。その瞳に、痛みと苦しみ……両方が浮かんでいた。

「そっか……じゃあ、それを過ぎたら……」

リサは何も言わず、僕から視線をそらした。

覚悟していた真実。答え。

わかっていたことだ。受け止めるしかない。

でも、本当はわかっているんだ。認めたくなくて、リサに詰め寄りたい。大声で叫んで、現実を否定したい。

ただ、取り乱したくない。それだけなのかもしれない。

「もう……方法はないのか？」

ヴァルバがそう言うと、リサは俯いてしまった。

「……ごめん。私には……わからないの」

今まで見てきた、強気のリサの姿はなかった。

「謝らなくていいって」

僕は顔を振った。それと同時に、彼女は顔を上げた。

「お前が薬を投与しなかったら……空は、死んでいた。お前がいなけりゃ、今頃、空はここにいない」

「……空……」

「お前のおかげで……空はこうして、生きてる。呼吸してる」

白い毛布の中で、彼女は小さな寝息を立てている。

僕の見える世界の中で、彼女は生きている。

「……リサのおかげで、こうして……」

あいつは生きている。それだけで、いいんだ。

だが、リサの表情は晴れやかではない。再び顔を俯かせた。

「……だけど、私は本当のことを言わなかった。あんたたちに……」  
彼女の瞳は小さく揺れ始めていた。罪の意識が、そこに溜まっている。

「みんなに、本当のことを言っていなかった……。私がインドラの幹部である、シュヴァルツとバルバロツサの……いや、アンナや空ちゃんや……多くの人を苦しめた奴の従妹だつてことを……」

「リサ……」

「本当に……ごめんなさい」

リサは礼儀正しいお辞儀をした。彼女の長い後ろ髪が、ぱさつと音を立て、垂れ下がる。

「だから、お前が謝る必要なんてないって」

僕は彼女の肩を掴み、起こさせた。

「お前があいつらと従兄妹同士だからって、何か変わるわけじゃないだろ？ お前はお前だ。お前は、僕たちの仲間だもんな」

エメラルドグリーンの瞳は震え、小さな雫をいくつか流し、彼女のほほを伝ってゆく。

「けど、私……私……」

「ソラの言うとおりで」

リサはヴァルバに顔を向けた。彼はぼさぼさの頭をかきながら、言った。どこか照れ臭そうに。

「お前が罪の意識に苛まれる必要など、ない。お前はいつだって、俺たちを助けてくれた。俺たちを導いてくれたもんな」

あごひげをさすりながら、彼はニコツと微笑んだ。

「そうそう、仲間だ。グランディア兄弟の従妹？ だからなんだつて言うんだ。血縁以外、何の関係も無いだろ？」

「レンド……」

「レンドにしては、いいことを言うな」

ヴァルバはニヤニヤしながら言った。

「お前な、いちいち言うたっての……」

「ま、レンドはこういうところだけが、取り柄だからな」

「デルゲン！ てめえ！」

「あいたた！！ 八八八、ごめんって」

「謝る気持ち、まったく感じねえ！！」

レンドは、げんこつを何度もデルゲンに食らわしている。

「……リサさん、これからもよろしくお願いしますね」

アンナは笑顔でリサに向けた。この笑顔で言われると、何でも了承してしまいそうだ。

「アンナ……うん、みんな……本当にありがとう……」

リサは自分のほほの涙を拭った。それを見たヴァルバが、ニヤニヤし出した。

「なんていうかな。やっぱ、あれだな」

「な、何よ？」

リサはほほを赤くしたまま、ヴァルバを睨んだ。

「女が涙を流してるところは、なんとも言えないかわいさがあるよなあ。普段とのギャップがあるからか」

「！！ う、うるさい！！」

八八八……からかわれると、かわいいなホント。そのうち、キレるだろうけど。

「リサは泣かないと思っていたが……うん、やっぱり、女は女らしくくないとな」

「レンド……」

リサの素早い蹴りが、レンドの顔に直撃。そのまま、レンドは音を立てて倒れてしまった。

「ぬおおお！！ あ、頭があ！！」

「こなくそこなくそ……」

倒れているレンドに追い打ちをかけるように、リサは何度も踏みつけていた。

「……………」  
その場を眺め、僕はこつそりとテントの外へ出て行った。草原を歩いていき、一望できる場所へ行った。

きれいな満月。

白いけれど、どこか青っぽく、その淡い光がこの草原へ降り注ぐ。草原を駆け巡る、優しい風。2月のため、体を震えさせるのだが……これはこれで好きだったりする。

空……変わってはいなかった。あまり食事が与えられず、やせ細っているのではないかと懸念したが……外傷らしい外傷もないし、目立ったことはされていないようだった。

空がさらわれて、約9ヶ月。

あれから……もう9ヶ月か……。

空を見つけるまで、9ヶ月もかかったのか。あつという間だと言えはあつという間だが、長かったと言えば……長かった。

樹が現れて、今まさに宝玉を取り出されそうになっているのに……僕は、何もできなかった。すぐ近くにいたのに。

強くなったと、思っていたのに。

満月を見上げ、自分に怒りを覚える。

リユングヴィという計り知れない力を持っているというのに、それをうまく扱うこともできず、愚かにも暴走し……仲間にも迷惑をかけた。

ただ、見ることしかできなかった。殺されかけたところを。

僕は何もしていない。空を助けてくれたのは……リサだ。自分の力では、何もできなかったんだ。

それが悔しい。  
齒がゆい……。

いつの間にか、僕は俯いていた。  
後ろで、草を踏む音が聞こえた。振り向くと、そこに立っていたのは……

「……アンナ」

「どうしたんですか？ 一人で出ちゃって……」

少し寒そうに、体を震わしている。

「……ちよつと、考え事だよ」

「そうですか……」

彼女は悲しげに言って、俯いた。その理由がわからない僕としては、思わず首をかしげてしまった。

すると、彼女は顔を上げて言った。

「あの……一緒にいても、いいですか？」

どことなく小さな声。

「……いいけど、寒いぞ？ テントに戻った方が……」

「それは、ソラさんも同じですよ」

「……まあ、そうだな……」

自分のことを棚に上げて言ったため、思わず夜空を見上げてしまった。

「じゃ、いいですよね」

「あ、ああ」

僕は小さくうなずいた。

アンナは僕の横に来て、草むらに腰を下ろした。

「……きれいな満月ですね」

「そうだな……」

「以前にも、こうして一緒に月を眺めましたよね？」

港町アルフィナの宿の上で、2人で月が浮かぶ海を眺めたっけ。

なんだか、この世界へ来て、月を眺めることが多くなったな……。

「樹さん……聞いていた樹さんとは、まったく雰囲気の違いました

「……」  
「……そうだな」

僕がアンナに言った「樹」の過去の姿……それとはある意味、次元の違う……いや、別人のようなものだ。

僕は小さくため息を漏らした。

「樹はさ、昔つから泣き虫で、弱虫で……小さい頃は、犬に吠えられただけで泣くような奴だったんだもんなあ……」

「転んだだけでも泣いていた、小学低学年の時代。あの頃は、体調が一番芳しくない時だったか。」

「すごく優しくくて、人の悪口一つ言えない性格でさ。いつも、いつも優しく微笑んでいて……」

僕とは似ても似つかない、一つ下の弟。勉強とかも、あいつの方が良く出来ていたもんな。

「なのに……」

過去の姿と、今の姿が交叉する。

「崩れゆくこの世界を眺めながら、空の死を見届けな」

赤紫　ルビーの瞳で、冷たく僕を蔑んだ。

小さく微笑むその姿は、あの頃の樹の姿にはなかったもの。

「全ての命を滅ぼす、か……。馬鹿げてるよ、ホントさ……」

「ソラさん……」

「……何が、あいつをあそこまで変えたんだろうな……」

僕は草原に目をやった。どこからともなく吹く小さな風によって、揺ら揺ら動いている。その向こうにある山々も、神秘的な青黒い輝きを放っている。

「自分の素性、自分の祖先、自分の力……この星の未来。それを、あの頃の樹が知ったからといって、あそこまで人個人の考え方が変わるのか……？」

どこで覚えたんだろう……凍てついた瞳を。たかが数年で、知りえるようなものじゃない。変わるものじゃない。

「あいつは……あんな奴じゃなかった。あんなひどいことを考える奴じゃないんだ」

再び、夜空を見上げる。寒さのせいか、満月が眩しいせいなのかわからないけれど、僕は目を細めた。

「じゃあ、原因は僕にあるのか？ あいつのことを知った気になっていただけで、何も……何も理解していなかったんじゃないのか？」いつも優しく微笑んでいた樹。

でも、あいつには陰りがあつた。あの、病室で。

世界が淡いよ

一人で、病室の窓から外を見つめる樹の姿を思い出した。あいつは……独りだったのか……？

「何もわかつちやいなかったんだ」

自然と、僕は顔を小さく振った。

「ソラさん……」

「僕はあいつの兄貴なのに、なんもわかってなかった。あいつはきつと……なんらかのシグナルを鳴らしていたはずなんだ」

「気付いてほしいって、小さな何かを光らせていたはずなんだ。ずっと見ていればわかる、小さな光　危険信号が。」

赤く、小さく、点滅していたはずなんだ。チカチカと。

「全部……全部、あいつのせいなんだ。アンナのお姉さんを殺したのも、他の巫女たちが犠牲になったのも、諸国の人々が会議で殺されたのも！　樹……樹……あいつが、弟のあいつが！！」

無意識のうちに、声が大きくなっていく。答えるはずの無い夜空に向かって、息を白くしながら僕は続ける。

「どうして、気付いてやれなかったんだよ？　僕は……あいつの兄貴なのに！！」

こうするほかない。こうするほか、僕は悔しさを……怒りを抑えることができなかった。

あいつらに対してだけでなく、自分に対しても。

「ソラさんのせいじゃないですよ！」

一瞬の静寂を切り裂くかのように、少女の声が響く。横にいるアンナは立ち上がり、僕の裾を掴んだ。

「……ソラさんは、まったく関係ないです。さっき、レンドさんが言っていたじゃないですか。血縁以外は何の関係も無いって」

彼女はリサと同じエメラルドグリーンの瞳は、強くも小さく潤んでいる。

「樹さんの考え方に……行動に、ソラさん自身が関係したとは思えません！」

「アンナ……」

「……ソラさんは違う。いつだって、私を護ってくれました。アルフィナの町で、あなたは私を励ましてくれた！　幼馴染の空さんを救うために、一人でこの世界に来たじゃないですか！」

訴えるかのように、彼女は言ってくる。

「だから……そんな、そんな悲しい顔をしないで……！」

いくつか涙を流しながら、俯いてしまったアンナ。

「……………」  
たしかに、樹とは血の繋がりに以外、関係ない。たしかに関係ないんだ。でも……心が付いて行かない。理解しているけど、理解できない。矛盾ばかりが、胸の奥で渦巻いている。

自分が犯したわけでもないのに、罪の意識を感じる。それは、犯罪を犯してしまった人間の家族の心境に似ているのだろう。

その時、僕の裾を掴む手が心なしか、震えているように感じた。

「……………アンナ？」

俯いたまま唇を噛みしめ、彼女は体全体を震わしていた。それは寒さのせいだけなのだと、その時は思った。

「私……は」

唾を飲み込んだのか、彼女の頭が小さく上下する。そして、アンナは顔を上げて僕を見た。

「好きです」

すでに涙は止まり、流れたその跡が、微かにほほに残る程度だった。

僕の頭の中では、彼女が何を言ったのかを確かめている。

なんて言った……………？

僕を……………

「……………ソラさんは悪くない」

寒さで赤くなっている白いほほを、より一層赤くして彼女は僕を

見つめる。

「悪いのは……彼をあそこまで追いつめた誰かです。……あなたは、何も悪くない」

断言するかのように、彼女は大きく言った。

「それに……」

一転して、アンナは……哀しくも、訴えかけるような瞳で僕を捉える。

「どんなことがあっても、私はソラさんが好きです。絶対に、それは変わりません」

裾を掴む手から伝わる震えは、いつの間にか止まっていた。

「いつも、いつも守ってくれる、あなたが……」

「好きなんです」

震える彼女の瞳。

僕は……彼女を支えた。護って来た。でも、それは大切な……仲間だから。和樹や啓太郎に美香……そして、修哉がしてくれたように。

「私じゃ、支えませんか？」

彼女は僕に一步、近づいた。

「ちよっ……ア、アンナ……」

アンナは僕に抱きついた。彼女の細い腕が、僕の背中に回る。

そのまま、僕とアンナは体を動かさなかった。僕は緊張と驚きで、体が固まってしまっている。

「……………」

そのまま、時間が過ぎていった。何を言えばいいのかも、どうすればいいのかもわからない。

「ソラさん、私……」

彼女は小さく微笑んだ。そつと指を伸ばし、細い指先が僕のほほに触れる。

「もつと……触れたい……支えてあげたい」

僕に触れる指先から伝わる冷たさと一緒に、彼女の想いの温かさが流れ込んでくる。

これを拒んだら、どうなる？

だからって、受け入れてどうなる？

答えなんてとうの昔に悟っているのに、何を悩む必要があるのか。僕は彼女の手を握り、そつと下ろした。

「アンナ……僕は……」

瞬きをせず、大きな瞳で彼女は僕を見つめる。

「おい！ ソラ！ どこだあ！？」

テントの方角から、レンドの大声が聞こえた。その瞬間、アンナは僕から離れ、何も言わずに数歩下がった。

「どこだあ！？ ソラの馬つつ鹿やるおお！！」

人を馬鹿呼ばわりして探すって、どうだよ……。まあ、おかげで上がり過ぎていた心拍数を落ち着かせることができた。

「……レンド！ ここだ！！」

僕は拳手をして、声を上げた。レンドはまだわかっていないのか、視線を四方八方に向けている。僕はもう一度、声を上げた。

「レンド！ こっちだった！」

「どっちだあ！？ ……ん？ そこか！」

レンドは僕と視線を合わせた。

「あのな！ 空ちゃんが目を覚ましたぞお！！ 意識を取り戻したんだ！ 早く行ってやれ！」

空が目を覚ました！？ 急降下した心拍数が、再び急上昇した。

「わ、わかった!」

走り出そうとした瞬間、僕は自分の服を引っ張る何かに気付いた。

「……アンナ」

顔を沈ませ、まるで子供のようには僕の服を小さくつまんでいる。

「……ごめんなさい。さっきのことは……忘れてください」

僕に伝えようとしている言葉を、彼女は足もとの草原に放っている。

忘れろって言われても……忘れることができるものじゃないよ……。

「早く……行ってあげて下さい」

絞り出すように、彼女は言う。そこには、さっきまでこもっていた彼女自身の想いが無いように感じた。

「ああ……」

僕が小さくうなずくと、彼女は指を離した。そして、僕はテントの方へ走って行った。

「……ソラさん……」

テントへと走って行く最中、僕はとてもドキドキしていた。空の意識が戻った。空が目を開けたんだ。何を話そう。どんなことを話そう。いろいろなるなことを話したい。今までの旅のこと。途中で寄った町々のこと。そして、僕の仲間のこと。

なんだか、ワクワクしてきた。話すことが、とても待ち遠しい。あいつの顔を見ながら。あいつの、声を聞きながら……。

なんか、傍から見ると気持ち悪いな。でも、そんだけ嬉しい。よ  
うやく、あいつの近くにいられるんだから。

この9ヶ月が、余計に自分の想いを強くしてしまったようだ。  
僕は勢いよく、テントの幕を開いた。テントの片隅に、布団の上  
で起き上がっている空の姿があった。

彼女の傍でしゃがんでいるリサと、会話を交わしている。思わず  
緊張し、体が硬直する。

「ソラ、ほら」

と、僕の後ろにいたレンドが肩を押す。

僕は空の近くへ行き、腰を下ろした。

「そ、空……気分はどうだ？」

空は、あの瞳を僕に向けた。

空色の瞳。日本人のはずなのに、なぜか黒くない。おじさんもお  
ばさんも黒い瞳なのに。

「空、大丈夫か？」

そう問いかけると、彼女は小さく頭をかしげる。

「……空？」

もう一度、名前を呼ぶ。すると、空は何度か瞬きをした。

「……誰……？」

「えっ？」

僕は言葉を失った。

いまいち、現状を把握できない僕の脳みそは、もう一度問いかけようという結論を出した。

「そ、空？ 僕だ、空だ」

僕は自分で自分を指差しながら、言葉を放った。それでも、空は何がなんだかわからない様子だった。

「……………」

彼女は首をかしげた。その瞳には、僕は映っていない。僕は……そのまま、動けなかった。

「空……お前……」

少しずつ、現実が戻ってくる。捉えたくない目の前の「光景」を、自分の中に引きずり込みたくない。

「空……あのね、空ちゃんは……」

リサが何かを言おうとした。それが何を意味するのか、すでに理解している。けど……認めたくない。

「リサ……何も言っな」

僕は彼女から目をそらした。聞きたくない。現実を聞きたくない。

「空……」

「なんも言っな」

「……空ちゃ」

「なんも言っなっただろ!!!」

噴き上がるものと同時に、天とを突き抜ける声が轟いた。

「頼むから黙ってくれ！ こんな……こんなことがあるか!!!」

僕は立ち上がり、外へ飛び出した。

「空!」

「ソラ!」

後ろから、リサとヴァルバの声が聞こえた。それでも僕は振り返らず、さつき行った草むらのところではなく、別の方向へ走った。ずっと続く草原を、ただひたすら走った。体にぶつかってくるこの寒さなんて関係ない。僕は何も考えずに走った。どこまでも。

息が切れてきたところで、僕は走りを止め、ゆっくりと歩き出す。そして、速く呼吸をしながら、空を見上げた。

「……なんでだ？」

言葉を夜空に放つ。何も返っては来ないのに。

「何が……こうさせた？　ただ当たり前であることを、どうして頑なに否定すんだよ？」

いるかどうかわからない「何か」に向かい、問う。それはある意味、自問自答に似たものなのかもしれない。

すると、後ろから草むらを踏みつけている足の音が聞こえた。

「空！」

後ろへ振り向くと、同じく息を切らしたリサとヴァルバの姿があった。

「ソラ……」

ヴァルバも、心配そうに僕を見つめている。

「……なあ、どうしてだ？」

僕は2人に問いかけた。

「どうして、空はあんな目に会わなきゃならないんだ？」

「空……」

「どうしてあいつが……どうしてあいつなんだ！！　どうして巫女はあいつじゃなきゃダメだったんだ！？　どうして……余命宣告をされて、記憶まで失わなきゃならないんだ！？　なあ、教えてくれ……どうして、空はあんな目に会わなきゃならないんだ！！」

何を否定しているのか、僕は顔を左右に振り続けた。

「……苦しむのは、僕だけでいい。リユングヴィっていう凶悪な力に蝕まれるとしても、覚悟はできている。自分の血も……理解している。……けど、空は何も関係ないじゃないか！　あいつはガイア

生まれの両親の元に生まれ、ガイアで育った。それがなんで、巫女にならなきゃならない！ レイディアントとは何も関係が無いのに！！」

僕はそのまま、草むらへひざまずいた。何かが込み上げてくる。そして、その込み上げてきたものは、僕の目から、草むらへ流れ落ちた。

「なんでだよ……。あいつが苦しまなくていいじゃないか……！」  
僕は顔を上げ、虚空を睨みつけた。

「運命だかなんだか知らないが……。あいつが苦しむ必要なんかねえだろ！？ あいつの何もかもを奪う必要なんかあんのか！？ ふざけるなア……！」

僕の叫びは、冷気漂う夜空へと吸い込まれてゆく。そして、僕はうなだれ、再び涙を流した。

泣くしかなかった。叫ぶしかなかった。この現実から……。僕は離れてしまいたい。嫌なことを知った瞬間を、すべて忘れてしまいたい。

樹のことから。

空のことから。

それができるならどんなものも捧げてやるとさえ、思ってしまった。

命が奪われるということは……。覚悟していた。けど、まだ生きている。だから、それまでの間、いろいろな話をしたかった。空白の時間を、共に埋めていきたくかった。なのに……。それさえも奪うのだろうか！ それすらも、許さないのだろうか……！！

「空……」

リサの声がし、僕は顔を上げた。その瞬間、彼女の平手打ちが僕のほほに直撃した。そして、僕は草むらへ倒れた。

「この……大バカ野郎!!」

リサは、怒りの瞳を僕に向けている。

「たしかに、あの子はかわいいそうさ！　なんで、関係の無いあの子がこんな運命に弄ばれなきゃいけないって思うさ！　けどね……」

彼女は首を振った。

「そこで……あなたが泣き叫んじゃ、いけないんだよ!!」

そう叫ぶと、彼女は僕の上に馬乗りし、胸倉を掴んだ。

「なんであなたが泣くんだよ！　なんであなたが悲しむんだよ!？」

僕の体を引つ張ったり押したりして、彼女は言い続ける。

「悲惨な現実からあの子を支えられるのは……あんたしかいないだろ

!!?　いや、あんたじゃなきゃダメなんだよ!!」

彼女の瞳に、涙がたまっていた。それを零さないようにしているのか、言葉を止めようとしめない。

「支えてやらなきゃならない奴が、そうやって文句を言って泣き叫んで……!　一番悲しいのは、空ちゃんなんだよ!？」

「んなの……わかってる……!!」

彼女の顔が、すぐ近くにある。齒を食いしぱり、彼女は僕を睨む。それにうろたえることなく、僕は言った。

「お前に言われなくてもわかってんだよ！　僕は……あいつを支えたい。記憶を失っているとしても、あいつを支えなきゃならない。そうやるしかないって……」

それしかない。自分にできるのは、それしかない。けど……  
「だからって……どうすりゃいいんだよ!？　こんな現実を突き付

けられて、知りたくもない真実を知って!!」

脳裏に、蔑むかのような瞳で見つめる、樹が浮かぶ。

死んだと思っていた弟が、大切な人を……自分がかつて好意を寄せた人を、殺そうとした。

躊躇いもなく。

「……僕がここまで来たのは、こんな真実を知ることなんかじゃない……空を救うことだったんだよ!!」なのに……なのに!!」  
本当はわかってる。わかってはいるが、心が付いていけない。僕のつたない脳みそは理解してるって言うのに……。

「わかってんなら泣くな!」

乾いた音が、響く。

彼女は思いつきり僕のほほを叩いたのだ。

「わかってんのに、なんで泣くんだよ!」なんで叫ぶんだよ!」ど  
うして、今、自分ができることを考えようとしななんだよ!!」

彼女の強烈な往復ビンタが炸裂する。僕の頭は、左右へ揺らされる。

その時、小さな雫が目元に降って来た。それとほぼ同時に、彼女のビンタの速度が落ちていく。

「あんたが……やんなきゃなんないんだろ……!?」本当のことを知って、世界を護るって決めたんだろ……!!」

「……リサ……」

まぶたを強く閉ざし、涙を止めようとするも溢れ出て、僕の顔に落ちていく。僕をビンタする力も、もはや当てるだけになってきていた。

「途中で止めんな……!」何もできないまま、終わろうとするな!  
あんたが……空がやんなきゃなんないんだ……!!」

リサは体を震わしていた。

声は小さくなるうとも、彼女の思いは強くなる一方だった。

「だから……泣かないでよ……！ 私は……私は……！！」

それ以上の言葉を放つのを止め……いや、泣き声を押し殺そうとするあまり、言葉が出なくなっていた。

「泣く……なよ……空……そら……！！」

彼女の長い髪が垂れ下がり、僕にかかる。涙が僕の唇に到達し、彼女の平手で切れた個所が染みる。心にも。

「……リサ……」

僕は仰向けのまま、彼女の頭を抱き寄せた。

「……ごめん……ありがとうな」

「う……う……」

まだ震えている彼女は、僕に顔を見せようとしなない。

「本当に……ありがとう」

泣きじゃくる彼女の背中をゆっくりさすりながら、僕は言った。

泣いている場合じゃない。

運命を呪っている暇なんてない。

僕は彼女をどかせて立ち上がり、手を差し伸べた。

「ほら……もう、泣くなよ」

「……あんたの……せいでしょうが……！！」

そう言いつつも、彼女は僕の手を取って立ち上がった。そこには、涙でボロボロの顔でありながらも、僕を強く見つめる双眸があった。

僕は、うなずいた。

「……抗う。どんなに嫌でも、逃げたくても、抗うよ。それが、知ろうって決意したことなんだから」

この運命を変えたい。いや、この悲惨な現実から、希望を見出したい。

起きたことを悔やんでも、今は変わらない。

「空……」

彼女は、ようやく笑顔になってくれた。さっきの泣き顔といい、この笑顔といい……どうして、リサは多くのことに気付かせてくれるのだろうか。彼女としては、当り前のことしか言っていないのだからうけど。

……わかっていることなのに、どうして人ってのは大事なところで、それを忘れてしまっただろうな……。

「運命に抗う、か」

何も言わずに見つめていたヴァルバが、呟くかのように言った。

「自分が信じたことを為せばいい。たとえ全てに裏切られ、全てに憎まれようと、お前が正義だと決めたことを為せばいい」

夜空を見上げ、ヴァルバは続ける。

「ユグドラシルを……樹たちを倒そう、ソラ」

彼はゆっくりと、僕に視線を向けた。碧い瞳が、満月の光を受けて小さく輝いていた。

「奴らを野放しにしておけば、奴らの望む理想が現実になる。それは、お前が望んだことでも、空ちゃんが望んでいることでもない。彼女は、そういう子なんだろ？」

「……」

僕は何も言わず、うなずいた。

「……俺たちが望んでいるのは、何もかもが消し去られた未来なんかじゃない。平凡な未来あしたなんだ。……空ちゃんや、リノアンのような犠牲者はこれ以上、出しちゃならない……」

彼の言葉には、哀しみが含められていた。

これ以上の犠牲は必要ない……そう、これ以上、無意味に命が奪われる必要性なんてない。

僕は拳を握りしめ、自分の目の前に持つてきた。

「僕は決めたんだ。何のために真実を知ろうとしたのか……真実を知って、何をしようとしたのか」

それは空を救うこと。それは、レイディアントを護ること。

握り締める拳に、力を入れた。

「……運命の神様が僕たちを怨んでるってなら、勝手に怨めばいい。滅ぼそうとしてんなら、好きにすりゃいい」

僕は「あの時」と同じように、そこにいもしない「何か」を睨みつけた。

「けど、それを易々と受け入れる僕たちじゃない。お前らが望んだようにはさせない。僕たちは……自分たちの夢を見続けてやるさ！死ぬまで、抗ってやる！そして、空も……世界も救ってみせる！！」

へへーんとした顔で、僕は「そこ」を見る。

こんなところで、挫けてたまるか。僕たちは独りじゃない。独りじゃないから、つまずいても立ち上げられるのさ。

「空……うん、そうだよ」

リサは大きくうなずいた。

「まだ私たちは知らないだけで、空ちゃんを救える術はあるかもしれない。諦めちゃ、いけないんだ！」

「リサ……ああ、そうだな。悲観的に考えるより、プラス思考でいかないとな」

何にしても、そう言えるような気がする。僕は時折、ネガティブになりがち。そうになると、マイナス方面へと進んでしまう。それでは、気が病んでしまうってものだ。

「ハハハ、ソラらしくなってきたな」

腕を組み、ヴァルバは笑った。

「よし、こうなったらとことんやってやろうぜ！俺たちが目指す

夢の形 は、まだまだ先だからな」  
夢の形。それこそ、僕たちが望んだ未来<sup>あした</sup>。  
彼の言葉に、僕とリサはうなずいた。その時

「その想いは本当かな？」

聞き覚えのある、誰かの声が聞こえた。僕たちは一斉に横を向いた。そこには、淡く白い光に包まれたクロノスさんが立っていた。

「クロノスさん……」

「久しぶりだね、空。そして……リサ」

「……………」

リサは小さくうなずいた。

「君たちの決意、聴かせてもらった。……盗み聞きのような形になってしまったがね」

クロノスさんはニコツと笑った。そして、あの紺碧の瞳を向けた。

「空、君の幼馴染を助ける方法、あるにはある」

「ほ……本当ですか!？」

思わず、すぐに問い返した。

「奴らがすべての宝玉を得たとはいえ、まだ聖杯の覚醒は行わないはずだ。なぜなら、まだ 聖玉 が見付かっていないからだ」

「 聖玉 ？」

ヴァルバが言った。そういえば、以前クロノスさんが言っていた。ロキの封印を解く、3つの鍵。その一つが 聖玉 。

「 聖玉 は天空帝都の眠る浮遊大陸の、ある場所に封印されている

る。その時まで、聖杯は覚醒させない。あれは、聖玉が無  
いと機能しないからな」

「つまり……天空帝都が復活しても、見付かるまでまだ余裕がある  
ということですか？」

「そうだ」

と、クロノスさんはうなずいた。

「だが……それが、空ちゃんの命を救うことと、どういう関係が…  
…？」

たしかに、ヴァルバの言うとおりだ。

「簡単なことさ。奪われた宝玉を、彼女の体に戻せばよいのだ」

少し微笑みながら、クロノスさんは続けた。

「そもそも、乖離現象はエレメンタル不足で引き起こされるものだ。  
取られたものを取り返せば、元に戻る。機械と同じだ」

そっか……動力を失った機械には、同じ動力を与えれば動くよう  
になる。

「じゃあ、樹たちに追いつけば……空は助かる……！」

「ええ！ やっぱり、どうにかなるんだよ！」

僕とリサは顔を合かし、笑顔になった。

希望が湧いてきた。やっぱり……空は救えるんだ！

「楽観するのは早い」

すると、クロノスさんはゆっくりと僕たちに歩み寄って来た。

「……今のお前たちでは、彼らを止めることはできないだろう」

さっきまでの微笑とは違い、厳格な表情に変わっていた。それが、  
厳しい現実なのだということをも物語っている。

「樹……いや、シャルフィル・ヴェルエス。彼もまた、お前と同じ  
カイン リュングヴィの力を持っている、唯一無二の存在。しか  
も、すでに 覚醒 を果たしている」

「覚醒を……」

暴走状態とは違い、自分の中に在る余りある力を、己の意思で操れる。あいつは、そういう存在になっているんだ。

「全ての生命と、星……そして次元そのものに関わることのできる神々の決定権を持った存在 『調停者』。樹は、調停者として世界を滅ぼそうとしている」

調停者……

聴こえる。心の中から、言霊が届く。

生命を超越せし、次元の支配者。

それこそが 調停者。

「そして、シュヴァルツとバルバロッサ。あの双子も、ラグナロクの歴史始まって以来の最強の戦士。それはリサ、君が1番理解しているだろう?」

リサはゆっくりとうなずいた。

「……あいつらは、私とは持って生まれた体格と才能が違う。天に与えられた才によって、一子相伝のラグナ流格闘術を極めし者。…

…しかも、あの2人が連携して攻撃してくると……その戦闘力は、数倍に跳ね上がると思う」

「たしかに、ヴァルカン シュヴァルツは、神聖騎士団の中でも群を抜いた能力の持ち主だったと聞くしな」

ヴァルバはため息をついた。敵は、果てしなく大きい。それは、想像以上だった。

「つまり……空、お前はリュングヴィを屈服させなければならぬ」  
クロノスさんの言葉に、僕は顔を上げた。

「そして 覚醒 を果たさなければ、奴らと戦うことなど、できは

しない。……お前の決意、先ほど聞かせてもらった。あれに、偽りは無いな？」

その問いに対する答えなんて、決まってる。

僕は首を振った。

「ありません。僕は抗いますよ、とことん」

「それが、実の弟を殺すとしてもか？」

弟……

その言葉に、一瞬だけ心が揺らぐ。でも、わかっている。大丈夫だ。

「……相手がどんな奴だろうと……いや、違うな」

そういうことではない。そうではない気がする。

「僕はいいつの兄として、一人の人間として、奴らの計画を阻止します。もう迷いません。たとえ、あいつをこの手で殺すことになっても」

「ふむ……」

クロノスさんは瞬きをせず、僕を見ている。僕も同じように、クロノスさんを見つめた。

視線をそらしてはならない。この人は、人の意志をはかることができる人だから。

「……わかった。ならば、カナンへ行くがいい」

「えっ？」

その時、僕の中で何かざわつく。溶岩が溢れるかのように、僕の深淵から噴き上がる。

「う……あっ……!!!!」

僕の体が光り出し、「何か」が表面化した。それは

「ソ、ソラ？ どうし」

「空じゃないよ」

リサはヴァルバの声を遮った。彼女の瞳には、警戒心が映っている。なぜ、僕に向けているのか。その理由など、すぐに理解できた。

「勘がいいな、巫女」

「お前は……」

ヴァルバは目を見開いていた。

「そんだけ大げさに出てくれば、誰だってわかるわよ」  
リサはため息混じれに言った。

そう　これは、リユングヴィだ。

「久しぶりに物質世界に具現化したか……なるほど、あれだけ暴走した割には、損傷はないな」

僕の体に乗っ取った奴は、自分の体となった肉体を見回す。僕の体は地面から離れ、光を薄く纏ったまま小さく浮かんでいた。

「巫女……貴様のおかげで、この貧弱な肉体は愚かにも強靱となり、精神の基盤も鋼鉄のように固くなった。……これで、俺の器となり得たってわけだ……」

奴はニヤツと微笑み、リサを睨んだ。

「お前の中にある、『穢れた女』と『聖なる女』の力だな……」  
「……………?」

リサは意味がわからず、小さく首をかしげていた。それを見て、奴はクククと笑い始めた。

「お前は自分が何かもわからぬ、愚かな少女。……このセヴェスと同じようにな」

「うるさい！ あんたには関係ないだろ！！」

リサは怒声を張り上げた。

「ふん、まあいい……いずれ、その時が来るだろうしな……」

「……………」

リユングヴィは嘲笑するかのように、鼻で笑った。

「……セヴェス、聴こえるか？ 俺と決着を付けたいようだな……」

突然、奴は夜空を見上げながら呟いた。

ああ、そのつもりだ！！

お前を倒し……僕は、僕となる！！

「ククク……いいだろう。ならば、もう一度、聖地へ赴くがいい。あらゆる愛憎の集いし『聖域』の果てで、貴様の器を食い破ってやる！」

奴は「僕の声」で、おぞましい言葉を吐いた。すると、再び身体が白く光り始め、離散した。それと同時に、ぼやけていた風景がくつきりし、僕がそこに立っていた。

聖地カナン

そこで、決着を付ける。僕が僕であるために。

「……どうやら、行くべき場所がわかったようだな」  
静観していたクロノスさんは言った。

「では……健闘を祈るよ」

そう言っつて、クロノスさんは背を向け、足元に魔方陣を出現させた。空間転移の魔法で、光に包まれながら、どこかへと消えて行った。

「聖地カナン……か」

僕は、聖都の方に顔を向けた。聖都の中心にあつた巨大な塔  
聖帝中央庁は、跡形もなく崩れ落ちている。

「あそこは地下だから、無事だとは思っが……」

あれだけの崩落だ。衝撃で、何が起きているのか予測できない。

「大丈夫よ。あそこは、古代の技術で造られた地都。あの程度じゃ、  
壊れないわよ」

リサは腕を組みながら言った。

「あそこで……僕がどうなるかが決まるんだな」

そう呟くと、二人は僕に顔を向けた。

「……明朝、行こう」

二人はうなずいた。

僕が僕であるため。

僕が、僕として生き続けるため。

自分が望んだ夢を見続けるために……

樹。

お前を好きにはさせない。

お前を、この手で殺すことになっても。

## 48章：失われた聖域 始まりと終わりの地

夜が明け、僕たちは聖都へ向かった。レンドとデルゲンは、一時出航禁止令が出たということで、船の管理などのことでペルルークへ向かった。

聖都に入ると、その混乱はひどいものだった。人々は入り乱れ、残された神聖騎士団があっちこっちを走り回っている。

インドラ 奴らを構成していたのは、実は神聖騎士団だったよ。うだ。教皇派と呼ばれる約4割の騎士たちこそ、グルヴィニアだったのだ。今回のことで、残りの6割のほとんどが殺された。

所々から、「ゼテギネアの襲撃だ」とか、「ゼテギネア皇帝の命を令らしいぞ！」などと、ありもしない噂が飛び交っている。ゼテギネアだけが会議に参加しなかったために、そういう噂が生まれたんだらう。

聖帝中央庁があった場所は、瓦礫の山となっていた。あの壮麗な宮殿の姿は、どこにも見当たらなかった。中央庁崩壊のために、周りの住宅や教会も巻き添えになってしまっていた。

瓦礫の山の周りには、呆然と立ち尽くす、教団関係者たちの姿があった。ただ、その瓦礫の山を見つめている。そこにあった、ソフィア教への尊敬、尊厳、すべてが一夜にして崩れ去ってしまった。

「聖なる都」の存在意義は、いなくなってしまった教皇と共に、どこかへ消えてしまったのかもしれない。

「……………あなた方は……………」

後ろから、声がした。振り返ると、そこにいたのは、やつれ果て

た大司祭トルーマンさんだった。

「トルーマンさん！ 無事だったんですね！」

僕はトルーマンさんに駆け寄った。

「え、ええ…… 会議が始まった後、枢機卿と神聖大將軍以外の教団関係者は、宮殿の奥にいるようにということだったんです」

「奥……？ よく無事でしたね」

そう言うと、トルーマンさんは小さくうなずいた。

「……生き残ったのは、そこにいる十数名の者たちと私だけです。崩れ落ちてきた天井の下敷きになる前に、聖地カナンへ逃げ込みましたからね……」

そうか…… あそこを、シエルター代わりにしたんだ。

「……入り口は、まだあるんですか？」

「入り口ですか？」

すると、トルーマンさんはその方へ顔を向けた。

「……もちろんです。あそこは入り口を含め、すべてが古代技術や特別な素材によって作られているため、あの程度のことでは壊れることはありません」

「そうなんですか……」

リサの言うとおりだ。古代技術…… あれだけのことで、壊れないとは…… 少し、信じられない。

「聖地へ…… 行かれるのですか？」

トルーマンさんは僕の目を見つめていた。

「……はい。あそこで、すべきことがあるんです」

僕が、僕を取り戻すために。

トルーマンさんは僕から目を逸らし、崩れ去った聖帝中央庁を見つめた。

「……あなたは、オディオ様に似ていらっしゃる」

「オディオ……？」

「先々代の教皇だよ。先代教皇ハロルドの兄……だったかな」  
「ヴァルバは僕の隣に立ち、言った。」

「ハロルド教皇の兄……ということは、14年前にクーデターを起こされた時の教皇で……つまり、その人こそが、僕の……。」

「オデイオン様は、14年前……あのクーデターで、亡くなられました」

「オデイオン5世……若くして即位し、改革派として保守派を抑え、教団改革を推し進めたという。彼の右腕にして弟であったハロルドは、突如として反乱を起こした。」

「オデイオン様の遺体は見つかりましたが、奥さまと二人の御子息は行方不明で……亡くなられたのだと、考えられています」

「……………」

母は、死んだ。あの裏山で。

そして、二人の子息こそが……僕と樹。

「生きておられたら……今は、空さまと同じ年頃でしょうか」

僕を見つめながら、彼は微笑んでいた。

そっか……やっぱり、ここ　ソフィアが、僕の故郷だったんだ。

僕たちが生まれた、聖なる都……。あんまり、覚えていないな。

その時の記憶とか、欠片でさえ拾うことができない。

「あの……オデイオン様は、どういった人でしたか？」

僕は訊ねた。もう、顔さえも覚えていない、僕の父親。

トルーマンさんは何度か瞬きし、目を閉じた。

「オデイオン様は……そうですね、厳しい……お方でした」

遠い目をして、彼は上空を見上げた。朝の青空が広がり、小鳥たちが瓦礫の上や城壁の上に立ち、歌を鳴らしている。

「……孤児院の出自であった私を従者として雇い、厳しくも、多くのことを教えてくださりました」

あのクーデターの時、トルーマンさんは北のゼテギネアに亡命したのだという。父による空間転移の魔法で、聖都の外に出されて。

「あの時……オデイオン様は私たちを逃がし、離宮にいた御家族を

救うために、一人で……」

反乱に加担した一部の神聖騎士団は、僕たちがいた離宮を襲撃したのだという。母のケガは、その時のものだったのだろう。

「……素晴らしい、お人でした。あの方が愛したこの都……悔やんでも、悔やみきれません……」

小さく顔を振り、彼は俯いた。

幼き頃からの君主……そして、彼の愛した地がようやく復興したのに、再び崩壊した。守り切れなかった自責の念に駆られ、トルーマンさんは震えていた。

「そんなことを言っている場合ではないはずだ」

僕の言葉に、彼は驚きと共に顔を上げた。

なんでだろう。今、悔やんでいるこの人に、言いたいことが浮かび上がってきた。余計な御世話……だと言えば、そうなのだろう。けど……。

「あなたはオディオン教皇の意志を知り、その遺志を継ぐ者。なら、夢に散った過去を見るのではなく、やるべきことを為すべきだ」

トルーマンさんは目を見開き、僕を見る。

「ソフィアを建て直すんだ。あなたには、まだできることがあるはずだ」

「ソラ……様」

ここで悔やんでいても、しょうがない。修哉が言っていた。「後悔は人を成長させない」って。

トルーマンさんはうなずき、聖地のある方向に体を向けた。

「……聖地カナンには、『失われた聖域』というものがあります。伝説ではありますが、その地には、失われたはずの『聖魔の神剣』が眠っていると云われております」

「聖魔の……神剣」

ラーナ様が言っていた、アイオンが携えていたというティルナノグ皇室の宝剣か。

「あなた方が何をしようとし、何を為そうとしているのか……私に

は、よくわかりません。ですが、聖地にこそインドラを………猊下

シャルフィル様を止める術があるような気がするのです」

確信にも似た想いが、彼の双眸に宿っている。

シャルフィル……樹を止めたい。インドラの理想を、食い止めた  
い。すべきことは違えど、その先に見ているものは同じ。

「……わかりました。ありがとうございます、トルーマンさん」

僕たちは、聖地への入り口がある方向へ向かった。

聖地カナンへの入り口は、わかりやすかった。トルーマンさんたちが避難していたため、そこ付近にあった瓦礫は取り除かれていたのだ。

長い、長い階段を再び、下りてゆく。

「聖地カナン………ここは、約2万年以上も昔にできたって云われている」

先頭に立ち、たいまつを持って歩いているリサが言った。

「に、2万年？ ……そ、そんな大昔にできたのか………」

僕としては、考えられない大昔だ。いや、ガイアの歴史を知っているものならば、誰もが驚愕してしまうだろう。

「2万年ほど昔、当時の世界は多くの国々が列挙していたらしいの」  
現代の技術を遥かに超える文明であり、戦争は悲惨さを増していたという。

「……その戦争の果てに、地上は瘴気で覆われてしまった。人類は、どこへ逃げ込んだと思う？」

彼女は歩くスピードを落とさず、背を向けたまま言った。

「空の上ですか？」

「ううん、空に住むのはティルナノグ時代から。……その逆よ」

「 大地の下か? 」

ヴァルバがそう言うと、リサは小さくうなずいた。

「 …… 聖地カナンは、その頃の都市の一部らしい 」

大地の下に造られた都市 …… か。

この世界の古代技術つてのは、ガイアでは想像できないほどなんだな ……。 基は同じ世界だつていうのに、どうして歴史がここまで違うのだろうか。

… ふと思つた。 僕たちが知つている歴史というのは、もしかしたら真実ではないのかもしれない。 だつて、僕たちは実際にそれを見たわけでも、聞いたわけでもない。

ガイアとレイディアント …… 謎が深まるばかりだな。

「 なあ、世界を覆つた瘴気つていうのは? 」

ヴァルバの問いに、僕は現実に引き戻された。

「 それはわからない。 …… この話、おじいちゃんから教えてもらったんだけど、さすがに瘴気のことまでは知らなかった。 2 万年以上も昔のことだもん。 知つてる人間がいたらすごいわよ 」

「 まあ、そりゃそうだな 」

考えてみれば …… 世界を 2 つに分けたのは、もつと昔つていうことだろうか? 」

樹は言つていた。 原因となつた男は「 滅亡の未来を変えるために戦つたが、次元の混沌を深めた 」と。 つまり …… 将来、この星を滅ぼすこととなる原因そのものが太古の昔にあるつていうことなのだろうか? 」

二つの世界が共有する歴史からまったく違う歴史が生まれたその瞬間が、世界が分かれた時なんだろう。

… …… だが、それを知る術は、もう見付からない気がする。 もしかしたら、リユングヴィが何かを知つているのかもしれないが …… 。

ようやく、聖地カナンへと出た。以前来た時と変わっていない。巨大な空間。巨大な宮殿や多くの住居跡。そして、天井に輝く天空石の数々。これが2万年以上も昔にできたとは、とてもじゃないが信じられない。

中央の通を歩き、真ん中にある宮殿へ向かう。あの宮殿の前で、僕はリユングヴィのいる空間へと行った。あそこへ行けば、たぶんリユングヴィに会えることができるはずだ。

宮殿の前まで行くと、僕たちは立ち止まった。

……何も起こらない。

僕は辺りを見渡した。天井に突き刺さりそうなくらいに高い、宮殿の塔。そして、辺りを囲む住宅。粘土色の風景。青緑色の光が注ぐ、地下空間。

ここが、始まりの地なんだろう？　ここが、お前のいう「聖域」のある場所なんだろう？

出て来いよ……リユングヴィ！！

### 夢見る命

何かが、囁いた。

それは僕だけでなく、他のみんなにも聴こえていた。その声はこの空間に響いているのではなく、僕たちの「心」に問い掛けるかのように、自分の内部から聴こえてくる。

初めての感覚に驚くヴァルバとアンナだったが、リサと……なぜ

か、空は無表情のまま宮殿を見上げていた。

古き誓約に縛られし言霊

永久に響き渡る、銀の音色

優しい声……のようにも感じるが、違う。

哀しい……哀しい声。太古の昔に消え去った、夢の囁き……男性  
の声だ。

全てを握りし者、今に残りし夢の残骸

神々の呪縛に抗うか

あれ……なんでだろう。

この声に、聞き覚えがある。ひどく、懐かしい大人の男性の声……。

「ソラさん？」

アンナが僕の名を呼ぶが、僕の意識は遠のく手前……霞んでいた。  
何かが僕を包んでいる。淡い光たちが、滲み出ているかのように。  
「ソラの髪が……青く……？」

選ばれし者よ

魑魅魍魎の想いが集いし、亡者どもの墓場

聖魔の扉、今こそ

すると、僕を包んでいた光が消えていき、僕の意識もここに帰って来た。

「……ここからは、空だけが進むようね」

リサは腕を組んでいた。

「どういふことだ？」

「選ばれし者……カインの直系者のことだろうから、空だけなはずよ」

「なるほど、血を持つかどうかってことか」

ヴァルバの言葉に、リサは首を振る。

「うっん……真の器を持たない者ってこと」

「……それって、どういう意味だ？」

僕が訊ねると、彼女は腕を組んだまま、僕に顔を向けた。

「私は知らないよ。……私たちが知ろうとして知るものではなく、

あんたが知るべきことだからさ」

「……………」

僕が知るべきこと、か。

この奥に……本当の自分であるための答えがあるってこと。

「ホラ、ポーっとするなって」

「いてっ！」

宮殿を見つめている僕のケツを、リサは軽く蹴った。

「早く行きなさいよ。時間だったたくさんあるわけじゃないんだし」

と、彼女は笑顔で言った。

「……言われなくてもわかってるっつの」

こんな時に急かさなくてもいいのに……と思いつつ、少し気が軽くなかった。

「まあ、考えすぎずにやれよ」

その時、誰かが僕の肩に手を置いた。後ろへ振り向くと、落ち着いた顔で立っているヴァルバがいた。

「お前はお前らしく。できないことは、しようとするな」

「……………」

「抗うって決めたんだけ。とことん、呆れさせてやんな」

そう言っつて、ヴァルバは小さくうなずいた。

「……………りょーかい。やってやるよ」

僕とヴァルバは、自分たちの拳を軽くぶつけた。

ヴァルバの碧い瞳　それは、少なからず僕に勇気を与えてくれていた。

「あの、気を付けて……………くださいね」

アンナが僕に近寄り、落ち着かない雰囲気と言った。それを見て僕は微笑んだ。そうすることでは、彼女の不安を払拭できない。

「ああ、わかったよ」

「……………」

彼女の表情は非常に暗く、重かった。

「アンナ、そんな顔するなって。なんだかんだ言っつて、なんとかなりそうだしさ」

かなり適当なことだが、そうやって彼女の心を軽くしてあげようと思った。だが、それでもまだアンナは俯いたままだった。

「……………わかってます。わかってますけど……………」

「ま、やばそうになったらとんずらするさ」

と、僕は冗談を言った。すると、彼女も小さく微笑んだ。

「……………ソラさんらしいです」

こういう時は笑わないとね。アンナも、心配そうな顔が少しだけほぐされたようだ。

「とにかくさ、あんたはあんたの気持ちをぶつけりゃいいだけの話さ」

リサはジャブみたいな動作をした。

「必要なのは力と、知恵と、努力と……ほんのちよつとの勇氣。だけど、そんなに欲張らばくていい」

そして、彼女は僕の胸に自分の拳を置いた。

「自分を信じな。あんたの未来は……あんたが創るんだから。あんたは、あんただけのもんだ。当たり前のことを、証明してきな」

「……わかつてる」

「よし！ もうなんにも言わないよ」

僕がうなずくと、リサは太陽のような笑顔になった。一抹の不安でさえ、感じていないようだった。

「あの……空さん」

僕の前に、空がやって来た。足元まである、白いドレス。この9ヶ月で太ももにまで達していた長髪は、リサが軽く切って上げたために以前と同程度。腰までの長さ。少し、痩せてしまったようにも見える。

「どうした？」

「……なんて言えばいいのか、わからないんですけど……」

しどろもどろになっている彼女を見て、思わず僕は少し笑ってしまった。

「ど、どうしたんですか？」

口を押さえて笑う僕に、彼女は訳がわからず戸惑っていた。

「い、いや、別になんでもないよ」

うまく自分の気持ちと言えないのは、あの頃と変わらんないんだな……。記憶を失っても、根元は変わらないってことか。どこか、安心した僕がいた。それだけで、前へ進めそうな気がしたのも確かだ。

「とにかく、頑張って来る。お前も心配しないで、のんびりしてるよ」

「の、のんびりって……」

空はクスツと笑った。僕は彼女の頭に手を置いた。

「少しだけ待っててくれ。すぐ戻るからさ」

「……………」

そう言つと、空は微笑んだままうなずいた。

ああ……なるほどね。そこかしこに、変わらない空の姿がある。だけど、だからこそ痛感する。記憶を失っているんだって。

「それじゃ、行つてくる」

そして、僕は宮殿の内部へと足を進ませた。

「……………大丈夫かな？ あいつ」

空が進んでいった宮殿の奥を、ヴァルバは見つめていた。

「心配？」

リサは横目で彼を見た。その顔には、微笑が浮かんでいる。それを見たヴァルバは、少し驚いていた。見るからに、彼女に心配している面影が無いからだ。

「……………お前は心配じゃないのか？」

彼が問うと、リサは首を振った。

「まあ……完璧に心配してないって言ったらウソになるけど……私はいつを信じてる。絶対に、やり遂げて来るよ」

絶対的な自信とも言えようか　リサははっきりと断言した。

「なるほど……お前らしいよ」

「あら？　そのため息は何？」

リサは彼の小さなため息を見逃さなかった。彼も隠すつもりはなかったが、してやったりの顔をしている彼女を見て、苦笑してしまった。

「ハハハ……お前があまりにも断言するから、心配すんのが馬鹿らしくなってるな」

そう言いつつ、彼は感じた。自分の胸につかえていた、わだかまりのようなものが縮小したことに。

「そんな顔すんなよ、アンナ。俺たちが信じてやんないとさ」

「……そうですけど……」

アンナは顔を上げ、天井で輝く天空石を見つめた。

「いつも、いつも心配しているんです。いつか……ソラさんがいなくなっちゃうんじゃないかって」

言い表すことのできない不安。どれだけ笑顔を向けられようと、言葉をかけられようと、彼が帰って来るまで消え去ることの無い不安。

彼女は、今にもその不安で押しつぶされそうだった。

「……私は、いつもソラさんに護られてきました。……だから、いつか……笑顔だけ残して、消えちゃう気がして……」

近いようで……遠い。どうしてそう感じてしまうんだろう。アンナは考えまいと、顔を振った。

「アンナ、大丈夫だって」

リサはアンナの頭をなで始めた。

「あいつは絶対にリユングヴィを打ち倒す。あいつは……こんな所で死んじまうような奴じゃないしさ。でしょ？」

「……ですよね」

そうやって、二人は微笑み合った。

「……………」

空は無言で、祈るように両手を合わせた。理由はわからない。自分の手が勝手に、動いたように感じた。それでいて、必然としてやることなのだ、心のどこかで感じていた。

空色の瞳は、宮殿の奥を見つめ、小さく呟き始めた。

「……………？　お願い……………生きて……………」

宮殿の中に入ると、真っ暗だった。何も見えない。だんだん目が慣れてきても、いまいちわからない。

すると、僕の意識に反応したかのように、いきなり光がこの内部を覆った。その光は、青緑色をしていた。急に明るくなったので、暗さに慣れてしまった僕の瞳は、ちゃんと辺りを見ることができな

かった。

時間を置いて、目を開けて辺りを見渡すと、そこは見たことのある風景が広がっていた。

ここは……聖帝中央庁と同じだ。出入り口の門に入って、目の当たりにした大きな広間。中央にある、巨大な扉へと繋がる大きな階段。天井にある、豪華なシャンデリア。しかも、そのシャンデリアは青緑の光を放っている。そう、中に天空石が埋め込まれているのだ。他の場所にも、電球代わりに天空石が用いられている。古代の人は、こうやって天空石を電気代わりにしていたのかもしれない。

「ここはかつて、人間が神々を祀っていた場所だ」

前から、掌大の光が現れた。      リュングヴィだ。

「古代の神々……12柱の神が祀られていた。いや、人から神と呼ばれる者たちが祀られていた場所、だな」

「……………」

光はゆつくりと、人の姿になった。以前、ここでリュングヴィが具現化した時と、同じ姿をしている。奴はゆつくりと、天井を見上げた。

「……地上に溢れた瘴気から逃れるべく、人は大地の中に生活を移した。ここは、その地下王国の中心地だった」

なるほど……だから、これほど大きいのか。

「ここで、多くのものが生まれた。太古の昔に矢われ、先の世界崩壊による文明衰退……。人々は、それらを掘り起こすかのように機械を生み出した。……魔法も、な」

「魔法？   ここで、作られたのか……………」

「魔法が作られ、この人間は太古の昔に誕生した   原初の人類   というものに興味を抱き、そこから新たな繁栄を導き出そうとした

……」

リونغグヴィは顔を下ろし、僕と目線を合わせた。

「1万年前……俺の全てが始まったのだ……」

そう言うと、リونغグヴィは再び光の玉となり、瞬間的に発光しながら、どこかへ消えてしまった。

……何を、伝えたかったのだろうか……

階段を上り扉を開けると、あのホリンと戦った広間とそっくりな場所に出た。東西南北に一つずつ、扉がある。たしか、北は謁見の間だったっけ。この広間は、ほとんどが粘土色だ。ただ、天空石によつて明るさを取り戻したため、神秘的な空間に見える。

北の扉を開けると、やはり謁見の間みたいな大広間だった。奥に階段があり、その上に玉座がある。しかし、その玉座は半分が欠けて崩れていた。

「……古の帝王たちが夢の跡……」

大広間のだ真ん中に、光の玉が現れた。そして、僕に背を向けたリونغグヴィの姿が形作られた。

「古の帝王？」

「あの玉座は、この地下王国を支配していた人間が座っていた場所だ。王ではないが……王の如き権力を握った者たち」

言葉の意味から察するに、現代で言う独裁者……的な立場にいた人間のこともなかもしれない。

「……玉座に就く者は、就く者にしかわからないものがある。だが、それは玉座に住み着く、何かに支配されていたのかもしれない……」

リユングヴィは、姿を見せても僕と目を合わせない。

「この玉座の下に多くの夢や希望、未来が集まった。だが、それと相反するものも集まっていた。……悲しみ、苦しみ、憎しみ、怨嗟の声……」

そして、リユングヴィは僕と目を合わせた。

「……玉座にある者は、必ず滅びる運命にある。たとえば、お前のように運命に抗おうとしても……」

再び、光の玉となって、消えて行った。

……運命に抗っても、結局、運命の赴くままだというのか……？

玉座の奥に道があると思ったのだが、そこは崩れてしまっていて、完全に通れなくなっていた。僕は来た道を引き返した。

今度は、西の扉を開けてみた。

扉の先には、中規模の会議場があった。イギリスの国会のような、円形の議会議場のようだ。

机はボロボロになっており、角はほとんど欠けて崩れていた。イスも半分以上朽ち果てていて、無造作に転がっている。イスを触ってみると、あの本のように簡単に崩れ去ってしまった。

辺りを歩き回っていると、後ろに気配を感じた。

「……ここで、この国の法律や、多くの事柄が決まっていた」

光の玉は、空中で人の姿となった。リユングヴィとなっても、空中でフワフワと浮かんでいた。

「だが、民のことを考えた政治が執り行われるわけではなかった……」

「……だろうな。けど、全部が全部そうじゃないと思うぞ？」

リユングヴィは、僕を横目で見た。

「……そうであってほしい。そうであってほしいと、人々は願っていた。そうなることを……。しかし、願えば願うほどそれは裏切られるものだ……」

三度、リユングヴィは消えて行った。

期待することが、悪いか？ 期待しなければ、それを叶える人も現れない。人々の願いが、それを成就させる人物を生まれさせることだってありえる。理由がわからない、確信が自分の奥に在った。

再び広間へ戻り、東の扉を押し開ける。そこにあっただのは、あの大きな会議場だった。西の扉にあった、中規模の会議場とは違い、ここは巨大な会議場である。きつと、ここでは他の地域の人たちとも話し合う場所だったのだろう。

聖帝中央庁の東の会議場に入った時、血の匂いと死臭がひどかった。床を埋め尽くす、惨殺された遺体と赤と黒の血溜まり。あの光景は、今も目に焼きついている。あそこで、レオポルトさんは死んでしまった……いや、殺されてしまった。

会議場とはいっても、ここでは本棚や数多くのテーブルが置いてあった。朽ち果てた本たち。黄色くなった書類たち。……『デルゼニア人口調査書』などと書かれてある。ここでも、政治的なことが行われていたのだろうか。

「……積み重なっていく、執筆されたものたち……」

光が現れた。奴はテーブルの上で足を組み、座っていた。片手には、光る書物があった。

「……人がその目で見えてきた事柄を自らの手で執筆し、多くの人々に自らの世界を示す。それは、文字の成せる業だ」

「文字……」

文字があったからこそ、人は進化していったといっても過言ではないと思う。

「そうやって、世界の視野は広がり、人は無限の希望と夢を膨らませてゆく。その中に愛憎と生死という、表裏一体のものがあるかも知らずに……」

リュングヴィは光り輝く本を、床に投げ捨てた。その本は、ろうそくの火が消えるようにふっと消えてしまった。

「愛の中に、憎しみはある。憎しみの中にも、愛は眠る。生きることは、緩やかに死へと向かっているということ。そう……生きていくということは、生 という言葉を使わずとも表すことができるのだ……」

奴は目を閉じてほくそ笑んだ。まるで、自分を嘲笑っているかのように。

「……雪が積もるように、歴史も重なってゆく。だが、同時に人類の血に塗れた歴史も積み重なってゆくのだ……」

「さあ……上を目指せ。お前がお前を手に入れたいのなら……」  
リュングヴィは、今度は光の柱となって上空へと昇って行き、天井に入ってしまった。

人が歩んできた歴史、か。

たしかに、お前の言うように、人は血に塗れた歴史を歩んできただろうさ。だけど、それが全てじゃないはずだ。人は、憎しみや欲望だけで生きてきたわけではない。もし、それだけで生きていたというのなら、人の世界はとうの昔に滅んでいる……。

この広間の奥にある、螺旋階段へと進む。

一人で、暗い螺旋階段を上っていると、壁が青く光り始めた。そこに、何かが映し出され始めていた。

これは 僕と樹……小さい頃の風景だ。あの、よく遊んだ公園で、砂遊びやブランコをして遊んでいた。滑り台をしすぎて、お尻

が痛くなった記憶がある。

その近くで、微笑んでいる幼いそっくりな少女が二人……そう、空と海だ。僕たちがガイアに辿り着いて、初めての友達だったんだよな……。

あの公園で、よく遊んでいた。泣き虫な樹は、元気っ子である海にちよっかいを出されては、泣きじゃくっていた。それを、いつも空がなだめていた。日が暮れると、僕の母さんと空たちのお母さんが迎えに来てくれたっけ。

今度は、キャンプに行った時の風景が浮かび上がってきた。あれは……何歳だったっけ。まだ、小学生の低学年ぐらいだっただろう。か。樹の容態が回復し、外で遊べるまでになった頃だ。そういうことで、父さんが日向家の人たちと一緒に、自分の故郷にあるキャンプ場へ連れて行ってくれたんだ。

澄んだ水が流れゆく、山の川。緑の木々たちが空気を浄化し、そのきれいな空気を僕たちが吸い込む。都会で暮らす僕たちにとっては、あらゆることが新鮮だった。夏の日差しが強い頃だったが、自然の中というのはなかなか涼しいもので、森の中に入ると、汗なんてほとんどかかなかった記憶がある。

自然の中で食べるカレーは、この世のものとは思えないほど格別だった。材料も作っている人もいつもと同じなのに、味がまったく違う感じがした。あのカレーライスを、何杯もおかわりしたっけ。

フツと、その映像は消えた。再び、僕は階段を上り始めた。

しばらく上ると、大広間に出た。

中央に会議ができるような、大きなテーブル。天井を支える、数本の支柱。こここの部屋だけ天空石の明かりではなく、ろうそくの灯りだった。

このテーブル……昔のものじゃない。きれいな石造りのテーブル。

並べられているイスたちも、どれも壊れていなく、新品のようだ。

「ここは、奴らのアジトさ」

天井に吊り下げられている大きなシャンデリアに、光に包まれたリユングヴィが腰掛けていた。

「……アジト？ 誰の？」

「インドラのアジトだ。奴らはここに潜んでいたのさ」

僕は辺りを見渡した。なるほど……人が住んでいたような形跡がある。

「ここなら、誰も入って来ないな……」

この宮殿の出入り口に、黄色いカードが吊り下げられていた。そこには、入れないという証だ。そこを利用したのだろう。

「……ここで、お前の弟は何を知ったのだろうな」

僕は上を見上げた。所々、くもの巣が見える。

「全てを滅ぼそうとする意志は、計り得ぬほど大きく、強靱なものだ。それを構築するまで、今まで知っていたこと、今まで愛してきたものを捨て去るほどの 絶望 を知ったのかもな」

「絶望……？ 世界や、人に対してか？」

そう訊ねると、リユングヴィはクツクツと笑い出した。

「さあな……。だが、奴の意志にそれが関係している可能性は少ないだろう。絶望は憎悪へと変わり、あの強靱な意志を完成させた」

「……………」

「空……お前はどうか？ お前には奴の意志と同じほどの 意志 を持っているか？ それが無ければお前はあいつを倒すどころか、俺を倒すことさえもできないだろう」

「そんなこと……知っている。お前に言われなくてもな」

僕は奴を睨んだ。端っから、知ってるさ。そんなことは。

「ならば……上がってくるがいい。全てが始まった、聖域へと……」

リユングヴィは大きな光を発して、消えて行った。まだ上があるのか……。

大広間の奥に、再び螺旋階段を見つけた。ここを隠すかのように、黒いカーテンが垂れ下がっていた。

階段を上っている途中、再び壁が青く輝き始めた。そう、僕の記憶が映像化されているんだ。

中学生になったばかりの頃だ。僕は空たちとは一つ年上であるため、中学1年生の時は、あまり遊ばなかったような記憶がある。というより、部活が忙しかったのもある。ちなみに、僕はバスケットを修哉もバスケット部だった。

修哉が天才だということを、この1年間で思い知った。テストでは何百人という学年の中で常に1位、バスケットでは1年生の最初からレギュラーとして活躍。チームは予選を突破し、県大会に初出場しかし、所詮修哉だけのワンマンチーム。県大会の1回戦で敗れた。すると、修哉は負けた理由は、他のレギュラーである先輩たちにあると発言してしまう。結果、先輩たちから集団暴力を受けた。だが、その後すぐに振り返り討ちにしてしまい、停学処分、退部させられた。その頃のことを、修哉は笑いながら言っていた。

そして中学2年生になり、空や樹たちが入学してきた。これで小学生の時のような、当り前の日常が始まる。……あの時は、そう思っていた。

この年に、樹は死んでしまう。いや、正確には行方不明になった。あの時にレイディアントへ行っていたなんて、想像すらしなかった。いや、生きているということさえも想像できなかった。

樹がいなくなり、数ヶ月の間、僕たちは落ち込んでいた。周りか

ら見ても、不気味と思われるほどブルーだった。しかし、それを修哉が励ましてくれた。遊びに来てくれたり、休みの日には町へ誘ってくれたり……。空と海が早く元気になれたのは、他ならぬ修哉のおかげだった。……修哉にとっても親友であり、弟のような存在であつた樹が死に、苦しかつたはずなのに。

中学3年生の時、僕はちよつと離れた高校へ進学しようかと最初は思っていた。そう考えていた時が実は1学期の頃だけであり、あの頃、毎朝空が迎えに来てくれていたのは、もしかしたら別れるのが嫌で、少しでも長くいたいという気持ちの表れだったのかもしれない。しかし夏休みに入り、勉強が難航してしまい、あきらめた。修哉が進学する地元の平凡な高校に行くことにした。それを知ってからののか、空は迎えに来てくれなくなった。あの頃、僕はいつも頭の上にクエスチョンマークを浮かべていたな。空の行動の意味がわからないからつて。

進学する高校が変わつたとはいえ、勉強が難航していたのは変わらなかつた。地元の平凡な高校とはいえ、いちおう公立。問題が難しい。いつも、修哉が付きっ切りで教えてくれた受験勉強。修哉はそんなシーズンに入つても、のんびりとしていた。ホント、天才はいいよなあと実感した。

ここで、壁の映像はフツと消えた。

懐かしいものばかり。置き忘れ去られていきそうだった、僕の奥底にある記憶たち。いつも、呼びかけていたのかもしれない。大切な何かは、その中にもあるつていうことを。

……ああ、そんなのかもな。

僕たちが生まれる前から求めている「真実」は、そこに眠っていたのかも知れない。だからこそ、生きて……生きて、抗い続けよう

とする。

階段をずっと上っていくと、一つの扉が現れた。見た瞬間、僕はギョツとした。扉の全てが、金でできていたからだ。そして、中央に2つの紋章が刻まれており、所々に宝石が埋め込まれている。赤や青、緑や黄色、そしてダイヤモンドのようなものまで。この扉だけ、つい最近にできたんじゃないかと思った。

その黄金の扉を、僕はゆっくりと押し開けた。

その先に広がっていたのは、6畳くらいの部屋だった。正方形の形をしており、角には縦長の天空石が設置され、青緑の光を発している。そして、部屋の中央部にある段差の床に、あの扉と同じような紋章が刻まれていた。

その紋章のところへ、僕は近づいた。すると、その紋章が突然、光を放ち始めた。まるで、大地の切れ間から光が漏れるかのように、光もまた紋章の形をしていた。

この光の所に、進めばいいのだろうか？

僕は自問自答をした。部屋を見渡してもこの紋章以外、めぼしいものは無い。リユングヴィが現れる気配も、まったくくない。静寂した空気が、どこか寒く感じた。

ゆっくりと、自分の足を進めた。まず、右足を紋章の中へ。次に、左足を紋章の中へ、進ませた。そして、僕は紋章の上に立った。

お帰りなさい

頭上から女性の声が聴こえた。……あの裏山で聴こえた、大人の女性の声。どこか懐かしく、どこか切なさを灯った声だった。

決定権を持ちし、私たちの幼子  
永遠なる時の流れを彷徨い、始まりの刻に戻られし者

あなたは、調停者

僕は身動きをせず、優しく受け止めるかのように、目を閉じたまま立っていた。言葉が、まるで雨のように降って来るような感覚。

夢と約束を紡ぎし、その時へ相見えんことを  
今こそ、その扉を開きましょう

四隅に配置されている縦長の天空石が、その光をさらに強くし始めた。光が届いてなかったこの部屋の天井にも、その美しい輝きが手を伸ばす。

全てが集いし地  
『失われた聖域リーヴェ』へ

すると、紋章の光が激しく動き始め、上空へと立ち上り始めた。それは意志を持つかのように、くるくると回り始め、螺旋を描きな

がら僕を包み始めた。

古き友よ……その血に連なりし者よ

言葉さえもが、光を纏っているかのように響く。

全ての始まりにして、全ての終わりなる時へ

その瞬間、僕の視界は真っ白になった。

シュ …………… という音と共に、僕はどこかへと消えて  
行った。

床に、仰向けになっている自分に気が付いた。ゆっくりと体を起  
こし、辺りを見渡す。

……見たことも無い、空間だった。  
周りは上空に燦然と輝く、星がある夜空のようだった。しかし、

下も同じような風景が続いている。つまり、すべてが夜空のような空間なんだ。

小さく、夜空は動いている。自分が勝手に動いているのか、それとも周りが動いているのか、さっぱりわからない。

「これは……宇宙？」

テレビとか、アニメとか……そういったもので見た、宇宙の姿のように感じた。全てが黒い風景で、無数に散らばる小さな光の点。それでいて、自分は正確だった。自分の手が見えないわけでも、姿が見えないわけでもない。言うなれば、自分だけが光を纏っているようなものだった。

その時、再び巨大な光が僕とこの空間を覆った。あまりの眩しさで、僕は目を閉じてしまった。

そして、目をゆっくりと開くと、広がっていたのは遺跡の中だった。古びた遺跡……だが、上空には先程までの夜空のような宇宙があり、床は水面。自分が立っている両足の部分から、波紋がゆっくりと広がっている。この水面の奥には、壊れた宝箱や、ギリシャ風の柱などが、無造作に転がっている。

正面には左右対称の支柱が立ち並び、その奥に一つの大きな石造りの箱が、横たわっている。そして、その上に紺碧の光を纏った一つの剣が吊り下げられていた。

「ようやく、辿り着いたか……」

上空から大きな光の玉が、石造りの箱の上に降り立った。そして瞬く間に、リユングヴィの姿へと変わった。

「……ここは？」

僕はリユングヴィが人の姿を成すと同時に、訊ねた。

「始まりにして、終わりなる地」

奴は足を組んだまま、言った。

「全てが始まった、一つの空間、次元、世界……。あらゆる命が、自らの肉体が滅び、墮ちゆく狭間の中で放出された、正と奇の感情が複雑に入り乱れる、禁じられた聖域……。『リーヴェ』」

「リーヴェ……。？それが、この空間の呼称なのか？」

そう言うと、リユングヴィはうなずいた。

「……ここは、レイディアントじゃないのか？」

「ここはどの時間軸にも属さない、特別な次元だ。簡単に言えば、妖精の国ユートピアと同じような空間さ。まあ……。ここは高次元だな」

ユートピア……。あそこは、世界が2つに分かたれてしまったことにより、2つの世界の間を引き寄せられてしまった、別の次元の場所。妖精は掌サイズだったが、ミリアという妖精だけは、小学生くらいの大きさだった。

「……この空間では、時が経ても生命は死ねない」

リユングヴィの声のトーンが、少しだけ下がった。

「なぜだかわかるか？」

すると、奴は石造りの大きな箱から降り、この水面のような床に立った。

「この空間では、時間が無いからだ」

「時間が無い……。？ どういうことだ？」

「時間とは、形あるものが緩やかに死へと向かうために用意された、いわば道標のようなものだ。生から死へ……。一つの直結した道を、物質が外さないようにするためにな」

「……ここには、そういつた物質が無いって言うのか？ じゃあ、そこらにある遺跡や、その大きな石の箱とかはなんなんだ？」

僕は辺りを指差した。天井もないのに並んでいる支柱。それぞれ、5〜8メートル間隔できれいに並べられていた。

「これらは、お前のために用意された風景さ。この空間は、選ばれた者の心情、あるいは心の内の風景を具現化する場所だ。目に見えらるとはいえ、決して壊れることの無いものだ」

「いまいち、よくわからないんだが……」

「そんな僕を無視し、奴は言葉を続けた」

「俺は長い間、この空間の中を彷徨っていた」

「リユングヴィは僕に背を向け、上空を見つめた」

「10000年前……肉体が死滅し、俺は穢れなき幼子たちが眠る地には行けず、この異空間で彷徨い続けた。それもこれも、新の器と融合するため……完璧なる生命となるため。セヴェス、お前こそ俺が求め続けていた俺の器そのものだ」

くるつと振り向き、僕を指差した。

「……古の神々から与えられた、全てを滅する力。星と生命の命運、それらを左右させることができる唯一の存在……」

「……それが『調停者』のことか？」

「リユングヴィはニヤツと笑った」

「そのとおり」

「じゃあ……リユングヴィ、お前は……『調停者』だったのか？」

そう訊ねると、奴は笑みを消した。少しだけ間を開け、奴は言った。

「……一万年以上も昔の話だ。あの頃の俺は、レイディアントにおける最初の調停者であり、尚且つ不完全だった」

「不完全……？」

目を瞑り、奴は小さく顔を振る。

「半分しか俺は俺として成り立っていないかった。そして、俺は肉体の檻に囚われ、己の為すべきことを理解しながら実行しようとしていなかった」

「……？」

言葉の真意を理解していない僕を、奴は鋭い眼光で見据えた。

「わからないか？ 俺はリユングヴィ 奴そのものではない」

「それって……」  
その時、何かが僕の心に語りかけた。

カイン

「お前は……カインじゃ……ない……?」

自分の心に従わず、何らかの声が出るのと同時にリユングヴィはニヤリとした。

「カイン、か。……そう、あいつはそういう名前だったな」  
クククと、奴は笑い始めた。

「……お前は一体、何者だ!」  
僕はキツと奴を睨んだ。それに気づいても、奴は笑みを崩さなかった。

「俺はリユングヴィ……奴が憎しみと怒りと哀しみ、その全てに支配された時、分離した思念体……とでも言えようか」

驚きを隠せない。カインだと思っていた奴は、カイン　リユン

グヴィと名乗った人間ではない。

「お前はリユンググヴィじゃないのか……！」

「そうさ。一万年前、リユンググヴィ　カインはあることが原因で、己の精神が破壊されていた。まだ　カイン　だった頃に受けた大量投薬と、巨大な喪失感、調停者であるが故の絶大な力による精神不安定………　カインの心は、混迷に混迷を極めていた」

誰かの声が囁く。

カイン

彼は、ただの人間だった。だが、ただの人間であることを許さなかつた者たちより、その運命を呪うことになり……　破滅へと突き進んでしまった。

誰かが……　囁く。哀しい調を奏でながら……。

「そして肉体が死滅する間際……　奴と俺は完全に解離した。奴自身の魂はすでに遠い彼方へ消え去り、俺は残留思念としてリーヴェに遺された」

「残留思念だつて……？」

「俺は奴の怒りの炎。燃え盛る紅蓮の憤怒そのもの」

一瞬、奴の体が紅く光る。

「……　だから、僕を求めていた。己の肉体と……　依り代となるべき者と融合し、己の至高目的を果たすために……」

そう言うと、リユンググヴィは拍手を شدした。

「よくわかっているじゃないか。それもこれも、お前の内にいる朽ちていった者の鎮魂歌か……」

鎮魂歌　レクイエム　遠い昔、無念を遺して逝ってしまった者たちの悲痛の

言霊。

「俺の存在理由は　大いなるの意志に則り、全てを滅すること。」

そのために、セヴェス……貴様と融合せねばならない」

鮮血のような、朱色のような艶やかな瞳は、僕を見つめている。

「全てを滅するだと？ そんなことが大いなる意志……そのものとでもいうのか？」

「そのとおり。我らが 母 のな……」

そう言つて、リユングヴィは星空を見上げた。

「……たとえそうであったとしても、僕たちはそんなことを望んじやいない」

「はたしてそうかな？ 樹たちはなぜ滅ぼそうとしているのだと思ふ？」

「……………」

「奴らも知っているからだよ……。我らの 母 が何を望んでいるのか……そして、何を夢見ているのかをな」

「自殺願望とでも言うのか？ 違うね。僕たちは滅ぶことなんて望んでない。ただ、普通に明日を生きたいだけだ」

すると、奴は鼻で笑った。

「そんなものはヒトのくだらん願望だ。命が命をむさぼり続ける。

……この悪循環、いつまで続けるつもりだ？」

眉を曲げ、奴はため息を漏らす。

「遠い昔から交わされていた約束なんだよ。そのために、調停者という存在はこの世に生まれたのだからな……」

僕はそれを認めまいと、首を振った。

「そんなの、認めない。僕たちに与えられたこの力が、全てを破壊するためだけに存在しているだなんて思いたくない。だったら、どうしてバルドルの『創造の力』が存在しているんだ？ ……：そういう『力』があるのは、全ての未来を切り拓くために存在しているんじゃないのか？ 新しい命を育む時に感じる、愛おしい心……：そういうったものを護るために存在しているんだろ？」

言葉が溢れる。まるで、昔っから知っているかのようにだった。

「未来、か……」

フツと、彼は笑った。

「お前も知っているんじゃないのか？ ……この世界、レイディアントが歩んだ先にあるのが何なのか……」

この世界の未来……樹たちは言っていた。この世界は未来で、逃れられない死を迎えると。

「この世界は死ぬ。逃れられぬ 運命 だ。どうせ滅びるといふのなら、俺は完全なる生命となつてやる。そして……滅びる運命にあるこの星を、殺してやる」

リユングヴィは拳を高く上げた。一瞬だけ、いつかのステファンの姿が重なる。

「……そんなことのために、僕にしたように……他の調停者をたぶらかしていたのか？」

「たぶらかす？ ……ああ、なるほどな。たしかに、俺はかつての調停者たちに語りかけてきたさ。何度も……何度もな」

「樹をあんな風にしたのも、全てはお前のせいか！？」

僕は怒声を上げていた。それを、奴は馬鹿にするかのような笑い声で返し始めた。

「ハハハ……勘違いするな。たしかに、俺はお前にしたのと同じように樹に語りかけた。だが、失敗だった。それは、奴が 完璧なる器 ではなかったからだ。全ての調停者になり得る者は俺が消えない限り、俺という存在に リンク できるようになっている。そのリンク口率が高いほど、器となり得る存在なのだ。……かつての調停者であるユリウス、アイオン……奴らもいい器ではあったが、完璧にリンク口はできなかつた。所詮、奴らはできそこないなんだよ……」

當時を思い出したのか、口元を押さえて奴は笑っている。

「……お前は神々の血を受け継ぐ者たちの中でも、最も純粋な存在だ。さすが 傾いた男 と 聖なる光神の巫女 の息子だ」

リユングヴィの声は少しずつ、大きくなっていつている。興奮して来ているのかもしれない。

「……………？ それは……………」

聖地カナンへ初めて来た時、こいつはそんなことを言っていた。

僕は、その2人の間に生まれた存在なんだって。

「貴様の父は調停者の権利は持っていないものの、ロキの血を濃く受け継いでいた。そして、貴様たちの母リリスは永遠の巫女

『聖焔の巫女』だった。調停者に近い存在と巫女の中でも強力な力を持つ者同士が交わった時、新たな調停者が生まれる……………」

リリス……………？ 僕と樹の母親、か。顔さえ、思い出すことができない。

「……………予想通り、お前たちは他の血族とは違う遺伝子構造を持って生まれてきた。特に、お前は俺と同等 あるいは、それ以上の存在」

「まったく同じ…………… 聖魔 ということか？」

「聖魔は光にも闇にも成り得るもの。お前は傾いた男の息子であるために傾いている。……………ロキになる確率の方が高いんだよ」

「じゃあ……………樹は違うのか？ あいつも、同じ血を受け継いでいるんだぞ？」

「同じ実がなる木にも、うまい実がなるものがあれば、まずい実がなるものもある。あいつはイレギュラーなんだよ。つまり、失敗作だ」

僕はムツとした。

「失敗作だと？ あいつは、誰かに作られた人間じゃない。そういう言い方をするな！」

「……………すべての生命は運命という一つの道の上に立たされ、それをただひたすら歩いているだけなのだ。樹は 失敗 という運命の下に生まれた存在なのさ。お前とは出来が違う。いくら ロキ を支配

しているとはいえ、結局は調停者でありながらお前と時を同じくして生まれたが為、その権利を得ることができない存在だ。お前と一緒にはならない」

失敗だと……？

いくら思想や理想が違えたとはいえ、自分の弟を 失敗 呼ばわりされるのは、なんとも言えない怒りを呼び起こさせる。怒りで小さく震える僕を見ず、リユングヴィは続けた。

「……古の記憶に埋もれていった神々だけが持ち得る 権利 を手にした唯一無二の存在…… 『調停者』」

リユングヴィは再び、僕と視線を合わせた。

「東空……いや、セヴェスⅡヴェルエス。一つになる時が来た」

僕は首を振った。

「お前の言う 一つになる というのは、僕がお前に飲み込まれ、

ロキ として覚醒することか？」

「……そのとおりだ。この星もろとも全てを破壊するには、闇の調停者 として覚醒しなければならぬ。俺だけでは無理だが、お前が俺の不足な部分を補うことにより、覚醒することができる。お前は……この俺のために生まれてきたんだよ……」

「違う。僕は僕だ。誰かに用意され、誰かのための器なんかじゃない。そんなの、認めない」

リユングヴィは顔を左右に振った。

「認める。お前は、大いなる意志の下に運命さだめられた生を与えられた人間……。お前が俺の一部となるのは、逃げることでできない運命なんだよ……」

「僕が認めると思うか？ 大いなる意志に運命られていただと？」

馬鹿にするな。僕の運命は、僕が作り得るものだ。誰かに用意され、

機械のようにそれに従って進むわけじゃないんだ。僕の意志は、僕のためにある。お前らなんかには、作られた意志なんかじゃない！」

自分の意志は、自分の意志で決定されたものなんだ。僕は力いっぱい、リユングヴィに言っただけだ。だが、やつも負けじと張り詰めた声で返してきた。

「なぜ認めない？ ヒトは……いや、全ての生命が、己の生きる理由も生きる価値も見出せない、情弱で未完成な存在であり、大いなる意志によって敷かれたレールを進むしかない。自らの運命に抗っているようで、そうするように仕向けられているのだ。あたかも、自分の意志でその道を歩んでいるように見せてな。そのレールを歩くことにより、生命は満ち足りた存在に成り得るのだ。自らの意志では結局、途中で諦め、惨めで情けない存在へと成り下がる。お前の世界にもいたただろう？ 人生というものに失敗し、社会から見放された者たちを。あれらは自らの運命を受け入れず、無駄に抗ったが故に、ああなったのだ。お前も、そうなりたいというのか？」

「そうなることが自分の運命だ！ 抗って、戦って、失敗してしまいうのも、自分が創った未来の一つなんだ。何かに、決められていたものじゃない。どうしてそれを、運命さだめられていたものだと決め付けるんだ！？」

「俺自身がそうだったからだ！ 聖地力ナンを見ただろう？ あそこで、人間の叡智の歴史が始まった。魔法という、とんでもないものが開発され、多くの人間が実験台にされた。地上が瘴気から脱出し、人類が地下から這い出ても、その実験は続けられた」

リユングヴィは、大きく歯ぎしりしていた。

「……そうか……お前……いや、カインは実験体にさせられていたんだな？」

奴は、なずきもせず、再び僕に背を向けた。

「……かつて、俺の主は地下帝都力ナンで悲惨な実験を受けさせられていた。それは肉体的、精神的苦痛だった。言っただろう？ 薬物投与だと。長い間薬漬けにさせられていたせいで、奴の精神

は 俺 という存在を生み出した」

そして、僕の方に向き直った。

「奴と同じであった頃、友とともに全ての世界を掌握せんがために地上へ出た。そして、世界を支配した。……それは、遠い昔から俺たちに与えられていた責務であり、 誓約 だったのだ」

「……………」

「死にも勝るこの地での長い時間……あれらの苦しみは、最終的な地点へ至るための、試練だったのだ。世界を支配するという運命の過程の中に、そういつた苦痛があったのだ。運命は一つの終着点へ向かわせるために、俺たちにあのような試練を与えたのだ」

「……それは、絶対に違う」

僕は顔を左右に振り続けた。

「お前は、自分の苦しい時間の中で運命を呪ったと言ったな？ あれは、抗おうとする意志じゃないのか？ それに、お前がこの地下王国から脱出できたのは、お前が自分自身の未来を、もつとすばらしいものにしてしようとして、自分で考え、決心したことじゃないのか？ そうやって創り上げた自分の道を……どうして、与えられた運命だと決め付けるんだ！？」

「貴様に、何がわかる？」

「わかるもんか！ 僕は、お前と違ってありふれ、それでいて幸せな家庭の中で育った。お前の苦しみなんで、まったく理解することはできない。けれど……それが、与えられたものだと、思えない。僕があそこで生きて来たのは、父さんや母さんが努力をし、僕たちを愛し、大切に育ててきたからこそ、僕はそういう道を歩んでこられたんだ。……大切な何かを育むために、人は努力する。その過程の中で、他の命もまた、幸せな道を歩むんだ」

「ならば、生まれた時から苦しみを背負わされる生を受けた命はどうなんだ？ あれも、開かれた未来の一つだとも言つのか！？」

「……それは、わからない。けれど、お前が苦しみから脱却しようとしたのは、お前の切実な意志によるものだろ？ 自分の意志で地

下王国を脱出し、そしてあくなき挑戦で、自分の未来を切り開いたんだ。……そりゃ、最初からハンデを背負わされた人間もいるだろうさ。だからって、理不尽な運命だと決め付けるのは、自分が弱いからだ！」

「弱い……？」

奴は鮮血の眼差しで、僕を睨みつけた。

「自分の不幸は、定められていたんだって決め付けるのは、弱いものの証さ。いわば、言い訳のようなものだ」

「ならば、自分のせいだとも言うのか？ 生まれた時からハンデを背負うのは、己のせいだとも言うのか！？」

カインの憤怒そのものであるリュングヴィは、目を見開き、歯ぎしりをしながら前へ一歩出た。

「そうじゃない。生まれた時の不幸は、自分ではどうしようもないことさ。けど、そこから未来を切り開かなければならない。やるチャンスはあるんだ。そのチャンスを生かし、未来を切り開く命は限りなく強く、勇ましい。お前が帝国を築き上げたのも、そういうことをしたからなんだ」

すると、リュングヴィは小さく笑った。

「俺が？ 違う。俺は、神によって定められた運命を受け入れ、あの帝国を築き上げた。ただ、流れる落ち葉のように、俺は生きてきただけだ。……俺は、星に選ばれた調停者だ。物質世界にいる時は不完全だったが、俺は待ち続けた。ただ、運命に身を任せ……。そして、ようやくお前が生まれた。これを、定められた運命と言ってなんと言う！？」

「……僕は、お前のために生まれた存在じゃない！」

「……受け入れる。誰かは違う誰かのために存在し、その違う誰かもまた、違う誰かのために存在している。そうやって、星の歴史は刻まれてゆくのだ。そう、犠牲によって構築された歴史だ。お前は、その犠牲となる命の一つなんだよ……！」

「なら、僕の意志は何のためにあるって言うんだ！ こうして一人

で考え、悩み、決意することが何の意味も無いとは思えない！ 誰かのために生きているってのは、犠牲になることじゃない！ ……

僕は、絶対に認めない！！」

静寂な空間に、僕の声が響き渡る。

お前の言つとおり、誰かは誰かのために存在しているのかもしれない。

けど、それは決して屍の上に成り立つものではない。絶対に。

「……………話は終わりにしよう」

## 49章：永遠のオルゴール

リュングヴィは、空中に浮かんでいる剣の方に体を向けた。

「お前がどうしても俺の考えに賛同しないというならば………残された道は、ただ一つ。……力づくで、お前を殺すしかない」

そう言うと、奴はその剣に手を伸ばした。掴んだ瞬間、淡い青い光が一瞬、彼を包み込むかのように発光した。

「……俺が 完全なる調停者になるために、お前の 精神 を食い破る」

「僕らの精神だと……？」

「ここは、実体と魂が混在する唯一の空間。つまり、お前の魂精神も、この空間にある。それを食い破るには、ここにいるお前を殺すことなんだよ」

僕は腰に差してある剣を、素早く引き抜いた。それと同時に、リュングヴィは僕の方に向き直り、剣の切っ先を向けた。

「この剣が何かわかるか？」

その剣は、透き通る青い宝石のようなもので作られており、施された装飾品は、なんとも豪華だ。刀身は、本当に透き通っているように見える。

「……これが、聖魔の神剣ティルフィングだ」

「……!?!?」

あれが、アイオンの剣！ ユリウスを倒した時に携えていたという、伝説の……。

「神々の流れを組む者にだけ……いや、『決定権』を持つ者だけが振るうことのできる、聖魔の元素の結晶体。これこそ、調停者の証……」

リユングヴィは見せびらかすように、ティルフィングを振った。

「だが、不完全なる存在が手にしては、完全に力を発揮しないのがこの剣の特徴だ。いや、扱う人間の力を理解しているのかもしれない。その力が、剣と同等なのかどうかを。俺ならば……純粹な力を持つ俺ならば、この剣は最大限の力を発揮させる。というより、調停者の権利を得ている者ならば、その力を発揮させることができるだろうな」

ということとは、僕でもその力を発揮させれるということか？　すると、リユングヴィは僕を見ながら笑い始めた。

「ククク……お前では扱えない。お前は、俺の付属品みたいなものだからな……」

「何だと!？」

思わず、僕は奴を睨みつけた。

「お前の存在価値は、俺が生命の頂点に君臨するためだけなんだからな……」

赤い鮮血の双眸を輝かせながら、リユングヴィは僕を一瞥した。

ああ……もう、あいつは人間じゃないんだ。基は同じカインであったのに、カインの心でさえ理解できず、すでに滅びへの願望しかない、哀れな魂。

もう、あいつはヒトに戻れない。

もしかしたら……あいつは、純粹に 完全な調停者 を求める欲望の塊 なのかもしれない。だからこそ肉体が滅び、一万年という長い時間が過ぎてても、今までのように人の心の中に巢食い、自分の器にさせようと唆す。

どうしてなんだらう。あんな考え方をするのは。

突然、僕の中に冷たい風が流れた。それは、小さく身震いした時、一瞬だけ視界がぼやける。

「今までの人生を振り返るんだな……セヴェス！」

僕は体の奥に力を入れた。普通の状態では、奴には絶対に勝てない。引き出せる限りの 聖魔の力 を、引き出して戦わなければ勝ち目は無い。

リユングヴィが向かってくる間に、僕は小さく深呼吸をした。

……何かを侵食するような、感覚が襲ってきた。だが、まだ自分を見失うほどではない。自分自身を保ちながら、戦わなければならぬ。

これは、自分自身との戦いなのだから。

リユングヴィは勢いをつけ、僕に向かって来た。僕も、同じようにリユングヴィへと向かった。

振り下ろされた剣のタイミングは、同時だった。2人の前で2人の剣がぶつかり、大きな音を轟かせた。

リユングヴィの攻撃は重い。 聖魔の力 を使っている時は、いつも重く感じていたホリンの攻撃さえ、とてつもなく軽く感じたのに。

リユングヴィは剣を押し上げ、僕の懐を空けさせた。奴はそこへ、テイルフィングを突き刺そうとした。しかし、僕は体を素早く左へ動かし、弾かれて上に浮かんだ剣を握り締めた右手を、振り下ろした。それを、リユングヴィは軽やかな動きでかわす。そして、再び剣と剣がぶつかり合う。

「なるほど、力の使い方が上手になっているじゃないか」

剣を押し合いながら、リユングヴィはニヤツと笑った。

「……僕は負けない。自分のためにも……あっちで待っている、あいつらのためにも!」

今度は、僕がリユングヴィを押し上げた。少しだけ、懐が開いた。

今だ!

僕は剣を横に振り抜いた。その時、リユングヴィは動く気配を見せなかった。当たったと思った。しかし、甘かった。

リユングヴィはフツと消え、石の箱があるところまで下がっていた。あの短時間で、あそこまで行けるのか!?

「簡単に、当てられると思うなよ?」

そう言うと、リユングヴィは手をかざした。その手に、赤い光が集結していく。

「大地を巡る、赤き亡者よ……崩れゆく血肉の狭間を、自らの意思をもって灰燼と為せ……」

この精霊の波動……まさか、禁呪か!? 気付いた時には、もう遅い。

「泣き叫べ、ブリュヴァールム」

リユングヴィのかざした手から放たれた真つ赤な光たちは、床に降り立ち、まるで波が押し寄せるように、炎を引き起こしながら僕の方へ向かって来た!

あまりに広範囲に押し寄せて来ているため、左右に避けることができない。こうなったら、上へジャンプして避けるしかない。

僕は力いっぱい、上空へジャンプした。聖魔の力のおかげで、十数メートルまで舞い上がった。

「死ねえ!!」

リユングヴィはその場で、剣を何度も振り抜いた。すると、以前ホリンが放った時のように、三日月の形をした衝撃波が、いくつも折り重なって飛んで来た。

まずい！ 空中で横に動いたりすることはできない。

こうなったら……！

僕は左手を前に突き出し、あの力を最小限にして、ここに溜めた。あれをうまくすれば……もしかしたら、盾のように出せるのかもしれない。

レーザー光線にしたり、小さく掌に出してホリンの炎を掴んだりしてきたんだ。きつと、できるはずだ。

すると、青い光がきれいな円形を描いて、僕の前に出現した。想像通りに発動したので、思わず僕は目を見開いた。リユングヴィが放った衝撃波は、その円形の光に阻まれ、塵となって消えた。

「ほほう、それなりに制御できるのか。ならば……」

リユングヴィは再び、詠唱を始めた。

「靈帝の怒りを我が許に統べよ。銀箔の濃霧、漆黒の大地を照らさん。ザヴェーロ……眠れ、凍結の棺の中に……」

巨大な氷柱が、上空に現れた。それと同時に、僕はようやく地上に降り立った。

「くっ……!!」

まるで巨大な槍の雨のように、それは僕を狙って降り注いでくる。僕は右へ、左へとかわす。だが、リユングヴィを確認する余裕がまったく無い。あまりにも氷柱が多すぎて、避けるのに精一杯だ。

「喰らえ！」

その声が聞こえると、僕は素早くチラ見をした。その時、さつき

と同じように、リونغヴィイは斬撃の衝撃波を繰り出していった。衝撃波は氷を破壊しながら、広範囲に襲って来た。僕はそれをつつ、二つと避けた。

「逃がすか！ クリムゾンフレア！」

クリムゾンフレア　ホリンが使っていた炎熱系の魔法だ！ 大きな火の塊が、3つ降ってくるのだ。

くそつ……八方塞だ。こうなったら……！

僕は避けながら、詠唱を始めた。初めて唱えた魔法だけなら、なんとかできるはずだ！

青黒い光を纏った指先を素早く動かし、印を結ぶ。それによって、一つの魔方阵が刻まれてゆく。

「集え、暗き闇夜に従いし者ども……漆黒の黄昏に誘え、忘却の魔人よ。その力に贅を与えん……グラノマーレ！」

巨大な青黒い光が、僕の周りを囲んだ。禁呪の氷柱も、巨大な火の玉も、斬撃の衝撃波も、その光にぶつかった瞬間、消えていった。「何……？」

僕は全て消えたところで、リونغヴィイのところへダツシュした。勢いそのまま斬りつけるが、奴のテイルフィングによって阻まれる。

「俺の声を聞かず、聖魔術を詠唱できるようになっていたとはなあ……ハハハ、褒めてやるよ！」

リونغヴィイは笑いながら、力任せに僕を吹っ飛ばした。僕が体制を整えるのと同時に、連続攻撃をしてきた。

「どうした？ 防戦一方じゃないか」

「くっ……そ……！」

僕はリユングヴィの攻撃を防ぐので精一杯だった。あまりにも、攻撃のスピードが速い。

「……そろそろ、おしまいにしようか」

そう言うと、リユングヴィは剣を勢いよく、下から振り上げた。僕はそれを剣で防いだが、衝撃で体ごと空中に舞い上がった。

まずい！

「ティルフィングの力、思い知れ！」

リユングヴィは剣をゆつくりと振り上げ、力を溜めるように、その状態で停止した。赤紫色の光が、渦を巻きながらリユングヴィを包み出し、ティルフィングの切っ先へと集中していく。

何かをされる前に、何かをしなくては……！

僕は、あのレーザー光線を出そうと考えた。あれは、ホリンの巨大な炎をも消し去るほどだった。リユングヴィの動きを止めることくらい、きつとできる！

左手を前に出し、集中した。

「ハアアア！！」

青く、半透明な巨大な光線が、リユングヴィへと突進して行く。リユングヴィは、それを見つめながら動こうとはしなかった。

「情弱な力だ！ 消え去れ！！」

リユングヴィがそう叫ぶと、ティルフィングをものすごい速さで振り下ろした。その瞬間、巨大な衝撃波が発生した！

「なっ！？」

10メートル以上の大きさを持つ衝撃波が、僕の放った光線と正面でぶつかり合った。すると、光線はその衝撃波によってかき消されてしまった。

僕はとっさに両腕を交差させ、防御の体勢を整えた。そして、ソリッドプロテクトとマジックシールドを、最大限に発動させた。

衝撃波が僕に当たった瞬間、巨大な轟音と共に、僕の体に電流の

ような衝撃が流れ込んできた。

「ぐああ　　！！」

そのまま、僕は地上に叩きつけられた。

そして、体中に広がる味わったことも無い痛みが、体の中を走り抜けた。

「ぐ……………うっ……………う！」

体中から、血が溢れている。なんとかして、片膝を付く体勢にまで戻すことができた。

血がぼたぼたと、水面のような床へとめどなく垂れてゆく。服は破れ、裂傷がひどい。骨もどれかが折れているような気がする……………。

「……………俺の力が、理解できたか？」

僕は首に力を入れ、リユングヴィに顔を向けた。

「お前では、俺には勝てん。いい加減、その力の差を認めたらどうだ？」

リユングヴィは、僕を見下ろしていた。勝者が、敗者に向ける視線だ。

僕は何とか、立ち上がろうとした。ひざが踊ってる。立つことさえ、ままならないなんて……………。

「ティルフィングの衝撃波を受けても生きていられるのは、お前の中にある俺の力の残りかすのおかげだ。ここまで生きて来られたのも、お前の力じゃないんだよ」

「……………くそお……………っ！」

剣を杖代わりにして、僕はようやく立つことができた。

腹部のこの痛み……………どうやら、先日のシュヴァルツの攻撃によって折れたあばら骨が、再び折れてしまったようだ。まだ、完全に治癒していないかった。

「ぐっ……………！！」

僕は大きく呼吸をした。体に力を行き渡らせるためには、酸素を多く吸わなければならぬ。

リユングヴィはそんな僕を見て、にやりと笑った。

「それ以上、動こうとするな。お前の負けは、決定的なのだからな」  
「うる……せえ……！」

こうなったら……もう少し、力を出すしかない。危険だけど、やるしかない。

僕は目を瞑り、精神統一をした。

傷の痛みが、少し和らいだ。それに、体も軽くなってきた。

「……………」  
リユングヴィはそんな僕をただ、見つめていた。何もせず。

ドクン

「!？」

激しい鼓動が、僕の中で響いた。まさか……!？

ドクンッ

僕は胸の辺りをさすった。心臓の鼓動が激しい。ホリンとミランダに襲われた時と、同じだ。

「力を行使しすぎたようだな」

リユングヴィは僕を見ながら、笑っていた。その姿を確認した時、僕の視界が揺らぎ始めた。視界の上部から黒く、もやもやしたものが現れた。少しずつ、それは僕の揺らぐ視界を埋めてゆく。

「所詮、お前などこの程度だ。自らの力を制御することもできず、自らの限界を軽視し、力の配慮を間違えた」

「なん　ぐっ……！」

激しい頭痛で、僕は顔を歪ませた。気を失いそうなほどの痛み。それにより、僕はその場に倒れた。

「この空間がどういうものなのかを、覚えているか？」

「聖域……リー、ヴェ……？」

すでに、僕は顔を上げる力さえ失っていた。

「この空間は……肉体が滅び、魂だけの存在となった者たちの、正と奇が複雑に混じった場所だと」

僕は体中に纏わり付く傷の痛みと、頭痛によって意識を失い始めていた。それを無視し、奴は語りかけてくる。

「正は……喜び、嬉しさ、楽しさ……そうだった、陽のものだ。

奇は、その逆……つまり、悲しみ、憎しみ、妬み　陰　を司るもの」

「何が……言いたい……？」

自分で意志をもって出した言葉なのかどうかもわからないのに、リユングヴィはそれに反応する。

「わからないか？　お前の中にある　バルドル　と　ロキ　は、それぞれ同じ眷属のものに反応する。この場所には、無念のうちに死を遂げたものたちの怨念が、陽　のものよりも、多く渦巻いている。さらに、お前は　ロキ　に傾いている。だから、その程度の力の行使で、ロキに蝕まれるのだ」

怨念………

クルシイ

聞こえる……

クルシイ…… ツライ……

無念を残し、堕ちていった命たちの、叫び声。

ナンデ…… ソンナヒドイコトヲ……

イヤ…… ヤメテ…… ヤメテエ！

キサマラア…… ワレラトオナジクシテ

シニタクナイ……

そうか…… 生きたかったのか？

望まずに生まれ、

望まずに死に、

望まずに…… 堕ちたんだな……

ドウシテダ

わからない。

なぜ、キサマハイキテイルノダ？

知らない……わからない……

オオイナルチカラニエラバレタガユエニ、  
オオクノイノチヲクライ、  
ソノシカバネノウエデハグクマレ……

誕生せし、神々の幼子

僕はそんなの……望んでいなかった……  
ただ、普通に過ごしたかった。  
こんな力なんていららない。  
憎み合うだけの……滅ぼすだけの力。

そうですよ

貴様は、生まれ変わればいい

永遠の眠りに就き、普通の

……そうだな。そうして、楽になるのなら……。

そうやって何もかも憎んで、  
蔑んで、  
僻んで、  
狂おしいほどに怨んで

ああ、僕は沈んでゆくんだ。

始まりと、終わりの地へ

……世界が暗転する。

僕は、果ての無い空間を墮ちていつているようだった。  
全てが入り乱れ、あらゆる負の感情が生への限りない渴望を轟か  
せ、世界を憎んでいる。  
肉体は滅び、魂は彷徨い、想いは星屑の欠片となって散らばり、  
夢は氷のように溶け、僕はこの闇の彼方へ墮ちてゆく。  
何も、見付からない。  
希望も、夢も、何もかも……消えてなくなってしまう。

ああ……そうか、ここが……終着地点なんだ。

生が死へと移り変わり、それから永遠に彷徨い続ける場所が……  
ここなのか。

僕はこの永遠なる海の中へ、沈んでゆく。  
全てを憎み、全てを滅ぼせと願いながら。  
そして、生まれてきたことを呪いながら……。

約束だよ

……!?

今の声は……

ずっと、ずっと……

誰かの声が聞こえた。この声は……空？ いや、海……いや、違  
う。  
リサ……!？ でも、違う。似ているけど、彼女でもない……。

「行ってらっしゃい」

これは……母さんだ。別れ際に言った言葉だ……。

「たとえ全てに裏切られ、全てに憎まれようと、お前が正義だと決めたことを為せばいい」

ヴァルバの声……もしかして、これは僕の記憶の断片か……？

「信じてます」

アンナ……。

「私、絶対に空以上に好きな人を見つけてやる」

この声……美香だ。夕焼けの光が差し込む教室の中で、彼女は微笑みながら言っていた。

「その繋がりがあるから、俺たちは生きていけんだよ」

真剣な眼差しで、和樹は言った。繋がりがあるから、僕は僕でいられる。

「ほら、僕たちの友達ってユニークなのが多いしさ」

にこやかにそう言った啓太郎。

「わかってんのに、なんで泣くんだよ！　なんで叫ぶんだよ！　どうして、今、自分ができることを考えようとしなんだよ！　！」

涙をまき散らしながら、リサは言ってくれた。

僕の中にあつた、決意。それを、呼び覚ましてくれた。

「待ってるから！」

再びレイディアントへ旅立とうとしていた僕に、海はそう言った。彼女との約束……。そう、決して忘れてはならない、大切な約束。

「空のこと、信じてるから」

今にも泣きそうな顔で、彼女　空は言った。  
信じられるに値する人になるう。彼女のために、彼女が笑顔でいられるために、僕は生きていこう。  
そう、決意していたはずなのに。

大丈夫、きっと

僕は、何をしていたんだ。  
こんな闇の底で、暗い波動を撒き散らしながら。今更、何を言っ

ても仕方が無いじゃないか。そんなこと、理解していたはずだろ？  
僕は、常に僕なんだ。そして、自分がしようとしていたこと。何を達成させようとしていたのか。暗い波動に飲み込まれ、それに流れるままに、自分の生を　世界を憎んでいた。  
それじゃあ、何も始まらない。何も創り出せない。

再び、誰かの声が響いてくる。

「ジエ・レル・ヴェスナ・セスタ……悠久なる、精霊の灯火よ……  
我を護り給え……。いい？　これはあなたを守るための言葉なの。  
不安になった時などに、思い出して言うてみて。きつと、あなたを守ってくれる……」

女性の声。

海を襲った時、僕を暗い世界から呼び起こしてくれた声。誰かはわからないけれど……この言葉の響きが、言葉の優しさが、僕を包み出してくれる。守ってくれる。

暗転していた世界が、元に戻り始めた。

全てが暗くなっていた。だけど、徐々に……徐々に、光を取り戻してきた。僕が、僕であるために。

空の命を救うために。樹たちを止めるために。

その時、一つの憧憬とともに何か聴こえて来た。誰かの話し声……か？

「初めまして。ここではG K 5 N o . 0 9 9 9。本名は」

白く、淡く……儂い憧憬の中で、誰かの姿が見える……女性の声だ。銀のような……白いような、長い髪。  
なぜだろう……初めて見るのに、懐かしく感じる。

「私も、あなたも……あいつらも、同じ人間よ。それ以上でも以下でもない。そうやって暗く考えるから、陰鬱になるのよ」

誰かを叱咤している……その中には、その人を想う優しさの影が見える。

「なんでそんなことをするの!?! …… どうして、自分を傷つけるようなことをしたのよ!?! …… あなたが考え抜いて出した最善の行動かもしれないけど…… それは誰かを傷つけることだってあるのよ!?!」

泣いている……。その人を想うがあまりに……。

「……ええ。あなたと、一緒なら……どこへでも……」

約束した。一緒に、ここから出るのだと。共に誓い合い、共に世界を歩んで行こうと決めた。そう……彼女とともに……。

「……お願い、い……見ない……で……」

涙を流す彼女……。苦しみと、悲しみが伝わってくる。  
やめてくれと、彼は叫ぶ。目を開けてくれと、願う。  
それは、決して届くことはなかった。  
永遠に

それを見つめる誰かの心に、あるものが放たれようとしていた。  
その時……

「私はこの研究員だ。……君にとってみれば、憎むべき相手かもしれないがな」

一瞬煌めいた炎が消え、別の憧憬が映し出された。今度は、男性だった。

「……原初の人類……知っているか？ 君は、その人類と同じなんだよ。だからこそ、ここにいる。……同時に、君は選ばれたんだ。運命を司る神々に。君は……世界を新たな繁栄に導く道標になるんだ」

自分に何ができるのか。

それを教えてくれている親友　　がいた。誰かに。

「……共に行こう。そして、世界を変えてやろう。お前の力は、そのために与えられたものなんだ。世界を破壊し……新たに創造し直すための……」

復讐を誓った。変革を誓った。その理想に共鳴しながら……。

「堕ちた者たちの願い、か……。皮肉なものだな……。欲に囚われた者たちが求めていたものを、私たちが手に入れるとは……」

哀愁漂う瞳で、彼は世界を望んでいた。果てしなく広がる、荒野を……。

「なっ………があああ！？ カイン………きさ………ま………！！ あと、もう少しのところ………！ プロジェクト………ジエネ………シス………を………。ぐああああ！！！」

ほとばしる電流とともに、断末魔の叫びが広がる。野望が潰えた時なのだろうか。

「………俺は……… M G 4 N o . 5 6 7 1 ……。昔の名前なんて………意味ないだろ………」

暗い、暗い吐きだめのような中で、彼は空気のように答えていた。

「わかったようなことを言うな………。俺は………ただの実験道具に過ぎないんだよ。道具は、夢なんか見る必要が無いのさ………」

真っ暗な世界に、あの銀髪の少女だけがまるで白い絵の具のように、佇んでいた。

「一緒に、空の見える場所に出よう。こんな場所から……遠く、遠く離れた場所へ……。お前に、見せてやりたいんだ。……あの、リーベリアの大地を……」

銀髪の少女と、彼は約束した。ずっと、一緒にいようって。その先にある、未来を信じて。

「ああ。お前と共に行く。そして、この世界を……この腐れきった人類の檻を、ぶち壊してやる！！俺の……この執行権をもつてな……！！」

青空の広がる大地の上で、彼は世界を睨んでいた。ただ……憎しみしかなかった。それだけだった。

「……これら全部が、俺のもの……？……まるで、世界じゃないか。俺は……お前の言うとおり、神になったのか……？」

空に浮かぶ大地から、世界を見つめる。そこにある全てが、彼のものになった。

「黙れええ！！お前が……！！お前があいつを……！！う……あああああ……！！！！」

全てを裏切られ……彼は憎んだ。信じていた全てのものを憎み、  
世界を……自分の運命を呪った。

「……俺は……ただの操り人形だったってことか……。何のために、  
ここまで……。俺の……。この力は……。何のために存在するんだ……  
？」

虚無……自分はまさにそれになった。その……瞬間だった。

「……クク……クク……。お前の……好きにはさせない……。俺  
の……俺の意志と想いは、俺だけのものだ……！ 終わりにしてや  
るよ……。何もかも、終わらせて……。あいつの……傍に……  
……」

ただただ、愛していただけなんだ。  
純粹に、夢を見ていただけなのに……

その憧憬たちは、一つ一つがろうそくの灯火のように、揺ら揺らと……煌めいていた。その一瞬、刹那を……必死に生きているようだった。まるで……人の人生そのものだった。

憧憬は消えて無くなり、永遠へ紡ごうとした未来は無くなった。

遠い……遠い友たちの記憶。

僕はゆっくりりと、両目を開いた。そこに広がるのは、聖域リーヴエだ。目の前に、リユングヴィが僕を見ながら、佇んでいる。その右手に、聖魔の神剣を握って。

「まさか……戻ってきたというのか？ ああ、永遠の海から……」  
リユングヴィの驚く声が聞こえた。

僕の体を、何かが包んでいる。

青く、光輝く何かが、僕に力を貸してくれている……囁いている。体がとても軽い。頭の中も、いつに無く冷静だ。体中を駆け巡っていた痛みも、まったく感じない。体を見れば、すでに血は止まっていた。

「……あれ？」

すると、僕の目の前に、青い光が集結し始めた。それは少しずつ、形を成してゆき、最後に大きな光を放った。

目の前にあったのは……リユングヴィの持っている剣と同じ、聖魔の神剣　ティルフィングだった。フワフワと、まるで妖精が浮かんでいるようだった。

青く煌く刀身。薄っすらと、向こう側が透けて見える。きれいな宝石類が付けられ、一見、ただの宝物にしか見えない。しかし、この剣から放たれている神々しさは、周りを圧倒するものがある。

それを

何かが、囁く。それに、触れよと。

僕はその剣を握った。その瞬間、青い光が波打つかのように、僕の周りに広がった。

これが……ティルフィング。

「貴様……なぜ……!!」

リユングヴィはわなわなと震えながら、僕を見つめていた。

「どうして、あそこから帰れた!?　なぜだ!？」

両目を見開き、奴は叫んだ。僕は彼を見据えた。

「なぜ?　それは、声が出したからだよ」

「声だと……!？」

僕はうなずいた。

「生きようと……全てが終わりを迎えようと、全てを愛そうとする人たちの声さ」

あいつは理解できない。だからこそ、今みたいに首を振るんだ。

「お前には、わからないだろうさ。……人は、一人で強くなれるわ

けではない。大切な仲間や、大切な人たちがいることで……ようや  
く辿り着けるんだ」

独りでは強くなれない。強くなったとしても、それはまやかし。  
他の者を隷属させる、強圧的な力でしかない。そういう力は、簡単  
に崩れ去る。

「本当の強さだと？ それは、俺が持っている力だ！」

「それは、偽りの力だ。そんなものもろい。たとえ、一時支配でき  
るものだとしても、すぐにほころびが生じてしまうさ！」

「ほざけ！ 何が大切で、何が大事なのか……俺のほうが、わかっ  
ている！ 俺は、一万年も」

「いや、わかっていない！！」

僕はリユングヴィよりも大きな声を張った。

「一万年も長い間、魂だけの存在となっても生き続けていたのに、  
お前はまったく理解していない！」

そう言つと、奴は齒ぎしりをしながら僕を睨みつけていた。

「……己が生きている理由も、生きている価値さえも見出せないお  
前が、偉そうなことをほざくな！！」

「生きている理由？ 価値？ そんなものを求めて、どうするって  
いうんだ！ なぜ、理由や価値を欲しがる？ それが無ければ、生  
きていけねえのかよ！！」

「全ての生命は、それらを欲している！ その答えが欲しいのだ！  
お前だって、そうだろう！？ でなければ、こんなにも争わない

！！！」

「……たしかに、最初はそうだったさ。けど、改めて気付いたよ。  
実際には、生きる上に理由や価値なんて、必要無い！ 生きている  
だけで、ただ、生きているだけでいい。それだけで、笑っていられ

る」

漠然としていると言われるだろう。けれど、そうなんだよ、きつと。

ただ、生きていだけいい。そこにいだけいいんだ。具体的な理由も価値も、必要無い。

生きる。そこに全てがある。

胸に手を当てた僕を、奴は鼻で笑った。

「生きていだけいいだと？ そんなもの、答えになっっていないじゃないか！ いいか？ 運命を受け入れ、その生きる理由、価値を求め歩いてゆくことこそが！ 生命を生命たらしめることなのだ！ お前のように運命を受け入れず、生命が求めるものを求めない者は、生きてい意味なぞ無い！！」

リユングヴィはティルフィングを握る手に力を入れ、僕に向かってさっきの巨大な衝撃波を繰り出してきた。

「朽ち果てる！！」

衝撃波が、唸りを上げて襲い掛かってくる。

僕は剣を携え、目を瞑った。

すると、衝撃波は僕に当たる直前で、光の塵を巻き起こしながら、音を立てて消えていった。

「な、何だと！？」

リユングヴィは驚いている。再び、あの衝撃波を繰り出す。僕は何もせず、目を瞑ったままだった。

同じように、衝撃波は光の塵となって消えた。

「ば……馬鹿な！！」

「……憎しみや欲望だけの剣では、僕を倒せない」  
確信できる。

「陰を含んだ想いは、陽を司る想いには勝てない」

光の想いが、僕に呼びかける。どんなに負けそうでも、屈服しよ

うと……抗うんだ。

「……貴様ああ　　！！」

リユングヴィは叫び声を上げながら、僕の方へと向かって来た。僕も同じように、ダッシュした。

2人のテイルフィングが、目の前でぶつかった。

「ぬう……！！」

軽い。もう、あの重さは感じない。

「……還る時が来たんだ、リユングヴィ」

「何い！？」

苦しそうな顔をするリユングヴィ。僕は小さく顔を振った。

「もうお前は、負の感情に感化されることもない。神々の呪縛に囚われ、この聖域で苦しむこともない！！」

僕は体を横に回転した。すると、リユングヴィの剣が下に叩き降るされる。僕はこのチャンスを、逃しはしない。

「！！！！」

リユングヴィの双眸が、大きく見開いている。

「僕たちは、好き勝手に生きていくんだよ！！！！」

僕は剣を右から左へ、そして目にも止まらぬスピードで切り抜けた。

感触は　　あった。

後ろを見なくても、わかる。すべてを凌駕しようとしていた、一つの生命体が、今ここに、消え去ろうとしている。

「がああああああ　　！！！」

断末魔の叫び声を上げながら、リユングヴィはもだえ苦しんでいる。

僕はゆっくりと、振り向いた。そこには、切り傷から光の水しぶきを上げている、リユングヴィの姿があった。

「お……おのれええええええ！！　この、俺が……調停者が！！　貴様ごときにいい！！！！！」

怨嗟の声のように叫びながら、奴は天を仰いでいる。

「……お前は、調停者　なんかじゃない。お前は……破壊衝動に取り付かれた、哀れな生命だ」

「ぐっ………セ、セヴェスー！！！」

巨大な咆哮を轟かせながら、リユングヴィの体はどんどん光の塵と化してゆく。そして、上空に舞い上がり、キラキラ輝きながら、この聖域に降り注いでゆく。

全てが光の塵となり、リユングヴィの姿は消えた。

「……さようなら」

なぜか、その言葉が出てきた。理由はわからない。誰に向けたのかもわからない。もしかしたら、僕の中の　何かが　、そう言った

のかもしれない。

哀れな 調停者 の儂き魂は、この空間から消え去った。いや、物質世界からも消え去った。……………もう、彷徨い続けることも無い。

「……………カイン……………これで、いいんだよな……………」

僕は 彼 に言った。聴こえているかどうかは分からないけれど……………

僕は、目を瞑った。光の主の声が聴こえる。それは、いつかの男性の声だった。

光は、あなたと共に

光の結晶球が円を描きながら、僕の掌へ集まってくるのを感じた。僕はゆっくりと、目を開いた。

僕は、ティルフィングを掲げた。ティルフィングはその刀身から青い光を、この空間に放ち始めた。

それに呼応するかのように、言霊が届く。

あらゆる魂を、命を癒す 創造 の歌声を  
調停者よ、あなたと共に

光はティルフィングに切っ先に集結し、大きな光を放ち、消えた。

さあ、真の器を持つ、調停者よ

僕は上空を見上げた。そして、気が付いた。この空間を覆っていたあの 夜空 が、きれいな 青空 へと変わっていたことに。果てなど見えない、永遠のような青空。

己の道を、己の道で切り開け  
バルドルを支配せし者よ

僕はうなずき、足を進ませた。そして、光となり、この空間から消えた。

螺旋階段を下り、インドラのアジトと思われる場所に出た。すると、中央のテーブルに、光の柱が出現した。その中から、一人の人間が出て来た。

「あ……」

緑と白の模様があるローブを羽織った男性……クロノスさんだ。

「どうやら、うまくいったようだね」

クロノスさんは微笑んだ。僕もそれにつられ、軽く微笑んだ。

「運命に抗い、そして見事、君は己の道を切り拓いた」

「……………」

少し間を空け、クロノスさんは言った。

「リユングヴィのことを、今はどう思う？」

「リユングヴィ……………ですか？」

クロノスさんは小さくうなずいた。

「かつて世界を支配した人間の哀しみ、怒り、憎しみ……………その全てが凝縮されたものが、奴だった」

「……………調停者とは、星に望まれた者のことなんですか？」

クロノスさんは少しだけ、視線をそらした。遠い目をして、宮殿の深部を見ている。

「どうか……………。実際、私にもわからない。ただ、人が持ちえる力を超えるものを持ち、星の未来を変える可能性を秘めた者のことではあるだろう。……………事実、リユングヴィはある未来を変えた、唯一の人間だから……………」

「星の未来を変える……………か」

ヒトには本来許されていない、超越的な力。どうしてそんな人間が、レイディアントに存在するんだろう、

「……………カインと分離した 怒り……………あやつも、星に踊らされた命の一つなのだろうな」

「……………」

「話したり、戦ったりすることで彼のことを……………少しは理解できたんじゃないのかな？」

「少しだけ微笑みながら、クロノスさんは訊ねた。

「……………そう、ですね。あらゆる憎しみと喪失を味わい、カインは世界を憎むしかなかった。自分を生み出したこの星を怨むしかなかった」

完璧にはわからない。僕は彼じゃないから。……………でも、それでも、

少しだけわかるような気がする。

「……負の感情だけが解離して生まれた彼は……それだけに身を任せるしかなかった。それだけが、彼の存在意義だったのだから……」  
破壊して、憎んで……それだけしか、彼は彼として保つことができなかつたんだ。

「その中で、求めるしかなかった。……自分にはできなかつた全てを滅ぼす力を手に入れて、果てしない夢を見続けていたんですよね……」

純粹に力を求め、戦い、あいつは消えた。もう、あの無限回帰の中で彷徨うことも無く、2つの世界の狭間で叫ぶことも無い。彼は、きつと新たな生命として、生まれ変わるはずだ。

「……彼なりの 夢 か……」

クロノスさんは目を瞑り、小さく息を吐いた。

「あらゆる生命を超越し、あらゆるものを滅ぼそうとした……。もしかしたら、彼は自分が 負の感情 だけで構成されているがために、自然とそれを受けることのない 無 へ回帰しようとしていたのかもしれない……。今はもう、知る術はないがな……」

クロノスさんは天井を仰いだ。その顔には、どこか切なさが浮かんでいた。

「……さて、新たなる 調停者 ……創造の力 バルドル を支配せし、唯一の存在よ。お前の弟、樹は 闇の調停者 として、己の野望を遂げようと動いている」

彼は僕に視線を向けた。紺碧の瞳……それは、全てを見透かしているようにも感じる。

「樹は君と対をなす存在。負の感情だけに支配されない、特別な調停者……」

僕が調停者の力を手にしたからと言って、簡単にどうにかなることではない。クロノスさんは、そう言っているような気がする。

「彼との戦いは、避けれぬ未来だ。それは決定付けられたというものではなく、この星が見る 歴史 そのものだ」

「歴史……?」

クロノスさんは瞬きをせず、僕を見つめた。

「今こそ……もう一度、問おう。真の調停者よ。君が望むもの、そしてしなければならぬことを、私に聴かせてくれ」

「……………」

僕は、心の中にある言葉を放った。

「難しいことなんて、言えません。けど……………」

たぶん、誰もが知ってる答えなんだよな。本当は。

「ただ、みんなが生きていけるようにしたい。笑顔を絶やさないように」

言葉としては、きっと短いだろう。けれど、多くの言葉はいらない。これだけで、今の僕がしたいこと、そして望むものが凝縮されているんだ。

クロノスさんはそれを聞くと、ゆっくりと目を瞑った。

「……………ならば、もう何も言うまい。君は、もう自分自身を手に入れたのだから……………」

自分自身。欲望に取り付かれた、自分の分身。

何かを憎み、妬み、蔑み、僻み……………。そして、果ての無い欲を光らせ、無駄な苦しみを生み出す。

ステファンを殺そうと、憎しみの中で暴走した自分。

自分を想い続ける海に対しての、穢れた欲望。

あれらは、すべて自分だ。リユングヴィではない、自分だ。リユングヴィと戦うのは、自分自身と戦うこと。極限まで追い求める心を、僕は食い止めなければならなかった。どうにか、終わらせなければならなかった。どんなことをしても、どんなに傷ついても。

そして、僕はようやく 自分になった。

空 という、一人の人間になれたような気がする。いや、確信だ。

「だが、忘れるな。君の中にある聖魔の神剣は、気の心に敏感に反応する。君がリユングヴィを倒したとはいえ、君が闇に支配さ

れば、聖魔の神剣は 邪剣 として、殺人の道具となってしまう。  
それを、肝に銘じておけ」

厳しい言葉が出る。でも、たしかにそうだ。安心してられない。  
「さあ、行きたまえ。……君の、大切な仲間たちが待っている」  
僕はうなずき、足を進ませた。それと同時に、クロノスさんは光を放ちながら、どこかへと消えていった。

宮殿の外では、みんなが待っていた。

「……ソラさん!!」

アンナが泣きながら、駆けつけて来た。その笑顔が、その声が、僕を呼んでいてくれた。暗い、時の底で。

「よく、帰って来たな。無事で何よりだ」

ヴァルバは微笑みながら言った。

「本当にそう思ってるのかよ？」

僕はなぜか笑ってしまった。

「こんな時に、ウソなんか言うやつがいるかってんだ」

「……それもそうだな」

彼は少し照れくさそうに、頭をかいていた。

「まったく……女の子を泣かせるやつは最低よ？」

リサは顔を俯かせて泣いているアンナを撫でながら言った。

「……かもな。でも、やるべきことはやってきたよ。……リサ」

そう言つと、その言葉を確信していたかのように、彼女はあまり見せたことの無い、穏やかな笑顔を見せた。

「……うん。信じてたよ、空……」

そして、彼女は再びアンナを撫で始めた。

「ホラ、アンナ。もう泣くなつてば。空が困ってるでしょ？」

僕の傍で、アンナが泣きじゃくっている。顔を下に向け、顔をボロボロにしている。

「も、もう……帰って来ないんじゃ、ない……かと、思つて……」

「ハハ、なーに言つてんだよ。ちゃんと、僕は帰ってきただろ？」

アンナは顔を上げ、僕の顔を見つめ、再び泣き出してしまった。

みんなの声が、言ってくれた言葉が、怨念と怨嗟が入り混じる「

あそこ」の中から、僕を救い出してくれた。

感謝しても、感謝し切れない。

「空さん……」

少し離れたところに、空が立ち尽くしていた。

「……」

「あの……」

「……ただいま」

ただいま。

その言葉だけしか、出てこなかった。空は少し戸惑いながらも、すくなく笑顔を見せてくれた。

「……お帰りなさい」

遠い記憶と運命の狭間で、人は多くの人と出逢い、喜び、別れ、  
悲しみ……。

僕の中に息衝いているたくさんの人たちの声が聴こえた。

永遠だと感じた愛を信じ、愛を貫き、幻となった未来を夢見た者。  
遙か太古の夢を紡ごうと、あらゆるものを膝下に置きながら、朽  
ち果てた者。

運命に弄ばれ、虚無を知り、愛を知り、憎しみを知り……己を殺  
した者。

愛おしさと、哀しみのオルゴールが鳴り響いていた。

## 50章：ゼテギネア帝国へ 隠れた少女の願い

2月8日。僕たちは、アルカディア大陸の大国 神聖ゼテギネア帝国へ行くことにした。なぜそうなったのかというと、僕が聖域から帰って翌日のことだった。

「さて、これからどうする？」

レンドの船の中で、寒さを凌ぎながら、デルゲンが言った。

「奴らを食い止めるにしたって、どこへ行けばいいのかさっぱりだからな」

ため息交じりに、ヴァルバは言った。

「そうだな……あいつらはどこに行ったんだろ？ リサ、思い当たる所はないか？」

僕はリサに振った。彼女は腕を組んだまま、うーんと唸っていた。リサはこの世界のことをよく知っている。あいつらが、どこに行くのかというのもきつとわかると思った。

「……たぶん、グラン大陸へ行ったんだと思う」

床の木目を睨みつけたまま、彼女は言った。

「グラン大陸？ どこかで聞いたような……」

「ソラさん、聖地の図書館にあった書物に書いてあった、あれですよ」

「アレ？ ……ああ、あれか」

北の大陸のことだ。リユングヴィー カインが生きていた約一万年前、どうやらその頃はまだ現在ののように永久凍土の大陸ではなく、緑が溢れ、多くの国々が戦争を繰り返していたようだ。シアルフィ……王国だか帝国だか、なんかあったよな。

「一応説明するけど、グラン大陸っていうのはシュレジエン諸島の北にある、永久凍土の大陸のことよ。今から一万年以上も昔、あそこには多くの国が割拠して、争っていた。その後、カインによるティルナノグ帝国によってグラン大陸は平定され、あそこに眠る特殊な鉱石を使つて、ティルナノグは天空石を作つた」

「あそこで作つたのか？ へえ……興味深いな」

ヴァルバは「なるほど、なるほど」と、うなずいていた。

「そして、グラン大陸の一部を剥ぎ取り、浮遊大陸を建造したといわれてる」

「大地を剥ぎ取つて？ んなのできるのかよ？」

レンドは頭の上にクエスチオンマークを浮かべていた。

「まあ、実際に見たわけじゃないからなんとも言えないけど、あつたのは事実よ。最後の天帝ユリウスによって、浮遊大陸と天空都市は壊滅、封印された。その時の破壊で、グラン大陸には天変地異が起こり、雪が年がら年中降るようになったとも云われてる。本当かどうかは知らないけどね」

ロキの力を持っていたとされる最後のティルナノグ天帝ユリウス……彼は、樹と同じ「闇の調停者」だった。

リユングヴィー カインの 怒り そのものだったあいつは、ユリウスのことを できそこない と言っていた。……ならば、天変地異を引き起こすほどの力とはどういうものなんだろう？ そして闇の調停者 として覚醒している樹が、その封印されたユリウスが持っていた ロキの力 を求める理由は、なんなんだろう。調停者としての樹の力は、ユリウスと同等の力を持っているはず。だったら、封印されてる力を求めなくてもいいはずなのに……。

「グラン大陸……か。行くにしたって、どうやって行くんだよ？」

レンドは尋ねた。ラーナ様は以前、言っていた。あそここの大陸に行くには、普通の船では難があると。

「……そうねえ……」

リサは天井を仰いだ。

「普通の船じゃあ、大陸の回りにある氷河に阻まれて行くことはできないだろうし……」

「俺の船だったら行けるんじゃないか？」

「無理だな。改造すれば行けるとは思うが……何せ、お金が無い」  
デルゲンは肩を落とした。

「……いちおう金はあるぜ。ルテティアからたんまりともらったからな」

たしか、ステファンの研究所をぶつつぶした時だったかな。

「おお！ 数百万セルトありゃ、立派な装甲を付けた船にできるぜ」  
「！」

ヴァルバのおかげで、レンドのテンションが大幅にアップした。

「これで俺の船も立派になるぜ！ うひよひよ」

気持ち悪い笑い声が、耳から耳へと通り抜けた。そんなに嬉しいのか？ レンドくん……。

「しかし、改造に半年近くはかかるぞ？ それじゃあ間に合わないよ」

デルゲンの言葉に、レンドは意気消沈した。どうも、気持ちの浮き沈みが激しいやつだな……。

「うーん、この世界に丈夫な船を持っている国はないのか？」

僕はみんなに訊ねた。ガイアなら、南極とか北極に突き進めるくらいに船はあんのに。

「丈夫な船、か……もしかしたら……」

デルゲンは自分の顎に手を当て、呟き始めた。

「……ゼテギネアにはあるかもしれない」

「ゼテギネア？ 何でまた」

「レンドは首をかしげた。」

「知らないのか？ ゼテギネアは、2大陸の中で最も工業が発達している国だ。造船技術も各国よりは断然いいはずだ」

「じゃあ……ゼテギネアには氷河をもともしない船があるかもってことだよな？」

「僕が言つと、デルゲンはうなづく。」

「たぶんな。絶対とは言えないが……期待できると思うぜ？ 昔から、ゼテギネアはルテティアとの戦争の折、海上での戦いではほとんど負けなしだったと言われる。あれは優れた造船技術がある証拠さ」

「ゼテギネアか……2大陸の中で、唯一足を運んだことのない国だ。ここソフィアの北に位置する、大国。」

「……ゼテギネア……か……」

「僕はその言葉を聞き逃さなかった。ヴァルバが小さく呟いたんだ。ヴァルバ？」

「そう言つても、ヴァルバはボーっとしている。」

「おい、ヴァルバ？」

「ヴァルバはようやく目をぱちくりさせ、反応した。」

「どうしたんだよ？」

「あ……いや、気にしないでくれ。ゼテギネア、ね……うん。なるほど」

「……………」

「どうも、ヴァルバはおかしい。レンドとヒソヒソ話をすると、なんか、隠し事でもしてんじゃないのか？」と、彼は言う。

「隠し事か……。たしかに、ヴァルバはまだ何かを隠している気がするのよ、否めない。ゼテギネア出身だということや、年をごまかしていたっていうのもあるし……どうして、ロンバルディアを旅し

ていたのかも教えてくれないし。

……ゼテギネア出身ということと関係しているのかもかもしれない。あるいは、過去のことで、もう足を踏み入れたくないのか……。

とはいえ、ヴァルバの怪しさは今に始まったことではないので、今更気にしてもしょうがない。それに、ヴァルバのことだ。ただの杞憂かもしれないし。

「んじゃ、次はゼテギネアへ参りますか」

こうして、僕たちはゼテギネアへと向かった。

ソフィア教国最東端の港町ペルルークから、船で海を北上し、工業都市といわれるアルツヴァックへ向かう。アルツヴァックは工業が盛んな町で、帝国の造船を一手に担っている。そこへ行き、残りのお金を全部使えば、船の一つや二つ買えるんじゃないかという、安易な考え（リサの提案で疑問視されたが、文句を言うつと殴られてしまうので、何も言えず。とはいえ、現状ではこれしか方法が無いのもたしか）なのである。

工業都市アルツヴァックは、船で約10日程度かかるだろうと思われる。場所は、アルカディア大陸の東の海岸線沿いの、ちょうど真ん中に当たる。その都市から西北西へ行くと、ゼテギネアの首都アヴァロンが見えてくるらしい。アヴァロンはこの2大陸の中の都市で、最も大きな都市であり、2大陸の中で最大の人口を擁する巨大都市なのだという。今まで見てきた都より、遙かにすごいのだか。

ゼテギネアへ行くにあたって、僕はこの国のことをいろいろ訊いてみた。ただ、みんなが知っている範囲でのものだが。

神聖ゼテギネア帝国　帝国とはいっても、連合国家。簡単に言

えば、昔のドイツ帝国のようなものだ。中心となる国……ここではフィンジアス王国の王が皇帝として、周辺の7王国・4大公国・4公国を従えている。全部で16ヶ国で構成されている。連合国家とはいえ、皇帝であるフィンジアス国王と、その貴族にかなりの権力が握られているのは確かだ。ちなみに、ゼテギネアというのは、大昔から帝都アヴァロン周辺の地域を漠然とゼテギネアと呼ばれていたことに由来するらしい。聖地力ナンの図書館にあった歴史書にも、アルカディア大陸の大国・ゼテギネア連合王国とかいうのが載っていた。

フィンジアス王国が成立したのは、新暦1557年（今は新暦2002年）で、1890年にゼテギネア連邦を成立させ、その盟主に。そして新暦1897年、宿敵ヴェルティナ帝国を滅ぼし、神聖ゼテギネア帝国として成立。他の参加の国は「ガザランド王国」、「ハイデルベルグ王国」、「シーザ王国」、「カパトギア王国」、「ネヴァルド王国」などのことである。全て、元々は独立した一つの国家だった。今も独立していると言えば独立しているが、実際にはほとんど支配されているようなものである。諸侯が集まって、帝国議会というものがあるものの、最終的な承諾は皇帝や帝国宰相（フィンジアスの首相）によるので、あまり意味が無いといわれる。

武力によって諸国を屈服させたためか、やはり反乱は毎年のごとく発生しているのだそうだ。工業などで発達した国なので、軍事力も1番大きいのだが、ルテティアに勝てないのはそれと平行して発生する反乱の鎮圧に、兵を向けているためであるという。つまり、反乱さえなければゼテギネアはルテティアに勝てるだろうと言われている。ただ、ここ数年は非常に平和になっているらしい。それもこれも、先代皇帝ベルセリオス7世と宰相ベオウルフによるものだから。

以前、ヴァルバが言っていたように、土地柄的には豊穡な南部（ソフィア辺り）に比べ、国土のほとんどを占める中部・北部は、作物が育ちにくい厳しい環境にある。温暖な気候を持つロンバルディ

ア大陸とは対称的に、アルカディア大陸は全体的に寒い。ソフィア教国は南部に位置するため、日本と同じような環境だった。帝都より北は、毎年冬になると豪雪により、地方の村々が被害にあっているらしい。そのようなため、食料は他国からの輸入に頼らざるを得ない。このところも、ルテティアに勝てない理由の一つだと思う。最も盛んなのは、前述したように工業。帝都周辺の山々には特殊な鉱石が数多くあり、造船・武器開発などがよく行われている。ルテティアと同盟している時は、造った船や武器などをかなりの高値で売りつける。鉄鉱石などの生産力が無いルテティアは、最大の敵国にして最大の貿易国ということだ。

現在の皇帝は6代ゼナン5世で、フィンジアス22代国王。まだ12歳と、子供である。今から5年前、先帝がはやり病により急逝し、一人息子のゼナン5世が即位したのだという。先帝の弟である叔父ベオウルフが数年の間、摂政兼宰相として政権を握っていたそう。今から18年位前にも、後継者問題で争いが起こり、一時帝都は暴徒であふれかえったとか。しかも皇室出である一国の王が、皇帝暗殺罪で一家全員処刑されたらしい。これが原因で、ルテティアに勝っていた戦争を破棄し、休戦条約を結ばざるを得ない状況に陥った。……この国では帝位を手に入れるため、血なまぐさい争いが頻発しているようだ。

ソフィア教国に程近い都市は、そのほとんどが豊穡な南部に位置するため、帝国で最も食料が確保される地域らしい。以前、レントが言っていたソフィア教国の魔法都市ガリオン又に近いため、魔法も盛んなのだとか。

この南部に帝都を置けばいいと思ったのだが、どうも帝都アヴァロンは、由緒正しき都であるらしい。創世時代の国の首都だったとか、ティルナノグの天空都市の一つだったとか（それが本当なら、空から地上へ落ちたときの衝撃で、都市は崩壊したはずだけど）、ティルナノグが崩壊した後、2大陸を唯一、統一したといわれるアヴァロン帝国の都だったとか……頭の固い上層部は、遷都を絶対に

許さないらしい。意味のわからない意地だが。

そもそも、首都は海に程近い場所にしたほうが、何かと繁栄するんだよね。日本の東京もそうだし、中国の北京、アメリカのワシントンD・C、イギリスのロンドンも然り。まだ文明が発達していない時代には、内陸部に都を定めるのがどうも2つの世界共通なようだ。まあ、元は同じ時間軸の世界。似てしまうのは致し方ない所か。

1週間が過ぎ、ひどい雨が降ってきたため、近くの岸边に停泊した。

この日、出発する頃から雲行きが怪しいと思っていたのだが、とうとう、どしゃ降りになってしまった。風も出てきて、波の勢いも強くなってきたので、念のため碇を下ろして様子を見ることに。

「ゼテギネアに行く」ということが決まってから、やはりと言うか、ヴァルバの様子がおかしい。一日中、ベッドにねっころがって天井を眺めたり、甲板へ出て海を長い時間眺めていたりして、ボケーっとしている。話しかけても、「ああ……そうだな……」と、まさにつわの空。

ゼテギネアと関係があるのだろうか？ 僕は、ヴァルバと1番長い付き合いであるリサに訊いてみることにした。

「……あいつ、詳しいことは教えてくれないんだよね」

レンドの船の船室で、最も大きな部屋（ちよつとしたバーみたいなところ）に、僕とリサはテーブルを囲んで話した。

「……たしか、イデアの砂漠で知り合っただっけ？」

「そうそう、懐かし」

と、彼女は天井を見上げて笑った。

「私がシュヴァルツたちを探す旅をしている途中、イード砂漠で出会っただよね。行き倒れてさ」

そのことを思い出しながら、リサはくすくすと笑い出した。

「今にも死にそうだったから、あいつを空間転移の魔法でアイデアまで連れて行ってやったんだよ」

その魔法を使うところを見てしまったので、ヴァルバはリサが伝説の一族の人間なんじゃないかと、疑ったという。

「まっ、そこまで隠しておくことじゃないから、あいつには教えただ」

「……だからアースとかの魔法を使うと、リサの体に障害が出るんじゃないかって心配してたんだ」

まあね、と彼女は微笑んだ。

「それを教える代わりに、ヴァルバのことも教えてもらおうと思っただけけど、あいつは断固として教えようとはしなかった。教えてくれたのは、自分の年齢と自分の出身地だけだった」

「……お前は、最初からあいつの年齢と出身地は知ってたんだ」

「……ゼテギネアのどこ出身なの？ って聞いたら、あいつ、すごい暗い顔するんだよ。いや、暗いというより厳しい顔かな」

「厳しい……？」

「もしかしたら、嫌な想い出があるのかもね。故郷に近いところに行くことによつて、その辛いものが浮かび上がってしまう……それが、きつと嫌なんだよ」

リサは小さく息を吐き、続けた。

「だけど、だからと言つて、今更ゼテギネアへ行くのを止めるわけにはいかない。嫌なことがあるからつて、私たちの最終的な目的は、果たさなければならぬ」

「……そうだな」

「今は、放っておいてやろうよ。あいつも、いい歳だ。きつと、ちゃんと心の整理をしてくれるさ」

リサは立ち上がり、棚にある飲み物を取りに行った。

心の整理、か。

自分は、リユングヴィと戦うということによって、完全に自分の考えを固めたと言える。大切な存在である空を助けるために、そして、滅ぼされそうになっているこの世界を守るために、実の弟・樹を倒さなければならぬ。それが、どれほど辛く、苦しいものなのか、僕は覚悟することができた。自分の未来を、自分の手で切り拓くためにも。

ヴァルバの決意とは、どういうものなんだろう？ あいつが、インドラと戦う理由は、僕たちと一緒に旅をする理由は、なんなんだろう。

「……なあ、リサがあいつらと戦う理由ってというのは、どうして？ 自分と僕、2つのコーヒーを、リサは持って来てくれた。」

「いきなり、どうしたの？」

ちよつと驚いた様子で、彼女はイスに座った。

「ふと、気になってさ」

「……私が、あいつらを止めたい理由……」

リサはテーブルに膝をつき、コーヒーをすすった。僕も、同じようにしてコーヒーをすすった。もう少し、砂糖を入れた方が良かったかも。

「……以前、言ったよね。私の両親は殺されたって」

リサはカップを置き、頼杖を付きながら僕を見つめた。

「……私の両親は、あいつらに殺されたんだ」

「それって……」

シュヴァルツとバルバロツサが……？

リサは答えを待たずして、小さくうなずいた。

「お父さんのお兄さんが、あの2人の父親でさ」

リサは、幼い頃の思い出を語りだした。

「あの2人は、私より10歳も年上なの。だから、もう26……27歳かな。2人は、私が小さい頃からいつも一緒に遊んでくれた。格闘術の天才だったから、森へ遊びに出かけても、不安は無かった。強かったもん」

リサの言い方には、2人のことを 兄 と慕っていたような雰囲気が含まれているようだった。もちろん、彼女の笑顔にも、それが含まれている。

「……生まれつき、2人は天才でさ。ラグナ格闘術の全技・全奥義を習得した。17歳くらいの頃で、すでに一族の中で1番強くなつてて……」

「……ちよつと質問なんだけど、ラグナ格闘術って何？」

僕は拳手して言った。目をパチクリさせたりサは、説明していなかったことに気が付き、苦笑した。

「えつと、ラグナロク一族に伝わる護身・殺人術のことよ。武器を持たなくても、敵と戦えるようになっていうことで編み出されたものらしいけど。……体内の元素を利用して、ソリッドプロテクトマジックシールドを一時的に強化、攻撃力・スピードを増大させて、相手を粉碎する」

殺人術……恐ろしい。たしかに、シュヴァルツのパンチは、一撃で僕のあばら骨を3本粉碎したもんね……。

「私は6割くらいしか習得できなかった。あの2人のように、体格に恵まれているわけじゃなかったし……」

と、彼女は付け加えた。6割って……十分すごいのではないだろうか。リサは女なわけだし。

「2人は魔法の鍛錬も欠かさず、双方も突出した人物になった。そして……6年前のあの日……」

「……いい？ リリーナ。あなたは、ここに隠れているのよ」

リリーナ リサの母親は木造建築の家屋の、ある場所にリリーナを入れた。

「お母さん……でも……」

「私たちが戻るまで、絶対に出たちゃダメよ？ わかった？」

泣きそうになっている、まだ10歳の少女の頭を、母親は優しく撫でた。

「大丈夫……。始祖サリア様が私たちを御守りしてくれるからね？ 心配しないでいいんだから」

母親は優しく微笑みかけた。自分の不安に気付かれないよう、娘を安心させるために。

「……うん」

リリーナは涙を拭きながらうなずいた。それを確認すると、母親はリリーナがいる箱にふたを置いた。そして炎が上がる外を睨み、走って行った。

リリーナは何が起こっているのか、少しだけわかっていた。

10分……いや、まだそこまで経っていない。ほんの数分前に、誰かの叫び声が響き渡った。それを聞き、リリーナの父親は厳しい顔をしながら外へ出て行った。何が起こっているのかわからないリリーナと、彼女の母親はある言葉を耳にする。

「シュヴァルツとバルバロッサが……！！」

男性の大声が轟いた。そして、2人は悟った。「この騒ぎの原因は、あの2人……」と。リリーナの母親はさっきの叫び声のこともあり、2人が何をしたのかを悟った。だが、リリーナだけはまだその2人が何かをしたという、漠然としたことしかわかっていなかった。いや、わかっていながらも、それを実際に見たわけではないから、違うのかもしれないと、自分に言い聞かせていたのだ。

再び、誰かの叫び声が木霊した。それを聞き、リリーナの母親は彼女を隠れさせ、外へと向かったのだ。

暗い、大きな箱の中でリリーナは険しい顔をしながら、プルプルと震えていた。

なぜか怖い。どうしてかわからないけれど、恐ろしさが体に巻きついている。その恐ろしさに連動して、原因不明の寒さも感じる。

「ギヤアアアアアア！！！！」

断末魔の叫びが、この村落を覆う。否応にも、それはリリーナの耳に届いてしまう。

リリーナはカタカタと、地震の初期微動によって震える家屋のようになってしまう。先ほどの断末魔の叫び声により、彼女を覆っている恐怖と寒さが増してきたからだ。

再び、誰かの叫び声が耳に入ってきた。リリーナはいよいよ怖くなり、耳をふさいで、怖い何かが起こっていることを忘れるために、今日のことを思い返した。

今日はお兄ちゃんたちと山へ行った。設置しておいた木の箱に、

スズメが巣を作ったかどうかを確かめるためだ。1週間ほど前に自分で木の箱を作り、お兄ちゃんたちに肩車をしてもらい、木の上部にそれを付けた。木の箱には穴が開いており、スズメが入れるようにしている。この季節は、スズメや他の鳥たちが寒い地域からやってくる。リリーナは今か今かと、スズメが巣を作るのを待ちわびたが、今日見てみてもスズメは来ていなかった。

バルバロツサは、落ち込むリリーナの頭を優しく撫でてくれた。「そのうち、来るって。せやから、泣きそうな顔すんな」

「こういうのは、気長に待たんとな。リリーナ、忍耐が大事やで」シュヴァルツはそう言うと、バルバロツサと共に笑顔を向けてくれた。その笑顔に、リリーナもつられて笑顔になってしまった。この2人の笑顔には、他人を惹き付ける。一つのパーソナリティなのかもしれない。

それから、リヴェル川へ行って……

ドゴオオオ

炎が爆発する音により、リリーナは記憶の中から現実へ戻ってきた。そして、家屋が崩れていく音もそれに続いて響いてきた。

何が起きているのだろう。

小さな好奇心が、リリーナの心の中にできた。

外で、何が起きているのだろう。お兄ちゃんたちが何かをしたのだろうか。あるいは、火事でも起きたのだろうか。窓から見た外には、闇夜を照らす真っ赤な炎がメラメラと揺れ動いていた。

「帰ってくるまで、絶対に出ちゃダメよ？」

好奇心の裏側で、母が言った言葉が脳裏に浮かぶ。帰ってくるまで……？ それは、いつまでなのだろう。もし、明日まで帰ってこないとしたら、ずっとこの狭い箱の中にいなければならぬのだろうか。

それは嫌だった。暖かいベッドで眠りたいし、トイレにも行きたい。何より、外で何が起きているのかを……知りたい。

リリーナは、音を立てないようにゆっくりとふたを開けた。真っ暗だった箱の中に、赤みがかつた光が少しだけ注いできた。恐る恐る、顔を覗かせる。窓の外に大きな火柱たちが昇っていた。

箱から右足を出し、次に左足を出し、辺りを見渡す。いつもの自宅。けれど、お父さんもお母さんもない。

外から人が騒いでいるような声が、ほんの少しだけ聞こえてくる。時に、爆音が耳を襲ってくる。……爆弾でも使っているのだろうか。恐怖と好奇心が交叉しながら、リリーナは足を進ませた。一步一步進むたびに、木造の床がギシギシと、音を立てる。

出入り口である扉までまで辿り着き、リリーナは息を呑んだ。心臓の音が聞こえる。心拍数が高い。

怖い。怖いけれど……好奇心がそれを乗り越えている。

リリーナは、扉をゆっくりと開けた。

扉を開けた瞬間、熱波が襲って来た。火傷をするほどではないが、息苦しいくらいだった。

口に手を当て、煙たさを減少させながら辺りを見渡す。自分の家の周りには家はあるが、ほとんどが崩壊している。崩壊しているガラクタの中で、炎が猛威を振るっていた。パキパキと、木が焼かれる音が聞こえてくる。すでに黒く焦げ、炭となっているものもあった。

「がああー!!」  
「キヤアアア!!」

男性と、女性の叫び声が聞こえた。リリーナは、声が聞こえた方向に顔を向けた。

あつちは、長老……おじいちゃんの家だ。

リリーナは走り出したかった。けれど、そんな勇氣は無かった。やっぱり、怖い。この闇夜とそれを焦がさんばかりの炎たち。そして誰かの叫び声。何が起きているのか、幼いリリーナでは分かるはずもない。そのために、わからないことによる恐怖心が出てくる。だが、それと同時に好奇心が湧いてくる。

大きく息を吐き、リリーナはおじいちゃんの家へと向かった。普通に歩く速さで。

おじいちゃんの家も他の家と同じように、炎が包み込んでいた。その炎の前で、何人かの人影が見えた。素早く、動いている。誰だろう……。

ゆっくりと、足を進ませ、そこにいるのが誰なのか、リリーナは理解した。

お兄ちゃんだ。

それに、お父さんと伯父さんがいた。何かを叫びながら、4人は動き回っていた。その周りに、何かが倒れているのが見えた。顔をこっちに向けていないし、少し暗いために、誰かわからない。だけど、わかったことがあった。

その人たちの周りに、血が流れていた。

リリーナは、そこで何が起きているのか、少しずつ理解し始

めていた。

……お母さん？

リリーナは、倒れている中の一人の服装を見て、わかった。あれは、私のお母さんだ。

どうして？

どうして、血を流しているの？

リリーナにはわからなかった。だけど、早く行かなくちゃということにはわかった。疑念と恐怖で震える足を動かし、倒れている母の元へと駆け寄る。

「お母さん！」

母を呼びながら、リリーナはかがんだ。

「お母さん！ お母さん！」

と、何度も母を呼ぶ。そして、ようやく母は目を開け、リリーナの顔を見た。

「リリーナ……どうして……待っていないさ……言った

……じゃない……」

母の言葉は切れ切れだった。口から血が垂れていた。今、気が付いた。母の体には、多くの傷があったのだ。服は裂け、皮膚も裂け、真っ赤な血が流れていた。誰がこんなことを……。

だが、自分の周りの様子を理解すれば、容易にわかることだった。

「早く……逃げ……て……！」

「でも、お母さん、傷がひどいよ！ 早く、手当てをしないと！」  
リリーナは辺り見渡した。その時、目に入ってしまった。

「死ねえ！ 獣牙閃！！」

お兄ちゃん シュヴァルツの声が聞こえた。そして、その拳が誰かを貫いた。

「が……は……っ……!!」

体を貫かれたのは、父だった。シュヴァルツの左腕が、父の胴体を貫いていた。

「一瞬の油断が命取りやったなあ!!」

「グツ…… シュヴァル、ツ……!!」

父の体から、ゆっくりとシュヴァルツの腕が抜かれた。せきを切ったかのように、父の腹部から、大量の血液が流れ出た。

お父……さん……。

「レオン!! …… シュヴァルツ、貴様あ!!」

伯父がそこへ行こうとした。しかし、その前にバルバロッサが立ちただかった。

「行かすかあ!!」

「クツ……!!」

伯父 ヴァロンは、右手を引いた。

「大地を駆ける、魔狼の咆哮! 奥義、マシヨウバケリヨウハ魔翔爆霊波!!」

ヴァロンの手から繰り出された、いくつもの真つ黒な衝撃波がバルバロッサを襲う。しかし、それを彼は瞬間移動のような動きで避け、伯父の背後に回った。

「なっ……!!」

「セシ閃!!」  
「天空に浮かぶ、死の星よ その軌跡を刻め! 奥義、シテンメツエイ死天滅影

バルバロツサは素早い連撃を繰り出し、ヴァロンを襲った。軽く当てただけなのに、彼の体中の穴という穴から、まるで火山が噴火するかのよう血が噴き出した。

「あ……………」  
伯父はそのまま、地面へ倒れた。そして、まったく動かなくなつた。

「…………最強のラグナロク戦士、か。所詮、雑魚やったか」  
バルバロツサは吐き捨てるように言った。

「兄上……………」  
体を貫かれた父は朦朧とする意識の中、ヴァロンを呼んだ。

「バルバロツサ…………貴様ら、己の父を殺すとは…………！ それでも、誇り高きラグナロクの戦士か……………」

父の言葉に、2人は笑い出した。

「何が誇り高きラグナロクの戦士やねん。反吐が出るわ」

「…………その口を、命もろとも潰してくれるわい…………」

シュヴァルツはもう片方の拳に、光を集結させた。

「神に抗いし愚かな魂よ、今こそ混沌の夢を希わん！ 塵になれ！  
パニツシュ…………」

放たれた光は、父の体を覆った。

「グアアアア……………」

光は父を貫き、巨大な発光を引き起こし、消えた。父と共に。

「お父さん…………」

リリーナは、気付かぬうちに叫んでいた。

少女の声に、シュヴァルツとバルバロツサは、ゆっくりと彼女の方向へ顔を向けた。

「……………リリーナ……………」

2人は、少しだけ驚いた顔をしていた。そして、シュヴァルツがゆっくりと、近付いてきた。腕に、父の血を付けたままで。

リリーナは、震えたまま動くことができなかった。いつもの2人ならば、すぐに名前を呼ぶ。だが、今は雰囲気がまったく違う。

この惨状は……………お兄ちゃんたちがやったことなんだ。おじいちゃんも、お父さんやお母さんも、伯父さんたちも、この村の人たちも。

「……………」

シュヴァルツは無口なまま、リリーナに近付いてゆく。恐ろしさのあまり、リリーナは今にも泣き出してしまいそうだった。

その様子に気が付いたリリーナの母親は、傷付いた体に鞭を打ち、リリーナの前に両手を広げて立ちはだかった。

「シュヴァルツ……………！」

シュヴァルツはリリーナの母の前に立ち、2人を見下ろした。シュヴァルツは、190cmを超える巨漢である。燃え上がる家屋を背にしてたつ彼の姿から、強大な威圧感と恐怖が流れてきた。

「お願い……………！ この子は……………この子だけは……………！ 私の、代わりに……………」

リリーナの母親は絶え絶えの声で言うと、両手で娘を抱きしめた。体を張って、守ろうとしているのだ。それを見ても、シュヴァルツは何も言わない。口を開かず、ただ2人を見つめていた。そして、ようやく瞬きをして口を開いた。

「……………叔母上、ワイらのここでの目的は、終わった。聖杯は……………手に入れた」

リリーナの母親は何も言わず、彼を睨みつけていた。

「……………リリーナに危害を加える気は、あらへん」

「なら……………この子を逃がして。私を……………殺してもいいから……………」

リリーナは今にも泣き出しそうだった。けど、泣けなかった。理由はわからない。ただただ、母の温もりが心地よかった。

「……瀕死の相手を嬲り殺すほど、ワイらは残酷やない」

「これだけのことを……して……おきながら、残酷じゃ……ないですって……!?!?」

母は怒りで大きく震えていた。今にも、彼に飛び掛りそうだった。

「んなことは、どうでもええ」

シュヴァルツは、手をかざした。

「シュヴァルツ、何するつもりや!?!?」

バルバロツサが叫ぶ。リリーナの母親は、娘を抱きしめる力をもつと強くした。娘が、離れないようにしようと。危害を加えられまいと。

「……殺すわけやない……」

シュヴァルツがかざした掌に、緑色の光たちがこぞって集まってくる。

「……深淵に眠りし、妖精の歌声……我が祈りとなり、次元の狭間を彷徨う哀れな魂を導き給え……遥かなる空の果てへ　リ・アース」

シュヴァルツの掌から放たれた光は、2人を包み出した。

「お兄……ちゃん……」

リリーナは光に包まれ、視界から消えようとしているシュヴァルツを呼んだ。

「……リリーナ……さよならや。元気でな……」

シュヴァルツの顔は、切なさを伴ったものだった。リリーナの瞳に、その顔がしっかりと焼きついた。

緑の光はいつそう力を増し、2人を完全に包み、そのまま天空へと上り始め、大きな発光を放ち、どこかへ消えていった。

「……………」

シュヴァルツは、上空を長い間、見つめていた。

「……行くで。もう、聖杯は手に入れたんやからな」

「……………わーっとる」

「……………」

リサの目には、薄っすらと涙が浮かんでいた。

「それで……………リサのお母さんは？」

「……………飛ばされた場所で、すぐに死んじゃった。たぶん、空間転移の魔法に肉体が耐えられなかったんだと思う」

リサは、ルテティアの中東部にある山に飛ばされていたらしい。母の遺言で、王都へと向かうことにした。行くまでの間に獣に襲われたり、崖から落ちたりと、ひどい怪我をってしまった。だから以前、宰相のレオポルトさんはやって来たりサの体には、ひどい傷があったと言っていたんだ。

「……………そして、私はあの2人への……………復讐を誓った」

「コーヒートをテーブルに置き、リサは言った。

「一族のみんなは……………全員、あの2人に殺された。聖杯を奪うため……………自分たちの仇となる者たちを予め……………」

同じ一族ならば、自分たちの能力に匹敵するやもしれない。危険な因子を、早々に潰しておいたってことか……………。

「聖杯は……お前たちのところにあつたのか？」

そう訊ねると、彼女は小さくうなずいた。

「……ラグナロクが世俗から離れ、二千年もの長い間、隠れるように住んでいたのは……聖杯グラールを隠し守るため……」

一族の中から裏切り者が現れるとは、誰も予想だにしなかったと……リサは付け加えた。それと同時に、彼女は歯を食いしばった。

「あの2人は、絶対に許さない！ 私の運命を捻じ曲げ、関係の無い人たちの命をも奪う、あの2人を……！」  
握り締める拳に、リサは力を入れた。

「……リサは、復讐のために今まで戦ってきたのか？」

僕は落ち着いた声で訊ねた。

「……最初は、そうだった。憎しみだけが、私を突き動かした。壊滅させられた故郷にあつた、格闘術の書物を死ぬほど読んで、必死に習得した。魔法も禁呪も……聖魔術も、覚えた」

ラグナロクでは、女性はラグナ流格闘術は習得してはならないらしい。体内元素を無理やり肉体に付加するため、体をかなり酷使してしまう。それを、リサは憎しみという力を借りて、乗り越えた。

「……だけど」

リサの声は震えていた。さっきまでの怒りはどこにいったのか、いつの間にか彼女は辛い表情だった。

「本当は、憎んでなんかいない。憎んでなんか、ないんだ」

顔を振るリサ。それと同時に、後ろで結っている金髪の髪が揺れ動く。

「私にとっては……優しくて、頼りになる兄のような存在だった。小さい頃から私の面倒を見てくれて、遊び相手になってくれて、山

で迷った時にも……日が暮れるまで、私を探してくれた。帰る時には、いつも肩車をしてくれてさ……」

想い出を語る時はうれしくも、やはり辛いのか……声を震わしている。

「だから……あの2人がどんなことをしても、憎めない。でも、2人がしてきたことは、許されることじゃない。あなたの弟を唆したのも、きつと2人の仕業だ。空ちゃんをさらい、あんなふうにしたのも、アンナのお姉さんを殺したのも、あの2人なんだ。レンドの仲間だったブリアンを殺したのも、2人だ。みんなは、あの2人を憎んでる。だから、私だけがあの2人を憎まないわけにはいかない。優しいころの面影をいつまでも追いかけては……2人を倒せない」  
俯いたまま、彼女はテーブルを叩いた。

「憎まなきゃ！ 憎まなきゃならないの！ じゃないと、私は戦えない……。お母さんやお父さん……一族のみんなに、申し訳ない……」

そして、テーブルに彼女の涙が落ちて行った。

憎めないと、戦えない。いや、リサの場合はそうじゃない。

幼い頃、自分の兄同然だった2人が、その幻影を残して各地で暗躍していた。多くの命も奪った。この世界を危険にさらしているのも、あの2人が原因だ。

僕も、2人を許すことができない。けど……

「……シュヴァルツとバルバロッサにも、信念があるんだよ。僕たちと同じように」

「信念……？」

彼女は顔を上げた。まだ、そのほほに涙が残っている。

「……あいつらは、言っていたよな。遙かなる未来に、この星は人間によって滅ぼされるって。あいつらは、何らかの方法でこの星の未来を知って、滅亡の未来から救おうとしている。それが、どんな方法だとしても」

「……………」

「だから、僕たちはあいつらと闘う前に、話をちゃんと聞かないといけないんだ」

「……？」

いつもの強い少女ではなく、まるで……泣きじゃくった後の空や海のように、リサは僕を見つめる。

「あいつらが世界中の命を滅ぼすという、とんでもないことをしようとするには、それを決心した理由がある。滅亡の未来をどうして知ったのか。どうして、他の方法を選ばなかったのか。僕たちは、闘う前にそれを確かめなくちゃならない。それを……僕たちは知る権利がある。もしかしたら……本当に、もしかしたら、僕たちは分かり合えるかもしれないしさ」

小さい希望。絶対に分かり合えないのかもしれない。けど、リサの話を聞くにシュヴァルツとバルバロッサは昔から、残酷な人間じゃなかった。樹も、残酷な奴ではなかった。3人と、むしろ優しくかった。人を思いやれる人間だったんだ。それがあいつの理想に繋がるには、星を救いたいということ以上に、何かがあるはず。僕は、知りたい。

「……憎まないといけないみたいに言うなよ」

僕は微笑んだ。

「お前が戦う理由……それは、2人を止めたいってこと。それでいいじゃないか。大切な人が間違ったことをしていると思ったのなら……止めなきや」

「空……」

それは、自分にも言えることだ。

「……じゃあ、私は……2人を憎まなくても、いいのかな……？」  
「ああ。きつと、ね。シュヴァルツとバルバロッサが、リサにとつて大事な存在だったなら……」

「……」

大事な人が、大事な人を殺した。でも、憎めない。だけど、憎まないと戦えない。きつと、リサはそうやって悩みながら、2人を探し

たんだろつ。そして、ようやく見つけて……どうすればいいのか、またわからなくなっただったんだ。

「ありがとう……空……」

「ハハ、らしくないな」

「……そうだね」

と、彼女はまぶたに付いた雫を手で拭い、笑顔になった。

人が生きていくのに、何らかの糧となるものがある。誰かと一緒にいたい、誰かを守りたい、世界が好き、世界が憎い……。

糧は、千差万別。考え方も、千差万別。

きっと、ヴァルバにもあるんだろう。僕たちと一緒に旅をする、

理由。奴らを止めようとする、その決意が……。

だが、物語の中には嫌なことが起きる。

それは、きっと良いことよりも多い。

できればそこから逃げたい。けど、現実がそれを許してはくれない。

運命に抗う

答えは、必ずしも期待するものではない。



## 51章：武器と戦艦の都市 アルツヴァック

2月20日。雪がちらつく中、僕たち一行は、ようやく工業都市アルツヴァックへ到着した。

アルツヴァックの港には、多くの船が停泊していた。その大部分が、黒い鋼鉄を身に付けた、巨大な船だった。戦争用の船なのだろうが、砲台のようなものがいくつも備え付けられていた。

さすが工業都市……想像以上に広い。雪が降り、寒いとはいえ、人々は切磋琢磨に働いている。街道の両脇に在る建物のほとんどが工場であり、それらの全てが正面玄関　つまり、現代で言えばシヤッターを開けているような状況で、外から内部で何をしているのかもろ見えだ。

工場の屋根にある煙突のようなものから、黒煙がもくもくと、上空の少し灰色がかった雲に延びていく。そして、そこかしこから鉄製のものを叩く音が聴こえてくる。ある時はリズムカルに、ある時は乱雑に鳴り響く。これこそが、武器と戦艦の都市と呼ばれる所以であり、この都市に暮らす人々の生活する音なのだろう。

都市には所々、数階建ての住居がある。ビルほどとは言えないが、紺色のレンガでできていて、なかなか立派だ。この都市で働いている人たちは、そういった集合住宅に住んでいるらしく、朝早くから夜遅くまで仕事をするのだとか。

「聞いた話だが、アルツヴァックは2大陸の都市の中で、最も鉄を輸出している都市らしいぜ」

こう言ったのは、レンドだ。アルツヴァックの南に、多くの鉄鉱石が取れる山があつて、その山が鉄鉱石採掘量1番なのだとか。どこの世界でも、鉄はかなり使用頻度が高いのだろう。

「……ところで、アルツヴァックに来たのはいいけど、これからどうすればいいのさ？」

通では寒いので、目に付いた喫茶店で寒さを凌ぎながら、僕はデルゲンに訊ねた。

「アルツヴァック総督のゴルフエン伯爵に頼めばいいと思うがな。

彼は、工業政務担当の大臣の一人だからな。装甲船を貸したり、売ることを許可するのも彼の承諾が必要だったと思う」

「ゴルフエン伯爵ねえ……ケチな性格だって聞いたけど」

イスの背もたれにどっかりと背中をかけ、頭の後ろで手を組んでいるリサ。

「そうなのか？」

「さあ？ あんたの方が知っているんじゃないの？」

リサはそう、ヴァルバに問い返した。ヴァルバは少し困った顔をしながら、頭をかきむしった。

「……たしかに、伯爵はケチだと聞いたな。ケチというよりも、貪欲と言ったほうがいいだろう。伯爵は昔は、貧相な下級貴族だった。それゆえか、権力欲や物欲には限りがないところが見える。そういう性格の人間は決まって、他人には自分のものをあげようとしな。い。たとえ、その人が貧しくてもな」

「なるほど、小さい頃に苦労したもんだから、今はその跳ね返りってことか？」

デルゲンは天井を見上げていた。

「……じゃあ、頼まないほうがいいのかもしれないな。ネチネチ文句を言ったり、あるいは無理難題を吹っかけられそうだし」

温かいお茶をすすりながら、僕は言った。

「だな。じゃあ、どうするよ？ これから」

レンドはため息をつきながら、深くイスに腰掛けた。

「……お金を払って、装甲船を買っつかないんじゃないですか？」  
アンナがそう言うと、デルゲンはばつが悪そうな顔をしながら、言った。

「買うにしても、ゼテギネアの強固な船は基本的に軍船で、それらを一般人が買うことは法律上許されていないんだよ」

「……それを早く言ってくれないと」

僕がそう言っていると、面目ない、とデルゲンは苦笑いしていた。

「うーん、どうしよう。結局、どうすることもできないのか？」

みんなは頭を抱え、悩み始めた。

「……一つ、方法がある」

ヴァルバが沈黙を突き破った。

「？ どういう方法？」

僕はすぐに訊き返した。

「皇帝に会うっていうことだ」

「皇帝？ どうして？」

わざわざ皇帝に頼むのだろうか？ ……まさか、そんな安易な…。

「彼は、誰にでも謁見を許す人だ。若いため、まだまだ知らないことが多く、他国の人間の言葉にも耳を貸すはずだ」

「……そうなの？」

「なんだよ、その疑り深い目は？」

ヴァルバは細目で僕を見た。僕も、同じように細目で彼を見ていた。

「謁見するにしても、正面から行くつもり？」

リサも同じように、疑いを含んだ目でヴァルバを見ていた。

「いや、たぶん、門前払いされるのがオチだろう」

「じゃあ、どうするって言うのさ？」

「……帝城に忍び込むのさ」

「忍び込む？」

僕たちは一斉に、顔をかしげた。

「おいおい、そんなことがうまくいくとは思えねえぞ？ それじゃ

あ、ただの泥棒と同じじゃねえか」

海賊のレンドにそう言われちゃ、元も子もないが。

「そこところは任しておけ。俺に、案がある」

ヴァルバは自分の頭を指でつつきながら、「コ」「コ」っていうこと  
表している。

「……案？」

リサは眉をしかめた。

「ああ。実は、俺はゼテギネアの宰相と知り合いなんだ」

一同が、驚いた。

「……あなたが、ゼテギネア宰相と知り合い……？」

「ゼテギネア宰相って、皇帝の叔父だったよな？ 先代皇帝が急逝  
した後、帝国の全権を握り、今は皇帝のサポートとして動いている  
と聞いたが……」

デルゲンは思い出すように言った。

「宰相とは皇帝の傍で彼を補佐し、政務を担当する最高位の職務。

皇帝に謁見することは可能だ。だが、俺は訳あって帝都の人間に自  
分を知られてはならない。もちろん、朝廷に関わる人にもな」

「だから、正面から入るのではなく、忍び込むってこと？」

ヴァルバはリサの方に向き直り、うなずいた。

「うまく帝城に忍び込み、宰相に会うことさえできれば、皇帝との  
謁見が叶うはずだ」

「なるほど……けど、うまくいくのか？」

僕がそう言つと、ヴァルバはひげをさすりながら、「ニコツと笑っ  
た。

「ああ、大丈夫だ。俺を信じろ、ソラ」

「……………」

「なんだよ。信じれないのか？」

何度も瞬きをしている僕を見て、ヴァルバは眉を八の字に曲げて言った。

「いや、そういうわけじゃないんだけど……」

なんだか、変な感じだ。もやもやした変な感覚が、心に纏わり付いているようだ。ヴァルバは信頼できる仲間。この旅で、最も長い付き合いの仲間だ。疑いたくはないんだが……どうも怪しい。それは、否めない。

だが、今のところ、装甲船を手に入れる方法はこれしかない模様。樹たちを追いかけるためにも、空を救うためにも……ここで、時間を食っている暇はない。

「どうも、怪しいね」

リサがギクツとするような言葉を放った。みんなが、リサの方へ振り向いた。彼女は足を組んだまま、ヴァルバを睨んでいるようにも見える表情だった。

「ゼテギネア出身だとは聞いてたけど、ゼテギネア宰相と知り合いというのは、どうも怪しい。……ゼテギネア宰相と言えば、『ベオウルフ』ヴォルガンフ『ペンドラゴン』……先帝亡き後、幼い現皇帝に代わって政務を執り行い、多くの反逆者を処罰、そして国を見事に統制したほどの人物。あのレオポルトを超える程って聞いた」

ソフィアで死んでしまった、ルテティア宰相レオポルトさん……

彼は、30代でありながらも王国の最高職に就いていた。

「だけど、まったく人前に姿を見せず、彼の姿を見たのは、皇族の者だけという噂が流れている。……そんな人物と、ただの『旅人風

情』が知り合いだなんて、私にはどうも信じられないんだけどね」  
ゼテギネア宰相のことはよく知らないけれど、リサの言うことが  
本当なら、たしかに怪しい。

みんなは、ヴァルバに視線を向けた。彼は特に表情も変えず、リ  
サの言葉を聞いている。

「それに、もしあんたが宰相と知り合いだったとしても、どうして  
それを今言うの？ それだけ大事なことだったら、もっと早く言わ  
なきゃならないでしょ？ 樹たちが、浮遊大陸を復活させるのも時  
間の問題だっというのに」

「……………」  
リサの厳しい質問に、ヴァルバは口を閉ざした。だが、困ってい  
る様子でもなかった。

「………… お前の言うとおり、怪しまれるのはしょうがない。秘密にし  
ていたことは謝る。だが、俺にとってはあまり知られて欲しくない  
ことだったんだ。お前にだってあるだろ？ 他人に知られたくない  
ことというのが」

「……………」  
誰にも、知られたくないことはある。リサにとって言えば、シユ  
ヴァルツとバルバロッサによる、7年前の惨劇。リサは話してくれ  
たが、ヴァルバは違う。彼にとって、まだ癒えぬ傷痕なのかもしれ  
ない。

「………… 信じてもらわなくてもいい。だが、俺の方法以外装甲船を手  
に入れる方法はない。俺を信じてもらわないと、グラン大陸へ行く  
ことはできないんだぞ？」

その時、ヴァルバはいつもと違う顔 時折見せる、いつものヴ  
アルバではない表情をしていた。一瞬、ぞくりとした。

「………… 私たちを脅すつもり？」

「そういうことを言っているわけじゃない。俺を信じるか、信じな

いか。……それだけだ」

「信じるか、信じないか？ それを、脅しじゃなくて何だつて言うの？ まるで選択肢は2つしかなく、信じなければ空ちゃんを助けられないようなことを言ってるさ」

「……………」

落ち着いた声とは裏腹に、リサはヴァルバを睨みつけ、瞬きもせずヴァルバを見つめた。それは、ヴァルバとて同じだった。あまりにもピリピリした様子だったので、デルゲンが仲介に入った。

「わかった。じゃあ、ヴァルバの言うとおりにしよう。な？」

「……………デルゲン、信じるつもりなの？」

ギロツと、リサは横目でデルゲンを見た。思わず、彼は唾を飲み込んでしまっていた。

「お前の言いたいことはわかる。だが、お前は言ったじゃないか。時間の問題だと。なら、ここで仲間を疑っている暇は無いはずだ。

ここは、ヴァルバを信じよう。それしか、今のところ方法が無いんだから」

宥めようとする彼の言葉に、リサは大きくも長い溜息を漏らした。

「……………みんながそれでいいなら、私は何も言わない」

そう言つと、リサはそっぽを向いてしまった。相当、イラついてるようだ。

「俺は別にいいと思うぜ？ ……たぶん、大丈夫だろ」

レンドは苦笑しながら言った。

「私も、ヴァルバさんを信じます」

アンナだけが、ちゃんと信じている様子だった。それに続くように、空も小さくうなずいていた。

「……………それしか方法が無いなら、しょうがないよ。僕も、賛成だ」  
僕はリサの方へ振り向いた。

「リサ、疑う気持ちも分からなくもないけど、ヴァルバだぜ？ 信じようよ。僕たちは、仲間じゃないか」

リサはチラツと横目で僕を見て、再び視線をそらした。そして、

再び溜息。

「……………あんたたちがそう言うなら、いいって言ってんじゃん。……………気に食わないけどさ」

冷や汗が出ている。リサの後ろに浮かぶ、あの黒い影……………怒りの影だよ。触らぬ神に祟り無しと言うが、触っても触らなくても、祟りがありそうで怖い。すると、ギロツとリサに睨まれてしまった。

どうして、女性は勘が鋭いのだろうか……………？

「よっしゃ。それじゃ早速、準備に取り掛かるう。デルゲン、ちょっと付き合ってくれ」

ヴァルバは一転、はつらつとした様子になり、しゃべり出した。誘われたデルゲンは戸惑いながらも、ヴァルバと共に、雪がちらつく町中へと消えて行った。「さむっ！！」という、ヴァルバの声が聞こえた。

「うーん、なんなんだ？ あいつ」

窓から2人の姿が見えなくなったところで、レンドは頭をかしげながらに言った。

「いつもと、様子が違いましたね……………」

空が小さな声で言った。

「……………どうしたんだろうな、あいつ」

「ふん、考えても無駄だよ。どうせ、教えてはくれないんだからさ」怒っている。どうにかして宥めないと、いつか僕にとばかりがるに違いない。僕は一度咳をして喉を整えて、彼女に言った。

「あ、あのさ、リサ。あいつにも考えがあるんだよ、きっと。今まで、一緒に旅して来た仲間だ。僕たちがあいつを信じなくて、誰が信じるって言うんだよ？」

そう言うと、リサはテーブルに肘をつき、僕の方に顔を出した。

「あんたね……………どう考えても怪しいでしょ？ いきなり、自分はぜ

テギネア出身だとか、宰相の知り合いだとか暴露してさ。いい？  
たとえ、仲間であろうとも、物事は疑うところから始めなきゃなら  
ないの。この世に、絶対 と言えるようなことは無いんだから」  
リサは僕を睨みながら言った。あまりの迫力に、僕は視線をそら  
してしまった。

「そ、そりゃあそうだろうけど……大丈夫だって、きつと」

「その確信は、どこから来るのさ？」

「そ、それは……勘？」

そう言った瞬間、リサのアップパーカットが僕のあごにヒット。

「答えになつてない！」

「い、いつてえな！ 何も殴ることねえだろ！？」

「うっさい！」

そう怒鳴り、リサは腕を組んで窓の外へ視線を向けた。

「とにかく、私は忠告したからね。何があつても、もう知らないか  
らな！」

最後に「フン！！」と付け加え、それからリサは一言もしゃべら  
なくなつてしまった。

「ハハハ、リサお嬢さんはご立腹だな」

レンドは笑いながら僕に近付いて来た。いつものリサなら、ここ  
で飛び蹴りでもレンドに食らわしそうなものだが、怒りがあまりに  
も大きいため、ちよつとしたことでは何もしないようだ。

「ホラ、金やるから、服屋にでも行けよ」

レンドが差し出した掌に、金貨が1、2……4枚あった。ちなみ  
に、金貨1枚で1000セルトくらいだ。

「？ なんていきなり？」

僕は立ち上がっているレンドを見上げた。

「いいからいいから」

「……服は間に合つてるよ？」

「馬鹿、お前じゃねえよ」

レンドは軽く僕の頭をはたいた。

「じゃあ、誰って言うのさ」

不満顔で、僕は言った。すると、

「あのなあ……んっ!!」

レンドは誰かを指差した。その方向に目をやると、空だった。彼女は頭の上にクエスチョンマークを浮かべ、頭をかしげていた。

「空がどうかしたのか？」

「空ちゃんの服装、見てみる。寒そうだろうが」

あっ……たしかに。聖帝中央庁の塔のときの服装のまま……白いドレスのままだった。

「つまり、空の服を買ってあげると？」

そう言うと、レンドはうなずいた。

「……だけど、女の服を僕が選ぶのか？」

僕は彼だけに聞こえるように、小さい声で言った。

「当たり前だろ。お前以外に、誰が選んであげるって言うんだ？」

「いや、女性の服装なら女性がわかるわけだし……アンナカリサがいいんじゃないかと……」

「お前な……せつかく愛しい女と再会したんだ。それくらい、お前が選んでやれっつての！」

再び、レンドが僕の頭をはたいた。今度はちよつと痛い。

「い、愛しい女って……恥ずかしいだろ!？」

「何がだ？ 本当なんだから照れるな！」

「くっ……! (レンドのくせに……)」

僕は少し照れながら、空のところへ行った。空は、まだ何かわかっていない様子だった。

「空、あなさ」

僕は頭をかきながら尋ねた。

「なんですか？」

空は普通の顔を僕に向けた。

うっ……。僕はたじろいだ。

この顔に、弱いのだ。

「？ どうしたんですか？」

空は僕の顔を覗き込んだ。僕は息を整え、続けた。

「あ……つと、服を買いに行かないか？」

「服……ですか？」

「ゼテギネアは今の時期、雪が降るほど寒いし、お前もその格好じゃあ寒いだろ？ だからさ、防寒着でも一緒に買いに行かないかって思ったんだけど……」

空は目をぱちくりさせていた。

「まあ、お前がいいならだけど……女性の服を選ぶのに、男の僕は役に立たないだろうし……」

と、僕はうまく視線を合わせられないまま、頭をかいていた。

「い、いえ、お願いします。一緒に行きましょう」

「へ？ いいの？」

「もちろんですよ」

「そ、そっか。じゃ、行こうか」

「はい」

空はニコツと微笑んだ。なぜか僕は照れてしまい、顔を逸らしてしまった。いや、誰でも照れるだろ。好きな子の笑顔って。

そして、僕と空は喫茶店を出た。外では、まだ雪がちらついていた。積もるほどではないが。

「……あんたも、優しいところあるじゃない」

「おいおい、いつもは無いって言うのか？」

レンドがそう言うと、リサは苦笑した。

「ハハ、そうじゃないよ。……空といることで、空ちゃんの記憶が少しでも元に戻ればいいんだけどね……」

憂鬱そうな顔で、彼女は外の通を歩いて行く二人に目をやった。

「……まあ、お似合い……かね。」

「大丈夫だろ、そのところは」

自分らしくもないことを考えていたリサは、レンドの言葉で何度か瞬きをした。

「……どうしてそう言えるのさ？」

そう彼女が訊ねると、彼はさっきまでソラが座っていたイスに腰掛けた。

「たとえ記憶を失ったとしても、想いは残ってるはずだろ？ たぶん、空ちゃんの中に、もやもやしたものがあるはずさ。まだ、それが何かわかっていないと思うけどな」

まるで遊ぶ子供たちを見るかのような表情で、彼は言った。

「ふ〜ん……なるほど。ま、あとは空次第だね」

「ソラ、か。たしかにな……」

二人は同時に、小さくため息を漏らした。

「……どういうことですか？」

アンナは頭をかしげていた。

「あいつが、どういう風に捉えてるかってことだよ」

リサは手を広げて言った。しかし、アンナの顔からして、理解できていないようだった。

「空の行動によっては、空ちゃんの記憶が早く蘇るかもしれないけど、空は怖がってる」

「怖がってるって……何がです？」

すでに窓から見えないところまで行った二人の足跡を見つめるかのように、アンナもリサと同じように外に目をやった。

「……これ以上は憶測で言うようなもんだから、やめとく。本人たちがいなくて勝手に分析したって、気分がいいもんじゃないし」

「えっ？」

と、リサは立ち上がり、外へ向かって歩き出した。

「リサ、どこ行くんだ？」

レンドが訊ねると、彼女は立ち止まって振り向いた。

「宿でも取って来るよ。お金、払っというてね」

笑顔を振りまき、彼女は出て行った。レンドは「やれやれ」と思いつつ、天井を見上げた。

「……まあ、俺たちがわかって、ソラがわかんねえはずねえしな……」

と、まるで独り言のように、レンドは言葉を放った。

「……………」

アンナは思わず、俯いた。それはきつと、今の現状を嬉しく思う反面、「彼女」がいない時のように接することはできないのだと、彼女なりに深慮してしまっただからだろう。

「……寒いなあ……………」

そう呟きながら、アンナはレモンティーを口に運んだ。

「うーん……………無い」

アルツヴァックの中央通にはほとんど店と言うものが無い。製鉄工場しか見かけない。

僕はチラッと空を見た。空は、辺りをキョロキョロと見渡していた。まるで、この町に建っているものが珍しいものかのようだ。

「……………どうしたの？」

そう言うと、空はハツとして僕の方に顔を向けた。

「あ、すみません」

「いや、謝らなくてもいいけど……そんなに、この町が珍しいのか？」

「ええ。こういった町を見るのは、初めてで」

微笑みながら、彼女は言った。

「初めて？ ああ、そっか……」

空は昔の記憶を失っている。とはいえ、自分の名前は覚えていたし、言葉も覚えていた。忘れているのは、家族や僕のこと……たくさんさんの想い出。そして、レイディアントに来てからのこと全部。もちろん、樹によって殺されかけたことも。

「あつちの世界とは、造りが全然違うよな」

「私がいた世界か……そうですね。なんていうか、もったきれいだつたような気がします」

白い息をハ と吐き、空はこの地域の寒さを実感していた。

「機械を使っていたからな、あつちでは」

ある意味、人ではできないことをやってのけるのが機械つてもんだ。大量生産とか、精密な作業など……人の力には、限界がある。

「空さんは……こつちに来てどれくらい経つたんですか？」

いつの間にか、彼女は僕に顔を向けていた。20センチ以上も身長差があるから、空は少し見上げているようにも見える。

「僕が来たのが5月半ばだったから……もう、9ヶ月か……。気が付かないうちに、思ったより時間が過ぎていたんだよな」

あつという間と言えは、あつという間だった。

「やっぱり、知っているところから知らないところに来るのは、不安でしたか？」

「そりゃそうだよ。ずっと過ごしていた場所から、まったく知らない場所へ来るのは、もちろん不安だったし、寂しいし……何より、怖かった」

「怖い……ですか？」

僕はうなずいた。

「……知っている人なんて、誰一人としていない。名も知らない土地ばかり。見るものも似ているとは言っても、やっぱり雰囲気は全然違う。……怖いなんてもんじゃなかったよ、ホント」

「そう……なんですか。私は、昔のことを忘れてしまっているから……なんだか、見るものすべてが新鮮なんです」

そう言っつて、彼女は再び周囲の建物を見渡した。

「それは、僕だつて同じだよ。……不安や寂しさもあったけど、それを超えるくらいのワクワク感があった。見たこともないものばかりだからね」

恐怖や不安を超えるほどの好奇心。それは、幼い頃に一番溢れていたものに似ているのだろう。

「新しいものを見るつて、なんだか嬉しいですよ。知らない世界が、ほんの少しだけ自分のものになったみたいで……」

「そうだな……自分の見ていた世界が、広がっていく感じだよ。視野が広がり、新たなことを知る。これもまた、勉強と同じことなのかもしれない。

「まあ、こんな世界が存在していたなんて、昔は思いもしなかったけどな」

「……小さい頃、か……」

すると、彼女は立ち止まった。

「……空？」

僕も立ち止まり、彼女の名を呼んだ。

「どうして私は……昔の思い出を全部、忘れてしまったんでしょうか……」

彼女は俯き、ギリギリ聞き取れるほどの声量で言った。

「きつと……大切なことばかりがあったはずなんです。お父さんやお母さんのことも、大切な友達のこと……」

「……空……」

大切な友達、か……。

「そして、あなたのことも」

「…………え？」

視線をそらした瞬間、彼女は顔を上げていた。

「私にとって、あなたは大切な存在だった。……………そうですね？」

空の強い眼差しが、僕の瞳に突き刺さる。懐かしい空色の瞳

え？

何かの残光と共に、一瞬だけ映像が揺らいだ。懐かしくも、哀しい……………愛おしい光景。知っている。僕はその姿を。

君は、リ

「空さん？」

ハッとした瞬間、顔を覗き込んでいる彼女の顔が、目の前にあった。

「どうされたんです？ 気分でも、悪いんですか？」

「い、いや……………なんでもないよ。ただ……………」

どう、言えばいいのだろう。僕はお前が好きだと。お前もまた、僕のことを好きと、伝えたほうがいいのだろうか。けど、教えたと

ここで空は記憶を取り戻すわけではない。だけど、伝えたい。それが本心だ。

「……お前は、僕にとって大切な……友達だ」

僕は所々、息を吸いながら言った。躊躇いとかがあったのかもしれない。

「友達……ですか？」

「ああ。僕とお前は、友達だったんだ。昔から、僕とお前は……お前の妹と、3人で遊んでいたんだ」

「私の妹……？」

空は頭をかしげた。まだ……思い出せないよな……。

「……お前の妹は、海って言って、お前たちは双子なんだ。見た目もそっくりなんだよ。覚えてないか？」

「双子の妹……覚えてないです」

空は小さく頭を振った。

「そっか……そうだよな」

いつも一緒にいた海ならば、少しはと思ったけど……無理があったか。

「……あなたのこと、思い出せません。すみません……」

申し訳なさそうに、空は頭を下げた。

「お前が悪いわけじゃないんだから、謝らなくてもいいんだよ。悪いのは……」

樹、とでも言うつもりか？ たしかに、あいつのせいでこうなったのは確かだ。だけど、一概に悪いとは言いつれない。

……弟の樹を、悪いとは到底思えない。そもそも、何かに責任を求めたって、どうにかなるわけではないし……。

「……誰も悪くないんだよな……」

僕は自然と、彼女の頭に手を置いてしまった。癖だと言えば癖なのだが、彼女は別に嫌がるそぶりを見せなかった。少し驚いてはいたが、すぐに微笑んだ。

「……ごめんな、空。もっと早く、お前を助け出されたなら……」

そうすれば、少しは違った現実があつたかもしれないのに。そうやってリサに怒られそうなことを考えていると、空は顔を振った。

「空さんが言ってること、矛盾してるじゃないですか」

彼女は思わず、笑っていた。

「……たしかにね」

僕は上空を見上げた。真つ白な雲が、空を覆っている。雪が小さな小さな粉となって、寒風が駆け回る大地に降り注ぐ。大雪とまではいかないけれども、見る分にはこの程度がいいのかもしれない。

「自分で、誰も悪くないなんて言っておいてな……」

つい、口に出してしまつた言葉なんだよ。

いつも、仮定のことばかり考えている。

もし、なら、れば……。そんなことを考えても、何の意味も成さない。自分を責めても、何にもならない。誰を責めても、憎しみが増えるだけ。

……空……

いつか、いつかきつと、お前は思い出してくれるはず。それまで、僕はお前に対する想いは伝えないでおこう。伝えたら、想いが違うんじゃないかって言われるのが怖いからかもしれない。良いのか、悪いのかわからないが……。

「……間違ってるのかな」

「え？」

「……なんでもないよ。それより、早く店を探そう。いい加減、寒くなってきたよ」

「それもそうですね」

彼女が微笑んだのを見ると、僕は歩きだした。その後ろを、空はあの頃と同じ歩幅で、付いて来る。

あの頃と、同じように。

## 5 2 章：紫苑の帝都アヴァロン 暗き濃霧に囲まれて

僕たちは帝都アヴァロンへ向かうことになった。

帝都アヴァロンはここ、アルツヴァックから西北西へ歩いて20日という距離。結構長い。聞く話では、このアルカディア大陸はロンバルディア大陸よりも広いのだとか。

さすがに歩いて20日なんて、めんどくさい（僕とレンド、及びリサの意見による）ということ、馬車を借りて行くことにした。ヴァルバの馬車は、未だアルフィナにある。ほぼ完全に、忘れてしまっている僕らであった。ちなみに、馬車は借りるのに約500セルトだった。安いのかどうか、いまいわからないが。

馬車で行くととなると、予定では3月上旬にアヴァロンへ入る。3月になるとはいえ、北ヨーロッパのような気候を持つアルカディア大陸には、まだ春は到達しないと思われる。

アルツヴァックは性能のいい武器も売っているらしいので、レンドやデルゲン、ヴァルバの武器を整えた。僕もティルフィング（いつでも具現化可能）があるが、一応、そこで一番人気の剣を買っておいた。

戦うことのできないアンナには、リサが魔法を教えてあげていた。ただ、攻撃魔法ではなく、治癒系の魔法を教えてあげていた。これは非常に扱いが難しい魔法ではあるのだが、リサが言うには、「アンナには先天属性として珍しい 治癒 がある。これだったら、初心者でも簡単に強い治癒魔法を使うことができる」とのこと。属性には7つしかないと聞いていたが、どうやらそうだったエレメンタルもあるようだ。僕の先天属性 聖魔 のように。

2月21日。僕たちは帝都へ向けて出発した。

行くのは僕とヴァルバ、アンナ、リサ、レンド、デルゲン、そし

て空の7人だ。レンドの仲間であるルーシーやロルグたちは、「へと戻ることになった。ラーナ様をお守りするためだという。」

鮮やかな冬の青空が広がる下、僕たちは緩やかな丘の道を進んでいた。馬車は2つに分かれ、一つ目の馬車にはデルゲンと僕と空。デルゲンが運転だ。二つ目の馬車は残りの4人で、運転はもちろんヴァルバ。リサはかなりヴァルバを疑っているので、同じ馬車に乗せるのは気が引けるのだが、レンドとアンナがいるから大丈夫だと思っ……と、デルゲンは言っていた。

「なあ、ソラよ」

「ん？」

僕は寒いので、馬車の中で毛布に包まり、外を眺めていた。

「お前、ヴァルバのこと……どう思う？」

デルゲンはたずなを引きながら言った。

「どつって……まあ、怪しいとは思っけど、信じてるよ」

「そうか」

デルゲンは小さくため息をついた。

「……デルゲンも、疑っているのか？」

呟くかのように訊ねると、少しだけ沈黙が流れた。

「……お前には悪いが、リサと同じくらい疑ってる」

「……」

そりゃ、結構なものだ。

「空ちゃんは？」

さっきまでの暗い声色ではなく、いつもの彼のそれで空に訊ねていた。

「ヴァルバさんのこと……ですか？」

「ああ」

「そうですね……」

空はうーんと唸り始めた。

「……私、まだ皆さんと知り合ったばかりで、ヴァルバさんのこともよくわからないんです。だから……すみません、なんとも言えな

いんです」

「そっか……そうだよな。まだ、わからないよな……」  
上空を見上げながら、デルゲンは言った。

「……あいつ、何を考えているんだろうな」

「いちおう、装甲船を手に入れるためだと思うけど……」

「たしかに、それも理由の1つだろう。だが、俺には別の理由があるように感じるんだ」

「別の理由……？」

デルゲンは頭をかきむしった。

「あいつ自身の目的を成し遂げるため……とても言うのかな」

「……それって、どういう目的だと思ってるの？」

「ヴァルバって、長い間一人でロンバルディアを旅してたんだよな？」

「僕はうなずいた。ただの旅人だとかって言っていたが……」。

「その最終的な目的だよ」

「けど、そんなことは一言も……」

「言っていないだろうな。あいつは、秘密主義だし」

「やれやれと、デルゲンは溜息を吐きだした。」

「秘密主義か……今までのあいつの言動を見れば、明らかといえば明らかだ。」

「ただ……いろいろなところを見たいから、旅をしていたんじゃないんですか？」

「たしかに、空ちゃんの言うことも尤もだ。……だけどね、そうだともしも言い切れない。だから、疑っているのさ」

「……」

疑っていないといえば嘘になる。けど、何をやるにしても、ヴァルバが僕たちに危害を加えるとは思えない。可能性の問題だとしても、最後の最後は違う……気がするし。

「僕は信じるよ。……まあ、あいつのことだからさ、あんまり気にしないほうがいいと思うよ」

「……そうだな。気にしないほうがいいのかもな。杞憂だといいたが……」

杞憂……。

あいつの怪しさなんて今に始まったことじゃないし、他の方法が思いつかない現状では、ヴァルバに賭けるしかない。

ま、気にし過ぎか。楽観的だとかって言われそうだけど。

3月4日、帝都アヴァロンへ到着した。

「ほへえ〜……………これまた、でっかいなあ……………」

城壁のあまりの大きさに、僕と空とアンナは、目と口が開いたままだった。城壁は黒く、数十メートルもある。重厚な威圧感が、ビシビシと伝わってくる。

帝都内に通じる巨大な城門も、厚さが1メートルくらいあり、要塞以上の要塞のように見える。

「ホラ、ポケットとしてないで行くよ」

リサが僕の頭を軽くはたき、帝都内へスタスタと進んで行った。「叩かなくてもいいだろ……………」

「まあまあ、愛情の印ってことで」

リサは振り向きながら言った。

「……………嘘くせ」

「当たり前じゃん」

「くっ……………むかつく……………」

そのまま、リサは先へと進んだ。

帝都の城門を抜けて内部へ行くと、やはりすごかった。

幅が数十メートルある、紺色のレンガで敷き詰められた中央通。

その所々に、大理石に似た噴水が立っていた。そして、この通を挟むようにして、整然と立ち並んでいる商店街。どうやら、この中央通は外来者用の通らしく、商人や貿易関係の人が多い。服装を見れば、帝都の人じゃないなっていうのがわかる。

帝都の人は黒いローブを羽織り、その上に黒い毛皮のコートみたいなものを着ている。頭には防寒具なのか、柔らかそうな帽子をかぶっている。今日は快晴であるが、それくらい寒いのだ。息を吐いてみれば、真っ白な煙のようなものになってしまう。

リサは一度だけ来たことがあるということで、彼女から帝都について教えてもらった。

帝都は王都ルテティアや、聖都ソフィア＝エルメスと同じように、区分けされている。しかし、ここは規模が半端ではなく、第1市街区から第12市街区までである。つまり、上空から見れば、きれいな12角形の形をしているのであるとか。

第1～第7市街区は、帝都民が暮らす住宅街が立ち並んでいる。その中には、アルツヴァックにあった集合住宅もある。もちろん、アルツヴァック以上に大きく、10階建てのものもあるとか。

第8市街区は、今僕たちがいる所。つまり、商店街である。ここは、他国の人が初めに通る場所である。通の側にある商店のほとんどは、おみやげ物屋だったり、軽食屋だったりする。もうちょっとこの市街区の奥に行けば、豪華な物が売られている店に行ける。金持ちな商人や、他国の貴族にしか買えないような物ばかりだとか。

第9市街区は教団関係の場所。キヤメロット聖殿という、聖帝中央庁を除く、アルカディア大陸で最も大きいソフィア教の神殿がある。他には、帝都で仕事をしている司祭たちが住むための住居もある。これらが帝都民の住宅街と離れているのは、建物の造りが違うからである。ソフィア教司祭や司教たちは、聖都にあるような住宅を作ってもらっているのだ。帝都の建物は基本的に紺色で統一されているが、ここだけ白い建物である。聖都を模しているのかもしれない。

第10、11市街区は貴族の住む場所。ルテティアにもあつたが、他の建物以上に金がかかっているようにも見える。煌びやかな噴水があつたり、舞踏会のための巨大パーティー場もある。そこには、皇族も行くのだとか。2つの市街区ではあるが、そこまで人は住んでいない。なぜなら、貴族は帝国民の約2割程度で、2つの市街区には少ない人数の割に、大きな住宅を持っているから、そうなっているのである。

第12市街区には、犯罪人たちの拘置所がある。ここには、外に通じる城門が唯一、無い場所である。そうすることにより、犯罪人たちは巨大な城壁に囲まれ、逃げ出すこともできないようにされている。逃げるには、すぐ近くにある騎士団寮を通り、さらに大きな城門を通り、市街区に出なければならぬ。そのため、今まで逃げおおせた犯罪人はいないとか。連合国家、しかも皇帝独裁による巨大な圧迫により、クーデターなどを考える輩は少なくなく、そのためにこういつた広い拘置所が必要なのである。第12市街区の名は知られているが、一般人では絶対に見ることができないよう、頑丈な城壁によって阻まれている。

そして、帝都の中心部にあるのが帝城。今いる第8市街区中央通からも、その姿を見ることが出来る。囚人のいる第12市街区以外の、全ての通から帝城へと繋がっているのだ。高さは、ざっと100メートル以上。ゴシック様式に似た造りで、黒い姿が巨大な権力を現しているように見える。ゼテギネア皇室　つまり、ペンドラゴン家は夫人たち（現皇帝は12歳なので、先帝の側室とからしい）も含め、千人以上に上るため、その人数を住まわすために、あれだけの大きさの城が建造されたらしい。

それにしても、ルテティアの王城や聖都の聖帝中央庁を遙かに凌ぐあの城……造るのに、かなりの時間と労力を必要としたんだろうな。それに付き合わされた民衆のことを考えると……溜息が出てしまいそうだった。

この通から帝城まで、約4キロ。帝都は直径約8キロにも及ぶの

である。山々が隆起しているこの北アルカディアでは、帝都アヴァロンのある所だけが平野であったため、このような都を建造することができたのである。

「……侵入するには、帝城の地下へ行かなければならない」

通の一角にある、約12畳程度の宿屋の一室にて、僕たちは作戦を練っていた。

「地下？ どうやって？」

「ソラ、今からそれを説明するんだよ」

あ、さいですか。ヴァルバは続けた。

「地下に行くには、帝都の下水道を遡っていけばいい。そうすれば、地下の牢獄に出れるはずだ。そこから6階まで行く」

「どうして6階なのさ？」

僕はすかさず訊ねた。

「6階が宰相が使う執務室のある場所だからだ。あそこまで行けば、もう皇帝に会えるも同然だ」

「会えるも同然ねえ……」

リサは溜息をしながら、窓の外を眺めていた。「そう簡単に会えるかしら」と付け加えた。

「大丈夫、俺が何とかするからさ」

ヴァルバは自分親指を立てながら笑った。それを、リサは冷ややかな目で見つめていた。

「ふん、どうだかね」

「……お前さ、まだ俺のこと疑ってるのか？」

「当たり前でしょ？」

即答だ。というより、ヴァルバが問い終わる前に言ったといえよう。ヴァルバは天井を仰ぎ、フーッと長い溜息をついた。

「まあ……とにかく、俺はグラン大陸にみんなを連れて行かせるために、この作戦を提案したんだ。……それだけは、信じてくれない

か？」

時折見せる、真剣なヴァルバの顔。それを、リサは視線をそらさずに見ていた。

「……言っただでしょ？ みんながヴァルバの作戦に乗るなら、私も賛成だ。今更、変えるつもりは無い」

「……信じてくれって言うてるんだが」

「それは無理。疑いが晴れるまで、私はあんたを疑う。……いい？ あんたが少しでも怪しい行動を見せたら……ただじゃおかないからな」

誰もが、リサの言葉に恐ろしさを抱いた。もし、ヴァルバが裏切るようなことをしたら、殺さんばかりの気がこもっていた。

「ハハハ、わかってるよ」

唯一、ヴァルバだけが笑った。とても、笑える雰囲気ではないと思うのだが……。

「と、とにかく、地下へ行くための下水道の入り口って言うのは、どこにあるんだ？」

デルゲンが少し慌てながらに言った。きっと、ギスギスした空気に耐えられない性分なのだろう。

「第5市街区の城壁近くに、壊れた下水道入り口がある」

「壊れてるんだったら、入れないんじゃないのか？」

レンドは首をかしげた。

「壊れているからこそ入れるのさ。元々、第5市街区の地下には皇族が万が一の時のために、帝都を脱出するための通路があるんだ。

それは下水道と繋がっているんだが、その第5市街区の下水道口が壊れているため、隠し通路に行けるようになっていたのさ」

「……なるほど」

デルゲンは小さくうなずいていた。

「その隠し通路が、帝城の地下牢獄に繋がっているというわけだ」

「……皇室の脱出通路なのに、直してないっていうのもマヌケな話だな……」

脱出通路なのに、逆に侵入されるんだもん……。。

思わず、ヴァルバは苦笑していた。

「大昔に作られ、使われたことが一度も無いもんだから、忘れ去られてるのさ」

「なんだそれ……」

「たしか、帝都アヴァロンはフィンジアス王国が建国されてから、一度も占領されたことはないそうですね」

アンナが言うには、小国だった頃、何度か囲まれたことはあったものの、今のような巨大な外壁がすでにあつたため、陥落したことはないそうだ。海上の古都ランディアナに勝るとも劣らない都市らしい。

「侵入するのは今日の深夜。皇帝や大臣たちは深夜過ぎには就寝する。だが、多忙の宰相はまだ起きている時間帯だ」

「深夜か……うまくいくといいですね」

空は、ぼそつと呟いた。

太陽が沈み、人々が夢の中へと沈んでしまっている深夜、僕たちは動き出した。

宿屋の中では音を立てないよう、ゆっくりと進み、通へと出る。

通には、街灯がオレンジ色のぼやけた色を発していた。ちなみに、この街灯は天空石を使っているのではなく、エレメンタルの結晶を用いて発光しているのである。これは水上都市ランディアナにもあつた代物だ。魔法石　だつたか。

通のあちこちを、数人の警備兵が見回りしている。片手には背丈ほどの槍。青黒い兜と鎧を身に付け、めんどくさそうに歩いている。そんな風にとろとろと歩いているので、僕たちは簡単に移動することができた。職務の怠慢は後々、泣く羽目になるかもしれませんよ。

帝都は直径約8キロ。かなり広いので、第8市街区から第5市街区まで移動するのに結構な時間がかかる。第5市街区はこの市街区の反対側にある。帝都を円と考えると、円周の長さは半径の2乗×円周率だから……約50キロか。おいおい、半端じゃないな。入り乱れた道を進むとして……8キロくらいはある。

それぞれの市街区の中央通以外の道は、普通の道路と同じくらいの幅だし、周りには集合住宅や大きな建物があるため、暗い路地のように感じる。建物の壁に取り付かれている小さな街灯が放つ光が、不気味な雰囲気を漂わせている。

路地を右へ、左へと曲がりながら突き進むと、ようやく大きな通に出た。ヴァルバが言うには、ここは第6市街区らしい。帝都民の住宅街がある通は、深夜でも帝城への道が開かれている。帝城には入れないが、帝城の近くまで行けば、簡単に第5市街区へ行くことができる。帝城が都の中心部にあるからだ。

もちろん、この中央通にも街頭の光の下を、トコトコと歩いている警備兵がいるのだが、どれもめんどくさそうにしている。簡単に行くことができた。

「警備兵、怠けすぎだろ」

「忍び足で走って行く最中、僕は呆れ顔で言った。」

「ま、平和な証拠さ」

「……ふーん……」

「反乱が頻発していると聞いたが？」

「デルゲンはヒソヒソ声で言った。」

「名宰相と名高い、ベオウルフ宰相の手腕のおかげだろうさ」

「リサはボソツと言った。」

「ここ数年、帝都は平和だって言われてるし」

「名宰相……レオポルトさんとどっちがすごいのかな」

「……さあね。ただ、ベオウルフ宰相はレオポルトのように、天才というわけではなかったと思うけどね。……そういう話が出ていな

いだけなんだけど」

レオポルトさん……短い付き合いだったけれど、感謝しきれないほど感謝している。あの人の助けが無ければ、ステファンの犯罪を暴くことができなかった。イデアへ行くこともできなかったかもしれない。

そして、ホリンのことも思い出した。あいつの最後の顔が、忘れられない。今までの自分のしてきたことに対し、悔いが無いように未練があり、どこか穏やかな顔だった。今まで求めてきたものは、なんであつたのか。最終的に、それさえもわからなくなっていたのだろうか。

僕はホリンから受け取ったペンダントを懐から出した。銀でできたペンダントで、古いのか、所々傷が目立つ。

「これを、あいつに……」

そう言われたけど、あいつというのは誰なのか。未だ、わかっていない。

その時、僕はペンダントを見ながら歩いていたので、正面を見ていなく、レンドの背中にぶつかってしまった。

「うおっ!？」

レンドは衝撃でふらつき、僕はずっとこけてしまった。ペンダントも手から離れ、通の上に転がってしまった。

「素晴らしい！ 何やってんのよ馬鹿空!」

「だ、大丈夫ですか?」

アンナが駆け寄って来た。みんなも、立ち止まって僕の方に振り向いた。

「いてて……」

「まったく、ドジな奴だなあ」

ヴァルバがほくそ笑みながら近付いて来た。

「た、たまたまだ。こういうこともあるんだよ」

僕は打ちつけたひじの辺りをさすった。ま、この程度だったらどうってことない。覚醒 してからというものの、ちょっとしたこ

とでは痛みは感じない。さっきの「いてて」というのは、反射的に出てしまう言葉なんだよなあ。慣習づいてるんだもんよ。

「ソラさん、怪我は無いですか？」

「ああ、大丈夫だよ、アンナ。……あれ？」

「どうしました？」

「いや、ペンダントが……」

手から離れてしまったペンダントが無い。近くに落ちたと思ったんだけど……。辺りを見渡しても、見当たらない。真夜中で、暗いためでもある。

「ペンダント？ なんですか？ それ」

「ホラ、ホリンから受け取ったやつだよ。あれがどこかに……」

僕はもう一度、辺りを見渡した。その時、空が何かを拾い上げ、見つめていた。

「あの……これですか？」

空の手には、そのペンダントがあった。

「あ、それだ」

僕は立ち上がり、空の隣へ行った。ペンダントを手にしようとした時、気付いた。ペンダントが、開いていることに。

「これは……ロケット？」

中に、写真があった。誰の写真だ……？

「……女の子ですね。誰でしょうか？」

同じく写真を見つめる空。

「……誰だ？」

ロケットには、まだ10歳前後であろう少女の肖像画があった。髪が黒く、ネックレスなどもしているかわいらしい少女。黒い髪から察するに、イデアの人ではなかるうか。

「どれどれ……」

ヴァルバが覗いた。

「誰かわかる？」

僕がそう訊いても、ヴァルバは何も言わなかった。ただ、その少

女をずっと見ている。瞬きもせずに。

「……………これ……………王女じゃないか……………！」

「王女つて？」

ヴァルバはガクツと肩を落とした。

「お前な……………ラル八王女だよ。覚えていないか？」

「ラル八王女……………んん？」

僕は頭をかしげた。聞いたことあるような、無いような……………。

「イデア皇隆王の長女、ラル八王女だ」

「……………あつ！ あの王女様か！」

一度だけ見たんだ。イデアの王都ローヴナーから出る前、大臣たちと協議する時に、ホリンの話をしていると、奥から出て来たんだ。長い黒髪、ほつそりとした体。まだ14歳とかつて聞いたが、小学生くらいに見えた。

「……………たしか、ホリンは幼いラル八王女の面倒を見ていたって聞いたな……………」

ヴァルバはロケットの中のラル八王女を見ながら言った。

皇隆王は政務で忙しく、娘のラル八王女にかまってやる時間が無いため、王の甥であるホリンが彼女の世話や遊び相手になったという。寂しい思いをさせまいと、そして立派な王族にしようと、頑張ったに違いない。ラル八王女に対しては、親族に対する愛情というものが大きかったのだろう。世話をする一方、ラル八王女が癒しになっていたのかもしれない。憎しみを駆け走る中で、ラル八王女の姿だけが、そんな自分を食い止めていたのだろうか。皇隆王と対峙し、殺せる時に殺さなかったのは、もしかしたらラル八王女のことか頭に浮かんだからかもしれない。いや、王を殺したら、彼女が悲しむとわかっていたから、殺さなかったのだろうか。今となっては、それを知ることはいかない……………。

「……………そうか……………ホリン、これは……………ラル八王女に渡せばいいんだ

な……」

ようやく、わかった。あいつの言葉の意味が。

「すぐにわかる」

そう言われて、すでに1ヶ月近く経っていた。装甲船を手に入れたら、これをラル八王女に渡しに行くよ……。

宿屋を出発して、約1時間が経過し、ようやく壊れた下水道口に辿り着いた。

城壁近くにあり、隣には大きな住宅があつて、その2つに挟まれるような形で下水道口はあつた。直径1メートルくらいのマンホールで閉められていた。

力持ち（自称）のレンドが変な声を上げながらマンホールを持ち上げる。思ったよりも、重かったようだ。開けた瞬間、下水の臭いが僕たちを襲った。男性陣は平然としていたが、女性陣は顔をしかめ、鼻を押さえた。

「うっ、臭い」

リサは今にも泣きそうな顔で、僕を見てきた。

「まあ、下水の臭いなんてこんなもんさ」

都会に住んでいたのだから、これくらいは慣れっこだ。

「空……ど、どーにかして……」

「いやいや……どーしろってんだよ……」

無理難題を言うなよな。

「ここを降りて、ちよつと進めばきれいな脱出通路に出れる。それまで、女性陣は我慢してくれよな」

ヴァルバは笑いながら、穴の中へ降りていった。

「……平気なの？ あんたたち……」

「ちよつとした臭いは平気だ。今まで、数々の修羅場をくぐつて来たからな」

レンドは自慢げに上腕二等筋を隆起させた。

「どんな修羅場よ……………」

入り口はガイアにあるようなものと同じだった。丸い豎穴が数メートル下まで伸びており、はしごで下りられるようになってい

下水道の中は灯りが無いため、真っ暗だった。先に入ったヴァルバが、灯りを用意してくれた。

「たしか、こつちだったかな……………」

ヴァルバは辺りを見渡しながら、慎重に歩き進んだ。

トンネルの形をしているのは、この世界も同じようだ。どす黒い、濁った汚水が流れていつている。さすがに、僕も顔をしかめた。

「……………あつた！ これだ！」

前方で、ヴァルバが言った。急いでそこへ行くと、ヴァルバが見つめる視線の先に、壁が崩れ、1つの穴ができていた。

「……………おいおい、入れるのか？」

デルゲンは顔を覗かせた。たしかに、穴ができているとは言っても、子供一人が入れる程度のスペースしかない。

「そこは大丈夫だ。壊そう」

壊すつて……………そう突つ込む前に、ヴァルバは右手を広げ、壁に手を当てた。黄色い光がヴァルバの右手を覆い、一瞬だけ発光した。

「……………」

壁は轟音を立てながら崩れてしまった。この辺り一帯が、震度2くらいの地震に襲われたかのようだった。

「よし、行くぞ」

ヴァルバは一足先に、たいまつを持って進んで行った。

「……………何もんだ？ あいつ……………」

レンドは頭をかしげた。みんなは、呆然と立ち尽くしていた。「怪しさが増えちゃいましたね」

空……………そこは笑って言うところじゃないような気がします……………。

崩され、広がった穴に入ると、すぐ下に広間みたいなのが見えた。2メートルくらい下だろうか。すでに、ヴァルバはそこに降り立って、手招きをしていた。

僕たちは順番に、一人ずつ飛び降りて行った。ただ、空とアンナはもしものことを考え、空は僕が、アンナはリサが抱えて飛び降りた。「そこは俺の役目だろうーよ」とレンドが言っていたが、リサが「女の子に触れちゃダメ!」と、半ば無理矢理なセリフでレンドを一蹴した。さすがに、鉄人レンドもショックを受けますよ。10秒間、アンナが宥めて立ち直ったけど。

下水道のようなところとは違い、そこは大きな広間だった。前方と後方に、1つずつ通路がある。後方にあるのが帝都の外へ向かっているもので、前方にあるのは帝城の地下へ通じている通路だ。

広間のあちこちに、火が灯っている。結晶のような物の中に、赤く光る物がある。どうやら、炎のエレメンタルの結晶なのだろう。リサが言うには、これは半永久的に使える結晶体のようで、地下にマグマでも眠っているんだろうとのこと。ガイア言えば、地熱というものに似ているかもしれない。

通路の幅は2メートル近く。周りはすべて、コンクリートのようなものに固められている。さすが、皇族専用の脱出通路だ。きれいに作られており、土の色などどこも出ていない。

通路を進み、時には右へ、左へと曲がりながら進んでゆく。壊れた下水道が外への城門近くにあったので、帝城までとは言うと……4キロか。しかも、この地下通路、いちいち曲がったりしているの、実際には6キロくらいあるのかもしれない。

「……この地下通路は、実は約2000年近くも昔に造られたんだ」  
20分ほど歩き、宿屋の一室ほどの広間でくつろいでいる時、ヴァルバが天井を眺めながら言った。

「2000年……かなり昔だなあ」

「……ソラ、ヴァルバが言っている意味を理解しているか？」

デルゲンは笑いながら言った。僕は頭をかしげた。

「どーいうことだ？」

「今の帝都が築き上げられたのは、フィンジアス王国が建国されてまもなくの頃だ」

「フィンジアス王国は、1550年頃に建てられたんですよ？」

アンナがそう言うと、デルゲンはうなずいた。

「つまり、建国される以前からこの地下通路はあったってことか。」

……じゃあ、誰が造ったんだ？」

そう訊ねると、ヴァルバが説明をし始めた。

「正確にはわかっていないが、ティルナノグ以来、2大陸を統一したと言われる伝説のアヴァロン帝国だろうと歴史学者は言っている」

アヴァロン帝国　以前、教えてもらったが、存在していたかどうかは定かでないらしい。一万年前に建国されたティルナノグさえ存在していたことがわかっているのに、なぜアヴァロン帝国のことがわからないのだろうか。

……ん？　よくよく考えたら、僕たちはリユングヴィヤクロノスさんから話を聞いているから、ティルナノグが存在しているのはわかっているんだ。依然、この世界の一般人たちは、ティルナノグを伝説上の王朝だと考えているんだろう。

「アヴァロン帝国か……」

リサが別のニュアンスを含んだ言い方をした。

「リサ、何か知っているのか？」

ヴァルバが訊ねた。

「……アヴァロン帝国の創設者、誰か知ってる？」

彼女がそう言うと、ヴァルバはあごひげを触りながら天井を見上げた。

「伝説では竜神バハムートが人間に乗り移り、バハムート1世として建国したって聞いたが……」

すると、リサは首を振った。

「それは間違い。アヴァロン皇室が、初代皇帝を神格化させるため……そして、彼の出自を隠すために作られた伝説なの」

「……じゃあ、どうということなんですか？」

体育座りをしているアンナが言った。

「創設者はラグナロクの青年　レグルス」

「ラグナロク……お前と同じ一族の出か？」

僕が言うと、彼女はうなずかず続けた。

「……彼は一族の掟を破り、俗世へと出て行ってしまった。ラグナロクの一族の中でも、彼は卓越した能力の持ち主だったらしく、絶対的なカリスマ性も持ち合わせ、次々と同志を集めていった。そして、彼は大きな野心を胸に秘め、アヴァロン帝国を建国し、2大陸を制圧した。彼は民衆から信仰されていた竜神バハムートの生まれ変わりであるということにより、さらに人望を得ていった」

しかし、そんな彼の野望を打ち砕くことがあった。それは、寿命。どんな常軌を逸した力を持って生まれたとしても、所詮、人間。死から逃れることはできなかつたのである。

「彼は夢を自分の息子に託したけれど、息子も同じような天才とは限らない。それ以降は幼帝が続き、朝廷は腐敗していった。最終的に、新暦1000年頃、南の王朝に滅ぼされてしまった。結局、悪巧みをするような奴の願いなんて、寿命っていう逃れられない運命によって打ち砕かれるのさ」

ざまあみろ、と言わんばかりにリサは言い放った。

「……レグルスの野望って言うのは？」

レンドは寝そべった状態で訊ねた。少々、眠いのかもしいない。

「それは樹と同じさ。ティルナノグの浮遊大陸を復活させ、ロキの力を手に入れること。……いや、厳密に言えば違うかな。樹の場合

は、ロキの力をもって世界を滅ぼし、星を救おうと考えている。自分の利益なんて考えていない。けど、レグルスの場合はロキの力を手に入れ、世界を支配しようとしていた。最終的に目指すものは真逆だったね」

どうやら、レグルスは2大陸を制圧してから、グラン大陸へ行つてティルナノグを復活させようとしたらしいのだが、それが命取りになったようだ。2大陸を制圧するのに、50年近くかかったらしい。しかも、聖杯も聖剣も手に入れて無かったとか。

「……ティルナノグが滅んでから2000年、レグルスとミッドラント帝国のアルヴィス1世は、強大な力と軍事力を保持しながらも結局、ロキの力を手に入れることはできなかった。……聖剣と聖杯を手に入れたのは、樹が初めてだろうね」

「……………」

「あつ……空、別に変な意味は無いからさ」

リサは僕を気にしてか、どこか哀しそうな表情で言った。むしろ、心配した顔かもしれない。

「いや、気にしてないよ」

と言うのは、ただの強がりなだけだ。僕は誰にもわからないように、小さくため息をした。樹、か……。

「ところで、どうして樹は封印を解く鍵である 聖杯 と 聖剣 を持っているんだ？」

デルゲンは頭をかきながら言った。

「……聖杯グラールは、シュヴァルツとバルバロツサが一族を出る時に盗み去った。あれは、ラグナロクが 戒めのための呪物 として、代々私の家系が守っていたものだからね」

ロキを解く鍵だとは、リサの家系の者しか知り得ないことだったのだという。

「だけど、どこで『聖剣エクスカリバー』を見つけたんだろう……」  
リサは唸った。エクスカリバーって……ガイアにもあった、伝説の剣だよな。元は同じ世界で、そこらが共通してるってのは……う

「ん、興味深い。」

「リサも、どこにあるか知らなかったのか？」

僕の問いかけに、リサは小さくうなずいた。

「私の一族は聖杯だけを守り、それ以外にも鍵があるとは知らされていたけど、どこにあるのかは知らない。……たぶん、樹たちにか知り得ない何かがあったんだとは思っただけ……」

あいつらだけが知っていたこととなると……

「樹は4年前に教皇になった……ということは、その間に聖剣を見つけたってことだよな？」

「……もしかして、聖剣は聖都にあったんじゃないか？」

デルゲンが言った。

「ラグナロクは古くから伝わる一族だ。と言うことは、それと同じように古い一族によって守られていたんじゃないか？」

「それが、教皇家ってこと？」

「たぶんな。聖都のどこかに封印されていたんだろう」

そういえば、以前、クロノスさんは言っていた。アイオンがイルナノグのもう一つの宝剣である 聖剣 を鍵にしたと。そう考えれば、つじつまは合う。封印をした人物が、鍵のどれかを持っている可能性は大きい。ソフィア教の開祖であるアイオンが、聖都に封印していたと考えるのは妥当であろう。

「……とにかく、樹たちによって浮遊大陸が復活し、天空帝都に眠る最後の鍵 聖玉 を見つけられる前に、私たちも追いつかないとね……」

リサの言うとおりだ。そうでないと、空の命は助からない。

ふと空に目をやると、彼女と視線が合った。照れたのか、彼女は顔をそらしてしまった。

「さて、休憩はこのくらいにして、出発するか」

ヴァルバが立ち上がった。それに続くようにみんなも立ち上がり、荷物を背負った。僕も歩き出そうとした時、空が近くに来た。

「? どうした？」

心配そうな面持ちで、彼女は僕を見上げている。

「……なんだか、哀しそうな顔をしてたから……」

「哀しい？ 僕が？」

思わず、僕は首をかしげた。

「樹さんのことになると、なんだか……哀しそうで……」

「……」

まだ、空には言っていないのだ。樹が僕の弟で、お前の幼馴染だということ。

「……ごめんなさい。なんだか、勝手なことを言っちゃって……」

慰めているはずなのに、なぜか彼女が俯いてしまった。そこがやっぱり彼女らしく、嬉しくなってきた。そこがや

「……心配してくれてるんだろ？ ありがとな、空……」

僕は空に微笑みかけた。空も、同じように微笑んでくれた。

それから20分ほど、ひたすらヴァルバの後を付いて行くと、一つの木造の扉が現れた。今まで通ってきた道の途中には、無かった。

「ふう……ようやく着いたな」

ヴァルバはゆっくりと扉を押し開けた。目の前に、紺色の階段が現れた。

「ここを登れば、地下牢獄に出れるようになってる。急ごう」

僕たちは階段を駆け上がって行った。

階段を上りきると、レンガ造りの広間に出た。赤い灯火だけが、この広間を照らしている。所々に通路があり、ヴァルバが言うにはそこから牢獄に繋がっているらしい。この静けさと湿気……ルテティアで牢獄に入れられた時を思い出す。ここも、雰囲気は同じだ。

1階へ通じる階段を上ると、細い通路に出た。左右に、長い一直線の通路が延びている。もちろん、あちこちに扉が付いている。壁

には、高そうな絵画たちが、ズラーツと顔を並べている。

「こつちだ」

ヴァルバは右の方へと走った。声を出しても大丈夫なのかと思っただが、どうやら兵士が見当たらないようだ。深夜とはいえ、見回りぐらいしていたほうがいいと思うんだけどな……。

空とアンナの速度に合わせ、僕たちは進んだ。しばらく通路を進むと、T字路に出た。それを右に曲がり、さらに突き進むと、再び階段が現れた。

「この階段は、すべての階層に繋がっているんだ。ここを、一気に登るぞ」

「ええ、6階まで？」

「めんどくさがるな、ソラ」

ヴァルバは笑いながら言った。

「僕はともかく、アンナと空は大丈夫か？ 6階といえば、結構な高さだと思うんだけど」

「えっ？ だ、大丈夫です。頑張ります」

なぜか、アンナは気合を入れていた。気合を入れる場面ではないと思うけど。

「たぶん、大丈夫です。気にしないで下さい」

空はというと、なんだか淡々としている。……ま、聖地力ナンから地上へ戻る時に比べたら、楽だしね。

僕たちは階段でもあまり音を立てないよう、且つ迅速に駆け上った。

この帝城、数十階くらいあるそうだ。そんなに高くする必要はあるのだろうかと思うほど。権力者って言うのは、どうして高いものを好むんだろうか。上から、地上を這いずり回る無力な人間を見たためだろうか。そんなものを見たって、自分は満たされないといいのに。

ものの数分で、僕たちは6階へ到着した。

「よし、もう少しだ。この扉を抜けて、通路を進めば宰相室に行ける」

ヴァルバに言われるまま、先へ進んだ。地下通路にあった木造の扉を押し開け、左右に延びている通路を左へと進む。1階の通路よりも、どこか明るい気がする。宰相はまだ仕事をする時間帯らしいので、そのためかもしれない。就寝したら普通、灯りは消すものだし。

左に延びている通路を進み、右へ直角に曲がり、再び右に曲がる。すると、再び大きな木造の扉が現れた。今までの扉とは違い、装飾が施されている。

「……着いたな。行くぞ」

どうやら、この先が宰相室のようだ。

ヴァルバはゆっくりと、扉を押し開けた。扉が開かれた先には、暗がりの部屋が現れた。床にはびっしりと赤いじゅうたんが敷かれており、天井には定番のシャンデリア。小さな明かりを灯している。部屋の四隅には蝋燭があった。

これが宰相室だろうか。僕は頭をかしげた。政務を行う人物の部屋にしては、政務を行っているような気がしない。部屋には、仕事をするためのテーブルも無い。

「ようこそ、帝城へ」

僕たちは正面を見据えた。すると、シャンデリアの光が突然大きくなり、部屋全体を覆った。そして、声の主が姿を現した。

「わざわざこのようなお時間に……ご苦労様です」

白髪のおじさん。あごにも、白いひげが少しだけ生えている。だ

が、まだ40代くらいだろうか。白髪になるには早すぎるのではと思った。スーツのような服を着ていて、どこか王族の使用人のようにも見える。

「……あんたが、ベオウルフ宰相？」

リサが言った。宰相と思われるおじさんは、ほんの少しだけ微笑んだ。

「……いいえ、私はベオウルフ様ではございません」

おじさんは頭を小さく振った。

「宰相を呼んでくれる？ 用があるんだ」

リサはずかずかと進んだ。礼儀もなくそも無いな……。

「呼ぶも何も……その必要はありません」

「??? それって、どうい」

「そのまんまの意味さ」

僕は後ろへ振り向いた。

「……ヴァルバ？」

すると、ヴァルバは何も言わず、前へと歩き出して行った。

「……久しいな、カザラン」

ヴァルバはおじさんの前に立ち、そう言った。すると、おじさんはひざまずき、ヴァルバに頭を下げた。

「お帰りなさいませ、閣下」

「……閣下……？」

「??? ヴァ、ヴァルバ……どういうことだ？」

僕がそう言うと、ヴァルバはくるっと僕の方へ振り向いた。

「……まだわからないか？」

まったく……と呟きながら、彼は苦笑した。

「……俺が、ゼテギネア宰相ベオウルフ　　ベオウルフⅡヴォル  
ガンフⅡペンドラゴン　だ」

「……………え？」

僕はヴァルバが何を言っているのか、わからなかった。

「あんたが……ベオウルフだって…………？」

「悪いな、黙ってて」

ヴァルバは軽いノリで言ったようだった。

「ヴァ、ヴァルバ……悪い冗談だよな？」

そう言うと、彼の陰に隠れてしまっていたカザランという人が、彼の隣に立った。

「冗談ではごさいませぬ。…………先代陛下の弟君であらせられるベオ  
ウルフ殿下こそ、我が国の宰相…………」

「…………！」

「な、なんだと!？」

嘘だろ…………!

「ヴァルバさん…………本当に…………？」

「…………ごめんな、アンナ。気を悪くしないでくれよな」

ヴァルバとカザランは後ろへ歩き出し、大きな扉の前に立ち、再び僕たちの方に振り向いた。

「君たちには感謝している。君たちと共に旅することによって、イ  
ンドラの目的の意味も、手に入れたいもののもわかったからな」

僕はようやく、ヴァルバが宰相だということに実感が湧き始めて  
きた。時折見せる、ヴァルバのヴァルバラしからぬ顔　いや、こ

れが本当の顔なのか。あれは、宰相であるヴァルバの顔ということだったんだ！

「ヴァルバ……裏切るつもり!?」

リサは叫んだ。噴出できない怒りを含みながら。それを聞いて、ヴァルバは小さく笑った。

「裏切るなんてとんでもない。お前が……お前たちが気付いていなかったただだよ。……本当の俺を」

「……あんたあ!」

リサは素早く片手を挙げ、白い光を集結させた。

「無駄だ。この部屋全体に、アンチ・マジックの魔方阵が敷かれている。たとえお前であろうと、その魔方阵を破ることはできない」

ヴァルバはサツと手を上げた。すると、あちこちの扉が開き、武装した兵士たちがなだれ込んで来た。槍を片手に、僕たちを囲んだ。

「……無駄な抵抗はしないことだ。お前たちのためにもな」

「私が本気を出せば、あんたたちなんて皆殺しにできるんだよ!」

リサの詠唱はすでに終了し、バスケットボール程度の光の玉が、彼女の手に浮かんでいる。

「ハハハ、だろうな。……だが、お前が全員を殺す前に空ちゃんかアンナを人質に取るがな……。それでも尚、お前は俺たちを殺すというのか? さあ、どうするつもりだ? リサ」

陽気にと笑いながら、リサの脅しの言葉に引けを取らないヴァルバ。それは、彼女の怒りを余計に増幅させるだけだった。

「ヴァルバ……お前……」

デルゲンは落ち着いた声で言った。片手で、アンナと空をかばっている。

「……おとなしくしていれば、装甲船はお前たちにやろう。お前た

ちの旅を、止めさせるようなことはしない。空ちゃんを死なせたくは無いしな」

フツと、ヴァルバは微笑んだ。

「用が済んだら、お前たちは解放しよう。それまでこの城にいてもらう」

「……いいですよ。って、言うと思う？」

リサは邪悪な笑顔で言った。

「言わないよなあ。そういう奴だよ、お前は」  
ヴァルバは小さく溜息をついた。

「……何が目的なんだ？ それを教えてください」

「ん？」

僕はすでに剣から手を離していた。彼はゆっくりと、僕に視線を向けた。

「……俺の目的は、永遠の巫女 を手に入れることだ」

「巫女だと……!？」

レンドが呟くと、彼はうなずいた。

「……じゃあ、リサを狙っているってことか？」

「ここには空とリサが巫女だが……空は、すでに宝玉を抜かれた状態。利用することなどできないはずだ。」

「……リサは最も破壊力があり、操作の難しい 時空 のエレメンタルを持っている。それでは、俺たちの求めることはできない。それに、リサの性格上、協力してくれるとは思えないしな」

ヴァルバは手を広げて微笑んだ。

「……あなた、それを……どうやって知ったの？ 私の体を調べない限り、通常の間人では先天属性を知ることにはできないはずなのに！」

リサの先天属性……？ どういうことだ??

「そんなことはどうでもいい。ともかく、俺が求めているのはリサではない。空ちゃんでもない」

「じゃあ、誰って言うんだ？」  
ヴァルバは僕の問いに対し、口を閉じた。そして、頭をかきむしりながら言った。

「……………アンナだ」

アンナ……………？ まったくもって、意味が理解できなかった。  
「私……………？」

どうして、アンナなんだ？ アンナが、巫女だっていうのか？  
「……………どうして、アンナが巫女だっていうことを知ってるの……………！」

リサは声を震わせながら言った。その言葉で、僕たちは彼女の方へ顔を向けた。

「リサ、お前……………知っていたのか？」  
レンドがそう言つと、リサは小さくうなずいた。

「……………ごめん。私は、初めて会った時から知ってたの。アンナは先  
天属性として特殊な元素を持ち、斜光の巫女 だということを……………」

「斜光の巫女……………！？」  
驚愕のことだった。ほぼ魔法の使えない彼女が……………。

！

……………！  
そうか……………だから、「治癒」のエレメンタルを持っているのか……………！

「烈火の巫女 リノアンの妹であるアンナも、同じように巫女と……………」

しての能力があったということさ」

「……どうして、アンナのお姉さんが 烈火の巫女 だということを知っているの？」

リサは落ち着いた声で言った。すると、ヴァルバは眉間にしわを寄せた。

たしかに、どうして出会ったはずもないリノアンさんのことを知っているのか。リサが言っていることが本当なら、リノアンさんと接触していない限り知り得ないはず。

「……もう、隠すことじゃないな。いつか、教えてやるって約束したもんな……」

ヴァルバは、どこか哀しそうだった。彼は天井を見上げ、ゆっくりと息を吐いた。

「……俺は、かつて ルテティアの魔道大臣ステファンの下で、呪術研究院の研究者として働いていた。もちろん、スパイとしてな。そこでは、リノアンの研究がされていた。……だから俺は知っているのさ。彼女の素養を、な」

「呪術研究院で……」  
まさか……。

嫌な想像が、頭の中を一瞬よぎる。

「ヴァルバさん……まさか……あなたが、お姉ちゃんを………！」  
アンナは震える声で、小さく言った。いや、自分の意識で言っているようには見えない。目を見開き、勝手に出てきた言葉のように見える。

それを察したのか、ヴァルバは顔を振った。

「……説明は終わりだ。おとなしく、俺の言うとおりにしろ。そうすれば命は助けるし、もちろん立派な装甲船もやる」

ヴァルバは手を動かした。すると、僕たちを囲んでいた兵士たち

が距離を縮め、縄を取り出した。その時、一人の兵士が空中へ吹き飛ばされた。

リサだ！

「ヴァルバ！！ あんた、何もかも知ってたんだね！ アンナのお姉さんのことを知っておきながら、隠していたってことだろ！？ あんたが……あんたが殺したのか！？」

リサは吹き飛ばした兵士の槍を握り、その握力で握りつぶしていた。それを、ヴァルバは動じずに見下していた。

「なんとも言え。俺には俺の理想がある。俺の目的達成のために、お前たちの旅に付き合っていた。それが終われば、もう何でもない」  
その言葉に、リサは槍を持っている手を引いた。今まさに、投げつけようとしている。

「ヴァルバ！！」

「動くな！ 動けば、俺はこの部屋に敷いている禁呪を発動させ、お前たちを殺さなければならぬ！！」

「くっ……！！」

ヴァルバがそう言うと、リサは怒りで動こうとした体を、なんとか理性で押さえつけた。

「……それでいい。よし、捕らえる」

ヴァルバの合図と共に、兵士たちは僕たちを縄で縛り始めた。いるのは、せいぜい20人程度。これくらいなら、リサではなく、僕でも何とかできる。

「おっと、へんなことは考えるなよ、ソラ。お前の力も、驚異的だからな」

「へ？」

僕の考えを察知したのだろうか、ヴァルバは笑顔で僕を見た。

「ハハ……承知してますよ」

僕たちは、大人しくお縄を頂戴した。

「……できれば、お前たちは傷付けたくないんでな。悪く思わないでくれ」

と言われても、それを信じる人間は少ないと思うぞ。たぶん、思ってくれるのは空と……僕くらいか。

「女性は俺の部屋へ連れて行け。男性は……ま、地下牢獄でいいや」  
ハハハ、とヴァルバは笑いながら命令した。

「お、おいおい、俺らは適当かよ。おかしくないか？」  
レンドは苦笑いしながら言った。

「平民風情が閣下に口答えをするな！！」  
と、一人の兵士が怒鳴った。

「いいから連行しろ」  
すると、兵士たちは僕たちを引っ張り始めた。ここは、大人しく言うことを聞いたほうが身のためか。

「空さん……」

空が心配そうに、僕を見つめた。

……不安なのだろうか。それを払拭させるために、僕は笑った。

「だーいじょぶだって。きっと、後で会えるからさ。心配すんな」  
「……はい」

兵士に連れて行かれ、僕とレンド、そしてデルゲンは地下の牢獄へと連れて行かれた。空たち女性は、たぶんヴァルバの部屋へと連れて行かれたのだろう。……何も無ければいいんだけど。

### 53章：真偽 その胸に秘めたるものは

牢獄に入れられて、数時間くらい経過しただろうか。

僕たち男性陣は手錠をかけられ、足には足かせ。しかも鉄球付き。念のためだろうけど、この程度のもの覚醒している僕ならば、簡単にぶち壊すことができる。もちろん、牢獄から出ることもできるが……まあ、ここは大人しく様子見でもしておこう。ヴァルバのことだから、殺したりはしないだろうし。

こうなってしまうても、僕は危機感を感じられない。裏切られたという気も、まったくしない。あいつが僕たちに危害を加えようとしていないのはよくわかったし、なんと言っても悪意が感じられない。悪い意味ではなく、もちろん良い意味でだ。だから、僕は意外と冷静でいる。あいつの命令に従っていれば、目的の装甲船も手に入るわけだし。

だが、問題はアンナのことだ。彼女は、相当ショックを受けていたようだった。ヴァルバがステファンの下で働き、リノアンさん殺害に関与しているとなると……。

今思い起こせば、ステファンの奴の名前を出した時、気分を悪くしていたことにも納得がいく。彼がしていたことを、ヴァルバが昔から知っていたのだとしたら……奴に嫌悪感を抱くのは必至だ。そう考えると、ヴァルバはリノアンさん殺害に関与していないのかも知れない。とはいえ、あくまでそれは可能性の話だが。

罪を犯し続けていたステファンや、表面だけの謝罪しかしないルテティア国王に対して怒りを露わにしながらも、冷静に対処していたヴァルバ。研究員として、スパイとして動いていた頃に、何かあったのだろうか。そうとなると、あいつは長い間、罪悪感か何かに

苛まれていたのかもしれない。

……ヴァルバにとって言いたくないということ。それは、そのところに関連しているはずだ。

気がかりなのは、別の部屋に捕らえられている空たちだ。ヴァルバのことだから、何もしないとと思うんだが……空がいると、なんだか心配だ。あいつが気になって気になってしょうがない。

どこへ行っても、僕はあいつのことばかりだな……。

その時、誰かが歩いてくる音が聞こえてきた。廊下を歩くかのよう、コツコツコ、と足音が通路に響く。

「居心地はどうだ？」

顔を覗かせてきたのは、ヴァルバだった。彼は紫色のローブを羽織り、大臣っぽい服装をしている。ひげも剃っており、さらにはうなじ辺りで結っていた髪をほどいた状態だった。

こうやって見ると……なかなか若く見えるんだな。なんだか、ヴァルバじゃないみたいだった。

「良いわけではないだろ。寒いし臭いし……早く出してくれよ」

レンドは体を縮みこませながら言った。たしかに、このコンクリートのようなもので作られた牢獄の床は、冷たい。腹下しちゃうよ。「悪いが、しばらくは我慢してくれ」

「それってどれくらい？」

そう訊ねると、ヴァルバは腕を組んで唸り始めた。その姿からは、さっきまでの緊迫感はしなくなっていた。

「うーん、とりあえず今日の夜までかな。ちなみに、今日は日の出くらいだ」

「……あと半日近くあるじゃないか。勘弁してくれよあー」  
ふざけながらレンドは言った。半分は本気だろうけど。

「ハハハ、悪いな。男の囚人は、ここって決まってるのさ」

「僕たちは囚人かよ……」

まあ、イメージできなくも無いけど。レンドとデルゲンは海賊なわけだし。

「リサたちは一応、巫女だからな。待遇はよくしないとイケないのさ」

と、彼は苦笑した。

「なるほど。女目当てかと思つたよ」

「デルゲン……………お前、怒ってるな？」

苦笑のまま、彼はそっぽを向いているデルゲンに視線を向けた。

「ハハ、当たり前だろ？ ……こんな目に合わせやがって」

「そつかあ、すまないな。……………ま、これからは口の聞き方に気をつけるんだな。俺はこれでも、神聖なる皇室の人間だからな」

ヴァルバは上から見る態度で言った。思わず、冷静なデルゲンはムツとなった。

「お前……………何様のつもりだ……………！」

「宰相様に決まつてるだろ？ ……お前の反抗的な言葉が兵士に聞かれると、殺されないまでも、腕を切られたりするぞ？ 俺は、この国では人望があるんでね。気を付けるこつたな」

「くっ……………てめえ……………！」

「よせ、デルゲン」

レンドがデルゲンを言葉で諫めた。いつもなら逆なのに。それを冷やかな目でヴァルバは見て、もと来た道を戻り始めようとした。

「……………ヴァルバ……………」

僕の声が聞こえたのかどうかはわからないが、立ち去ろうとしたヴァルバは立ち止まった。

「おっと、言うのを忘れていた。今日の午後、朝廷の場でお前たちは陛下に謁見することになる。失礼の無いように」

そういうことだ、じゃあな

そう言い残し、ヴァルバは足音だけを残して消えて行った。

「……ちっ！ なんだよ、あいつ」

「……いつに無く、デルゲンは舌打ちをした。」

「……また、俺たちは利用されただけなのかもな……」

「……レンドは天井を仰いだ。力が抜けているようだった。」

「……俺らを、簡単に裏切りやがった。怪しいとは思っていたが……さすがにこんなことになるとはな。これじゃあ、時間も無くなるし、装甲船も手に入らない……！」

「そして、デルゲンは拳を壁にぶつけた。鈍い音が響く。」

「装甲船は手に入ると思うんだけど……」

「僕がそう呟くと、デルゲンは溜息を漏らした。」

「そう簡単にくれるとは思えないな。おとなしくしていれば、装甲船はやる。なんてのは、嘘に決まってるんだよ」

「歯を食いしばりながら、あまり見せたことの無い表情でデルゲンは僕を見る。」

「……そうじゃないかもしれないだろ」

「……そう言うと、彼は一瞬驚いたまま止まった。少しだけ、口をポカッと開けて。」

「空……お前、この期に及んでまだヴァルバを信じているのか？」  
「どこか呆れた感じで、彼は言った。」

「ああ、信じてるよ」

「と、僕は断言した。それに対し、デルゲンは顔を振る。」

「何でだよ？ あいつ、俺たちを騙したんだぞ？」

「まあ、それはそうだけど……なんつーか」

「うーんと、僕は天井を見上げた。じめじめとした空間。今はまだ寒いので、まだカビとかが生えるわけでもないか……などと、少し考えてしまった。」

「あいつ……完璧には裏切らないと思うんだよ。僕たちの旅を止めないって言ってたしさ」

空ちゃんを死なせない　そうとも言ってくれた。

「お前は……甘いよ。あいつは、最後に言ったじゃないか。俺の目的達成のために、お前たちの旅に付き合っていた。それが終われば、もう何でもない、と。そう言い切ったんだぞ？　それでも、お前はヴァルバを信じるって言うのか？」

「……そうだな。だって、あいつは世界が滅ぼされようとしているのを、放っておくような奴じゃない。それは、断言できる」

「その根拠は何なんだよ……」

デルゲンは溜息交じりに行った。

「根拠？　根拠……」

と、僕は腕を組んで頭をかしげてしまった。あれ……なんでだろ？

「まあ……直感じゃない？」

「はあ？」

思わず、デルゲンは肩を落とした。

「ハハハ、つまりさ、あいつはそういうことができる人間じゃないってことさ。きっと、今まで接してきた中で、自然と知り得たことなんだよ」

彼が変な顔をしたので、僕は半笑いで言った。

「だからってなあ……」

「まあまあ、ソラらしいじゃねえか」

その時、傍観していたレンドがデルゲンの肩に手を回し、言った。

「こいつが信じるって言うてんだ。俺たちも、信じてやろうぜ？」

「お前までそんなことを……」

「大丈夫だよ。ヴァルバはヴァルバ。あいつは、ベオウルフなんか

じゃねえって」

そう言って笑顔になったレンドを見て、デルゲンは溜息と共に苦笑した。

「やれやれ……お前にそう言われちゃ、どうにもできんな」  
考えるのが馬鹿馬鹿しくなったのか、デルゲンは手を広げて笑った。

そうだよな……あいつは、宰相様なんかじゃない。最後の最後まで、旅人で一緒に旅をしてきた「ヴァルバ」なんだ。  
僕たちは、そう信じるとするよ。

帝城の奥にある豪華絢爛な部屋に、リサたちは腕を縛られ、立たされていた。彼女の前に、一人の兵士がベオウルフの到着を待っていた。

「閣下、この者たちはいかが致しましょう？」

そこへ、ヴァルバがやって来た。

「……俺は彼女たちを自室へ連れてゆくようにと、命令したはずだが？」

ヴァルバは兵士を見下ろすかのように、腕を組んでいた。

「しかし、この者たちは平民です。しかも、我が敵国の民……とても閣下のお部屋には……」

「……俺の命令を無視したということだな……」

兵士はヴァルバの眼光に怯えたのか、思わず一步後ずさりしてし

まった。どんな命令であろうと、彼の命令に従わなければならないかった。兵士は、その後悔が遅いことを、すでに気付いていた。

「も、申し訳ございません。どうか……」

ヴァルバの放つ威圧感に押され、兵士はその言葉を放ってしまった。命乞いなど、逆に惨めだと……認めてもらうわけないのだと、わかっていたはずなのに。

「……遅い。俺の命を聞けぬ者は、俺の配下である資格は無い」

「……！」

ヴァルバは右手を素早くかざした。すると、光が集結し始め、それは見る見る槍へと形を変化させた。その槍を、兵士の頭に突き刺した。

「か……っか……」

兵士は目と口を開けたまま、絶命した。ヴァルバが槍を抜くと、せきを切ったかのように、兵士の傷穴から血が噴出した。そして、ヴァルバの槍は光を発して消え去った。アンナと空は、あまりのことにその光景から目をそらした。

「誰か！ この死体を処分しておけ」

ヴァルバがそう言うと、数人の兵士たちがやって来て、死体を処置し始めた。

「……君たちは、俺の部屋へ案内しよう。付いて来なさい」

ヴァルバはリサたちの方へ向き直り、先程までの厳しい顔のままだった。

「……」

リサは彼から顔をそらし、別の方に目をやっていた。ヴァルバは溜息を混じらせながら言った。

「従え。さもなくば、無駄な血を流させるだけだぞ？」

「……行こう。アンナ、空ちゃん」

リサは2人の背中を優しくさすった。人が死ぬところを見てしまつて、2人は気分を悪くしていた。

多くのシャンデリアが吊ってある豪華な通路を歩いて行き、今まで見た部屋よりも大きな部屋へと連れて行かれた。どうやら、ここが宰相の部屋らしい。あまりにも豪華なので、アンナと空は目を奪われた。リサはというと、嵐の静けさとも言えようか、傍から見れば冷静であるが、怒りを内に秘めている状態だった。

「……さてと」

ヴァルバはナイフを持って、3人に近付いた。リサは2人をかばうように、ヴァルバの前に立って彼を睨んだ。それを見たヴァルバは、フツと微笑んだ。

「心配するな。縄を切るだけだ」

「……………」

それでも、リサは臨戦態勢のまま睨み続けていた。その様子を、彼女の後ろにいる空とアンナは、極度の緊張で体を強張らせていた。「手を出せ」

ヴァルバは返答を待たずして、3人の手に巻きつかれた縄を切った。

「……………どういうつもり？」

リサは自由になった手を眺めながら言った。きつく縛られていたので、縄の跡ができてしまっている。

「痛いだろうーな〜って思ったからだよ」

と、ヴァルバは微笑んだ。リサは小さくため息を漏らす。

そういう意味じゃないっての……………。

「あんだ、私たちをどうするつもりなの？」

気を取り直して、彼女は言った。

「……………君たちは、今日の夜に陛下に謁見してもらおう。リサ、君は求めない。君の先天属性はあまりにも強大すぎて、我々では扱うことができないだろうからな。だから、君は少しだけ調べさせてもらうだけにする」

丁寧な口調で、ヴァルバは淡々と説明した。それにイラついたのか、あるいは内容が許せなかったのか、リサは彼を再び睨みつけた。

「……調べるだつて？ 何をするつもりさ！」

「そこは、まだ知らなくてもいい。……空ちゃんはエレメンタルを抜かれている状態だし、危険だ。彼女を死なせてしまうことになる」と、ソラに殺されちゃうからな」

そして、ヴァルバは苦笑した。あれだけ彼女に惚れてるのだから、怒った時のことは想像に難しくないな、と。

「……じゃあ、アンナはどうするつもりなの？」

その質問に、ヴァルバは笑みを消した。そこには、宰相であるヴァルバ ベオウルフの顔があった。

「……アンナ、君は 斜光の巫女 として、我が国のものとなつてもらう。我が主君の夢を実現させるためにな……」

「くそみたいだよ、ホント……！」

リサは一步、足を前に出した。

「アンナを……兵器として利用するつもりか！？」

小さく歯ぎしりをしながら、リサは言った。

「……兵器、か……そうだな。ある意味、そういうことになるな」

「そんなこと、絶対にさせない！！」

リサは首を振り、叫んだ。怒りの宿つたエメラルドグリーンの瞳を、ヴァルバは背けることなく受け止めていた。

「あんた……巫女が持つ能力の高さを知らないだろ！？ たとえ、御しやすい属性を持つ巫女であっても、素人なんかには扱えるような代物じゃないんだ！ ……巫女は普通の人間とは違う。個人だけでこんな都を吹き飛ばすくらいの力は備わってんだよ！！」

「……」

彼女の罵声に、ヴァルバは小さくため息を漏らした。

「……それは、お前が知っている範疇のことだろう？」

「何……！？」

「我が国の技術力をなめないでほしいものだ。お前たちでは、到底理解できないことだろうがな……」

「……！ あ、あんたねえ……！！！！」

リサはヴァルバに一発、ぶちかまそうと拳を引いた。彼女の口が、破裂しそうな怒りでヒクヒクと動いていた。

「動くな！」

すると、天井から声がした。3人は天井を見上げるが、どこにも人らしきものは無い。辺りを見渡しても、気配がするだけで何も無い。

「それ以上、閣下に近付けば……小娘の命は無い」

小娘だつて!?

リサはアンナとソラの方へ振り向いた。その後ろに、黒装束を身に纏い、片手に小さなナイフを持っている男がいた。リサは納得した。戦闘能力の無い二人は人質なのだ。

「言うておくが、この部屋にもアンチ・マジックは敷かれている。

お前が魔法を使おうとしても、発動はできない」

ヴァルバは追い打ちをかけるように言った。

「……フン……」

リサはヴァルバから離れ、床にあぐらをかいて座った。

「こうしておけば、あんたたちも安心だろ？」

「……」

「だから、アンナと空ちゃんに向けているそのナイフを……遠ざける！」

「……閣下」

黒装束の男に対し、ヴァルバは手を広げた。

「言つとおりにしとけ。そうしないと、殺されるからな」

ヴァルバが苦笑すると、黒装束の男は2人から離れて行き、ナイフをしまった。

「……ヴァルバさん……」

アンナは、今にも泣き出しそうな目で彼を見つめていた。それにヴァルバは気付いているのかどうかはわからないが、大魔神のように座っているリサに視線を向けた。

「床に座らなくてもいい。そのソファ―にでも腰掛けていいんだぞ？」

「……………」

「遠慮するな。君たちは一応、陛下のお客様なんだから腕を組んでいるリサは目を瞑ったまま何も言わない。」

「……ま、いいけどな」

ヴァルバはため息をつきながら、3人に背を向けた。それと同時に、リサはまぶたを開けた。

「……あなた、どこからどこまで、私たちを騙していたわけ？」

「騙していたわけではないと言っただろ？」

「あなたがそう思っているだけで、私たちはそうは思っていない」

「……なるほど」

彼は頭をかきむしり、3人に顔を向けた。

「俺は先々代皇帝の第3子なんだよ」

「先々代つて……あの、ベルセリオス6世の……」

リサは驚きを隠せなかった。いや、たしかに彼がベオウルフならばそうなのだが、あの「大帝」とも謳われた皇帝の息子とは、少々信じがたいものがあつたのだ。

「18年前、あの戦争の最中に父が亡くなり、兄がベルセリオス7世として即位した。俺は兄の片腕となつて、この国を動かしていた」

ヴァルバは部屋の奥へと歩いていき、一つのイスに腰掛けた。

「数年して、兄の政治も安定し、国内秩序も今までに無いくらいよかつた頃、俺は兄の命でスパイとしてルテティアに潜入することになつた」

「……皇帝の命つて？」

ヴァルバは、リサの方に顔を向けた。

「工作人員から聞いた、伝説の巫女を手に入れたという情報の確認。」

そして、巫女の搜索などだ」

永遠の巫女。ゼテギネアでは、まだ伝説であった。

「……8年前、俺は単身ロンバルディアへとやって来た。到着してすぐに、ルテティアが王都で何らかの研究をしていると聞きつけた」  
ヴァルバは昔のことを思い出しながら、ゆっくりと目を瞑った。

まだ、25歳……ただ、兄上のためについて思ってたな……。

「研究つて言うのは、ステファンがしていた暗黒魔法生成や、巫女に対する人体実験のこと？」

リサの問いに、ヴァルバはゆっくりとまぶたを開けた。彼女の後ろで、顔を俯かせているアンナの姿が、否応なくは入って来た。

「……そうだ。俺はステファン卿が指揮している 呪術研究院 で、人体実験をしている噂を聞き、下っ端の研究者としてあそこに潜入した。……下っ端だったおかげで、ステファンには顔を覚えられなかった。下っ端でなければ、奴と対峙していた時に、俺のことがばれていたしな……」

運がよかった、とヴァルバは笑った。

「潜入して数ヶ月が経ったある日、俺はようやく人体実験の場に出ることができた。そこで……」

ヴァルバは少し言葉を詰まらせ、リサの後ろにいるアンナに目をやった。それと同時に、アンナも顔を上げていた。

「アンナ、君のお姉さんを見つけたんだ」

「……お姉ちゃんを……？」

ゆっくりとうなずくヴァルバ。その顔には、どこか哀しそうな霧  
困気を漂わせていた。

「……しかし、リノアンは過度の魔道注入により、元素の結晶体で  
ある宝玉を取り除かれ、死んでしまった」

小さくヴァルバは顔を振りながら、天井を見上げた。

「……その頃、兄が亡くなったとの報を受け、俺は帰国した」

イスから立ち上がったヴァルバは、近くの本棚の上に置かれている、一枚の紙に触れた。そこには、幼い少年の隣で微笑んでいる父親であるう、30歳近くの男性が立っていた。

「現皇帝　ゼナンは当時まだ7歳で、とてもじゃないが政務を行うことはできない。兄の遺言に従い、俺は帝国宰相として数年間、国を守った。そして、国が安定してきた頃に俺は巫女の搜索を兼ねて、再びロンバルディアへと渡った」

「……その時に、空と出会ったってことね」

ああ、とヴァルバは小さくうなずいた。

「あの時、俺はいるかどうか分からない巫女を探すことよりも、その可能性を持つ……リノアンの妹であるアンナを見つけた方がいいと思つてな。……巫女は血に関係して誕生することは知っていたからな」

だからこそ、彼はフィアナへ向かっていた。その途中で、ソラと出逢ったのは偶然であり、彼にとって予想外のことでもあった。

「……とはいえ、アンナが本当に巫女なのかどうかわかりかねていた。特殊な属性を持っていることに違いは無かったが、それが本当に『永遠の巫女計画』で使われた元素なのかどうか、判断できなかったからな」

リサは未だに疑問に思っていた。

なぜ、ヴァルバは自分たちの先天属性がわかったのか。

「しかし、聖地カナンで彼女が巫女だということが判明したよ」

「聖地カナン……?」

アンナは頭をかしげた。

あそこで、自分のことがわかるようなことがあっただろうか。

巫女である証拠がありそうなことなんて、何一つ……。

「アンナ、君とソラがあそこにあった天空石に触れた時、俺が触れた時のようにはならなかったのを、覚えているか?」

「天空石……あ……！」

あの時、自分とソラだけ何も起きなかった。ヴァルバだけが、触れた時に強烈な痛みを感じたのに。

「天空石　古代の天才が作り出した、『疑似C』と呼ばれたもの。それは、天帝カインの流れを組む者……一定以上の遺伝子情報を持つ者だけが操作できる石。そう、巫女やソラのような特殊な存在だけが触れることのできるものなのさ」

「そう、だったの……」

リサは驚いていた。そんなことは、聞いたこともなかったからだ。「巫女もお前の一族ラグナロクも……元を辿ればティルナノグ皇室なんだよ」

「！！……ど、どうして、あなたはそんなことを知ってるの！？」  
思わず、リサは声を上げていた。

「この帝都周辺にあったアヴァロン帝国時代の遺跡の中に、その旨のことが記述された書物が発見されてな。……ゼテギネアはゼテギネア独自に捜査・研究したんだ。お前が教えてくれた、アヴァロン帝国の祖・レグルスが持ち出した資料なのかもな……」

巫女、ラグナロク、ヴェルエス宗家……全てが、カインの末裔。まさか、そんなことをたかが一国の宰相が知っていると、想像しがたいものだった。

「……じゃあ、あなたの国がしようとしていることってというのは、なんなのさ？」

「……」  
「教えないつもり？ アンナに、ひどいことをしておいて……」

睨み付けるリサの瞳、哀しく見つめる空の瞳、信じたくない、信じたくないけれどという、2つの気持ちが交叉するアンナの瞳から、ヴァルバは逃げるように背を向けた。

「……我が帝国の長き夢　　2大陸の支配だ」

「なんだって……!？」

リサは体を震わした。そして、拳を握りしめて立ち上がった。

「あんた！ 助けるだの、なんだの……あれだけのことを言っておきながら、2大陸の支配が夢だって!? ハッ、反吐が出るよ!!」

結局、あんたはそこらの権力者と同じだったってことだね!」

リサの怒声が、この宰相室に木霊する。それでも、ヴァルバは一切同時ようとしなかった。

「そして、アンナのお姉さんをが死んだのは……あんたのせいでもあるんだろ!」

言い返せないのか、言うつもりもないのか、ヴァルバは何も言わずに背を向けたままだった。

「最低だ! あんたは最低だ! 仲間を……私たちを最初から騙して、利用価値がなくなったら殺そうとしていたんだろ!!」

「……………」  
リサは頭を振った。そういった行動で、ヴァルバ自身を否定しているのだ。

「私たちの悲しみも、苦しみも……そして、この星の未来を知っておきながら、あんたは自分の国の利益を求めらるって言うのか!!」

「……なんとも言う方がいいさ。俺の道は、俺自身が決める」

ヴァルバはリサの方へ向き直った。そこには、あの碧い瞳でリサを睨むヴァルバがいた。

「父が亡くなり、兄上が即位してから、俺はこの国にすべてを捧げた。俺の命も、俺の誇りも全てな。この国がある限り、俺はこの国のために生き続ける。この国が生きているということは、俺が生きている意味そのものであり、価値だ。……祖国を持たぬお前には、到底わからないだろうよ」

吐き捨てるかのように、ヴァルバは舌打ちをした。  
「ふん！！ そんなくだらしないもの……わかりたくもない！ 祖国  
つてのは、命を賭ける場所じゃない！ 自分の心を置いておく場所  
だ！」

私がかかって、なんであんながわかんないんだ！！

その叫びに、ヴァルバは顔をしかめた。揺らぐはずの無い想いが、  
一瞬でも揺らいでしまったのかもしれない。

「……あなたが、お姉ちゃんを殺したんですか？」

ハツとしたヴァルバは、ゆっくりと彼女へ視線を向けた。

「あなたが……殺したんですか？」

自分を見つめる、彼女の瞳。巫女特有のエメラルドグリーンの瞳  
が、小さく震えながらも自分を怨んでいる。

そう、彼は感じた。いや、確信かもしれない。

「答えてください！」

ほとんど出すことのない声量で、アンナは言った。

「あなたが殺したなら……そうだというなら、私は……私は……！  
！」

瞳と一緒に、体を小さく震わしているアンナ。それは怒りか、哀  
しみか。

ヴァルバは、顔を振った。

「……赦さなくていい。憎んでくれてもかまわない」  
ヴァルバは3人の方へ歩き始めた。アンナを見つめながら。そして、彼女の横を通り過ぎようとした時、

「俺が……リノアンを殺したようなものだからな」

「えっ……」

そのまま、ヴァルバは黒装束の男と共に、この部屋から出て行った。バタン、と閉められた扉の音が、アンナの心の中で反響していた。

「……………」

突然、アンナがストンツと座り込んでしまった。まるで、力が抜けてしまったかのように。緊迫した空気が無くなったからかもしれない。

「アンナ、大丈夫？」

心配そうに、空が駆け寄った。

「だ、大丈夫です。ちよつと……………」

アンナは自分の体を抱くかのように、自分の肩を抱いた。

「……私、もう何がなんだか……………」

俯いた顔に、涙が浮かび始めた。

「ヴァルバさんが……あの人が、お姉ちゃんを殺したんだと思うと

……もう、どうすればいいのかわからない……………」

掠れそうな声で、独り言のように呟くアンナ。

「嫌だ……もう、嫌だ……………」  
「どうして、こんなことになるの？」

「どうして……………」

小さく顔を振った瞬間、涙の雫が床下へと落ちていく。

「アンナ、信じましょう」

「……え？」

空は彼女の隣に座り、微笑んだ。空の言葉に驚いたのと同時に、その笑顔にも驚いていた。

「もう一度、ヴァルバさんを信じましょう」

彼女はアンナの肩に、自分の手を優しく置いた。

「私は、ヴァルバさんが悪い人には思えないんです」

「思え……ない？」

アンナは空の瞳を見つめた。

空色の瞳。

「まだ……私は皆さんのことをあまり知らないし、ヴァルバさんの性格や、考え方もかも、ほとんどわかりません」

と、空は苦笑した。

「……だけど、ヴァルバさんを見てて、あの人はアンナのお姉さんを殺すような人だとは、思えないんです」

はにかみながら、空は言った。疑念を抱いていない彼女にいらついたのか、リサが口を開いた。

「けど、ヴァルバは私たちを騙してたんだよ？ ……時間が無いっ

ていうのに、それを邪魔したんだ！ どうやって、あいつを信じろって言うのさ！？」

「……そうですね。ヴァルバさんは、たしかに仲間を裏切るようなことをしたんだと思います」

そうでしょうが、とりサが言おうとした瞬間、彼女は首を振った。「でも、ヴァルバさんにも何か考えがあるんだと思うんです。……

うつん、悩んでいるのかもしれない」

「悩む？」

思わず、リサは首をかしげた。

「……ヴァルバさんが宰相だということを明かした時、そしてさっ

き、あの人の顔は……どこか哀しそうでした」

哀しそうだと言う空の顔にも、哀しそうな雰囲気が浮かんでいた。なぜ自分までそうなるのかと、リサは意味がわからなかった。

「後悔と深い悲しみ……そういったものを感じました。ヴァルバさんは、インドラを食い止めようとすること、そして祖国に対する気持が交叉して、葛藤しているんだと思うんです」

「……………」

「……誰にだって、悲しいことはある。苦しいこともある。それらを体験した上で、ヴァルバさんはこうすることを決意したんだと思います。……たとえば、それが私たちを裏切ることになるのだとしても……………」

裏切ったのは否定できない。でも、そこには隠された理由がある。空はそう感じていた。

「空ちゃんを感じた後悔というのは、私たちを裏切ったことに対するもの？」

リサの問いに、空は何度か瞬きをして唸った。

「……わかりません。それもあるのかもしれませんが。昔のことにも関連しているんだと思います」

もしかしたら、リノアンさんのことに関連しているのか……

あるいは、この国のことなのかもしれない。

空は憶測ではあるが、それこそが答えなんじゃないかと、漠然とした考えをしていた。

「……ヴァルバさんが私たちを裏切ったのは、否めない。けど、私たちの インドラの野望を阻止し、世界を守る という想いまでは、裏切っていないんだと思います」

本当に意味で裏切っていない。

空はそれを信じようと決めた。

「だから、もう一度信じましょう。まだ時間はありますよ」

空はそう締めくくった。優しく微笑む彼女を、まるで心を奪われたかのように見ているアンナとリサの姿が、そこにあった。

「……だから、か」

ボソツと呟いたリサに、アンナは顔を向けた。なんでもないよ、とリサは微笑んだ。

だから、あいつは惚れてんのかな……あそこまで。

「お手上げ」

そう言っつて、リサは手を広げた。理解できない空とアンナは、顔を見合せて眉を八の字にしていた。

「空ちゃんにそう言われちゃ、敵わないよ」

ため息を漏らしながら、リサは苦笑していた。

「滅茶苦茶腹立つけど、もう一回チャンスを与えてあげようか」

「チャンス？」

アンナがそう言っつと、リサは天井を仰いだ。

「私たちは何かの縁があっつて、ここまで来た。もちろん、あの馬鹿ひげも」

馬鹿ひげ……意味を理解した空は、クスツと笑ってしまった。

「なんだかんだ言いつつ、仲間なんだし……信じてやんないといけなかつたね」

「リサさん……」

空はホツとしていた。リサは果てしなく怒っていたから。

「アンナ、もう一度だけ信じてやるうよ。……まあ、あんだだけ怒つてた私が言っつても、説得力無いけど」

苦笑しながら、リサは自分のほほを人差し指でかいていた。

「……………」  
アンナは何も言わず、俯いていた。拭うことのできない疑念………  
信じたいという二つの想いが複雑に絡み、彼女は悩んでいた。

「……私は、ヴァルバさんがリノアンさんを殺したとは思えないんです」

再び、空が言い始めた。

「直接的ではないにしろ、間接的に関与しているのかもしれませんが………詳しい話を聞くんです。恨むかどうかは………それからです」

「空さん……………」

アンナは顔を上げた。空と同じように、微笑んでいるリサが彼女の目の前に座った。

「結論を出すのは尚早………なんだよ、きっと。私は………私たちは、まだあいつの本音を聞いてないんだからね」

本音

そこに、彼の想いは宿っていたか？

彼の真意があったか？

それが断言できない今、答えを出すのは間違い。彼からもっと話を聞くまで、出しちゃいけない。

そう、空が言ったのになあ……………。

リサは、小さく笑った。

「………まだ、どうしていいかわからないですけど………本当のことがわかるまで、ヴァルバさんを信じます」

ようやく、アンナは微笑むことができた。

「……………」

空さん……あなたは、どう思いますか？ ヴァルバさんのこと。  
私たちは、もう一度信じようと思います。

あの時、あなただけが冷静だった。それは、彼を疑っていなかったからじゃないですか？

……だから、きつとあなたも信じますよね。

きつと……

## 54章：帝城 覇権の在り処に群がる者ども

その日の夜、僕たち男性陣は、ようやく冷たい牢獄から解放された。と言っても、手錠が付けられたままだけど。

謁見の間 帝城の1階にあるらしく、僕たちはそこへ連れて行かされた。まだ12歳の皇帝が、巫女を見たいからであるとか。それだったら、僕たちは必要ないんじゃないかと思った。僕はただの男だし、レンドとデルゲンなんか海賊だし。とても、見たいとは思わないだろうよ。

赤いじゅうたんが敷かれている長い通路をひたすら歩き、右に曲がったり、左に曲がったり、再び右に曲がったりと、長いこと歩いた。そして、1つの広間に到着した。ここは、今まで見てきた王宮の出入り口と同じようだ。10メートル近くある天井に、そこから巨大なシャンデリアが吊らされ、辺りには武装した警備兵や豪華な絵画が並んでいる。すすすべの床には、温か味のある赤いじゅうたん。広間の中央に大きな階段があり、その奥には当然のごとく、巨大な扉が1つ。

階段を上り、僕たちは扉の奥へと進んだ。すると、奥行きのある大きな広間へと出た。ここが謁見の間か。奥にはズラツと並んだ、頭が固そうなおじさんorおじいさんたち。若い人もいるけどが、全て皇帝の側近や大臣だろう。その面子の中には……ヴァルバはいない。宰相だつて言うんだから、いるのが当然だと思うのだが……。そうやってキョロキョロしていると、後ろにいた兵士に「キョロキョロするな!」と、頭をどつかれた。

……空たちが捕まってさえいなければ、お前の頭を床に食い込ませてやるのによお……。

「ソラ、邪悪なことを考えていないか?」

デルゲンが、声を小さくして言った。

「えっ？ …… そんなこと考えるかって」

「そうか？ …… なんか、ブラックな空気が漂ってたもんだからさ」

「ハ、ハハ…… そう」

勘のいい奴だ。

広間の中央まで歩き、そこで立ち止めさせられた。後ろから付いて来ていた槍を持った6人くらいの兵士たちも、僕たちを囲むようにして立ち止まった。

数メートル離れた場所に、大臣らしき人たちと共に玉座が見える。金で装飾され、赤いふかふかそうなイス。

「皇帝陛下のおなーりー！」

すると、この大広間にいる誰かが叫んだ。奥にある大きな垂れ幕が、中央から両側へと引いていった。そして、一人の人間が姿を現した。周りにいた人たちは、すぐに頭を深々と下げた。兵士たちに関しては、片膝をついてだ。下げなかつた僕たちは、一人の兵士に頭をはたかれ、「ひざまずけ！」と言われた。言つとおり、僕たちはひざまずいた。デルゲンは冷静だが、レンドと僕のイライラは少しづつ上昇中……。

「みな、面を上げよ」

そう言われたので、僕は頭を上げ、皇帝の姿を確認した。

なるほど…… 子供だ。12歳の少年。青紫色のミディアムくらいの、ウェーブがかかった髪。金色のサークレットを額に付け、藍色っぽいローブを身に着けている。皇帝だと言つから、もっと金ぴかなものを身に付けていると思つたが…… あまり、豪華ではない。ラー

ナ様並みに質素だ。それに、何と言つか……子供らしさが感じない  
とでも言えようか、場慣れしているのか、堂々とした態度だ。

「……子供だな」

レンドが呟いた。

「たしかに。でも皇帝だ。偉いんだぞ？」

「んなのわかってるよ、ソラ」

「……いちおう、確認」

「何の？」

「……皇帝かどうか……」

「貴様ら！ 無駄口をするな！！」

今度は、槍の棒のところで頭を叩かれた。

「俺は話してないのに……」

デルゲンもなぜか、叩かれてしまっていた。さっきまで一人だけ  
冷静だったが、結局3人とモイライラし始めてしまった。

「……叔父上はまだか？」

皇帝は玉座に座ると、右手側の大臣に訊ねた。

「宰相閣下は、たまった資料に目を通しておられます。しばし、お  
待ちを……」

「そうか……」

皇帝は小さく息を吐き、僕たちの方に目をやった。

「……その者たちは？」

僕たちを一瞥すると、皇帝は頭をかしげていた。

「宰相閣下が捕らえた、賊でございます」

「賊？ 賊だと？ レンドとデルゲンはともかく、僕も賊だと！？」

「おかしいだろ、それは！！」

「賊……？ フム、そうは見えぬが……。だが、賊ならば余の前に  
出す必要は無いのではないか？」

「そうなのですが……閣下が、この者たちも巫女たちと一緒に  
こととして……」

「叔父上が？ なるほど、そういうことならばよかるう」

声はまだ幼いものの、言葉遣いのせいか皇帝としての風格が漂っている。

その時、大広間の左扉が開き、誰かが入って来た。

……ヴァルバだ。長かった後ろ髪を切り、藍色の貴族服の襟にかかる程度になっており、いつもの無造作ヘアではなく、現代風で言うところのウルフヘア的に整えられている。すでに剃ってあったあごひげのせいか、5歳程度若返った風にも感じる。

彼の後ろに、空たち　3人の姿があった。

「空さん！」

空は僕に気が付き、走り寄って来た。その後を、リサとアンナが歩いてやって来た。

「空、無事だったんだな。よかった……」

相手がヴァルバとはいえ、可能性の問題として無事だという保証は無かった。こうして姿を見られれば、本当にホッとした。

「何？ 私たちは心配じゃ無かったの？」

リサはニヤニヤしながら、僕の横を通り過ぎて行った。

「な、何言ってるんだよ？ 心配してたに決まってるんだろ」

「ホントにい？」

僕が振り返った瞬間、リサはほくそ笑みながらデコピンをしてきた。

「ほ、ホントだよ。……ところで、何でお前たちは手錠させられてないんだ？」

そう、3人には手錠が付けられていない。僕たち男性には、鋼鉄製の手錠が付けられてるのに。

「あれ？ あんたたちはされてるの？ なんで？」

「……男女差別か？」

レンドは頭をかしげた。

「なーんか、おかしくないかあ？」

「き、気にしちゃいけないんだよ……たぶん……」

デルゲンは困ったような顔で、僕の質問に答えた。

「陛下。ベオウルフ……ロンバルディアでの旅を終え、帰還いたしました」

ヴァルバは玉座の前にある段差の下で、ひざまずいた。

「叔父上……いや宰相、長い旅、御苦労だった」

「これは、勿体無きお言葉……」

こうして見ると、ヴァルバって高い身分の人間だったことを、今更ながら実感する。そしてヴァルバは立ち上がり、並んでいる大臣たちに顔を向けた。

「皆……宰相であるのに長い間、国を空けていて申し訳ない。私がない間、よくぞ陛下を支えてくれた。礼を言う……」

そう言うと、大臣たちに一礼した。

「いえ、我らは与えられた役目を全うしただけです。礼など、言われるほどではございませんぬ」

一人の老人が、微笑みながら言った。

「……ありがとう」

ヴァルバは再び頭を上げて、皇帝の近くに立った。

「陛下。これから、私の旅の結果をお伝えいたします」

皇帝は小さくうなずく。

「数年に及ぶ旅により、我が父・ベルセリオス6世が望んでいた永遠の巫女をようやく、見つけることができました」

すると、周りの人々が「オーオー」言い出した。驚きや喜びの顔を、互いに見せ合っている。

「そうか！ さすが、叔父上だ。して、その巫女とは誰だ？」

「……私が連れて来た、3人の女性のことでございます」

皇帝は空たちの顔を向けた。しかし、よくわかっていないよう

で、頭をかしげていた。

「……普通の女性にしか見えぬが？」

「陛下、見た目で判断してはなりません。巫女とはいえ、陛下が想像するような人間ではないですよ。」

と、ヴァルバは優しく微笑んでいた。

あつ……そうか。これが、「ベオウルフ」なんだ。家族にだけ、親族にだけ見せる表情。彼にとって、皇帝は甥なんだ。

「あの者たちは、私がゼテギネアで見つけた。古代アヴァロン白書に基づき、捜査した結果、それぞれ違う属性を持つ者たちでございます。」

「……まったく違う先天属性を持つ者が、同世代に現るのですか？」  
一人の大臣が訪ねた。

「そのようだ。あの古書には載っていないが……」

「なるほど……もう少し、他のものを調べる必要があるようですね。」

その大臣は、自分でうなずきながら呟いていた。

「それで、どのような巫女なのだ？」

皇帝はワクワクしてきたのか、身を乗り出して訊ねた。皇帝とはいえ、好奇心旺盛な所は子供のようだ。

「あちらの髪を結った女性は、先天属性として『時空』を持ち、『次元の巫女』であります。『時空』とは、あらゆるエレメンタルの中で最も破壊力・難易度の高い属性です。操作性も難しく、我々の技術力では兵器に転換することはできません。」

リサの持つ先天属性に、そんな秘密が……。一体、いつそこまで調べたんだろう。

「なるほどな。……君、名を覚えてくれないか？」

皇帝は笑顔で訊ねた。

「……リサ＝ブレスレッド。」

無愛想な感じで、リサは言った。完全に、相手の大臣や兵士たちに怒りを売ったぞ。

「貴様！ 陛下の御前だぞ！ ひざまずいて名を申せ！ もう一度だ！！」

一人の兵士が、槍を突き出して叫んだ。リサはそれに見向きもしなかった。

「よい。余は気にはおらん」

と、皇帝は座ったまま手を出して、御した。

「しかし……」

「よいと言っておる」

兵士は観念し、一礼して一步下がった。

「……では、そなたの名前は？」

今度は空だ。

「日向空です。初めまして、皇帝陛下」

空は微笑み、ペコリと頭を下げた。

僕は思わず、笑ってしまいそうだった。口元を手で押さえてしまったのだ。特に緊張もせず、いつものままで自己紹介したところが、なんだかおかしい。

皇帝も最初はきょとんとしていたが、すぐに微笑んだ。

「ヒナタソラ……珍しい名だな」

「良く言われます。ところで、陛下はなんといい名前なんですか？」

えっ？

僕たちだけでなく、周囲の兵士たちまでもが驚きの表情で、彼女に顔を向けた。その時、皇帝の傍にいるヴァルバだけが、フツと微笑んでいた。

「ハハハ、そうだな。自分の名前も申さずに、そなたたちの名を訊くのは無礼だったな」

すまぬと、皇帝は軽く頭を下げた。

僕はその行動に、驚愕した。なぜなら、一国の主がこんな簡単に頭を下げたからだ。シュレジエンのラーナ様や、イデアの皇隆王は

ともかく、ルテティアの国王とゼテギネアの皇帝はかなり高飛車、  
というかプライドの高い人だと想像していた。国が大きい、と聞いて  
いたからだったかもしれない。

「余は、神聖ゼテギネア帝国6代皇帝……フィンジアス22代国王  
ゼナンⅡ ヴイルヘルムⅡ ルートヴィヒⅡ ベルセリオスⅡ フォンⅡ  
ペンドラゴン だ」

自分の胸に手を当て、威風堂々とした表情で皇帝は言った。

……なんだか、自分より年下のように思えなくなってきた。あ  
まりにも立派過ぎる。ガイアではこんなに丁寧に、しかも堂々とし  
やべることができる12歳なんていないだろう。

「それにしても、そなたのような名は聞いたことが無い。どこの国  
の者だ？ 髪の色からして、東方民族か？」

「陛下。彼女はこの世界と対を成す伝説の世界、ガイアの住人です」  
ヴァルバがそう言うと、一同がざわつき始めた。やはり、ゼテギ  
ネアもガイアのことについては、伝説だと思っていたようだ。

「ガイアだと！？ あの聖典に載っていた、伝説の世界のことだよ  
な！？」

「そのとおりです、陛下。ガイアは伝説ではなく、実在するもう一  
つの世界なのです」

「なんと……」

周囲の大臣たちは信じられない様子で、空を何度も見ている。

「私はどういったものなのかは見たことありませんが、彼女をご覧  
になっておわかりのように、我々と同じような姿・形をしている人  
類が存在し、言語も持っています。聞くところによると、この世界  
よりも数千年経過したほどの、高度な文明を誇っているということ  
です」

「我々の文明を超えていると？ では、古代ヴァナヘイム文明と同  
じくらいなのか？」

皇帝の問いに、ヴァルバは少し言葉を詰ませた。

「……あれとは、また次元の違うものであると思われませぬ。いずれ

にせよ、地上を馬よりも数十倍の速さで走る人工的な乗り物があったり、天空を飛ぶ石の塊に大勢の人々を乗せるなど、想像を絶するものであることは、間違いありません」

それは全て、僕が旅の途中で話したことだ。その時は、アンナもヴァルバも目を輝かせて訊いていたっけ。

「ほほう……それはすごい！ 見てみたいものだ、その世界を！  
アヴェン老、そなたもそう思うだろ！？」

皇帝は興奮が抑えきれず、声を大きくした。あの気持ち、わかるなあ。僕も、この世界に来た時は、見るものすべてが新鮮で不思議で、不安や恐怖を好奇心が抑え込んだ。男っていうのは、いくつになっても好奇心は変わらないんだろう。見たことも無い世界があり、実現しているとわかると、いてもたってもいられないんだ。

「たしかに、そうですね。巫女の研究と兵器の開発が終わり次第、  
18年前にとん挫した次元の研究も行いましたよ」

アヴェン老と言われたよぼよぼのおじいさんが、真っ白なひげで見えない口を動かしてしゃべった。しゃべる時、ひげが動いているのがなんだかおかしい。

「そして、日向空は唯一無二の『紺碧』の属性を持つ『蒼空の巫女』であります」

紺碧　それも、古代に開発されたエレメンタルなのだろうか。

「『時空』と同じように、『紺碧』も絶大な破壊力を持ち合わせています。しかも、操ることは難しい話ではないでしょう」

「では、その娘が？」

アヴェン老の隣に立っている、赤い貴族服のおじさんが言った。

「いや、この娘はインドラによって、すでにエレメンタルの結晶である宝玉を取り除かれている。今は、太古の薬で乖離が抑えられているが、少しでも何かをすれば、命を落としかねん」

と、ヴァルバは首を振った。

「よいではないか。破壊力のあるエレメンタルを持ち、操作することもできるのならば、命を奪ってでも研究すべきだ」

厳格そうな黒ひげの大臣が言った瞬間、僕は奴を睨みつけた。

「てめえ！ お前たちの利益のために、空は死んでもいいというのか！！ ふざけるな！！」

僕は声を上げていた。自分でも、気付かないうちに言っていた。

「き、貴様！ 賊の分際で、ワシを愚弄するか！！」

「貴族だからって高貴なのか？ 生まれつき、高貴な人間なんかいるか！ 簡単に人を殺してもいいと言ったお前なんか、賊以下だ！」

「な、なんだとお！？ もう一度言ってみろ！」

「なんとでも言ってる！ この最低貴族！ お前の方が下賤だ、ボケ！」

「ソ、ソラ、止めるって」

デルゲンが僕の前に立ち、奴から僕を見えないようにした。

「あいつが悪いんだ！ 空を……人の命を、なんだと思ってるやがる！！」

どこに行っても、ああいう考え方をする人間がいるのに対して怒りを覚えるのと同時に、どこか虚しい気持ちもあった。

「ソラ、気持ちはわからないでもないが、それ以上言ったら……」

「いやいや、そこは言わないと。俺も腹がたっちまってさ」

レンドは腕をぶんぶん回していた。

「た、頼むから変なことは……」

「このデブ貴族！！」

「って、おいおい……」

僕は悪ガキ風味で言ってるやっただ。デルゲンは、大きく肩を落とすてしまった。

「き……貴様ああ！！ 誰か、こやつを殺せー！！」

「あーあ、私は知らないって」

黒ひげの大臣は兵士に命令した。兵士は槍を携え、僕の方に向かって来た。暴れたくは無かったが、しょうがない。殺されそうならば、やるしかない。僕は、自らの内に呼びかけるようにした。

「待て！！」

ヴァルバが叫んだ。もう少しで、力を解放するところだった。僕に言ったのか、兵士に言ったのか。

「止める。陛下の御前で、血を流すつもりか？」

「か、閣下！ なぜ止めるのです？ 奴は、ワシを冒涇したのですぞ！？」

「カブール卿、そなたが軽率な発言をするからだ」

ヴァルバがそう言うと、言葉の意味が理解できないのか、大臣は当惑した表情をした。

「利益のためだけに、人間を殺してもよいという発言をしたそなたに非がある」

「ですが、我が帝国の繁栄のためにはそれ相応の犠牲が……………」

「カブール。私は帝国宰相であり、皇族だ。その私の命に従えぬのか？」

「くっ…………ぐ…………っ！」

抑えようのない怒りで、カブール卿はブルブルと震えていた。

「もういい。カブール、そなたの今日の発言を禁止する。よいな？」

皇帝はため息交じりに言った。

「で、ですが！」

「余の命は絶対だ。カブール、下がれ」

冷酷な視線で、皇帝はカブール卿を御した。本当に、12歳かと疑いたくなる光景だ。

「……………御意」

そして、カブール卿は奥へと下がって行った。

「すまぬな、宰相。続けてくれ」

ヴァルバは一礼し、一度咳をして喉を整えていた。

「……………レモン色の髪の少女ですが」

ヴァルバの声と共に、皇帝や大臣たちはアンナの方に目をやった。

「彼女は、先天属性として『治癒』を持ち、『斜光の巫女』であります」

「斜光の巫女？ 余はそんな巫女の名を、聞いたことがないぞ？」  
「……そうですね。しかし、『烈火の巫女』の影として存在する、  
真正銘の巫女であります。彼女の属性に破壊能力はあまり無いに  
しろ、ほとんどの人間が操れるほどのものであり、研究・開発には  
適しています」

「しかし、宰相。破壊力が無いということは、強力な兵器を作るこ  
ともできないということではありませぬか？」

再び、赤い服の大臣が言った。

「……そうだな。しかし、属性の名のとおり癒す方では最強の部類  
に入る属性だ。これを研究し、治癒兵器を開発できれば死人をほと  
んど出さない戦をすることができるようになるはずだ」

僕はハツとした。もしかして、あいつは……。

その時、立派なあごひげを蓄えた漆黒の服の大臣が、前で出た。

「閣下、お言葉でありますが……我らが求めていたものは、強大な  
力であります。味方を治癒するものではなく、敵を一瞬で殲滅でき  
るものを求めていたはずですよ」

「そうだ、そのとおりだ。『治癒』なんて甘ったるい属性では、我  
が国の長年の夢を成就させることなど、到底無理な話だ」

他の大臣たちにも、その考えが波及していった。そして、口ずさ  
むように「2人の巫女のほうがいいのではないか」と言い出した。  
こいつら、ヴァルバの考えが理解できないのだろうか。ヴァルバの  
配下でありながら、あいつの理想を理解できないのだろうか。

「閣下、『斜光の巫女』ではなく、『時空の巫女』に致しましょう。

彼女は、まだ宝玉を抜かれておらぬのでございましょう？」

「……………」

ヴァルバは眉間にしわを寄せ、何も言わずに発言を聞いていた。

「操作が難しいと言っても、まだ研究もしていません。もしかした  
ら操作が可能となり、より強力な兵器を開発できるかもしれませぬ  
ぞ」

「おお！ そうしたら、我らの夢も達成されますな！」

空想のことに身を入れ、その中で夢見ている愚か者たち。何が夢だ。多くの人々を殺す兵器を作ることが、夢だと言うのか？ ふざけるのも、大概にしると言いたかった。

「陛下、ここは『時空の巫女』を選びましょう」

夢 だと発言していた大臣が皇帝のところへ駆け寄った。

「さすれば、先祖代々の夢を……陛下が実現できるのです」

「……………」

皇帝は腕を組み、口を横一文字にしていた。

「黙れ！！」

ヴァルバが、その大臣の胸倉を掴んだ。

「なっ……！！ 何をなされます、閣下！？」

「なぜ、殺人兵器を開発しようとか考えぬ！？ どうして、殺すことだけしか考えないのだ！！」

ステファンを倒し、ルーファス8世と謁見した時のヴァルバのようだった。怒りを露にしている。

「お、お言葉ですが、治癒の兵器を開発しても結局、戦を行うのなら同じことですぞ？ 戦争というものは長引けば長引くほど犠牲が多く出るものです。破壊兵器ならば、すぐに戦を終結させ、大陸の統一という夢も実現できる。そうではないですか！？」

「たしかに、戦をするならばそうだろうな。だが、治癒の兵器を開発できれば統一した後も利用できる！ 苦しむ人々を、救済することができる！ 破壊兵器などできたところで、戦が終わればただのガラクタでしかない！ 残るのは、言いよつの無い虚無と怨嗟だけだ！」

「ヴァルバさん……………」

アンナは、ジッとヴァルバを見つめていた。いや、僕たち全員が、

ヴァルバを見つめていた。あいつは、そういうことを考えていたんだ。祖国と、あらゆる民のことを。

あの大臣は、小さく顔を振った。

「閣下、思い出してください。我が国は建国されてから数百年……度々統一の夢を阻んできたのは、ルテティアのルシタニア家です。どこの馬の骨ともわからぬ下賤の一族如きに、主天使アムナリアの加護を受けた、我らがペンドラゴン家が屈してはならないのです！」  
負けじと、大臣は口早に言った。

「本当は18年前……閣下の父君であらせられます、ベルセリオス6世陛下の治世の時に、統一の夢は成し遂げられたはずなのです。

……それを、あのアヴァロンの逆賊どもによつてとん挫され……」  
悔しさなのか、大臣は震えながら俯いていた。どこか、演技のように見えるのは勘違いだろうか。

「今度こそ……今度こそ果たすべきなのです。我が国の夢を！ 統一の夢を！」

声高々に、大臣は言う。あんなことを言つて、忠誠心を煽ろうつていう魂胆だろうな。

「……たしかに、父は統一の眼前で御倒れになった。だが、兄上は……先帝陛下は違う。先帝は、平和を愛しておられた。国民を愛しておられた。だからこそ、一度も戦争を起さなかつたのではないか……！ ……私は先帝に誓つたのだ。その願いを、きっと叶える……！」

「な、ならば、2人とも手に入れてしまえばいいのです！ 治療と破壊の兵器、両方を造り上げれば、戦は早々に終結でき、民の救済できるではないですか！」

焦っているのか、大臣は慌てた様子で笑顔になっていた。

「ダメだ！ これ以上、巫女を犠牲にしてはならない。……必要最低限の巫女だけで、十分だろう？ 彼女たちも、我々と同じように人間なのだ。持ち物ではないのだ。……『斜光の巫女』ならば操作も簡単で、しかも研究や実験により、彼女自身に対する痛みや苦し

みも無いはず！」

「し、しかし……」

「もうよい!!」

ヴァルバたちは皇帝に顔を向けた。皇帝は、右手を前に出して御していた。

「……宰相の考えはわかった。大臣たちの考えもわかった。最終的な決断は、余が下す。よいな？」

ヴァルバは大臣から手を離し、皇帝に深々と頭を下げた。

「御意のままに……」

皇帝は小さくうなずき、そっと目を瞑った。どうするべきなのか、考えているのだろう。自分の決断が、国を動かすのだから。

「……では、判断を下す。余は」

ドゴオオオン!!!!

巨大な爆音と共に、城が揺れた。

## 55章：襲撃！ 護るべきもののために

「な、なんだ!？」

「どうしたのだ!！」

揺れは収まったが、みんなはざわついていた。何が起こったのか、皆目見当が付かない。

「陛下ア！ 大変でございます!!!！」

大声を響かせながら、数人の兵士が謁見の間になだれ込んで来た。息を切らせながら皇帝の近くに行くと、片膝を付いて一礼した。

「どうした？ 何が起こっているのだ!？」

「て、敵が このアヴァロンを襲撃してきました!！」

「敵……だと!？」

皇帝は驚き、玉座から立ち上がった。

「敵はどこだ!？ ルテティアか!？」

「そ、それが……わからないんです」

困惑した様子で、兵士は言った。

「わからないだと？ なぜだ!？」

「見たことも無い服装をしておりますし、軍旗も掲げていないので……」

軍旗さえも……ということとは、国ではない？ ゼテギネアは複数の国による連合国家のため、反乱が良く起きると聞いたが……。

「敵は、すでに城の近くまでやって来ています！」  
他の兵士が言った。

「カーレル元帥は!？」

「そ、それが、まだアヴィニオンに滞在中でございまして……」  
兵士たちはオロオロとした様子で言った。

「すぐに呼び戻せ！」

「は……ハッ！」

足をばたつかせながら、兵士は出て行った。

襲撃してきた奴らがルテティアではない。と言うより、国王や宰相が殺されたルテティアが、こんなすぐに襲ってくることは考えられない。いや、そもそも、遠く離れたこの帝都に直接、襲撃してくること自体が考えられない。じゃあ、一体……？

「親衛隊は陛下をお守りし、後宮へ！ 城にいる兵士は、城門の前へ行って敵の侵入を防げ！ レイン卿、そなたが指揮官として行ってくれ！」

「ハッ！」

ヴァルバは混乱するこの広間の中、冷静且つ大声で命令を下した。

「……まさか、インドラじゃあ……」

デルゲンがぼそつと呟いた。

「インドラだって……?？」

たしかに、襲ってくる奴らと言えばあいつらしか思い当たらないけど……。

「だけど、なんで？」

「……あいつら、ソフィアでの会議の折、各国の首脳を一網打尽にしようとしていた。だけど、ゼテギネアだけは来なかったから、殲滅することができなかった。だから……強硬手段に来たのかも」

「……！」

リサの言うことも尤もだ。そうとしか、考えられない。奴らなら放っておくことはできない。これ以上、犠牲者を出すわけにはいかない！

僕はバルドルの力を解放した。その瞬間、僕の髪の色はいつもの黒ではなく、青へと変化した。その力で、僕は自分の手錠をぶち壊した。

「ソラ！？ 何をするつもりだ！」

それを見て、ヴァルバが叫んだ。

「奴らなら、普通の兵士じゃあ太刀打ちできない！ 僕も協力してやるってことだ！」

「だが……！」

彼は迷った様子で、顔を振る。

「ヴァルバ！ ここは手を組もう！」

「……何？」

「ここは一時休戦し、協力しよう！ 相手がインドラなら、協力しないとダメだ！ 僕たちは犠牲者を出したくない。……それは、お前も同じだろ？」

ヴァルバは僕を見つめた。僕も、同じように視線を向けていた。

そう、目指すことは同じだ。

「……わかった！ 頼む！」

ヴァルバはうなずき、微笑んだ。

「閣下！ 囚人ですぞ！」

一人の兵士が、声を上げた。

「囚人もくそもあるか！ あいつは……あいつらは、俺の仲間だ！」  
「か、閣下……」

少しだけ、ジーンと来てしまった。こんな時に、いちいち感動させるようなことを言わないでほしいもんだ。

「空！ 私も行くよ」

軽くストレッチをしながら、リサはこっちに来た。

「もしシュヴァルツたちが来ていたら、あんただけじゃあ敵わないかもしれないしね」

作戦遂行に、幹部の奴らは絶対に来ている。きっと、奴らも……。

「……そうだな、行こう」

「おいおい、俺たちも参加するぜ！」

「それより、手錠を外してくれよ」

デルゲンは笑いながら両手を差し出した。そうだった、これじゃあ戦えないもんな。僕はレンドとデルゲンの手錠を掴むと、引きちぎるかのように破壊した。うーん、我ながらこの力はすごいもんだ。

「ヴァルバ！ 俺たちの武器を貸してくれ！」

デルゲンが言った。ヴァルバは、広間に飾ってあった豪華な槍と斧を手に持ち、僕たちに向かって投げた。デルゲンは槍をキャッチできたが、レンドは斧をキャッチできなかった。

「……取れよ」

僕は冷たい視線でレンドを見た。

「馬鹿！ 危ねえだろ！？」

と、彼は苦笑した。

「ところで、ソラの武器は？」

「大丈夫。ここにあるから」

僕は手をかざし、心の中でその名を呼んだ。

ティルフィング、と。

すると、青い光が一瞬にして僕の右手に集結し、剣の形を成していった。久しぶりを見る、聖魔の神剣の姿だ。

「これは……」

レンドは剣を見つめながら言った。そっか、僕以外、見るのは初めてだったな。

「聖魔の神剣ティルフィング……アイオーンが携えたっていう、伝説の剣だよ」

「……空が、自分を取り戻した証だよな」

リサはニツコリと微笑んだ。ああ、たしかにそのとおりだ。自分を取り戻し、多くの人を救うために手に入れたものだ。それがこの剣だ。

「よし、じゃあ……」

「待って！」

僕は声がした方に振り向いた。空だ。

「？ どうした？」

「あの……」

言葉がうまく出て来ないのか、視線があっちに行ったりこっちに行ったりしている。

「お前はここにいろよ」

「い、いえ、その……気を付けてくださいね」

「わーってるよ。そう易々とやられるかって」

僕は笑いながら言った。バルドルの力を手に入れたんだ。ちょっとやそつとでは、負けるつもりなんか無い。

「……」

それでも眉を八の字にしている彼女に、僕は軽く撫でてやった。「な、なんですか！？」

いきなし撫でられたので、彼女は困惑している様子だった。

「ん？ いや、相変わらずちっさいなあ〜って思って」

「い、いきなり何言ってるんですか！」

顔を赤くして、いつになく大きな声で彼女が言った瞬間、僕はニコツと笑った。

「よし、大丈夫そうだな」

「え？」

目をパチクリさせている彼女は、まだ顔が赤い。

「少しは楽になったろ？ んじゃ、行って来るよ」

「そ、空さん……」

僕は笑顔で握りしめた手を彼女に向けて出し、親指だけ立てた。

「どうか、気を付けて……」

神妙な面持ちのアンナが言った。

「アンナ、ヴァルバがお前を守ってくれる。きつとな」

勇気付けようと、僕は彼女の背中を軽く叩いた。それと同時に、

彼女は小さく微笑んだ。そして、僕たちは走り出した。

「ヴァルバ！ ちゃんとやんなさいよ！ 空ちゃんとアンナにケガを負わせたなら、後で承知しないからね！！」

外への扉へ向かう途中、僕の隣にいるリサが言った。

「言われなくてもわかってるよ！」

多くの人のごった返す中、横目でギリギリ、ヴァルバが見えた。

視界に入った瞬間、彼が微笑みながらうなずくのがわかった。

任せたぞ。

そう行ってくれた気がした。

「外は扉を出て真っ直ぐよ！」

城門から出ると、外は月明かりと兵士たちが携えているたいまつ

の炎で、闇夜が照らされていた。そして、戦をしている声が響いてくる。さらに、城壁などが崩れる音、人の悲鳴も木霊する。

ゼテギネアの兵士と戦っているのは、黒い服装……やはりインドラの下っ端、グルヴィニアたちだ。剣を振りかざし、兵士を殺している。少し離れた所で、暗黒魔道士が詠唱をしている。

都のあちこちから、黒煙が昇っている。帝都民も巻き込んでいるのだ。遠くから、民衆の悲鳴が聞こえる。家々の明かりは付けられ、慌てている様子が伺える。

「……城門の所は、人が多すぎて入ることもできなさそうだね」  
リサは落ち着いた声で言った。城の内部に通じる城門の前に、もう一つ巨大な城門があつて、そこに大勢の敵味方が入り乱れているのだ。

「じゃあ、ここは兵士たちに任せよう。あの様子だったら、まだ時間はある。その間、市街区の方に行つて民衆を助けよう」

「たしかに、ソラの言うとおりだ。でも、どうやって行くんだ？ 城壁が高すぎて、行くことができないぞ？」

城壁は20メートルくらい。だけど、この程度なら飛び越えられるだろう。僕は普通にジャンプする要領で、ジャンプしてみた。

僕は簡単に、城壁のトップに辿り着いた。幅が狭いので、僕は少しバランスを崩してしまった。

「おっとっと……ホラ、来いよ」

僕は手招きをした。レンドとデルゲンは、苦笑いをしている。

「「んなの、できるわけねえだろ！」」

「な、なんだよ……」

2人は僕を指差し、声を揃えて叫んだ。

「私はできますよっと」

彼女も同じように、空高く舞い上がり、僕の側に着地した。

「……………」

「ま、あんたたちはそこで頑張つてね」

リサは笑顔を振りながら言った。レンドとデルゲンは、ため息混

じりに、苦笑いしていた。

「おっと、その前に……」

リサは地上へ降り立った。

「念のため、エスナをかけておくよ。ホラ、空もこつち来て」

僕は同じように、下へ降りた。一応やっておかないと、万が一暗黒魔法を受けた場合、死んじゃうからね。

「……あまねく精霊よ、その庇護の下、邪悪なる意志を退けたまえ……神聖なる大海の雫 エスナ」

青い光たちがリサの手から離れ、僕たちを包み込むように四方へと散った。暖かい光が、僕たちの内側へ染み込んでゆく。

「……これでよし、と。んじゃ、ここは頼んだよ」

「ああ、任せとけ」

「そんで、何かあつたらこれを上空に打ち上げて」

リサは腰に付けた、小さなバツクから何かを取り出した。

「これは？」

レンドはそれを受け取り、まじまじと眺めた。ピンポン玉くらいの大きさで、ざらざらした表面だ。

「打ち上げ花火みたいなものよ。上空へ飛ぶ時、音を発してわかるようになっているの」

「……なるほど」

「じゃ、任せたよ」

「ああ。そっちも、気を付けてな」

デルゲンの言葉に、僕とリサはうなずき、再び城壁の上へとジャンプして上った。

「ひどいな……」

ここから市街区を眺めると、人々が通で入り乱れ、悲鳴を上げているのがわかる。あらゆることから、波打つ炎たちが猛威を振り、住居を破壊している。立ち上る黒煙が、この闇夜をいつそう深めている。

「……ともかく、行こう」

大きく跳躍しようとした瞬間、リサに足蹴りをすねに喰らわせられた。

「あのね、どの方向に行くか決めなさいよ」

「け、結構痛いですけど……」

「いいから、早く決めろっつもの」

だったら自分で決めろよ……と思いつつ、僕は再び帝都を見渡した。

「……あつちだな」

僕は第8市街区の方を指差した。

「たしか、あそこの城門は1番夜遅くまで開いてるって聞いた。あそこから、入っているような気がする」

「……なるほど。じゃ、行こうか」

僕はうなずき、城壁から飛び降りた。

降り立つと、兵士とグルヴィニアたちが戦っていた。

「なんだ！？ 上から人が！」

グルヴィニアたちが気付き、僕たちに向かって来た。

「僕は左の方をやる。リサは……」

「言われなくても、わかってるよ」

「さいですか」

ため息交じりにそう言うと、リサは右のグルヴィニア達へ突っ込んでいった。それぞれ、4、5人のグルヴィニアがいる。全員、剣を持って僕たちに襲い掛かった。

振り下ろされる剣。あまりにも遅く見え、僕は難なく避けた。そ

して、ティルフィングで敵の横つ腹を切り裂いた。

悲鳴と共に、グルヴィニアは倒れた。血がかかる前に、僕はそいつから離れて他の敵を見据えた。

自分が殺したことと自分の力に戸惑いつつも、僕は流れるように他のグルヴィニアたちへ向かった。

まるで、ゲームのようだ。スローモーションのように敵の動きが見え、簡単に避けれる。そして、一瞬で間合いを詰め、敵を切り裂く。そうすれば、簡単に倒れる。1人、2人、4人。ティルフィングを右へ、左へ、上へ、下へ。敵がバタバタと倒れてゆく。

僕は実感した。これが、調停者……バルドルの力つてやつだ。たしかにすごいが、同時に危うさを潜ませている。

気が付けば、リサもグルヴィニアをやっつけていた。

「……速いな、リサ」

「まあね〜」

リサは腰に手を当て、片手をブラブラさせて陽気に答えた。彼女の周りに、身動き一つしないグルヴィニアたちが倒れていた。

「……殺したのか？」

「ううん、気絶させただけ。それに足の骨を折ったから、目を覚ましてもどうにもできないよ」

「……さすがだな。僕は……殺すことしかできなかった」

そう呟くと、リサは顔を振った。

「しょうがないよ。あんたの武器は、私と違って剣だもん。攻撃すれば、死に至る可能性は高い」

「……」

「ホラ、行こ。助けを待つてる人がいるんだからさ」

リサは僕の背中を押してくれた。力を手に入れたのは、素直にうれしい。自分が、ようやく自分になった証なのだから。けど、この力のために殺さなければならぬことがある。インドラを止めるために、世界を守るために、奪わなければならぬこともある。そういうことは、わかりきっていたはずなのになあ……。

第8市街区。他国の人や、商人たちが通る場所。しかし、今は逃げ惑う大勢の民衆の後ろから、剣を携えたグルヴィニアたちが襲い掛かる。

僕とリサは住宅を屋根づたいに急行し、グルヴィニアたちの前に降り立った。

「!? 誰だ、貴様ら！」

グルヴィニアたちは追いかける足を止め、僕たちを睨んだ。

「誰って……えと」

「説明する必要なし！」

と、リサは僕に再び足蹴りをした。ま、またすねを……。

「リリーナだ！ あの女、リリーナだぞ！」

グルヴィニアたちはざわつき始めた。今がチャンス。そう思い、僕は突撃した。

「!!!」

グルヴィニアは驚いていたが、もう遅い。駆け抜け際に、そいつの左足を切り裂いた。完璧な感触。敵の左足が、斬れた。

「ギャアア!!! あ、足がああア!!!?」

通に転げ回り、叫び声を上げている。リサも、他の敵の方に突撃していた。

「豪嵐の大气、我が魂となりて駆け抜けよ！ 奥義 爆烈衝弾！  
！」

リサは両手を引き、一気に押し出した。そこから、巨大な衝撃波が弾き出された。その衝撃波は、敵をなぎ倒す風となった。グルヴィニアたちは、将棋倒しのように前から後ろへ倒れていき、さらに10数メートルも吹き飛ばされていった。

「さらにい……大地をも震わす、破壊の振動！ 轟け、閃波・剛爆！！」

爆音を響かせる衝撃波が、再び敵陣へと駆け抜ける。強烈な衝撃波を2度与えることで、敵の意識を断ち切るうとしたんだ。

「やるじゃないか！」

「よそ見してないで、他の敵をやっつける！」

「わかってるよ！」

素早く僕は敵陣を駆け抜けた。敵は血しぶきを上げながら、バタバタと倒れてゆく。後ろに気配がし、一回転しながら後ろの敵の胸を切り裂く。横へ移動し、さらに他の敵に斬りつける。噴出してくる血が自分にかかる前に、別の所へ移動し、敵に斬りつける。ホントに、すごい速さだ。ティルフィングも、紙切れのように軽い。本当に、自分でないみたいだ。だけど、ちゃんと意識はある。

これこそが、調停者だけに与えられた力。

僕は1つ、あることをやってみようと思い、手をかざした。今なら、聖魔術を使うこともできるはずだ。心の奥に渦のように流れている言葉を選んで繋ぎ、言霊にして放つ。

「獰猛なる殺戮の嵐……永遠の命を捧げよう。広がる、あまねく命を奪うがいい」

緑色の波紋が僕を中心に広がり、そこから光が立ち昇るようにして僕のかざした手に集う。

「疾風の帝王　ガヴァルゲノス！」

詠唱が終わった瞬間、前方にいたグルヴィニアたちの足元に、渦を巻く風が動き出した。それは、見る見るうちに巨大化した。通を埋め尽くしていたグルヴィニアたちが獰猛な風に切り刻まれつつ、悲鳴を上げながら上空へ昇ってゆく。

「おお〜、すっげー」

リサはまるで上空にいる鳥を眺めるかのように、その光景を見つめていた。緊張感が無いというか、なんというか。

殺戮の嵐は数百人のグルヴィニアたちを巻き込み、音も無く消え去った。舞い上がったグルヴィニアたちは、数十メートルの高さから、地上へと叩きつけられた。たぶん、今で生きていた奴も死んでしまっただろう……。

恐ろしいくらいに、巨大な破壊力を持つ聖魔術。とても、人間が生み出したものとは思えない。

僕は、自分の掌を見つめた。

……どこをどう見ても、普通の人間の掌にしか見えないんだけど。昔、親戚のオジサンに手相を見てもらったら、「生命線が短いなんてことを言われたっけ。あの時は、真剣に悩んだもんだ。30代で死ぬんじゃないかってさ。僕は思わず、ほくそ笑んでしまった。

「何笑ってんの？」

「……いや、別に」

「??？」

リサは頭にクエスチョンマークを浮かべていた。こんな時に、平和な頃の自分を思い出しても仕方が無い。

この通の敵は、一通り殲滅した。僕たちは、戦う姿を呆然と眺めていた民衆たちを、安全な場所へ避難するように言った。

「……よし、これでここは大丈夫だな」

「うん」

その時、花火が打ち上がる時のような音が、月が光る夜空へ響いた。これは……レンドたちに渡したやつものだ！

「何かあったんだらうか？」

そう問うと、リサは帝城を見据えた。

「わからない。ともかく、戻ろう」

僕たちは急いで、帝城も門の所へ急行した。

そこでは、まだ戦いが繰り広げられていた。しかし、どうも様子が違う。さっきまでは一進一退の攻防だったのに、今はグルヴィニアたちに押されている。

僕たちは城壁に上り、レンドたちを探した。そして、門の手前にいる2人を見つけた。2人は攻撃を受けたのか、地面に這いつくばっている。僕たちはすぐに駆け寄った。

「大丈夫か!？」

レンドは、口から一筋の血を流していた。体のあちこちにも、傷が見受けられる。

「ソラ……あ、あの女が……」

「あの女……?」

レンドはある場所を指差した。その方向に目をやると、一人の人間が上空に浮かんでいた。あのシルエットは

「ミランダか!？」

聖霊術師ミランダだ! やはり、幹部の奴が来ていたか……。

「こんなところでお出ましかよ……やれやれ」

めんどくさそうに、彼女はため息をした。

「リサ、なんだか嫌そうだな」

「当たり前じゃん。あいつ、いちいち魔法使うから嫌なんだよ」

魔法使うのはお前も同じでしょ。

「……ミランダのスレンダーボディに嫉妬してるのかと思っ

ボゴツ!

リサの後ろ回し蹴りが、僕の顔面に命中。衝撃で、僕はしりもちを付いてしまった。

「い、いつてえ!!」

「嫉妬なんかするか! 私の方が美人だ!!」

「そ、そういうことを言ったわけじゃなくて、体つきがだな……」

「待て! ソラ! ……それ以上言うと、殺されるぞ」

デルゲンは僕の肩を掴み、肩で大きく息をしながら言った。……傷を負って辛いはずなのに、わざわざ警告してくれるなんて……サックス。

ミランダは僕たちに気が付いたのか、空中に浮いたまま、こっちに近付いて来た。

「お久しぶり。会いたかったわ」

と、彼女は腕を組んで微笑んでいる。

「……私は会いたくなかったけどね」

「フフ、私もあなたには会いたくはなかったわ」

ミランダの言葉に、リサの口が引きつく。これはヤバイ……。

「落ち着け。挑発なんだから……」

「わかってるよ!」

僕は軽く裏拳を食らわせられた。か、完全に挑発に乗っている。わかってるのに、怒っている。

「んで? 帝都に何の用なのさ?」

リサは邪悪な笑顔で言った。それを見て、ミランダはニコツと微笑んだ。

「……教えない」

「何よそれえ!!」

馬鹿にしてんのか　!!　リサは腰に手を当て、かっこよくミランダを指差した。ミランダは思わず、口に手を当てて笑い出してしまった。た、たしかに、今のポーズのリサは面白い……。

「どうせ、すぐにわかるわよ。私たちの目的なんてね……」

ミランダは僕に目をやった。

「……とうとう、覚醒しちゃったのね」

燃え盛る炎の明るさに当てられて、彼女の灰色の髪が輝いているようにも見える。

「結局、あなたも力を求めたってことね……」

「……護るための力だ。ただ破壊し、殺戮を行うためのものじゃない」

「どうだか。余りあるものを持つ人間は、最終的に暴走する。それが、人間というものよ」

蔑むかのように、彼女は口元に手を添えて笑った。

「……たしかに、そうかもしれない。けど、僕にはリサたちが……みんながいる。仲間がいたから、僕はここに立ってる。だから……僕はもう迷わない」

彼らの声があったからこそ、僕は僕として存在できている。それを忘れてしまえば、僕は再びロキに蝕まれてしまうだろう。

「仲間？　フフ、齒が浮くようなセリフを吐くのね」

「何？」

ミランダは顔を振った。

「そんなもの、必要無い」

「……樹やシュヴァルツたちは仲間じゃないのか？」

「……同志よ。同志であって、仲間じゃない。最初から仲間意識なんて持っていないもの……」

ミランダは僕から視線をそらした。仲間じゃない。仲間じゃないなら……どうして、樹の理想に賛同したんだろう。どうして、協力するんだろう。同志も、仲間じゃないのか？

その時、後ろから爆音が轟いた。後ろに振り向くと、帝城の1階の所から、土煙と共に壁が音を立てて崩れている。

「な、なんだ？」

「だから、すぐにわかるって言ったでしょ？」

僕はミランダの方に向き直った。

「……私たちの狙いは、遺跡の場所が記された古書を手に入れること。それは、皇帝ゼナン5世が持っていると聞いたからね……」

「……………しまった!!」

まずい……1階には、空とアンナがいる！僕は帝城内部へ走り出そうとした。その時

「……」

僕の前に、轟音と共に雷が落ちた。

「そうはさせない」

後ろへ振り返ると、ミランダの周囲に黄色い光が唸りながら漂っている。

「あなたたちを用が済むまでここで食い止めるのが、私の役目」

「くっ……………」

1階に襲撃してきたのは……きっと、シュヴァルツたちだ。あの壁を破壊でき、確実に任務を遂行するやつといえば、あいつらしかない！だとすれば、普通の人間では太刀打ちできない。僕たちじゃないと……!!

「今度は、前のようにはいかない……」

ミランダは空中で手を夜空にかざし、詠唱を始めた。

「ほとばしる紫電の光……空を泳ぐ竜の如く、その逆鱗を大地に降らさん……………」

バチバチと雷鳴が轟く。



「ソラ、俺たちは……まだ動けない。2人で、空ちゃんたちを……！」

デルゲンが、傷付いた体を起こしながら言った。

「……わかった。行こう、リサ！」

「うん。二人とも……後でちゃんと治療してあげるからね！」

リサはうなずき、僕たちは帝城内部へと走って行った。

「させるか！ 雷光の刃よ、ライトニングブレード……！」

ミランダは空中から再び魔法を唱え、発動した。しかし、漆黒の剣士がその魔法の前に立ちはだかり、氷の魔法でそれを防いだ。

「くっ……！ 漆黒の剣士、貴様……！」

ミランダは歯ぎしりをしながら、再び印を結んだ。

「……ククク……」

「何がおかしい……！」

ミランダがそう言うのと、漆黒の剣士は人差し指を立て、左右に揺らしながら「チツチツチ」と舌を鳴らした。

「愚かな奴だ」

「『雷光天使』を操れる程度のお前が、この俺に勝てると思っ  
てんのか？」

「……！ 貴様、なぜそれを……！！？」

漆黒の剣士は、初めて言葉を口にした。ミランダはそのことよりも、雷光天使のことを知っていることに驚きを感じた。

「俺に勝てれば教えてやるよ。尤も、一般人のお前に負けるつもりなんかねえけどな」

「な、なんだと……!!」

「さあて、楽しい楽しい殺戮ショーの始まりといこうか!!」

漆黒の剣士が持つ、水晶のような刀身を持つ片刃の剣が青く煌めく。そして、一瞬にして宙に舞い、空中にいるミランダへ切りかかった。

「なっ ……!!」

## 56章：黒い魔狼 暴帝よ、紅き血潮を謳え

僕たちは、謁見の間へと急いだ。あそこに、まだ皇帝や重臣たちはいたはずだ。狙うなら、あそこだ。

謁見の間へ急行すると、そこには大勢のゼテギネア兵士と共に、グルヴィニア剣士や魔道士がいた。あちこちで戦いを繰り広げている。僕は床に倒れている空を発見した。

「空！！」

思わず、僕の心が凍り付いた。まさか、あいつ……！！

しかし、声に反応したのか、空は体を起こして辺りを見渡した。

彼女は僕を見つけると、

「空さん！」

僕の名を呼び、彼女はもたつく足をどうにかして、駆け寄ろうとしてきた。だが、彼女の背後に、剣を携えたグルヴィニアの姿があった。

「空！ 伏せる……！」

僕は空に向かって叫び、その方向に手を向けた。空はすぐに、頭を抱えながら床へ伏せた。

「インフィニティ！」

かざした掌から、青い光線が飛び出した。それは彼女の上を通り過ぎ、グルヴィニアに直撃した。

「ギヤアアアアアア……！」

グルヴィニアは、そのまま後ろへ他のグルヴィニアを巻き込みな

がら吹き飛んでいった。

「空!!」

僕は空の所へ駆け寄った。

「大丈夫か!? 怪我は無いか!?」

「は、はい……」

空は怖かったのか、少しだけ震えている。どうやら、ただ単に転んでしまっただけだったのだろう。

「アンナ! こっちに!!」

戦場となった謁見の間で、逃げ場を失って縮こまっているアンナに叫んだ。彼女の周りでは、多くの戦闘が繰り広げられて来ることができないようだ。

「ちっ……リサ、空を頼む!」

「りょーかい!!」

僕はアンナの活路を切り開くため、近くにいるグルヴィニアたちを倒そうとした。体勢を低くし、素早く敵の首や脇を狙う。そこが、急所だ。

1人、2人、3人……そして、10人。僕は、次々と敵を斬り殺していった。それぞれの断末魔の叫びが、耳の奥へ響く。そして、ようやくアンナの元へ辿り着いた。

「アンナ! 大丈夫か!?」

「ソラ……さん……」

彼女は、すでに泣いてしまっていた。

「怪我は無いか? 立てるか?」

アンナは震える足を何とか立たせた。よほど怖かったのだろう。目の前で、大勢の人が殺し合いをしているのだから。

「ソラさん、奴らが……」

「奴ら? !!?!」

その時、後ろから何かがやってくる気配がした。僕はアンナを自分の後ろへどかせ、後ろに振り向いた。その瞬間、太い豪拳が襲い掛かってきた。僕はそれを、ティルフィングで防いだ。

「お前は シュヴァルツ!?」

カナンの聖塔の時と、同じ服装。藍色の髪。うなじの辺りで、長い髪を結っている。

「よお、小僧……ふん!!」

彼のもう一つの拳から、強烈な一撃が繰り出された。それを僕はしゃがんで避け、そのまま剣を振り上げた。しかし、シュヴァルツはバツク転でそれを避けやがった。そして、玉座のある所に着地した。そこには、同じ顔の人間 バルバロツサだ!

「襲撃して来たのは、やっぱりお前たちか!」

僕は大声で言った。じゃないと、この騒ぎでは聞こえない。

「なんや、生きとつたんかい。……………アホな残留思念に食い破られ、あの聖域の最果てで彷徨うてる思うたんやけどな」

バルバロツサが細目でそう言うと、奴らはカカカと、同じように笑い始めた。双子のため、余計に腹が立つ!

「残念だったな。僕は、お前らが思ってるほどやわじゃないってことさ!」

僕はティルフィングを構えた。それを見た奴らは、顔から一瞬だけ笑みを消した。

「ティルフィング……ほう、それを己の心中に喚び起こしたか」

「ま、バルドルの力を手に入れたかて、ワイらに勝てるとは限らんけどな」

バルバロツサは首元まである黒いタイツに、茶色いベルトをしている。あの時と同じように、ポニーテールにしている。

体が震えた。

ラグナロク最強の戦士。そんな奴らを、僕は倒せるのだろうか。生半可な力では、敵いつこない。けど……奴らを倒さないことには、樹の所に辿り着けない!!

「シュヴァルツ、バルバロツサ!!」

リサが僕の隣までやって来た。

「なんや、お前もおるんかい」

「決着を付けてやる! かかって来い!」

リサは武道家のように構え、叫んだ。シュヴァルツとバルバロツサは同じように笑った。

「決着を付けるやってえ? アホか。お前が、ワイらに敵うはずあらへんやろ」

バルバロツサは腕を組み、笑顔で言う。それを、リサはけなすかのように鼻で笑った。

「やってみなくちゃわからない。私は、あんたたちを倒すため……いや、あんたたちを止めるために、修行を重ね、魔法を会得し、今まで生きてきたんだ!」

「ふん……女のお前に、ワイらを止めれるかつちゅーねん。生まれつき、お前とワイらには能力に差がある。それを、いくら努力しようとも埋められるわけあらへんやろ」

シュヴァルツは不敵な笑みを浮かべ、リサを睨んでいる。

「たとえ才能に差があったとしても、私はそれを埋めるために女を捨てて生きてきたんだ!!」

リサは手を合わせ、何かを呟き始めた。

「……我に眠る、聖魔の血よ……具現せよ! 魔闘気!!」

禍々しい紫の光がリサを包み出し、そして発光した。

「魔闘気か……ま、それを使わんとワイらには勝てんやろうな」

「うるさい！」

リサは怒りを露にしなから、奴らに向かって行った。

「大気をも震わす、破壊の振動！ 閃波・剛爆！！」

離れた場所から、リサは強力な衝撃波を繰り出した。

「……ふん」

シュヴァルツは前に手を出した。衝撃波を受け止めようとしているのか……と思った時、衝撃波はシュヴァルツの目の前で離散した。まるで、シュヴァルツの前に巨大な壁でもあるかのようなだった。

「！！！？」

「しょぼいのお……本物は、こうするんや！ 破壊の振動 閃波・

剛爆！！」

シュヴァルツの拳から繰り出された衝撃波が、リサに襲い掛かる。彼女は両腕をクロスさせて、それを防いだ。なのに、彼女は後ろへ少し吹き飛ばされてしまった。

「くっ……！！」

「ハハハ！ 軟弱な女やなあ！！」

今度は、シュヴァルツが攻めかかった。僕も奴の方へ向かおうとした。しかし、僕の前にバルバロッサが立ちはだかる！

「行かすかい、ボケエ！」

「バルバロッサ！！」

奴の攻撃を、後退しながら素早く避ける。しかし、バルバロッサもそれに付いて来る。

「果てしなき、魔狼の瞬撃 奥義！ 皇狼閃剄脚！！」

バルバロッサの体が黒く光り、連続蹴りが繰り出された。

「ちっ！」

僕は防戦一方となった。リサや奴らがラグナ格闘術を使用した時、強力なソリッドプロテクトが発動し、さらにスピード・攻撃力も増しているようだ。ラグナロクの一族にだけ備わっている、何かが作

用しているのかもしれない。だが、特技や奥義が終われば、そこがチャンスとなる。そこを狙う！

シュヴァルツの最後の蹴りをガードし、それを跳ね除け、僕はバルバロッサに切りかかった。今度は、僕の番だ！

素早く連続切りを繰り返すが、バルバロッサはそれを紙一重で避けていく。バルドルの力を使っても、あいつらはまだ避けれる範囲にいるというのか……！

「インフィニティ！」

奴が少し大きく距離を開けた瞬間、僕は手を奴に向けて広げた。青い光線が、バルバロッサを襲う。

「ぬ……！」

バルバロッサは、両腕をクロスさせて防御をした。光線はバルバロッサに当たり、爆音を立てて粉塵を巻き起こした。

「……なかなか、やるやないかあ！」

バルバロッサの笑顔に、一筋の血が流れていた。

「死ねや！ 獣牙閃！！」

「喰らうか！！」

リサはシュヴァルツの岩をも貫く豪拳を、左へ回転して避けた。

「宙に舞え、鮮麗なる不死鳥と共に！ 奥義、華竜鳳凰閃！！」

紅きオーラを纏い、回し蹴り、さらに連続回転蹴り、そして連続パンチとアツパーカットを繰り返す。シュヴァルツはリサの攻撃の速さに、防御するしかなかった。

「この……うるああ！」

シュヴァルツの豪拳を、リサは後ろへステップし、軽やかに避けた。しかし、リサとの間合いが少しだけ離れた瞬間、彼はニヤリとした。

「大地を駆ける、魔狼の咆哮　死ね！！　奥義、魔翔爆霊波！！」

「早っ！！！」

シュヴァルツの連続拳から繰り出された黒い衝撃波が、リサに襲い掛かる。巨大な弾丸の如く、10発もの衝撃波をリサは左右に避けていた。

全てが打ち終わったとき、シュヴァルツはリサに体勢を整える隙を与えないため、さらに連撃を繰り返した。

リサは最初のパンチをかわした後、蹴りを繰り返した。

「はあっ！！！」

「ぬん！！！」

シュヴァルツも同じように、蹴りを繰り返し、それは両者の前でクロスするようにぶつかった。リサのほう足が細いのに、両者の蹴りは拮抗していた。

「ほう……ワイの蹴りを受け止めるとはな。せやけど、それはお前が魔闘気を纏つとるからやで！」

「黙れ！」

リサは上へ飛び上がり、空中蹴りを繰り返した。それはシュヴァルツの側頭部に直撃した。しかし

「貧弱が！！　んなの、痛くもかゆくもないわ！！！」

「！？？」

シュヴァルツはリサの攻撃してきた左足を掴んだ。  
「碎けるー!!」

「きゃ　　っ!!」

シュヴァルツは彼女を掴んだまま、地面へ叩きつけた。衝撃で、床は円形にへこみ、碎け散って上空へ浮かんだ。リサは、全身を強く打した。

「うるああ!!!」

リサを振り上げ、再び床に叩きつける。

「が……かつ!!」

リサの骨が、軋む。

まずい……魔闘気を使用しても、こんな様だなんて……!

シュヴァルツの力は、尋常じゃない……!!

「安心しろ、こんなことで死なさんわい!!」

シュヴァルツはそう言うと、リサを空中へ放るよう投げた。

「荒れ狂う竜巻、切り刻め!　奥義　嵐龍烈襲閃!!」

シュヴァルツの繰り出したコークスクリューから、獰猛な竜巻が吹き飛んで行った。それは、ものすごいスピードでリサに襲い掛かる。ダメージを負っているリサでは避けることができず、防御するしかなかった。

「くっ……うああああ　　!!」

リサの体は切り刻まれて吹き飛び、壁に叩きつけられた。

僕の視界の中で、横向きの竜巻とともに誰かが吹き飛んで行くのが見えた。

リサ!?!?

「隙を見せたな!」

「!?!?!」

一瞬だけそこに目をやった時を、バルバロッサは見逃さなかった。奴のミドルキックが、僕の腹部に直撃した。

「ぐっ!!」

「まだや! 烈霊黄波!!」

バルバロッサは僕の近くに掌を広げ、そこから強烈な衝撃波を出した。僕はリサと同じように吹き飛ばされた。空中で体勢を整え、くるくると回転しながら、僕は床に着地した。

「ちっ……この、馬鹿力め……!」

ソリッドプロテクトのおかげで、アバラは折れてはいないけれど……結構なダメージを負ってしまった。

片膝を付いている僕の所へ、バルバロッサが不気味に微笑みながら近づいてくる。

「ククク……バルドルの力を得、調停者として認められた割には、大したことあらへんなあ」

「……バルドルは、どちらかゆうたら戦闘には向いてないもんや。その程度じゃない」

シュヴァルツは吹き飛ばしたりリサを放って、僕を見ていた。リサは……壁に打ち付けられ、腕を押さえながら立ち上がっているところだった。

「さて……終わりしちやろつかい」

バルバロッサは、宙へ手を上げた。小さな光の粒たちが、弧を描きながら終結していく。それらは少しずつ、大きくなっていったい

る。……魔法なのか？

「シュヴァルツ！ バルバロッサ！！」

彼らの隣に、光の柱が出現した。その中から、ミランダが出てきた。腕を手で押さえ、よろよろしている。

「なんや、お前の役目は外の奴らを足止めしとくことやろが」

「シュ、シュヴァルツ……漆黒の剣士が……」

「漆黒の剣士……？ なるほど……」

バルバロッサは厳しい顔になり、光の玉を握りつぶした。

「せやったら、さつさと例のもん、もらわなあな」

「せやな。これ以上、邪魔が入るのはめんどいわ」

2人はそう言うと、僕たちと反対の方向へ歩き出した。あつちには……アンナが！？

「ま、待て！！」

僕は立ち上がり、一気にそこまで行った。ティルフィングで斬りつけたが、シュヴァルツとバルバロッサは目にも止まらぬ速さで避けた。

「邪魔やあ！！」

僕の背後に、バルバロッサが回っていた。

速い、速すぎる！ けど、付いて行けないスピードではない。

奴が繰り出してきた豪拳を、ティルフィングで防いだ。僕たちは、そのまま硬直状態になった。

「キヤアア！！」

僕は、叫び声の方に顔を向けた。その時

「でりゃあー!!」

バルバロツサのミドルキックが襲い掛かる。ティルフィングを盾のようにしてそれを防いだ。が、あまりにも衝撃が強く、僕は横へ数メートル吹き飛ばされた。

体勢を整え、顔を上げると、シュヴァルツがアンナの首を掴み、持ち上げていた。アンナは苦しそうにもがいているが、シュヴァルツの力が強すぎる。逃げ出すことができない。

「戦いはやめや! グルヴィニアらも、ゼテギネアの奴らも攻撃を止める。小僧……お前らもや。さもなくば、この女が死ぬで?」

「くっ……シュヴァルツ、てめえ!!!」

この光景……海の時と同じだ。あの時もシュヴァルツは……いや、バルバロツサは海の首を掴み、殺そうとした。

「ヴァルバ……いや、ベオウルフ。『アヴァロン創世記』を、知っちよるよな?」

「……何……」

「知らんとは言わさへんぞ。アムナリアの子孫　ペンドラゴン家だけに受け継がれたはずや。あれをワイらに渡せ。そうすればワイらはここから撤退し、この女の命も助けたる」

シュヴァルツは、アンナの足が地面に付く所まで降ろした。あれなら、アンナは呼吸をすることができる。

「……そんなもの、俺は知らない」

ヴァルバは、いつでも飛び出せる体勢だった。

「ほう……知らん、か」

それを聞き、シュヴァルツはニヤリとした。その瞬間、アンナを再び宙に持ち上げた。

「あつ!!　か……っ!」

再び、アンナの呼吸が止められてしまった。目を開き、呼吸をし

ようと口をパクパクさせている。

「アンナー！」

僕とヴァルバは同時に叫んだ。

「はようあの古書をワイらに渡せ。……この娘が死んでもええんか？」

奴は絶対的な自信で、震えるヴァルバを見ている。そこにあるのは……不敵な笑みだった。

「き、貴様ア………！！ この、卑怯者があー！！」

「いちいち叫ぶなや。お前にかかるとんやで？ この娘の命はな……」

「くつ………！！」

僕は怒りで震えていた。ヴァルバもまた、同じはず。助けたい。

助けたいけど、何かをすればアンナは真っ先に殺される。それだけは阻止しないと……！！

「………わかった。古書を、渡そう………」

大きく息を漏らし、彼は怒りで震える体を鎮めた。

「閣下！ なりませぬ！ あれは………ペンドラゴン家に古くから伝わる、神聖なる家宝！ 逆賊などに渡してはなりません！！」

床に倒れている大臣が叫んだ。さっきの……カブール卿だ。

「だが………人の命には代えられない………」

「閣下！ 皇室の家宝を、なんと心得られるのですか！！？」

ヴァルバはキツとその大臣を睨んだ。

「家宝がなんだ！！ こんなものなど、命よりも価値があるかあ！！」

ヴァルバは僕が思っていることを言ってくれた。それが、普通の考え方。だけど、貴族の間では、きつとヴァルバの発言はおかしいと思われてしまうのだろう。

「………古書を渡す。アンナを、離してやってくれ………」

シュヴァルツは、小さく笑った。

「アホか。古書を早く出せ………それからや」

「……わかった」

そう言つと、ヴァルバは手を広げた。小さな光たちがヴァルバの掌に終結し、どんどん形を成していった。

あれは……本？ あれが、『アヴァロン創世記』というものなのだろうか。

「……これだ」

ヴァルバはそれを手で掴んだ。

「よし、こっちに投げろ」

「……………」

ヴァルバはゆっくりと歩き、シュヴァルツから少し離れた所で、無言のまま彼の足元に本を投げた。それをバルバロッサが拾い、まじまじと眺めた。

「これが……アムナリアの聖典か。こんな簡単に手に入るなら、はよう来ときやえかったわ」

「せやな。ま、無事に手に入ったんやから、よしとしようやないか」  
2人はうれしいのか、声を上げて笑い始めた。

「……約束だ。アーナを離せ！」

「わかつとるわ。……約束どおり、離したるわい！！」  
シュヴァルツがニヤリとした瞬間、奴は空中に彼女を放り投げた。  
「なっ！！？」

「黒き淵より出でし、黄泉の大蛇よ。光を持ちし者どもに、溢れる血肉を捧げよう……………」

黒い風がバルバロッサを包み込み、彼の上空に黒い光の玉が出現した。

「邪悪なる、混沌の呪縛を　　ヨツムンガンド！！」

光の玉から、紫色の光線がうねるようにして空中へ舞い上がる。

そして、その光たちは大蛇のような大きな闇となり、アンナへと襲い掛かった。

「!? やめてえー!!!」

リサが叫んだ。何がダメなのか？ それを悟る前に、僕は走り出していた。だが、頭の奥で理解していた。

間に合わない。

闇の大蛇はその牙をむき出しにして、空中にいるアンナへ向かってゆく。もう、ダメだ！

当たると思った。そう、たしかに当たったんだ。だけど、アンナには当たっていなかった。

ヴァルバだ！ ヴァルバがジャンプして飛び込み、アンナを抱きかかえ、その魔法を食らってしまった。

「グアアアアア！」

「ヴァ、ヴァルバさん!?!」

そして、2人は床へと落ちた。闇色の炎が、ヴァルバの体を覆っていた。ヴァルバもまた、激しい痛みに襲われてもがき苦しんでいた。

「ヴァ、ヴァルバさん…… ヴァルバさん!!」

アンナが体を起こし、ヴァルバを揺する。

「ちっ…… 当たらんかったか」

「まあええやる。リオンの狙い通りになったんやし」

シュヴァルツはバルバロッサの所へ行き、古書を眺めた。そして、笑顔でそれを開いている。

僕は怒りで震えた。もう、抑えられない！

気が付けば、奴らのもとへ突撃していた。

「うあああ!!」

「小僧が…… 荒れ狂う竜巻、切り刻め！ 奥義 嵐龍烈襲閃!!」  
シュヴァルツは豪拳を繰り出し、そこから横向きの竜巻を発生さ

せた。僕はそれを、顔面すれすれで避けた。僕も突撃、竜巻も突撃していたので、自分でも避けられたのが不思議だった。

シュヴァルツはそれに驚いていた。避けられるとは、思わなかったようだ。僕は、彼に斬りかかった。

「ぬあっ!!!」

シュヴァルツは僕の攻撃を避けられなかった。とはいえ、胸へ深さ1センチほどの切り傷しか与えられなかった。

「小僧風情が！ 逆鱗に触れよ、大地の怒り！ 奥義 地龍吼爆陣!!!」

バルバロッサは自分の足元の床を殴った。いや、腕が床に食い込んでいる。その衝撃で謁見の間だけでなく、帝城が大きく揺れた。床が砕け、それが石つぶてとなって下から上へ吹き飛び始めた。まるで弾丸のように、僕の下から襲い掛かる。

「グッ!!!」

僕はその石つぶてたちに当たり、空中へと吹き飛ばされた。

「ほぼしる鬨気……我が破壊の衝撃と化せ！ 奥義、閃牙顎翔波!!!」

バルバロッサは、僕に向かって巨大な衝撃波を吹き飛ばした。とんでもないほど大きな衝撃が、僕の体を突き抜けた。そして、僕は天井にぶつかり、そのまま床へと跳ね返った。

「くっ……!!!」

「小僧が……ワイに傷を付けやがってえ!!!」

「もうええ、シュヴァルツ」

バルバロッサが、傷口を押さえているシュヴァルツを止めた。

「古書は手に入った。長居は無用や」

「……せやな」

すると、2人はミランダの所へ行った。

「帰還するで。ミランダ、お前は先に帰ってユグドラシルに報告せ  
い」

「……わかった」

ミランダは傷付いた体に鞭を打ち、空間転移の魔法で消えた。

「……グルヴィニア！ お前らも帰還や！」

バルバロッサの声と共に、グルヴィニアたちはぞろぞろと外へ出  
て行き始めた。そして、シュヴァルツとバルバロッサは、他の壁に  
衝撃波を飛ばし、大きな穴を開けた。

「……ワイらを止めたいなら、グラン大陸の天空遺跡に來い」

2人は僕たちの方へ向き直り、エメラルドグリーンの瞳をぎらつ  
かせながら、微笑んだ。

「まもなく、アトモスフィアは復活する。はようせんと……お前ら  
の負けやで？」

そう言い残し、奴らは外へと消えた。

## 57章：失いし未来 永遠に輝く、碧き瞳

あっという間に、敵は消えた。全員、消えた。残されたのは僕たちと、死体だけだった。多くの兵士とグルヴィニア、帝国の大臣たち骸むくろとなって転がっている。

バルバロツサにやられたとはいえ、そこまで痛みはない。……バルドルの力のおかげか。これが無ければ、きっと体の骨がすべて折れてしまい、死んでしまっていたはずだ。

僕は立ち上がり、ヴァルバの元へ駆け寄った。ヴァルバは仰向けになり、ぐったりとしていた。見るからに……外傷は無い。

「ヴァルバ……大丈夫か？」

「大丈夫……夫なわけ、ないだろ……」

苦笑いをしながら、ヴァルバは言った。

この感じ……以前にも遭遇したことがある。これは 暗黒魔法で死んだジョナサンの時と同じだ……。

一瞬、思考が停止した。だが、僕はそれを振り払って顔を上げた。

「リサ！ 来てくれ！！」

症状を見るには、リサしかない。リサも怪我がひどかった。だが、今はもう歩けるほどになっていた。たぶん、彼女にもリジエネレイトが発生しているのだろう。

「ヴァルバ……無茶して……」

リサは膝をつき、片手でさするようにしてヴァルバの体に触れた。その瞬間、彼女の表情が凍り付いた。その反応を見逃さなかった僕は、どうなるのかを悟ってしまった。

「ヴァルバさん……しつかり……」

アンナはヴァルバの横にしゃがみ、彼の体に両手を添えていた。  
「空さん」

僕の近くに、空が駆け寄って来た。僕たちが来てからは広間の端っこにいたため、鬨いに巻き込まれなかった。

「ヴァルバさんは……どうなんですか？」

「……それは……」

どう言えいいんだろう。空だけが、知らないんだ。暗黒魔法を喰らったら、エスナをかけていない限り死に陥ってしまうことを。

「……死ぬんだな」

ヴァルバが、ボソツと言った。その言葉を、近くにいたため否応なく訊いてしまったアンナは、目を見開いた。

「そ、そんな……ど、どうしてですか？」

空は僕にすぐるかのように言った。

「……さっきの魔法は受けてしまうと、必ず死んでしまうものなんだ。もう、どうしようもできない」

「そん……な……!!」

真実を知ってしまった彼女は、小さく震え始めた。

「どうして……かばったんですか？」

「……アンナ」

アンナは空と同じように、震えていた。現実の痛みを、心も体も受け付けることができないんだ。

「ど、どうして、私を……」

ヴァルバの顔には、汗が噴き出ていた。仰向けになっているためか、大きく呼吸しているのがよくわかる。

「それはさ……もう、誰も失いたくないからだよ」

「え……？」

彼は苦悶の表情ながらも、小さく微笑んだ。

「リノアンのように……誰かを護れずして失うのは……嫌なんだ」

「お姉ちゃん……を？」

その言葉の意味を、この場にいる誰もが理解できなかった。ヴァルバは、想い出を語るかのように話し始めた。

「俺は……リノアンを愛した」

愛した。そう、彼ははつきりと言った。

「初めて、誰かを愛した」

ヴァルバは何度も言った。その時のことが嬉しいのか、天井を見つめながら笑っている。

「お姉ちゃんを……？ どういう……ことなんですか？」

「……ステファンの下に、下つ端研究員として潜入した時、俺は……彼女に出逢った。俺の目的は、彼女を自国へ連れ去ることだった。……もちろん、リノアンが『烈火の巫女』だとわかっていなかったからな……」

ヴァルバの呼吸が、少しだけ荒くなってきた。……暗黒が、彼を蝕んでいく。

「彼女は、ひどい人体実験を受けていた。俺は、それから解放してやる代わりに……ゼテギネアに来いと、提案した。……だが、彼女

はそれを拒否した。……なぜだかわかるか……？」

「いえ……」

アンナは首を振った。それがわかっていたのか、ヴァルバは小さくうなずいた。

「それはな……アンナ、リノアンが君のことを心配していたからなんだ」

妹を放って、自分だけが逃げるわけにはいかない

リノアンさんは、睨みつけるかのようにヴァルバに言ったそうだ。

「……………」

「……………何ヶ月も彼女と接している内に……俺は、彼女を愛し始めた。……彼女もまた、俺のことを愛してくれた……」

2人は、想いが通じ合った仲。今も尚、彼女を愛している。ヴァルバの碧い瞳が、そう告げていた。

「そして、5年前……俺はルテティアの地下研究所から、彼女を脱出させた。……もう、ゼテギネアのためなんか……どうでもいい。

リノアンさえいれば……彼女さえ生きていれば、もうそれだけでいいと思っていたんだ」

「あんたは……ゼテギネアを捨てるつもりだったの？」

リサの問いに、ヴァルバは小さくうなずいた。

「……………だが、祖国を完全に裏切るわけにはいかない。俺には、それができなかつた」

ヴァルバは言う。先帝……自分の兄が即位してから、自分を護って来てくれた兄のために、生きてきたと。兄を裏切ることだけは、できなかつたと。

「だから、リノアンをアンナが暮らす……フィアナ村まで連れてゆき、俺は兄上の了承を得るために……帰国した。必ず、必ず帰って

くると約束して……」

ヴァルバは、そつと目を瞑った。そして、震える右手を自分の胸に置いた。

「……しかし、帰国してすぐに兄上が亡くなった。即位したのは、まだ7歳の甥……。俺がゼナンを……。ゼテギネアを守らなければならなかった。全ての責任を……。皇室の者としての責任を放り出して……。リノアンの元へ帰ることができなかったんだ……！」

唇をかみしめるかのように、ヴァルバは言った。そして、彼はまぶたを開けた。

「2年後……。朝廷の混乱も鎮まり、国が安定した頃……。俺は、フィアナへ行った。……。リノアンと、アンナを連れて行くために。あの時、君に出会ったのを……。覚えていないか？」

「え……。っ？」

「……。ま、あの頃は今みたいに、ひげが無い状態だったから……。覚えていないのもしようがない。そう、微笑みながら言った。

「……。フィアナへ行った時には、リノアンはもう……。バルバロッサに連れさらわれた後だった……」

ヴァルバは小さく首を振った。

「俺は……。彼女を探したよ。ルテティアへ向かい、再び研究所に潜入した。きつと、またここにいると。また、脱出させてやると思っ  
てさ」

希望を胸に抱いて、彼は研究所へ行ったんだ。きつと、きつと生きてると信じて。

「……。そして、俺は……」

「リノアンが殺されたことを知った……」

その瞬間、ヴァルバの体が小刻みに震えだした。それは、体が蝕まれたせいではない。当時の……想いが蘇ったからだ。

「護ると……絶対にお前を護ってみせると、誓ったのに……！俺は……国を選んでしまったが故に、リノアンを助けることができなかったんだ……！！」

ヴァルバの碧い瞳が震え始め、そこから大粒の雫がほほを伝った。

彼は、泣いていた。その姿を見るのは、初めてだった。

「何もかも……嫌になった。俺は……約束したのに、その約束を果たせぬまま……あいつを死なせた……！俺が生きている理由は……もう、無くなったんだ……」

前から言っていた、生きている理由 という問いは、リノアンさんを失った悲しみを知った時から、常に問いかけてきたものだったのかもしれない。

「……もう、何もかもがどうでもよくなった。自分が生きている意味さえ……わからなくなっていた。……自分が生きている価値さえ、見出せなくなっていた……。俺は……もう、ゼテギネアが望むままに生きていこうと考えた……」

祖国のために 兄が愛した、この国のために。

もう、それしかなかったんだ。

「……そんな時に、ソラ……そして、アンナ……君に出会ったんだ」  
ヴァルバはアンナを見つめた。リノアンさんの妹である、アンナを。

「彼女がいつも話していた……笑顔で話していた妹の君を……絶対に、護ってやりたかった。あの時、果たせなかった約束を……」

だから、ルーファス8世と謁見した際、謝罪にこだわっていたん

だ。いや、リノアンさんが殺されてしまったことも、影響しているのだろう。

「……だが、祖国に近づくにつれ……また、迷い始めてしまった。皇室の人間としての責務を果たすべきか……それとも、お前たちと一緒に……この星の行く末を見定めるか……」

国のためか。星の未来のためか。彼にとって、究極の選択だったのだ。

「結局、祖国を選んだってこと……よね」

リサは何とか彼の痛みを和らげようと、治療術をかけていた。

「リサ、そういうことは……」

「いいんだ、ソラ」

彼は僕を見て、顔を振った。

「俺は……お前たちを裏切り、アンナを手に入れようとしたんだ。

世界を救うのではなく、祖国の利益を取ってしまった……。赦してくれとは、言わない」

でも、謝らせてほしい。……すまない

ヴァルバの声には、力が無かった。彼の顔はすでに青くなり、さつきまで噴き出ていた汗が消えていた。

「ヴァルバ……信じてたよ。みんな……」

「何を言ってる……俺は……」

彼の言葉を遮るかのように、僕は顔を振った。

「お前は、やっぱり僕たちの仲間だ。……傷付く民衆を癒すために、アンナの力を利用したんだろ？」

「……………」

「無言もまた答えなりってか。それに、お前は死をかえりみずに、アンナを護ったじゃないか。……どうなるか、知ってたんだろ？」

暗黒魔法に当たれば、死んでしまうということはわかっては  
ずなんだ。それを……。

「だが……俺は、今まで黙っていた……リノアンのことを……」  
自責の念に駆られ、彼は再び涙を流していた。

「アンナ……すまない。君には……悪いことをした……憎んでく  
れて……構わない」

「そんな！ 私は……むしろ、感謝しているんです。お姉ちゃんを  
愛してくれた……あなたを……」

アンナはヴァルバの左手を持ち上げ、両手で握り締めた。

「それに……ヴァルバさんは、私をいつも助けてくれました。……  
たくさんのことを教えてくれました……」

「……ハハ、俺、は……そんな、立派な奴じゃ……、！！」

ヴァルバは大きくせき込んだ。口から、真つ黒な血が吐き出され  
た。咄嗟に顔を横にしたため、アンナにはかからなかった。

「ハハ……もう、ダメ、な、ようだな……」

「ヴァルバさん……弱気にならないで！」

堪え切れずに、涙を流すアンナ。苦笑しつつ、ヴァルバは震えな  
がらアンナを見据える。

「無理だよ……君も、わかってるだろ？ 死ぬん、だって……」

「嫌です！ お願いですから、死なないで……死なないで下さい！」

アンナはいつそう、力強くヴァルバの手を握り締めた。彼女の目  
から流れ落ちた涙が、ヴァルバの額へと辿り着く。

「リサ、ソラ……空、ちゃんを……星を救わなければならないのに  
……邪魔をして、すまない……」

「……すまないと思ってるなら、生きて償え！ 悪いと思ってるな  
らちゃんと形にして謝罪しろ！！ 何も……何もしないまま死ぬな  
んで、私は絶対に許さないからな！！」

リサは怒声を放った。けど、顔を見ればわかる。怒っているのは  
はなく、悔しいんだ。今、何もできない自分を呪って。

歯をくいしばって泣いているリサを見つめて、ヴァルバは微笑んだ。

「ハハ……そうだな……けど、無理、だ」  
「無理だなんて言うな！」

「……お前は、さ……何度も言うようだけど……そんな格好さえしなければ……美人なのに……勿体、無い……」

「余計なお世話だ！」

リサは軽く、ヴァルバの頭をはたいた。「本当のことだろ？」と、ヴァルバはほくそ笑みながら付け加えた。

そして、彼は僕の隣にいる空に目をやった。

「……空ちゃん……ごめんな……。君の時間は、少ないって、いうのに……」

「ヴァルバさん……いいんです。もう、いいんです……」

空は必死に、涙を堪えていた。今にも、瞳から流れ落ちそうだった。

「ヴァルバ、空は絶対に……僕たちが救い出す。きっと、きっとだ」  
そう言うと、彼は小さくため息を漏らした。

「じゃない、と……あの世で……呪うからな……？」

「なんだよ、それ」

僕とヴァルバは笑った。いつもこうして笑いあっていたのに、こうすることも……できなくなってしまうんだな……。

「アン、ナ……本当、にごめんなあ……嫌なこと……ばかり、してさ……」

「怒ってなんかいません！ 怒ってなんか……いませんか……ら……」

顔を俯かせて、アンナは涙を零す。

「……泣くな……」

ヴァルバは、優しくアンナのほほに触れた。そして、人差し指で彼女の涙を取った。

「……君は……君のままで、いて、くれ……それだけで、多くの人が……癒されるはず、だから……」

治癒の属性を持つ『斜光の巫女』。彼女こそ、彼と……彼の兄が望んだ、人を平和にさせるものなのかもしれない。

彼の瞳から、それが伝わって来る。

「そんなことはいいから……お願いです、死なないで……！」

「……リノアン、に……似てきた、なあ……。ああ……ハハ、そう、だな……お前、と……約束したもんなあ……」

ヴァルバはリノアンさんの姿を思い浮かべているのだろうか、涙を浮かべながら笑顔になっていた。その瞳に、生气はほとんど感じられない。

「……死ぬのは……怖く、ない。きっと……あつちには、彼女もいる……」

「死ぬなんて言わないで！ お願いですから……！」

アンナは今にも崩れ落ちそうな、ヴァルバの手を握り締めた。

「ごめん、な……アン……ナ……」

兄……上……母上……リノ……ア……



アンナの叫び声が、虚しく謁見の間に響き渡った。アンナの涙が、まるで宝石のように、キラキラと輝いていた。

ヴァルバのまぶたに、涙がたまっていた。それは彼のものなのか。それとも、零れ落ちたアンナのものなのだろうか。

彼の顔は、どこか穏やかだった。

「こんなところで何してんの？」

レイディアントに降り立った時、あの緑の草原が生い茂るルナ平原で、ヴァルバと出逢った。ひげ面で。

「俺はヴァルバ……ヴァルバ・ダレイオス。敬語は使わなくていいからな。君の名前は？」

ニコツと微笑み、馬車の中に入れてくれた。

「まだ14歳の少女が、さらわれた姉がまだ生きていると信じて、ここまで来た。そして、とんでもない事実をそれを行った本人の口から聞かされたアンナの気持ち……貴様らにわかるのか!? ……いいか? 権力を持つ者は民を護らなければならぬ。それが王侯貴族として生まれた者の義務だ! その義務を果たせなかった貴様らこそ、万死に値するんだ!!!」

ルーファス8世に対して、ヴァルバは怒りを露にした。

「自分が信じたことを為せばいい。たとえ全てに裏切られ、全てに憎まれようと、お前が正義だと決めたことを為せばいい」

あの草原で、お前はそう言ってくれたよな。

「……俺たちが望んでいるのは、何もかもが消し去られた未来なんかじゃない。平凡な未来あしたなんだ。……空ちゃんや、リノアンのような犠牲者はこれ以上、出しちゃならない……」

未来を望もうと 笑顔になれる日々を求めて、闘おうって決心したんだよな。

「よし、こうなったらとことんやってやるうぜ！ 俺たちが目指す夢の形 は、まだまだ先だからな」

夢の形……それは、普通に平凡なことなんだ。ただ、笑顔で生きていきたいっていう。

「抗うって決めたんだ。とことん、呆れさせてやんな」

微笑んで、お前はうなずいてくれたんだよな。抗えって、僕の心に勇気を与えてくれた、あの碧い 誇り高き、皇室の瞳。

もう、あの笑顔を見ることはできない。

もう、あのひげ面を見ることは無い。

もう……あの碧い瞳が、輝くことは……無い。二度と。

世界を包む闇夜の静寂の中で、ヴァルバは死んだ。

## 58章：決意の先へ 意志と遺志を引き継いで

翌日、ヴァルバの葬式がひっそりと行われた。僕たちと皇帝……そして数名の大臣ほどだけで。

本来、皇室の者であり、宰相である者の葬儀は国葬とし、盛大に行うのが通例だという。しかし、ヴァルバは宰相でありながら民衆の前に現れたことが無く、スパイ活動をしていた人物なので、こうしてひっそりと葬儀を行ったのである。宰相が殺された　と民衆に伝われば、今の状況を考えると、混乱を深くしてしまうだけなのだ。

「ベオウルフ殿下は、先帝陛下の腹違いの弟でな」

白いひげのアヴェン老は、花を添えている皇帝の傍で言った。

帝城の深部に、一つの中庭がある。ここは影で帝国を支えてきた者たちの墓がある場所で、ヴァルバはここに眠っている。

「腹違い……ですか？」

そう言うと、アヴェン老は小さくうなずいた。

「異母兄弟なのじゃ。……ベオウルフ殿下の母は、イデアの部族長の娘だったかの」

あの黒髪、そして日焼けをしたような肌。あれは、イデア人特有のものだったんだ。母親から、それを受け継いだんだ……。

「殿下の父　ベルセリオス6世陛下は、皇室の髪を持たぬ殿下を忌み嫌ったのじゃ」

いつだったか、ヴァルバは両親のことを語ってくれた。「父親は父親で、仕事ばかりでかまってくれない。母親は体が弱く、かまうことなんてできなかつた」……と。

「叔父上の母……クラン様は、叔父上が10歳の頃に亡くなったんだ。体が弱いと聞いたかな……」

皇帝はゆっくりと立ち上がり、周囲の花たちを見渡した。

「……先帝は、孤独だった殿下を一番かわいがったのじゃ。だからこそ、殿下は……」

アヴェン老はそう言って、俯いてしまった。

兄のため。

自分を孤独から掬い上げてくれた兄のために、ヴァルバは自分の全てを捧げたんだな……。その想いが、どれほど大きいのか僕にはわからなかった。

「叔父上は、父が早くに亡くなってしまった私を護り、導いてくれた……」

瞳に涙を浮かべ、皇帝は顔を振った。たしか……彼は7歳で即位したんだっただな。親代わりとして自分を支えてくれたヴァルバが、こんなにも早く亡くなってしまおうとは……。どれほど、辛いものなのか想像できない。

「陛下、そろそろ参りましょう」

「あつ……うん」

アヴェン老によって促され、皇帝は小さくうなずいた。

「僕たちは、先に失礼させてもらうよ。……君たちは、ゆっくりしていつてくれ……」

優しく、どこか哀しく皇帝は微笑んだ。そこに、12歳としての少年っぽさが現れていた。

僕と空は、突っ立ったまま足元にある墓を見つめていた。この中庭に広がる草原の中に、いくつもの平面の墓がきれいに並んでいる。リノアンさんと共に、新しい人生を切り開こうとした矢先、兄である皇帝が亡くなってしまった。……その時、ヴァルバはどんな気持ちだったんだろう。……迷ったに違いない。一人で、悩み、葛藤したんだ……。

皇室の皇子であるが故に、その責務を背負って国民を護らなければならぬ……か。どうして、そんな考え方を持つ人に限って早くに逝ってしまうんだらうか。神様がいらっしゃるなら、ホントに理不尽だよな……。

ベオウルフ＝ヴォルガンフ＝フリードリヒ＝カール＝ペンドラゴン  
新暦1969～新暦2002

碧き瞳を持つ、我らが主の子よ

眠れ 永久に

「……まったく、貴族を超えて皇子だなんて。さすがに、そこまで想像できなかったよ」

僕はヴァルバの墓の前でしゃがみ、その石に触れた。つるつるのお墓。きれいに、文字が刻まれている。

「……ヴァルバさん……」

空も同じように、僕の横でしゃがんだ。

「まさか、こんなことになるなんて……」

思いもしなかった。誰が想像できただろう。こんなところで、ヴァルバが死んでしまうということ。最後の最後まで、樹を倒す時まで一緒にいてくれるって思っていたのにさ。

「……お前が死ぬなんてなあ……」

お前がいなくなってしまうなんて、想像できるはずが無い。だって……お前は、僕の……僕たちの、大切な仲間だったんだから。誰も、仲間が死ぬことなんて想像しないから。

「まさか、お前がな……」

僕は目を手で押さえた。

今頃になって、実感が湧いてきた。お前はもういないということをお前は、もう死んでしまったんだということ。

この世界へ降り立ち、初めてできた友達であり、仲間だった。この世界について無知に近い僕に、いろいろ教えてくれた。僕の質問に対し、文句を言いつつも答えてくれた。まるで、先生みたいだったよ。

「……いつもふざけているのかと思えば、そうじゃなかった時もあったよな。あれは……宰相としての、お前だったんだな」

いつも見てるお前らしからぬ、お前の姿。何度も驚かされた。

「そういえば、まだ教えてもらってなかったな。港町アルフィナへ行く途中に、教えてくれた言葉の主のこと」

……  
諦めるな。自分が諦めた時が、すべてが終わる時なのだから

「ま、もう教えてくれなくても、わかっちゃったけどな」

僕は再び、彼の墓に触れた。ちよんちよんと、突くように。

「あれ、リノアンさんの言葉だろ？ そうとしか考えられないもんな」

大切な人、か。護ることができなかったお前の気持ち、ほんの少しだけなら、わかるかもしれないのに……。

「まったく……騙してたことを悪く思うなら、死ぬなよなあ……」

「空さん……」

空は、心配そうに僕を見上げた。

「こんなに辛いなんて……」

それでも、僕たちは前に進まなければならない。僕たちは、生きていくのだから。

「空さん……無理をしなくても、いいんですよ？」

彼女はそっと、僕の膝に手を置いた。電流が走ったかのように、思わず僕の体が小さく反応した。

「泣きたいなら、泣けばいいじゃないですか。恥ずかしがることじや、無いんですから……」

悲しそうに見つめる、空色の双眸。水面のように揺れている。

僕は目を瞑り、顔を振った。

「空、だけどな……僕は……」

僕は口をつぐんだ。

泣けないよ、人前では。……悲しいのは、みんな同じなんだ。

僕が泣けば、アンナや皇帝が余計に悲しむ。自責の念に駆られて。

「……空さんって、いつも無理してます。……うつん、こついう時だけ、空さんは自分の心を押し殺しています」

彼女は俯く僕に続けた。

「泣いて、当たり前じゃないですか……。無理をしなくて、いいんです」

空は今にも泣きそうな顔で、僕に肩を寄せた。

「……お前は、泣かないのか？」

墓を見つめながら、僕は呟くかのように言った。

「……私は皆さんのように、ヴァルバさんと付き合いが長いわけではないですから……泣くと、なんだか悪いようで……」

「なんだよ、お前も無理をしてるんじゃないか」

僕は思わず、苦笑した。

「けど……」

「無理するなつて。お前は、泣き虫なんだから」

いつもいつも泣いて、僕を困らせていた。幼い頃から、ずっとそうだった。

「なんですか、それ」

ため息混じれに、彼女は笑った。

「お前は、そういう奴だったんだよ」

「……知っている人が亡くなれば、泣いちゃいますよ。だって……」  
彼女が震えているということが、寄り添っている肩から伝わって来た。言葉を詰まらせている彼女のほほに、僕は指先で触れた。

「悲しいですもん」

その指先に、涙が触れた。彼女の瞳から流れた涙が、僕の手を伝ってきた。

「……ごめんなさい……」

「なんで謝るんだよ？ ……お前は、なんもしてないのにさ」

僕は彼女のほほから指を離し、軽く頭を撫でてやった。

「空さん……」

僕は立ち上がり、刻まれている彼の名を見た。

ベオウルフ

お前は、ヴァルバでもあるんだよな。

「ヴァルバ、言ってたよな？ 生きていることに、何の意味があるんだって……」

あの時は何の気なしに答えただけ、今度は真面目に言っよ。

「……意味なんか、求める必要はないんだ。だって、生きてることが幸せだと思える日々が存在したんだからさ」

リノアンさんと共にいた時、そうだったんだろ？ 未来に希望を抱けるってことは、それだけで今を生きたいって願ってるんだから。「ただ、生きてるってだけでいいんだよ。端っから答えなんて知ってるのに、さ……」

僕は上空に顔を向けた。じゃないと、溢れ出てくるものを抑えられなかった。けど、それは無意味だった。震える心と共に、温かく、懐かしいものが溢れ出てきた。

「空さん……泣いて……るんですか？」

震える声で、彼女は言った。

「……さあな。どうだろ……」

次の日、僕たちは皇帝に呼び出された。大切な話があるらしい。

僕たちはボロボロの謁見の間で、6人で並んだ。玉座にゼナン皇帝。両脇に、カザランという人とアヴェエン老が立っていた。

「まず、そなたたちに謝罪しなければならぬ。……すまない」

皇帝は玉座から降りて、僕たちと同じ目線の高さのところまで来て、なんと片膝をついて謝罪したのだ。あまりのことに、僕たちは慌ててしまった。

「へ、陛下……そこまでしなくても……」  
そう言つと、皇帝は顔を振った。

「いや、これでも謝罪にはならないと、重々承知している。だが、余にはこうする他無いのだ……」

皇帝はもう一度、頭を下げた。12歳の皇帝がここまでなるには、相当強靱な精神が必要だ。それに、この態度……今は亡きルテイアのルーファス8世とは、雲泥の差がある。どうして、こうも人間とは違うのだろうか。

国の長によって、国そのもの本質が変わる　　そういうことなのかもしれない。

「陛下、お顔をお上げ下さい」

リサは皇帝の肩に触れ、言った。

「陛下のお気持ちは、十分伝わりました。……ね？」

そして、リサは僕たちにウィンクをした。もちろん、と僕はうなずいた。アンナも、レンドもそうだった。みんな、そうだった。本当は、謝ってもらふ必要なんて無いのだから。

「……それよりも、これからのことについてお話ししましょう。陛下が私たちを呼んだのは、そのことだと思つたのですか？」

皇帝は少し驚いた様子だったが、すぐに「そのとおりだ」と言つて、為政者の顔つきになった。

彼は立ち上がり、僕たちを見渡した。

「……もう知っていると思うが、インドラにより各国の首脳陣のほとんどが殲滅させられた。インドラを倒そうにも、当然のごとく各国は兵を出すことができぬ。我が国も帝都は焼き尽くされ、叔父上を始めとする諸大臣の悉くが殺された」

古書を手に入れるためのついでに、ゼテギネアの首脳陣を殲滅させようとしていたのだろう。そうすれば、追ってくるのは僕たちし

かない。

「今、我が国も諸国も朝廷の編成に大忙しだ。そなたたちに協力しようにも、あまり力になつてやれないのが現状だ」

小さく息を漏らし、皇帝は申し訳なさそうに言った。

「……だが、そなたたちが求めていた装甲船、あれなら準備をしてやれる」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ、もちろんだ」

皇帝は大きくうなずき、カザランを呼んだ。彼から証書のようなものを受け取り、僕に渡した。

「我が国最大の装甲船 『ガルガンチュア』をお貸ししよう。あの船ならば、北の大陸の周りを覆っている氷河も、ものともしないはずだ」

「ガルガンチュア……マジかよ……!」

レンドは驚きと喜びが入り混じった顔で、言葉を漏らしていた。すると、だんだん表情に喜びの笑顔だけが表面化してきた。

「知ってるのか？」

「ガルガンチュアっていや、ゼテギネア最大の装甲船なんだよ。2大陸に存在する船の中で、最も巨大で丈夫な船だ! あれに乗れるのか……まったく、信じられねえ!」

いやっほーい、とレンドははしゃぎにはしゃぎまくっていた。さすがに、これは僕たちとしてもうれしいのだが……レンドの行動が恥ずかしい……。

「だが、ガルガンチュアを操作するのに、俺たちの仲間だけで操作できるのか？」

腕を組みながら、デルゲンは言った。

「デルゲン、そこは何とかすんだよ」

「レンド……さすがに無理があると思うぞ?」

彼の笑顔に、デルゲンは苦笑していた。

「そこは大丈夫だ。我が国の操船者たちをお貸し致す」

「……陛下、そこまでしてくれるのですか？」

僕がそう言うと、皇帝は微笑んだ。

「今、インドラの連中を食い止めれるのはそなたたちしかないよ  
うだ。我々は、できる限りのサポートをするしかない」

「陛下……」

「世界を守りたいという気持ちは、私たちも同じだ。……国の元首  
でもないそなたたちに頼むのは、誠に勝手だが……この世界を、頼  
む」

皇帝は、再び頭を下げた。どうにかしたいが、皇帝であるために  
この国を離れるわけにはいかない。混乱した朝廷を建て直し、民衆  
のための政治を行うためにも、皇帝はこの国を……『護らなければ  
ならない』んだ。

それこそが、ヴァルバの願いだったのだから。そして、彼のもう  
一つの願い……空を救い、世界を守る。それは、僕たちがするべき  
こと。

「……ありがとうございます、陛下」

僕たちは、気持ちを込めて一礼した。

後ろへ振り返ろうとしたその時、後ろの扉が勢いよく開かれた。

「陛下！ 急報でございますー！」

一人の兵士が、息を切らせて走ってきた。

「どうした？」

皇帝がそう言っても、兵士は息が切れているのか、なかなか言葉  
を出すことができない。そして、彼は大きく深呼吸をして言葉を放  
った。

「ル……ルテティアが……滅ぼされました！」

「な、なんだとー!?!？」

皇帝は驚きと共に、言葉を発した。

ルテティアが……滅んだ!?!?

「どういうことだ？ まさか、イデアが攻め込んだわけではあるまい」

「い、いえ……インドラの仕業だと思われませう！」

「インドラだと!?!？」

インドラの奴らが、ルテティアを滅ぼした？ こんな短期間に!?!?

兵士の報告によると、聖都での惨殺によりルーファス8世及び宰相・主要な大臣たちが殺され、ルテティアの中央政府は混乱に陥ったという。第1王子のクレイン王子が即位し、臨時政府を結成した。しかし、それでも朝廷の混乱を收拾することはできず、そこをインドラに突かれた。王都はインドラの軍隊に攻め込まれ、クレイン王や弟のカーン王子は戦死し、臨時政府も崩壊した。

「王都ルテティアは制圧され、ヴィンラント、クテシフォン、ドウアザ……主要都市のほとんどが奴らに制圧されたとのことですよ！」  
「……混乱に陥っているとはいえ、ルテティアがこうも簡単に破れるとは……インドラめ、かなりの軍事力を持つておるといふことじやな」

アヴェン老が、口をもごもごさせながら言った。

「ただ、第3王子のアルベルト王子が各地の兵をランディアナに集結させ、必死に抗戦しているとのことですよ！」

「アルベルト王子！？ よかった、あの人は無事だったんだ！」  
王都が制圧されたと聞いたから、王族は全員殺されたのかと思っ  
た。

「ランディアナ、か……。あそこは、水のエレメンタルで守られた  
要塞都市。簡単には陥落しないだろうな」

デルゲンは落ち着いた声で言った。海にある無限のエレメンタル  
を使い、半永久的に巨大な滝の壁を作り出している海上都市。戦の  
歴史の中で、あそこだけ陥落したことが無いという。

「よし……。我が国も、ルテティアを援護しよう」

「陛下、本気でございますか？」

どこか嬉しそうに、カザランは言った。

「カザラン、世界に危機が迫っているのだ。そんな時に、敵国も何  
も無い。今こそ共に協力し合い、共に歩む時だ！」

12歳とは思えないほど、立派な言葉だった。これほど、自我を  
固めている少年はいまい。

「カーレル大將軍！ ランスロット將軍！ ガウエイン將軍！」

「ハッ！！」

後ろの扉から、3人の男性が入って来た。

「カーレル將軍、そなたに5万の兵を与える。カパトギア王と共に、  
海を渡ってランディアナへ向かい、アルベルト王子の救援へ向かえ  
！ その後、王都を解放するのだ！」

「御意！」

紅い長髪の男性がひざまずいた。大將軍ということは、帝国の軍  
事的地位が最も上の人っていうことだ。

「ランスロット將軍、そなたには2万の兵を与える。ロンバルディ  
ア大陸西方の貿易都市群ミレトスへ向かえ！ あそこは、重要な補  
給点となる」

「かしこまりました」

美形の男性が、ひざまずいた。この人も、帝国將軍の中ではかなり上の人なのだろう。

「ガウエイン將軍、そなたには3万の兵を与える。まずはランスロツト將軍と共にミレトスに向かい、その後北上、ヴィンラントなどの主要都市を開放するのだ！」

「ハッ！」

巨大な剣を背負った、金髪の將軍がひざまずいた。まだ20代後半のように見え、最も將軍らしいといえば將軍らしい。

「諸国に伝令を飛ばせ！ イデアはガウエイン將軍と共に、各都市の解放協力を打診せよ！ そしてシュレジエンは、救援物資をランディアナへ送るなどの支援対策を打診、ソフィアは自国を固め、我が国の支援を要請せよ！」

「かしこまりました！」

皇帝は言葉のスピードを緩めることもなく、命令を発した。その堂々たる様は、まさに皇帝といったところだ。一瞬だけ、インドラがここに攻め込んだ時のヴァルバの姿が重なる。

やはり、血は同じってことだな。

そして、將軍たちと共に兵士も走りながらこの広間を出て行った。皇帝は僕たちの方に振り向いた。

「……どうやら、とうとうインドラも表舞台へ完全に現れたようだ。我々は、この2大陸の地にて奴らと戦う。そなたたちは……」

あの碧い瞳が、僕を見つめていた。

大丈夫。僕たちは、僕たちのできることをする。

「もちろん、グラン大陸へ行って首領ユグドラシルを……樹を食い止めます！」

皇帝は微笑み、手を差し出した。僕は彼と握手を交わし、共にうなずいた。

「とうとう行くのかあ……八八、腕が鳴るぜ！」

「ま、今回はレンドと同じ心境だな、俺も」

「おっ？ いつもならもつと冷静に……なんて言いそうだからな、お前は」

「ハハハ、御尤もな意見だ」

デルゲンとレンドは、顔を見せ合って笑った。

「相手はかなり強大……ラグナロク一族最強の戦士たちと、ロキの力を統べる闇の調停者。下手をしなくても死ぬかもしれない……。覚悟できてる？」

リサは脅すようなことを言っておきながら、少しだけ微笑んでいる。みんなの答えは、訊かなくてもわかっているからだ。

「当たり前だろーが。僕たちをなめんなよ？」

「あつたぼうよ」

「もちろんだ。ここで逃げたら、男の名が廃るってもんだ」

「ヴァルバさんのためにも……！」

アンナは祈るように手を合わせ、うなずいた。それに応えるように、僕は彼女に向って微笑んだ。

「……そうだな。きつと、あいつが力を貸してくれる」

見ていてくれよ、ヴァルバ。お前が築こうとした夢の形を、未来へと導いてやつからさ！

「よーし！ いっちょやりますかー！」

「……やかましいにもほどがあるっての……」

気合を入れている僕に対し、リサはため息で応えた。

「こんくらいの方が、逆にちょうどいいんだっての」  
「そうですね」

空はクスクス笑いながら、僕を見ていた。

この笑顔を守るためにも、僕は負けない。

「行きましょう。グラン大陸へ……！」

「ああ！」

空はそっと、僕の手を握った。

小さな手。絶対に救ってみせる。お前も、世界も。

世界と生命が見るべき夢を……未来を、この手に掴むために……  
僕たちは、最後の闘いへ向かおうとしていた。

遙か古に忘れられた、永遠への約束  
それを紡ごうと、幾多の夢が交叉した。

僕たちがこの旅の終わりに見るものとは？

グラン大陸

穿たれた空が眠りし、天帝たちの墓場へ……

僕たちの旅路の終わりが、そこにある。

……とうとう、お前たちはあそこに行くんだな。  
これで、お前たちは引き戻すことはできない。  
あの陽だまりの中に、還ることはできない……

遙か彼方を夢見続けた命たち……  
それらの墓場で、お前たちは何を見るのだろうか……

セヴェス、シャルフィル

所詮、お前たちも憎んでいるものと同じように、  
殺し合うことでしかわかりあえないんだな……  
所詮、ヒトだから、か。

さて……見せてもらおうか。  
お前たちのどちらが星に愛され、  
「約束の刻」に相見えるのかを……

さあ、見せてくれ。

お前たちが、どんな「夢の形」を築くのかを。

58章・決意の先へ 意志と遺志を引き継いで（後書き）

第4部「運命の空」

F i n

第5部へ続く。

休憩中〜その2〜（前書き）

本編とは一切関係ありません。  
ていうか、本編にも外伝にも関係ないっす。

## 休憩中〜その2〜

というわけで、第4部が終了しました。

かなり長かったですが、物語の「転」の部分に当たる大きなところだったと思います。

ちょっと休憩を挟むということで、この第4部を作るにあたって考えたことを。

実はヴァルバ、初期プロットの段階では死ぬ予定などありませんでした。

ていうか、まったく考えていませんでした。

彼が大国のお偉い人ってのは最初からの設定なんですけど、本当は最後の最後まで生きる予定でした。

んでもって、アンナと結婚でもさせようかな〜と思っていましたね。もちろん、一つの結末としてですが。……まあ、そうしたらしたで犯罪っぽいんで、止めていたような気がすつけど。

第4部を作っていて、いきなし方向転換しました。

理由は、本来は全4部構成だったのを全5部構成に変えたからなんですよね。

第3部で聖魔の神剣を手に入れて終了　グラン大陸へ〜

が初期の設定だったんですが、思ったよりも長くなってしまったので、

空が調停者になるところを「第4部」にしようと思いました。

ですが、思ったよりも短くなってしまったので（本にすると200ページ超くらい）、急遽別の話を作ることになりました。

それが、ベオウルフの死。

主人公に大きな喪失つてのがなかったんで、それをどっかで表してきたかったんですよ。

個人的には気に入ってますが（笑）

あと、本来は48章と49章は一つの章で、

「48章：聖魔の真剣 永遠を望みし調停者」

54～57章も4つで一つの章で、

「54章：悲哀の碧き瞳 失いし未来を願って」

だったんですが、あまりにも長いんで無理やり分割しました。特に54章については3～4万字くらいありましたんで。

残すところ第5部のみです。

このEpisode 4 に関しての伏線など、全てがばらまきになる予定です。

そして、読んでくださった読者の皆様、本当にありがとうございました。そして、

よろしければ、最後までお付き合いください。

では。

59章：歩む意味 傷ついてもなお生きること（前書き）

BLUE・STORY Episode 4

第5部「約束の空へ」

ページをめくり、一つ二つの言霊が浮かび上がる。  
そう、それは空の果てへと紡がれ、一つの夢となる。  
ええ……きつと、私たちはそれを望んでいたわ。  
この星の上に生まれ落ちる前から、  
ずっと握っていた一欠片の雫……

約束したよね……

あの、遠い陽だまりの中で。

だから……あの輝く円環の中で、笑顔でいてね……  
お願いよ……

最後の第5部です。

一番長いですが、よろしくお願いします。

## 59章：歩む意味 傷ついてもなお生きること

3月12日。快晴。3月とはいえ、まだまだゼテギネアの大地には寒風が我が物顔で流れている。

工業都市アルツヴァックを出発し、予定では10日前後でシュレジエンに行き、食料を調達（ゼテギネアには今の季節、食料が少なくなる時期のため）。その後、シュレジエンの研究者にグラン大陸への行き方を教えてもらい、出発するという計画だ。

レンドの仲間たちである、ルーシーやサンガたちも乗せ、出航した。操船するのはいちおうレンドのだが、ガルガンチュアのような大型船を操作するのは初めてらしく、帝国から派遣された操船者に教えてもらいながら、操作している。その他、デルゲンやルーシーたちも、船のあちこちを調べ、どういう時にここを使うのか、どのようにすればこれを使えるのかなど、いろいろ教えてもらった。

「グラン大陸……そういえば、リサの住んでいた島もグラン島っていう名前だったよな？」

「うん、そうだけど？」

すでに青空が夕焼けになり始めた頃、甲板の上で僕とリサは並んでしゃべっていた。レンドやデルゲンは仕事で大忙し。アンナと空は料理をするからと言って、厨房にいる。リサも作ればいいのだが、どうやら苦手のようなのだ。僕はというと……ま、気にしないでほしい。

「何で同じ名前なんだろ？」

そう言うと、リサは空を見上げながらうーんと唸った。

「……伝説なだけどさ」

風がなびいた時、彼女は呟くかのように話し始めた。

「グラン島は、自然にできた島じゃないんだってさ」

「……どうということだ？」

僕が首をかしげると、リサは上空を見上げた。

「ティルナノグが滅んだ時、同時に世界を眺めていた空中都市も、地上へ落ちていった。グラン島は、その落ちた都市が海に落ちてできた島だっていう伝説があるの」

「空中都市って……グラン大陸のほうにあったんじゃないのか？」

だから、樹たちもグラン大陸を目指しているんだろ？」

「そうなんだよねえ……」

北の最果てにあるグラン大陸から、ロンバルディア大陸の南東に位置するグラン島まで、空中都市が続いていたとは考えにくい。もしそうだとしたら、カインの造り上げた浮遊大陸が、海をまたがってロンバルディアまで広がっていたということになる。そこまで巨大な浮遊大陸を造れるとは、さすがに想像し難い。

「ただ、グラン島の中心にあった森に、朽ち果てた遺跡みたいのを見た覚えがあるの。……だから、まんざら伝説とは言えないのよね」  
「ヴァルバが言っていた『ラグナロク一族と巫女、調停者は、元を辿れば同じティルナノグ皇室』というのが本当だとしたら……まあ、つじつまが合わなくも無いよな」

グラン大陸の上空に住んでいたティルナノグ人。帝国滅亡後、移り住んだ皇族の生き残りが、島にそう名づけたのかもしれない。

「……けどさ、私とあんたが元を辿れば同じ一族っていうのは、いちおうわかるのよ」

「なんで？」

すると、彼女は小さく笑いながら僕を見る。

「だって、変な力持ってるし」

リサは僕を指差した。僕は思わず、ほほをかいてしまった。

「……変な力って言われると、うれしくないな」

「ま、所詮は望まなかった力だからね」

望まずに得てしまった力。

たしかに、そうだな。力を持つがために、人を殺めたり、憎しみを作り出してしまふ。……普通、そう考えてしまふ。けど、逆の発想はどうだろうか。

力があるからこそ、自分たちにしかできないことがある。力があ  
る無いに関わらず……とりたいところだが、実際問題そうはいか  
ない。力があるからこそ、自分が手を出せる範囲が広がる。本当な  
ら手の届かないことへ指先を伸ばし、帰ることができる。

あらゆることは、嫌なこと、苦しいことばかりではない。同時に、  
それと相応なうれしさや、喜びというものがある。きっと、そつい  
う風にできているんだよ。

「私が疑問に思うのは、空ちゃんよ」

いつの間にか、リサは僕から離れ、船首のところで海を一望して  
いた。

「空が？」

「……あの子はあるみたいだ、レイディアントで生まれたわけじ  
やないんでしょ？」

「まあ、たぶんな」

並行世界があったのだから、何かの歪みで迷い込んだレイディア  
ントの人間がいるかもしれないため、違うとは言いつれない。……  
が、だからつてうまいことなるものだろうか？ いまいち、自分で  
考えたはずなのに、その仮定には納得できない。

「けど、空ちゃんは私と同じ『永遠の巫女』。つまり、カインの血  
筋つてことよね？」

たぶん、と僕はうなずいた。

「ガイアでは、魔法は存在しない。ということは、魔法を造り上げ  
た創世時代が無かったことになる」

「……つまり、創世時代に実験台にされ、調停者として覚醒し

たカインも存在しなかったはず、ということか？」

リサはうなずいた。

「リユングヴィの言っていたことが本当ならね」

「……あそこで嘘をつく必要は無いから、十中八九、事実だろうな」  
僕とリサは頭を抱えた。

どうして、空にはカインの血が流れているのか。いや、海もか。それに、どうして海は巫女ではないのか。2人は、まったく同じ遺伝子を持って生まれた双子なのに。

あの2人がカインの血筋ということは、おじさんとおばさん、どちらかがカインの血筋だったということなのだろうか。あるいは、先祖の誰かが、カインの血筋だったのだろうか。もしそうだとしたら、その人はレイディアントの人間ということになる。なら、どうしてガイアに来たのかという疑問も湧いてくる。魔法を持ち出さずに、一体何のためにガイアに来たのか……。

謎ばかり、僕たちの周りを渦巻いている。多くの真実を知り、何度も驚かされたが、まだまだこの世界にも、あの世界にも秘密はあるようだ。

全てを知り得る人がいるなら、教えてほしいものだ。

……すべて知り得る人間？

僕はハツとした。

「なあ、クロノスさんなら何か知ってるんじゃないか？」

「クロノス？ どして？」

リサは頭の上にクエスチョンマークを浮かべ、僕の方へ向き直った。

「あの人、ほとんどのことを知ってるじゃないか。空のことについても知ってるんじゃないかって思ってたさ」

「……クロノスカ」

リサは腕を組み、顔をしかめた。

「あの人、怪しすぎるんだよね」

「……まあ、怪しいといえば怪しいけど」

思わず、僕は笑ってしまいそうだった。最初の意見が「怪しすぎだもんな」

「私たちを助ける目的がなんなのか、さっぱりわからないし」

彼女は大きくため息を漏らした。

「でも、世界を救おうとしている人には間違いないんじゃないの？」

「それだったら、助けてほしかったよ。……ジョナサンやヴァルバをさ」

そう言って、彼女は再び海の方へ視線を向けた。

「……あの時、私が襲撃することを予測できていれば………エスナで、2人を死なせなかったのに……」

弱弱しく放ったその言葉の時だけ、気弱な少女のように感じた。

それを振り払うかのように、彼女は首を振った。

沈黙が流れ、海が波立ち、この巨大装甲船にぶつかった時の音だけが聞こえる。それを断ち切ろうと、僕が話しかけようとした時

「わかってる」

彼女はそのタイミングをわかっていたかのように、僕を遮った。

「悔やんだって、仮定の話をしたって、ただ自分を追いつめるだけにしか過ぎない。私たちは、生きてるんだから」

「……………」

「でも、考えられずにはいられないよ……」

彼女にとって、知り合いを失うというのはどうということなのだろうか。

生と死が密接に存在するこの世界……いや、リサの見る世界では、どのように映るのだろうか。それを知りたいと思ったのは、僕を育て、僕が見てきたあの世界とは、まるで違うからだ。

知り合いが一人、また一人と消えていって……彼女は、我慢しているように感じた。

「クロノスさんには、クロノスさんの目的があるんだろうな」

「……どういう？」

リサは振り向かず訊ねた。

「わからない。けど、僕たちに害を与えるような人じゃないってことだけは、わかる」

すると、彼女は再び大きなため息を漏らした。

「……どうせ根拠もなし、でしょ？」

くるつと振り向き、彼女はどこか訝しげに僕を見る。

「まあな」

「まったく……」

呆れつつも、リサは軽く笑っていた。少しは、気が晴れただろうか。

「……漆黒の剣士も、同じなのかな」

ふと思いだしたのか、リサは呟いた。

「漆黒の剣士か……ピンチになったら、現れてくれるんだよな」

ホリンと初めて戦った時、船上でホリン・ミランダと戦った時、そしてシュヴァルツたちが帝都を襲撃した時……僕たちを、ピンチから救ってくれた。顔をまったく見せていないし、声も聞いたことがない。わかっているのは、ホリンやミランダを遥かに凌ぐ戦闘能力を持ち、魔法に関してもリサ並みなのもかもしれないということだけ。

「変人なのは、間違いないな」

「？　どして？」

リサが首をかしげると、僕は手を広げた。

「全身黒づくめで、おまけに仮面もかぶってるとききた。どう考えても変人だろ？」

「ハハハ、そうだね」

リサは口元を押さえ、笑い始めた。

「なにせよ、私たちの邪魔をしないならなんだっていいんだけどね」

リサはぐーんと体を伸ばした。細身の体が、夕暮れの光により映えて見える。

「シユレジエンに寄るなら、クロノスの所に行こうか。ついでに」  
腰に手を当てているリサは、太陽の光で妙なシルエットに見えてしまう。

「居場所、知ってるのか？」

「うん。だって、あの人はだいたいユートピアにいるしさ」

そういえば、いつか言っていた友人というのは、妖精の国・ユートピアに住むミリアだったよな。

「……前にさ、クロノスさんに訊いたんだよ。『あなたは、何者なんでしょうか』って」

そう言うと、リサは僕の方に歩み寄って来た。

「なんて答えたの？」

「僕と同じような力を持った『人間』だって」

「人間？」

リサは怪訝そうに僕を見つめ、目の前に腰を下ろした。

「嘘くさいわねえ」

「だろ？ 僕もそう思うんだよ」

僕たちは顔を見せ合って、笑った。笑いが収まってきたところでリサは、

「でも、あんたと同じような存在ってことは…… 調停者 なのかな」

「さあな…… 言葉の意味をそのまま捉えると、そういうことになるけどな」

「……謎の多い奴」

と、彼女は仰向けになって上空を見つめた。

「そーいうお前も、謎が多かったぞ。今は結構知ってるけどさ」  
あぐらをかいて、僕はほくそ笑みながら言っちゃった。

レイディアントの人間だのなんだの、意味のわからんことを始めは言っていた。どんだけ意味不明な女だよ、などと思っていたもん

だ。

「根に持つてる？」

「何を？」

「隠してたこと」

彼女は、上空の赤みがかつた雲を見つめていた。

「まあ……最初はイライラしたかな。けど、それはそれではないことだと思ってるし」

「なんでそう思うの？」

「何でって……」

わからないかなあと思いつつ、僕は彼女と同じように上空を見つめた。

「お前にはお前の事情があつて、行動していた。そうだろ？」

そう言つても、彼女から言葉が来る気配は無かつた。

「それに、僕はお前が奴らを止めるために、必死に今まで生きてきたのを知ってるしさ」

「……そっか」

ふと視線を彼女に戻すと、リサは横向きに寝っ転がっていた。ちよつど、僕に背を向けている状態だ。

「……罪悪感でもあんのか？」

「……」

何も言わないリサ。それだけで、彼女は気にしてんだらなと直感させる。

「気にすんなつて」

僕は、小さく笑つた。

「……気にしてない」

力の無い返事は、いつものリサらしくはなかつた。

「ホントかよ。お前、後に引きずるタイプだからな」

シュヴァルツたちとのことなど、あの時の彼女は泣いていたからな……。

「ま、そこがお前の良いところだと思つよ」

「……………」

すると、リサは僕に聞こえるくらいのため息を吐いた。

「うっさい」

「へーへー。んじゃ、僕は撤退しますよ」

いい加減、寒くなってきたので部屋に戻ることにした。というより、リサを一人にしておいた方がいいかなと思ったのだ。

なんだかんだ言っつて、あいつも空と同年の、まだ16歳の少女なんだ。少女が背負うには、大きすぎるものを背負っている。それを、考えてやらないといけない。

10日程度で、リーフ島に到着。3月だというのに、ここにはまだ、雪がたくさん残っている。雪は降っていないが、数十センチくらい積もっている。前に来た時のような、大雪じゃないからいいけど。

食料を調達している間に、僕とリサは王都に向かった。

王都はどこか慌しく、ピリピリとした空気が流れていた。ここにも、ルテティア滅亡の報告は来ているはず。今度は、自分たちじゃないかっていう不安感の表れなのかもしれない。

王宮へ行き、僕たちはラーナ様にお会いした。

「お久しぶりですね、ソラ君、リサさん」

穏やかで、優しい微笑み。母親の暖かさを感じさせる、ラーナ様の声。どうしてか、ホッとした感じになる。けど、以前よりもやつれたように見える。やはり、インドラのこと大きな心労となっているのだろう。

「ご無沙汰しています」

僕たちは同時に一礼した。

「……………あの時、あなた方が来てくださらなかったら、私は崩壊と共

に死んでいたでしょう。……ありがとうございます」

「……けど、他の人は救えませんでした。……残念です」

「自分で気にするなって言っておいてこれだもんなあ、まったく」

リサは呆れ顔で僕を見ていた。

「あのな……」

「仲が良いですね、2人とも」

ラーナ様は微笑みながら言った。

「え？ まあ、腐れ縁ですし」

「空……そこは、ちよつと否定するところよ？」

「何で？」

「もう……」

リサは顔を少し赤くし、頭を抱えてため息を漏らした。

「ところで、お2人は何の用でここに？」

「あ、そうだった」

今回、僕たちがここに来たのは、確認したいことがあったからだ。

それは、『巫女』について。

「……単刀直入に伺います。ラーナ様が話してくださった王子

ジルファア王子についてなんですが」

そう訊ねると、ラーナ様の表情が少しだけ険しくなった。

「ジルファア王子は、男性ですか？」

「……」

ラーナ様は視線をそらし、口を閉ざした。それだけで、答えはわかった。シュヴァルツたちが言っていたことは、本当だったのだと。

「やっぱり、男性じゃないんですね」

ラーナ様はうなずいた。

「……どうして、王女であることを隠していたんですか？」

僕の問いに、ラーナ様は答えずに近くのイスに座った。目を瞑って、どこか物悲しげに。

「ジルファアは……いえ、シルヴィアは、呪われた運命の下に生まれてしまった子なんです」

ラーナ様はまぶたを開け、僕たちの向こうを見つめながら語り始めた。

「この国には、子供は生まれてすぐに占いをしてもらう風習があります。もちろん、シルヴィアも占ってもらいました。……その時に、あの子の運命は、呪われていると診断されました」

この子は、いずれ闇に囚われることとなる。そして、逃れられぬ死に向かうことになってしまうと。

「そして、どうすればいいのかを尋ねました」

成人するまで女性であることを隠すこと。親族にも、それを教えてはならない。そうすれば、彼女にかけられた呪いは解かれるだろう。

これでわかった。どうして、女性であることを隠す必要があったのか。それは、『永遠の巫女』であることを隠すためだ。巫女として生まれたのなら、樹たちによってさらわれ、殺されてしまう運命があるかもしれない。

「ただの占い……そう思いたかった。けれど、言いようの無い不安が、私たち夫婦に纏わりついていたので。……だから、あの子を男として、王子として教育していったのです」

「そうなんですか……」

僕はリサと目を合わせた。そして、彼女は哀しそうな顔でうなずいた。

シュヴァルツたちの言ったことが本当だとわかった以上、伝えなければならぬことがある。それは、巫女としてさらわれ、どうなってしまったかということ。

「ラーナ様、落ち着いて聞いてください」

ラーナ様は頭をかしげていた。この穏やかな顔を、一瞬のうちに絶望に変えてしまうと思うと……気が引ける。

僕は、躊躇ってしまった。自分の娘のことなんだ。知らなければならぬんだ。だけど、ラーナ様にとって知らない方が幸せなんじゃないかと、少なからず思っている僕がいるのも確かなんだ。

「私が代わりに言おうか？」

リサが、僕の顔を覗きながら言った。

「嫌なら、無理しなくてもいいよ。私が言うからさ」

彼女は僕より一歩前に出て、少しだけ深呼吸をしていた。

「……ラーナ様。今回、私たちがここに来たのは、あることを知ったからなんです」

「あること？」

ラーナ様がうなずくと、リサも小さくうなずいた。

「シルヴィア王女は、亡くなられています」

「えっ……？」

ラーナ様は口を小さく開いたまま、硬直した。

「今……なんて……？」

目を見開き、ラーナ様はイスから立ち上がった。

「落ち着いてください。シルヴィア王女はインドラによってさらわれ、殺されていたんです。……ラーナ様から王女の話聞いて、確信しました」

「そん……な……っ！」

ラーナ様は小さく震えだした。その姿を見ると、心がひどく傷むような感覚に襲われた。

「ど、どうして？」

「……シルヴィア王女がさらわれた理由は、王女がインドラの求める『永遠の巫女』だったからです」

「……！」

ラーナ様は顔を抑え、ペタリとその場に座り込んだ。

「……そんな気がしていました。あの子が、突然いなくなってしまうってから……」

床に手を付き、ラーナ様の涙が下へ落ちていく。

「きつと、呪いをかけた死神がさらいに来たのだと……心の奥底で、

そんなことを思っていました」

生きていてほしいと願っているのは確かだが、その中には小さな確信も孕んでいた……ということだろうか。

「でも……それでも、シルヴィアはどこかで生きている」

ラーナ様は顔を上げ、僕たちを見据えた。そこには、いつもの優しい微笑みが現れていた。

「……何となく、そう感じるのです。風が、そう教えてくれているように……」

風のような王子 そんな話を聞いたからだろうか。ラーナ様の言っていることを、理由もなく納得してしまったのは。

ラーナ様に別れを告げ、僕たちは王都ジニーの中央通を歩いていった。まだまだ寒いシュレジエンでは、完全防備をしないと寒くてやっつけられない。

「どうする？」

リサは自分の鼻に付いた雪が溶けるのを見つめていた。

「どうしようか？」

「あんたね……」

「こういう時、どうすればいいのか……ホント、わからなくなるよ。僕は上空を仰いだ。吐いた息が、白い霧となって寒空へと昇る。

「……気になったんだけど、巫女っていうのは何人いるもんなんだ？」

あまり考えたことではないので、訊いてみた。いる人数だけ、犠牲になったって考えられるし。

「全部で32人……だったかな」

「さ、32人！？ そんなにいるのか！？」

僕は思わず、声を上げた。それに驚いたのか、彼女は雪を見るの

をやめて僕の方に振り向いた。

「そんなに驚くこと？」

「いや、だって……そんだけ犠牲になったってことだろ？ そうだとしたら……」

すると、リサは首を振った。

「それは、古代ティルナノグ期に開発された特殊元素の数。だから、そんだけいるんじゃないかってこと」

彼女も、本当のことはわからないそうだ。

「聖杯の覚醒に必要なエネルギー充填に達せられれば、巫女は32人もいらぬ。だって、私やアンナは無事でしょ？」

「そう言えば……そうだな」

「誘拐の噂とか、シルヴィア王女とかのことを考えると……犠牲になったのは、10人程度だと思う」

僕たちが知る限り、犠牲になってしまった巫女は……空、リノアさん、シルヴィア王女の3人。ほかに、7人も犠牲になった人がいるのか……。

ゾツとした。それをしたのが、僕の弟の樹なのだから。

リサの話によると、巫女はそれぞれ違う元素を持ち、名称も違う。空は『紺碧』を持つ『蒼空の巫女』。リノアさんは『業火』を持つ『烈火の巫女』。シルヴィア王女は予測であるが『翡翠』を持つ『緑風の巫女』。ほかに『命』の『再生の巫女』、『音』の『旋律の巫女』、『雪』の『氷雪の巫女』などがあるという。リサもアンナも、巫女の一人である。

「……どうして、リサはさらわれなかったんだろうな」

「え？」

リサは首をかしげた。

「だって、お前の先天属性ってかなり強力なものなんだろう？」

ヴァルバの話が正しいという前提だが。

「そのお前を、どうしてさらわなかったんだろ。従兄であるシュヴァルツもバルバロッサも、気付いていたはずだし」

「……そうね。そう言われてみれば……」

リサは腕を組んで唸り始めた。と思うと、僕に眉を八の字にして顔を向けた。

「でも、そうする理由がわかんない」

「……だな」

シュヴァルツやバルバロッサには、少し不可解なところがある。リサをさらわなかったこと、殺さなかったこと、今まで放っておいたこと。脅威となる人物だと、理解していたはずなんだ。それを、わざと生かしておくのは、別の目的があるということなんだろうか。

浮遊大陸　天空帝都には、まだ秘密が隠されており、それにリサは関連しているということか？　えさを撒き散らし、おびき寄せ、捕らえる。

ただの餌でしかない？　そして、リサを……

いやあああ　　！！

悲鳴が轟く。女性の悲鳴が。

やめろ……やめろ。

でないと……貴様らを、肉片一切残さずに……殺

「どうしたの？」

リサは疑心一杯の顔で、僕を覗き込んでいる。僕はハツとした。  
「怖い顔しちゃって……どうしたの？」

「……怖い顔なんかしてたか？」

彼女は目をパチクリさせながら、小さくうなずいた。

怖い顔……何を思って、僕はそういう風になったんだろうか。

「うーん……意味わかんね」

「……？ 変な奴だね」

「失礼な女だこと……」

杞憂であればいい。ただの、杞憂であればいいのだが……ヴァルバのことがあったから、気に留めておいたほうがよさそうだ。

……ヴァルバ、僕たちを守ってくれよ……。

その後、僕たちはクロノスさんのところへ行くことにした。リサの空間転移の魔法・アースで、一っ飛び。

果てのない草原が広がる妖精の国 ユートピア。

よくよく見てみれば、あちこちに小さな家々が並んでいる。赤い屋根で、レンガ造りだ。大きさ的には、32型のテレビくらいだ。

妖精はミリアを除けば、掌サイズだったから、あの程度くらいがちょうどいいのだろう。

「あっ！ リサだ！」

子供の妖精の声が、上空から聞こえた。上を見上げると、そこには姿は無かった。すでに、リサの回りをぐるぐると飛んでいた。

「よっ。久しぶり、マリユ」

リサが名前を呼ぶと、マリユは彼女の目の前に停滞した。

「なかなか来ないから、いい加減死んだのかと思ったよ」

「ハハハ、この私がそう簡単に死ぬかっての」

「そりゃそうだ。女とは思えないほど凶暴」

リサの裏拳が、僕の額に命中。

「誰が凶暴だつて？ 誰が」

「お、怒って殴るところが、凶暴じゃ」

今度は脳天チヨップ。僕は頭を抱え、ひざまずいた。ぬう………！

「やれやれ、リサは相変わらずだな」

マリユはため息混じれに笑っていた。

「それにしても、人間の男と来るなんて………どういふ風の吹き回しさ？」

と、マリユはニヤニヤしてリサを見ている。

「なーに言ってるのさ。そんなんじゃないよ」

「ふーん、てつきり……」

「余計なこと言うと、握りつぶすよ？」

「……相変わらずだね、ホント」

マリユは引きつった顔で答えた。うーん、妖精君もわかっているのだろう。リサの恐ろしさを……。

「んで？ 今日はどうしたのさ。あっちにでも行くの？」

あっちとは、ガイアのことだ。

「いや、クロノスに会いに来たんだ。いる？」

「おお、いるよ。ミリアの家に行きな。たぶん、本でも読んでいるだろうからさ」

「わかった。ありがとう」

ミリアの家は、このユートピアの中で最も大きい。当然と言えば当然。ミリアは、他の妖精とは違って、人間の子供くらいの大きさだからだ。妖精たちの親分的な存在なのかもしれない。

それは、普通の家だった。一本の廊下があり、両側の壁にいくつかの部屋へ通ずる扉が付いている。廊下の奥まで行くと、そこはリ

ピングのような場所だった。柔らかな日差しが窓から差し込む中、辺りを見渡すが……ミリアの姿は見当たらない。

「おい、ミリア。いないのー？」

リサの声が家の中で木霊する。

「……その声、リサー？」

どこからか、ミリアの声が聞こえた。

「そーだよ、私だー」

「わかったー。待っててー」

一体、どこから声をするのだろうか。あっちこっちから声が聴こえてくる。まるで、体育館の中で彼女だけが叫んでいるかのようだ。すると、どこからかともなくミリアが現れた。部屋の上空をくると飛び回り、ピンク色の羽を動かしながら、僕たちの前に停滞した。ピンク色のロングヘア、大きな瞳、しかもスッポンポン。うぐ……頼むから、服を着てほしい……。

「やっほー」

ミリアは目の前にいるっていうのに、手をぶんぶん振っている。

「久しぶり、リサ。……ん？ あんた空じゃないの」

「あ、ああ……久しぶり」

僕はすでに顔を横へそらし、今の光景から逃亡している。

「リサが男を連れてきているなんて、珍しいもんだな」

「うっさい」

ミリアはケラケラと笑った。

「ここに来たってことは、クロノスに用事があるんだろ？」

どうしてわかったのか不思議だが、僕たちはうなずいた。

「クロノスなら奥にいるよ」

「いるの？ 呼んでも、返事が無かったよ？」

「……寝てるんじゃないの？」

クロノスさんが寝る？ なんか、あの人が寝るところを想像できないんだよな。寝ることも必要としない、超人っぽいし。

奥の部屋に行くと、たくさんの本棚に囲まれ、イスで寝てしまっ

ているクロノスさんを見つけた。床にも、本が無造作に撒き散らされている。

「もー、クロノス！」

ミリアはピューンと彼の頭の上に飛んで行き、わめき始めた。

「起きろ！ クロノス！！」

今度は、頭を軽く叩いた。クロノスさんは、うめきながら体を起こした。

「……どうした？」

クロノスさんは目を閉じたまま言った。

「あなたにお客様だよ。……て言うか、本は読んだら片付ける！」

「ああ、そうだった。すまない」

クロノスさんは腰を上げて、目をこすりながら微笑んでいた。

「さて……今日は何の用かな？ リサ、空」

僕たちを見ず、クロノスさんは言った。

「クロノスさん、実はお聞きしたいことがあります……」

「なにかな？」

なぜだかわからないけど、僕は少し緊張していた。唾を飲み込み、僕は口を開いた。

「実は、空のことなんです……」

「単刀直入に訊くよ。なんで、空ちゃんはリユングヴィの血を受け継ぐ『永遠の巫女』なのさ？」

「お、おいおい……」

僕が訊く前に、一步前に出て訊きやがった。

「イレギュラーの世界であるガイアにはカイン……初代の調停者は存在しなかったはずよ。ということは、その一族もいなかったことだろ？ おかしいじゃないか」

「……なるほど。そのことが……」

すると、クロノスさんは少し考える仕草をしながら、本棚を見つめた。

「……遙か昔、リユングヴィの祖先と彼女の祖先は同じだったという」と、だろっ」

「……？」

首をかしげると、彼はフツと笑った。

「私も全てを把握しているわけではない。彼女については謎が多すぎるのでね」

そう言えばいつだったか、リサも「謎が多い」と言っていた。

「今はまだ、確信が持てないというのが正直な話だ」

「何らかの憶測はできている……ということですか？」

僕がそう訊ねると、クロノスさんは顔をこわばらせた。

「……憶測で話はしたくないのだよ。確信が持てるまではね」

「……」

じゃあ質問を変えよう　そう言いながら、リサは腕を組んだ。

「あんたが何者で、何が目的なのかを訊きたいんだよ」

リサはストレートに言い放った。いや、文句があるわけじゃないのだが……こういう質問するのは、少しくらい躊躇するもんだと思うんだが……。

「……私が怪しいと思って、そのような質問をしたと受け取るが？」

クロノスさんは、微笑を浮かべながら僕たちを見据えた。

「そーいうこと」

「ふむ……」

クロノスさんは本棚の本を1つ、手に取って開いた。

「私は……この次元　時間軸の人間ではない」

本の活字に視線を走らせながら、クロノスさんは呟いた。

「この時間軸じゃない……ってことは、どういことなんですか？」

「何言ってるの。私と同じさ」

僕を塞ぐかのように、ミリアが目の前に出て言った。とりあえず、

彼女から顔を背け、

「そりやどーいう意味だ？」

「わかんない？ あんたたちが『妖精』って呼んでいる私たちは、別次元の生命体。あんたたちがそう捉えているから、そうなんの」

「……私たちがそう見ようとしているから、あんたたちは妖精に見えるってことか？」

リサが言うと、ミリアはうんとうなずいた。

「本来は遭遇するはずの無い別次元の生命体……それが、私たち妖精とクロノスってことさ」

そう言って、ミリアは軽く飛んで本棚の上に腰掛けた。

「妖精たち……この次元が、二つの世界が分たれてしまったために隙間に引き寄せられたってことは知ってるよ。けど、なんでクロノスがいんの？」

クロノスさんが妖精……ならば、ここにいてるってことも納得できるのだが、見つからに普通の人間。雰囲気以外は。

「……それは、2つの世界を見定めるためだよ」

クロノスさんは、ゆっくりと本のページを一枚めくった。

「遠い昔……一つの世界は分たれ、二つになってしまった」

まるで歴史を語るかのように、僕たちに聴かせるかのように彼は語り始めた。

「それをしたのは、全てを変えようとした一人の人間……愚かにも彼はあらゆる時の流れさえも、変えてしまおうとした」

ゆっくりとページをめくっている彼の顔には、懐かしさのようなものを浮かばせてはいたが、時折……哀愁を漂わせているかのようだった。

「その結果が、ガイアとレイディアントだ」

彼は視線を上げ、本棚を見つめた。

「……だからこそ、私は見極めたいのだ。二つの世界が、太古の運命による楔から逃れられるのかを……」

そして目を閉じ、すばし沈黙が続いた。

「運命の楔……？」

リサはそう言い、鼻で笑った。

「くだらないね。運命だとかなんだとか、そんなの関係ない。私たちは、最初っから自分たちの望むがままに生きてんだから」

「……かつて、己の運命を呪った者の言葉とは思えんな」

クロノスさんは本を閉じ、嘲笑するかのように微笑んだ。一瞬この場に張りつめた冷たい空気に、僕はぞくりとした。

「ふん、私は私だ。自分の運命を呪ったからこそ、今は前を向いていられるんだ」

いつもなら怒り狂うはずなのに、彼女は胸を張っていた。いや、怒っているのだろうけど、それを何とか抑えている。

「……運命の女神を欺くことはできん。絶対にな」

「運命に逆らうことから逃げた腰抜けってことだろ、あんたは」

「お、おい……リサ」

僕がそう言うと、リサはそっぽを向いてしまった。

「……ともかく、1つだけ言っておくが、私は君たちの邪魔をするようなことはしない。絶対にだ」

本を棚にしまい、彼はあの紺碧の瞳で僕を見ていた。

「……帰るよ、空」

リサは出口の方へ体を向け、早足で歩き始めた。

「ちよっ……待てよ」

そのまま、リサは家の外へ出て行ってしまった。僕はクロノスさんに頭を下げ、ここを後にした。

「……大変だね、あんたも」

「ミリアは本棚の上に座ってまま、羽をばたつかせていた。」

「時の呪縛によって、あんたは完全には両世界へ干渉できない。運命を捻じ曲げるようなことは、赦されない。……あいつらを援助したいとしても」

「……それが、大罪を犯した私に与えられた 罰だ。受け入れるしかあるまい」

「受け入れるねえ……」

「ミリアはフーとため息をついた。」

「……腰抜け、か」

「クロノスは再び椅子に腰かけ、天井を見上げた。」

「まさに、そのとおりだな」

「自分を嘲笑うかのように、フツと微笑む。」

「腰抜けクロノスか。変なの」

と、ミリアは少女のように微笑んでいた。何かを察知したのか、クロノスは彼女に顔を向けた。

「それをあだ名にするのはよしてくれよ？ 子供たちに笑われてしまっからな」

「私が黙っておくと思う？」

「ミリアは頬杖を付き、ニヤニヤしていた。それを見て、クロノスはため息混じりに、

「うーん、そうだったな。お手上げだ」

と言つて、苦笑した。

「おい、待てよ」

「ユートピアの草原をスタスタと歩くりサ。すると、ようやく立ち止まった。」

「まったたく……怒るなつて」

「うつさい。怒ってないっつの」

「あのな……」

どう見ても怒ってるじゃんかよ……。そう思いつつ、僕は彼女に聞こえないようため息を付いた。

「もうここには用事ないでしょ？ 帰るわよ」

リサはそう言うと、上空にあるレイディアントへのワームホールへ行こうとした。

「リサ、ちょっと待ってくれ」

「ん？」

彼女は不機嫌そうな顔で振り向いた。そんな顔されると、言いたいことも言えなくなっちまう……。。

「実はさ、お願いがあるんだけど」

「お願い？ ……まさか、ガイアに連れて行ってくれなんて言うんじゃないでしょうね？」

ものすごく嫌そうに見る、彼女の瞳。

「違っつての……」

その目で見られたら、やる気を削ぐつての。

「……アイデアに連れて行ってほしいんだ」

「アイデア？ 何だよ」

完璧に何もわかっていない表情だったので、僕は思わず肩を落とした。

「何でつて……これだよ」

僕は懐からある物を取り出して、彼女に見せた。

「これは……」

そう、ペンダント。というより、ロケットだ。ホリンが死ぬ間際、僕に渡したものだ。

「……そうだったね。忘れてたよ」

リサはロケットを眺めた。この中には小さな写真があり、そこにはラル八王女の姿があったのだ。

「行かなきゃね」

「ああ」  
リサは、アースの魔法を唱えた。僕たちは光に包まれ、上空へと昇って行き、消えた。

「ところで、これからあなたはどうすんの？」

ミリアは大きく背伸びをした。それと同時に、4つの羽が小刻みに震える。

「……運命の女神の導くままに、さ」

「運命？ あんた、運命なんて信じてるわけ？」

「……………」

クロノスはあごに手を当て、少しだけ唸った。

「……人には、どうすることもできない流れというものがある。それに流れるか、逆らうか……。それ全体のことを運命と呼ぶのなら、信じてはいないがね」

「？ 意味わかんない」

ミリアは本棚から降りると、クロノスの座っているイスの傍にあるテーブルに座った。

「いずれにせよ、遙か深淵の導き手が創りたもうた円環……あるいは、螺旋。行き詰まるところは高次元か、あるいは新たな……」

「意味わかんない」

クロノスは、少し笑った。

なるほど、ミリアは幸せなんだな。

「あんたってさ、頭固いんだよ。もうちょっと柔らかくしたらどう？」

「……………考えておこじ」

「いや、真に受けてもらっても困るんだけど」

「おや、そうだったか」

光が消え、目を開けると　どしゃ降りだった。

「おわっ！！　な、なんで雨が降ってんだ！？」

「そりゃ、土地がまつたく違うんだもん。当たり前じゃんか」

「　だもん……じゃねえよ！　場所考えて移動してくれたっていいだろ！？」

「うっさいなー！　文句言っただったら、今度からアースしてあげないからな！」

ふん、とりサはすねた。ていうか、雨が降ってのに平気そうな顔をしているのはどういうことだよ。

よく見渡せば、ここはイデアだ（当たり前だが）。

「ともかく、王城に行こう」

「ハイハイ」

リサは適当に答え、のらりくらりと走り出した。

「おや、あなたたちは……」

城門を守る兵士はこの大雨にも関わらず、サボらずにきちんと仕事をしていた。

「どこかで見たような……」

兵士は僕たちを下から上まで、じろくつと眺めた。

「あの、皇隆王様にお会いしたいんですけど」

「陛下に？　無理だ、無理だ」

兵士はぶんぶんと頭を振った。

「……どうしてですか？」

僕は顔をかしげた。

「知らんのか？ インドラなる者たちが隣国ルテティアを攻め滅ぼし、今度は我が国を狙っているとのこと。そんな時に、お前たちのような怪しい奴らを、陛下に会わせるわけにはいかん」

「そっか……すでにルテティア崩壊の連絡は来ているんだ。対応策などを練っているのだろう。」

「なんつーか……大切なことなんですって」

「ラルハ王女のことだし、たぶんそうだ。」

「ダメだ」

しかし、兵士はなかなか承諾してくれない。こんな態度じゃあダメなんで、僕は思いつきり懇願する顔をした。

「ホントッ！ めちゃくちゃ大切な用事なんです！ お願いします！」

「そう言われてもなあ……いや、無理だ」

「ええ？ ケチ」

「ケ、ケチとはなんだ!？」

僕は軽く舌打ちをした。

前回は入ることができたんだが……あの時はリサが色仕掛けみたので、兵士をおとしたもんだ。

「絶対にダメなんですか？」

いつの間にか、リサは兵士の真ん前に突っ立っていた。その様子に、僕の脳裏に嫌な予感がよぎった。おいおい……今度は何をする気だ？

「む、無理だと言っているだろう。あまりしつこいと、捕らえ」

ズビシ

リサは秘孔を突いた。兵士は、3秒以内に死んでしまう……ってのはウソで、リサは兵士の眉間を殴った。すると、兵士は目を回して、バタンと倒れてしまった。

「お、お前！ な、何をした！」  
もう一人の兵士が、駆け寄って来た。まずいと思った瞬間、

ズビシ

リサは同じように、眉間を一突きした。またも、兵士はバタンと倒れた。これが漫画なら、きっと頭の上に鳥が回りながら飛んでいるだろう。

「……………」

「これでよし」

満足気な顔で、リサは僕の方に顔を向けた。いや、そんな顔を見せられても……………。

「行こ、空」

「あ、ああ……………」

スタスタと歩いて行く彼女の後ろを、僕は付いて行った。

「……………お前、何をしたんだ？」

「気絶技。眉間を殴った瞬間、電流みたいなものを飛ばしたから、数時間は気絶したまんまよ」

「……………」

「何よ？」

「いや、なんでもアリマセン」

おっそろしい女だこと……………。

エントランスを抜け、謁見の前へ続く扉の前へと進んだ。

「失礼しまーす」

扉をノックし、言った。しかし、あまりにもざわざわしていて、気付いていないようだ。会議中なのだろう。

「お、おい、お前たち、何をしている？」

振り返ると、驚いたような顔をしている兵士が立っていた。

「今は臨時会議中だ。邪魔をするでない」

「臨時会議？ それ、やっぱりインドラのことについてですか？」  
そう訊ねると、兵士は少し唸った。

「ああ。2月に聖都で起きた襲撃とルテティア滅亡の報を受け、イデアがどうするかを話し合われているのだ」

あの時、皇隆王は怪我をしているものの、命に別状は無かった。さらに、他の重臣たちも運がよかったのか、みんな生き延びたのだという。

「僕たち、皇隆王陛下の知り合いなんです。通してくれませんか？」  
陛下の？ ならば今はダメだ。大事な会議中だからな」

「けど……」

「ちょっと、ちょっと」

リサは兵士の肩を指先で、ちょんちょんと突つつく。

「ん？」

兵士が彼女の方に顔を向けた瞬間、

ズビシ

バタン

さっきと同じように、兵士は気を失った。目をくるくると回している。

「……………」

「行く、空」

「おいおい……」

まあ、いちいち気にすることでもないか。

リサは扉を開け、ずかずかと乗り込んで行った。広間の奥に座っている皇隆王を中心に、頭が固いと王が言っていたおじいさん大臣たちがいた。おじいさんなのに、大きな声で何かを言い合っている。すると、みんなは僕たちに気付いたのか、こっちに向き始めた。

「なんじゃ？ 貴様ら！」

「今は会議中じゃぞ……！」

「うるさい！ ワシがしゃべっとるんじゃぞ!？」

「何をゆうとる!! ワシじゃ!」

「いいや、ワシじゃ!」

「ともかく、これからはゼテギネアに対し……」

数人の大声が重なり合い、何を言っているのか理解できない。

「んん? ソラたちじゃないか!!」

王の声が聞こえた。大臣たちに囲まれ、顔だけを出している。

「おい、お前ら……」

「じゃからな、これからはゼテギネアとの条約も視野に入れ……」

「襲撃して来たのは、奴らかもしれんのじゃぞ!」

「考えられん!」

じいさんたちの声に阻まれ、王の言葉がかき消されてしまった。

「……だぁー!!! ちょっと黙れ!!!」

王の大声が広間に響き渡り、じいさんたちの言葉と動きが止まった。

「俺の客が来てんだよ! ちょっと静かにしろ!!」

「……客ですか?」

「ああ、客だ。ほら、あいつら」

「??」

じいさんたちは落ち着きを取り戻し、目が悪いのか、顔を前にのめり出して僕たちを見つめていた。

「覚えていないか? ルテティアの使者として、ここに来た彼らを」

「……??? 誰じゃったかの?」

「さあ……?」

じいさんたちは顔を見せ合っていた。ま、一度しか会っていないから、わからないのも無理はない。

「あいつらは、俺を聖都で救ってくれたんだ」

「そうなのですか?」

そうと王はうなずいた。

「さあ、こっちに来い。用事があったんだろ?」

王は手招きをし出したので、僕たちは玉座の所まで行った。

「今日は、インドラについて話してくれるのか？」

「へ？ あ、ええっと……」

いちおう、伝えておいたほうがいいのかもしれない。ゼテギネアと樹たちのことを。

「インドラの首領と幹部は、ティルナノグの浮遊大陸を復活させるべく、グラン大陸へ向かいました」

リサは説明を始めた。

邪神復活というのが最後の天帝・ユリウスの力であること。ゼテギネアが襲撃され、皇帝以外の主要な大臣が殺されてしまったこと。そして、ゼナン5世が勅命を下し、大軍を擁してルテティア解放を宣言したこと。

「なんじゃと……！？ まさか、ゼテギネアはロンバルディアを、この隙に攻め取るつもりでは……」

一人のじいさんが、呟くかのように言った。

「そうか……きやつら、そもそもそのつもりじゃったんじゃないのか？ インドラと裏で繋がり、画策しておったのかもしれない」

「たしかに……ゼテギネアは聖都での会議にも出席せず、首脳陣は無傷。そしてインドラによるルテティア侵攻……考えてみれば、つじつまが合うじゃないか」

「ちよっ……待ってください」

止めようとするも、じいさんたちの勝手な想像は膨らんでいくばかりだった。少しずつ興奮していつているようにも見える。

「ゼテギネアに対抗できるのは、ルテティアだけじゃ。ルテティアが滅ぼされた今、数十万という大軍で攻め込まれたら、我がイデアは……」

「待ってください！ ゼテギネアは、ロンバルディアを手に入れよ

うとは考えていません！」

僕は大声で言った。そうでもしないと、耳の悪いじいさんたちには聞こえないからだ。そんな僕を、じいさんたちは衰えながらも鋭い視線で見してきた。

「おぬしのような若造に、何がわかるというのじゃ。よいか、ゼテギネアとはな……」

「ブリユレン、ちょっと黙っている」

いつの間にか王は玉座から降りて、大臣たちの声を塞ぐかのように、僕とリサの前に立っていた。

「こいつらは、実際にゼテギネアに行ったんだ。そうだろ？」

どこが微笑んでいるように、王は言った。

「……ゼテギネアのゼナン5世陛下は、混乱に乗じて領地を手に入れようと考える人ではありません。僕たちは、この目で見てきました。皇帝は諸国と協力し、インドラを駆逐しようとお考えです」

ゼナン皇帝の目に、ウソはなかった。それだけは確信できる。

「じゃが……」

「じいさん、こいつらはウソは言ってないぜ」

大臣たちの声を遮るかのように、彼らに笑顔を向ける王。

「今は疑っている場合ではない。我が国もルテティアを救うべく、ゼテギネアと同じように兵を派遣しよう」

笑顔から一転、為政者の顔になった。

「これより、緊急作戦会議を行う。諸将をここへ招集せよ！ ほら、早く呼びに行け」

すると、じいさんたちは「やれやれ」といった顔で、会議場から出て行き始めた。僕たちと王、そして大臣らしきじいさんの4人になった時、王は僕たちに顔を向けた。

「ご苦労だった、二人とも。今夜は、王宮でくつろいでくれ」

そう言ってくれるのはありがたいが、僕たちがここに来た本当の目的は、別にある。

「……実は、今日は報告が目的じゃないんです」

「ん？ なんなんだ？」

「ラル八王女に会わしていただきたいんです」

そう言うと、王は頭をかしげた。

「ラル八に？ なぜだ？」

「王女に、お渡したいものがあるんです」

僕の真剣な顔で何かを察したのか、王は神妙な面持ちになった。

「……わかった。そこまで言うつてことは、何か理由があるんだろ。リヴェン、ラルはを呼んで来てくれ」

「……年寄りに言うつてはの」

小さく文句を呟きながら、じいさんは奥の方に向かって行った。

数分後、ラル八王女がやって来た。腰まである長く、きれいな黒髪。黒いワンピースを着て、王女らしく黄金の首飾りなどを身に付けている。14歳と聞いていたので、まだまだ幼さが残る。ゼナン皇帝と同じくらいには見えるが。

「父上、どうしたんですか？」

王女は玉座にいる王の隣に行った。

「俺の客が、お前に渡したいものがあると行ってな」

王は僕たちを指差した。王女は僕たちの顔を見ると、頭をかしげた。自分は、この人たちは知らないといった顔だ。彼女も一目ぐらいいしか僕たちを見ていないので、気付かないのも無理はない。

僕は王女に近寄り、ロケットを胸のポケットから取り出した。

ホリン、ようやく渡せる時が来た。……遅れて、すまない。

「王女様、初めまして。ソラ＝ヴェルエスと言います」

僕は一礼した。

「……初めまして。ラル八です」

不審げに僕を見ながら、王女も小さく一礼した。端正な顔立ち……

…なるほど、どこか日本人らしさを感じる。褐色の肌を持つはずの東方民族なのに、肌は白い。

「あなたに、ある人から渡してくれと頼まれ、ここまで来ました」

「ある人……？ 誰ですか？」

そう問われ、僕は唾を飲み込んだ。彼女に悟られないよう、小さく深呼吸をする。

「…………… ホリンです」

言葉を放った瞬間、王女の顔が硬直した。

「ホリン……？」

「ええ、ホリン…… ホリン＝デイルムンからです」

「ホリン…… 兄さん！！？」

僕はうなずいた。信じられないだろう、行方不明だった兄代わりの人からのものだなんて。

「…………… これです」

僕はロケットを差出した。

「これは？」

「ロケットです。この中に、あなたの写真がありました」

王女はロケットを手に取り、ゆっくりと開けた。その写真を見て、彼女は震え始めた。

「どうして…… あなたが、これを……？」

「……………」

それを聞かれると、心苦しい。心拍数が、結構上がってしまったている。

「ホリンの最後に立ち会ったんです。その時、このロケットを受け取ったんです。…………… あなたに、渡してくれて」

今にも消えそうな灯火を瞳に宿し、彼は小さな声で言っていた。

「兄さんが……！？ ちょ、待って！ 兄さんは…… 死んだの！？」

悲痛な面持ちで、彼女は言った。ホリンが死んでしまったということに対し、彼女は信じ切れないでいた。

「…………… そうです」

「うそ……!!」

王女は床に座り込んだ。そして、大きな声を上げて泣き始めた。小さな希望が打ち砕かれ、絶望に浸されてしまった瞬間だった。

「ど……して、兄さんは……死んじゃったの？」

涙で心を濡らしながら、王女は訊ねた。これもまた、言わなければならぬことなんだ。辛いことだとしても。言ってしまったら、きっと王女は僕を怨むのだろう。そう思うと、言葉を出すのを躊躇してしまった。

「……ホリンは、僕が殺しました」

「え……っ!!!?!?」

王女は顔を上げ、僕を見た。涙でいっぱい瞳が、痛い。

「彼と戦い、彼を殺しました」

閃光のように駆け抜け、ホリンを斬った。今でも、あの時の感触がある。彼を切り裂いた、その時の。

「あなたが、兄さんを……!!?!?」

「……………」

僕は小さくうなずいた。それと同時に、王女の悲しみは、徐々に怒りへと変貌していった。

「どうして……どうして!?!? どうして、兄さんを殺したの!!?!?」

少女の声が、この謁見の間に轟く。

「ねえ、どうして!?!?」

僕の服を掴み、王女は僕の体を揺らす。なんで殺したのか……それは

「彼を止めるためです」

意味がわからない王女は、何度か瞬きをした。それと同時に、瞳に残っていた涙がいくつか流れ落ちていった。

「ホリンは大勢の人を殺した。無差別に」

「何よそれ……? どんなことを言ったって、あなたが兄さんを殺

したんでしょ!? そうなんでしょ!!!?」

殺したことには変わりはない 彼女の漆黒の瞳が、痛々しく僕を貫こうとしている。

「ええ、そうです。僕があいつを殺した。それは間違えの無いことだ」

「……………あああー!!」

「よせ、ラルハ!!」

王女が僕を殴ろうとした瞬間、王は彼女を後ろから抱くかのようにして抑えた。

「父上、話して!」

「落ちて着けラルハ!!」

「あいつが……………あいつが兄さんを!」

王女は泣き叫び、あの長い黒髪を乱していた。

「……………憎んでくれて構いません。だけど、2つだけ知っておいてほしいことがあります」

「!?!?」

王の腕の中で暴れていた王女は、静止して僕を見上げた。

「一つは、先ほども申しあげたように、彼が理想の名の下に、関係の無い人を殺したことです」

「ウソよ! 兄さんは……………兄さんはそんなことをする人じゃない!」

そうか……………彼女の中では、ホリンは優しい従兄のまんまなんだ。きっと、王は彼女のことを案じて、何も教えていなかったのだろう。……………そして、もう一つ。彼は、あなたのことを大事にしていたということですよ」

涙をまき散らし、王女の顔はすでにぐちゃぐちゃになっている。彼は人を憎んでいました。憎んで、怨んで……………」

いつも笑顔で人を殺していたのは、今までの自分を捨てようと無理に作った、仮面の顔だったのかもしれない。今だからこそ、そう言えるような気がする。

「けど、彼は……どこかで望んでいたんです。昔のように、陽だまりの中で生きていくことを」

僕は思わず、天井を見上げた。

「ラル八様。あなたがいたからこそ、彼は生きてきたんです」

「……私？」

僕は小さくうなずいた。

「あなたがいたから、彼は全てを憎まずに済んだんです」

全てを憎んでいるのなら、あの時、王を殺していたはず。僕に、あんなことを訊いたりしなかったはずだ。

「だから……あなたに望んだはずです。笑顔で、生きてほしいって」  
王女はロケットを握り締め、その場に崩れた。

「兄……さん、兄さん………！！」

これで、よかったのだろうか。僕では、こうすることが精一杯だ。  
ホリン……お前の口から全てを話してもらえると、すんなりいく  
んだけどなあ……。

## 60章：懐古の歌 その掌にある欠片とは

「今は絶海に入ったところだ」

絶海。シュレジエン諸島の北に広がる、巨大な海。大昔から海の底に魔物が潜んでいるといわれ、それが旅する船を襲うという伝説があり、誰も近付かない海である。もちろん、そんな伝説など本当のはずも無く、永久凍土と化したグラン大陸の近くにあるために、そういう伝説が生まれたのだろう。

聞くとところによると、グラン大陸の海岸線沿いには巨大な氷がいくつも浮かんでおり、船の行く手を阻めるのだという。

「ま、そんな氷なんてこのガルガンチュアにかかれば、ヘツチャラだぜ！」

大きな声でレンドは言った。貰ったのではなく借りただけなのに、レンドはすでに自分のものだと思っているようだ。明日には、「俺のガルガンチュア！」なんてことを口走っていそうだ。

「この距離だと……予定では、あと1ヶ月くらいかかるだろうな」  
海図を見ながら、デルゲンは言った。今回、ガルガンチュアの船長はもちろんレンドで、デルゲンはやっぱり副船長（仮）だ。この日、どのような海路で行くかをゼテギネアから派遣された操船者たちと相談していた。

「この辺りの海域は、氷河が流れていく場所です。西へ迂回してから進む方がいいでしょう」

「だが、そうすると時間がかかりすぎやしないか？」

レンドは操船者のロベルトさんに訊ねた。

「ですが、氷河に突進しながら進むのは危険です。いくらゼテギネア最強の装甲船とはいえ、何度もぶつかって進むことができる耐久度はありませんし、支障をきたさないという保障もありません」

「たしかに、ロベルトの言うとおりだ。船が沈んでしまつては、元も子もないからな」

デルゲンは一度うなずき、そう言った。

「けどよ、空ちゃんに残された時間は少ないんだぞ？」

レンドは彼らに目を向けず、海図を眺めながら言う。

「……リサが言うには、あと4ヶ月程度は大丈夫なはずだ。この海路で進むとしても、約1ヶ月かかるかからないかだ。上陸して、まだ3ヶ月の余裕がある」

すると、レンドは顔を振った。

「その上陸してからの問題だ。グラン大陸の大きさはわからないし、浮遊大陸がどこら辺にあるのかもわからない。その場合、どうするんだ？ できるだけ、近道をして行ったほうがいいと思うんだがな」

「……………」

デルゲンは押し黙った。レンドの言うとおりではあるのだが……。

「……時間が無いとは言え、危険な海路を進むわけにはいかない。大陸へ確実に辿り着くためにも、ここは西への迂回路を選んだ方が得策……だ。もちろん、副船長としての意見だ」

デルゲンの言葉の裏側に、あるものを感じた。それは、きっとレンドも察知しているだろう。

「船長はお前だ。お前の命令に従うよ」

「……………」

レンドは唸りながら頭を抱えた。

「……………」

そして、彼は目を瞑ったまま大きくうなずいた。

「西へ迂回し、グラン大陸へ行こう。確実な方法で進むべきだと判断した」

「……………」

デルゲンは少し微笑み、部屋を出ていった。

「……………」

レンドはデルゲンの出ていった後を見つめながら、呟くかのよう

に言った。どこか、罪悪感を持ってしまったのだろうか。それは違  
うよ、と言ってしまえばよかったのかもしれないが、それでは逆に  
彼を苛ませてしまうような気がした。

「ロベルト。西へ迂回するとはいえ、急がなければならぬ。迅速  
に船を進ませよう」

「わかりました」

こうして、シュレジエン諸島リーフ島の南部にあるルヴィアを出  
航した僕たちは、まず西北西へ進み、回り込むようにしてグラン大  
陸を目指すことに。

空に残された時間は、約4ヶ月。詳しい日数はわからないが、リ  
サが毎日エレメンタルの量をチエックし、危険度を見る。そうする  
ことによつて、おおよその日数もわかるらしい。

その日、リサに空のエレメンタル量をチャックしてもらった。リ  
サは空の胸の辺りに手を添え、心臓の鼓動を感じるかのようにして  
いた。聴診器を当てるような仕草、のようにも見える。

「どうだ？」

女性陣　空とリサとアンナの部屋。空はベッドにちょこんと座  
つており、その隣にリサが座っている。僕は、近くのイスに腰掛け  
ていた。

「……思ったよりも安定してる。これなら、まだ140日程度は大  
丈夫だと思う」

そう言つて、リサは彼女から手を離れた。

「そっか……」

ふう、と僕は胸を撫で下ろした。

「増魔剤を使うのは初めてだったし、うまくいったという研究結果  
も無かったから、一時的にエレメンタルを補えてもショック症状を  
起こして、危険な状態になるかもしれないに……うまくいってよ

かった」

リサも同じように胸を撫で下ろしていた。彼女は以前、自然界に存在する元素は人体に順応するように出来ていないため、細胞崩壊を引き起こしかねない　　と言っていた。シヨック症状というのは、そのことなのかもしれない。

「ところで、増魔剤っていうのはどうやって手に入れたんだ？」

「……グラン島に残されてあった古書に、増魔剤のことについて書かれてあって、もちろん作製方法も記されてあった」

きつと、ティルナノグ皇室の末裔である昔のラグナロクの人々が、持ち込んだものなのだろう。

「もし、空ちゃんが結晶を取り除かれる時に直面した時……その場合、命を繋ぎ止めるためのものが必要だった。まさか、本当にそうなるとは思わなかったけど」

念のために用意していたのだから、そう思うのは必然か。

「あんだと、空ちゃんを会わせたかったしね」

リサはニコツと微笑んだ。そこまで考えてくれていた彼女に対し、僕は思わず顔がほころんだ。だが、彼女はすぐに顔を曇らせた。

「……けど、いつ症状が悪化するとも限らない。油断は禁物。常に、空ちゃんの症状を見ておくこと。いい？」

と、リサは僕を指差した。

「あ、ああ」

「空ちゃんも気分が悪くなったりしたら、遠慮せずに空に言うんだよ？ 私でもいいけど……」

僕をチラッと見て、リサは邪悪な笑みをした。

「たぶん、こいつが傍にいるだろうしさ」

「えっ？」

空は頭をかしげていた。こいつ……余計なこと言いやがって……。不満気な顔を見せる僕に対し、リサは何かを感じたのか、

「何よ？ 文句でもあんの？」

と、睨みつけるように言ってきた。

「んなこと一言も言っただろ……」

「恥ずかしがるんじゃないよ、このやる！」

「ごっつー！」

リサは笑顔で、僕の腹部を殴った。その場に、僕は崩れ落ちた。

「じゃ、私はシャワーでも浴びてくるよ。昼食になったら教えてね」

「」

「お、おい……」

そう言っただけ、リサは悶絶する僕を放って部屋を出て行った。

「だ、大丈夫ですか？」

空は苦笑しながら言った。

「ああ……まったく、あの女……」

いちいち僕を殴るなって言いたいが、何やら常道になりつつあるような気がしてしまうところが怖い。

僕はお腹をさすりながら立ち上がった。すると、

「あの、質問していいですか？」

「へ？」

空は言葉で、僕は彼女の方に顔を向けた。

「リサさんって、どんな人なんですか？」

そんな言葉が来るとは思わなかったので、僕は少しだけ口を開けたままになってしまった。

「ええ……っと、リサ？」

そう問い返すと、彼女はこくんとうなずく。

「何で今さら？ 1ヶ月近く一緒にいるわけだし……」

「ん……」

彼女は天井を見上げ、唸り始めた。

「少しずつ分かったような気がするんですけど……なんですか、違うんですよ」

「違う？」

さっきと同じように、彼女は小さくうなずいた。

「いまいち理解できないんですけど……私、リサさんのこと……懐

かしいって感じたんです」  
窓から差し込む日光を背にして、彼女はどこか微笑んでいるかのように言った。

### 懐かしい

それは、遙か遠い場所で聴こえた言葉のようであり、近くで囁いてきた言葉のようでもあった。

「なんででしょうか……。初めて話したのに、なぜか……。自分と話しているような、変な感覚で……」

彼女は戸惑いながら言った。彼女もまた、僕が時折りサに感じる「懐かしさ」を持つのと同時に、別の思いも湧き上がって来るらしい。

「だから、空さんにはどう見えるのか教えてほしくて」

ああ、なるほど。そう思いながら、僕はうなずいた。

「……そうだな」

僕はさっきのイスに座り直し、腕を組んだ。

「まあ、かなり暴力を振るう女だよな」

そう言った瞬間、空はぷつと吹き出した。

「傍若無人で天上天下唯我独尊だし、逆らう者には天罰っていう名の肉体的制裁するし……女とは思えねえもんな」

追い打ちをかけるかのように言うと、彼女はさらに笑い出してしまった。

「そ、空さん、そんなに言ったらダ、ダメですって」

笑いながらそう言うが、笑いが原因で一切説得力が感じられない。

「いーんだよ。どーせ、今はいないんだし」

たまにやあいつの文句言わないと、やってられねえっつーの。そう思いつつ、同時に彼女の今までの姿が浮かんできた。

優しく微笑んだり、心から僕を叱咤してくれたり。その姿を想い出すと、自分の笑みは別の笑みへと変わった。それは、嬉しかったからかもしれない。

「けど、あいつは…… すごい奴なんだよな」

僕は背もたれに深く腰掛け、天井を見上げた。

「自分が辛い目にあつた時には傍にいてくれたし、何度も手を差し伸べてくれた。もしかしたら…… どこか、あいつに憧れてんのかもな」

自分で言っていてよくわからなかった。それでも、心のどこかで「そう感じていたんだ」という、確信に近い想いがあるのも確かだ。「あいつは自分の信念を曲げずに、我慢しながら頑張ってる。女だし、まだ16歳なんだから、子供なはずなのに…… 尊敬するよ、ホント」

僕より年下とは思えない時があるもんな。

「でも、あいつは女なんだよな……。知ってるか？ あいつ、髪ほどいて女性らしい服を着せると、滅茶苦茶かわいいんだよ」

僕は笑いながら言うと、空は少し驚いた表情だった。

以前、女の服装をしていた時のリサに対し、僕は思わず目を奪われた。あまりの美しさに。

「あん時さ、リサが」

「もういいです」

言いかけた言葉を覆い尽くすかのように、彼女の鋭そうな言葉が放たれた。

「……空？」

彼女の方に顔を向けると、不機嫌そうな顔で俯き、床を見つめている姿があった。意味のわからない僕は、言葉を失ってしまった。

さつきまで感じていた和やかな雰囲気、一瞬にして逆方向のものへと変貌したのだ。

「もう……いいです」

と、彼女は小さくもはっきりとした口調で言った。

「いや、いきなりどうしたんだよ？ 気分でも悪いのか？」

僕が顔を覗かせると、逃げるかのように空は顔を背けた。

「どうしたんだよ」

「なんでもないです」

顔を向けず、空は即答だった。

「いや、だからおかしいだろ？ いきな」

「なんでもないって言うてるじゃないですか!!」

空は立ち上がり、空色の瞳を震わせながら響くかのような声だった。

「……なんだよ、空」

一瞬訪れた静寂の中、僕は言った。すると、空は僕に背を向けてしまった。

「おいっ!!」

僕は大きな声で言った。その瞬間、空の体が電撃が走ったかのように、ビクツとした。だが、それでも空は何も言おうとしない。

「……もういいよ」

僕はため息を吐き、船内へ戻った。ああいう時は、一人にして頭を冷やさせた方がいいと思う。

女って、いちいちわからなくなる。リサもそうだったが、ちょっとしたことで気分を害す。それで、とばかりを受け取る僕の身にも

なつてほしい。納得ができる怒りならばいいが、わけのわからないことは本当にイライラする。僕にどうしろって言うんだよ。

心の中で文句をぶちまけながら、船内の自分の部屋へ戻り、ベッドに仰向けになった。この部屋って、あまり船っぽくない。ちょっとしたホテルのように感じるためか、装甲船というより豪華客船なんじゃないかと思ってしまう。

ガルガンチュアはかなり大きい。タイタニックとまではいかないが、首が痛くなるくらい見上げなければならぬほどだ。もちろん、船室の数も半端ではなく、一人一室にしても、空室は100室くらいある。レンドの仲間、僕たちとゼテギネアの操船者を合わせても、100人くらいしかないのだ。

他にも広い部屋はあるのだが、レンドの船室と同じくらいの部屋を選んだ。あまり広いと、逆に落ち着かなくなってしまうからだ。

天井を仰ぎ、僕は大きくため息をついた。

さっきの空の様子、わけがわからなくてムカついたけど……なんだか昔っぽくて、ちょっとだけうれしかった。

記憶を失った彼女と接する中で、時折見せるいつかの空。その度に嬉しく感じる反面、哀しくもなる。いつになったら、元に戻るんだろうって思う。

僕はなんで空が好きなんだろうか。あいつの笑顔はもちろん、声も、仕草も、全てが愛おしい。

僕は、よく考えたら理由がわからなかった。

理由も無く他人を愛しく感じるのだろうか。

理由も無く、人を愛せるのだろうか。

白い天井を見上げ、僕は考えた。

どうして人は人を愛し、憎むのだろうか。歪んだ愛憎を抱き、持

ため者は持つ者へのおぞましい羨望を抱える。

いつだって人はたくさんのものを求め、何かを犠牲にして生き永らえている。まるで己の膝下に敷くかのように、蹂躪するかのよう  
に、人は「それ」を求めるがために、真反対のものを増幅させてい  
る。

……空のことを考えただけで、話が飛躍してしまった。あまり深く  
考えすぎると、気が滅入ってしまうから止めておこう。

僕が寝返りをうつた瞬間、部屋の扉が開く音がした。誰かと思っ  
て顔を向けると、そこにはデルゲンがいた。

「お、いたいた」

彼は少し微笑み、近づいてきた。

「何か用？」

「ん？ ちよっと、な」

どっころしよと、デルゲンはもう一つのベッドに座った。ここは、  
10畳くらいの部屋に2つのベッドがあり、それは対になって置か  
れてある。

「さつき、空ちゃんが一人で甲板の端にいたんだけどさ」

デルゲンはばつが悪そうに、ほほをかいていた。その時点で、彼  
が何を言いたいのかを察してしまい、僕は心の中でため息を漏らし  
ていた。

「彼女、泣いてたぞ」

やっぱりと思いつつ、今度は本当にため息を漏らした。

「さつきまで一緒だったよな？」

そうですねけど何か？、と心中で呟きながら、僕はうなずいた。

「泣かせるようなことでもしたのか？」

「そんなこと、するわけないだろ」

彼から背けるように、僕はもう一度寝返りをうつた。

「だけどさ……」

「あいつがいきなり不機嫌になったんだよ」

僕は少し声を荒げてしまった。まるで、僕が悪いみたいにデルゲ

ンが言ってくるものだから。

「空ちゃんが？ そりゃなんでまた？」

「知らねえ。リサってどんな人なのかって訊かれたから、答えただけさ。そしたら、突然、機嫌を悪くしてさ」

「ハハハ、なるほどな」

デルゲンは笑い始めた。意味がわからず、僕は再び彼に顔を向けた。

「……笑うところか？」

そう言つと、デルゲンは「すまんすまん」と言いながら口を押さえた。

「お前つて、鈍感だつて言われるだろ」

「はっ？」

突然のことに、僕は変な声を漏らした。

「言われたことないか？ ガイアでの友達とかに」

そう言えば……誰かに言われたな。修哉だっただろうか。少し考えている僕を見て理解したのか、デルゲンは話し始めた。

「お前は、なんていうか……しっかりしてるようで、しっかりしてないんだよなあ」

彼はそう言いながら、笑っていた。なぜか、その姿に対して憤りは感じなかった。

「きつと、あまりにも想い過ぎてるから、時折気付かないのかもしれないな」

一人で納得するかのように、彼はうなずいていた。

「もう少し、柔軟に考えてみな」

「……………」

「お前はさ、どこか達観しているけど……足元にあるものには、つまづくまで気付かないんだよ」

灯台もと暗し　　みたいなもんだらうか。

「空ちゃんに対して、記憶失ってるからって考えながら接するのはやめた方が良い」

その言葉の瞬間、僕は心拍数が上昇した。

「彼女は彼女だ。いつだって、変わらない。変わり得ない」

そう言いながら、デルゲンは微笑んで目を瞑った。

「お前のことをずっと愛してくれた、幼馴染……大事な人には間違いないんだからさ」

「……………」

空は空でしかない。あいつは、昔のまんま。それは理解しているはずだった。……頭の中では。

記憶を失った。そのフレーズが心の底に刻印として残り、彼女に対する隔たりとして確立されていたのかもしれない。あるいは、彼女を「新しい空」として構築し、今までとは違うように接していたのかもしれない。彼女は彼女なんだと、自分に言い聞かせながら。「まあ、いちいち俺が言わなくても、お前は自分でしっかりやるもんな」

デルゲンはベッドから立ち上がった。

「じゃ、夜には出て来いよ。一緒に、酒でも飲もうぜ」

「……………未成年なんですけど」

「んなの気にすんな。せつかく、ガルガンチュアを貸してもらったんだ。この中にある酒は、平民じゃあ手に入れないようなものばかりなんだぜ？」

デルゲンは白い歯を見せるほど微笑み、出て行った。……酒は飲めるけど、苦手なんだよなあ。眠くなっちゃうし。

布団に潜り込み、ゆっくりと息を吐きながら目を閉じると、なんだか眠くなってきてしまった。今日は寒い所にいる割には、太陽の光が暖かく、春のような陽気を感じさせていたからかもしれない。自分にとって、一番好きな季節……春。それはつまり、寝ろって言ってるようなもんだ。

まどろみの中を歩いているようだった。こういう時、自分が夢の中にいるって言う事がよくわかるんだよな。なんだかフワフワしていて、浮かんでいるような感覚。上を見上げてても、空は広がらずに、霧が立ち込めている。

「セヴェス」

目の前の霧に、人影が見えた。

「あんたは？」

霧に訊ねるかのように、僕は言った。

「私はお前。同時に、お前ではない」

「……………？」

落ち着いた声だった。いつかのリユングヴィみたいなことを言っているが、この落ち着くかのような雰囲気は、全く次元の違うものだと思わせる。

「ああ、そうか……………お前は」

込み上げてくるかのように、何かが溢れた。それは懐かしさであり、温かさでもあった。

「バルドル」

そう名を呼ぶと、その人の周りの霧が潮が引くかのように、さあっと消えた。そこに、男性の姿があった。

20代前半で、少しウェーブのかかった長い髪は青い。髪の色とは真逆なのか、真っ赤な瞳をしている。白いローブを羽織っているが、所々金色の装飾が施されている。

「あなたは、バルドルだな？」

再び名を呼ぶと、彼は一步、僕に歩み寄った。

「お前がそう呼ぶのなら、そうなのだろうな」

「……………」

「私には名が無い。名など、与えられていない。それはつまり、この世界　次元にすることを赦されていないということ。その存在自体を、あらゆる生命から認識されていないということ」

「認識……………」

「お前がいるからこそ、私はここにいます。お前が私を知覚し、その存在を認識しているからこそ、私はバルドルとして存在している」

拙い僕の脳みそじゃ、いまいち理解できない。つか、なんでこう……………クロノスさんやリユングヴィとかは、わっかりにくい説明するかな。もうちと、優しく伝えようとは思わないのだろうか。

「こうして会うのは、初めてだな」

「……………そっか。リユングヴィを倒し、あなたの力を手に入れたといつても、こういった空間に入ることは無かったもんな。ていうか、声を聞くのも初めてだよ」

心のもやもやが消え、曇り空が透き通るほど鮮やかな青空になったかのように、心は澄んでいた。それは、バルドルが醸し出す雰囲気そのものかもしれない。

「そうだったな……………お前は、リユングヴィによって不安定にさせられ、私の声を聴くことはほとんどなかったからな」

フツと微笑み、バルドルは僕を見据えた。

「だが、覚えていないか？　お前が、私の力を行使したのを」

「……ん〜？」

バルドルの力を行使した覚えは……無いんだけどな。ロキの力なら、ギリギリのところ（ほぼ失敗だったけど）まで行使したのは多数あった。

「フォルトウナ神殿で、おまえは私の力を使った」

「フォルトウナ……ってことは、ホリンと戦った時のか？」

あの時、ヴァルバがやられそうになった瞬間、体が軽くなった。さらに、ソリッドプロテクトを弾き、攻撃することができた。暴走した時のように、凄まじいものではなかったが、あの危機を脱出するには十分だった。

「本来ならば、カインと同等の存在であるお前は絶対的行使力で、私とロキの力を使えるはずだった。しかし、負の怨念の集合体であるリユングヴィを抑えていた楔が無くなり、奴によって力的一端  
いや、そのほとんどを奪われていた」

リユングヴィがいたために、僕はうまく自分を操れなかった、ということらしい。リユングヴィと僕の関連性についてはいまいち不透明なところがあるので、はっきりとしたことは言えない。

「まあ、結果としては元に戻った　ということだな」  
バルドルはなんだか、安心したような雰囲気と言った。

「あなた、何者なんだ？」

そう訊ねると、バルドルは笑みを消して目を細くした。

「あなたにしても、ロキにしても……あなたたちがヴェルエス宗家に関わっている意味がわからない。あなたたちは人間なのか？ それとも……」

「……………」

それ以上は、言葉が出て来なかった。いや、出すことができなかった。

った。理由はわからないが、それを言葉にしてはならないと、心が警告を鳴らしているみたいだった。

「……遠い昔……」

バルドルは目を瞑り、僕に背を向けた。

「私たちは、共に夢を見ていたのだ」

「夢？」

バルドルはうなずく。

「……共に夢を見、共に生きていた。その中で私たちは、本来では得られるはずの無い経験と、幸福を得た……」

言葉が続いて行く中で、青い粒子がいつの間にか出現し始め、それらは彼を少しずつ包み始めた。どこから湧いているのかと思いい、下の方へ目を向けると、そこは水面のように、青く透き通ったものに変化していた。

「しかし、結果として……私たちは破滅した。何もかもが消え去り、私たちの夢は粉々に砕け散った」

バルドルは背を向けたまま、上空を見上げた。

「……お前たちは、その 夢の残骸 とでも言えるのかもな……」  
「……………」

夢の……残骸？

僕が首をかしげると、それに反応したのか、バルドルは小さく鼻で笑った。

「いや、お前たちは自分自身だけの夢を見て、生きているんだっとな……」

彼の微笑みを解せない僕は、さらに混乱した。

「何言ってるんだ？ 意味わかんねえって」

「わからなくてよい。今はまだ、な」

バルドルは僕の方に向き直った。あの紅い瞳で僕を見つめている。宝石のような それでいて、嵐のように猛々しく、氷のように冷たく、流れる小川の如く静かで、炎のように憤っているかのような瞳。相反する全てのものが、そこに凝縮されているように感じた。

僕は知っている。この「感じ」を。

その時、バルドルは僕の後ろを指差した。

「そろそろ戻れ。お前を呼んでいる」

「……誰が？」

再び、彼の笑みが返って来る。

「……言わずとも、わかるんじゃないのか？」

バルドルがそう言くと、この空間が閉じた。フワフワした感覚と共に、霧は消え、辺りは真っ暗になった。

目を開けると、船室の天井があった。

「……夢……じゃない、よな」

あれは、僕の精神世界だろうか。リユングヴィは僕の意識下に表面化していたが、バルドルは僕の内面に表面化しているように思える。その辺りが、僕の精神が操作させられるか否かを決定しているのかもしれない。

ふと思ったが、僕は多重人格なのだろうか。……いや、そうだとしたら、リユングヴィは太古の記憶を持っているはずがないし、バルドルに関しては外に表面化もしていない。完璧にもう一人の僕というわけではなさそうだし。

いつだったか、リユングヴィは言っていたな。「アクセス」とか、「リンク」とか。その言葉を考えると、リユングヴィ　カインの

血を受け継ぐ者の中で、彼に最も「近い」者に、リونغグヴィはア  
クセスできるっていうことだろう。それはつまり、あの聖域に固着  
させられていた奴が、同じ血族の血を辿って働きかけることが可能  
……ということなのかもしれない。

そう考えると、バルドルもまたそういった存在なのかもしれない。  
リونغグヴィとは形は違うが、別の原因で聖域に堕ち、精神だけが  
囚われている存在。

だがしかし、そこで疑問が浮かぶ。

リونغグヴィは「人の精神」だったが、バルドルはそうではない  
ように感じる。話してみte感じたのだが、人と話しているというよ  
りも……もっとう、別の「何か」に話しかけているように感じた。

名を持たない存在

それって、一体どういうことなのだろうか。人でもなければ、生  
命でもないのだろうか。……だとしたら、彼は一体なんなんだ……？

まさか………神………？

その時、何かがよぎる。

これもまた、我々の罪か

一瞬の閃光と共に、あらゆるものが崩壊する。消えていく。

全てが塵となり、無となり　そこには、希望もくそもなかった。

## 神々の鉄槌

「いつつ……！」

その「ワード」がよぎった瞬間、今まで何度も経験した電流のよ  
うな頭痛がした。最近は、ほとんど無くなっていたんだけどな……。

「神々の、鉄槌……か」

天罰とかみたいな類なのだろうか。たしか、樹も言っていたが……  
結局、理解することはできなかった。

「ん？」

ふと何かに気が付いた。僕の腹部の辺りに、何かが乗っている。  
仰向けになっている状態から顔をゆっくりと上げ、それを見た。

空だった。

小さな寝息をたて、空は布団の上に両手を重ね、その上に顔を乗  
せて寝ていた。ルテティアで気を失った時、アンナも同じように寝  
ていた。あの時、僕は3日も寝ていたんだっただけな。

空の寝顔は、静かだった。日焼けすることが苦手な、いつも肌は  
白かった。今もそうだ。彼女の肌は、一般の女性のそれよりも白い。  
どこか、シュレジエンの人たちのような肌を思い浮かべさせる。

「ん……」

小さく声を出しながら、空は顔を上げて目をこすり始めた。そし  
て、寝ぼけ眼で僕の方に顔を向ける。

「おっす」

なぜかわからないが、僕の口からそんな言葉が漏れた。もう少し、  
まともなセリフはなかったのかと考えてしまう。

彼女は少しだけ瞬きをして、もう一度目をこすった。

「……………」

ようやく気付いたのか、彼女は慌てて寝かせていた上半身を起し、僕から顔を背けた。

「何か用か？」

僕は頭をかきながらそう言った。なんか……………緊張してしまう。夢から覚めて現実に戻ったかと思えば、僕を悩ませている一つの存在がそこにいるのだから。

ええつと……………何を言えればいいんでしょうか。何やら、不穏な空気が漂っているような気がしなくもない。

その時、僕はあることに気が付いた。

なんで僕が緊張しなきゃなんねえんだ？ こいつが悪い（たぶん）だし、僕は堂々としてりゃいいんだ。

そう結論した僕の脳みそは、「懲らしめてやるつ」という考えに至った。ちなみに、これはわずから秒程度で思考されたものである。「……………ごめんなさい」

結論を出した瞬間、彼女の言葉が漏れた。まさか彼女の方から謝って来るとは思わなかったので、僕は思わず何度も瞬きしてしまっ

た。

そして、彼女は僕の方に振り向いた。

「いきなり、態度悪くして……………」

「ごめんなさい、と空は頭を下げた。

「……………怒ってます？」

空は上目で、僕をチラツと見た。まるで怒られている子供みたいなので、笑ってしまいそうだった。それを何とか抑え、僕は簡単な意地悪を試みようと考えた。

「怒ってるよ、もちろん」

「えっ？」

空は驚いた顔をしていた。たぶん、デルゲンから「怒っていない」とても聞いていたのだろう。んな簡単に安心させてやるかっつーの。

「当たり前だろ？ いきなり、何の理由かわからないまま機嫌悪くして……。僕が何か悪いことしたのなら納得できるけど、何もしていないのにあんな態度取られたら、誰だって怒るだろ」

僕はため息を混じらせて言った。

「そ、そうですけど……」

「けど？ なんだよ」

「……………」

だんだん、空は泣きそうな感じになってきた。こんな簡単に泣きそつになられると、相変わらずすぎて笑えてきそうだった。

「分が悪くなると、すぐ泣こうとする。これだから女つてのは」

僕は体を起こし、ベッドの上であぐらをかいた。

「だって、空さんが……………」

「僕のせいにするつもりかよ？」

そう言つと、彼女は俯いた。

「ごめんなさい……………本当に……………」

声は小さく、細くなり、震えていた。そろそろ泣いてしまつたろうと、確信させる。

「理由も何も言えねえくせに、いっちょ前に謝ることはできんだな……………！！」

追い打ちをかけるように言つと、彼女の震えが止まった。

「そ、そんな言い方しなくても……………！！」

彼女が怒りで顔を上げた。その瞳には、涙が溢れる寸前だった。「そんな風に言わなくてもいいじゃないですか！ 私だって、自分が悪いって自覚してるのに……………」

空は立ち上がり、涙を散らしながら言った。まるで、叫んでいるように見える。

これ以上やると僕がぶつ叩かれそうなので、やめておこう……………そう思い、僕はため息を漏らした。

「悪かったよ。ごめんって」

お手上げのポーズをして、僕は笑った。

「…………えっ？」

「ぼかんと口を開けたまま、空は僕を見つめる。」

「怒ってないよ、もう」

「涙をまぶたに残し、彼女は硬直してしまった。」

「ごめんな。少し、からかってみたかっただけだからさ」

「から…………かう？」

「僕がそううなずくと、彼女は再び震え始めた。」

「ど、どうしてですか！？　じゃあ、さっきのはわざとなんですか？」

「へ？　あ、うん」

「……………」

「納得したのか、ほっとしたのか、彼女はその場にペタンと座り込んでしまった。」

「お、おい、大丈夫か？」

「僕はベッドから降り、彼女の傍に行った。」

「おい、そ」

パチンッ

その瞬間、乾いた音が響いた。

「…………馬鹿ア！！」

「彼女に叩かれたほほに、少しずつ痛みが広がってくる。」

「……………」

「とは言っても、転んだ時と同じように痛みは感じない。反射的に言ってしまったのだ。」

「……………」

「叩いた自分の手が痛いのか、彼女は右手を抑えながら言った。」

「私は本気で謝らなきゃって思ってるのに……………空さんは！！！！」

そして、彼女は僕の服を掴んできた。

「……………」  
空は顔を俯かせ、泣いている。

ああ…………まずったな。少しやり過ぎたようだ。そう考えながら、僕は懐かしさを噛みしめていた。

…………ん？

噛みしめているって…………なんでだ？

どうして、懐かしいと感じたのか。それは、記憶を失う以前の空だとか、そういうものじゃない。これは……………

リサ？

「……………空さんは……………」

怒りで大きくなった声とは違い、悲しさで静かになっている。

リサに似ているんだ。

「理由はわからない。けど、はつきりとした感覚でそう思った。……………なあ、なんで怒ったんだ？」

僕がそう言うと、彼女は顔を上げた。涙でボロボロの顔が、自分

の顔の下にある。驚いているようなので、僕は念のために言う。

「いや、今のじゃなくて、リサのことを話してた時だぞ?」

「……………」

目を開けたまま、空は僕をずっと見つめる。

「ん? どうした?」

困惑した表情で、まだ僕を見つめる。

「ええっと……………」

空の表情に、少しずつ笑みが浮かんでくる。その中にはもちろん、驚きが含まれている。

「あの……………ですね」

僕から顔を離し、彼女は座り直した。僕も、その場にあぐらをかいた。

「空さんがリサさんの話をしてくれた時、最初はおもしろかったんです。リサさんの悪口ばかり言ってるものだから」

「ハハ、そうだったな」

思い出したのか、彼女も小さく笑った。すると、空は自分が笑っていることに気が付くと、ハツとした様子で僕を見てきた。そして、不機嫌そうな表情になってしまった。

「……………私、怒ってたのに……………なんだか、ずるいです」

「ずるい? なんで?」

僕が首をかしげると、空は肩をガックシ落としてしまった。

「もう……………空さんは」

空はため息を漏らすと、クスクスと笑い始めた。

「なんだか、もう……………おかしくて嫌になるなあ」

「な、なんで笑うんだよ?」

すると、彼女は笑いを抑え、僕を見つめた。

「さっきの質問に答えますね」

「は?」

空は指先で、僕の唇に触れた。

「好きだからですよ」

彼女はずいと僕の前に顔を出し、ニコッと笑った。その笑顔に心を奪われたわけではないのだが、僕は瞬きをするのを忘れて彼女の瞳　空色の瞳を見つめていた。

空は顔を戻し、微笑んだまま目を瞑った。

「空さんがリサさんのことを教えてくれた時、知らないリサさんを知って嬉しいのと同時に……ムカツと来たんです」

クスツと笑い、彼女は続ける。

「なんででしょうね……リサさんを褒めるからでしょうか。私でもなんだかよくわからないんです」

と、彼女は自分の胸に手を添えた。

「……記憶を失って、私は空さんと出逢いました。あなたは元の世界の……忘れてしまった友人なのに、そう言ってしまうのはおかしいですけど」

まあ、たしかに。友人か……。その言葉に、僕は思わず少し落胆してしまった。

「その時から、あなたを見る度に……変な感じがするんです」

「へ、変な感じ？」

なんじゃそりゃ………と思い、僕は言葉を出してしまった。すると、空は少しだけ笑い始めた。

「あのですね、不愉快なものじゃないんです。それとは逆………すごく、懐かしいものなんです。リサさんに対して感じた意味不明なものとかじゃなくて、もっと確かな形の」

「……………」  
「うう……なんて言うか、すごく心地いいんです。心が温かくなっ  
て……………」

彼女だけにしかわかり得ない、自分を満たす感情。常に傍にあり  
ながら、決して輝きを失わない宝石そのものなのかもしれない。

「一人で考えたんです。それがなんなのかって」

怒った僕が彼女の部屋を出た後、甲板へ行って考えていたようだ。

「結局、わかったのか？」

そう言つと、空は小さく顔を振った。

「ダメでした」

「おいおい……………」

苦笑する彼女に、僕も同じように苦笑してしまった。

「でも、別のことがわかったんです」

そして、彼女は言った。

「空さんの隣にいたいってことが」

誇らしげにそう言う彼女に、僕は再び心を奪われた。

「だから……………うまく言えないんですけど、私は……………空さんが好  
きなんです。それだけは、確信」

そして、空は笑った。ぎこちなく。

お前は……………自分に正直なんだな。いや、自分を一切偽っていない。  
お前はずっとあのままで、自分に正直に生きている。

空は全てを壊してでも、平和で平穏な日常を壊すことになっても、  
自分の心に従うことを決めた。変えようって、変わりたいって願っ  
て。

今と同じ。今までと全く同じなんだ。

空は空。

なのに……僕は空が記憶を失っているからって、今までと違うように接したり、自分を偽っていた。

あの時……日常を変えようと願ったのは、僕も同じだった。今までの日々に満足せずに、守ろうとせずに、新しくしようと。

結局、僕は空によって気付かされるんだな。大事なことは、自分の掌たなひしろうに存在しているってことに。

「……迷惑だったら、ごめんなさい」

ハツとすると、そこには笑顔のままの空がいた。

「でも、それが私の正直な今の気持ちなんです。だから、後悔なんてしません」

なんだか、あの頃よりも一層惹かれるような感覚に襲われた。自分を包み隠さずさらけ出す彼女に対し、憧れに似たものさえ抱いていた。

「じゃあ、自分の部屋に戻りますね」

そう言って立ち上がる空。そして、出て行こうとする白い手を、僕はいつの間にか握っていた。

「？ 空さ」

僕は立ち上がり、ある言葉を放った。

「お前が好きだ」

これ以上、何かを言えるだろうか？

導き出されたはずの答えは、霞み始めていたその輪郭をさらけ出し、輝きを増す。それは、彼女にきつと届くだろうと確信させる。

やっぱり、幼馴染だとか、そういうのは関係ないんだ。

僕は日向空のことを愛してる。

彼女だからこそ、こういう想いになれたんだろう。

惹かれたのは、やはり彼女にしか存在し得ない「宝石」があるからなんだなあ。

僕と空は、共に微笑んでいた。

## 61章：グラン大陸 忘れられた大地

潮風と冷気、そして粉雪が流れる中、ガルガンチュアは海の先へと進んで行った。リーフ島のルヴィアを出航して10日余り、未だ氷河は見えない。氷河が見えてくたら、大陸に近付いて来た証拠なのだ。まあ、デルゲンが言うには1ヶ月近くかかるらしいので、気長に待つしかない。

待っている間、僕は雑用をしたり、特訓などをしている。特訓とは、もちろん筋トレや剣の練習も含んでいるのだが、もっぱら力の制御の練習をしている。

バルドルの力を手に入れたのはいいが、あまり行使したことがないのだ。掌から出せる光線や、魔法や衝撃波を防御するための障壁を展開させたり、ソリッドプロテクトやマジックシールド、リジエネレイトの練習。これを完璧にやっておかなければ、奴らには勝てない。帝都でシュヴァルツとバルバロッサと戦った時、実感したからだ。

「よくやるね」

甲板で筋トレをしている時に、傍でリサがしゃがんで言った。今日は快晴。寒いが、日光が心地よい。

「……んだよ。邪魔しに来たのか？」

「なわけないでしょ。暇なの」

「……お前な……」

すでに4月に突入していた。北の絶海に来ているが、今日は少し暖かいほうだ。ぽかぽかとした陽気が眠気を誘う。いつだったか、桜が咲く季節になると授業中、生徒がみんな寝てしまう教室があるという話を聞いたつけ。

「……フウ、腹筋終了」

半年以上筋トレを続けているので、体全体の筋肉が付いてきた。

とはいえ、身長が180を超えているのに体重が70キロ未満なので、少々細いのがダメだ。レンドに相談すると、シンプルなる文字を与えてくれた。……「肉食え」らしい。

「お疲れ様」

「ああ、サンキュ」

空が差し出してくれたタオルで汗をふき、僕は大きく息を吸い込み、その場で大の字になった。5分くらい休憩したら、今度は背筋200×5セット。今では、結構慣れてきたものだ。

「暇」

頬杖をついて横になっていたリサは、ぼそつと言った。

「あーあ。なんか空は充実してそーだし、いいよなあ」

リサはため息をついた。緊張感の欠片も無いというか、なんと言うか……。

「充実しちやいけねえのかよ」

「うん、むかつくもん」

「おいおい……」

かわいい顔して、そのセリフないだろーよ……。

「まったく……空ちゃんも、こいつのどこがいいのか」

「え……えっ?」

いきなり言われたので、空は困惑していた。

「こいつ、優柔不断で感情で突っ走ることが多いんだよ?」

否定できないところが悲しい。

「うっせえなあ……」

そう言うと、リサはギロツと僕を睨みつけた。

「だって、空ちゃんみたいないい子、あんたには勿体無いもん」

「……あのな」

「こいつ、とことん打ちのめすつもりなのかもしれない。」

「空ちゃんは、こいつのどこが好きなの?」

「えっ?」

リサは男のようにあぐらをかき、空に詰め寄った。  
「そういう質問をするなよ。空が困」

ボカ

リサのジャブが顔にヒット。僕はもがいた。は、鼻が……。  
「あんたは黙ってる」

リサはいつもの邪悪な目つきで微笑み、僕を見下ろす。  
「で？ どこがいいの？」

「え、えつと……ええ……」

「ちよ、ちよつと待てよ。僕が恥ずかしいじゃ」

ボカ

再び、リサのジャブが鼻に直撃した。

「黙ってないと、気絶させるよ？」

「うっ……」

イデアの兵士にやったような、突き攻撃を僕に見せた。さすがに  
あれは嫌なので、大人しくせざるを得なかった。

「で？ どこがいいの？」

リサは顔をのめり出して訊ねた。

「え、えと……」

空は顔を赤くして、僕を見たり、あつちを見たりと、落ち着かな  
い。いや、そこは悩まなくてもいいんだが。

「……は、恥ずかしくて言えない」

そう言って、空は船内へと走りながら戻ってしまった。

「あららら、行っちゃった」

「お前な……いちいち追求するなよ」

「だって気になるじゃん。他人の恋路って、おもしろいでしょ？」  
「ニコツとリサは笑った。やれやれと思いつつ、僕はため息を漏ら

した。

「……性格の悪い女だこと」

「なんですってえ!?!」

怒りの形相でこちらに振り向いた瞬間、僕の脳内に危険信号が発せられた。いかん、逃げなければ!

「うわっ!?! よ、よせ!?!」

僕はすぐさま立ち上がり、逃げ出した。その後ろを、リサが追いかけて来る。

「待て!?!」

捕まったらやられる……なんでか知らないが、今日はやけに暴力的だ!

「お? なーんだか楽しそうだなあ」

遠くで、レンドが笑いながら僕たちを見ていた。寝起きなのか、寝癖ではねた前髪、ちゃんと開いていないまぶた、片手は腹部をかき、もう一つの手で歯を磨いていた。傍から見ると、かなりマヌケな姿だ……。

「わ、笑ってないで助けてくれよ!」

「いやあ、そうなるならリサはライオン以上に凶暴だからなあ。勘弁してくれ」

ハッハッハと笑い、レンドは言った。

「誰が凶暴だつて!?!?」

リサがレンドの方向に顔を向けた。その瞬間、レンドの笑いが止まる。そう、リサの標的はレンドに変わったのだ。

「お、俺は関係ねえだろ?」

「私をライオンと一緒にしたな!」

「ちょ……う、うおおおー!?!」

レンドは本気の本気で逃げ出した。それ以上のスピードで、リサは彼を追いかける。格闘術を会得しているリサから逃げられないだろうな……ま、おかげで眠気も吹っ飛んだことだろう。

「なんだか平和だな」

傍観している僕の傍に、いつの間にかデルゲンが立っていた。

「これから、最後の闘いに向かっていている連中だとは思えないよな」

「……だな」

平和、平穩。これが幸福というものなのだろうと思いつつ、逃げ回るレンドを笑いながら見つめる。

「空ちゃんとは、うまくいったみたいだな」

「……」

言わずともわかる、か。

「まあなんにしても、グラン大陸へ行く前にケリを付けることができて、よかったじゃないか」

「……そうだな」

僕はその場に座った。

「今回は、デルゲンのおかげだ。ありがとう」

「なんだよ？ 急に」

苦笑するデルゲン。少し照れているのかもしれない。

「……本当のことを言つとき、空が怖かったんだよ」

「怖い？」

僕は小さくうなずく。

「拒絶されるんじゃないかって」

ふーん……と、デルゲンは僕と同じように、あぐらをかいてその場に座った。

「わかるよ、その気持ち」

潮風を受けながら、デルゲンは目を瞑っていた。

「だけど、お前たちは互いに繋がってる。それだけは、きっと失われるものじゃないんだよ」

どんなに遠くても　そう付け加えて、デルゲンは目を開いた。

「……デルゲンには、好きな女性とかいないのか？」

「ハハハ、今度は俺か？」

彼は苦笑しながら、自分のほほをかいていた。

「ふと、聞きたくなっただよ。レンドやデルゲンって、昔から海賊してるしさ」

「……そうだなあ……」

デルゲンは上空を仰いだ。

「ちょっと違うけど、俺にとってのそれは妹だったな」

「妹？ まさか……」

「お、おい、変な想像するなよ？」

と、デルゲンは僕に釘を刺した。

「好きだとか、そういう感情じゃないんだ。肉親に対する、愛情って言うのかな。俺にとっての家族は、あいつしかいないからな」

修哉みたいなものか。あいつも、妹の咲希ちゃんだけは唯一の家族だと考え、一番大切に思ってたもんな。

「……両親は？」

そう訊ねると、デルゲンは顔を振った。

「俺が物心ついた時には、もういなかったんだよ。気が付けば、俺は赤ん坊の妹と一緒に、孤児院に預けられていたんだ」

孤児院。その言葉が出た瞬間、さっきまで心地よかった潮風が冷たく感じた。

「……そうだったんだ」

「しみりするなよ。よくある話さ。いわゆる、戦災孤児ってやつだったらしいぜ。俺自身は覚えていないけどな」

戦災孤児ってことは、18年前の戦争のことかもしれない。

「なんにしても、俺や妹は両親がいなくても十分に幸せだった。そこにいて、よかったと思ってる」

遠くを見つめる彼の目は優しくかった。きっと、孤児院の人がよくしてくれたんだろう。けど、ほんの少しだけ満たされないのではないだろうか。完全な愛情というのは、親から与えられ、他人へと与えられるのだから。

「もしかして、レンドも？」

デルゲンとレンドは幼馴染と聞いていたため、そう思った。

「いや、あいつは違う。ちゃんとした家族がいるよ」

「ふーん」

「あいつ、カーラーン侯爵の御曹司なのに、こんなことしてんだから参ったもんだよな」

デルゲンは未だ追いかけているレンドを眺めた。

「……ん？ 御曹司？」

なんだ？ それ。初耳だぞ。

すると、デルゲンは首をかしげた。

「あれ？ 言ってなかったっけ？ レンドは、シュレジエンのカーラーン侯爵ライザー卿の息子なんだよ」

少しの間、僕は思考が停止した。

いやいや、まてまて。

「……はっ？ レンドが？ ウソつけよ。さすがの僕も、そんな嘘は見破るって」

僕はとりあえず、全否定した。一応やっておかないと、自分の精神が保てそうになかったからだ。つか、レンドはおだてても貴族の一員には見えない。「おしゃれ」とか「上品」とかから、かけ離れている人間だもんよ。

「ウソつくかって。本当だぜ？」

デルゲンは予想通りの反応をしている僕を見て、ニヤニヤ笑っていた。

「……うっそ……」

僕は走り逃げるレンドを見た。必死な顔で、足と腕を振っている。あいつが、貴族の息子！？ あ、あまりにも不意打ち過ぎる……

！ 考えたことがなかった。と言うより、考えないよそんなの。いや、考えることができない。死角からいきなり蜂蜜でもぶっかけられるくらいあり得ないし、想像できない。

「あいつ、親に反抗して勘当されてさ。従兄弟で同じ貴族の息子だったブリアンとロルグ、そして平民の俺と一緒に海賊団を立ち上げたんだ」

「あいつが……貴族……」

アンナは貴族で巫女、空も巫女、ヴァルバなんて皇室の皇子、リサは伝説の一族の生き残り、僕は教皇家の生き残りにしてティルナノグ皇室の直系……。よくよく考えれば、僕たちのメンバーって普通じゃないよな。普通なのは、デルゲンくらいなもんだし。

「ま、今は勘当された身だ。あいつ自身、貴族の人間だったということに何も感じていない。接し方を変えてやるなよ？」

「わかってるよ。あいつが貴族だからとか、そうじゃないとか、まったく関係ない。ヴァルバの時と同じさ」

貴族だからって、何か変わるわけじゃないんだし。

「……そうだったな」

デルゲンは笑顔だった。期待していたとおりの答えが返ってきたからなのだろうか。

「ところで、さっき空ちゃんが走って船内の方に行っちゃったけど、お前……」

「な、何もしてないって」

僕は苦笑した。

「リサのせいで、恥ずかしくなって逃げちゃったんだよ」

「恥ずかしくて？　なんで？」

「はっ？」

それを言うと、僕が恥ずかしいではないか。

「そ、それは、リサに訊いてくれ」

「……無理だろ、あれじゃあ」

デルゲンがリサを指差した。その瞬間、彼女の空中回し蹴りがレンドに命中。あーあ、捕まっちゃった。

「……だな」

かわいいそつに、レンド。とばっちりとはい、まさにこのことだな。

「ま、空ちゃんのところに行ってやんな。理由はあとでリサに訊くからな」

「……………」

「この場にいると、危ないからな」

僕はリサを見た。馬乗りになって、レンドに罵声を浴びせたり、はたいたりしている。

「……………」

僕は船内へ向かった。いちおう、空を励まそう。……………励ます必要もないような気がしなくもないが。

ソラがいなくなり、リサたちを眺め、デルゲンはため息をついた。  
「……………」

デルゲンは苦笑いをしながら、大空を見上げた。今日の空も青いなあと思いつつ。

それから10日が過ぎ、雪が降り始めた。絶海の果てに近付いて来た証拠なのかもしれない。

船室の中も、暖炉を付けておかないと耐えられないほどの気温になってきた。ホント、寒いつていうのは嫌なものだ。動く気力が奪われる。部屋から一步も出たなくなり、青空を拝むのも一苦労。大空を見ることが一種の趣味になっている僕としては、不快この上ない。自然と、ため息も出てきてしまう。

翌日、部屋の中で空やアンナとトランプをしていると、サンガ（覚えてる？）が走って入って来た。

「ど、どうしたんだよ？」

「ソラ、甲板へ出てみる。ようやく、見えてきたぞ」

「見えてきた？ それって……」

サンガはうなずいた。

「ああ、グラン大陸だ！」

僕たちは甲板へ向かった。

甲板へ出ると、風と雪と冷気が体を包み込んだ。以前より、かなり寒い。氷点下に達しているのかもしれない。

甲板の先端に、みんなが海の向こうを指差したり、何かを言ったりして集まっていた。僕たちも、そこへ行った。

人をかき分けて端へ行くと、海の向こうにその姿があった。

真っ白な大地。天空からやって来る白い雪たちが、まるで砂嵐のようにその大地に降り注いでいる。大陸を覆う吹雪のせいで、大陸の向こう側がまったく見えない。山があるのか無いのか、さっぱりだ。

大陸を囲む海の上には、ひび割れ、パズルのようになって密集している氷河たちがあった。その氷河は、数キロも離れているここまで達している。

……あれが、忘れ去られたもう一つの大陸　グラン大陸。約2000年前、天変地異に襲われ、猛吹雪が止むことのない大地へと化してしまった。

あそこに、樹たちがいる。古代ティルナノグの浮遊大陸も、あそこで永い眠りについているのだ。

「グラン大陸……神々が眠りし、災いの大地　か……」

レンドはよく目を凝らしながら、大陸を見ていた。

災いの大地。あそこは悲劇が始まり、新しい希望が生まれ、人が大地へ帰った場所でもある。空の上については結局、見下す心しか生み出せないのだから。

その後、停泊して作戦が練られた。

「ここまで、ルヴィアを出発して26日……予定より、早く到着できたな」

レンドは海図を見ながら言った。この海図は、グラン大陸の端までしか描かれていない。なぜなら、ティルナノグが滅んだ後、グラン大陸へ渡ったこととなる人物がいなかったからだ。

「氷河に阻まれるとしても、明日には上陸できる。だが、問題はそれからだ。甲板から見ると、あの大陸は猛吹雪で、何があるのかもよくわからない。視界も悪いし、かなり厳しい寒さを予想される。上陸しても、奴らを見つけるのは不可能に近い」

デルゲンは厳しい顔で言った。彼の言うとおりだと、その場にいる全員が納得している。

「ロベルト、防寒具はどの程度耐えられるものを用意した？」

「アシヨール地方の気候に耐えられるものを用意しました。今、2大陸の中で最も防寒能力のあるものです」

アシヨール地方とは、アルカディア大陸の北の地域を指す。アヴアロンよりずっと北で、あそこは2大陸の中で最も寒いと言われているらしい。鼻水が凍ってしまうほどと言うから、零下20くらいだろうか。

「グラン大陸はアシヨール地方の遙か北の位置ですから、この防寒具では耐えられる寒さではないでしょう」

「厚着したら？」

リサは腕組をしたまま、壁に背をかけた。

「……まあ、耐えられるほどまでにはなるかもしれないが……無理だろうな」

デルゲンはストレートなりサの言葉に、思わず苦笑していた。

「ある程度のことは予想していたが、あの猛吹雪だと耐えられたとしても、進むのはちょっと難しいと思うぞ？」

レンドはそう言って、デルゲンと同じように苦笑し始めた。

予想以上に、グラン大陸の吹雪が厳しいのだ。雪が弱まり、防寒着を身に付ければ、進むことは難儀なものではないのだが……。

「これじゃあ、上陸するのは無理だ」

誰しもが思っていたが、口に出さなかった言葉を、ため息交じりでレンドは言った。

みんなは押し黙ってしまった。重い空気がたちこみ、しばしの間、沈黙の時間が流れた。

……そういえば、樹はどうやってグラン大陸へ行ったんだ？あの寒さなら、あの吹雪なら、樹たちも進むことはできないはず。だけど、奴らは進めた。ということは、何か方法があるということなのだろうか。

進みなさい

声はどこからとも無く聞こえた。僕は辺りを見渡したが、誰が言ったのかわからない。しかも、誰もその声に気が付いていない。

先に進みなさい

これは……リユングヴィの時とかと同じように、僕の内側から聞こえる。

さあ、前へ

誰だ？ この声……バルドルでもロキでもない。時折聴こえていた、女性の声のような……。

私たちの幼子、調停者よ

この声は……聖域へ進む時に聞こえた、あの声だ。すごく懐かし

い、大人の女性の声。

彼らを知りし者たちのみが、自然の理を破壊できる

すると、その声は遠くへ行ってしまった。

「どうしたんですか？ ポーっとして」

横を見ると、アンナがいた。目をパチクリさせている。

「い、いや、何でもないよ」

「??？」

アンナは首をかしげてしまった。

彼らを知りし者？ それはつまり、カインやアイオンを知る者  
ってことか？ そうだとしたら、彼らの知り合いか、あるいは僕と  
樹のような末裔のみ……。

ああ、なるほど。

『調停者』という存在のみ、『自然の理を破壊できる』という意  
味か。そうだとしか、考えられない。

「あのさ、お願いがあるんだけど」

僕はイスから立ち上がり、レンドに言った。

「なんだ？」

「大陸まで進んでくれないか？」

「は？」

レンドは頭の上にクエスチョンマークを浮かべていた。

「僕を、大陸へ降ろしてほしいんだ」

「何言ってるんだよ。危険だ。ダメに決まってるだろ？」

彼の答えは即答だった。あまりに返答が早すぎて、逆によろけて  
しまった。

「進むわけじゃない。降ろしてくれるだけでいいんだ」

「ますますわからないな。どういうことだ？」

レンドは意味がわからず、眉を八の字にさせて訊いてきた。

「確信は持てない。けど、なんかできそうな気がするんだ」

「……………」

何かに気付いたのか、レンドはほほを何度かかき始めた。そして、ため息交じりに言う。

「わかったよ。けど、少しだけだぞ？ 何もなければ、すぐに戻ってこい。わかったな？」

「ああ、りょーかい」

翌日、僕たちは氷河で埋め尽くされた海を突き進み、グラン大陸の岸壁に船をつけた。ここまで近づくと、どこから大陸で、どこまでが氷河なのかわからなくなってくる。

僕はロベルトさんから渡された防寒具を身に付け、さらにその上に各地の防寒具を装着し、準備完了。

「へ、変なの……………」

僕の姿を見て、リサはお腹を押さえながら笑っていた。たしかに僕の姿はまるで、大きなボールだった。重ね着しすぎて、丸々としている。それに重い。何となく太った人の気持ちが……………わからなくもない。

「……………笑うなつての」

僕が結構な目で睨みつけても、リサは笑いを抑えない。

「だ、だって、あんたのその姿……………も、もう、おかしくて……………！」

「……………」

笑い転げるリサ。未だかつて、彼女がこれほどまでに悶絶するこゝとがあつただろうか？ いや、ない。

「まあまあ、気にすんなつて」

優しく諭すデルゲン。しかし……………

「……………顔が笑つてるぞ」

「えっ？ あ、ああ……………す、すまない」

そう言つと、デルゲンは僕から顔を逸らし、小さく震えていた。こいつ……逆に、リサよりも腹立つんですけど。

「ま、気をつけるよ」

「レンド……無理しなくてもいいんだぞ？」

レンドの顔が引きつっている。今にも崩れてしまいそうなほどに。

「ま、まあ、早く行けよ、ホラ」

押されるがまま、そしてイラついたまま、僕は外へ出た。

「ちくしょう！ 人の姿見て笑うなんて……さぶつ！！」

前が見えない。横から吹き付ける雪と風が体温を奪い、視界を襲う。無数の真っ白な粒だけが、目の前を通過しているのがわかる。

あまりに吹雪が強いので、顔を前に向けていられない。雪の地面の見ることもできない。

うう、寒い。あつという間に、顔面が凍りついたかのようだ。ほんの少しだけ出た鼻水が、すぐに力チンコチンになってしまった。

これだけ着重ねていても、服の繊維の隙間という隙間から、冷気が忍び込んでくる。動くなと言われても、動けないな、こりゃ。

外に出たからといって、何も起こらないじゃないか。だけど、あの声の主がウソをつくとは思えない。と言つより、ウソをつく必要性が無い。僕にしか聞こえない声が、僕を騙すようなことはしないはず。リユンググヴィならまだしも。

疑心暗鬼になってきた時、なんだか吹雪が収まってきたような気がした。気のせいなのかと思い、ゆっくりと目を前に向けた。

「……マ、マジ？」

あまりに衝撃的な光景が、広がっていた。

さっきまでの猛吹雪が止み、視界が開けていたのだ。太陽の光が雪の大地に降り注ぎ、白銀のようにキラキラと輝いている。反射し

たその光が、僕のはほや瞳を貫く。

その光り輝く白銀の世界に、何かを見つけた。さつきまでは、猛吹雪で気付かなかったが、1つの扉があったのだ。それは、背後に建物の1つも無いので、地中へと繋がっているのだろうと思われる。視線を徐々に上げ、空を見た。雪を降らしていた巨大な雲がどこかへと消えてしまい、青空が姿を現していた。その空の果てに、僕はあるものを見つけた。それを見た瞬間、体の動きが止まった。その光景に目を奪われた。体の隅々まで、驚きのあまり動くことを忘れてしまったかのようにだった。

巨大な何かが、空の果てに浮かんでいる。

あれは、なんだ？

何百キロと離れた場所の、さらに何キロも上空に、巨大な何かが玉座に座っている権力者のように、この大地を……いや、この世界を見下ろしてる。

まさか、あれが浮遊大陸！？

それしか考えられない。

顔を右に、左に向けても、あの大陸の端を確認することができない。あれほど巨大なものとは、ティルナノグの浮遊大陸以外考えられない。

だけど、どうして？

あの浮遊大陸は、アイオーンによって封印されていたんじゃないかなかったのか？ あのように、未だ空の上に漂っていたのか？

僕はある仮説を考えた。それは、アイオーンの封印とは、さつきの猛吹雪そのものなんじゃないかということだ。あそこまでの吹雪ならば、人は近付くことができない。まして、文明が衰えた今、空を飛んで行くこともできない。

どのようなにして、自然の力を利用した『封印』を施したのかはわからない。だけど、ティルナノグの時代の人間ならば、可能だろう。あの巨大な物体を空高く浮かばせ、それを何千年も保つことができるのだから。

遙か空の果てにあるせいか、浮遊大陸そのものが群青色に見える。大陸とは言っても、大地のような色をしていない。想像では大陸が抜き取られ、そのまま浮かび、土色をさらけ出していると思っていた。浮遊大陸というよりも、空中都市と言った方が妥当かもしれない。

それらの中心に、きれいな駒のようなものがある。予想だが、真横から見れば角度を測る定規に見えるだろう。いわゆる台場的なものなのだろうが、きっとあれが中心地だ。

そこからいくつもの橋のようなものが遙か先まで延び、それぞれの駒 都市に繋がっている。そこから、さらに橋のようなものが延びており、別の都市へと繋がっているのだ。

いくつもの都市の中に、さらに上を目指している建物の姿も、微かだが見える。どれも、ここからでは霞んでよく見えない。だが、あそこまで行けば、ガイアの高層ビルに匹敵するものばかりがあるのだろう。

本当に、あんなものが存在していたんだ。もちろん、今までたくさんの人たちから聞いた話で、信じてはいた。だが、現実味が無い皆無に等しい。ガイアでも、空に浮かばせる巨大なものなんてのは存在しない。あんな……巨大なもの 全てが人工的なものであるのに、遙か上空に浮かんでいるという現実には、実感が湧かない。

それを呆然と眺めていると、ようやく実感が湧いてきた。それと同時に、なんとも言えないこの……ドキドキと言うか、ワクワクと言うか……喜びに似た感情が入り乱れる。少年の心が未だに残る僕としては、あれは心を十分に躍らせる。

早く行ってみたい。そして、空の国を眺めたい。

僕ははやる気持ちを抑えながら、船内へ戻った。そして、みんな

に教えた。興奮して、うまく舌が回らなかったが、数分してようやく僕の言っていることが、みんなに伝わった。最初、みんなは信じなくていかなかったの、僕は無理矢理、甲板へ連れて行き、空の果てを指差す。すると、みんなはあんぐりし、眼を見開いたままになった。あまりに突然で、想像を絶するものなので、うまく口が動いていない。

そして、数十秒後に、ようやくレンドが声を発した。

「な、な、な………なんじゃありやああ　！！！！！」

期待通りの言葉ですよ、レンド君。

「あれが浮遊大陸アトモスファイアかあ………想像以上だな」

甲板から、レンドは腕を組んであれを眺めていた。吹雪が止み、気温もかなり上がり、少々の厚着で外へ出れるようになったのだ。

「空の上に、ホントに浮かべれるもんなんだな………」

デルゲンは未だ、開いた口が塞がらないようだ。

「うわああー………」

アンナも感嘆の声を出しながら、ずっと見つめている。

「あれって、どうやって浮かんでるんですかね？」

空を見上げながら、アンナが訊ねた。

「聖地カナンにあった、天空石と同じもので浮かんでるんじゃないの？」

「そうだとしたら………あれだけのものを浮かばせるのに、どれくらいの数の天空石を使ってるんでしょうか？」

「………想像できないな」

天空石………すでにいくつもの天空石を見つけたが、その力を実際に見たことは無い。僕が石ころだった天空石に触れると、青緑の光を取り戻した。ヴァルバはあれを、『カインの流れを組むものであり、一定以上の遺伝子情報を持つ者のみ操作できる』と言っていた

らしいが、どのようにして使うのかが、まったくわからない。

「掌サイズの天空石で、成人男性一人を浮かばせることができるほどって聞いたから……アトモスフィアを浮かばせるには、直径50メートルくらいの天空石が必要かもね」

リサは上空を見上げながら言った。

「おいおい……んなの、作れるのかよ？ 俺にはどうも信じられねえな」

「まあ、あそこに証拠の物体があるから、そうも言えないだろ。……気持ちにはわからんでもないが」

ため息を混じらせ、デルゲンは言った。

「で？ これから、どーすんの？」

リサは僕に顔を向けた。

「……さつき、吹雪が止むのと同時に、変な扉を見つけたんだ」

「扉？」

「ホラ、あそこ」

僕は甲板の上から、地上を指差した。

「……怪しすぎる扉だな」

レンドは目を細めながら見ていた。

「あそこから、どこかに繋がっているのかもしれない。……確信は持てないけど」

「ティルナノグ人が作ったものなら、期待できそうね」

と、リサは跳躍して、甲板の手すりに立った。

「何が？」

「ワープ装置があるかもしれないから」

「……ワープ装置？」

名前のまんまか？ ていうか、そんなものが存在するのか？

「私の故郷にあった古書に、ティルナノグ人はそういった装置を使って、広い世界のあちこちに行っていたと書かれてあった。もしかしたら、あそこはその機械のある場所かもしれない」

「……………」

何でもできるんだな、ティルナノグ人って……。

そう考えると、それらを築き上げたカインの偉大さというか、圧倒的な力というか、ある意味感服するよ。ガイアの人たちが未だ夢見ていることを、いくつも成し遂げているわけだし。

「じゃあ、行ってみつか」

レンドは背筋を伸ばし、お使いに行くみたいと言った。

「そんな適当な……」

デルゲンは呆れ顔だった。

「行くなら、それなりに準備をしていかないといけませんね……」

そう言って、アンナは前を見据えた。

「そうね……樹たちが、待ち受けているかもしれない」

行くのは、いつものメンバー。僕とレンド、デルゲン、リサ、アンナ、それに空。戦えないアンナと空を連れて行くのは少々気が引けるが、アンナはヴァルバのことがあるし、空に至っては宝玉を取り戻し、すぐさま回復させなければならない。それに 『護る』と決めたんだ。気が引ける、なんて思っちゃいけない。

僕たちは持てる限りの食料を持ち（食料……というより、荷物を持つのは専ら男性人の役目だと、リサが言い張る）、出発した。

扉のところまで行って、気が付いた。

扉には、あの紋章が刻まれているのだ。それは聖域リーヴェへ通じる、転送装置のようなものの上に、これと同じ紋章があった。翼を広げた鳥のように見えるが、別の生き物のようにも見える。

……孔雀？ 鳳凰？ いや、龍？ ……どちらにせよ、これがティルナノグ帝国の国章みたいなものなのだろう。

「あれ？ この扉、開かないぞ？」

いつの間にか、レンドは扉を押していた。目一杯の力で押しても、扉は開く様子が無い。

「どれどれ……ぬ？ こりゃ、びくともしないな」

デルゲンが協力したが、それでも開かない。

「……もしかしたら、何か必要なものかもしれませんね」  
空がボソツと言った。

「必要なもの？」

そう訊ねると、空は首をかしげて唸り始めた。

「たぶん……天空石みたいなものだと思うんですけど……」

「それっぽいと言えば、それっぽいね」

「天空石……聖地にあるんだよなあ」

僕は上空を仰ぎ、こう思った。あの時、ルール違反でも何でもいから、持ち帰ってりゃよかった。腐るほどあるわけだし。

そういえば、この紋章があった場所……聖域では、僕が近づけば道が開けた。だったら、ここでも開くんじゃないだろうか。

いちおうやってみる価値はあるので、僕は扉に近付いた。

「……………」

何も、起こらない。やっぱり、何か必要だったのだろうか？ 再び離れ、頭を抱えた。

その時、意識が海底のように、静かになった。みんなの話し声ごとつもなく遠く聞こえ始め、心の奥が夜のように暗くなる。急に、この風景が遠く感じた。不確かなものへと、変化していた。

けど、僕はここにいる。ここに、確かなものとして。

目の前に、不思議な文字列が並び始めた。視界のあちこちに、文字の一つ一つがボールのように、飛んで行ったりしている。しばらくすると、ようやく文字列が完成した。

ネシイエ・ミヒ

我は調停者

その文字を頭の中で呼んだ瞬間、変な感覚が消えた。同時に、風景も元に戻り、意識もちゃんとしていた。みんなは、気が付いてい

ない。レンドとデルゲンは何度も押ししているが、開かない。リサは頭を悩ませ、アンナは目をパチクリさせてそれを見、空は……僕を見ていた。空だけは、僕が普通じゃなかったことに気が付いているようだった。

「どうしたんですか？ 気分でも……悪いんですか？」

僕に近付き、空は言った。心配そうな眼差しが、かわいらしく見える。

「もしかしたら、扉が開くかもしれない」

「……？」

空は頭をかしげていた。僕は再び扉に近付き、手を当てた。傍にいたレンドとデルゲンは、「？」という顔をしていた。

「……ネシイエ・ミヒ……… 我は調停者」

すると、扉の紋章から風が吹き出るかのように、金色の光が溢れ出した。

お帰りなさい。シリウスの子供たち

懐かしい、きれいな女性の声だった。聞いたことも無いのに、暖かさを感じた。生まれる前に聞いた声なのかもしれない。

ゆっくりと手に力を入れ、押した。ゆっくりと、紋章の扉は開いていった。やはりと思い、僕はニヤツとした。

「……？ な、なんでだ？」

レンドは頭をくるくる回していた。

「空の言葉に反応したんだよ。たぶん、調停者 だからさ」

リサの言葉の裏側に、「樹も」という文字があったのだと思う。

あいつも、僕と同じ 調停者 なのだから。

扉が開かれ、光が行き届いていない階段が現れた。だが、すぐに両側の壁に円形の光が並ぶように出現した。青緑色の光 たぶん、

天空石だろう。

「……あまり長い階段じゃあなさそうだ」  
扉の中へ、デルゲンは顔を覗かせた。

「ワープ装置でもあればいいんだけどね」

「……行こう」

僕たちは荷物を抱え、その中へ進んだ。

階段は短かった。深さで言えば、3〜5メートルくらいだろうか。階段を降り切ると、人2人が通れるくらいの幅の通路が現れた。

ずっと先まで、直線だ。灯り代わりに天空石が用いられているのは、言うまでもない。

「この絵って、なんなんだ？」

レンドが指差した両側の壁は、壁画だったのだ。延々と続く、何かの絵。人のような絵もあれば、動物のようなものもある。中には、浮遊大陸を表しているであろう絵もあった。

「天空人が描いたものだろうね」

リサは壁画に顔を近づけて、それを眺めている。

「……あれだけのものを作った割には、絵とかは大したことないんですね」

アンナが見ている先にある絵は、ガイアの古代文明の壁画みたいな、人間の動きを描写し切れていないものだった。色褪せており、すでに「絵」としての輝きは失われている。

「……ということは、電子工学的なものは発展してないってことかな」

よくわからないが、電子工学が映像やらなんやらに関係しているんだと思っただけ。ちよつと、曖昧だ。

「電子工学？ なんですか？ それ」

アンナが頭をかしげていた。なんですかって訊かれても、ちよつとうまく説明できないと思うんだけど……。

「んー……映像や音声とかを、表示したりする分野……みたいなも

のかな。うまく説明できないけど、数百キロ離れた場所の映像を、機械があればここに映し出せたりできたりするんだ」

「へえ……ガイアには、天空人でもできなかったことがあるんですね」

「さすがに、浮遊大陸ほどのものはできないけどな」

あんなものができたら、それこそ危険だ。人間の文明が行き過ぎると、自らを滅ぼしかねないのだから。ガイアの技術がこれ以上進まないことを祈るが、果てしない欲望に歯止めはできないだろう。

「ガイアでは、他にどんなことができるんだ？」  
デルゲンが訊ねた。

「いろいろできると言えば、いろいろできるんだけど……このくらの丸いもの　ディスクって言うもので、それを再生するものがあれば、どこかの誰かが作った音楽を聴けたり、映像を楽しんだりできるんだ」

僕は両手の指を使って、丸い円を描いた。いまいち、みんなうまく伝わっていないようだ。

「……？　よくわからないな」

「つまり、人が演奏しなくても音楽を聴けるってことですよ。演劇とかも、わざわざ見に行かなくても見ることができるとです」

空が説明した。彼女は僕や友人、家族との記憶を失っているものの、ガイアでの知識は失っていないのだ。

「は……そりゃすごいな」

レンドの感嘆の声に、僕も同じく「すごい」と感じた。

よくよく考えてみれば、詳しい知識を持たない僕のような一般人は、どういった原理で音楽が聴けたり。映像を見ることができるとか理解できない。それらの「情報」をデータとして刻印し、それを再生する……こうやって考えると、ガイアの技術もよくわからないものだらけなんだよな。

「……疑問に思ったんだけどさ」

リサは壁に埋め込まれている天空石に触れた。

「どうして、同じ世界から分岐したレイディアントとガイアの技術  
つてのは、差があるんだろうね」

リサが言ったこの質問。クロノスさんとミリアから聞いた時から、  
僕も思っていた疑問だ。

「それは、違う道を行ってきたからだろ」

デルゲンは、腕を組んでそう言った。

「どうということ？」

「大昔に……それもティルナノグがある以前に分岐した”はず”。

それも、1万年以上も昔に」

たしかに、ガイアではティルナノグも創世時代も存在しない。そ  
れ以前に分岐したと考えるのが妥当なのだ。

「それまでは同じ歩みだとしても、分岐してから途方もない時間  
違う道を行んだことになるんだ。それだけの年数が重なれば、当  
然の如く違う部分も出てくる。それが、『魔法』と『高度文明』だ  
ったってことじゃあないのか？」

魔法がレイディアントで、高度文明がガイア。デルゲンの言っ  
ていることが、たぶん答えに近いんだと思う。

「……うーん……」

いまいち納得できないのか、リサは背を向けて唸り始めた。

「だけど、一体いつ、誰がこんなことをしたんだろうね」

「……樹さんたちが言っていた、『ある男』のことですか？」

僕はうなずいた。

「誰かがこの星の『滅亡の未来』から救うために、太古の人間と戦  
ったらしいけど……」

「んあの考えてても、どーしようもねえだろ？」

レンドは目をキョロキョロさせながら言った。長い直線の通路の  
壁には、まだまだ不思議な壁画が描かれていた。

「……そうだな」

10分くらい歩き進めると、一つの大きな扉が現れた。この地下

通路の出入り口の扉と同じで、ティルナノグの国章であろう紋章が刻まれていた。今度は紋章だけが金でできていて、所々にエメラルドやらルビーやら、それらしき宝石が埋め込まれている。聖域への扉と同じだ。

「開かないな」

デルゲンは押してみたが、開かないようだ。

「てことはだ。ソラ君に頼むしかないようだな」

ニヤついた表情で、レンドは言う。

「……僕は便利屋じゃないんだぞ？」

「ハハ、細かいことは気にすんなって」

「いや、意味わからないっての」

ぶつぶつ言いながら、僕は扉の前に立った。

「……ネシイエ・ミヒ……我は、調停者」

すると、宝石たちが輝き始め、それぞれの色の光を放ち始めた。

「やっぱり、当たったな！」

手でまぶしさを減少させながら、レンドは言った。

我らが幼子よ

扉が開く時と、同じ声だった。

そなたの名を

「……名？」

「あんたの名前だよ」

「いや、それはわかってるけど……」

たぶん、東空ではないだろう。こちらでの本名だ。

僕は一度せきをして、喉のつまりを無くし、言った。

「……我が名は、セヴェス　セヴェスⅡクピトⅡヴェルエス」  
すると、宝石の光たちがさらにその強さを増した。

セヴェス……お帰りなさい

そして、扉が音を立てながら、ゆっくりと開き始めた。ようやく中を見ることができたが、真っ暗で何も見えない。

シリウスの子らよ、その胸に一重の祈りを捧げん

優しい声が降り注ぎ、真っ暗だった先の広間の中に、灯りが広がる。ほのかな天空石の輝きが、広間の隅々に行き渡った。

「……空さんって、本名は『セヴェス』なんですか？」

空は僕の傍に立ち、言った。

「まあ、そうなるな。……僕の本当の両親がくれた名前だよ」

「じゃあ、それが本名じゃん」

と、リサは言う。

「……実際はそうなんだろうけど……」

リサの言うとおりなんだけど、あんまり実感は無いんだよな。『東空』として生きてきた時間がほとんどだから。

本当の父さんと母さん……顔なんて、一切覚えていない。まるで、どこかに追いやられてしまった、子供時代の玩具のようだ。

父上、母上　？

そう、呼んでいたのかな……。

「先に行ってみようぜ」

デルゲンに促され、みんなは先へ進んだ。しかし、空は先へ行かず僕の傍にいたので、僕もなぜか行けなかった。

「どうした？」

「名前、やっぱり気になりますか？」

「……………」

僕は唸りながら、上を見上げた。

「そうだな……僕は、戦いが終わって世界が救えたら、ガイアに戻るつもりだし。これからも、『東空』で生きるつもりだよ」

「そっか……………」

彼女の顔は、どこか安堵した様子だった。

「やっぱり、空さんは空さんがいいですもんね」

と、笑顔になった彼女。それを見て、僕も思わず微笑んでしまった。

僕を生んでくれた、本当の両親には悪いけど……僕は、やっぱり『空』で生きていきたい。

「おい、何してんだよ、2人とも」

レンドが広間の中央で僕たちを呼んだ。

「あ、はい」

空が歩き出したので、僕も歩き出そうとした。その時、

わかるでしょう？

僕は振り返った。後ろから、女性の声があった。頭の中に聴こえるのではなく、後ろから。

「……………」

「どうしたんですか？」

「……………」

どこかで、聞いた覚えのある声だったんだけど……どこだったかなあ……………」

「なあ、これ見てみるよ」

デルゲンが、広間の中央にあるものを指差した。

「これは……機械か？」

直径6メートルくらいの円盤があり、青透明だ。それと同じようなものが、天井にもある。まるで、鏡になっているようだった。

「何かの装置かな？」

「でしょうね」

リサを見ると、彼女は何かをいじっていた。部屋の隅に、キツチンくらいの大きさの、コンピューターみたいなものが置かれていた。僕はリサのところへ行き、そのコンピューターを眺めた。ズラツとボタンが並び、所々に画面がある。だが、起動していないのか、画面には何も映っていない。さっきまで、映像の技術があーだこーだと言っていたが、どうやらティルナノグにもこの技術はあったようだ。

「……わかるのか？」

「わかんない」

僕はガクツとしてしまった。

「わ、わかんないのかよ……」

「私だつて、こんなもの見たことも触れたことも無いんだよ。文句あんの？」

ギロツと睨むリサ。

「も、文句なんかないつて。……ところで、これって何の機械だと思っ？」

「予測だけど、転送装置でしょうね」

「ワープ装置ってことか？」

リサは小さくうなづく。

さて、どうしたものか。何百個もあるボタンを押して、この装置を起動させなければならぬ。たぶん、これはグラン大陸のどこかへ通じている。もしかしたら、浮遊大陸へ通じるものかもしれない。……これかな」

リサはおもむろにボタンを押した。カチツと音がしたが、何も起

こらない。

「ダメか？」

「あ、当たり前だろ。まだ起動していないんだから」

「……わかるんなら、あんたがやりなさいよ」

できるもんならやってみると言わんばかりに、彼女はコンピューターの前から離れた。

「わかるというわけでもないんだけど……」

わかるというより、まだ電源を入れてもいないのに動くはずが無いってことだ。まず、電源ボタンを探さないと。

赤とオレンジ、黄色に緑、さらには青、紫、ピンク色のボタンが並んでいる。だいたい、電源ボタンつてのは、赤っぽい色で、大きいボタンなんだよな。適当だが、たぶんそれっぽいはず！

コンピューターの左端にあった、大きめの丸い赤のボタンを、ゆっくりと押した。

グーン……………

音と共に、コンピューターに気が戻った。パソコンが起動している時のような音がしながら、映像などが映し出された。とはいえ、説明らしき文字などは一切ないが。

「動き………だしたの？」

リサは僕の方に顔を向けた。

「だろうな」

「なによ。あんた、やっぱりわかってんじやないの！」

バチンと、リサは僕の後頭部をはたいた。

「いってえな！」

「愛情表現だつてば」

リサは笑顔でそう言った。つか、嬉しいなら暴力はダメでしょーよ。

「んな愛情表現、欲しくないっての………まったく」

僕は頭をさすりながら、機械を眺めた。

よく病院にある、心拍数を表す画像っぽいものや、外の風景を表示している画像もある。これは　あの雪景色だ。上の部分に、浮遊大陸らしきものも映っている。

「ここから、どうすればいいんだろう。さっぱりわからない。」

「ねえ、どうなの?」

「……………」

「ねえってば」

そわそわしているリサは、理解できないので何度も訊ねてくる。

「……………わかんないんだよ」

「なによ、それ」

リサは長いため息をついた。

「そんなあからさまにガツカリしなくても……………」

「こんなの、適当にやりゃあいいんだよ!」

そう言うと、リサは無造作にボタンを押し始めた。

「お、おい、間違えたら大変なことに……………」

「いいの!　どうせ、わかんないんだからさ!」

止めても無駄だとわかり、僕はリサを放った。彼女はものすごい速さで指を動かし、あらゆるボタンを押した。……………ゲームのボタンの連打みたいだ。

「……………いいんですか?」

心配そうに、空が見ている。

「よくないな」

うん、とうなずく僕。

「だったら、止めないと」

「……………僕が殴られるじゃないか」

「……………」

それで納得されてしまっつてのもおかしい話だが、空は僕と同じように諦め、苦笑しながらリサを見ていた。

「つりゃああああ!」

終いには、リサはコンピューターを殴ったり、蹴り始めた。さすがにこれはやばいと、僕は止めに行った。壊れてしまったら元も子もない。

「ボタン押すのはいいけど、殴るの禁止！」

「るっさいわね！」

「うばあっ！」

ミドルキックが横っ腹に……！

「あーあ、毎度毎度……ご愁傷さま」

と、レンドは腕組みをしてうなずいていた。と、止めるよ……！

「ええい！ これだああ！！」

リサはある大きなボタン目掛け、拳を振り下ろした。鈍い音が、この広間に響き渡る。

ヴ  
ン……………

ボタンが押された瞬間、再び起動する音が聞こえた。そして、中央の転送装置が輝き始めた。

え？ マジで？

「おいおい……マジかよ？」

デルゲンもレンドも、呆れ顔だった。

「ホラ見ろ！ すごいだろ！？」

リサは僕に太陽のような、無邪気な笑顔を向けた。

「あ、うん……」

たしかにすごいんだけど、こんな古典的な方法で起動してしまうつても、如何なものでしょうか。まあ、深いことは気にしないでおいっつ。

『ピ。ピ。ピ……移動先を……入力してください』

コンピューターから、言葉が出てきた。真ん中にある画像に、

移動先入力』という文字が浮かんでいた。もちろん、古代ティルナノグ文字で。

「どうすんの？」

「まーまー、ここは任せとけ」

その画像の下に、キーボードみたいなものもあった。なるほど、パソコンみたいなものか。いや、もしかしたら画面に触れて、入力するタイプのものかもしれない。タッチパネルって言うのかな。

「……押してみるか」

僕は画面の『移動先入力』という文字に触れた。すると、画面が移り変わり、表みたいなのが表示された。

これは……移動先のリストだろうか？ 10個程度くらいしかない。

バベル、ウルク、ヴァルハー、ハラシ、カネシユ、エンリル、ダマスカス、ウル、ニムルド、アルベラ………ティルナノグ時代の土地名だろうか。

「ん？ もういいの？」

急かしてくるリサ。彼女は、古代ティルナノグ文字が読めないからだ（後期の文字は一般人でも知っているものだが、初期の文字は彼女でも読めない）。

「ちよつと待ってって」

うーん、どこに行けばいいのかわからないな。そんなことを思っている、土地名の横にある『備考』という欄を見つけた。

ニムルド 地上都市。海に面し、魚介類が豊富。

エンリル 天空都市。工業分野に秀で、学者たちが集う。

バベル 天空都市。水晶の町と呼ばれるほど、建造物が美しい。

コメントかなんかか？ ていうか、この天空都市を選べばいいんじゃないのか？

と言うことで、画面の端にあった『移動先入力』を押した。すると、画面が変わり、入力画面になった。ここで、土地名をキーボードで入力すればいいんだな。

「『エンリル』と。んで、『確定』」

『確定』 ボタンを押した。たぶん、これでいいと思うんだが……。転送装置が、ヴンと音を立て始めた。

『ピー、ピー。エラー、エラー』

「??？」

画面を見ると、『移動不可能』の文字が映し出されていた。その文字に触れると、今度は、次のように映し出された。

『天空都市エンリルの転送機に接続できませんでした。あちらの装置が故障している可能性があります。別の移動先を入力してください』

故障って……数千年も経てば、壊れるか。

「どうしたの？ ダメだった？」

「リサ、待って。他にも入力してみるからさ」

今度は『バベル』と入力した。だが、これもさっきと同じように、あちら側の装置が壊れていてダメだった。他の天空都市にするしかないか。

ダマスカス 地上都市。エリドウ伯爵統治。

ヴァルハー 地上都市。緑溢れる土地にあり、大樹が有名。

ウル 地上都市。砂漠に程近い都市。囚人収容の場所。

ハラシ 天空都市。天空貴族の町。

ウルク 地上都市。ラガシユ侯爵統治。

カネシユ 天空都市。魔法工学が盛ん。

アルベラ 天空都市。唯一神リユングヴィを祀る。

つか、天空都市なら天空都市、地上都市なら地上都市と、区別しておいて欲しいんだが。

ともかく、次は『ハラン』を入力した。

『天空都市ハランの転送機に接続できませんでした。破壊されている可能性があります』

今度は破壊かよ……じゃあ、『カネシユ』を入力。

『天空都市カネシユの転送機に接続できませんでした。破壊されている可能性があります』

またかよ。じゃあ、『アルベラ』を入力。

『天空都市アルベラの転送機に接続できませんでした。あちらの装置が故障している可能性があります。別の移動先を入力してください』

全部ダメじゃん……どないせーちゅーねん。

「どうなの？」

リサはそわそわしていて、何度も画面を覗いている。

「この装置から行ける天空都市には行けないみたいだ」

「じゃあ、どうすんの？」

「考え中」

「……………」

樹たちもここに来たのだと考えれば、もちろんこの転送装置で天空都市に移動できなかったということだ。ってことは、あいつらは地上都市に行ったということか？ そうだとしたら、その地上都市

から程近い場所に、アトモスファイアへ通じる道か何かがある可能性があるかもしれない。

僕は、地上都市を入力した。『ニムルド』と。

「地上都市ニムルドの連絡機はスリープ状態です。あちらの装置を起動してから、再度入力してください」

なんじゃそりゃ。じゃあ、『ダマスカス』と。

『地上都市ダマスカス……ピ、ピピ……接続中……しばらくお待ち下さい……』

おっ！？ 大丈夫か？

画面に古代文字で「接続中」が表示され、白い光が画面の中で円を描いている。

『……接続完了。転送機にお乗り下さい。中止する場合、あるいは移動先を変更する場合は、『中止』を押して下さい』

どうやら、うまくいったようだ。

「よし、これで大丈夫なはずだ」

「えっ？ 天空都市に行けるの？」

「いや、どこか別の地上都市だ」

「……それじゃあ、ダメじゃんか」

リサは不機嫌そうな顔で言う。

「樹たちもここに訪れていると考えれば、天空都市には行けなかったはずだ。ということは、地上都市に行った可能性がある」

「あ、そっか。……でも、あいつらが移動して、その装置を破壊したって考えられるんじゃないの？」

「それは大丈夫だよ。だって、そうだとするとゼテギネアに古書を奪いに行った意味が無い。きっと、その古書には地上都市から程近い場所にある、アトモスファイアへ通じる都市が記されていたんだ」

あいつらも、探していたんだ。天空へ通じる道を。

「じゃあ、今入力した地上都市に行けばいいの？」

「さあ？ 行ってみないとわからない。情報が記されていないからね」

納得したのか、リサはこれ以上の質問はしてこなかった。

「ともかく、移動してみよう。それからだ」

僕たちは転送装置に移動した。この円盤に乗ればいいのか？

ぞろぞろと6人、円盤の上に乗った。ちょっとしたエレベーターっぽい。

「乗ったのはいいけど、どうすんだ？」

レンドは落ち着かない様子で言った。

「たぶん、『移動』みたいなボタンがあると思うんだけど……」  
辺りをキョロキョロしていると、円盤の表面が輝き始めた。

『転送を開始します……転送中に、転送機から出ないで下さい』

上の装置から声が聞こえた。なるほど、乗れば勝手に転送を始めるのか。どっかに、物体を感知するものでも組み込まれているんだろう。

上の円盤と下の円盤の光が徐々に延び始め、合体した。合体した光は柱となり、僕たちを包んだ。

「……これ、リサの空間転移の魔法と同じ感じがしないか？」

デルゲンは光を受け、上を見上げている。

「それと同じ原理なのかもね」

『……移動先、地上都市ダマスカス……』

リサが答えた瞬間、僕たちの視界は真っ白になった。

ほんの少しの間だけ、真っ白な光に包まれていた。そして、目の前に景色が戻ってきた。

さつきと同じような広間だった。出入り口の紋章の扉、部屋の隅にはコンピュータ。違うのは、天井が開けているということだ。青々とした大空が、顔を覗かせている。

「……着いたようですね」

アンナは転送装置から降りて、辺りを見渡した。

「外へ出てみよう。……ちょっと、不安だけど」

僕も降りて、外へ向かって歩き始めた。

「ソラ、ビビッてんじゃねえよ！」

と、速度が僕の背中を叩いてきた。

「び、ビビッてなんかないっつもの！ いちおう、用心に越したことはないからな」

そう言うと、レンドは「あゝ？」という顔で、不気味な笑顔をしてみせた。

「そんなんだから、お前は空ちゃんどだな……」

「か、関係ないだろ！？」

「まあまあ、落ち着けて。ホラ、レンドもからかわないで行くぞ」

「へーへー」

「まったく……」

こんなところで言われると、恥ずかしいんだったの。僕たちは、扉の外へ進んだ。

「……………」

「どしたの？ アンナ」

「……いえ、なんでもありません」

「……………」

扉を開き、さっきの通路と同じような道を進むと、ようやく外に出れた。

「これは……廃墟か」

丘の上の都市、なのだろう。見晴らしがいい。緑の草原が遠くに広がり、さらに遠くには春の色を持った山々が連なっている。自然は生き生きと、僕たちの視界に広がっていた。

だが、都市は滅んでいた。人が住んでいたであろう住居跡は、長い年月により、半分以上が崩壊、あるいは風化し、草木が生えていた。きれいに配置された住居は、どれも同じ規模のものばかりで、同じように半壊し、数千年前の面影は無い。

「ティルナノグが滅んで、2000年余り……文明が滅びれば、人間もいなくなるってことか」

廃墟と化した都市を眺めながら、レンドは言った。

「あれ……見てみるよ」

デルゲンが何かを指差した。その先には、巨大な建物があった。塔のように見えたが、半分から崩れた状態のものだ。壊れていなかった時は、十数メートルの建物だったんだろう。

「……地上都市の建築技術ってのは、現代とあまり変わらないようだな」

「地上人は、天空人によって泥をすするような生活を強いられていたらしいからね。そんな人たちが、高度な技術でできた建物に住むことはできなかったんだよ」

リサは少し歩き、廃墟の住宅の傍で小さく生えている花に触れた。タンポポ……のようにも見えるが、いまいちわからない。

「ま、今とあまり変わらないか……」

デルゲンはため息混じりに言った。

「そうなんですか？」

「……王侯貴族や特権階級の人間は食べたいものを食べ、欲しいものは何でも手に入る。だが、それ以外の人間は地上人と同じようなもんさ。貴族から税として作物は徴収され、働いても働いても報われない。……変わらないんだよ。今も昔もな。違うのは、抑圧が昔ほどではないってところかな」

「……………」

「俺個人の意見だがな」

ハハツと、デルゲンは笑った。

レイディアントも、ガイアも変わらない。『持つ者』だけが何かを手にし、『持たない者』は利用され続ける。形は違えど、根本的なものが同じなんだ。どちらとも満たされぬ者であり、絶えず何かを求め続けている。その過程の中で、憎しみや妬み、僻みを渦巻かせている。

この都市も、そうだったのだろうか。

天上からの圧政に苦しめられ、人として生きる権利を奪われ、憎悪を保ちながら、怨嗟の声を轟かせていたのだろうか。あるいは、自分たちを救ってくれる人間がいることを、信じていたのだろうか。荒れた丘の上に佇む滅びた都市には、風と共に哀愁の想いが漂っているようにも感じた。

「……さて、これからどうする？」

この都市の中心部に、人が集った公園らしき跡があったので、そこで僕たちは腰を下ろし、休憩した。

「樹たちがどこに行ったのか、だな」

僕は空を見上げた。奴らがいたような痕跡は無いし、もちろん足跡とかも無い。

「この都市以外、何も無いように見えるが……………」

レンドは辺りを見渡した。見渡す限り、草原しか広がっていない。ルナ平原のようにも感じる。

「他の地上都市に行ってみたらどうですか？」

アンナが言った。

「他の地上都市か……どうする？」

「他に方法が無いんだから、そうするしかないでしょ。ここで話しても、埒が明かないしさ」

僕が訊ねると、リサはそう言いながら立ち上がった。

「決定だな。元来た道を戻ろう」

ということ、さっきの装置がある部屋へ戻ることにした。

それにしても、ここら一帯は自然が溢れるいい場所じゃないか。

春の訪れを感じさせる暖かい風、それに吹かれて揺れる草花、空の色で青っぽく霞んでいる緑の山々。『永久凍土の大陸』と聞いていたが、どうやら凍っているのは、絶海に面した辺りだったようだ。

2大陸へ渡った人々が、グラン大陸の内陸部へ行けられないようにするためだけだったのかもしれない。

転送装置のあった場所へ戻り、あのコンピューターをいじってみた。たぶん、こちらの装置からでも行くことができると思うのだが。

ヴ  
ン……

機械が起動すると、画面に何かが表示された。

ジツグラト神殿      大陸最南端に位置する。ロンバルディア、

アルカディアへ行く時に利用。

これはたぶん、あの遺跡っぽい所のことだろう。あそこは、2大陸へ繋がる場所だったんだ。

ともかく、今度は『ヴァルハー』を入力、と。

『地上都市ヴァルハー……接続中……しばらくお待ち下さい。……

……接続完了。転送機にお乗り下さい。中止する場合、あるいは

は移動先を変更する場合、『中止』を押しして下さい』

この都市も大丈夫だったようだ。いちおう、他の地上都市も行けるかどうか確認しておこう。『中止』を押しして、『ウル』と。

『地上都市ウル……接続中……しばらくお待ち下さい……接続完了。但し、若干の異常を確認。都市近くに獣などがいる恐れがあります。移動した際には、お気をつけ下さい』

獣って……おいおい。じゃあ、次のを入力。

『地上都市ウルク……接続中……しばらくお待ち下さい……接続できませんでした。あちらの転送機のバッテリーに異常あり。破裂する恐れがあります。早急に、エレメンタルパワーを補充してください』

ここもダメか。結局、接続できて安全なのは、2つだけか。

「ヴァルハー、と………よし。みんな、転送装置に乗ってくれ」

「今度はどこなんですか？」

空は画面を覗き込んだ。とは言っても、彼女はこの世界の文字は一切読めないのです。どうにもできない。

「地上都市ヴァルハーって所。緑が溢れて、きれいな所なんだってな」

「へえ……少し、楽しみですね」

と、彼女は微笑んだ。

「こんな時に何言ってるんだよ」

「だって、本当に『旅路』っていう感じなんですもん」

まあ、それは否めないな。なにせ、僕たちは2大陸の人々が一切知らない場所に来ているのだから。

「俺も寧ろ楽しんでるけどな」

レンドがそう言って、転送装置に乗った。

「転送装置で一瞬の間に移動……こんな技術、ワクワクして落ち着いてられるかって」

「まったく……遠足じゃないんだぞ？」

デルゲンは僕と同じように、呆れた表情になっていた。

「重い気分で行くよりかは、いいじゃないですか」

「ハハ、アナナの言うとおりだね」

「リサまで……ま、いつか」

気負いするところではあるけれど、詰め込みすぎないほうがいいもんな。

僕たちは転送装置に乗り、さっきと同じように光の柱に包まれ、消えた。

## 62章：ヴァルハラ 緑風と大樹の囁きに

真つ白な視界が消えた瞬間、コケの臭いを感じた。今までの広間よりも狭いし、明かりは灯っていないし、木の根みたいなのが床や壁を這いずり回っている。天井は所々、崩れていて光が差し込んでいた。

正面に、今までと同じ紋章の扉。だが、それはかなり古びていて、半開きになってしまっていた。長い年月のために、封印が解かれてしまっていたのかもしれない。

「……なんか、雰囲気を感じるな」

辺りを見渡しながら、デルゲンは言った。

「人がいるような気配がする」

「人が？ それはありえないような……」

遺跡の中にいる静けさのせいか、個人的にはまったく人の気配を感じないのだが。

「いないとも言い切れないよ、空」

「……なんで？」

「たしかに、ユリウスによってティルナノグが滅ぼされ、アイオーンによって人々が2大陸のほうに導かれたとはいえ、残って今の今まで生活してきた人たちもいるはずよ。さっき行った地上都市の周辺のように、緑溢れている土地なら可能性はあると思うし」

緑ある所に、命あり。命ある所に、人間ありってか。

装置の円盤から降りて、僕たちは扉の外へ向かった。

長い通路を歩き、1つの扉に突き当たった。木製の扉だ。この扉だけが、どうも最近作られたように見える。

ゆっくりと押し開け、僕たちは外へ出た。

広がっていた風景は、町だった。自然に囲まれた町。そして、何人も人の姿を確認できる。ここで、生活しているんだ。

普通の町ではない。森の中の町と言うべきだろう。空を覆わんばかりの木の枝や、鮮やかな緑の葉っぱたち。その隙間からやって来る木漏れ日が、温かさや穏やかさを僕たちに与えてくれる。空気も澄んでいて、いつか行ったガイアの山を思い出す。小鳥がさえずり、風によって揺れる草木の音が、なんとも言えない平穏さを漂わせている。

この町の家は、巨木の枝に乗つかるように作られた小屋や、巨木そのものの中を切り抜き、住居にしているものもあった。すべてが、木造建築の住居だった。

「どなたかな？」

いつの間にか、僕たちから数メートル離れた場所に、白い髪とひげを持ち、腰が曲がったおじいさんがいた。転送装置があった遺跡が盛り上がった場所にあったため、僕たちはおじいさんを見下ろす場所に立っていた。

「えっと、僕たちは……」

「もしや、その奥にあった装置を使って来たのかな？」

おじいさんは小さな目を細めながら言った。

「え、ええ、そうです」

「……なるほどのお」

ホッホッホ、と穏やかにおじいさんは笑った。

「ところで、どこから来たんだね？」

「私たちは……南の大陸から来ました」

リサが丁寧に行った。こういう時、なぜかりサはシャキシャキと答えることができる。

「南の大陸？ あの、猛吹雪の大地よりさらに南なのか？」

僕たちはうなずいた。

「ふむ……伝承は本当だったんじゃない……」

おじいさんの言葉が小さすぎて、よく聞き取ることができなかつた。ただ、うんうん、とうなずいていた。

「あの、ここは？」

僕は周囲を見渡した。

「ここは、大樹の町ヴァルハラじゃ」

「ヴァルハラ？」

あのコンピューターに載っていた名前とは違う。だが、『ヴァルハラ』と『ヴァルハラ』、『緑』と『大樹』、共通する部分は、たしかにある。

「あんだたち、ここには何の用で来たんじゃない？」

「ええつと、浮遊大陸へ行くためです」

「浮遊大陸とな？」

おじいさんは辺りをうろろしながら、考え事をしていた。

「……まあ、ここで話すのもあれじゃ。ワシの家に来なさい」

ちよいちよい、とおじいさんは手招きをした。

と言うことで、僕たちはおじいさんの家にお邪魔することにした。おじいさんの家はこの町の奥にあり、町の中で最も大きい大樹の上に、秘密小屋かのように家が建てられていた。高さ的には、10メートル程度だろうか。

地上からはしごを上り、枝伝いに造られた階段を上る。ここから地上を見ると、「落ちたら痛いんだろっなあ」なんてことを考えてしまう。

「……ん？」

階段を上りきった時、上から笛の音が聞こえ始めた。きれいな音

色で、小鳥さえも鳴くことを忘れ、聞き入っているくらいだった。上空へ目を向けると、横に突き出た大きな枝の上に座り、横笛フルートのようなものを吹いている子供がいた。葉っぱに隠れ、顔を確認できない。

「こりゃっ！ シエリア！」

先頭を歩いていたおじいさんが、上を見上げて怒鳴った。

「上に登るなど、何度もゆうたじゃないか！」

おじいさんはその子供に対し、降りろという動作をしている。子供は吹くのを止め、クスクス笑い始めた。

「いいじゃん。今日は風も気持ちいいし、いい音を出してる。こういう時こそ、音楽を奏でるべきだと思わない？」

少女の声だった。まだ、小学生くらいの年齢の声だ。聖歌団みたいな、澄んだきれいな声をしている。

「笛を吹くのは構わん。高い所に行くなとゆうとるんじゃ！」

「こういう所で吹かないと、気持ちよくないんだよ。鳥たちも寄ってこないし、風の音も聞けないし」

「とにかく、降りなさい！」

「ちえっ、わかったよ。……よつとー！」

少女は3メートルほどの高さのところから、僕たちがいる高台のところに、軽やかに舞い降りた。

少女……か？ 緑色のミディアム程度の髪で白いターバンを巻き、白いローブを羽織り、片手には銀製の笛。なぜか肩には小鳥が2匹、乗っていた。紫色の瞳をして、傍から見れば男の子に見えなくも無いのだが……。

「あれ？ お客さん？」

少女は、僕たちの顔を眺めた。目をパチクリさせながら。

「そうじゃ。これから、ちょっと話をするところじゃ」

「ふーん……見慣れない人たちだね。カラハザンの人？」

「いや、南の大陸から来たそうなの？」

「南の大陸？ そんなのあるの？」

少女は頭をかしげた。

「どうやら、そのようじゃ」

「へえ。なんかすごいな。ね、僕もお話を聞かせてよ」

「ちょっと、驚いてしまった。『僕』という一人称を使うってことは、やっぱり男の子か？ いや、でも声が女だしなあ……。はて？ どういうことだ？」

「ね、いいでしょ？ 知らない土地のお話、僕も聞きたい」

「ダメじゃ。お前は、いちいちやかましいからの」

「ええ？ 邪険にしないでよお」

子供はブーたれていた。こういうことを言う人間を、久しぶりに見た気がする。ガイアだったら、近所の子供が何かとそういう言い方をするからな。

「おじいさん、私たちは別にいいですよ」

リサが優しい声で言った。あまりに聞いたこともない声だったので、仲間一同、驚愕していた。いや、空以外か。

「じゃがのお……」

「ま、まあ、別に俺もいいですよ。な？」

引きつった顔を、デルゲンは僕たちに向けた。

「あ、ああ」

「皆さんもこう言っているんだし、いいでしょ？ ねえ」

ねだるようにおじいさんの裾を引っ張りながら、子供は言った。

おじいさんのため息と共に「わかった、わかった」と、2つ返事をした。

おじいさんの家の中は、木の匂いがしてなんだかいい気分になってしまう。昔、田舎の川へキャンプに行った時、寝泊りしたログハ

ウスのような匂いだった。

一階建ての住居だが思ったよりも広々としていて、タンスやベッド以外、何も無い。いちおうキッチンらしきものがあるが、なんとも質素な住宅だ。

僕たちは中央に敷かれているカーペットの上に、あぐらをかいて座った。そうでない人もいるが。

「シエリア、紅茶を入れてくれんか？」

「ええ？ 自分でやってよお」

「階段を上ったりして、腰がいつてのお……」

おじいさんはワザとらしく、自分の腰を叩いて見せた。仮病だな……。

「ちえっ、しょうがないなあ」

シエリアは、渋々キッチンの方に行き、準備を始めた。

「私も手伝うよ」

空は立ち上がり、シエリアの方へ行った。シエリアに笑顔を向ける彼女を見ていると、なんか……姉妹のように感じた。「海」という妹がいるが、あいつが双子だしな。

数分後、紅茶を用意してくれたところで、僕たちは話を始めた。

「まず、自己紹介をしないと。ワシはアラファドじゃ。ヴァルハラの長老をしてる。そして、この子はワシの孫のシエリアじゃ」  
アラファドさんの隣で正座しているシエリアが、ペコッと一礼した。

「シエリアって言います。初めまして」

シエリアが深々と頭を下げるもんだから、こっちまでつられて頭を下げてしまった。しかも、あぐらをかいていることに対し、なぜか罪悪感を感じるようになってきてしまったので、正座にした。

「こんな格好じゃが、シエリアは女の子じゃ。誤解せぬようにな」

「女！？ お前、女だったのかよ！？」

レンドがシエリアを指差しながら言った。

「……レンド、声を聞いて気付かなかったのか？」

デルゲンが呆れた顔をしている。

「だってよ、『僕』とかって言うんだぜ？ おかしいだろ、普通」

「ハハ、僕の口癖なんだ。直らなくてさ」

無邪気な笑顔で、シエリアは言った。

「私はリサです。よろしく」

「うん、よろしく」

シエリアとアラファドさんは、小さく頭を下げた。

「アンナです。初めまして」

「僕は空。よろしく」

「ソラ？ 変な名前だね」

「ハハ、よく言われるよ」

そう言えば、ヴァルバにも言われたっけ。……「変な名前」……

って。少しだけ、寂しくなったのは気のせいじゃないのだろう。

「俺はデルゲン。よろしく」

「俺はレンドだ。よろしくな、坊主」

「僕は坊主じゃないよ。女の子だよ」

「……あのな、だったらその『僕』口調を直せってんだ。女なら、

女らしくしろっての」

あぐらをかいたまま頼杖を付き、レンドは呆れていた。

「そんなこと言われても、癖なんだからしょうがないじゃないか」

「いいか？ シエリア。今のうちに行くべき道を正さねえと、あの

女みたいになっちまうぞ？」

「あの女？」

レンドはリサを指差した。予想はしていたが、さすがにそれはま

ずいんじゃないのか、レンド……。

「？ きれいな人じゃん」

「いや、それは見た目だけなんだよ。あいつ、魔界の女王と言われる

ほど凶暴でな、暴れたら手が付けら

「あ……レンド、リサが」

僕が言いかけた時、すでにリサは空中へ舞い、回し蹴りをレンド

に食らわした。レンドは、そのまま床へ倒れこんだ。

「……………あーあ」

「遅かったですね」

「ですね」

空とアンナは笑顔でその様子を眺めていた。

「いやいや……………少しは止めようよ」

こういう時、なぜか冷静なんだよな……………空とアンナって。

「誰が凶暴だ!!」

リサはかの有名なアイアンクローで、レンドの額を掴んでいる。

「ま、待て……………く、首が……………!!」

レンドは首の辺りを押さえながら、もがいている。

「まあ、自業自得だな」

デルゲンの言葉に、助けようという気持ちは一切無かった。まあ、彼の言うとおりっちゃあ言うとおりなのだが。

「アハハハハ！」

アラファドさんの隣で、シェリアは笑い転げていた。笑い方まで、男の子っぽいなあ……………。

レンドをぼこぼこにしていたリサは、あまりにもシェリアが笑うので、恥ずかしくなってしまうたようので、

「……………オホン、レンド！　今回はこれで許してやるけど、次言ったら、承知しないからな!!」

と、彼を離してやった。どことなく、顔が赤いようにも見える。

「ファイ……………」

ビンタされまくり、顔が腫れたレンドは変な声での返事しかできなかった。触らぬ神に祟りなし、なのにな。

「えっと、話を戻すと……………自己紹介は終わったから……………」

「じゃあ、ここらのことを教えようかの」

アラファドさんは小さく微笑みながら、話してくれた。

「さっきもゆうたが、ここはヴァルハラ。太古の昔から伝わる大樹を護り、細々と暮らす100人程度の町じゃ。この町の近くには、

文明の痕跡も残っており。その一部が、あなたたちがやって来た所じゃ」

「その文明は、ティルナノグという名前じゃなかったですか？」

そう訊ねると、アラファドさんは白いひげを触り始めた。

「ティルナノグ……うむ、そういう名前じゃったな」

こちらの大陸にも、その名は伝わっていたようだ。

「……この町には多くの伝承があつての。その全てがティルナノグに関係することじゃ」

この町も、ティルナノグ期の古代都市の跡地に建造されたのだという。

「伝承では、ティルナノグが滅ぼされたと同時に古代都市に住んでおつた人々は、自らの都市を破壊し、南へ渡つたと云う」

「それが伝説だと思つてたから、僕たちは驚いたつてことなんだ」

シエリアはアラファドさんの隣に座り直し、そう言った。

「……なぜ、あなたたちはこの大陸に住んでいるんですか？」

リサは正座をして、訊ねた。

「そうじゃな……遙か先祖の時まで遡らなければならんのだが…

…」

アラファドさんは腕を組み、天井を見上げて語り始めた。

「先祖は戒めを守り、大樹を護るために、ここに残つたと云われておる」

「……戒めというのは？」

僕がそう言うと、シエリアは少しだけ唸り、説明する。

「戒めは、僕たちの先祖が犯した大罪を償う、というものなんだ」

「ワシらの先祖は、かつて天空帝国の特権階級の者たち……天空人と云われた者たちなのじゃ」

少しの間だけ、言葉を失った。

天空人……その卓越した叡智を利用し、繁栄を極めた。そんな彼らの大罪とは、地上人に対し圧政を敷いたことなのだろうか。

「最後の天帝とその弟により……ティルナノグが滅ぼされた後、天空人は地上に連れて行かれ、この大陸に残されたのじゃ。あらゆる都市は滅ぼされ、それまで天空人が使っておった機械も、破壊されていた」

さらに、南はアイオンの呪いにより、猛吹雪が止まぬ大地と化した。遙か北にある大陸への道にも巨大な大地の亀裂があり、行けないようにされていったのだという。

「もちろん、各地へ行けるようになっておった転送装置もまた、封印の扉が施されて使用不可能にされたのじゃ。まあ、ここのは長い年月のためか、扉が開いておったが」

ワシらには使えなかつたが と付け加えた。

あの猛吹雪や紋章の扉の封印は、南側の人間が行けないようにするため。そして、天空人の生き残りを、グラン大陸に封じ込めるためだつたのだ。

「子孫である我らは 先祖の大罪を忘れず、無為に命を奪わず、無意味に争わず、ここに永住すること を義務付けられておる。とはいえ、こんな美しい場所で生活してゆけるのなら、悪いもんじやないがの」

ホツホツと、ひげを動かしながらアラフアドさんは笑つた。戒めを守つて生きてゆくことが、そんなに苦じやないように感じる。戒めというよりも、もっと別の意味合いを持つような気がする。

「大きなしがらみか何かに縛られてるわけじゃないからね。僕も天空人の末裔として償いの意識はあるけれど、そこまで重いものとは思つてないんだ」

シエリアも、幸せそうな笑顔をしていた。……僕だけだろうか。ある疑問を感じたのは。

天空人の末裔と、その他の民族の末裔 北の人々と南の人々。

結局、解放された南の人々は、同じように争い続けていたのに。

「ワシらの話はお終いじゃ。次は、あんたたちの話を聞こうかの」  
アラファドさんはひげをさすっていた。

僕たちは、僕たちがここへ来た理由その全てを、包み隠さずに伝えた。アラファドさんは小さくうなずきながら、話を聞いていた。シエリアはというと、よくわかっていないのか、口を半開きにさせていた。

「ふむう……なるほど、なるほど。この世界に、そのような危機が迫っていようとはのお……しかも目の前に、ティルナノグ皇室の血を受け継ぐ者たちがいようとは」

小さな目で、アラファドさんは僕とリサ、アンナ、そして空を見ていた。

「古の大戦の最中、ティルナノグ皇室はユリウスによって惨殺され、各地の王侯貴族に封じられた分家の者たちも、そのほとんどが同じように殺されたと云われたが……どうやら、一部の者たちは伝承どおりからくも生き残り、今に至っていたのか。やはり、伝承は間違っておらんかったんじゃない」

そして、アラファドさんは紅茶を口に持って行った。

「アイオーンの血族である空のヴェルエス家はともかく、私の一族やアンナ、空ちゃんは一体どういうことなんだろう……」

リサがつと、漏らした。彼女たちもティルナノグ皇室の末裔とはいえ、僕のようにはつきりとしたものではないのだ。

「それもまた、アイオンと同じ一族なのじゃろうて」

「……どういふことですか？」

リサは問い返した。

「アイオンは全てを終わらせた後、二人の人間に あるものを授けたと云われておる。その二人は天帝の血を受け継いでいると云われており、それらが伝承にある『聖杯』と『聖書』じゃよ」「

「聖杯……ってことは、それを授けられたのがリサの先祖……なのか？」

「たぶん、そうなるんでしょうね」

彼女は小さくうなずいた。聖杯グラールは、ラグナロク一族の長である、彼女の『グランディア家』が保持していたらしいのだ。

「ということは……リサの先祖もヴェルエス家？　だが、全員殺されたんだろ？」

「いや、正確には全員じゃないのじゃよ」

レンドが言うと、アラファドさんは首を振った。

「理由は不明じゃが……ユリウスは数人の皇族を生かしたと云われておる。そのうちの一人が、弟のアイオンなのじゃ」

弟は生かした、か……。同族に対する情ってやつだろうか。けど、親族を憎んでいたユリウスは、どうして生かしたんだろかな……。

その時、僕の脳裏に何かが浮かぶ。

兄様！　お願い、もうやめてえ　！！

でも……シリウス兄様、それでは結局

わかりました。私は、これと一緒に地上へ

ええ、それはユリウスの元素。それならば、このシステムを

レナ、君が遺した最後の希望は……僕が、必ず

このプログラムは、あらゆる「審判」<sup>ジャッジ</sup>を下すための  
ああ、そうさ。これは、永遠に続く終わりのない旅路

一瞬、何かがよぎった。それは、不確かなものだった。  
言葉……言葉？

視界がぼやけたほんの一瞬、気を失ってしまったような気がする。  
「ところで、聖書つてのは？　今までインドラの奴らでさえ、そんなものことは言わなかったと思うが……」

デルゲンは首をかしげて言っていた。  
「さすがにそこまでのことはわからん。そちらの地と同じく、こちらの地にも限られた情報しか遺されておらぬからな……」

自然にか、意図的にそうさせたのか……。何はともあれ、一般人は知るべきことではないのは確かだ。その中で、野心を持つ者が現れてしまう。……ステファンのように。

「……ただ、聖書は　道標　であると云われたらしいがの  
「道標？」

そう問うと、アラファドさんは小さくうなずく。

「……はからずも生まれ落ちし幼子たち……」  
すると、突然シエリアが歌を歌うような感じで、言葉を綴り始めた。

「そなたたちに捧げよう、蒼き神秘の秘宝を……。  
私たちは遠く昔から希う……言葉よりも想いへ、想いよりも言霊へ。  
そなたたちは何を見つめるだろうか。黒き蹄に踏みじられた夢の跡だろうか。

さあ、共に奏でよう。私たちの想いを知る子供たちに贈る、夢への道を……。

共に歌おう。私たちの愛を知る子供たちに、暁の旋律が眠りし在り

処を……」

美しい歌声で奏でられたそれは、この場にいるみんなが言葉を失って見つめていた。そして……再び、僕の中に言葉たちが浮かび上がって来た。

### 星の遺産

それこそが、遙か古に堕ちた神々が求めていたものだ

### カイン

「……とまあ、こんな歌がこの地には伝わってるんだけど、これが聖書 に関連してることなんじゃないかって云われてるんだ」

シエリアは少し照れながら言った。それを見て、ようやく僕は自分の世界に戻ってきたような感覚に襲われた。

「へえ……シエリアって、歌上手なんだね」

リサは思わず聴き入っていたのか、瞬きをするのを忘れてしまっている。

「へへ、ありがと。でも、この村に住む人なら誰でも歌えるものなんだ。僕が特別ってわけじゃないよ」

謙遜するその姿は、どこか少女らしかった。

「その歌が聖書に関連してるってのか？ ……なんか、いまいち掴めねえんだけど……」

デルゲンは頭をかきながら言う。

「まあたしかに……な」

デルゲンは苦笑しながらうなずいた。

「聖書にまつわる古代の歌……ということが口伝として残されているからの。むしろ詳しいことはわからん」

と、アラフアドさんは言うと、天井を仰いでため息を漏らした。

「……それにしても、いつも浮かんでいた巨大な雲の塊の中に、浮遊大陸があったとは……70年も生きてきて、まったく気付かんかったわい」

どうやら、アトモスフィアはこちら側の人たちからは、巨大な積乱雲と思われていたらしい。常に同じ場所にある巨大な雲っていうのは怪しい限りなのだが、生まれてずっとそれが「当たり前」だと疑問なんて浮かばないのが現実だ。

「言い伝えて、『お空の雲の中に、夢がいっぱい詰まってる』っていう話もあつたんだよね」

そう言つて、シエリアは微笑んだ。夢がいっぱい……ある意味、夢だったのかもしれない……。

「さて、樹……と言つたかの、封印を解こうとしておるのは」

「え、ええ。見かけませんでしたか？」

奴らがこの町に来たのならば、住民が見かけたはずなんだ。こちらの人々とは、服装が違うだけじゃなく、見慣れていないから、きつと印象に残っているはず。

「そのような話は聞いておらんがの。何せ他の町との交流も少なく、外から人が来るといふことが無いからのお」

「そうですか……」

ということは、もう一つの都市に行ったのだろうか。たしか、砂漠に面した都市だったっけ。しかも、猛獣がいるとか。

「ハイハイ！ 僕、見かけない人たちを見かけたよ！」

シエリアが勢いよく拳手した。見かけない人を見かけたって……なんか変だなあ。

「どこで見たの？」

空が訊ねるとシエリアは天井を見上げ、うーんと唸った。

「えっとね、1週間くらい前だったかなあ。夜、いつものように大樹様の上に登って、空を眺めていたら」

「シエリア！ お前、大樹様の上には絶対に登るなど、あれほど言っただけではないか！」

アラファドさんは、シエリアの頭をはたいた。

「ご、ごめんなさい！ あまりにも月がきれいだったから……」

「……まったく、罪深い孫じゃ……」

そう呟く顔には、どこか幸せの面影が見えた。なんだかんだ言っ  
て、孫のことはかわいいんだろ。世話の焼く子供ほど、てか。

「そ、そしたら、話し声が聞こえてさ。下を覗いてみたら、見たこ  
とも無い格好をした人たちがいたんだ」

「それって、どんな人だった？」

僕はすぐに質問した。

「うーんと……そっくりな筋肉もりもりの2人組みの男がいたのは  
わかったんだけど、他の人の顔は確認できなかった。男か女もわか  
らない。けど、たぶん4人くらいだったと思うよ」

筋肉もりもりの2人組みって、どう考えてもシュヴァルツとバル  
バロツサだよな……あの体格は目立ってしょうがない。

「ビンゴ、だね」

リサは指をパチンと鳴らし、笑顔で僕に顔を向けた。

「シュヴァルたちがいるってことは、樹もいる。たぶん、ミランダ  
も」

「幹部たち、全員ここに来てたってことか。……ソラの予測は当た  
ってたな」

「ほうはな」

「……レンド、何言ってるのかわからないぞ？」

デルゲンは苦笑いをしていた。晴れ上がったあの顔じゃあ、レン  
ドは話せない。

「でも、樹さんたちは何を話してたんでしょうか？」  
アンナが言うと、シェリアは再び唸る。

「うーんと、よく聞き取れなかったけど、『せいぎよく』とか、『ここからきた』とか何とか言ってたと思うよ？」

「ここから来た？　ここから北？」

「そう言ってるリサの方に向くと、

「『北』でしょーが」

そう言って、彼女に頭を叩かれてしまった。

「ここから北……アラファドさん、この町の北に遺跡か何かありますか？」

奴らはアトモスフィアへ通じる遺跡を探していた。

「ここから、遙か北に『光の森』という所がある。その奥に、各地の町の人々から『ゲルミナス遺跡』と呼ばれる、ティルナノグ期の遺跡が佇んでいる。何度も調査したんじやが、紋章の扉によって封印されておった」

「紋章の扉……間違いない、そこだ！」

樹たちが捜し求めていた天空への遺跡は、そこだ。アヴァロンを襲撃してまで手に入れた古書には、そこが記されていたはずだ。

「よし、これで行くべき場所が決まったな」

「……目指すは、ゲルミナス遺跡ね。ところで、どのくらいの距離なんですか？」

「そうじゃな……20日余りで行ける距離じゃったと思うぞ」

「20日か。全然、余裕だね」

リサはニコツと笑った。空に残された時間は約3ヶ月。もし遠すぎたら、気が気じゃなかったよ。

「まあ、すぐに出発せずつとも時間があるのなら、今日はこの町に泊まりなさい」

「けど……」

「時には、羽を休める時も必要じゃろって」

「……」

僕は空を見た。こいつの体のことも心配だし……。

「私は大丈夫ですよ。無理しないで、今日くらいはゆっくりしてもいいと思います」

そう言っつて微笑む空。

「ソラ、焦る気持ちもわからなくもない。だが、いざっつていう時のことも考えて、今日はここで休もう。この先、何があるかわからないだし」

デルゲンはそう言いながら、立ち上がった。

「……わかった。じゃあ、今日はお世話になるうか」

デルゲンの言うことは尤もだし、素直にご厚意に甘えさせてもらおう。

「やった！　じゃあ、僕が町を案内してあげるよ！」

シエリアは勢いよく立ちあがり、空の手を引っ張った。いつの間にか、彼女はシエリアに慕われたようだ。

「珍しい町だから、楽しみですね」

アンナは笑顔でそう言っつて、彼女たちの後を付いて行った。僕も行くこうとした時、誰かが僕の服を引っ張った。

「リサ？」

さっきまでの表情とは違い、どこか神妙な面持ちのリサだった。

「ちょっと話があるんだけど……いい？」

「……へ？」

というこつとで、シエリアの案内でこの町を見回ることになったの

だが、僕とリサはあの遺跡にある転送装置の広間に行った。

「どうしたんだよ？」

「……………」

リサは僕に背を向けたままだ。はつきり言って、まったく意味がわからない。彼女の雰囲気が違うところから、大事な話のような気がするのには確かだが。

「このまま…………間に合うと思う？」

リサは振り向き、言った。やはり、神妙な顔だ。「間に合うと思う？」というのは、今の状況から考えるに…………

「空のことか？」

そう言つと、彼女はうなずく。

「…………間に合わないかもしれないと、お前は思ってるのか？」

「わからない。そういった期限とかの問題じゃなくて……………」

言葉を詰まらせる彼女の様子に、僕はハツとした。

「まさか…………空の体に、何か起こってるのか!？」

僕は彼女に詰め寄つた。言いようのない不安が、脳裏をよぎる。

「はつきりとしたことは言えない。けど、空ちゃんに与えた増魔剤の影響が出てる。あの子自身は気付いてないと思うけど」

リサは顔を振り、続ける。

「…………いくら資料があつたからって、私じゃあうまく作れなかつたみたい……………」

彼女は声を弱くし、俯いた。

「あの子の中で、本当に少しずつだけ…………乖離が始まつてる」

「!?!? ど、どういうことだよ!？」

「空ちゃんはやっぱり、ガイアの人間なの。本来なら持つはずの無いエレメンタルを保持してること自体おかしかったし…………体自体が、エレメンタルに順応できるようにはできてない」

あの子は、謎が多すぎる

そう言つて、リサは顔を上げた。そこには、涙が浮かんでいた。

「ごめん…………私が、もっとしっかりしてれば…………!」

悔しそうに唇を噛み、呟くかのように言った。

「お、おいリサ」

「私のせいだ！ 私が……」

顔を振るリサを見て、僕は困惑した。彼女は、ここまで情緒不安定になることがあったか？ いくら責任感があるとは言っても、どこかリサっぽくない。

「な、泣くなつて。お前のせいじゃないんだし。……な？」

僕がそう言うと、リサは僕から顔を背けた。

「……もう一つ、言うておくことがあるの」  
鼻をすすり、彼女は泣くのを止めた。

「その前に、怒らないって約束して」

「は？」

あまりのことに、僕は首をかしげた。リサが、リサらしからぬことを言うからだ。

「お、怒らないって約束してくれって……ええ？」

「約束して」

そう詰め寄る彼女から、僕は思わず体を引いてしまった。

「え……つと、なんで？」

「とりあえず、そう言ってしまった。」

「……あんたを、すごく怒らせてしまいそうだから」

僕に視線を合わせず、彼女は下を見ている。……怒らせてしまいそうってことは、よっぽどのことなのだろうか。

「わ、わかったよ」

わかったとは言っても、彼女は依然、顔を俯かせたままだった。ようやく顔を上げたかと思えば、視線を合わそうとしないし。

「……実は、空ちゃんは救えるの」

「宝玉を取り戻せば、だろ？」

そう言うと、リサは小さく顔を振った。

「違うよ。それ以外の方法で、確実に助けられる方法があるの。時間縛られずに」

「ちょ、ちょっと待て。それって、一体どういうことだ？」

「増魔剤が切れる前に、あることをすれば、空ちゃんは救える。元素不足による乖離現象を防げる」

「……だから、それはどういう方法なんだって訊いてるんだろ？」

「そ、それは……」

リサは再び顔を俯かせた。

「…それに、どうしてそういう方法があるってことを黙ってたんだ？ お前、最初からその方法があることに気が付いていたんじゃないのか？」

「……………」

「言えよ！」

つい、僕は声を荒げてしまった。まずい　　と思つた時には、遅かった。リサは涙ぐんだ目で、僕を睨んだ。

「怒らないでつて言つたじゃない！」

女の涙というのは強敵だ。だからと言って、退くわけにはいかない。僕はゆっくりと大きく息を吸い込み、言い放った。

「怒るだろ、普通！ それってスゲー大事なことじゃないか！ なんで今まで黙つとくんだよ！？」

「だから嫌だつたんだよ！ あんたはすぐ怒るから！」

リサは負けじと言う。

「お前な……大切な話を隠されていて、イラつくのはお前もわかつてるはずだろ！？ ヴァルバの時と同じだ！」

ヴァルバがアルツヴァックで装甲船の話を持ちかけた時、リサはつてかかった。どうして、今更そんな話をするのか。どうして、黙

っていたのかと。

「そんな大切な話を話さないってのは、僕たちを信用していないってことだろ？」

「……違う」

リサは小さな声で言った。それを否定するように、僕は顔を左右に振った。

「違う。プライベートなことを隠すのはいいよ。自分に関わることだ。だけど、今は世界が危険だとか、命が奪われそうだとか、そういう重大な問題を抱えている時なんだぞ？ それに関わることは包み隠さず話してくれないと、無駄に労力は費やすし、時間も費やしてしまう。結局、みんなの足を引っ張ることになるんだ！」

「違うって言うてるじゃない！」

「違う！ 黙ってたことが何よりの証拠だろうが！」

彼女は耳を押さえ、その場に崩れるように座りこんだ。

「お願い！ 声を荒げないで！」

混乱する。いつものリサではない。いつもの彼女ならば、食って掛かるはずなのに。頭の中がグルグル回る。

「お、おい……リサ、どうしたって言うんだよ。お前、変だぞ？」

「怒らなでって……言った……じゃない……！」

「……リサ？」

リサは小さく泣いていた。涙が溢れるせいで、うまく言葉が出てこないようだった。

リサらしくない。まるで、リサじゃないみたいだ。……いや、リサの奥底にあった何か が表出ているようにも見えた。

まるで……どこかのか弱い少女だった。

「……泣くなよ。もう声を荒げたりしないから」

怒っているのを止めれそうも無い。だが、声を荒げたことが彼女を泣かせたというのなら、抑えるしかない。

「……」

「なあ、リサ」

顔を手で隠し、小さく泣きながら、彼女は何も言おうとしない。僕はいい加減、嫌になってきて大きく舌打ちをした。

「……もういいよ。そうやって、一人で泣いてるよ……ったく」わけもわからないまま泣かれ、ちゃんとしたことを説明してくれないので、僕はリサを放っておこうとした。これ以上付き合っても、埒が明かないからだ。

「……詳細は話せないんだ」

ギリギリ耳に入る声が、後ろから聞こえた。出て行こうとした僕は、彼女の方に向き直った。涙を手で拭い、彼女は僕を見据えている。

「空を助ける方法……ってことか？」

リサは小さくうなずいた。

「なんで？」

「……」

息を整え、リサは続けた。

「……まだ、決心が付いていないから……」

小さくも、はっきりとした声で彼女は言った。エメラルドグリーン色の瞳は、少しだけ涙を残しながらも僕を突き刺している。

「決心って、お前の？」

「……うん」

「よくわからないな……それはお前が、空を助けることに関わってるってことなのか？」

「……ごめん。それ以上は……」

「結局、それがよ……」

僕はため息をつき、穴のあいた天井を見上げた。まあ、あらかじめ予想していたが。

「ごめん……でも、これだけは信じて」

再び、僕は彼女を見つめた。

「私は空も、みんなも信用してる。何よりも信頼してる。それだけは……本当だから」

偽りの無い瞳。穢れを知らない双眸。そこには、今まで培ってきた大切な想いが込められていた。

「……黙ってて、ごめん」

リサは大きく頭を下げた。後ろに結ってある彼女の長い金色の髪が、小さく音を立てて前に垂れかかる。

すすり泣く音が聞こえる。我慢しているが、どうしても抑えられないようだった。

いつもの彼女と違う。それはわかるのだが、この感じ……この雰囲気、誰かに似ている。

今まで、何度も感じていた彼女への「懐かしい」というかんかく。

なんて言えばいいのかわからないけど、誰かに似ているのは確かだ。

「……空ちゃんを救いたい。それは本心だよ」

「んなの、わかってるよ」

言わなくてもわかってる。お前は、そういう奴だもんよ。

「……空ちゃんがあんな風になったのは、私のせいでもあるんだから……」

「??? 空がさらわれる時のことを言ってるのか？ それだったら、違うよ」

「えっ……?」

リサは顔を上げた。ほほを伝った涙の痕跡が、はっきりとわかる。

「事は起こるべくして起こるもんなんだ。どうしようもできないことだってあるってことだ。……けど、それに抗おうとしているのが

僕たちだ。空は死んだわけじゃない。記憶が戻らないわけでもない。

まだ、あいつは生きている。昔のように、笑顔を向けてくれる。希望が無いわけじゃないんだ。そうだろ？」

「……だけど、私は……あんたまで巻き込んだしさ……」

罪悪感のせいか、彼女は再び視線をそらした。

「おいおい、それも違うって」

僕は思わず、苦笑してしまった。

「お前に言われたから来たわけじゃない。自分で決めて、この世界へ来たんだ」

きっかけと決意する勇気を与えてくれたのは、他ならぬリサだけだな。

「それに、お前には感謝してる。お前が現れなかったら……僕は、きつとガイアに残ってただろうし」

そう考えると、ゾツとした。何も知らないまま、あそこにいると思つと。

「空……」

再び、涙を流し始めた。なんでここまで泣くのか、少々戸惑うが「ホラ、泣くなつて」

僕は指先で彼女のほほに触れた。

「ダ、ダメ」

その瞬間、リサは逃げるように僕から離れた。

「……空ちゃんに、悪い……から……」

「？ ああ、そういうことか」

僕としては普通のことをしようと思っただけだったのだが、相手の捉えようによっては、そういう見方をされる場合もある。空もそうだ。下手をすれば、睨まれてしまいそうだな。

僕は小さく微笑んだ。

「とにかく、負い目を感じることは無い。だから、泣くな」

「……」

彼女は何も言わず、顔を逸らしたまま涙を拭っていた。

「僕は戻るよ。どうする？」

「……」

「一人にしておこうか？」

そう言うと、リサは小さくうなずいた。

「……わかった。夜までには戻って来いよ？ みんなが心配するからな」

同じように、彼女はうなずいた。そして、僕はアラファドさんの家に向かった。

通路を歩きながら、僕は思った。リサがあんなふうに泣くって、珍しいこともあるもんだな。というより、人前であんなに泣くとは思わなかった。ヴァルバが死んだ時だって、泣いてはいたがあそこまで泣くことは無かった。

女性の涙は最大の武器、とはよく言ったものだ。しかも、かわいい人や美人な人に泣けられたら、心も揺らぐ。……哀しい、悲しい男の性……といったところか。空や海もそうなんだよなあ。あれに対してはどうにもできないので、困ったもんだ。

それにしても……彼女をあそこまで泣かせたのが僕のせいだとしたら、疑問が残る。あれほど泣く理由にはならないはず。負い目を感じていたということが、彼女にとっては、よほど大きなことだったのだろうか。僕がここにいるのも、空があんなふうになったのも、自分のせいではないのかと。

だけど、馬鹿だな。もしそうだとしたら、話すことによつて、僕がお前を嫌ったりするのかと思つたのかな。なわけない。僕はリサも、みんなも信じている。ヴァルバの時もそうだった。何があつても、今までの本人のことを信じてやれば、簡単にわかることなのにさ。

……あんなに肩を震わせて泣いているリサ……リサとは思えなかった。だから、誰かに似ていると思つたんだ。

誰か 誰かに……。

僕は歩きながら通路の床を見つめていた。

金色の髪……エメラルドグリーンの瞳。  
懐かしい、その面影……

空色の 瞳？

そうか あいつ、空や海に似ていたんだ。

そうだ、そうなんだ。泣いているあの姿が、なぜか彼女たちに似ていた。いや、そっくりだった。あの雰囲気、どこかで感じたと思っていたが、空と海の雰囲気とそっくりなんだ。  
でも、どういうことだ？

リサと彼女たちに接点はないはず。あるとしたら、巫女だということだけだ。だが、そうだとすれば、アンナも空たちに似ているということになる。アンナもよく泣くが、雰囲気は違う。言葉でうまく言い表せないけど……。

外へ出た時、木漏れ日が僕の目に差し掛かった。緑の葉っぱや地面に囲まれたこの町は、どこよりも美しい気がする。緑の中にいると、本当に落ち着く。世界が隔絶されているかのように思える。

「……けど、違う」

今まで感じていた「懐かしさ」とは違うのだ。あの懐かしさは、

空や海に似ていることに関係はしていない。

じゃあ、なぜ？

僕はなぜ、リサに対して懐かしさ 親近感を覚えるのだろうか。

謎ばかり、膨らむだけだな……。

「……ごめんね、空。あなたには……あなたたちには、まだ話してないことがあるんだ……」

天井を見上げると、あちらこちらに空いた穴から、陽光が煌きながら舞い降りてきている。そうしてできた光の柱にほこりが当たり、それらが泳いでいるように見えた。

「私は……やっぱり、そうするしかないのかな……」

もう、とうの昔に答えは出ているはずだった。出ているはずだったのに、認めるのが怖かった。その現実を直視するのが怖かった。「うっん、そうするしかないんじゃない。するか、しないかだ」

自分に言い聞かせ、己を奮い立たせる。

「……もしも……その時を迎えたのなら……私は……」  
春の暖かさを感じながら、リサは一人で呟いていた。

私は、何のために生きてきたんだろう。

ここに立っていることだろうか？

それとも、空たちを「約束の刻」に相見えさせるため？

その時に、「護る」ため？

……わかんない。

でも、一つだけわかってることがある。

たとえあなたに怒られるとしても、決めなきゃならないんだよね。

それが、私の贖罪なのだから。

### 63章：出発 天の道を求めて

大樹の町ヴァルハラ。

かつて、地上都市ヴァルハーとして機能していたが、その面影は無い。ティルナノグ期の都市の残骸が、町外れの林の中に並んでいた。ケリユーで見たような半壊状態の住宅たちだった。ここは緑が多いためか、樹木が半壊した壁などに巻き付いたりして、ほぼ森林状態になっている。長い、長い月日が経ったことを実感させる。

打って変わってこのヴァルハラ、約150人の住民が暮らすのかな町である。どの家も自然を利用した造りで、その多くがアラフアドさんの家のように樹の上に作られている。10メートルくらい高さの所に、どうやって家造ったのか疑問なのだが。

この町が『大樹の町』と呼ばれる所以、それは町の奥にある大きな樹に由来する。樹齢数千年といわれ、成人男性20人が手を広げて、樹を抱くとなんとか手を繋げることができるとののだ。空を覆わんばかり、というより覆っている大樹の多くの葉っぱや枝は、太陽の光を通さないようにしているみたいだった。

この大樹は『シエルフィーノ』と言い、古代ティルナノグ語で『大樹』という意味を持つのだという。ティルナノグ時代から崇められ、農作物の神様と言われているそうだ。大きな何かには、巨大な力が宿っているように感じる。大樹然り、巨石然り。

アラフアドさんの孫シエリアは、この大樹にちなんで名付けられたとか。「シエリア」という名には、「緑」や「風」という意味合いも含んでいるのだという。小鳥などの動物に好かれるなど、どこか野生児のようにも見えるが、言われてみれば「自然」の子供っていう感じはする。

10歳になるシエリアには両親がいない。彼女の両親は、シエリアが7歳か8歳頃に突然亡くなってしまったのだという。

親がないということ、シエリアは昔、他の子供たちからかわれたらしい。よくある話……特に男の子に言われたそうで、自分の弱い部分　女性らしさを打ち消すために、「僕口調」になってしまったのかもしれない。

親がないからといって、シエリアの顔に寂しさはない。この町の人を見てみても、表情はみな穏やかだった。町のそのものの気風というものがあるのだ。

ここの人たちは、農業や建築業、狩などをして生活をしているらしい。町にとって重要な事項は、大人全員を集め、会議をしたりするのだという。

ここには、国家というものが存在しない。もちろん、元首も存在しない。長老は投票で決めるというし。つまり、小さな共和政なのだ。みんながみんな、言いたいことを言って、いい町にしようと思いがける。王さまや貴族なんかいなくて、人々はこんなにも平和で、穏やかに生きていくことができる。そう考えると、上に立つ者の存在意義とは、一体何なんだろうか。

……そう言った話は置いておいて。

アラファドさんの家に泊まらせていただいた後、僕たちは北へ出発することにした。

「この草原をずっと北東へ。夜になったら、北の星を見ながら進むといい。途中で、カラハザンという町に寄って行きなさい。あそこは、果物が豊富じゃからな」

「わかりました。いろいろと、ありがとうございました」  
僕たちは頭を下げた。

「じゃが、誰か一人でもこの町の者をお供にしておこうと思ったんじゃが……折り返く、手ごろな奴がおらんかったわ」

申し訳なさそうに、アラファドさんはひげをいじっている。

「いえ、気になさらないで下さい。たぶん大丈夫ですから」

「たぶんって……おいおい」

レンドは苦笑いをしていた。昨日リサによって腫れさせられた両ほほは、完璧に回復していた。1日で回復しなかったら、重傷ものですけど。

「ハイハイ！」

シエリアが跳ねながら挙手している。

「僕が案内してあげるよ！」

「な、なんじゃと!?!?」

アラファドさんは小さな目を見開き、シエリアに詰めかかった。

「何をゆうておる！ お前はゲルミナス遺跡に行ったことがないじやろうが！」

「ううん、あるよ」

プルプルと、シエリアは顔を振る。

「僕、行ったことあるよ」

ニッコリ微笑み、少女はアラファドさんの心に襲いかかる。孫にああいう笑顔見せられちゃあ、負けは確定だな と、僕は心の中でうなずいていた。

「だからさ、僕が案内するよ。ね？ いいでしょ？」

「じゃ、じゃが、危険じゃし……」

「まあまあ、じいさん。俺たちが付いてんだ。大丈夫ツスよ」

陽気に、レンドはアラファドさんの肩を叩きながら言った。なんでも自信がおりなのか問いたいところだが、まあ気にしまいたいよ

「おじいちゃん、いいでしょ？ たまには、僕だって外へ行ってみたいよ」

「お前はいつも外に行っておろうが」

皮肉を言うが、シエリアの笑顔は途切れぬ。

「ううん、行ってないよ。樹の上には登るけど」

それがダメなのでは……と思ったが、アラファドさんは呆れてしまっているのか、ため息を漏らしている。

「しょうがないのお。まあ、ソラ君たちがおるから、大丈夫じゃろうて」

「ホント!? やった! ありがとーおじいちゃん!」

溢れんばかりの笑顔をさらけ出すシエリア。さすがのアラファドさんも、これには勝てない。

というわけで、シエリアが加わることになった。アトモスフィアに行かないならば、安全は保障できるけど。

ニコニコと微笑みながら、シエリアは「行って来ま〜す!」と元気よく言った。どう考えても遠足程度にしか考えていな、こりゃ。

町の外、つまり森を出ると、緑の草原が一面に広がっていた。草原の地平線とは、まさにこのことだ。遙か先まで、緑の草原にしか見えない。ずっと先に、山脈があり、その上にアトモスフィアが浮かんでいる。転送装置を使って、かなり近づいてきたと思ったが…

…まだまだ、あそこの真下までは遠いようだ。

「うーん! いい天気!」

シエリアは元気よく背を伸ばした。

「……いい風だな。もう4月下旬だから、気温もちょうどいいもん

だ」

この大陸の気候は、本来穏やかなようで、四季がはっきりしているとか。どこか、日本の春のようにも感じるこの陽気は、世界が危機に迫っていることを忘れさせてしまいそうだ。

「そうですね。ロンバルディアよりも、温かく感じます」

春風になびかれながら、アンナは言った。

「『呪われた大陸』、『永久凍土の大陸』。そんなの、全部ウソだったな。ロンバルディアやアルカディアよりも、自然がきれいな大陸じゃないか」

デルゲンも気持ちよさそうに体を大きく伸ばしている。

「2大陸はあそこの人間が争ったりしていたからな。この大陸……というより、この辺りではティルナノグが滅んで一度も争いが無かったんだろつよ。2000年も経てば、大地もヒトも変わるってもんだ」

レンドは上空を見上げ、どこか呟くかのように言った。

「レンドもたまにはわかってること言うじゃない」

「……失礼な女だ」

レンドはリサに対し、苦笑を向けた。

リサ……ちよつと、とつつきにくいのは事実。昨日のことがあるからだ。こうやってレンドを殴っている彼女を見てみると、昨日のことが嘘のように思えてくる。

「ていうか、道らしき道が見えないな。シエリア、こんなんでゲルミナス遺跡の道がわかるのか？」

「うん、大丈夫だよ。ホラ、あの山が見える？」

シエリアは遙か彼方にある山脈を指差した。

「あの一番高い山、わかる？」

ヴァルハラの森から北へ一直線。他の山に比べ、一番高い山が見える。遠く霞み、空の色に化けている。

「あの山のふもとにカラハザンがあるんだ。んで、あの山を越えれば、光の森に行けるんだ」

「あの山が目印ってことか？」

「うん」

目標がわかったとはいえ、歩いていくのでめんどくさい。今まで、ほとんどが馬車だったからな。

歩いて行くとなると遠いし、上空には不気味な浮遊大陸（ほとんど機械っぽいけど）があるし……。風景は最高なのに、気分がブルーになってしまふ。こんなにも平和そうに見えるのに、樹たちによって滅ぼされそうになっている。

「滅びる」ということを何度も聞いてきたが、それ自体を想像したことが無かった。

この風景が、この草原が、この空が、この大地が、あらゆるもの全てが、灰燼に帰す。  
無に還る。

恐ろしい言葉だ。考えただけで、体中の血液の温度が下がる。だけれど、それを僕の弟の樹が行おうとしている。

あいつらは、滅ぼした後どうするつもりなのだろうか。自らと共に、滅びるつもりなのだろうか。……僕にはわからない。あいつがそこまでしようとするのが。

当然と言えば当然。僕はあいつじゃないし、あいつが経験してきたことを知らない。厳密に言えば、知らないのは空白の3、4年間なんだ。その空白の間に、樹はあらゆる真実を知って、世界を滅ぼそうと決めた。

世界を滅ぼそうとするほどの真実？

その真実によって？

どれだけの憎悪を駆り立てる真実だというんだ？

人が人を殺そうとするのは、簡単なことではないことは、僕自身が知っていることだ。もちろん、誰にしても。

人だけではなく、地上に存在する全てのものを消し去ろうとするというのは、どれほど世界を憎めば浮かんでくるものなのだろうか。どれほど絶望すれば、あの考えが浮かんでくるのだろうか。

今更ながら、考えても考えてもわからない。

答えを導き出すことができない。

草原を歩いている最中、僕はそうやって一人で考え続けた。静かな草原。柔らかな緑の風。和やかな空気。平和な雰囲気。

これが現実なのに、どうして壊そうとするのだろうか。

これほど美しいものを、どうして破壊しようとするのだろうか。

「どうした？」

デルゲンが僕の肩に手を置いた。

「……え？」

考えていたことが、別の空間へ飛んで行ってしまった。

「お前だけに、上の空だったな」

「……つまんねえギャグ」

そう言うレンドの歩く気力を奪うほどだった。

「そういうつもりで言ったわけじゃないんだが……ともかく、昨日からちよつと様子が変だぞ？」

「変なのは今に始まったことじゃないだろ？」

レンドが笑いながら言った。どーという意味やねん。

「ん、たしかに」

一人でうなずくデルゲン。

「納得すんなよ……」

「ハハ、すまない。んで？ どうしたんだ？」

微笑を浮かべたまま、彼は訊ねてきた。さすがに、リサのことは言えない。なぜかわからないが、あのことは言わない方がいいと判断している自分がいる。

「いや、なんでもないよ。ちよつとした考え事だったからさ」

デルゲンはほほをかき、少し困った様子でレンドに顔をやる。そ

こで彼に任せようとするところが、デルゲンの悪い点。

「なるほど、俺たちには言わねえつもりか」

レンド……こつという怪しい笑顔をする時は、決まって悪ふざけする時だ。嫌な予感がしつつも、僕は呆れた表情を彼に向ける。

「そういうことじゃないって」

「ならば、こつするまでだ！」

と言って、レンドは横から空を引っ張り出してきた。何もわかっていないのか、空は目をパチクリさせている。ていうか、おとなしく来るなよ……。

「さあ！ 空ちゃんに隠し事ができるのか！？」

レンドは彼女の後ろで、手を広げながら言った。

ああ、なるほどね……そういう手口ですか。だがしかし、そんなことで口を割るようなことはしません。

「一人で考えたいことってあるだろ？」

僕はため息を漏らし、言った。

「空ちゃんにも黙っておくようなことなのか？」

むう……それを言われては、個人的にまずい。

「……プライバシーの侵害」

「ぶらいばしー？ んなの知るか」

レンドは悪魔の微笑をしながら、空を押している。なぜか、彼女は固まってしまっているし。

「ちよっと、レンドさん！」

すると、アンナがレンドの腕を引っ張った。

「ソラさんは嫌だと言ってってるじゃないですか。無理に聞こうとしないで下さい！」

アンナの言葉に、ちよっと怖気付いたレンド。普段、怒らないアンナが怒っているの、驚いているのはシエリア以外のここにいる一同もだが。

「……わかったよ。てか、俺が悪いんかな？」

「お前が悪い」

うん、とうなずくデルゲン。

「お、お前な！」

ふざけ合う二人の姿を見ながら、僕は少し笑ってしまった。

あまりにも、平和すぎる。いや、これが普通なんだよ、きつと。

普通だと思えることが、普通ではなくなってしまうからこそ、僕は怖いんだ。こうしてみんなで一緒にいる時間が、消えてしまうことに対し、恐怖感を覚えている。

こうして人と触れ合うことこそが、一つの宝物。それを忘れてしまっているのが、樹たちなのだろうか？

あるいは、それを知っていて尚、世界を殺そうとしているのか？

……一瞬、僕は思った。

僕たちは、相容れないんじゃないかって。

「……これが」

ある遺跡の深部で、樹は何かを見上げていた。遺跡というより、近未来都市の中　と言った方が正しいかもしれない。

「シュヴァルツ、古書に書かれてあるのはこれで間違いないのか？」

「……ああ、そのようや」

黄色く変色した古書の文字列を眺めながら、シュヴァルツは言った。

「せやけど、起動するんかいな？」

バルバロッサはペタペタと、巨大な装置を触り始めた。真っ白な機械は動力を失っているのか、動く気配を感じない。無数に配置されたボタンの列には、古代ティルナノグ文字が刻まれている。

「……………」

樹は装置の周りを歩き始めた。細めた目で、装置の隅々を見つめる。

「動力が完全に切れている、か」

「どないすんねん？　これじゃあ、アトモスフィアに行けれへんで？」

バルバロッサは腕を組み、機械に触れるのを止めた。

「わかつてる。その動力を探すしかないだろ」

「……めんどくさいもんやで、ホンマ」

シュヴァルツは大きいため息をついた。

「この古書も、装置の使い方とか載せとけっちゅーねん」  
と、シュヴァルツは古書を指先で突つつく。

「古書に文句を言っても仕方ないだろ。どうせ、シリウスがこうなることをある程度予測して作ったものだろうからな」

いちいち回りくどいことをして……そこまでして、隠す必要性はあるのか？

そんなことを思いながら、樹は外に目をやった。このフロアにある窓から、近未来都市全体が見渡せる。ガイアに似てはいるが、それよりも発達した巨大都市を。

「ま、小僧どもがここに来るには余裕があるし、気長にやるか」

シュヴァルツは古書を腰のベルトに付けている小さなバッグに入れ、歩き始めた。

「……ところで、リオンからの連絡は？」

樹は辺りを見渡しながら言った。

「そろそろ、戦況報告をするはずなんだが……」

「未だに、送ってきていません」

「……………」

樹は小さくため息をついた。

「ウラノス……私は、あの人を見たことはありません」

ミランダは眉をしかめ、言った。そこには、「リオン」という人間に対する疑問を感じていたからかもしれない。

「それは、あいつが望んだことだ。あいつは秘密裏に行動をする。

それこそ、リオンとして生きていくことなのだろうからな」

「……まあ、あいつはある意味特別な奴や。気にすることでもない」

「……………」

ミランダは後ろに振り向いた。

……杞憂だといいのだけれど……。

1 週間が過ぎようとした頃、草原ばかりの風景の中に、小さな柵  
そこには、ちょっととした牧場なのか、何匹かの羊が放たれてい  
る　と一緒に、ポツンと小屋が佇んでいた。レンガ造りの小さな  
小屋。同じように小さな煙突から、白い煙が出ている。人が住んで  
いるようだ。

「シエリア、あれは？」

僕はそれを指差しながら訊ねた。

「んつと……ラヴィンおじさんの家だったかな」

「あそこで、泊まらせてくれないかな？」

「たぶん、大丈夫だと思うよ。ラヴィンおじさん、優しい人だから  
僕は上空を見上げた。すでに世界は少しだけ赤く焼けていて、あ  
と数時間で日が暮れるといったところだ。

「ちょうどいいや。今日は泊めさせてもらおうよ」

「んなこと言つて、テント暮らしが嫌になっただけじゃないのか？」

「うっ……」

さすがデルゲン。察しがいい。

「いいじゃん。私もちゃんとした屋根のあるところで寝たいし」

「リサ、子供じゃないんだから……」

デルゲンは呆れた感じで苦笑していた。

「俺も、いい加減飽きたぜ」

「……ま、かくいう俺も、家で寝るのが恋しくなってきたところだ」

「結局、みんな泊まりたいんですね」

アンナは小さく微笑んでいた。

「じゃ、決定だな。交渉は……シエリア、頼んだぞ」

「ええ？ 自分でやりなよ、ソラ」

「……初対面の人つてのは、苦手なんだよ」  
「そういうわけで、小屋に直行した。」

小屋の外で一人の男性が、切り株の上で空を眺めながら座っていた。ポパイみたいなものを口にくわえ、円を描いた丸い煙を噴出している。

「あ、やっぱりラヴィンおじさんだ。ラヴィンおじさん！」

シエリアは走り出し、その人のところへ向かった。おじさんは声に気がつき、穏やかな顔を彼女に向ける。

「おお、シエリアじゃないか」

「うん、久しぶり！」

「見ない間に、大きくなったなあ」

ハハハと笑いながら、おじさんはシエリアの頭を撫でていた。あの町の人と同じだ。平和な証拠、というやつか……。

「おや？ シエリア、あの方たちは？」

「えっと、お客さん。おーい、こっちに来てよ」

そう言われ、おじさんとシエリアのところへ行った。

ラヴィンさんは白い無精ひげを生やした、ダンディーなおじさんと言ったところか。カウボーイの方な格好をしている。もっとも、あのありがちな帽子はかぶっていないが。

「この人たち、ゲルミナス遺跡を目指しているんだ。だから、今日泊めてくれないかな？」

「……ゲルミナス遺跡？ ほう、あなたたちもそこを目指しているのか」

おじさんは僕たちの顔を見渡すと、そう言った。  
「それってどういうことですか？」

僕はすぐに訊ねた。答えは何となくわかっている。わかっているけど、どうしてか聞かずにはいられなかった。

「君たちがここへ来る以前、人が寄ったんだよ。……君くらいの年頃の青年と、2人の大男と美人な女性の4人だったかな」

やっぱり、か。僕はリサに視線を向け、小さくうなずいた。

「……ともかく、泊まりたいなら泊まってゆきなさい。歓迎するよ」  
ラヴィンさんはニコツと微笑んだ。それにつられて、なぜか小さく会釈をしてしまった。

ラヴィンさんの家の中は、こじんまりとしていた。木を使って使用する暖炉、動物の皮で作ったであろう床に敷かれているカーペット。リビングに置かれた木製のテーブル。隠居したおじいさんの家っていう想像にピッタリだ。

「どうぞ」

ラヴィンさんがコーヒーみたいなものを作ってくれた。いや、ココアか。飲んでみると、温かくて、懐かしい甘さがした。そういえば、ココアなんて長らく飲んでいないな。寒い地域のシュレジエンに行った時は、いつもコーヒー（苦いのがダメなので、かなり砂糖を入れていた）を飲んでいたっけ。そもそも、実家でもココアを飲むタイプではなかった。ココアを飲むより、ホットミルクを飲むタイプだし。

「訊いてもいいかな？」

ラヴィンさんはイスに腰掛けながら言った。

「なんですか？」

僕はカップをテーブルに置いた。

「どうして、ゲルミナス遺跡へ行きたいんだ？」

「世界を守るためなんだってさ」

シエリアがココアに息を当てながら言う。それを聞いて、ラヴィンさんは何度か瞬きをし、

「世界を守るため？ これはまた、大きな話のようだな」

そう言っつて、彼は立ち上がった。

「まあ、詳しく訊くつもりはないよ。君にとって、あまりいいことではないだろうからね」

「……？」

あまりいいことではない……それって、どういう意味なんだ？

「さて、夕食の準備に取り掛かるつか。皆さん、手伝ってくれないか？」

食事をし、その後は団欒みたいな状態になった。平穏な空気が流れると、みんな平和な話しかしない。ティルナノグや樹のことなんて、一言も出てこなかった。いや、心のどこかで考えてはいるものの、関係の無い人にあれこれ込み入った話をするのはいいいことではない。と、誰しも感じているからかもしれない。

その夜、ラヴィンさんを交え、男性陣だけで酒を飲んだ。……僕が未成年だっということには気にしない。てか、今年で18になるし空たち女性陣はと言うと、早々に奥の部屋で夢の世界へと旅立った。よくよく考えれば、女性陣はみんな歳が若い。もちろん男性陣も若いのだが、彼女たちの中で20歳を超えている人はいない。てか、傍から見ればガキばっかなんだよな……自分のことを棚に上げてるけど。

『北の酒豪』と謳われたレンド（自称）は、とんでもない量の酒を飲み、ベロンベロンに酔っ払ってしまった。その酔っ払った時がホント、質が悪い。大声を出して笑っわ、いきなり泣き出すわ、屁をこくわ、自分の（自主規制）……。デルゲンがいなかったら、レンドは追い出されていたであろう。

デルゲンはというと、酒に滅法強く、飲んでも飲んでも酔わない。いずれ酔うのであろうが、その時には他のみんながノックアウトしているのだ。

僕はそもそも酒が得意じゃないので、あまり飲まなかった。それに、ラヴィンさんの家にある酒は、飲んだら喉が焼けそうなほどで、せいぜいコップ2〜3杯が限度だ。それ以上飲んだら、本当に……ねえ、ホラ、吐いちゃうよ？

深夜になった頃、レンドは泥酔してしまった。ラヴィンさんとデ

ルゲンは、チーズケーキみたいなものをほお張りながら、談笑していた。

僕は少し顔も熱いし足がふらつくので、酔いを醒ますために外へ出た。この辺りは夜になると、ちょうどいい寒さ。いい感じに酔いを醒ましてくれる。

「ふう……」

僕は柵で囲ってある小さな牧場の傍に座り込み、草原を眺めた。

いつだったか……ああ、そうだ。樹と空と再会したあの日、聖帝中央庁が崩れ去った後、眺めた風景に似ている。たしか、リーベリア平原だったか。

緑の草原が風で小さく揺れ、辺りを月の光が照らしている。

……ふと思ひ、外へ出た時にはいつもお月様が顔を出しているのはどうしてだろう。たまたまか……あるいは、神様が僕に与えられる宝物という風景の1つだろうか。

風景。美しい景色。それは、星が、空が、僕たちに与えてくれる宝そのもの。目に見えるだけだが、それでも心に安堵と驚嘆を与える。そして、人の心はその分だけ広くなる気がする。

星の雫。星が与えてくれる、星自身の垣間見る姿そのもの。

空を見上げれば、輝く月。常に太陽の光に隠れ、太陽が姿を消した時間帯にだけ、その神々しい、淡い光を地上へ降り注ぐ。

人間も同じ。光に当たる場所に出る者、その影で支える者。あるいは、虎視眈々と陽の場に出ることを狙う者。

それを考えれば、人間はとてつもなく汚れている。犯罪に手を染め、権力や富を手に入れようとしている。それを、人は見て見ぬふりをする。その過程の中で、屈辱や苦しみを受ける人がいる。

## 原因と結果。

たしかに、そうでしかない。だが、そうと言えるのだろうか。そうだからといって、放っておくことなんてできないのが現状。だから、反乱やデモ、テロを起こしたりする。中には、宗教的なものもあるけど。

考えれば考えるほど、人間ってのは醜く、汚らわしい。樹やシユヴァルツたちが人間を滅ぼそうとしているのも理解できる。

でも、それは自分も同じ。蔑めば蔑むほど、自分が卑しく感じてきてしまう。何を上から目線で言っているのか、と。

「…………ヴェルエスと、星…………」

滅ぼした後は、樹…………お前が新世界の創世主か？

僕は思わず、鼻で笑ってしまった。

そんなの、馬鹿馬鹿しいとは思わないか？ 驕りが過ぎると思わないか？ お前が言った『驕りが過ぎる人類』、その代表的な者になる。

創世主と勘違いしているだけなんだよ。

人間は人間を生み出すことができるが、世界を創り出すことはできない。もちろん、あらゆる命を消滅させても同じ。人だけで成り立っている世界じゃないんだから。

人がいて、他の動物がいて、多くの生命がいて、世界は成り立つ。いや、僕たちが考えている世界が成り立つ。

…… 人と 動物 と区別しているだけで、僕はすでに驕りが過ぎているのかもしれない。人も同じ動物の一種なのに。

この星に生れ落ちた、1つの生命なのに。

けれども、わからないだろうか。

この風景を見て、樹は、人は気付かないだろうか。

僕たちを優しく包んでくれる風。千差万別の姿を見せる天に浮か

ぶ空。何千、何億という時間をかけて造られた、時の造形である大地。とても近く、同時に遠く、あらゆるものを生み出した母なる海。全てを知って尚、滅ぼすことを求めるというのか？

だから、僕は理想論を言うのさ。全てを救える、最善な方法を。おかしくなんてない。もちろん、正しくもない。だけど、お前が考えていることも、正しいとは限らない。

だから……僕はお前を殺

「どうしたのかね？」

落ち着いた声　後ろに誰がいるのか、すぐにわかる。ラヴィンさんだ。

「酔い覚まします。あんまり、酒は得意じゃないので」

「ハハ、そうか」

ラヴィンさんは僕の隣まで来るなり、僕と同じように草原の上にあぐらをかいた。

「きれいですね、この景色」

「そうかね？　私はもう見飽きたがね」

だが、いつ見ても心は満たされる、そういうものだ　と、付け加えた。

「僕の故郷には、こんな美しい風景はありませんでした。だから、何度見ても見飽きませんね。というより、いつまでもここで眺めていたいですよ」

「……景色ほど人の心を穏やかにするものはあるまい。戦う者、争う者、怨む者、復讐を遂げようとする者、欲望を満たそうとする者……美しい景色を見れば、そうすることも忘れてその景色を見つめ、己の愚行ぶりに気付くだらうに」

どこか寂しげに語るラヴィンさんを見ると、目を閉じていた。こ

の風景は、すでに目で見なくても感じる事ができるのだろう。

「……君は、以前来た異国の者に似ている」

「異国の者？」

「君と同じ年頃の男性さ」

「ああ……」

樹のことか。まあ、兄弟だもんな。似ているのは当然だ。けど、昔はあんまり似てないって言われたもんだ。自分でも、いまいちわかないし。

「どこら辺が似ていました？」

好奇心でそう訊ねると、ラヴィンさんは目を開いた。

「彼の持っていた独特の雰囲気、空気と言えようか……君に似ているような気がしてね」

「……どんな空気なんですか？」

「そっだね……」

ラヴィンさんはあごに手を当て、夜空を見上げた。

「どこか優しく、強く……同時に脆く、暗い」

「……」

「だが、彼の方がどことなく暗く、君の方が危つく感じた。理由はわからないがね」

何となくわかる気がする。僕はあいつのようにはつきりとした方法 というものを考えていない。その中で、揺らいでいる。自他に認めることだろう。

「……そいつと僕は兄弟なんです」

思わず、言ってしまった。言うつもりなどなかったのに、なぜか言ってしまった。時折、誰かに話したくなる……そういった時間が、今なのかもしれない。

「ほう、そうなのか？ なるほど、だから顔が似ているわけだ」

少し笑いながら、ラヴィンさんは言った。あまり驚いた様子がないという事は、出会った当初から気付いていたからだろう。

「だが、兄弟とは思えぬほどかけ離れている気がするな」

「……………何がですか？」

「それがわからないのだよ」

無精ひげをさすり、小さく笑った。

「……………君が彼を追いかけ、彼が何をしようとしているのかはわからないが……………」

ラヴィンさんは立ち上がり、僕を見下ろした。

「とりあえずは、傍にあるものを大切にしてほしいかな」

「え？」

そう言っつて、ラヴィンさんは立ち上がり、小屋へと戻って行っつてしまつた。

「……………」

僕はその場に大の字になつて、夜空を見上げた。

大切なもの、かあ……………。

## 64章：ゲルミナス遺跡 地の都への入り口

翌日、僕たちはラヴィンさんからいろいろなものを選び、お礼を言つて北へ出発した。遙か北、まだまだ目的地までは遠そうだ。

今日は曇り空。もう少ししたら雨が降つてきそうな感じた。この雲のせいか、上空にある空中都市群は姿を隠してしまっている。

「ここから北東の方に進めば、遺跡みたいなところがあるからそこで雨宿りしようよ」

いよいよ降つてきそうになり、シエリアは言った。数時間ほど歩いてみると、雨が降ってきたので、先にあつた小高い丘を登ると、その廃墟が見えた。草原の中にうずくまっている廃墟群。規模はそんなに大きくはないが、教会程度大きさの廃墟だ。ここから見るに、内部には入れるっぽい。

外壁には草が生い茂り、長い月日を感じさせる。口を空けているような入り口の中に入ると、薄暗い部屋が広がっていた。天井はほとんど崩れ、雨の水が床へ降り注いでいる。瓦礫があたりに散らかり、人が住んでいたような形跡はまったく感じられない。

部屋の奥に、ほとんどコケに覆われた鋼鉄の扉があつた。シエリアが言うには、何をやっても開かない扉だという。

その扉に近付き、コケを取り払ってみた。そこに、あるものが刻まれていた。

「これは……」

あの紋章だ。ということとは、封印が施されているんだ。つまり、僕が鍵を解けるってことか。

僕は扉に近付き、言葉を放った。

「……ネシイエ・ミヒ……我は、調停者」

紋章が輝き始め、扉は砂煙を出しながら横へスライドした。どうやら、この扉はちょっと進歩した扉なようだ。

「ね、ねえ、ソラ、今のどうやってやったの!? 魔法かなんか!?」

初めて目の当たりにし、シエリアは驚きそのまま僕に訊ねてきた。

「魔法? 魔法じゃないんだけど……なんなんだ?」

「私に訊かれても……」

リサは困った様子で苦笑した。

「じゃあなんなの!?!」

興奮気味のシエリア。人間の好奇心つてのは、年齢と反比例しているのかもしれないと思った。

「えっと……わかんね」

「ええ!?! なんなの、それえ」

シエリアは愕然とした顔で、大きくため息を漏らした。

中へ進むと、暗闇の部屋があった。部屋のうちこちに、書物や機械が置かれている。本棚の中に入れられた本が、コケが生えた床へ無造作に散らばっていて、キッチンサイズのコンピューターも動力を失い、眠っていた。

「……転送装置じゃあないですね」

コンピューターを眺め、アンナは軽く触れたりしている。

「動力が無いんだろうな」

そういえば、廃墟だったダマスカスの転送装置で別の地上都市に繋げた時、どこかの都市の転送装置は『エレメントパワーが不足しています』とかつて言っていたよな。つまり、そのエレメントパワーとやらが動力源なのだろう。

そこらへんにあった厚めの書物を拾い、題名を見てみると、**テイルナノグ地理** と書かれてあった。本を開き、冒頭を見てみると、

ズラリと並んだ地名が載せられている。中には、遺跡のコンピューターで見た天空都市の地名もある。どうやら、この本には天空都市だけ書かれてあるようだ。

少し黄ばんだページ。地名の説明の中には、写真が含まれているものもあった。僕はその中で、『天空帝都』というものを発見した。

『天空帝都セレスティアル。天帝陛下のおわす都である。人口100万をほこり、ほとんどの貴族もここに住んでいる。天帝城の最上階に、浮遊大陸そのものを浮かばせている核である。セレスティアルがある。空中都市群アトモスフィアの中心部に位置し、最も巨大な都市である。世界最先端の技術と共に、我が帝国の繁栄を示すそのものである』

ということは、あの巨大な駒みたいなものが天空帝都なのだろうか。まあ、見るからにあれが中心部っぽいし。

「おい。これ、動くぞ」

レンドの方へ向くと、彼は機械をいじっていた。

「どれどれ」

僕はそのコンピュータを眺めた。画面が明るくなり、何かを映し出している。どうやら、どこかの映像を出しているようだ。

「……………『土地検索』?」

これは、土地名を検索できる装置なのだろうか? 以前の装置と同じようにキーボードを発見。ここで、土地名を打ち込めつつ何か。樹たちが目指しているのが天空帝都セレスティアルなら……………

「セレスティアル……………」

帝都の名を打つと、画面が移り変わり、あの上空の駒の都市が映し出された。やはり、あれが天空帝都だったか。

「なんて書いてあるんですか?」

アンナも、他のみんなと同じように画面を覗き込んでいる。

「ええっと……帝都への行き方……は、アースガルズ神殿の転送装置を用い、地上の都力ナンへ行き、そこで天上装置を使用する……」  
「アースガルズ神殿？」

デルゲンは首をかしげた。

「たぶん、ゲルミナス遺跡のことだと思う。ティルナノグ時代にそう呼ばれていたけど、滅亡後はその名称が伝えられていなくて、違う名称が名付けられたんだと思うんだけど……」

「だが、違う可能性もあるんじゃないのか？」

「そりゃそうさ。ゲルミナス遺跡がアースガルズ神殿だといいいんだけどね」

そうじゃないと、本当にわからなくなってしまう。

……待てよ。この装置を使えば、そのアースガルズ神殿の行き方もわかるんじゃないのか？

僕はキーボードを押し、画面を変えた。そして、今度は『アースガルズ神殿』と入力した。

画面が変わり、神殿の姿が映し出された。白銀のギリシャ風の神殿。パルテノン神殿に代表されるあの支柱のようなもので、全体が支えられている。

「……ここより北、白き山脈のふもと」

北……か。确实とは言えないが、このことだろう。

「ゲルミナス遺跡で間違いないようだな」

「っていうことは……ゲルミナス遺跡へ行つて、転送装置で『カナン』という都市に行けば、アトモスフィアに行けるはずか？」

レンドの言葉に、僕はうなずいた。

よし、これで確実に行ける。確信めいたものが無かったので、少々不安だったし。

「……それにしても、地上の都力ナンねえ……なんかの因果かな？」  
リサは機械に映し出されている神殿を見つめ、言った。

創世時代の遺産 聖地力ナン。あそこは、当時の科学が集結し

た地。調停者としてのカインと、魔法が生まれた場所。

そこと同じ名を持つ、カナン……地上の都と表記されているからには、巨大な都市であることは間違いないだろう。

「ティルナノグはカインが創った国だ。関連性があるのは当然だよ」  
「……まあ、ね」

そう言っても、リサの顔には疑問が浮かんでいる。どうも、彼女には腑に落ちない点があるようだった。

「ともかく、雨が止んだら出発しよう。時間が無いしな」

レンドは妙に張り切りながら言っていた。

カナン……よく出てくる名だな。創世時代　1万年以上も昔の世界に取って、重要な意味を持つ名だったのかもしれない。リサの言うように、何かの『因果』があるのだろうか……。

雨が止み、僕たちは再び歩き始めた。

それから5日ほど進むと、ようやくカラハザンに辿り着いた。

山のふもとにある、のどかな町。ヴァルハラよりも規模が大きい。レンガ造りの家々が立ち並び、ニワトリを育てている家屋が2、3軒あり、町を縦横に割くようにして敷かれている2つの道路が交差する所に、1つの塔みたいなものがあって、てっぺんには大きな鋼の鐘があった。さらには、山の斜面に沿って、3つの風車もあった。童話に出てくるような町　といったところか。

太陽が沈みかけ、青空が茜色に染まってきた頃に到着したためか、町のいたる所にある店の前で、おばさんたちが夕飯の材料を選んでいった。片手には買い物袋。その中に大根でも入っていたら、昭和の下町みたいだ。

この町の人々を見てみると、ヴァルハラの人たちの姿が浮かんでくる。そう、誰もが普通なんだ。それこそが、平和なんだ。

分断された北と南……レイディアントとガイア。

ガイアでは多種多様な国々があり、それらの国と民族の概念で物

事を言い、争い合ってきた。

……レイディアントを救おうとした、太古の人間。結果として、世界を二つに分けてしまった。

彼の願い……その中で誕生したガイア。そこもまた、彼の願いと希望を受け入れられなかった世界なのだろうか。

彼の想いは、とうの昔に滅んでしまったのだろうか。

この日、僕たちは宿屋で久しぶりにベッドで寝た。やっぱり、ふかふかのベッドで寝るのが一番。

翌日、僕たちは町の人にゲルミナス遺跡の行き方を教えてもらい、出発した。

町を出て長く続く緩やかな坂道を登ると、山道の入り口に到着した。木が一本も無く、緑のじゅうたんのように山は草に覆われている。所々、石灰岩のように白い岩が突き出ている、遠くから見れば緑の絵に所々、白い斑点があるようなものだろう。こうした山と青い空ってというのは、風景画としてはありがちなながらも、かなり美しい。

山の斜面から柔らかな風が吹いてきて、僕たちを包む。そこまで高い山ではなく、標高は500メートル程度だと思われる。町の人が言うには、この山を回り込んで進んだほうが遺跡に早く着くのだという。

1〜2時間程度、登ったり降りたりして、ようやく山のふもとへ辿り着いた。カラハザンの反対側に当たるといふ。

目の前に広がっていたのは、遙か先まで広がる密林だった。アマゾンのような熱帯林ではなく、ドイツの森みたいな感じだろうか。森の奥は暗がり、どこか妖しさを持ち、妖精の森のような雰囲気をかもし出している。何か「おいで、おいで」と招いているよう

な気さえする。きっと、その妖気に誘われ、この森へと足を進ませた人は少なくないだろう。

「シエリア、ここが光の森なのか？」

僕がそう訊ねても、返事は返って来ない。シエリアはその森を見つめながら、少しだけ何かを考えているようだった。

「シエリア？」

再度訊ねると、シエリアは我に返ったように、僕に顔を向けた。

「ご、ごめん。なんて言った？」

「ここが光の森なのかどうかってこと」

「う、うん。そうだよ。だけど……」

シエリアは森の奥を見つめ、顔をこわばらせている。

「……どうしたんだ？」

「以前来た時と、なんだか雰囲気が違う気がする」

少しだけ怖がっているのか、声が震えたように感じた。

「よくわかんないけど、何か……」

「……危険ってこと？」

空がそう言うと、シエリアは小さくうなずく。

「そうなのかも、しれない。はつきりとは言えないけど……」

この先が続く中で、何かが待ち受けている。そうなのだとしたら、そこには樹たちがいるってこと……。

わざわざ、こんな中途半端な所にいるはずはないだろう。そう思った時、

「危険なことなんて、俺たちからしてみれば今に始まったことじゃないだろう？」

レンドはシエリアの隣に立ち、言った

「ま、俺らが付いてんだ。心配すんなって」

レンドはシエリアの頭をなで、髪の毛をクシャクシャにした。

「そ、そんなんじゃない！」

「おーお、ガキのくせに気を張っちゃってまあ」

シェリアの顔を見下ろしながら、レンドはケラケラ笑い始めた。

「こ、子供扱いするな！」

「いやいや、そりゃ無理な話ってもんだ。お前はガキ。それは事実だからな。ガキはガキらしく、守られる立場にいりゃいいんだよ」

結局、言いたいのは守ってやるから安心しろ　ということなのかな。シェリアは終始ブスツとしていたが。

そして、僕たちは光の森へ足を進めた。道らしい道は無く、周りには密集した林、足元にはうっそうと生い茂る草。どの草も葉っぱの一つ一つが膝元辺りまであり、進むのが少々めんどくさい。

外からの様子どおり、上空も木の枝やら葉っぱやらで覆われ、太陽の光が差し込んでいないために、森の中は薄暗い。初めて『暁の門』を見に行く時に通った、小学校の裏山。あの山もこんな感じだった。昼間なのに暗く、どこからとも無く聞こえる虫の声や風によって揺れる草木の音が、変な緊張感と恐怖を湧き上がらせた。

「だー！ 草が邪魔だあー！！」

レンドはイライラを我慢できず、前方の草を叩き始めた。

「レンドさん、我慢ですよ、我慢」

それをアンナが優しく宥める。こういうのは、彼女の専門だな。

「俺はスムーズに物事が進まなくなるのが嫌なんだよ！」

「誰だって同じでしょーが」

リサは呆れ顔で言った。

「それを行動に出すか、出さないか、だな」

「そうそう。デルゲンの仰るとおり。レンドって、カルシウムが足りてないんじゃないの？」

僕はうなずきながら、草をかき分けて進んでいた。

「なんだ？ カルシウムってのは」

あ、そっか。この世界には、未だに成分とかが判明していないんだ。いや、判明していたとしても、名称がガイアと同じってことはほぼあり得ない話だった。

「えつと……まあ、栄養の一種だよ。牛乳とか小魚によく含まれるやつ」

「??? そのカルシウムって言うのがあると、レンドはイライラしないわけ?」

「へっ?」

リサが素朴な疑問をぶつけてきた。そういえば、科学的に判明しているかどうか、僕は知らないだった。なんかの本で読んだんだよ、「イライラするのはカルシウム不足だから」だってさ。

「た、たぶんね」

確証を得ることもできないので、とりあえずそう言った。

「ふーん。じゃあ、これからはレンドの主食は牛乳ね」

「はあ? お前な、牛乳だけで生きていけるかっての」

「冗談に決まってるでしょ? 馬鹿ね」

冷やかな視線を送るやいなや、リサは怒りで震えてきそうなレンドを放つて進み始めるた。

「ぬぬ……てめえ……!!」

「アハハハ! 変な顔!」

シエリアがレンドの顔を指差しながら笑い始めた。ほう、たしかに変な顔だ。ゴリラみたい。

「ゴリラだ! ゴリラ!」

「誰がゴリラだ! シエリア、てめえには一回、お仕置きをしなきゃなんねえようだなあ」

何をするつもりかと思っただら、レンドはビントの仕草をした。いや、あの位置は……けつ叩きだな。お尻ペンペンという、古い技。昔、父さんにやられたような気がする。

しっかし、変なところで文化を共有しているもんなんだな……と、僕はしみじみと思った。

「な、何するつもりだよ!」

「黙らっしやい!」

なんでお母さん口調? そして、レンドはシエリアを担いだ。

「わ、わわ！ お尻叩くつもり？ 女の子のお尻を叩くのは変態なんだぞ！」

「うっせ！ 僕口調のガキが何言ってるんだ！ 一度はこっやって、賤けしなきゃなんねえんだよ！」

ベチン。シエリアの叫び声が、暗がりの森の隅々に響き渡る。

「あ……いいのかな？」

空が微笑みながら言った。

「まあ……いいんじゃないの？」

まったく、先が思いやられるなあ……なんて思いつつ、微笑ましかつたり。

草をかき分け、ひたすらシエリアが指した方向へ進むこと数十分ある建造物を見つけた。

ゲルミナス遺跡、なのだろうけれども、あの草原で見つけたコンピューターで見た映像とは、違うように見える。いや、似ていると言えば似ているんだけど、時の流れによって朽ちたといえようか。映像で見たような白銀の支柱は黄色く変色し、あるところは欠け、あるところはツタが巻きつき、さらには完全に崩れてしまっているものもある。屋根の角の部分も崩れ、地面に叩きつけられて粉々になっってしまった。

「ボロボロだなあ……大丈夫か？ 内部」

「こんなん、内部に入れるのだろうか。まあ、樹たちも来たんだとすれば入れるはずなんだけど。」

「大丈夫だって。以前僕が来た時も、こんなんだったし」

「中に入ったのか？」

レンドの問いに、シエリアは「うん」とうなずいた。

「中也崩れかかってたけど……たぶん大丈夫だよ」

「おいおい……」

「ともかく、行ってみようよ」

リサが進みだすと、僕たちも同じように進みだした。内部へと続く入り口へ、大きな階段を下りて行く。一段一段が30センチくらいあり、マヤ文明のピラミッド並みだ。

大きな入り口の奥は、真っ暗だった。今までの遺跡には天空石があつて、それが灯り代わりになっていたが、ここには無いようだ。僕たちはたいまつを取り出し、奥へと進んだ。

幅の広い真っ直ぐな通路。両側の壁には、ひび割れたところからツタが侵入し、あちこちにはびこっていた。

歩く音が、どこまでも続く暗い通路の奥へと響く。歩いていて気付いたが、どうやらこの通路、微妙に下り坂になっている。傾斜1〜2度程度だろうか。ほんの少しずつ、下へと向かっている。

「シエリア、奥に何かあるのか知ってるのか？」

そう訊ねると、シエリアはなぜか僕の背中に乗って来た。いわゆる、おんぶ状態。

「ずっと奥に行くと、通路が枝分かれしてるんだ。その先は1つを除いて、ガラクタが転がってる部屋だったかな」

なぜ乗ってきたのか訊ねるのは置いておいて、

「そのもう一つってのは？」

「その通路の奥には階段があつて、どんどん下へ行くようになってた。それで、着いたかと思えば行き止まりだったんだ」

「行き止まり？」

「うん。それに、他に行けるような道も無かったし」

なるほど、怪しいな。たぶん、そこに秘密の通路でも隠されてるんだろう。

「……つか、降りるよ。歩きにくいだろ？」

「ええ？ 疲れたんだもん。ちょっとぐらいいいじゃん」

と、シエリアは僕の背中の上で暴れる。

「まったく……とんだお荷物だな」

そんなことを呟きながら、僕は自分に年の離れた妹がいたら、こ

んな風になんのかなあ〜などと考えていた。兄弟は、樹しかいなか  
ったしさ。

この通路を進んでゆくと、シエリアの言ったとおり、道が分かれ  
ていた。通路は4つに別れ、1つを除いて同じような通路だった。  
1つは、前述どおり階段だった。

僕たちは階段へ進んだ。長い長い階段。かつては真っ白な大理石  
の階段だったのだろうが、今は見る影も無い。

しばらくすると、階段を降り切り、平坦な通路の先には行き止ま  
り。シエリアの言ったとおり、扉らしいものは何も無い。両側と同  
じ壁が、僕たちを囲んでいた。

「さて、どうしたもんかな」

デルゲンはそんなことを言いながら、目の前の壁に触り始めた。  
さするようにして何か無いか探ったり、軽く叩いてみたりしていた。  
そうやって、奥に通路があるのかどうかを確認しているんだ。

「……うん？　なんだ？」

デルゲンが何かを発見し、壁にたいまつを近づける。

「これは……手形か？」

壁のやや上部に、手形のように凹んだ部分があった。さらに、そ  
れとやや離れ、同じ高さの場所にこれも同じような手形の部分があ  
る。よく見てみると、それは右手・左手となっていた。

「もしかして、ここに手をはめろってことなのか？」

それをまじまじと眺めながら、デルゲンは言った。

「じゃあ、誰なんだ？」

僕がそう訊ねると、彼は僕を指差した。

「もちろん、お前しか考えられないだろ？」

「……まあ、そうだろうね」

またもや調停者か。アイオンも、ちょっとは違う仕掛けを施せ  
よ。……なんて、自分のご先祖様に突っ込みを入れてみたり。

僕は右の手形に右手を入れ、左の手形に左手を入れようとした。

その時になって、ようやく気が付いた。……届かない。

「なんだよ、空がちっちゃいのか？」

「僕はレンドより背が高いと思うんだけど……」

「もしかして、調停者の手じゃないんじゃない？」

リサが言った。ついさつき、アイオンに突っ込みを入れたばかりなのに……なんだか恥ずかしくなってしまうた。

「でも、そうだとしたら誰の手なんですかね？」

アンナはそう言っつて、自分の手を伸ばした。彼女の場合、背伸びをしてなんとかその手形にはめることができる程度だ。

調停者である僕じゃないとすると、もちろん樹たちもここで行けなかったに違いない。だが、あいつらは先へ進んだ。ということは……他の人間の手で開いたということか？

なら、答は容易だ。ラグナロクの血族であるシュヴァルツとバルバロッサ。きつと、この2人の手だったんだ。

僕はそのことをみんなに話した。

「……なるほど。じゃあ、リサの手が必要ってことだな」

「じゃあ、もう一人は誰なんですか？」

空がそう訊ねた瞬間、僕の頭の上に電球が出現。

「……そっか。2人必要なんだった」

「ソラ……もうちと、考えろよ」

みんなはちよつと呆れ気味だった。

「でもさ、樹たちはきつとそうやって通れたんだよ。じゃないと、意味わからないじゃないか」

「そりゃ、そうだな。……片方は調停者だったとか？」

「……」

レンドの言ったことを試しにやってみた。片方が僕で、もう片方がリサ。

ピタ。

「……何にも起きませんね」

空がダメだしを言うつと、

「ダメじゃん、レンド」

ため息混じりに、リサは追い打ちをかけた。

「俺のせいだよ……」

「これじゃあ、先に進めないな。うーん……」

念のため、僕とリサの手をはめる位置を変えてみてやったが、ダメだった。これこそ、まさに八方塞……と、そうみんなが思い始めてきた頃、リサの頭の上に電球が飛び出した。

「まさか……？ まさかね……いや、もしかしたら……」

リサはぶつぶつ言いながら、頭を抱えた。

「……空ちゃんと私の手なのかも」

「空とお前？ 何だよ？」

「なんとも言えない。正直、わからない。ただなんとなく……そんな気がしたから」

と、彼女の顔にも疑問が浮かんでいる。直感　みたいなものなのかもしれない。

「とりあえず、やってみるよ」

右側の手形に空、左手側はリサ。同時に、2人はそれぞれの対応する手をはめ込んだ。

サリア

えっ？

何かの音が聴こえたような気がした時、ひび割れていく音がした。ピシピシと、その音はだんだん感覚を狭くし、最終的には連続的に音が漏れ始めた。

そして、音が消えた瞬間、青い光が壁の隙間から放たれ始めた。もしや、さっきの音は壁がひび割れていった音だったのかもしれない。

青い閃光の噴射と共に、壁は小さく揺れ始めた。いや、この遺跡が地震に襲われているかのようだった。上下に、左右に激しく動き、立っているのもままならないほどになった。

ゴゴゴゴゴ

地響きが起こったと思った。だが、それは目の前の壁が、床に滑り込んでいく音だった。壁がどンドン、見えなくなつてゆく。

扉が完全に隠れると、広間が現れた。天井にシャンデリアのようなものを取り付けられ、白い光を降り注がせている。研究施設のような広間で、壁全体が白い。広間の中心にある機械。それは、転送装置。それを囲むようにして、コンピューターが並んでいる。

「動くんでしょうか？」

僕の隣で、空は言った。他の遺跡と同じように、電源ボタンを押せば起動すると思うのだが……。

ポチツとな。

ヴン……………

朱色のボタンを押すと、低音の起動音が聞こえ、同時にコンピューターに光が灯った。

僕はコンピューターをいじり、転送装置で行ける場所を検索した。すると、行ける場所は1つしかなかった。

『大都力ナン』

それだけ、表示されていた。

「どう?」

リサは画面を覗き込んだ。そこに映し出されている文字を見ても読めないはずなのに。

「ああ、大丈夫なようだ。……行くか?」

「もちろん。躊躇ってる時間なんて無いしね」

「……そうだな」

僕は『確定』を押した。

『……大都力ナンに接続中……しばらくお待ち下さい……接続完了。転送機にお乗り下さい。中止する場合、あるいは移動先を変更する場合は、『中止』を押して下さい』

「よし。みんな、転送装置の上に乗ってくれ」

僕たちは転送装置の上に移動した。が、人数が一人増えたので、なんだか狭く感じる。

「まったく……余計なもんがいるから……」

レンドはぶつぶつ文句を言っていたが、シエリアはそれが自分のことだとは気が付かず、はしゃぎにはしゃぎまくっていた。

「これって、ピューンとどっかへ移動する装置なんだよね? すごいなー。ワクワクしちゃう。ねえ、これってホントに瞬間移動するの?」

シエリアは目を輝かせながら、訊ねてくる。子供の好奇心って、ある意味すごいと思うってしまった瞬間だった。

『転送を開始します……転送中に、転送機から出ないで下さい。…

……移動先、大都力ナン……』

転送装置が作動中の音を出しながら、光を発した。その白い光に僕たちは包まれ、目の前が真っ白になった。

## 65章：大都力ナン 滅びと孤独の音色

とてつもなく発達した都市だった。

転送装置のあった広間から壊れた扉を抜けると、巨大な都市が広がっていた。

群青色をした建物群。全て正方形や長方形の形をしている。遠くから見ると、機械の一部に見えるが……まるで、これではガイアの首都圏だ。現代 あるいは、近未来の都市。そこかしこに乱立しているビルの透明のガラスが、空の色を反射していた。

ガイアにあるような道路が、都市全体に張り巡られている。その道脇には電灯や、レプリカの樹木。しかし、人の気配は感じられない。車が道路を移動している姿も無い。聴こえるのは、この都市を囲む砂塵の風景から運ばれてくる乾燥した空気と、滅んだ音色だった。

ユリウスによって滅ぼされたのかと思えば、建物などはちゃんと形を保ったまま。なのに、都市の外は干からびた大地が広がっている。遙か彼方まで広がる砂漠。焼き尽くされたとすれば、植物が育たなくなっただのも理解できる。

青空の下、人が消え去り、建物と機械だけが残された巨大な都市。どこか、哀れにも感じる。

「……たしか、『天上装置』だったっけ？ アトモスファイアに行けるのは」

デルゲンはベンチに座りながら言った。

転送装置のあった小さな建物から出て、大きな道路を横切ると、

広々とした公園があり、僕たちはそこで一先ず休憩することにした。白い大理石のようなもので敷かれた公園の中心には、水の無い噴水場。所々、レプリカの樹木がある。

「この都市のどこかにあるってことですよね」

「……こんなに広い都市の中にか？」

レンドはそう言うと、立ち上がって辺りを見渡した。ここが少し地表より高いところにあるため、遙か遠くにある陽炎の砂漠を見ることが出来る。つまり、この巨大都市は計り知れないほど大きいのだ。たぶん、帝都アヴァロンよりも巨大であろう。

「それに、似たり寄つたりの建物ばかりだし……。この中から見つけるのは、少し難儀な話かもな」

ため息にも似た言葉をデルゲンが発する。

「全部の建物をしらみつぶしに探すしかないだろうね。……めんどくさいけど」

リサも同じようなため息を吐いた。

ここまで来て、探索ってというのは気が引ける話だ。やる気を削ぐというか、なんというか。アトモスフィアは真上にあるっていうのに。

僕たちは3つのグループに別れ、探すことにした。それぞれ、もし見つけたなら花火（みたいなもの。ものすごい音を響かせる）を打ち上げる。リサがアヴァロンでの戦いの折、デルゲンとレンドに渡したものと同じものだ。

まず、都市の北の方角はリサ・デルゲン・アンナ。都市の東はレンド・シェリア、都市の西側は僕と空（どっかの誰かさんが変に気を利かせてくれた結果）ということに。どうもレンドのところがないが……。安だが……。

「それじゃ、日が暮れる頃になったらこの公園に集合な」

「ああ。デルゲン、気を付けて」

リサがいるから……。と、僕は意味深な笑顔を送った。

「ハハ……お前の言いたいこと、なんとなく受け止めたよ」  
「何がです？」

と、アンナは彼の横で首をかしげている。  
「何でもないって。ほら、出発するぞ」

「？ は、はい……」

彼はアンナと一緒に歩き始めた。……デルゲンって、ホントに他人の気持ちを理解するのに長けている気がする。

「レンド、シエリアをいじめんじやないよ？」

リサはレンドの肩に手を置きながら言った。

「いじめるかって。ガキじゃねえんだし」

いや……普段、レンドが1番子供っぽいような気がするのだが。

「シエリア、もしこのおっさんになんかされたら、迷わずお姉ちゃんに言うのよ？ お仕置きをしてあげるからさ」

リサはシエリアの目線に合わせるようにしてしゃがんだ。

「おいおい、なんちゅーことを……」

「うん、わかった。何かあれば、お姉ちゃんに言えばいいんだね！」

「そう！ お姉ちゃんは正義の味方だから」

意味がわからん……。

「おーいリサ、行くぞ」

「はーいはい」

デルゲンに言われ、軽くステップを踏みながらリサは都市の中へと消えて行った。

「……つたくよお、俺って信用無いのかねえ？」

歩いてゆくデルゲンたちを横目に、レンドは呟く。

「さあね。ま、『お仕置き』とか言ってぶたないことだな」

僕がそう言くと、レンドは小さく笑った。

「肉体的制裁は子供のうちが最も重要だと思っただけどねえ」

「ハハ、それは言ってる」

「そもそも、俺を心配するよりもソラを心配したほうがいいのになあ、リサも」

彼は目を細くし、僕を見つめる。

「はっ？　なんでだよ」

「2人きりだからって、変な気を起こすなよ？」

「ばっ……何言ってるんだ！」

こんな時にんなことするか！　って言いたいが、それを言っしまうとレンドの掌の上で踊らせられているような気がしてしゃくなくため、言えなかった。

「なーに焦ってるんだよ。……まさか、お前……」

「なわけないだろ！？　さっさと行けっのー！！」

「ハハハ、ごめんって。まあ頑張れよ。行くぞ、シエリア」

「はいよ〜」

シエリアはやる気の無い返事をしながら、大きな足取りで歩いてゆくレンドの跡を追って行った。

まったく……最近、レンドにいつもからかわれているような気がするのは、気のせいだろうか？

「どうしたんですか？」

空は僕の目の前に顔を覗かせた。僕はなぜか慌ててしまい、彼女から視線をそらしてしまった。

「べ、別に。ほら、行くぞ」

「？　……はい……」

レンドが変なことを言うもんだから、逆に意識してしまうんじゃないか……　　まったく。

大都カナン。歩いてみれば歩いてみるほど、そう呼ばれていたことが納得できる。

圧政を敷かれていたはずの地上の中で、天空都市にも勝りとも劣

らない先端技術を擁した巨大地上都市。天空人からは天空と地上を繋ぐ「天上装置」があるが故に、重要視された都市なのかもしれない。

疑問に思うのは、その重要な都市をユリウスはどうして破壊しなかったのだろうか。ということだ。きっと、ここでは様々な研究や実験、そして開発が行われていたに違いない。つまり、地上人に対する「圧政」の象徴の一つだったはず。憎んでいる人を表すようなものを見ると、無性に苛立つのと同じだ。当時、圧政を敷かれていた記憶を表すものが、こういった高度な都市なはず。

アイオンも、どうして破壊しなかったんだろう。他の天空都市に行ける道は破壊されていたのに、なんでここだけ残しておいたんだ？ わざわざ、遠回りするような道を作っておいて。

いずれにせよ、この都市もアトモスファイアも、破壊しておけばよかったんだ。全部粉々にして、圧政と暴政の象徴だったものを破壊すれば、地上の民の心も少しは楽になったのに。……まあ、仮定の話をしても、過ぎたことを言っても、意味が無い。もしかしたら、アイオンにはアイオンの考えがあったのかもしれない。彼が世界を変えようと、救おうとした意志は本物だったのだから。こうして僕たちが樹たちを追っているのも、樹たちがロキの解放を企んでいるのも、下手をすれば彼の思惑通りだったとか？ いや、さすがにそれは無いか。いくら超人離れした人間でも、数千年も先の未来のことを予測することも、憶測することも不可能だ。

……未来予知の力が無ければ、の話だ。不思議とファンタジーの世界であるレイディアントなら、そういった能力を持っている人間がいても不思議ではないもんな。そうやって考えてみると、いつか僕がやったRPGゲームの世界そのものだよ。小さい頃は、そういった世界が現実に存在するんだと思っていたしね。まさか、空想だと気が付き、探究心なんて薄れてしまった年頃になって、本当に存在していたのだと知ると、なんとというか、頭をトンカチで殴られた気分だった。

そんなことを考えながら、僕は空と一緒に装置を探索した。

どの建物も、自動ドアだった。ガイアにあるように、一歩手前まで来ると「シャツ」という音がして素早く右（左だったかも）へスライド。しかも中は明るく、天井に小さなBB弾程度の大きさの電球のようなものが、いくつも張り巡らされていた。これだけの数なら、夜になっても闇には負けないだろう。電力というか、動力は未だに都市全体に息衝いているようだ。

建物の中は閑散としていて、地震でもきた後かのように、物が床に散らばっていた。書物やらコップやら、生活用品も無造作に投げ出されている。しかし、建物自体は崩れていたり、壁にひびが入っているわけでもなかった。少しだけ部屋の四隅に黄色い砂のようなものがあるが、老朽化しているようには見えない。

今まで見てきた地上都市は、そのすべてが半壊、あるいは全壊状態だったというのに、この都市の建物はそのままだ。頑丈な素材で作られているのかもしれない。建物の内部から壁などを見ても、コンクリートとかではないようだ……やはり、ティルナノグの高度な技術の賜物ってことかな。ちよつと、爆弾でも設置して、壊れないかどうか確かめてみたいものだ。それで壊れなかつたら、ちよつと尊敬。ガイアよりすごいってことになる。

というか、上空に重力に逆らって大陸を浮かばせている自体で、もうティルナノグの方がすごいものなんだが、負けた気分で嫌になっちゃう。ガイアの良いところなんて、発達した文明だけだったというのに。

僕と空は大きなビルの中を搜索した。数十メートルもある高さをほこり、都心にあるようなビルだ。ただ、ガラスが張られてはいるが、外から内部を覗くことができない。どうやら、マジックミラーのようだ。

中は薄っすらとしていた。天井の灯りは動力を失っていないものの、時折、点滅している。

今いる一階は、病院なのかもしれない。正面の奥に病院のカウンターに似た場所があり、それから少し離れたところに大勢の人が座れるようなイスがびっしりと並べられている。触ってみると、少しフワフワしていた。まるで、車の座席のようだった。

一階から繋がっている部屋を覗くと、部屋の中央に1つのベッド。その真上の天井に変な機械が備えられていた。もしかして、ここは診察室か何かだろうか。隅には机が1つ。その上に、無造作に置かれている書類たちがあった。

カウンターのあった広間に戻り、僕たちはエレベーターのようなものを見つけた。ボタンを押すと、扉がスライドして開いた。中へ進み、ガイアにいた時のような感覚で 2 というボタンを押すと、まだエレベーターは動くようで、体が浮くような感覚に襲われた。

いつも思っていたが、エレベーターで上の階へ行こうとすると、一度浮いたかと思ったら、突然、下へ行くような感じになる。その瞬間、なんだか体が浮く感じになるんだよな。

2階へ到着し、エレベーターから出ると、1階の広間と同じような広間に出た。あのカウンターに多くのイス、そしていくつかの部屋に繋がるであろう扉が数ヶ所。

今度は3階へ行ってみるが、同じだった。

「この建物は、関係ないみたいですね」

辺りを見渡しながら、空は言った。

「どうします?」

「うーん……じゃあ、最後に最上階へ行ってみて、何も無かったら他の建物に行こうか」

そして、僕たちはエレベーターへ戻り、列挙されているボタンの一番下を押した。45のボタン。45階つて言えば、十分な高さじゃないか。待てよ、よく考えたら、1つのフロアの床から天井までの高さが3メートル(僕が手を伸ばしても、届く分には程遠か

ったから)くらいだったから……ゆづに100メートルは超えている計算になる。

まったく、こんなものをどうやって造ったんだろうね。ガイアにある『70階建てのビル』とかもそうだよ。100メートルを超える建物を、どうやって造ったんだろう。見たこと無いもんな。今思えば、大きな建造物というのは造られていく様ななんてのは、想像できないものだ。家にしても、ビルにしても。

45階までは、エレベーターを言えども時間がかかった。どこぞのビルみたいに透けているわけでもないので、ちよっぴり暗い空間が続く。こんなところでエレベーターが急停止なんてしたら、ホントにどうしようもない。

そんなことを考えているうちに、45階へ到着した。エレベータから出てみると、今までのフロアとは違うフロアだった。

このフロアの中に、もう一つガラスに囲まれたフロアがあったのだ。曇りガラスのようで、中を見ることができない。

「これ、開きませんね」

そのガラスに囲まれたフロアへ通じるガラスの扉があったのだが、自動ドアではないようだ。いや、動力が切れているのかもしれない。押しても引つ張っても、叩いてもビクともしない。

「しょうがない、こうなったら……」

僕は軽く光線を掌から出した。すると、ガラスの扉は粉々になり、それらは床へ音を立てながらばら撒かれた。

「よし、これでオッケー」

「……危ないこととして……」

空は少し呆れた様子で、僕を見ながら苦笑している。

「まあまあ、気にしない。ホラ、足元気をつけな」

刃のようになって、上を向いているガラスを踏ませないよう、僕は空の手を取って進ませた。僕の靴は厚いものだし、少々やられても大丈夫なのだが、空の場合は事情が変わってくるものだ。

内部には、至る所に機械や机が鎮座していた。天井からぶら下げ

られた人が入れる程度の大きさのカプセルのような機械がいくつもあり、中には床へ転がっているものもあった。それらはすべて透明で、中身が見えるようになっていたが、今は何も入っていない。中には、ガラスが砕けてしまい、中身が出てしまったような形跡もある。ぶら下げられたカプセルの隣には、何らかの装置なのか、コンピュータが佇んでいた。

怪しげな機械といい、これらのカプセルといい、このフロアは何らかの実験か研究がされていた施設だったのかもしれない。

僕たちは、床に転がり割れてしまっていたカプセルの近くへ歩み寄った。このカプセル、それなりに大きなものが入るくらいのサイズだ。そう、ライオンくらいの大きさの動物や、人間が入れるくらいの。

何となく、何となくだがこれらがなんなのか、わかったような気がした。あまり言いたくは無いけど。

足元に落ちてあつた書類に目が行った。これは……古代ティルナノグ文字だ。

この書類はどこも朽ち果てておらず、少々文字が濁っているものの、はつきりと文字が読める。内容は次のとおりだ。

#### 『ウィーヴルに関する調査書』

創始歴7915、某月某日。

1年に渡る研究・実験により、ルベニスとアルタニクスの合成に成功した。強靱な筋肉を持ち、自然界のルベニスやアルタニクスを張るかに凌駕する知能を持つ生物が誕生した。

だが、合成完了から6日後の昨日、暴走反応が起こり、何らかの間接的な攻撃によって装置内から研究員一人を殺害したため、「U・M0209」は処理された。合成する際、脳細胞及び臓器器官における大きな拒否反応が生じたが、「ラジエル」の大量投与を施し、それを強制的に抑制。それが今回の暴走に遠因するものと思われる。

もしくは、生物的に合致しない部分があつたのかもしれない。

しかし、研究員を殺害した方法に関して、死体を解剖した結果、超音波のようなもので空間の超振動を引き起こし、それを利用して脳細胞や神経を中心に破壊し、殺害されたのだとわかった。これらのことから鑑みて、他の合成生物以上に強力であることが伺える。つまり、合成における拒否反応を起こさずに合成が完了されれば、この合成生物は強力な兵器となり得るのである。今後、更なる研究が必要なため、倍の資金が必要と思われる

』

読み終わって、やはり　という思いだった。

ここでは間違いなく、生物実験が行われていたんだ。それも、別々の種族の動物を合成させるというものを。

漫画や空想、あるいは虚偽的な情報によるものでしか存在しないと思っていたが、この世界には存在していたんだ。動物と動物とを合成させるということ。

なんてくだらなく、ひどいことをするんだろう。結局、この生物は殺されてしまったんだ。何かをしたわけでもない。『研究と実験』、そして『結果』を求める人間の醜い欲望の過程で、殺害されたんだ。ほぼ無意味に近く、そして虚無に等しい。

きっと、苦しかったに違いない。わけもわからぬまま捕らえられ、関係の無い動物と無理矢理合成させられ、己の意志とその動物の意志が入り乱れ、自我というものを失ったんだ。それは、死よりも苦しいことだ。自我や自尊心を奪われたまま死ぬなんて、考えただけでも恐ろしい。……あの正と奇が複雑に絡み合う聖域に放り出され、無限回廊を漂ってしまったんだ。

これらの生物実験をあのカインが命じたとは思えない。同じよう

な実験を受けた彼が、他の生物に対しそれを行うだろうか？

そう、それはない。

あの聖域の奥底に堕ちた時、僕の中に彼の感情が流れ込んで来た。一瞬にしか過ぎないものだったが、その中で僕はたしかに感じた。

彼は、そういう人間ではないと。

人を怨んではいたが、全てがそうではなかった。

ならば、一体誰が？

……考えるのはよそう。既に、大昔の話だ。答えを導き出したからって、過去の悲惨な実験の事実が消えることはない。この動物たちも。

「何て書いてあったんですか？」

いつの間にか、彼女は僕の傍で文書を覗き込んでいた。空は文字を読むことができないため、この文書の内容がさっぱりなのだ。たしかに、ガイアの文字しか知らない人……いや、現代のレイディアントの人でさえ、わけのわからない列挙した文字列としか認識されないだろう。

「い、いや、大した内容じゃなかった」

「そうですか……じゃあ、これからどうします？」

「そ、そうだな。ともかく、ここには何も無いから外に出ようか」

そう言うとな彼女は小さくうなずいた。

なぜ、僕は彼女にこの文書の内容を言わなかったのだろうか。別に言っても言わなくても、何かあるわけでもないのに。

これ以上の長居は無用と思い、僕たちはこのフロアから出ようと

した。

セヴェス

「……………っ!？」

いつか聞いた、女性のような声がどこからともなく聴こえた。この声は、僕にしか聴こえない。僕が急に立ち止まり、後ろに振り向いたものだから、空もそれにつられて後ろを振り向いてしまった。た。

穿たれし空を紡ぐ時

封じられた永久の旋律

……………なんだ？ それ。

僕は心の中で問いかけた。

わかるでしょう？

あなたは、それを知っている

古きヒトの遺産、蒼き翼

翼？ まったくわからないな。

あなたを導く、最後の

言葉が終わると、その変な感覚から解き放たれた。それから数度呼びかけても、返答は無い。

「空さん？」

僕はハツとした。目の前で、空の手が左右に振られている。

「意識、ありますか？」

「え？ あ、ああ」

僕がよく意識が飛んでしまうからか、空も慣れてきていた。彼女はあまり心配した様子は無く、元に戻ったのかどうかを確かめている。

「前触れも無く、変になるんですね」

「……なんか、喉に引つ掛かるような言い方だな」

「冗談ですよ」

と、彼女はクスクス笑っている。

「それより……」

僕は辺りを見渡した。

「ここには、なんか隠されてるっぽい」  
すると、空は首をかしげる。

「なんかって……何です？」

「……その肝心なところがわかんねえんだよ」

「そ、そうですね。なんだか、いつもそんな感じですよね」

「まっただ。よっほど、僕を動かせたいんだろーよ」

僕のため息と同時に、空は笑顔で「探しましょう」と言った。模索するも、どこもかしこもカプセルや書類、あるいは粉々になったガラスがあるだけだった。

しかし、フロアの奥に怪しげなテーブルがあった。半径1メートル程度の円形のテーブルで、まるで鏡のようにきれいなもので、僕たちの顔を反射している。中心部に、穴のように凹んだ跡があった。このきれいな円形からいって、仕込であろう。

どう考えても怪しい。この小さな穴、きっと何かをはめ込むようになってるのだろう。とはいえ、この穴にはめ込むようなものがないとどうにもならない。

その辺に転がっていないかなあと思い、テーブルの周辺に目を向けた。しかし、やはりと言うか、何も無い。

「これ、指が一本は入るくらいの大きさですね」

空がそんなことを呟いた。その瞬間、もしや　という気持ちが湧いてきた。もしかして、もしかするかもしれない。僕は試しに、自分の人差し指をその穴に差し込んでみた。

ちょうど指の付け根の辺りまで差し込むと、奥に突き当たった。ちょうど、指がはまる広さだった。

ガコン

何かが落ちたような音がした。すると、フロアの隅のガラス扉が横へスライドし、どこかの部屋に通じるような道が出現した。

「……うーん、微妙に予想通りの展開だ」

思わず、そう口に出してしまった。それと同時に、呆然としていた空は笑い始めた。

僕たちはそこへ進んだ。その周りのガラスだけ、異様だった。

なぜなら、ガラスの壁なのに外が見えないのだ。というより、鏡……か。

その通路へ進むと、個室を発見した。中は部屋の中央に小さな箱がある以外、何も見当たらない。あるとすれば、天井の各場所に付いている電球くらいだ。

その中央の箱は、青や赤、黄色の宝石で装飾された宝箱のようなものだった。鍵穴のようなものが見当たらないので、簡単に開けませんでした。

箱の中には、小さな……なんだろう、これは。

「これ……鍵　なのかな？」

それを空は眺めていた。

ビー玉くらいの大きさの赤い玉が埋め込められた、変な形をした鍵……だろうか？ この歪な何かを言葉で言い表せるものか思いつかない。語彙がそんなに豊富ではないのでね。

「変な形……ただの石の欠片みたいですよ」

「だな。こんなもの持って行っても、何の役にも立たない気がするが」

「けど、空さんにだけ聴こえた声は、それが必要だって言っていたんですよね？」

「必要と言うか……導くやら何やら」

「だったよーな。」

「別に大きな荷物じゃないわけだし、持ってつてもいいんじゃないですか？」

「そう、だな」

僕はその鍵のようなものを手に取った。思ったよりも重い。鉛みたいで、ずっしりとしていた。

これが本当に必要なのか……疑心暗鬼になってきた。まあ、どこからとも無く聴こえてくるあの声がウソをついたことは無かったし、いずれ、この変なものが必要となる時が来るだろう。

このフロアから出ると、古代ティルナノグ文字で表札が飾られていた。

『カナン生物研究所：B - 014』

奇しくも、生物実験をしていた場所が同じカナンというのも、きつと何らかの因果なんだろうな……。

1階まで戻り、僕たちは無人のビルから出た。その時、何らかの心配がした。ビルの外に出た瞬間、入ってくる時とは違う雰囲気を感じた。

「どうしたんですか？」

「……………」

こういう時、人間の六感とはすごいものだ。最初とは違う「それ」を感じるのだから。

「空さん、どうし」

「後ろに隠れる」

僕は空の腕を引っ張って、僕の影に入れた。ゆっくりと左右を確認し、視線を当たりに散らばせる。

辺りは閑散とした道路に隔たれた建物群。巨大なビル、マンションのような住宅。それ以外、何も無いように見えるのだが……どうも、似ても似つかない何かがいる気がする。

僕の警戒心に気付いたのか、空は口を閉ざし、同じように辺りを見渡した。

「……！ 空さん、あれ……………！」

空が小さな声でこのビルの上を指差した。そこには

「……………なんだ？」

ビルの屋上から、僕たちを見下ろしている見たことも無い何かがある。そこに佇んでいた。

異形、異様。

機械なのか、動物なのかわからない。一応は生命体なのだろうか。ライオンのような顔をしているように見えるが、胴体はそうじゃない。鋼の体だ。群青色の装甲を身に纏い、そこかしこから黄色っぽい

い毛がはみ出ているように見えた。背中には紫色の何かがある。ここからだ、それが何かよくわからない。

「グオオオオ　　！！」

その生命体は遠吠えをした。それはあまりにも不気味で、耳鳴りを引き起こすほどだった。ライオンの鳴き声ではない、聞いたことも無い生物の声だ。あんな高い場所から、これほどまでに大きな咆哮を響しているということは、きつとりサたちにも届いているだろう。

そう思った瞬間、その生物はビルの上から飛び降りた。100メートルはあるうビルの屋上から降りたら、いくらなんでも地上に叩きつけられ

そう思ったが、その生物は道路に大きな音を響かせて降り立った。ちょうどその場所が、ひび割れて凹んでしまった。

その生物とは5メートルほど距離がある。その生物は、たしかにオスのライオンの頭部を持つ。しかし、胴体と四肢は鋼の鎧で固められていた。爪がある部分なんて、ライオンの爪ではなかった。鷹の爪のように長く、血塗られたかのように真っ赤だった。背中にあった紫色の何かは、巨大な一対の翼だったのだ。

ライオンに翼？ そんなもの、あり得ないじゃないか……と悪いそうだったが、そうでもなかった。このビルで、合成生物の実験が行われていたことを考えれば、あり得る話なんだ。そう、あれはきっと合成された動物。ライオンと……何かはわからないけれど。

その生物と僕の視線が合った。僕たちに襲い掛かってくる。そう確信した。

僕はすぐさま手をかざし、心の中でその名を呼んだ。

## ティルフィング

瞬く間に光が終結し、剣の形を成した。薄っすらとした透明感のある水色の刀身。煌びやかな宝玉がはめ込まれた鏢。この姿を見るのは、久しぶりだ。

ティルフィングが形を成した瞬間に、その生物が僕たちの方へ突進してきたのと同時に、僕は空を抱き寄せた。

「キヤツ！」

傍にいたとはいえ、少し離れているだけで不安だ。襲われる気がする。こうして腕で抱えていれば、たぶん大丈夫。……闘う分にはあれですけど。

野獣は走りながら大きく跳ぶ。そして、牙をむき出しにしながら、僕たちに襲い掛かってきた。

軽く横へステップをしてかわした。左腕で空を抱えているため、あまりスピードは出せないのだが、野獣の攻撃速度は思ったよりもたいしたことはない。とはいえ、一般的なライオンよりは速いだろう。

獰猛な爪が繰り出される。ホリンやリユングヴィ、そしてシユヴアルたちに比べれば、のろい。少しの間、余裕なので様子を見ていたが、この程度だとわかった時、僕はティルフィングでやつの左目を潰した。

後ろの2本の足で立ち上がり、地響きがするような鳴き声と共に、野獣は前足でその部分を押さえた。僕はすかさず剣を素早く振りぬき、斬撃による衝撃波を繰り出した。衝撃波は野獣の鎧のような胴体に直撃した。が、あまりに固いのか、小さな跡を付けるだけに留まった。

「空さん!!」

思ったよりも硬いんだな……なんて感心していると、野獣は体勢を整え、再び襲い掛かってきた。

赤い爪が妖しく光る。だが、それは僕の目の前を切るしかなかった。空は「わ! わっ! わっ!」と声を発しながら、僕に振り回されている。時折おかしくなり、笑ってしまいそうだ。

すると、野獣は大きく道路の所まで下がった。左目の辺りから、真っ赤な血がぼたぼたと流れている。

何をするつもりなのかと、僕も動きを止めてそいつを見ていた。野獣は残された目で、僕を睨んでいる。その時、野獣の右目が一瞬だけ、小さく光ったように見えた。

「いたっ……!」

突然、空が頭を抱えて俯いた。

「どうした!？」

「頭が……い、た……い……!」

彼女は顔を歪ませ、苦しそうな表情を浮かべている。

野獣の方に目を向けた。奴は小さく震えながら、僕たちを見つめているだけ。何をされたのか、この状況ではわからない。

「……!!」

その時、頭の奥で激痛が走った。まるで電流が流れたように、強烈な痛みがほとばしる。いつも感じていた抽象的な頭痛ではなく、現実的な頭痛だ。あまりの激痛に、僕は立っていられなかった。その場に、崩れるように倒れて込んでしまった。

これは……あの施設で見つけた調査書に載っていた合成生物が研究員を殺した時に用いたと書かれていた、超音波……? ?

まさか、そんなことが……!

待っていたかのように、野獣は僕たちに近付いて来た。ライオンが近づいてくる時に聞こえる、「グルルルル」という声が、否応

にも耳の中へ入ってくる。

くそ……このままじゃ、やばい。このままでは、奴の餌になってしまう。だけど、ひどい激痛だ。ハンマーか何かで何度も頭を叩きつけられているような感覚。あの調査書に書かれてあったことが本当ならば、脳細胞や神経が破壊されかねない。

どうにかしねえと……！

野獣はある程度僕たちに近付いた瞬間、草原を駆けるライオンのように、僕たちに突進してきた。よだれを口の端から流しながら。奴は直進してきていると思いきや、途中で左へ回った。そして、そのまま再び直進してきた。奴は……空を狙っているんだ！

やるお……やらせっか！！

僕はとっさに左腕を伸ばして空をかばった。その瞬間、腕に激痛が走る。

「ぐっ！！」

頭痛以上の激痛で、僕は顔を歪ませた。野獣は僕の左腕に噛み付いていた。奴の牙が、深々と腕の肉に食い込んでいる。

「そ、空さん！？」

空は無事だった。けど、その顔は頭痛で歪んでいる。

野獣は噛み付いた牙を抜こうとしない。だが、チャンスだった。

奴はそのまま動かない。腕を食いちぎろうと、精一杯力を入れて牙を食いこませようとしている。だが、もう遅い。ソリッドプロテクトで、それ以上は食い込まない。

終わりだ！！

僕は右手に握ってあるティルフィングを、奴の首の付け根へ差し込んだ。刺さった瞬間、野獣はビクツとした。すると、フルフルと小さく震えだし、ゆっくりと僕の腕から牙を離す。そして、大きな

咆哮と共に、野獣は暴れ出した。その衝撃でティルフィングが抜け、そこから大量の血液が溢れ出した。

「グオオオオオオ！！」

再び吼え、口からも血液を吐き出しながら、奴はのた打ち回った。すると、野獣の胴体を埋め尽くしているあの鎧の隙間から、小さな光が漏れ始めた。発したかと思えばすぐに消え、また発光。その繰り返しだった。

気が付けば、頭の奥の痛みも消えていた。残ったのは、腕に残る深い傷と痛み。

野獣は真つ赤な血をばら撒きながら、少しずつ、少しずつ後ろへ下がり始めた。意識があるのか無いのか、もはや皆目見当が付かない状態だ。

「ググ……ゴ、ゴ……」

突然、野獣の声ではなくなった。まるで……そう、故障した機械のような……。

その瞬間、装甲から漏れていた光が大きくなり始め、火花を散り始めさせた。パチパチと、線香花火のように。

「……これは……」

嫌な予感が脳裏をよぎった瞬間、倒れこんでいる空をかばうようにして、僕は自分の意識を集中させた。バルドルの力で、大きなシールドを張ったのだ。

そのシールドが張られた瞬間、野獣は大きな光に包まれた。そして、巨大な爆発を引き起こしたのだ。

「空、つかまれ！」

「は、はい！！」

彼女の手を僕はグツと握った。彼女もまた、同じように握り返し

た。

野獣は大きな爆発を引き起こし、僕や辺り一帯を巻き込んだ。その爆発の光の中に吸い込まれ、僕は意識が飛んでしまった。

## 66章・空色の約束(前書き)

ちと性的な表現がありますので、しし注意ください。

## 66章・空色の約束

「ら……………、……………そら……………」

まったくの暗闇。暗闇しか見えない。自分の姿さえ見ることができない状態。いや、そもそも自分の姿がここにあるのかどうかもわからない。

「……………そ……………空……………」

あれ、どこからか声が聞こえる。

遠く離れた場所に在りながらも、それは古より自分の中に息衝いていた。たしかに存在するかのよう、ずっと、ずっと呼び続けた声。

君は……………誰？

「そらさ……………空さん！」

僕はその声の主を求め、もがいた。必死に、上へ行こうと。

「空さん！ 空さん！！」

その瞬間、目の前に光が広がった。あまりの光でまぶしく、思わずまたまぶたを閉じてしまった。もう一度、ゆっくりと目を広げると、目の前には

「空……か？」

そこには、彼女の顔がある。柔らかい彼女の長い髪の毛が、僕の首筋に当たっている。

「よかった！ やつと目を覚ましてくれた！」

彼女の顔に、安堵が広がった。すると、左腕に激痛が走る。そこに目をやると、血まみれで肉がえぐられたような状態になっていた。「動かないで！ ひどいケガですから……」

ああ、そうか。あの大爆発で、僕は気を失ってしまったんだ。せつかくシールドを張ったのに、自分の意識が飛んでしまうなんて……情けない話だ。

「大丈夫ですか？ 意識は……あります？ 腕は？」

「まあ、大丈夫。意識はちゃんとしてるし、腕は……これも大丈夫だろ」

「他に、痛いところとかないですか？ 変なところとか……」

彼女は僕の体のあちこちに目をやり、矢継ぎ早に問いかけてくる。「大丈夫だよ。なんともないから」

「本当ですか！？」  
と、彼女は僕の目の前に顔を出してきた。思わず、僕は顔を引いてしまった。

「あ、ああ……」

「ウソとか、ついてないですよ？ 本当に大丈夫なんですか？」

あまりにも心配症なので、僕は再び自分の体のあちこちに意識を集中させてみた。……とりあえず、ケガをしているのは噛まれた左腕だけか。他の箇所は、擦り傷などはあったのかもしれないが、すでに自然治癒リジエネイトで治癒している。

「左腕以外は大丈夫さ」

そう言っただけで笑顔を向けると、彼女は力が抜けてしまったのか、大きく息を吐きだした。すると、彼女の瞳からぼろぼろと涙が溢れ出てきた。

「な、なんで泣くんだよ？」

不意打ちにも等しい彼女の涙は、少なからず僕を慌てさせた。

「な、なかなか目を覚まさないから、どうしようって……」

涙を手で拭いながら、彼女はそう言った。

そう言えば……ガイアで気を失った時、彼女は同じようなことを言っていたっけな。泣きじゃくる彼女を見ながら、僕は申し訳ないと思いつつも小さく微笑んでしまった。

「泣くなつて。別に死んだわけじゃないんだし」

僕は彼女に笑顔を向けた。手と手の隙間から、彼女はまだ涙を流しているのがわかる、

「……心配してくれてありがとな」

彼女の震える小さな肩に手を置くと、その震えは一瞬のうちに収まった。そして、空は小さくうなずいた。

「空さん……ありがとうございます」

彼女は涙を拭い、微笑みながら言った。

「な、なんでお前が礼を言うんだよ？ 普通、僕が」

「そう言ってくれて、ありがとって意味ですよ」

戸惑う僕に対し、再び微笑みを向ける空。

……変化を感じ始めたあの頃、こんな会話があったよな。お前は、同じように「ありがと」って言ってくれた。

「……包帯、巻いてあげますね」

「え？ あ、ああ」

少し想い出の中に回帰していると、彼女はバッグから包帯を取り出した。すでに左腕には包帯が巻かれていたが、赤い血が滲み出ている。

一息ついた時、僕はようやく周りの風景に気が付いた。

僕たちがいたのは、1つの個室だった。それも、ロッカーのような場所。さっきまでとはまったく違う。ほこりっぽく、辺りに物が散らかっている。天井にある平たい電灯は光っているものの、時折

消えかけている。

「ここ、どこだ？」

「たぶん、地下だと思えます」

空は処置をしながら答えた。

「地下？」

「……あの爆発で道路が崩れて、地下街みたいな場所に落ちたんです。それで、近くにこの部屋を見つけたから……」

地下街、か。まあ、これほどの大都市だ。地下街なんてものがあるとしても不思議ではない。

「ん？ じゃあお前、一人で僕をここまで？」

こくりと、彼女はうなずいた。

少しの間、言葉を失った。非力な彼女が、僕をここまで運ぶことができたなんて。それと同時に、少しの間とはいえ、気を失ってしまったことを恥じた。せめて、動けるほどだったら、彼女に面倒をかせげなかつたのに。

治療が終わり、僕は彼女がこの個室から引つ張り出したであろう毛布の上で横になっていた。腕の怪我は本来ひどいもののだが、聖魔の力を持つ者の特権である「自然治癒」が発生しているため、少しずつではあるが、傷は癒えていく。これは骨が折れた場合なども治療してくれるという優れたもの。シュヴァルツにやられたあばら骨も、このおかげで数日で完治したのだ。

「……あの生物、なんだったんだろう」

僕の傍でちよこんと座っている空が呟いた。

「最初はライオンかと思ったけど……どう見ても、違う。あれは……ただの動物じゃなかった。普通では存在し得ない……そう、魔物みたいな……」

魔物……たしかに、言い方は悪いがその表現が最も正しいだろう。人間が作り出した、魔物。

「怖かった。あれって……自然に生み出されるような生き物、じゃ

無いですよね？」

「だろうな。違う世界とはいえ、生態系は同じはずだから」

「じゃあ、あれは……人が生み出したものなんでしょうか」

その言葉が出たのと同時に、僕の心に汗が溢れた。

「そうとしか考えられませんか。嫌な話だけど……」

そして、彼女は表情を曇らせながら言い始めた。

「そうだとしたら、ひどいにもほどがあります……ティルナノグの人は。動物には、何の罪も無いのに。人の欲求が満たされるために、きつとライオンは食い物にされたんです」

「……………」

「私と同じ人が行ったこととは思えないけど……私たちが人のせいなんですよね」

どこか自分を蔑むかのように、彼女は小さく笑った。

「あの生物があんな風にされたのも、私たちに襲い掛かったのも……」

死んでしまったことも……」

どこでそうなってしまったのか　人は、そうなるように運命づ

けられているのかもしれない。文明が発達すれば、結局は同じ。そ

ういうことなのだろうか。

「……あんまし考えるな。気分が悪くなるだけだしさ」

顔を悪くしていた彼女は、小さくうなずいた。彼女はそこまで

「血」に慣れていない。アヴァロンでの時も、今回も。

「少し、休め。ずっと見てたんだろ？」

「そうですけど……」

すると、彼女はどこか不満気な顔で僕を見た。

「どつしても、一つだけ言っておきたいことがあります。いいですか？」

「へ？」

な、なんだろう……身に覚えのない僕としては、彼女の視線が怖い。てか、なんで怖く思ってしまうんだよ。堂々としてりやいのに。

「もうしないでください」

「な、何を？」

そう問い返すと、彼女は僕のほほを指でつねって来た。

「いてて！」

「今回みたいなことです！」

こ、今回みたいなこと？ そう言われてもまったく理解できない。そんな僕の様子に気が付き、彼女はよりいっそう力を入れてつねる。「だから！ 私をかばったことです！」

かばった……ああ、なるほど。けど、かばったのになんで怒られるにやいかんのだ？ そこんところが納得できない僕は、つねられた状態のまま顔をしかめた。

「私が怒ってる理由、まだわかんないです？」

「いや、寧ろお礼を言われるんじゃないかなって」

苦笑しながら言うと、彼女は呆れたのか、指を離してため息を漏らした。

「……もう、空さんは……」

何か落ち込んでしまったようで、なぜか申し訳ない気持ちが湧いてきてしまい、それと疑問が混じり、僕はどうすればいいのかわからなくなってしまった。

「えと……な、なんで怒ってんの？」

顔を俯かせていた彼女は、チラッと僕を見てきた。

「だから、庇ったからですよ」

「いや、だからわけわかんないんだって。あん時」

「ケガしたじゃないですか」

僕の言葉を遮り、彼女は顔を上げた。さっきまでの怒りは消えており、哀しく微笑んでいるように見える。それに気付いた時、思わ

ず心がびくついた。そういう風にしてしまったのは、僕自身だからだ。

「二度も庇って……もし　って考えなかったんですか？」

「二度？」

「……噛まれた時と、爆発の時です」

前者はともかく、後者は……まあ、庇ったと言えば庇ったになるのかもしれない。ただ、あの時は「大丈夫」という確信があった。

天井を見上げながら納得した僕を見て、彼女は言う。

「もし、無事じゃなかったらどうするつもりだったんですか？」

「何言ってるんだよ。あの程度でどうにかなるほど、やわじゃないって」

そう言って微笑むと、彼女は再び顔を俯かせた。

「それに、少々ケガしたって」

げっ……と、僕はそのことに気付いた瞬間、心中で言ってしまった。

彼女は、泣き始めていたのだ。

「お、おい、なんで泣くんだよ？」

慌てて彼女の肩に触れようとした瞬間、ふわりとした感触が自分に伝わってきた。空が記憶を失う前、何度も感じたその感触。空は、僕を抱きしめていた。そのことに驚くのと同時に、やはり軽いと感じた。

「……どうしたんだよ、突然」

小さな彼女の肩と頭に手を置き、訊ねる。聴こえてくるのは、嗚咽している彼女の小さな声だけ。

「庇ってもらうのが、嫌だったのか？」

そう訊ねると、彼女は頭を小さく振る。

「じゃあ、悲しいのか？」

再び、顔を振る。

「……半分は、悲しかった」

涙声の空。まだ、顔を沈ませたままだ。

「あと半分は、嬉しかった」

そう言われると、ますます泣いている理由がわからなくなってきたしまう。

「ただ、嫌なことしか浮かばなくて」

「……………」

そっか……………そういうことか。

彼女が泣いている理由、それは嬉しいからでも、悲しいからでもない。

怖いんだ。

「そんな風に考えるなって。大丈夫だから」

「だって……………」

僕は彼女の背中を、ポンポンと叩いてやった。これって、よく母親が赤ちゃんとかにやるんだよな。あのリズムと違って、なぜか落ち着くものだ。もしかしたら、人間の奥底にある命のリズムに近いのだろうか。

「僕も、みんなも元気にしてるだろ？」

「……………」

「だから、お前も笑っていてくれよ。じゃないと、なんか……………」

と、僕は唸りながら自分の頭をかいてしまった。思わず、空は涙でポロポロの顔で僕を見上げる。

「まあ、その、なんだ。大好きなお前のために頑張れないし、さ」

「空……………さん……………」

少し照れくさくて、僕はぎこちない笑顔でそう言った。すると、空は泣き顔のまま小さく微笑み、再び強く僕を抱きしめてきた。

「……………あの、ですね」

「ん？」

すると、彼女はいつの間にか泣くのを止め、恥ずかしさからなのか、赤くした顔で僕を見上げた。

「お願いが……あるんです」

なぜか、彼女は僕とまともに視線を合わせられないでいる。

「その、あの……」

そして、彼女は「願い事」が何なのかを、僕に告げた。

その願いを受け入れるということは、彼女を受け止める　ということでもあった。それと同時に、彼女の言いようのない不安を払拭する、一つの手段であったのかもしれない。

終わった後の……表現できない「罪悪感」。それは、それをしてしまったという現実と、苦痛に顔を歪ませていた彼女の表情と、そして行為によって出た彼女の血と自分から出されたものが混じっている、彼女の陰部を見てしまったからだろうか。

けど、彼女は首を振る。

それでも彼女は続けることを望んだのだ。

空は「痛い」と言いながらも、涙を流しながらも、微笑みながら望んでいた。

空は怖がっていた。「ひとり」になることを。

彼女には死の宣告がされている。あと数ヶ月、という。

それは、言葉で表現できないほどの恐怖だった。残り数ヶ月しか生きられないという恐怖と、死は数ヶ月後にやって来るといふ恐怖と同じような恐怖でありながらも、個々が大きな痛みとなって彼女を苦しめていた。

いつも微笑んで、優しく他人と接する普段の彼女からは想像もつかない現実。そう振る舞うことでしか、彼女はそれを遠ざけることができなかった。

僕たちと旅をする中で、彼女はその真実を霞ませてゆき、独りにならない限り、考えることは少なくなっていたのだという。

でも、あの時……僕が彼女を庇うことで、彼女の脳裏に一つの「未来のビジョン」が浮かんでしまう。

それは、僕が死ぬということ。

それと同時に、自分が僕と離れてしまうということ　自分自身が死ぬということも。

彼女の心に押し寄せてきた「もしもの未来」と「現実」としての恐怖。

だからこそ、あそこまで僕と繋がることを望んだ。そうすることで、少しでも恐怖を遠ざけようとする。

「『ひとり』になりたくない」

行為の最中、彼女は初めて味わう痛みと湧き上がってきた快感の混じった表情で、そう言った。

誰しもが持つ、それに対する恐怖……。

死の宣告をされた彼女だから、それを如実に感じていた。

心と体が繋がり、僕はあることに気付いた。

どうして、僕たちは複数の人と一緒にいようとするのか。どうして、寄り添って生きようとするのか。

それは、恐怖から逃れるためだ。どんな生あるものでも、死ぬことを避けることはできない。太古の昔から　あらゆるものが創造されたその時から、定められたこと。生命には潜在的に、それに対する恐怖感があるのだ。

なら、死に対する恐怖とは、生きることこそ最も感じることもあ  
るのだろう。

今、その場に息衝いている　ということを。

生と死

それは、たしかに一つなのかもしれない。

「空さん……」

彼女は何度も僕の名を呼び、痙攣するかのように体を弓なりにした。それと同時に、自分も果ててしまった。

何度も、それらを繰り返した。

そして、僕たちは一つの約束を結ぶ。

傍にいと。

始まりから終わりを迎えるその過程の中で、僕たちは一つになっていた。

そのことが、後々「ある人たち」に大きく関連していくとは……  
この時の僕は、想像することさえできなかつた。

## 67章：近未来ビル 天上装置を探して

「ホラ」

崩れた瓦礫の上に立ち、僕は彼女に手を差し伸べた。

「……よしよ」

空は僕に引つ張られる形で、瓦礫をよじ登った。あの爆発で崩れた道路の真下は、本当の意味での「地下街」だった。聖地カナンとまではいかないが、約5メートルほどの高さがある巨大空間。ほぼ、研究施設だったが。

「青いですね……」

「そうだな」

ここ、カナンの上空には空中都市群が浮かんでいるが、青空を隠すことはできない。

すると、空は僕の手を握った。思わず顔を向けると、彼女は微笑みを向ける。そして、僕たちは道路を歩き始めた。太陽が眩しい…… どうやら、まだ朝を迎えてまもない頃のようにだ。

「そう言えば、僕が気を失った時間はどのくらいだったんだ？」

「そんなに長くはなかったと思います。たぶん……30分程度だったかな」

「そっか。なら……」

僕は辺りを見渡した。その時、僕はとんでもないことを思い出した。

「ああああア！……！」

それと同時に驚愕の聲が飛び出る。

「ど、どうしたんですか!？」

空はびつくりして訊ねてきた。

「じゅ、重大なことを忘れてた！」

「重大なこと？」

空は頭をかしげる。こいつ、まったく覚えてねえな。

「日が暮れる頃には戻れって話だっただろ!？」

「……あつ！」

僕と空は顔を合わせた。

「む、夢中になりすぎたんでしょうか？」

そう言う空の顔は、引きつっていた。

「……なりすぎたな」

ハハハ、と僕たちは笑い合い、すぐさま走り出した。

「どっちだっけ!？」

「お、覚えて無いです！」

走りながら、僕たちは笑っていた。

「あんたたち！ 一体、どこをほつつき歩いてたのさ!？」

鬼のような怒声が、静かな古都カナンに響き渡る。

無事、あの公園に戻ることができたのだが……そこにいたのはきれいな金色の長髪を舞いあがるほどに怒るリサだった。他のみんなは、ホツとした様子で苦笑している。

「い、ごめん」

「ごめんなさい……」

仁王立ちして、閻魔様のように怒っているリサの前で、僕たちはしきりに頭を下げていた。

「だ・か・ら！ どこで何してたのかって訊いてんの！」

「うっ……」

それを訊かれると、まずい。×××してました、なんてとてもじゃないと言えない。それは、空も察知していた。

「まあまあ、落ち着け」

ハハハ、と笑いながら、デルゲンはリサの肩を叩いた。

「ともかくにも無事に帰ってきたわけだし、いいじゃないか」

「そりゃそうだろうさ。けどね……」

「もちろん、お前の気持ちは理解してるよ。二人も十分反省してるんだし……な？」

デルゲンは僕たちに顔を向けた。

「あ、ああ。心配させて、本当にごめん！」

「ごめんなさい！」

僕と空は一緒に、深々と頭を下げた。申し訳ない気持ちでいっばいだが、僕はストレートパンチ一発くらいは覚悟している。

「こう言ってるわけだし、もう許してやれよ」

「……ちえっ、わかったよ」

そして、リサは噴水場の近くへ行ってしまった。

ようやく、リサ魔人の許しを得られたので、ホッと、胸を撫で下ろした僕たち。

「ところで、本当に2人はどこ行ってたんだ？」

怒られる様を、笑いながら傍観していたレンドが言った。

「えっと、まあ……」

僕と空は、魔物に出会ったこと、その魔物が起こした爆発で地下街に落ちてしまったことを説明した。もちろん、あのことは秘密だが。

「なるほどねえ。しっかし、お前ほどの奴が、魔物なんかにやられるなんてなあ」

「うぐっ……………」

レンドの言葉が心に突き刺さった。そ、それを言われては、反論のしようがありません故。

「ち、違うんです。空さんは、私を庇って……………」

多少なりとも落ち込む僕を庇うかのように、空は言った。キョトンとした様子のレンドは、すぐに細目で笑顔になった。

「へえ〜」

「な、なんだよその目は？」

「いやあなに、お前らしいなってことよ」

「……………」

レンドは僕の肩を強く叩き、笑い始めた。……………なんか恥ずかしい。

「何はともあれ、ホントに2人が無事でよかったよ」

「心配させてごめん、デルゲン」

「俺も心配したんだぜ？」

「……………お前が言つとウソ臭いな」

そう言つと、レンドの笑顔でチョップが僕の脳天に直撃。

「ハハハ、いじめてやんなよ」

そう言つてデルゲンは僕の肩に手を回し、

「教えといてやるよ」

と、小さな声で言った。

「何を？」

デルゲンがヒソヒソ声なので、僕も必然とヒソヒソ声になってしまった。

「リサの奴が1番心配してたんだ」

「……………リサが？」

「『2人を探しに行く!』……………つて言つて聞かなくてよ」

なぜか、レンドまで僕の肩に手を回して行つて来た。なんか、まるで二人に尋問されてるみたいだ……………。

「まあお前のことだし、無事だろつて思つてたんだが……………どうも、リサは心配症だな」

と、デルゲンはシエリアと話しているリサに目をやった。

「……………」

デルゲンは「朝まで待とう。それまで帰らなかったら、探しに行こう」と言っ、一人で行くこととするリサを止めたい。日が沈み、怪しさ漂うこの都市を探索するのは、危険だと考えたからだ。

「あれだけ怒るってことが、証拠だな」

レンドはそう言っ、リサを見ながら笑い始めた。

「アンナなんて、泣いてたんだぜ？」

デルゲンの言葉で彼女の方に見てみると、なんだか悲痛な面持ちで、加工された石のいすに座っている。

「彼女を宥めんのも一苦労だったよ。…………彼女にしてみれば、ヴァルバのことがあるわけだしな」

「…………ごめん」

「謝らなくてもいいよ。こうして無事に戻ってきたんだからさ」

「そうそう。気にすんなって」

二人は僕の背中を軽く叩いてくれた。

「…………ありがとう、二人とも」

どうやら、他のみんなも天上装置なるものを見つけられることはできなかったようだった。結構、広い範囲を探索したのだが、どこにも見当たらない

「ただ、1つだけ怪しい場所を見つけたんだ」

リサは床にあぐらをかいて言う。少しは女性らしい座り方でもすりゃいいのに…………などと思っってしまう。

「ガードシステムでも発動してんのかどうかわかんないんだけど、妙な光で遮られてさ」

「その光に触れると、ビリビリっとしてな」

「どうやら、デルゲンは不覚にも失神してしまっただけらしい。ということは、スタンガンみたいに電流が流れているのかもしれない。」

「それってどこ？」

「私たちが搜索した北の辺りよ。そこまで遠くじゃないけどね。」

「どこかのコンピュータをいじって開けるのか、調停者 しか入り得ない場所なのか……どちらかだと思っただけですけど。」

「樹もそこへ行ったのだとしたら、アンナの意見が妥当だな。」

「ともかく、そこへ行ってみようか。手がかりはそれしかないようだし。」

「僕がそう言うと、空が僕の肩を軽く叩いた。」

「空さん、あれのこと、言わないんですか？」

「あれ？ あれって？」

「……変なものを見つけたじゃないですか。」

「苦笑しながら、彼女は僕のバツクを指差した。」

「あ、そうだった。」

「あの鍵（つばいもの）だ。すっかり忘れてた。」

「実は、こんなものを見つけたんだ。」

「僕は自分のバツクから、あの鍵を取り出した。それを、みんなは顔を近づけて見つめる。」

「……なんですか？ これ。」

「第一声は、アンナだった。」

「たぶん、鍵だと思っただけだ。」

「それにしても、歪な形してんだよね。」

「鍵にしては……変だな。」

「レンドの言うとおり、鍵にしては重いし、艶やかだし、異形だ。」

「頭の奥で声が聴こえてきて、なんだったかな……『蒼き翼』、

『導く』……とかがって。」

「例の、空にしか聴こえないやつだよな？」

「デルゲンの問いに、僕はうなずいた。」

「その声に従ったことをすれば、たしかに道は開けてきた。今度も、

きつとそうだと思う」

「ということは、その鍵があつた場所を通るための鍵だとすると……その先には、天へ通じる道……天上装置があるってこと？」

リサは自分の顎に指を当て、推測する。

「そうかもしれない」

「とりあえず、行つてみるしかねえな」

僕たちは荷物をまとめ、リサやデルゲンに付いて行つた。

自動車もいない、乗り物と言つた類のものがどこにも見当たらない道路を、僕たちは歩いて進んだ。二千年前までは、多くの自動車たちが日本の大都市のように、無限に行き交う所だつたんだろう。

歩いていて再び思うのが、これだけ陳列する巨大ビル群があるにも関わらず、僕たちの声や歩く音と、風が運ぶ音しか聞こえないというのが、なんとも言い切れないほどの不気味さなのである。人の気配がするはずなのにしないという不気味さ。つまりは、放置された家屋。人がついさつきまで生活していた状態なのに、誰もいないという感じだ。

直線の道路を進み、今度は右へ曲がつた。そこから少し進むと、上空にある道路が現れた。都会などによくある環状道路だ。その道路の陰に隠れるようにして、建物の内部へ通じる自動ドアがあつた。自動ドアを進むと、すぐに階段が現れた。と思つたら、それはエスカレーターだつた。ずっと先まで、結構な高さである。

それを昇り終えると、大広間 エントランスに出た。至る所に透明なガラスの自動ドア。多数のボタンが備え付けられた巨大な機械。10メートルはあろう天井。そこには、多くの電灯がきれいに配置されていた。床はすべすべ。まるで、色を持った鏡のようだつた。赤だつたり青だつたり、黄色だつたり。

リサに案内され、そのフロアを進み、1つの階段を進んだ。そして、1つの自動ドアを進み、通路に出ると、そこには、彼女たちが言っていた『光の壁』があった。

通路を塞ぐようにして、ほんのりとレモン色をした半透明な薄い膜が張られている。

「……電流のようには見えないんだけどな」

僕は触れてみようかなと思い、手を伸ばそうとすると、

「ま、待って。ホントに気絶するぞ？」

デルゲンが僕の手首を掴んだ。いや、人間の好奇心って怖いね。

とりあえず、あの言葉でも言ってみようか。

「ネシイエ・ミヒ……我は調停者」

すると、一瞬この通路の電灯が点滅した。そして、再び元に戻ったかと思えば、右手側の壁から、白い給食のトレイ程度の大きさのものが出てきた。そこには古代ティルナノグ文字で ヴェルエスと刻まれ、その文字の下にハンドボールほどの大きさの円形が刻まれている。そこには、小型カメラのようにちっちゃなガラス玉みたいなものが3個、正三角形の角の場所にはめ込まれていた。

はて？ これはどうしろって言うんだ？ ヴェルエス と記されているからには、僕が関係するんだろうけど。

手をかざせばよい

ふと、聞き覚えのある声が舞い降りた。他の人の様子から察するに、僕にしか聴こえていないようだ。

お前は、バルドルか？

この独特の感じ、あの女性の声ではない。

そこに手をかざすのだ

かざす？ このトレイに？

ああ。円形の上にかざしてみる

僕は頭をひとつかきし、そのトレイの円形の上に手をかざした。すると、「ピピピ」という機械音を立て始め、あのガラス玉みたいなものが青く発光し始めた。

「……指紋認証・静脈検査を開始します。手を動かさないで下さい……」

そのトレイが、突然声を発した。

「……ピピ……オールグリーン。カイン＝ウラノス＝ヴェルエスを継ぐ者と認証しました。エントリー認証、ガードシステム解除……」

だんだん、あの薄い光の膜が消え始めた。まるで、映像が映らないテレビの砂嵐が、徐々に消えていくかのようだった。そして、数秒後には膜は完全に消え去った。

「……すごい仕組みですね」  
思わず、アンナは呟いた。

「ていうか、カインを継ぐ者だったら、リサやアンナ、空ちゃんでもよかったわけ？ テイルナノグ皇室の流れを組むわけだし」

レンドが疑問を投げかけた。

「そういうことになるけど……」

「私が来た時には、この装置は出てこなかった。傍系には反応しない。つまり、血の濃い人に反応するようになってんでしょね。」

そもそも、『カイン』を継ぐ者なんでしょ？ だったら奴と同じ調停者じゃないと無理なんでしょーよ」

よくできた仕組みね、と言いながらリサは前へ進んだ。

調停者……よくわからない存在だよな。なんで、たかが人間なのにこんな力が備わっているのか。たしか、「次元を超越する存在」やらなんやらだったか。それが具体的に何を表わすのか、いまいちわからないところだ。

まるで巨大企業の通路のような通路を進んでゆくと、今度はエレベーターが現れた。あの生物実験があったビルと同じようなエレベーターだ。しかし、ボタンは4つしかない。開、閉、上、下 だけ。その中で光っているのは、下 以外のボタン。つまり、ここは 下 で、行けるのは 上 だけなのだ。

上 を押し、エレベーターが昇る。どうやら、僕と空以外、エレベーターを利用するのは初めてなようで（当たり前と言えば当たり前だが）、歓喜の声を上げていた。

「おおおお………すげえなあ、これ」

「どうなってるのかなあ!？」

と、レンドとシエリアは興奮のあまり、動き始めた。

「ちょ、ちょっと………あんまり動くなつて。止まっちゃうから」  
上へ昇る間、2人を抑えるのに一苦労だった。

エレベーターには、結構な高さを昇っているようだった。そう言えば、この建物に入る前に、高さを確認していなかった。たぶん、一番上まで昇っているっばいけど。

数分後、ようやくエレベーターが止まった。ドアが開くと、目の

前には中央に巨大な装置が置かれている大広間に出た。ドーム上のフロアで、天上の中央部分は床から十数メートルはありそうで、その部分だけ吹き抜けになっている。空の青が垣間見える。そしてこのフロアを見渡すと、壁がすべてガラス張りだった。そのため、外の風景が見える。

「うわああー！ すごーい！」

シエリアがそれを見るなり、そのガラスの壁へ走り寄った。

「うお……！」

思わず、声が漏れる。

カナンの大都市が、丸ごと見える。砂漠の果てまでも見える高さだった。カナンの建物中で、最も高い建物のようにだ。こうして見ると、本当に遙か先まで砂漠しか見えない。この辺りは乾燥してしまい、残されたのはカナンだけなのかもしれない。それにしてもここは一体、どれほどの高度なのだろう。100メートルだろうか、200メートルだろうか。いや、東京タワーよりも高いかもしれない。「感心しないで、これを見ろ」

デルゲンが後ろで言った。彼らは外の風景には目もくれず、フロアの中央にあった転送装置みたいな機械を眺めていた。転送装置よりも、遙かに巨大だ。半径は3、4メートルはある。だが、これの上空に対になっている円盤が無い。……ということは、今までの転送装置と違うのだろうか？

「これが、天上装置ですかね？」

空はその機械を見渡しながら言った。

「たぶん、そうだと思っただけ……」

「そのとおりよ」



## 68章：美しき魔女 愛憎の狭間に沈め

「大罪の都へ通じる、封じられし天への道」  
上から声が聞こえた。この声は

「……ミランダか？」

僕は後ろへ振り向いた。床から10メートルほど離れた場所に、幹部の一人・ミランダが浮かんでいた。

「ここでお出まし、か」

僕は彼女を睨んだ。それに対応するかのように、彼女は不敵な笑みを浮かべる。

「アトモスフィアへ行く前に、あなたたちをここで殺すのが、私の最後の任務」

笑顔でそう言うミランダ。殺すことに、何の躊躇いも感じていない。

「樹たちはどこだ？」

辺りを見渡す限りでは、ミランダだけのように見える。

「わかってるはずよ。彼らは、すでにアトモスフィアへと渡った。そして、最後の鍵を手に入れた」

「最後の、鍵？」

ミランダは笑みを浮かべた。

「……殺戮の冥帝が愛した『熾天使レナ』フィルム……その命  
とも言つべき元素の結晶体 聖玉マナ。ようやく、すべての  
鍵が集まったということよ」

「そんな、な……！」

間に……合わなかった……！！？

現実を直視できない僕を見て面白いのか、ミランダはクスクスと笑っている。

「残念ね。あなたの愛しい人の宝玉は……もう、元に戻すことはできない」

「う……ウソだ！」

「ウソじゃない。巫女の命は、もう救えないのよ」

そんな……そんな……！

体が震える。どうしようも無い事実を受け入れたくない。受け入れたくない。空がもう助からない真実なんて……知りたくない！  
「と言つても、どうせお前たちはここで死ぬのよ。巫女と一緒に、あの世へ送つてやる」

ミランダはそう言い終わると、素早く印を結んだ。

「雷光の刃よ……ライトニングブレード！」

巨大な剣の形をした雷が彼女の手から放たれ、僕たちに襲い掛かる。僕は傍にいた空を抱え、横へ避けた。

「ミランダ！ あんたの狙いは私と空だろ！？ 他のみんなを狙うな！」

リサはすでに体勢を整え、構えていた。

「……たしかに、あなたの言うとおり。けど、必要の無い人間を排除しておいたほうが、闘い易いとは思わない？」

そんなことを言われても、僕は未だに現実と向き合えずにいた。目の前にいる敵に、集中できない。

「こいつらには邪魔はさせない。殺すなら、私を殺してからでもいいでしょ？」

「……………」

ミランダは詠唱を止め、手を下ろした。

「いいわ。手を出さないと約束するなら、勝敗が着くまでは手出ししない」

「……わかった」

リサは僕以外のみんなを下げた。レンドやデルゲンも闘えるが、特別な力を持たないため、ミランダたちと闘うには劣ってしまう。殺されかねない。

「言うておくけど、空にも手出しさせない。今回は、私とリサ……2人で勝負させてもらう」

「何？」

「恋人のことで呆けているような人間には、興味無いからね」

ミランダは腕を組み、僕を見下ろす。

「てめえ……!!」

「挑発に乗るな、ソラ」

デルゲンが僕を抑えた。ただでさえ、困惑しているっていうのに……!

「お前はまず、心を落ち着かせろ」

「デルゲン……」

だけど、落ち着けてるのが無理な話だ。頭の中がグルグル回る。現実と理想が、地球と月のように円を描いている。永遠に交わることとの無い二つが、果てしなく回り続けている。

「空ちゃんを最終的に支えてやらなきゃならないのは、お前なんだ。まずは自分の心を整理しろ。いいな？」

「……」

僕は頭を抱えた。くそ……そうだよ。デルゲンの言うとおりだ。

空を……あいつを支えてやらないといけないのに、僕が現実を受け入れられていないんじゃないかあ支えてやれない……。

何かいい方法はないのか？ 何か……!

「さて、始めましょうか」

ミランダは空中で手をかざした。彼女は高さ5〜7メートルくらいのところで浮遊しているので、直接的な攻撃は届かない。しかし、リサはラグナ格闘術を扱える。彼女ならば、間接的な攻撃によってミランダにダメージを与えられる。

「紛うこと無き、優秀なる僕よ……天地が崩れ去りし時を喚べ  
擽猛なる牙を剥き出すがいい！！　パウルフエーノ！」

ミランダはリサが攻撃を開始する前に、詠唱を終えた。上空から、巨大な紫電の光線が降り注ぐ。リサはそれを低い体勢で走り避けたが、その紫電光線は角度を変え、彼女を負って行く。まるで、ホリンの繰り出した炎と同じで、意志を持っているかのようだ。

「崩せ、無限回帰へと！　パウルフエーノ！」

リサの手元が一瞬、閃光を放った。すると、ミランダの魔法が消え去った。……いつか聞いた魔法相殺だ。

「お返ししてやるよ！　喰らいな　閃波・剛爆！」

リサが繰り出した拳から、目では見えない空気の衝撃波がミランダに襲い掛かる。だが、それは彼女の前で轟音を立て、消えた。

「あなたの攻撃は受け付けない」

ミランダの周りには、いくつもの黄緑色をした光の玉が弧を描いて停滞している。

「それは……！？」

「さすがに、あなたと戦うにはこういったものがないと、敵いそうにないからね」

すると、数十個はあろう野球ボール程度の大きさの光弾が、高校球児もびっくりの速度でリサに襲い掛かった。リサは転がったり、ジャンプしたりして避ける。外れた光弾は床に直撃し、床の破片や粉塵を巻き上げている。

「これは……聖光装束!？」

リサはそう眩き、数個の光弾をバツク転で避け、印を素早く結んだ。

「光れ、宝石の如く！ クリスタルシエル！」

青透明な障壁がリサの正面に映し出され、光弾はそれに当たり、ミランダの方へ跳ね返った。だが、それは彼女の元へ帰還しただけのことであった。

「聖光装束……まさか、ただの一般人がそれを扱えるはずはない。じゃあ、あんたは……!？」

ただの一般人。つまり、リユングヴィの血族ではないと言うこと。ミランダは、小さく微笑んだ。

「そうね……あなたの言うとおり。けれど、リユングヴィの血族を超えることができるのよ。ある方法を使えばね……」  
いくつもの光弾を従えているミランダは、リサを見下ろす。

「ある方法……？ 魔道注入だけを行ったとしても、それほどまでに魔力が増大するわけではないはず。それに、浮遊魔法だって失われた魔法よ？」

失われた魔法 聖魔術ってことだろか。

「……あなたには、あまり関係ないことよ」

八工を振り払うかのように、彼女は手を動かした。

「ふん……どうせ、自分の寿命と引き換えにそんなことをしたんでしょ？ あんたたちがしようとしていることなんて、わかりきって

るさ！」

「それほどまで叶えたい信念……だと気付かない？ 命を捧げるほどに、叶えたいもの……あなたにはわからない？」

ミランダは彼女を蔑むかのように、ほくそ笑む。

「自分が死んでしまつては、叶えたい想いだつて成就しない……。死んだら、終わりなのはわかるでしょ！？」

「死が終わりだとしても？ それは間違つてるわ」

顔を振り、ミランダは天井を指差した。

「私が朽ちていったとしても、私の理想を叶えてくれる人たちがいる。彼らが、人類によつて穢された世界を浄化してくれる」

空中都市にいる樹たちを讃えるかのように、彼女は言った。

「歪んだ考えだよ、ホント……」

リサはため息交じりに言い、彼女を睨みつける。

「何かを犠牲にしてまで成就させる願いに、どんな価値があるつて言うんだ！」

「……私は犠牲以上の価値が生まれると信じている」

すると、リサは鼻でその言葉を嘲笑つた。

「まつたく……話にはならないよ。あんた、確証も持たずにこの世界を滅ぼそうとしてるつてのさ？ この世界の何を知ってるつてのさ？ ほとんどのことは知らずに滅ぼそうとする。美しいものや、すばらしいものが満ち溢れている世界の片鱗に見向きもせず、それによつて幸福を得ている生命を根絶やしにしようとする。……それは、あんたらが忌み嫌う人間と同じつてことさ！」

「……………」

人間が富のために滅ぼしてしまった多くの種族。リサは、そのことを言っているのだ。

「……あなたは悲惨な運命を歩んできた」

「だから？ なんだつて言うつてのさ」

「リリーナ……あなたは、己の家族を己が信頼していた人間に殺され、独りぼつちにされた。どうして、あなたがそんな運命を歩まな

ければならないのか？ 考えたことはなかった？」

「……………」

自分の従兄たちによって、家族だけでなく一族全てを殺されたりサ。彼女が旅をする目的は二人に復讐すること だった。

「あなたが復讐を誓ってここまで来たことも、私が理想を掲げ、ここであなたと闘うことは、結局のところ同じなのよ」

「……………違う！」

「同じよ。それを否定することは、あなたの6年間の存在意義を消しかねない」

ミランダは再び、詠唱を開始した。

「させるか！ ほとばしる闘気……………我が破壊の衝撃と化せ！ 奥義、閃牙顎翔波！！」

リサの拳から、巨大な衝撃波と化した闘気がミランダの方へ吹き飛ぶ。

「無駄だ！」

ミランダの光弾が彼女の正面に並び、巨大な障壁となり衝撃波を防ぐ。

「久遠の影に消えよ……………精霊の宴、命の灯火」

黄色い光がミランダを包み込み、小さな電流がほとばしる。

「くそっ！ 沈黙の羊よ……………掛け替えのないものをそなたに捧げよう。悪夢の氷結へと堕ちろ、我に仇なす者ども……………」

白い粒子 いや、霧のようなものがリサを包み込む。そして、それは水色の光と変わった。

「魑魅魍魎の旋律と化せ ウォーベル！！」

リサを包んでいた水色の光が、このフロア一体に広がった。一瞬にして、体を刺すような冷気が出現する。そして、ミランダの足元

から巨大な氷柱が出現し、彼女目掛けて突き延び、そこを数多くの氷たちがぶつかり合い、1つの氷海へと化した。ミランダはほんの数秒で、氷付けにされたのだ。

「くっ……なんでよ!!」

なのに、リサは悔しがっていた。そう、ミランダには直撃していないのだ。彼女の周りを、さっきと同じように光の障壁が防いだのだ。

「破滅の狭間へ誘おう、暗闇の審判を　フェイスヴェルド……」

リサが彼女目掛けて衝撃波を飛ばそうとした瞬間、ミランダを囲っている氷塊が砕け散り、紫電の光がこのフロア中に広がっていた。それは壁を走り、床を駆け、何かを狙っている。

「ラグ・フェン」

「!!!??」

一瞬にしてリサは紫電に包まれ、大量の電流を浴びさせられた。

「うあああああ!!」

「リサ!!」

リサの顔に悲鳴と共に苦痛が広がる。雷が消え、リサの体から灰色の煙が溢れ出した。まるで、焦げたかのようにだった。

「くっ……!!」

そのまま、彼女は床へ崩れ去った。服が焼け、肌は火傷を負っていた。ほのかに、電気がほとばしっている。

「知ってるはずよ？　聖光装束は物理的なものだけでなく、魔法によつて造形されたものをも通さない力を持っている。私の魔力、意志、あるいは命そのものが消えるまでは……ね」

「ちく、しょ……！」

リサは小さく震えながら、顔を上げた。

このままではまずい。そう思い、僕は彼女の下へ駆け寄り、寄りかかるとした。

「来るなー！」

それに気づき、彼女は僕を睨みつける。

「来たなら……約束を反故したことになるでしょうが！」

「リサ……」

リサが約束を破れば、もちろんミランダは力を持たない者を狙う。闘いにおいては、弱い者を狙うのは当たり前なのだ。

「まったく……心配症なんだから……！」

リサは笑う膝に鞭を打ち、震えながらも立ち上がった。

「……聖魔術を受けて尚、立ち上がれるというのは感嘆するわ」

そんなことを言っているミランダだが、肩で呼吸をしている。ラグナロクの間人でないのに、聖魔術を扱うというのは相当な量の魔力を消費したに違いない。

「へへ……だてに、次元の巫女じゃないからね……」

笑う余裕など無いはずなのに……リサは小さく微笑んだ。

「光の民と呼ばれたラグナロクの民が……あんたみたいな『聖魔術もどき』で、死ぬかってんだ！」

こんな状況にも関わらず、リサは嫌味を言い放った。だけど、そんな挑発に乗るような相手じゃないことは、重々承知しているはずだ。これは、ただのリサの性格故なのかもしれない。

「フフフ……たとえば、『聖女サリア』の末裔だとしても所詮同じ人間。操作させられたのは、始祖だけじゃないのよ……！」

ミランダは手をかざし、光を集結させ始めた。

「次の一撃で、葬ってあげる」

そう言うと、彼女の周りを紫色の光が包み始めた。そして、印を

結ぶと不思議な魔方陣が空中に映し出された。

「遙かなる古の神よ……我が血の盟約に従いて、断罪の剣を希わん  
……」

「……！ 禁忌聖魔術の詠唱、か。ふん……！ そんなものまで行使  
できるなんてね……」

リサは小さく笑い、彼女を見上げる。

「……だけど、そんなものを簡単に詠唱させるような馬鹿だと思う  
……！？」

すると、リサは素早く印を結んだ。

「我が命の糧となれ！ 緑風の翼、我と共に！ ララヴェン！」

リサを囲むかのように、爽やかな風が吹き始めた。それと同時に、  
彼女の金色の長髪が舞い上がる。

「何……！？」

「浮遊魔法が使えるのは、あんただけじゃないのさ！」

リサは、上空へ向かってジャンプをした。すると、そのままミラ  
ンダと同じ高さの所まで上昇し、落ちなかった。そう、リサもまた  
浮遊魔法を使用したんだ。

「貴様……！！」

「獰猛なる獅子の咆哮 破壊し尽くせ！ 奥義、爪魔獅子撃波！」

リサは空中で回転しながら連続蹴りを繰り返した。その蹴りに、  
黄色い闘気が纏っている。だが、ミランダの光弾が盾となり、それ  
を防いでいる。

「無駄だ！ その程度では、この光の壁を破壊することはできない  
……！」

「ふん！ 黙ってな！ …… ハアツ！！」

連続蹴りの後、リサは少しかがみ、シオルダータックルで光の壁ごとミランダをほんの少しだけ吹き飛ばし、最後に手を添えて強烈な衝撃波を与えた。ミランダはそのまま、大きく吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。だが、それでも浮遊魔法は解けないらしく、落ちては来ない。

「く……っ！」

ミランダが体勢を整える前に、リサは追い討ちをかける。

「滅せよ、悔恨の眠りし墓場に！ 奥義、閻魔業殺打！！」

目にも止まらぬ連続攻撃、いや、光の速さのごとき連撃をミランダを守る光の壁へと打ち付けた。

「無駄だと言うのが、わからないのか！？」

リサの攻撃の衝撃で、少しずつ壁に埋まっていくミランダ。未だ、攻撃は一度も彼女に直撃していない。

「うっさいんだよ！ でりゃあああ！！」

闇の闘気を纏った彼女の豪拳が、光の壁の真ん中を打ちつけた。

「無駄だと」

ミランダが言いかけた瞬間、光の壁はまるで、ガラスのように小さくひび割れていった。

「なっ！？」

そして、ガラスが砕け落ちる時のような音を立てながら、光の壁は上空へばら撒かれた。

「そ、そんな馬鹿な……！？」

「へっへーん！ うらあ！！」

リサはミランダを蹴り上げ、さらにオーバーヘッドキックのように後ろへ蹴り飛ばした。そして拳を構え、吹き飛ぶミランダに狙いを定める。

「荒れ狂う竜巻、切り刻め！ 奥義 嵐龍裂襲閃！！」

彼女はシュヴァルツと同じように拳風で竜巻を起こし、ミランダにぶつけた。

「キヤアアアアア！！」

ミランダは竜巻に切り刻まれ、床へ叩きつけられた。彼女の体は裂傷でひどく、一瞬にして真っ赤な血が舞い散る。

「大地を駆ける、魔狼の咆哮……奥義、魔翔爆霊波！！」

リサは空中で奥義を繰り出し、真っ黒な衝撃波をミランダに襲わせた。多数のそれに叩きつけられ、彼女はさらに床へめり込む。大きな粉塵に包まれ、ミランダの姿は見えなくなってしまった。そして、リサは浮遊魔法を解き、床へ降り立った。

「はあ、ハア……………いててて」

リサは辛そうに顔を歪め、大きく呼吸をしていた。

「く、うう……………！！」

ミランダはうめき声を上げながら、体を起こした。見るからに、体を動かせるようには思えない。裂傷に青あざ、それに大きく晴れた左腕。もしかしたら、骨が折れているのかもしれない。

「まだ、立てるのか……あんたも無駄に強情な女だね」

彼女は笑いながら言っているが、足も同じように笑ってしまったている。

「調子に……乗るな……………！！」

ミランダは何かを、呟いた。すると、彼女は再び空中へ浮かび始めた。

「貴様に……見せてやる！ 雷神の鉄槌を……！！」  
そして、再び詠唱を始めた。彼女の周りに、黄色と紫色の光がうねるようにして辺りを動き、彼女を包みこむ。

「……我が言霊よ響け、そして誘え……厳正なる死の裁きよ……」

「こ、これは……まさか……！！？」

一瞬、ミランダの体自体が黄色く発光した。そして、再び二つの光が出現し、彼女に吸い込まれていくかのように消えていく。

「我に仇なす愚かな幼子よ、遙かなる命脈を絶たん……」

少しずつ、彼女を包む光が放つ力が大きくなっていつている感じがした。

「あいつ……絶対障壁も発生させてんのね……！ 手も足も出ないじゃないのよ！」

悔しげに歯ぎしりをする彼女は、ただ見上げているだけだった。

「リサ、ミランダは……何をしようとしてるんだ？」

僕は彼女の傍に行き、訊ねた。

「……詠唱することも、この魔法自体を知ることさえも禁じられた、究極の聖魔術の1つを唱えてる……」

「？ それって、かなりやばいってこと？」

「……当たり前でしょーが」

究極の聖魔術だって……？ あんな傷付いた体で、そんなものを唱えようとしているってのか？

「紫電を司りし精霊よ……我が下に集いて力を解き放たん……」

ミランダは薄っすらと、閉じていたまぶたを開けた。まるで、僕たちを見据えるかのように。

「詠唱を止めないと！」

「無駄よ。あいつの周囲にあらゆる干渉を防ぐ絶対障壁アブソリュートが発生して。魔法が終わるまで、消えることはない」

「なっ！？」

じゃあ、どうにもできないっていつのか!?

「……雷神の鉄槌……金色の巨人よ、我らが破滅の祈りを具現せよ……」  
そして、黄色と紫色の光が辺りへ四散した。

「ミヨルニール！」

一瞬にしてフロア全体が光に包まれ、轟音を立てながら何か解き放たれた。それは 巨大な稲妻だった。竜巻のように逆巻きながら、稲妻は光を放ちながら僕たちの方へ向かってきていた。

「……くそ！」  
リサは素早く印を結び、何かを唱え始めた。

「永遠の風、慈しみの気高き風よ！ シルフィード!!」

彼女は両手を稲妻の方向にかざし、そこから強力な風を発生させた。その風はと巨大な稲妻は両者の間でぶつかり、互いに押し合った。

「な、なんて雷精の波動……！ ミランダ、あんた……!!」  
「雷光天使を従えし、星の現象の一つ……たかが巫女風情に、これを止める術はないわ!!」

彼女の顔には、歪んだ笑顔が浮かんでいた。

「くっ……!!」

徐々に、リサの魔法 緑の風が押されていく。

「光の下で生きてきた……お前たちに下す、裁きの雷だ!!」  
ミランダは今までにないくらいの怒声で叫んだ。

「光の下で、だと……？ あんた、何を勘違いしてる！」

「何……？」

口から血を滲ませながら、ミランダはリサを見据える。

「誰しもが、あんたの思っているような幸せを手に行っているような人間じゃない！ 誰しも、それぞれ自分にしかわからない苦しみや、痛み……憎しみを心の中で背負って……生きているんだ！！ あんたがもう嫌だと思っっている、この 生 という軌跡の中でね！！」

リサの言葉は少なからず、ミランダに届いたのか 彼女は、歯ぎしりをするかのようにリサを睨みつけていた。

「貴様に……私の何がわかる！ 私は……常に喰われる側の人間だった！！ この世界が！ この世界の人間が、私を食い物にしたんだ！」

顔を振り、あの灰色の長髪を動かすミランダ。まるで、泣き叫んでいるようだった。

「何もかも……消えて無くなってしまえばいいのよ！！！」

「……ミランダ……」

美しい女性なのに、その手を血で赤く染め上げた彼女は……ただ、意地になっているようにも見えた。ただ、気付かないふりをするに過ぎないんじゃないかって……。

「どうして痛みや苦しみを受ける自分がかわいそうだと考える！ もちろん、あんたの苦しみはあんたにしかわからないだろうさ！

……だけど……他の人だって同じなんだ！ 苦しみを知って生きているのは、あんただけじゃないんだ！！」

「黙れ……黙れ黙れ黙れ！！ 貴様なんか……貴様なんか何がわかるのよ！！？」

「わかるわけじゃないか！ 私は……あんたのことを何も知らない！ 何も知らないんだ！ どうやって知り得るってのさ！？」

「なら」

「だけど……」

ミランダの怒声にも勝る声で、リサは言う。

「これだけは言える……。世界は、あんただけが憎んでいるんじゃない。この世界を……。愛している人もいるんだ」

「！」  
「だから……。滅ぼしていいわけない。滅ぼしちゃ、いけないんだ！」

全員が全員、憎んでいるわけじゃない。自分が憎んでいるから滅ぼすのは、そいつの勝手な妄想でしかない。

「黙れ！！……その口もろとも……。滅ぼしてやる……。消え去れ！！」

ミランダは力を入れ、稲妻の勢いを強めた。

「くっ……！！」

もう、リサの魔法は稲妻を防ぐことができなかった。緑の風は、髪が破れるかのように四散していく。

「死になさい！！」

巨大な稲妻がリサの風を吹き飛ばし、こちらへ向かって来た。

「このままじゃ……。死ぬ」

リサがそう呟いた。

ここまでできて死ぬのか……。？　もう少しでアトモスファイアなのに。空を助けてもいないのに。

「……こうなったら……」

リサは両手を合わせ、何かを唱えようとした。その時

「……空？」

僕とリサの前に、空が出てきた。そして、僕たちに顔を向けるなり、

「大丈夫。大丈夫だから……」

そう言って、空は再び前を見据えた。

「そ、空！？ 何を……！！！」

その瞬間、彼女は向かってくる稲妻の前に右手を掲げた。瞬く間に、青い光が空を包み込む。

「穢れなき星の光……永遠に眠りし少女の歌声……」

すると、彼女の手から青い光が飛び出し、オーロラのように僕たちを包んだ。

「この光は……！？」

「これは……！」

青い光は巨大な稲妻の前に立ちはだかった。

「この波動は一体……！？」

ミランダは何かを呟いた。その時、青い光は巨大な稲妻を包むようにして広がり、龍の体のようにして伸びる電流の隙間へ入り込んでいった。

「さあ、神々が愛した 原初<sup>イヴ</sup>の人 の下へ還りなさい……」

## スーパーノヴァ

そして、大きな発光と共に、青い光と稲妻は一体化した。星が発光する時のような そんな錯覚を引き起こさんばかりの白い爆発を引き起こし、魔法を消し去った。辺りに残ったのは、霧と砂埃だけだった。

「そんな……！！」

ミランダはもう力が抜けた状態となり、ゆっくりと降下していた。  
「雷光天使の魔法が……消し去られるなんて……!!」

そして、彼女は床へ足が着くと、崩れる岩山のようにしりもちを  
着き、そのまま小さく仰向けになるように倒れた。

「……ミランダ……」

リサは肩で呼吸をしながら、ミランダの方へ歩み寄って行った。

「……………」

僕も、そこへ行った。ミランダを見て……わかった。直感した。

彼女は、死ぬ。もうすぐ。

ミランダは今にも閉じそうな目で、リサを見つめていた。リサは  
彼女の近くへ着くと、かがんだ。

「……魔法の使いすぎによる乖離現象……そして、固体エレメンタ  
ルの過剰摂取による、末期症状ね」

彼女の体を見るなり、リサは顔を振った。

「魔道注入……そこまでして、あんたは力を……復讐するための力  
が必要だったと言うの？」

リサがそう言うと、ミランダはフツと笑った。

「それは……あなたも同じでしょう？」

「……………」

「誰しも、同じなのよ。人を大きく突き動かすのは……巨大な憎し  
み……復讐という、感情だけ……。それだけが唯一、純粹なのだか  
ら」

「……それは違うだろ」

僕がしゃがむと、ミランダは僕に視線を合わせた。

「全力で……命をかけるほど人を動かすのは、それだけじゃない。  
寧ろ、それだけじゃ辛過ぎて生きていけない」

ホリンがそうだった。辛過ぎるって……。

「……愛……とても、言いたいのか？」

すると、ミランダは再び笑った。

「フフ……所詮、温もりの中で生きてきた温室の人間……ね……」

「……愛だけじゃないって。いろんなことだよ。ほんの、些細な事柄さ」

「……………」

小さなことでも、それが希望に繋がる時だってあるのだから。

「お前だって、気付いてるんだろ？ 何もかも……」

ミランダは僕から視線を逸らし、目を閉じた。

「……私は……ルテティアの奴隷として生まれた」

突然、彼女は淡々とした口調で言い始めた。

「生まれた時から家畜扱いをされ……女性としての辱めを受けてきた……。女性であるが故に、ね……」

女性であれば、そういうことをされるといふ屈辱、恥辱。死にも勝るものだ。男である僕には、想像することすらできない。

「ゴミなのさ……奴隷なんてね」

消えかけた瞳に力を入れ、天井を見つめる。

「人として生きる権利が生まれた時から無く、私は何をすればよかった？ どうすればいいの？ ……あの、牢獄で」

ミランダは右手を広げた。その手首の辺りに、黄色い印があった。

「それは……雷光天使の御印……」

リサがそれを見ながら呟いた。

「そうか……だから、あんたは禁呪や聖魔術を使えたってことか」

「……………」

「けど、それだけで聖女の末裔である私に匹敵するほどの能力は無

いはずよ。魔導注入だけでは、あそこまでは……」

「……ある男に、してもらったのよ。特殊な手術で……己の限界を越えるように」

ミランダは自分の胸に手を置き、小さく息を吐いた。

「その男つてのは……？」

リサは小さな声で訊ねた。

「……ヴェリガン……。ほとんどのことを知っていた、ウラノスの協力者……」

ヴェリガン……？ そんなの、聞いたことはないな。というより、奴らに加担している奴らつて、一体何人いるんだ？

「彼に、私の体の中に特殊な仕掛けを施された。結果、今の力を……」

体の中に……？ それに手術つてことは……あまり想像したくはないが、彼女は……。

「どうして、あんたはそこまで……」

それが何なのかを察知したりサは、小さく顔を振った。

「あなたには……あなたたちにはわからないわ。力無き者……持たざる者はそうでもない限り、世界を変える力を手にすることはできない。だって、私たちは所詮『<sup>イヴス</sup>原初の人類』の子供たちじゃないのだから……あなたたちとは違って」

「……」

己の命を犠牲にしても、この世界を壊したかった。変えたかった。それは、シュヴァルツもバルバロッサも……樹も同じなんだろう。

ミランダは僕の方に顔を向けた。

「……アトモスフィアへ行きたいのなら、その装置は使えないわ。すでに、シュヴァルツたちが破壊したから……」

「……！？」

それでは、僕たちはどうすれば……。

「セヴェス……東空。あなたに与えられるはずの翼が、この都

市には眠っている……それを、見つけなさい」

今まで見たことの無い表情を、ミランダはして見せた。穏やかな表情。いつだって、彼女はそんな表情をしたことがなかったのに。

「どうして……そんなことを？」

敵であるはずなのに。

「……………」

ミランダはまぶたを閉じ、ゆっくりと息を吐き、言った。

「どうしてかしらね……気でも、触れたんじゃないかって……思うわ」

嫌味たつぷりに、ほくそ笑んだ。その時、彼女の体から白い粒子が浮かび始めた。浮き出てくるように、いくつも。

「そうね……もしかしたら……いえ、いいわ……こんな、些細なこと……」

微笑み、彼女は上空へ手を掲げた。

「……暗い………けど、あそこ………以外、な　天国、よ………ね

……………」

そして、彼女はどこかへと消えて行った。遠く、遥かに遠く、そして深いどこかへ……沈んで行った。

「……？」

すると、ミランダの体が白み始めた。体自体が光を放っているかのようで、だんだん白くなってゆく。さっきの粒子も、より数を増してきている。

「これは……は？」

「……分子と元素の乖離現象よ。体を構成する物質が空気中へ消え、塵となる。そして文字通り、彼女は世界の一部となる……」

「……世界の一部、か……………」

ミランダの体はさらに光を増していった。そして、完全に光となった時、無数の小さな光の粒と化し、上空へ浮かび始めた。ほんの

少しずつ、少しずつ。そして、高く上まで昇った光の粒は、透明になっ  
ていった。

ミランダの体は、完全に消え去った。

## 68章：美しき魔女 愛憎の狭間に沈め（後書き）

雷光天使について、後々書かないことなんで説明しておきます。

### 雷光天使

基本元素と光陰二元素を司る精霊というのが存在するのだが、最高位の精霊を一概に【天使】と呼ぶ。雷光天使は【雷】属性の最高位精霊である。人間の遺伝子がうまく混ざり、先天属性が強化されると、時折天使を操れる人間が出現する。そういった人間は基本属性を持っているが、基本的に「常人より生まれつき元素が多い」というようなもの。かなり特別な存在というわけではない。

69章：天空へ 生きとし、生けるその先は

「どうする？ これから」

フロアの天井装置を前に、僕たちは円を描くようにして座った。

「調べてみたが、ミランダの言うとおりこの装置は使えないみたいだ」

デルゲンはため息を混じらせて言った。

この装置自体は壊れていないのだが、繋がっているアトモスフィアの装置が壊されていたのだ。

「……ミランダの言葉が本当なら、翼 とやらがアトモスフィアへ行ける唯一の方法なんだろうな」

と、レンドは辺りを見渡している。

「翼、か……」

あの声も、そう言っていた。ビルの最上階には鍵があったが……。

「……天上装置では行けない今、その翼 を探すほか無いね」

そして、リサは立ち上がった。またこの広大な都市を歩くのだと思っの嫌になるが、それでも探さないと先に進めない。

重い腰を上げて立ち上がるうとした瞬間

待て

「……バルドル？」

気が付かないうちに、僕はそう言っていた。

ここにある

「……何が言いたいんだ？」  
「ど、どうしたんですか？」  
アンナは僕の傍に来て言った。

シリウスが遺した、最初で最後の翼  
天空の楽園へ誘いし、蒼空の翼を

「つば、さ……」  
「ソラさん？」  
「待って、アンナ。……たぶん、何らかの音が聴こえてるんだと思う」  
リサたちは、何も言わず僕の様子を見ていた。  
「それは、どこにあるんだ？　ここ、カナンだろ？　それとも……」

お前が何なのか……あの言葉を

「……称えよ……我、を……ネシイエ・ミヒ……我は、調停者」  
僕の意思とは無関係に、言葉を発した瞬間、大きな揺れを感じた。それは、この建物が、大きく揺れている。巨大な地震にでも襲われたかのようにだった。

部屋の壁に張り巡らされた透明なガラスもまた、ガタガタと言う音を立てながら揺れている。その揺れと同時に、ガラスから見える外の風景がグニャグニャしていた。  
しばらくして、揺れが収まった。

「……………」  
僕はゆつくりと辺りを見渡した。天上装置の近くの床に、大きな何かが出来ていた。あれは……紋章だ。ティルナノグ皇室を表す、あの紋章。青っぽい小さな淡い光を辺りに放ちながら、空中へ円を描いている。  
「あれは……………」

さあ、進め

熾天使の称号を持ちし翼……セラフィムを

「セラフィム？」

僕は紋章の上に足を進ませた。光の雫が足元から、霞みながら浮かんでいつている。

「……みんな、この上に立ってくれ」

みんなは頭をかしげながら、僕と同じように紋章の上に立った。

「……バルドル、僕たちをそこへ……………」

すると、僕の声に反応したのか、光の勢いが強まり、光の粉塵が渦巻く風のようにくるくる回り始めた。そして、視界全体が一瞬、ほんの一瞬だけ真っ白な光に覆われた。

目を開けると、そこにはさっきまでとは違う風景が広がっていた。広く、暗がりのフロア。ドーム状の天上。そして、中央には巨大な機械。

「……なんだ？ これ」

レンドがそれを見上げながら言った。

これは ……飛行機……………か？

本体に備え付けられた鳥の翼のような、銀色の装甲。まるで、翼を広げたツバメのようだった。高さはゆうに3メートルを超え、全長も十数メートルあり、人が10人程度乗れるようだ。

この飛行機のようなものの胴体の下に進んだ。ゲームやら漫画やらでは、ここらへんに入り口らしきものがあるはずなんだけど……。すると、ちょうど胴体の真ん中辺りに、変な穴を見つけた。「E」のような穴の形をしている。鍵穴だろうか？　鍵穴だとすれば、あれのことだろうか？

僕はバツクから鍵を取り出し、見上げながらそこへゆつくりと差し込んだ。

……ピッタリだ。そのまま奥へ差し込むと、左へ回した。

ガチャ

プシュー……

空気が抜けるような音がしたかと思えば、震えるような機械音がしだし、その胴体を円形にくり貫いたかのように、円柱が降下してきた。エレベーター……みたいなものか？

「入り口ってことか」

この降下してきたものに乗れば、機械の中に入れるということか。僕たちは足を進ませ、そこへ乗った。7人ギリギリだ。……ふと気付いたが、この円盤のようなエレベーターを上へ引き上げるものが見当たらない。エレベーターならば強力なロープ（？）みたいなものが自動で引き上げたり、緩めたりすることで上下に移動できるのだが、これでは移動できないのではないか？

そんなこと思った瞬間、まるで突っ込みを入れたかのように、円盤が浮かび始めた。光り輝く光線が期間の本体からこの円盤に伸び、吸い寄せられるかのように昇ってゆく。一体、どういう原理なんだろう。

上まで昇ると「カチ」と、はまるような音がした。機械の中は真っ暗だったが、すぐに明かりが灯った。中は座席がいくつつかあり、ちよつとした飛行機の客席のようだ。

天井は2メートルほどあり、電灯のようなものが整然と並べられ、光を放っている。機械の先端部分に当たる所には扉があり、そこへ進むと座席が2つあり、あちこちに操縦するための機械のようなものが配置され、外が見えるように透明なガラスが前面に張られている。なるほど、コックピットか。

「すげえ……車のハンドルみたいだ」

座席の前に配置されている機械には多くのボタンと共に、ハンドルのようなものがある。これで、操作するということだろう。

「空、これってなんなの？」

リサがあちこち触りながら言った。

「たぶん、ティルナノグ期の飛行機だと思う」

「飛行機？」

「その名のとおり、空を飛ぶ機械だよ。人を乗せて、自分が行きたい場所へ行くための交通手段の一つさ。ガイアでは形は違うけど、こういったものが多くあるんだよ」

「と言うことは、これでアトモスフィアへ行けてことね」

「たぶんな」

「……だが、これはどうやって動かすんだ？」

レンドが言った。

「さあ？」

「おいおい……」

わかんないもんはしよーがない。

「どこかのボタンで起動するか、あるいは鍵を使って起動させるか……」

僕は操縦席辺りを見回した。下らへんに、再び同じような鍵穴を見つけた。やつぱり僕は心の中でガッツポーズをして、そこへあの鍵を差し込み、ひねった。

すると、鍵穴から青緑色の光が機械の中を走り抜けるようにして駆け巡り、一つ一つの機能を呼び起こし始めた。永い眠りから、ちよんちよんと肩を叩かれた居眠りしていた学生のように目覚め、画面上に映像を映し出し、半透明なボタンはそれぞれ、対応した色を放ち始めた。

「起動した、ってことか」

予想通りだったのか、デルゲンは案外落ち着いた声で言った。

「さてさて、どうやって操作するかだな……」

レンドがそう言いながら、あちこちのボタンを押すまでではないが、軽く触れたりした。

『……………』

操縦席の前にある、10インチ程度の大きさの画面に文字列が並び始めた。そこには、「おはようございます」と表示されていた。

『行き先をお答え下さい』

言葉と共に、画面にその言葉が表示された。転送装置のように、画面を押せばいいのだろうか。ために押してみたが、画面は変わらなかった。キーボードらしきものも見当たらないし……。

「? どうすればいいんでしょうか?」

アンナは他のみんなと同じように、顔を覗きこませている。

「ボタンを押したりするってわけじゃないらしいな」

「ということは……」。

「言葉か?」

つと、僕はそう漏らした。

「言葉?」

リサが問い返してきた。

「言葉」というより、音声と言った方がいいかもな。とりあえず、

やってみよう」

僕は画面に近付き、オホンと喉を整えた。

「えっと……アトモスファイアへ」

すると、画面上の文字列がチラつき始め、別の文字列を形成した。

『空中都市群アトモスファイア……設定完了。自動操縦ですか？  
マニュアル操縦ですか？』

自動操縦とマニュアル……答えなんて当たり前。もちろん、自動操縦だ。

「自動操縦で」

楽できるんならそれに越したことはないもんね。

『了解しました。……空中都市群アトモスファイアへは、帝都のセキユリテイシステムにより、外殻へ着陸します。よろしいですか？』

外殻？ なんじゃそりゃ。

「それでいいよ。天空へ連れて行ってくれるなら」

『了解しました。上空の風速、19メートル。天空都市群アトモスファイア外殻へは、約10分で到着します。お待ち下さい』

すると、ウィーンという音が飛行艇の外から聞こえ始めた。それと同時に、この飛行艇自体が前方に少しずつ、動き始めた。人が歩くほどのスピードで前に進むこと数メートル、突然止まり、今度は左へゆっくりと回転し出した。左へきっちり90度曲がると、飛行艇の前方にある壁が、真つ二つに開き始めた。そこから、突然太陽の光が差し込んできたため、僕は思わず目を閉じてしまった。目が慣れてくると、そこに広がっていたのは青い風景と白い雲。どうやら、この秘空艇がある場所自体が、かなりの高度の場所にある

ようだ。

『……エネルギー充填……』

中央の画面に、0%と表示された。小刻みに増えたかと思うと、一瞬にして数値は100%へ達した。

『完了。発進します。衝撃にお気をつけ下さい』

衝撃って

と思った瞬間、強烈な重力に圧迫された。これは、ジェットコースターや飛行機に乗った時に感じる、あの感覚だ。目の前のガラスから見える風景も、一瞬にして変化した。すべてが、空の風景に変わったのだ。とんでもないスピードで、飛行艇は進んでいる。雲を突き抜け、空を裂き、天空の国へと進む。

ほんの少しして、ようやくあの重力から解き放たれた。辺りを見渡すと、僕だけではなく、みんな床にこけたりしている。ホントは、座席に座らなければいけなかったようだ。当たり前だけど。

「……おお、見てみるよ。すんげえ高さだぜ」

レンドは座席に座り、窓から外を眺めていた。飛行艇の真ん中、つまり乗客が乗れる場所。ここの一部の床や壁は透ける素材なため、地上の姿が見える。とは言っても、ほとんどが雲に隠れて見えない状態だ。時おり見える大陸の姿は、映画で見た時のように、手で覆ってしまうことができるほど小さくなっていた。

「飛行機　か。今更ながら、天空人が発明したものってのは、常軌を逸しているよな」

そんな風景を眺めながら、デルゲンは呟く。

「私たち、空中を飛んでるんですよね？　なんだか、信じられないです」

アンナもまた、同じように眺めていた。みんな、驚くべき風景に目が釘付けだった。飛行機に乗ったことのある僕でさえ、目を離すことができない。

その時、誰かが僕の右肩を軽く叩いた。振り向くと、真剣な表情をしたリサが手招きしていた。

「……どうした？」

なぜか、僕は声を小さくして訊いた。リサの表情が、そうさせる。「わかってんでしょ。空ちゃんのことよ」

「……」

リサはレンドたちに目をやると、再び僕に視線を合わせた。レンドたちは、外の風景に見入っている。

「……ミランダが最後に使った魔法……あれは、雷鳴系最高位の精霊を利用した、最強最悪の魔法の1つなの」

「禁呪？　それとも、聖魔術か？」

リサは「うーん」と唸った。

「なんとも言えない、のよね。いちおう聖魔術の部類に入るんだろうけど……いまいち伝承が伝わっていない、ほぼ伝説化した魔法なのよ。たぶん、聖魔術よりも上位だと考えていいと思う」

聖魔術より上……人が扱える力の範疇を超えているんじゃないのか？　それを言ったら、僕も同じか。

「空ちゃんはそんな魔法を消し去った……いや、雷精を無理矢理、御した。自分の魔力でね」

「……自分の魔力？　あいつ……魔力の元になるエレメンタルが抜けている状態だろ？」

エレメンタル　元素が無いのに、どうやって魔法を使用するっていうんだ？　それに、あいつは魔法を使う素養なんて一切無いはずなのに……。

「彼女は、紺碧の属性　星の元素を持つ、蒼空の巫女。……どうしてガイアで生まれたのかはわからないけど、ある意味でラグナロクの私を超える人間よ」

「……つまり、あいつは少ない魔力であれを……？」  
うん、とリサはうなずく。

「残り少ないエレメンタルだけで、あのミヨルニールを御した。そんなの、万全な状態の私でもできない。……ううん、誰にもできないと思う」

空が持つ力は、禁呪でさえ連発できるリサを超える。いまいち、それが納得できない。

「空ちゃんの命が危ない」

「……………」

リサは小さく頭を振った。

「でも、まだ大丈夫。期限はかなり短くなったと見ていいだろうけど」

「…………どのくらい？」

リサは目を閉じ、少しの間考えた。

「…………もって一週間…………いや、三日程度」

「た、たったのそれだけ!？」

僕は思わず、彼女に詰め寄った。

「数ヶ月あったのが、たったの…………三日!？」

「…………運がよかった方よ。そもそも、禁呪の精霊を御することはラグナロクの間でも、できるかできないかのものなのに…………それ以上の魔法の精霊を御した。…それも、雷属性の最高位精霊をね」

彼女が言うには、魔法の相殺　あれは、発動された魔法と同質量の魔法をぶつけて、両方消し去るようなもの。

だが、空がやったのは違う。

あいつは、魔法を無理やり消した。覆い隠すかのように、最高位

の精霊を己の魔力の膝下に置き、操作して消した。

「私がやったら、魔力のほとんどを失う。だけど、魔力が10分の1程度しかなかった空ちゃんをそれを使った。……乖離現象が起きて死んでしまうことも十分にあったのに」

「……………」

たった三日。多くて、一週間。そんなの、どっちにしても同じ」とだ。

「何はともあれ、生きていただけでも私はよかったと思ってる」

「そりゃあ、そうだけど……………」

うなだれた僕の肩に、リサが掌を乗せた。

「以前、私が言ったこと覚えてる？」

自分のほほを指先でかきながら、リサは言った。

「他にも、彼女を救う方法があるって」

「……………覚えてる。けど、無理な話なんだろう？」

リサは何も言わなかった。それが、答えのような気がした。

「……………行ってあげなよ」

「……………」

僕は何も言わず、コックピットの方へ行った。

空がコックピットへ向かう後ろ姿を、なんとも言えない瞳で見つめるリサ。

「無理な話、か……………」

さて、と言いながら、リサは座席に腰を下ろした。そして、大きく息を吐く。

「アンナ、お願いがあるんだけど」

「ハイ？」

アンナはリサの傍へ駆け寄った。

「あのね、治癒術をかけてくれない？」

「以前、教えてくれた魔法ですか？」

ソフィアからゼテギネアへ向かう最中、リサはアンナの持つ巫女の元素「治癒」によって扱うことのできる魔法を教えていたのだ。

「うん。……かなりやられちゃったからね。お願いできる？」

「はい、わかりました。……うまくできるかどうかわからないですけど」

不安げな面持ちで、アンナは魔法を唱え始めた。しかし、「治癒」を持つアンナにとってみれば、治癒魔法など造作もないものであった。

コックピット……そこに、空が一人で立っていた。ガラス越しに外の風景を眺め、ただボーっとしている。

自動ドアが開いた音に気が付き、彼女は僕の方に振り向いた。

「あ、空さん」

いつもの表情で、彼女は言った。その表情が、逆に僕の心を痛めつける。無数の棘を纏ったヒモが縛り付けるかのように。

「ほら、見てください。すぐきれいですよ」

「……そうだな。今、想像もできないほどの高さにいるんだもんな  
僕は彼女と同じように、外を見つめた。

「うわぁ……富士山よりも高いんでしょうか？」

「さぁ、どうだろうな。登ったことないもんだよ」

「結構なスピードで上昇してるから、もう10キロとかいってるのかな……。空さんはどう思います?」

空は、笑顔で僕の方に振り向いた。

「どつって……。心配だよ」

「え?」

僕は彼女に視線を向けず、窓の外を見つめた。

「……。なんで、お前は笑ってたんだよ」

「空さん?」

平然と振る舞おうとする彼女に対し、憤りを感じる。彼女の恐怖がわかるだけに、無理をしているのがわかる。

「怖いなら怖いって言えよ。苦しいなら苦しいって言えよ!僕は、お前を……。!」

頭がズキズキする。

わかってる。わかってるよ。

直視しろってのは。でも、目の前にこうして「存在」していることが消えてしまうというのは、見たくない。触れあうことができるほど、ずっとその温かさを知ることができるほど近くににいるのに。

「ごめんなさい」

そう言って、俯く僕に抱きついた空。彼女が小さく震えているのが、体を通して伝わって来る。

「私も、わかってたんです。無理に笑顔でいるのは、辛いだけだつて」

だったらすがれよ、それがはっきりとするくらいに。と、言うてしまいましたかった。でも、それは僕のがままでしかない。

「これ以上……。空さんに負担はかけたくない」

「何言ってたんだ。負担じゃ」

「違うんです」

と、顔を振って彼女は僕を遮った。

「私のことを気にかけてあげれば気にかけてくれるほど、私のことが空さんの心の負担になる。ううん、なっているんです」

「……………」  
彼女は顔を上げて、僕を見つめた。そこにある二つの宝石は、健気に想いが溢れるのを我慢していた。

「だから、笑っていた方がいいって思ってたんです。でも……………」  
溢れ出てきた苦しみの想いは、双眸から一瞬にして滝のように流れてくる。

「そうすることも苦しいし……………空さんも傷つけて……………」  
顔を振り、目を閉じる。涙は溢れ、自分の顔と僕の服を濡らしていく。

「あの時、私はみんなを助けたかった……………。みんなと、一緒にいたいから……………そしたら、声が聴こえたんです。イヴとユリアの力を使えって……………」

「イヴと……………ユリア？」  
初めて聞く言葉だ。そう言えば……………ミランダは、「イヴズ」とかって言っていたような……………。

イヴ……………

ユリア？

二つの……………螺旋？

永遠に続く円環と似て非なる、二つの軌跡

「ただ、それに従うまま……手を掲げたら……」

すると、彼女は嗚咽でうまく話せなくなってきた。

「ど……して？ 私……嬉しいのに……辛い……」

僕たちを救って喜ばしいはずなのに、結果として自分を死に近づけてしまった。複雑な感情が、彼女の中で混じり合っていた。

みんなに対する感謝と、そう思ってしまうことによるみんなへの罪悪感。

彼女は、それを覆い隠してしまおうとしていた。

「どう……したらいいんです？ どうしても……苦しいだけ……苦しただけ……私……わたし……！」

何度も顔を振り、彼女は全てを振り払おうとした。現実も、何もかも。

「お前は……本当に優しい奴だな」

そう言つと、彼女は目を見開いたまま、僕を見つめた。

「そんなお前だから、好きになれた。そんなお前を好きになれて……本当に良かった」

「空さん……」

「隠すなよ。辛いことも、苦しいことも、嬉しいことも」

僕は、彼女を強く抱き締めた。

「一言だけでいい。たった一言でいい。お前がどうしたいのか、素直に言えよ」

「空……さ……！」

「どうしたい？ お前は……」

彼女は止まる気配の無い涙を何度も拭い、再び顔を上げた。空色の瞳は、水面のように揺れている。

「……生きたい……。空さんと……みんなと一緒に……！」

「空……」

僕が抱きしめるのと同時に、彼女は再び僕の中に顔を沈ませた。

「だったら、絶対にお前を護ってやる。何が何でも……」

「う……う……」

何かしらの方法を見つけてやる。こいつを助けるために……笑顔で妹の海に再会させるために……

海たちと、約束したのだから。

「お前の傍にいる。どんな時も」

世界には、自分を殺める者がいる。

そこには何かしらの理由が存在するのだろう

いつもの僕ならば、そう言っつて「自殺」することを否定も肯定もしなかつただろう。

でも、今日だけは否定したい。

こつやつて生きたいと願う人間がいるのに、てめえらは何やつてんだ。

こつして生への希望を見出そうとしてるのに、なんでてめえらは生への憎悪と死への渴望しか見出せない。

ただ、そうやって現実を滲ませようとしていた。

## 70章：忘却の空中都市 アトモスファイア

『まもなく到着します』

コックピットの機械から声が発せられた。その声は、この飛行機の中全体に行き届いている。この飛行艇のスピードから考えると、あと数十秒だろう。

みんなコックピットへ集まっていた。しばらく前方の風景を見ていると、上から何かが見えてきた。群青色をした、巨大な半球体。この距離からだ、半球体の全面に広がる、パズルを組み合わせた時のような境目の線が見える。そして、上の部分には都市が広がっている。光り輝く、水晶のようにキラキラしている。あれではまるで、水晶の都市だ。

半球体から延びている、たくさんの管のようなもの。それは、一つ一つの小さな半球体へ繋がっている。その半球体の上にも、都市が広がっている。だがあれらは、1番大きい半球体にあるような水晶の都市ではなく、ほんのりと群青色をした建物ばかりだ。素材が違うのかもしれない。

そうやって眺めていると、飛行艇のスピードが、だんだんゆっくりとなった。そして、ある半球体の端に到着した。ガコンと、機体がかかとセッティングされたような音がした。

乗客席のところから、いつの間にか扉が開いていた。真っ白な大理石の床が、扉の外に広がっている。

外へ出ると、涼しげな風が僕たちを包んだ。

「……………わあ……………」

「ここが……………アトモスフィア……………」

大きく広がる平面に建てられた、数々の建造物。見たこともないような形をした建物ばかりだ。ビルの縮小版のような長方形の建物や、ピラミッドみたいな三角すいの建物など、いろいろだ。たぶん住宅なのだろうが、一般人が住むには立派な造りをしている。すべての壁。太陽の光が当たって、光を反射している。とはいえ、さすがに二千年も経っているためか、少し腐食しているようにも見える。

真っ白な大理石の床が広がっているのかと思いきや、都市の方には芝生が生い茂っていた。それも、きれいに整備されている。区画ごとに分けられているようで、道路となっている白いところには一切生えていない。

「滅ぼされた、とは思えないほどきれいだな」

都市の中期、デルゲンがごと漏らした。

「ユリウスに滅茶苦茶にされたかと思つてたけど……………そういうわけでもないみたいね」

「……………」

人がいないのが、不思議だった。大都カナンのみみたいだ。機能しているように見え、人が住んでいるようにも見えるが、実際に来てみれば、人の気配がまったくしない。何も無い草原のように、静寂なのだ。聴こえるのは、吹き抜ける風の通り過ぎた後の名残。遙か上空にあるためか、風は少し強く感じる。

ふと気が付いた。地面に、雲が這いずり回っているのだ。運動会で使う大玉くらいの大きさの雲が、手の届く高さを流れたり、足を流れたり、中には僕たちの顔に直撃するものもある。地上ではあり得ない光景だ。

「……………暁の誓約が崩れる時、人は天より母なる大地に還る。天空の

楽園を捨てし神々の幼子、終わり無き旅路の果てに、蒼空への鎮魂歌を捧げる……」

シエリアはぶつぶつと、立ち止まって何かを呟いている。

「シエリア、それは？」

アンナが訊ねた。

「伝承の一部にある言葉だよ。小さい頃から、僕たちはその伝承を両親や、親類から教えられるんだ。忘れてはならない、一つの歴史だから……って」

「……天空の楽園、か」

僕は辺りを見渡した。

きれいに整備された道。シンプルでありながらも、壮麗さをほこる建物。一つ一つの建物の周りに生い茂る、緑の芝生。建物の隙間を縫って、駆け巡る優しい風。上空に広がる、果てしなき青空。その中心に、命の光をもたらず太陽が1つ。

たしかに、天空の楽園だ。

人は、こういう場所に 神 が住んでいると思っっているのかもしれない。だから、ここへ移り住んだ人たちは、自分たちが 絶対者 であると勘違いし、何かを傷つけ、当たり前前の心を失ってゆくのかも知れない。

だって、ここは 楽園 なんかない。ここは、人の 驕り

そのものだ。己の力を過信した、愚かな生命の、1つの戒め。

「浮遊大陸というより……浮遊都市だな、どちらかと言つと」

と、レンドは呟いた。

「そうね……どれも、見るからに人工的なものばかりっぽい。この芝生も、きつと人工のものよ」

「そうなんですか？」

アンナはしゃがむと、足元の芝生に触れた。指でつまんでさすったり、引っ張ったりしていた。

「……引っ張っても、取れませんか。それに、なんだかツルツルしてる」

「へえ、すごいな。地上には、そんなもの無かったぜ？」

「当たり前だろ。中世くらいの文化力しかないんだから」

「中世？」

「……ガイアの1000年前くらいの時代をそう云うんだ。レイディアントは僕が見る限り、そのくらいの文明に見えるよ」

まあ、実際に当時の文明がいかほどなのかを見たわけではないが、「同じ時間を行んでるのに、1000年くらい差があるのか……まったく、誰だよ？ 歴史改変した男ってのは」

歴史改変……

世界を変えるほどに、大きな事柄 事象を変化させ、星が歩むべき道を捻じ曲げた張本人。

でも、その人は滅びゆく星を救うために、そうしたのだ。世界の未来が分かれ、次元が狂ったのは想定外だったのではないだろうか。

今となつては、知る術は無いけれど……どう考えても、その人はもうこの世にはいない。聞いたわけではないが、そうと確信している。理由もなしに。

「おい、こつち来てみるよ。すげえぞ」

レンドが僕たちを手招きしていた。レンドがいるところは、この半球体の都市の端だった。そこからは、地上が覗くことができた。覗くことができるというより、流れる雲の下にある豆粒のように小さい島々、青々とした森林が広がるグラン大陸、そしてそれらを囲む広大な青い海を見下ろしている感覚。大陸などは、ほんのりと青く霞んでいる。

「そつか……ここは、遥か雲の上だったな」

一体、地上から何メートル離れているんだろう。何十キロとかいう距離じゃないと思うけど。

「……あれは、アルカディア大陸でしょうか？」

アンナは水平線の端を指差した。少しだけ、大陸の姿が見える。

「太陽の位置から見て……あれは、アルカディアでもロンバルディアでもないと思うよ」

リサは上空を見上げた　という表現はおかしいかもしれない。  
ここは、その上空にある場所なのだから。

「私たちの知らない、未開の大陸　なのかもね」

「へえ……そんなのあるんだな」

と、デルゲンも遠くを眺めた。

「あるに決まってるよ。だって、世界は広いんだよ？　まだまだ、  
開拓されきっていない。……もしかしたら、ティルナノグ帝国はす  
べてを知っていて、あらゆる大地を支配していたのかもしれないけ  
どね」

たしかに、リサの言うとおりだ。地球は、そんなに小さくはない。  
思ったよりも、遙かに大きい。アルカディア大陸やロンバルディア  
大陸を歩いてみて思ったけど、ユーラシア大陸とかのように広大だ  
とは思えない。せいぜい、中国大陸程度ではなかるうか。いや、ヨ  
ーロッパくらいかもしれない。

どちらにしても、その程度の広さの大陸二つと、グラン大陸を合  
わしても、ガイアの大陸の半分にも達していないと思う。

「……ここから落ちたら、シャレに　ぶっ！！」

変な声が聞こえた方向に目をやると、レンドが顔を押しさえて痛が  
っている。

「……何やってんの？」

ものすごく呆れた様子で、リサは言った。

「な、なんか……ありもしない壁に当たってよお」

「壁？」

僕はレンドのいる所に行き、手をそつと伸ばしてみた。すると、  
何も無いのに壁に触れた感触がするのと同時に、その触れた部分  
が水面の波紋のように揺れ始めた。

「これは……見えない壁か？」

もう一度触れると、再びゆらゆらと波紋を広げていく。

「なるほど、人が落ちないようにするためのものか」

「ああ？　どーいうこつた？」

「つまり、特殊な仕掛けで障壁かなんか発生させてるんだよ。もしかしたら、魔法の類なのかもしれないけど……安全のためのものってことだろうね」

恐ろしいほどに高度な技術だな。外の空中の風景は見えるのに、水面であり、それでいて固い壁のようなものがこの都市全体を囲んでいる。けど、風などは遮断しない。目に見える物理的なものしか遮らないようにできているのかもしれない。

「……これだったら、絶対に落ちないね」

と、シエリアは胸を撫で下ろしていた。

「シエリア、怖いのか？」

レンドがニヤニヤしながら言った。彼女の足を見ると、小さく、小刻みに震えている。

「べ、別に。怖くなんかない」

「言葉と体は正反対だな」

ハハハ、とレンドは笑った。

「笑うな！ こ、怖いんだから、しょうがないだろ！」

シエリアは顔を真っ赤にして言った。瞳には涙がたまっている。

「……しょうがねえ奴だな。ホレ」

すると、レンドはシエリアを担ぎ、肩車をした。

「わ、わ！ な、何すんだ！」

シエリアはレンドの上で暴れ始めた。

「暴れるなって。こうしておけば、お前が歩く必要はないだろ？」

そうすれば、お前がフラツと倒れることもないし、アトモスファイアから落っこちることないだろ？」

「こ、怖いこと言うな！」

「ハハハ。そんだけ元気なら大丈夫だろ。ホラ、ちゃんと捕まってる」

「……むう……」

シエリアは大人しくなり、両手でレンドの頭にしがみついた。

「へえ、いいところあるじゃん」

リサは僕の耳元で、囁くように言った。

「たしかに、な」

シエリアも、なんだか安心した様子だった。なんだかんだ言って、彼女は小学生と同じ年頃の子供だもんな。

「よし、さっさと行こうぜ」

「わ！ ゆ、揺らさないでよ！」

ギヤーギヤーわめきながら、2人は歩き進んで行った。僕たちも、その後へ付いて行った。

「レンドにはさ、2人の妹がいたんだ」

歩きながら、デルゲンが言った。

「いた？」

過去形だ。

「一人は今も元気に生きているが、あいつが14歳の時に、もう一人の妹は病気で死んじまった。……シエリアと同じ歳の時にな」

レンドの方に目を向けると、妹に接しているような……そんな姿に見えた。

「……名前は、なんて言うんですか？」

空は僕と同じようにレンドの背中を見つめ、訊ねた。

「サーシャ。俺の妹と同じ年だったよ」

誰かを失う痛み。大切な人を失う想い。

誰にも、それを理解することも、感じることもできない。その痛みも、苦しみも、悲しみも、その人だけのものだから。

「似ているわけではないが、結構活発な女の子だったからな。……どこか、シエリアの姿からサーシャの姿を映しているのかもな」

「樹たちはどこにいるんだろーな」

シエリアを肩車しているレンドは、歩きながら呟いた。

「そりゃ、天空帝都でしょーよ」

「その帝都はどこかって話だよ」

リサは辺りを見渡した。

「……たぶん、あの1番大きい半球体だろうね」

「水晶みたいな建物ばかりの所ですか？」

アンナも遠くにあるそこを眺め、言った。

「私の村にあつた伝承では、天空帝都セレスティアルは『青く輝く都』だつたと記されてあつた。それが正しいならば、あれがそうでしょうね」

最も大きな半球体の上面に広がる、水晶の都市。ここからだと、見るぶんには結構近いのでその姿がよく見える。

ここらの建物とは違い、水晶のように青色　いや、水色に輝いている。光が反射して、キラキラと光を放っている。

都市の中央にあるのか、宮殿のように見える巨大な建物が、都市に囲まれた中程からよきつとその姿を、さらに上へ伸ばしていた。さらにその上には、何にも支えられていない円盤のようなものがあり、そのさらに上には別の円盤が　って、どうやって浮かんでるんだ？　建物くらい、連結させておけばいいのに。

その宮殿は他の建物とは違い、真っ白な造りだ。所々に窓が付いており、それが水晶のように輝いている。

「……よし、行こう」

ここから、わずか数キロの距離のはずだ。僕たちは、足早にこの都市を進んだ。

都市の端まで来ると、1つの長い橋のようなものが姿を現した。これが、地上から見た時に管のように見えたものだ。細長く、橋とは言えないかもしれない。手をつかむような場所が無いため、もしバランスを崩したりでもしたら、真つ逆さまだ。幅も、わずか1メートル強しかない。

ふと、橋の横の部分に目が行くと、窓のようなものが付いている。ズラッと、この橋全体に付いている。

「……もしかして、これは内部を通ってあそこに行くためなのか？」  
辺りを見渡しても、別の道はなさそうだ。

「上を渡っていくのは、危険としか言いようが無いぜ？」  
シエリアを肩車しているレンドが、軽く彼女の足を叩いた。

「こいつが失神しちまうよ」

「だ、誰が！ 失神なんかするもんか！」

「おお、威勢だけはいつも立派だもんなあ。ともかく、中の通路を通れるならそれに越したことはない。探そうぜ」

「そ、そうだな」

すぐ近くに、他の建造物とは違うものを発見した。天井が低いため、一階しかないようだ。人が住めるほどの大きさのものにも見えない。僕たちは、そこへ進んだ。

この建物は、自動ドアだった。鏡のように僕たちの姿を反射していたが、中へ入ってみて、驚いた。外からだ、その自動ドアから外が見えるのだ。マジックミラー……みたいなもんか。

内部は、ホントに狭かった。ほんの、4畳程度の広さだ。壁や床は外と違い、なんだか暗い青色をしていた。変なカクカクした亀裂が部屋全体にあり、その隙間から白い光を出していた。これは壊れているわけではなく、故意にやったものだろう。部屋の中には、見覚えのある魔方陣が描かれていた。

「この魔方陣は……」

「転移魔方陣。ホラ、私やミランダたちが転移魔法を使った時に出

る、あの魔方陣だよ」

と、リサはそれを指差す。

「じゃあ、これはどこかへ繋がってるってことか？」

「たぶん、ね」

「まあ、ともかく入ってみようぜ。考えるのは、それからだ」

「……レンドは適当だな」

「そうですね」

アンナはクスクス笑っていた。

魔方陣へ入ると、青い光の粒子たちが目の前に舞い上がった。フワフワと、ほこりのように漂っている。そして、いつものように一瞬だけ目の前が真っ白になった。

光が視界から遠ざかっていくと、さっきと同じような部屋が広がっていた。ただ違うのは、自動ドアから見える風景が違ったところだ。一つの通路が見える。

自動ドアから出ると、長い通路が現れた。幅は1メートル強。両壁には、一定の間隔を開けた窓が並んでいた。そのどれも、青い風景が広がっている。

「当たり前だな。ここは、さっきの橋の中のような」

細い通路。窓から見える空の風景は、いつまで見ていても飽きない。上も下も空だから、なんだか変な感じがしてしまう。

再び実感する。ここは、天空なのだ。

夢のような世界。

空想の中でしかないはずの世界。

それが、こうして現実のものとして広がっている。

もしかしたら、これは 夢 なんじゃないだろうか。始めから夢で、僕が夢見ている世界を旅している 夢 を見ているんじゃないのか？ こうして歩いているのも、こうしてみんなと話しているのも。

こうして、妙な力を保持しているのも。

でも……現実なんだよな。夢の世界には、僕の感情なんていやしないのだから。この、最後に向けてのドキドキと、大切な人が死んでしまうという未来を待ち受ける絶望感。これは、現実のもの。

ホントは、そんなもの味わいたくもない。苦しみを味わいたくないのが、本音だ。けど、受け入れなければならぬ。

決めたんだもんな、ヴァルバ。

最後の最後まで、抗うって……。

長い通路を歩くと、再び自動ドア。そこを入ると、さっきと同じような魔方陣があった。そこから別の場所に出ることができた。

「まぶし……」

目を覆わんばかりの眩しさだった。建物すべてが、光を反射している。宝石のようにキラキラと輝いている。

「ここが……天空帝都……」

空は辺りを見渡しながら、そう呟いた。

水晶のような建造物。さっきいた都市にあった建物よりも、もっと大きく、高い。高層ビルや、マンション、そしてピラミッド型の建造物。すべてが水色のガラスで作られている。ガラスじゃないのかもしれないが。

同じように、大理石の真っ白な通と、緑の芝生はきれいに区分されている。人が住まう場所の周りには、きれいに生い茂っている。所々、白い花や赤い花、多種多様の花が顔を出している。あれらも、

レプリカなのだろうか。

帝都の中心、アヴァロン並みの幅の広い通の果てに、真っ白な宮殿が見える。さつき見えた宮殿だ。天高くそびえる、巨大な宮殿。きつと、あれが天帝が住んでいた場所なんだろう。二千年前まで、あそこで一人の権力者が世界を牛耳っていたんだ。それを考えると、なんとも言えぬ身震いを感じた。

「なんて言うか、ここは今まで見てきた都市とは別格だな」  
通を歩きながら、レンドが言った。

「眩しいにもほどがあるよ……」

シエリアはすでにレンドの肩から降りているが、指で彼の服の端をつまんでいる。顔は似ても似つかないが、なんだか兄妹みたいだ。僕は、通を離れて建物に触れてみた。

……すべすべで、ツルツル。こうして触ってみると、ガラスじゃないみたいだ。一体、どんな素材でできているんだろう？ もしかしたら、銀や金よりも、さらにはダイヤモンドよりも固い素材なのかもしれない。

それはあり得る。だって、ガイアよりも優れた文明を築き上げたティルナノグだ。そういうものがあっても、不思議ではない。

「この花は本物でしょうか？」

空が僕の傍にやって来て、花に触れた。すると、簡単に花びらが取れてしまった。そして、彼女の指先にも、白い粉のようなものが付着していた。

「この花……本物です」

「……花だけは、勝手に生えてきてしまったんだろうな。二千年も放っておかれれば、そうなるか」

これは なんだっけ。パンジーだったかな。この季節に咲く花なのか、よくわからない。1年近くガイアから離れているためか、花の名とその姿を忘れかけてしまっている。

通を進んでゆくと、広場みたいなところに出た。中央に噴水があり、周りには小さな池がいくつもある。

「これ、水じゃないぞ。ガラスだ」

デルゲンはしゃがみこみ、何かを覗き込んでいる。

小さな池かと思ったものは、ガラスだった。そこから、この半球体の内部が覗ける。内部には、また別の都市が広がっていた。都市というより、工場のようにも見える。だけど、不思議な空間だ。正方形の何かが空中をフワフワと浮かんで移動していたり、三角すいやら長方形をした宝石のようなものも、辺りを漂っている。谷底の奥には、赤く光る巨大な水晶体も見える。チカチカと光っては、長いこと点滅している。

「……すごい技術ですね」

「これって、聖都と同じ感じじゃない？」

リサが覗きながら言った。そう言えば、聖都ソフィアにも地下に巨大な空間があり、そこに大都市が広がっていた。

「ここは、あそこにいたカインが造ったんだ。関連はあるだろうな」  
わざわざ嫌な施設の造りまで模倣したくはなかったとは思っけど。  
「……あいつは、何を考えてこの帝国を創ったんだろう……」

「……………」  
青と白と緑を基調とした壮麗な都、セレスティアル。美しすぎる都だ。人の叡智によって築かれた、最高の都市。人々は、こういう所を楽園だと感じる。僕も、ここは楽園じゃないかと思わんばかりだ。

「……………行こう。もう昼間だ」

僕たちは再び進み始めた。

宮殿の手前まで到着。ここには、宮殿に続く大きな階段がある。

とは言っても、ほんの数段だけだが。

この階段の前　白い床に巨大な紋章が刻まれている。もちろん、あの紋章だ。これが、ティルナノグを証明する紋章。

この階段の手前から、左右にも通が広がっている。ずっと先には、他の都市が見える。

「……不気味な静けさだな」

ふと、レンドが言った。鋭い目つきで、辺りを見渡す。

「奴らがいるはずなのに、その気配がしない。あまりにも、静か過ぎる……」

リサは腕を組み、左右の通に目をやった。風が吹き、花が小さく揺れている。

「……………」

風の音が僕たちの間を縫って通り過ぎ、僕たちを覆うくらいの雲の塊が目の前をよぎる。

雲が消えた瞬間、床に足を着けた音が正面の方から聴こえた。すぐさま視線を階段の上……宮殿の入り口に向けると

「よお来たの」

そこにいたのは、シュヴァルツとバルバロッサだった。

「お前ら……！！」

うなじの辺りで長い黒髪を結び、Vネックの黒い服を着ている巨漢がシュヴァルツ。そして、後頭部で髪を結び、首元まである黒いタイツを着て白銀のベルトを付けているのがバルバロッサだ。

「お前らがおるっちゅーことは……ミランダは逝ったか」

一瞥するなり、シュヴァルツは細い目つきで呟いた。

「シュヴァルツ、バルバロッサ！」

リサは小さく唇を噛み締めながら、奴らを睨みつけた。

「そういきり立つなや、リリーナ。お前らの相手は、ワイらやないと、バルバロッサは微笑みながら指を鳴らした。

「？ それは、どういう」

その時、何かが上空から降ってきた。それは床に直撃し、大きな揺れを引き起こした。2メートルはある、大きな岩石が4つ。かと思いきや、その岩石は身体の中程から4本の棒を出した。いや、それは両腕と両足だった。そして、最後にてっぺんから拳大の岩石がよきつと出てきた。

「セレスティアル・ガーディアンや。お前らの相手には十分やで」

「……バルバロッサ！」

リサはキツと顔を上げると、奴はにこやかに手を振って来た。

「ほな、頑張りや〜」

「ワイらは ロキ の復活に取りかかるんでな。ほなさいなら〜」

2人は笑いながら、宮殿の内部へ進んで行った。

「ま、待て！」

僕が走り出そうとした瞬間、あのセレスティアル・ガーディアンが僕の前に立ちはだかった。大きく、全身がこげ茶色だ。頭と思われる部分にはセンサーなのか、2つの穴の中にビー玉のようなものが見える。

「くそ、邪魔だー！！」

僕は拳に力をため、バルドルでそのまま正拳突きを、岩石人形の懐にぶつけた。すると、拳が埋まるほどだったのだが、岩石人形の動きを止めるほどではなかった。

「くっ！ かってー！！」

逆に、自分の手が痛かった。僕は右手を冷ますように、フー、フーと息を当てた。

「おいおい、こんな奴らどうやって倒すんだ!？」

斧を取り出し、構えているレンドが言った。

「……セレスティアル・ガーディアン……たぶん、地のエレメンタルの結晶体だろうね」

リサは特技で衝撃波をぶっ飛ばし、岩石人形にぶつけた。しかし、それは一瞬だけ動きを止めるだけにしか過ぎなかった。

「ちっ……この程度じゃあ効かないわね」

「結晶体って、どういうことだ？」

「純粹な地 ってこと。どこその宝石よりも硬いわよ」

マジかよ……。

「んで、どうすんだ？」

僕は手を広げ、光線をはじき出した。しかし、それもさつきりサがやったのと同じ程度しか効果が無かった。

「エレメンタルの結晶体とはいっても、どこかに刻印があって、それで私たちを攻撃するように設定されているんだと思う。つまり、その部分を攻撃すれば奴らはただの石ころさ！」

その時、岩石人形が攻撃を仕掛けてきた。大きく腕を振り上げ、一気に振り下ろす。それを横っ跳びで避けたが、その攻撃が床に直撃し、辺りを大きく揺らした。

「うおっ！ こ、こんなの喰らったら木っ端微塵だぞ!？」

あまりの衝撃に、レンドは驚嘆している。こりゃあ……骨折れるだけじゃすまないかもな。

「んなこと言ってる場合かって！ ともかく、攻撃だ!」

デルゲンは槍を構え、岩石人形の攻撃を避けた。そして、動きながらや奴らの体を見て回った。

その時

「!?!?!」

空が攻撃されそうだった。僕はとっさに、彼女を抱えて床へ転げた。岩石人形の攻撃は外れ、再び床を直撃。すると、その衝撃で床に亀裂が走った。

「!? まずい! みんな、離れろ!」

リサが言った時には、遅かった。

亀裂はすぐさま広がり、崩壊した。氷を張った水溜りのように割れ、半球体の内部へと落下していった。僕と空は運よく飛び出していたため、難を逃れた。リサも何とか床の端を掴んで、ぶら下がっている。だが、他のみんなは岩石人形と共に下へ落下してしまっていた。

「みんな!」

僕はすぐさま駆け寄り、リサを引っ張り出し、開いた穴の底を覗いた。あまり深くはなく、3、4メートル程度だった。アリーナのような場所に、レンドたちは落ちてしまったんだ。砂埃に塗れ、身体をさすっている。その周りに、岩石人形がノロノロとうごめいている。

「だ、大丈夫だ! 俺たちのことはいいから、先へ進め!」

デルゲンは僕たちを見上げるなり、叫んだ。

「何言ってるんだよ! そんなこと」

「さつき、奴らは言ってただろ! 『ロキを復活させる』と。早く行かないと、手遅れになっちゃう!」

「だけど……!」

何かを言おうとする僕に、それを遮らんばかりにデルゲンは顔を振る。

「何のためにここまで来た! 世界を護るためだろ!? 樹たちを止めなきゃいけないんだろ!」

「デルゲン……」

「空……行こう。みんなのためにも」

リサは僕の肩に手を置いて言った。

「俺たちのことなら心配すんな！ 何とかすっからよー!!」

自信満々の顔で、レンドは斧を掲げる。

「早く、行ってください！」

「そつだよ。時間が無いんだからさ」

アンナとシエリアも、笑顔で言った。本当は、怖いはずなのに。

「……わかった。行こう、リサ、空！」

リサと空はうなずき、僕たちは階段を駆け上り、宮殿へと突っ走った。

そこで待ち受けている運命の円環

遠い過去に交叉し、長らく違えていた二つの螺旋

約束の刻は、目の前に迫っていた。

「……ふう……何とかする　とは言ったものの、どうすつかねえ」  
「レンドは小さくため息を吐いた。」  
「おいおいレンド、いつに無く弱気じゃないか」  
「デルゲンはレンドの傍に歩み寄り、微笑みながらそう言った。」  
「行動がのろいとは言え、あんなパンチ一発でも受けたら、確実に骨が10本は折れる。頭にやられた日には、あの世行きだな」  
と、レンドは苦笑しつつお手上げのポーズを見せて見せた。余裕の表れなのか、二人ともものんびりした様子であった。  
「まあ、な。そこは何とかするしかないだろ？」  
「……気楽な奴だな。少しは気負わねえと」  
「お前にそれを言われちゃ、元も子もないな」  
「そりゃそうか　と、レンドは斧を肩に担ぎ、呟いた。」  
「気楽というより、プラス思考と言って欲しいもんだ」  
「いつもと逆ですね」  
と、アンナは二人の後ろで微笑んでいた。  
「アンナもそう思う？　プラス思考は俺の専売特許だったのによ」  
「意味わかんないって」  
「シェリアはため息混じりに言う。」  
「ホラホラ、前見て。来たよ」  
「ようやく標的を見定められたのか、セレスティアル・ガーディアたちはゆっくりと歩を進め、レンドたちに向って来ている。」  
「さあて、いつちよやってやりますか」  
「セレスティアル・ガーディアンは地響きを立てながら、足を上げて進んで来る。一步一步が遅いが、それだけ重厚感がある。」  
「……まあ何とかなる……かな」  
地に足を付ける度に揺れるので、急に不安になって来たデルゲン。  
「こんな所で死ねないもんな」  
そして、デルゲンは槍の切っ先を奴らに向ける。

「できるなら、地上で死にてえもんだ。こんな所は嫌だわ、さすがに」  
「ハハ、たしかに」

## 71章：光の決意 破滅の空を穿つ時

不思議な宮殿だ。外からは内部がまったく見えなかったのに、大きな窓のようなところから外が見える。青い空が広がり、雲が流れている。

扉を潜り抜けた先に広がっていたのは、ドーム式で真っ白な大理石の広間だった。

「……来たか。これで、邪魔者はおらへんな」

シュヴァルツは僕たちを見据えるなり、ほくそ笑んだ。

奴らはこのフロアの中心に立っている。そっくりな二人の姿が、そこにはつきりと。

「……樹はどこだ？」

彼らから10メートルほど離れた場所まで来ると、僕たちは立ち止まった。バルバロッサは細い目で、訊ねた僕に視線を合わせる。

「あいつはすでに 上 や。ロキの復活に取り組んどる」

そう言って、奴は天井を指差した。

「なら、どけ。お前たちにかまつてる暇なんかないんだ」

僕は彼らを睨みつけながら、歩きだした。すると、シュヴァルツは片手を前に出して顔を振る。

「待てや。こつから先は進ませへんで」

「ここを通りたきや、ワイらを倒すしかない。……な？」

2人は微笑みながらも、燃えるような闘志をたぎらせている。

「ええ場所やと思わんか？ ワイらが闘うに、相応しい場所やんけ」  
シュヴァルツは腰に手を当て、笑顔で言った。

「遙か至上の天帝が創り出した、古の帝国 テイルナノグ。元々は、当時信仰されとった宗教の中にある、英雄らの楽園らしいで」  
辺りを見渡し、バルバロッサは微笑みながらそう言った。

その時、僕の隣にいたリサが一步前に進んだ。

「シユヴァルツ、バルバロッサ。……私は、一族の仇を討つために……あんたたちを殺すために、ここまで来た」

彼女は握りしめている拳を、小さく震わしていた。そして、彼女は顔を振る。それを振り払うかのように。

「でも、それは過去の私。ここに来たのは、あんたたちを止めるため。この世界を、殺させないため」

リサは僕の方に振り向き、うなずいた。僕も同じようにうなずくと、再び彼女は奴らを見据えた。

「私は復讐のためだけに生きて来たんじゃない。私は私のために……全ての子供たちに未来あしたを見させるために、生きてきたんだ」

誇らしげに彼女が発する言葉は、迷いが一切無いもののように感じた。決心して、ここまで来た……それだけなのだから。

「だからこそ、あんたたちに問うよ。どうして、この世界を殺すのか」

自分の胸に手を当てて、彼女は言った。奴らはさっきまでの笑みを消し、リサを見つめている。

「……『星の滅亡』という未来を回避するため　以前言ったやろ？」

バルバロッサは首をかしげ、言った。

「そうじゃない。どうして、そうしようとしたの？　どうして、滅ぼすという手段を選んだの？　……私は、それを聴きたいの」

他にも方法があるはずなのに、彼らは世界を殺すことを決めた。

その理由など、従妹である彼女でさえ理解できなかったこと。

「リリーナ、お前にはゆったことは無かったが……ワイらは、特殊な能力を持って生まれたんや」

シュヴァルツは頭をかきながら言った。

「特殊な能力？」

「『未来予知』の能力や。『先読み』とでも言えるのかな」

「それは……『未来を見通す力』、ということか？」

そう言つと、バルバロツサは小さくうなづく。

「ワイらは、生まれつきその能力を持つとつた。そのことは、誰にもゆつて無かつた。始めはワイらも疑つとつたからな」

「中途半端な能力や。ここ最近、まったく出てこん。……せやけど、7年前……ワイらは見てしもつたんや」

バルバロツサは顔を上げ、天井を見つめた。

「煌めく残照……その中で、全てが崩壊しとつた。空も、大地も、海も……ヒトも」

「世界は終わりを告げ、あらゆる生命体は塵になる。おびただしいほどの粉塵が舞い、太陽の光は遮られ……星は死んだ」

シュヴァルツは腕を組み、目を閉じた。

「阿鼻叫喚の言葉が入り乱れる中、ある言葉が流れ込んできたんや」

数千年後、星は死ぬよ

君たち、ヒトによつて

「……………」

シュヴァルツはまぶたを開け、リサと同じエメラルドグリーンの双眸で僕たちを見据えた。

「ワイらはな、いずれ一族の長になる。せやから、ガキン頃から」

星』について学んできとった。星はワイらの力の源、ワイらの心の在り処 やとな」

ラグナロク一族の中で、そういったものが伝わっていたのだろうか。

「せやけど、ヒトが星を殺す。己らの母を、その手でな」

彼は握りしめた拳を突き出し、言った。

「ならどうする？ 結果を知っとるからこそ、ワイらでできることがある。それを模索していく中で、ワイらはロキの秘密を知った」

バルバロッサは当時を振り返りながら言った。

ラグナロク一族に伝わりし歴史……それが一体何なのか、彼らは古書などから研究したのだという。

「ワイらは……ラグナロク一族は、ソフィア教典の『聖女』……サリア・ヴェルエス・カルドムンドの末裔 やと知った」

「！！？」

聖女サリア

アイオーン1世に聖杯を渡し、妻となったといわれる人物。彼女は実在した人物で、アイオーンとユリウスの従妹であり、ヴェルエス皇室だった。

以前、ヴァルハラのアラファドさんは言っていた。「アイオーンは二人の人間に、聖杯と聖書を渡した」……と。

「聖杯グラールがなんのために存在しとんのか知ったワイらは、かつて……世界を分岐した事実も知った」

「『奴』が目指した方法じゃ、星は救えん。なら、殺せばいい。星以外、全てを消し去れば……」

バルバロッサは小さく顔を振り、言った。

「……それが、お前たちの本音か」

二人はうなづく。

「だからって、どうして関係の無い人を殺す必要があるんだ？」

大量殺戮の果てにあるのは、無。意味が無いのは明らかだ。

「……何かを助けるには、それと同じ犠牲が必要。前にもゆうたやんけ。何度も言わせんなや」

バルバロツサは睨みつけるかのように、僕を見る。

「好きで人を殺すんじゃない。それ相応の覚悟を持って、ワイらは人殺しをする。結果、星が救えるんならなんと言われようとかまわへん」

そう言ったシュヴァルツに、僕は思わずキツと睨んだ。

「じゃあ、帝都でアンナに向けて暗黒魔法を放ったのはどうなんだ！？ アンナは殺す必要なんて無いはずじゃないのか!？」

約束を破り、アンナを殺そうとして……結果、ヴァルバが死んでしまった。その時のことを思うと、体が震えてくる。

「……んなの、ただの『餌』や」

バルバロツサは小さく微笑み、言い始めた。

「ゼテギネア皇室ペンドラゴン家……あそこもまた、ワイらと同じテイルナノグ皇室なんや。知らんかったろ？」

「えっ……!？」

僕とリサは驚きを隠せなかった。それを見て、奴は微笑みながら続ける。

「ソフィア教典の『主天使』 アムナリアⅡセントジネスⅡペンドラゴン・ヴェルエス。そいつこそ、聖書を受け継いだアイオーンらの叔母や」

僕はその時、帝都アヴァロンでのことを思い出した。あの時、重臣の誰かが言っていたような気がする。『主天使アムナリア』とか

って……。

「傍系ながら、ワイらグランディア家に劣るが、ペンドラゴン家も不思議な能力を持つとった。その一人が、ベオウルフなんや」

「ヴァルバは生まれつき、『属性を判別する能力』を持っていたという。だからこそ、リサや空の先天属性を知っていたんだ。」

「それだけであいつを殺したの!？」

リサが叫ぶかのように言うと、シュヴァルツは顔を振る。

「なわけないやろ。……ある奴に頼まれてん。『ベオウルフを殺せ』……とな」

「あるやつ? それは誰だ!」

「それは言えん。ワイらも、あいつのことはよわからへんからなあんまし顔合わせたことないしの」

「ただ、『そいつにとつて知られてほしくないこと』でもあったんちゃう? そうでもなきや、ベオウルフ如き放つといたやろ」

「……………」

「ヴァルバはそんなことで殺された。あいつのアンナを守ろうとする行動を利用して……。」

「教えといたる。そいつの名は『リオン』……ロンバルディアとアルカディアの制圧総司令官や」

「バルバロッサは首をかしげながらそう言った。」

「リオン……そいつは、ここにはいないってことか。彼らの言葉から察するに、そのリオンという奴も幹部なのだろう。」

「今、そいつはゼナン皇帝やアルベルト王子たちと戦っている……。」

「ま、んなことはどーでもええんや。それより……………」

2人は、不敵な笑みを浮かべて僕たちを見つめた。

「小僧、リリーナ」

シュヴァルツの言葉と同時に、僕は彼らを見つめた。

「お前らはこれ以上、上には行けん。弟の樹と対峙することはありません」

「……お前らは、ここで死ぬ。この……蒼空の上でな！」

奴らは一気に闘気を解放した。殺戮の意思が、そこかしこに広がる。

その時

「空さん、リサさん」

後ろにいた空が、僕の服の袖を掴んでいた。

「……勝ってください。そして、信じてます」

悲痛な面持ちの彼女は、無理に微笑んでいた。その健気な彼女の姿に対し、僕たちは微笑み返すしかなかった。

「ああ。任せとけ」

「絶対に勝ってやるからさ！」

空はうなずき、後ろへ走って行った。彼女が十分離れたところで、僕は心の中で「それ」を喚んだ。

ティルフィンゲ

空間に具現化された、青い刀身を持つ神剣……それを握りしめ、

僕は構えた。

「さて、お前らがこの数ヶ月でどこまでつよおなったか……見せてもらおうか」

バルバロッサは、ゆっくりと足を進ませてきた。

「アヴァロンじゃあ死にかけたしのお……リリーナ」

「……………」

シュヴァルツも、ゆっくり歩き始めた。

「我に眠る、聖魔の血よ……具現せよ！ 魔闘気！！」

禍々しい光と共に、リサの長い金髪の髪の毛が舞い上がった。それと同時に、バルバロッサが屈み、床に掌を広げて押しつけた。

「破滅の旋律、我が膝下に在りし言霊を喰らえ……汝、時の底へ墮ちるがいい……砕け散る命の焰」

黄色い光が、彼を包み込む。

「カタストロフィ！！」

禁忌聖魔術が唱えられ、僕たちの足元に黄金の魔方陣が映し出された。それは一瞬にして煌めき、土砂と崩壊の宴を呼び起こす。

「空、上だ！！」

リサの言葉と共に、僕たちは魔法の領域内から逃れるために上空へ大きく跳躍した。

「血を飲め、鋭き陰りの刃　　ゲーヴレイグ！！」

今度はシュヴァルツが聖魔術を発動した。僕たちに無数の刃が猛スピードでやって来る。

僕はティルフィングを掲げ、巨大なマジックシールドを展開した。その刃の魔法を防いだ時、シュヴァルツとバルバロッサもこちらへ向かってジャンプしていた。

「……シュヴァルツは任せな」

「ああ」

リサは印を結び、緑の光を纏う。

「我が命の糧となれ……緑風の翼、我と共に！ ララヴェン！」

ミランダと闘った時に使った、浮遊魔法。そのまま、シュヴァルツの方へ直進する。

「鋭く貫け、瞬速の閃光！」

閃波・瞬光！！」

リサは一瞬のうちに弾丸のように小さい、いくつもの衝撃波を飛ばした。それを、シュヴァルツは手を前に出して広げた。弾丸の衝撃波は彼の手元で弾けながら消え去った。

「喰らえや！！ 獣牙閃！！」

空中で、シュヴァルツは空を裂く豪拳を繰り出した。リサはそれをさらに上空へ回転して避け、シュヴァルツに蹴りを繰り出す。

「小僧！！ お前の相手はワイや！！」

数メートル離れているバルバロッサの体に、赤い闘気が広がる。

「轟け、竜の咆哮 爆砕！ 竜撃砲！！」

バルバロッサは空中で回転しながら強力な蹴りを繰り出した。それを剣でガードしたが、強烈な衝撃波も噴出されたらしく、僕は後ろへ吹き飛んだ。

体勢を整えながら、僕は床へ着地した。それと同時に、バルバロツサも数メートル離れた場所に降り立った。

僕はすぐさまそこへ突撃し、斬撃を繰り出した。

「ぬ……っ！」

バルバロツサは後ろへ下がりがりながら、何とか避けていた。

速く、速く！　バルバロツサに攻撃の体勢を作る隙を与えるな！　バルバロツサはミドルキックを繰り出し、僕はそれを左腕で防くと、右手のティルフィングを奴に突き刺すように攻撃した。奴はそれを、後ろへ大きくバックステップをして避ける。

今だ　！

「喰らえ！！！」

距離が大きく開いた瞬間、僕は左手から光線を弾き出した。

「ちよこざいな！　クリスタルシエル！！！」

光線はバルバロツサの身体の周りに出現した、水晶のような障壁に直撃する。粉塵を巻き上げ、彼の周りがよく見えなくなった。

すると、バルバロツサは粉塵から抜け出し、僕のところへ猛スピードで移動した。

「ぶっ飛びな！　天撃衝！！！」

バルバロツサの右拳が赤く光り、その拳でアッパーカットを繰り出した。うまく防御できたのだが、僕は衝撃で宙高く舞い上がった。

「なっ！！！！？」

あれほど踏ん張っていたのに、こんなに吹き飛ばされるなんて……！！

……！！

「うるあああ！！　猛襲連脚！！！」

すでに、僕の近くにバルバロツサが来ていた。奴は回転蹴りをして、最後に蹴り下ろしをした。僕はそれをまともに受け、斜め下へ急降下し、床へ叩きつけられた。ソリッドプロテクトのおかげでありダメージは無かった。すぐに体勢を立て直し、前を見据えた。まだ、奴は上空にいる。

「っらあ……！！！」

僕の意思に反応したかのように、ティルフィングの鎧が青く煌めく。振り抜かれた時、強力な斬撃による三日月のような巨大な衝撃波が、一瞬にしてバルバロッサを襲う。

「ぐっ……!!」

バルバロッサは腕を十字にクロスさせて防御したが、衝撃波によつてさらに上空へ吹き飛ばされた。

彼は何とか着地することができたが、片膝を付いて、唇の端から血を流していた。両腕にも、腰にも、服が裂けて血が流れている場所があった。

「カカ……さすがは、真の調停者 ともゆうところか？」

バルバロッサは笑みを浮かべ、立ち上がった。

「これなら、ワイを楽しませてくれそうやんけ」

彼は右の拳を掲げた。その甲には、グランディア家の証であろう「紅い魔方陣」が刻まれている。

「……んじゃ、本気を出させてもらおうか……!!」

その時、彼を包み込む紫色のオーラが出現した。それと同時に、彼の藍色の髪さえも紫色に変貌したのではと錯覚する。

「それは……魔闘気!？」

「使えるのはリサだけやと思つたら、大間違いや」

微笑みながら、彼は僕を睨みつける。

「ククク……聖女サリアの力、たっぷりと味あわせたるわぁ!!!!」

「……来い!!」

聖女サリアの末裔だろうがなんだろうが、お前たちには負けない。いなくなったヴァルバヤ、みんな……そして、ガイアで待ってる海たちのためにも!

「うるあああ!!!!」

「はあああ!!!!」

バルバロッサの黄金色の拳が煌めき、  
ティルフィングとぶつかり  
合う

72章：魔狼と少女 崩れゆく想い出に（前書き）

今回の章は三人称です。

## 72章：魔狼と少女 崩れゆく想い出に

「闘気よ、我が焰の礎となれ！ 奥義、爆王竜炎掌！！」

リサは両掌をシュヴァルツの懐に当て瞬時に回転、闘気を爆発させた。局地的な真つ赤な爆炎がシュヴァルツを襲つた。

「ぬっ！」

シュヴァルツは衝撃で、そのまま後ろへ吹き飛んだ。体勢を整え、回転しながら着地する。懐の部分のタイツが摩擦熱で焼け、生身の腹筋をさらしていた。

「やるやないけ」

シュヴァルツはその焼け爛れた部分に触れながら、笑った。

「せやけど、この程度じゃあ効かんてえ！！」

10メートルも離れた場所から、瞬時にしてリサの目の前に移動したシュヴァルツは、豪拳を繰り出す。

リサはそれを右に移動して避け、ハイキックを繰り出す。しかし、シュヴァルツはそれは跳躍して避ける。

「奥義、魔翔爆霊波！！」

至近距離で彼は黒い衝撃波をいくつも繰り出し、リサにぶつける。

「やられっか！ 魔翔爆霊弾！！」

瞬時に同じ奥義を繰り出したリサ。互いの衝撃波がぶつかりあい、共に相殺される。その時の衝撃で、シュヴァルツはさらに宙高く浮かぶ。リサはそこで、印を結ぶ。

「血を飲め、鋭き陰りの刃よ ゲーヴレイグ！！」

無数の風の刃が、シュヴァルツ目掛けて突進する。シュヴァルツはそれに対し、手を広げて障壁を展開した。

「見せたるわ、本物の聖魔術をな!!!」

彼は空中から下降していく中、印を結ぶ。そして

「閻魔の審判、悉くを薙ぎ払え！ ウルテイル!!!」

シュヴァルツの掌が白く光り、無数の閃光となって上空へ飛んでいった。そして、そこから雨のように、リサの所へ降り注ぐ。

(ちっ……早い!!!)

リサはそれらを左右に素早く移動しながら避ける。その中で、詠唱を始めた。

「焰、我らが叫びに震え、緑風の大地を蹂躪せん!!!」

その魔法を発動しようとした時、シュヴァルツはとてつもないスピードで、リサとの間合いを詰めた。

「!!!」

「我が拳よ、破壊の牙と化せ！ 奥義、絞狼絶襲牙!!!」

シュヴァルツの両拳が共に血のように赤く光り、フック アツパ ーカットの瞬速攻撃を繰り出した。

「ぐあっ!!!」

リサの身体を、シュヴァルツの拳が突き抜ける。それと同時に、赤い血が……

「雑魚が……この程」

すると、突き抜けたはずのリサの身体が塵となり、消えた。

「!?!? これは……」

「あんたも見えたかい？ 桜闇をさ!!!」

塵となったかと思えば、それは桜の花びらのようになっていた。ピンク色の花びらが、シュヴァルツの左腕に纏わり付く。

いつの間にか、リサはシュヴァルツの背後に回っていた。

「反目の調、崩さん！ 連旋、昇脚!!!」

リサは体勢を低くして水平蹴りを繰り出し、更に強烈なサマーソルトキックでシュヴァルツを攻撃、上空へ打ち上げた。

「大気よ裂け！ 我が獅子の憤怒とならん！！ 奥義、獅空滅刃破！！」

リサは勢いをつけて体を回転させ、その蹴りで斬撃によって生じる巨大な衝撃波を発生させた。

衝撃波は一瞬にしてシュヴァルツに当たり、彼の身体に爪痕を残した。

「まだまだ！ 閃波・剛爆！！」

リサの正拳突きで、巨大な衝撃波を繰り出し、それでシュヴァルツを攻撃した。

「ぬあっ！！」

シュヴァルツの身体はさらに上空へ舞い上がった。それでもリサは、攻撃の手を止めようとしなかった。気を集中させ、拳に力をためる。

「大地を駆ける、魔狼の咆哮……奥義、魔翔爆霊波！！」

連続して黒い円形の衝撃波を、シュヴァルツ目掛けて飛ばした。そのすべてがシュヴァルツに命中し、黒い爆発を引き起こし、真っ黒な煙を漂わせた。

（どうだ……？）

リサは大きく息を吐きながら、呼吸を整えていた。

連続的に奥義級の技を行使したため、体内の魔力が消耗してしまい、その影響で長距離を走ったような感覚に襲われた。

「なかなかな」

シュヴァルツは、浮遊魔法で上空に浮かんでいた。彼の口からは赤い血が滴れ、タイツはボロボロになって、上半身のほとんどが生身になっていた。そのはだけた部分でも同じように、裂傷やあざが目立つ。それでも、彼は平気そうだった。ほんのりと、笑顔を浮かべている。

「ククク……以前のお前とは、また一味も二味もちやうつつーことか」

首を右へ、左へと曲げ、不敵な笑みでリサを見つめる。

（あれだけの技を受けて、まだ平気だつて言うの……？）

「さて、こつからは本気でいかせてもらうで」

シュヴァルツは大きく息を吸って腕を掲げ、一気に振り下ろした。その瞬間、彼の周りから紫色のオーラが出現した。シュヴァルツの長い髪を結っていた紐は解け、女性のように髪を揺らしている。

「魔闘気を使えるのは、お前だけやないんやで？」

「……！」

予想の範囲内　とはいえ、あまりにも威圧感がすごい。こんなんで、はたして奴に勝てるんだろうか？

リサはぞくりと、背筋に寒気が走るのを感じた。それを恐怖だと認めることは、絶対にできなかつた。認めれば、今構えているこの腕が震えだし、闘うことができなくなると確信していたからだ。

「ボケツとすんなよ？」

すると、シュヴァルツは一瞬にしてリサとの間合いを詰めた。シュヴァルツが床へ着地した時の衝撃が大きく、床に亀裂が走つた。

リサは回し蹴りを繰り出すが、シュヴァルツはそれを軽く手で払いのけ、奥義を繰り出す。

「宙に舞え、鮮麗なる不死鳥と共に！　奥義、華竜鳳凰閃！！」

華麗な連続蹴りが、リサに直撃する。彼女は蹴りは喰らうものの、なんとか防御体制に入り、奥義中の連続パンチ、フィニッシュのアップercutを防ぐことに成功したが、最後の攻撃で防御が弾かれてしまった。

「しまっ」

「久遠の歪み、深淵へ墮ちろ！ 奥義、殺衝狼連閃！！」

シュヴァルツの右拳が闇色に染まり、目にも止まらぬ連続パンチを繰り出した。そのすべてがリサの腹部にクリーンヒットする。

「が……はっ！！」

「とどめや！ うるあああ！！」

最後の強烈なパンチが、リサに炸裂する。彼女は大きく吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「く、がっ……！！」

彼女の口から、大量の血液が飛び出てきた。

（くっ……アバラが、ほとんど折れた……！ リジエネイトで、なんとか致命傷を治さないと！）

体を動かそうとするが、ほとんど動かない。リサは何か頭だけを起こすことができる程度だった。

「もう立てんのか？ 情けないのお」

シュヴァルツは笑いながら、リサの方へ向かってくる。

まずい。魔闘気を得た奴の力が、これほどだなんて……。

リサは再び、大量の血を吐いた。白い大理石の床が、紅く染まっていく。自分の体の力が、どんどん抜けて行くのがわかる。

どうすればいい？

このままでは、死ぬ。

なんとかなる　なんて、甘い考えだった。接近戦では、奴には絶対に勝てない。だからと言って、詠唱時間のかかる魔法主体での戦いをして、逆に反撃されるのがオチだ。

なら……どうすれば？

リサはあきらめかけた自分の思考を振り払うかのように、顔を振った。そして、自分に言い聞かせる。

絶対に勝たなきゃならない。空を……あいつを『約束の刻』に間に合わせるためにも！

自分の体に鞭を打ち、膝を震わしながら彼女は立ち上がった。その双眸には、まだ命の煌めきが揺らめいている。

「いいかげん知れ。ワイとお前じゃ、元々の体格に差がある。んなの、いくら努力したって補えん」

まだ自分に抗おうとするリサに対し、シュヴァルツは小さくため息を混じらせながら言った。

「……そんなの、最初っからわかりきってるよ」

自分を嘲笑うかのように、リサは微笑を浮かべる。そして、鋭い眼光でシュヴァルツを見据えた。

「それでも、私は負けられないんだ！」

口から血を流し、唇をかみしめるリサ。そんな彼女を、シュヴァルツは怪訝そうな目で見つめる。

「理解できひんな」

シュヴァルツは顔を振り、彼女から数メートル離れた場所で立ち止まった。

「お前は……気の弱い女の子やった」

彼の口調から、先程まで漂っていた威圧感が消えて行った。そこにあるのは、懐かしさ。あるいは、愛情か。

「憎しみ、復讐……お前を支えとつたんは、それだけだったはず」

カナンの聖塔で6年、いや7年ぶりに再会した時、彼女の中には憎しみだけしかなかった。復讐を遂げるために、そこで彼らを睨み

つけていたのだから。

「たかがそんなくだらんもので、己の命を賭けられん。世界にはそれだけで命を捨てられる奴もおるが……お前は、んなのできん。負の感情だけで、闘うことはできん奴や」

「るっさい！ 私を……分析するな……！」

立っているのがやっとの彼女は、怒りを込めて叫んだ。あくまで「リサ」を演じ続ける彼女に対し、シュヴァルツはあきらめにも似たため息を漏らした。

「なるほど、そーいうことかい」

彼は激しい闘いを繰り返している、自分の兄を見つめた。

「……そんなに、あの小僧が好きか？」

シュヴァルツはリサと同じ、エメラルドグリーンの瞳で彼女を見つめた。思いもよらぬ言葉が発せられたため、リサは瞬きをするのを忘れてしまった。

「お前が始祖の『生まれ変わり』なら……まあ、納得できんこともないがな」

「……………」

ジエ・レル・ヴェスナ・セスタ

もしもそうならば、リリーナが「あれ」を使ったことも理解できる。逆に、そうでなければおかしい。あれは、シリウスが暴走するのを食い止めるために、始祖が創造した魔法なのだから。

シュヴァルツが自分で納得した時、リサが小さく笑う声が聞こえた。

「そんなんじゃないよ」

彼は視線を彼女に戻すと、壁に寄りかかっているリサの姿があった。息絶え絶えとは、このこと。

「私には、そんなの必要ない。絶対にね……………」

クククと、再び自分を嘲笑う彼女。それに対し、シュヴァルツは表情を変えず見つめている。

「たとえ憎まれようと、愛されようと……………愛そうと、私は私のままでいる。ただそこに、存在意義がある」

自分の胸に手を当て、何かを確認するかのようにリサは言葉を放つ。

「約束の刻……………私は、そこにあいつを立たせるために闘ってんのさ」

「お前、あれのことを知っとるんか？」

シュヴァルツがそう言うのと、リサは彼に視線を向ける。

「……………ふん。せやけど、『星の遺産』が何なのかは知らへんのやる

？」

「……………」

ラグナロクに伝わりし、星の遺産の伝承。

それは、星の心。星の命。星の愛憎……………

そう、彼女は幼い頃に教えられた。大好きだった、シュヴァルツとバルバロッサに。

「『星の遺産』が崩れようと、目覚めようと……………私には関係ない。ただ……………」

彼女は震えながら、壁に寄りかかっていた自分の体を動かした。

「これは、私の贖罪だよ」

あの美しい瞳を潤ませ、彼女は従兄を見つめる。

「だから……あんなたちには関係ない」

73章・決着 黒い戦慄、白い陽光（前書き）

### 73章：決着 黒い戦慄、白い陽光

「うるあああ！！！」

バルバロッサの豪拳が床に直撃し、巨大なクレーターを作り上げた。

魔闘気を得てから、奴のスピードとパワーが増大している。何とか避けるのが精一杯 に近い。

バルバロッサの回転蹴りをティルフィングでガードすると、後方へ吹き飛ばされた。

「轟け！ 霸王滅波！！！」

バルバロッサは連続蹴りで、いくつもの衝撃波を飛ばした。僕はそれを右へ、左へと避けた。そして、衝撃波が切れたところで手をかざし、光線を弾き出した。

「ちっ！！！」

バルバロッサは上空へ飛び、それを回避した。

チャンスだ！ 上空では物が無い限り、体勢を変えることはできない。僕はすぐさま詠唱を開始した。

「聖なる光と共に、汝に神の裁きを下さん。……命をもってその罰を受けよ……掛替えない、ほとぼしる閃光と共に！」

その時、バルバロッサは空中から衝撃波を飛ばした。僕は左手に途中まで完成させた魔法を停滞させ、瞬時に右へと移動する。そして、奴の方向へ手をかざす。

「喰らえ！ ジョルフアーレ！！！」

僕の周りから光が螺旋を描いて集結し、一瞬にして移動して奴を包み込む。光の牢獄となったそれは、徐々に光を増す。

「ちっ！！！」

そして、彼を中心として大爆発が起きた。このフロアが、大きく揺らぐ。

空中に漂う粉塵の中から落ちたバルバロッサは地表へと着くと、ダメージで床に膝を着いた。僕はそこへ突撃し、剣撃を繰り返す。

「調子のんじゃねえぞ!!」

彼を斬りつけたと思ったら、彼の姿はそこに無かった。僕の目の前に、桜吹雪が舞う。

「これ以上は時間の無駄や! やらせてもらうで!!」

「!?!」

気付いた時には遅かった。奴は僕の真後ろで体勢を低くし、構えている。

「我が聖魔の血よ、狂乱の宴を呼び起こさん!」

僕が振り向いた時、それは発動した。

「エルドリッス天魔蒼殺技

地凰吼龍舞!」

バルバロッサは僕の目の前で裏拳を叩きつけるようにした。すると、それと同時に僕を叩き潰すかのように、巨大な衝撃波が上から襲いかかった。

「ぐあっ!」

その場に仰向けになるように叩きつけられた後、追い打ちをかけるかのようにバルバロッサは同じ衝撃波を繰り返す。骨が軋み、僕を中心に大きなクレーターができてゆく。

すると、奴は宙高く跳躍し、僕に向かって下降してきた。バルバロッサの体が、黄金色に輝く。

「死ねやボケエ!!」

「まずい……!!」

僕は発動できる限りのソリッドプロテクトを発生させた。それと

同時に、バルバロッサは加速させた体重ごと、膝を僕の腹部にぶつけた。それと同時に、あまりの衝撃で周囲の大理石が砕け、宙に舞う。

「がっ……!!!!」

アバラの骨が、小さな音を立てて折れていくのがわかる。

バルバロッサは跳躍し、後ろへ下がった。あまりにも強力な攻撃だったため、僕は身動きができない。

「ちっ……」

なぜか、バルバロッサは関節辺りをさすっていた。少しだけ、顔を強張らせている。

「うっ……く、う!!」

バルドルのソリッドプロテクトを貫くほどの一撃　なんて攻撃だ……!!

「思ったよりも反動がでかいのお……まあ、これでお前も終わりや汗を滲ませ、バルバロッサはほくそ笑んでいる。

「どんな強力なりジエネイトでも回復し切れん。あきらめえ」

「くっ……!!」

僕はプルプルと震えながら、上体を起こした。ひどい激痛が、体中を襲う。

「お前もリリーナも終わりや。お前らの夢は、無残に散る」

「なん、だと……!!」

バルバロッサはニヤ付きながら、右の方向を見つめた。僕も、ゆっくりとその方向へ視線を向けた。

「リ、サ……!!」

リサも壁に打ち付けられ、息絶え絶えの状態だった。そして、止めを刺そうと、シュヴァルツがゆっくりと近付いている。

「よお頑張ったが、ワイらには勝てん。ここで死ぬのが、お前らの運命や」

バルバロッサは汗を拭い、僕に顔を向けた。

「くそっ……!!」

ちくしょう……早く、早く動けよ！ 僕のリジエネレイトよ……早く身体を治してくれ！

「楽にしたる……感謝せえよ？」

そう言つて、奴は歩き始めた。

「ソラさん！！」

その時、誰かの声が聴こえた。僕はその声が聞こえた方向 出入り口の方へ目をやった。

「アンナ……！！」

その後ろには、レンドとデルゲン、シエリアがいた。

「ソラ！ リサー！！」

「無事か！？ ……いや、無事じゃなかったな」

レンドとデルゲンの服はボロボロだが、特に目立った傷は無い。

「みんな……無事だったんだな」

僕がそう言つと、4人はうなずいた。

「ああ。思いもよらぬ助っ人が現れたんでな」

と、レンドは歯をむき出しにして微笑んだ。

「ふん、雑魚かいな」

いつの間にか、シュヴァルツはバルバロッサの隣に立っていた。

「リリーナは？ ……殺したんか……」

バルバロッサがそう訊ねると、シュヴァルツは彼女の方に視線を向けた。そこには、すでにうつ伏せになっているリサがいた。

「……………」

奴らはうなずき、今度はレンドたちに顔を向ける。

「お前ら肩がいくら束になったかて、ワイらには勝てんのはわかっ  
とるやろ？」

「……………そうとは言い切れない。俺たちがお前たちに敵わなくても……」

…」

レンドは不敵な笑みを浮かべ、

「少しくらいは、手を煩わせることはできるぞ」

デルゲンも同じように微笑む。

「なんやと？」

すると、レンドは腰に付けてあったバックから2本のナイフ取り出し、2人に投げつけた。

「！！！」

突然のことで、シュヴァルツとバルバロッサはそれぞれ左右へ避けた。そこを、デルゲンが槍で素早く追撃する。

「死ねや！ 獣牙閃！！！」

シュヴァルツの空を裂く豪拳が唸りを上げながら、デルゲンに襲い掛かる。

「うわっと！！！！？」

デルゲンはうまく上体を逸らし、間一髪、攻撃をかわすことができた。

「あつぶね〜っと！！！」

デルゲンは槍で奴を突き刺した。しかし

「アホちゃう？」

ソリッドプロテクトにより、槍は奴の体に突き刺さるところか、皮膚を貫くことさえできていなかった。

「……………やべ」

デルゲンは苦笑していた。まずい、デルゲンがやられる！！

その時

「シュヴァルツ、後ろや！！！」

バルバロッサが叫んだ。シュヴァルツが振り返ると、彼の後ろにはリサが攻撃の構えをしていた。

「おまー！」

「獰猛なる獅子の咆哮　破壊し尽くせ！　奥義、爪魔獅子撃波！」

黄色く光る連続蹴りが、シュヴァルツを襲う。そして、フィニッシュにショルダータータックルからの巨大な衝撃波を放つ連携で、シュヴァルツをフロアの端まで吹き飛ばした。

「この……！！！」

バルバロッサがりサの方へ行こうとすると、彼女は拳を引いた。

「荒れ狂う竜巻、切り刻め！　奥義、嵐龍裂襲閃！！！」

「ぐおっ！！！」

彼女の拳から解放された竜巻は、猛スピードでバルバロッサを襲った。その隙にリサは後ろへ下がり、僕の所へ来た。

「大丈夫？」

「お……お前こそ、大丈夫なのか？」

そう訊ねると、リサは小さく笑った。だが、それは無理をしているのがはつきりとわかるほどに、彼女の体はボロボロだった。

「私から目を離れた隙に、自分に治療術をかけたんだけど……このままじゃ、やばいかもね」

そして、彼女はその場に片膝を付いてしまった。大きく呼吸している彼女には、もはや力が無い。

このままじゃ、みんなやられる。奴らが復帰する前に、どうにかしないと……！！

「空さん！」

すると、空たちが駆け寄って来た。すでに、空は泣きつ面だ。

「な、泣くなよ。死んでないんだから」

「だ、だって……」

とは言っても、本当に殺される。奴らの方に視線を向けると、瓦礫の中から立ち上がっているのが見える。

「私が、お二人を治療します」

アンナはそう言って、僕とリサの間に座った。

「でもあんた、今日は私にもやってくれたろ？ それ以上やったら、身体が持たないんじゃない……」

リサは顔を上げて言った。すでにアンナの顔には疲れが浮かんでいる。素養があるとは言っても、訓練を積んでいないんだ。体に負担が大きいに決まってる。

「大丈夫です。これくらいしか、私は役に立てませんから」

「アンナ……」

ニコツと微笑み、アンナは僕たちに手を添える。

「いきます」

アンナが目を閉じると、彼女の体が淡く光り始めた。

「……天より授けられし命の灯火よ、我らが祈りを聞き届け給え。

ヴ・ケル・ルフィン……生命の息吹、ここに羽ばたけ……ルーフェ」

すると、彼女の掌から白い光が飛び出し、上空に舞い上がった。

雪が降るように僕とリサに降り注ぎ、今度は弧を描きながら僕たちを包み込み始めた。

温かい風だ……。

光の粒が傷口に降り立ち、癒す。痛みが、どんどん引いていく。

「大丈夫か？」

「ああ……油断したわ」

僕たちの傷が癒えるのと同時に、奴らは僕たちを見つめた。

「あの光は、『治癒』の聖魔術……」

「扱えるまでになつとつたか」

「予想以上の魔力やな。先天的に弱い属性とはいえ……やはり、ワ

イらと同じサリアの血族 か」

「……………」

僕とリサは立ち上がり、2人を見据えた。奴らの傷は、大したことなさそうだ。

それにしても、アンナの魔法はすごい。たった少しの時間で、あれ

だけの傷がほぼ完璧に癒えたのだから。

「何度やっても同じや。お前らじゃ、ワイらには到底敵わん」  
バルバロッサは僕たちを侮蔑するかのような目で見てくる。

「……たしかに、今のままじゃ勝てない。けどね……」  
リサは顔を振り、構えた。

「こつちだつて命懸けてんだ！　こんな場所で、死んでたまるか！  
！」

「リサ……」

彼女の意思が、想いが伝わる。

彼らを止めたい。彼らが好きだったからこそ、自分だけが生き残ったからこそ、彼らを止めたい。

それは、一途な彼女の願いだった。

「互いに、相容れんっつーことやな……」

バルバロッサは鬨気を奮い立たせ、僕たちを見据える。

「せやからこそ、ワイらも引けん。……もう戻れんあの陽だまりに、ワイらの身命があるんやからな」

誇りを灯らせた、双子の双眸。そこには、男としてのプライドも滲ませていた。

その時、リサは手を宙へ掲げた。

「閻魔の審判よ、悉くを薙ぎ払わん！！  
ウルテイル！」

彼女の手から放たれた無数の閃光は、断罪の刃となって彼らの下に降り注ぐ。二人はそれぞれ、左右へ散った。僕はバルバロッサ、リサはシュヴァルツの方へ向かつて行った。

バルバロッサは軽く跳躍し、体を回転させてその場で蹴りを繰り返す。

「大気、裂けるやあ！　奥義、獅空滅刃破！！」

回転による遠心力で蹴りの威力を上げ、その衝撃波は三日月形の

刃と化す。巨大な衝撃波が、一瞬にして僕の正面で弾けた。

「ぐっ!?!」

僕は後ろへ勢いよく吹き飛ばされた。

「空!」

リサは思わず、僕の方へ振り向いた。

「よそ見る暇なんぞあらへんで!」

シュヴァルツは彼女から離れた場所で、奥義の構えをする。

「舞い散る命の影、黄昏を血で染め上げろ!」

一瞬にして、シュヴァルツはリサの目の前に移動した。

「天魔蒼殺技

ゲウイテル

狼龍嵐翔舞!!」

緑のオーラに包まれたシュヴァルツは、暴れるような豪拳と蹴りを何度も繰り出した。一発一発の威力が高く、防御しているリサの身体から血が吹き出る。

「逆鱗に触れよ、大地の怒り! 奥義、地龍吼爆陣!!」

壁に叩きつけられた僕の前で、彼は奥義を繰り出した。体を右へ移動させて避けると、彼の闘気を纏った豪拳が壁にめり込み、振動と共に壁が砕け散り、瓦礫らが僕に向かって飛んでくる。

「はああ!!」

石つぶてらに当たり、吹き飛ばされる中、僕はティルフィングを振り抜いて衝撃波を奴に飛ばした。

「ぬっ!!」

まだ背を向けていた奴に、衝撃波は見事ヒットした。しかし、バルバロッサは体勢を崩さずに跳躍し、空中から衝撃波を飛ばす。僕はそれを左右へ避けながら、リサの方に目をやる。

「死ねえ!!」

その時、シュヴァルツのフィニッシュの正拳突きが放たれた。そ

れは、『嵐龍裂襲閃』と同じように、竜巻を伴っているものだった。リサはその竜巻に巻き込まれ、吹き飛んだ。

「リサア!!!」

殺戮の風に切り刻まれた彼女は、バラバラに　　？  
違う。そこにあるのは、桜吹雪だ。

「!!!?」

「引つかかったな、桜闇さ!」

リサはシュヴァルツの背後を取り、攻撃態勢に入っていた。

「やられるかあ!」

シュヴァルツは裏拳を繰り出した。だが、またもやりサの身体は塵となって消えた。

「な……っ!?!」

「崇高なる太陽の輝き、魔なる意志を屠らん!」

彼女の背後にある、紫のオーラが大きく揺れる。それは彼女を包み込み、内なる力を解放しようとしていた。

「お前にできるはずは　　!」

「雲昇!!!　天聖蒼刹技レウフテン下

煌凰閃!!!!」

オーラに包まれたリサは、刹那の内に連続正拳突きを与えた。その一発一発がシュヴァルツに当たるのと同時に、その場所で小さな爆発が起こる。

「とどめだ!!!」

リサは宙に舞い、掲げた掌に青い光を集結させた。彼女がそれを握り締めると、指の隙間から光が木漏れ日のように溢れる。そして、リサはそれを奴に叩きつけた。

「ぐああああー!!」

巨大な爆音とともに、シュヴァルツは光に叩き潰された。まるで、そこで爆発が起きたみたいだった。

「シュヴァルツー!!」

その時、バルバロッサに隙が生まれた。僕は瞬時に、斜め下から剣を振り上げた。バルバロッサはバックステップでかわしたつもりだったが、衝撃波によって深々とした傷が巨軀に刻まれる。

「ぬう!!」

「インファイニティ!!」

僕はすかさず光線を飛ばした。光線はバルバロッサに当たり、奥の壁まで吹き飛ばした。バルバロッサは壁に叩きつけられ、倒れた。

「ぐっ……小僧!!」

奴は僕を睨みつけてきた。だが、まだ動いてこない。足にきている。

空

なんだ？ この感じ……

爽やかな風が吹く。少女の呼び声が、僕の中で響き合う。

バルドルの力が、そこかしこから溢れ出て来る。

この声は……リサ？

「ほとばしる闘気、我が破壊の衝撃と化せ！ 奥義、閃牙顎翔波！」

バルバロッサは走りながら豪拳で巨大な衝撃波を飛ばした。避けなければならないのに、どうしてか動く気がしなかった。

すると、衝撃波は僕に当たる前に、壁に当たったかのように塵と

なつて弾けた。

「なつ!?!」

僕はティルフィングを引き、思いつきり振り抜いた。すると、巨大な斬撃の衝撃波が高速でバルバロッサに直撃した。何度も剣を振り抜き、僕は奴を切り刻んだ。

「ぬああああ!!!」

バルバロッサは為す術なく、切り刻まれながらその場に立ち尽くす。

「終わりだ!!!」

そして、最後の一撃を放った。最後の衝撃波は最も大きく、バルバロッサを斬り付けた。一瞬の発光と共に、バルバロッサの身体から血が噴出した。

「ば、馬鹿な……」

そして、その場に膝を付けながら倒れた。

「や……つたのか?」

攻撃をし終えた途端、身体の節々から痛みを感じた。関節痛にでもなったかのような。これ以上、激しく動くことはできないっばい。

「空」

後ろに振り向くと、汗を浮かばせて大きく呼吸しているリサの姿があった。

呼んだのは、彼女だったのか。

何かを悟る前に、リサはニコッと微笑む。

「やったね」

「……ああ！」

僕とリサは、手と手を叩き合った。そして、打ちひしがれたシュヴァルツとバルバロッサに目をやり、リサは呟く。

「これで、もうあいつらは終わりだね……」

哀愁を交え、彼女はゆっくりとその場に座った。

「やったな、ソラ」

ボロボロの僕の肩に、レンドの大きな手が置かれた。そこには、いつになく微笑んでいる彼の顔がある。

「空さん！」

「いてっ……！」

僕に抱きついてきたのは、他ならぬ空だった。

「よかった……ホントに……！」

小さく泣き始める彼女の背中を、僕は優しくさすった。とりあえずは、奴らを退けることができたんだ。少しくらい、喜んでもいいよな……。

「そう言えば、あんたたちがセレスティアル・ガーディアンを倒したの？」

リサはあぐらをかき、デルゲンに訊ねた。

「いや、助っ人さ。漆黒の剣士が来てくれたんだ」

仮面男　　「またも、僕たちを救ってくれた。」

「宮殿に向かったから、ここらに来てると思ったんだが……」

「来てないみたいですね」

と、アンナは辺りを見渡す。闘っている最中、仮面男が来たような気配はなかったし……。

「ともかくさ、よかったじゃん。勝てて」

シエリアはそう言って微笑んだ。

「そうだな……よし、これから」

その時、このフロアに怒号が響き渡った。

73章・決着 黒い戦慄、白い陽光（後書き）

## 74章：ラゲナロク 終結せし軌跡の果て

「く……………っそがああああ！！！！」

振り向くと、シュヴァルツが口から血を吐き出しながら立ち上がっていた。

「ワイが負けて……………たまるかい！！」

叫ぶと共に、彼の傷口から血が吹き出る。シュヴァルツの身体は、限界に見える。立っているのがやっとだ。

「それ以上、動かない方がいい」

リサはゆっくりと立ち上がり、静かな声で言う。これ以上、手をかけるつもりはない。だからこそ、ここは大人しく引き下がってほしいのだ。

しかし、シュヴァルツはそれを振り払うかのように、顔を振る。

「黙れ！……………みせたるわ。サリアの力をな……………！」

シュヴァルツはそう言うと、掌を前に出して印を結び始めた。

「シュ、シュヴァルツ……………お前、まさか！」

バルバロッサはやつとこさの状態で、上半身を上げることができた。震える体を動かし、シュヴァルツの所へ行こうとするが、立ち上がることをさえまならない。

「や、やめい……………それを、をやったら、天都ごと……………！」

「これをするしかないんや！ だまつとれ！！」

シュヴァルツは、両手を合わせた。光の粒子が彼を包み始め、周りの大気が歪み始めた。まるで、蜃気楼のようにゆらゆらしている。

「 天地、狭間に眠りし沈黙の波動……………あらゆるものを創造せし、無に帰す忘却の光……………」

一瞬、彼周りの光の粒子らが四方へ散る。と思いきや、再び彼を包み込む。すると、このフロア全体が小刻みに震え始めた。

「この精霊の波動は……!!」

小さく揺れるこのフロアで、リサは驚愕からか、一歩足を引いた。

「シュヴァルツ！ あんた……」

「そつや……これは、『ビッグバン』や！ この宮殿ごと、お前らを吹き飛ばしたるわ!!」

シュヴァルツの手元に光が集結してゆく。彼は合わせていた両手を離し、右手で印を結び始める。

「な、なんだ？ 『ビッグバン』って!？」

こんな状況で訊いて申し訳ないが、わかんないんだからしょうがない。

「……ミランダよりも質が悪いよ」

ため息を漏らし、リサは言った。

「どうということだ？」

「止める術のない、禁断の聖魔術。『ミョルニール』を遥かに凌駕する、人類が創り出した最悪の魔法さ……」

「なっ!？」

リサは悔しさのあまり、歯ぎしりをしていた。

「奴の言ったとおり、この辺りは破壊される。この宮殿ごと、ただの塵にされる……!!」

「んな馬鹿な……!!」

「じよ、冗談じゃねえぞ!？」

僕の後ろで、レンドが叫ぶ。

それじゃあ、ここでみんな死ぬってのか!？」

「ど、どうするんだ!？」

レンドはリサの隣に駆け寄って来た。

「どうするも何も、止めるしかないだろ!？」

僕はティルフィングを振り抜き、三日月の衝撃波を飛ばした。し

かし、それはシュヴァルツに当たる前に、粉塵となって消えてしまった。奴の周りに、大きな膜が張っているかのようだ。

「!?!」

「無駄よ。ミランダと同じで絶対障壁が展開してる。あいつの魔法自体が消えない限り、干渉することは一切できない」

「そ、そんな冷静に説明している場合か！」

「……………」

こうしている間にも、シュヴァルツは詠唱を続けている。奴の手元の光の玉が、体から染み出している光の粒子を吸収し、大きくなつていつている。

シュヴァルツのエレメンタル全てが……奴の手元に集結しているんだ!!

「星の怒り、ここに顕れよ……愚なる者どもに、煉獄へ通ずる黄泉の門を開かん……!!」

「シュヴァルツ！ やめい!!」

バルバロツサがそう言っても、止める気配はない。大気中に含まれるエレメンタルも具現化し、奴の手元に集まっていく。

「私がやります」

その声の主は、空。彼女は僕たちの前に進み、前を見据える。

「私がもう一度、あの時みたいに……」

あの時　ミランダの時と同じように、自分の力で防ごうとしているのか？

僕は彼女の腕を掴み、僕の方へ体を向けさせた。

「馬鹿なこと言っな！　そんなの絶対にダメだ!!」

「でも……」

「でもじゃない！　そんなことしたら、今度こそ死ぬぞ!?!」

空は馬鹿だ。自分を犠牲にして、僕たちを守ろうとしている。それは正しくなんか無い。自分を犠牲にすることは、『護る』ことでは



言葉が小さすぎて、聞き取れなかった。

「うっん、なんでもない」

リサは立ち上がり、僕に笑顔に向けた。その笑顔が、どこか造りものに見えたのは、気のせいだろうか。

妙な気配がよぎる。

「さて、と」

すると、リサは印を結び始めた。彼女の指先に光が宿り、目の前に魔方阵を刻んでゆく。

「……天地、狭間に眠りし沈黙の波動。あらゆるものを創造せし、無に帰す忘却の光よ……」

「ん？」

リサの手元に、無数の光が集結し始めた。シュヴァルツと同じように、彼女の体の節々から出てくる光の粒子が、白く輝く手先に集い始める。

この詠唱、まさか……！

「リ、リサ！ お前、何してんだよ!？」

僕は咄嗟に、彼女の肩を掴んだ。

「しょうがないでしょ？ これしか方法はないんだから」

リサは僕に顔を向けず、詠唱を続ける。淡い光が円環となり、リサを包み込む。

「止める！ そんなことをしたら、お前の身体が……!!」

リサは連戦で、エレメンタルの量が少なくなっている。この状態では、危険なことになりかねない。

すると、彼女は首を振った。

「そんなことは、考えなくていい」

「考えるに決まってるだろ！ 自分を犠牲にだなんて考えるな！

それは、間違っ

その時、リサは僕の言葉を止めるかのように、自分の指を僕の唇に乗せた。

「私は、自分を犠牲に とかみたいな、立派なことは考えてない

よ。自分のためにやるんだからさ」  
「だけどー!!」

「大丈夫。私は負けないから。……ね？」

ニコツと、リサは微笑んだ。

光を受ける彼女の顔は……誰よりも美しく、誰よりも気高く、誰よりも……強かった。

彼女を止めたかった。「馬鹿を言うな!!」と叫んで。けど、この瞳に抗うことはできなかった。それに抗うことは、彼女を否定すること。そのものだと思った。それをすることは、彼女を裏切る。そう思ってしまった。

「ソラ、ここはリサに任せよう」

デルゲンは僕の肩に手を置いた。

「リサは決意したんだ。自分にできることを」

「デルゲン……」

僕は少しだけ俯き、すぐに顔を上げてリサを見つめた。彼女は僕の言葉を待っているのか、詠唱を停止させている。

「……わかったよ。リサ、お前に懸ける。思う存分……やってやれ!!」

僕は彼女の肩から手を離し、笑顔で言った。そうするしかできなかった。それだけしか……。

「ありがとう、空……。あんたがそう言ってくれるだけで、私は頑張れるよ……」

そう言って、リサは前を見据えて集中し始めた。己の全てを……そこにかき集めていた。

見守ることしかできないのか。僕は、何もできないのか……!!  
「馬鹿が！ お前ごときに、ワイが負けるとでも思っとるんか!!」

口から血を吐き出しながら、シュヴァルツは叫んだ。奴の目は血走り、不敵な笑みを浮かべている。

「……ふん。私は自分が負けるなんて、これっぽっちも思っただけ無いよ。あんたには負けない。ここで、みんなを死なせはしない!!」

> i 2 6 2 5 — 2 1 5 <

そう言っただけ、リサは自分の髪を結っている紐をほどいた。美しい長い金色の髪が、優しく揺れる。そして、手を素早く動かして魔方阵を削り上げていった。

「ククク……ここではつきりさせてやるわい!! どちらが、星の未来を掴むにふさわしいのかをなあ!!!!」

シュヴァルツは怒声のような声と共に、手を大きく掲げた。奴の両手が白く光り、円を描くようにして体を包み込む。

「……万物、今こそ生まれ出でた 始まりの刻 へと還るがいい……

…! 終焉の光よ、我が下へ堕ちろ!! フェリウ・ヴィレ……」

「ビッグバン!!」

奴を中心に、巨大な光が辺りを覆う。

「くっ……!!」

あまりの眩しさに、僕たちは目を手で覆った。

「死ねやあ！！」

すると、彼の手元から波紋のように光が広がり、一つの閃光がはじき出された。それは巨大な光。光は床の大理石の床を破壊し、塵にしなから僕たちの方へ向かってくる。

その時、リサはずっと印を結んでいた右手を止め、シュヴァルツが解き放った光を睨みつけた。

「万物、今こそ生まれ出でた 始まりの刻 へと還るがいい。終焉の光、我が天使の歌声に触れよ！ フェリウ・ヴェレ」

「ビッグバン！！」

リサを中心に、光の円環が周囲に広がる。それは風となり、彼女の長い髪を巻き上げる。

「いつけええー！！！！」

彼女の手元から放たれた小さな光は、一瞬にして巨大な光へと変貌した。それは驚異のスピードで進み、シュヴァルツの光とフロアの中央でぶつかった。

「！！」

その瞬間、衝撃と共に風が吹き起こり、僕たちを襲った。

「す、すごい！ これは……本当に魔法か！？」

あまりのすごさに、僕の口から言葉が漏れた。二つの光が電流や小爆発を引き起こしながら、フロアの中心で停滞している。そして、吹き抜ける風 いや、嵐。長く目を開いていられないほどだ。

「くっ……！！」

2人の力は、拮抗していた。どちらの光も、前進したかと思えば後退するという、一進一退の攻防だ！

「リリーナ……なぜ、この世界を守るうとする！ この世界は、あまりにも薄汚れているとは思わんのか！？ 守るほどの価値があると思うんか！？」

苦しそうな顔をして、シュヴァルツは叫ぶ。

「……守る価値は、あるよ」

リサは苦悶を浮かべながらも、言った。

「あんたには……あんたたちには見えていないだけさ。この世界の美しさや、すばらしさ。滅びると知りながらも、懸命に生きようとする生命の煌きをね」

彼女は眉間にしわを寄せながら、小さく微笑む。まるで、それを知らないシュヴァルツに対して「残念ね」みたいに思いながら。

「星を救うためには、選びたくもない方法を選ばなあかん時だつてあるんや！ きれいごとばかりで、この星が救えるとも思っんか！？」

怒声を放つシュヴァルツに対し、リサは首を振る。

「ヒトの力をなめちゃダメよ？ ヒト……うっん、命が紡ごうとする未来への希望の力は、計り知れない。『滅亡の未来』だって、絶対に回避することはできるんだ！ 私たちには、そのための力が備わってる……！」

彼女の、信じる心そのもの。その言葉の中に、彼女の想いが詰まっていた。

それを払いのけようとしているのか、シュヴァルツは顔を振る。

「お前がそう思っていて、世界中の人間がそうするとは限らん！ ほとんどの人間は、己の生が犠牲の上に成り立つことも知らず、のうのうと生きとる……。星の命を喰らい続ける生命なんぞ、この星にはいらんのやあ……！」

ヒトに対する憎しみ？ いや、違う。シュヴァルツにあるのは、もはやそうすることでしか未来を残せない というものなのかも

しない。

ヒトが、生命が減んでも星が生き続ける限り、あらゆるものが一つの生命体として、終わりの時まで存続する。そうしなければ、ヒトは必ず世界を殺してしまう。

それだけは、絶対にさせたくないのだ。

「ぬ……がああああ……！！！！」

「くっ……あああ……！！」

シュヴァルツの光が、徐々にリサの光を押ししていく。彼女の顔に苦悶が広がり、悲鳴にも似た声が漏れた。それと同時に、彼女の両腕から血しぶきが舞う。

「リサ……！！」

彼女の傍に行かなければ

その想いが僕を突き動かし、彼女の下へ駆け寄ろうとした瞬間、レンドが僕の腕を掴む。

「！？ レンド……！！」

「やめろって……！！」

「だけど、このままじゃ……このままじゃ、リサが……！！」

あいつは死んでしまう。理由はわからない。この緊迫感が、そう思わせているだけなのかもしれない。

懇願するかのようによく僕に対し、レンドは首を振った。

「俺たちはリサに託したんだ。俺たちの全てを託したんだ！……あいつは、それを背負って闘っている。自分の命と、俺たちの全てを懸けて闘ってんだ」

そう言って、レンドはリサを指差す。

「お前はそんなあいつの想いを……誇りを傷つけるつもりか！？」  
レンドの叫びは、僕に衝撃を与える。

「仲間なら信じる！！ あいつが……ぜってえ勝つってことを！  
お前が信じてやらなくて、どうすんだ！！？」

僕を掴む腕に力を入れ、歯を食いしばるレンド。彼も……彼らも  
また、歯がゆいんだ。それでも、リサにかけた。彼女を信じて。

「……………」

何も言い返せなかった。彼の言うとおりだから。

僕には何もできないのか？ このバルドルの力があいながら、ど  
うすることもできないってのか？

じゃあ、一体何のために僕はいるんだ！！

「ふざけんな！！」

僕はそう叫び、その場に拳を叩きつけた。床に、亀裂が走る。

「バルドル、教えてくれ！ カインの……聖魔の力は、なんのため  
にあんだよ！」

お前がくれたこの力は、あらゆるものを創造し、護るための力だ  
ろ？ こういう時こそ、発揮するんだろ！？

「答えるよ……………バルドル！！」

自分の心の中で叫ぶつもりが、現実世界に叫びとして放出されて  
しまった。何の反応も示さないバルドルに対し、僕は少なからず憤  
りを抱かせていた。

その時、誰かの指先が僕に触れる。

「……………空」

彼女は何も言わずうなずき、そっと僕の手を握り締めた。彼女は、  
瞬きをせずに僕を見つめている。

信じましょう。

それだけ、聴こえてきたような気がした。彼女の優しくも、強い  
空色の瞳がそう告げているのかもしれない。

いつだって、リサは前を向いていた。全てに打ちひしがれることなく、辛い事実につき当たっても、先にある未来を掴もうと、必死に抗っていた。

そして、あそこで『運命』に抗っている。歯を食いしばり、血をまき散らしながらも、諦めずに。

自分の全てを懸けて闘っている。

「……………」

僕は俯いていた顔を上げ、彼女を見つめた。

「リサ！！ 負けんなあ！！」

目一杯の力を込めて、僕は叫んだ。こんな爆音の中でも、彼女に届くように。

「お前の力はこんなもんじゃねえだろ！！？ 僕を蹴り倒した時のお前は……もつとつええだろーが！！！」

そう叫ぶと、リサの苦しみの表情の上に微笑みが浮かんだ。

「うっさいわねえ！！ そんなくだらない時と一緒にすんな！！」

「要領は同じだ！ あん時の怒りを思い出せ！ 憤怒だ憤怒！！」

ぬおりゃーと、僕は力こぶを作って見せた。

「なんだよ、それ！！」

ハハツと、リサは笑う。

「まったく、お前はこんな時に体面でも気にしてんのか！！？ お前はたしかに誰にも負けねえくらいかわいいけど、僕を蹴り飛ばす時だけ凶暴だろーが！！！」

「なっ…………！！？ こ、こんな時に何言ってるのよ！！！」

リサは顔を少し赤くして、僕を睨みつける。

「い、いいから黙ってなさいっつーの！！」

「じゃあ黙ってやるから、さっさと終わらせろ！！」

「んな簡単に言うなってば！！！」

ああ、わかってるさ。それでも言わせるよ。僕たちは

「僕たちは……僕たちの見る夢は、こんな所で終わりやしないんだ

「からな！！」

僕は彼女にとびつきりの笑顔に向けた。それも、拳を握り、親指だけを突き出して。

「……空、あんた……」

彼女の優しい瞳が、僕を捉える。エメラルドグリーンの瞳は、誰よりも美しい。どんな宝石よりも、輝いている。

そう、僕たちの未来を紡ごうとする 夢 は終わらない……永遠に輝き続けるんだ。絶対に！！

「……よおし！！ 任しときなっ！！ 全部背負って飛んでやるよ！！」

リサの周りに光が一瞬、集ったように見えた。そして、押されていた彼女の光は、再び拮抗状態へと押し戻した。

「ぬう！！ くそがあ……！！！」

「なんやと！？ リリーナのエレメンタルが……変異しとる……？」  
今度は、シュヴァルツの顔に苦悶が広がった。

「 シュヴァルツ！！！」

リサは光の先を見据え、彼を呼ぶ。

「あんたなんか、全ての命を殺す権利なんてない！ 存在する全てのものは、生き続ける権利を持つてんだ！」

強風になびかれながらも、彼女は言葉に想いを宿らせ、言霊として彼に届けるのを止めない。

「これ以上、私の大事なもんを奪わせない！！」

一つの光の円環が、彼女を包み込む。

「ハアアアアア！！！」

リサの身体の回りに、不思議なオーラが出現した。今まで見てきた、紫色のオーラじゃない。

なんだ？ これは……

「！？ ま、まさか 発露 したっつーんか？ サリアの力が……！？」

バルバロツサは立ち上がり、その光景を見つめていた。

「永遠の空へ……… 星の果てまでぶつとべえ！！！！」  
リサが叫んだ瞬間、彼女の周りの光はより一層大きくなり、全てを包み込んだような錯覚を引き起こした。

これは 虹？

「君は………」

僕の口から勝手に言葉が出てきた。  
懐かしい名。

遠い日々、君を見ていた。

君を見続けていた。

僕は知っている。君を。

その名を……

「……………ユリ……………ア……………?」

「ぬああああ……!」

シユヴァルツも、負けじと魔力を注入する。光はいっそう巨大化し、触れているものすべてを破壊し尽くしている。

「次元の巫女を、なめんなああ……!」

「……!」

すると、彼女の体から発生している虹色のオーラが、2つの光を包み始めた。そして、幾多の発光を繰り返しながら、光の輝きを増してゆく。

そして……すべてが真っ白になるくらいの光が、僕たちの視界を覆った。まったく何も見えなくなったのだ。

白光の爆発　まさに、それだった。

「う　っ……!」

キ　ン　……………

耳鳴りがするような音が、フロアを突き抜けた。まだ、目を開くことはできない。だけど、あの光と光が押し合っている音は聞こえなくなっていた。

そして、ようやく目を開くことができた。

「…………えっ？」

そこに、光の姿は無かった。あるのは、漂う砂煙と無数の瓦礫。そして、シュヴァルツとリサが立ち尽くしているだけ。

「ぐ…………くっ…………！」

シュヴァルツは、構えたまま小さく震えていた。

「相殺、か…………！ くそ…………」

そう言つと、シュヴァルツは片膝を付き、顔を沈ませた。

「ど、どうなったんだ？」

レンドはキョロキョロ辺りを見渡していた。

「…………もう、大丈夫。もう…………」

リサは、僕たちの方に振り向き、優しい笑顔を浮かべた。

75章：兄弟と妹 思い出の陽だまり、永遠に

シュヴァルツとバルバロッサとの闘いは、終わった。シュヴァルツは顔を沈め、辛そうに呼吸している。バルバロッサは傷口を抑えながら、立ちつくしていた。

これ以上、2人は動くことができないだろう。それは、誰の目から見ても明らかだった。

リサは、静かに彼らの所へ歩み寄って行った。足取りは重く、病人のようにふらついている。僕は彼女の近くに行き、倒れそうな身体を支えた。

「このワイが……お前に、負けるとはの……」

絶え絶えの声で、シュヴァルツは言った。呼吸が荒く、血と汗がとめどなく溢れている。

「さあ、殺せ」

シュヴァルツは顔を上げ、リサを見つめた。

「お前の両親を……一族を殺したワイを殺せ……」

リサを見ると、彼女は顔を振り、小さく微笑んでいた。

「言ったでしょ？ 復讐のためには生きないって」

すると、シュヴァルツの顔に驚きが広がる。かと思いきや、彼は鼻で笑い始めた。

「まったく……とことん、甘ちゃんやわ」

顔をそらし、彼は笑っていた。やれやれと思っているのか、大きくため息も交えて。

「ま、どちらにしても死ぬんやけどな」

すると、シュヴァルツの身体が光り始めた。湯気が立ち上るかのように、光の粒子が彼の体から浮き上がり、上空へ舞い上がっていく。

「これは……」

「ミランダと同じ、乖離現象よ」

乖離現象……。

シュヴァルツの身体が……エレメンタルと分子が、ほつれてゆく。少しづつ、少しづつ。

「……あのさ、一つだけ教えてくれないか？」

僕がそう言つと、シュヴァルツは顔を上げて僕を見つめた。

ずっと、疑問に思っていたこと。

「どうして、リサ……リリーナを生かしたんだ？」

その言葉を、彼は表情を変えずに聞いている。

「生かせば、将来きつと自分たちの障害となり得る存在だったはずだろ？」

彼がラグナロクの一族を殺したのは、彼らが自分たちと同じようにサリアの末裔で、大きな力を持っていたからだろう。あるいは、その情報力から、無駄に世界に情報が漏れることを懸念したのかも。しれない。

なのに、リリーナだけを生かした意味がわからない。

「どうしてだ？ 何か、考えでもあったのか？」

「……………」

7年前、シュヴァルツとバルバロッサは幼いリサを、わざわざルテティアまで魔法で逃がした。自分の両親を、躊躇いもなく殺したはずなのに。

シュヴァルツは顔を逸らし、小さく笑った。

「……………賭けや……………」

「賭け？」

シュヴァルツは小さくうなずいた。

「リリーナはきつと、ワイらを止めようとするやろ。そして、きつ

といつかは互いに闘うことになるとな……」

「どちらが勝つのか、試したんや」

バルバロツサは、シュヴァルツの傍へ歩み寄って来ていた。

「ワイらのしようとするのが……絶対的に正しいとは言えん」

長い藍色の髪を揺らし、バルバロツサは天井を見上げる。

「せやからこそ、もう一つの……逆の方法を選び取る人間が必要や  
った」

「ワイら自身が、驕った時のためにな」

シュヴァルツはそう言っつて、僕たちを見つめた。

自分のすることが正しいとは言えない。それは、僕たちにも当てはめることのできるもの。

「……それにしても、強うなつたな……リリーナ」

シュヴァルツの声は、聞いたこともないほどの優しい声だった。今まで張りつめていた何かが、解けたような感じだった。

「7年前までは、ワイらの後を付いてくる子供だったのに……こんなにかわいらしゅうなつてなあ」

バルバロツサはシュヴァルツの隣にしゃがみ、言った。

「叔母上に似たんやな。あの叔父上に似とつたら、大変やわ」

ハハハ、とシュヴァルツとバルバロツサは顔を合わせては笑った。

この愉快的笑顔は初めて見る。今までの暗い笑顔とは、わけが違う。「……………」

リサは顔を俯かせ、何も言わない。すると、彼女は顔を上げて、

「お兄ちゃんたちこそ、見ない間に老けたね」

リサの顔には、微笑みが広がっていた。そこにいるのは、リサじゃない。リリーナだ。

「ハハ、せやな」

と、バルバロツサは苦笑する。

「おいおい、これでもまだ20代なんやで？」

「……そうだったね」

リサは彼らに歩み寄り、二人の間にしゃがんだ。彼らをゆっくりと見回し、あの頃との違いを見つめている。

「……もう……」

彼女の体が、小さく震え始めていた。

「昔のように肩車は……してくれないの？」

溢れ出ようとするものを堪えているのか、声までもが震えている。

「肩車かあ……ハハ、懐かしいのお。山からの帰り道、いつもしてあげとつたもんな」

当時を振り返り、シュヴァルツはあの頃と同じように笑顔を向ける。

「歩くのが疲れたって言っちゃあ、催促しとつたもんな」

バルバロツサも同じように、微笑む。

「お兄ちゃん……」

リサは顔を手で覆い、泣き始めた。声を上げずに、健気に。

彼女の小さな頭に、シュヴァルツは手を置いた。

「……ごめんなあ、リリーナ」

「今まで、よお頑張ったの……」

バルバロツサも、同じように彼女の頭に置く。リサは二人を見上げ、涙を拭わずに顔を振る。

「う……わあ……!!」

リサは二人を抱きしめた。二人もまた、彼女を抱きしめる。その光景は、彼らが7年前まで築いていた想い出の姿のようにも見えた。

幼い少女と、兄のような双子。

本当の兄妹のように、接していたのだろう。

彼らの言葉は、自分の大切なものを捨てたその時から、胸に

秘めていたものだったのかもしれない。

シュヴァルツは、ポンポンとリサの背中を軽く叩く。

「……さいなら」

シュヴァルツは彼女に笑顔を向け、言った。そして、彼の身体は一瞬にして半透明となり、無数の粒子となっていく。ミランダの時のように、粒子は上空へ舞い上がり、消えてゆく。そうやって、シュヴァルツの身体は完全に消え去った。

その消えゆく姿をリサは涙を浮かべながらも、瞬きもせず、ずっと見つめていた。彼の粒子が、完全に消えるまで。

「逝ったか……」

残されたバルバロッサは立ち上がり、呟いた。

「これで、ワイらの全ては終わりや。……あの時に誓った決意は、この場所で消えた」

「……………」

バルバロッサは小さく微笑み、上空を仰ぐ。

「それでも……ワイらは、それを望んだ。全ては始まりし時へ……  
……それこそが、ワイらの夢やったからな」

たとえ憎まれようと、蔑まれようと、命を捨てても果たしたい夢がそこにはあった。

その時、バルバロッサの体が白く輝きだした。光の粒子が、ほつれてゆく。

僕たちの疑問に気付いたのか、バルバロッサは僕たちに視線を戻した。

「ワイとあいつは双子。エレメンタルを共有し合った。……せやからこそ、常人以上の力を出せた。ワイらは二人で一人なんや」

あの魔法を使った時、バルバロッサも力を送り込んでいたのだ。

「弟のあいつが死んだ今、ワイも乖離によって死ぬ。……半身が欠けちゃあ、残りは生きていけれんからな……」

常に一緒に、常に同じ夢を見続けた二人。バルバロッサは、リサに微笑みを向ける。

「短い生涯やったが、後悔は……無い」

彼はリサの頭を、優しくなでた。大きな彼の手は、彼女の頭を掴めるほどだった。

「……ワイらは、己が真実やと思ったことを貫きとおせた。どんなに、罪を背負うことになっても……」

彼らは、自分たちがしてきたことに誇りを持っているようだった。たとえ間違っけていても。

「やだよ……お兄ちゃん……」

彼の手をギュッと握りしめるリサ。そんな彼女を、まるで父親のような眼差しで見つめるバルバロッサ。

「……じゃあの、リリーナ。シュヴァルツが待つとる……」

そして、バルバロッサは上空を見上げた。それと同時に、彼の身体が半透明になってゆき、光の粒子が浮かび始めた。少しずつ、少しずつ粒子となり、バルバロッサの身体が消えていく。

最後には、跡形も無く消えていった。



## 76章：遠い約束

闘った跡だけが残されたフロアの中央で、リサは消えた二人が昇っていった場所を、ずっと見つめていた。

「二人はさ」

彼女は上空を見上げ、僕に背を向けたまま呟いた。

「優しくかった。私にとっては、掛け替えのない……大切な人たちだった。私の想い出……陽だまり、そのものだから」

「……うん」

僕は小さくうなずく。

「私をあの時に還してくれる人は……もういない」

彼女の言葉には、いつもの猛々しさはない。哀しみだけが、彼女を覆い尽くしている。

「残るは、樹だけだね」

リサは僕の方に振り向き、微笑みながらそう言った。

「ああ」

「……もう少しで、私たちの願いは達せられる。樹は 上にいる」

彼女は再び、天井を見上げた。

「約束の刻……それは、もうすぐ。星の遺産が微笑む、その瞬間に

……あなたは、その場にいなきゃならない」

「……リサ？」

彼女はなぜか、首を振った。

「だから……ちえっ、悔しいな」

リサは微笑んだかと思えば、ゆっくりとその場に仰向けになるように倒れた。

「リサ！」

僕は彼女の頭を支えて、顔を起こした。さつきとは全然違つ。顔色が一瞬にして悪くなっていた。他のみんなも、足早に駆け寄っていた。

「リサ、しっかりしろ！ おいこら！！」

「いて……」

僕はペシペシと彼女のほほを叩いた。すると、彼女の拳が瞬時に僕の顔面にめり込んだ。

「いちいち叩くな。意識はあるわよ」

い、痛い。僕は眉間をさすりながら、

「ど、どうしたんだ？」

と訊ねる。すると、彼女は小さくため息を漏らした。

「わかつてるでしょ？ 馬鹿ね」

その言葉で、全てを悟った。

乖離だ。

「ウソ……だろ？」

「こんな時に、ウソ付く馬鹿がどこにいるつてのよ？」

そう言つて、彼女は僕を再び殴った。げ、元氣じゃねえかと言つてやりたいが、彼女の顔を見ればそれも言つてられない。

「……マジかよ……」

想像もしなかった。けれど、冷静に考えてみれば当たり前だ。シユヴァルツと同じように、『ビッグバン』を使用したのだから。「何とかならないのか!？」

僕はすぐさま言った。そうとしか、言えなかった。

「ならない。当たり前でしょ？ 私は……」

「言うな！ お前を助ける。絶対にだ！！」

彼女の言葉を消し去るかのように、僕は矢継ぎ早に言った。彼女はそんな僕を、嬉しいのか微笑んで見つめている。

「……ありがたいけど、無理なもんな無理」

「お前……」

彼女は、自分自身が良く理解しているんだ。何をしたって、どうにもならないことを。

「空ちゃん、こっちに来てくれる？」

「え……？」

リサは手招きをし、空は彼女の言うとおり傍にしゃがんだ。空の顔には、すでに涙が流れていた。

「リ、リサさん」

涙声で、彼女はうまくしゃべれない状態だ。そんな彼女を見て、リサは思わず苦笑する。

「ほーら、泣かないの。手、出してくれる？」

「は、はい」

空が左手を差し出すと、リサは両手でその手を優しく包み込んだ。すると、彼女は僕に顔を向けた。

「空、覚えてる？ 以前、私が言ったこと」

「え？」

「あれよ。空ちゃんを助ける、別の方法」

「あ、ああ……あれか」

けど、彼女の様子から察するに、それは無理なものなのだろうと思っていた。だから、ほぼ忘れかけていたのだが……。

「そんなのがあったのか？」

デルゲンが言った。そう、僕以外にそのことを知っている人はいなかったのだ。

「ごめんね、黙ってた。今から、それをやるから……」

と、彼女は申し訳なさそうにうなずき、握りしめている空の手を

見つめた。

「リサ？」

リサは再びまぶたを閉じ、大きく息を吐いた。

「私の体……あと少しだけ、もって頂戴ね……」

彼女がそう唱えると、身体が青っぱく光り始めた。その光はリサを包む薄い膜となり、そこから多くの青い光の粒子が飛び出してきた。

「これは……？」

それらはフワフワと空中に浮かび、目の前で漂う。そして、それらは空の身体へゆっくりと、吸い込まれるように入っていく。空の身体に当たった瞬間、水面のように波紋が広がる。次々に青い光の粒子は浮かび上がり、どんどん空の体内へと入ってゆく。雨粒が横向きに落ちているみたいだった。

数分の間、僕たちは呆然とその光景を見つめていた。すると、ようやく光は収まった。

「空ちゃん、何ともない？」

まぶたを開け、リサは空の顔を見つめた。

「え、ええ。ただ、すごく温かくて……なんだか、軽くなったような……」

空がそう言うと、リサは安心したのか、ゆっくりと息を吐いて微笑んだ。

「よかった……これで、もう大丈夫だね」

彼女は納得しながら、休むかのように目を瞑った。僕たちは訳がわからず、ただ頭をかしげていた。

「リサ……お前、何を？」

そう訊ねると、彼女はまぶたを開けずに答える。

「私の元素を分け与えたの」

「!?!」

そんなことができるのかという驚きの前に、乖離しかけているリサがそれをしたということに衝撃を受けた。

「お前の元素を!?!」

「そんなことをしたら、リサさんの元素が……!?!」

空の言葉に、リサは顔を振りつつ空の手を握り締める。

「いいの……もう、いいの」

「ちよ、ちよっと待て!?!」

割って入るかのように、レンドが言った。

「元素を分け与えるって言うても……先天属性と違う元素を入れたら、拒否反応を起こして人体に影響が出るんじゃないのか?」

そう、彼の言うとおりだ。元素は言うなれば血液型と一緒にのもの。別の元素を入れると、細胞崩壊を引き起こしてしまう。

「大丈夫。空ちゃんの持つ 紺碧 のエレメンタル……あれは、星の元素。私の 時空 は、それを模して創られた太古の元素。理論上では、可能よ」

「そ、そうなのか?」

思わず、そう言ってしまった。

「……もう、空ちゃんの命を心配しなくてもいい」

リサは顔を振り、僕たちを見渡す。

「もしかしたら、順応するのに時間がかかるかもしれないけど……これで、普通に生き続けることができるから……」

疲れ切った表情で、彼女は微笑んだ。

「リサ……さん?」

彼女の中に、疑問めいた何かが浮かんでいたようだった。それを

知ることは、この時の僕にはできなかった。

「リサ、死んじゃうの？」

シエリアはぼろぼろと涙を流しながら言った。

「うん……私、もうダメみたい……」

今更どう繕うこともできない。リサは間接的にはあるが、「死ぬ」と言ったのだ。

「なんで……」

自然と、言葉が漏れた。

「なんで、こんなことをしたんだよ！」

僕は震えを隠すかのように、大きな声で言った。そんな僕を、リサは首をかしげて見つめる。

「空……何よ？ 文句で」

「あるに決まってるんだろ！！」

彼女の言葉を遮り、僕は叫んだ。

「自分を犠牲にするみたいなこと、どうしてしたんだよ！ 元素が少ないのに、こんな……」

「あんたね、馬鹿？」

「！ おまつ」

言いかけた瞬間、彼女は大きなため息をついた。そのせいか、自分の言葉が止まってしまった。

「言ったでしょ？ 私は自分を犠牲にするとか、そんな立派なことは考えてない。どうせ消えるなら、今できる精一杯のことをする。」

「……それをしたまでよ」

「だけど……」

その時、リサは僕の額にデコピンをしてきた。

「いいの。これは、私が選んだことだからさ」

よろめいた僕に対し、リサは微笑む。

誇りを持って、そう言えるよ

彼女は、後悔の無い瞳を輝かせていた。

けど、言いようのない虚無感が広がっていく。まるで、心という湖に水が無くなっていくかのようだ。

「……これはさ、私にできる 贖罪 なの」

彼女は視線を天井に向け、呟くかのように言った。

「全部、私のせい」

その言葉の意味が、すぐにはわからなかった。

「それって、どういう……？」

思わず、問い返した。すると、リサは徐々に顔を歪めていった。

それは体が痛いからではない。心が痛いからだ。

「空ちゃんが犠牲になったのは、私のせい」

「えっ……？」

自分のせい。

最初は、自分の責任っていう意味なのだと思った。だけど、本当は違う。

「私は、インドラが空ちゃんをさらうことを知っていた。それを知っていて、防がなかった」

「……！」

僕は、言葉を失った。

「なぜだと思っ？」

その問いに、誰も答えなかった。まだ、さっきの言葉が耳に残っているのだ。

「……それは、聖魔の力を……本当の意味で未来を変える権利を持つ調停者あなたを、レイディアントへ連れて来るため。幼馴染の彼女がさらわれれば……少なくとも、あなたはこちらへ来ると確信していたから……」

罪の意識に囚われ、彼女は僕と空に視線を向けることができず、震えていた。

「あなたの……調停者としての力があれば、インドラに対抗できる。神々の力があれば、2人に復讐できる。そう、考えた………だから……！」

リサは唇を噛みしめ、その瞳から一つの雫を零した。

「ごめんなさい」

かすれる声で、彼女は言った。

「わた……私のせいで……全部、私が……！！」

リサ……。

顔を覆って、彼女は声を殺しながら泣き始めた。手で隠しても、涙は溢れて来る。指と指との少しの隙間から、それはほほを伝う。

「お前だって……馬鹿じゃないか」

「……え？」

罪悪感で震える体が止まり、彼女は僕を見た。エメラルドグリーン瞳には、涙でぬれている。

「空がさらわれることは……しょうがなかった。いや、たしかに……お前が防ごうとしたのなら、あの時さらわれることは無かったかもしれない。でも……」

僕は涙で濡れているリサの手を握った。

「きつと、あいつらは何度も空をさらおうとしただろう。もし、そうじゃなかったとしても……別の誰かが、空の代わりとしてさらわれたはずだ」

それを良しとするか？

誰かが犠牲になって空が救われるなら、それでいいと思うか？

……違うんだよ、結局さ……

「でも、私は……」

彼女が言いかけた時、僕は首を振った。

「お前がいたから、僕はここまで来れた。知るべきことを、知れた。リサと出逢えたから……」

リサが叱咤し、支えてくれたからこそ、大切な人を取り戻せたんだ。自分を取り戻すことができたんだ。

「だから……謝んなよ。お前に出逢えて……嬉しかったんだから」

「……空……」

リサに逢えて良かった。

彼女と出逢えなければ、今の僕はいない。

「ありがとう」

微笑むリサ。

涙を浮かべて微笑むその顔を、僕は知っている。それが、少しずつ確信へと変貌していく。

その時、リサの身体が白く霞み始めてきた。小さな粒子がほつれ、少しずつ彼女から抜け出してゆく。

命の欠片が……元素の粒が。

「リサさん、お願いですから死なないで……」

ずっと彼女の手を握りしめていた空は、懇願するかのようにつつた。

「空ちゃん……ごめんね、許して……」

「嫌ですよ！ 謝らないで下さいよ！ 私、私……！！」

空は震えながら、リサを何度も揺する。すでに抑えることのできない想いが、彼女の双眸から溢れだしている。

「リサ」

レンドとデルゲンは僕たちの後ろに立ち、彼女の名を呼んだ。そこへ、リサはゆっくりと視線を向ける。

「……レンド、デルゲン。今まで、ありがとうね」

彼女がそう言つと、レンドは自分の鼻をさすった。

「へっ、それはこっちのセリフだよ」

「今まで、何度も助けてくれたな。何もできないのが悔しいが……」

ありがとう」

二人は一番の大人だからか、素直に現実を受け止めていた。彼女が死ぬという現実を、僕は素直に受け取れない。こんな時だから……。

リサはアンナの方に顔を向けた。

「アンナ、ヴァルバを死なせて……ごめんね。あんたには、辛いことばかりさせちゃってさ……」

「……………」

アンナはすでに、涙で声がおぼつかない状態だった。彼女は顔を俯かせて、リサを抱きしめる。

「……元気でね」

「リサさん……」

すると、リサを包む白い光が一層輝きを増し始めた。

「リサ……」

僕は咄嗟に、両手で彼女の手を握り締めた。生きる温かさを失いかけたそれは、ひどく冷たくなっていた。

「空、あのね……」

虚ろになりつつ瞳を向け、彼女は震える声で言う。

「言ってくれたよね？ 『私たちが見る夢は、まだ終わらない』って……」

「？ あ、ああ……」

彼女は小さくうなずき、続けた。

「私が死んでも……夢は終わらない。だってさ、この世にある全てのものは……永遠っていう名の夢を、見続けている」

彼女は微笑みながら、再び涙を薄らと浮かべる。

「私たちは、ずっとその夢の中で生き続けるの……」

夢の中でずっと、永遠に。  
死ぬことは終わりではない。  
夢が途絶える時こそが、終わり。

彼女の夢を辿る限り、彼女は生き続ける。僕たちの中に、息衝いている。

「だから……」

リサは小さく顔を振った。それと同時に、宝石の瞳が水面のように揺れる。

「泣かないで……」

泣く……？

ああ……そっか。

言われて、初めて気が付いた。自分の中から溢れ出る、熱い……  
願い。

僕は、いつの間にか泣いていた。

リサは優しく微笑む。

エメラルドグリーンの瞳は輝き、多くの雫を流す。

信じてるから

誰かの姿が浮かぶ。

「リサ……!!」

僕は彼女の手を強く握りしめた。彼女が冷たくならないように。彼女の温もりが逃げていかないように、自分の温もりを与える。

「死ぬなよ！ 僕と……僕たちと一緒に、新しい未来を生きるんだろ……！」

僕のぼろぼろと流れ出る涙が、ほほを伝って握りしめている彼女の手に滴る。彼女の涙も、ほほを伝って床へと落ちてゆく。

「だから……今度こそ、今度こそ……」

自分で、何を言っているのか意味がわからなかった。

理解していないのに、言葉が出てくる。まるで、昔から知っていたかのように。

「一緒に生きよう」

「そ、ら……」

リサは小さく顔を振った。そこには、笑顔が浮かんでいた。全ての苦悩が浄化され、そこには喜びだけが存在する。

彼女の笑顔には、そういった意味が込められている。

「そう……だったんだ。そっか……私は……」

笑顔を浮かべながら、彼女はまぶたを閉じて何かを呟いている。

何かを悟った彼女は、再び僕を見つめる。優しい眼差しは、僕の心

を包み込む。

「そ……ら……」

彼女の弱弱しく震える手が、僕のほほに触れた。

冷たい指先。

「約束……し、て……」

彼女の指が、僕のほほを優しくなでる。

「生き……てね。ずっと、ずっと……と……」

生きてほしい。

その想いが、指を伝って流れ込んでくる。

「約束する！ 絶対に、生き続けてやるから……！」

「約束……だよ……」

そう言うと、リサは指先で僕のほほを突つついた。けど、あまりにも弱弱しく、ただ触れただけのようにも感じた。そうされる度に、涙が溢れて来る。

「ねえ……泣かな、い……で……」

途切れそうな声で、彼女は優しく微笑む。

泣くな？

無理だよ　そう思いながら、僕は顔を振った。

「おねが、い……。私に、笑顔……見せ、て……あなた、の……えが、お……」

エメラルドグリーンの瞳は優しく囁く。僕の涙をその指先に乗せ、ゆっくりとなでる。

こんな時に、どうやって笑顔をしるってんだ？　涙ばかりが出て、自分ではコントロールできっこないのに。

「バーカ！　こんな顔で、どうやって笑えってんだよ……！」

笑えるはずがない。笑顔になれるはずがない。

……そう思っていたのに、なぜかはわからないけど　僕は、自然だと思えるほど笑顔になっていた。こんなに、涙を流しているのに。人生で一番、涙を流しているのに。

それを見たりサは、天使のように微笑んだ。白く輝くためか、彼女のほが透き通っているように見える。

「うん……で、も……いい……えが、お……だよ……」

そして、彼女は指先を僕の唇の先端に持ってきた。

「そらあ……私、さ……あなたに言い……たかった、ことが……ある、の……」

ゆっくりと点滅するリサ。僕は崩れ落ちそうな彼女の手を、ぎゅっと握りしめた。消えないでくれ、消えないでくれと願いながら。

「リサ……リサ」

彼女の名前を呼ぶ度に、彼女の瞳から涙がこぼれ出る。小さく、口を動かす。そこから出てくる言葉は、遠い日々から知っていた言葉。  
霊。

その微笑みは、あらゆるものを癒す。

あの頃から、僕の中に息衝いている調。

拭い去ることのできない、遙遠なる日々。

「……わた、し……さ……あなたの……を……、てるよ……」

ええ。あなたと一緒になら……どこへでも

「どい……ても………続け、る……か………」

ゆつくりと、ゆつくりと彼女のまぶたが閉じた。微笑んだまま、僕に触れていた指先はパタリと落ちていった。

「リ……サ？」

すると、彼女の身体から光の粒子が浮かび始め、少しずつ彼女の身体が崩れていく。徐々に、削れてゆく。

「リサ！」

名前を呼んでも、白い粒子が更に浮かぶだけ。

彼女の白い肌が、どんどん白くなっていく。

握り締める彼女の手の感覚が、薄れてゆく。どんどん消えていく。

「リサ、リサ！」

何度呼びかけても、彼女の薄くなった微笑みは動かなかった。

「リサ……リサ！ 逝かないでくれ！！」

そして、握り締めた手が消えた。  
足が消えた。

身体が消えた。

顔が消えた。

きれいな長い金色の髪が、粒子を巻き上げて消えた。

「リサ……逝くなよ。逝くなー!!」

リサの姿は完全に消え、白い光の粒子だけが上空に漂っていた。  
その粒子を掴もうと、僕は必死に両手でもがく。けれど、掌の中に収まることは無かった。決して。

それらはフワフワと漂い、僕たちを一瞥すると、粒子はさらに上空へと昇っていった。まるで、天使が還っていくかのよう。

最後の粒子が、光となって消え去った。

彼女の姿は、どこにも見当たらなくなった。

「リサアアアー!!!」

彼女の名前を叫んでも、何も帰って来ない。帰ってくるのは、沈黙だけだった。

わかっているのに。

何もかも、わかっているのに。

「う……」

彼女の笑顔がそこには無い。いつも見た怒った顔や、笑った顔が、どこにも見当たらない。

「わああああー!!!」

僕はその場に泣き崩れた。

リサ……リサ……！！

彼女の表情が、脳裏に浮かぶ。鮮明に。

彼女の声が、耳の奥底で聴こえる。鮮明に。

掴もうとしても、掴めない。

何をしても、その笑顔を見ることができない。

どうして、彼女はいないのだろうか。

見えない。

彼女の美しく、太陽のように明るい笑顔が。

「もしかしたら遠い昔、私とあなたは知り合ってた……今のよう、何かを話していたのかもしれないね……。そう考えたら、人と人の出逢いがどれほど大事なものがわかる気がする。……本当のことには、程遠いのだろうけれど……」

そう言って、彼女は暁の門の前で微笑んでいた。金色の髪を輝かせて。

「わかる？ ヒトってのは、誰しもがどこかで繋がりが合ってるの。それは絶対に断ち切れるものじゃない。だって、遠い過去から紡がれていた約束だもの。誰にも、それを断ち切る権利なんて存在しない。でしょ？」

遠い陽だまりの中で、彼女は少し照れながら言っていた。あの、銀色の髪を輝かせて。

「行く、空」

「約束だよ」

約束だからね



## 77章：天帝宮 旅路の終わりに

形あるものはいずれ滅びる

そんなことを、中学の時の先生が言っていた。地球も、太陽も、何もかも。

僕たちが生きている限り、そのことから逃れることはできない。忘れようとして、たくさんの人と接して、その未来を霞ませる。そうやって、僕たち人間は文明を築き、その真実を消そうとし続けた。でも、それは必ず訪れる。どんなに嫌でも、辛くても。

「ソラ」

僕の肩に手を置いたのが誰なのか、振り向かなくてもわかる。何を言っているのかわからず、デルゲンは困った顔をしているに違いない。

わかってるよ。わかってる。

僕は……僕たちは、ここで立ち止まっている場合じゃないってことくらい。

でも、僕はこの悲しみから、この苦しみから立ち上がることがなかなかできない。彼女がどれほど大きな存在だったのか、最後の最後でわからされた。

彼女が、死ぬこと。そんなことで、気付かされるなんてない…。

「空さん」

か弱くも、しつかりとした声。それもまた、見なくても誰なのか理解できる。そこにいるのは、護るべき人。いなくなった彼女が救った、最後の人。

彼女は何も言わずに、僕の左手に自分の手を重ねる。

「……ああ、わかつてる」

口を開きかけた彼女に対し、僕は言った。顔を上げて、彼女の顔を見つめる。そこには、僕と同じように涙でボロボロの顔があった。「お前は……そこに、いるんだよな」

僕は右手で、自分の涙を拭った。それでも尚、涙はまだ流れ出てくる。

「どんなにそれを望んでも、世界はそれを赦してはくれない」

僕は今、それを望んでる。あらゆる理を破壊してでも、それを希っている。

「でも、大丈夫。僕たちは、歩いてゆける」

小さな雫を流しながら、僕は彼女に微笑みかけた。そうすることこそ、彼女を救ったあいつに対する償い。のような気がしたから。

「あいつは、こうなることがわかってたのかな」

「……………」

「たとえそうであっても、そうでなくても……」

僕は手を伸ばし、彼女のほほに触れた。すると、彼女の瞳が大きく揺れ動く。

「お前は、ここにいるんだよな。ここに、こうして」

そう言つと、彼女はその手を握り締めた。そこから、彼女の持つ温かさが伝わって来る。

「だから」

そして、彼女は小さくうなずき始める。その瞳から、いくつもの雫を流して。

「笑顔でいこうよ」

そして、僕は再び微笑んだ。

リサと同じように微笑む空。

空と同じように微笑んでいたリサ。

そこにあるのは、未だわからない円環と螺旋の果て。

「空さん……」

彼女は大きくうなずき、涙を拭った。

ホールの奥にあった扉を抜けると、今度は巨大な空間が現れた。

全てが真っ白の大理石で、野球を行うドームくらいの広さかもしれない。中央に大玉程度の水晶体が浮かんでおり、その周りに4・5メートル幅の正方形のプレートが、ゆっくりとあちこちに移動していた。遠くに見える大きな窓には、先ほどのホールと同じように青空が広がっていた。

「……すげえな」

レンドは辺りを見渡した。驚くのも無理はない。何十個とある白いプレートは、まるで魔法にかけられたかのように空中を移動しているのだ。

「あれは、天空石でしょうか？」

アンナは巨大な水晶体を指差した。

「……だろうな」

あそこまで巨大な天空石となると……どれほどのものを浮かばせているのだろうか。もしかしたら、この空中都市全体、ということも……。

「うわっ！ 下見てよ！」

シエリアの声で、僕は下に何かあるのか気づいた。まるで、谷底のようだ。巨大な噴火口というか……遥か下は白く霞んでおり、白っぽい物体がうごめいているのが微かに見える。

「勝手に動いてるんだな」

下を覗きながら、デルゲンは呟いた。

「きつと、動力が切れていないんだよ。人がいなくても動力があれば、機械　この都市は動き続ける。ずっと……」

そう言いながら、僕は生き続けているこの空間を見つめた。無人のためか、今ここにいる僕たちがこの空間にとって、異端なもののように感じてしまった。まるで、ここにはいちゃいけないような。

「もし、この都市自体に意思があったのだとしたら……この二千年の間、何を想い続けてきたんでしょうか……」

空の言葉には、物悲しさが漂っていた。

僕たちは空中に浮かぶ階段や動くプレートに乗って、上へ、上へと進んだ。

長い階段を登り、今度は城の後宮みたいな場所に出た。ひたすら幅の広い通路を進み、右へ行ったり、左へ行ったり。途中で迷ったりしてしまい、次のフロアへ行くのに時間がかかってしまった。

そのフロアの奥にはエレベーターがあった。このエレベーターは指紋認証が必要で、それは僕の指紋である。

エレベーターが上に進んでいく途中、周りを囲んでいた白い壁がいきなり透明の壁に変わった。そこから、天都に広がる住宅街や道路が見ることができた。ものすごい速さでエレベーターは昇り、そこから見える風景はぐんぐん遠ざかっていくようだった。

エレベーターから出ると、思いもよらぬ風景が広がっていた。再び巨大な空間。やはり、ドーム並みだ。

「すごい……」

そこにあっただのは、庭園だった。きれいに整備された庭園には、

色とりどりの花が咲き乱れ、夏の森のように鮮やかな緑色の樹木たちが整然と立ち並んでいる。どこからともなく、鳥のさえずりも聞こえる。どうやら、放し飼いにしているようだ……まさか、この庭園は本当に自然のものなのだろうか？

「うわぁ……いい香り」

空は近くにあった花畑に近寄り、匂いを嗅いだ。

「空さん。これ、全部本物ですよ」

彼女に言われるがまま、僕はチューリップみたいな鼻の花びらに触れた。……滑らかじゃない。この感じ、自然のものだ。

「……ここは、本当に自然のものなのか？」

僕は立ち上がり、辺りを見渡した。この穏やかさ……上空の透明な天井から見える青空も含め、建物の中にいるとは思えない。

「滅んだ古の都とは思えないな。本当にここは上空の上なのか？」

デルゲンは歩きながら、樹木を眺めていた。

「さすがティルナノグ。やることは現代より一味も二味も違っているか」

そう言いながら、レンドはため息を漏らす。

「……この空間だけは、平和なんですな……」

「だね。なんだか、世界を牛耳ってた帝国の中心地とは思えない」  
アンナとシェリアが言った。

きつと、室温やら何まで設定されており、コンピューターが管理しているのだろう。二千年もの間、彼らは閉鎖された空間の中で、天井から見える太陽を望んでいたんだろう……。

庭園の中央にある円形にだけ、草が生えていなかった。大理石がむき出しとなっており、そこには空間転移の魔方陣が刻まれている。そこから移動した先には、巨大な扉があった。そこに刻まれたティルナノグ文字には　　朝廷の間　と書かれていた。

扉の先に広がる空間の中央に長方形のテーブルがあり、奥には玉座のように、一人用の豪華なイスがある。テーブルにある百人程度のイスの前には、薄型パソコンのようなものが置かれていた。玉座

の周りには、巨大なコンピューターが囲むようにして並んでいる。どこその戦艦のブリッジみたいな感じだ。

「へえ……これは、地上にあった移動用の遺跡群の機械っぽいな」  
デルゲンはそう言いながら、そこら辺のコンピューターをいじり始めた。

「……ん？　おい、付いたぞ？」

「うっそ？」

たしかに、コンピューターは起動していた。いろいろな数字や文字が表示されている。……地域とかの情報だろうか？

「……付くとは思わなかった」

「きつと、天空石が未だに起動しているからだよ。この巨大な空中都市を二千年も動かしてんだ。これくらいの機械が動いていても不思議じゃないよ」

しかし、天空石つてのはどういう原理でできてんだらうな。半永久的なエネルギーでも持つてるんだらうか。そうでもない、こんな沖縄とかみみたいな島を覆ってしまえばそうなくらい巨大な都市を浮かばせることなんてできないはずだ。天空石を作った人物つてのは、よっぽど天才だったんだらうな……。

「ソラさん、これはなんて書いてあるんですか？」

アンナは起動されたコンピューターの画面を指差している。

「どれどれ」

僕はそれを覗き込んだ。そこには、天空石についての説明が書かれてあった。

『創始歴012、初代宰相である　　II　フェイウス卿によって開発されたもので、閣下によって推進されていた「浮遊論」の骨格の一つ。俗に言う「疑似C」である。各自の天空石は本体に自由且つ自動的にアクセスでき、そこからエネルギーを供給するため、半永久

的に作動し続けることが可能。これは、主に浮遊論から確立された本体による反重力システムを応用し……』

これ以降は、わけのわからん理論やらなんやらで理解できないので、説明は割愛することに。

「そう言えば、ヴァルバさんも言っていました。天空石は『疑似C』って呼ばれてたって」

僕の言葉を聞いた後、アンナは言った。

「よくわかんないけど、この青い部分は？」

と言いながら、シエリアは画面の「リユングヴィ1世」 カイ  
ンが表記されている所に触れた。すると、一瞬にして画面が変わり、彼についての簡潔な説明が映し出された。なるほど、タッチパネルのようなものか。

『初代皇帝・初代天帝リユングヴィ1世 在位・創始歴001〜031。』

シアルフィ帝国より王位を賜った後、独立してティルナノグ帝国を建国。皇帝として3大陸を制圧し、 Ⅱフェイウス卿と共に、浮遊大陸を築く。

創始歴009、皇帝は『天を統べる帝』として天帝に即位。

創始歴025、宰相の Ⅱフェイウス卿が急死してから、体調を悪化させる。

創始的029、世界統一を成し遂げる。

創始歴031、紺碧の間にて崩御。享年55歳。嫡男ジークがウラ

ノス1世として即位する』

カインって、意外にも若くして亡くなってるんだな。これだけの技術力なら、医療も進歩していたはずなのに。

「さっきから気になってたんだけどさ」

そう言っつて、レンドは腕を組んで僕に近づく。

「この……『フェイウス卿』だっけ？ 妙に名前が削除されてるけど、どうなってるんだ？」

たしかに、そこだけが削られているのだ。ただ、名前だけを。

「……ソラさん、聖地カナンにあった歴史書覚えてます？」

アンナは画面を見つめたまま、言った。

「ん？ 歴史書？」

そう言えば、聖地カナンには図書館があり、そこにはティルナノグ成立以前の歴史が載っていたな。

「あつたな、そんなの。それがどうかしたのか？」

「覚えていませんか？ あの歴史書はリユングヴィ……カインのことが書かれていましたよね？」

「たしかに、そうだったな。当時は何ヶ国も存在し、争い合っついで、シアルフィのカインという将軍、とかっつて」

アンナはうなずいた。そして、怪訝そうな表情を浮かべている。

「……その中に、その宰相のことが少しだけ書かれていたんです。その歴史書でも、その人の名前は削られていました」

「え！？」

「っつてことは宰相 右腕だった奴は、意図的に名前が削られてる……っつてことか？」

デルゲンの言葉に、アンナは再びうなずく。

「そんな気がします。誰かが、わざと消した………そんな意図が感じられるのは、気のせいでしょうか」

「……………」  
帝国を築き上げた初代天帝と、天空石を開発した初代宰相。ある意味、彼は皇室以上の権力を握っていた人物だったかもしれない。なら、なおさら名前は載せられるはず。なのに載らないってことは、彼がいたってことを消したいのか？ それとも……

見ろよ！ これは……まさに、星の遺産だぞ

フェイス……？

ロタール⇨フェード⇨フェイス

貴様の、『原初の人類』……

あれが無ければ、俺は……

俺は

「空さん？」

空は僕の目の前に、顔を出していた。

「どうしたんですか？　ボーっとして」

「……マジで？」

「うん。……大丈夫？」

心配そうに見つめる彼女。少しだけ、瞳が揺れているように見える。僕はそれを振り払うかのように、笑顔を向けた。

「大丈夫だって。なんもないよ」

と、僕は彼女の頭に手を置いた。それに納得したのか、空も小さく微笑む。

……けど、なんだろう。変な感覚だ。一瞬、気を失っていたような感覚。自分が何を思い、考えていたのか、さっぱりわからない。

うーん……。

その玉座の後ろの壁に、ティルナノグ皇室の紋章が刻まれているた。

「これは……」

「たぶん、お前の認証が必要なんだろうよ」

レンドに言われるがまま、僕は紋章の中心に手を当てた。すると、紋章は小さく光り出し、コンピューターが解析する時みたいな音が聞こえ始めてきた。

『指紋…… オールグリーン。封印を解除します』

紋章の上にある小さな宝玉から、女性の声が漏れた。壁は一瞬煌めき、2メートル幅程度のそれが消えて無くなり、通路が出現した。長い通路の果てには、再び扉が現れ、認証するための電子文字が浮かび上がった。

「なんじゃこりゃ？」

レンドは首をかしげながら言う。

「空間に文字を表記させてるんだよ。たぶん、エレメンタルか何か

の力でやってるんだと思う」

改めて、ティルナノグの文明力が高いことを知った。ガイアでは、2次元の作品とかでは出現してくる技術ではあるが、現実問題として実行はされていないと思う。

「ええつと……何々……」

声紋？ 声、か。

「えつと、僕はセヴェス・ヴェルエス」

そう言っていると、電子文字の数列が慌ただしく動き始めた。まるで、パズルが組み立てられていくかのようになり、そこに別の文字列が完成されていく。

『セレスティアルに触れ得し者と認証しました。ドアを開きます』  
扉は光を放ちながら消えた。

『お帰りなさい。我らが主、神々の子よ』

そして、出現した広間の中央に、空間転移の魔方陣が映し出されていた。

「ソラさんが、神々の子 とういんでしょうか？」

アンナは僕に視線を向けた。

「さあな。何にしても、ソラが持つ力は超人的なものだ。そうだと考えれば、まあ……納得できなくもない」

デルゲンの言つとおり かもな。僕も樹も、シュヴァルツやリサたちも……カインの血を受け継ぐ者たちは、みな超人的な能力を持っている。それは人に許された力ではない。それはまさしく……

「よし、行こうぜ」

レンドに言われ、僕たちは足を進ませた。

神々の子。

その言葉だけが、どうも脳裏に焼き付いていた。

魔方陣から出ると、大きな扉の前に出た。青い宝石のようなものが散りばめられている。これは、天空石かもしれない。

天空石によつて描かれている紋章。龍のような、鳳凰のような動物をかたどった紋章。一万年、カインが調停者として覚醒し、この天空の帝国を築き上げた時からこの国を見守り続けた守護神なのかもしれない。

この先に、樹がいる。そんな確信が溢れた。

心臓の鼓動が早くなるのを感じる。振動が、喉にまで伝わってくるような気がした。

樹……シャルフィル＝ヴェルエス。

血の繋がった、唯一の家族。その彼が、世界を殺そうとしている。旅の途中で、僕はそれを知ってしまった。知りたくて、それを知った。自分のことや、殺された両親のことも。

そして、僕は決意した。

樹を殺すことを。

「……それが、お前に応えることのできる真実だよな」

僕は扉を見上げ、そう呟いた。

「世界が、僕たちにそうやって種を撒いたんだ。そうでしか、わかりあえないんだから」

相容れない……そう悟った。僕たちは互いに近くにありながら、光と闇のように遠い存在。決して、交わることの無い二つの螺旋。陰に在りし月の運命とは似て非なる、一つの道筋。

僕たちは、そこに生まれた二つの星屑。

そう、全てはイヴの子供たち

そして、暁の誓約に囚われし少女への歌

全てが集いし、始まりと終わりの時へ

あの、不思議な女性の声が聴こえた。そして、扉はど真ん中から、氷が融解するかのようにながれ始めた。丸く、透けた穴がどんどん広がる。四隅が残り、最後には全てが消えた。

「行こう」  
僕たちは、その先へ進んだ。

78章：約束の刻 星が微笑む地に「1」

大広間。闘技場のように、丸い。床や壁は真っ白な大理石で、光り輝いていた。天井はあの透けた壁で、青い空と白い雲が広がっている。

広間の一番奥に祭壇のようなものがあり、そこに樹は佇んでいた。樹が影になって、その祭壇に何があるのかよく見えない。

僕たちは歩を進ませた。何も言わず、ゆっくりと。

「かつて」

僕が祭壇から10メートルほど離れた場所まで来た時、樹が言った。

「この世界に、『原初の人類』を継ぎし者が現れた」

僕は何も言わず、ずっと樹の背中を見つめていた。白いスーツ、白いズボン。カナンの聖塔の時と同じだ。

「そこから始まった人間の物語……幾重にも積まれたヒトの歴史。それは、二つの鏡によって成り立つ、不完全なもの」

まるで独り言のように呟いている。

「ユリウスとシリウスは、そんな中で絶望したんだろっね」

樹はゆっくりと僕の方に体を向け、視線を向けた。

ルビーのような赤紫の瞳　ロキの力が覚醒した証。

「よく来たね、兄さん」

樹は小さく微笑んだ。昔の面影を残す、懐かしい微笑み。

「こうして話すのは、聖都で再会した時以来かな」

「……ロキを復活させずに、待っていたのか？」

僕はそう訊くと、樹は小さくうなずいた。

「早い者勝ち　みたいなのは嫌なんだ。僕自身、納得できないからね」

樹は後ろへ振り返り、祭壇に建てられた石像に触れた。長方形の石像だが、ただの石造りの棺おけにも見える。

「これに、ロキが封印されている」

「な……っ!？」

ただの石像なのかと思っただが、表面には何かを差し込むような穴や、はめ込むような穴が見える。

「ロキの力は、ここに封印されている　と、あの聖書には載っていた」

再び、彼は僕の方に向き直った。

「……兄さんがここに来たってことは、二人は逝ったか……」

樹は石像に触れるのを止め、天井を仰いだ。樹にとってみれば、敵だったあいつらは信頼するに足る友人、だったのかもしれない。

僕にとつての、二人のように。

「まあ、それもまた覚悟の上。犠牲は付き物だからな」

そう言って、彼は顔を横に向ける。

「　間違ってたんだ。今の現状は」

樹はゆっくりと歩を進ませ、白い壁に触れた。

「星の誕生と共に生まれた二つの意思。一つは星の内に、一つは星の外に。二つの軌跡……それはまるで、僕と兄さんのようなもの。決して相容れないものなのに、どうしてか触れ合ってしまったもの」「互いの信念が別々であっても、同じものであっても、それらはいつかきつと重なり合う。」

「今が、その時なのだから。」

「……ヒトは、生まれるべきでなかった。互いに憎み合って、殺し合って。それは結局、ヒトとしての業なんだ」

「変えられない　変わらない。」

「そう付け加えて、彼は僕に顔を向けた。」

「いつそのこと、滅ぼしてしまおう。その方が、幸福なことだってあるんだ。世界を隔てる壁を破壊するようにね」

「壁？」

「例えば。レイディアントとガイア……言語の違いや、文化の違いによって生じるもの。その　壁　があるからこそ、ヒトは血で血を洗うことを続ける」

「……だから、滅ぼすのか？」

「僕は顔を振った。」

「だとしたら、それは違う。まだヒトは何もしていない。しようともしていない。しないから殺すのか？　微々たる可能性を潰してまで、お前は何をしようとしてるんだ？」

「まだ何もしていないのに、なぜ滅ぼすのか。彼には、理由もへったくれもないじゃないのかと思ってしまった。」

「……それこそ違う」

「彼もまた、僕と同じように顔を振る。」

「文明が発達し続ける中で、ヒトは山を越え、海を越え、さらには空を超えるようになった。そうすることで、ヒトの世界は広がっていった」

「船や飛行機。ヒトの叡智が創り出した、多くのモノ。」

「そして、多くの種族がいることを知る。白人や黒人、純血や混血。」

アジアと欧米。ヒトはそんなことを理由に他者を虐げ、犯し、黷り……それは、未だに続く人間の『現実』なんだ。この世界だって、ある国は種族の違う人間を奴隷にしている」

それは、ルテティアだったか……。

「……更には、大気を汚し、地表には大量の廃棄物を捨て、川と海は排水で汚濁される。生活の品々によって、地球を守っていたオゾン層が破壊され、害を被るにまでなった。排ガスで地球の気温は上がり続け、海はさらに上昇する。少ない緑の大地に住まう生命や、気候の変化で死にゆく生命も生まれる。自然の摂理が崩れ始めれば、それによって成り立っていた生命の根本たるものまでも崩れていってしまう」

思わず、僕は少し顔を歪ませた。彼が言っていることを、否定することはできなかったから。

「どうせ、ガイアは近い将来滅びる。所詮、本元から外れた欠陥品だからね」

「……………」

樹は小さく笑い、続ける。

「なら、本来あるべき次元である、レイディアントの未来を護る。いずれガイアや古の時代と同じように文明を発達させるだろうけど、今ならまだ間に合う。ここなら、リセットできる」

再びへ。

星だけが存在した、その時と同じように。

「……今まで生きてきたヒトの……命の歴史をむざむざ消し去るってのかわ？」

何もしていないのに、リセットをする。それは、ただ逃げているに過ぎない。

「どうして簡単な方法を選び取る？ どうして、辛い現実だけを壊そうとするんだ。受け入れられないってのかわ!？」

「何言ってるんだ。これは、調停者としての責務だよ」  
小さくため息を漏らし、彼は上空に目をやる。

「調停者 次元そのものに関与できる、唯一の存在。二つの側面である、創造と破壊。調停者には、そうする権利がある」

それはつまり、バルドルとロキとリンクできたかどうかのことだろうか。

「……すでに、創造のチャンスはない。世界が分たれるその時に、失敗してしまったのだから」

だからこそ、破壊する。ロキとして

「破壊するだけが、僕たちの力だっというのか？」

僕にはそう思えない。この手は、血で濡らすためだけのものじゃないはず。

「そうとしか思えないね」

そう言った樹は、自分の掌を見つめる。

「ヒトであつてヒトでない僕たち……カインの末裔はさ、そもそも存在しちやいけなかつたんだよ」

自分のを見ながら、樹は侮蔑するかのようにクスクスと笑い始める。

「なにせ、物質を超える物質なんだ。ヒトに赦された 星に住まうことを赦された生命じゃない。なのに、調停者が創造の権利を持つから、ヒトは……命は滅びる時に滅びなかつた。それは、あるべき姿じゃないんだ」

創造の権利を持つが故に、星を傷つけて生命は生き延びた……そうとは、思いたくなかつた。そう思ってしまうことは、自分たちがここに立っていることを否定しかねないから。

「だから、始まりに戻す。星に決定権を委ねる。……僕たちに与え

られた『執行権』を、星に還すんだ」

「……それが、お前の本音か？」

そう言つと、彼は自分の掌から僕に視線を移した。

「異端な生命であるヒトの中でも、異質な存在であるヴェルエスには、破壊するしか能が無いんだよ。そうすることでは、僕たちは自分の身命を傍らに置くことができない」

ただ傷付け合つて、互いに憎み合うことしかないっていうのか？

……それは間違つてしていると断言できる。なぜなら、僕が生きてきたほとんどのことが、ありふれた日常で構築されているから。

「僕たちは世界を殺すためだけに存在しているんじゃない。カインも、ユリウスも……アイオーンも」

そう言つて、僕は顔を振る。樹の考えが間違つていることを悟らせるために。

「調停者には権利があるとか無いとか……関係ない。僕たちは、既に一個の自由意思。自分自身がどうしたいかだ」

たしかに、自分は他人と違う。でも、姿や形が違うわけでも、考え方が違うわけでもない。

「調停者である前に、僕たちにはヒトとして生きていく権利も与えられてる」

同じようなことで笑い、喜び、悩み、苦しみ……同じように生きている。違うのは、力があるかどうかだけ。

「僕は調停者だから破壊するとか、創造するとかじゃないと思う。他のヒトと同じように、自分がどうしたいかなんだよ」

自分で決めて、自分でする。そうでなきゃ、いつまでたっても変わりはない。周りに原因を求め、抗おうともせずに自分の運命を呪うだけ。

僕はゆっくりと手を前に出し、樹を指差す。

「樹、お前はそうやって考えて、自分の結論を出したのか？」

「……」

「ただ憎んだり、怨んだりするだけで結論を出しちゃいけないか？」

お前には、自分の意思は存在するのかわ？」

誰に何を吹き込まれたのかは知らないが、樹は自分の考えを確立していないように見える。何かの原因や理由を押しつけているだけ。そこには、自分が本当にしたいことが現れていない。

「……………いいか」

樹は再びため息を漏らすと、僕に目をやった。そのルビーの双眸は、すでに僕を睨んでいる。

「所詮、兄さんの言っていることも、やろうとしていることも理想論でしかない。それは、最善の結果を生まない。星の命を繋げること……………そう、結果が大事だということだ。滅ぼすのは、過程の中で起こる話。滅ぼすことに意義があるんじゃない、星を救うことに意義があるんだ。生命の絶滅は、星の命の代価。滅びの未来を回避するには、こうするしかない」

それだけしか道は存在しない　と断言する樹。

やはり、わからない。本当に、彼がそうしたいのかどうか。

「お前は、自分が憎んでるもんと同じことをしようとするんだな」

「何？」

ギロツと、彼は僕を見る。それに対し、僕はため息を漏らしながら腕を組んで答える。

「だってそうだろう？　破壊　殺戮で結果を引き出そうとしている。

それは、お前が嫌がっている人の業じゃないのか？」

「……………」

「典型的なヒトでしかないんだよ、お前も。ヒトがしてきたこと、なんら変わりはない」

だからヒトでしかない　そう思った。同時に、虚しくも感じる。

「樹、本当の理由は何なんだ？」

僕はゆっくりと歩を進ませた。それに対し、彼は睨みつけることで制止させようとする。

「ヴェルエス家の者でもなく、調停者でもない、お前としての理由は何なんだ？」

僕は、樹としての考えを知りたい。彼個人の意思とは何なのか。なぜ、この方法を選び取ったのか。今まで述べてきたことは、「調停者だから」というものでしかないように感じた。

「黙れ」

樹は祭壇の方に歩き始めた。

「僕は世界を護る。星の未来を護る。兄さんとは違う方法で、世界を護り通してみせる」

祭壇の前に立つと、彼は僕に背を向ける。

「……そうさ、僕が護る。あなたたちが愛したこの世界は……僕が……」

ぶつぶつと呟く樹。何を言っているのか、僕には聞こえなかった。

「これ以上は時間の無駄だ」

はっきりと声を放った樹は、ゆっくりと僕の方に体を向けた。

78章：約束の刻 星が微笑む地に「2」

ルビーの瞳は紅く煌めき、僕を見据える。すると、淡い紫のオーラが炎が立ち込めるかのように、彼の身体を覆い始めた。

「……………」  
僕は目を閉じ、あの名を呼んだ。

ティルフィング。これが、最後の闘いだ……。最後まで、頼んだよ。

「来ないのか？」

僕は剣を構え、樹を見据えた。

「来ないのなら、こっちから行ってやるよ」

すると、樹は片手を挙げた。その手に、白い光が集結し始める。

「白夜の眠りに エルヴァイス！」

その光はバスケットボールほどの大きさになり、樹はそれを僕に向けて投げた。閃光を放ちながら、それは高速で僕に向かってくる。

僕は素早くそれを避け、樹の方に向かおうとした。その時、

「いいのか？ 後ろの大切な仲間当たるぞ？」

「！！！！？」

こいつ……僕が狙いじゃなかったのか！

すぐさま急ブレーキをし、僕は空たちの方へ向かった。空たちは右へ避けようとしているが、そこへ白光の玉が曲がりながら向かってゆく。追尾型だ！

「ずいぶん余裕だな……」

上を向くと、僕の真上に笑みを浮かべている樹の姿があった。

「ハア!!!」

樹は右手を真っ白に輝かせ、薙ぎ払うかのように大きく振る。すると、白光がその軌跡を描き、僕を攻撃してきた。

「くっ!」

まるで爆発に巻き込まれたかのようなだった。とっさに防御体勢に入ったが、それでも威力は大きい。床は砕け、破片が宙に舞う。

樹を見失った僕は、気配がした後ろに振り向く。数メートル離れた位置で、樹は印を結んでいた。

「断罪の剣、雨となれ! ブリリアントスピア」

上空にいくつもの光り輝く剣の形をした発光体が現れ、僕に向かって降り注いできた。

僕は自分の体の周りにマジックシールドを展開させ、それを防ぐ。僕から外れたいくつかの光の剣は床へ垂直に突き刺さり、発光して消えてしまった。

すぐに前を見ると、樹は腕を組んで微笑んでいた。

「よかったね」

と言つて、彼は僕の後ろを指差した。僕はハツとして、すぐに後ろへ振り向く。そこには、床に転げたみんなと、その隣に巨大なクレーターができていた。

「……ソラ! 気にすんな! 前を見てろ!!!」

レンドは立ち上がりながら叫ぶ。

「女の子はちゃんと守るからよ!」

拳を握りしめ、彼は親指だけを突き出した。そうやって微笑む様子は、思わずこっちまで微笑んでしまう。

僕はうなずき、樹の方に目をやる。

「思ったよりも、身体能力はあるんだな。兄さんとリリーナ以外、

ただのヒトだと思つてたけど」

樹はため息混じりに呟く。僕はそんな彼に対し、鋭い視線を送つた。

「狙つたこと、怒つてるのか？」

そう言つて、樹は微笑んだ。

「あいつらには手を出すな。あいつらは僕たちみたいなのは持ち合わせていないんだ」

「へえ、だったらさっさと処分しておいた方が、邪魔にならないんじゃない？」

クスクスと笑いながら、樹は言った。

「お前……！」

「冗談だよ、冗談。彼らは死すべき時に殺してやるさ。どうせ、星の遺産をどうにかできる権利なんて持つていないんだし」

どこで知つたのかわからない、侮蔑の双眸。あれでは、姿形が同じだけの樹じゃないように見えてしまう。あの頃とのギャップが、大きすぎる。

樹は再び手を光らせ、なぎ払つた。すると、光は破壊の武器となり、僕の目の前の真っ白な床を破壊した。粉塵が舞い上がり、僕の前方の視界を奪つた。

僕は樹がいるであろう場所へ斬撃の衝撃波を飛ばした。そして、前方に立ち込める粉塵を回り込むように、左へ移動する。

「……！」

粉塵の中から樹が飛び出し、空中蹴りをしてきた。それを、ティルフィングで防御する。

「反応はいいようだな！ だが」

その時、樹の体が黒く光った。

「魔狼の瞬撃　奥義、皇狼閃剄脚……！」

素早い連続回転蹴りで攻撃する樹。増幅された元素で、瞬間的に威力とスピードが増す。

これは　リサたちと同じ技!?

「死ね、ゼロ!!」

ティルフィングで防御していた僕を少し吹き飛ばして距離を開けると、樹は村崎の光線を手からはじき出した。それは僕に直撃し、後ろへと吹き飛ばされてしまった。

「な、なんでお前がそれを……!?!」

空中で体勢を整え、僕は床に着地する。

「僕はあるの二人と一緒に行動してきたからね。当たり前だろ?」

と言つて、彼は再び僕に突撃してきた。それに対し、僕はティルフィングで上から斬りつける。しかし、樹は体を横に回転させて避け、その勢いで僕を蹴りつけた。

「轟け、霸王滅波!」

瞬時にエレメンタルを足に集結させ、彼は至近距離で連続蹴りによる衝撃波を繰り出した。僕はすぐさま上空へ飛び上がり、そこから剣を振り抜いて鋭い衝撃波を飛ばす。それと同時に、僕は印を結んだ。

「クリムゾンフレア!」

小さな太陽のような炎の球を、樹に向けて放った。彼はそれらに対し、シュヴァルツがやったように手を前に出して障壁を発生させ、防いだ。その隙に降り立った僕は、素早く斬り付ける。大振りしないよう、小さく、小さく何度も斬り付ける。しかし、奴は軽やかなステップをするかのように、それを避ける。

「ハア!」

白く手を輝かせた樹は、僕に向かって手を振り払う。同時に起きた白い衝撃波は、僕を襲う。だが、ソリッドプロテクトでそんなの

は効かない！

すぐさま僕は横一文字を繰り出す。樹はそれをしゃがんで避け、そこから水平蹴りをしてきた。それを軽くジャンプして避け、僕は再び切り下ろした。だが、樹は床に手を当てて、反動で横へ飛んで回避する。その時、彼は印を結んでいた。

「暗黙の淵より煮えたぎれ、血だまりの槍雨　ブラッディランス  
！」

樹が唱えると、僕の周りの床が黒くなった。まるで、沼のようだった。そこから、いくつもの柱のようにして槍が飛び出し、僕に降り注いでくる。

「やられっか！」

僕はティルフィングを掲げ、光の障壁を発生させた。暗黒の槍は障壁に当たって砕け、塵となった。

「へえ、やるじゃないか。なら……閻魔の審判、悉くを薙ぎ払え！  
ウルテイル！」

樹の方へ向くと、彼の手から光が上空へ飛び出していっていき、上空から雨のように降り注いできた。

「同じようなものが効くか！！」

僕は一瞬にして樹との間合いを詰め、切り上げた。

「！」

当たった。感触はあった。けど、浅い。樹のスーツの胸の辺りが裂け、赤い血が滲んできている。

僕はすぐに間合いを詰め、何度も斬りかかった。

「くっ……！！」

樹は避けるのが精一杯だった。すると、樹は印を結んだ。

「氷山の河川　」

「させるか！！」

印を結ぼうとした奴に対し、僕は突き攻撃をした。樹には当たらなかったが、彼の詠唱を止めることはできた。すると、樹の体勢も少し崩れた。

今だ！

僕は衝撃波を伴う斬撃を繰り出した。

「ぐっ！」

顔を歪ませる樹が見えた。腕に当たったそれは、空中に血を撒き散らす。後ろへ下がろうとする樹に対し、追撃を行おうとすると、

「クリスタルシエル！」

樹は自分の前に水晶の障壁を展開した。

「ぶっ！」

いきなり出されたもんで、それに僕は思いつき顔をぶつけてしまった。ま、まさか……障壁をこんな風に使うとは……。

顔をさすりながら前を見据えると、腕の傷を抑えている樹の姿があった。

「やるね、兄さん」

樹は傷口を眺めながら、言った。その傷口から、緑の粒子が舞い上がって来ている。あれは、リジエネレイトの効果によるものだ。

「でも、まだまだこれから」

余裕なのか、彼は微笑んでいる。

「押されてる割には、余裕じみたことを言うんだな」

僕も同じように微笑み、皮肉を言う。すると、彼はため息を漏らしながら手を掲げた。

「兄さん、あんたは忘れてるよ」

チツチツチ、と舌を鳴らしながら、彼は僕を呆れた目つきで見ると、

「僕たちは調停者　だろ？」

その時、瞬く間に光が唸りをあげて広がり、樹の手元に集結した。

光は何かを形作り、そこに浮かぶ。

あれは テイルフィング!?

たしかにテイルフィングだ。青く輝くあの刀身は、触れてはならない神々しさを放っているように見える。だけど……僕のテイルフィングとは形が違う。あれは、もっと細い刀身をしているように見える。

「どうしてお前がそれを……!」

「調停者には二つの側面がある。それは、聖魔の神剣もおなじ。聖剣テイルフィングは『真の調停者』……魔剣テイルフィングは『闇の調停者』に」

創造と破壊、それぞれの力を映したもう一人の自分。

「調停者の心の形によって、その姿を変える『虚数の造形』。本来なら、存在するはずの無いモノだよ」

だから、リユングヴィもこれを持つていたのか……。ある意味、彼も調停者であるカインと同じだったからな。

「それにしても、よくできた話だよな」

そう言って、彼は自分のテイルフィングを眺めた。

「闇の調停者が存在する時、真の調停者も現れている。二千年前、ユリウスとシリウスもそうであるように、僕たちもそうになっている」  
青い刀身はほんのりと透けており、ユートピアで出会った妖精たちの羽を思い起こさせる。

「どうして、兄弟だところなっちゃうんだろうね……。最初から、そうなってほしいって望んでもいなかったのにさ……」

樹……。

僕はふと、樹の意思はそこにあるんじゃないかと思った。ひたすらに隠そうとする想いが、そこに。

彼に問いかけようとした時、樹はテイルフィングを振り下ろした。すると、僕に向かって床が一直線に割け、斬撃の衝撃波が襲い掛かる。僕が右に避けると、それを予期していたかのように目の前に樹がいた。

「……！」

二人のティルフィングがぶつかり合う。何度も何度も斬り合う度に、同じように二人の剣がぶつかる。同時に、火花が散る。

「さあて、どっちが本当のティルフィングなのか試そうじゃないか！」

「……樹！」

剣と剣がぶつかる度に、剣風が巻き起こる。僕たちの間を、その風が勢いよく吹き抜ける。

僕と樹は互いに後ろへバック転しながら下がり、剣を構えた。そして、同じように剣を振り抜いた。そこから、三日月の巨大な衝撃波が飛び出す。衝撃波は僕たちのちょうど真ん中でぶつかり、粉塵を巻き上げながら炸裂した。

「聖天使の腕を震わし、雷光よ降れ 邪悪なる意志を屠らん！」  
素早く移動しながら、樹は詠唱を始めた。僕はそこに向かって衝撃波を放つのと同時に、

「アクラシエル！」

無数の光の円環が僕を包み込み、電流のように発光する。そして

「……！」

辺りはまぶしさに包まれた。光は床を破壊し、破片を巻き上げた。衝撃と共に、僕に襲いかかる。

「ぐう………！」

マジックシールドが張られているから、そこまでのものじゃなかったが……それなりにダメージを受けてしまった。魔法能力の部分では、樹の方が一步上手なようだ。

「焰、我らが叫びに震え、緑風の大地を蹂躞せん！」

詠唱と共に、赤い光が樹を覆う。僕も同じように、聖魔術を唱えた。

「敬虔なる我が僕よ……」

「傀儡となりし言霊を　サリエル！！」

赤い発光と共に、いばらのような無数の炎が僕に向かってきた。高速で追いかけてくるそれに対し、僕は上空へ跳躍する。

「聖なる掟に従いて、冥府に住まう悪しき者どもを煉獄の閃光にて焼き尽くさん……」

詠唱が完了したのと同時に、僕はそれを左手に停滞させた。こうすれば、魔法を発動せずに動き回れる。

僕はテイルフィングを使って魔法障壁を発生させ、炎の聖魔術を防いだ。そして、左手の魔法を発動させる。

「光りに塗れし聖天使　ウリエル！！」

僕の手元から放たれた光が、宙へ舞って人の姿へと変わる。それは白く輝く巨大な槍を持ち、樹の方へ投げつけた。

「ふん、そんなも　！？」

樹は避けようとしたが、聖魔術によって放たれた光が、まるで揺りかごのように、彼を囲んでいた。

「これは……くそ！」

光の槍は、逃げ場を失った樹に直撃した。光の槍が当たった瞬間、巨大な火柱が昇るかのように、光の柱が轟音を立てて天井へと昇る。光が消えると、服がボロボロになった樹が身体の所々を押さえ、立っていた。

「……ハハハ、大したもんだな」

笑みを零しながら、樹はボロボロの袖などを引きちぎった。

「けど、聖魔術の仕方がなっちゃいないね」

「なっ」

「見本を見せてやるよ！」

そう言つて、樹は印を結び始めた。

「敬虔なる我が僕よ」

そうはさせまいと、僕は樹の方に切りかかった。だが、樹はさっきの僕と同じように詠唱を停滞させ、テイルフィングで攻撃を防ぐ。「聖なる掟に従いて、冥府に住まう悪しき者どもを煉獄の閃光にて焼き尽くさん……」

攻撃を防御しながら、樹は詠唱を続ける。これでは、止めることができない！

「轟け、竜の咆哮……爆砕せよ！ 竜撃砲……！」

樹はくるりと回転し、僕を蹴り飛ばした。同時に吐き出された衝撃波は、僕を後ろへと大きく引き飛ばす。

「光りに塗れし聖天使　ウリエル……！」

「しまっ」

僕が離れた瞬間、樹は聖魔術を発動させた。光は人の姿となり、僕の時と同じように光の槍を投げつけてきた。逃げようにも、既に僕は光の牢獄に入れられていた。

「だぁーくそっ……！」

逃げられねえじゃんかよ！

僕はできるだけだけのマジックシールドを展開した。それとほぼ同時に、僕は光の槍に貫かれた。

「がああ……！」

マジックシールドの上から響き渡る強烈な痛み　粉塵に覆い尽

くされた中で、僕は膝を付いた。かなり……のダメージだ。

「聖魔術つてのは、上手に使わないとね」

「ちっ……」

ニッコリと微笑む樹に対し、僕は舌打ちをしながら睨みつけた。

「空さん！」

その時、後ろから誰かが駆け寄って来る。

空だ。

「お前……何してんだ！ こっちに来んな！」

「もうやめて……もうやめてください！」

僕の言葉の制止を振り切り、彼女は傍に来る。

「もう、争わないでください！ 兄弟でこんなことをするべきじゃないです！」

「お、お前な……」

こんな時に、何言ってたんだ。心配するあまり、彼女は気が動転してしまっている。

「兄弟ねえ」

樹はティルフィングを肩に担ぎ、鼻で笑った。

「空は、兄弟同士で殺し合うのはおかしいって思ってるのか？」

ほくそ笑みながら、樹は彼女に質問を投げかける。

「……そうでしょ？ 血を分けた、家族ですよ？ 家族は寄り添って、支え合うべきなんです。なのに、こんな……！」

僕に触れながら、彼女は震えていた。それは樹に対する恐怖と、悲しさのせいだった。

「やれやれ……相変わらず、お前の思考には呆れるよ」

大きいため息を漏らし、彼は彼女に目をやる。

「兄弟とかそうじゃないとかは意味ないんだよ。逆に、兄弟だから

こうすることもある。……僕たちは、相容れない。何もわかつちや  
いないくせに、いちいち口出しするな!!」

燃えるような双眸　再会したあの時、彼女に向けた冷たい瞳で  
はなく、勝手に踏み込んで来ることを許さない瞳だった。

お前は、これ以上この「テリトリー」に入ってきて来るなという。

「空、下がれ」

僕はゆっくりと立ち上がり、言った。

「空さん……」

「心配すんな。ぜってえ負けないから」

彼女に向けて、僕は微笑んだ。僕たちを護るために、命を賭して  
闘ったりサのように。僕に向けてくれた、あの優しい微笑みのよう  
に。

「……ごめんなさい……」

顔を俯かせ、彼女は怯えるようにして言った。やれやれ……と思  
い、僕は軽く背中を叩いてやった。

「ありがとな」

「……」

こくりとつなずき、彼女は後ろへと下がって行った。

「……空が近くにいる間は、仕掛けて来ないんだな」

僕は彼女の方に目をやりながら言った。

「まあ、ね。いちいち邪魔だし」

「……あの時、殺そうとしたくせにか？」

そして、僕はボロボロの体を彼に向けた。

「それはそれ、これはこれ。所詮、結晶体の抜けた抜け殻の巫女だ  
る？」

苦笑しながら、樹は言う。

「力の無い巫女は、いらないうってことか？」

「そうだよ。生かす価値もないが、殺す価値もない」

「……………」

どこか彼女に対する優しさを感じたのは、気のせいだったのだろうか。今の言葉も、無理に繕っているように感じる。

……もしかしたら、あいつが空のことを好きだったという過去を知っているから、僕はそう言う風に仮定してしまったのかもしれない。

「さて……休憩は終わりだ。始めようよ」

そう言って、樹はティルフィングを構える。

見え隠れする樹の本心。彼はどこに向かおうとしているのだろうか。はつきりと明示されない、その軌跡。

暗黙の洞窟の中、一筋の光明が見えたかのように感じるのに。

78章：約束の刻 星が微笑む地に「3」

樹は僕に斬りかかって来た。僕はそれを防ぎ、二人は同じように斬り合う。攻撃のスピードはほぼ互角……だが、力ではわずかだが僕の方が大きい。それは、ティルフィングの刀身の大きさが違うことが証明している。

「僕にはわからない」

互いにぶつかり合う中、樹は呟く。

「自分の命を賭してまで、護ろうとする意味がわからない」

「お前こそ、どうして自分の命を懸けてまで星を護ろうとするんだ？」

僕はそう言っつて、剣を押し合う中、彼を蹴りつけた。そして、すぐさま斬り下ろすが、樹はバックステップでかわす。

「……この次元が、僕が生まれた次元だからだよ」

踏み込んで斬りつけてきた僕に対し、樹は剣を僕の剣に対して斜めにし、受け流す。そして、彼は付き攻撃を繰り返した。それに対し、僕は上半身を左に曲げ、その大勢のまま剣を振り上げた。当たったが、瞬時にして避けられたためにスーツに傷を付ける程度だった。

「この次元は……レイディアントは、僕たちが生まれた所なんだよ」  
大きく離れた樹は、僕を見据える。

「そして、父上と母上が生まれた所でもある」

覚えてもいない両親。3歳だった僕が思い出せないのだから、ま

だ2歳程度の樹が覚えているはずはない。

「……僕たちは、両親に会うことなんてできない」

樹はティルフィングをブラブラと揺らし、遠い目でそれを見つめる。

「親孝行も何も、できやしない」

「……………」

父さんと母さんがいるじゃないか　と言いたくても、それはきれいな事ではない。必ずしも、それが樹にとって大切なものだとは限らないのだから。

「僕たちが足手まといだつたから……二人は死んだんだ」

拳を握りしめ、天井を仰ぐ樹。

「何もできやしないなら……せめて、願いは叶えてあげたいんだよ」  
「……願う？」

そう問い返すと、樹は小さくうなずいた。

「父上と母上は、この世界を愛していた。そのために、多くの研究を重ねていた。この世界を……星を癒すために」

小さく顔を振り、樹は唇をかみしめていた。

「せめて、この世界だけは護りたい。星だけは護りたい。そうすることでは、僕はここに立てないんだよ」

立てない？　一体、それはどういう意味なのだろうか。

「兄さんにはわからないよ。……兄さんにはさ」

理解できない僕に気付いたのか、彼は僕に顔を向ける。

「己の掌から望むものを零したことの無い兄さんには、到底理解し得ないんだよ」

僕を睨みつけるルビーの双眸。僕に向けられているのは……憎しみ？　羨望？

ふと、樹が病院で外を見つめる光景がよぎる。

白い風景　陰気で、葉臭い病院の一室。

「……だから、僕はここに立っている。あんたを殺して、生命の世界を殺すために」

ティルフィングの切っ先を僕に向け、彼は言った。

「それに……空と海たちと過ごしたあの日々に、還りたくないからさ……」

何かを言った樹は、微笑む。それは、悲しく微笑んだように見えた。

その時、樹は僕に突進してきた。目にも止まらぬ速さで、僕の横を駆け抜ける時に斬りかかる。瞬時に体を動かしたが、僕の横っ腹から血しぶきが舞う。

「くっ……!!」

すぐさま後ろへ振り返ると、樹はティルフィングを妖しく光らせて斬り下ろして来ていた。僕は体を右に少しだけ動かし、すれすれで避けた。そして、最大限の速さで駆け抜け、樹を斬りつけた。彼も僕と同じように、横っ腹から血が流れ出る。

「ゼロ！」

樹は傷を顧みず、ロキの光線を弾き出した。

「なめんなあ!!」

僕も同じように、バルドルの光線を弾き出す。正面でぶつかったそれらは互いに相殺され、粉塵を巻き上げる。

僕は剣風で衝撃波を奴に飛ばした。それに気付いた樹もまた、同じように剣の衝撃波を飛ばす。

ほぼ互角なら、二つとも相殺される。なら……!!

僕は衝撃波を飛ばした後、それを追いかけた。相殺された一瞬だけ、奴に隙が開くはず!

目の前で二つの衝撃波はぶつかり、予想通り塵となった。そこを一瞬にして駆け抜け、僕は樹に斬りかかった。

「なっ　！」

叩きつけるような攻撃を奴は防いだが、体勢が揺らぐ。何度も僕は斬りかかり、奴の体勢を更に崩した。そして

「ぐっ！！」

僕のティルフィンが奴の左肩を斬った。いや、鎖骨の辺りだ。上から、約10センチほどめり込んでいる。

「うっ　　が……あ！」

樹は苦痛に顔を歪ませ、声を漏らす。しかし、

「まだだ……」

樹は僕を睨みつけ、自分の足元にティルフィングを突き立てた。すると、そこから不思議な青い光が周囲に広がり始め、不思議な魔方陣を築き上げていく。

「これは!？」

僕は剣を引き抜こうとした。だが、樹は僕のティルフィングの刀身を掴んで離そうとしない。

「クク……チエックメイトだ」

「　！！」

奴のティルフィングが赤く光り、僕たちを覆う。魔方陣を刻んだ光もまた、赤く煌めく。

そして　　衝撃と共に、僕の視界は閃光に包まれた。

ティルフィングを中心として引き起こされた緋色の爆発は魔方陣の中のもの、全てを破壊した。一瞬にして、僕は吹き飛ばされてしまい、壁に叩きつけられた。

僕の前に広がるのは、横向きになった世界　　気が付いたら、僕は倒れていた。

「な、なん……ぐ!!」

それに気付くのと同時に、ソリッドプロテクトの上から尋常じゃないほどの痛みが全身に広がる。

「くそ……」

樹の方に目をやると、奴は突き立てたティルフィングを杖代わりにして、自分の震える体を見つめていた。

「思ったよりも消耗が大きい……それもこれも、聖剣の元素破壊能力のせいか……！」

悔しそうに何かを言いながらも、樹は僕を見てほくそ笑んでいた。そう、僕の体がほとんど動かないからだ。動こうとしても力が入らず、何とか入れても小さく震えるだけ。

全身から血が溢れ、口の中には鉄の味が広がる。額から垂れてきた血が目に入り、視界を歪ませる。

「く……そ……」

動けない。立てない。負けるつてのか……！

「空さん……」

空の悲鳴にも似た声が轟く。僕は、そこへゆっくりと視線を向けた。走り出そうとする彼女を、デルゲンが抑えている。

「よせ……」

「嫌……死なないで……死なないで……」

そんな物騒なことを言うなよ　と思いつつも、完璧に否定できない。呼吸もうまくできない今、逝きたくもない場所に近づいているのだから。

「ソラさん！　立ってください！　立って……」

空と同じように叫ぶアンナの声。ああ、わかってる。そうしたいけど、足が動かないんだよ……。

「ダメ……こんなところで、終わっちゃいけない……」

ハツとした。空の声であるはずなのに、なぜか別人のように感じた。

空の体から、何かが立ち込めている。

「残念だな。兄さん……セヴェスは、もう終わりだよ」

樹はみんなの方に顔を向け、言った。

「核となる元素を打ち砕いた。立ち上がれないさ」

クククと笑い、彼はティルフィングを引き抜いた。

「お前たちは屑だよ……ただ一緒にいるだけで、何の役にも立たない屑。リリーナさえいなければ、お前らなんてそんなもんだよ」

「なんだと……！」

レンドは歯ぎしりしながら、樹を睨みつける。それに対し、樹は侮蔑するかのようにつつた。

「たかがヒト風情で、ヴェルエスの人間には敵わない。星の幼子も、斜光の巫女も役に立たないんだよ！」

剣を引きずりながら、樹はみんなの方向へ歩き始めた。

「ハハハハ！ お前らの旅路の終わりは、僕がくれてやる……！」

そして、彼は剣を掲げる。そこに、光が集う。みんなを殺そうと、怨嗟の闇を集わせている。

やめろ やめろ そう叫ぶこともできない僕は、血が滲み出るほど拳を握りしめていた。

「空さん……！」

空の叫びが木霊する。その時、彼女の周囲から立ち込める光が……金色に輝き始めていた。なのに、周囲のみんなも……樹も気が付いていない。

あれは……？

空

この、声は……!?

僕を見る、今の光景が止まったかのようにだった。剣を振り上げたままの樹。アンナたちを護るようにして手を広げ、樹を睨むレンドとデルゲン。体を縮こまらせているシェリア。祈るように手を合わせているアンナ。

その中で、空だけが僕に顔を向けていた。その瞳に、涙を浮かばせて。

ほら、立って

空から発せられている金色の光は、僕を優しく包み込む。そして、僕を立ち上がらせる。

……痛みが、感じない。

ね？ まだ、大丈夫

きつと、生きていける

君は……!!

それが何なのかわかる前に、僕は樹に向って手を広げていた。そして、世界が動き出すのと同時に、あの青い光線を弾き出した。

「……!!?」

視界の外からの光線は、樹に防御させる暇を与えないまま突撃した。彼は吹き飛ばされ、床に転げる。

「空さん!!」

彼女が、僕の名を呼んだ。今度呼んだのは、彼女だ。

そうか、力を貸してくれてるんだな……そこで。

僕はうなずき、樹の方へ直進した。完璧に回復していないために節々が痛むが、それでも闘える範囲内だった。

「くそ……!」

樹は立ち上がり、僕の攻撃をティルフィングで防ぐ。

「だらああ!!」

僕は叫びながら、剣撃で樹を吹き飛ばした。ダメージの多い樹は、踏ん張りが利いていない。

そして、僕はそこから衝撃波を飛ばした。今までで一番巨大な、青い衝撃波を。

「やられるかあ!!」

樹はクリスタルシエルを展開させた。だが、僕はそこから更に衝撃波を幾重にも発生させ、飛ばす。

エレメンタルの障壁は粉々に砕け散り、ティルフィングで防御する樹に襲いかかる。その時

「なっ……!!?」

樹のティルフィングの刀身が、粉碎した。僕の放った衝撃波に耐えられずに。キラキラと輝く青い刀身は、光の粒子となっていく。

「ロ、ロキの剣が　！！！」

そして、最後の衝撃波が彼をすり抜ける。彼の胸元から腰まで、大きな爪痕を残して。

「く、そ……………」

その瞬間、血しぶきが舞う。樹の白いスーツは、赤く染まっていく。樹はゆっくりりと、その場に片膝を付いた。

「力及ばず、か」

顔を俯かせ、樹はそう言った。

「……………」

「まさか…………最後の最後に、サリア　いや、レナが力を貸したのか……………」

顔を上げ、樹は僕を見た。そこには、小さな笑みが浮かんでいる。

「…………僕の、負けだ」

その言葉が放たれた瞬間、僕は仰向けに倒れてしまった。

「マジ…………かよ」

一気に、体の力が抜けてしまったのだ。さっきまで、あんなに激しく動けたつてのに。激しく呼吸をしながら、僕は上空を見つめた。

ああ、青空が広がってる。青空が、果てしなく広がってる。なんだか、闘っていたなんて思えないほど平和な風景に見える。あの青空の下、僕はずっと生きることができるとな…………。

そうだろ？ リサ……

「空さん！」

「ソラー！」

みんなが駆け寄り、僕の視界を埋め尽くす青い空の光景の中に、顔だけを出す。五人の顔が、円を描くようにして。

「あーあ、ボロボロだな」

レンドはそう言いながら、苦笑していた。

「うっせ。頑張ったんだから誉めろ」

「へーへー。ごっつあんです」

と、彼は何やら拝むようにして言う。

「くっ……腹立つ」

そう言うと、レンドの笑みがより一層増してしまった。

「ほら、大丈夫か？」

今度はデルゲンがそう言い、僕の上半身を起してくれた。

「やれやれ、弟は強かったな」

「……ああ」

僕がこくりとうなずくと、デルゲンは微笑む。

「よく、頑張ったな。ありがとう……」

「デルゲン……」

彼は僕の肩を優しく叩いた。

女性陣に目をやると……うおっ。完璧に泣いてしまっている。

「お前ら……死んでもいないのに、泣くってどういうことだよ？」

「だ、だって……」

止める術の無い涙を放置し、空はその場に座り込んでいる。せっかくのかわいい顔が、大無しになってるし。

「いくらなんでも泣き過ぎなんだよ。少しは誉め讃えると」

言いかけた瞬間、空が僕に抱きついてきた。それと同時に、激痛

が体中に電流のように走り抜ける。

「いでえー！ お、お前」

「空さ……空さん……！」

「……………」

名前を呼びながら、彼女は泣いていた。ギュッと抱きしめるので痛いけど、なんかかわいらしいから……今回は許してやろう。うん。僕も同じように、彼女を抱きしめた。

「ソラさん、本当に……よかった……」

「アンナ……」

僕の傍に座り込み、アンナは微笑んだ。たくさんの涙を流しながら。

「勝ったよ。なんとか、ね」

僕は彼女の頭をなでた。すると、彼女は手で顔を覆って、大きく泣き始めてしまった。

「ソラあ……死ぬかと思ったよお」

「……鼻水垂れまくりだな」

鼻水に涙。ある意味、シエリアはすごい顔になっている。

「うるさい馬鹿アホマヌケソラ」

「……お前な……」

全くと思いつつ、僕はシエリアを撫でてやった。経験したことのない恐怖を味わったんだ。慰めてやんないとな……子供だし。

「ここまで泣かれちゃ、死ぬに死ねねえなあ」

ハッハッハと、レンドは大きな声で笑った。

「人事だと思つて……」

「まあいいじゃねえか。なあデルゲン！」

「え？ あ、うん。まあ、思う存分泣かれるよ」

と、二人は笑顔を向ける。

「意味わかんねえよ……」

まったく、なんていうか、なんというか。

僕は空を抱きしめたまま、ゆっくりと立ち上がった。樹は、倒れ  
そうな体を鞭打ち、何とか片膝だけを付いている状態を保っていた。

「……………樹……………」

顔を床に向け、ポタポタと血が垂れている。僕は空に体を支えら  
れ、彼に少しだけ近づいた。まだ、数メートル離れている。

「止めを、刺さないのか……………」

樹の声は、震えている。

「……………もう、お前は立てない。これ以上、傷付ける必要なんてない」  
僕はポリポリとほほをかき、天井を見上げた。

「とにかく、僕が勝ったわけだし、どうしようと僕の勝手つーこ  
とだよ」

「……………」

うん、とうなずき、僕は青空を見つめる。その時、樹の小さく笑  
う声が聞こえた。

「お前……………鼻で笑ったな？」

僕はなんだか照れくさく、顔を向けないまま言った。

「いや、そうじゃないよ」

顔を見なくてもわかる。樹は、穏やかに微笑んでいる。

「そつだな……………なんて言うか……………」

「……………なんて言うか？」

しばしの沈黙。密閉されたフロアのはずなのに、涼しげな風が僕  
たちの間を通り過ぎて行ったように感じた。

それらが過ぎ去るのを待っていたかのように、樹は口を開く。

「……………兄さんらし」

> i  
2  
5  
6  
4  
—  
2  
1  
5  
<

79章：FATE 凍てついた運命の言霊

声が途切れた。

僕は上空から、樹の方へと視線を向けた。そこには、何かに体を貫かれた樹の姿があった。

「ぐっ……は！！」

樹は、口から血を吐いた。せきをするかのように、何度も何度も「樹！！！」

彼の後ろに、誰かが立っている。黒い装束を身に纏い、樹の背中から剣を突き立てているそいつは「！！！」

漆黒の剣士！？

そこに、あの漆黒の剣士が立っていた。たしか、レンドたちがセレスティアル・ガーディアンに襲われた時、彼らを救ったらしいのだが……。

仮面の隙間から、彼は樹を見つめている。樹は、体を震わせながら後ろへと振り向く。

「き……貴様……！！！」

樹は、震える声で言った。

「リオン……！ 貴様、どうしてここに……！」

リオン？

リオン と、樹は言った。その名はたしか……

「ご苦労だったな、ユグドラシル いや、樹」

その名をどこで聞いたのかを思い出す前に、仮面男の音が発せられた。そして、樹から剣を引き抜いた。すると、樹の腹から大量の血液が流れ出す。

「がはっ……！」

樹は、血を吐きながらその場につつ伏せになるように倒れた。仮面男は、血塗れの刀身 氷でできているような、水色の刀身を眺める。

「……………あれ？」

初めて聞いた仮面男の声。なのに、ひどく懐かしい。

いや、懐かしいなんてもんじゃない。はつきりと、僕の記憶に刻まれた声。それは、拭い去ることのできない声。

「……………汚ね」

と、仮面男は剣をブンブンと振り回し、樹の血を辺りに散らす。

(なんだ……………？ どうして、すぐに思い出せないんだ？)

もうちょっとで出てきそうなのに、出てこない。喉に引つ掛かった魚の小骨のように、不快感が纏わりつく。思わず、僕は顔を俯かせてしまった。

「なかなか出てこないのも、無理はない」

「えっ？」

僕は顔を上げた時、仮面男は腰に付けた黒い鞆に入れていた。

「なにせ、久しく会話していないんだ。人間の脳みそってのは、大事な時にうまく動いてくれないもんさ」

唯一見える鼻から下……そこにある仮面男の口元が、ゆっくりと微笑む。

「お前は……」

そう、お前は僕と一緒にいた。一緒にいたんだ。

！！

体中を巡る、おぞましいほどの身震い。嬉しいからでも、怖いからでもない。いや、理由がわからない。

「お前……まさか……!!」

その言葉を待っていたかのように、彼はフツと笑う。

「そのまさか、さ。……空」

そう言うと、彼は仮面の上の黒いターバンを取り始め、顔を隠していた仮面を取り外した。

「おま え……………」

黒い髪が、さらけ出される。碧い瞳が、そこにはあった。

「  
修哉！！？」

柊修哉 僕の一番の親友。小・中・高と、ずっと一緒だった幼馴染。

「久しぶりだな、空」

修哉は手を挙げ、陽気な顔で言った。あの顔は、まぎれもなく修哉。いつも見ていた、あの修哉だ。

「約1年ぶりか。時間ってのは、あつという間に過ぎるもんなんだな」

そう言いながら、彼はそっぽを向いて笑っていた。現実を追いつかない僕を置き去りにして。

「お？ なんか、この一年で体つきがすっかりしたんだな。一年前までは、細身の長身だったのにさ」

と、今度は僕を眺めながら笑う修哉。

「ど、どういうことだよ！？」

ようやく出てきた僕の第一声は、それだった。

「なんでお前が……？ ど、どうしてここにいんだよ！？」

なぜ、ここに修哉が？ どうして、修哉が？ そんな疑問が僕の

頭の中で這いずり回り、答えというものを必死に探す、一向に見つからない。手がかりさえ、発見できないのだ。

「どうしてって……」

苦笑して、修哉は首をかしげた。

「そりゃあもちろん、ロキを復活させるためさ」

「……」

その言葉と同時に、僕はシュヴァルツたちの言葉を思い出した。

ロンバルディアとアルカディアの制圧総司令官……リオン。

「お前が……リオンなのか!？」

その言葉を聞き、修哉は小さくうなずく。

「ああ、そのとおりだ。俺が、リオンだよ」

自分を指差し、クスクスと修哉は笑う。

本当に、あいつがリオンだったのか……!

「ぐ、う……リオン……!」

伏せるようにして倒れている樹は、横目で修哉を睨み付けた。それに気が付いた修哉は、僕から樹に視線をやる。

「なんだ、まだ生きてんのか? そんなだけの傷で……まったく、しぶといなあ、お前も」

めんどくさそうにため息交じらせ、修哉は言った。

「き……さま、やはり……!」

口の端から血を流しながら、樹は修哉を睨みつける。それを受け流すかのように、修哉は首をかしげる。

「やはり? まさか、俺の狙いにも気付いてたつてののか?」

クククと笑い、修哉は再びため息を漏らす。

「なわけないんだろ? お前は気付いていなかったからこそ、今そこに倒れてんだよ」

「くっ……」

何とか体を動かさそうとするも、樹は動けない。僕との闘いのダメージが大きすぎるのに、そこから追い打ちをかけられたのだから。

「無様な姿だな、樹。どんな気分だ？ 最後の最後に逆転されるつてのは」

「……ひどく、腹が立つ……！」

声を震わしながら、樹はほくそ笑んだ。それを、修哉は冷たい表情で応える。

「……そもそも、チエックメイト王手をかけていたのはお前でも、空でもない。この俺なんだよ」

「く……っ……！」

樹の顔には苦悶と悔しさ……そして、修哉に対する憎しみの思いが浮かんでいた。

その時、樹の身体から淡い光が立ち込めた。それらは、何かを形造っていく。一つは長い剣、一つは杯。もう一つは、宝玉。全て黄金のように輝き、フワフワと修哉の目の前に浮かんでいる。

「やっぱり、同化していたか。同じ元素だから、当たり前と言えば当たり前だが」

修哉はそう言つと、指先を金色に輝かせながらそれらに触れた。すると、それらはまるで誘われたかのように、修哉の上へ移動し、漂い始めた。

「空。これらが何か、わかるか？」

「え？」

三つの物体。剣と杯と宝玉……？

「まさか……封印の鍵じゃないのか!？」

デルゲンが指差し、言った。

そうだ、デルゲンの言つとおりだ。聖剣と聖杯、そして聖玉。樹の体と同化していたんだ。

「そう、ラストエンペラー『ユリウスⅡフェムトⅡヴェルエス』の力であるロキの封印を解く鍵。これで、全ての鍵は俺の下に集った」

すると、修哉はしゃがんで樹の髪を掴みんで引つ張り、彼の耳元で何かを言い始めた。

「樹、冥土の土産だ。いいこと教えてやるよ」

「何……!?」

修哉は後ろの祭壇らしきものを、背を向けたまま指差す。

「あの祭壇、実はまやかしなんだよ。知らなかっただろ？」

「!!!!」

樹の顔に、驚愕が広がる。それを見た修哉の顔には、不気味な笑みが広がっていった。

「本当の祭壇は、『紺碧の間』にあるのさ」

「紺碧の……間、だと？」

「アイオン シリウスはな、ロキを封印した場所を更に隠したんだ。アムナリアに与えた聖書には、この『天帝の間』にあるとかって記しておきながら、な」

「!!! 貴様……最初から、知っていたな……!!!」

歯ぎしりをしながら、樹は言った。白い歯が、血で赤く染まっている。

「ヴェリガンが使用していた執務室に、それについてのメモがあったな。どこで見つけたのかは知らないが……きっと、14年前に聖都で見つけたんだらうよ」

微笑みながら、修哉は続ける。

「そんでさ、いいこと思いついたんだよ。……お前らが全員死んで、残るのは俺だけっていうのを」

その瞬間、僕の背筋に凍りつくような悪寒が走った。ゾツとした修哉の顔には、見たことも無い……おぞましい笑顔が浮かんでいるのだ。全てを見下し、全てを蔑視している笑顔。あらゆるものを殺しても、笑顔でいられるような。

「お前……奴まで殺したのか!!!」

「ああ、そうさ。あいつは屑だったが、いいものを遺してくれたよ」  
そう言って、修哉は樹の頭から手を離し、立ち上がった。そして、

周囲に目をやりながら手を広げる。

「どうだ？ おもしろかっただろ？ シュヴァルツもバルバロッサも、お前も空も、うまいこと動いてくれてさ！ ククク……ハァー  
「ハハハハ！！！」

修哉は声を上げて笑い出した。抑えきれないのか、腹を押さえながら何度も自分の膝を叩いている。

「ゆ、愉快すぎて……腹がいてえ！ ハハハハハ！！！」

なんだ？

あれは、誰だ？

あの笑い声を上げているのは、誰だ？

あれが修哉なのか？ いつも一緒にいた、親友の修哉なのか？

なんだ……あの修哉は……？

その時、ようやく収まってきたのか、修哉は笑いで出てきた涙を拭いながら、再び樹に目をやった。

「まあそもそも、祭壇が偽物だとは知らなかったとはいえ、敵が来るまでのんびり待っているような奴に、あの力を持つ資格なんてねえんだよ。バーカ」

「……貴様あ……！！！」

すると、修哉は再びしゃがんで樹に顔を近づけた。

「この際だ、はっきり言っただけでやる」

目を細くし、微笑む修哉。

「お前は所詮、俺の駒だったんだよ」

その瞬間、樹の眼が血走った。それは傷のせいではない。修哉が……許せないからだ。

「そして、お前と空……秤に量らせてもらった。その結果が、これだ。お前は、用済みなんだよ」

「くっ……！」

「残念だったな。古の神々にだけ許された『次元の執行権』を得るディメンショナル・ジャッジメントのは、この俺だ……」

修哉はそう言っ、立ち上がった。僕たちを笑顔で見渡すと、祭壇の方へと歩き出す。そして、そこで印を結び始めた。

「……天を統べる、至上の帝よ。我を、その手許へと導き給え。ケリュ・ヴェル・ゼスナー……天界への梯子　ビフレスト」

すると、修哉の足元に不思議な光が出現した。それは彼を包み込むように広がり、粒子をまき散らす。一瞬の発光と共に、修哉は消えてしまった。そこに、光の円環を残したまま。

呆然と立ち尽くす僕たち。どうしてこんなことになっているのか、理解できない。

僕は顔を振り、空に支えられながら樹の所へ行った。

「樹！」

傷口から、とめどなく血が流れている。樹は、真っ青な顔をしていた。

「アンナ！ 頼む！」

「え？ あ、はい！」

すぐに、アンナの治癒術で応急手当をしてもらった。彼女の魔法ならば、傷は感知できるはず。なんてたって、斜光の巫女だから。

「何をしている……！！ 情けをかけるつもりか！」

治癒の光を受けながら、樹は僕を睨みつけた。

「違うよ。お前は負けたんだろ。どうしようが、僕の勝手だ」

「……………」

樹は呆れてしまい、苦笑と共にため息を漏らした。きつと、「甘い」などと思っているのだろう。

「なあ、ソラ」

後ろへ振り向くと、デルゲンが神妙な顔でほほをかいていた。

「彼は……お前の知り合いなのか？」

彼 修哉のことだ。僕はうなずく。

「柊修哉……僕の、ガイアの友達だ。ずっと一緒だった、一番の親友だよ……………」

天才と言われるほど賢く、運動能力も群を抜いていた。彼に勝てるものなど、何一つないと思わされるほど。

「…………柊、修哉？」

つと、空がそう漏らす。ボーっと、彼が消えた場所を見つめながら。

「ああ、そつだよ。覚えていないだろうけど、あいつはお前にとつても幼馴染……………なんだよ」

「幼馴染……………」

顔を曇らせ、空は俯く。こんな時、彼女に記憶が消えていてよかったと思ってしまう。もし、覚えていたらショックで…………

「あんな冷たい笑顔をする人がいるんですね」

「え？」

彼女は顔を振り、僕を見つめた。どこか、瞳が揺れているように見える。

怖い、のか？

「彼とは関わっちゃいけない気がします。…………触れてしまうと、自分たちが壊されてしまいそうなの……………」

「……………」  
無垢に近い彼女は、何かを感じ取っていた。修哉の中にある、冷たい何かに。

その時、樹の治療が終わった。

「致命傷は無くしましたから、闘わない限り大丈夫だと思います」と、アンナは小さく息を吐いた。何度も力を使っているせいで、彼女の疲労もたまっている。

「ありがとな、アンナ」

「いえ……………」

労いの言葉をかけると、アンナは健気に微笑んだ。無理をしていると確信させる、その笑顔。これ以上は、負担をかけられないな……………」

「大丈夫か？」

そう言っても、樹は傷の癒えた自分の体を見渡しているだけで、何も言わない。

「……………修哉は……………」

「行け」

僕の言葉を遮り、樹は言った。僕を直視する、赤紫色の瞳。

「修哉は……………リオンは、僕よりも質が悪い」  
たち

その言葉と彼の表情から察するならば、修哉を放っておいてはいけないということが理解できる。

「早く行け。手遅れにならないうちに」

「樹……………」

すると、樹は右手を上げ、僕に差し伸べた。その時、その手から白っぽく淡い光がいくつも出現し、僕を包み出した。

だんだん、痛みが引いていく。関節や、筋肉の痛みも遠のいてい

く。これは……治療術？ いや、違う……元素か？

「これで……もういいだろう」

樹は、小さく呼吸しながら手を下ろした。それと同時に、僕の体が一瞬発光する。

「……元素を分けた。僕と兄さんは『聖魔』のエレメンタルで構成されているから、特に支障はきたさないよ」

そうか……要は、リサと同じようなことをしたってことか。

「さあ、行け」

樹はその場にあぐらをかき、祭壇の前にある魔方陣を指差した。

「どうせ、僕は負けたんだ。このステージから降りる。……もう、執行権を得ることもできないからな」

「……………？」

フツと微笑み、樹は僕を見据える。

「早く行ってくれよ。あいつを……修哉を、止めてくれ」

「樹……」

哀しげな双眸は、何かを言いたげだった。それでも言わないのは、意地になっている部分があるのだ。

僕はうなずき、みんなと共に祭壇の魔方陣の上に立った。入った瞬間、淡い光の粒子がフツと上空に舞った。そして、僕たちは光に包まれ、どこかへと消えた。

終わったと思った闘いは、まだ続いている。

修哉 いや、リオン。

最後の、インドラの幹部。

僕たちは真実を見定め、彼を止めるために……

カインが散った、紺碧の地に足を踏み入れようとしていた。

「……………ふう……………」

樹は息を吐きながら、上空を見つめていた。青い空だけが、そこに広がっている。この天井は、マジックミラーか何かでできているんだろうか　などと思いつつ。

「いるんだろ？　出て来いよ」

樹は一人になった広間で、そう言った。その瞬間、彼の傍から光の柱が出現し、そこからある人物が出てきた。樹は彼に目を向けず、上空を見つめたままだ。

「いつから、いると気付いていたんだね？」

クスツと微笑み、その男は言う。

「さあ？ 直感かな」

と、彼はようやくその男に視線を向けた。

「クロノス……相変わらず、だな」

ローブを羽織った男性　クロノス。彼は樹に歩み寄り、ソラたちが行った跡を見つめる。

「君らしくないな」

「……………」

「空を、あのまま行かせるとはね」

いつもの樹ならば、そんなことはさせないはず。

そう思える部分が、クロノスにはあった。

「ハハ、そうだな。たしかに、僕らしくない」

「やれやれと言いながら、樹は苦笑した。

「…………ほとほと、嫌になつていったのかもしれない」

そして、彼はため息を漏らした。いつにも増して陰気な彼に、ク

ロノスは首をかしげる。

「嫌に？ 何が？」

クロノスの問いに樹は顔をそらし、顔を振った。

「…………何も望んじやいなかったんだよ」

兄たちがいなくなったこの空間は、まるであの頃を思い出させるものだった。樹にとって、「奇」となりし影の始まり。

白い、病室に。

「普通のヒトでありたかった。普通の」

それが一番の望みだった。普通でありたかった。

「僕には……僕たちには、そうする権利さえ与えられていなかったんだよ」

だから、壊したかった。自分に責任を押し付けたこの世界に復讐したい。というのは、一つの理由に過ぎない。

樹にとって、一番の理由となるものがあつた。それを心に巡らせ、彼は嘲笑するかのように小さな笑い声を吐き出す。

「滅茶苦茶にしてやれば……どうなってたんだろっね」

顔を振りながら、樹は笑顔で言う。そんな彼を、クロノスは何も言わずに見つめていた。

「でも……疲れた。いちいち、意地になんのはさ」

そして、樹は再び青空を見つめた。

「……嫌になるよ。こんな世界……」

## 80章：カルマ 冥道への慟哭「1」

「どういうことだ？ なぜ、覚醒しない。伝承どおりやったはずなのに……まさか、ここも違うというのか？ ……いや、それはない。ここに、これがあるからこそあるはずだ。……ちっ、シリウスの野郎、最後の最後まで……」

光の中から出ると、そこに広がっていたのはさっきと同じようなフロアだった。違うのは、壁すべてが透けていて、外の風景が見えるということと、祭壇らしきものがある奥には、巨大な水晶体が浮かんでいた。青い、光り輝く水晶体。ゆっくりと横に回転している。その祭壇に、修哉は佇んでいた。

「修哉……！」

僕は彼の名前を叫んだ。すると、修哉はゆっくりと僕の方に顔を向ける。

「……お前か」

彼は僕を見るなり、再びあの巨大な水晶体に目を向ける。

「空、これが何かわかるか？」

修哉はそれを指差す。ほんの少し透けているそれは、宝石というより……神秘的な神々しさを放っているように感じた。触れてはいけないもの。ヒトが触れたら、身の破滅を起こしそうな……。

僕は、これを見たことがある。はっきりとはなく、夢のような空間の中で。

「これはな、この空中都市群の 核 セレスティアルだ」

セレスティアルって、この天空帝都の名前のことではなかっただ

ろうか？

彼はそれを見上げ、言い続ける。

「これこそが、この空中都市全体を一万年の長きに渡って浮遊させ続けている原因のものだ」

「じゃあ、それは……」

僕がそれが何なのかに気付いた時、修哉は僕の方に向き直った。ほんの少し、笑みを浮かべて。

「そう、これは天空石だ」

「あれが!？」

あんなに大きなものか!？　ここから見るとはつきりとはわからないが、高さはゆうに3メートルを超えているはずだ。幅も、2メートルはあるんじゃないだろうか。今まで見てきた天空石は、石ころ程度の大きさばかりのものだったのに。

「天空石って言っても、そこらの天空石とはわけが違う。あれらは所詮、統制主から零れた偽りの果实」

統制主　その言葉の意味を、今の僕が理解することはできなかつた。

修哉は再び、セレスティアルを見上げる。

「全知万能の神が創り出した、『星の遺産』さ」

修哉がそう言った瞬間、僕の中に映像が流れ込む。

このことと同じ、青空しか見えない空間。そこに浮かぶ、一つの水晶体。

## 創造と破壊の象徴

そう、僕はたしかにあれを見た。ガイアにいた頃、頭痛と共にそれを見た。

「……太古の昔、星が生まれたのと同時に誕生した、奇跡の物質」意識を取り戻した時、修哉は再び僕から背を向けていた。

「星の元素『紺碧』のエレメンタルだけで構成された、純精霊石。大地の奥深くに眠り、何十億年と眠り続けた神秘の秘宝。生命が触れてはならない、禁断なる知識の果实」

彼は独り言でも呟くかのように、セレスティアルを見つめている。

「だが、約五万年前……人類は見つけちゃったんだよ」

「え……？」

クスクスと笑い、彼は僕の方に顔を向ける。

「人類は歓喜して、神々にこれを捧げた。死への恐怖を払拭し、完璧な人類のための世界を創り上げさせるためにな」

僕は小さく顔を振った。彼の言っていることの意味が……わからぬ。なのに、僕の心拍数が上昇している。まるで、それを掘り起こすなど言わんばかりに。

何を、焦っているんだ？

「だが、神々がこれから創り出した『人類のための神』は、悉くを薙ぎ払った。存在していたほとんどのものが、消え去ったんだよ」  
意味不明な彼の言葉が、僕の心を揺さぶる。

修哉は知っている　あれが、人類を殺したものだということ。  
その時、修哉はパンツと手を叩いた。それと共に、遠ざかるようにしていた僕の意識が、ここにはつきりと立つことができた。

「ま、これの話はこれくらいにしておこうか」

目をパチクリさせる僕を見るなり、彼は微笑む。

「お前が知りたいことは、なんで俺がここにいるか　だろ？」

彼は「教えてやるよ」と言いながら、祭壇から降り始めた。

「俺はさ、お前と同じレイディアントの人間なんだよ」

「……………!!」

「覚えはないか？　俺の瞳の色に」

修哉は祭壇から降りた所で立ち止まり、言った。瞳の色……………修哉の瞳の色は、碧い。そう、ヴァルバと同じ瞳の色。

考えている僕を見ながら、修哉は言い始める。

「俺の名は『リオン』フェイト『ウルク』フォン『ペンドラゴン』」。

……………聞いたことはあるだろ？　ここまで辿り着いたお前なら、さ

不敵な笑みを浮かべ、彼は言った。ペンドラゴン……………僕はそれを、忘れてはいない。碧い瞳は、その証。

「じゃあ、お前は……………ゼテギネア皇室なのか!？」

そう言うと、修哉は小さくうなずいた。

「そうさ。細かく言えば、俺は皇室の分家だがな。分家でありながら、本家の名を名乗ることを許された唯一の一族……『アヴァロン王家』の生き残りだ」

アヴァロンって、大昔に2大陸を統一したって言うやつか？でも、それと今のペンドラゴン家は関係ないような……。

「アヴァロン……あのアヴァロン王家か」

レンドが呟くように言った。

「知ってるのか？」

デルゲンがそう訊くと、レンドはうなずく。

「……俺が小さい頃、歴史学で習ったんだよ」

彼の説明によれば、アヴァロン王とはゼテギネアが創設され、皇位継承権第2位の人間が就く位らしい。帝国の盟主フィンジアスが建国された頃はそうだったが、帝国となってからは世襲され続けたという。

「へえ、よく知ってるな」

と、修哉は拍手をし始めた。そして、何かに気付いたのか苦笑する。

「ああ、そっか。お前、カーライン侯爵ライザー卿の息子だったな。忘れてたよ」

「……………」

あいつ、レンドがどこの出身なのかさえ知ってるのか……。

「……だが、アヴァロン王家は18年前、王家転覆を凶つたとして、一族全員処刑されたと聞いた」

全員処刑　！？

僕は修哉に顔を向けた。それと同時に、修哉はニヤリとほくそ笑む。

「そして、アヴァロン王位は消えることとなった……らしい」

「……じゃあ、お前はそのアヴァロン王家の生き残りなのか！？」  
そう問うと、彼はうなずく。

「そのとおりだ。俺は最後のアヴァロン王にして、当時の帝国議会

議長オルドヴァスの孫。正当なる、皇位継承権を持つ人間だ」

逃げ延びていたってことか……。

待てよ？ アヴァロン……そう言えば、誰かが言っていた。たしか、帝都だっただろうか。誰かが、アヴァロンの逆賊どもとかつて。

「俺の父、克正 本名は『ヴェリガン』と言ってな。祖父の嫡男だった」

「えっ!？」

あの人、ヴェリガン!? ミランダが言っていた、樹の協力者。修哉がインドラの幹部なら、たしかにあり得ないことはないが……。

「18年前、祖父が謀反の罪で捕らえられ、即座に処刑された時、父は連座で処刑されると確信し、俺を妊娠していた母を連れてガイアへと逃亡した。父は王太子でありながら、歴史学・次元学の権威だったため、もう一つの世界があることを知っていたんだよ」

帝都には、かつての統一王朝アヴァロンの遺産が多く残っており、そこから次元学などが発展したのだという。

「ま、ガイアへ辿り着いてから俺を出産した母は、すぐに死んでしまったけどな」

死んでしまったというのに、彼はそれを淡々と説明していた。

「俺の祖父は、謀反など企ててなどいない。あれは、皇位継承の争いに負けた結果だからな」

「……?」

僕が首をかしげると、修哉は話し始める。

「聞いたことはなかったか？ 18年前、ルティアとゼテギネアの18度目の戦乱はゼテギネアが優位であったにもかかわらず、皇帝が急逝したために終結したのだと」

そう言えば、レイディアントに降り立った頃、ヴァルバから聞いたことはある。20年前に勃発した、二大国の戦乱だって。

「俺の祖父は3代皇帝デュラン・カルヴァス2世の実弟でな。皇位

継承権第2位を持ってたんだ」

3代皇帝の嫡男で、次の皇帝であるベルセリオス6世というのが、18年前の戦乱の途中に急逝した帝なのだという。

「そして、当時の皇子と俺の祖父との間で、皇位を巡り水面下での政争が起きた。まあ、それぞれの派閥の家臣どもの醜い争いに過ぎないがな」

即位したのが、ベルセリオス7世。……ヴァルバこと、ベオウルフの兄。現皇帝の実父。

「結果、俺の祖父は皇帝暗殺罪及び皇位篡奪未遂の罪で捕らえられ、即座に処刑された」

醜い骨肉の争い いや、欲望に塗れた家臣たちによる悲劇。それを、ヴァルバは知っていたんだろうか。

「レイディアントへと逃れた父は、復讐を誓った。自分の運命を滅茶苦茶にしたゼテギネアを滅ぼすため 世界の覇権を手に入れるために、ロキの復活を目指したのさ」

修哉のお父さんと言えば、あの警察官だ。今でも忘れない。

空がさらわれた後、僕たちを調査しに来た警察官。彼の不気味で冷たく、鋭い刃物のような笑顔は、今でも忘れない。

あの時もそうだったが、修哉はその笑顔をしている。あの頃はほとんど見かけなかったが、今はずっとその笑顔のままだ。

空が怖がっていたのは、これのことなのだろうか。

「計画を進める中で、何人かの仲間を集めた。さすがに一人では、世界に対抗することなんてできないと思ったんだ。グランディア兄弟にホリン、ミランダ、ステファン……そして、樹」

計画の中枢を担っていたのは、どうやら彼の口ぶりからして修哉のお父さんらしい。……けど、樹によると修哉がその人を殺したんだ。

実の父を。

「くだらない奴さ。その計画の中で、俺を手駒として操ろうとしていた。……そうとは知りながらも、俺は親父に付き従ったんだがな」  
修哉は吐き捨てるように言いながらも、横を向いて微笑む。

「じゃあ、どうしてお前は僕たちを助けたんだ？」

「……ん？」

修哉は僕の方に、再び顔を向けた。

「どうして仮面をかぶり、僕たちを窮地から救ったりしたんだ？  
お前の最終的な目的は……ユリウスの封印された力を手に入れることのはず。僕たちを助ける必要なんてなかったはずだろ？」

何度か目をパチクリさせ、修哉はニコツと微笑み、うなづく。

「……だけどな、空。樹が生きていては、ロキの力を得たからと言って、俺の望むことが成就されるわけじゃないんだよ」

「望むこと？」

問い返すと、修哉は自分の掌を見つめ始めた。

「あいつが目指す世界の姿と、俺が目指す世界の本当の姿は　違  
う」

彼は顔を振った。

「あいつは星を救おうとしていたが……俺にとって、そんなことは  
どうだっていいんだよ」

あの碧い瞳で僕を一瞥すると、彼は再び祭壇への階段を上り始め  
た。

「俺はな、世界がどうなるうと、星がどうなるうと関係ない。滅び  
るなら、滅べばいい。人に滅ぼされるのなら、勝手に滅ぼされてし  
まえばいい」

修哉は僕たちに背を向けたまま、巨大な水晶体を見上げた。青く  
煌めくセレスティアル。どこか、吸い寄せられるような感じがして

しまつ。

「俺は俺が目指した未来みこを見るため、生きている。それだけだ」  
小さく、呟くように言う修哉。彼の背中からは、さっきまでの猛々しい冷酷さが感じ取れなかった。……気のせいなのだろうか。

「そんなことはどうだっていい。それより、いいことを教えてやるよ……」『セヴェス』くん」

くるつと僕の方に向き直り、彼は微笑みながら僕を見る。口元が笑っているのに、目が笑っていない。

「樹……いや、シエルフィル＝ヴェルス。あいつ、なんでレイデイアントで生きていたのか不思議じゃなかったか？」

「え？」

たしかに……何で、あいつがこちら側に来ているんだって思った。やっぱり、さらわれたとしか……。

「樹は4年前のあの日、交通事故で死んだと思われていた。そうだよな？」

「……………」

僕は何も言わず、うなずいた。

「だが、あの交通事故が俺たちの 親父と俺の仕組んだことだとしたら？」

「なっ……………!!」

僕の驚きの表情を見て、修哉はより一層笑みを大きくする。予想通りの反応と思いながら。

「ロキの力を手に入れるためには、カインの直系者が必要だった」  
アイオーンが仕組んだシステムのほとんどが、調停者として覚醒した者が必要であり、調停者には直系者しかねない。

「親父は、俺の友人にオディオン5世の死んだと思われていた二人の息子がいることを知った。親父も、ベオウルフと同じように何かを『探知』する能力を持つてたのかもな」

含み笑いをしながら、修哉は僕を見据える。

「まさか、息子の知り合いの中に、同じようにレイディアントから逃れてきた人間がいて、それがヴェルエス宗家の者だとは思いがけないことだ」

そして、ヴェリガンはどちらか一方を手に入れようとした。自分の駒として、上手に動いてくれる調停者を。

「空、お前は危険だった」

彼は僕を指差す。

「お前には、カインとしての『カリスマ』、ユリウスとしての『優しさ』、シリウスとしての『強固な意思』を隠し持っていた。正義感に溢れるお前に、世界を殺そうとすることなんかできやしない。逆に、自分たちが滅ぼされかねないと、親父は危惧したんだよ」

だからこそ、樹を選んだ。修哉は、そう付け加える。

「あいつは優しいが、馬鹿みたいに脆い。お前と違って、自分の意思なんかを築き上げられない弱者」

彼は腕を組み、青空を見上げて言った。

「簡単に周囲に感化される、愚かな調停者。誰かに付いていかなければ、自分の存在意義を見出せない不完全なヒト。まあ、おかげでうまく動いてくれたけどな」

「お前ら……なんていうことを……！！」

じゃあ、樹が死んだ時から何もかもを知っていて、僕たちと接していたのか!?

あの時、優しく声をかけ、樹を失った悲しみから僕たちを解放させてくれたのは……ただの演技だったのか！？

僕の中に、修哉に対する憤りが膨らんでいく。それが、目に見えるようになるように。

「あいつ、最初は帰りたいたいなどとほざいていたが、簡単だったよ。

……俺たちの色に染め上げるのはさ」

顎に触れ、その頃を回想しながら修哉は笑った。それもまた、僕の怒りを増幅させるものだった。

「お前……あいつに何を吹き込んだ！？」

いつの間にか、僕は怒声を上げていた。それに対し、修哉は細めた目で僕を見据える。

「ヴェルエス家 直系者に与えられた強大過ぎる力は、一体何のために存在し、意味を成しているのか」

「！？」

「そして、お前自身ができることと言ったら、生命の悉くを殺して、星を護ることくらい とかな」

そう言っつて、修哉は手を叩きながら笑い声を上げた。それと同時に、僕の体も怒りで震え始めていた。

「本当に、お前たちは上手に動いてくれた。シュヴァルツもバルバロツサも、何も知らないで樹を担ぎ上げてさ。自分たちが、俺に利用されているとも知らずにな」

「修哉……！！」

何もかも……何もかも、あいつが計画したこと。

最後まで闘ったシュヴァルツや樹たちを、掌の上で弄んで……！  
「親父を殺し、俺は全ての権利を得るためにお前を助けた。お前と樹を競わせることによって、事を早く進ませたかったんだよ」

そう言つと、修哉はなぜか僕ではなく、僕の後ろにいる誰かを睨みつけた。

「……誰かさんのおかげで、少し遅れが生じてたからな」

それが誰なのかを理解する前に、修哉は僕に視線を戻す。

「やっぱり……お前が、家族を殺したのか!？」

ガイアに一度戻つた時、修哉の家族はみんな死んでしまっていた。両親だけでなく、妹の咲希ちゃんまで。

「ああ、そうだ。親父は力を得ることによって、支配することしか見えていなかった。そんな奴に、『次元ディメンショナルの執行権ジャッジメント』を得る資格がない。あれは……もつと崇高な事を成すためのものだからな」

表情を変えず、修哉は言った。

「お前……咲希ちゃんまで殺したのか!? なぜだ!! 咲希ちゃんだけは、大切にしていたじゃないか! お前のことを想う、大事な家族だつたはずだろ!？」

叫ぶ僕を、彼は冷たい視線で見つめる。

「答える……修哉!！」

修哉は殺していない。家族を殺しちゃいない。

そう信じていたのに。

僕の瞳から背けるように、修哉はまぶたを閉じる。

「……俺に、家族なんて必要ないんだよ。俺に必要なのは……絶対的な権利と、超越的な力……この二つだ。それ以外は、ただのゴミさ」

修哉は冷たく吐き捨てた。いや、冷たく吐き捨てたように見せた。

今感じた修哉の雰囲気　それは、あの時と同じだ。  
夕方の公園で、ブランコの上で佇んでいた時……親父に殴られた  
って、修哉が最初で最後の弱音を吐いた時と。

「空」

すると、修哉は祭壇への階段を降り始め、僕に近づいてきた。

「俺はずっとお前たちを見てきた。お前と樹、どっちが『約束の刻』  
に相見えるのかを、見定めるために」

そして、彼は僕から5メートルほど離れた位置で、立ち止まった。  
「お前が樹と闘うまで死んじゃ困るってんで、あんなくそ暑い服装  
に仮面までしてたんだ。両者にばれないように行動すんのは、さす  
がに骨が折れたぜ」

シユヴァルツとバルバロツサにも顔がばれていたため、彼らにも  
接しないようにしていたのだという。

「結果、お前はここに立っている。一万年前の残留思念リユングヴ  
イに勝ち、闇の調停者である樹にも勝つたんだ」

そう言って、彼は僕に手を差し伸べた。

「空、一緒にこの世界を滅ぼさないか？　欺瞞と憎悪に満ちた、こ  
の世界をさ」

微笑みかける修哉。さつきとは違い、今の修哉はいつもの修哉に  
しか見えない。それが、余計に嫌だった。

一緒に滅ぼそう　そう言っている修哉が、あの頃の修哉と重な  
ってしまふ。

「俺とお前の仲じゃないか。幼い頃から、俺とお前は常に一緒だっ  
たろ？」

その笑顔で、その声で言わないでくれ。

心が惑わされると同時に、怒りが僕を支配しようとしているの  
に。

「何をするにも一緒だった。共に悩み、共に泣き、共に笑った」

彼と出逢ってから、いつも一緒だった。同じことで遊んで、悩みがあれば聴いてくれた。傍にいて、僕を支え続けてくれた。

「俺たちは、親友だろ？」

一切疑わぬ双眸で、僕を直視する修哉。

どうして、あの頃のお前と同じようにして、世界を滅ぼそうなんて言うんだ？

お前のせいで、あいつらが死んでしまったのに……！

「全部……全部、お前の謀だったんだな……！」

僕の両手は、わなわなと震えていた。

「今まで……たくさんの人が犠牲になった。仲間たちも……失った」  
この一年、目の前で多くの人が死んでいった。殺し合いたくもないのに、殺し合い。憎みたいわけでもないのに、憎み合い。

「ヴァルバが……」

彼の姿が脳裏に浮かぶ。修哉と同じ、皇室の碧い瞳を輝かせ、微笑んでいる姿が。いつも、僕にいろんなことを教えてくれたあいつが。

「リサが……！」

あいつは、僕たちを導いてくれた。自分の命を賭して、僕を先に進ませてくれた。彼女と一緒にいて、僕は何度も立ち上がることができた。空を救うことができた！

泣かないで

そう言っつて、あいつはいなくなつた。微笑みだけを残して、二人はいなくなつてしまつた！

修哉さえ、修哉さえいなければ、二人は死なずに済んだ！　こんな血生臭い闘いをしなくてもよかつた！

「お前のせいで、あいつらは死んだんだ！！」

僕は彼に向かって叫んだ。

殺してしまいたい　そんな想いに、僕の心は塗りつぶされてしまひそうになつていた。

「弱い者は死ぬ、それだけだ」

「！！」

修哉は、小さく顔を振つた。

「犠牲になつた巫女たちも、惨殺された諸国の首脳陣も、リリーナやベオウルフも、俺の築く未来の礎になつたに過ぎん」

僕を睨みつけながら、修哉は微笑む。どうして、そんなことを気にするのか理解できないとでも、言いたげに。

「……修哉ア！！」

僕の怒りは頂点に達した。右手を掲げ、そこにテイルフィングを

具現化させようとした。

その時

「ダメ！」

優しい手が、僕の腕を抱く。一瞬リサかと見間違っそれは、空だった。

「いけません。空さんは、怒りだけに囚われちゃダメです！」

「空……」

「たとえ世界中の人がそうであっても、あなたはダメなんです。あなたは、星と命を護ろうって……抗おうって決めたのだから……！」

僕を叱咤するその双眸は、見覚えがある。強く、美しく、気高い宝石の瞳は、僕を引き戻してくれる。

「……ありがとうな」

ゆっくりと深呼吸をし、僕は彼女の頭をポンポンと叩く。こんな時なのに、すぐく落ち着くのは彼女の為せる業だろう。

僕は、修哉を見据えた。

「……成長したな、お前……」

修哉は少しだけ微笑みを浮かべながら、僕を見ていた。

「かつてのお前なら、それでも俺に掴みかかって来たのにな。……」

小山内美香の時みたいになさ」

「……」

「元はといえば、お前の精神不安定はそこに息衝く馬鹿どものせいだが……今、お前がそうやっていられるのも、原初のヒト『イヴ』のおかげだろうな」

目を瞑り、彼は苦笑した。

再びまぶたを開けると、彼は「リオン」としての顔で僕を見る。

「ならば、調停者『ソラ』として訊こう。……俺と共に来い、『聖魔の調停者』」

同じように手を差し伸べ、彼は言った。

「バルドルとしての責務 全てを創造するための力を行使するならば、この次元を『崩壊の時』から護るのがお前の目的のはず。俺がすることは、結果的にそこへと辿り着くことだ」

鋭い視線が、僕に向かう。

「全てが始まり、全てが終わりなる地 そこへ至ることこそ、俺たちが生まれた時から望んでいることだ」

僕も同じように、彼を見る。

「さあ、セヴエス。この俺と共に来い。俺たちが望んだ『夢の形』を、ここに創り出すために。……俺たちは、親友だろ？」

親友だろ

碧く、煌めくような彼の瞳が、僕を貫く。その言葉が、僕の心の中で木霊する。

その時、僕の手を握り締める感触があった。それは、誰かを確認しなくても誰なのか、はっきりわかる。

細い指。何度も握りしめた、その手を。

大丈夫だよ。僕には、お前たちがいるもんな。

「答えなんか知ってんだろ？ 修哉」

そう言っても、彼は何の反応も示さず、僕を見つめている。

「お前なら、僕がどうしようとするのかわかってるはずだよ」

「……………」

「僕は滅ぼしたいなんて望んだことはない。一度も」

消えてしまいたい 逃げてしまいたいと思ったことは多々ある。けど、世界を殺したいと思うほど憎んだことはない。

空がさらわれてしまった時、勇気を持てずに受け身になっていた自分。

初めて人を殺した時、その場からいなくなりたいと思った自分。

リユングヴィが発露し、海を犯そうとした自分。

樹によって空が殺されかけ、記憶まで失ったことを知り、自暴自棄になった自分。

「世界なんて残酷だよ。世界なんて、自分を癒してはくれない」

人生なんか甘くない。幸福なことよりも、寧ろ苦しいことや悲しいことの方が多い。

「だけど、僕は憎んでいない。誰一人、憎んじやいない」

樹も、シュヴァルツたちも、赦すわけではないけど……怨んじやいない。

「お前にとってみれば、この世界は滅ぼすしかない世界なんだろうな」

僕は彼を見ながら、小さく微笑む。

「僕にとっては、大切な人たちが息衝いてる世界なんだよ」

祖国と愛する人への想いに揺さぶられたヴァルバ……でも、一緒に抗おうって言うてくれた。

信じ、愛する家族を殺され、復讐を誓い、他人を利用したことに苛まれたリサ……彼女も、僕と同じ位置に立ち、歩き続けてくれた。たとえ、自分が消えてしまおうとわかっていても。

僕を信じ、世界を愛してくれた。

「そんなレイディアントを、滅ぼしたいだなんて思わない。思うはずが無い」

僕は自分の胸に手を当てた。

……なんだ、思ったよりも落ち着いているじゃないか。目の前にいるのが修哉なのに、さっきまでと違い、穏やかな緑風のように静かだ。きっと、後ろにいるみんなと、僕を握ってくれる人がいるからだろう。

「だから、お前と一緒に歩けない」

そう言い放ち、僕は微笑んだ。

修哉　僕にとって、一番の親友。

だからと言って、彼の冥い感情に流されてはいけない。僕は僕でしかない。

そうであると、決めたのだから。

「……本当に、予想どおりの答えだな」

修哉は差し伸べていた手を引き、小さく微笑む。

「その言葉、本当にお前らしいよ」

上空を仰ぎ、彼はハハツと笑う。

「空、お前は変わらないんだな。旅立つ前と……何一つ、変わっていない」

旅立つ時、彼は僕の背中を押してくれた。あの時の修哉と同じであるはずなのに、そうではない修哉がいる。

「ああ、そうだ」

小さく顔を振り、彼は呟くかのように言った。

「俺はさ、ずっと思ってたんだ。いつもそんなお前に対して、いつも思ってたんだよ」

そして、彼は僕を見据えた。

「殺したいってな」



80章：カルマ 冥道への慟哭「2」

修哉の顔が一瞬にして、冷たいものへと変化した。樹へと向けていた、あの表情に。

「お前は、ガイアとレイディアント……両方を知っていないながら、そんなことを言うんだな」

修哉は呆れるように顔を振り、大きなため息を漏らす。

「憎んでいないとか、そういうのは意味を成さない。リリーナを見ていたお前なら、そんなことすぐに理解できるだろーが」

「……………」

「お前みたいな考えなんか、腹を満たしちゃくれないんだよ。本当の意味で、全てのものが癒されはしない」

そう言うつと修哉は、一瞬にして祭壇の前まで後退した。そして、セレスティアルを見上げる。

「ヒトだけでなく、生命が減びたいと願っている。それは、違えることのできない必然。そうでなければ、こんな歴史を創り上げてはいない」

何かを振り払うかのように、彼は自分の前を手で払った。

「真実の夢……星だけでなく、目に見えるもの全てが望みし瞬間。

お前はそんな……全ての夢みる者たちの 願い を拒み、自分とそこにいる、糞みたいな連中の幸福のために世界を救おうって言うんだな……………」

僕を睨みつけ、冷たい微笑を浮かべる。

「俺は認めねえ！」

そう言い放った瞬間、修哉はセレスティアルに拳を叩きつけた。

それと同時に、激しい電流がそこから放ち始める。

「どうしてもお前が星と命　全てを護りたいってほざくのなら…

…」

修哉は、鞘から剣を引き抜いた。その切っ先を、僕に向けて。

「お前を殺す」

水色の刀身を持つ、修哉の剣。氷河のような冷気を放っているそれは、まるで修哉そのものだった。

「修哉……！」

僕は右手から、ティルフィングを具現化した。

今度こそ、最後だ。修哉を倒して、終わりにしよう……。

「行き着く先は、魑魅魍魎の怨念住まう聖域の果てだと知れ……！」

修哉の剣が、青く光る。そして、剣を横に払った。すると、その光が飛び出し、猛スピードでこちらに向かって来た。そして、目の前の床に這いずるように広がり、大きな氷河を出現させる。

「なっ!？」

氷河の刃が、僕に向かってやって来る。僕は上空へ大きく跳躍して、それを避ける。斬撃による衝撃波に半端ではないほどの冷気が纏わっており、触れたものを一瞬で凍らせるのだ。

「逃がすか！ 紅蓮の氷河 レイシヴェルサ！」

彼は僕に向けて手を掲げると、一瞬にして青い魔方陣を出現させた。

この波動は禁呪……しかも詠唱破棄か！

真っ白な冷気が、僕を包み込むようにして周囲を高速で徘徊し始める。そして、四方八方から氷の壁が押し寄せてきた。

「レイジングフレア！」

僕は同じように詠唱破棄をし、自分の周りに炎の膜を張った。フオルトウナ神殿で、修哉の冷気魔法をホリンはこうやって防いでいたからだ。氷の壁が押し寄せてくるが、炎の膜のおかげでなんとか防ぐことに成功した。それが消えると、修哉の姿が無い。

後ろだ！

後ろへ振り向くと、今まさに斬りかかろうとしている時だった。僕は空中で回転し、その勢いで斬りかかった。二人の剣が、両者の間でぶつかり合う。

「いい反応だな、空」

「修哉！」

そして剣を離し、もう一度斬りかかった。再び、両者の間で剣がぶつかり合う。すると、2人とも衝撃で後ろへ吹き飛んだ。床へ着地した時、修哉は再び印を結び始める。

「氷山の河川 フィンブル！」

冷気が辺りを埋め尽くし、床を這う氷河が襲い掛かる。僕は猛スピードで横へ避けた。

「獰猛なる殺戮の嵐……永遠の命を捧げよう。広がる、あまねく命を奪うがいい！ 疾風の帝王 ガヴァルゲノス！！」

氷河を避けながら僕は印を結び、空中へ跳躍したのと同時に魔法

を発動させた。修哉を中心に、床から風の刃が渦を巻き始める。

「その程度か……」

修哉はフツと微笑み、手を広げる。

「崩せ、無限回帰へ　ガヴァルゲノス！」

すると、風は光が弾けたかのようにして消え去ってしまった。聖魔術を簡単に相殺しやがった！

僕は空中から、ティルフィングを振り抜いた。風を巻き起こし、三日月の衝撃波が修哉の方へ向かってゆく。

「弱いな」

修哉は掌を前に出し、青い障壁を発生させて衝撃波を防いだ。僕は猛スピードで移動し、修哉の背後を取る。そこから剣を横へ、縦へと振りぬく。しかし、修哉は背を向けたまま、それを華麗に避ける。

「知ってるか？　空」

修哉は振り向き、僕の攻撃を剣で防ぐ。

「何をだ！」

僕と修哉は、鏝迫り合いの状態になった。そんな中でも、彼は涼しい顔をしている。

> i 6 1 2 8 — 2 1 5 <

「世界はな、ゆっくりと衰退してるんだ。ゆっくり、ゆっくりと破壊の坂道を転がっていく。それは偶然でも奇跡でもない。……必然なんだよ」

「だから、何が言いてえんだよ！」

修哉を剣ごと思いつき押し、距離が少しだけ開いた瞬間踏み込み、横一文字を放つ。だが、修哉はそれも剣で防いだ。

「とどのつまり、世界はどちらにしても滅びる。遅かれ早かれ、滅

亡から逃れることはできないってことさ」

自分を睨みつける僕を見ながら、修哉は微笑んでいた。

「結論を言え！」

そう叫び、僕は左手から光線を弾き出した。修哉は瞬時に左へと移動し、それを避ける。そして、彼は僕から十メートルほど離れた位置で僕を見据えた。

「俺が滅ぼそうが、お前が救おうが意味は無いつてことさ。違うか？」

「違うに決まってるんだろ！」

僕は衝撃波を伴う一撃を放った。その一撃を剣で防御した修哉は、後ろへ吹き飛んだしまった。わざわざ大きく吹き飛んだのは、衝撃を和らげるために自ら吹き飛んだのだ。

くるりと回転し、着地した修哉は剣を肩に担いだ。

「世界が死ぬのに、どうして救う必要がある？ 星もいずれ滅びるのに、なぜ生き永らえそうとするんだ？ 無意味だろ？」

片手を広げ、彼は苦笑する。

「無意味じゃない。存在する全てのものは、本質的に生きようとしている。そうやって、歴史は創られんだよ！」

「無意味だと思っけどな。どうせ死ぬのなら、今死んだほうがいいんだよ。永く生きれば生きるほど、あらゆるものは多くの喪失と悲しみを感じなければならぬ」

それは一概に間違っではない。だけど、それは必然。生きる上で、必ず経験するもの。そこから逃げていては、本来あるべき姿を見失ってしまうのではないか？

そういった疑問を浮かべた時、修哉は剣を床に突き立て、腕を組んだ。

「結局のところ、お前は自分が生きているこの時代に滅んで欲しくないからこそ、そうやって闘ってるのさ」

僕を見ながら、彼は微笑む。

「そうすれば、どうせ星は自分が死んだ後に滅びる。死んだ後のこ

となんて、どうだつていいんだろ？ 自分が生きている今こそ、生きておいて欲しいだけだろ？ 全てが望むがままにある、今を消し去りたくないだけなんだろ？」

修哉はからかうように言う。それはまるで、わざと僕を怒らせようとしているかのようじ。

「そうじゃない！ 僕は……僕たちは、抗おうつて決めたんだ。星が滅びてしまつていう未来を壊し、新しい未来を創るためだ！」  
ヒトによつて滅びる星を護り、この空の下で笑顔でい続けるために抗う。あの月夜の草原で、そう誓つた。ヴァルバとリサと共に。

その時、修哉はキョトンとした表情で僕を見ていた。かと思つと、腹を押さえて笑い始めたのだ。

「ハハハハ！ こ、これは、お笑い種だな！」

笑い過ぎて、うまくしゃべれていない。僕には、どうして笑うのが理解できなかった。

「……おかしいことなんて、一つもない。なんでお前は笑つていられるんだ？」

僕は彼を冷たい目で見つめる。しかし、彼はそれに気付きながらも笑つていた。

「おかしいだろ？ ヒトに、未来を創る権利なんて与えられてないからさ」

口元を押さえつつ、彼は笑いを落ち着かせるために深呼吸をし始めた。

「お前みたいに世界とヒト、双方を考えてる人間なんてのは、ほとんど存在しねえんだよ」

そして、彼は顔を振る。

「ヒトは、自分のことだけしか考えていないもんさ。そうじゃなけ

りや、自慰や売買、戦争や恋愛なんてのはしない」

どれもこれも、自分を満足させるため

微笑みながら、彼は続ける。

「わかるか？ ヒトはそうするようになってるんだよ。星が誕生し、その心と共に零れた滴 生命が誕生したその時から、生命にとつての宿命カルマとして存在してんのさ」

否定はできない。だが、肯定もできない。それを認めてしまえば、僕たちがここにいる意味が無くなる。意味を求めているわけではないが、それでも認めたくない。

「ヒトは常に誰かを愛し、誰かを憎む。それもまた、定められたことの一部にしか過ぎない」

突き立てた剣を見つめ、修哉は言った。

「寧ろ、俺たちは愛することよりも、憎しみ合うことの方がヒトらしく生きれる。生への渴望を抱いて生命力に溢れるのさ」

「それは違う！ そんなものだけで、今までの世界が構築されてきたって言うのか？ そうじゃないだろ！？」

叫ぶかのように言うと、それを修哉は鼻で笑う。

「さあ？ どうだろうな。お前がどう思うが知ったこっちゃないが、俺にとつてはそうなんだよ。そうでないと、俺たちは生きていけない」

「全部が全部、負の感情だけで生きてはいない。僕たちには、それと真逆なものも必要なんだ！」

すると、修哉は再び笑い始めた。さっきまでのお笑いではなく、含み笑いだ。

「お前、いつからそんな人間になったんだ？」

腰に手を当て、彼は大きいため息を漏らした。

「たしかに、お前はそれに触れ、多くを護つたよ。空ちゃんにしても、海ちゃんにしてもな。だが、果たして絶対的にそうと言えるのか？」

「何！？」

「お前はさ、彼女たちを自分の揺りかごの中に閉じ込めようとしていたのさ」

苦笑しながら、彼は僕を指差した。

「どついう意味だ!？」

「……お前は、そうすることの方が楽だったんだよ。そうやって、お前は自己満足していた」

違う。そんなの違う。僕は、そんなこと思っていなかった。

それを言いたいが、彼の瞳が僕の言葉を抑制させているように見える。

「だからこそ、お前は彼女への想いを封印した。彼女たちを自分の手元に置くことで、独占欲と他者への優越感を満たしていた。そうだろ?」

体が震える。怒りと、理解できない感情が渦巻く。

修哉が僕を否定しているからか?

僕を支え続けてくれた……信頼していたあの修哉が、あの頃の僕を全否定しているからか?

「お前にしても、何にしても同じさ。ヒトはそこに行き着く。正は所詮、奇の一部分でしかない」

冷たい目で僕を見ながら、修哉は微笑む。まるで、幼稚で醜悪なものを見ているように。

「お前……本気でそんなことを言ってるのか!？」

そう言つと、彼はすぐさまうなづく。

「本気さ。俺にとつての真実は、それしかない。ヒトはヒトの心の片鱗を喰らい、凌辱し、壊す。だからこそ、生きていられる」

「なんでそういう風に考えんだ!　なんで、目の前にあるものを見ようとしなんだ!！」

「見ようとしていないのは俺ではなく、お前じゃないのか?」

「僕じゃない!　お前だ!!　お前は、間違っている!！」

僕がこんなにも否定するのは、未だに彼を信じているからか?

「リオン」だと完璧に認識するのが、嫌なのだろうか。

「俺が間違ってるだど？」

僕を一瞥するなり、彼は唾を床に吐きつけた。

「何も知らずに温室で育ち、全てが満たされ続けてきたお前程度の人間が、知ったようなことを言うな」

自分を否定するなど言わんばかりに、彼の瞳は僕を睨みつけ、心に刃を立てようとしている。

「レイディアントを歩き、あらゆることを見続けてきたつもりなんだろうが、履き違えるな。お前には、掌から希望を零した奴らの想いには近付けない。信じ、愛することではか生命を語れねえだろうが」

「！！！」

僕はその瞬間、ティルフィングを振り抜いていた。青い衝撃波が、一直線に彼へと飛んでいく。

「アロндаイト」

修哉は腕を組んだまま、何かを言った。すると、突き立てられていた彼の剣から氷が広がり、彼を包み込む。衝撃波はそれに当たり、轟音と共に塵となってしまう。

「空、お前だけだ」

氷が彼の周りから徐々に消え、姿が見え始める。

「俺の中で、お前だけが信頼できる。お前だけが、俺と同じ位置に立て得る人間だ」

彼は一步前に進み、手を掲げた。

「お前がいたからこそ、俺は一つの希望を抱けた」

僕を見ながら、微笑む。今まで見てきた、優しい彼の笑顔。

「約束したる？ 一緒に、旅をしようってさ」

「えっ……」

忘れていない。小学生の頃、約束した。一緒に、世界を見て回ろうって。

「お前となら、歩いて行ける。俺とお前は、同じ。始まりから、終わりにかけて」

「違う……違う……」

僕は顔を振り続けた。

あの頃とは違う修哉で僕を否定しておきながら、どうしてあの頃の修哉で僕に話しかける。どうして、優しい双眸で僕を見るんだ！

「行こうぜ、空」

そして、彼は握手を求めるかのように、手を差し出した。

彼の言葉は僕の心を揺さぶる。僕の考えや決意を揺さぶられているわけではない、彼の声が修哉だからだ。いつも傍にいたあの声で、あの姿で語りかけてくるからだ。

ボロボロにされた彼の姿が、再び築き上げられていく。

僕の中にある修哉の姿が、重なりつつある。

嫌なのと同時に、怖い。これ以上、彼の微笑みを見てしまうのが。

「空さんは同じじゃない!!」

紺碧の地に、少女の声が木霊する。声の主の方へと、僕は顔を向

けた。

「空さんは、あなたが言っているような『ヒト』じゃない！　あなたと……一緒にしないで！！」

彼女は、修哉を睨みつけていた。あの、空が。

「お前と一緒にくたにされちゃ、ソラが困るだろーが」

と、レンドはため息を漏らしながら言った。

「あなたとソラさんは違います。間違っているのは、あなたです。怖いはずなのに、アンナは修哉を指差した。」

「お前みたいに黒に塗り潰された人間がいれば、白いのがほとんどの人間だっているんだよ。そのところ、よく考えな」

顔を振り、デルゲンは言った。

「な、何でもかんでも憎めばいいってもんじゃない！　僕たちは、一緒にいて笑ってられんだ！」

なぜか、シエリアは腰に手を当て、偉そうに言っていた。声が震えているくせに。

「……ホント、おめでたい奴らだな」

修哉は顔を振りながら、長いため息をした。

「とはいえ、お前たちが言っていることも正しいのかもしれないが」  
「……………」

あれだけ自分の意思を謳っておきながら、他人の意思を正しいと言うのか？　僕には、いまいちそれが理解できなかった。

「本来、物事は正しいのかどうか分からない。ヒトを騙すことにしても、傷つけることも、殺すことも」

彼は上空の青空を見上げる。

「世界にとつての正義なんて、必ずしも自分たちの正義に直結しない。悪だけが、ヒトを穢すとは限らない。ヒトの形が違うように、そういう抽象的なものも千差万別。ある意味では、それこそが命としての真実なのかもな」

そして、彼は僕に視線を合わせた。

「だから、誰にも　俺にもわからねえんだよ。俺やお前がしよう

としていることが、本当に正しいのかどうか」

それは何にだって当てはめられる。どうして命を殺すことは間違いないのか。どうして傷つけることの中には合法なものもあるのか。

それは所詮、ヒト自身が自分たちを抑制し、護るために創り上げた檻。法でしかない。その中でしか、今のヒトは生きていけないのかもしれない。

「存在し、存在しようとするもの全ては、遙か時の彼方から紡がれている軌跡の欠片。俺たちもまた、その中であがいているだけなんだな」

苦笑しながら、彼は言った。

「殺し合い、か……。所詮、俺たちも醜いと蔑んでいる奴らと同じ方法でしか、わかり合えないんだな……」

彼はそう言うと言分の剣を握りしめ、床から引き抜いた。そして、血を払うかのように一振りし、僕を見据える。

本当に……修哉は滅ぼし、滅ぶことを望んでいるのだろうか。

昔からそうだった。自分のことはほとんど話そうとも、見せようともしない。それは、ただ単に僕たちが頼りないからだと思っただ。

時折見せていた、修哉の暗い笑顔。空虚に見える瞳。

あれらが、リオンとしてのあいつだったのだろうか。

ガイアでのあいつは、本当に偽りでしかなかったのだろうか……。

## 80章：カルマ 冥道への慟哭「3」

「さーて、行くぞ」

彼の言葉で我に返ると、修哉は上空へ大きく跳躍した。

「吼えろ、白夜の主 アロンダイト！」

修哉の持つ剣が、氷のような光を解き放つ。そして、まるで吹雪を纏うかのように、刀身の周囲を無数の何かが高速で回転している。

「おらあー!!」

修哉は空中で剣を振り抜いた。衝撃波が、冷気を伴ってこちらへ向かってくる。僕はそれを前進して避け、修哉へ向かって剣を振り抜き、衝撃波を飛ばした。

「もういつちよお！」

修哉は笑いながらその衝撃波へ向かって、冷気の衝撃波を飛ばした。2つの衝撃波は空中でぶつかった。すると、そこに巨大な氷の玉ができてしまった。まるで、氷のうにみたいだ。

修哉は降り立ち、僕に斬りかかる。そして、僕たちの剣がぶつかり合った。奴の剣が動くたびに、肌を刺すような冷気が飛んでくる。「そろそろ、やばいんじゃないのか？」

つばぜり合いをする中、修哉はほくそ笑みながら言った。その時、カチカチと変な音が聞こえてきた。そう、僕の肌が少しずつ凍っていつているんだ。肌だけでなく、剣を握り締めている手さえも。

「長いことアロンダイトの近くに居続けると、勝手に凍りつくぞ？」

修哉は嘲笑いながら言った。僕は瞬時に後ろへ移動し、距離を開ける。そこから、光線を弾き出した。

「んなもん効かねえよ」

彼は光線に対して切っ先を向ける。光線がそれに当たった瞬間、あっという間に凍りついてしまった。すると、修哉は連続して剣による衝撃波を飛ばしてきた。

「ちつくしょー!!」

僕は素早く移動しながらそれを避け、印を結んだ。

「破滅の旋律、我が膝下に在りし言霊を喰らえ……」

移動しながら禁忌聖魔術を行うのは疲れるが、やってみるしかない。黄色い光が、僕を包み込もうとしていた。

「馬鹿が！」

修哉は僕の方へ直進しながら、手を前に出した。

「アンチ・マジック！」

その瞬間、僕を包んでいた黄色の光が弾けて消えてしまった。

「!?!?」

「うらあ!?!」

冷気を纏った修哉の攻撃が、僕に襲いかかる。それをティルフィングで防ぐと、修哉は瞬時に回転し、そのまま斬りつけてきた。僕はバック宙しながらそれを避け、回転する最中に、至近距離で衝撃波を伴う横一文字を繰り出した。

この距離では防げず、彼は低空で吹き飛んだ。すると、剣を床に突き立て、すぐさま立ち上がる。そこへ追い打ちをかけるために追撃をしようとした瞬間、僕の胸元から血が噴出した。

「なっ!?!?」

切り裂かれた部分の周囲に、血に塗れた氷が張りついている。

そうか、僕が剣を振り抜いた瞬間、彼も剣を切り上げていたんだ。「俺より身体能力が劣っていた割に、なかなかだ」

傷口を抑える僕を見据え、彼は左腕から流れ出る血を舐めた。

……アムナリアの血を受け継ぐとはいえ、調停者である僕と互角

？ いくらカインの末裔だとしても、直系のヴェルエス家に敵わないはず。

「氷の刃　アイスベルグストーム」

修哉は氷水魔法を発動した。冷気が上空を覆い、そこから無数の氷柱が降り注いできた。そして、彼は逃げ場を無くすためにあちこちに衝撃波を飛ばした。

僕は自分の真上の氷柱に対して衝撃波を飛ばして破壊し、そこから上空へと逃げた。だが、既に目の前には修哉がいた！

「まだまだ！」

「くっ……！」

空中で剣を何度も交叉させる。

やはり、これはおかしい。聖女サリアの末裔ならまだしも、傍族の傍族でしかないアムナリアの末裔が、ここまでできるはずが無い。

修哉が類稀な天才だからか？ それだけではない気がするのなぜだ？

すると、彼は攻撃を防ぐ僕に対し、空いていた左手で殴りつけてきた。僕はまともにそれを喰らい、地上へと吹き飛ばされる。

「死ねえ……！」

幾重にも氷の衝撃波を高速で飛ばす。体勢を整えられていない僕は床にぶつかるのと同時に、それらに襲われた。

「……！」

衝撃と想像を絶する冷たさが体中を巡る。僕を中心として、氷の森ができていく。

「終りにしてやるよ！」

氷が砕け散り、僕はその場に膝を付いてしまった。空中にいる修哉の方へ振り向くと、彼は水色に輝くアロングイトを横へ一回転させるように薙ぎ払った。その瞬間、水色の円環がフロアの上空を覆

いつくすように広がる。いや……下から見ると、水色の空になっているようだ。薄い膜が張られているかのようだ。あまりの光景に、僕は目を奪われていた。

そして、その膜はガラスが砕けるようにしてバラバラになり始め、空中に散らばっていった。ダイヤモンドダストとは、こういうものなのか　　と　　思　　っ　　て　　し　　ま　　っ　　た　　。

「アロンドイトの力、思い知れ！」

修哉を中心に、光が煌めく。それと同時に、無数　　目　　で　　数　　え　　る　　こ　　と　　も　　で　　き　　な　　い　　ほ　　ど　　の　　破　　片　　が　　僕　　を　　覆　　う　　よ　　う　　に　　し　　て　　集　　い　　、　　高　　速　　で　　回　　転　　す　　る　　。

「まずい！！」

僕は手を十字にさせ、ソリッドプロテクトと魔法障壁を最大限展開させた。

その時、僕をすり抜ける風を感じた。冷たい、風を。

「まさか……」

腰から肩にかけて、一直線の軌跡が現れた。そして　　真　　っ　　赤　　な　　血　　が　　、　　噴　　出　　す　　る　　。

「リーヴェに堕ちろ、セヴェス」

冷たい修哉の声が聞こえた時、周囲の氷の破片が次々と僕に突き刺さっていく。そして、白銀の爆発が起こった。

「あ………がっ………！」

ソリッドプロテクトを上回る威力……僕はその場に両膝を付いて倒れてしまった。体中に裂傷ができ、血が噴出する。それよりもひどいのは、未だに突き刺さっている氷の破片だ。

だが……

「これで終わりだ。お前の夢も、ここで潰える」

地上に降り立った修哉は、アロンドイトを鞘に入れた。

八八……ここで、終わりかって？

冗談言つな。お前の攻撃なんて……

「くっ……！」

僕はティルフィングを握りしめ、立ち上がった。体から流れる赤い血が、白い床へと落ちてゆく。

それを見た修哉は、顔を振った。

「馬鹿な……あれだけ喰らっておきながら、なんで立てられるんだ！？」

そんな修哉に対し、僕は笑みを浮かべた。

「……やっぱり、お前は調停者じゃないんだよな」

「……ああ？」

ギロツと、修哉は僕を睨みつける。

「なんだかんだ言つて、お前じゃ無理だよ。僕に勝つのは」

体のあちこちから、緑色の粒子が舞い上がる。リジエネレイトが、体を癒す。

「樹の攻撃に比べれば……どうってことないね」

「何　！？」

僕は瞬時に移動し、彼に斬りかかった。辛くもそれを防御した修哉だが、あまりの威力に吹き飛んでしまった。

「まだだ……！」

僕は床に掌を当て、そこに光を発生させた。

「砕け散れ　カタストロフィ……！」

中断させられた禁忌聖魔術を、彼が着地するであろう場所へ発動させた。

「な、なんだと!？」

体勢を整えられていない修哉は、自分の後ろに発生した黄色い魔方阵に捕えられた。それは一瞬にして黄金色に煌めき、土砂と共に大爆発を引き起こす。

「ぐおおああ!!！」

修哉の叫び声が響く。僕はそこへ突撃し、ボロボロにされていく修哉に斬りかかった。

「…………お前じゃ、調停者にはなれない」

修哉の碧い瞳が、恐ろしいほどに暗い。

「空…………てめえ…………!!！」

じゃあな、修哉。

僕はティルフィングを横一文字に振り抜いた。後に付いて来るように、鮮やかな血がフロアを彩る。

僕は、修哉の横つ腹を引き裂いた。

「終りなのは、お前だったな…………修哉」

僕はそう吐き捨て、ティルフィングを消した。

たとえ天才であろうと、樹のように僕を動けなくすることはできない。調停者は、調停者でしか消し去れないんだ。

「ぐっ…………ああああ!!！」

声のする方へ振り向き、アロンドイトを振り上げて襲いかかる修哉に対し、光線を弾き出した。そして、彼を祭壇の方まで吹き飛ばした。祭壇は砕け、粉塵と瓦礫が修哉の周りに舞う。

「…………何をしても、もう無駄だ」

僕はそこを一瞥すると、上空を見上げた。

リサ、ヴァルバ……  
今度こそ、終わったよ。  
闘いは終わったんだ。  
これで、もう……。

「ソラさん」

いつの間にか、みんなが周りに来ていた。

「終わったんですか？ 何もかも……」

アンナは修哉が倒れているであろう場所に目をやりながら言った。

「ああ、終わったよ。全部」

僕は彼女に笑顔をして見せた。

「……………」

「どうした？」

アンナはどこか怪訝そうに顔を俯かせていた。

「いえ……何でもありません」

彼女は作り笑いを浮かべ、顔を振った。

「治療してあげますね」

「え？ あ、ああ……頼む」

彼女は手を広げ、魔法を唱え始めた。

アンナには、何か疑問でもあるのだろうか？ まだ、やり残しているようなことがあるのか？

ダメ

「え？」

何かが、心の中で囁いた。なぜかはわからないけど、心拍数が上昇していくのがわかる。

兄様

兄様？ 君は……誰だ？ 心を揺さぶる、君は……

お願い、もうやめて

「終わりましたよ」

アンナの言葉に、僕はハツとした。

「え？ もう？」

そう訊ねると、アンナはこくりとうなずいた。僕は自分の体を見渡し、それが本当なんだと認識した。

……本当に、治癒専門の巫女 「斜光の巫女」の力つてのは、すごいんだな。死なない限り、完全に治療できてしまうのではないだろうか。

僕はじーっと、アンナを見てしまった。

「？ どうしたんですか？」

と、彼女は顔をかしげる。

「いや、なんでもないよ」

アンナもまた、聖女サリアの末裔なんだよな。二千年の間に、グラン島から出てしまった人の子孫ってことか。……不思議なものだ

よな、こうしてサリアの力を行使してるってのは。

「これから……どうするんです？」

そう訊いてきたのは、空だった。修哉はこれ以上動けないし、とどめを刺す必要もない。再びアトモスフィアを封印するにしても

「そうだな……とりあえず、この天都をもうちよつと搜索した方がいいかもな」

「？ どうしてですか？」

「……ここなら、もしかしたらシリウスたちの」

その時、瓦礫が崩れるような音が聞こえた。そこに目をやると、修哉が震えながら上半身を起こしていた。

「ぐっ……ぐっ……！」

歯を食いしばり、彼は何とか立ち上がるうとしている。

「くそっ……くそ……！ ここで……ここで死ぬわけには……  
っっっ！！」

修哉は大量の血を吐きだした。そこに、真っ赤な湖が広がっていかのようになり、

「修哉、もうやめろ」

僕は自然と、その言葉を発してしまっていた。どうせ、彼には届かないのに。

それでも、修哉は立ち上がるうとする。そうやって血を吐き、すぐに倒れ込んでしまう。

「お前に……」

修哉は激しく呼吸しながら顔を上げ、顔を振った。

薄らと見えた。

光を受け、水面のように瞳が揺れているのを。

「ど……して、お前は……の世界で、生きられなかった……！」  
何を言っているのか、わからない。誰に對していつているのかもわからない。彼は崩れかけた祭壇に手を伸ばし、それに寄りかかるようにして立ち上がった。だが、足は大きく震え、今にも崩れてしまいそうだ。

「俺、は……お……前の……」

修哉は、再び大量の血を吐き出した。それは、祭壇とセレスティアルに降りかかってしまった。

あまりにも痛々しい。思わず、僕は目を背けてしまった。

「修哉、もうやめろ。お前は、もう」

その時、このフロアを閃光が駆け巡った。

修哉の方へ目をやると、セレスティアルが激しく回転し始めていた。それと共に、電流がその周りを駆け巡っている。

「！？ な、なんだ……！？」

「こ……これは……？」

すると、祭壇に置かれてあったのか、聖剣と聖杯、そして聖玉が淡い光を放ちながら、空中へ上昇した。ゆっくりと移動し、セレスティアルの前に停滞する。

「……？」

僕は、何がどうなっているのかわからなかった。だが、修哉は何かを感じ取っているのか、震えながらセレスティアルを見ている。

「そ……そうか……これ、が……最後の鍵……だった、のか……！」

修哉は不気味な笑みを浮かべながら、セレスティアルに歩み寄った。彼の右手には、祭壇の破片　　みたいなものが握られている。

「ク、クククク……」

彼は顔を振りながら、セレスティアルに触れた。激しい電流が、彼の周りにほとばしる。

「あらゆるものを見、あらゆるもの愛してきたためえならわかるんだろ？　俺もお前も……同じだってことを……！！」

答えるはずの無いセレスティアルを、目を見開いて彼は何かを言っている。

「修哉……お前、何を……？」

そう呟くと、それを聞き取ったのか……彼は、僕の方に視線を向けた。そこには、あの瞳は無い。鮮血のように、真っ赤になっている。

背筋に、妙な悪寒が走る。

「捧げてやるよ……俺の……　滅んだ神々の血　をなあ！！」

そう叫ぶと、彼は尖がった破片を自分の首に刺した。

「！？　修哉！！！！」

そこから大量の血が噴き出し、空中に浮かんだ3つの鍵に振りかかった。すると、聖玉が一瞬、発光した。円を描いた淡い、黄色い光がパアッと修哉を包みこむ。

「グッ……くっ……　ククク、ハハ……　ハ、ハハハハ！！！！」

修哉は口から血を吐きだしながら、笑い始めた。両手を大きく広げ、噴水のように出ていく自分の血を浴びながら。

聖玉は大きく上空へ昇り、円を描いて回転し始める。そして、聖剣の鏢へと吸い込まれるかのように、飛んで行った。そこにあった穴らしき所に、聖玉はピッタリとはまった。

「!!! まさか!」

僕はようやく、何をしようとしているのかわかった。

「止める! 修哉!!!」

あいつは……修哉は、口キを復活させようとしている!!!

「よせえ!!!」

「もう遅い! 俺は……俺、はああ!!!」

僕は、足を動かした。それと同時に修哉は聖杯を握り、それにあつた赤いものをクツと飲んだ。光に包まれた、自分の血を。

「修哉アア!!!」

その時、光が溢れた。そして、巨大な爆発が引き起こされた。

## 81章：堕ちた願い 遙か深淵への旋律

あまりのまぶしさで、僕は視界全体を手で覆った。長い、長い発光が続く。

「修哉……!!」

すると、少しずつ、光が引いていった。波が引くように少しずつ、少しずつ。ようやく見えてくると、そこには祭壇はなく、セレスティアルだけが何事もなかったかのように佇んでいる。その近くには、爆発でできたであろうクレーターがあった。粉塵がその辺りを覆い、修哉がいるのかどうか分からない。

「空」

その声は、修哉だった。それと共に、粉塵が収まっていく。そこにいるのは

「……お前は……？」

赤紫の長髪は、波打つように背中へと流れている。上半身は裸で、右肩に何かの紋章が刻まれている。

「なあ、見てみるよ」

言葉を放ち、そいつは僕に顔を向ける。

鮮血の双眸。血塗られたかのように紅い、人とは思えない瞳。全ての人の心を切り裂こうとする、冷酷な眼差し。

……修哉？

「これが、俺か？ この姿が、ロキとしての……闇の調停者としての姿なのか？」

修哉は自分の掌を見つめる。それが、本当に自分のものなのかどうかを確かめるように。

その時、修哉は目を見開いたまま微笑み始めた。クスクスと、周囲に笑いが零れている。

「そうか……ああ、そうだな。俺は……ユリウス、お前と同じだ」  
顔を振り、彼は手を掲げた。

「二千年という長い時の中で、お前はずっと待ってたんだな。……この世界を殺す、自分の子孫が現れるのを」

赤い光が一瞬、その掲げられた手に集う。何度も何度も発光し、修哉の体を包んでいく。

「ようやく、『審判』<sup>ジャッジ</sup>を下せる権利を得たってわけか……。シリウスによつて、ここに封印されてたもんな」

手を下ろし、修哉はセレスティアルを見つめた。そこには、まだ微かに修哉の血が残っている。

「これで、俺はお前と一緒になれたよ」

修哉は僕の方に向き直ると、口元を歪ませた。凍りつくような、殺意に満ちた微笑み。

「お前……修哉なのか？」

なぜ、こんな馬鹿な質問をしたのだろうか。未だに、現状を把握できていないってのか？

「ああ、そうだよ。俺はリオン……柊修哉。姿形はこんなに変わってしまったが、俺だよ」

自分の体を見渡しながら、彼は言った。

「それにしても……」

修哉は呟きつつ、手を大きく広げて息を吐きだした。それはまるで、快感を得ているかのように。

「なんていい気持ちなんだ……。不完全だった色が、一つに統一された気分だ。そして何より、二千年分の知識を得るといっものは、こんなに心地良いものなのか」

修哉の筋肉が躍動しているのがわかる。それが、ひどく気味悪いものだった。

「そう、俺は神になった。星によって選ばれたヒトとは違う、異次元の神々によって権利を与えられたヒト。この次元に存在する、全てのものを超越せし存在にな」

彼は再び、僕に視線を移した。そこには、不気味な笑顔が浮かんでいる。

「神……？ そんな力を持っている奴が、神だったのか？」

神じゃない。あそこまで禍々しい威圧感を放つ存在が、神なわけ無い。畏敬されるべき存在なのかもしれないが、あいつは違う。

恐怖しか与えない、絶対的な悪。

「何言ってるんだ……。お前だって、そうだろう？」

修哉は首をかしげていた。

「調停者は、物質が得てはならない権利を持つ存在。そもそも、物質として存在してはならない、異端な生命。俺もお前も、共に破壊することしか能の無いヒト。太古の時代のように、世界が歩むべき道を狂わせる元凶さ」

「この力が破壊するためだったのか！？ なら、ロキだけで十分なはずだ！ バルドルが存在するのは、別の道も存在するからだろう？」

そうでなければおかしい。わざわざバルドルとしての力があるというのには、理由があるからだ。

「じゃあ、どうしてお前は人を殺してきたんだ？」

「え？」

修哉はため息を漏らす。

「お前はここまで来るのに、障害となった者たちを殺していった。それが『破壊』ではなく、なんだと言うんだ？」

違う……そうじゃない。僕は、殺したかったわけじゃない。

「やむを得ない場合だって……ある。僕だって、好きで殺し合っているんじゃない！」

「それだけで済まされるのか？」

クスクスと笑い、修哉は続ける。

「ならば、命ってなんなんだろうなあ、空。軽いのか？ 重いのか？ 『障害となったから、理想のためには止むを得ない』。そうやって切り捨てれば、気持ちとしては楽だからなあ！」

彼は口を大きく開けて笑い始めた。

「くっ……！！」

僕は歯を食いしばった。ここで激情に任せ、動いてはならない。

あいつはわざと、僕の冷静さを失わせようとしている。

「露と消え、露と消えぬるは我が身……そう、俺たちは全てを滅ぼし、己もこの星と共に消えさるべき。そうすることで、遙遠なる夢は果たされるのさ」

すると、修哉は床から少しだけ浮かび、そのまま停滞した。

「さあ、一緒に消えようぜ……空」

彼は右手を掲げた。そこに白い光が集い、何かを形作っていく。

見る見るうちに、十字架 いや、逆さ十字のようなものになった。あれは、聖剣エクスカリバーか！？すると、修哉は猛スピードで僕に斬りかかって来た。

「なっ ！？」

あまりにも攻撃が早い。自分の身の丈ほどある聖剣を、彼は高速で振り回す。僕はそれを防ぐのに精一杯だった。

奴の横一文字を何とかしゃがんで避けると、僕は剣を振り上げる際に交戦も同時に弾き出した。斬撃は奴に当たらなかったが、光線は命中し、奴を空中に吹き飛ばした。

「喰らえ！！」

僕は瞬時に衝撃波を飛ばした。

「疾風の帝王、ガヴァルゲノス」

攻撃を放ったのと同時に、僕の足元に巨大な風の渦が発生し始めた。

まさか 修哉の魔法か！？ 聖魔術を詠唱破棄しやがった！

すぐさま避けたが、その際に左足の部分だけ風に切り刻まれてしまった。そこから、血が噴出する。

「逃さん」

「！！」

長い髪をなびかせ、修哉は僕の頭上から斬りつけてきた。僕は横へ転がることで避けられたが、奴の攻撃は床に直撃し、そこが粉碎した。

「ゲーヴレイグ！」

僕は床を手で押し、わざと吹き飛ぶ中、無理やり風の禁呪を詠唱

破棄して発動した。無数の風の刃が、修哉の方へと飛んでいく。

「無駄だ！」

修哉の持つ聖剣が一瞬にして光の盾となる。そして、修哉は左手を振りかざした。すると、僕の頭上からいくつも光の槍が降り注いできた。それらも、聖剣のような形をしている。

「くそ！」

体勢を整えられていない僕は、それをマジックシールドで防御した。だが、それでもかなりのダメージを受ける。

「白き断罪　ヴァイスノヴァ」

追い打ちをかけるように、光の爆弾が降り注ぐ。それらは僕に当たると発光と共に小爆発を起こし、炸裂していく。そして、最後の巨大な爆発が引き起こされ、僕はその場にめり込んでしまった。

「や……ろお！！」

足が震える。詠唱破棄をしているのに、奴の聖魔術の威力が凄まじい。すでに、足にきてしまっている。

「スゲエな……使っても使っても、疲労感が無い。これは、セレスティアルと同化していたせいかな？」

自分の手を、彼は訝しげに見つめた。

「さすが星の遺産……あらゆるものの源となりし、星の心だな」

そして、修哉は僕を見て微笑んだ。

「お前は完璧な調停者だが……俺は、星と交わった調停者だ。敵うはずもない」

「なんだと……！！」

僕はティルフィングを携え、奴の方へと突進した。

「ふん」

修哉は鼻で笑うと、聖剣を空中に放った。それは一瞬にして僕を囲む円環となる。僕はそれを無視して、奴に斬りかかるうとした。

「無駄なあがきだな……」

すると、光の円環が引き締まり、僕を動けなくした。必死にもがくが、微動だにしない。

「さあて」

修哉は右手を掲げて広げた。そこに無数の粒子が集い始める。そして、彼はギュツとそれを握り締めた。指の隙間から、光が漏れる。

僕の視界が真っ白になった。

光の円環は消え、僕はその場に両膝を付いた。それと同時に、体のあちこちから血が破裂するかのように出てきた。

「がつ……！」

何をしたんだ？　そこまで外傷はないのに……体に力が入らない。「力が出ないだろ？」

修哉は腕を組み、見下すかのように僕の目の前に浮かんでいる。

「お前の体内元素を破壊した。元素は力の源……極端にそれが減れば、体は動かせない。それを超えれば、乖離が起きるがな」

聖剣には、そういった能力があるってのか……？

僕は歯ぎしりをしながら、修哉を下から睨みつける。調停者の力を持っているのに、手も足も出ないなんて……！

「……残念だったな。お前の旅路は、ここで終わりだ……」

「……！！」

修哉の右手にエクスカリバーが具現化され、彼はそれを振り下ろした。咄嗟に、僕はティルフィングで防ごうとした。

パキイン

青い刀身が砕け散る。

ティルフィングが……破壊され

「……！！」

そして、僕は後ろへと吹き飛ばされた。起き上がるつもりだったが、自分の身体の傷を見てハツとした。肩から腰にかけて、大きな傷ができていたのだ。それに気が付くと、今まで体験したことも無い痛みが、電流のように響き渡る。あまりの痛みに、僕は声を上げることができなかつた。

「がっ……！！ ああア……！！！！」

呼吸が荒くなった。過呼吸になったように、うまく呼吸ができない。しかも、そこから大量の血が流れ出る。

「空さん！」

「ソラ！！」

みんなが、僕の所へ駆け寄ってきた。すぐさまアンナが治療術を開始する。だが、一向に傷口が塞がらない。更には、リジエネレイトさえも発動しない。

「ど、どうして！？ どうして、治らないの！？」

「わかりません！ まったく効いてないんです！！」

空はパニックになり、アンナは必死に元素を注入している。

「もう無駄さ」

修哉はさっきの位置に浮かんだまま、僕たちを見据えていた。

「空の核エレメンタルを破壊した。つまり、ティルフィング……聖魔の元素の中核。しかも、体内元素も枯渇に近い。治療術による細胞結合なんぞ、意味ないってことさ」

「そんな……！」

それでも、アンナは顧みずに治療術を行う。

「アンナ……もういい」

「ダメです！ このままじゃ……このままじゃ……！！」

彼女は顔を振った。それによって、涙の雫が辺りに散る。

「空さん、しつかり……！」

空は僕の傍で、震えていた。必死に涙を堪えている。

「……デルゲン」

「ああ、わかつてる」

レンドとデルゲンは顔を合わすと、立ち上がって僕たちの前に立った。

「お前ら……何するつもりだよ？」

僕はかすれる声を絞り出し、言った。

「何って、自分らにできることをするだけだよ」

レンドは背を向けたまま、腰に取り付けてあった斧を握り締めた。

「待て……お、前らじゃ……！」

「敵う敵わないって問題じゃないって」

どこか微笑みながら、デルゲンは言ったように見えた。その背中が、そういう風に感じさせる。彼も、槍を取り出していた。

「さて、行くとするか」

レンドはそう言つと、二人は修哉の方へ歩き始めた。

「へえ、お前らが俺の相手か？」

修哉は二人を見渡し、笑いながら言った。

「……少しは、やってやらないとな……！」

「もちろんだ！」

二人は声を掛け合つと、修哉に突撃した。斧と槍が、腕を組んだままの修哉に直撃する。だが

「……！」

斧と槍は、まるで鋼鉄に当たっているかのように、動かない。

「てめえらヒトなんか、この程度さ」

修哉は手を広げた。その瞬間、そこで光が弾ける。レンドとデルゲンは四隅に吹き飛ばされてしまった。壁に打ち付けられた二人は、

その場に倒れた。気を失ってはいるが、相当なダメージを受けたようだ。

「お前らは、空の後に髑り殺してやつからさ」

笑顔でそう吐き捨て、修哉は床に降り、僕たちの方へ歩み寄って来た。

「やめてください!!」

いつの間にか、アンナは修哉の前に仁王立ちしていた。手を広げ、先へ行かせないようにと。

「……斜光の巫女、ね」

修哉は顔をかしげながら、微笑む。そのまま、アンナを平手打ちした。彼女はもののように床に転げていった。

「アン……ナ……!!」

あいつ、見境なしかよ……!!

「ちっ……邪魔ったらありやしねえ」

修哉は床に唾を吐き、再び歩み寄り始めた。そして、僕と空、シエリアの目の前に立った。

「……どんな気分だ？ 空」

そう問われ、僕は修哉を睨みつけた。鮮血の瞳は、余裕の笑みを浮かべている。

「星の遺産は輝きを増し、『約束の刻』はもう目の前だったのに、そこで倒れてんのはさ」

「……………」

僕は返答できず、ただ睨みつける。

「終わりだな、完璧に」

修哉は僕たちを一瞥し、自分の手元に聖剣を具現化させた。金色に輝く、逆さ十字のような剣の切っ先は、僕たちに向けられている。

「……つと、その前に」

「キヤッ！」

すると、修哉は空の腕を掴み、無理やり立ち上がらせた。

「は、離して！！」

空は咄嗟に、修哉のほほを叩いた。

「……相変わらずだな」

それをものともせず、修哉はニツと笑った。思わず、暴れていた空の動きが止まる。あまりにも、冷たい笑顔だったから。

「紺碧……いや、時空か。リリーナの元素をもらったせいだな……」  
空を上から下へ、ゆっくりと見渡す。

「な、何……？」

「星の幼子つてのは、いまいちよくわからないな。サリアの末裔でもなければ、レナの末裔でもない。寧ろ、教皇家に顕れるはずだしなあ」

うーんと唸りながら、修哉は空から手を離れた。彼女はいきなり離されたため、その場に倒れてしまった。

「……君さえいなければ、無為に時間を費やすことも無かったんだけどな」

「えっ？」

彼女が顔を上げたのと同時に、修哉は聖剣の切っ先が向けられた。まずい……早く、空の所に行かないといけないのに……体が動かない。ただ、震えるだけだった。

「星の幼子……生命の運命に関わりし、唯一無二の存在」

「……？」

修哉の言っていることの意味がわからない。あいつは、空のことを知っているのか？

「だから生きていられるつてのか？ ……ふざけるなよ」

修哉は意味もわからず、クスクスと笑っている。そして、あの鮮血の双眸で空を睨みつけた。

「お前はなんで生きてんだ？ ……なんで、お前だけが生きられんだよ

「!!」

空に向けた憤怒の意思。なぜそれが自分に向けられているのかわからない空は、顔を振った。

「何……？ 私が、何をしたって言うんです？」

「何をした？ …… 八八、ちげえよ。俺は、あんたが憎いだけさ」  
左手で目の辺りを覆い、修哉は首を振る。

「ただ、そうであるからという理由だけで…… お前が生きてるからだ。命の重さが、定められてるからだ!!」

そう吐き捨て、修哉は天を仰いだ。

「完璧に平等な世界なんて存在しない！ 遠い昔から定められてるのなら、何のために存在してんだ！」

わけがわからない。あいつは、何を言いたいんだ……？

「殺してやるよ」

再び空に視線を戻し、修哉は剣を引いた。

「やめろ!!」

その時、シエリアが修哉の腕に噛みついた。恐怖を顧みず、空を護ろうとしている。

「……ガキが」

まるで虫を払いのけるかのように、修哉はシエリアを平手打ちした。横に吹き飛ばされたシエリアは、そのまま気を失ってしまった。

「修哉！ お前……!!」

思わず、僕は声を上げた。

「黙ってる。お前はもうどうすることもできない、屑さ」  
放り出された玩具を見るようにして、修哉は言った。

「さて、覚悟はできたかい？ 空ちゃん」

「い……嫌……！」

空は手を動かし、後ろへ逃げようとする。しかし、彼女は恐怖で震えてしまい、うまく動くことができていない。

「ハハハ、怖がるなって。あつという間だからさ」

聖剣をゆっくりと引く。その切っ先が、白く煌めく。

「お前の代わりに星の愛を受けられなかった者たちのために……」

「こで死ねえ……！」

「いやあああ……！」

「空アア……！」

身体の筋肉が切れていく。千切れていく音が、細胞の中で始める。絶え間の無い、赤い血が流れていく。僕の体は無理やり動かされ、そこへ向かう。

息が止まったような感じがした。

「空……さん？」

傍で倒れている空が、僕を見つめる。

「……馬鹿が」

目の前にいる修哉は僕を見下ろしながら、ため息を漏らした。

体を貫く、白い線。それは、他らなぬ聖剣の刃。

あーあ……ったく。

また、同じことをやってしまったよ。

「そ、空さん！」

彼女は目を見開き、それを見ている。

「……いくら強力なりジエネレイトがあっても、追いつかな」

修哉は凍るような瞳で僕を見つめ、ゆっくりとエクスカリバーを引き抜いた。その瞬間、せきを切ったかのように血が流れ出てくる。

「空さん……！」

空は倒れようとする僕の体を支えた。血が流れ出るのと同時に、僕を維持しようとするエネルギーが消えていく。最早、体を支えておくことさえできない。

「空さん……空さん！」

僕の大量の血なんて気にせず、彼女は必死に傷口を押さえようとする。

この様子だと、大丈夫っぽい。そんなことを思いつつ、僕は小さく微笑んでしまった。

「無事……みたい、だな……」

声あまり出ない。自分の中から、何か絶え間なく抜けて行くのを感じる。それと同時に、もう自分はどうにもならないのだと……確信した。

「ダメ……空さん、どうしてこんな……！！！」

既に多くの涙をこぼしている彼女は、それでも必死に血を止めようとしている。

「どうして……って、そりゃあ……」

わかりきってることなのに、なんでいちいち質問するのかな。まあ、こんな時でないと言えないのかもしれない。

「お前が、大切……だからな」

僕はフルフルと震える手で……血塗れの指で、彼女のほほに触れた。

疑う余地の無い、僕の真実。あの日見つけた、一番の宝物。これを見失うことは、自分を見失うことに等しい。

「空……さ」

彼女の瞳が揺らぐ。瞬きもせず、口を半開きにしたまま僕を見つめている。

何かを悟ったような双眸

彼女の下に、一つの宝石が舞い戻る。

「……空……」

彼女は僕の名を呼び、小さく顔を振った。今まで僕を呼んでいたようなものではない。あの頃と同じ　　ガイアの頃と同じように、僕の名を呼んだ。

「そ、ら……お……まえ……？」

彼女は、小さくうなずく。

「……私、思い出せたよ。あなたと過ごしたこと……全部」

空は微笑み、僕の顔に触れた。

白い指先。天使のような、優しい温かさ。

「そっか……よかつ……た、これで……」

海のこと、家族のこと、思い出せたんだ。ようやく、お前はあの頃と同じに戻れたんだ。乖離する心配もないんだ……。

「空！　ダメだよ……しっかりして……！」

崩れかけそうな僕の体を、彼女は支える。

「……ハハ、泣き過ぎ……だよ……」

「こんな時に何言ってるのよ！　お願いだから……」

僕はそのまま、空を抱きしめた。たぶん、これ以上は動けないだろう。

「空……？」

「……お前と、出逢えて……よかつた」

心からそう言える。

14年前、お前と出逢えて……本当に良かった。

「そんなこと言わないで！　私を一人……一人にしないで……！」  
僕の体を、彼女はギュッと抱きしめる。

「ごめんなあ……約束、守れ……そうじゃない……」

「そうよ！　一緒にいるって約束したじゃない！　私を残して……逝かないですよ……！……！」

嗚咽を混じらせ、彼女は言う。彼女が記憶を取り戻したとたん、これだもんな。泣いてしまつのも、しょうがない……。

「……好きだ……」

ああ、なんでこんなことを言ってしまうのか。普段は恥ずかしいから言わないはずなのに。すると、

「私も同じだよ」

彼女はそう言い、さらに僕を抱きしめる。

「空が好きだよ」

それを聞いて、よかった。

ありがとう。

「…………ら…………」

僕の言葉が聴こえているだろうか？ もつ、何も聴こえない。自分が言葉を発しているのかさえわからない。

「何……？ 聞こえないよ！ 空………ねえ、空？」

………ありがとう………

まぶたが閉じた。目の前が、真っ暗になった。

僕の言葉……彼女に辿り着いただろうか？

ちゃんと、その手元に届いただろうか……

願わくば、泣かないで前を向いてほしいな……

あいつ、泣き虫だから。

「空？」

空は身体を離し、彼を見た。すでに目を閉じ、体には力が無い。まるで、ただの人形のように。

「空……空！！」

空は彼の体を揺らしながら、何度も名を呼ぶ。何がどうなっているのか、その心の奥では悟っているのに。

「ねえ……返事してよ……ねえってば！」  
返事は無い。

彼は、死んだ。それだけは、認めたくなかった。

「嫌……よ、そんなの……」  
反応を示さない、彼の体。体中にある傷から、血が流れ出てくるだけ。

「嫌……私を……一人に、しないで……」

彼女は顔を振る。今、目の前に広がる現実を否定し、そこにある絶望から目を背けるため。

彼の顔に自分の顔を付け、空は願いを届けようとする。

冷たい。

どつにもできないのだと、改めて実感する。

「どつして……目を開けてくれないの……？」

そう言っても、空のまぶたが開くことは無かった。眠るかのよう  
に、彼の顔は穏やかだった。

「そ……ら……そらああ！！！！」

魂の無くなつた器を抱きしめながら、彼女は叫んだ。いつも見上げていた青空は冷たく、何も応えてくれないこの紺碧の間で。

その時、彼女から何かが立ち込める。淡い光が、彼女から立ち上る。虹色に輝くそれは、オーロラのように揺れている。

「これは……！？」

修哉はつい、漏らした。見たことも、感じたことも無いエレメンタルの波動。それは、彼に少なからず恐怖を与えていた。

「まさか………？ いや、違う……レナか……！？」

彼の中に、抽象的な答えが膨らんでいった。それが正しいかどうか分からない。だが、彼の胸を揺さぶる「これ」は、奴のものなのだとしたら……。

「空……嫌だ………空アアア！！」

泣き崩れる少女。そこにあるのは、虚無と絶望のみ。

ただ、叫ぶしかなかった。そうすることでは、現実を霞ませることができなかった。

「ソラさんが……嫌………そんなの………」

アンナは現実を直視できず、小さく震えていた。震えは徐々に大きくなり、それと同時に現実がおい寄せてくる。

「死んじゃ……やだよ……ソラ……!!」  
シエリアの瞳に浮かんだ涙は、小さくその場に落ちて行った。

「くそっ……!! 死ぬなんて……許さねえぞ……!!」  
レンドは小さく歯ぎしりしていた。悲しみを受け止めたくないがために、偽りの怒りを呼んでいた。そうすることでしか、逃避することができない。  
それは、自分でも理解していたのに。

「くっ……ダメだ。このままじゃ……どうすることも……!!」  
希望を失ったことにいち早く直視したデルゲンは、どうしようもできない絶望感に打ちひしがれていた。  
これから……どうすりゃいいんだ!  
ソラがないのに……どうやってリオンを……!!

リサ……ヴァルバ……!!

## 82章：有と無 正と奇

気が付けば、辺りは真つ暗だった。

いや、正確には真つ暗じゃない。上も下も、右も左も、夜空が広がる。星屑の光が、辺りで煌々と輝いている。そのためか、今自分が下を向いているのか、上を向いているのかわからない。

ちよろちよると、小川を流れる水の音がどこからともなく聴こえる。どんなに見渡しても、水らしきものは見当たらないのに。

ここは……一体どこなんだろう。

「確実に、生きている世界じゃないのは確かだ。」

あの時、僕はたしかに消えた。死んだ。

確かな事実。

「死んだんだな……とうとう……」

来るべきであろう未来。逃れることのできない、確実に訪れる未来。

「じゃあ、ここは……リーヴェ……か？」

聖域リーヴェ

聖域とは名ばかりに、怨念渦巻く失われた次元。2つの世界どころか、あらゆる次元からも隔離された場所。

僕は底に沈んでいる。

ただ、ただ沈んでいるだけ。

僕にはもう、何も無い。この掌には、何も残されちゃいない。あ  
るのは、己の意識のみ。肉体という器さえ持たない、ただの幻影。

「なあ、ソラ」

声がした。後ろへ振り向いても、そこには誰もいない。遙か彼方  
まで続く、星空だけ。

「俺はどうしたらよかったんだ？」

この声は……ヴァルバ？ どうして、死んだはずの彼の声が聞こ  
えるんだ？

「俺は国とリノアン、どちらを選べばよかったんだ？」

声のみが届く、暗い世界。その中で、彼の想いが届けられる。

ここは リーヴェ。

「兄は俺を掬い上げてくれた。父に忌み嫌われ、母を失った俺を」  
そこにあるのは、温かさだろうか。半分しか血の繋がらない兄か  
らもらった、温かい心。

「皇室の髪を持たぬ俺を、兄は愛してくれた。家族として……」

ああ、わからないよ。ヴァルバ、僕にそれを言っただろうって  
言うんだ？

「国を愛し、民を愛した兄上……。戦争に奔走する国を、変えよう  
とした」

だから、平和を愛したのか？

「そうさ。……だけど、俺はリノアンと出逢ってしまった。あまり  
にも美しすぎる、彼女に」

一目惚れ。それは、僕が空に感じたものに近いのだろうか。

「アンナと同じレモン色の髪……聖女とは、彼女のためにありそうだった。苦しむ彼女を、護りたくなかった」

でも……死なせてしまったんだろ？ それだけ愛していたのに……

「ああ、そうだ。俺が兄に結婚の承諾を得るために帰国したせいで……リノアンは……」

なんでだよ。なんで、行っちゃったんだよ？

「お前にはわからない。俺にとっての兄とゼナンは、リノアンに相当するのだから」

僕には理解できない。

「それでいい。お前は、そういう人間だから……」

遠くなっていく、一つの意識。僕に語りかけてきていたそれは、遙か深淵に沈んでしまったのだろうか。

「私もそうだよ」

違う声。僕はすぐにわかった。

リサ？

「ヴァルバに言われたもの。祖国を持たないお前には、わからないって」

その時、その声は小さく鼻で笑うかのように微笑した。

「どうせ、私には祖国なんてものはないさ。……それに値するものは、あいつらに滅ぼされたのだから」

……憎んでいるのか？

「憎しみ……ええ、そうとも言えるわ。だって、あなたに出逢うまで私は、それだけを血肉として生きてきたもの」

本当に、そうなのか？

「私には必要ない。愛も信頼も、何もかも。世界中の馬鹿な人たち

が望むものなんて、いらぬ。ただ、二人を殺せばいい」

ただ、それだけを望んでいたって言うのか？

「そうよ。そうしないと、私は私を形作れない。一つの偶像として、今の私に繋げることができない」

なんでそんな悲しいことを言うんだ？ 僕たちには、愛し合うことだってできるのに。

「何を今さら。いい？ 世界はそんなものを望んでいない。望んでいるのは、見たことも無い理想を掴もうとする人たちだけ。本当のところは、空虚な心を埋めたいって思ってるだけなのよ」

だったら、どうしてヒトには感情なんてものが存在するんだ？

「それが、ヒトとしての責務だからよ。星とヒト、調停者と星の幼子。あらゆるものは対となっていて、それぞれの責務と権利を与えられてる」

責務？ 権利？

生きることは責務でも何でもない。ただ、そうあるだけだろ？

「大きな揺りかごの中に、まるで牢獄に入っているかのように、ヒトは生きるための居場所を奪い合ってる。それもまた、責務の一つなの。だって、それはヒトの持つ権利の一部だから」

奪い合い、憎しみ合う……そうではない。

「この次元に存在する以上、私たちにはそうするしかない。遙かなる理を破壊し、絶対的な希望を得るまではね……」

声は霞んでいき、どこかへと沈んでいく。僕もまた、もっと深淵へ沈んでいく。

「その理を破壊できれば、お姉ちゃんは死ななかつたんでしょか？」

君は……アンナ？

想いだけが、この聖域に溶け込んでいるのだろうか。彼女は、まだ墮ちていないのに。

「お父さんもお母さんも……ステファンに、殺されずに済んだのでしょうか？」

君は、家族を殺されたんだ。過ぎたことは、変えることができない。

「世界は理不尽です。無為に生きる人もいれば、無為に死ぬ人もいます。そこには優しさも、愛おしさも、あらゆるものが交わってる。同質のものであるんですか？ 奇に連なるものは、所詮一つの螺旋でしかないんですか？」

たとえ違っていたとしても、全ては同じだよ。僕たちは、同じ器をもっているんだから。

「同じじゃないです。同じであるなら、なぜ星と命は別個としてそれぞれの道を歩むんです？ ……いえ、もしかしたら……星の道の上に、命の道が敷かれている……？」

それこそ違う。そうだとしたら、僕たちは星に操られているだけだぞ？

「ううん、だからこそ、生命は尊ぶんです。命を」

僕たちは生命として存在する時から、そう思っているんじゃないのか？

「おかしなことを言いますね……。一が二に、果ては十となります。繋がり合う鎖は、どこかで断ち切れるものじゃありません。繋がっているからこそ、私たちは私たちとしてなり得るんです」

誰かは複数の誰かと繋がり、それは連鎖的に連なる。でも、完璧にそうであると言えるのか？

「やめてください！ 私には……私には、そう信じるしかないんです。憧れからそれに変わり、私は近くにいたいって思ったんです。だから、たとえ離れていても……」

涙声に変わろうとした彼女の声は、星空の彼方へと飛んで行った。

言霊渦巻くのは、ここがリーヴェだからか？

でも……不思議と、嫌じゃない。

乾いた大地に、雨が降り注ぐかのように……満たされていく。それは、今まで感じたことの無い至福。

いつかきつと、得られるもの。

「お前なら、どういつ答えを導き出すんだろうな」

男らしい男の声……と言ったら、変だろうか。

「ハハ、そうだな。俺には、大した答えも出せなかつたよ」

レンドは嘲笑するかのように笑っている。自分に対して。

「ずっと、馬鹿みたいに親父に反抗した。それは、兄貴たちに対する感情も、少なからず入ってるがな」

兄？ お前、兄貴がいたのか。

「俺とは違う人種さ。所詮、俺は代用品。兄貴たちがいなくならない限り、利用価値はない」

どこからともなく、ため息が漏れる。

「何が違うっていうんだろ？ 姿形は同じヒトなのに、目に見える権利には、雲泥の差がある。それが今の世界の姿なのか？」

お前は何を言っているんだ？

「ああ、そうだったな。お前は、違う世界の住民だもんな」

そうであるからと言って、何かが変わるってのか？ 僕たちは共通だろ？ 同じじゃないのか？

「同じ？ ちげえよ。既に歩み続けた道筋が違ってんだ。ヒトとして共通するが、世界が違うんだよ」

レイディアントとガイア……お前は、どうしたいんだ？

「変えてやりたかった　というのは、結局のところ嘘なんだろうな。俺は、ただ親父に抗おうとしただけ。自分の意思で、自分の足で歩くために……」

貴族の生まれってことが、嫌だったのか？

「ああ、嫌だよ。こんなくだらない吐きだめ、生きていて何になる？　俺たちは、何も生み出さない。得てして、それは暗い陰りとなるだけ。きつと、最初から間違ってたんだよ」

僕たちもそうだったんだろうか。そうでしかないんだろうか？

「……行き着く先には、深淵の宝石しかない。そう思ってるのは、俺たちが自分を愛していないからさ」

愛していない？　なら、どうして憎み合うんだ？

「そう、愛と憎しみは同じ。生と死が同じように、それらは一つの鏡として輝きを持つ。お前にも見えたんじゃないのか？　ヒトつてのは、俺たちが見定めることのできるもんじゃねえってことをさ」

声は遠くなり、再び僕は孤独となる。

掴み切れていないのは、僕だけじゃない。あらゆるものが、その大きさを測りきれていないんだ。

ゆらゆらと、それは陽炎のように抽象的で、僕たちはもがくだけ。そこにしかない、永遠の歌を聴き届けるために。

「もがいたって、俺たちにはどうしようもない」

一つの光が命を燃やすかのように、煌めく。

デルゲンか。

「二つの希望の雫として、俺たちは大地に堕ちた。それはきつと、望まれたものなんだろうさ」

僕たちは種子……世界に花を咲かせるための。

「花ね……。だが、全てのものが花になるわけじゃない。望んでも

いないのに、それらは朽ちる時だつてある」

変えようの無い真実。拭い去ることのできない、現実。

「わかるだろう？ 一つ一つが個であるように、全てもまた個ではない」

それらが寄り添つて、一つの螺旋を築くのだろうか？

「見えない壁に阻まれ、俺たちはその螺旋の上を歩く。互いに近い道であろうとも、それは虚無的なまでに暗い。その先の明かりを見ることができないんだ」

何を得ようつていうんだ？ その先には、僕たちが求めているものがあるはずなのに。

「だからこそ、壊したいつて願うんだ。その壁を取り払い、それぞれの栄光を掴むために」

そうすれば、自分としては気が楽になるんだろうよ。実際、僕たちは自分のものしか見えない。他人のそれを見てしまえば、否が応でも比較するだろうし。

「所詮、それしか方法はないんだよ。その方が、わりと自然なんだ。自然であるが故に、その軽薄なものを破壊できない」

もっと滅茶苦茶にしてやればいい。そうすることも、僕たちの未来の一つじゃないのか？

「ハハ……そんだけの勇気があれば、俺はここまで沈まなかつたさ。自分を蔑み、弱く見せることでしか自分を愛せない。なら、どうやって他人を愛せつていうんだ？ 自分を愛せない人間が、他人を愛せるわけ無い」

そうさ。僕たちは自分を見極められていない。わけもわからず、ただ安穩と世界を望んでいるだけ。

「なんだ……わかつてるじゃないか。ぐずぐずしていちゃ、宝物を見失っただけさ」

なら、どうすればいいんだ？

「お前がわからないはずがない。ただ、歩けばいいんだ」  
歩く？

「そう、歩けばいい。ただ、歩けば……」

僕の目の前から、それは遠のいて行った。一つの光明が、ずっと先へと延びて行ったかのように。

「でもね、歩くのは辛いんだよ」

幼い少女の声　君は、シエリアか？

「誰だって、後ろを振り返りたくなる。僕たちは、強くないんだもの」

自分たちが歩んできたものは、本当の意味で正しいのか？　自分たちだけの、正しいものにされているんじゃないのか？

いや……どうしてそう考えるんだ。考えたって、しょうがないのに。

「小鳥がさえざるように、僕たちもずっと届けようとしているんだよ。あの虚空に吸い込まれたって、ただ自分のためにね」

自己満足でしかないよ、そんなの。

「ヒトってそうでしょ？　誰かれ構わず、いくら叫んだって形にさえならない。僕たちは、もっと奥……ずっと暗い場所で身構えているだけなんだ」

待つだけか。

「ほとんどは、そういう風になっているんだよ？　そんな四隅に縮こまって、何を求めようとしてんのさ」

その方が楽なんだ、きつと。意思と意志は、互いに相容れないんだから。

「　なぜだろうね、私たちはそれよりも濃くできている」

違う声。シエリアよりも、大人の声。僕と同じ年くらいのこと……。  
「私はあなたを知っている。幼い姿の私を、なでてくれたでしょう？」

「ああ、君もシエリアか。」

「そう……同じであって、同じでない。世界に溶け込んだ私の願いは、ジルフェたちによって構築されたの」

それを君は願っていたんだ。終わりが来ても、再び始まりを迎えることを。

世界の理を、超えることを。

「よく知ってるじゃない。でも、みんなそうでしょ？ どうせ、覆ることのできない希望だとしても、少なからず願っているのよ。誰だって、還りたいと思うわ」

「還る……どこに還るっていうんだ？」

「そこは無でしかないよ。何も無い……何も、残らない。」

「あの人が言っているように、本当に希っているのかもしれない……。傍から見れば、ただそこへ向かっているだけのように見える」

「なら、笑顔でいる必要なんてない。互いに手を取り合うこともしないよ。」

「それは、私たちが望んでいるのよ。同じようにね」

望んでも望んでも、僕の手には収まることはない。ずっと、もがき続けているのに。こんなにも、あいつのことを愛しているのに。

「そう叫べば美しいものよね……。でも、忘れちゃだめよ？ それは、言霊としては美しいけれど、残酷なものなの」

「鏡だからか？」

「そうとも言える。鏡でなかったなら、あらゆるヒトは最初から手に入れていたわ。それでも叶えられないのは、同一だからよ」

「僕はいつを憎んでいるのか？」

「それも違うわ。あなたはそれだけに堕ちたっていうの？ そうだとしたら、ここでの交叉は意味を成さないわね……」

風となつて、それはどこかへと消えた。  
何がそうさせている？ 僕の中に息衝く言霊のせいかな？

「兄さんは愛したいだけなんだよ」

優しい声であり、冷たい声。

忘れないよ、樹。

「いや、何もかもそうなんだ。同じだから 僕も、それを望んで  
いただけだったからね」

そんなこと、一言も言っていないじゃないか。

「言えるわけないだろ？ ヒトには譲られないものがある。それに  
連なるからこそ、僕たちは一個としてなり得るのさ」

だからこそ、僕はそれに羨望の念を抱く。

「僕もそうさ。ただ単に、そうでありたいってね。……でも、違う。  
僕が求めるものと、あなたが手にしようとしていた夢の形は、全く  
違うんだ」

そりゃそうさ。なんでわからない？

「あなたは手にしていたからさ。ずっと傍にあり続けながら、永久  
に忘れかけようとしていたもの。多くのヒトたちのそれとは似てい  
るけれど、よく見てみれば違う。僕たちのようにね」

お前は、何を考えていたんだ？

「考えようが考えまいが、遠くにあつたんだよ。ここに墮ちれば、  
それは太陽のように見えるだけ」

憧れだけでは、何もできないよ。自分から進んでいかなければ、  
何も変わりはない。変わることが怖いのか？

「変わらないことは安穩であり、変わることは希望か絶望。でもね、  
そこには別の解釈もあるんだ」

解釈？

「ヒトとしての意義だよ。汚いけれど、そうしなければ僕たちは僕たちとしての姿を保てない。今を、望めない」

そんなことを言うなよ。そういうことばかり言っても、誰も振りむいちゃくれない。

「いいんだよ。僕が見たかったのは、そこにある歪んだ愛なんだから」

いつだって、誰だってその奥には存在する。

「果ては、結局のところリーヴェなんだね……。父上も母上も、共に夢を糧として眠っているだけなのに」

そこにあつたのは、愛だけだったのか？

「狂おしいほどに、愛せるわけじゃないさ。どこかで、気付くんだよ。それは、ただの茶番でしかないってことをさ」

道化師か？ 僕たちは。

「そう……星や、上位次元の奴らにしてみればそうだろうさ。その揺りかごの中で、狂乱の宴を繰り返す亡者……ああ、堕ちちゃえばいいのに。僕も……あなたも」

そして、言霊は水が引くように消えていった。

お前は僕を怨んでいたんだろうか。そうでなければ、傍に居続けられなかったんだろうか。

「所詮、あいつらなんてそんなもんさ」

馬鹿にしたような声 修哉？

「考えてもみるよ。何もかもが、そこに渦巻いている。虎視眈眈と、お前の糧となるものを奪おうとしている」

どこかで傷つけ、どこかで怨まれていたんだろうな。

「理解してんなら早い。一つ一つに宿っているそれは、はからずも散っていく。どうしようもできない願いは、永遠の円環へと引きずり込まれる」

始まりの時から紡がれていたんだ。それを穿つことは、僕たちに許されていないんだ。

「いいや、違う。俺の全ては、俺だけが定められる。どこその次元で覗いてる奴らなんか、決められてたまるか！」

何言ってるんだ？

僕たちは僕たちだ。それ以上でも、以下でもない。

「言っただろ？ お前みたいに考えられるのは、寧ろ特殊さ。愛でも希望でも、それは砕かれて散った欠片でしかない。それを拾い損ねたから、俺たちは未だに彷徨ってるのさ」

リーヴェへ辿り着くことは、何もそうであるとは限らない。愛しちやいけないってのか？

「好きにすればいい。俺も、お前と同じように愛していたんだから遠くに光るそれは、お前のためのものなのか？」

「……そうであつたなら、俺は最初から壊そうとしなかった。それを握りしめ、抱きしめることができていたなら……俺は、何もいらなかったんだ」

先に……見えていたのか？ 未来に。

「さあな。見えているとしたら、俺はこんなにも欲していない。温かい木漏れ日を探すかのよう、ただ迷宮を歩いているだけさ」

お前が言うそれが本当なら、無為に奪う必要もないだろうに。「世界がそれを望んだんだ。星ではなく、この世界がな」

星と次元……別個に考えるしかないってのか？

「当たり前だ。ヒトの愛も、星の愛もただのお遊戯でしかない。弄ばれているだけの俺たちは、気付くべきだったんだよ」

気付くにしても、何にしても……最初からそうなっていたじゃな

いか。なのに、なんでそうしようとしらないんだ？

「触れてしまえば、壊れる。お前と違って、俺にはそれだけの勇気がなかったんだよ」

勇気……？ 僕には、そんなものないよ。

「いいや、あるさ。お前は歩もうとしていたことから消し、一つの軌跡としてそれを選んだ。変わらぬものを変えようとしたのは、掌の中に虹色の種があるからだ」

じゃあ……僕は、最初からそうしていたのか？

「俺にはわからないし、認めたくもない。俺は憎むだけだから」  
なんでだよ？

「お前が……空ちゃんが、それを持っているから。お前たちだけが、星の愛を享けているからだ」

お前の言っていることの意味がわからない。

「そうさ、お前はそんなものだよ。俺の憎悪も、欲望も、羨望も

何もかも、お前にはわからない!!」

そうすることで、お前は何を得ようとしているんだ？

「ハハハハ！ ただそれだけでいいのに、なんで黒く塗りつぶされなきゃならねえんだ！？ 陽光に満たされていたって、結局はそこに集うのにな！」

お前の言葉は僕を揺さぶる……。これ以上、しゃべるな！

「なら、愛憎をその奥底に沈ませろ！ 言霊を、ズタズタにしちまえ!! 愛も憎しみも、一つの楔にしろ!!」

愛して愛しても、憎しみを止められないってのか？ 僕たちはそうすることでしか、わかり合えないのか!？

「家族も親戚も、親子も兄弟も……流れの中にある者たちは、その手を血で濡らす。そして、それを洗うために再び血を流す。これは、止められない円環だ」

僕たちはそうであるってのか？ それとも、お前がそうであったのか？

「俺は憎い。あいつが憎い。この運命を与えた世界と、お前たちだ

けが愛される星が憎い。だから……俺は、全部壊したいって思ったんだ」

憎いなんて、何度も言うなよ。僕たちはそうであるわけじゃないんだ。

「俺には残されていない。抛り所となるのは所詮、虚像でしかない。俺にはそれしか、命を懸けられない……誰にも、触れることのできない……」

暗い何かが、僕を包み込もうとしている。

いくつもの螺旋を描いて、僕は黒いウロボロスとなっていく。リユングヴィの望んでいた、聖域の果てへと沈んでいく。

全ての存在はここへ堕ちる。

夢を抱いたまま、心を輝かせながら。

僕は何のために存在し、何のためにそれを掴もうとしたんだろうか。

言い表せられぬ想いと叫びが、僕の心中でせめぎ合う。

そのままでいることの難しさ、そのままでいることの罪。何かに抗い、それを手にして僕は何を築こうとしたんだ？

掌にあるこの宝石は、誰からもらったもの？

狂おしいほどに愛し、憎むのは誰一人として変わらない。そこにある、個々の自己主張をしているに過ぎない。そうしているのでさ

え、いつかは馬鹿馬鹿しいことなのだと気付く。

ヒトだからか？

それとも、僕が調停者だからか？

日々より重ねられてきた言霊は、いつかは崩れていく。それを止める術はなく、僕たちはただそれを見つめるだけ。何をしていて、引き裂かれていくこの想いは、いつかは朱色に染め上げられる。もう存在している理由なんてないんじゃないのか？ 所詮、僕たちはここにいる資格もなければ、望まれてもいない。星にも、次元にも。

「お兄、ちゃん……助け……」

乱暴にされる少女。それは、誰？

「助け………て」

その双眸から涙を流し、虚ろな視線で何を見る。

「お母さ……助けてよお……」

激しく揺さぶられる少女の体。彼女を覆い尽くすのは、暗い影。

その体は、火照っている。

やめろ。

この光景は、あの時と同じなんだ。あいつが、その心を壊してしまった時と。

「……お父さん やめ………て……」

少女は拒む。それでも尚、彼女の体と心を傷つける「それ」は、

消えない。

殺してやる           ！！

それは誰の叫びか。お前か？ 修哉か？

その空間に乱れ散る紅い花は、希望が食い潰され、絶望が蒼空へ轟く時。

やめてくれ、やめてくれ。

そう願っていても、狂おしいほどの愛は踏みにじられる。蹂躪される。

「殺してやる……お前も、あんたも」

全てを憎んだのはその時だったのか。入り乱れる数多の想いは、とうとう闇色に染まるしかなかったんだ。

暗いよ 暗いよ。

僕はどこに堕ちる？ 絶え間ない怨嗟の叫びが木霊する聖域で、永遠の旋律を奏で続けるのか？

肉体という檻を失った心は、この深淵に

「どうしてそうしようとするの？」

懐かしい声だ……しばらく、聞いていなかった。

海だよな？

「沈まなくてもいいの。空は、そうしなくてもいい」

何言ってるんだよ。僕は身を滅ぼし、この聖域に沈む。それを阻むことはできない。

「ううん、違う。私は、ずっと……空のことが好きだった」  
いきなりなんのことだ？

「あなたの傍にいられば、それでよかった。たとえ大きく傷つけられ、身を穢されても……あなたの傍にいただけで、私は私としての意義を保っていた」

そんなことだけでよかったっていうのか？ お前は、どうしてそういう風に言っているの？ それじゃ、まるで自分が無いみたいだ。「ただそうしているだけで、世界は優しくなれる。この世界の中に、溶け込むことができる」

たとえそうであっても、僕たちは間違いを犯し、魑魅魍魎な次元の狭間で嘆くだけ。その意義を見出せず、ただ彷徨い続けるだけだ。「どうして空はそう思うの？ 傍にいて、愛を感じられるのは生命だけ。生きとし、生けるもののみが手に入れられる、宝物なのよ？」  
きれいな事はもうたくさんだ！

何をしても結局は無意味なんだ。どうしようもない現実に苛まれ、暗いだけの未来に打ちひしがれる。僕たちには、そもそも権利さえ与えられていないんだよ。

「権利とか、そういうものじゃない。ただ、そうあるだけよ」

え？

「ただ、そこに『在る』だけ。星も、ヒトも……世界も」  
存在しているだけってのか？

それは、いつか僕が導き出した答え……だけど、本当に正しいのか？

「忘れちゃったの？ 正しいかどうかなんて、誰にもわからない。わかる存在なんて、いない。答えは、あなただけのものなの」

あなただけの

### 83章：道標

「いい加減、離れたらどうだ？」

修哉は、空に冷たく言い放つ。空は彼の遺体を抱きしめ、泣き声をあげずに涙を流していた。

「どうせ、空ちゃんも死ぬんだ。すぐに会えるさ」

クスクスと笑い、修哉はセレスティアルを見据えた。

どうせ、みんな消える。消えちまうんだから。

「かわいいそうな人」

修哉はゆっくりと、空の方へ顔を向けた。彼女は、彼を睨みつけている。

「何もかも知っているはずなのに、世界を殺そうとする修哉くんはかわいいそう」

憐れみのような言葉を放つ彼女に対し、修哉は目を細める。

「掌の上にある宝石に気付かないふりをして、周りにある真実に触れようともしないあなたは、本当にかわいそうな人」

彼女は顔を振った。修哉にしてみれば、それは自分を完全否定するに等しい行為だった。

「俺を哀れむつもりか……？」

修哉はエクスカリバーの切っ先を彼女の喉もとに向けた。

「お前、俺の何を知ってるって言うんだ？俺のことを何も知らないくせに、かわいいそうだとかぬかしてんじゃねえ……！！」

修哉の罵声に、空は目を逸らさずに受け止める。その瞳には涙が

浮かんでいながらも、何にも屈しないという 強さが秘められていた。思わず、完全優位である修哉は一瞬だけたじろいだ。

「知りたいとも思わないわ！」

空はほとんど出したことの無い声を、このフロアに轟かせた。

「あなたはそうやって人のせいばかりにしているけど……あなたは今まで一度だって、自分の本当の心をさらけ出したことがある！？ 本当の気持ちを、言葉にして誰かに言ったことがある！？」

「何……！？」

「自分の気持ちを理解してもらおうと努力しないで、わかっただけで、えるとしたら大きな勘違いだわ！」

空は顔を振った。自分の幼馴染でもある彼が、あまりにも幼稚過ぎていてから……今までのことを、何も学んでいないから。

「信じてもらいたいなら……理解してもらいたいなら、相手を信じないとダメなの！ それもわからないくせに、被害者みたいなことを言わないで！」

空は修哉を睨みつける。空色の双眸は、破壊の調停者を退かせんばかりに強かった。

空がいたならば気が付いただろう。言葉を発する彼女の影に見える、二人の少女の姿が。

金色の髪を持つ少女が。

銀色の髪を持つ、少女が……

「偉そうなことをほざくな！」

退いてしまおうとする自分の足を何とか食い止め、修哉は叫ぶ。  
「誰かに言ったってな、理解してもらえらと思うか!? この世界……レイディアントもガイアも狂ってる。弱き者は強き者に虐げられ、奴らが用意した掃き溜めみたいな道を歩かざるを得ない!」  
そう願っているわけでもないのに、世界にはそこへ導こうとする確かな意志が存在している。

修哉は、それが許せないのだ。

「そうやって生きるしか道のない二つの世界を変えようと思っても、たかがヒトではどうしようもできない! お前らみたいに愛だのなんだの叫んでいて、本当の意味で腹が膨れることはありやしねえんだよ!」

そうやって叫べば、楽になるだけ。修哉にとって、それらはその程度のものでしかなかった。

「……だから、何もかも消し去るんだよ。あらゆる夢も、希望も、憎悪も……ただ、無に還させるんだ!」

本当の意味でそう願っているとは言い難い。けれど、そうするしかない。彼にしてみれば、それ以外の方法は詭弁でしかないのだから。

修哉は上空を見上げた。

「そうしなければ……ヒトは……全ての生命は、ほんとう 眞実の愛を知らな  
いまま、このちっぽけな揺り籠の中で朽ち果てていくしかないんだ  
!」

まるで、修哉の言葉は透けているあの大空に、吸い込まれていく  
かのようにだった。虚空の彼方に、それは溶け込もうとしていた。

「……空なら、あなたのことを受け止めてくれるはずだった」

目を背けず聞いていた空は、顔を振る。

「空なら、あなたのことを理解してくれる」

その言葉で、修哉は彼女に顔を向ける。

「ううん、理解できなくても……理解しよう和努力をしてくれろ。」

空は……あなたの親友の空は、絶対にそうしてくれるはずだった！

それに対し、修哉は顔を振った。

「ふざけるな！ あいつは」

「空は！」

修哉の言葉を遮り、空は声を発する。

「空は、絶対に理解しよう和努力をしてくれる！ 苦しむあなたを

……最高の親友だった修哉くんを、支えてくれるはずだった！！」

すでに冷たくなってしまっていた彼の手を、空はぎゅっと握りしめる。

「なのに……なににあなたは、この人を殺してしまった……」

可能性なんてなくなった。僅かな隙間を見つけてくれる人は、いなくなった。

「もう、空はこの世にいない！ あなたを支えてくれる人は、あなた自身が殺したのよ！！」

空にしてみれば、修哉は迷走しているにすぎなかった。何が彼をここまでそうさせているのかはわからない。それでも、彼ならば何かをしてくれるはずだった。その可能性となる部分を、彼女自身見てきたから。

「てめえ……！！」

修哉は激しい憤りで、歯ぎしりをしていた。

自分の知らない部分を指摘する彼女に、殺意をより一層大きくしていた。今までしてきたこと、全てを否定されている。

それは嫌なのだ。

空を殺したことが、間違いなのだと指摘されるのが

「……ざけんなあ!!」

波紋が広がる。

見えない世界に、僕は降り立った。暗くて何も見えない。それでも、僕がここに立っているのはわかる。

ここは……最下層か？

堕ちた言霊たちが来る、最後の地……。

「まだするべきじゃない」

それは、今までのように僕の中から語りかけてくるものじゃない。たしかに、後ろから聞こえた。そこに振り向くと

……リサ？

いつか見た、髪をほどいた姿。白いワンピースだけを着て、金色の長髪をなびかせているその姿は、あまりにも美しすぎる。

「その時は、まだ来ていないもの」

彼女は小さく顔を振った。

「何もかもが癒し、救われることなんてない。世界は常に、混沌<sup>カオス</sup>へと向かおうとしているのだから」

そうではないだろ？ 僕たちは初めから存在するべきじゃなかったんだ。いなければ……無為に命を削ることはなかった。

「でもね、あなたは違う。存在して、存在するだけで命を慈しみ、愛することができる」

何の確証を持ってそう言えるんだ？ どうして……

「私はあなたを信じているから」

笑顔で、リサは言った。

でも……お前、さっき言ったじゃないか。愛も、信頼もいらな  
いって。

「そうね。たしかに、そう思っていた頃はあった。……寧ろ、最後  
までそうだったかもしれない」

すると、彼女は顔を振った。

「でも、最後の最後で気付いたんだ。私には、あんたが必要だった  
んだって」

必要？　ただ、無為に破壊することですか、自分の存在を示すこ  
とのできない、調停者が？

そう問うと、彼女は再び顔を振った。

「調停者でも、カインの末裔でもない」

そして、彼女は僕を指差す。

空、あなたがね

微笑みながら、彼女は真つ暗な上空を見上げた。

「あなたがいるだけで、私の心は癒された。醜いものでしかなかっ  
た私の心を、受け止めてくれた」

祈るように手を合わせ、再び彼女は僕を見る。

「世界の隅々まで、ヒトとしての希望と欲望、羨望……絶望が入り  
乱れる中、私にとっての『道標』はあなただけだった」

僕が……？

そんなの、違う。

「違わないよ。暗いだけしかなかった私の世界に、青い色を与えてくれたのは……あなただから」

すると、彼女は後ろに手を組んだまま、ゆっくりと歩み寄って来た。足を付ける度に、波紋と共に光の円環が広がる。

「たとえ、世界があなたを憎んでも、怨んでも……」

彼女は僕の前に立ち、顔を上げた。

魅入ってしまうほど美しい、宝石のようなエメラルドグリーンの瞳。この瞳に、何度も貫かれたいと思った。

「私は、あなたの傍にいる。ここで」

と、彼女は僕の胸に手を置いた。その瞬間、黒だけでしかなかった僕の姿が、はっきりとその姿を現した。

久しぶりに見る、自分の手。

なぜだか、長い間……見失っていたような気がする。

「ずっと、あなたの傍に居続けるから」

優しく微笑むその姿は、彼女のそれと同じだった。

僕が唯一愛した女性と。

「だから……」

約束、忘れないで

僕から手を離し、彼女は一步下がった。

「愛は憎しみの一部でしかない。でも、憎しみも愛の一部でしかない。それらを切り離して考えることはできないけれど、私たちはたしかにその可能性を持っている」

願いは言葉となり、言葉は言霊となる。

「祈るだけでも、私たちの手元にある真実は輝ける。どんなに歪んでいても、永遠から紡がれるこの誓約は、途切れない。浄化される時まで、私たちはその上で笑っていられる。その果てまで、歩いてゆける。……この、青空の下でね」

その瞬間、世界に色が広がる。どこまでも広い、青い空が。

「いつかきつと、私たちは全ての呪縛から解放たれ、一からやり直せる。それこそが、この物語の 私たちの終息なのだから」

その空の下に広がる草原に立ち、彼女は言った。

> i 3 0 7 6 — 2 1 5 <

バイバイ

空ちゃんど……………

目を閉じていたわけでもないのに、なぜか僕は目を閉じていた。ゆっくりまぶたを開けると、そこには白い風景しかなかった。

「戻ってきたのか、空」

そこにいたのは、バルドルだった。

「あそこから掬い上げてくれたのは、彼女か」

遙か上空を眺めながら、彼は言った。

「……あいつは、ずっと僕を護ってくれていたんだ」  
樹の時も、そうだった。

彼女は死してなお、僕を導いてくれる。この手を手に取り、僕が描いた夢の形へと誘ってくれる。

「太古の時より、お前たちを補完してくれる人がいるのだな。まったく、羨ましいものだ」

「なんだよそりゃ」

僕とバルドルは、思わず笑ってしまった。

「まあ、お前はお前としての自我を保てたようだ。彼の憎悪に沈むことなく、な」

「……………」

何が彼をそうさせていたのか　リーヴェに堕ちたおかげで、なんとなくだが、知ることができた。言葉に出したくもない、あの光景。垣間見えたあの情景は、もしかしたら……修哉の記憶なのかもしれない。

「さて、お前はこれからどうするのだ？」

「……え？」

すると、バルドルは苦笑する。

「レイディアントに戻り、お前は私の『権利』を使役し、何をしようというのだ？」

戻る……あそこに、僕は戻れるのか？

どうするとか聞かれても、それ以前に戻れることに驚いてしまっている。

「？ 何を驚いている」

キョトンとした様子で、彼は言った。

「い、いや、普通驚くよ。だって、一度は死んだんだぞ？ 某漫画のように願い事で復活〜みたいなことは起こらないわけだし」

「リーヴェの深淵に堕ちなかったのが証拠さ」

とは言っても……ほとんど、堕ちかけていたような気がする。いろいろな言霊が行き交い、僕は思わず自分を見失ってしまいそうだった。

あれは……ヒトの想いの集合地なのだろう。そうでなければ、彼らの声は聴こえなかったはずだ。

「それで？ お前はどうするのだ？」

再び、バルドルは訊ねる。僕はほほをポリポリとかき、これからのことを思い浮かべた。つーか、僕はとっくの昔に答えを出しているんだよな。いちいち、深く考える必要性なんてない。

「言っただろ？ 抗うって。死ぬまで、とことんな」

自分に課せられた運命や宿命が、どんなものなのかはわからない。それはもしかしたら、他人よりも苦しまなければならぬものかもしれない。

「だから、世界を変える。この星の未来を、変えてやる」

そうだとしても、僕は歩く。挫けても、足を止めても、何度だつて立ち上がり、前を向いて歩く。

この終わりの無い、永遠とも言える旅路の果てまで。

「……セヴェスとしてか？ それとも、空としてか？」

バルドルの瞳が輝く。何かを呼び起こさせる、紅い双眸が。

「両方だよ。僕は、どちらでもある。双方の権利を持っている者として、自分のしたいことをするまでさ」

調停者であり、ヒトでもある。だからこそ、できることがある。

「いいだろう……ならば、私はお前と一つになるう」

「はっ？」

すると、バルドルは僕に近寄り、手を掲げた。その手が青く光り始め、僕を包み始める。

「な、何をするつもりなんだ？」

「……私がお前と同化することで、お前の離れてしまった魂と肉体を繋ぎ止めるだけさ」

同化？ 僕は思わず、首をかしげた。

「お前と同じになることで、お前は癒される。そして、私は私としての自我を失う」

「!!!？」

それってつまり、消えてしまっってことか？

「何も焦ることはない」

僕が戸惑ったことに気付き、彼は微笑んだ。

「いつかは消えてしまう存在。寧ろ、長く居続けたくらいだ」

自分が消えてしまうというのに、どうして彼は笑っていられるのだろうか。嫌じゃないのだろうか。

「私がいいたために、お前たちには苦勞をかける……」

遠い目をしながら、彼は僕を見る。なぜ、そんな目で僕を見るんだろう。まるで、自分の息子を見るような……。

その時、僕の足元に青い魔方陣が広がり、そこから無数の青い粒子が舞い上がり始めた。

「バルドル！」

「何も心配するな。自分たちの望むことをし、自分たちの足で歩み続ける」

粒子のせいで、彼の顔がよく見えなくなってきてしまった。

「……らばだ、…………よ」

「何言ってるんだ！？ 聞こえないって！」

僕の体は浮かび始め、青い球体となってどこかへ飛び立とうとしている。

「……の審判を……」

そして、僕の世界は青くなった。

黒い世界に堕ち、白い世界から旅立った自分。

どこへ向かうのか。

それは、未だ果たせぬ夢の跡に。

「死ねえ！！」

修哉の聖剣が、空に向かう。だが、それは激しい金属音を響かせ、彼女に到達できなかつた。そこに、僕が障壁を展開させたからだ。

「……！！ お、お前……」

「そ、空！」

修哉は思わず後ずさりをし、聖剣を引く。

「これ以上、お前の好きにはさせない」

僕はゆっくりと立ち上がり、奴を見据えた。憎悪だけを宿らせた、奴の双眸。リーヴェで見た時と、変わらない。

「空……なの？」

空は床に座り込んだまま、僕を見上げている。瞳には涙が残り、それは瞬きもせず、この現実を見つめていた。

「ほら」

僕は手を差し出した。だが、彼女は未だによくわかっていない。

「……何、ポーっとしてんだよ」

「え？」

僕は彼女の手を握り、無理やり立たせた。服には僕の血が付いてしまっているが、外傷はないようだ。

「ど……して？」

彼女は小さく顔を振る。

「お前の傍に……」

ずっと、な。

僕は微笑んだ。それに伴い、彼女の涙腺は緩んでしまい、そのまま大粒の涙を流し始めた。

「空……空あ……!!」

泣くなつて言いたいところだが、そうもいかないだろう。

僕は彼女の頭に手を置き、撫でてやった。

「……ありがとな」

彼女と共に、お前はあそこで囁いてくれていた。ずっと……

僕は修哉の方へ向き直った。彼は、眉をしかめて顔を振っている。

「なんで、生き還ってんだ……？ お前は、たしかに……」

「そんなことはどうだっていい」

僕は右手を掲げた。そこに、自然と光が集う。僕を護り続けてきた、温かい光が。

「お前を倒し、僕は僕の権利を執行する」

右手に集う光は徐々に姿を成していく。

「全ての約束を紡ぎ、この螺旋を断ち切るためにな」

そして、そこに聖剣が具現化される。

僕の力の証、ティルフィングが。

「くっ……!!」

修哉は激しく僕を睨みつけ、臨戦態勢に入った。

「修哉」

僕はティルフィングの切っ先を、修哉に向けた。青い刀身が、太陽の光を反射している。

「お前の夢は、ここで終わる」

「……てめえ……!!」

全てを知っておきながら、何もかもを破壊するお前の「夢」など、絶対に認めない。それは、全てのものが望んでいる姿でも何でもな

い。

「  
終わりにしよう、  
修哉」

## 84章：次元の審判 創造と破壊の導へ

何度も何度もぶつかり合う互いの剣により、周囲に剣風を巻き起こす。そこかしこにある小さな瓦礫は舞いあがり、宙高く舞い上がる。

「うらああー!!」

修哉の攻撃を高く跳躍して避けると、奴もジャンプして追撃をしてきた。その横一文字を左手で展開させた障壁で防御し、右手のテイルフィンゲで斬りつける。修哉はそれを僕と同じように、障壁で防御する。

「ちい!!」

大きな舌打ちをした彼に、僕は前蹴りを行う。それによって吹き飛んだところで、斬撃の衝撃波を飛ばした。修哉は手から真空波を巻き起こし、その反動で避け、地上へと着地した。

「臥竜滅砕、天地の悉くを喰らわん！ ブランディゼル!!」

修哉は一瞬にして詠唱破棄をし、僕に対し聖魔術を発動した。宙にいる僕の下から、巨大な氷の槍が突き出てくる。その氷を剣で叩き、その衝撃で地上にいる修哉に突撃した。

「馬鹿が!!」

奴は聖剣を光らせ、長い刀身で突いてきた。それを、僕は凄まじい速度で回転し避け、その勢いのまま奴に斬りつける。あまりの速度に、修哉の胸が切り裂かれた。そこから、真っ赤な血が舞い上がる。

「くっそ!!」

修哉はすぐさま距離を取り、聖剣を振る。その瞬間、僕を光の円

環が包み、一瞬にして大爆発を起こす。

「くっ……！」

粉塵が視界を塞ぐ中、僕は片膝を付いたまま、気配がした方向へ衝撃波を飛ばす。それは粉塵を切り裂き、僕に斬りかかろうと近付いていた修哉を吹き飛ばした。だが、僕が立ちあがるのと同時に、修哉はうまく着地をして態勢を整えていた。

「くそ……くそお……！」

修哉の体のあちこちから、血が滴れ落ちる。僕もまた、同じように血が流れている。

だが、さっきまでのように圧倒されてはいない。

「……なんで、生きてんだよ……！」

傷口である胸を抑えながら、修哉は僕を睨みつける。

「俺が殺したのに……殺したはずなのに……！」

「……………」

ああ、そうだよ。お前に殺されたんだ。ある意味、今の僕は空であって、空でない。バルドルと一体化したのだから。

「言っただろうが。これ以上、お前の好きにはさせねえって」

未だ戸惑う彼は、自分と同等の力を持っているが故に、恐れているのかもしれない。絶対的な支配者になりかけたつてのに。

「いつもお前に負けていた」

勉強にしても、運動にしても……僕は、修哉に勝てなかった。勝てるものなど、自分にはないって思っていた。

「でも……今回だけは、お前に負けない。たとえ、お前に憎まれようとも」

「……………空……！！」

お前に惑わされない。お前の絶望と悲憤を感じ取れたからこそ、僕は自分の全てを懸けてお前と闘うんだ。

「くっ……があああ……！！」

奴は雄叫びをあげながら、聖剣を振りかざす。聖剣は無数の刃となり、空中に散布した。そして、修哉が広げていた手を握りしめた瞬間、刃は一斉に僕に突き刺さって来た。しかし、それらは僕が展開した障壁に突き刺さっただけで、届いてはいない。

「んなの効くかってんだ！」

僕は高速で奴に斬りかかる。修哉も聖剣で攻撃し、互いにぶつかり合った。そうなるだけで、僕たちは致命傷を与えることができないでいた。

「お前は昔っから適当だったよ！」

交叉し合う中、修哉は言った。

「何でもかんでも、力を抜いて……なのに、なんで今だけ本気になるんだ！」

奴の上からの攻撃を受け流し、眉間に向かって剣を突く。しかし、修哉は体を反転させて避け、下から剣を振り上げた。それをティルフィングで防ぎ、僕は光線を弾き出した。轟音を立て、奴は吹き飛ばされる。

「まだだ！」

追撃するために、僕は剣で衝撃波を飛ばした。それは修哉の体を切り裂き、上空に血が乱れ散る。

「……今が、本気を出す時なんだよ」

今まで、手を抜いてきたつもりじゃない。

でも、今回は違うんだ。

全てが全てであるために……彼女との約束を果たすために、僕は己の全てを懸ける。

互いに、前を向くために。

「ぐっ……」

修哉は血を床に吐きつけ、立ち上がった。

「お前に……愛されてきたお前なんか……！」

そして、彼は上空に向けて顔を上げた。

「やられて……たまるかああ……！」

その瞬間、修哉は僕に突撃してきた。紫色のオーラを纏うその速さは、さっきまでと違う。高速の連撃を防御するも、思わず体勢を崩してしまった。すぐさま障壁を発生させるが

「死ねええ……！」

聖剣が光り、修哉はそれを振り下ろした。その衝撃で、障壁が砕け散った。

「マ、マジ……？」

「クク……終わりだア……！」

今までの速度が、いきなりスローモーションになった気がした。

修哉は笑みを浮かべ、聖剣を僕の眉間目掛けて突きだす。

僕は左手を顔の前に広げる。聖剣が、ゆっくりと僕の掌を貫いてゆく。しかし、それでも止まらず、その切っ先が僕の鼻先に到達しかけた。

「空ア……！」

彼女の声が聞こえる。彼女の中にいる、懐かしい呼び声も。

……ここだ！

左手を聖剣もろとも思いっきり顔の左へ移動させる。切っ先は僕のほほをかすめたものの、僕の手を貫いただけだった。

「お、お前…………！」

修哉がその光景に驚いている隙に、僕は貫かれた手で聖剣の刀身

を握った。

「……終わりだ」

「なっ　！？」

その刀身を力いっぱい握りしめると、それは粉々に砕け散った。同時に、血が滴れ落ちる。そして、僕は後ろへ下がろうとする修哉に向って、ティルフィングを振り下ろした。そこに、青い軌跡が描いて。

刃は修哉の体を切り裂いた。ティルフィングの爪痕が、肩から腰にかけて刻まれる。

「がっ……は」

彼はセレスティアルの方へ、吹き飛ばされる。粉塵が舞い上がり、彼の姿が見えなくなってしまった。

「……………」

僕はティルフィングを消し、小さく息を吐いた。

貫かれた左手からは、血が大量に出てくる。だが、緑の粒子が底を包み込み、少しずつ痛みを緩和してくれていた。

「空」

後ろに振り返ると、そこに微笑んでいる空の姿があった。少しだけ、涙を浮かばせて。

「終わった。全部」

そう言つと、彼女は小さくうなずく。

「これから……僕たちは、見定めなければならぬ」

再び、彼女はうなずく。

「その権利を持つ者たちとして、世界がどこへ歩むのか」  
ヒトとして、世界の一部として。

「だから……一緒に、歩いてくれるか？」

空色の瞳は、僕を見つめる。それは、遠い昔から知っていた、大切な宝石。

「ずっと、一緒に」

僕が彼女に向けて、手を差し出した。彼女は歩み寄り、手を握り締めようとした。

「ふざ……けるな」

震える声

セレスティアルの前で、立ち上がっている修哉の姿があった。真っ赤な血が、彼の体を濡らしている。

「お前らが……手にするってのか……」

その時、何かが囁いてくる。

愛と憎しみに覆い尽くされた青年

この声は、バルドルではない。何度も聴いていた、大人の女性の声だ。

運命に翻弄されし者  
想いは踏みにじられ、その言霊は届かず

修哉のことを……言っているんだらうか。

お願い

彼を……解放して

さっきの女性とは違う声が聴こえた。少女の……声だ。  
そして、覚えがある。この声に。  
そうか……君だね。……あいつを、愛していたんだね……。

お願い

僕は一度大きく息を吐いて、前を見据えた。

「修哉、お前は知っているんだろ？」

そう問うと、彼はゆっくりと僕に鮮血の双眸を向ける。

「わかってて、還ろうとしているんだな……」

「……黙れ」

僕を睨みつける修哉。

「お前にだって、それはあったのに……わからないふりをするなよ」

「……黙れえ!!」

咆哮を上げるかのように、修哉は叫んだ。そして、彼は手を前に出す。

「永遠へ穿たれし暁の誓約……我が下に集え、断罪の翼……」

修哉の前に、紫色のオーラを終結させた手のひらサイズの宝玉のようなものが現れた。まるで電気を放つように、パチパチと何かを発している。

「ネシイエ・ミヒ……調停者の名において命ずる……」

「この波動……?」

そこから風が発生しているのか、修哉の赤く、長くなってしまった髪がなびいている。

「こ、これは……!?!」

この精霊の波動は……いや、違う!

これは精霊なんかとは次元が違う。リサが使った「ビッグバン」  
とも違う。

……じゃあ、一体……

調停者のみに許された、

ディメンショナル・ジャッジメント  
次元の執行権

この声は……バルドル?

星とヒト、次元と次元、それらに関与するための ジャッジ 審判  
それに抗う術は、誰一人として持ち得ない

じゃあ、どうしろってんだ！？　これは……ビックバンよりもやばい！

お前もそれを使うのだ

えっ？

お前たちにだけ与えられし、その権利を  
今、この時に

その権利を……今こそ使うべき時？　そうなのか？  
僕は体が指し示す方向に、目をやった。今まさに、修哉の光  
が放たれようとしている。

終わりを迎えるための審判。  
始まりへ向かうための……審判。

僕は小さく息を吐き、右手を前に出した。  
「永遠へ紡ぎし暁の誓約ラグナロク……我が下に集え、光輝なる翼……」  
青い光の粒子が、僕の周りに集まってくる。温かい光は、僕の  
の何かを呼び起こそうとしている。

「ネシイエ・ミヒ……調停者の名において命ずる」

埋もれていたものを掘り起こすかのように、言霊が放出される。その時、誰かが僕の手を握りしめた。リサの時と同じように。

……空……

僕たちは何も言わず、うなづいた。何も言わなくても、わかってる。そんな気がした。彼女は僕の手を握り締め、その手を青空に掲げる。すると、そこに澄んだ青色の宝玉が現れた。煌めきながら、青い光をそこかしこに広げている。

「崩壊せし時を再び刻め！ 全ての始まりにして、全ての終わりなる時へ！！」

「創造せし時を再び刻め……全ての始まりにして、全ての終わりなる時へ！！」

僕と修哉は、互いに視線を向けた。

僕たちは、進む

私たちは、歩く

二人の想いが重なったその時に、光は放たれた。

「破壊の導」

「創造の導」

ダイヤモンド・クラブス

ダイヤモンド・グローリー

> i 2 6 7 4 — 2 1 5 <

二つの宝玉から、二つの光が上空へ広がる。波紋が広がるかのように、全てを包み込むかのように。

しかし、青い光は紫色の光を浄化し、同じ青色の光へと変えた。

光たちは世界を覆い尽くし、存在する全てのものに祝福を与えていた。

生きとし、生けるもの全て。

愛し、愛しき全てのものに。

そして、この 赤い世界 に

光が溢れた。

「……馬鹿、な……」

修哉は絶望した双眸で、僕たちを見ていた。

「まさか……こんな、こと……が……」

そして、修哉は大量の血を吐き出し、その場に倒れた。

「ソラ……!」

みんなが、駆け寄って来てくれた。みんな無事らしく、笑顔だ。「長かったな……ここまで来るのに」

デルゲンはそう言っ、苦笑しながらため息を漏らした。よくため息をすると幸せが逃げるといっが、今回は違っような気がする。「ホントに終わっただな……これで、ようやく……」

レンドもホツとしたかのように、胸をなでおろしていた。

「この苦しい道のりも、目標地点に辿り着くことができただんですね……」

アンナはそう言いながら、祈るように手を合わせた。まるで、逝っってしまった人たちに伝えるように。

「いろいろ辛いこともあっただけど、全部終わっただな……」  
シェリアは遠くを見つめながら言った。

「……これから、始まるんだよ」

僕はそう言っ、上空を見上げた。

「僕たちはそこに立ち、別の未来を望む。そこから見えるのは、何なのかわからないけど……」

「それは、私たちが撒いた種の咲く場所」

僕に寄り添うようにして、空は言った。

「きっ、笑っていけるよね？」

「……ああ、きっとな」

リサ、ヴァルバ。

これで、よかつただよな？

これで……



## 85章：暁の誓約 もう一つの約束

「ぐっ……!!」

修哉は血を大量に流しながら、立ち上がった。すでに、絶命していてもおかしくない傷なのに。

「ハ、ハハ……おめでたい、奴らだ……」

彼はゆらゆらと体を揺らしながら、僕たちを見据える。変異してしまった髪の色はいつもの黒に戻ったが、その双眸だけは、血塗られたかのように紅い。

「終わっただと……？ まだ、終わっちゃいない!!」

すると、修哉は後ろにあるセレスティアルの方へ向かって後ずさりを始めた。手をかざし、その壁を吹き飛ばす。すると、外から大量の風がフロアに入り込んできた。

「修哉、何を……？」

「……お前は、何も知らないようだな……!!」

そう言って、修哉はセレスティアルに触れた。バチバチと、電気がほとばしる。

「これが表すことが、なんなのかを……!!」

「……？」

修哉は手を離し、ゆっくりと後ずさりを始めた。その後ろには、さっき自分で空けた大きな穴がある。

まさか

「来るな!!」

彼は走ろうとした僕を睨みつけ、制止させた。

「修哉……」

「近くに……寄るな!!」

そう言っつて、修哉はセレスティアルを見上げた。

「……ハハ……俺は、結局のところ…… 貴様 に翻弄され続けた

……ただのピエロだった……つーこと、だな……」

彼は何度もセレスティアルに触れ、呟いている。クスクスと微笑みながら、瞬きもせずに。

「憎い………？ ああ、そうさ!! 俺はお前と同じさ………!!」

その時、風が入り込んできたのか、修哉の髪が柔らかく揺れ動いていた。

「お前がこの世界を……己自身もろとも消し去ろうとし続けた、あらゆる歴史と同じようになあ!!」

「………」

答えるはずのない物体に、修哉は語りかけ続けている。そして、彼はセレスティアルによりかかるようにして、僕を見つめた。

「なんでだろうな……空」

彼のまぶたは、今にも閉じてしまいそうなのか……半分ほど閉じかけている。

「もがけばもがくほど……深く……深く沈んでいってしまう……」

彼は自分を奮い立たせるかのように、勢いを付けて天井の青空を見上げた。それと同時に、彼の血が宙に舞う。

「どうして……世界はお前を選んだ？」

彼は顔を振る。

「どうして……光を受ける者だけが……ヒトの愛を知る奴だけが、星の愛を享けられるんだよ……！」

遠目から見ると、修哉は泣いているようだった。……紅く、黒い鮮血の涙を。

「修哉くん……」

空は僕の隣で、彼を見つめている。それに気付いたのか、修哉は顔を下ろし、僕たちを見ながら微笑み始めた。

「蒼空の巫女……遥か古より、星の在り処を知りし、太古の昔に分かたれた最後の欠片……かあ」

彼は 彼女を見ながら、何かを悟っているようだった。あるいは、それを知って喜んでいるような……。

「君こそ、この大空に……この世界に祝福された……唯一の女性……なのかも、な……」

優しく微笑み、彼は空を見つめる。そこには、リオンとしての彼はいなかった。ガイアと一緒に過ごしていた時の、修哉そのものでしかない。

それは、空にも理解できていた。

「なあ、空……何もかも、さ……」

彼は僕に視線を移し、名を呼ぶ。

「永い間……夢を見続けたんだよ……」

「……夢？」

修哉は、小さくうなずく。

「崩れかけた、遙遠なる灯火……古き黄昏の残骸 暁の誓約を……」

……その胸に刻んでさ……」

何かが、聴こえる。

「俺も、カインも……アベルも」

## 暁の誓約

崩れてしまった、遠い約束

アベル

一瞬、頭の中に何かがよぎった。黒く……暗い何か……。

「ただ……夢を見ていたんだよ……ただ、純粹にさ……」

目を瞑り、彼は僕に告げた。それは、まるで……最後の言葉のように感じた。自然と、僕の足は動き始めていた。

「来るなつつつたる!!」

どこからそんな声を出す元気があるのか、修哉は再び叫んだ。

「修哉……!!」

「お前に……」

ぎりぎりと歯ぎしりをし、僕を睨みつける修哉。

「お前なんか、手を差し伸べられたくねえんだよ!」

そう言い放った瞬間、彼の口から大量の血が吐き出された。それはこの真つ白な床を、真つ赤に染め始める。

小さく震えながら、彼は再び僕を見据えた。そこには、修哉の鮮血の眼差しが、僕の全てを憎んでいるかのように、赤く　　紅く、燃え盛っていた。

「俺は……俺が望み、願い、求めた全てを手に入れる！俺の全ては俺だけのものだ！てめえらに……あれこれ振り回されるものじやねえんだ！！」

修哉は手を広げて、天空を見上げた。彼は　いもしない「何か」に向けて言い放っているんだ。

「俺の人生は……俺だけが、定められる。俺だけが、始まりと終わりを下す権利を持つてんだ！！お前らに、好き勝手にはさせねえ！！」

そう叫び、彼は血を再び吐き始めた。それでも尚、彼は言葉を綴るのを止めようとしない。

「ククク……ハハハハハ！！お前らが愛した次元つて、汚ねえなア！！穢れきつた生と血塗れの死が入り混じり、俺は虚無の楔に囚われる！！歌え、謳え！唄え、笑え！！新しい屑どもの未来を嗤え！ハハハハハハ！！」

しばらく続く、断末魔の笑い声。それが途切れた時、彼は僕を見据えた。

あの瞳ではなく、碧い瞳で。

修哉としての、あの瞳で。

……お前に出逢わなけりや、素直に殺せたのになあ……

ほんの少しだけ、彼の表情が和らいだ気がした。

「咲希……………今、帰るよ……………」

そう言っつて、修哉は微笑んだ。その時、修哉の体がゆっくりと後ろへ倒れ始める。

「修哉!!」

「修哉くん!!」

僕は走った。彼の姿が、少しずつ消えていく。

「修哉アア……………!!」

穴に辿り着き、下を見た。けど、もう彼の姿はどこにも無かった。広がる雲と空。どこまでも広がる、青い風景。彼はその中に、沈んでいってしまった。

「……………修哉……………」

彼が見た世界の姿とは、なんだったんだろうか。

彼が見たかった世界の姿とは、どんなものだったのだろうか。

彼は、どんな夢を見ていたのだろうか……………。

今となつては、知る術は無い。

「空、いつか一緒に世界を見て回ろうぜ」  
「いつかって……世界回るためには、どれだけお金必要だと思ってんだよ……」  
「んなの、少し頑張って働きやすぐ貯まるっつの」  
「そんな一朝一夕に貯まるわけないじゃんか」  
「お前……夢のねえ奴だなあ」  
「現実主義って言って欲しいですね」  
「ま、そこがお前のいいところだけだな」  
「……………」  
「ん？ なんだよ、その目は？」  
「……気色悪いこと言うなっていう目だよ」  
「ハハハ、たしかにな」

幼い頃の約束……もう、果たすことはできないんだな……。

「……………修哉……………」

言っただけだった。  
お前の痛みと苦しみを。  
いつも微笑み、隠そうとしていたその想いを。

お前が僕を何度も支え、何度も前へ向かわせてくれたように……

僕もお前を支えたかった。少しでも、お前の想いに近付きたかった。

僕は……お前と、同じ位置に立ちたかった。

お前は、僕の親友だから。  
一番の、親友だから

それだけを、あいつに言いたかった。

## 8 6 章：遙か彼方の夢へ 遠い友たちの記憶よ

入り込んでくる強めの風。潮風のように、目を痛ませる。目頭が熱くなるのは、やはり哀しいからだろうか。

「修哉くん……」

崩れた壁から青空を見つめる僕の傍に、空は立った。

「気付いてやればよかった」

呟くかのように、僕は言葉を放った。

「時折、気になってたんだ。あいつに対する、違和感に……」

どこを見ているのか 何を思いつめているのか、あの頃はまったく理解できなかった。でも、それに気付いていながら、僕はあいつを支えることができなかった。それを訊くことさえ、しなかった。「……でも、今さら何言っても、どうしようもできない」

あの頃に戻ることはできない。修哉も、いない。

「だけど……」

それでも、悔いが残る。頭の中では後悔しても、仮定のことを考えてもしょうがないってのは理解できている。

「馬鹿だよ、ホントに」

「空……」

僕は思わず、目頭を押さえた。

こうするほかなかったとしても、どうしてあいつと殺しあわなければならなかったのだろう。ずっと一緒だった、親友のあいつと。

よりによって、修哉と。

あいつは、こうなることがわかっていたんだろうか。いつか相見えることを、知っていたんじゃないのか？

わざわざ僕をレイディアントへ行かせようとしたのは、彼にはまだ「何らかの」理由があったんじゃないだろうか。そう思えて仕方がないのは、修哉がもういないからだろうか……。

「終わったようだな」

この声は……

僕は後ろへ振り向いた。

「……クロノスさん」

どこか涼しげな顔で、僕と空に歩み寄って来ている。

「とうとう、セレスティアルの眼前に来たんだな」

そう言っつて、彼はセレスティアルの前に立ち、それを見上げた。

「……柊修哉 いや、リオン。彼が調停者の力を使えたのには、理由がある」

「理由、ですか？」

僕に後ろ姿を向けたまま、クロノスさんはうなづく。

「彼は、ユリウスたちの叔母『アムナリア』の子孫。たしかに、ヴェルエスの力を持つてはいたが、もともと傍族であり、二千年の間にその血は薄れていった」

たしかに、リサのラグナロクならばともかく、ペンドラゴン家にはそこまで能力がなかったはず。あるとはいっても、微々たるものだ。

「しかし、彼の母は『ニーナ』……君の叔母だよ」

「え!？」

僕の叔母ってことは……僕と修哉は、従兄弟同士ってことか!？

「君の母、リリスの妹さ」

僕と修哉の母はもともと教皇家の直系であったが、女系の教皇が即位することはなかった。そのため、傍系であった僕の父・オデイオン5世が即位し、直系としての流れを組ませるために、結婚したのだという。

「ニーナは時のアヴァロン王太子……ヴェリガンの妻となった」

直系の子供である修哉にも、僕と樹ほどではないが調停者になる権利を持っていたのだ。

「空と修哉くん……従兄弟だったんだ。でも、あまり似てないような……」

と、空は訝しげに言った。

「まあ、似てたら僕もそこはかたなく気付いてたはずだよ。……あいつは、何もかも知っていて、僕たちと付き合っていたんだろうけどな」

「……だったら、ずっと隠そうとしてたんだね。死ぬまで……」

彼女は顔を俯かせた。

普通に接していたはずの修哉が、全てを知っていた。どれが嘘で、どれが本当だったのか、わからなくなっているのだ。

「もしかしたら、ヴェリガンはその頃から知っていたのかもしれないな。調停者という存在と、ロキの力 即ち、『破壊の執行権』が現世に残されていることを」

クロノスさんは、小さくため息をつきながら言った。

「それって、どういうことですか？」

「……樹は闇の調停者でありながら、ロキの解放を目指した。しかし、調停者ならば、わざわざロキの解放を望まなくてもよいはずだ」  
それは、クロノスさんの言うとおりだ。ロキの力を得たのに、どうしてロキの力を望んだのか。

「前の調停者ユリウスは、その権利を執行しないまま死んだ。だが、アイオーン……シリウスは、彼の元素をセレスティアルに転写した。結果、現世に『破壊の執行権』だけが取り残されることになったのだ」

それから長い時を経て、僕と樹が誕生した。僕が権利を持っているのは、前の調停者であるアイオーンがその時に権利を執行していたから。

「肉体的な能力は受け継がれたが、ヒトとしてではなく、物質として移行されていたロキの権利は、受け継がれることはなかったのだよ」

彼は僕の方に振り向き、小さくうなずいた。

「そうすることもまた、シリウスの想定内だったのかもしれない。消し去るうと思えばできたはずのことを、しなかったのだから」

いつか、兄の力を解放することを。

いつか、自分の願いを叶えることを……。

「さて、これから」

クロノスさんが何かを言いかけた瞬間、セレスティアルが輝き始めた。その中心から青い光を放ち始めたと思えば、小さな電流を撒き散らしている。

「な、なんだ？」

さっきまでゆっくり回転していたのに、スピードが増しているように感じる。

「……そうか、結局は予測どおりか」

クロノスさんはそう呟き、セレスティアルを見つめる。

「空、君だけ傍に来てくれ」

と、彼は僕を手招きした。「君だけ」というのが妙に気になるが……とりあえず、僕はクロノスさんの傍に立った。

「どうしたんですか？」

思わず、僕は声を小さくしてしまった。それは、クロノスさんが神妙な顔をしているからだろう。

「とうとう、迎えた」

クロノスさんも、小さくもはっきりとした声で言う。

「何をですか？」

「……約束の刻を」

約束の刻……？ 何度も聞いたけど、それがいったい何を表わすのか、未だにわからなかった。

「それはセレスティアルのタイムリミット。かつて、ユリウスが引き起こそうとしたメルトダウンが、再び始動することを意味する」

「……？」

いまいち、意味がわからない。僕は頭をかしげた。

「ユリウスは世界を滅ぼそうとした。その方法は、このセレスティアルのエネルギーを使うことによる大爆発だ」

「大爆発？ ……こんなものが爆発するだけで、世界を？」

と、僕は苦笑しながらセレスティアルを見上げた。

「セレスティアル 星の遺産は、星の元素『紺碧』のみで構成された物質。そのエネルギー量は、星のエネルギーそのものに相当する」

「……本当なんですか？」

僕がそう訊ねると、彼はうなずいた。

「星の遺産は、各地に散らばる天空石のエネルギーの源。そして、

それを基に造られた『暁の門』……不安定なワームホールを無理やり制御しているのは、これがあるおかげだ。お前も知っているだろう？ このアトモスフィアは、これが核となつて浮かんでいることを」

「……！」

アイオーンがロキの力をわざわざ封印したのは、このメルトダウンを防ぐためだった。すでに始動していたシステムを止めるためには、大きなエネルギーが必要だった。そこで、兄の元素を使って無理やり封印したのだという。

しかし、修哉によつてそれは解かれた。彼の言っていた「終わっちゃいない」というのは、このことだったんだ！

「じゃ、じゃあどうすればいいんですか？ 止めることは、できないんですか？」

「要はシリウスと同じことをすればよいのだが……これもまた、奴の計画の一端。止める術は、ない」

「そんな……！」

ここまで来て、そんなことつてあるか！ これじゃあ、何もできないまま……

「だが、破壊するとなれば別だ」

「え……？」

「私とお前にある『聖魔』は、次元にあつてはならない元素。全てを癒し、全てを壊す能力を持つ力。これならば……」

この力……？ 存在してはならない、ヒトが持つてはならない力。だからこそ、星の遺産をどうにかできるのか？

「……だが、覚悟しろ」

そう言つて、クロノスさんは顔を振つた。

「世界の崩壊は防ぐことができるかもしれないが、アトモスフィアに残った場合、その程度は吹き飛ばされる。それはつまり」

クロノスさんの口から、その言葉が出された。

一瞬だけ、ほんの一瞬だけ心臓が止まった。ああ、そうするしかないのかつて。

「……やるか？」

クロノスさんはすぐに訊いてきた。少しくらい、考えさせてくれて言いたいもんだが　まあ、彼も僕の答えなんて知っているから、そう言ってきたのだろうけど。

「やりますよ。抗うって、決めましたからね」

そう言って、僕は微笑んだ。クロノスさんも、フツと笑う。

とうの昔に覚悟なんてできていたし、怖いなんて思っちゃいない。だって、僕はそうならないって確信しているから。

約束を、破りたくないから。

僕はみんなの方に顔を向け、歩み寄った。

「ソラ、お前……」

レンドは何かを言いかけたが、自らそれを止めた。

「これから、みんなにはここから避難してもらおう」

「……えっ？」

「僕とクロノスさんの2人で、セレスティアルのメルトダウンを防ぐ。けど、完全に抑えることはできないと思う。だから、ここには危険なこと」

「……吹き飛ばす、ということか？」

デルゲンは、落ち着いた声で言った。その問いに、僕は小さくうなずいた。

「そうか……」

「なるほど、な」

レンドとデルゲンは同じようにうなずき、納得したようだった。けど、他の3人はそうでもない。

「どういうこと？　ねえ、空。どういうことなの？」

空はなんとなく理解しているはずなのに、それを見ようとしない。少しだけ微笑んでいるように見えるその表情こそが、それを物語っている。

「ソラさん。一体、どういうことですか？　吹き飛ぶって……」

「……まさか……」

アンナはまだよくわかっていない。シェリアの方が、先に現実を悟ったようだ。

「ここは危険だから、先に避難しておいてほしいってことだよ」

僕がそう言うと、落ち着きの無かったみんなの動きが止まった。

その中で、レンドとデルゲンだけが僕から目をそらしている。

「空は？　空はどうするの？　一緒に……逃げるんだよね？」

彼女は再び戸惑った様子の微笑みを浮かべ、言った。

「みんなで脱出するんですよ？」

アンナもまた、期待と不安を混じらせた表情を浮かべている。彼女たちの言葉に対し、僕はゆっくりと顔を振った。

「僕はここに残るよ」

「えっ？」

空は目をパチクリさせた。そして、

「どうして？　どうして空は逃げないの？」

と、あまりにもわかりきった質問を投げかけてきた。何で僕だけが残るのか、理解しているはずなのに。

「わかってんだろ？ 理由なんて」

「……………」

僕はせめてはっきりと言わず、彼女自身に問いかけることにした。その方が、彼女を絶望させないんじゃないかと思ったから。

でも、違った。彼女は僕を直視したまま、その体を小さく震わし始めていた。

「どうして？」

少しの間続いていた沈黙を破ったのは、その言葉だった。

「どうして、そういうことをするの？」

彼女はそう言って顔を上げ、僕を睨みつける。空色の宝石が、僕を否定しようとしている。

「……………なんでって、そりゃ」

「空が言ったんじゃない！」

僕の言葉を遮り、彼女は声を上げる。その瞳に、溢れんばかりの涙を浮かべて。

「自分を犠牲にするようなことはするなって、空が言ったんじゃない……！」

このフロアに入り込んでくる風になびかれる彼女の長い髪を、自分で大きく顔を振って更に揺らす。

「私やりサさんにはそういうことを言っつて、自分は平然とするって言うの？ 矛盾してるよ！ そんなの……！」

彼女は僕の胸に、手を叩きつけた。

「たとえ、それがみんなを救うことになっても、残されたみんなは…… 私たちは悲しむんだよ……！」

何度も何度も、彼女は僕の胸を叩く。精一杯、瞳にある雫を零さないようにしながら。

「どうしてそれを考えないの？ どうして、誰かが苦しむことになるって考えないのよ!？」

「……………」

「ねえ！ 何か言つてよ！ ちゃんと、理由を説明してよ!！」

僕はただ、必死に言葉を放つ彼女を見つめていただけだった。彼女が今言いたいこと全てを吐き出す、その時まで。

何も言わない僕に対して、彼女は手を打ちつけるのを止めた。そして、強い眼差しで再び僕を突き刺す。

「約束したじゃない」

そう言つて、空は小さく顔を振つた。

「ずっと、傍にいてくれるって……………」

彼女の声が、揺れ動き始めていた。微かに。

「あの時…………約束した。終わりが来る、その時まで一緒にいるって…………傍にいてるって!！」

ああ、そうだな。

大都力ナンの地で、そう約束したよ。それは僕の願望であり、希望でもある。今も、それに変わりはない。

それも、彼女はわかつているはず。わかつているはずなのに、僕の心を揺さぶろうとしている。本意ではないのが、よくわかる。

「だから…………残るなんて言わないで!！」

そして、彼女は僕の胸に顔を沈ませた。泣いている顔を見せず、ただ嗚咽だけが聴こえてくる。

「お願い…………い。傍にいて…………ひとりしないで……………」

さっきまでの強い声は消え、弱弱い声だけが僕の胸に木霊する。そんな現状に対し、僕は「彼女」らしいと思つてしまった。それを言ってしまうと、きっと彼女はポカンと口を開けて、戸惑うのだから

うけれど。

僕は上空に広がる青い風景に目をやった。

自分はどうしたいのか。

いつも求め続けていた答えは、ずっとそこに在り続け、僕が触れるのを待っていた。今もまた、あの時と同じように僕が掬い上げるのを待っている。

僕が彼女に告白する時と、同じように

僕はそれに触れた。怖いなんて、思っぢゃいない。

「空」

僕は彼女の名を呼び、そっと抱き締めた。

小さな体　そして、柔らかな髪。ふんわりとした長髪で、生まれつき毛先がパーマをかけたかのようにくるんとしている。

「僕は僕でしかない」

そう言つと、彼女は体の震えを止めた。それと同時に、僕は優しく彼女の背中かを叩いてやった。カナンの時みたいに。

「自分と引き換えにするなんてこと、考えてないよ。んなの、絶対

「にやりたくない」

「……………」

自分を犠牲にするほど自分は立派でもないし、する勇氣もない。そうすることは、美德でも何でもないのだから。

「僕は、自分を犠牲にしてどうこうするんじゃない。自分が何をできるのか……はつきりと示すだけだ」

リサと同じように、精一杯やるだけ。

「それに、約束を反古にするつもりはないし、こんなところで死ぬつもりもない」

すると、彼女は顔を上げて僕を見上げた。大量の雫を流しながら。

「でも、残ったら……そうなるじゃない！」

「そうだな。そうかもしれない」

うん、と僕はうなずいく。

「だったら！！」

僕は顔を振った。彼女の言葉は、それ以上出て来れなかった。

「そうじゃないかもしれないじゃないか」

僕は微笑みながらそう言った。彼女の顔が、硬直したかのように固まる。

「絶対にそうなるとは限らないだろ？」

物事は何でも100%ではない。方程式で完成されていないのだから。まあ、確率としては、なってしまう方が高いだろうけど。

「でも……」

「でもないっつの」

と、僕は彼女の脳天に軽くチョップをお見舞いした。

「な、何するのよー！」

「信じろよ。少しはさ」

怒りかけた彼女の表情が、再び止まる。その頭を、僕は優しくな  
でた。

「それに、約束したんだ。海と」

ガイアに戻った時、そう約束した。絶対に、空を連れて帰るって。  
「ひとりにしないで」と言ったのは、空だけではない。彼女もまた、  
孤独に苛まれていた。彼女の想いに応えることのできない僕にと  
って、空を彼女の下に帰させることは、一つの償いでもある。

空をあそこへ 長束町へ戻すことは、この旅の目的でもあった  
のだから。

「あいつが、お前を待ってる。お前の帰りを」

「……それは、空に対しても同じでしょ？ 海は、空のこと……」  
彼女は俯き、そこから先の言葉を繋げることができなかった。そ  
れはきつと、海の気持ちを理解しているからだろう。

「僕は少し遅れるだけさ。ほんの少し、な」

完璧にそうなのかどうかはわからない。知っているのは、いるか  
どうかもわからない神様だけなのだから。

「ちゃんと、約束は守るよ。絶対に」

「……………」

「それにさ……………ええ……………つと」

この後、僕は僕らしからぬことを言ってしまう。それはすごく恥  
ずかしく、通常は口に出さない言葉。そうであるからこそ、大事な  
時に取っておくべき言葉だったのか。

今まで、ほとんど言ったことの無い言葉。それに近い言葉は  
言ったことがあるかもしれないが、はっきりと告げたことはない。

「まあ、なんつーかさ……………」

ぼりぼりと、僕は頭をかく。そんな僕を、彼女はずっと見つめて

いる。

もしかしたら、この時のために言わなかったのだろうか。

後になってそう思えるのは、自分が幸せだったからなのかもしれない。

「お前のこと、愛してるから」

気付いた時には遅い。なんでもいきなりこんなセリフを言ってしまったのか、僕にはわからなかった。ただ、恥ずかしさだけが尾を引いている。

「……………」

空はただ、僕を見つめている。見られれば見られるだけ、恥ずかしさが増していく。彼女からの視線から逃れるように、僕は双眸を辺りにチラつかせていた。

「私も……………」

彼女は、優しく微笑んだ。まつ毛に、涙の雫が付いたまま。

「空のこと、愛してるよ」

僕とは違い、一切恥ずかしがらずに言う彼女は、どこか凛々しく見えた。それが、彼女のすごいところなのかもしれない。

僕は彼女を抱きしめた。彼女もまた、同じように抱きしめてくれた。そして、ありったけの想いをその双眸から流し始める。

「……………ありがとう」

僕は彼女の耳元で囁いた。修哉に刺された時、ちゃんと届けられなかった、あの言葉を。

……………やはり、以前思ったことは当たっていた。

僕は彼女のために存在していて、彼女の存在は僕の存在その

もの。

「お前らしいと言えば、お前らしいけどな」

レンドは僕の前に立ち、小さく微笑む。どこか恥ずかしげに、自分のほほを指でかいている。

「この旅の目的は 空ちゃんを救って、星を救うこと」

そうだよな？ と言って、彼は僕を見る。

「お前が犠牲となって、星を救うというのなら、止めはしない。それが、お前の選んだ道なんだからな」

「……………」

「俺にも…………誰にも、それを止める権利なんてありやしない」

彼は目を閉じた。何かを感じ取るかのように。

「だけど、俺はお前にこんなことをして欲しくは無い。…………絶対にな」

そして、彼はまぶたを開け、穏やかな視線で僕を見つめる。そこには、いつもの彼の陽気さは感じられなかった。

「お前との旅、かなり苦労することばかりだった…………。何度も死にそうになったし、怖い思いもした」

微笑む彼の顔の中に、どこで恐怖を感じたんだろうって思ってしまった。それを言ったら、失礼かもな。

「お前に出逢わなければ、俺はきつと何も知らないまま、海賊とし

て生きていたんだろうな。……そうじゃなくて、本当に良かったって思える」

もしもの未来。もし、みんなと出逢わなかったら……

「本当なら知るはずのない世界のことを知って、この星のことを知って……。俺たちは、もう一度未来あしたを生きようって決心できたんだな」

誰かに傷つけられて、誰かに怨まれて。

僕たちは、それでもこの世界で歩んで行こうと決めた。そこには、きっと求めるものが在るから。

「お前と出逢えてよかった。お前と旅をすることができて……。本当に良かった。ありがとうな、ソラ」

そう言って、レンドは拳を突き出した。

「お前といると、楽しかったよ」

ニツと笑い、彼は白い歯を見せつける。

「レンド……ありがとう。僕も、レンドと一緒にいて楽しかったよ。まるで、友達みたいだった。年上なのに、変な話だな」

ホント、変な話だ。どうしてか、簡単に話せるようになっていたもんな。きっと、それは彼の持つ雰囲気のおかげなのだろう。

「ハハハ、違いねえ」

レンドは髪をくしゃくしゃにしながら笑った。

「無事に生きて帰ったら、一緒に酒を酌み交わそうぜ」

「……僕は未成年ですけど？」

「おいおい……こんな時に、んなこと言うかあ？ 普通よお」

さすがのレンドも、苦笑이었다。

「ハハハ、そうだな。でも、いつかしたいもんだね」

酒と言えば、一番最初に思い出すのは、そう、ミレトスだ。初めて港町ってのを見たし、飯屋に行ったし。うわっ、すげえ懐かしく感じる。

「酒飲み勝負……あれが、僕たちの出逢いだつたもんな」

ミレトスの飯屋。酒飲み勝負をしたヴァルバ。アンナがちよつかい出され、対決になった時、僕は無理やりヴァルバを矢面に立たせたんだつたっけな。あいつ、かなり焦つてたもんだ。

その表情が、昨日のように思い浮かぶ。あの時、「船に乗せてやるよ」と言ってくれた、レンドの表情も。

「だったな。……いつかまた、あん時みたい……」

僕たちはうなずき、彼の拳に自分の拳をぶつけた。一種の挨拶みたいなもんだ。

「俺も、レンドと言いたいことは大体同じなんだが……」

デルゲンは照れ臭そうに頭をポリポリとかいていた。

「俺の人生で、起点となった人物は二人いるんだ。それはレンドと」  
そして、彼は僕をチラッと見る。

「お前だ、ソラ」

そう言って、彼は僕から再び視線をそらした。

「俺の価値観すべてを変え、俺の新しい生き方を見出させてくれたのがレンドだ」

昔を懐かしむかのように、彼はフロアの先を見つめる。どこか、微笑んでいるようにも見えた。

「そして、俺にとつて大切なものは何なのかを気付かせてくれたのは……ソラ、お前さ」

彼はゆっくりりと、僕に顔を向けた。シュレジエンの人にとっては珍しい、翡翠の瞳。

「俺は 平民出身だからか、常日頃から平民なんてのは生きててもしょうがない……とかつて思ってたんだ」

彼は幼い頃に両親を戦争で亡くし、妹と共に孤児院に預けられ、そこで育ったという。

「平民には平民の、高貴な者には高貴の者たちなりの人生があつて、決して相容れぬもの同士、だと思っていた」

すると、デルゲンはフツと笑った。まるで、そう考えていた頃の自分を嘲笑するかのよう。そうかと思えば、彼は再び僕に微笑みを向ける。

「だが、そんな考えは貴族出身のレンドによつて変わった。レンドのおかげで、俺は自分の価値を改めることができた」

だからこそ、レンドと共にいようと決めた

デルゲンは天井を見上げて、そう言った。

「そして、お前が理不尽な現実に対して、必死に抗っている姿を見ていると……俺は、この世に覆せないものなんてないんじゃないかと思えた」

彼は小さく顔を振り、目を瞑る。

「……絶対的に覆せないものも、あるのかもしれない。だが、結果は決して悪いものになるとは限らない。たとえ、俺たちは一人一人がちっぽけであつても……一つ一つが弱くても、互いに寄り添うことで真実を得ることができる」

掴み損ねた、ちっぽけな欠片。それはきつと、自分たちが生まれ出でたその時から、握りしめていた種なのかもしれない。

「この星に生まれたんだから、一緒に生きていっていいんだよな？」

俺たちは「

……ああ」

僕はうなずき、彼に右手を差し出した。

「デルゲンは、僕にとって兄貴みたいな存在だ。厳しいことは言うてくれるし、優しいことも言うてくれた。……今まで、ありがとう」「ハハ、よせよ。俺はそんなに立派な人間じゃないっての」「デルゲンは照れながらそう言っつて、僕と握手を交わした。

「いつか、お前ともう一度旅がしてみたいもんだ」

「デルゲン……」

すると、彼はニッコリ微笑み、僕の中で泣いている空の肩をちよんちよんと叩いた。彼女が振り向くのと同時に、

「そんな時は、空ちゃんも一緒だからな」

と、彼は言った。

「約束な？」

「デルゲン……さん」

空は泣きながらも、小さく微笑んだ。

「そうだな。いつかきつと……」

いつになるかわからない。それでも、僕たちは心を繋げることができるだろう。

それだけは、はっきりとわかること。

「ソラさんと出逢って、もう一年……一年も経っちゃったんですね」「ああ……そうだったな。もう、そんなに経ったんだな」「アンナに言われ、僕はあの頃を回想した。この世界に降り立ったその日に、アンナと出逢ったんだよな。

「初めて会った時は変な名前をした人だと思ってたし、ヴァルバさ

んもふざけてたし」

クスクスと、彼女は口元に手を当てて笑った。

「ハハ、そうだったな」

僕もあの頃のヴァルバを思い出し、笑ってしまった。あの頃、僕はあいつのことを「年齢詐称」だかつて思ってたもんだ。

「いろいろなことがありました」

そう言っつて、彼女は祈るかのように手を合わせた。

「お父さんやお母さん、お姉ちゃんのこと……国々のことや、世界の秘密。そして、いなくなってしまった人たち……」

優しく言葉を放つアンナ。いつにも増して、穏やかな彼女の雰囲気  
気が僕を包み込む。

ああ……僕は、いつも彼女のこんな雰囲気  
に救われていたんだ。

心が、ゆっくりと癒されていくかのような感覚。幾度となく、僕を救ってくれた。

「私にとつて、辛いことばかりでした」

彼女は、哀しげな瞳で床を見る。

「……でも、真実を探し求めるためにソラさんたちに付いて来たこと……決して、後悔していません」

そして、彼女は首を振る。

「ううん、すごく……すごく、大切なものを見つけられた旅でした」

リサと同じエメラルドグリーンの瞳　永遠の巫女の証であるそ

の双眸で、彼女は僕を見つめた。

聖女サリアの力を受け継ぐ証、その宝石の瞳で。

「お姉ちゃんも、リサさんも……ヴァルバさんも、どこかで星と私たちの未来を……祝福してくれてますよね」

「……ああ。きつと、な」

そううなずくと、アンナも同じようにうなずいた。そして、彼女は再び僕に微笑みかける。

「ソラさん、私はあなたのことが好きです」

はつきりとした口調で、彼女は言った。満月に照らされるリーベ

リアの草原の時とは違い、彼女には涙もか弱さも見えない。  
アンナは、空に対して小さく頭を下げる。

「ごめんなさい。私はやっぱり、彼が好きです」

彼女は空にはっきりと言った。申し訳ないような感じではなく、誇りさえ感じるような面持ちで。

そう、誰かを好きになることは罪でも何でもない　普通のことなのだ。

「アンナ……」

そんなアンナの意思を、空はしっかりと受け止めていた。それに応えるかのように、アンナはニコツと笑う。

「……だから、信じてます」

彼女は、僕に顔を向ける。

「あなたは、生きて帰って来るって」

レモン色の長い髪が、優しく揺れる。初めて会ったあの時とは違い、少しだけ大人びた表情。

時間は、たしかに過ぎて行っていた。彼女を強くしながら。

「いつかきつと……ソラさんに負けないくらい立派な人を見つけます。そして、今回くらい大きな恋をしたいです」

「……アンナならできるよ。君には、多くを愛せる力がある」

ふわりと流れ込んでくる想い。それは、彼女の持つ「治癒」の元素の為せる業なのかもしれない。

「ええ、きつと」

自信を持って、アンナは答えた。

「アンナ……今まで、ありがとう。君がいたから、乗り越えること

ができたことがたくさんあった。多くのことを、教えてくれた……」  
そう言うと、アンナは首を振った。

「それは、私のセリフですよ」

クスツと笑い、彼女は顔を振る。

「ソラさんは、いつだつてみんなを護つてきました。あなたがいたから、私は大切なことを知れたんです。だから……」

何かを言いかけた瞬間、彼女の声が震えた。それを隠そうと、アンナは視線をそらす。

「ダメですね、私。これ以上、甘えちゃいけないのに……」

ほんの少しだけ、彼女の瞳が揺れていた。それに気付いた彼女は、溢れだす前に目の辺りを拭う。

「……またいつか、フィアナの村で食事がしたいな。おばさんの味、結構いけてたからなあ」

この世界での初めての食事。それは、あの村での料理だった。

あの時、僕はガイアとレイディアントは近いものだと感じた。

「ソラさんらしいです。いつでも来てください……私も、準備して待つてますから」

アンナは笑い返してくれた。そうしてくれることが、この世界で恐怖を感じることを滲ませてくれる。

後にも先にも、彼女のような「聖女」に出逢うことはないのかも  
しれない。

「残るんだね」

シエリアは、下から僕を見上げていた。

「ああ」

僕がうなずくと、シエリアは俯く。

「……短い間だったけど、ありがとね。特に、役には立てなかったけどさ」

「ハハ、そこところは気にしなくていいよ。だって、シエリアちゃんはまだ子供だもんよ」

僕はシエリアの頭の撫でた。すると、彼女は顔を赤くして僕を睨みつける。

「こ、子供扱いするなって！」

「そういうこと言う間は、まだ子供なんだよ。」

「……むう……」

シエリアは子供らしくほほを膨らませ、再び俯く。

幼いながらも、多くのことを知った少女に対して僕が言えることは……一つだけだ。

「ありがとう、シエリア。生き延びれたこの世界の中で、たくさんの美しいものを見、成長してくれ……。お前みたいな子供にこそ、いなくなった人たちの想いを繋げられる可能性があるんだからさ」

これから何をするのか、何を為すのか。それを定めるのは、本人でしかない。誰にも、それに干渉する権利はない。

「……ソラ……」

シエリアはぼろぼろと涙を流し始める。そこには、いつもの少年らしい少女の姿はなかった。

「……死ぬなんて、僕は許さないからな」

すると、シエリアは顔を上げて僕を再び睨みつけた。

「死んでもいい……なんて考えるなよ！ 死んだら、もう何もできないんだ！ 絶対に生き延びてやる！！ って考えるんだぞ！！」

いきなり大声で言ってくるその様は、驚かされるものがあつた。

「……驚いたな。ガキのくせに、なかなか」

「ガキって言うな!!」

その時、シエリアは僕のすねを思いつき蹴り飛ばした。

「い、いつてえ……!!」

「ふんだ! 絶対に、空姉ちゃんの所に帰るんだぞ!? 約束だからな!!」

シエリアはふんぞり返るくらい、威張った調子で言った。さつきまで女の子らしかったのに、すぐに男の子っぽくなって……。将来、リサみたいになるんじゃないかと思ってしまう。

「まったく、言われなくてもわかってら」

そう言つて、僕は再び彼女の頭をなでた。

「……約束、だからね……」

再び、少年面の少女は本物の少女に戻つた。何度も何度も涙を拭い、僕を見つめる。

「元気だな。シエリア……いや、シルヴィア」

小さくも、力強くうなずいた少女。泣きそうになったら、風を呼んでみると良い。きっと、シルフェ風精たちが歌ってくれるからさ。

僕はみんなの方に向き直り、彼らを見回した。彼らもまた、僕を見ている。

「じゃあ、空を頼む。ガイアに、帰してやってくれ」

「ああ、任せろ」

レンドがそう言つと、みんなは小さくうなずいた。

「……空」

僕は彼女の肩に触れ、彼らの所に行くように促した。それでも、彼女は顔を俯かせたまま、離れようとしなない。

「ほら、早くしないと」

セレスティアルが消えれば、暁の門は消えてしまい、確実に帰ることができなくなってしまう。

「……ねえ、空」

彼女は俯いたまま、僕の名を呼ぶ。

「私たち、きつと会えるよね？」

涙声ではなく、はつきりとした口調。

「また、会えるよね？」

彼女は顔を上げた。そこには、リサと同じような見たこともない、天使を思わせるような微笑みがあった。それは、自分の奥底にある「何か」を揺さぶる。そう確信させる。

星に愛されし少女と、星に惑わされた少女

「だから……待ってる」

涙をこぼしながらも、彼女は言う。その、女神のような笑顔で。

ああ、そうか。

はっきりとは言えない。絶対にそうだとは言いつれぬけれど、微かに感じるこの想い。それは、遙か彼方に飛び立ったはずの願い。約束を紡ごうとした、一つの希望。

だからこそ、彼女は僕の目の前に現れた。

「ずっと待ってるから。空が、帰って来るまで……」

「空……」

思わず、僕は微笑んでしまった。

お前を好きでよかった。お前を愛してよかった。

誇りを持って、それを言えるよ。

僕はクロノスさんの方に顔を向けた。

「クロノスさん……お願いします」

「ああ。シュレジエンへ飛ばしてあげよう」

クロノスさんは手をかざし、詠唱を始めた。すると、みんなを囲むようにして光の円環が出現し、それが消えるのと同時にみんなは消えた。

みんながいた場所を、僕はずっと見つめていた。

名残惜しい、とはこのことなのだろう……。

僕は、何も言わずに上を見上げた。

空。青い空。ただそこに、広がる風景。

そして、残された僕が知るべきことは

「クロノスさん。あなたに、訊きたいことがあります」

僕はクロノスさんに背を向けたまま言った。

「あなたは、一体誰なんですか？」

何度も訊いてきた質問。それでも、納得のできる内容ではなかった。

「あなたは、この世界の人間でも　ガイアの人間でもない」

彼は何も言わない。ただ、僕へ向けている視線があるってのを感じられるだけ。

「僕の一部となったバルドル……彼のおかげで、あなたがどういう存在なのか……なんとなくですが、わかりました」

僕は振り向き、クロノスさんを見た。

僕に融合したバルドルが告げている。彼は違う。僕たちとは、違う世界のヒトだと。

「教えてください。あなたは、一体誰なんですか？　クロノスさん

……いや、『ズルワーン』クロノ『ヴェルエス』」

そう言うと、クロノスさんはフツと微笑んだ。

「その名を知っていたか。……懐かしいものだ」

微笑みながら、彼は修哉が作った壁の穴から外を見つめた。

「ここまで来たのだから、隠す必要もないようだ」

僕は内心、ドキドキしていた。たぶん、僕が知らない謎の中で最も大きいのはクロノスさんのことだから。

「……君の言うとおり、私は二つの世界の人間ではない。……いや、詳しく言えばこの時代の人間ではない、だな」  
彼は僕の方に向きなる。

「私は、新暦7655年のレイディアントから来た、未来人だ」

「えっ……！？」

クロノスさんはうなずいた。

「……私が世界を分岐させた張本人だ」

「……！」

僕は息を飲んだ。

「あなたが……ガイアを生み出したんですか！？」

樹やシュヴァルツが言っていた、次元を混沌させたヒト。

「……新暦7655年、レイディアントは滅びてしまう。ヒトによつて」

世界の技術は進歩し、未曾有の戦争が起きた。それはこの星だけでなく、すでに人類は宇宙空間にまで手を出していたため、数々の惑星で戦乱が行われた。当時の技術によって、瞬く間に多くの惑星ヒトが死んでいったという。

「その戦争を打開するために、当時の枢機卿代理……ジークムントという人間によつてある計画が遂行され、その過程の中で次元の制御実験が行われた」

セレスティアルを用いたその計画は、詳しくは知らないのだという。ただ、当時の人類を救うための方法ではあったと、クロノスさんは言った。

「しかし、それによつて世界は消えた。星だけでなく、存在するものの全てが」

失敗したのか、成功したのかわからない。だが、カインの末裔で

あるクロノスさんだけが、なぜか生き残っていたのだという。

「……私は焦土と化した星を見て、悟った。ヒトは、いくら年代を重ねても進化しない。進歩していない。ただ、無為に繰り返すだけ。ただ、それだけなのだ」と

それが、クロノスさんは許せなかった。どうにかして、それを変えようとした。

「私は最後の 調停者 として、己の力を使ってその年代から二万五千年前……創世時代初期といわれる時代に遡った」

当時の世界もまた、戦争に明け暮れている時代だった。進歩した科学技術を持つとある帝国に、クロノスさんは潜入したのだという。

「そこに、セレスティアルがあつた。当時は、『G A I A』と呼ばれていたがな」

彼はそれを使って戦争を終結させ、後にセレスティアルを破壊しようとした。それは兵器として使うのではなく、抑止力として。

しかし、セレスティアルに魅せられた皇帝がそれを邪魔し、自国に攻め入って来た諸国を滅ぼすため、G A I Aを起動した……。

「兵器として使用されたセレスティアルは、瞬く間に世界中を破壊させた。他国だけでなく、その帝国さえも」

クロノスさんは消滅し、精神だけが取り残されたのだという。

「……セレスティアルは消えなかった。滅びの未来を変えることはできず、更には次元の混沌を生み、君の住む次元を創り出した」

約二万五千年前に、ガイアは生み出されたってことか……。

「それだけでなく、新しい次元は魔法が存在しないのにレイディアントよりも早く進歩し、早くに滅びを迎えることとなっていた」

それは新しい暦の時代になって、千年後だという。それがいつなのかは、詳しくはわからない。

「そして、私によって人間の運命を変えてしまった。次元が歩むべき道を狂わせてしまった。……そのため、罰を与えられたのだ」

「罰、ですか？」

クロノスさんは青空を見上げた。

「……私は時の呪縛により、リーヴェに堕ちなかった。永遠に魂は消滅することは無く、時が流れるのをじっと待ち、世界の事象に関わることもできなくなってしまった」

彼は、顔を小さく振った。

「想像できるか？ 死 というゴールの無い、永遠の旅路……人に触れることも話すこともできず、未来永劫……一人で彷徨い続けるという苦痛を……」

「……………」

じゃあ、この人は約二万年もの長い間、ずっと一人で……。

「私の自我と想いが世界に溶け込むようになり、私と同じ血を受け継ぐ者たちに、その光景を見せることとなった。それこそが、シュヴァルツとバルバロッサの見た、未来の姿なのだよ」

彼らが言っていた「滅びの世界」の姿は、クロノスさんが見たもの。彼が見た当時の光景が、夢として彼らに映し出されたんだ。

「……でも、どうして僕たちにはあなたが見えるんです？ どうして、話すこともできたんですか？」

「それは、君が未来を変える可能性を持つ存在だからだ」

「……………」

「調停者とは、未来を変えることができる唯一の存在。そして、リユングヴィの血を受け継ぐ人間やその人間に関わる周りの人間にも、その影響のせいか私を見たり、話したりすることができなのだ」

僕がこの世界の降り立ち、わかるはずの無い言語と文字が理解できたのには、調停者になる権利を持ち得ていたことも関係しているのだという。樹もそうだったから。

「ただ、それは私たちの知る由の無い、別の存在によって操作させられているのかもしれないが……」

クロノスさんは僕に背を向け、セレスティアルの方へ歩き始めた。  
「リサと日向姉妹もまた、そういった『何か』に操作させられていたのかもしれない」

「……クロノスさんは、知っているんですか？ 彼女たちがなんなのか……」

そう問うと、彼は顎に手を当てて上を見上げた。

「リサと日向姉妹が似ているのは、同時代に誕生した別次元のヒト……ということだが……」

つまり、リサはレイディアントでの『空と海』で、空と海はガイアでの『リサ』らしい。だが、それだけではいまいち納得できないところがある。あの三人が似ているのは、それだけではないはずだ。  
「ガイアで誕生するはずだった『カイン』となり得るヒトの末裔が日向姉妹……ということにしても、『永遠の巫女』がガイアで誕生するはずはない」

巫女は聖女サリアの末裔でかなり得ないのだという。

「シリウスは、計画のために従妹のサリアのDNAに細工を施した。ティルナノグで開発された、特殊元素の情報をインプットし、女性だけが持つ因子によって、巫女として覚醒するように」

そう、ガイアにはカインとなり得る存在がいたとしても、サリアのように何かをされた人間がいたわけじゃない。だから、ガイアに巫女が誕生するはずがないのだ。

「じゃあ、空と海は一体……？」

「……私もわからない。遙か古……気の遠くなるような時代に、何か起きたのはたしかだ」

何か……あつた？ 修哉の言っていた、「アベル」とかに関連しているのか？

「それこそが、『原初のヒト』と『原初の人類』と呼ばれる、謎の人類に關係しているのかもしれない」

イヴ、イヴズ。

……アベル。

何かが、胸の中をよぎる。切ないような、苦しいような……。

「わかつているのは、その力のほとんどを持つのが日向空であり、  
微々たるものを持つのが『青海の巫女』 日向海だということだ」

「！！ あいつも、巫女だったんですか!?!」

「ああ。姉は星の元素を、妹は生命の元素を持っていた。能力差は、  
かなり大きいかな」

海がさらわれなかった理由は、そこだった。樹は、エネルギー量  
の多い空を選んだんだ。

「いずれ、わかる時が来る。彼女たちは、ある意味でお前と同じ」  
普通のヒトではない何か』なのだから」

「……………」  
誰かが言っていた。

調停者と星の幼子。それは、対となっていると。

それがわかるのは、まだ後のことだった。

「さて、そろそろ取り掛かるとするか」

そう言って、クロノスさんはセレスティアルに触れた。その瞬間、  
さっきよりも大きな電流が辺りにほとばしる。いつの間にか、回転  
の速度も速くなっているようだ。

「私は、ずっとお前たちを待っていたよ」

バチバチと電流が鳴る中、眩くかのように言う。

「この世界の未来を変えることのできる、君たちを」

「……………」

「きつと、こつすることが……私が望んでいた『夢』なのだろうな……」  
遙か未来から、遙か過去より願い続けていたもの。  
それは、朽ちることなくそこに在った。  
まだ見ぬ、夢の果てを望もうと。

「いいか？ 自分の力を放出する時のように、セレスティアルにぶつけるんだ」

「はい」

僕はこくりとうなずき、精神を集中させた。

「……準備はいいか？」

僕は大きく息を吸い、大きく息を吐いた。

「はい！」

クロノスさんはうなずき、両手をセレスティアルにかざした。僕も、セレスティアルに手をかざす。

「さあ、行くぞー！！」

「はい！！」

僕は気を集中させ、両手からエネルギーを放出させた。クロノスさんも同時に、エネルギーを放出させる。

すると、セレスティアルから放たれる電流が僕たちを包んだ。ビリビリする。いや、ちくちくする。

「くっ……！！」

やっついてわかる。セレスティアルのエネルギーは……半端ではない。とんでもないほど大きい。二人の力を、軽々と上回っている。「これは、想像以上だな……！！」

クロノスさんは苦笑しており、このエネルギーには驚いていた。いつも平然とした表情をしている人が、この時は苦しそうに顔を歪

めている。

激しい音が、このフロアに駆け巡る。それに伴い、セレスティアルの光が増し、地響きが起きているかのように全体が揺れ始めた。セレスティアルから放たれるエネルギーが、僕たちを襲う。すると、腕の血管が大きく浮き出し、破裂した。宙に血が舞い、腕に激痛が走る。

「ぐっ！！　いつてえな……こんなにやるお！！！」

腕が震える。勝手に震える。怖いからだとか、そういうものじゃない。強大なエネルギーに反動して、体が反応しているんだ。

星と同じエネルギーを持つものと、たかが人間二人の力の差は歴然としている。さすが星の生み出した産物……と言いたいところだが、そうもいかないってのがこっちの事情。こんな空の上で、死ぬわけにはいかない。

約束したから。みんなと。

あいつと……。

「だあーくそ！！　いちいち粘ってんじゃねえ！！！」

痛みを堪え、僕は叫んだ。同時に、セレスティアルに蹴りを入れてしまった。

「くるくる回転して、我慢すんな！　ここだけぶっ飛ばして、お前だけが消えちまえてんだ！」

ずっと一緒にいると、歩いて行こうと約束した。

帰って来ると、約束した。

絶対に生きると……約束した！！

「とつとつと、ぶっ壊れちまええ！！！」

頭の血管が切れてしまいそうなくらいに、大声を上げた。声を出せば、さらに力が出る気がする。要はハンマー投げの時と一緒だ!!  
「うらあアア!!!!!!」

「……いいぞ、これなら!!」

セレスティアルが激しく回転する。メルトダウンも、間近だ。だけど、これが爆発するのと同時に、本当に死ぬかもしれない。さすがに、今回はあそこから戻っては来れないだろう。

ああくそ、何となくそれを察知してしまう自分が嫌だ。

何もわからず、ただ全力を尽くせただけならば、救いようがあるつてのに。

あーあ、さよならくらい言えばよかつ

「死のうとするな」

いきなり、後ろから声が聴こえた。この声は

「樹!!」

振り向くと、そこには樹が立っていた。白いスーツはボロボロで、血で赤く染まったまま。だが、傷はほとんどが癒えているようだった。

「どうして……お前……!!」

「……」

樹は何も言わず、僕の傍へ歩いてきた。そして、同じように手をかざす。

「兄さんは僕に勝ったんだ。何が正しくて、何が間違いなんてどう

でもいい。僕がそうしたいから、そうするだけさ」

「樹……」

僕は、顔がほころんだ。樹が、僕に協力してくれるなんて。うれしさのあまり、泣いてしまうそうだった。

「だが、その前にやっておかないとな」

すると、そのかざした樹の手から何かが具現化される。

ティルフィンゲ！？

その瞬間、樹はティルフィンゲを僕の足に突き立てた。

「ぐっ！！？」

僕は、思わずその場に膝を付いた。

「樹……お前、何のつもりだ！？」

顔を上げ、僕は樹を見た。彼はどこか、微笑んでいるように見える。

「どうするも何も、見てわからないか？」

「な、なん」

樹はティルフィンゲを突き立てたまま、僕の胸倉を掴む。

「すぐにガイアへ送り帰してあげたいけど、ほとんど魔力が無いから我慢してくれよ」

そう言っつて、樹は苦笑した。

わ、笑ってる場合じゃないだろ！？

「樹、何をするつもりだ！ 止める！！」

そう言っつても、樹は手を離そうとしない。僕は、クロノスさんの方に顔を向けた。

「クロノスさん！！ 樹を止めてください！！」

「……………」

クロノスさんは何も言わず、僕を見ていた。その手を、セレステ

イアルにかざしたまま。あの紺碧の双眸が、悲痛な思いを物語っている。

「……すまないな」

まさか、最初から……!?

「そついうことだ」

樹は僕の足からティルフィングを抜いた。

「!!! いつ」

言いかけた瞬間、樹は修哉が壊した壁の穴から、僕を投げ飛ばした。僕は、空の中へと飛ばされたんだ。

「じゃあな。空と海に、よろしく言っておいてくれ」

遠のいてゆく天空に浮かぶ宮殿。  
遠のいてゆく、二人の姿。

「さようなら、兄さん」

樹は笑い、手を振った。

今……そんなことをする時じゃないだろ!?

「樹……樹、樹!」

僕は落ちていく中、必死にもがいた。だが、みるみる宮殿は遠のいてゆく。遥か下には、あちこちに広がるアトモスフィアの姿がある。

「樹 !!! クロノスさん!!!」

この声はすでに届かない。あの青空にぼつりと浮かぶ、小さな空間には。

「うそ……だろ……」

言いようのない絶望が広がる。

なんで僕を……なんで、なんで!!

「いつ……き」

僕はこの時になって、涙がこぼれ始めてきた。涙はこの空の中で、小さな宝石のように光り輝き、どこかへと消えていく。

「クロノスさん………樹イ!!」

僕は空を漂う中、叫んだ。もう、離れてしまっただけの姿は見えない。見えるのは、遠のいてゆく空中都市群と、青空と雲だけ。

二人は、自分たちを犠牲にして助けようとした。

最後の最後に、どうしてこんな……!!

「樹……の、馬鹿やろおー!!」

「……とうとう、この時が来たか……」

「よじやく、か?」

樹は笑みを浮かべ、クロノスに目をやった。

「そうだな……二万年……途方もない時間を過ごした。これで、よ

うやくこの呪縛から解き放たれると思うと……」

クロノスもまた、彼と同じように笑みを浮かべる。そこには、いつもの強張った表情が消えていた。

「何となく、わかる気がするよ」

樹はセレスティアルに歩み寄り、見上げた。

「四年前のあの日……僕は死ぬべきだった。たとえ、修哉やヴェリガンの謀であったとしても、あの時……死んでしまえばよかった。」  
樹は思い出していた。四年前の、あの日を。

あの日……消えてしまいたいと思ったのは、本当だった。何もかも、忘れて……亡くなって、砕けて……消えて無くなりたかった。

なのに、生き延びた僕は復讐しようとした。手にすることできない、あいつの愛を手にするあの人を殺し、愛したあいつを滅茶苦茶にして。

「……終わりを迎えたと思ったからこそ、僕はロキとして歩くことを決めた。既に、それは帰ることのできない現実なんだよ」  
言い訳をするつもりはない。

でも、悔いがあるとしたら……

「……もう一度、微笑んでほしかった」

自分の目の前で

そう思うと、彼はため息が漏れてしまった。

「……誰に？」

「さあね。あなたにとってみれば、些細なことさ」

樹が手を広げて苦笑すると、クロノスも同じように苦笑した。

「まあ……消えてしまえばいい時を逃したんだから、もう一度そこに立ち会おうってことさ」

「……そんなことを言ったら、空に怒られるぞ？」

と、クロノスは微笑みながら言った。

「ハハ……そうだね。……リーヴェにいる、父上や母上にも……」  
肖像画でしか、見たことが無い両親。彼には、その頃の記憶がなかったから。

「さて……最後の大事な。いくぞ、樹」  
「言われなくてもわかってるよ」

兄さん……

あなたは、あなたが信じる道を行けばいい。

そうすれば……きつと、星も、命も……僕の心も癒されるはずだから。

きつと……修哉も……。

さようなら……

兄さん……空、海……父さん、母さん……

……さようなら……

その時、巨大な発光と共に、大爆発が起こった。

一瞬にして空中都市群は爆発に吞まれ、灰燼に帰していった。僕は爆風に飲み込まれてしまい、どこかに吹き飛ばされる。

視界が回転する中、ほんの少しだけ確認できた。爆発は、天空帝都だけに留まっていた。爆発は、世界を飲み込んではいなかった。

「樹、クロノスさん……！！」

雲に、風。そして、青い空。もう午後だな。太陽が、西に見える。下を見ようとしても、風が強いためになかなか目を開けられない。だけど、何とか見ることができた時、僕はふと気が付いた。

この風景は……あの時の『夢』に出てきた風景。

青い空。

白い雲。

体を包み込む太陽の温かい光と、優しい癒しの風。

僕自身は、空中に漂っていた。この時だけ、まるで一切れの紙のようにヒラヒラと。

地上には、緑色の草原が広がる大地があった。その果てには、大海原が見える。

青海と蒼空の境界線。その果てに、僕たちが求める「永遠の答え」があるような気がした。遠い昔から追い求め続けている、神秘の宝石。誰にも奪うことのできない、光輝なる秘宝。

心が奪われてしまいそうなほどの、美しい地球の姿。

ああ……そうだったんだ。そうだったんだよ。

あの時が、始まりだったんだ。

僕が『夢』を見た時が……。

そのまま、僕は気を失ってしまった。

## 87章：久遠の歌 星の雫が集う頃へ

「意識はありますか？」

女性の声が聴こえ、僕は目を開けた。

「……あなたは……？」

白いローブを羽織った、真っ白な長い髪を持つ女性が僕の前に佇んでいた……というより、わずかだが空中へ浮かんでいた。優しい眼差しで、僕を見ている。

どこかで、見たことがある。そして、声も聴いたことがある。それを深く考える前に、僕は自分がこの空間に気を取られた。

周りは、あの聖域リーヴェの時と同じみだった。上にも下にも星空が広がり、遙か遠くには銀河が見える。

「私は、あなた方から 神 と呼ばれる存在……とでも言いましようか」

フワフワと漂いながら、彼女は言った。

「神……？」

もし、ここがあのだとって言うのなら、あながち間違っていないような気がする。

銀色のストレートな長髪、透きとおるほど白い肌、黄金の瞳、白いローブ……彼女はまるで「女神」という抽象的な存在を、そのまま現実世界の女性として具現化したように見えるほど美しい。

「……ここは、一体どこなんですか？ 僕は、死んだんですか？」  
そう訊ねると、女性は顔を振った。

「あなたは死んでいませんよ」

そう言われても、僕はいまいち納得出来ていなかった。それに気付いたのか、女性は言葉を続ける。

「ここは、遙遠なる次元。あなたがいた二つの次元とは、まったく別次元の空間。虚無の狭間。物質が入ることを許されない異次元……いわば、無」

無、という言葉に、少なからず恐れた。それはある意味、死後の世界と同じようにも感じたからだ。

「……妖精たちの世界、ユートピアみたいなもんですか？」  
すると、女性は少し困った表情になった。

「そうですね……詳しく言うと、同じではありません。あそこは、厳密に言えばあなた方の次元と同程度の次元です。ここはそうではない」

「とすると……あなた方のような 存在 しか入り得ない場所、ですか？」

「そうですね。ここは、リーヴェと同じような場所です。あそこも、本来ならあなたのような生きるものは入り得ない場所ですからね」

聖域リーヴェ。あそこは、命を落としたり者が来る場所。精神だけの存在となつたものたちだけが入れ場所。……聖域ではなく、僕たち人間が信じている 天国 や 地獄 に相当する場所なのだろう。

「僕は、生きていますか？」

ゆっくりと、僕はその質問を投げかける。リーヴェにいないということは、やはり死んでいないのだが、それでも訊きたいことだった。

「ええ。今、ここにいるあなたは物質から離れた精神体。あなたの肉体は、しばしの間眠りに就いているだけです」

「そう、ですか……」

嬉しい反面、僕はクロノスさんや樹がここにいないことに、胸を痛ませた。

どうして……。

「……あなたは、レイディアントの『滅びの未来』を回避しました」

しばし顔を俯かせていた僕に、彼女は言葉を放った。

「それは、どういう……」

顔を上げて彼女を見ると、そこには先程までの微笑は消えてしまっていた。それどころか、どこか哀しそうな雰囲気にも見える。

「……あなたたち 調停者 は、物質でありながら未来を変える権利を持つ、唯一の存在。あらゆるものを凌駕する、理の破壊者。あなたはその権利を用いて、この次元が歩むべき未来を変えました」

「じゃあ、星は……世界は、滅びないんですか？」

「ええ、そうです。」

「そうか……僕たちの旅は、無意味じゃないんだ。」

「……ですが、この次元から分岐したもう一つの世界……ガイアの滅びの未来 は未だ生き続けています」

安心している僕を咎めるかのように、彼女は言う。

「あなたが救ったのは、レイディアントのみ。ガイアの未来は変わっていないのです」

「……」

「それに、あなたには 調停者 としての権利は残されていません。この次元を救うのと同時に、消滅しました」

一回ぼつきり、ということか。そうそう、うまい話はない。

「……これから、どうするのですか？」

女性は、穏やかな表情で問いかけてきた。

「これから、ですか？」

問い返すと、彼女は小さくうなずく。

「もちろん、ガイアの未来を救うために尽力するつもりです」

それこそが、真実を知ったから為せることなのだから。

「……ですが、あなたには 調停者 としての権利も、力も残されていません」

「……………」

「それに、ガイアには 調停者 となり得る人物は今のところ存在しません。……そのような状況で、一体どうすると言うのですか？」  
優しい声だが、厳しい質問だった。それでも、僕にはそれに答えなければならぬ。適当なことを言っただけは、彼女に失礼だと思ったのだ。

「そうですね……きっと、レイディアントでやったようにうまくいかないでしょう」

今回は、うまく事が運んでいったような気がする。リーヴェに二度も堕ちたのに、そこから戻ることができたわけだし……。

「でも、僕は一人じゃない。一人で変えることができなくても、僕たちには可能性があります。そうだと、信じてます」

「……あなたの意思に、みなが賛同すると思いますか？」

遠い目をしながら、まるで僕の奥を見つめるかのような視線で、彼女は言う。

「どうでしょうね……かなり苦労するでしょう」

今回だって、想像以上に苦しかった。たくさんの痛みと、喪失があった。

「……けど、僕はあきらめません。特別な存在だからだとか、そうではなく……自分たちの未来は自分たちで選び取る。始めから定められていることなんか、壊してやりますよ」

僕は自然と笑顔になった。ヒトつてのは、信じないといけない。信じていかないと、生きていけない。信じてもらいたいなら、信じられない。そうやって歴史は積み重なっていくのだから。

「……そうですか……」

女性は小さく微笑み、目を瞑った。

「遠い……もう、何が起きていたのかもわからぬようなほどの遠い昔に……あなたのような心を持った、存在がいました」

「存在？」

女性は横を向き、この空間の果てにある渦巻き　　銀河を見つめる。

「私と同じ、この次元に存在する意思。星の数だけ存在する次元の狭間で彷徨う存在。何によって生み出されたのかも、何のために存在するのかもわからない存在。……そう、まるであなたたち……ヒトのように」

風が吹いているわけでもないのに、彼女のローブと長い髪が揺れる。

「彼は、ヒトとなることを夢見、ヒトの世界に具現化しました。実体としての肉体を持つことが、どれほどの喜びなのか……きっと、想像し得ないほどの幸福だったに違いありません」

微笑む女性の表情は、想い出を語るようなものだった。

「……滅びゆく人類を救おうと、彼は闘いました。どんなに時間がかかろうとも、愛するもののために闘いました」

その「愛するもの」というのは、人類のことなのだろうか。

「けれど、彼は運命に打ち勝つことができませんでした。ヒトとしての範疇を超えたものでありながらも、予想だにできなかった事態に対してどうしようもなかったのです」

「……その人は、もういないんですか？」

そう言つと、女性は首を振つた。

「いますよ。……そこに」

女性は僕の胸を指差した。その瞬間、胸が青く光る。

「バルドル……我が古き友よ」

「……！！」

バルドルが……！？

そう思った時、それに呼応したかのように女性はうなずいた。

「う、ウソだろ！？ そんなの……」

よくわかっていない僕に対し、彼女は顔を振る。

「あなたは何度も見ていたはずですよ。垣間に過ぎないけれど、あ

なたは見ていたわ。まだ、何も知らない頃に……」

「えっ……？」

その時、ふとある映像が浮かび上がった。

まさか……あの、わけのわからない会話をしていた……

葬られた文明  
忘れ去られた歴史  
黄昏の歌声  
凍てついた焰  
穢れなき暁の天使  
失われた星の遺産

全てが始まりし時より、全ての終わりを告げし万物の源

「……………そう、あなたは彼らの血を受け継ぐが故に、彼らの記憶の端末も一部引き継いでいる。あなた方の宗教の中にある考え方に沿って言えば、輪廻……………とでも言うのでしょうか、あなたの精神構造に彼らは影響を及ぼせることは不可能であり、あなたはあなたとしての自我を持つ。完璧に彼らと同じではなく、不可分な意思が受け継がれたに過ぎないということです」

「……………?? ……難しいな」

いまいちよくわからない。僕がバルドルの子孫であるが故に、彼

の意識や記憶、想いなどを引き継いでいる。けど、それはあくまで影響に過ぎず、僕の意志は僕としてのものであり、バルドルそのものではない……ってことだろうか。

「そして、その記憶はバルドルであり……ロキでもある」

「ロキ!? ロキも、同じだったのか?」

まさか、あいつまで一緒だったとは……。でも、二人が元は同じような存在であったのなら、理解はできる。二人は、同じような力を持っているのだから。

「彼らは同じ……カードの表と裏。鏡の内と外。ですが、具現化するのと同時に分化したのです」

女性は微笑みながら、僕へ手を伸ばした。

「あなたは知るべきね。全てを」

彼女の指先が光り、僕を包みだす。その瞬間

何かが降って来る。それは言霊。それは想い。  
無数の星の如く、僕の心の中に降りしきる。

遠い 約束の欠片

五万年前……神々の時代と謳われる頃……

「そんなことさせるか!!」

「これもまた、我々の罪か……」

バルドルとロキは世界に降臨し、世界を救おうとした。滅びゆく世界とヒトを、救うために。だが、そのために創り出した『モノ』は、彼らだけでなく、世界を滅ぼした。僅かな希望だけを遺して……

一万年前……創世時代の末期……

「お願い、い……見ないで……」

「君は、世界を新たな繁栄に導く道標になるんだ」

「いいよ、死んでやるよ。俺は、俺のものだ……!!」

核の冬が過ぎてから、千年後　カイン＝ウラノスは、時の力ナ  
ン政府によつて捕らえられ、ありとあらゆる実験を繰り返された。  
吐きだめのような中で、彼は二人のヒトと出逢う。その中で、彼は  
愛することを知った。

だが、世界はそれを許さなかった。全てが、一つの計画であつた  
がために。

自分を殺し、自分の中の『憎悪』を消そうとした。そうすること  
でしか、自分の心を傍に置くことができなかつたから……

二千年前……天空の夢が、穿たれようとした頃……

「いいえ、私は一緒に行きます。兄様たちと、一緒に……」

「ガルザス閣下。彼らを助けしてくれるなら……私は、あなたのもの  
となりましょう」

「お兄様、必ず……必ず、帰ってきてください。約束ですよ？」

「私も……ヴェルエス家も必要ない。なぜなら、我らはヒトではな  
いだからな」

「こんなの、僕が望んだ世界の姿じゃない……！」

地上へ捨てられた十二歳と十一歳の兄弟……ユリウスとシリウスは、地上の人々に愛され、裏切られた。

ヒトに絶望したユリウスは、世界を殺そうとした。優しく接してくれた人々でさえ自分を憎むから……世界が、彼を必要としないこと悟ったから。

アイオン……シリウスは、兄を止めようとした。従妹であるレナ、サリアたちと共に。

兄を殺したシリウスは、世界を見つめた。そこには、統一国家が座っていた玉座を手に入れるために、殺し合うヒトの姿があった。

ヒトは、どうして

世界を変えようと願って、最愛の兄を殺したのに。

世界を愛していたから、それと引き換えに兄を自分の手で殺したのに。

愛するもう一つの欠片は、自分を裏切った。

支配する者と支配される者      結局、行き着くところはそこなの

かと……

ヒトが歩むのは、同じ道なのかと……

彼は逃げた。この世界を愛し続けることから。  
あらゆる権利を捨て、彼は逃げだした。この世界を見つめること  
から。

カインの仕組んだ自爆システムに、約二千年のリミットを付け、  
天都を中心とする空中都市群を封印した。

兄の剣「エクスカリバー」と天帝の証「グラール」、そして死ん  
でしまったレナの元素の結晶 「マナ」を鍵として改造した。

「永遠の巫女計画」……サリアの遺伝子に特殊なプログラムを組  
み込み、彼女の血を受け継ぐ者たちだけ覚醒するようにした。

叔母であるアムナリアに計画を記した書物を渡し、南へと渡らせ  
た。彼女たちを南に渡らすことで、北と遮断させようとするために。

そして、自分は……世界を渡った。何も考えず、何も望まずに。  
彼の傍には、兄とレナの子 ジュリアスだけがいた。その子だ  
けは、自分の手で育てようと傍に置いていたのだ。もしかしたら、  
彼が……自分の代わりに世界を愛し、世界を殺すかもしれないから。

シリウスは世界を愛していた。けど、裏切られたと感じた彼は、  
世界を滅ぼすも生かすも、ジュリアスとその子孫に託して……死ん  
だ。レナや両親の眠る、カナンの地で……。

全ての決定権を……自分の子孫に託して。

僕の意識は、今立っているこの場所に還って来た。あのような情景が浮かんだのは、きっとここが高次元だからだろう。

「泣いているのですか？」

女性はさっきまでと変わらずに、目の前に浮かんでいた。

僕は自分でもよくわかるくらいに、泣いている。涙が絶えることなく、ほほを伝っていく。

「今は、一体……？」

「私が見た、世界の姿ですよ。……数々の、辛い現実です  
ああ、そっか。」

無数の言霊と、永遠の叫び。どうやっても繕うことができず、紡いでいけなかった夢。果たすことのできなかった、数々の約束。

「……彼らは、本当に……僕たちと一緒になんです  
笑って、喜んで、ふざけて、泣いて……悲しんで。」

何もかも、僕たちと変わらない。変わらないのに、特別な力を持つが故に、世界が普通であることを許さなかった。

「もし、彼らと一緒にの時代に生まれていたのなら……きっと、僕た

ちは互いに手を取り合って、笑い合っていたような気がするんです」  
僕は涙を拭わないまま、女性を見つめた。

「だからこそ……僕は、彼らに笑顔で生き続けてほしかった。あんな……あんな悲惨なことばかりじゃ、辛過ぎる……」

僕だったらどうだろうか。

あの苦しみを背負って、生き続けられるか？ あの喪失を味わって、世界を愛せるか？

「……あなたが泣いているのは、悲しいからですか？ それとも、悲惨だからですか？」

そう問われ、僕は涙を手で拭い、彼女を見つめた。

「わかりません。自分のことなのに、理解できないんです」  
勝手に溢れ出た涙。理由なんてわからない。けど……

「でも、僕はこの涙が、先へ進むためのものであるとは確信できません」

いつの間にか、涙は途絶えていた。

「全てを知り、全てを受け止め……彼女たちと一緒に、歩み続けるための」

それこそが、彼らの想いを受け継ぐ者として為し得ること。

セヴェスとして、空として。

「そうですね……それもまた、運命なのかもしれませんね」

彼女は微笑みながら、上空を見つめた。僕はその時、ふと疑問を浮かべた。自分なりの答えを出したつもりだが、それでも訊きたかったこと。

「……もしも、運命というものが存在するのなら……ヒトや、生命

の意思とは何なんでしょうかね」

僕は常々思う。

運命に抗ってきたつもりだが、そうすることさえも何らかの意思なのではないだろうか。全宇宙が誕生したその時に、全ての歯車は定められていたのではないだろうか。己の意思を謳っておきながら、そう考えるのは朽ちていった者たちへ申し訳ないかもしれない。

それでも、僕は訊きたかった。それは、彼女が特別な存在であったからかもしれない。

「……それは誰にもわかりません」

彼女は僕に視線を向ける。

「運命とは、不確かなものです。残酷のようであり、幸福をもたらすものです。もし、全てが始まった一点……そこに何かの意思がいたとすれば、そのものによってあらゆる運命は定められていたのかもしれない。あなたたちがそうであるように、私たちも運命に束縛されているのです。……それは、『運命』というものがあればの話ですが」

そして、彼女はそれを否定するかのように顔を振った。

「そうは言っても、あなたたち生命は自分の意思で考え、行動している。それは間違いないものでしょう?」

「そう、ですね」

「……それは定められた行動であるかも知れませんが、必ずしもそうであるとは限らないのです」

思わず、僕は頭をかしげた。

「いいですか? 結局は、本人次第なのです。己自身の意思を運命という言葉、一つで片づけるか……それとも、己の未来は己のものであり、今ある意志は己自身が築いたものであると考えるか……。あるかどうか分からない『何か』に固執する前者より、後者の方がいいと思いませんか?」

微笑んだ女性の顔。

結局のところ、自分でどう思うかってことか……。どれが真実か虚偽だなんて……。考えなくてもいいのかもしれない。そう考えるには、非常に難儀なことではあるが。

「……星の滅亡のシナリオを描いていたのは、セレスティアルの意思……。ということなんでしょうか？」

セレスティアル自身が滅ぼうとしている。彼女が見せてくれた数々の光景の中で、セレスティアルが何度も関わっているからだ。

「一概にそうとは言えません。ただ……」

彼女は顔をしかめた。

「あれは、星が生まれた時と同じ時に生まれたもの。つまり、星自身と言えるのです。もし、星の意思を宿していたのだとしたら、星はこの世を全ての生命もろとも滅ぼそうとした。……。あるいは、自分さえも消し去ろうとした……。ということなのかもしれません」

星と同時に誕生した物質。そこに、星自身の意思が潜んでいたとするならば……。

「こういつた次元の存在であるあなたでさえも、無数の次元の一つの次元にある星の意思に対しては、何ら影響を及ぼせることはできないんですか？」

そう言うと、女性は顔を曇らせた。

「……あなた方人間や生命が不完全であるように、私もまた不完全なのです。全知万能の存在など、森羅万象  どこにも存在し得ません。だからこそ、セレスティアルも……。星も不安定なのです」

何もかもが、そうである。そうだからこそ、争う。

「もしかしたら、セレスティアルは永い……。永い時の中で、多くのものを見すぎたのかもしれない。ヒトや命が積み重ねゆく歴史

それは、血と殺戮の歴史。それに染められ、愛憎が膨らみ、完全なる無への回帰……。自らも滅びようとしたのかもしれない」

それは、どこか修哉に似ているような気がした。

「そして、それは完全になるうとする事と同義……」  
リユングヴィの謳っていた、完璧な存在になること。

「哀しいですね……完全になるうともがけばもがくほど、墮ちていつてしまうなんて……」

「……………」

永い間、自分の懐の中でもがき、苦しみ、憎み……愛し合う生命たちを見続け、何かが壊れた。そういうことがあるのかもしれない。彼らも、そうだったのだから。

「いずれにしても、滅びようとする破壊の意思は何も生み出しません。残るのはただの空虚。無。そこには何も存在しません」

修哉の望んだ世界は、そういったものだったのだろうか。そう考えると、余計に胸が辛くなってくる。

「それでは、この次元が……宇宙が生まれたことさえも否定しかねません。存在しようとするからこそ、全ては存在している。今、そこに息衝いている。……私も、あなたたちも……」

彼女は自分の胸に手を当て、まぶたを閉じた。

何かを感じているのだろうか……生命の息吹のような、かすかなものを。

「……なんだか、一つの真理ですね」

彼女の言葉には、重みがある。「たしかにそうだ」と自信を持って言えるような、確かなものが。

「……考える時間は永遠と言っていていいほどありますからね」  
彼女は微笑みながら、僕を見つめる。

「あなたはヒトの身でありながら、超越的な存在であったバルドルたちが為し得なかったことを成し遂げた」

手を差し伸べ、僕に触れようとして触れない。目に見えない、何かを掴もうとしているかのように。

「ヒトは不完全で、未熟で、欺瞞に満ちているけれども……不完全だからこそ、為し得ることもある。……そう、あなたたちはあなたたちの手で未来を紡ぐ権利があり、希望を創り出すのもまたあなたたちでしか出来得ない」

黄金の瞳が、小さく輝く。

「バルドルたちは、そこを履き違えていたのかもしれない。……驕っていたのです。神の如き力を持つのですから、ヒトを救えるのだと……」

彼女の遠くを見つめる瞳の奥に、確かに陽だまりの中でのバルドルとロキ 二人への愛が見えた。

切なく……哀しみが詰まったその瞳に。

「……でも、彼らがいなければ僕はいなかった。樹も、クロノスさんも……」

僕も、修哉も……。

「……あなたのように考えられるからこそ、私やバルドルたちは羨望の眼差しであなたたちを見つめ続けていたのかもしれない……」

優しさの中に、陰りが見えた。

不完全な存在。それはすべてのものに当てはまる。

不完全だからこそ傷付け合い、争い、殺し合い、憎み合い……喜びを分かち合い、愛し合う。

だからこそ生きたいと願うんだ。

この星の上で……。

「さあ、あなたがいるべき場所へ帰りなさい……空」

遙か彼方を指差し、彼女は言った

「帰れって言ったって……どうやって？」

僕はきよるきよると辺りを見渡す。聖域と同じ光景が広がってるし、出口っぽいのはないし。

「目を閉じ、心を落ち着かせるだけでいいんですよ」

「そ、そうですか……」

僕はあることを想い出した。初めてリサと出逢った時も、こんなだった。同じような掛け合いだったな。

いいから、言われたとおりにする

僕は小さく微笑み、彼女を見つめた。

「最後に、あなたの名前を教えてくださいませんか？」

「……私には名というものはありません」

「？ そうなんですか？」

こくりと、彼女はうなずく。バルドルとロキには名があるのに、彼女にはないってのはなんだか寂しいな……。

「あなたが名を付けてくれる？」

「へ？」

そんなことを言われるとは思わなかったので、少なからず仰天してしまった。

「えっと、それじゃあ……」

僕はほほをかきながら、考えた。

幼い頃、僕を護ってくれたいたあの人の名を。

「リリース……ってのはどうです？」

「リリース、ですか？」

彼女は目をパチクリさせる。

「リリース……いい名ですね。これからは、そう名乗りましょう」

そう言って、彼女……リリースは自分の胸に手を添えた。

「……そっくりです。あなたは、その人に」

忘れていた、その人の温かさ。僕と樹を護った、その白い腕。

「きつと、その人はあなたの心に息衝いています。あなたが、あなたである限り」

「……きつと」

僕は目を閉じた。

消えていく。

この場から、消えていく。

これでもう、この夢のような旅は……本当に終わりを告げる。  
調停者でなくなった僕は、普通の人間へと戻る。

普通の人間でできることは？

たぶん、かなり小さなことしかできないだろうさ。けど、僕は知ってる。この世界の中で、たくさんの人たちが遺っていた 希望があるってことを。

一歩踏み出せば、僕は空の下。  
そこに広がる、無限と永遠の世界。  
果ての無い、星と生命の夢。

歩き出そう。

新しい未来を見るためにさ。



## 最終章・〜Liebe〜

土の匂いがする。懐かしい香りだ。  
僕は目を開けた。

「……………」

目の前には、青空と緑の葉っぱたち。気が付けば、僕は地面の上で仰向けになっていた。

僕は立ち上がり、無意識に体に付いていた土などを払いながら、周りを見渡す。周囲には、緑や樹木が生い茂っている。

ここは 小学校の裏山だ。 暁の門があった、あの裏山。

しかし、もう暁の門は見当たらなかった。セレスティアルが消滅したために、ワーフホールを安定させることができなくなった……ということか。

ということは、ワームホールを見つけられない限り、レイディアントに行くことはできない。しかも、この世界の人間はエレメンタルをほとんど持たないため、ユートピアに行くこともできない。それにリサやクロノスさんがいない今、どこに出されるのかもわからない。かなり、危険が伴ってしまうのだ。

ん？ そういえば、自分の服……レイディアントで着ていたものではない。この服装は……覚えてる。レイディアントへ旅立つ時に着ていた服だ。レイディアントで、捨ててしまったものだ。

どうして、これを着ているんだろうか。クロノスさんみたいに、リリースが服を変えてくれたのだろうか？

まあともかく、これからどうするかだ。とりあえず、自分の家に戻ってみるとするか……。

ふと、僕はそこから見える光景に目を奪われた。

この山の頂上から見渡せる、僕が住む町の姿。

懐かしい……本当に、懐かしく感じる。

一度戻ってから、半年近く経っているんだっけ。あの時は、まだほとんどのことを知らなかったよな……。

僕はしみじみと思いながら、山を降りた。

山道に落ちた木の枝を踏むと、「パキ」という音がした。レイデイアントでもこういう音は聞いてきたけど、なんだか懐かしい音に感じる。

鳥の囁き　忘れかけていた、母国の野鳥の鳴き声。ああ、ここは自分の生まれ育った場所なんだな。そう、実感させる。

ようやく、小学校の裏門の所に辿り着いた。……不法侵入っぽいけど、卒業生だからいいよな。そう勝手に解釈し、僕は閉められていた門を飛び越え、小学校の敷地内に侵入した。

今日は、土曜日だろうか。それとも、日曜日かな。元気な小学生の声が聞こえない。この時間帯、太陽の高さを見るとまだ昼間だ。普通だったなら、昼休みの時間だ。その時間帯だと、小学生の元気振りと言ったらもう……スツゲーの何の。

この小学校に通っていた頃は、樹も修哉も、笑っていた。樹は体が弱かったけど、楽しみに学校に通っていたっけ。修哉とは、毎日のようにいたずらをして、二人とも先生に叱られたな。

けど、あの2人はもういない。過去が目の前を通り過ぎ、現実が視界を埋め尽くす。

「ちよつとあんた!」

グラウンドを堂々と横断していると、女性の怒声が聞こえた。恐る恐る後ろへ振り返ると、そこには女性教師が……。

「勝手に小学校の敷地に入らないで下さい!」

「あ、すみません。ちよつと、近道をと……ん?」

その見覚えのある姿に、僕は思わず目の辺りを手でこすった。その教師も、僕を見ながら頭をかしげる。

「君……空くんじゃないの?」

女性教師は僕を指差した。

「……坂本先生!」

僕たちも同じように指をさした。

坂本先生は、僕の担任だった先生で、眼鏡をかけていて意外にほつそりしている。あと、小さい。小学生の頃、何度も叱られたものだ。ちなみに30台半ばで、2人の子供がいます。

「久しぶりねえ、空くん! いつ以来かしら……中学校卒業以来かしら」

「そんな前になりますっけ?」

うーん、あんまし思い出せない。そうやって唸っていると、「相変わらず背だけは高いんだから」とか言いながら、先生は僕の背中を叩く。

「ところで、なんでこんなところに?」

「えつと……ホラ、あの裏山から降りて来たところなんですよ。んで、今は帰り道ってことです」

「なるほど。あんたたち、あの裏山でいつも遊んでいたもんね」

「ハハ、そうですね。いつも修哉たちと……」

「修哉？」

先生は頭をかしげた。頭の上に、クエスチョンマークが浮かんでいる。

「誰？ その子」

「覚えていませんか？ 柊修哉……ほら、滅茶苦茶頭が良くて、運動神経抜群の奴ですよ」

と、僕は苦笑しながら言った。

「そんな子、いたっけ？ そこまですごい子なら、忘れないだろうし……」

「……………？」

まさか、修哉はいなかったことになってるのか？

「そもそも、柊 なんて苗字は聞いたこと無いけどね。珍しい苗字は同じように忘れないはずだし」

つまり、柊家自体の存在自体が消えてしまってるのか？ 修哉の

父親も、妹の咲希ちゃんも。

「あの頃は、君の弟…樹くんだったっけ？ 体は弱かったけど、いつもあなたの後を付いて回っていたわよね。懐かしいわ……」

考え込んでいる僕を置いてけぼりにして、先生は思い出話を話し続けている。

樹の存在は消えていない……つまり……？

「あの子が亡くなってから、もう少して三年かしら？ 早いわよね……」

三年？ あいつが死んだのは、四年前のはず。

「あ、思い出させちゃってごめんね」

先生は申し訳なさそうに、苦笑する。

「いえ、気にしないで下さい」

樹の存在は、死んでしまったことになってる。あの時に、死んで

しまった　ままなのだろう。

「……あの、ちょっと訊いていいですか？」

訊くのはちよつと変な感じもするが、どうしても確かめておきたいことがある。

「ん？　何？」

「今日って、何月何日でしたっけ？」

こつこつという質問をするのは、なんだか恥ずかしい。やはりというか、先生は怪訝そうに頭をかしげている。

「あんだ、頭でもおかしいの？」

いきなし、なんつー失礼なことを。

「いえいえ、ちよつとど忘れてしまいました。ほら、いい天気ですし」

どなど忘れかつての。自分自身に突っ込み。

「……今日は五月十九日だよ」

「五月十九日、ですか？」

たしか、僕がレイディアントへ行ったのは五月十九日の朝。

「あの、今年って……二〇〇七年……」

僕は恐る恐る質問した。どんどん先生の顔に疑問が広がっていく。「当たり前でしょ？　あんだ、そんなことまで忘れちゃったの？」

まったく……いつも物忘れが激しい生徒だとは思ってたけど……」

先生は大きいため息を漏らし、僕の頭を叩いた。

「や、やだなあ、そんなわけ無いじゃないですか。確認しただけですよ」

僕は苦し紛れに笑った。なんだか、変な意味で怪しまれそうだ。

「あっ！　やつべ！　ちよつと急がなきゃならないんで、失礼します！　さよなら！！　また今度！」

僕は再び嘘を言って、この場から走って逃げた。

「さようなら。……変な子になったわねえ……心配だわ」

今日は二〇〇七年五月十九日、土曜日。

どづいづことだ？

どうして、時が戻っているんだ？

僕が歩んできた一年は、なかったことになっているんだろうか？  
いや、たしかにある。僕の身体には、その傷が刻まれていた。そして、僕の記憶も残っている。あの旅も、想いも。

たしかに、僕はレイディアントで一年近く過ごしたんだ。そして、帰ってきた。もしかしたら、リリースが何かをしたのかもしれない。確信は無いけれど……時間が逆流した……ということだろうか。

そして、修哉の存在が消えている。みんなの記憶の中から、消えてしまってるんだ。樹に関しては、変わっていない。つまり、二人とも「現実世界にはもう存在しない」ということになってしまっている。

一体、何のために？

……深く考えてもしょうがないか。

僕は足早に家へ戻った。

家の前に辿り着いて、僕は足が止まった。

ここへ来ること。それは、帰ってくるということだった。他の人からしてみれば些細なことかもしれないが、今の僕にとっては……かなり重大なこと。少し、緊張してしまう。

ここは、僕の家。帰るべき場所。

僕は心臓を落ち着かせるために深呼吸をし、意を決して玄関の扉を開けた。この時間帯、母さんはねっころがっているため、テレビの音しか聴こえない。父さんも仕事が休みだからといって、ゴロゴロ口としているはずだ。

僕は家の中へ上がり、リビングへ進んだ。そこには、テレビの前で横になっている母さんと、テーブルを囲むイスの上で新聞を広げている父さんの姿があった。

「空、どこ行ってたんだ？」

「……へっ？」

久しぶりに聞いた、父さんの声。

「んなすつとぼけたような顔をして……お前、朝飯も食わないでどこかに行くもんだから、心配したじゃないか」

「あ？ ああ……ごめん」

今さっき見た、のほほんとした様子から心配の欠片も見えないんですけど……。ていうか、やっぱり時間が逆流しているのか？ 僕がいるってことが、普通のまんまだ。

「お帰り〜」

母さんは僕を見ず、テレビを見ながら言った。このおばはんは…  
…相変わらずだな。

「……ちよつと、用事があってね」

僕は少し笑いながら言った。

何も、変わっちゃいない。時間は進んでいない。まったく言うて  
いいほど。

平凡な日常。

これが……一年前までの普通だったんだな。これがどれほど安心  
でき、どれほど平和であり、幸せなことか………それを実感した。

「そうなのか？ まあ、心配はしてなかったけど」

「……さっき、心配したって言ったじゃないか」

「ああ、あれは嘘だ」

父さんはニコツと笑い、再び新聞に目をやる。

「あのね……」

僕は大きくため息をついた。相変わらずだよ、ホント。

「母さん、空に昼飯作ってやんな」

「ええ〜？ 昼食タイムは終了してるんですけど」

「おいおい……」

父さんも、いつもどおり呆れ顔だった。

なんだか、心がホツとする。レイディアントの仲間たちから別れ  
てしまったという哀しさの反面、なんだかうれしい。それどころか、  
僕は泣いてしまいそうだった。こんなにも、家族というのは温かい  
のだと。平和なのだ。

「そう言えば、海ちゃんが来たぞ？」

「海が!？」

な、なんているんだよ!? いきなり、心拍数が上昇してしまっ  
た。

「というより、お前の部屋にいるけどな」

「な、なんで勝手に入れてんだよ!」

せめて本人の了承を得てからしてほしい。

「なんか、ゲームがしたいんだとさ」

「なんじゃそりゃ……」

プライバシーってもんは東家と日向家にはないのかね……。今更  
ながら、おかしいんじゃないかって思ってしまう。

僕はリビングを出かけたところで立ち止まった。

「ねえ、父さん」

「ん?」

父さんは僕の方に振り向かず、新聞に目を通してている。

「終っていう名前、知ってる?」

「ヒイラギ? 知らないな。お前の友達か?」

「……ああ」

親友だよ。最も大切な、僕の親友。

「そうか。なら、今度連れて来れば?」

「……ああ」

少し、ドキドキする。もしかしたら、あいつは記憶を残している  
のかもしれないからだ。そうだとしたら……うーん、ホントにドキ  
ドキする。

僕は部屋の前でフーと息を吐き、心を落ち着かせた。よし、開け

よう。

そう思ってドアノブを掴もうとした瞬間、扉が開き、僕の顔に直撃した。

「ぶっ！！」

僕は後ろへよろけた。

「あっ、空。帰って来たんだ」

部屋から出て来たのは、海だった。目をパチクリさせている。

「お、お前……」

「どこ行ってたの？ 昨日、宿題を覚えてくれるって約束してたのにさ」

なんだか、海は不機嫌そうである。そんな約束、まったく覚えちゃいないんですけど。

「そ、そうだったっけ？」

「そうだよ。もう終わっちゃったよ」

フン、と海はそっぽを向いた。それを見て、僕は思わず笑ってしまった。

そっか……海も、今までのことは覚えていないんだ。いや、そういう現実に遭遇しなかったことになってるんだ。覚えているはずも無い。

「何笑ってんだよ！」

と、海は僕の頭をはたく。とはいえ、彼女と僕の身長差は結構あるので、眉間を叩かれたみたいになった。

「いや、ちよっと……懐かしいなあと思って」

「……はあ？」

海は眉を八の字にし、頭をかしげる。まあ、それが普通の反応だよな。

「懐かしいって……昨日も会ったじゃない」

「うーん、そうだったっけか？」

僕にとつての昨日では、会っていないんだよね。

「空、頭でもおかしくなったの？」

「……アホか」

ズビシ

僕は海の頭にチョップをした。

おお。この感じ、久々。

「いたっ！ 何すんだよ、この馬鹿空！！」

今度は、海は僕のほっぺたをつねってきた。

「いてて！」

「まったく……」

すると、海は僕の顔をジーっと見つめ始めた。

「なんだよ？」

ほっぺたをさすりながら、僕は言った。

「……なんだか、様子が変わったね」

「え？」

海はよくわからない、という顔をした。うーんと唸りながら顎に指を当て、天井を見つめる。

「昨日も見てるのに……なんか、昨日とは別人みたいに見える。見た目とか変わってるわけじゃないのに……なんでだろ？」

言い表すことのできない違和感に、彼女は率直に疑問を感じていた。

いつも見ている彼女は、気付くんだ。見た目は変わらなくても、変わっているということ。……なんだか、僕はうれしくなった。

「一日程度で何が変わるってんだ？ 髪型程度だろ」

そう言うと、海は顔を下ろして僕を見る。

「……そうだよ。うん、そうだよ。私、何言ってるんだろ」

と、海は笑った。

彼女の笑顔を見るのは、久しぶりだ。表情は空とそっくりなんだけど、やっぱり違う。

そして、やっぱりリサにも似ている。……けど、違う。

別世界のリサ。別世界の空と海。

運命って、不思議だよな。

「あつ……そう言えば、空は？」

僕は気になってた質問をした。無事なら、あいつはちゃんとこちに帰ってきているはず。

だが、もう一つ不安があった。時が戻ったなら、空がさらわれてしまった時に戻っているんじゃないのかって。

「お姉ちゃん？ お姉ちゃんなら、さっき出かけちゃったよ」

「……そっか」

ホッとした。あいつは無事に帰ってきている。もしかしたら記憶の全てを失って、僕と同じように時間を遡ったのかもしれない。

……でも、それでもいい。あいつが無事にここに帰って来たのなら。

「空は、どこに行っただ？」

「たしか、そこら辺ぶらついてくるって言ってたと思う」

「そこら辺って……」

まったく、せめてどこに行ったのかを明確に言っておけよな……。

「とりあえず、一・二時間程度で帰って来るって言ってた」

「……そっか。わかった」

僕がうなずくと、海はどこか顔を曇らせてしまった。

「……お姉ちゃんに用でもあるの？」

「まあ、ちょっとな」

と、僕は苦笑する。ただ会いたいだなんて、口が裂けても言えない。恥ずかしすぎるし、今の彼女にとっては酷だ。

「ふーん……じゃあ、私帰るね」

そう言って、彼女は階段を降り始める。すると、頭だけが見える位置まで降りたところで、僕の方に向き直った。

「空の部屋、掃除してあげたから」

「は？」

「だから、掃除してあげたって言ってるでしょ？」

彼女は何度も言わせるなど言わんばかりの顔だった。

「……………」

僕が瞬きもせずに見つめるもんだから、海は何度も瞬きをし出した。

「な、何よ？」

「ありがとさんってこと」

そう言つと、海は照れくさそうに顔をそらす。

「だっ……だつて、部屋に入ったら散らかってたんだもん。あれじゃ、宿題しようにも集中できないよ」

「ハハ、それはごめんな」

「……変な空」

そして、海は小さな足音を立てながら、下へ降りて行った。

あの時のことも、無くなってるんだろっな。海が告白してくれた時のことも。

必ず帰って来る　と約束をしたことも。

空がさらわれることの無かった世界……だから、それに関連した事象は全て消えてしまっているのだろっ。

あれらの約束さえも遭遇しなかった未来となってしまうんだ。

僕は、海が歩いて行った階段を見つめた。

でも、約束は果たしたよ。

僕は帰って来た。ちゃんと、な。

「空、今度はどこ行くつもり？」

玄関で靴を履こうとした時、母さんの声が聞こえた。後ろに振り返ると、リビングから顔だけをひょっこり出している母さんの姿がある。

「ちょっと、そこまで」

「そこまでってどこまでよ？」

「……そこら辺だよ」

そう言われたら、返答のしようが無いんですけど。

「せっかく、あんたの昼飯作ってやるうと思ったのに」

その言葉に、僕は動きを止めてしまった。

「じゃあ、お願いする」

「あら？　なんだか変に素直ね」

と、母さんは怪しげに微笑む。

「なんなんじゃねえっての。作るなら、早く作ってくれよ」

「ハイハイ」

めんどくさそうに言いながらも、母さんはキッチンへ向かった。

僕はうれしかった。普通のことなのに、これほどうれしいなんて

……自分でもびっくりだ。

出てきたのは、みそ汁とオムライス。母さんは相変わらず、卵を乗せるのが下手で、崩れてしまっている。それを、ケチャップで隠

そうしているのが……なんというか。

久しぶりに口にした母親の手料理は、涙が出そうなほどうまかった。一度帰って来た時に食べたけど、あれからまたずいぶん月日が経ってしまったもんな……。

「いくらなんでも、そんな速さで突っ込んでたら窒息するよ?」

僕があまりにも速いスピードで食べ進めるもんだから、母さんは呆れ顔で言う。

「おいおい、大丈夫かあ?」

父さんまで新聞を読む目を止めて僕を見ていた。

「いや……なんか、すっげえうまく感じて」

「なんだあ? 今日の料理は手が込んでんのか?」

そう言っつて、父さんは僕のオムライスを覗き込む。

「それ、いつもは手が込んでないって言いたいわけ?」

母さんはテーブルに頬杖をつき、ギロつと父さんを睨んだ。

「いや……まあ、もうちょっと贅沢なもんが食べたいかな?……と」

「あんたが安月給だからでしょうが!!」

「そ、それを言っっちゃあいけないだろ!?!」

とまあ、よくある変な夫婦ゲンカが始まったわけ。

それを見ている、なんだか泣きそうだった。涙もろくなつたわけではないんだけど……

そうだな……

父上、母上……

この人たちが、僕の 父さん と 母さん です。

ここまで大きくなれたのも……ここまで 来れた のも、二人のおかげです。

見てくれますか……? ?

父上……母上……

食事をし終え、僕は外に出た。

空が帰ってくるまで、そこら辺でぶらつくか。そうすれば、もしかしたら遭遇するかもしれない。そんな期待も込めて、僕は歩きだした。

さっき、山から家に帰る時は急いでいてあまり見ていなかったのだが、こうしてこの町の風景を眺めていると……当たり前のように見ていた景色が、どこことなく色褪せているように感じた。よくわからないけど、レイディアントの風景が目には焼き付いているからなのかもしれない。

レイディアントとガイア。

太陽と星のように遠く、男と女のように近い二つの世界。

ヴァルバが言っていたっけな……「赤の子と青の子という双子の

体が、二つの世界となった」……って。

レンド、デルゲン、シエリア……アンナ。みんな、元気にしているだろうか。全てを終え、お前たちに映る 世界 はどう見える？ 僕は………すぐく、愛おしく思えるよ。たとえ、滅びの未来をまだ歩んでいたって、自分にとってどう見えるかが大事なんだよ。

僕はそう信じるよ……樹、修哉。

学校。

ここに来るのも、すごく久しぶりだ。一年ぶりになるんだが……今の時間軸では、昨日以来なのだろう。

何も変わっちゃあいない。というより、何も変わる必要性がないもんな。

白い壁、茶色いグラウンド、その端にある銀杏の木。いつも町を眺めていた屋上。あそこで、僕はよく修哉と話していた。

目に映る全てのものが、今の僕にとっては感傷に浸らせるものだった。

……また、ここに帰ってこれるなんて……。

「あれ？ 空じゃんか」

懐かしいこの声　僕は、後ろに振り返った。

「和樹、啓太郎……それに、美香か？」

そこには、高校での友達3人が立っていた。

変わっていない。なら、変わっちゃいない。それが、とても……

「どうしたんだ？　学校になんか来ちゃってよ」

和樹がそんなことを言いながら、こっちに歩み寄って来た。髪は相変わらず茶髪で、ピアスもしている。

「？　空？」

美香が僕の顔を覗き込んだ。

「どうしたの？」

「あっ……いや、別に」

「別について……変なの」

彼女は首をかしげる。すると、和樹が笑い始めた。

「空が変なのは、今に始まったことじゃねえだろ？」

「……和樹が言うかな」

啓太郎はため息交じりで言い放つ。

「んだとお？」

てめ〜と言いながら、和樹は啓太郎にチョークスリーパーをかけた。よく、僕も和樹にやられたもんだ。

そんな光景を見ていて、僕は笑い出してしまった。そんな僕を、彼らはキョトンとした顔で見ている。

「ど、どうしたの？　空」

美香は腹を抑えている僕に、少し戸惑いながら言う。

「いや……なんか、すごくおかしくてさ……」

「おかしいって……別に、いつものことじゃない。特に進藤なんてさ」

と、彼女は彼らを指差す。

そうだよ。そうなんだよ。いつものことなんだよ。それがたまた

なくおかしくて、うれしくて……

「なんか、空に笑われると腹が立ってくるのはなんでだろうな」

「ハハハ、そりゃどっちともあれだからだよ」

「……あれってなんだ？ 啓」

和樹はギロツと彼を睨んだ。

「それで、空ってばどうしたの？」

そんな和樹を無視し、美香は訊ねた。

「そういう美香たちこそ、今日はどうしたんだ？」

僕の笑いはようやく収まり、普通にしゃべれるようになった。

「私は買い物に行く途中。もしたら、和樹と啓太郎にばったり出会ってさ」

「俺たちはちよつくら服でも買いに行こうかってな」

和樹はケータイを取り出し、時間か何かを確認していた。

「ふーん……そっか」

「んで？ お前は？」

和樹は僕を指差した。こうして和樹を見ると、ホントにチャラ男だなあ。これも懐かしくて、笑っちゃいそうだよ。

「僕は、ちよつと散歩」

「散歩お？ お前があ？」

「……そのあからさまな驚き方はないだろ」

「いや、だって空だもんよ」

まるで突っ込みを入れるかのように、和樹は言う。

「ハハ、まあね」

と、啓太郎までもが言う。

「そんなにおかしいかあ？」

散歩とか、個人的には嫌いじゃないんだけどな。寧ろ、好きな方かもしれないし。

「なんつーか……散歩したかったんだよ。今日は、なんだかスツゲエ気分が良くてさ」

僕は上空を見上げた。

青い空と白い雲。この空も、あっちの空も変わらないな。どの世界でも、僕の心を奪ってくれる 星の雫。  
こっちの空も、あっちの空も同じだ。

果てしなく青い空……

遙かな夢の形が、そこに浮かんでいるようだった。

「……………」

ふと、僕をじーっと見つめる視線に気が付いた。美香は、目をパチクリさせながら僕を見ている。

「どうした？」

「……なんか、空ってば変わった？」

「……………」

「それはちよつと思つたな。なんか、大人っぽくなつたっていうか、うなずきながら、啓太郎は言つた。

わかるんだな、お前たちも。

僕は変わったよ。自分でも、それがよくわかる。そして、そんな変化を察知してくれるからこそ、僕はお前たちを 親友 っと思えるんだ。

「そうかあ？」

和樹はそう言いながら、僕をジロジロと見回す。

「……和樹は馬鹿だもんな」

「てめえ！ 啓——！」

再び、和樹は啓にチョークスリーパー。

「こーら、いい加減にしなさいって。進藤なんかいつまでたつてもガキっぽいんだから」

こっちで見ていると……似てるような気がした。和樹はレンド、

啓太郎はデルゲン、そして美香はアンナ。

もしかしたら、空と海とリサのように、ガイアでの三人なのかもしれない。でも、そうじゃないかもしれない。そして、この世界の

どこかにシエリアみたいな男の子のような女の子もいるのかもしれない。

二万年も昔に分かたれた、二つの世界。

もしかしたら、僕たちは遠い昔に出逢っていたのかもしれない。

僕と、リサのように。

「なんか、ホツとした」

「は？」

三人はキョトンとした様子で、顔をかしげる。

「んじゃ、僕は行くよ」

僕は歩きだした。すると、

「おーい、空。一緒に行かねえか？ どうせ暇なんだろう？」

帰ってくる答えを知っているような感じで、和樹は言った。

残念、和樹。僕はまだいろんな所を見て回りたいんだ。……この故

郷を。それに……

「悪い、ちよっと今日は無理」

「なんでだよ？」

そりゃあもちろん

「今日はどうしても会いたい人がいるんだ」

「はあ？」

和樹は意味がわからず、口を開けている。

「じゃあな」

僕は大きく手を振り、再び歩き出した。そう、どうしても会いた

いんだ。あいつに……。

「空つてば、どうしたんだろ？ 私たちと一緒に行けばよかったの  
に」

「さあ……好きな人でもいるんじゃない？」

「それって、空ちゃんだろ？」

「……和樹でもわかるか」

「そりゃどーという意味だ？ 啓」

「別に、気にしなくていいって」

「こんにやる!!」

「いたっ！ 痛いって!!」

「まったく……二人も飽きないわね」

僕はとりあえず、山に行ってみることにした。あそこからレイディ  
アントに行ったんだし、あそこからもう一度この町を眺めてみよ  
うと思ったからだ。

山へ行く道の途中、僕は公園に行った。

ブランコに砂場、滑り台。ジャングルジムに平均台。どこにでも  
あるような公園。でも、僕にとってはある意味 宝箱 のような場  
所。

ここで……僕は空たちと出逢ったんだ。十三年前 レイディア  
ントでの一年を加えれば、十四年前か。

あの時、僕は白い服を着た女の子に出逢った。

十四年前、この世界へとやって来た僕と樹は、父さんと母さんと  
一緒に暮らし始めた。あの時の記憶を失い、一から……セヴェスと  
シャルフィルではなく、空と樹として。

ようやく思い出せたよ……母上が、母さんたちになんて言ったの

か。

「この子たちを、お願い……」

それが、母上の最後の言葉だった。大ケガを負っていながらも、母上は僕たちを護り続けた。聖帝中央庁で反乱兵に見つかり、僕たちを庇って何度も傷を負いながらも。奴らは、僕たちが目当てだったのだから。

「いいか？ どこに行っても、私たちの心は離れ離れにはならない。きつと、また会える。……お前たちを、護ってくれるから……」

父上は優しく微笑みながら、僕たちをレイディアントから避難させてくれた。禁忌とされていた、次元彎曲の魔法を使用して。

父上は……知っていたんだ。僕の叔父である大司祭の反乱が、ある男に唆されて勃発したものであり、レイディアントの別の場所へ逃げたって無意味であることを。なぜなら、その人は自分の義理の弟でもあるから。

今ならわかる。

ヴェリガン……いや、柊克正。

あなたが、父上を殺したんだな。

聖帝中央庁を襲撃し、わざわざ僕たちが住んでいる後宮から攻め入ったのは、調停者となり得る僕と樹を奪うため。

母上に……自分の義理の姉である母上に致命傷を与えたのも、あなただった。

あれから……僕は当時のショックで記憶を失い、ガイアで生活していた。そして、灰色の砂がある場所で僕は君と出逢った。

「わたし、ひなたそら。あなたは？」

それが、最初の言葉だったな。

あの時から、僕は 東空 としての生を始めた気がする。記憶を失ってしまったのは、もしかしたら……お前と出逢うためだったのかもしれないな。

僕の今までの人生のほとんどが……空、お前にあるよ。

僕はこれから、セヴェスとして……空として生き続ける。そして、太古の昔より続くこの螺旋を壊し、新たな邂逅を見出す。

それこそが、お前たちの願いに繋がる。

そうやって、お前たちと一緒に夢を見続けられるんだよ……リサ。

どこかにいるか？ リサ。

僕はお前と出逢えて、本当によかった。お前に出逢ったその時から、僕の中に在った『何か』が動き出したのだから。

遠い昔　遠い想い出の中で、僕たちはともに未来を夢見ていた。その果てに、どんな結末があるうとも……

今こそ、君の……『君たち』の名を呼ぶよ。

……ユリア……

僕は山へ向かった。

この森を進む時に、変な声を聞いたんだよな。それからも、何度も聴こえた声。優しく囁いた、あの声。

……たぶん、あの人だろう。今頃、遥かなる次元の果てで、この世界を覗いているのかもしれない。

大丈夫、僕たちは弱くない。弱くても、強くなれる可能性を秘めている。

そんなことを心の中で呟きながら、僕は先へ進んだ。

ようやく、頂上へ辿り着いた。まさか、一日に二度もここへ来ることになるなんてな。爽やかに体をなでてくる風が、少し火照った僕の体を冷ましてくれる。もう5月半ばだ……ちよっとした山道を登るだけで、汗が出てきてしまう。

額に滲んで来た汗を拭い、僕は前に目を向けた。

そこに、それはいた。

そう言ってしまったら、怒られてしまうかもしれない。

町を一望できるその場所で、彼女は青空を見つめていた。爽やかな風になびかれ、世界を包み込む太陽の淡い光を受けながら。

空

腰までありそうなほど長く、黒い髪。夏の青空の蒼さよりも黒く、美しい髪。

白い肌 それは、シュレジエンの人々を思わせるような、雪のような肌。

彼女の来ている白いワンピースは、あの時と同じだった。

僕に手を差し出してくれた、あの天使のような指先……

幼い彼女の手を握り締めた時こそが、全ての始まりだったのかも  
しれない。

十四年前……僕は、彼女に恋をした。

そう、彼女も……

何かに勘付いたのか、彼女はこちらに振り向いた。それと同時に、  
美しい長い黒髪が泳ぐように動く。

「……………」  
「……………」

少しの間の沈黙。その止まったかのような空間の中に、五月晴れの中を優雅に漂っていくつも緑風が、優しい旋律を奏でながら入り込んで来る。その風たちは二人を包み込み、この世界が美しいことを悟らせた。

その風が途絶えた時、再び時は動き出す。

彼女は小さく震えている。その理由など、考えなくても理解できた。

僕はうなずく。すると、彼女の表情が変わった。その煌めくような彼女の笑顔は、僕の見る世界に光をもたらしてくれる。本気で、そう思えた。

彼女はゆっくりりと頭を振る。これは現実なのかどうかを、確かめるように。

僕は笑顔で彼女を見つめる。それに応えるかのように、彼女も僕の瞳を捉える。

あの、空色の瞳で。

今、約束を果たすよ

その心の言葉が彼女に伝わったかどうかは分からない。けど、彼女はその宝石のような瞳から、いくつかの小さな宝石を流し始めた。キラキラと輝くそれは、彼女の白いほほを伝っていく。でも、笑顔だった。ヒトとして、最も美しい顔。

この青い世界の中で、僕たちは巡り逢えた。  
それは運命だったのかもしれない。  
それは奇跡だったのかもしれない……

彼女は笑顔のまま、ゆっくり歩き始める。  
僕も同じように、ゆっくりと歩き始める。

この始まりの山頂から見える、ぽっかりと開いた景色から青空と町が望める。

ここから、もう一度始めよう。  
僕たちの物語を。

彼女はそつと手を差し出した。  
僕はその彼女の手を握り締める。

あの時と同じように

もう一度、紡ぎつ

『Liber』

とつとつ名の物語を

お帰りなさい

ただいま



Epilogue……終わりの歌声

「BLUE・STORY」  
Episode?

紡ぎゆく約束の果て

こうして、星の物語の第4章は終わりを告げる。  
遙か古に穿たれた空は、一つの証を生みだし、輝きを放つ。

あらゆるものたちの想いは、ある大きなうねりに乗って、  
この青空の彼方へと飛びだった。  
結ばれた約束は、今ここに別の約束を生み出した。

それがなんなのか、今はまだわからない。

だけど、もしかしたら……

永遠の彼方を望む誰かが、  
この記憶を紐解いているのかもしれない……

明日へ  
未来へ……

私たちが遺した星の雫は、  
いつの日か……華やかな花を咲かして、  
私たちの心に戻ってくるのだろう。

私たちの見る夢は  
永遠に、永久とこしえに輝き続ける

……だから……

また、その時に

日向空  
改め、

東空

星は夢見、生命は願う

全てが集う頃に、再び物語を紡ぐために

空から堕ちた雫を掌に乗せ、

全ては世界の果てを望む

一つの螺旋と、二つの円環

再び交差するその時、

次の物語は始まる

遙か永遠への、調として

Next episode

「BLUE・STORY」  
Episode 5

暁の誓約が集いし処



ああ、そうだよ。

あの時崩れたものは、再び築かれ始める。

誰も覚えていないだろうか？

貴様たちでさえ、その崩壊と滅亡を。

なぜなら、ヒトは忘れてしまいたかったからだ。  
愚かな、自分たちの所業を。

だが、私は知っている

動き出した歯車、重なり合う旋律。  
消えかけた灯火、囁き始める緑風。

さあ、共に見ようではないか。

新しい層どもの未来とやらを

なあ？

.....

私たちは

始まりにかけて、終わりに至るまで

暁の誓約は、まだ途絶えてはいない。

Epilogue.....終わりの歌声（後書き）

Fin

あとがき(前書き)

ちょっと変えました。

## あとがき

こんにちは、森田しょうです。

以上で「BLUE・STORY Episode 4【紡ぎゆく約束の果て】」は完結です。ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。

この作品は約8年ほど前から考えていたもので、作り始めたのは4年前です。そして、一応の完成に至ったのは去年の1月だったでしょう。作ったということをお忘れかけた頃、偶然にもこのサイトを知り、投稿することにしたわけです。

ええっと、いろいろ書き連ねたい　　っていうか書き連ねていたんですが、ちとあれなんで、それらはブログの方に……　　ってことで、ここでは少しだけ。

自分はどーしても、「少年・少女」という「ボーイ・ミーツ・ガール」ってのをやりたくて、たぶん、これから作っていく作品のほとんどがそういう風になるんじゃないのかなって思います。

ソラがリサと出逢って、そこからソラと空たちの見える世界が如実に変わり始めて、ソラは異世界へと旅立ち、リサと共に世界を護ろうとして。

少年が劇的(?)な出逢いをする事で、世界が変わっていくような作品を作り続けていきたいと思っています。

そして、テーマの「約束」は全て見つけられましたでしょうか？

大まかなものが彼と彼女のものですが、たくさんあるので見つけてやってくださいね。

ソラと修哉、空とリサ。彼らといろんなキャラ達の物語が、「よかった」「面白かった」と思って頂ければ、これ以上ないです。

最後に……今までお付き合い頂き、ありがとうございました。ほんの数ヶ月でしたが、これからもこの作品を読んでくださればと思います。

あと、この物語の設定資料集的なもののURLを載せておくのでよかったら見てください。

<http://blau.wiki.fc2.com/>

修哉が言っていた『ほんとう真実の夢』……それは、きっと人によって形が違ふものです。それを見つければ、自分にとっての『ディメンショナル・ジャッジメント次元の執行権』を行使しましょう。

自分が自分らしくいるために、自分らしく愛し続けるための条件ですから。

では、またいつか。

以下、わかり辛いところを説明します。 e p 5・6では明かさな  
いことについてです。

別にいいやって人はスルーで（笑）

#### ベオウルフが殺された理由

彼は修哉とは親戚（ベオの祖父と修哉の祖父は兄弟）にあたります。ベオウルフは幼い頃、帝都で何度かオルドヴァスやヴェリガンを見たことがありました。当時、過激派の筆頭であったヴェリガンは有名で、大きな派閥を作っていたため、ベオは兄のゼナン（後のベルセリオス7世）から「気をつける」といった話を聞かされていました。なぜなら、ゼナン皇子は穏健派であり、過激派とは対立していたから。

修哉はベオが、もしかしたらヴェリガンや自分の母のことをソラたちに言ってしまうのではないかと危惧して、シュヴァルツ達に殺害を命令しました。もちろん、アヴァロン王家没落の折、既に母が自分を懐妊していたので、そのことも言われてしまったのは、少々都合が悪いのです。

#### 調停者であったクロノスが時の呪縛を受けた理由

彼はたしかに調停者ではありませんが、彼は「既に起きてしまったことを変えた」のです。調停者には「未来を変える」という権利はありますが、「過去を変え、現実を変える」という権利はありません。そのため、彼は「何か」によって肉体だけ消滅し、精神だけの存在となつて二万年も彷徨い続けていたのです。

#### ソラが何度も聴く「会話」の人々

主にep2・3の人たちです。ユリウス、シリウス、レナ、サリア、アムナリア……等々。

レゲルスについて

覚えていらっしやるでしょうか（笑）？ 二千年前にアヴァロン帝国を築き上げた人物で、2大陸統一を成し遂げました。彼はリサと同じラグナロク一族で、サリアの長子です。サリアの夫については、普通の人間だったのではないかとされています。ちなみに、彼の子孫が2大陸中に散らばり、それがアンナやシルヴィア王女のような巫女へと繋がっていきました。

ガルザス閣下について

上のURLにある設定資料集にも書いていますが、ユリウスとシリウスの叔父にあたる皇室の人間です。318代天帝の実弟で、帝国元帥でした。朝廷を武力で支配するも、帝位に就くことはできないため、甥で皇位継承権第1位を持つユリウスを天帝に据え、自らは摂政になるといって、傀儡政権を樹立させました。その後、クーデターを起こそうとしたユリウスとシリウスを地上に捨て（カインの直系のため、処刑は禁じられていた）、帝位に就かず帝国を支配し続けます。しかし、闇の調停者として覚醒したユリウスによって、殺されてしまいます。

アムナリアについて

ユリウスたちの叔母になりますが、年齢は6つほどしか離れていません。ユリウスのクーデターを支援したとして、地上へ追放されそうになります。しかし、彼女はその美貌を使って、ガルザスの妻となることで、ユリウスたちへ向く矛先を緩めようしました。その後、ユリウスによって解放されます。

ジュリアスについて

彼はユリウスとレナの子供で、後のソフィア2代教皇（厳密に言えば、初代教皇）。シリウスは兄を殺す際にレナを死なせてしまいません。そのこともあって、彼らの愛情の証であるジュリアスを傍に置き、自分の息子として育てていきます。自分は誰とも結婚せず、ジュリアスに後を託して独りでこの世を去ります。その後、ジュリアスはソフィア教を開き、義父であるシリウスを初代教皇として祀り、彼の本名「シリウス」アイコン「ガイア」ヴェルエス」から取って、アイコン1世としたのです。

アベル、イヴ、イヴズ、ロタール「フェイウス、ユリアについてこれは「BLUE・STORY」の中でも中核を成す人物たちです。これらはep5・6での大事なところなので、ここでは割愛します。

リユングヴィがリサに対しての「穢れた女と聖なる女」と言うことについて

彼女の正体について言及しています。それは、ソラが空との別れ際に「星に愛されし少女と、星に惑わされし少女」というものに近いものです。これは「空とリサ」という解釈も可能ですが、本当はもっと別のところにあります。

ヴェリガンはどうしてガイアを知っていたのか

彼は修哉が言っていたように、考古学の専門家にして、当時発展しつつあった次元学を研究していた人物でした。暁の門はティルナノグ期に造られたもので、それに関連した資料を手にしたのがきっかけです。それは、自分の義兄でもあるオディオンによるものでもありません。

それぞれのエピソードについて

Episode? 「神々が知る、星の閃光」

・バルドルたちの時代（約五万年前）

Episode? 「永遠の夢へ堕ちし願い」

・カインの時代（約一万年前）

Episode? 「穿たれた空と、終わりのない旅路」

・ユリウスとシリウスの時代（約二千年前）

Episode? 「暁の誓約が集いし処」

・現代（約18年後） 「BLUE・STORY?」

Episode? 「全ての始まりにして、全ての終わりなる時へ」

・宇宙歴時代（約二千年後） 「BLUE・STORY?」

となっております。

長くなってしまいました。が、今度こそ……

またいつか！

> i 2 7 1 0 — 2 1 5 <

## 外伝：Leine

黒煙が昇る。

周囲からは、悲鳴と叫び声の混じった音が飛び交う。

一つの宮殿。

真っ白な通路を走る銀色の長髪を持つ、女性の姿があった。片腕で1〜2歳程度の子供を抱き、片方の手で3歳の少年の手を引きながら、必死に前へ走っていた。すでに夜のため、窓の外は暗い。しかし、それでも少し明るいのは、この宮殿の周囲に火柱が昇っているからだ。

「ははうえ……もう、走れないよお」

3歳の少年は、泣き顔でそう言った。

「もう少し頑張つて。もう少しで、お父様の所に着くから」

走りながら、母親である女性は少年に笑顔を向けた。

自分の夫の所に行けば、きっと大丈夫。子供たちを安全な場所に連れて行くことこそが、今の自分のすべきこと。その女性は、そう考えながら逃げていた。

「逃げられると思いますかな？」

「……」

女性は立ち止まり、前の暗闇を見据えた。そこから、黒いロープを羽織った男性が、ゆっくりと姿を現してきた。

「既にここ、聖帝中央庁は包囲しています。どこから脱出しても、我が包囲網から逃げられません」

不気味に微笑みながら、その男は青い瞳を輝かせる。

「教皇猊下は未だ見つかりませぬが……見つかるのは、時間の問題。大勢は決したのです」

「……そうであっても、私はあなたに命乞いなどしません。子供を護るようにして、女性は3歳の息子を後ろに隠させた。

「でしょうね。あなたは、妻と同じでそんなものだ」

口元に手を添え、男は笑う。その様子を、女性は一切表情を変えずに見つめている。

「さて、用件を申し上げましょうか」

腕を組み、男は言う。

「あなた様の御息息、私に譲っていただきたい」

「……………」

自分を睨みつける女性に対し、男は小さく微笑む。

「そんな風に睨まないください。これは、あなたたちの望む『世界』を築き上げるためのことなのです。それは調停者になる権利を持つ、あなた方の御息様でしか為し得ないのですから」

そう、その子供たちがいなければできない。

男はそんなことを表面に出しながら、中では別のことを考えていた。恵まれている者たちを、その手で穢すことを。

「私たちが望んでいることは、あなたが為そうとしていることではありません。私たちは、希望を生みだすために禁書を解いたのです」

「ハハ、何を仰いますやら」

男は手を広げ、笑い始めた。

「二千年前から続く掟を破りながら、何の戯言でしょうか。……我々は、既に引くことができぬところまで来てしまった。これ以上、無為に時間を費やしては、『約束の刻』を迎えてしまうのですから」

男の言葉に対し、女性は顔を振った。

「あなたがしているのは、ただの殺戮と凌辱、支配でしかない。『神々の果実』を一人で手にして、一体何が得られるというのですか！」

女性は怒りを露わにしながら言った。その様子を見ている3歳の子供は、初めて見る母の姿に驚愕している。普段の生活の中では、一切見せない母の怒りを。

「得てして、我々はそうであるべきなのです。普通の人類とは違うのだから、支配する立場に君臨するのは当然のこと。我々は『神の代弁者』となるべく生まれたのだから　な」

そう言いながら、男は一步、女性たちに近づいた。それと同時に、女性も一步下がる。

「さあ、その子供を渡せ。さもなければ、奴と共に追いつけた夢に終止符を打つことになるぞ？」

さつきまでの紳士的な口ぶりは消え、男はその獰猛さを表し始めた。それこそが、彼の中にある「影」。全てを食い潰そうとする、野獣のような牙。

「この子たちは渡しません」

何もわかっていない腕の中の子供は、それから起ころうとしていることを予感したのか、その場で泣き声を上げ始めてしまった。

そんな様子を見ながら、男はより一層笑みを大きくする。

「ククク……シャルフィル様も、察しておられるのでしょうか。これから、自分たちが私の『手駒』として生き続けねばならぬことを、それを手に入れるためならば、彼は家族であろうと何であろうと、利用しようと考えていた。

「ふざけないで！　この子たちは、私が絶対に護ります！！」

「ならば、抗ってみせよ。私から逃げおおせてみるがいい！」

男は腰にさしてあった、鞘から氷のような水色の刀身を持つ剣を抜いた。それと同時に、女性は一瞬で魔法を完成させる。

「クリスタルシエル！」

女性たちを包み込む水晶のような壁が出現した。

「くだらん!!」

男は剣を一振りした。すると、女性の障壁は破壊され、彼女の体に大きな爪痕を刻んだ。真っ赤な血が舞い散り、女性の体が崩れる。

「あつ……」

「は、ははうええ!!」

3歳の子供は叫び、倒れた母の体を揺する。

「貴様程度で、私に勝てると思いか？」

笑みを浮かべながら、男は女性に近寄って来た。泣き叫ぶ子供を見下ろし、切っ先を向ける。

「愚かにも私を裏切った屑どもに死を与えんがために、ここで死んでください……義姉上」

「……!」

男を睨みつけるも、女性の体力は血と共に流れていく。その時

「うあああ!!」

そこから放たれた光は男を襲い、後ろへ退かせた。

「これは!?!」

男はそれが少年によるものだと知り、驚嘆した。一瞬ではあるが、少年の中に在る「力」が発露したのだ。

「アース!」

女性はうつ伏せの状態のまま魔法を唱えた。すると、彼女を中心として魔方阵が出現し、子供たちと共にどこかへ消えて行った。

「しまった！ 空間転移の魔法か……」

舌打ちをした男は、すぐに笑みを戻した。

「なるほど……既にその『兆候』は出ているというわけか。カイン  
いや、シリウス……或いは、ユリウス……。いずれにせよ、『  
統制主』が遺した産物は俺の手中にあるわけだが……ククク……」  
肩を震わせながら、男は笑っていた。

大きな広間。今ちょうど扉を抜けた男が入って来た。その右手に  
ある剣は、血塗られている。

「リリース！」

暗闇に倒れていたのは、さっきの女性。魔法で近くまで来たもの  
の、この広間で倒れてしまったのだ。下の子供はただ泣き叫ぶだけ。  
上の子供は、何度も母の名を呼んでいた。

「あなた……」

「ちちうえ！」

自分の夫の姿を確認するや、女性はホツとしたように微笑んだ。

彼女には、まだ息があつた。

「よかつた、無事だったのだな」

白いローブを羽織つた清廉な男性は、しゃがんで上の子供を抱きしめた。

「あなた……やはり、今回の反乱は」

そう言いかけた時、男はこくりとうなずいた。

「わかっている。全て、奴の仕業だ」

男はギリギリと歯ぎしりをし、悔しさを滲ませた。

大司教ハロルド　自分の弟による、突然の反乱。彼を慕う神聖

騎士団の一部も加わり、更にはほとんどの神聖騎士団が遠征でゼテギネアにいるため、聖都はほとんど空っぽだった。

安穩し過ぎていると言えば、そうかもしれない。だが、それほどこの国は平和だったのだ。

「……リリス、お前は子供たちの傍にいる」

妻の肩に手を置き、夫は言った。

「この世界のどこに行っても、きっと無駄だ。奴は……恐ろしいほど『馬鹿』だからな」

こんな時に、なぜか笑みを零す夫。そうでもしないと、今の現実を直視できないのかもしれない。

そして、その言葉の意味をリリスは理解していた。

あの男は、あまりにも天才過ぎる。

「……わかりました。でも、私も……」

妻の顔色は、悪くなる一方だった。治療術の知識がない夫は、妻に対して何もできなかつた。

流れ過ぎた妻の血。これが、今生の別れとなる

「……セヴェス」

男は泣き続けている息子を体から離し、その幼い顔を見つめた。

「泣くな。お前は男の子だろ？」

いつものように、男は言った。

「だって、ははうえが……ケガしてるんだもの」

まだ3歳の子供でも、少なからず現状がどれほどのものなのか、理解できているのかもしれない。

「……いいか？」

男は大きな手を、息子の頭に置いた。

「どこに行っても、私たちの心は離れ離れにならない」

いつも厳しい顔をしていた父が、稀な微笑みを息子に向ける。それは、息子の心に驚きと安心感を与えた。

「きつと、また会える」

「ちちうえ……？」

男は立ち上がり、妻が抱きしめている下の子供に触れた。そして、自分が付けていたネックレスを外し、その息子の首にかけた。

「……お前たちを、護ってくれるから……」

下の息子も兄と同じように、父の微笑みをキョトンとした顔で見つめた。

「……リリース、子供たちを頼んだぞ」

「はい……あなた」

二人はキスを交わし、互いに抱き合った。

それが、最後だとわかっていたから。

「ちちうえ、ちちうええ!!!」

自分と呼ぶ息子から離れ、男は印を結び始めた。

「……ビフレスト」

光の円環が3人を包み込み、発光と共にどこかへと消えて行った。その場に残された男は、3人がさっきまでいた場所を見つめ続けた。

「セヴェス、シャルフィル……………リリース」

自分の大切な子供たちと、最愛の人。

もう二度と、会うこともないだろう。

そんなことを考えていると、彼の心に静かな風が吹き始めた。

「全て、触れてはならないものに触れてしまった、我々の罪というところか……………」

真つ暗な天井を見上げ、男は剣を床に放った。

「お前も、同じように夢を追い続けていたに過ぎん」

そう言つて、男は後ろに振り向いた。そこには、黒衣の男が立っていた。あの水色の刀身を持つ剣を、血で濡らせて。

「……………お久しぶりですな、義兄上」

ニコツと微笑み、男は剣を振つて血を吹き飛ばした。

「私がない間に、子供をお二人も御作りになつて……………いやはや、祝いの言葉が遅れて申し訳ない」

と、男は小さく頭を下げた。

「それをずっと待つていたのだろうか？」

「……………ええ。確信していましたからな」

男は刃物を思い浮かばせる笑みをする。

「……………国境付近での小競り合いを起こし、我が神聖騎士団を派遣させ、その勢力を削る。そして、弟のハロルドをたぶらかして反乱を引き起こさせた。……………あいつは、どうも権力欲があつて仕方がなかったからな」

「そこまでわかつていただけると、私の苦勞も報われるというものです」

「……苦勞？ お前に、そんなものは関係なかるう」

教皇 オディオンは顔を振る。

「お前の中には、生への渴望と死への羨望しかない。完璧な命になることを求め、永遠に彷徨い続ける愚者だ」

男を指差す彼の瞳は、男に対して睨みつけるのではなく、哀れなものを見るかのようなものであった。

それに対し、男は目を瞑り、フツと笑う。

「何を言っているのやら……。この世界にいる以上、我々は求め続けるのだ。存在するものを余すところなく喰らい、穢し、犯し、我らの生を謳歌せんがために」

男の碧い双眸は、狂気に満ちていた。冥い光がその瞳孔の奥に広がり、彼の願いを際立たせている。

「リリースたちは逃がしたのだろうが、意味はない。あの馬鹿な大司祭がこの国を支配してくれた方が、何かとやりやすいのでな」

クククと笑い、男は教皇に近付き始めた。教皇は、彼を見つめたまま動こうとしない。

「ニーナは生きているのか？」

その問いに、男は立ち止まる。

「……妻は死んだよ。とうの昔にな」

虚ろな微笑を浮かべ、男は言った。それによって、教皇は悟った。

この表情は、ニーナがいないためか。

「もう、無駄なようだ。後は好きにするがいい。……ヴェリガン」

教皇は胸に手を添え、目を瞑った。最早、抗っても意味はない。

自分には、奴を倒す いや、傷つけることさえできない。

最愛の妻の妹が愛した、唯一の男なのだから。

「潔いのは美しいものだ。我がアロンダイトで………死ね」

男は微笑み、水色の刀身を輝かせながら教皇に直進した。

その場に、真っ赤な血しぶきが散る。

夢とは何だ？

何を求め、何を望んだのか。

どこが間違っていたのか。どこで、歯車は狂ったのか。

狂っていたのは、元からなのかもしれない。

それもまた、同じことでしかないのに。

「義兄上……二ーナと共に、レビューで見ている。『奴』がなし得  
なかつた計画を、プロジェクト・シネシス『創世計画』を、この俺が実現するのをなア！  
ククク……ハア——ハハハハハハ——！！」

外伝・Leine（後書き）

最後まで読んで頂けた方なら理解できる……はずのお話です。

詳しいことは書けませんが、13年前、彼らが何をしようとしていたのか、その片鱗でも感じて頂ければ幸いです。

## 外伝：Anliigen

「ねえ、ベオ」

その言葉を放ち、母は微笑んだ。いつもいつも、俺の名前を呼んで微笑んでいた。食欲がなくなるとも、寝ることができなくなるとも、母は俺の名前をいつも呼んでいた。

10歳になる、その時まで。

外には、雪景色。

帝都アヴァロンは、久しぶりの大雪に見舞われていた。窓の外では白い粒子が雨のように降りしきり、世界を埋め尽くすかのようだった。

「ベオ」

優しい声が、俺を呼ぶ。外の猛吹雪に意識を奪われていた俺は、後ろへ振り向いた。そこには、ベッドに座って微笑んでいる母がいた。

「こつちへいらっしやい」

母は俺を手招きし、自分もそれに従って母の隣へ座った。その瞬間、一人用としてかなりの大きさであるこのベッドが、少しだけ揺れた。

「なんですか？ 母上」

ずっと微笑んでいる母上は、幼い俺の頭をゆっくりとなで始めた。

「ベオ、もう少しで10歳の誕生日ですよ？」

「ああ……そう言えば、そうでした」

まるで知らなかったかのように、俺はうなずいた。この頃から、「誕生日」というものについて特に意識しなかったからであろう。

というよりも、毎年その日に会おう父が嫌だったからだろうか。幼い俺の脳みそでは、その理由をうまく理解できていなかった。

「その日は、きちんと正装するんですよ」

「なぜですか？」

今まで、自分の誕生日では正装などしなかった。本来ならば、皇子である俺は盛大な誕生日会を開くもののだが、俺自身が父に忌み嫌われていたため、そういったものが開かれなかったのだ。

「この度は、陛下が開いてくださるのよ」

「……父上が？」

意外だった。10歳にして父に嫌われているのだと悟っていた当時の俺は、驚きを隠せなかった。

いつも自分を見ては厳しい顔をして、「下がれ」と言っていた父。髪の色が違う俺を見ては、「愚かな息子よ」と言っていた父。

イデアの民でありながら、白い肌を持っていた母とは違い、生粋のイデア人のような肌を持つ俺を、ある意味で憐れんでいた父。

「ええ。陛下は、あなたの10歳のお誕生日を祝って、盛大なものにしてくださいさるそうよ」

ニコニコしながらそれを話す母は、傍から見れば幸せな奥さんなのだと思うのだろう。実際は、全く違うのに。

俺の父は、アルカディア大陸の大部分を統べる神聖ゼテギネア帝国の皇帝であり、「大帝」と謳われる人だ。帝国を築き上げた初代皇帝に勝るとも劣らないと言われており、国民の人望も想像を絶するほど大きい。しかし、問題なのはその歓声に、父が酔いしれてしまっているということなのだが。

俺の母は、父の正式な妻ではない。……そう、「妾」というやつだ。さらに本当のことを言えば、第3夫人だ。

イデアのとある部族長の一人娘であり、前述したようにイデア人が持つ漆黒の髪を持ちながら、その肌は白い。まるで、シュレジエンの人を思い浮かばせるほどであった。だからこそ、父は母に求愛したのだ。裏を返せば、珍しいイデア人であったから、手を出した

とも言えるのだが。

生まれつき病弱な母は、俺を産んでからというものの体調が優れない。父の妾となつてから、そのほとんどをこの後宮の一部である東の離宮で過ごしている。外へ出ることも、父がいる宮殿へ行くこともなく。

この離宮に来るのは、専らメイドたちだけであろうか。同じような格好をした人たちが、母のための食事などを持ち運ぶだけ。それ以外と言え、せいぜい離宮内の掃除くらいだろうか。俺でさえ、近頃はやれ勉強だの魔法だのと、ここへ来ることは激減していた。

今日は外で乗馬の練習だったのだが、天候が雪の嵐のため中止になった。久しぶりに、俺は母と一緒に空間にいた。それが嬉しいのか、今日の母はいつも微笑んでいる。

「それに、ゼナン殿下も出席されるのですよ」

ふと視線を母に戻し、俺は首をかしげた。

「ゼナン……？」

「そうですね。あなたのお兄様、ゼナン殿下です」

嬉しそうにその人の名を呼ぶ母。その理由を知るのは、もう少し後のこと。

聞いたことはある。ゼナン 父の第2子で、長男。近い将来、皇太子になると言われている。自分より、7つほど年上だっただろうか。

俺には兄弟が多くいるが、そのうち生きているのは20歳になる姉とゼナン皇子のみ。皇帝である父は多くの子を作ったが、そのほとんどが早世してしまった。それも遠因して、健康な俺を嫌うのかもしれない。

20歳になる姉はすでに結婚しており、帝都にはいない。数えるほどしか見ることは無かったが、長い藍色の髪を持つ、美しい女性だったのを覚えている。

兄であるゼナンとは、未だに会ったこともないし見たこともない。すでに17歳の彼は、朝廷や帝国議会にも参加しており、地方への

視察なども行っているため、皇居を留守にすることが多いからだ。だからこそ興味が湧いたのだが、それをすぐに払拭させる感情が現れた。

会いたくない。それだけだった。

理由は簡単だ。父に愛されている、優れた兄だからだ。自分とは違い、皇室の証である藍色の髪と白い肌、そして碧い瞳。将来を囑望され、父に愛されていると聞く。

自分が父から受け継いだのは、碧い瞳だけ。それ以外は、東方民族であるイデア人と同じだった。

褐色の肌に、漆黒の髪。俺は、ペンドラゴン家に相応しくない皇子だった。

「ベオ？」

母の声に、俺は我に帰った。

「どうかしましたか？」

心配そうに見つめる、母の黒い瞳。父は、この美しい宝石に一瞬だけでも心を奪われてしまったのだろうか。

「何でもありません、母上」

作り笑顔でそう返すと、母はさっきまでの微笑を取り戻したかのように、小さく笑った。

白い雪はここ数日降り続き、帝都の雪は自分の背丈に迫るほどだった。

その雪が溶け、すでに雪というより氷になってきた頃、俺の10度目の誕生日会が開かれた。

皇居にある、舞踏会場。ここには、千人近く入ることができるほどの大きさで、貴族服を着た人ばかりが集まっていた。

主役である俺は、着たことの無い豪華な服を着せられ、段上にあるいくつかの玉座の一つに、座らせられていた。その隣には、母。

母上は俺を産んでから、ほとんど人前に現れたことが無い。今日は

朝から体調が良く、珍しく出席することができたのだが、帝都内だけでなく、国内では母は有名だった。というのも、母は妾 側室でありながら、非常に美人だったからだ。

もともと、イデアの辺境部族の民であるのに、艶やかな漆黒の長髪に、アルカディア系の人間にはない、丸みを帯びた輪郭。どこか包み込むような、黒い瞳。イデア人でありながら、雪の肌を持つ珍しい女性。他国の「美人」をほとんど知らないゼテギネアの人々にとって、母は別次元の美しさを持つ女性だと認識していた。

「克蘭様、この度はおめでとうございます」

その時、母に声をかける男性がいた。俺はあまりの人の多さに気を取られ、それに気が付かなかった。

若い男性だ。まだ、10代だろうか。

「ああ、お久しぶりです」

母はニツコリ微笑み、頭を下げた。

「克蘭様、なかなかお会いすることができず、申し訳ございません」

母のお辞儀に対し、彼は少し慌てながら言葉を発した。

「いえ、あなた様はお忙しい身……私のような側室の者に、お時間を割く必要性などありません」

母は顔を上げ、彼にいつもの優しい笑顔を向けていた。

「そんな……。それより、克蘭様。私のことを『様』としなくても結構ですよ。私は、あなたの息子なのですから」

その言葉に、俺は驚愕した。息子だと、彼は言った。そんなはずが無い。母の子供は、俺一人なのだから。

すると、母は小さく顔を振った。

「いえ、私は側室の者……身分が違います」

「ですが、克蘭様……」

そして、彼の言葉を遮るかのように、母は彼を見つめた。彼は少しため息を交えながら、苦笑した。

「克蘭様……いえ、義母上。この子が？」

義母上。彼は母をそう呼び、俺を見据えた。

「ええ、そうです。その子が、ベオ……ベオウルフです」

「ベオウルフ……そうか、君が……」

二人は顔を合わせ、同時に微笑んでいた。そして、彼は再び俺に視線を向けた。

「ベオウルフ、初めまして。私はゼナン。そなたの兄……になるのかな？」

と、彼は頭をかきながら苦笑した。

ああ、なるほど。この人が、俺の兄……ゼナン第1皇子。皇室の証である藍色の髪に、碧い瞳。笑顔の似合う、爽やかな男性。

「……………」

「ん？ 私の顔に、何か付いているか？」

「え？ あっ、いや……」

初めて見る兄に対し、10歳になったばかりの俺は、瞬きするのを忘れて見つめていた。これが自分の兄だと思つと、どうも……実感が湧かなかつたからかもしれない。

「ハハハ、無理もない。そなたの兄なのに、今日この日まで会うことができなかったからな」

もし、父が笑つたらこうなのだろうか。そんなことを思いながら、笑顔の兄を見ている俺がいた。

「えっと……兄上……初めまして。ベオウルフです」

と、俺はお辞儀をした。これが噂の兄なのだと思うと、少しばかり緊張してきてしまった。

「そんな固くならなくてもいいよ、ベオ」

俺は顔を上げて、兄を見つめた。彼は、俺のことを「ベオ」と呼んだからだ。母上と同じように。

「今日からは皇居にすることが多いから、一緒に遊ぼうな」

そう言つて、兄上は微笑んでいた。

親以外の親族との、初めての会話。

それは、周りから見れば大したことじゃないのかもしれない。  
だが、俺にとってこの出逢いは、俺の全てを変えるに等しいもの  
だった。

なぜなら、俺は皇室　ペンドラゴン家そのものを憎んでいたか  
ら。

どうして、そういう思いが湧いたのかなんて理由などわからない  
が、それを考える度に浮かんでくるのは父だった。

結局、父はこの誕生日の席は地方で起きた反乱に対する軍会議と  
いうことで、欠席した。嬉しいとか、悲しいとかいう気持ちはない  
が、わけのわからぬ憤りがどこからともなく湧いていて、いつしか  
それは皇室そのものに対する感情へと変貌していった。

あれから、兄　ゼナン皇子は俺に長く接するようになった。そ  
れまで皇子として各地を奔走する父に従いつつ、帝都に戻っても公  
務などで暇を作る時間がなかった。しかし、先日にも終結した北方民  
族との戦争から帰ってくると、ゼナン皇子は父に申し出て、宮廷で  
父の代わりに政務を行うことにしたそうだ。幼い俺は、兄がなぜそ  
うしたのか……いまいわからなかった。

ただ、幼い俺にとって「兄」がいてくれることは嬉しかった。そ  
れは今まで抱いたことのない感情に近いもので、自分でさえ戸惑っ  
てしまうほどだった。

俺を忌み嫌う父と、病弱な母。冷たい大理石の宮殿と寝室。感情  
の欠片もない、人形のようなメイドたち。俺を取り囲む全てのもの  
が、どこか色あせた玩具のようで、幼い俺をより一層冷たいものに  
していた。

そう考えると、兄はそんな俺の世界をぶち壊す存在だったのかも  
しれない。教師ではなく家族として、兄は俺に生活する術や馬術・  
剣術・槍術を教えてくれた。失敗したら怒りはしたが、それでも最

後には笑顔を向けてくれる。その笑顔は、母の笑顔しか見たことのない俺にとって、どれほど大きなものだったか……。

それをさらに実感したのが、母が亡くなった時だった。それは急に訪れたもので、俺はすぐに涙すら流さなかった。

ベッドの上で、白い衣を羽織ったままの母。いつにも増して白い肌と、それと対照的なほど美しい黒髪。その姿は、ただ寝ているかのように見える。

父は、来なかった。そして、母はとうとう父に会うこともできずに、死んでしまったのだ。その場に来ていたのは、皇室では兄だけ。俺の傍で、俺と同じように涙を流さず、母を見つめていた。

「ベオ、クラン様……義母上は、幸せだったのかな」

「どうしたんですか？ 急に」

そう問い返すと、兄は小さく顔を振った。

「父がどんな想いだったのか、とうの昔に悟っていたはずなのに……わざわざ、こんな地に来ることなどしなくてもよかったのだ」

「……？」

「結局、今も昔も変わらない。これでは、義母上も……かわいそうだ」

兄の言っている言葉の意味が理解できなかった。ただ頭をかしげるだけだったけれど、俺はその時見てしまったのだ。

兄が涙を流す姿を。

その時から、俺は兄に付いて行こう と思ったのかも知れない。漠然と、そう思っていた気がする。

そして、俺は泣いた。いつも俺の名を呼んでくれていた母がいなくなったことは、俺にとってかけがえのない心の拠り所が消え去ってしまったことなのだ、ようやく悟ったのだ。

けど、すぐにわかった。その時、涙を流す俺を抱きしめてくれた兄こそが、もう一つの心の拠り所になっていたのだと。

「陛下、ミレトス貿易都市群マリーを制圧したとのことですよ」

一人の年老いた貴族が、その白い髪をなびかせながら言った。俺の父にひざまずき、視線を合わせないまま。その視線は、床の大理石へと向けられている。

「ふむ……開戦25日目にして、マリーを制圧したか」

玉座に座るのは父。いや、神聖ゼテギネア帝国4代皇帝ベルセリオス6世。頬杖をつき、戦況を聞いて喜んでいいるはずなのに、どこか貴族を睨んでいるようにも感じる鋭い眼光。それを否応なく受ける配下の貴族……心の中では、その臆病な心が震えているに違いない。

父は、恐れられていた。帝国最大の皇帝として。

「愚かなマリーの民たちだ。早々に屈しておれば、無駄な血を流さずに済んだものを……」

不気味に笑い、マリーに住む人々を憐れむ父。憐れむなどと、この人にはないか……そう思った時、父の笑いなどすでに治まっていた。

「レイドリックの部隊はどうなっている？」

齢50を超える父は、冷酷な目で貴族を捉える。

「それが……未だ、陥落できていないとのことですよ」

その言葉が放たれた瞬間、朝廷内に沈黙が走った。俺は「朝廷の間」にある一つの扉から、その姿を見ることが出来ていた。まだ13歳だった俺は、朝廷の間に入ることは許されていなかった。

「10万の兵を与え、さらにはガルガンチュアやブリカンディアまでも与えたというのに、レイドリックはまだランディアナを制圧できないのか？」

ため息を交え、父は顔を振った。

「も、申し上げます」

その時、貴族の後ろにいた兵士が震えながら、顔を上げていた。

父は、ゆっくりと彼へ視線を向けた。

「ランディアナは千年以上もの間、難攻不落の大都市です。半永久的に自然の防壁を作り出すランディアナに対し、海上戦では我が軍は不利でございます」

兵士は父へ目を向けることができなのまま、言葉を繋げていた。

「このままでは、無為に兵を損ねるだけではないでしょうか？ こ

こは、北のアルフィナを落とすべきかと……」

ふと視線を上にした兵士は、一瞬目を見開いた。

父の凍てついた碧い瞳に気付いてしまったが故に。

小さく震え、言葉を失った兵士に対し、父は言った。

「余は貴様に対し、言を発するのを許可したか？」

この後起きたことから、俺は目を背けた。その場に舞い散った血の光景は、父への哀れみと共に恐怖が増していくものだった。

「やはり、アヴァロンの軍勢を使わざるを得んようだな……」

そう呟き、父は微笑んだ。

新暦1981年、ルテティア王国との18度目の戦争が起きた。

この戦争で、父は2000年前の統一王朝アヴァロン以来成し遂げられていない、二大陸統一を目論んでいた。朝廷内でも今の戦力ならば勝てる という意見が大多数で、蓋を開けてみれば全くその

通りだった。

開戦一カ月で貿易都市群を制圧し、その半年後にはルナ平原からイデア王国との国境沿いまでを制圧し、大陸の半分を掌握した。この様子なら、来年には王都を落とすのではないかと思われていた。だが……

「陛下が御倒れに？」

執事からそう聞いた俺は、兄の執務室へ向かった。

「兄上、陛下が病床にあるとは本当ですか？」

山積みになされた資料に囲まれた兄は、一つの文書に目を通しながらこくりとうなずいた。

2年前に大陸の半分を制圧した頃から、父の体調はおかしくなっていた。それまで朝廷や帝国議会を欠席することなどなく、前線で指示を送ることもあった。だが、父の病は帝国軍の勢いそのものを弱めることになり、未だにルテティアを滅ぼすことができていない。

それから2年　いよいよ、父が危篤状態になった。ということ  
は、次期国王　次期皇帝の話が出てくるのは必至。

この時、正統後継者である兄を推す派閥と、分家でありながら巨大な権力を持つアヴァロン王家当主オールドヴァス王を推す派閥が反発し合っていたのは、国民でもわかるほどのものになっていた。

普通に考えれば、次期皇帝は兄であるゼナン皇子なのだが、兄は今回の戦争に反対した「穏健派」に属しており、開戦以来、父との溝が深まっていた。

そんな中、父に接近したのがアヴァロン王オールドヴァスの嫡男である、ヴェリガン王太子だった。彼は皇帝独裁と連邦制廃止などを掲げる、いわば「過激派」と呼ばれる者たちの筆頭であり、類稀な才知とカリスマ性を持っていたため、国民からも、群臣からも人望のある人だった。

「あちら側も、何かしてくるでしょうか」

「いずれ事を起こすかもしれない。ベオ、用心しておけ」

「……はい」

兄は、ヴェリガン王太子に関連する話が出る度に、俺に「気をつける」といった風な言葉を送る。シンプルな言葉ではあったが、それはいかに彼が恐ろしい人物なのかを物語るに相応しいものだった。考古学と次元学の権威にして帝国海軍総督であり、名君と誉れ高い現ソフィア教皇と縁戚関係にあるヴェリガン。ある意味で、「大帝」と称賛される父だけでなく、初代皇帝やあのアヴァロン皇帝バハムート1世をも超える存在なのかもしれない。そう思わせるほど、彼は全てに優れた人物だった。

今でも覚えている。彼を見た日のことを。

あれはたしか、12歳の誕生日のパーティだった。例の如く父は欠席していたが、代わりに来ていたのがアヴァロン王家の人たちだったのだ。オールドヴァス王と共に、ヴェリガン王太子は来ていた。

「ゼナン、久しぶりだな」

俺の隣にいる兄に声をかけてきたのは、オールドヴァス王。長く黒いあごひげと、どこか優しげな顔は父に似ていない。と思った。たしか、オールドヴァス王は父の叔父に当たるのだが、あまり年齢に差はないと聞いた。父と対称的なその顔は、幼い俺の脳裏に深く刻むものではあった。

「これは……オールドヴァス様、お久しぶりでございます」

兄は丁寧に頭を下げる。

「見ない間に、陛下に似てきたな」

「そうですね。父からは、母に似ているといわれるのですが」

そんな会話をしながら、両者は笑顔を浮かべている。それがどこか作り物に見えるのは、気のせいではなかったと思う。

ふと、オールドヴァス王の傍に立っている若い男性に目が行った。

20代前半の男　父と同じ髪の色と瞳の色をしていて、グラスを片手に微笑を浮かべていた。

「ヴェリガン殿下も、お久しぶりです」

兄は、その人に声をかけた。すると、その人の鋭い視線がゆつくりと、兄へと向かって行く。

「……そうですね、何年ぶりですか。3年ぶりですかね？」

「北方民族の制圧以来ですから、そうなりますね」

「あれから、皇子は帝都にこもっているとお聞きになりましたが……」

彼は兄から俺の方に視線を向けた。その瞬間、まるで蛇に睨まれたカエルのように、俺は身動きができなくなってしまった。

冷たい瞳。

「どうやら、そのようすな。ククク……」

小さく笑うその姿は、俺の中にある彼への恐怖を膨らまし続けた。この人と接してはならない。この人と関わってはならない。子供心に、それがはっきりと刻印された。

後で、俺は兄から聞いた。彼がアヴァロンのヴェリガン王子……自分と対立している派閥の筆頭……だということを。

父が危篤状態に陥ると、兄とヴェリガン王太子の対立は表面化しだした。

兄を推す「穏健派」と、オルドヴァス王を推す「過激派」。それは、戦争を中断するか否か　という相反するもの同士の争いでもあった。

そんな中、父が崩御する。その情報を早くに知った兄たち穏健派は、これを過激派の仕業だと流言した。先以後宮を支配していた兄は、証拠などをでっち上げること成功し、先手を打たれた過激派はたちまち崩れて行った。

そして、俺に優しい笑顔を向けてくれた一族の一人、オールドヴァス王は計画の首謀者として処刑された。だが、元々少数派だった過激派を巨大な派閥にさせ、議会の中枢を握った張本人のヴェリガン王太子は、妻と共に行方をくらました……。

俺は知っている。

少量の毒を毎日飲ませ続け、父の体調を少しずつ悪化させ、崩御の日、父を殺したのも兄であることを。

「このままでは、この国は迷走するだけだ」

幼い俺にそう言い続けていた兄は、平和主義者だった。だからこそ、無益な戦争に反対し続け、父を殺すことを決断した。そして、それは最大の敵・ヴェリガンを陥れるのに必要なことでもあったのだ。

兄は「ベルセリオス7世」として即位し、議会と海軍を掌握していたアヴァロン王家が滅亡した今、全権は兄にあった。

「ベオ、お前は私に付いて来てくれるな？」

帝城から歓喜する帝都民たちに手を振りながら、兄は言った。俺の意など、とうの昔に悟っていた。

「もちろんです、兄上」

この歓声の中、兄に聞こえるようにはっきりと、大きな声で。

俺の全てだった母上が死んで以来、母上の願いを叶えようと奔走する兄こそが、俺の国 「ゼテギネア」になっていた。だからこ

そ、俺は兄に全てを捧げよう……そう、決心した。

戦争は終わり、戦争に明け暮れていた国を立て直すために、俺と兄は休む暇もなく働き続けた。北方などの中央から離れている地域は気候が厳しく、作物が育ちにくいために貧しさから抜け出すことができない。そのために、税をできるだけ低くし、代わりに公共事業などに従事させたりなど、国民自身を豊かにさせるために、眠らない日々は続いた。

そんな生活が10年近く続き、国はようやく安定してきた頃、俺は兄に呼び出された。

「ベオ、これからお前にはルテティアへ潜入してほしい」

「ルテティア……？」

意図の見えない言葉に、俺は頭をかしげる。

「工作人員から、ルテティアで『巫女』を発見したとの情報が入った」

「巫女……創世記に記されてある、あの巫女ですか？」

「ああ」

にわかには信じがたいことではあったが、それが確かならばルテティアに渡すわけにはいかない。と、兄は言った。それは、いずれ来るであろう「ルテティアからの戦争」を予期させるものでもあった。戦争を嫌う兄は、その可能性の芽を摘まんで来い、という命令を俺に下した。

巫女を見つけ次第、殺せ。と。

だから、彼女に出逢った時、俺はどうすればよかったのだろう。

ルテティアに渡り、俺はリノアンと出逢った。

王都にある「呪術研究院」に忍び込み、そこで研究員として働くことにした。情報を集めながら、俺は実験を受けている巫女を捜索した。

「こんなことしてて楽しい？」

彼女はそう言った。白い牢獄の中、首輪を付けられて拘束されている彼女は、俺を睨んでいた。

「楽しいと思うか？」

皮肉交じりに、俺はそう言ってやった。

「そうね、あなたは違つかもしれないわ」

なぜ、そう言ったのか……当時の俺にはわからなかったし、その時の彼女の強がりな笑みが印象的で、考える暇などなかった。

レモン色の綺麗な長髪。エメラルドグリーンのかなかな双眸は、どんな宝石よりも美しかった。後にも先にも、俺にとっての「聖女」は彼女だけだった。

俺は彼女の世話係に任命され、専ら食事や体調管理の仕事だった。日に日にやせ衰えてはいないか　など。しかし、過激な人体実験は禁忌とされていたものまで含まれており、これでは否応なく彼女の体が壊れていくと思わせた。それを痛々しいものと思う反面、このまま死んでくれれば、俺は彼女を殺さなくて済む　と思っていた。

「私には妹がいるの」

やつれた顔でスープをすする彼女は、そう口を零した。

「まだ、小さくてさ。きつと、大きくなってるんだらうなあ」

なぜか、彼女は俺にそういったことを言うようになっていた。他の研究員よりも親身に接していたからだろうか。それとも、彼女が見せた強がりな微笑が、俺の心を射抜いたからだろうか。

この感情を、どう呼ぶのかはまだ理解できていなかった。初めての感情は、少なからず俺の気持ちを昂らせつつ、味わったことのない安堵を与えてくれた。

それを恋だと知るのは、彼女の涙を見た時だった。

「もう、嫌……」

白い牢獄に戻って来た彼女は、涙を流していた。下っ端の研究員である俺は彼女が何をされて、何を受けているのか詳しくは知らない。だが、彼女がやつれていく様は実験がどんなものなのかを物語っていて、なんとなくではあるが把握できるものだった。それでも彼女は一切弱音を吐かず、「いつか外に出て、妹と一緒に暮らす」と言っ、前向きな姿勢を崩さなかった。

だから、彼女が涙を流している姿を見た時の衝撃は大きかった。まるで、今までの俺自身が壊されてしまうほどに。それは、兄が涙を流した姿を見た時のそれに似ていた。

「ダメ……あんなことされるくらいなら、死んだ方が……！」

何をされようとしたのか、何をされたのか、聞きたくはなかった。俺はただ、彼女を抱きしめたただけだった。母が亡くなった時、兄がそうしてくれたように。

何かを……誰かを護りたいと、本気でそう思ったのはこの時が初めてだった。そのためならば、俺は俺の全てを賭けてもいい。全てを失ってもいい。……そう思った。

彼女は俺を好きだと言ってくれた。俺も、彼女を護ると誓った。今まで、俺を護ってきてくれていた母と兄のように。

俺は兄に報告するため、リノアンを脱出させて妹のいる辺境の村へと連れて行った。

「少し時間がかかるかもしれないが、きっと帰ってくる。絶対に」「うん……待ってる。ずっと……」

いつものように、強気な顔を向ける彼女。泣いてしまつのを必死に堪えている様子が手に取るようにわかってしまい、俺は彼女を抱きしめた。そうやるのが、この上ない幸福なのだわかっていたから。

船の上で、俺は空を見つめながら思った。これほどまでに清々しい気持ちになったことはない。と。世界の果てまで見える青空が、いつもよりも鮮やかに見えてしまつのは、気のせいではない、とも。

それはある意味、これから起こることの前兆だったのかもしれない。

帰国した日、兄が倒れた。長年患っていた病が悪化し、休まずに働いてきたつげが回って来たのだ。

「ベオ……お前に、ゼナンを頼みたい」

病床の兄は、虚ろな顔で俺を見る。いつもの声はそこになく、すぐに死が訪れてしまつのを確信させた。

「クラン様との約束、守れそうにないから……お前に、託したいんだ……」

何度も声を詰まらせながら、兄は俺に言う。俺はそんな兄の手を、握り締めていた。いつかの母と同じように、冷たい手を。

「何もかもをお前に任せてしまう兄を……許してくれ……」

家臣の前だけでなく、俺の前でさえ弱音を言ったことのない兄が、そう言った。それは俺の心を激しくざわめかせ、涙を呼び起こすものだった。それを止めることなく、俺にはできるはずもない。

「兄上、そんなことを言わないでください。ゼナンは……この国は、必ず守りとおしてみせますから……！」

その言葉が精いっぱいだった。リノアンのことなど、言う余裕などなかった。いや、言うてはならないと思ったのだ。

兄はそれを聞くと、微笑んだ。

「……ベオ……本当に、すまない……」

最後の言葉が、それだった。俺の傍で、泣き叫ぶ甥のゼナンの姿があり、それはいつかの自分を思い起こさせるものだった。母を失った時も、俺はこの子と同じだったのだらう、と。

だからこそ、誓った。俺は、ゼナンにとっての「兄上」にならうと。俺の全てとなってくれた、兄のように。

兄の寝室にあつた文書には、自身の母に対する想いと、戦争に奔走する父に対する憤り、それを促進させる過激派を含むヴェリガンへの憎しみ……そして、俺の母上に対する感謝の想いなどが綴られていた。

その時、俺は知った。兄は早くに母を亡くし、その代わりを務めたのが俺の母上なのだということを。母上は乳母として後宮に入り、兄の世話をしていたのだそうだ。そして、兄の平和への想いは、母上が抱いていた願ひそのものであったことも、この時に知った。

これを読んでいる中でも、俺は涙を流すしかなかった。様々な想

いがその文書には映し出されており、兄上と母上を失ってしまった  
悲しみと喪失感だけが、俺の中に広がっていった。

俺はリノアンのもとへ行くこともできぬまま、甥のゼナンをゼナ  
ン5世として即位させ、7歳の彼に代わって宰相として政務を執り  
仕切った。平和主義者であった兄が亡くなると、それまで鳴りを潜  
めていた反対派の者たちが台頭せんと動き出したからだ。俺は兄の  
想いを絶やさないために、ゼナンを護りながら日々を忙しく生きて  
いた。

「叔父上、こういった時はどうするのですか？」

幼いゼナンはそう言っ、教科書の文字を指さす。

「これはだな、まず軍隊をまとめて……」

兄のような立派な皇帝にするために、既に両親を失ってしまった  
いた甥のために、俺は彼にとっての全てになろうと、あらゆること  
を教えた。まるで、兄と母からもらったものを、ゼナンに与えるか  
のように。

2年が経った時、俺はようやく時間ができ、リノアンのいる村へ  
と向かった。そして、俺は知る。

彼女は再びさらわれ、殺されたことを。

母を失い、最愛の兄を失い、最愛の女性を失った俺は、天を仰ぐ  
こともできなかつた。

神様がいるのなら、どうして俺をこんなに弄ぶんだ。

掌の上で、踊らされているような気がしてならなかった。そして、俺はこれから何のために生きていけばいいのか……わからなくなつた。

「ゼナンを頼む」

その時に浮かんできた言葉は、俺にこれから何をすべきなのかを教えてくださいました。そう、俺はゼナンを護ればいい。彼と兄たちが愛した「ゼテギネア」を護ればいいのだと。

俺は帝城から、空を見つめた。そこには、青空の中を優雅に旅する鳥の姿があり、ゴールのない道を歩んでいるように見えた。

自分とは正反対な光景。

俺に微笑みを向けてくれていた母上。最後の最後で、俺を護り続けていたことを悟つた俺。

俺を忌み嫌つた父上。そんな父上がいる皇室を憎んだ俺。

俺に手を差し伸べてくれた兄上。彼が愛した国民と国を護ろうとした俺。

愛することを教えてくれたリノアン。彼女が全てになっていた当時の俺。

俺は今でも、それらを胸に抱いて空を眺めるだけしかない。

願い事は、あの青空の上で紡がれただろうか。

「叔父上、私は父上のような立派なこうていになります」  
幼いゼナンは、俺の手を握ってそう言う。

「ハハ、いつかそうなってくれるのを楽しみにしてるよ」  
「絶対になります」

満面の笑顔のゼナンは、俺に残された唯一の希望だった。

だから……………



外伝：Anliegen（後書き）

ヴァルバこと、ベオウルフのお話でした。

彼には彼なりの理由があったのだということ、ちょっと載せてしました。

く補足く（前書き）

補足とはいつでも、大したことはないです。

ゼテギネア、ソフィア、ティルナノグの人物について簡単に説明したりなんたり。

本編のネタばれみたいなあれです。

く補足く

ここではあんまし本編に関係ないような人物や、詳しく書かれていないキャラについて説明します。

【神聖ゼテギネア帝国】

ベオウルフⅡヴォルガンフⅡフリードリヒⅡカールⅡペンドラゴン  
神聖ゼテギネア帝国宰相。先帝の異母弟で、ゼナン5世の即位により宰相となる。彼に代わって政務を取り仕切り、事実上の最高権力者として君臨していた。人前には姿を現さず、ほとんどが謎に包まれていた

ベルセリオス7世

5代皇帝・21代国王。ゼナン5世の父で、ベオウルフ宰相の兄。かつては穏健派の筆頭として父帝との溝を深めたが、即位してからは国を改革させ、対外戦争を一切行わずに国力を増大させた。今までにない皇帝であったため、国民からの支持は絶対だった。しかし、わずか33歳の若さで亡くなる。

ベルセリオス6世

4代皇帝・20代国王。ベルセリオス7世とベオウルフの父。厳格で帝国主義であり、積極的に対外戦争を進めてきた。強い皇帝として人気はあったが、敵も多かった。彼の急死によって皇室内部の争いが勃発し、20度目の戦乱は終了した。

デュラン＝カルヴァス2世

3代皇帝・19代国王。ベルセリオス6世の父。初代皇帝の第4子にあたる。過激派に触発されて、何度もルテティアと戦争を行った。各地で反乱が相次いだのもこの頃。

アヴァロン王・オルドヴァス

1900年代後半に即位したアヴァロン王で、当時の帝国議会議長。3代皇帝の弟にあたり、初代皇帝の末子になる。過激派によって担ぎ上げられ、後に帝位継承争いに巻き込まれてしまう。本人はその気はなかったが、穏健派の謀略により処刑される。性格は非常に優しく、甥の皇帝とも仲は良かった。

ヴェリガン＝オットー＝ゲルド＝フォン＝ペンドラゴン

オルドヴァス王の嫡男にして、アヴァロン王太子。当時の帝国の中では権力の在った若者で、帝国海軍総督。皇帝独裁主義を掲げ、帝国の改革を進めようとしていたため、父よりも彼の方が過激派の筆頭であったとされる。皇帝に近づき、その派閥は日々力を付けるばかりで、議会は完全に彼に支配されていた。義兄であった教皇と共に、歴史学・次元学を積極的に研究していた。帝国の実権を握るために暗躍したが、政敵であるゼナン皇子によってその夢は砕かれ、ガイアへと逃亡した。

ガイアへと身を隠してからは、レイディアントとガイアを掌握すべく、自分の息子を利用しながら計画を進める。しかし、最後はその息子によって殺される。

ニーナ＝ヴェルエス・ペンドラゴン

ヴェリガンの妻で、王太子妃。オディオン教皇の妻・リリス＝ヴェルエスの双子の妹で、政略結婚としてアヴァロンへ嫁いできた。しかし、そうとは思えないほど夫婦仲は良く、帝都では二人の仲睦まじい姿がよく見られたという。後に、夫と共にガイアへ逃亡するも、息子の出産と共に死亡する。

リオン＝フェイト＝ウルク＝フォン＝ペンドラゴン

ヴェリガンとニーナの長子で、インドラの幹部筆頭。父の片腕として、レイディアントとガイアで暗躍していた。父から全ての才知を受け継ぎ、母の聖なる力を受け継いでいたため、他を圧倒する剣士だった。今回の事件はほぼ全てに絡んでおり、父を殺して全てを手に入れようとしたが……

## 【ソフィア教国】

オディオン5世

84代ソフィア教皇。弱冠15歳で即位し、何度もルテティアとゼテギネアの戦争の仲介役として、戦争を休戦に導かせた。同族で直系のリリスと結婚し、彼女の妹の夫であるヴェリガン王太子と共に古代ヴァナヘイム文明や、神話・伝説について研究する。しかし、弟のハオルド大司祭によって反乱を起こされ、その最中に戦死する。

## リリスⅡヴェルエス

オディオン5世の妻。80代教皇の孫娘で、こちらがヴェルエス宗家になる。後継者争いから免れるため、隠されたといわれる。政略結婚ではあったが、夫を支える良き妻として人気があり、相思相愛だった。大司祭による反乱の中、夫によってガイアへと転移されるも、そこですぐに死去する。

## ハロルド10世

85代ソフィア教皇。オディオン5世の異母弟。兄の即位に従って聖都大司祭になったが、14年前、突如としてクーデターを起こす。兄との確執や、兄への羨望、権力欲に囚われたなど、噂は様々。即位後、国内は不安定になった。彼の傍には、常に黒衣の男がいたとされる。後、甥のシャルフィルの手によって殺される。

## 【古代ティルナノグ】

### ユリウス12世

322代天帝。318代天帝の長子であったため、叔父・ガルザスによって若干7歳で即位させられる。世界を憂い、格差社会のティルナノグを案じ、叔父を倒すためにクーデターを画するも失敗し、

廃位させられる。地上に捨てられた後、地上人として他の人々と共に生活を営んでいたが、とある事件によって「殺人鬼」に変貌。テイルナノグ帝国を滅ぼすも、シリウスによって死亡する。

#### シリウスⅡアイオンⅡガイアⅡヴェルエス

ユリウスの異母弟。兄のように心優しく、彼の良き理解者だった。兄と共にクーデターを画するも漏えいして失敗に終わり、一緒に地上へ捨てられた。破壊者として覚醒した兄を止めるため、世界を護るために兄を殺した。しかし、その時にレナを殺してしまったことを最後まで悔やみ、それが後々の人生に尾を引いている。サリアと約束を交わすが、とうとう迎えに行けずに死去してしまう。

#### レナ

ユリウス12世の皇后、或いは「熾天使」とされるが、実際はユリウスたちの従妹に当たる女性で、皇室の分家。ユリウスたちと共にいたが、彼が変貌した時、決別。しかし、最後はユリウスを庇ってシリウスの聖剣で貫かれ、死亡してしまう。彼女とユリウスの子供が、ソフィア教皇家へと繋がってゆく。非常に温和な女性であったとされる。

#### サリア

シリウスの妻、或いは「聖女」とされるが、レナの実姉。活発で聡明な女性であつたらしく、シリウスと共にユリウスと闘う。その後、計画の一端として肉体にとあるプログラムを仕込み、シリウスの命で地上の孤島へと隠れるように生活をした。シリウスと再会することを願っていたが、結局叶わずに彼女はそこで死亡する。ラグナロク一族　グランディア家の始祖。

## アムナリア

ティルナノグ帝国の大貴族にして、ユリウスたちの叔母。後世では「主天使」とされる。当時の帝国の実権を握っていた摂政・ガルザスを説得し、ユリウスたちの処刑を免れさせた。その後は辛い日々を送ったとされ、皇族を惨殺していたユリウスは、彼女だけは殺さなかった。帝国崩壊後、シリウスの命で地上へ下り、ペンドラゴン家の始祖となる。

## 用語集（ネタばれ）

以前から思っていたことではあつたんですが、この小説も投稿して2年以上が経過してしまつたので、話をまとめるためにもネタばれを含む用語集を載せようと思います。

昔、設定を考えていた時に作った資料なので、ところどころおかしいところもあると思いますが、そこはスルーで（笑）

盛大なネタばれなので、それを承知の上でお読みください。

### 星 地球

生命の住まう惑星。レイディアントでは単純に“星”と表記される。

### ガイア

人口が64億人を超す世界。現在の“空たち”が暮らす舞台でもある。遙か太古の昔に、もう一つの世界「レイディアント」からある自称によって分岐してしまつた平行世界。高度な文明を誇る現代世界。生まれるはずのなかつたもう一つの世界であるため、“イレギュラー”な世界といえる。

### レイディアント

もう一つの世界であるが、こちらが本来の“世界”である。中世ヨーロッパのような文明を持っているが、魔法が存在しているためガイアの文明とは次元の違う文明ではある。

## 調停者

あらゆる存在を“紡ぐ”とされる唯一無二の存在。「聖魔」のエレメンタルを持つ者。カインの直系のみがなり得る存在であり、星の未来を変えることができる“物質世界の自由意志”。「神」すなわち、バルドルとロキの血を受け継ぐため、次元に關与できるのである。「次元の執行権<sup>ディメンショナル・ジャッジメント</sup>」を使用することができるが、来るべき時・運命の瞬間でしか作用しない。神の権利を持つ者であるがゆえに、調停者に付与される能力は他者を圧倒する。それは「聖魔」というエレメンタルがこの次元にそもそも存在しない“力”であるため（破壊と創造、その両極端の能力は世界に存在する物質そのものに作用するため、どんな方法であろうと防ぐことは不可能。ソラがセレスティアルを破壊できたのは、セレスティアル自身が物質世界に存在するものであるため）。劇中では東兄弟、クロノスが調停者である。

## 永遠の巫女

特殊なエレメンタルを持つ女性たちのこと。基本属性や光陰二元素を基礎として持っていない元素を持つため、生まれながらにして強大な魔力を持つとされる。約2000年前、アイオン（シリウス）によって聖女サリアの末裔のみ巫女として覚醒するように遺伝子操作されたため、永遠の巫女はサリアの血筋、ということになる（アンナはシリウスの息子レグルスの末裔で、他の多くの巫女も彼の子孫）。但し、リサはサリアの直系であるため、他の巫女とは一線を画した能力を持っている。

## 星の幼子

劇中では、日向空のことを指す。核エレメンタルとして星の元素“紺碧”を持つ者がこの存在であるといわれているが、詳しいことはわかっていない。“紺碧”は地球上に存在する全てのエレメンタルに干渉・支配することが可能であるため、これを用いて理論上最大

のエネルギーを利用することができる。ただ、本来ならば存在しない元素 “聖魔” であれば、この元素に直接干渉し、制御することができない。シリウスは兄ユリウスの元素を用い、メルトダウン寸前だったセレスティアルを封印したのである。

#### 星の遺産「セレスティアル」

星の元素「紺碧」でできた巨大な結晶体。空中都市群アトモスフィアの核であり、一万年もの間浮遊させ続けている力の源。遙か太古の時代から存在し続け、いくつもの物語に登場してくるが、この存在を知っているのは本当にごくわずか。創世時代（カインが統一する以前の時代）初期、「神聖ユグドラル帝国」がこれを地中から発見し、兵器として転用する。結果として地上は崩壊し、人類は数千年もの間、地中で生活をするのを余儀なくされる。それから行方はわからなくなっていたが、カインがシアルフィ帝国を滅ぼすと、その皇室墓所からこれを発見する。そして、「反重力システム」の核として利用されることになる。これに関わってきた者たちは絶対的な支配と願いを成就させるが、最終的にそれら全てを滅ぼしてきた。まるで“意思”を持つかのように。

#### ヴェルエス家

ソフィア教皇家の家名。この世界の教皇は選出されるのではなく、ヴェルエス家の血筋且つ直系である（若しくは直系と婚約している）者が教皇に即位することが可能。古くは崩壊したティルナノグ皇室の流れを汲む一族で、シリウスの息子ジュリアス（ユリウスとレナの子供）の血筋であるため、調停者として覚醒する可能性が高い。

#### ペンドラゴン家

ゼテギネア皇室（フィンジアス王家）の加盟。赤と紫、二匹の龍が家紋である。伝説では二大陸を統一したアヴァロン帝国の流れを汲むといわれていたが、実際はシリウスとユリウスの叔母アムナリア

の末裔で、代々「聖典」を受け継いでいる。長い時間の中でカインの血は薄れ、他の血筋の者たちのように常軌を逸した能力が発露することはなかった。しかし、リオン（柊修哉）とその父ヴェリガンに関しては、突然変異的に能力が発露したこと、リオンにいたっては母がヴェルエス家の直系であったため、調停者に近い能力を有していた。

### ミッドランド帝国

新暦1415年、当時のロンバルディア大陸の大半を支配していたランディアナ帝国の藩国である、ミッドランド公国の当主アルヴィスが、ミリア皇女（王太子の唯一の子供）と結婚し、王国の実権を握る。1424年、王国宰相として国を動かし、ロンバルディア大陸を統一する。1425年、禅譲という形でミッドランド帝国を建国し、皇帝として即位する。1431年、アルカディア大陸のソフイア教国へ侵攻するも、1435年に皇帝アルヴィス1世が急逝したため、帝国は崩壊する。

### アルヴィス1世

ミッドランド初代皇帝。新暦1403年、若干13歳でミッドランド公国当主となる。25歳の時にランディアナ皇女と結婚し、朝廷の中枢に昇る。巨大なカリスマ性を持ち、次々と宮廷の家臣たちを己の配下にし、朝廷内で大きな権限を持つ。1422年に宰相に就任、23年にはミッドランド王位を賜る。同年に帝国大元帥になると、政治・軍事における総括者となり、実質的なランディアナ帝国の最高権力者となる。24年にロンバルディア統一を果たし、25年に6代皇帝ワグナー2世に禅譲を迫り、帝位に就く。稀代の天才と言われ、古代暗黒魔法を復活させ、自身の思想に基づき法治国家を築く。だが1435年、ミリア皇后によって殺害されてしまう。絶対的な指導者を失った帝国は崩壊する。彼はルシタニア宗家の当主でもあり、当時のルテティア公国の当主はアルヴィスの祖父

の弟の家系に連なるため、ルシタニア王家はミッドランド皇室の流れを汲む。

#### ミリア皇后

ランディアナ最後の皇太子の一人娘。15歳の時にミッドランド公アルヴィスの妻となる。彼によって父が殺され、母国が滅ぼされてしまう。復讐を誓った彼女は、1435年に夫を殺害し、皇子をヴィクトル4世として即位させ、ランディアナ帝国の再建を宣言させる。しかし、アルヴィスによる絶対的な支配から解放された諸侯は、反旗を翻す。結果、ルテティア公によってヴィクトル4世は廃位、毒殺され、彼女は旧都ランディアナに幽閉され、1445年に死去する。彼女の子孫が、後のランディアナ総督となっていく。

#### ヴァナヘイム文明

レイディアントにおける5万年前、2大陸両方、あるいは他の大陸をも支配していたのではないかと言われる超古代文明。新暦1779年、ルテティアの行商人によって遺跡が発見され、研究が始まる。研究結果によると、この文明は伝説のティルナノグ帝国に勝るとも劣らない文明を持っており、アルカディア大陸やシュレジエン諸島にもその残骸らしきものがあることから、その力を持って全世界を牛耳っていたのではないかと思われる。ただ、古書のようなものがほとんどなく、文字の解読もできないため解析するのは無理かもしれないと言われている。ヴァナヘイムとは古代ロンバルディア神話にある「聖皇」のことで、ソフィア教典にある12柱の神々の一人とされる。

#### 原初のヒト

通称「イヴ」。その人間たちの総称を「イヴス原初の人類」と呼ぶ。星の力を携えた生命であり、星の意思そのものを受け継いでいるといわれた。劇中でミランダは「所詮、自分はイヴズの子供たちじゃない

のだから」と言っているが、それはソラヤリサたちカインの血筋に  
対する皮肉である。つまり、カインの血筋こそがイヴの力を受け継  
いでいると解釈されるが、カインの血筋には“星の力”は存在しな  
い。持っているのは……。

神

劇中では別次元に存在する“何か”のことを指す。彼らが太古の世  
界に干渉してしまったことにより、世界の運命が変わってしまうこ  
とになる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4255g/>

---

BLUE・STORY

2011年10月13日13時52分発行